

茨城県教育財団文化財調査報告第77集

常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

沢 田 遺 跡
(上)

平成 4 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第77集

常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

さわ だ 遺 跡
(上)

平成 4 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

製塩跡

この写真は平成2年度調査時の航空写真です。
このような遺構が同じ場所で何層にもわたって発見されました。

[写真右上]

調査前風景

通称「青塚」と呼ばれていた付近です。

[写真右下]



製塩跡

釜屋内の竈・鹹水槽・居出場及び屋外鹹水槽、土樋等がセットになっています。

[写真右上]

遺物出土状況

鹹水槽内から濃い塩水の不純物を取り除くろ過器や灰を掻き出したと思われる柄振の一部などが発見されました。

[写真右下]



序

茨城県は、元「水戸対地射爆撃場」跡地内に、常陸那珂港の建設を進めております。この建設予定地内の那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚には、埋蔵文化財包蔵地である沢田遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、昭和62年7月から昭和63年3月まで運輸省第二港湾建設局から委託を受けて、沢田遺跡第一次の発掘調査を実施し、すでに平成元年3月にその調査成果を報告書として刊行しているところです。続いて、昭和63年4月から平成3年3月までについては茨城県から委託を受け、沢田遺跡の第二次から第四次までの発掘調査を実施いたしました。

本書は昭和63年4月から3年間にわたって発掘調査を実施した沢田遺跡の第二次から第四次までの調査成果を記録したものであり、特に製塩遺構が多数収録されております。

本書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深め、教育、文化の向上の一助としてより多くの方々に活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県はもとより、茨城県教育委員会、那珂湊市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から寄せられた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 礒田 勇

例 言

1 本書は、茨城県土木部港湾課の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和63年度から平成2年度まで発掘調査を実施した茨城県那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚に所在する沢田遺跡の発掘調査報告書である。

2 沢田遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度初めの組織改正により、従来の調査課（企画管理班・調査第一・二・三班，整理班）は埋蔵文化財部となり，その下に企画管理課，調査課，整理課をおき，調査課には，調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理 事 長	川 又 友三郎 磯 田 勇	昭和61年4月～昭和63年5月 昭和63年6月～
副 理 事 長	小 林 元 角 田 芳 夫	昭和63年4月～平成3年7月 平成3年7月～
常 務 理 事	滑 川 貞 雄 小 林 洋 本 田 三 郎	昭和61年4月～平成元年3月 平成元年4月～平成3年3月 平成3年4月～
事 務 局 長	坂 場 庸 克 一 木 邦 彦	昭和62年4月～平成元年3月 平成元年4月～
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年4月～
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行
	課長代理	水 飼 敏 夫
	主任調査員	山 本 静 男
	主任調査員	小 河 邦 男
	主任調査員	小 山 映 一
	主任調査員	根 本 康 弘
	係 長	園 部 昌 俊
	主 任	山 崎 初 雄
	主 事	大 部 章
	主 事	飯 島 康 司
主 事	吉 井 正 明	
主 事	大 貫 吉 成	
		平成2年4月～ 平成2年4月～(昭和62年4月～ 平成2年3月 企画管理班長) (昭和63年4月～平成元年3月 企画管理班) (平成元年4月～平成2年3月 企画管理班) 平成2年4月～平成3年3月 平成3年4月～ 昭和63年4月～平成3年3月 (昭和60年4月～平成元年3月 企画管理班) (昭和61年4月～平成2年3月 企画管理班) 平成3年4月～ 平成元年4月～ 平成2年4月～

調 査 課	課長	青木義夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長(部長兼務)	石井毅	平成元年4月～
	班長	加藤雅美	昭和63年度調査第三班長
	班長	中村幸雄	平成元・2年度調査第二班長
	主任調査員	小河邦男	昭和63年度調査
	主任調査員	榑孝雄	平成元・2年度調査
	主任調査員	小山映一	平成元年度調査
	主任調査員	齋藤真人	平成元年度調査
	主任調査員	緑川正實	平成2年度調査
	主任調査員	鯉淵和彦	平成2年度調査
	主任調査員	中村敬治	平成2年度調査
	調査員	新井聡	平成2年度調査
	嘱託調査員	片平雅俊	昭和63年度調査
整 理 課	課長	沼田文夫	平成2年4月～
	主任調査員	鯉淵和彦	昭和63年度・平成元年度調査分について整理・執筆・編集
	調査員	新井聡	平成2年度調査分について整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号等については、第4章第1節「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4 発掘調査にあたっては、宇都宮大学教授石部正忠氏、香川県教育委員会大山真充氏、唐木裕志氏の御指導を得た。

人骨の鑑定については、国立科学博物館人類研究部の馬場悠男氏、遺構内の土壌分析については、農業環境技術研究所環境資源部土壌管理科科长天野洋司氏、同研究員草場敬氏、竈の熱ルミネッセンスによる年代測定については、奈良教育大学の長友恒人氏、平賀章三氏、土器・陶器については、国立歴史民俗博物館考古研究部の吉岡康暢氏の御指導を得た。

なお、木製品の材質鑑定等は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

5 イラストは、勝田市在住の酒井広子氏に委託作成して掲載した。

目 次

口 絵	
序	
例 言	
目 次 (図版・写真・表目次を含む)	

— 上 卷 —

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査方法	13
第1節 地区設定	13
第2節 基本層序の検討	13
第3節 遺構確認	14
第4節 遺構調査	14
第4章 遺構と遺物	15
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	15
1 遺跡の概要	15
2 遺構・遺物の記載方法	16
第2節 製塩跡	26

— 下 卷 —

第2節 竈を伴わない鹹水槽及び土樋	381
第3節 人骨と馬骨について (埋葬遺構)	448
第4節 その他の遺構	459
1 炉 跡	459
2 土 坑	460
3 不明遺構	461

第5節 遺構外出土遺物	473
1 土器・陶磁器	473
2 金属製品	474
3 石製品	475
4 古 銭	477
5 土製品	477
6 骨製品	477
第5章 考 察	499
第1節 塩づくりとその歴史	499
第2節 遺 構	503
第3節 遺 物	516
1 製塩業に関する遺物について	516
2 その他の遺物について	517
3 遺構と遺物から窺う塩づくり	519
第4節 埋葬遺構について	524
第5節 塩の流通について	527
結 語	531
付 章 (人骨, 熱ルミネッセンス, 土壌分析, 木製品の材質鑑定)	533

挿 図 目 次

上 巻

第 1 図	沢田遺跡周辺地形及び周辺遺跡 位置図……………	11
第 2 図	沢田遺跡調査区名称図……………	13
第 3 図	沢田遺跡土層柱状図……………	13
第 4 図	第 1 製塩跡遺構配置図……………	26
第 5 図	第 1 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	27
第 6 図	第 1 製塩跡鹹水槽実測図……………	28
第 7 図	第 2 製塩跡遺構配置図……………	29
第 8 図	第 2 製塩跡釜屋内遺構実測図……………	30
第 9 図	第 2 製塩跡鹹水槽実測図……………	31
第 10 図	第 2 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図……………	32
第 11 図	第 3 製塩跡遺構配置図……………	33
第 12 図	第 3 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	34
第 13 図	第 3 製塩跡鹹水槽実測図……………	35
第 14 図	第 4 製塩跡遺構配置図……………	37
第 15 図	第 4 製塩跡鹹水槽実測図……………	39
第 16 図	第 4 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	40
第 17 図	第 4 製塩跡出土遺物実測図……………	42
第 18 図	第 5 製塩跡遺構配置図……………	43
第 19 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	45
第 20 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	46
第 21 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・竈・鹹水槽 実測図……………	48
第 22 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	50
第 23 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	51
第 24 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(1)……………	52
第 25 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(2)……………	53
第 26 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(3)……………	54
第 27 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(4)……………	55
第 28 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(5)……………	56
第 29 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(6)……………	57
第 30 図	第 5 製塩跡土樋実測図(1)……………	60
第 31 図	第 5 製塩跡土樋実測図(2)……………	61
第 32 図	第 5 製塩跡土樋実測図(3)……………	62
第 33 図	第 5 製塩跡土樋実測図(4)……………	63
第 34 図	第 5 製塩跡土樋実測図(5)……………	64
第 35 図	第 5 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図(1)……………	67
第 36 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(2)……………	68
第 37 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(3)……………	69
第 38 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(4)……………	70
第 39 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(5)……………	71
第 40 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(6)……………	72
第 41 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(7)……………	73
第 42 図	第 6 製塩跡遺構配置図……………	75
第 43 図	第 6 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………	78
第 44 図	第 6 製塩跡鹹水槽実測図(1)……………	80
第 45 図	第 6 製塩跡鹹水槽実測図(2)……………	81
第 46 図	第 6 製塩跡土樋実測図(1)……………	82

第 47 図	第 6 製塩跡土樋実測図(2)……………83	第 71 図	第15製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………113
第 48 図	第 6 製塩跡出土遺物実測図……………84	第 72 図	第15製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………114
第 49 図	第 7 製塩跡遺構配置図……………85	第 73 図	第16製塩跡竈実測図 ……………115
第 50 図	第 7 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………86	第 74 図	第17製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………117
第 51 図	第 8 製塩跡遺構配置図……………87	第 75 図	第18製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………118
第 52 図	第 8 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………88	第 76 図	第17製塩跡出土遺物実測図 ……120
第 53 図	第 9 製塩跡遺構配置図……………91	第 77 図	第18製塩跡遺構配置図 ……………120
第 54 図	第 9 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………92	第 78 図	第18製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………121
第 55 図	第10製塩跡遺構配置図……………93	第 79 図	第19製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………123
第 56 図	第10製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………94	第 80 図	第19製塩跡竈実測図 ……………124
第 57 図	第10製塩跡鹹水槽実測図……………97	第 81 図	第20製塩跡出土遺物実測図 ……125
第 58 図	第10製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………98	第 82 図	第20製塩跡竈実測図 ……………126
第 59 図	第10製塩跡土樋実測図 ……………100	第 83 図	第21製塩跡遺構配置図 ……………127
第 60 図	第10製塩跡出土遺物実測図 ……100	第 84 図	第21製塩跡竈・鹹水槽実測図 …128
第 61 図	第11製塩跡遺構配置図 ……………101	第 85 図	第22製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………130
第 62 図	第11製塩跡釜屋内遺構実測図 …102	第 86 図	第22製塩跡遺構配置図 ……………132
第 63 図	第11製塩跡鹹水槽実測図 ……………103	第 87 図	第23製塩跡釜屋内遺構実測図 …134
第 64 図	第12製塩跡遺構配置図 ……………104	第 88 図	第23製塩跡遺構配置図 ……………136
第 65 図	第12製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………105	第 89 図	第23製塩跡鹹水槽実測図 ……………137
第 66 図	第12製塩跡鹹水槽実測図 ……………106	第 90 図	第23製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………138
第 67 図	第12製塩跡出土遺物実測図 ……107	第 91 図	第23製塩跡土樋実測図 ……………139
第 68 図	第13製塩跡遺構配置図 ……………108	第 92 図	第23製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………142
第 69 図	第13製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………108	第 93 図	第24製塩跡遺構配置図 ……………142
第 70 図	第14製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 ……………110		

第 94 図	第24製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………143	第117図	第31製塩跡遺構配置図 ……………176
第 95 図	第24製塩跡鹹水槽実測図 ……………144	第118図	第31製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………178
第 96 図	第24製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………146	第119図	第31製塩跡鹹水槽実測図(1) ……180
第 97 図	第25製塩跡遺構配置図 ……………147	第120図	第31製塩跡鹹水槽実測図(2) ……181
第 98 図	第25製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………148	第121図	第31製塩跡鹹水槽・土樋 実測図(3) ……………182
第 99 図	第25製塩跡鹹水槽実測図 ……………149	第122図	第31製塩跡土樋実測図(1) ……183
第100図	第26製塩跡遺構配置図 ……………151	第123図	第31製塩跡土樋実測図(2) ……184
第101図	第26製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………152	第124図	第31製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………185
第102図	第27製塩跡竈実測図 ……………154	第125図	第32製塩跡遺構配置図 ……………187
第103図	第27製塩跡出土遺物実測図 ……155	第126図	第32製塩跡土樋実測図(1) ……189
第104図	第28製塩跡遺構配置図 ……………155	第127図	第32製塩跡出土遺物実測図 ……189
第105図	第28製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………156	第128図	第32製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………190
第106図	第28製塩跡鹹水槽実測図 ……159	第129図	第32製塩跡鹹水槽実測図(1) ……192
第107図	第29製塩跡遺構配置図 ……………160	第130図	第32製塩跡鹹水槽実測図(2) ……193
第108図	第29製塩跡土樋実測図(1) ……161	第131図	第32製塩跡土樋実測図(2) ……194
第109図	第29製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………162	第132図	第33製塩跡遺構配置図 ……………196
第110図	第29製塩跡鹹水槽実測図(2) ……164	第133図	第33製塩跡釜屋内遺構・溝 実測図 ……………198
第111図	第29製塩跡鹹水槽実測図(3) ……165	第134図	第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………200
第112図	第29製塩跡鹹水槽・土樋 実測図(4) ……………166	第135図	第33製塩跡鹹水槽実測図 ……202
第113図	第29製塩跡出土遺物実測図 ……170	第136図	第33製塩跡土樋実測図 ……203
第114図	第30製塩跡遺構配置図 ……………170	第137図	第33製塩跡釜屋内遺構実測図 ……204
第115図	第30製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………172	第138図	第33製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………205
第116図	第30製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………174	第139図	第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 ……………206
		第140図	第33製塩跡土樋実測図 ……208

第141図	第33製塩跡出土遺物実測図 ……212	第165図	第43製塩跡遺構配置図 ……244
第142図	第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……214	第166図	第43製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……246
第143図	第34製塩跡遺構配置図 ……216	第167図	第43製塩跡鹹水槽実測図 ……248
第144図	第34製塩跡土樋実測図 ……217	第168図	第43製塩跡土樋実測図(1) ……249
第145図	第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 ……218	第169図	第43製塩跡土樋実測図(2) ……250
第146図	第35製塩跡遺構配置図 ……220	第170図	第43製塩跡出土遺物実測図 ……252
第147図	第35製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……221	第171図	第44製塩跡遺構配置図 ……252
第148図	第36製塩跡竈実測図 ……222	第172図	第44製塩跡土樋実測図 ……253
第149図	第37製塩跡竈実測図 ……223	第173図	第44製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……254
第150図	第38製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……224	第174図	第45製塩跡遺構配置図 ……257
第151図	第39製塩跡遺構配置図 ……225	第175図	第45製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……258
第152図	第39製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……226	第176図	第45製塩跡鹹水槽実測図 ……261
第153図	第40製塩跡遺構配置図 ……229	第177図	第45製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……262
第154図	第40製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 ・土樋実測図 ……230	第178図	第46製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……264
第155図	第41製塩跡遺構配置図 ……231	第179図	第47製塩跡遺構配置図 ……266
第156図	第41製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……232	第180図	第47製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……268
第157図	第42製塩跡遺構配置図 ……233	第181図	第47製塩跡土樋実測図 ……270
第158図	第42製塩跡釜屋内遺構実測図 ……234	第182図	第47製塩跡出土遺物実測図 ……270
第159図	第42製塩跡鹹水槽実測図(1) ……235	第183図	第48製塩跡遺構配置図 ……271
第160図	第42製塩跡鹹水槽実測図(2) ……236	第184図	第48製塩跡釜屋内遺構実測図 ……272
第161図	第42製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……237	第185図	第48製塩跡鹹水槽実測図(1) ……276
第162図	第42製塩跡土樋実測図 ……238	第186図	第48製塩跡鹹水槽実測図(2) ……277
第163図	第42製塩跡釜屋内遺構実測図 ……239	第187図	第48製塩跡土樋実測図 ……278
第164図	第42製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……240	第188図	第49製塩跡竈実測図 ……280
		第189図	第49製塩跡出土遺物実測図 ……280
		第190図	第50製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽

	実測図 ……………281	第213図	第64製塩跡鹹水槽実測図 ……………318
第191図	第51製塩跡竈実測図 ……………283	第214図	第65製塩跡竈実測図 ……………320
第192図	第52製塩跡竈実測図 ……………284	第215図	第66製塩跡竈実測図 ……………321
第193図	第53製塩跡竈実測図 ……………286	第216図	第67製塩跡遺構配置図 ……………322
第194図	第54製塩跡遺構配置図 ……………287	第217図	第67製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……323
第195図	第54製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………288	第218図	第68製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………324
第196図	第54製塩跡土樋実測図 ……………290	第219図	第69製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………326
第197図	第54製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………293	第220図	第70製塩跡竈実測図 ……………327
第198図	第55製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………294	第221図	第71製塩跡竈実測図 ……………329
第199図	第56製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………296	第222図	第72製塩跡竈実測図 ……………330
第200図	第57製塩跡遺構配置図 ……………298	第223図	第73製塩跡遺構配置図 ……………332
第201図	第57製塩跡出土遺物実測図 ……299	第224図	第73製塩跡釜屋内遺構実測図 ……333
第202図	第57製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………300	第225図	第73製塩跡鹹水槽実測図 ……………334
第203図	第58製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………302	第226図	第73製塩跡土樋実測図 ……………335
第204図	第59製塩跡遺構配置図 ……………303	第227図	第73製塩跡出土遺物実測図 ……337
第205図	第59製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………304	第228図	第74製塩跡遺構配置図 ……………339
第206図	第60製塩跡竈実測図 ……………306	第229図	第74製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……339
第207図	第61製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………309	第230図	第75製塩跡竈実測図 ……………341
第208図	第61製塩跡鹹水槽実測図 ……………310	第231図	第76製塩跡遺構配置図 ……………343
第209図	第62製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………312	第232図	第76製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………344
第210図	第63製塩跡竈実測図 ……………315	第233図	第77製塩跡竈実測図 ……………347
第211図	第64製塩跡遺構配置図 ……………316	第234図	第78製塩跡竈実測図 ……………350
第212図	第64製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……317	第235図	第79製塩跡竈実測図 ……………351
		第236図	第80製塩跡遺構配置図 ……………352
		第237図	第80製塩跡釜屋内遺構実測図 ……354
		第238図	第80製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………357
		第239図	第81製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………360

第240図	第81製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………359	実測図 ……………369
第241図	第82製塩跡遺構配置図 ……………362	第247図 第83製塩跡出土遺物実測図 ……370
第242図	第82製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………363	第248図 第84製塩跡遺構配置図 ……………372
第243図	第82製塩跡鹹水槽実測図 ……………364	第249図 第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………374
第244図	第82製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………366	第250図 第84製塩跡鹹水槽実測図 ……………376
第245図	第83製塩跡遺構配置図 ……………368	第251図 第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………377
第246図	第83製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽	第252図 第84製塩跡鹹水槽実測図 ……………373
		第253図 第84製塩跡土樋実測図 ……………378

下 巻

第254図	竈を伴わない鹹水槽実測図(1) ……395	第274図	竈を伴わない鹹水槽実測図(21) ……415
第255図	竈を伴わない鹹水槽実測図(2) ……396	第275図	竈を伴わない鹹水槽実測図(22) ……416
第256図	竈を伴わない鹹水槽実測図(3) ……397	第276図	竈を伴わない鹹水槽実測図(23) ……417
第257図	竈を伴わない鹹水槽実測図(4) ……398	第277図	竈を伴わない鹹水槽実測図(24) ……418
第258図	竈を伴わない鹹水槽実測図(5) ……399	第278図	竈を伴わない鹹水槽実測図(25) ……419
第259図	竈を伴わない鹹水槽実測図(6) ……400	第279図	竈を伴わない鹹水槽実測図(26) ……420
第260図	竈を伴わない鹹水槽実測図(7) ……401	第280図	竈を伴わない鹹水槽実測図(27) ……421
第261図	竈を伴わない鹹水槽実測図(8) ……402	第281図	竈を伴わない鹹水槽実測図(28) ……422
第262図	竈を伴わない鹹水槽実測図(9) ……403	第282図	竈を伴わない鹹水槽実測図(29) ……423
第263図	竈を伴わない鹹水槽実測図(10) ……404	第283図	竈を伴わない鹹水槽実測図(30) ……424
第264図	竈を伴わない鹹水槽実測図(11) ……405	第284図	竈を伴わない鹹水槽実測図(31) ……425
第265図	竈を伴わない鹹水槽実測図(12) ……406	第285図	竈を伴わない鹹水槽実測図(32) ……426
第266図	竈を伴わない鹹水槽実測図(13) ……407	第286図	竈を伴わない鹹水槽実測図(33) ……427
第267図	竈を伴わない鹹水槽実測図(14) ……408	第287図	竈を伴わない鹹水槽実測図(34) ……428
第268図	竈を伴わない鹹水槽実測図(15) ……409	第288図	竈を伴わない鹹水槽実測図(35) ……429
第269図	竈を伴わない鹹水槽実測図(16) ……410	第289図	竈を伴わない鹹水槽実測図(36) ……430
第270図	竈を伴わない鹹水槽実測図(17) ……411	第290図	竈を伴わない鹹水槽実測図(37) ……431
第271図	竈を伴わない鹹水槽実測図(18) ……412	第291図	竈を伴わない鹹水槽実測図(38) ……432
第272図	竈を伴わない鹹水槽実測図(19) ……413	第292図	竈を伴わない鹹水槽実測図(39) ……433
第273図	竈を伴わない鹹水槽実測図(20) ……414	第293図	竈を伴わない鹹水槽実測図(40) ……434

第294図	竈を伴わない鹹水槽実測図(41) ……435	拓影図(3) ……482	
第295図	竈を伴わない鹹水槽実測図(42) ……436	第321図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(4) ……483
第296図	竈を伴わない鹹水槽実測図(43) ……437	第322図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(5) ……484
第297図	竈を伴わない鹹水槽実測図(44) ……438	第323図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(6) ……485
第298図	竈を伴わない土樋実測図(1) ……439	第324図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(7) ……486
第299図	竈を伴わない土樋実測図(2) ……440	第325図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(8) ……487
第300図	竈を伴わない土樋実測図(3) ……441	第326図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(9) ……488
第301図	竈を伴わない土樋実測図(4) ……442	第327図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(10) ……489
第302図	竈を伴わない土樋実測図(5) ……443	第328図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(11) ……490
第303図	竈を伴わない土樋実測図(6) ……444	第329図	遺構外出土遺物実測図(12) ……490
第304図	竈を伴わない土樋実測図(7) ……445	第330図	遺構外出土遺物実測図(13) ……491
第305図	その他の鹹水槽出土遺物実測・ 拓影図 ……446	第331図	遺構外出土古銭拓影図(1) ……492
第306図	人骨出土分布状況図 ……455	第332図	遺構外出土古銭拓影図(2) ……493
第307図	人骨に伴って出土した古銭 拓影図(1) ……457	第333図	I区(F3)集中製塩跡竈分布図 ……509
第308図	人骨に伴って出土した古銭 拓影図(2) ……458	第334図	II区(H3)集中製塩跡竈分布図 ……510
第309図	炉跡実測図(1) ……464	第335図	III区(L3)集中製塩跡竈分布図 ……511
第310図	炉跡実測図(2) ……465	第336図	IV区(R4)集中製塩跡竈分布図 ……512
第311図	炉跡実測図(3) ……466	第337図	V区(W5)集中製塩跡竈分布図 ……513
第312図	土坑実測図 ……467	第338図	沢田遺跡の揚浜式塩づくり 予想図 ……520
第313図	不明遺構実測図(1) ……468	第339図	主な出土遺物実測図 ……522
第314図	不明遺構実測図(2) ……469	第340図	江戸時代那珂川における河岸 ……529
第315図	不明遺構実測図(3) ……470	第341図	近世那珂川流域における街道 ……530
第316図	不明遺構実測図(4) ……471		
第317図	炉・土坑・不明遺構出土遺物 実測・拓影図 ……472		
第318図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(1) ……480		
第319図	遺構外出土遺物実測図(2) ……481		
第320図	遺構外出土遺物実測・		

付章挿図目次

第1図 熱ルミネッセンス (TL) 年代測の原理 ……………567	第3図 等価線量の決定方法 ……………570
第2図 第89号竈の火床の石英粒子のTL グローカブー ……………569	第1図 沢田遺跡試料中の2 μm 以上粘土のX線回析図 ……………577

付図目次

付図1 製塩跡遺構配置図・竈断面図(1)	付図2 製塩跡遺構配置図・竈断面図(2)
----------------------	----------------------

表目次

表1 那珂湊市遺跡一覧表 ……………12	表6 炉跡一覧表……………459
表2 鹹水槽一覧表……………381	表7 土坑一覧表……………460
表3 土樋一覧表……………393	表8 不明遺構一覧表……………461
表4 人骨出土一覧表……………448	表9 各製塩跡のグルーピングされた遺構群の標高分布表……………514
表5 人骨に伴って出土した古銭一覧表……………452	

付章表目次

表I-1 代表的人骨計測値 (頭骨) ……549	(%) (上腕骨) ……………553
表I-2 代表的人骨計測値 (鎖骨) ……550	表II-2 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (橈骨) ……………553
表I-3 代表的人骨計測値 (上腕骨) ……550	表II-3 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (尺骨) ……………553
表I-4 代表的人骨計測値 (橈骨) ……550	表II-4 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (大腿骨) ……………554
表I-5 代表的人骨計測値 (尺骨) ……551	表II-5 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (脛骨) ……………554
表I-6 代表的人骨計測値 (寛骨) ……551	
表I-7 代表的人骨計測値 (大腿骨) ……552	
表I-8 代表的人骨計測値 (脛骨) ……552	
表II-1 四肢骨計測値 (mm) および示数	

表III	沢田遺跡出土四肢骨計測値の 平均値と比較……………555	表2	沢田遺跡試料の土性……………575
表IV	沢田遺跡出土人骨個体構成表……………556	表3	沢田遺跡試料の比電導度・ PH(H ₂ O, Kcl) ……………575
第1表	TL年代測定結果……………571	表4	沢田遺跡主要層の微細形態……………576
表1	沢田遺跡分析試料一覧……………574	表1	沢田遺跡出土材の樹種……………582

写 真 目 次

P L 1	調査前風景	P L 11	第6製塩跡，釜屋全景，第6の1号 鹹水槽，第32号鹹水槽，第35号鹹水 槽，第46号鹹水槽，第3号土樋，第 22号土樋
P L 2	調査後風景，作業風景	P L 12	第7・8・9製塩跡，7－第26号鹹水 槽遺物出土状況，7－第28号鹹水槽 遺物出土状況，7－第33号鹹水槽， 7－第49号鹹水槽，8－第18号竈， 8－第177号鹹水槽，9－釜屋全景， 9－第105号鹹水槽
P L 3	第1製塩跡，第1号竈，第11号鹹水 槽，第12号鹹水槽，第14号鹹水槽， 第15号鹹水槽	P L 13	第10製塩跡，釜屋全景，第154号鹹水 槽，第180号鹹水槽，第184号鹹水槽
P L 4	第2製塩跡，釜屋全景，第13号鹹水 槽，第63号鹹水槽，第64号鹹水槽， 第64・65号鹹水槽	P L 14	第11・12・13製塩跡，11－釜屋全景， 11－第146号鹹水槽，12－第33号竈， 12－第161号鹹水槽，12－第162号鹹 水槽，12－第169号鹹水槽，13－第27 号竈，13－第157号鹹水槽
P L 5	第3製塩跡，釜屋全景，第1号鹹水 槽，第2号鹹水槽，第10号鹹水槽， 第61・62号鹹水槽	P L 15	第14・15・18・19製塩跡，14－第8号 竈，14－第36号鹹水槽，15－釜屋全 景，15－第24号竈，18－第150号鹹水 槽，19－釜屋全景，19－第19の1号 鹹水槽
P L 6	第4製塩跡，釜屋全景，第87号鹹水 槽，第89号鹹水槽，第90号鹹水槽， 第91号鹹水槽	P L 16	第21・22・23製塩跡，21－第168号鹹 水槽，21－第168号鹹水槽土層断面，
P L 7	第5製塩跡，釜屋全景，第5の22号 鹹水槽，第5の35号鹹水槽		
P L 8	第5製塩跡，第16号鹹水槽，第17号 鹹水槽，第18号鹹水槽，第27号鹹水 槽，第32号鹹水槽，第45号鹹水槽， 第47号鹹水槽，第55号鹹水槽		
P L 9	第5製塩跡，第1号土樋，第58号土 樋		
P L 10	第5製塩跡，第81号鹹水槽遺物出土 状況，第125号鹹水槽遺物出土状況		

- 22-釜屋全景, 22-第698号鹹水槽,
23-製塩跡全景, 23-釜屋全景,
23-第699号鹹水槽, 23-第820号鹹水槽
- P L 17 第23・24製塩跡, 23-第848号鹹水槽,
23-第864号鹹水槽, 23-第198・199号土樋, 23-第225号土樋, 24-製塩跡全景, 24-第199号竈, 24-第199号竈断割
- P L 18 第24・25・26製塩跡, 24-第719号鹹水槽, 24-第723号鹹水槽, 25-製塩跡全景, 25-第200号竈, 26-製塩跡全景, 26-第201号竈, 26-第716号鹹水槽
- P L 19 第26・27製塩跡, 26-第717号鹹水槽(%) (尺骨) (二次), 26-第717号鹹水槽(一次), 27-第202号竈, 27-第202号竈遺物出土状況
- P L 20 第28・29・30製塩跡, 28-製塩跡全景, 28-第203号竈断割, 29-製塩跡全景, 29-釜屋全景, 29-第761号鹹水槽, 29-第163・166号土樋, 30-第786号鹹水槽
- P L 21 第31製塩跡, 製塩跡全景, 釜屋全景, 第784・785号鹹水槽, 第207号竈断割, 釜屋に伴う柱痕土層断面
- P L 22 第31製塩跡, 第701号鹹水槽, 第701号鹹水槽断割, 第709号鹹水槽, 第715号鹹水槽, 第815号鹹水槽, 第884号鹹水槽, 第151号土樋土層断面
- P L 23 第31・32製塩跡, 31-第148号土樋, 31-第185・186号土樋, 31-第187号土樋水受け, 32-製塩跡全景, 32-釜屋内炭化材出土状況, 32-第829号鹹水槽, 32-第830号鹹水槽
- P L 24 第32製塩跡, 第830号鹹水槽, 第832号鹹水槽, 第834号鹹水槽, 第838号鹹水槽, 第210号土樋
- P L 25 第33製塩跡, 釜屋全景, 第223号竈(一次), 第223号竈(二次), 第223号竈遺物出土状況, 第223号竈内土釜出土状況
- P L 26 第33製塩跡, 第821号鹹水槽, 第828号鹹水槽, 第818号鹹水槽, 第906号鹹水槽, 第203・204号土樋, 第203号土樋, 第202・251・261・262号土樋, 第258号土樋
- P L 27 第34・35・38製塩跡, 34-釜屋全景, 34-第224号竈, 34-第224号竈断割, 34-第213号土樋, 35-釜屋全景, 38-釜屋全景, 38-第228号竈
- P L 28 第39・40・42製塩跡, 39-釜屋全景, 39-第229号竈, 39-第844号鹹水槽, 39-第845号鹹水槽, 39-第846号鹹水槽, 40-釜屋全景, 42-釜屋全景, 42-第882・887・891・893・904号鹹水槽群
- P L 29 第42・43・44・45製塩跡, 42-第886号鹹水槽, 42-第246号木樋, 43-第828号鹹水槽, 43-第206号土樋, 44-第57号竈, 44-第207号鹹水槽, 45-釜屋全景
- P L 30 第47・48製塩跡, 48-製塩跡全景, 48-第90号竈, 47-製塩跡全景, 48-

- 釜屋全景，48-第281・367号鹹水槽
- P L 31 第46・49・51・53製塩跡，46-釜屋全景，46-第335号鹹水槽，49-釜屋全景，49-第91号竈，51-第109号竈，53-第110号竈，53-第120号竈
- P L 32 第54・55・56製塩跡，54-第126号竈，54-釜屋全景，54-第477号鹹水槽，54-第107・108・109号土樋，55-第480号鹹水槽，56-第128号竈，56-第128号竈断割
- P L 33 第57・58・59・61製塩跡，57-釜屋全景，57-第129号竈，57-第130号竈，57-第405号鹹水槽，58-釜屋全景，59-釜屋全景，59-第410号鹹水槽，61-第284号鹹水槽
- P L 34 第61・62・63・67・68・69・70製塩跡，61-第309号鹹水槽，62-第198号鹹水槽，62-第199号鹹水槽，63-第98号竈，67-第148号竈，68-第155号竈，69-第157号竈，70-第158号竈
- P L 35 第71・72・73・74・76・78・80製塩跡，71-第159号竈，72-第165号竈，73-釜屋全景，74-釜屋全景，76-第171号竈，78-第170号竈，80-釜屋全景，80-第183号竈
- P L 36 第81・82・83・84製塩跡，81-第634・638号鹹水槽，82-釜屋全景，82-第642号鹹水槽土層断面，82-第642号鹹水槽遺物出土状況，83-釜屋全景，83-第193号竈，84-釜屋全景，84-第667号鹹水槽
- P L 37 竈を伴わない鹹水槽，第3号鹹水槽，第4号鹹水槽，第5号鹹水槽，第6号鹹水槽，第7号鹹水槽，第8号鹹水槽，第9号鹹水槽，第21号鹹水槽
- P L 38 竈を伴わない鹹水槽，第25号鹹水槽，第40号鹹水槽，第57号鹹水槽，第65号鹹水槽，第114号鹹水槽，第116号鹹水槽，第133号鹹水槽
- P L 39 竈を伴わない鹹水槽，第138号鹹水槽，第139号鹹水槽，第142号鹹水槽，第148号鹹水槽，第149号鹹水槽，第152号鹹水槽，第160号鹹水槽，第171号鹹水槽
- P L 40 竈を伴わない鹹水槽，第171号鹹水槽土層断面，第693号鹹水槽，第694号鹹水槽，第707号鹹水槽，第707号鹹水槽土層断面，第766号鹹水槽，第769号鹹水槽，第770号鹹水槽
- P L 41 竈を伴わない鹹水槽，第771号鹹水槽，第778号鹹水槽，第798号鹹水槽，第853号鹹水槽，第863号鹹水槽，第898号鹹水槽，第226号鹹水槽，第230号鹹水槽
- P L 42 竈を伴わない鹹水槽，第232号鹹水槽，第285号鹹水槽，第292号鹹水槽，第294号鹹水槽，第303号鹹水槽，第315号鹹水槽，第316号鹹水槽，第323号鹹水槽
- P L 43 竈を伴わない鹹水槽，第329号鹹水槽，第334号鹹水槽，第344号鹹水槽，第374号鹹水槽，第376号鹹水槽，第444号鹹水槽，第466号鹹水槽，第467号鹹水槽

- P L 44 竈を伴わない鹹水槽・土樋，第503号鹹水槽，第565号鹹水槽，第569号鹹水槽，第670号鹹水槽，第681号鹹水槽，第48号土樋，第80号土樋
- P L 45 炉跡・土坑，第10号炉跡（SK77），第13号炉跡（SK84），第18号炉跡（SK97），第21号炉跡（SK102），第23・24号炉跡（SK104・105），第27号炉跡（SK132），第40号炉跡（SK179），第7号土坑（SK214）
- P L 46 不明遺構，8（SX18），21（SK60），25（SK79），26（SK81），27（SK82），28（SK88），36（SK175），T5h₉区遺物出土状況
- P L 47 陶器，磁器，土師質土器，内耳形土器
- P L 48 陶器，土師質土器，内耳形土器
- P L 49 陶器，磁器
- P L 50 石製品（石臼・石塔・砥石）
- P L 51 石製品（石臼・硯）
- P L 52 石製品（石臼）
- P L 53 石製品（石臼）
- P L 54 石製品（石臼・石塔・砥石）
- P L 55 石製品（石塔・砥石・硯・石球），鉄製品（吊金具・耳金・鍋）
- P L 56 金属製品（煙管・吊金具・耳金・小刀・短刀・筭・鎌・鍵・刀装具），土製品（管状土鍾）
- P L 57 木製品（担い棒）
- P L 58 木製品（ろ過器・柄振・椀・担い棒・櫛），骨製品（筭）
- P L 59 古銭(1)
- P L 60 古銭(2)
- P L 61 古銭(3)
- P L 62 古銭(4)，陶器，瓦質土器

付 章 写 真 目 次

- P L 1 I：3号・33号人骨頭骨
- P L 2 II：33号人骨四肢骨
- P L 3 III：33号人骨四肢骨
- P L 4 IV：3号人骨四肢骨
- P L 5 V：3号人骨四肢骨
- P L 6 VI：SK-25幼児骨
- P L 7 VII：病的所見を示す人骨
- P L 1 微細形態

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

常陸那珂港建設が計画されている元「水戸対地射爆撃場」跡地は、戦前水戸東陸軍飛行場用地であり、戦後は米空軍により「水戸対地射爆撃場」として使用されてきた。しかし、昭和48年日本政府に返還されて、国の普通財産となっていたため、首都圏に残された広大な未利用地（総面積1,182ha）であることから、昭和56年に大規模流通港湾と国営公園を主要な土地利用用途とする跡地利用計画が決定された。このような中で本港は、道路、港湾の基盤整備の核として、また、水戸・日立都市圏、更には北関東地域の物流の拠点として、同時に、首都圏のエネルギー需要に対処するための基地（石炭火力発電所）の港湾として、昭和58年3月に港湾法に基づき、地方港湾（常陸那珂港）となり、同月重要港湾に指定された。

茨城県は、県全体の均衡ある発展を図るため、『常陸那珂港湾公園都市構想』を立て、国際的な流通拠点都市、高度技術産業集積都市、レクリエーション・リゾート都市の三つの都市像から構成される21世紀を目指した未来都市づくり構想を決定している。

当初、これらのことから港湾計画の整備に伴い、運輸省により、常陸那珂港建設予定地域に「作業基地」の工事が進められることになり、昭和61年10月に那珂湊市教育委員会に対し、建設地域内の埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し、那珂湊市教育委員会は、同年11月に埋蔵文化財の所在する旨を回答した。これを受けて、運輸省は、同年12月に茨城県教育委員会と建設地域の埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、現状保存が困難であるため、発掘調査による記録保存の措置を講ずることにした。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会の紹介により、昭和62年7月1日付で、運輸省と埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結し、昭和62年7月1日から昭和63年3月31日まで沢田遺跡の第一次発掘調査を実施した。

茨城県は、昭和61年8月に運輸省から土地管理を受託し、これによって、昭和63年4月から常陸那珂港建設予定地内の「作業基地」建設工事を進めることになった。そこで、茨城県は、昭和62年12月に茨城県教育委員会と建設地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、沢田遺跡は引き続いて発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。

財団法人茨城県教育財団は、昭和63年4月1日付で、茨城県と埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結し、昭和63年4月1日から平成3年3月31日まで沢田遺跡の第二次から第四次の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

沢田遺跡の調査は、第一次調査として昭和62年7月1日から昭和63年3月31日まで運輸省第二港湾建設局から委託を受けて発掘調査を実施し、すでに平成元年3月に調査成果を報告している。続いて、第二次調査から第四次調査として昭和63年4月から平成3年3月まで茨城県と発掘調査事業についての委託契約を結び、発掘調査を実施した。

なお、年度ごとの調査区は、略記号を用いて以下のように表示した。

- ・第一次調査 (SA 1)－昭和62年度調査区 (A1～E3区…運輸省委託)
- ・第二次調査 (SA 2)－昭和63年度調査区 (M1～O5区…茨城県委託)
- ・第三次調査 (SA 3)－平成元年度調査区 (F1～L4区, W3～W7区…茨城県委託)
- ・第四次調査 (SA 4)－平成2年度調査区 (P3～V6区…茨城県委託)

以下、昭和63年4月から平成3年3月までの調査経過の概要について記述する。

昭和63年度－第二次調査

- 4 月 5日に、本年度調査予定地の現地踏査を行い、調査計画を作成した。11日に現場事務所を開設し、諸準備を進めた。25日から作業員を投入して、発掘器材の搬入、整理、諸施設の整備、調査区内の清掃を行った。26日から遺構確認のためのトレンチを南北に10mおきに18か所設定し、遺構確認調査を実施した。
- 5 月 6日から9日にかけて調査区のほぼ中央部に南北トレンチ (M3～P3) を入れ、試掘を開始した。その結果、M3区とL3区の境付近に黒色土砂、粘土ブロックを検出した。N3区からも黒色土砂と共に、獣骨が出土した。その後も引き続き、トレンチによる試掘を行い、黒色土砂、焼土、焼石及び炭化物を検出した。30日にはN2区南半分からO2区北端部にかけて鹹水槽と思われる粘土貼り遺構7か所を確認した。
- 6 月 2日から7日にかけて、日本物理探査株式会社 (以下「日本物理探査」という) に委託して砂捨場の磁気探査を実施し、残留爆弾の有無を調査した。6日からトレンチによる試掘と併せて重機による第一次面の表砂除去をO3区北半分から開始した。その結果、O3区南西側から土樋1条、鹹水槽2基を確認した。14日までに、O3区からO4区西側で確認できた遺構は、土樋4条、鹹水槽30基、土坑(竈を含む)10基である。15日は、N2・3区からO2・4区にかけて、遺構確認状況写真撮影を行った。その後、N3区南半分からO3・4区西半分にかけての掘り込みを開始し、16日から遺構実測も開始した。
- 7 月 重機による一次面の表砂除去をL2・3区からはじめ、N3・4区、M2・3区と行って8日に一応終了した。その後、鹹水槽37基、土樋26条、土坑(竈を含む)15基の掘り込み、

遺構実測及び写真撮影を行った。

- 8 月 降雨日が多く、現場作業を中止することがしばしばであった。調査は、土樋3条の掘り込みと鹹水槽、土樋及び土坑等の補足調査（断割り）を行った。
- 9 月 引き続き、降雨日が多く、調査は鹹水槽23基、土樋13条及び竈3基を調査した。重機でN2・4区、O2・4区の二次面の表砂除去作業を行った。
- 10 月 鹹水槽16基、土樋12条の調査を進めた。
- 11 月 調査は鹹水槽31基、土樋16条、竈1基、人骨や獣骨を検出した土坑2基について調査した。24日と25日にわたって第81号鹹水槽から出土している木製品の出土状況図作成を実施した。
- 12 月 6日からMとN区の磁気探査を日本物理探査に委託して行った。調査は、鹹水槽30基、土樋13条及び竈3基を調査した。26日発掘器材の点検及び整理を行い、年末年始の休業に入った。
- 1 月 厳寒の5日から調査を開始した。調査は、「千々乱風」伝説を思わせるような風が吹き、砂をまき上げる中での作業だったので、かなり困難で進捗にやや支障をきたした。鹹水槽16基、竈を含めて13基の土坑を調査した。9日から重機でL2～M2区の二次面の表砂除去を行い、同時に近くの浄妙寺で人骨の埋葬を県常陸那珂港湾・都市建設事務所と共催で行った。
- 2 月 調査は、鹹水槽17基、竈5基を調査した。6日からL1～3区、M3区及びN2区の二次面の表砂除去を重機で行った。24日には国立科学博物館人類学研究部の馬場悠男氏に依頼して人骨鑑定を行った。
- 3 月 11日に那珂湊市中央公民館で発掘調査報告会を実施した。24日までに本年度検出した鹹水槽186基、土樋85条、土坑28基及び竈17基の調査をすべて完了した。出土遺物は、内耳形土器及び陶磁器、石製品、金属製品、人骨、古銭及び木製品等であった。

平成元年度－第三次調査

- 4 月 発掘調査を開始するための諸準備を行い、10日に事務所を再開した。12日から作業員を投入して、調査区の北側から南北のトレンチ（F2～J2）試掘と併せて青塚の平板測量を進めた。
- 5 月 2日に前年度調査区より休憩所、倉庫等の施設を移設した。トレンチ試掘はK2～L2区まで進み、鹹水槽と思われる粘土ブロックや黒色土砂を確認した。31日にH2区の黒色土帯拡張部より人骨が検出され、那珂湊警察署による鑑識調査が実施された。
- 6 月 調査の能率を上げるために大型重機を導入し、F1～3区、G1～3区の一次面の表砂除去

を行った。併せて遺構確認を実施して、遺構確認図を作成した。その後、遺構調査を行い、鹹水槽18基、土坑（竈を含む）3基、人骨8体を検出し、実測及び写真撮影を行った。26日から日本物理探鑛に委託して、磁気探査を実施し、自衛隊に依頼して爆弾数点を掘り出した。

- 7 月 重機による一次面の表砂除去を H2・3区、I3及び G3区から始め、J2・3区、K3・4区、J4区・L3区、I4区、H4区、L4区と進めた。調査は鹹水槽35基、土樋2条及び土坑（竈を含む）12基を行った。
- 8 月 連日厳しい暑さが続くなか、新たに鹹水槽37基、土樋2条、土坑（竈を含む）11基の調査を進め、人骨9体、短刀、内耳形土器等が出土した。重機による表砂除去は予定通り進み、28日で第一次表砂除去を終了した。
- 9 月 F3、G3区の二次面の表砂除去を開始し、新たに鹹水槽46基、竈を含む土坑20基の調査を行った。
- 10 月 3日から H3・I3区の三次面の表砂を除去し、調査は鹹水槽44基、土樋3条、竈を含む土坑43基の調査を行った。24日には、現地説明会に先駆け報道機関に対し事前の説明会を実施した。26日と27日の2日をかけて、奈良教育大学の長友、平賀両氏の御指導により、竈の熱ルミネッセンスによる年代測定を実施するために、竈の焼砂の採集を行った。
- 11 月 4日に現地説明会を実施した。見学者は500名を越えるほどの盛況であった。10日から W3～X4区の南北トレンチ試掘を開始し、15日から重機による一次面の表砂除去を開始した結果、南側から黒色土砂及び鹹水槽と思われる粘土ブロックを5基確認した。遺構の調査は鹹水槽39基、土樋10条、竈を含む土坑30基を検出したが、重複が激しく、新旧関係をおさえるのに困難をきたした。
- 12 月 調査区の南側の調査を本格的に開始するために、休憩所や倉庫等の施設を移設した。調査は、鹹水槽82基、土樋6条、竈6基を調査し、人骨3体が出土した。27日には発掘器材の点検及び整理を行い、年末・年始の休業に入った。
- 1 月 新年を迎え、5日から調査を開始した。風が強く、時には吹雪の日もあり、そうしたなかで鹹水槽60基、竈12基の調査を行った。22日から日本物理探鑛に委託して W5区の磁気探査を実施した。25日には W5区のトレンチ試掘によって竈3基を確認した。
- 2 月 調査は鹹水槽30基、土樋1条及び竈5基を調査した。20日には国立科学博物館人類学研究部の馬場悠男氏を招聘し、人骨鑑定についての研修を行った。
- 3 月 19日まで調査を行い、本年度検出した鹹水槽496基、土樋57条、竈57基、炉跡41基及び埋葬遺構65基の調査を完了した。事務所内の整理を行い、27日に事務所を閉鎖した。

平成2年度－第四次調査

- 4 月 9日に事務所を再開し、諸準備を行った。12日から作業員を投入して、調査区の南側から南北にトレンチ試掘を開始し、R4区を中心に黒色土砂を確認した。
- 5 月 前月に引き続きトレンチ試掘を行い、10日から重機を導入し、重機による試掘も開始した。その結果、鹹水槽と思われる粘土貼り遺構8基、土樋1条を確認した。28日から大型重機を導入し、R3とS3区の一次面の本格的な表砂除去を開始した。31日から遺構の掘り込みを行い、鹹水槽12基、土樋1条の実測と写真撮影を行った。
- 6 月 降雨日があしばしばあり、作業を中止することもあった。重機による一次面の表砂除去をR4とS3区から始め、V5・6区、U5・6区と進めた。調査は鹹水槽63基、土樋12条、竈6基の実測、写真撮影及び補足調査等を行った。
- 7 月 遺構は重複が少ないので、セット関係もとらえやすく、鹹水槽45基、土樋16条、竈5基の調査を実施した。16日から日本物理探査に委託してQ4・R4区、U4・5区、V4・5区の磁気探査を実施し、自衛隊に依頼して砂中の爆弾を掘り出した。遺物の出土量は少なかったが、徳利や土師質土器の皿が出土した。S2区から幼児骨が出土した。
- 8 月 竈、鹹水槽、土樋のセットごとに写真撮影を行い、鹹水槽19基、土樋3条、竈2基、炉跡2基及び土坑3基の調査を実施した。U4区内の遺構は、二次面から三次面にまたがり、重複が激しく新旧関係をおさえながら調査を進めることができた。遺構確認はQ3区まで進み、鹹水槽と思われる粘土貼り遺構3基、その他、竈と思われる落ち込みを確認した。
- 9 月 重機による一次面の表砂除去がQ5区、R5及びS5区に進み、鹹水槽2基、土樋1条、竈と思われる落ち込みを1基確認した。調査は調査区のほぼ中央部まで進み、鹹水槽8基、土樋10条、土坑を含む竈5基を調査した。前月調査をしたR4区の竈は補足調査の結果、灰の下面より焼石が多数検出されたため、更に掘り下げて調査を実施した。
- 10 月 遺構調査が調査区のほぼ北半分に移ったため、休憩所や倉庫等の施設を移設した。9日に宇都宮大学の石部正志氏を招聘し、「出土遺物と沢田遺跡の遺構のとらえ方」について研修を行った。調査は、鹹水槽18基、土樋12条及び竈1基を調査した。Q5区から検出した鹹水槽は今までのような単なる砂に粘土を貼ったものではなく、暗褐色土を下地に粘土を貼って構築されていた。
- 11 月 1日快晴、風もなく予定通り航空写真撮影が実施できた。調査は鹹水槽15基、土樋26条及び竈1基を調査した。Q3区から検出された竈の南側とそれに伴う鹹水槽の中から炭化物が多量に検出された。14日は報道機関に対し遺跡の説明を行い、17日には昨年度に続き現地説明会を実施し、440名の見学者があった。

- 12 月 鹹水槽23基，土樋16条及び竈3基の調査を終了した。現場休憩所や倉庫等の整理と清掃を行い，27日から年末・年始の休業に入った。
- 1 月 7日から調査を開始した。重機による遺構確認により調査を終了した一次面のR4区の竈の下から鹹水槽5基，土樋3条を確認し，調査を実施した。
- 2 月 R5区の遺構調査を実施した。R5区の竈は残存状態も良く，吊金具と思われる鉄製品が数点出土した。
- 3 月 最後の補足調査を行い，8日に鹹水槽235基，土樋132条，竈22基，土坑16基，炉跡2基及び埋葬遺構3基の調査をすべて完了した。11日から事務所内整理，休憩所，倉庫，事務所及び物品等の撤収を行った。22日には関係機関へ挨拶回りをを行い，4年間，111,000㎡に及んだ沢田遺跡の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

沢田遺跡は、茨城県那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚に所在し、那珂湊市役所の北々東約7.0kmに位置している。

那珂湊市は、茨城県の海岸線約180kmのほぼ中央部にあたり、栃木県的那須岳に源を発する那珂川の河口左岸に位置している。市域は、東西約5.9km、南北約8.9km、面積25.64km²で、人口は33,001人(平成3年4月1日現在)である。東は太平洋を臨み、北から西にかけては勝田市、南西から南にかけては那珂川を隔て東茨城郡常澄村、大洗町に隣接している。市街地は、市域南部の那珂川河口の沖積低地を中心に形成され、西部は水田地帯、北部は台地で畑地が多く、野菜、さつまいも及びイチゴの栽培が行われ、近郊農業が盛んである。

本市は、江戸時代に水戸藩の高港として栄え、東北、北海道の米や物産の中継港としての役割をにない、諸国の出船・入船で賑わうとともに、漁港としても大いに発展してきた。最近では茨城県の『常陸那珂港湾公園都市構想』により、常陸那珂港を中心に一層の発展が期待されている。

市の地形は標高25m前後の那珂台地南東端が太平洋にせまり、那珂川支流の中丸川等が、この台地に樹枝状に深く入り込んでいる。市南東部の海岸は急斜面あるいは崖状を呈し、県内でも最も多くの岩礁が存在しており、特に、那珂湊市平磯町から磯崎町にかけての岩礁地帯は、中世代白亜紀層として天然記念物の県指定をうけた海岸として著名である。これに対し、市北東部の海岸は緩やかに湾曲し、東海村村松方面に延びる雄大な砂丘地帯となっている。

沢田遺跡は、市北東部の太平洋を臨む阿字ヶ浦海水浴場北側の標高4～15mの砂丘地帯に位置している。調査面積は96,000m²で、現況は砂丘である。

注・参考文献

那珂湊市立図書館『図書館要覧』 1989年

茨城県教育財団「沢田遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第52集 1989年

第2節 歴史的環境

沢田遺跡のある那珂湊市は、那珂川河口に位置し、自然に恵まれ、狩猟漁撈の時代や稲作農耕の時代にも人々が居住し生業を営んでいたものと思われ、原始・古代から中世・近世にかけての遺跡が数多く存在している。

先土器時代の遺跡は、本郷川左岸の部田野台地に西原遺跡⁽⁷⁾〈1〉があり、剥片が採集されている。

縄文時代になると遺跡の数も多くなる。那珂湊市を6つの地区に分けて説明すると、那珂川河口に位置する湊地区には、河口ということもあって貝塚が多く、小川貝塚⁽⁷⁾〈2〉、辰ノ口貝塚⁽⁷⁾〈3〉、御船蔵貝塚⁽¹¹⁾〈4〉及び富士ノ上貝塚⁽¹¹⁾〈5〉等が所在している。湊地区の北東に位置する平磯・磯崎地区には、三ツ塚の磯崎遺跡⁽⁸⁾⁽¹⁵⁾〈6〉が所在している。那珂湊市の北東部に位置する阿字ヶ浦地区には、谷板沢左岸台地縁辺から草創期の有舌尖頭器等の石器が出土⁽⁷⁾⁽⁸⁾している。

那珂湊市の西部に位置する部田野地区には、草創期・早期の部田野^{わじな} 猪 I・II 遺跡^{やまぎき}〈7〉、山崎遺跡 I・II⁽⁸⁾〈8〉、中期^{かみ}の上ノ内貝塚^{うち}〈9〉及び後期^{みやま}の宮前貝塚^え〈10〉などがあり、上ノ内貝塚付近の水田からは中期初頭の土器も発見されている。那珂川と中丸川に挟まれた細長い台地の北半部と中丸川右岸の水田地帯に位置する柳沢・柳が丘地区には、中期^{はらやま}の原山遺跡⁽⁸⁾〈11〉、後期から晩期にかけての柳沢十二所遺跡^{やなぎさわじゅうにしよ}〈12〉、寺脇遺跡^{てらわき}〈13〉及び大田房貝塚^{だいたぼう}〈14〉⁽⁸⁾がある。同じく那珂川と中丸川に挟まれた三反田台地に位置する美田多地区には、前期^{むべやま}の道理山貝塚⁽⁸⁾〈15〉がある。ここからは釣針や尖頭器などの遺物が多く出土している。以上、那珂湊市を地区ごとに述べてきたが、那珂川河口や海岸に近いということもあって貝塚が多く点在している。

弥生時代の遺跡も各地区にみられる。湊地区では、富士ノ上遺跡⁽⁷⁾〈16〉、山ノ上遺跡^{やま かみ}〈17〉及び八幡ノ上遺跡⁽⁷⁾〈18〉などがあり、住居跡が発見されている。山ノ上遺跡は後期の十王台式土器が出土している。平磯・磯崎地区でも三ツ塚の磯崎遺跡で弥生式土器が出土している。阿字ヶ浦地区でも谷板沢左岸台地で弥生時代中期の土器片等が採集されている。部田野地区にも猪 I・II・^{あまがね} 尼ヶ祢^{かまがみうえ}〈19〉、釜神上遺跡⁽⁷⁾〈20〉などがあり、特に猪 I・II 遺跡は、茨城県内の弥生時代編年上、中期の「猪式土器」として標式遺跡となっている。柳沢・柳が丘地区にも弥生時代の寺脇遺跡や昭和46年に発掘調査して甕棺墓（土器棺）が4基発見された柳沢十二所遺跡がある。⁽¹⁴⁾

古墳時代には、磯崎から阿字ヶ浦地区に至る太平洋岸台地を中心に連なって古墳群が形成されている。その数は百数十基に及び、県内でも屈指の古墳群である。磯崎地区の川子塚古墳⁽¹⁵⁾〈21〉は全長約81mの前方後円墳で、5～6世紀頃の那珂川下流域の一部を支配した豪族の墳墓と考えられている。最近、同地区にある磯崎東古墳群⁽¹⁰⁾〈22〉の調査が行われたが、ここは葺石を伴う帆立貝式古墳で、石室内からは直刀、骨鏃、刀子及び珠文鏡等が出土している。古墳時代の集落は、

湊地区の八幡ノ上から廻り目、神敷台⁽⁷⁾へかけて存在が確認され、和田ノ上古墳群⁽²³⁾^{わだうえ}、東塚原古墳群⁽²⁴⁾^{ひがしつかほら}が海に面する台地に形成されている。部田野地区では鷹ノ巣⁽²⁵⁾^{たかさす}、尼ヶ祢遺跡及び山崎遺跡などから住居跡が見つ⁽⁷⁾か⁽⁹⁾つている。特に山崎遺跡は、昭和63年6月工業団地土地区画整理事業に伴う発掘調査を行い、古墳時代前期の住居跡27軒を検出している。柳沢・柳が丘地区にも原山遺跡、御所内I・II遺跡⁽²⁶⁾^{ごしやうち}、寺脇遺跡及び柳沢十二所遺跡⁽¹⁵⁾^すなどがあり、柳沢十二所遺跡からは後期の住居跡が発見されている。美田多地区では、三反田台地に現在4基からなる道理山古墳⁽²⁷⁾^いが所在している。

奈良・平安時代の集落としては、湊地区では八幡ノ上遺跡、神敷台遺跡⁽²⁸⁾^{かみきだい}から発見されており、平磯地区では西方の輪笠内の清水町から発見されている⁽⁸⁾。部田野地区では、昭和63年に調査された山崎遺跡からも検出され、美田多地区でも奈良・平安時代の土師器、須恵器等が出土していることから集落が存在するのではないかと思われる⁽⁷⁾。

那珂湊地方は『新編常陸国誌』⁽⁵⁾によると、大化(645~650)前代は仲国に属していた。奈良時代には、奈良の平城宮から発掘された天平18年(746)頃の木簡に、「常陸国那賀郡酒烈埼所生若海藻⁽⁷⁾」とあり、「酒烈埼」よりワカメが奈良の都へ貢納されている。平安時代には湊・平磯・磯崎・阿字ヶ浦・部田野地区は常陸国那賀郡幡田郷に属し、柳沢・柳が丘・美田多地区は常陸国那賀郡岡田郷に属したとなっている。『新編常陸国誌』では「幡田郷」^{はただごう}の中心地を部田野地区、「岡田郷」^{おかだごう}の中心地を柳沢地区としている。『日本文徳天皇実録』には、天安元年(857)10月、大洗磯前と共に酒烈磯前にも朝廷から薬師菩薩明神の称号を贈られている。このように那珂湊の地は、古来より畿内地方とのつながりがあったことが窺える。平安時代末期には、平氏の常陸大掾系吉田一族の勢力下に入っている。

中世に入ると、古代の幡田郷に代わり、「戸田野郷」^{へたのごう}として資料に現れ、また、那珂郡に属した。そして、那珂川流域の郷村を支配していた常陸大掾氏の勢力は、応永33年(1426)には江戸氏に一掃された。江戸氏は那珂川河口の湊や平磯の地に注目し、江戸但馬守通勝の家臣阿彦三郎が館を構えたという伝承もある。更に南北朝時代の史料をみると、「那珂湊」と「那珂港」という名が記録されている。つまり、これは那珂川河口に位置する那珂湊が交通や交易の要衝としての機能をもっていたことが窺える。

近世になると、天正18年(1590)12月、江戸氏は常陸太田を本拠としていた佐竹義宣に水戸城から追われ、その後、那珂湊一帯は佐竹氏の管轄下に入り、蔵入地としても重視された。慶長7年(1602)佐竹氏は徳川家康によって秋田へ移封され、慶長14年(1609)徳川頼房が水戸へ封じられて水戸藩の初代藩主となって以来、明治4年(1871)の廃藩置県まで那珂湊は水戸藩領に属することになる⁽⁵⁾。そして、那珂湊が名実ともに著名になったのは、水戸藩の商港となったこの時期からである。即ち、幕藩体制の確立にともなって、北海道・東北地方の米や物産が東廻り航路

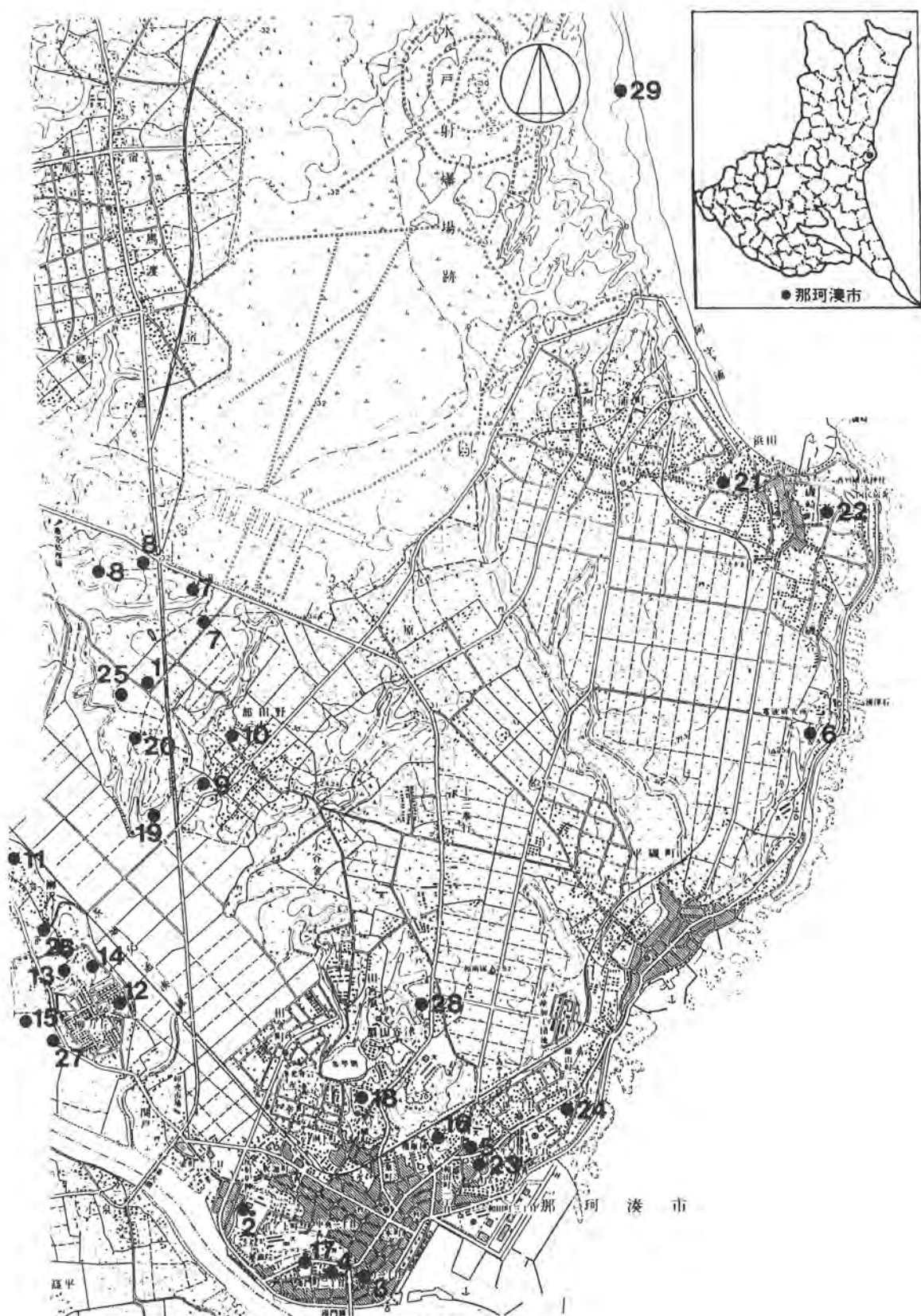
によって江戸へ運送されるようになったからである。⁽¹³⁾史料によると、那珂湊は当時、東北からの東廻り航路の中継港として、酒沼川－海老沢－(陸路)－巴川－北浦－利根川－江戸川を通過して江戸へ結ばれる交通の要所となっていた。更に、那珂湊は、那珂川の黒羽－烏山－水戸－那珂湊を結ぶ河川輸送の便をあわせてもつ港で、水戸城下近傍の商品流通の要として発展し、水戸藩唯一の貿易港として大いに繁盛した。

さて、今回調査した沢田遺跡<29>は、全国的にも調査事例の少ない中・近世の製塩跡であり、この地域には江戸時代初期の強風のため、村が砂に埋もれてしまったという「千々乱風」⁽⁶⁾伝説が今日まで語り伝えられている。遺跡内からは、多数の人骨、内耳形土器片及び古銭などが発見されており、出土遺物等から考えて、鎌倉時代から江戸時代にかけて、この地において人々が製塩を営んでいたことは確実である。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第○図中の該当遺跡番号と同じである。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」1987年
- (2) 茨城県「茨城県史料＝中世編Ⅰ」1973年
- (3) 茨城県「茨城県史料＝中世編Ⅱ」1981年
- (4) 茨城県「茨城県史＝市町村編Ⅰ」1972年
- (5) 茨城県「茨城県史料＝近世編」1985年
- (6) 宮崎報恩会版「新編常陸国誌」崙書房1973年
- (7) 那珂湊市教育委員会「那珂湊市史料」(第一集)1975年
- (8) 那珂湊市「那珂湊の地名」1986年
- (9) 那珂湊市教育委員会「那珂湊市部田野山崎遺跡」1990年
- (10) 那珂湊市教育委員会「那珂湊市磯崎東古墳群」1990年
- (11) 茨城県教育財団「沢田遺跡」茨城県教育財団調査報告第52集 1989年
- (12) 那珂湊市教育委員会「那珂湊市文化財地図」1988年
- (13) 宮崎報恩会版「那珂湊の歴史」財団法人宮崎報恩会 1974年
- (14) 茨城県「茨城県史料＝考古資料編弥生時代」1991年
- (15) 茨城県「茨城県史料＝考古資料編古墳時代」1974年
- (16) 茨城県「茨城県史料＝考古資料編先土器・縄文時代」1979年
- (17) 山内清男「日本先史土器の縄紋」先史考古学会 1979年



第1図 沢田遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

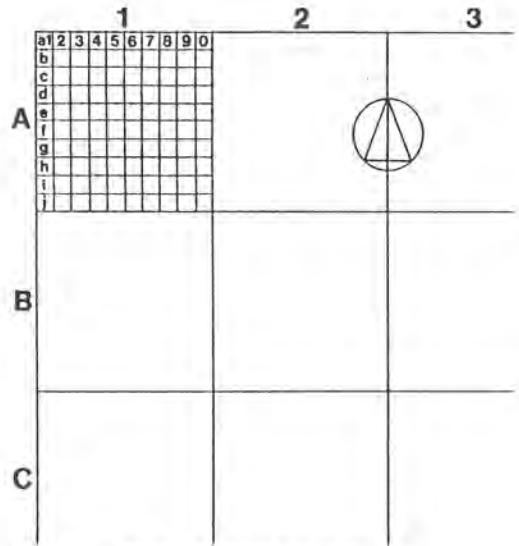
表1 那珂湊市遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	遺 跡 の 時 代						
		先土器	縄 文	弥 生	古 墳	奈・平	鎌・室	江 戸
1	西 原 遺 跡	○						
2	小 川 貝 塚		○					
3	辰 ノ 口 貝 塚		○					
4	御 船 蔵 貝 塚		○					
5	富 士 ノ 上 貝 塚		○					
6	磯 崎 遺 跡	○	○	○				
7	部田野貉 I・II 遺跡		○	○				
8	部田野山崎 I・II 遺跡		○	○	○			
9	上 ノ 内 貝 塚		○					
10	宮 前 貝 塚		○					
11	原 山 遺 跡		○	○	○			
12	柳 沢 十 二 所 遺 跡		○	○	○			
13	寺 脇 遺 跡		○	○	○			
14	大 田 房 貝 塚		○	○	○			
15	道 理 山 貝 塚		○	○				
16	富 士 ノ 上 遺 跡		○	○	○			
17	山 ノ 上 遺 跡		○	○				
18	八 幡 ノ 上 遺 跡		○	○	○			
19	尼 ヱ 祢 遺 跡		○	○	○			
20	釜 神 上 遺 跡			○	○			
21	川 子 塚 古 墳				○			
22	磯 崎 東 古 墳 群				○			
23	和 田 ノ 上 古 墳 群				○			
24	東 塚 原 古 墳 群				○			
25	鷹 ノ 巢 遺 跡				○			
26	御 所 内 I・II 遺跡			○	○			
27	道 理 山 貝 塚				○			
28	神 敷 台 遺 跡			○	○	○		
29	沢 田 遺 跡	○	○	○	○	○	○	○

第3章 調査方法

第1節 地区設定

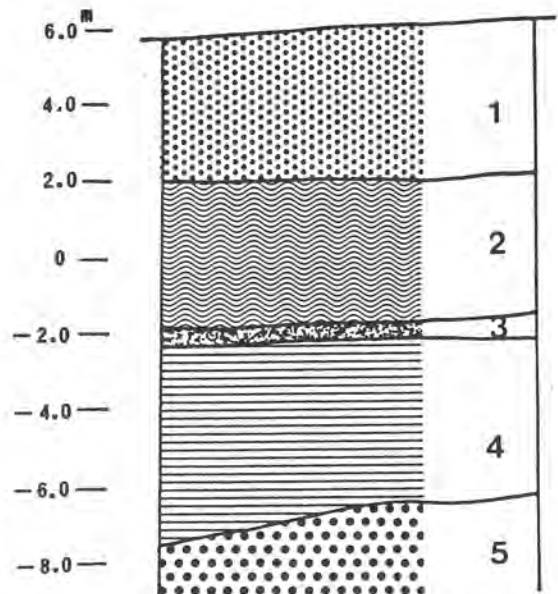
沢田遺跡の調査区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸(南北)+44,900.00m、Y軸(東西)+6,980.00mの交点を通る軸線を基準にして、東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定した。大調査区の名称は、北から南へ「A」、「B」、「C」……「F」と大文字を付し、西から東へ「1」、「2」、「3」……として、「A1」区、「B2」区と表記した。小調査区は40m四方の大調査区を更に4m四方の小調査区に100分割し、北から南へ「a」、「b」、「c」……「j」、西から東へ「1」、「2」、「3」……「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせた四文字で「A2b₁」区、「B2b₂」区のように表記した。



第2図 沢田遺跡調査区名称図

第2節 基本層序の検討

当遺跡の基本的層序は、運輸省第二港湾建設局作成の「地層想定断面図」によると、1、2層は砂質土層(沖積世)で8mほど堆積しており、3層は礫質土層(沖積世)である。4層は砂質土層(洪積世)で、5層は、軟岩(中新世)である。当遺跡で検出された遺構は、いずれも1層の砂質土層中に構築されていた。



第3図 沢田遺跡土層柱状図

第3節 遺構確認

昭和62年度に運輸省委託で調査した区域と接しているため、前年度の方法とほぼ同様に、4 m四方のグリッド毎に遺物採集を行い、遺物の分布状態を把握しながら、幅2 mのトレンチを南北に設定して遺構が存在するものと思われる黒色土を目安に掘り下げ、遺構の確認を進めた。その結果、竈、鹹水槽、土樋及び土坑等と思われる遺構が検出されたために、遺構、遺物を破壊しない層まで重機を導入して表砂を除去し、その後、明確な遺構確認調査を人力で行い、調査区のほぼ全域から釜屋、鹹水槽、土樋及び土坑等を確認した。

第4節 遺構調査

釜屋の調査は、長径方向とそれに直交する方向に灰層観察用のトレンチを幅60～80cm前後で掘り込み、鹹水槽の調査は、短軸で二分する二分法を用いた。土樋の調査は、適宜な位置に砂層観察用ベルトを残して底面まで掘り込んだ。

土層観察は、色相、含有物、混入物の種類と量及び粘性等を総合的に観察し、分類の基準とした。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用した。遺物は、出土位置、標高、遺物番号等を遺構平面と共に図化し、レベルを測定後に取り上げた。

遺構平面図は、水系方眼地張測量によって、20分の1の縮尺で図化した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構平面図作成→遺構断面図作成の順を基本とした。図面、写真等に記録できない事項については、遺構記録カードに記録した。

第4章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

当遺跡は、茨城県那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚に所在し、県の中央部東端、阿字ヶ浦海水浴場の北側に広がる砂丘地帯に形成されている。調査範囲は、東西約120m、南北約925mで、面積111,000m²である。第一期の調査面積は15,000m²で、調査結果は釜屋8か所、鹹水槽114基、土樋29条、土坑2基である。これらについては、平成元年3月に既に報告している。

第二期から第四期の調査面積は96,000m²で、調査の結果、製塩跡84か所、竈123基、鹹水槽920基、土樋274条、炉跡45基、埋葬遺構79基、土坑13基、不明遺構43基が検出されている。

釜屋は、^{かんすい}鹹水を煮つめて塩をつくる施設である。当遺跡の一般的な形態として釜屋内の中心部には竈があり、その東側には2基の小さな鹹水槽が、南側には^{にがり}苦汁を^{いだしば}抜く居出場（水槽）が作られている。釜屋の大きさははっきりしないが、床と思われる黒色土（炭化植物片（稲藁）と粘土の混合したもの）の広がりからは時期によっても大小の違いが見られるが、東西12m、南北14m前後でほぼ隅丸長方形を呈しているものと思われる。

竈は、灰、炭化粒子及び貝殻片を含む黒色土（炭化植物片（稲藁）と粘土の混合したもの）等を用いて作られている。竈内からは釜を吊っていた吊金具や、粘土に貝殻を含む釜の一部と思われるものが発見されていることから、ここでは主に土釜（貝釜）が使われていたものと考えられる。

鹹水槽は、塩の結晶が付着した砂を洗いだして得た濃い塩水（鹹水）を溜める水槽である。砂浜に穴を掘り、黒色土で下貼りをした上に、稲藁と粘土を混ぜたものを丹念に貼って作っている。大きさや形は様々であるが、長さ5.5m、深さ2.0mに達する大きなものもある。平面形は楕円形、隅丸方形、隅丸長方形、ひさご形などである。

^{つちひ}土樋は、釜屋内の鹹水槽と外の鹹水槽を結ぶ溝である。砂浜を溝状に掘り、その内側に稲藁と粘土を混ぜたものを貼って作っている。規模は、幅15～30cm、深さ10cm前後で、断面形は半円形を呈している。溝の上には主に石の^{ふた}蓋を載せ砂が入らぬように工夫している。

炉跡は、塩づくりに従事した人達の煮炊きをした跡と思われる。砂浜に穴を掘り、そこに黒色土を貼って、直径0.50～1.00mの皿状に作っている。

埋葬遺構は、人間や家畜を埋葬した跡である。人骨は80体分出土しており、中には「^{かいげんつうほう}開元通寶」や「^{えいらくつうほう}永楽通寶」等の渡来銭を六道銭として埋納されているものもある。家畜の多くは馬で、他に

犬の骨も出土している。

出土遺物は、塩づくりに使われたと思われる柄振^{えぶり}、柄杓^{ひしゃく}、ろ過器^{ろりか}、吊金具^{つりかなぐ}等があり、その他、内耳形土器、土師質土器の皿、陶磁器の香炉、小皿、播鉢、甕、壺、徳利等の生活用具、短刀、足金物や筭等の刀装具、死者の埋葬に使用した古銭等である。

2 遺構・遺物の記載方法

平成元年3月に刊行した「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1」の遺構、遺物の記載方法を本書では、調査の実態に合わせて簡略化したため若干異なるが、下記の要領で統一した。




(1) 使用記号

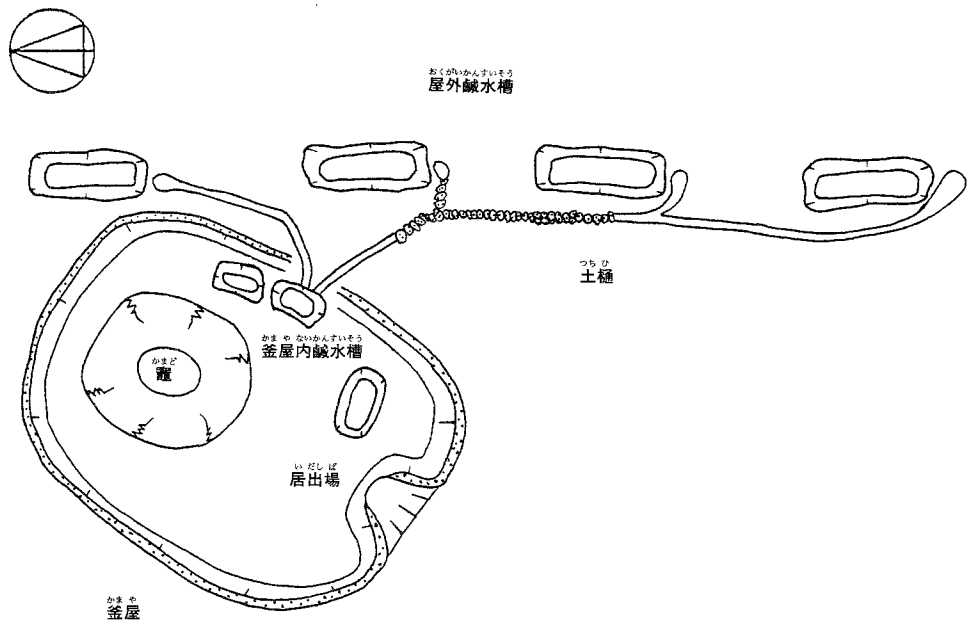
本書で使用した記号は、次のとおりである。

釜屋	竈 土坑	鹹水槽	土樋 溝	不明	ピット	土 器 陶磁器	土製品	石製品	金属製品	木・竹製品	骨角製品
SH	SK	SN	SD	SX	P	P	DP	Q	M	W	B

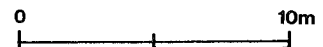
(2) 遺構、遺物の表示

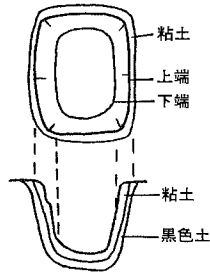
本書で使用した遺構、遺物等の表示方法は、次のとおりである。

竈・炉— 粘土— 釉— 黒色土—K 人骨—△

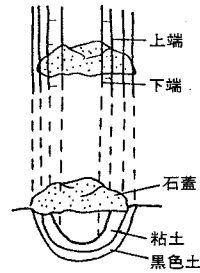


製塩跡平面図





鹹水槽平面・断面図



土樋平面・断面図

(3) 土層の分類

当遺跡から検出された遺構の土層観察は、調査時に、色調、含有物の種類と量、粘性、締まり具合などを観点として線引きし、観察記録を行ったが、整理の段階で色調と含有物の種類と量について下記のように整理し、記号化した。

なお、色調については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著，日本色研事業株式会社）を使用した。

番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物	
1	黒色	5YR	1.7/1	3/1	A 粘土ブロック(落壁を含む) B 粘土粒子 C 灰 D 砂 E 焼砂
		7.5YR	1.7/1 2/1		
		10YR	1.7/1 2/1		
		2.5Y	2/1 3/1		
		5Y	2/1		
2	暗青灰色	5B	4/1	F 炭化物(木炭も含む) G 炭化粒子	
3	灰色	5Y	4/1 6/1	H 礫 I 焼礫 J 貝殻片	
		7.5Y	4/1		
		10Y	4/1 8/1		
4	灰白色	2.5YR	8/1	8/2	K 黒色土砂(煤も含む) L 焼土 M ローム
		5YR	8/1 8/2		
		7.5YR	8/1 8/2		
		10YR	7/1 8/1 8/2		
		2.5YR	7/1 8/1 8/2		
		5Y	7/1 7/2 8/1 8/2		
5	灰オリーブ色	5Y	4/2 5/2 5/3 6/2	※土層断面における含有物の量(面積割合)については、「」少量(10%未満)、「無印」中量(10%~30%未満)、「〃」多量(30%以上)として、アルファベット	
		7.5Y	4/2		
6	オリーブ黒色	5Y	2/2 3/1 3/2	の右上に付加して表示した。	

番号	土 色 名	色 相	明 度/彩 度	含 有 物
7	暗オリーブ褐色	2.5Y	3/3	
8	オリーブ褐色	2.5Y	4/3 4/4 4/6	
9	オリーブ黄色	5Y	6/3 6/4	
10	暗オリーブ色	5Y	4/3 4/4	
11	オリーブ色	5Y	5/4	
12	明褐灰色	5YR 7.5YR	7/1 7/2 7/1 7/2	
13	褐灰色	5YR 7.5YR 10YR	4/1 5/1 6/1 4/1 5/1 6/1 4/1 4/2 5/1 6/1	
14	灰褐色	5YR 7.5YR	4/2 5/2 6/2 4/2 5/2 6/2	
15	黒褐色	5YR 7.5YR 10YR 2.5Y	2/1 2/2 3/1 2/2 3/1 3/2 2/2 2/3 3/1 3/2 3/1 3/2	
16	極暗褐色	7.5YR	2/3	
17	暗褐色	7.5YR 10YR	3/3 3/3 3/4	
18	にぶい褐色	7.5YR	5/3 5/4 6/3	
19	明褐色	7.5YR	5/6 5/8	
20	褐色	7.5YR 10YR	4/3 4/4 4/6 4/4 4/6	
21	灰黄褐色	10YR 2.5Y	4/2 5/2 6/2 4/2 6/2	
22	にぶい黄褐色	10YR	4/3 5/3 5/4 6/3 6/4	
23	明黄褐色	10YR 2.5Y	6/6 6/8 7/6 6/6 7/6 8/6	
24	黄褐色	10YR 2.5Y	5/6 5/8 5/3 5/4 5/6	
25	暗灰黄色	2.5Y	4/2 5/2	
26	黄灰色	2.5Y	4/1 5/1 6/1	
27	灰黄色	2.5Y	6/2 7/2	
28	にぶい黄色	2.5Y	6/3 6/4	
29	浅黄色	2.5Y 5Y 10Y	7/3 7/4 7/3 7/4 5/2	
30	淡黄色	2.5YR 2.5Y	8/4 8/3 8/4	
31	黄色	2.5Y	8/6 8/8	
32	にぶい黄橙色	10YR	6/3 6/4 7/2 7/3 7/4	

番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物
33	浅黄橙色	7.5YR 8/3 10YR 8/3 8/4		
34	黄橙色	10YR 7/8 8/6 8/8		
35	にぶい橙色	2.5YR 6/3 6/4 5YR 6/3 6/4 7/3 7/4 7.5YR 6/4 7/3 7/4 2.5Y 6/3		
36	淡橙色	5YR 8/3		
37	淡赤橙色	2,5YR 7/3 7/4		
38	橙色	2,5YR 6/6 5YR 7/6 7.5YR 6/6 6/8 7/6		
39	赤黒色	2.5YR 1.7/1 2/1		
40	暗赤灰色	2,5YR 3/1		
41	明赤灰色	7.5R 7/1 2.5YR 7/1 7/2		
42	赤灰色	2.5YR 4/1 5/1		
43	灰赤色	2.5YR 4/2 5/2 6/1 2.5Y 4/2		
44	極暗赤褐色	2.5YR 2/2 5YR 2/3		
45	暗赤褐色	2.5YR 3/2 3/3 5YR 3/2 3/3 3/4		
46	にぶい赤褐色	2.5YR 4/3 5/3 5/4 5YR 4/3 4/4 5/2 5/3 5/4		
47	明赤褐色	2.5YR 5/6 5YR 5/6 5/8 7.5YR 5/6		
48	赤褐色	10R 5/4 2.5YR 4/8 5YR 4/6 4/8		
49	赤色	10R 5/6		

(4) 遺構の実測図の掲載方法

本書における遺構実測図の掲載方法は、次のとおりである。

- 釜屋、竈、炉跡、鹹水槽、土樋、土坑は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組し、それをさらに3分の1、2分の1に縮小して掲載することを基本とした。
- 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。
また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- 製塩跡の実測図の掲載については、釜屋、竈、鹹水槽及び土樋を群ごとにまとめて掲載した

(5) 遺物の実測図の掲載方法

遺物の実測図の掲載にあたっては、次の表現方法を用いた。

- 土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、右側に断面を図示した。
- 上記以外の遺物については、効果的方法で実測した。
- 遺物の実測図は、原則として原寸トレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさによって、それ以外の縮尺も使用した。

(6) 表の見方

それぞれの表の見方は、次のとおりである。

〈第○製塩跡一覧表〉

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			

- 製塩跡番号は、整理の過程で付した番号を使用し、グループ分けした番号も併せて記した。
- 位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 標高は、遺構確認面のレベルを記した。
- 竈、鹹水槽、土樋、居出場は、それぞれのグループに関連する遺構名を記した。
- 新旧関係は、各グループの新旧関係を記した。

〈竈一覧表〉









竈番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				

- 竈番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。

- 位置は、遺構の占める面積の割合が最も大きい小調査区をもって表示した。
- 長径方向は、座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、「N-20°-W」（座標北から西へ20°傾く）のように角度で表示した。
- 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、円形、楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
 円形……………長径：短径=1.1未満：1
 楕円形……………長径：短径=1.1以上：1
- 規模の欄の長径，短径は，上端部の計測値（m）で表した。
- 規模の欄の深さは，遺構確認面から火床（底面）の最も深い部分までの計測値（m）で表した。
- 覆土は，自然堆積のものは「自然」，人為堆積のものは「人為」，不明のものは「不明」と表記した。
- 標高は，遺構確認面のレベルを記した。
- 出土遺物は，遺物の種類と実測個体数を除いた出土土器片数を記した。
- 備考は，重複関係や特徴等を記した。

〈鹹水槽一覧表〉

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							

- 鹹水槽番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。
- 平面形は，現存している形状の上端面で判断し，円形，楕円形，隅丸長方形及び隅丸方形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。
 円形，隅丸方形 ……………長径 [軸]：短径 [軸]=1.1未満：1
 楕円形，隅丸長方形……………長径 [軸]：短径 [軸]=1.1以上：1
- 規模の欄の長径 [軸]，短径 [軸] は，上端部の計測値（m）で表した。
- 規模の欄の深さは，遺構確認面から底面の最も深い部分までの計測値（m）で表した。
- 壁は，底部からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。
 81°～90°の傾き 65°～80°の傾き 65°未満の傾き 半円形の頂部を切り取った傾き
 垂直  外傾  緩斜  内彎 
- 底面は，下記の基準で分類し表示した。
 1 平坦  2 皿状  3 凹凸  4 ゆるい起伏 
- 形態分類の基準については，次のとおり表した。

平面形	I - 楕円形	II - 長楕円形	III - 円形	IV - 隅丸長方形	V - 隅丸方形
	VI - 舟形	VII - ひさご形	VIII - 不定形		
断面形	A - 逆台形状	B - 皿状	C - 頭截半円形状		
規模	1 - 1m 未満	2 - 1m 以上2m 未満			
	3 - 2m 以上3m 未満	4 - 3m 以上			
深さ	a - 0.5m 未満	b - 0.5m 以上1m 未満			
	c - 1m 以上1.5m 未満	d - 1.5m 以上			

※上記以外の項目については製塩跡・竈一覧表の記載方法に準じた。

〈土樋一覧表〉

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						

- 土樋番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。
- 位置は、遺構の占める大調査区（大グリッド）名を表示した。
- 主軸方向は、直線部の長い部分が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを表示した。
- 規模は、全長をメートル（m）単位で、その他はセンチメートル（cm）単位で表示した。
- 断面形は、主としてどのような形をしているかを表示した。
- 覆土については、鹹水槽一覧表の項目に準じた。
- 標高は、土樋の底面のレベルを記した。
- 備考欄は、重複関係、図版番号、出土遺物、接続遺構名を記載した。

〈土器観察表〉

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考

- 図版番号は、実測図中の番号である。
- 法量は、A - 口径、B - 器高、C - 底径、D - 高台径、E - 高台高を示し、現存値は（ ），復元推定値は [] を付して示した。
- 器形の特徴は、底部・体部（胴部）等の各部位について土器観察の結果を記した。
- 手法の特徴は、土器の成形・整形について記した。
- 胎土・色調・焼成の順で述べ、色調は「新版標準土色帖」を使用した。焼成については、硬く焼き締まっているものは「良好」、焼きがあまく器面が剥離しやすいものは「不良」と

し、その中間のものを「普通」とした。

○備考の欄は、土器の残存率、遺物番号、出土位置を表示した。

〈古銭一覧表〉

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。

○鑄名は、古銭名を記した。

○初鑄年は、最初に鑄造された西暦を記した。

○鑄造地名は、鑄造した国名を記した。

○土地点は、出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

○備考の欄は、遺物番号を表示した。

〈鉄製品・木製品一覧表〉

図版番号	名称	法 量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		

〈土製品一覧表〉

図版番号	名称	法 量					出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		

〈石製品一覧表〉

図版番号	名称	法 量				石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

○図版番号は、実測図中の番号である。

○名称は、遺物の種類名を表示した。

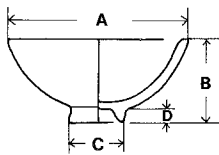
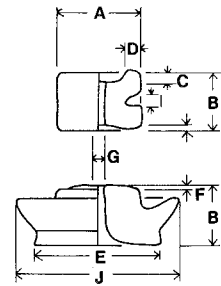
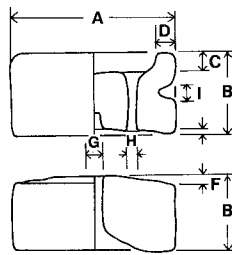
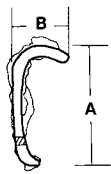
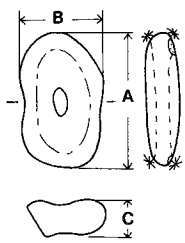
○法量は、それぞれの最大長、最大幅及び最大厚の計測値である。

() 内の数値は欠損した鉄製品、木製品、土製品及び石製品の残存値である。

○石質の欄は、その石製品を作る母岩の岩石名を表示した。

○出土地点は、出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

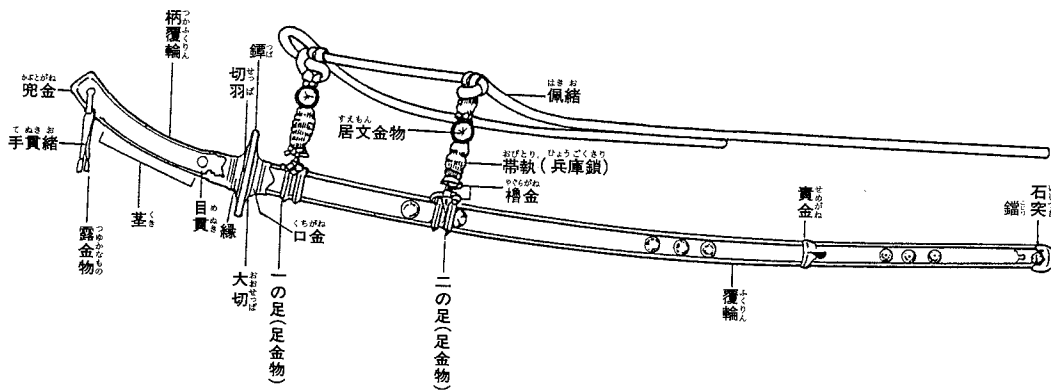
○備考の欄は、残存率、遺物番号を表示した。



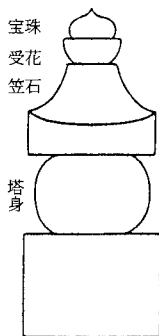
〈土器〉
 A 口径
 B 器高
 C 底径
 D 高台高

〈石製品・鉄製品・土製品〉
 A 最大長
 B 最大幅
 C 最大厚

〈石臼(粉挽臼, 茶挽臼)〉
 A 直径
 B 高さ
 C 上縁高
 D 上縁幅
 E 下縁高
 F ふくみ
 G 芯穴の径
 H 供給口の径
 I 挽き手穴の径
 J はんぎりの径

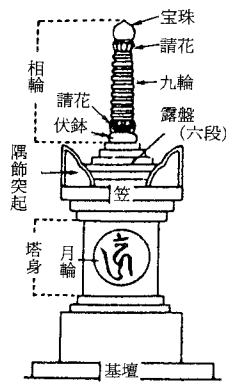


太刀の部分名称

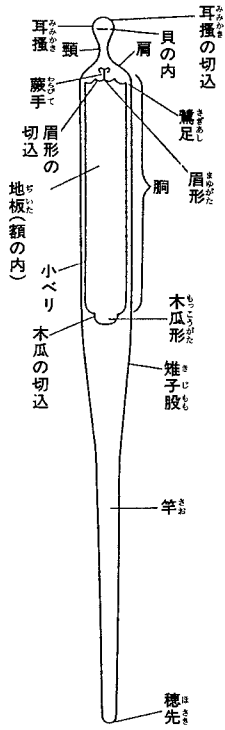


梵字	五大	形式	読み	字義	五気
阿	空輪	団	キヤ	虚空	土用
蘇	風輪	半月	カ	因業	冬
伊	火輪	三角	ラ	塵垢	夏
呂	水輪	円	バ	言説	秋
丑	地輪	方	ア	不生	春

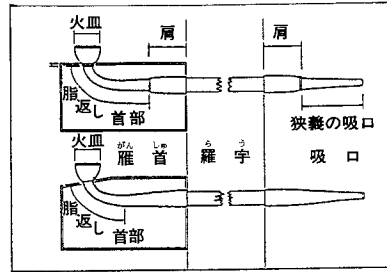
五輪塔各部名称と意味



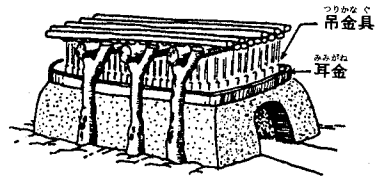
宝篋印塔の各部名称



筭の名称



煙管の部分名称(仮称)(古泉弘氏 作成1985)



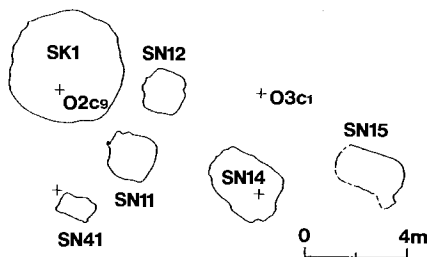
どがま かいがま
土釜(貝釜)

第2節 製塩跡

第1製塩跡（第4図）

位置 調査区の中央部 O3b₁区を中心に確認され、標高10.10m に位置している。

関連遺構 第1号竈，第11・12・14・15・41号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，第14号鹹水槽と第15号鹹水槽の長軸方向と配置の違いから，2グループに区別できる。第1グループは，第1号竈，釜屋内鹹水槽（11，12），居出場（41）及び屋外鹹水槽（14）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（15）で構成されている。



第4図 第1製塩跡遺構配置図

第1製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	O3b ₁	10.10	1	11, 12	41	14	—	新
2	O3b ₁	10.10	1	11, 12	41	15	—	古

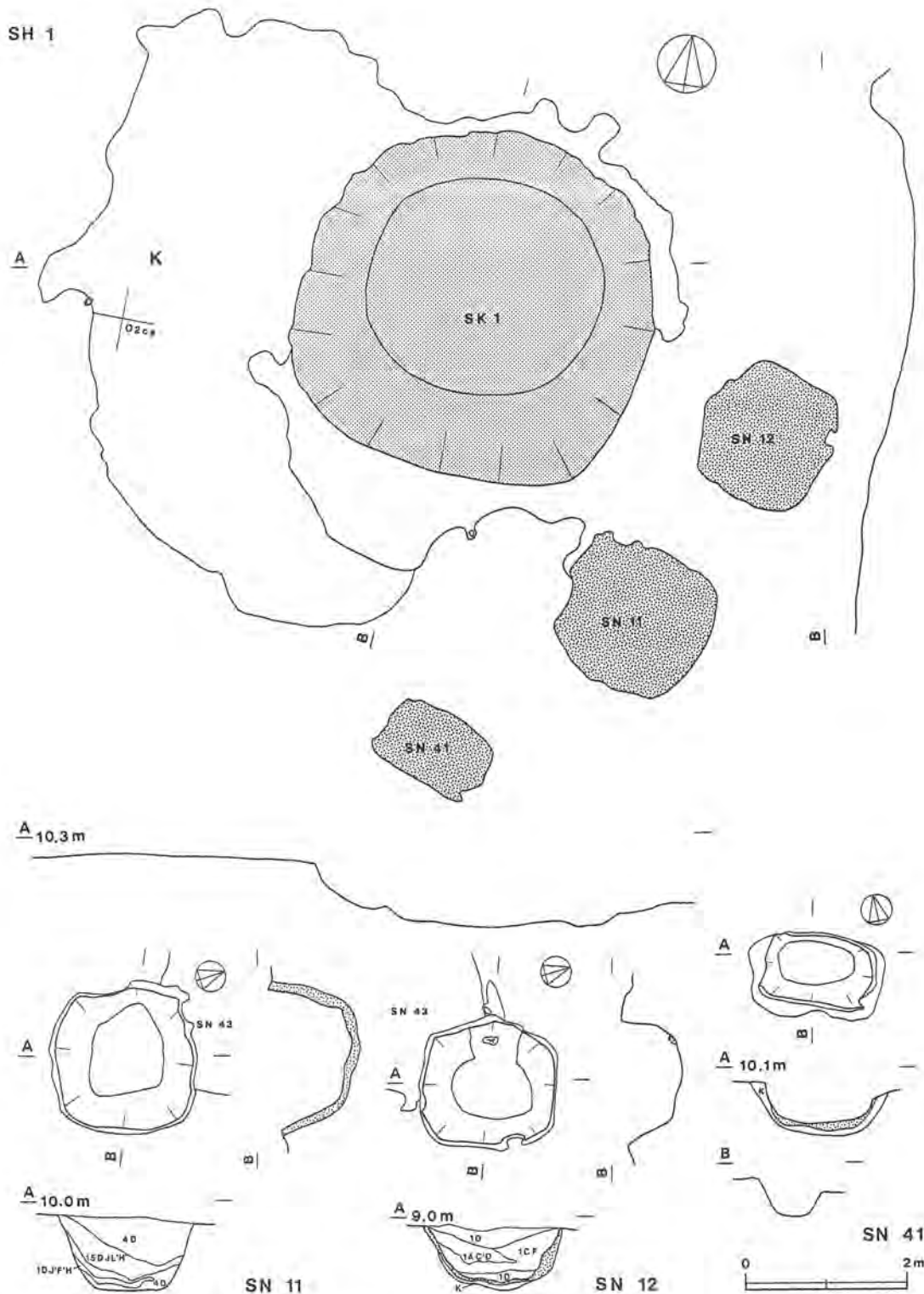
釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北約7.30m，東西約7.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ10cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。北側よりに竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出場1基で構築されていたものと思われる。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 O2b₉区を中心に1基（第1号竈）検出され，平面形は，隅丸方形を呈している。規模は，長軸4.30m，短軸4.30m，深さ0.90mである。黒色土を10cmの厚さで鍋状に貼って構築しており，覆土は，上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，下層は灰が2～3cmの厚さで堆積している。火床直下の砂層は長期間火熱を受けたために赤変している。

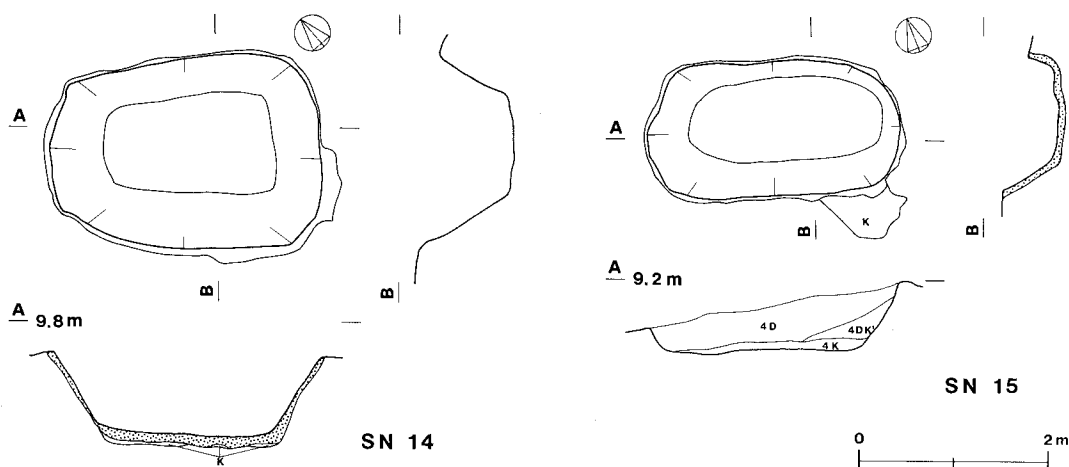
竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
1	O2b ₉	N-10°-E	隅丸方形	4.30	4.30	0.90	自然	10.00		

釜屋内鹹水槽 竈の東側の O2c₉・c₀区から2基（第11・12号鹹水槽）検出され，平面形は，隅丸方形を呈している。規模は，長軸1.76・1.63m，短軸1.72・1.54m，深さ1.04・0.75mである。底



第 5 図 第 1 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第6図 第1製塩跡鹹水槽実測図

面は平坦及び皿状を呈し、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~21cmの粘土を貼って構築している。

居出場 竈の南側のO2d₉区から1基(第41号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.34m、短軸0.82m、深さ0.53mである。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3~12cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 釜屋の東側のO2c₀区とO3c₂区から2基(第14・15号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.86・2.70m、短軸2.02・1.42m、深さ1.06・0.62mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~14cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

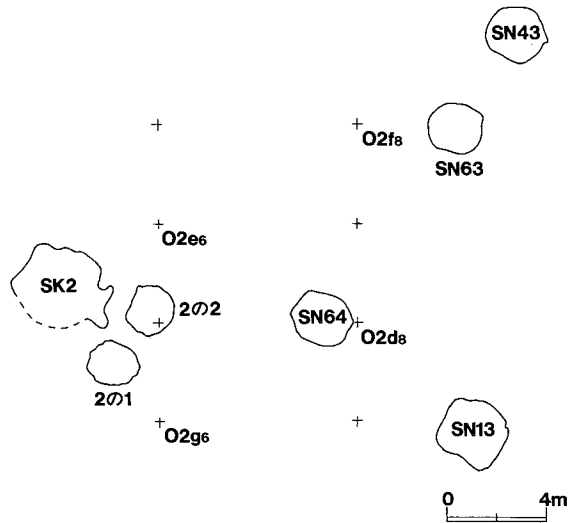
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
11	O2c ₉	N-64°-W	隅丸方形	1.76	1.72	1.04	8~21	外傾	平坦	自然	9.86	VA2c	釜屋内鹹水槽
12	O2c ₀	N-20°-E	隅丸方形	1.63	1.54	0.75	1~14	緩斜	皿状	自然	9.49	VA2b	釜屋内鹹水槽、底面・石1点
14	O2c ₀	N-40°-W	隅丸長方形	2.86	2.02	1.06	2~14	緩斜	平坦	自然	9.63	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点
15	O3c ₂	N-71°-W	隅丸長方形	2.70	1.42	0.62	6~7	緩斜	平坦	自然	9.01	IVA3b	屋外鹹水槽
41	O2d ₉	N-68°-W	隅丸長方形	1.34	0.82	0.53	3~12	緩斜	皿状	自然	9.93	IVB2b	居出場

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、第1グループの第14号鹹水槽の方が第2グループの第15号鹹水槽より標高が高いため、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第2製塩跡（第7図）

位置 調査区の中央部 O2b_s区を中心に確認され、標高10.40m に位置している。

関連遺構 第2号竈，第2の1・2の2・13・43・63・64号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，屋外鹹水槽の長軸方向と配置の違いから，3グループに区別できる。第1グループは，第2号竈，釜屋内鹹水槽（2の1，2の2）及び屋外鹹水槽（13）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で，屋



第7図 第2製塩跡遺構配置図

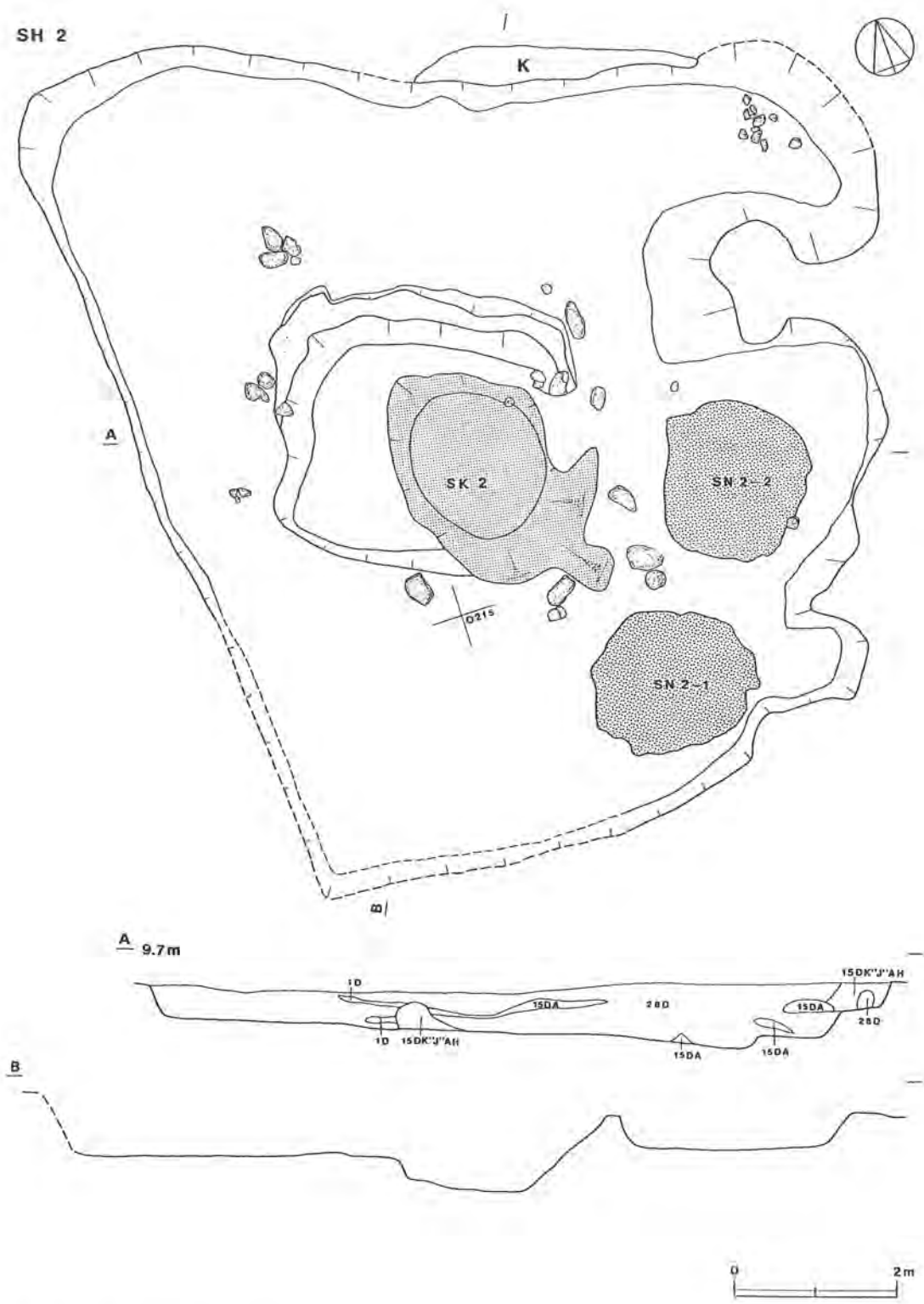
外鹹水槽（43，63）で構成されている。第3グループは，竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（64）で構成されている。

第2製塩跡一覧表

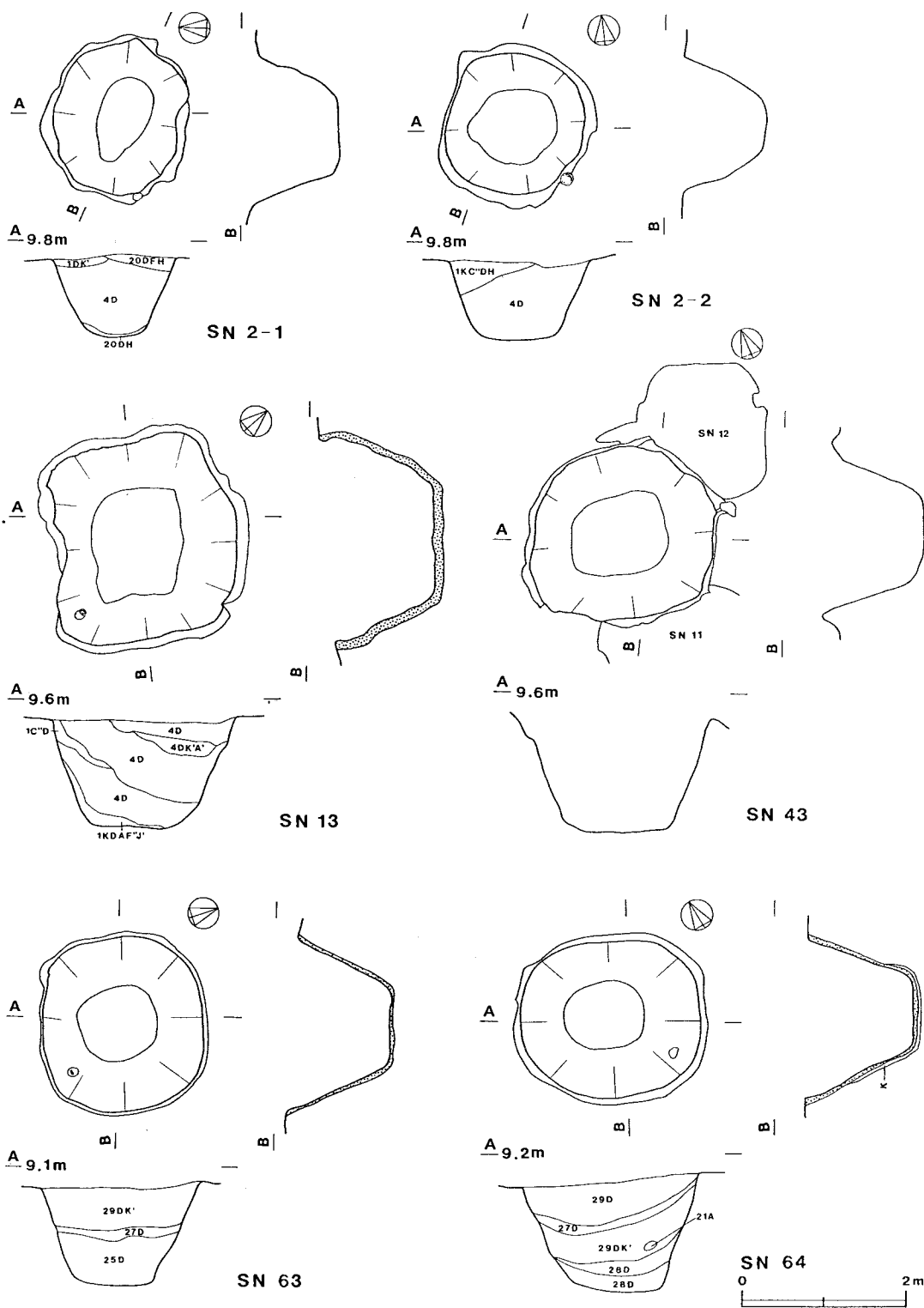
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	O2b _s	10.40	2	2の1,2の2	—	13	—	最古
2	O2b _s	10.40	2	2の1,2の2	—	43,63	—	第3グループより古い
3	O2b _s	10.40	2	2の1,2の2	—	64	—	最新

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北約11.00m，東西約10.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～100cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 O2e_s区を中心に1基（第2号竈）検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸4.10m，短軸3.40m，深さ1.20mである。黒色土を60～100cmの厚さで鍋状に貼って構築しており，覆土は，上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，中層から下層にかけて灰が10～25cmの厚さで堆積している。竈周辺からは，竈の構築材として使用されたと思われる焼石が散乱している。



第 8 図 第 2 製塩跡釜屋内遺構実測図



第9図 第2製塩跡鹹水槽実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
2	O2e5	N-55°-W	隅丸長方形	4.10	3.40	1.20	自然	10.30	陶器(香炉)1点	

釜屋内鹹水槽 O2f5区とO2e5区から2基(第2の1・2の2号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.85・1.75m、短軸1.60・1.70m、深さ1.06・1.05mである。底面は皿状及び平坦を呈し、壁は外傾及び内彎して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～5cmの粘土を貼って構築している。

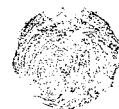
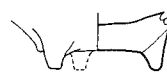
屋外鹹水槽 O2g9区・O2c9区・O2d8区・O2e7区の4か所から4基(第13・43・63・64号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.15～2.45m、短軸1.93～2.11m、深さ1.35～1.56mである。底面はいずれも平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～15cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
2の1	O2f5	N-72°-W	隅丸方形	1.85	1.60	1.06	1～5	外傾	皿状	自然	9.72	VA2c	釜屋内鹹水槽
2の2	O2e5	N-36°-E	隅丸方形	1.75	1.70	1.05	1～5	内彎	平坦	自然	9.57	VC2c	釜屋内鹹水槽
13	O2g9	N-52°-W	隅丸長方形	2.45	2.10	1.51	7～11	緩斜	平坦	自然	9.55	IVA3d	屋外鹹水槽、足掛け石1点
43	O2c9	N-77°-W	隅丸長方形	2.20	2.11	1.56	2～15	外傾	平坦	自然	9.85	IVA3d	屋外鹹水槽
63	O2d8	N-73°-W	隅丸長方形	2.15	1.94	1.35	1～3	緩斜	平坦	自然	8.98	VA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点
64	O2e7	N-63°-W	隅丸長方形	2.18	1.93	1.44	1～8	外傾	平坦	自然	9.82	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点

出土遺物 第2号竈手前付近から陶器の香炉1点(第10図1)と赤化した石が散乱して出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第3グループが最も新しく、次いで第2グループ、第1グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第2号竈から14世紀頃の陶器の香炉が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることはできなかった。



第10図 第2製塩跡
出土遺物実測・拓影図

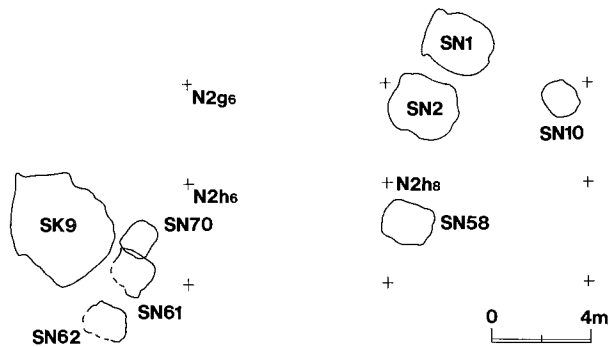
第2号竈出土土器観察表(第10図1)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	香炉 陶器	B (2.3) D 5.2 E 0.7	底部破片で、丸味をもって立ち上がっている。足は3か所に付けられている。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転系切り。	砂粒・スコリア にふい 橙色 普通	P1 30% 底部内面煤付着 第2号竈手前付近

第3製塩跡(第11図)

位置 調査区の中央部 N2i7区を中心に確認され、標高9.50mに位置している。

関連遺構 第9号竈，第1・2・10・58・61・62・70号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向と配置の違いから、3グループに区別できる。第1グループは、



第11図 第3製塩跡遺構配置図

第9号竈，釜屋内鹹水槽（62，70）及び屋外鹹水槽（58）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（1，2）で構成されている。第3グループは，竈が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽（61，62）及び屋外鹹水槽（10）で構成されている。

第3製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N2i7	9.50	9	62,70	—	58	—	最新
2	N2i7	9.50	9	62,70	—	1, 2	—	第1グループより古い
3	N2i7	9.50	9	61,62	—	10	—	最古

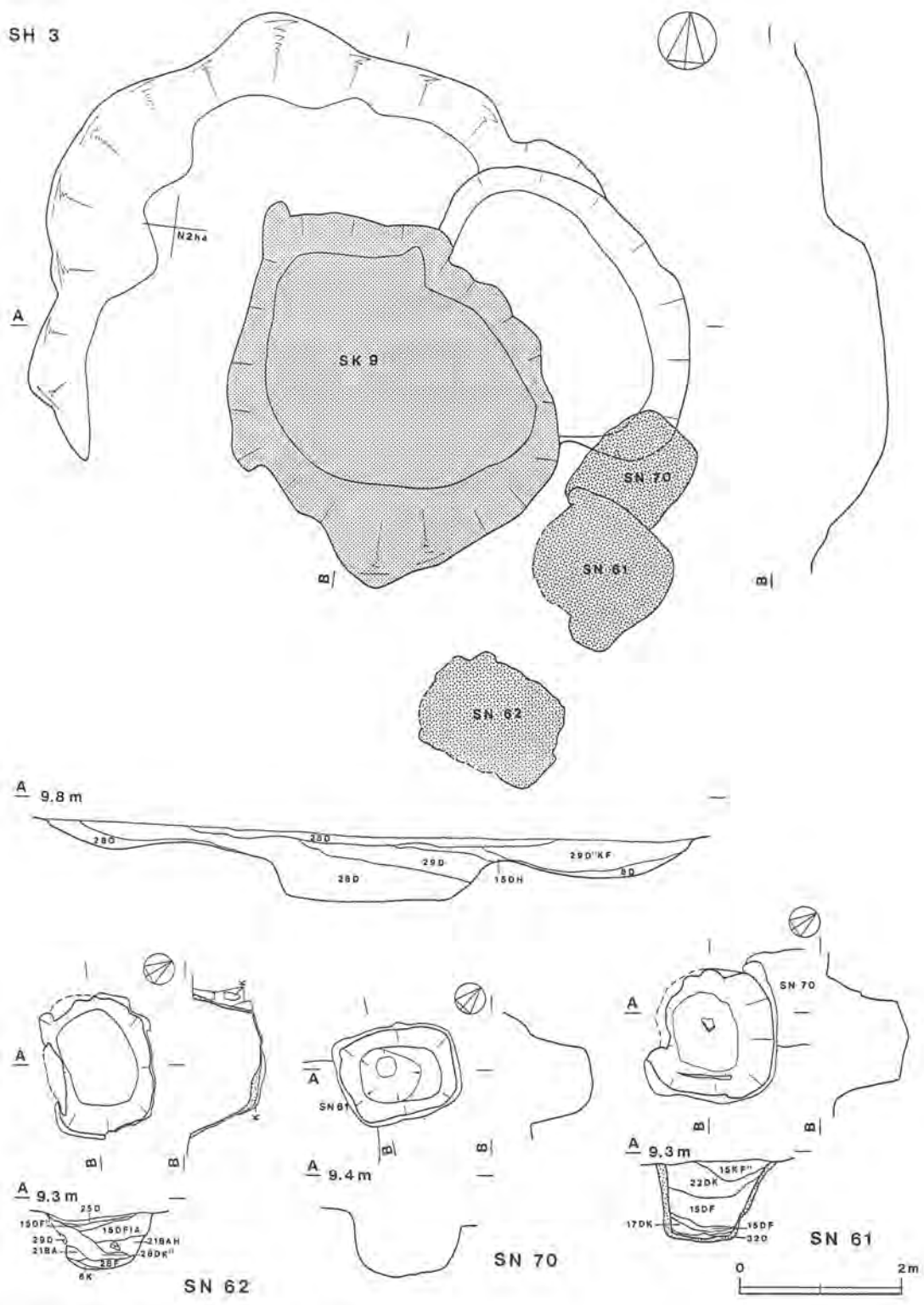
釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北約6.50m，東西約8.10mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～50cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽3基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 N2h4区を中心に1基（第9号竈）検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸4.60m，短軸3.80m，深さ0.94mである。黒色土を10～40cmの厚さで鍋状に貼って構築しており，覆土は，上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる炭化物を含む砂が自然堆積し，下層は灰が10～90cmの厚さで堆積している。

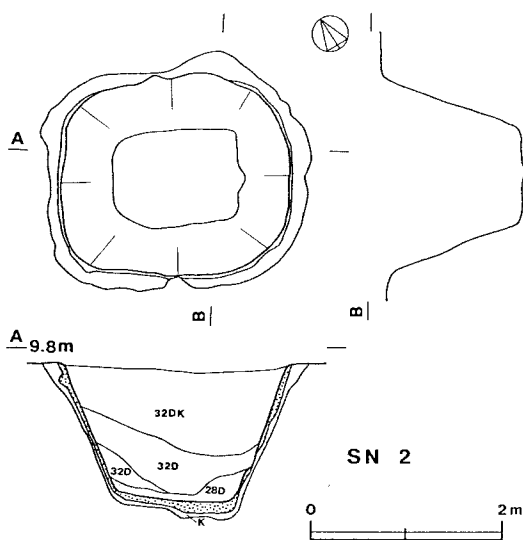
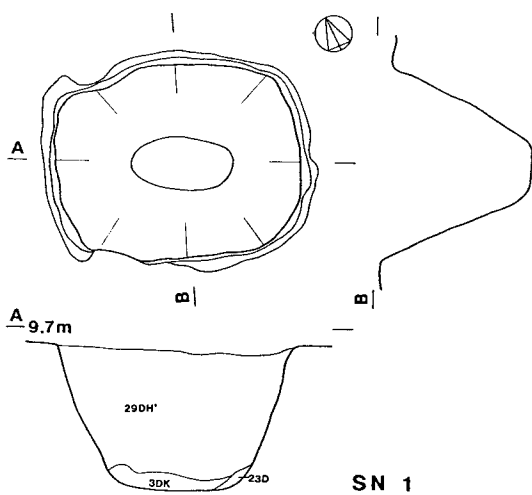
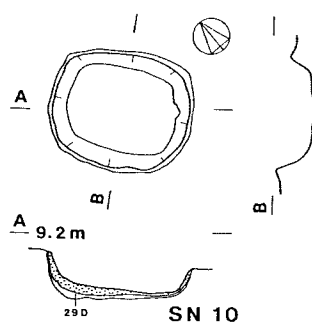
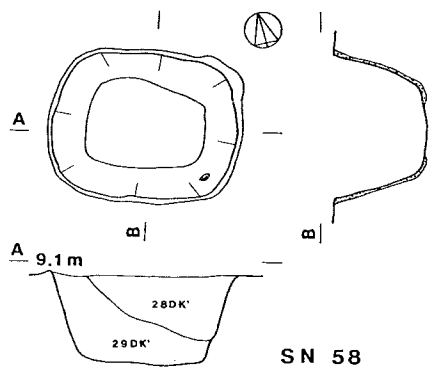
竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
9	N2h4	N-48°-W	隅丸長方形	4.60	3.80	0.94	自然	9.32		

釜屋内鹹水槽 N2hs区とN2is区から3基（第61・62・70号鹹水槽）検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸1.42～1.69m，短軸1.09～1.32m，深さ1.00～1.12mである。



第12図 第3製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第13図 第3製塩跡鹹水槽実測図

底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～18cmの粘土を貼って構築している。第61号鹹水槽と第70号鹹水槽が重複し、第70号鹹水槽の下から第61号鹹水槽を検出していることから、第70号鹹水槽が新しく構築されたと思われる。

屋外鹹水槽 N2fs区・N2gs・g9区・N2hs区の4か所から4基（第1・2・10・58号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.42～2.54m、短軸1.22～2.11m、深さ0.46～1.54mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～13cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

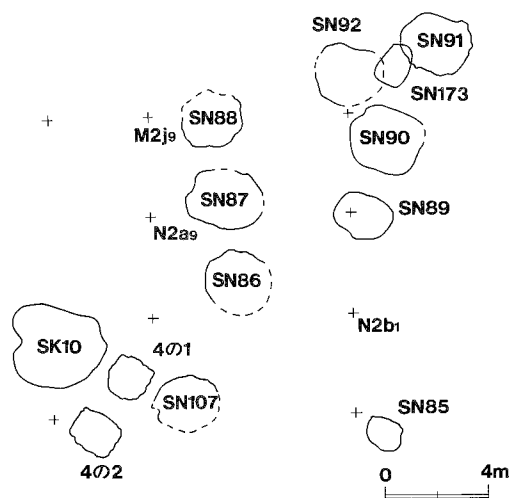
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
1	N2fs	N-68°-W	隅丸長方形	2.54	2.08	1.54	1～11	緩斜	平坦	自然	9.61	IVA3d	屋外鹹水槽
2	N2gs	N-58°-W	隅丸長方形	2.39	2.11	1.53	1～13	外傾	平坦	自然	9.69	IVA3d	屋外鹹水槽
10	N2g9	N-40°-W	隅丸長方形	1.42	1.22	0.46	2～9	緩斜	平坦	自然	9.16	IVA2a	屋外鹹水槽
58	N2hs	N-66°-W	隅丸長方形	1.92	1.53	1.14	2～5	外傾	平坦	自然	9.98	IVA2c	屋外鹹水槽、足掛け石1点
61	N2hs	N-53°-W	隅丸長方形	1.52	1.32	1.00	4～18	外傾	平坦	自然	9.20	IVA2c	釜屋内鹹水槽、底面-石1点、第70号鹹水槽と重複
62	N2is	N-67°-W	隅丸長方形	1.69	1.31	1.04	1～9	緩斜	平坦	自然	9.21	IVA2c	釜屋内鹹水槽
70	N2hs	N-33°-E	隅丸長方形	1.42	1.09	1.12	5～7	緩斜	平坦	自然	9.26	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第61号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第4製塩跡(第14図)

位置 調査区の中央部 N2a₉区を中心に確認され、標高9.80m に位置している。

関連遺構 第10号竈 (A・B)、第4の1・4の2・85～92・107・173号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と屋外鹹水槽の長軸方向と配置の違いから、4グループに区別できる。第1グループは、第10号竈A、釜屋内鹹水槽(4の1, 4の2)及び屋外鹹水槽(85)で構成されている。第2グループは、釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、第10号竈B及び屋外鹹水槽(87, 88)で構成されている。第3グループ



第14図 第4製塩跡遺構配置図

は、竈と釜屋内鹹水槽が第2グループと同一で、屋外鹹水槽(86, 91, 107)で構成されている。第4グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第2グループと同一で、屋外鹹水槽(89, 90, 92, 173)で構成されている。

第4製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N2a ₉	9.80	10A	4の1,4の2	—	85	—	最新
2	N2a ₉	9.80	10B	4の1,4の2	—	87,88	—	第1グループより古い
3	N2a ₉	9.80	10B	4の1,4の2	—	86,91,107	—	第1・2グループより古い
4	N2a ₉	9.80	10B	4の1,4の2	—	89,90,92,173	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.00m、東西11.30mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-38°-Eを指している。砂上に厚さ15～60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部と北西側に竈2基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、建屋の柱穴を想定するようなピットは検出できなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細は不明である。釜屋の周囲は底面から40～60cmの高さで土手が築かれており、南側に釜屋内へ向かって傾斜した出入口が付設されている。

竈 N2b₈区とN2a₇区の2か所を中心に2基(第10号竈A・B)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.90・3.20m、短軸3.35・2.74m、深さ1.30・1.20mである。黒色土を10～40cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、第10号竈Aが上層から中層にかけて攪乱を受けているため、堆積状況は不明であるが、第10号竈Aと第10号竈Bの下層には赤変した灰が10～15cmの厚さで堆積している。二つの竈の新旧関係は、土層と標高から第10号竈Bが古いと

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
10A	N2b ₈	N-54°-W	隅丸長方形	3.90	3.35	1.30	不明	9.65	㊦吊金具1点	
10B	N2a ₇	N-36°-E	隅丸長方形	3.20	2.74	1.20	自然	9.52		

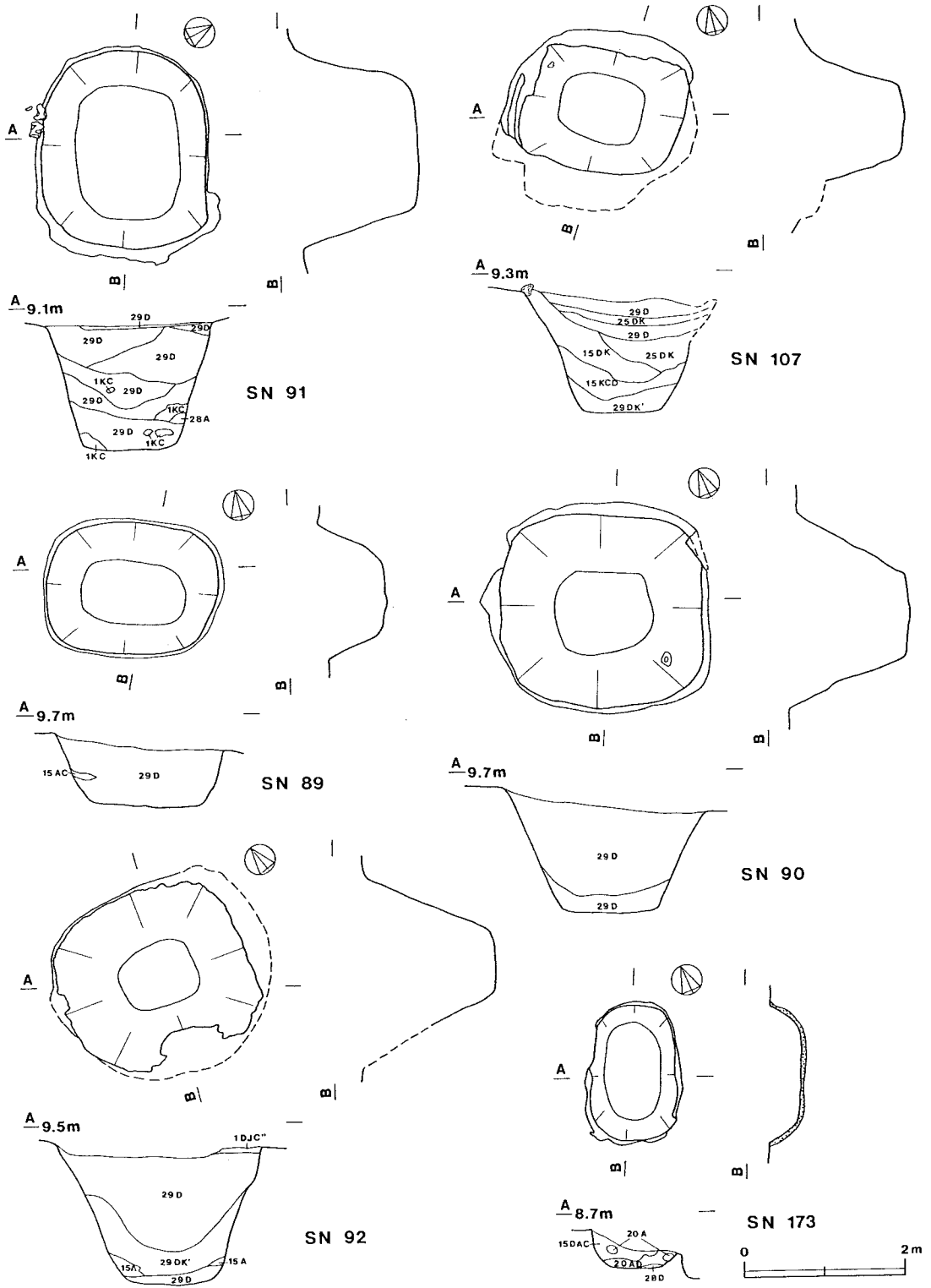
思われる。第10号竈Bの東側から焼石が集中して出土している。

釜屋内鹹水槽 N2b₈区とN2c₈区から2基(第4の1・4の2号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.54・1.64m、短軸1.53・1.54m、深さ1.04mである。底面は平坦を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～16cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 M2j₉区・M3i₁区・M3j₁区・N2a₉・a₀区・N2c₉区・N3a₁区・N3c₁区の8か所から10基(第85～92・107・173号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形、隅丸長方形及び楕円形を呈している。規模は、長軸[径](1.35)～2.66m、短軸[径](0.92)～2.44m、深さ(0.23)～1.70mである。底面は平坦で、壁は内彎、外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～18cmの粘土を貼って構築している。第91号鹹水槽の下から第173号鹹水槽を検出したことから、第91号鹹水槽が新しい。

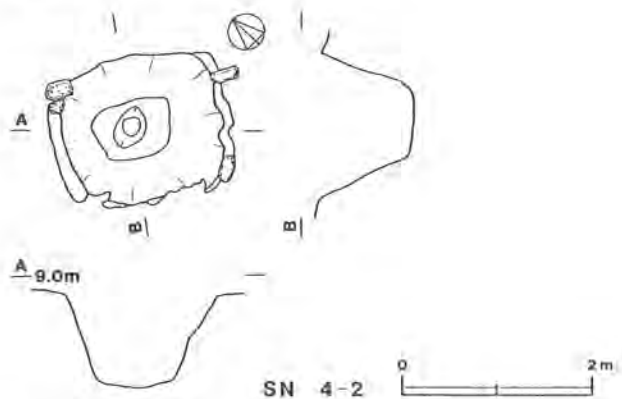
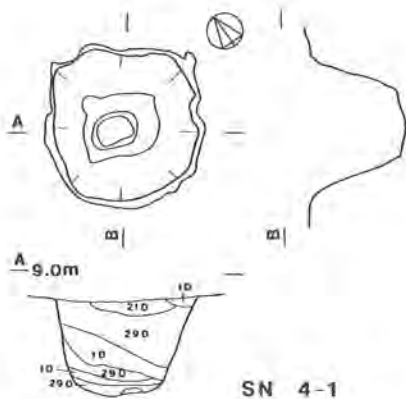
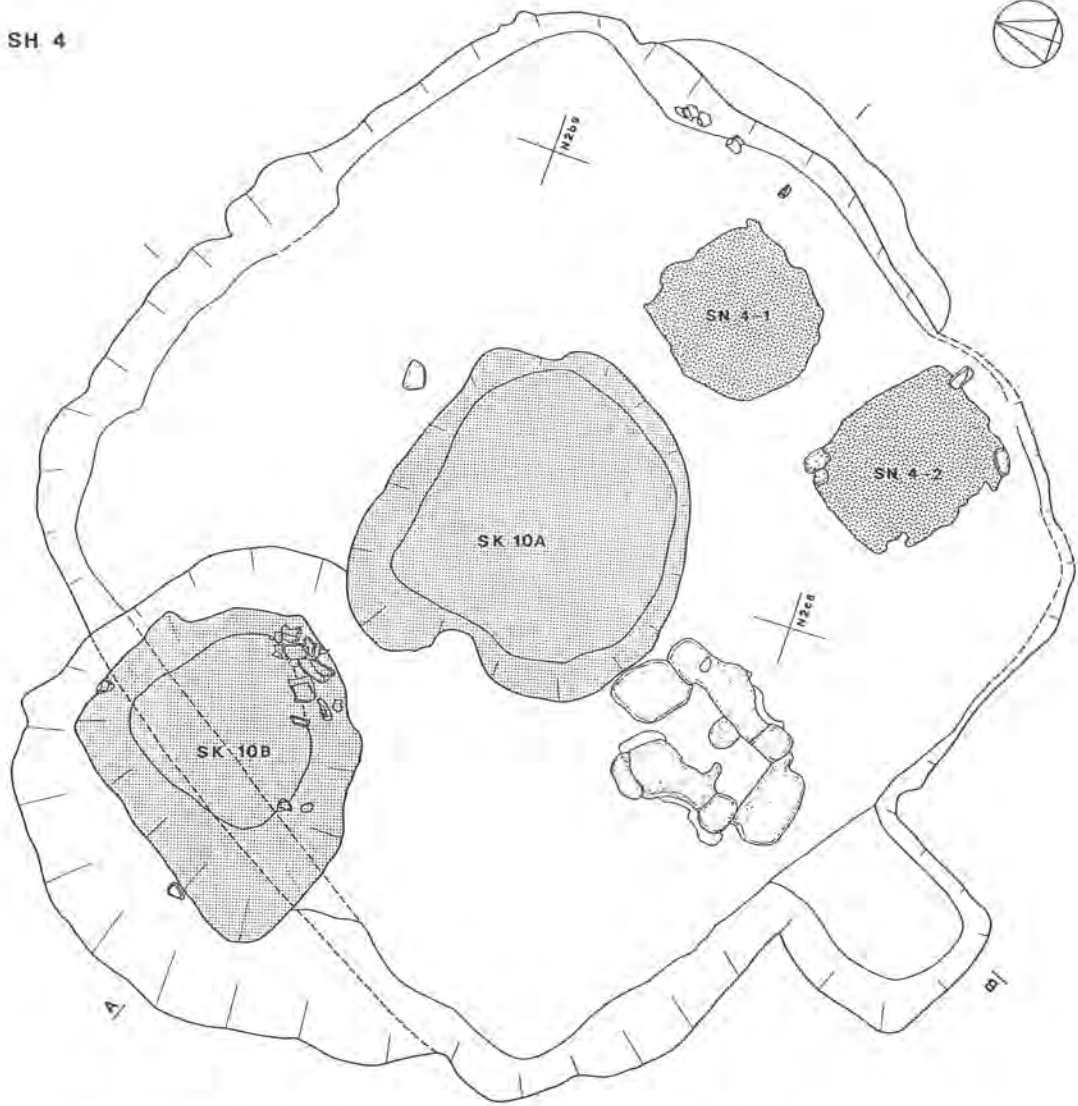
鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
4の1	N2b ₈	N-35°-E	隅丸方形	1.54	1.53	1.04	1～16	外傾	平坦	自然	8.70	VA2c	釜屋内鹹水槽、㊦石1点
4の2	N2c ₈	N-56°-W	隅丸方形	1.64	1.54	1.04	1～7	外傾	平坦	自然	8.80	VA2c	釜屋内鹹水槽、㊦石4点
85	N3c ₁	(N-54°-W)	隅丸長方形	(1.35)	(0.92)	(0.23)	5～6	緩斜	平坦	自然	(8.94)	IVA2a	屋外鹹水槽、㊦石1点
86	N2a ₉	N-62°-W	隅丸長方形	2.53	2.23	1.70	2～8	緩斜	平坦	自然	9.36	IVA3d	屋外鹹水槽
87	N2a ₀	N-84°-W	楕円形	2.66	2.31	1.54	5～17	外傾	平坦	自然	9.50	IA3d	屋外鹹水槽、足掛け石1点
88	M2j ₉	N-88°-W	隅丸長方形	2.22	2.00	1.68	4～9	緩斜	平坦	自然	9.51	IA3d	屋外鹹水槽、足掛け石ほみ
89	N3a ₁	N-74°-W	楕円形	2.13	1.67	0.86	3～6	緩斜	平坦	自然	9.33	IVA3b	屋外鹹水槽、足掛け石1点
90	M3j ₁	N-72°-W	隅丸方形	2.55	2.44	1.50	3～18	緩斜	平坦	自然	9.44	IVA3d	屋外鹹水槽、足掛け石1点
91	M3i ₁	N-63°-W	隅丸長方形	2.48	2.03	1.50	6～12	緩斜	平坦	自然	9.32	IVA3d	屋外鹹水槽、底面一本片、㊦石3点、第173号鹹水槽と重複
92	M3i ₁	N-73°-W	隅丸長方形	2.38	2.10	1.66	3～8	緩斜	平坦	自然	9.14	IVA3d	屋外鹹水槽
107	N2c ₉	N-63°-W	隅丸長方形	1.90	1.55	1.53	—	緩斜	平坦	自然	9.05	IVA2d	屋外鹹水槽、足掛け石1点
173	M3i ₁	N-73°-W	隅丸長方形	1.70	1.00	0.46	2～10	内彎	平坦	自然	8.50	IVC2a	屋外鹹水槽、第91号鹹水槽と重複

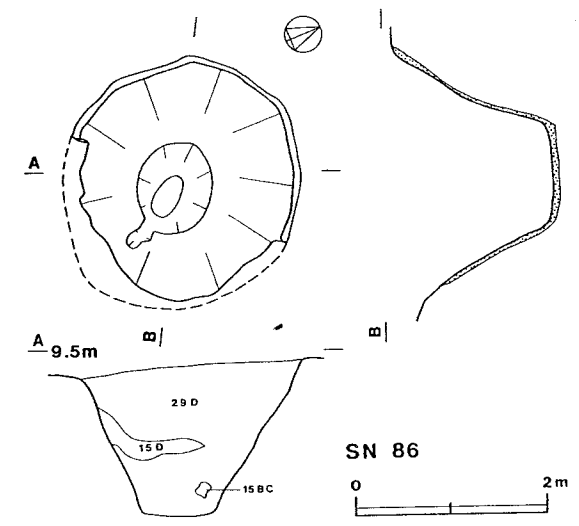
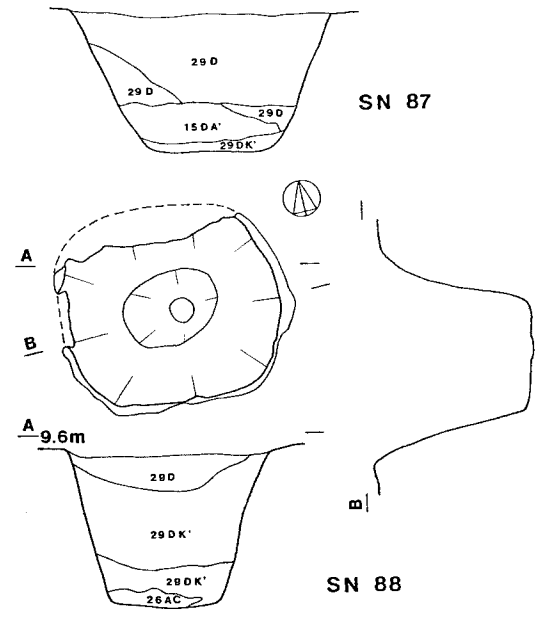
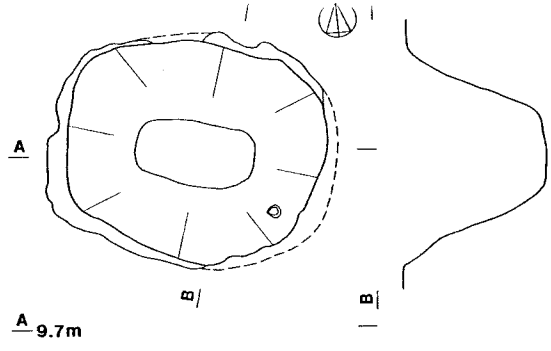
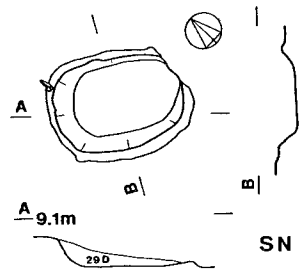
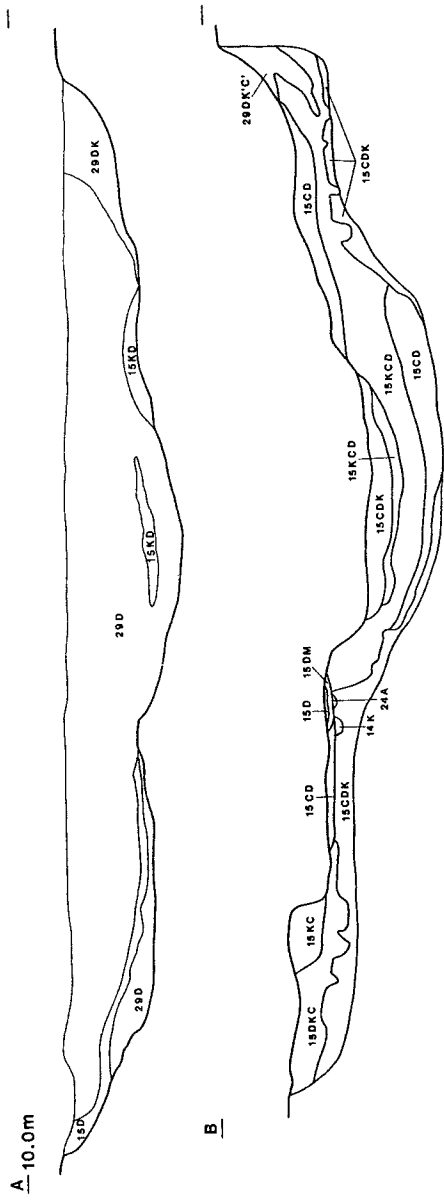


第15図 第4製塩跡鹹水槽実測図

SH 4



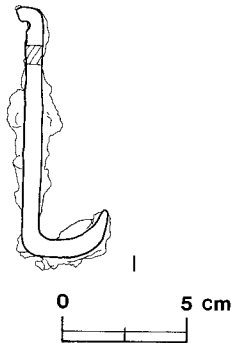
第16図 第4製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第10号竈出土鉄製品一覧表(第17図1)

図版 番号	名 称	法 量				出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	吊 金 具	10.1	0.8	0.7	52.0	第10号竈	M1 断面正方形,下端部折れ曲がる。

出土遺物 第10号竈Aの覆土中から吊金具(第17図1)が出土している。



第17図 第4製塩跡出土遺物実測図

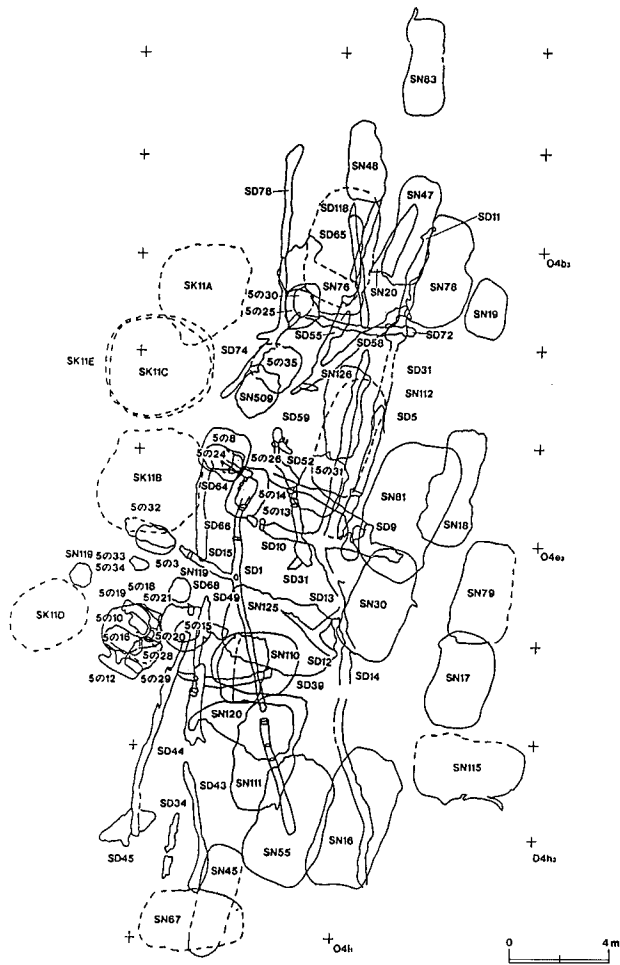
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、第1グループと第2グループが、竈と屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。第2グループと第3グループ及び第4グループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第2グループが3グループの中で最も新しく、次いで第3グループ、第4グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第10号竈から吊金具が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

第5製塩跡(第18図)

位置 調査区の中央部 O3d₀区を中心に確認され、標高8.10m に位置している。

関連遺構 第11号竈(A~F)、第5の3・5の8~10・5の12~16・5の18~21・5の24~26・5の28~35・16~20・27・30・45・47・48・55・67・76・78・79・81・83・108~112・115・117~120・122・125・126号鹹水槽及び第1・5・9~15・31・33・34・39・40・42~47・52・55・57~66・68・71・72・74・78号土樋で構成されている。これらの遺構は、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場の重複関係や長軸方向の違いから、6グループに区別できる。第1グループは、第11号竈A、釜屋内鹹水槽(5の9, 5の14)及び居出場(5の3)で構成されている。第2グループは、第11号竈C、釜屋内鹹水槽(5の8, 5の35)及び居出場(5の32)で構成されている。第3グループは、第11号竈B、釜屋内鹹水槽(5の10, 5の13, 5の15)及び居出場(5の12, 5の16, 5の

18～21, 5の33, 5の34, 119)で構成されている。第4グループは、第11号竈D, 居出場(5の28・5の29)で構成されている。第5グループは、第11号竈E, 釜屋内鹹水槽(5の25, 5の30, 5の31)及び居出場(5の24, 5の26)で構成されている。第6グループは、第11号竈F, 釜屋内鹹水槽(5の25, 5の30)及び居出場(5の24, 5の26)で構成されている。さらに、屋外鹹水槽も重複関係と長軸方向及び配置の違いから、六つのグループに区別できる。第1グループは、第16・18号鹹水槽, 第2グループは、第45・47号鹹水槽, 第3グループは、第67・110号鹹水槽, 第4グループは、第30・55・111号鹹水槽, 第5グループは、第48・83号鹹水槽, 第6グループは、第78・108号鹹水槽(第109・115号



第18図 第5製塩跡遺構配置図

鹹水槽と重複)である。しかし、屋外鹹水槽のグループは竈と釜屋内鹹水槽及び居出場のグループとを結び付けるにはあまりにも重複が激しいので、グルーピングできなかった。そのため、屋外鹹水槽のグルーピングを製塩跡一覧表の中にいっしょに掲載することができなかった。竈, 釜屋内鹹水槽及び居出場のグルーピングと、屋外鹹水槽の新旧関係は、確認面での標高の違いにばらつきがあるため、相対的な標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ, 第3グループ, 第4グループ, 第5グループ, 第6グループの順に古くなると思われる。土樋は37条検出されているが、部分的なためグルーピングできなかった。

第5 製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	03d ₀	8.10	11A	5の9,5の14	5の3	—	—	最新
2	03d ₀	8.10	11C	5の8,5の35	5の32	—	—	第1グループ より古い
3	03d ₀	8.10	11B	5の10,5の13,5の15	5の12,5の16,5の18, 5の19,5の20,5の21, 5の33,5の34,119	—	—	第1・2グループ より古い
4	03d ₀	8.10	11D	—	5の28,5の29	—	—	第1～3グループ より古い
5	03d ₀	8.10	11E	5の25,5の30,5の31	5の24,5の26	—	—	第1～4グループ より古い
6	03d ₀	8.10	11F	5の25,5の30	5の24,5の26	—	—	最古

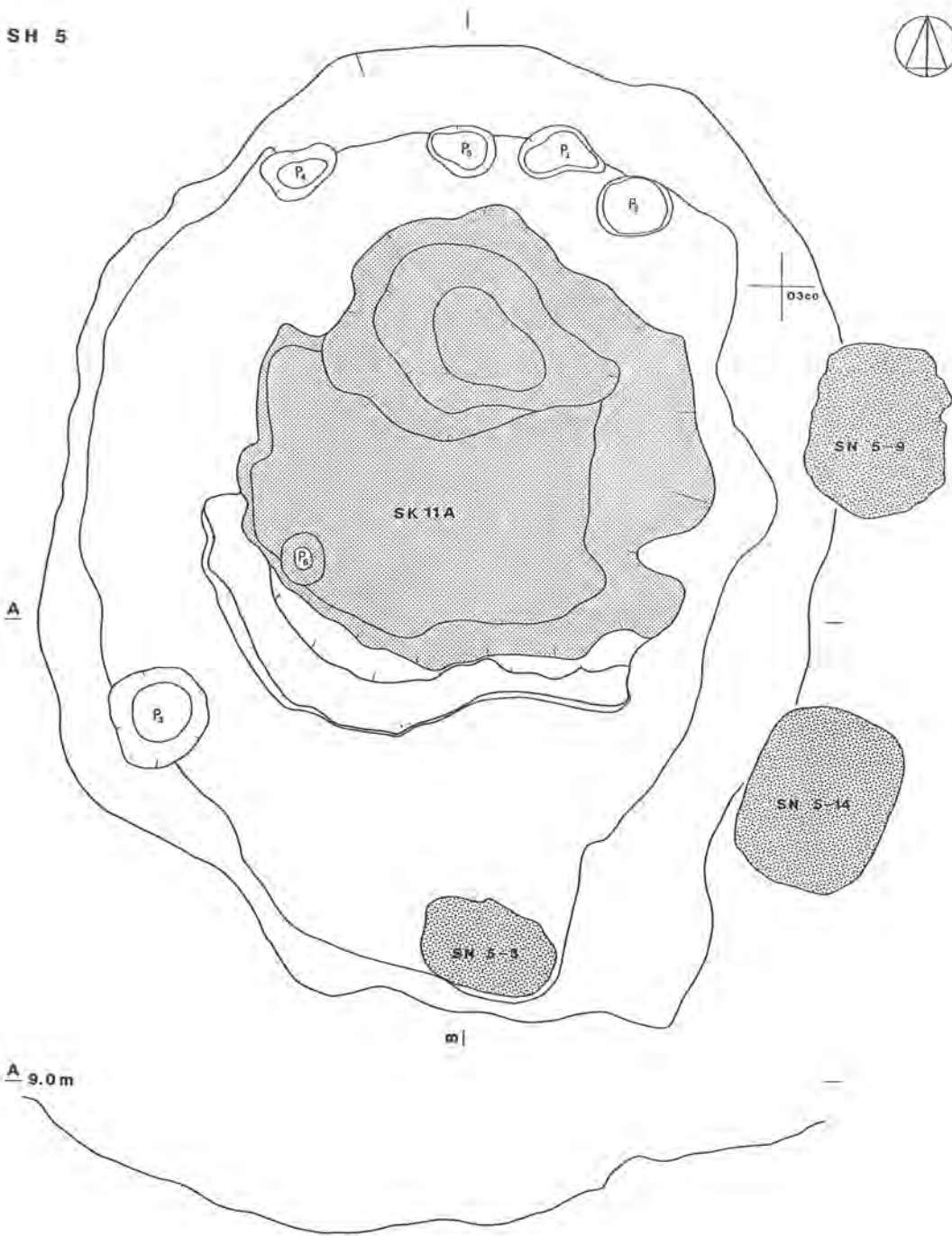
釜屋 釜屋の規模と形状は、確認できた黒色土の範囲から南北11.30m、東西9.00mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-14°-Eを指している。砂上に厚さ20～50cmの灰、炭化物及び焼土混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈6基、東側に鹹水槽9基、南側に居出場15基が位置している。建屋の柱穴と思われるピットは6か所検出され、P₁～P₆の規模は長径0.27～1.10m、短径0.27～0.90mで、深さ0.21～0.90mである。釜屋の周囲は底面から60～70cmの高さで土手が築かれている。

竈 O3b₉区・O3c₉区・O3d₉区・O3e₉区の4か所から6基（第11号竈A～F）検出され、A、B、D、Eの平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.15～5.50m、短径2.70～5.05m、深さ0.50～1.00mである。CとFの平面形は、円形を呈している。規模は、径4.00・2.00m、深さ0.80・0.20mである。いずれも黒色土を10～50cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は周辺から流れ込んで自然堆積した砂の下に灰が10～40cmの厚さで堆積している。六つの竈の新旧関係は、確認面での標高の違いと重複関係から、第11号竈Aが最も新しく、次いで第11号竈C、第11号竈B、第11号竈D、第11号竈E、第11号竈Fの順に古くなる。

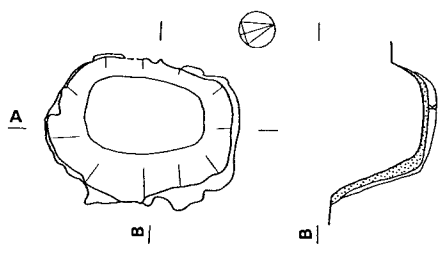
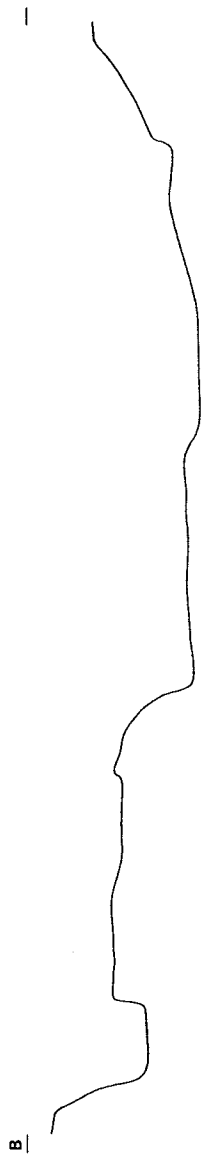
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
11A	03c ₉	N-13°-E	楕円形	5.50	5.05	0.90	自然	8.10		
11B	03d ₉	N-0°	楕円形	4.20	4.10	1.00	自然	7.10		
11C	03c ₉	—	円形	4.00	4.00	0.80	自然	7.60		
11D	03e ₉	N-47°-E	楕円形	3.15	2.70	0.67	自然	7.10		
11E	03b ₉	N-16°-E	楕円形	4.00	3.70	0.50	自然	5.50		
11F	03b ₉	—	円形	2.00	2.00	0.20	自然	4.90		

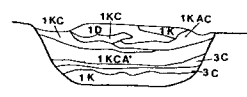
SH 5



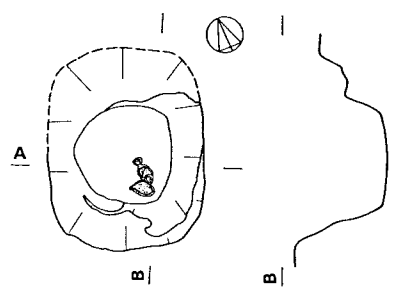
第20図 第5製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



A 8.3 m

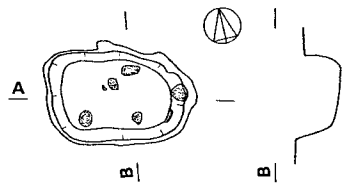


SN 5-9

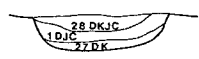


A 7.0 m

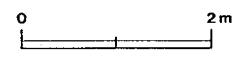
SN 5-14



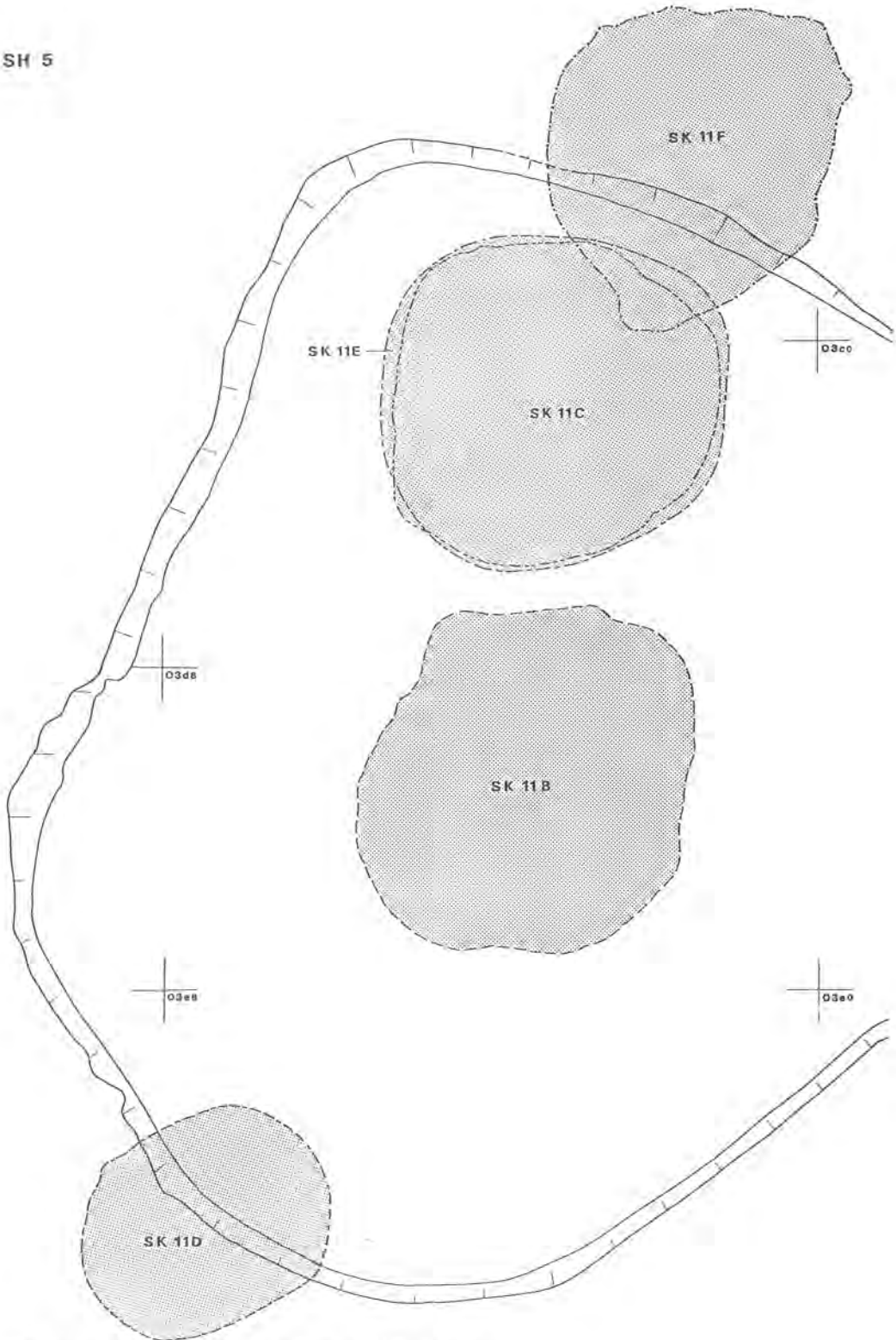
A 8.4 m



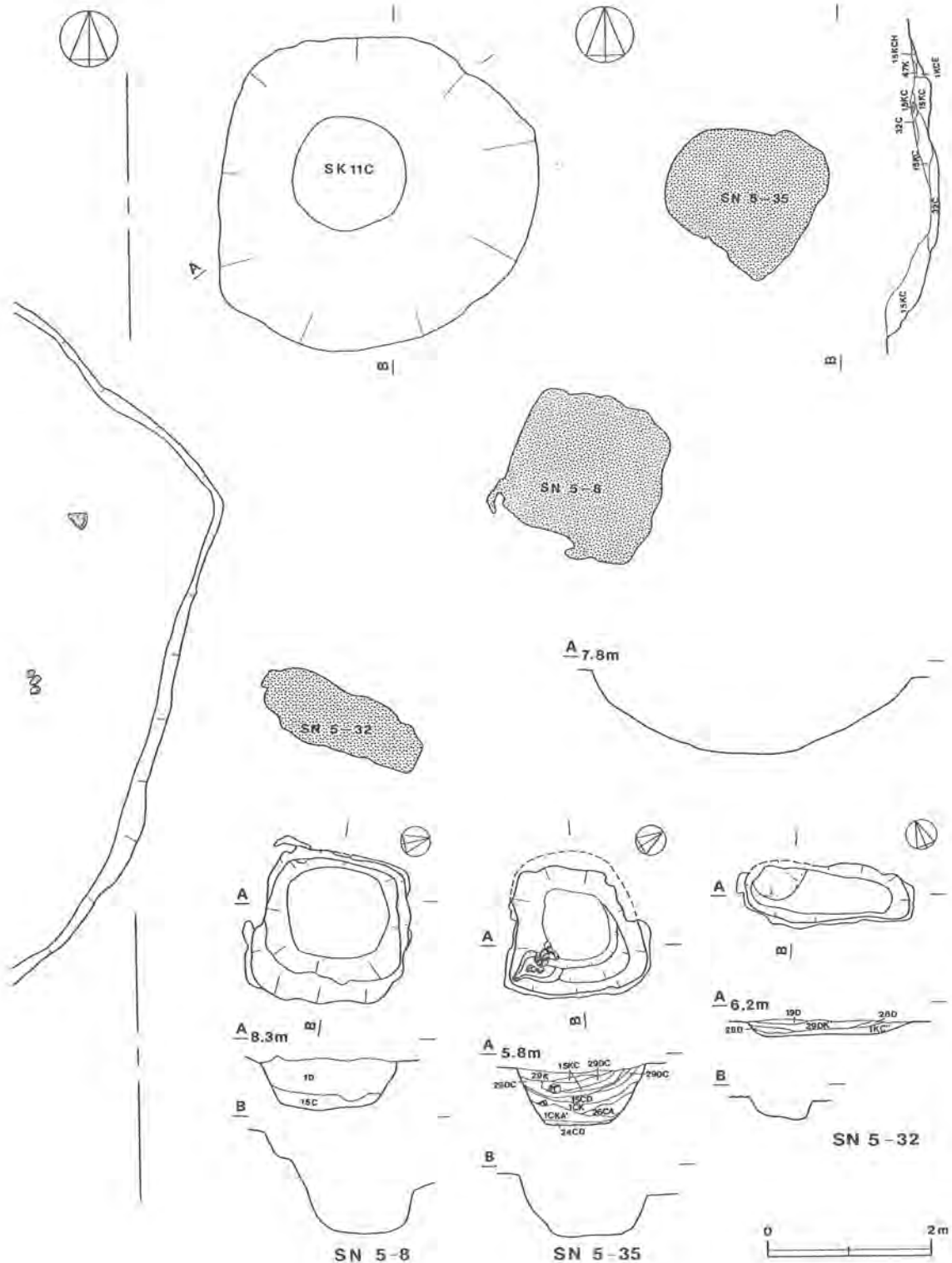
SN 5-3

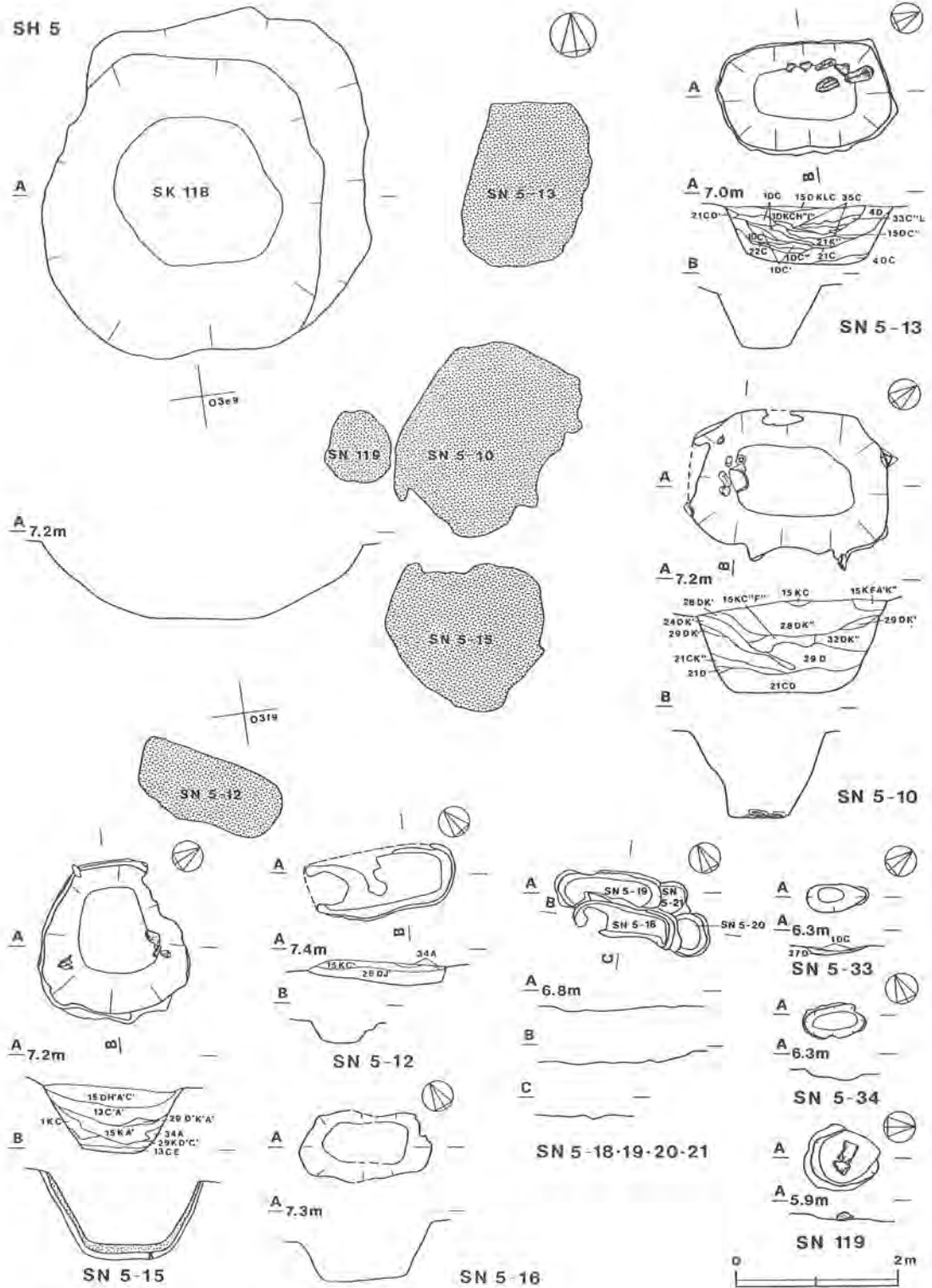


SH 5

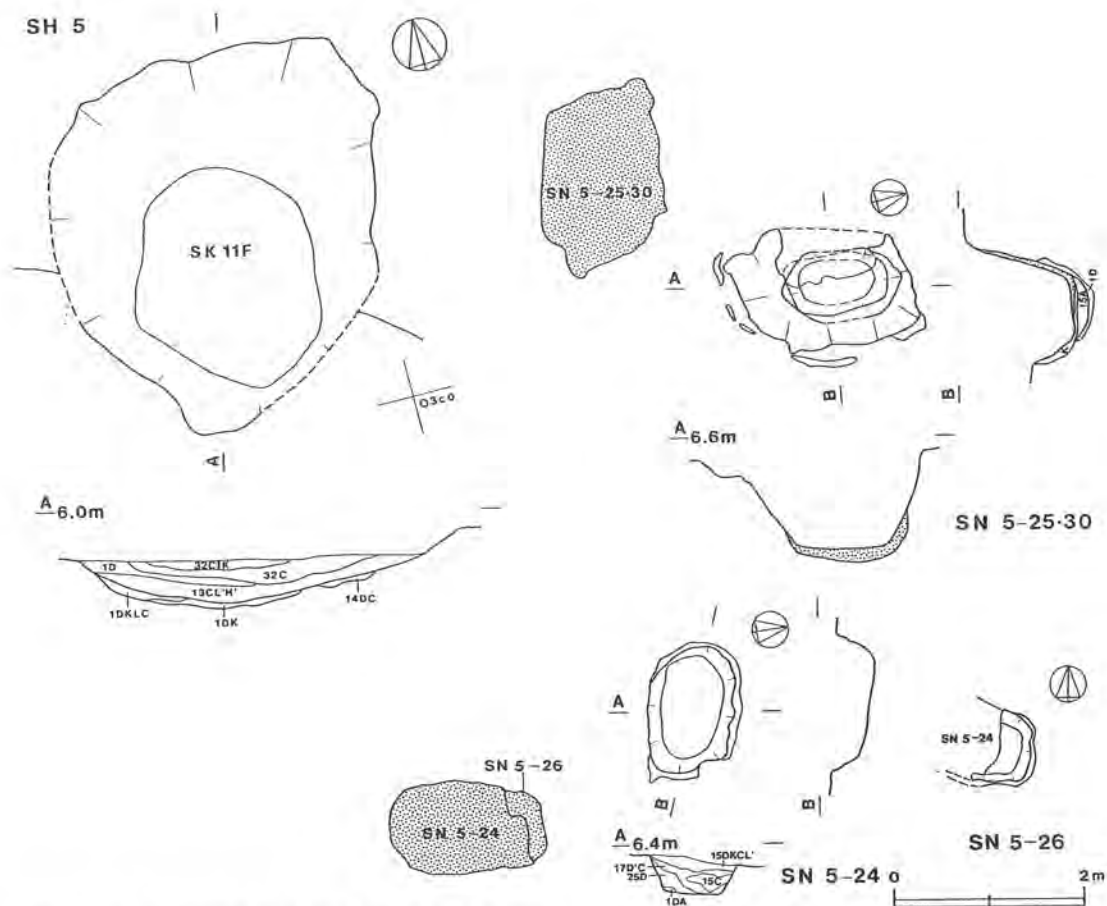


第21図 第5製塩跡釜屋内遺構・竈・鹹水槽実測図





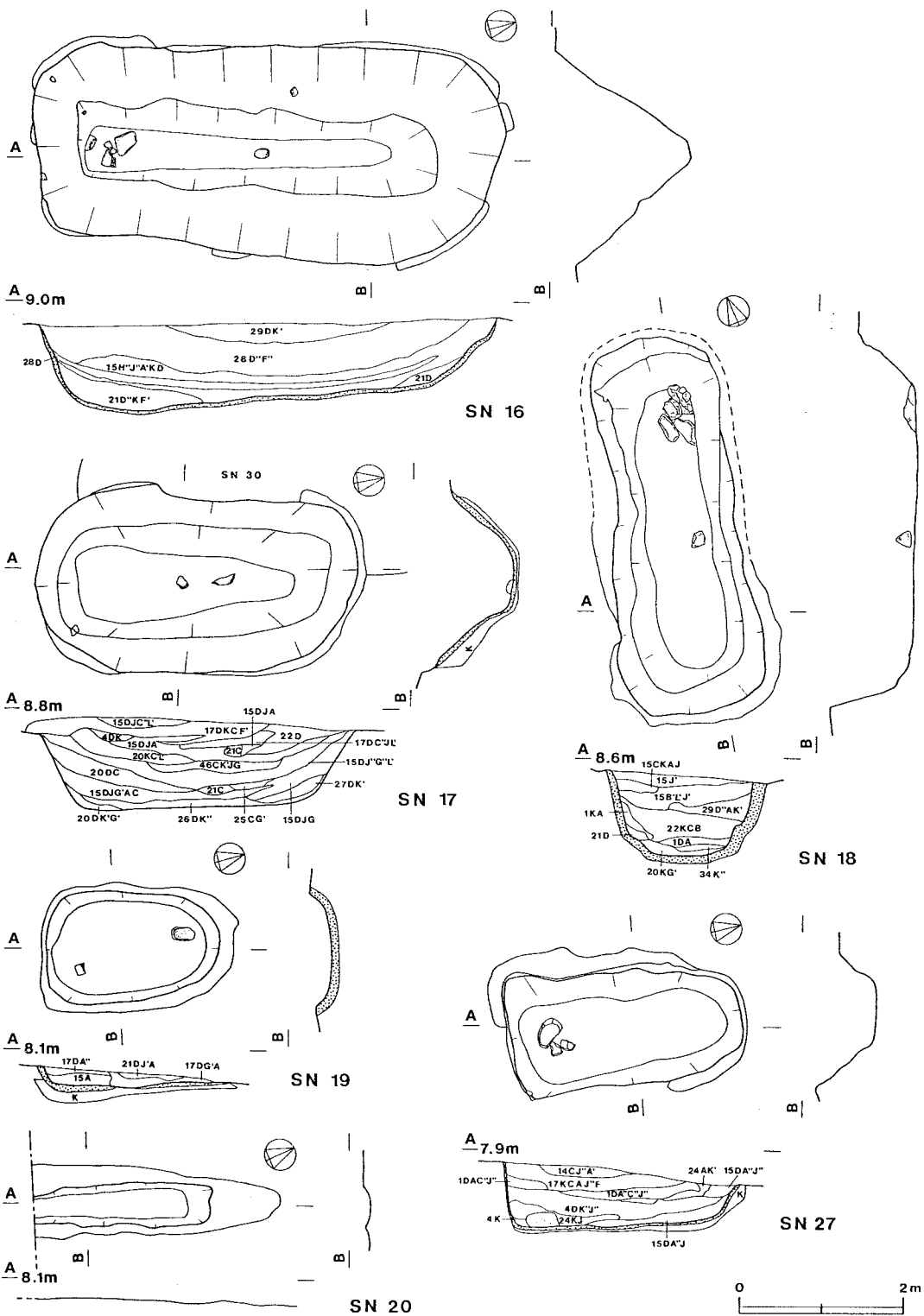
第22図 第5製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



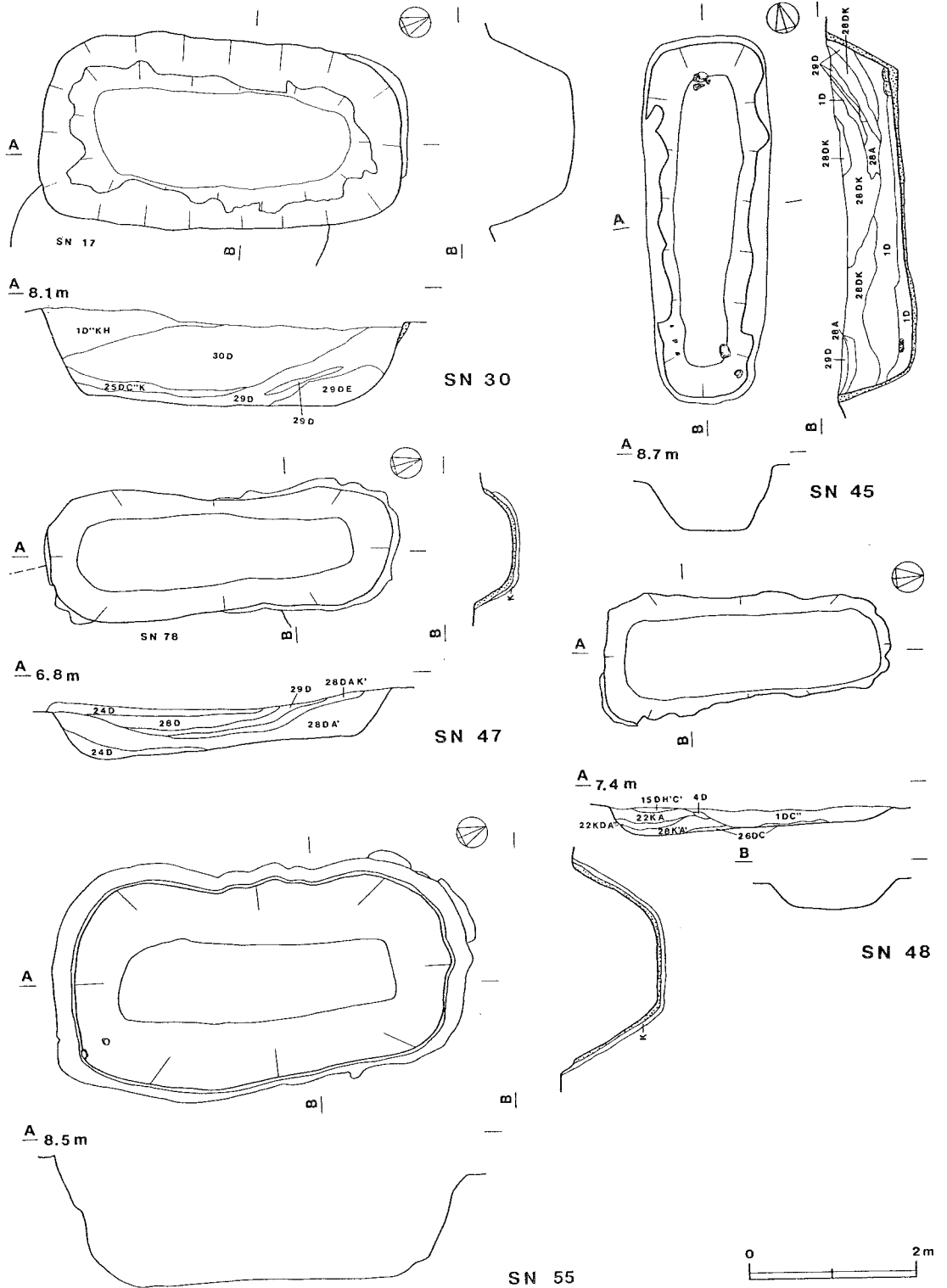
第23図 第5製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

5の15・5の25・5の30号鹹水槽と第1・68・71・72号土樋が連結している。

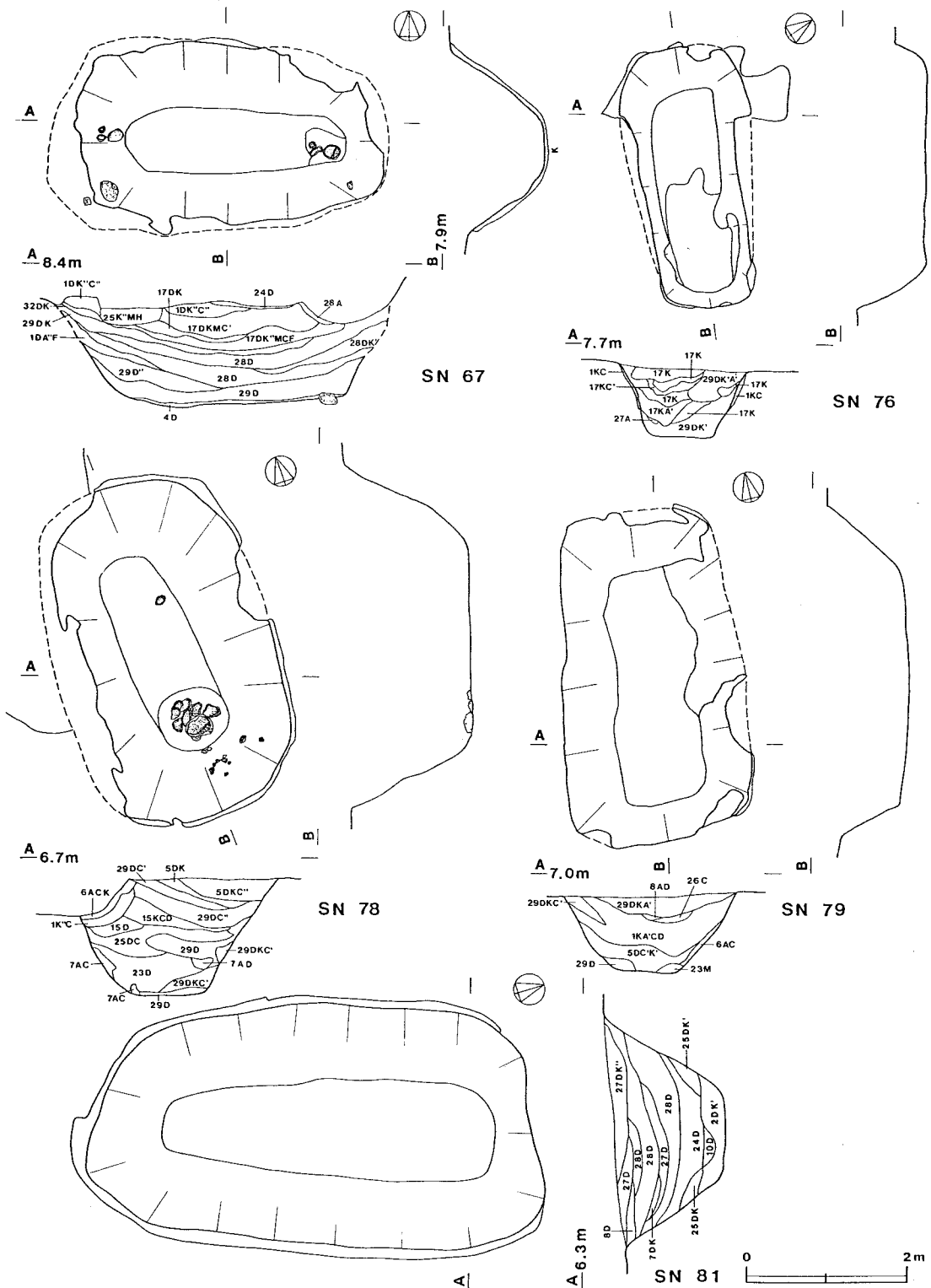
居出場 O3d₉区・O3e₉区・O3f₈・f₉区の4か所から15基（第5の3・5の12・5の16・5の18～21・5の24・5の26・5の28・5の32～34・119号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸〔径〕(0.30)～2.03m, 短軸〔径〕0.36～1.00m, 深さ(0.01)～0.69mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3～10cmの粘土を貼って構築している。第5の10・5の15・5の16・5の18～21・5の33・5の34・119号鹹水槽, 第5の3・5の8・5の24・5の26・5の32号鹹水槽, 5の28・5の29号鹹水槽が互いに重複している。



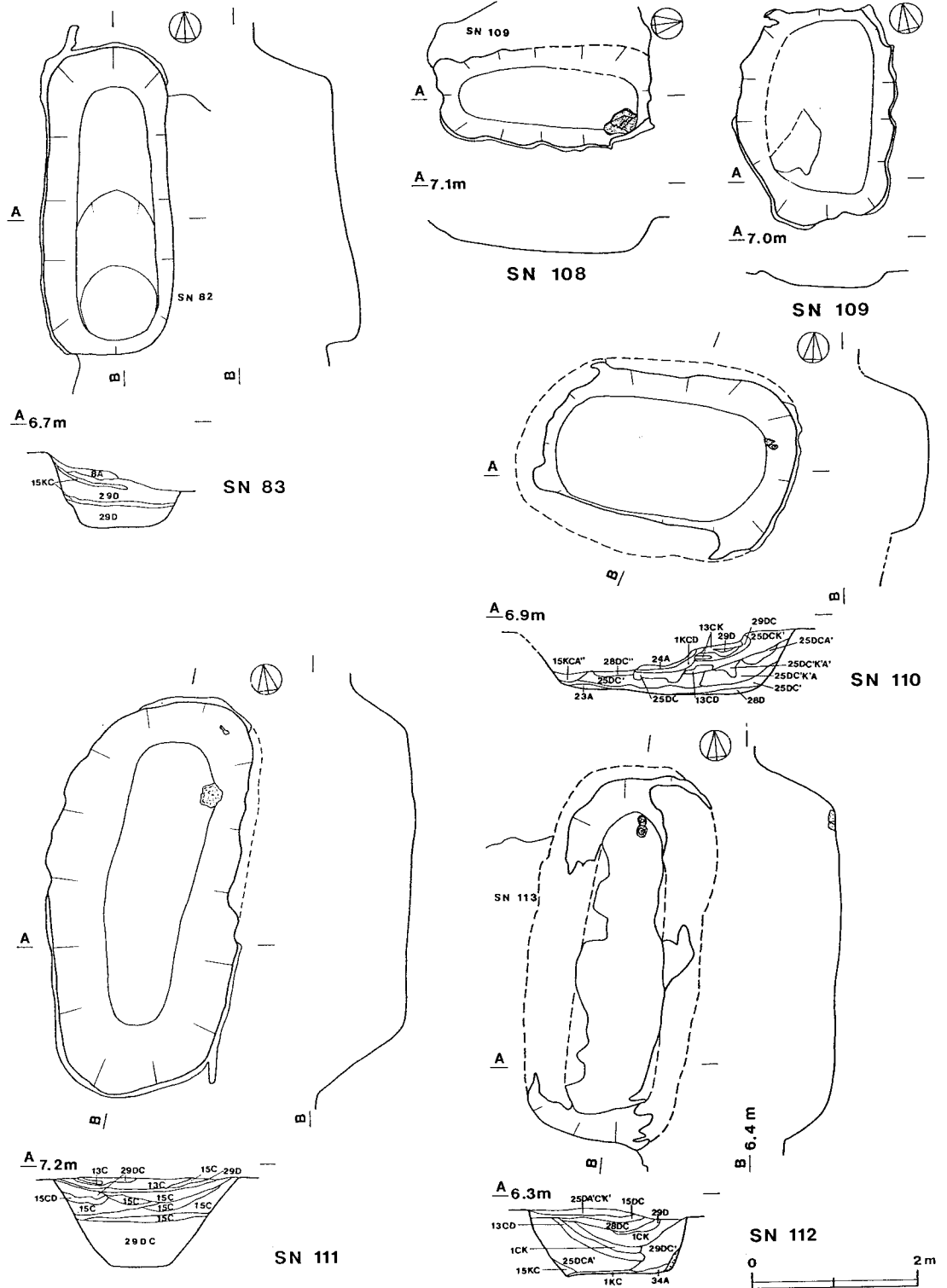
第24図 第5製塩跡鹹水槽実測図(1)



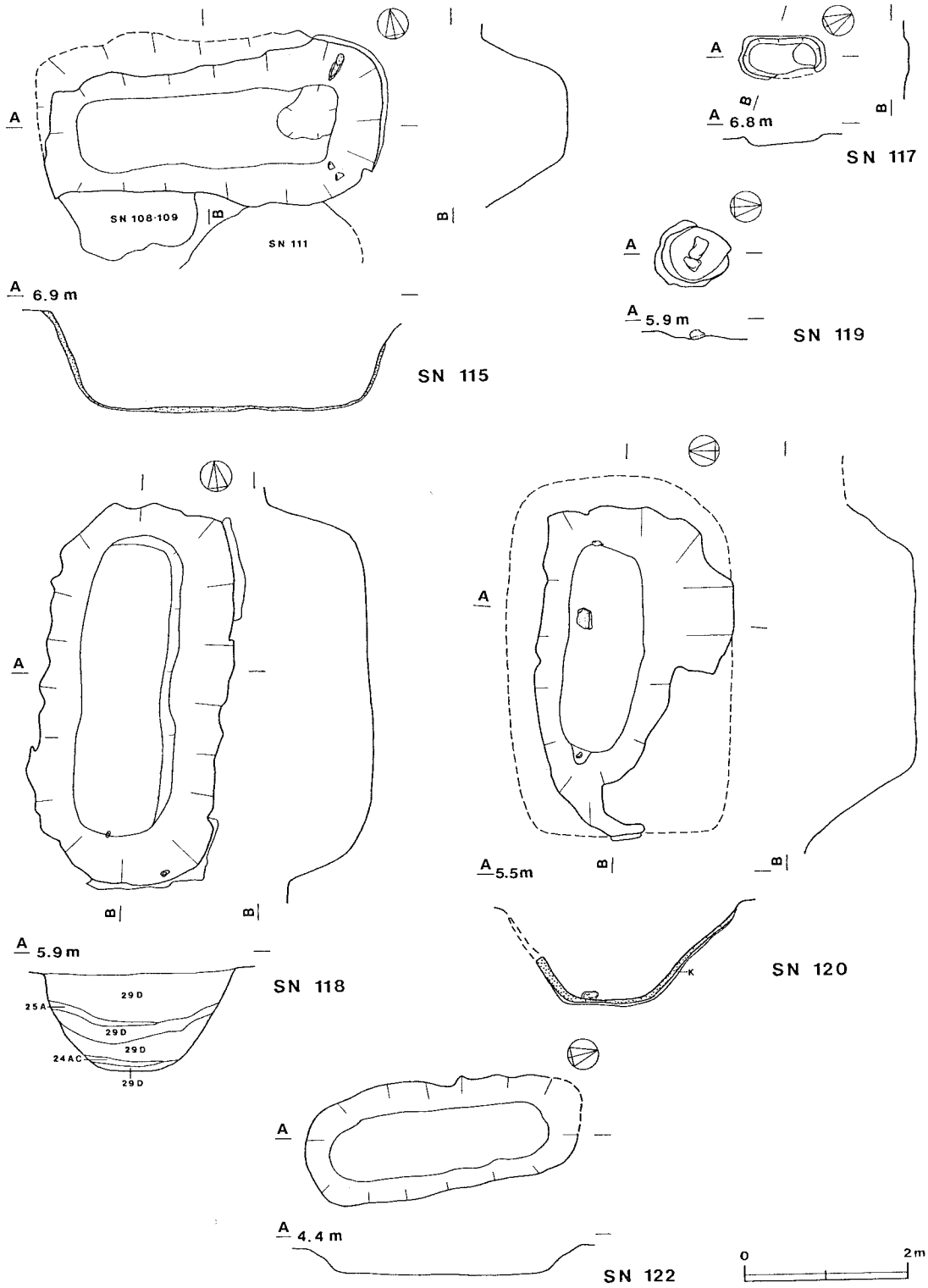
第25図 第5製塩跡鹹水槽実測図(2)



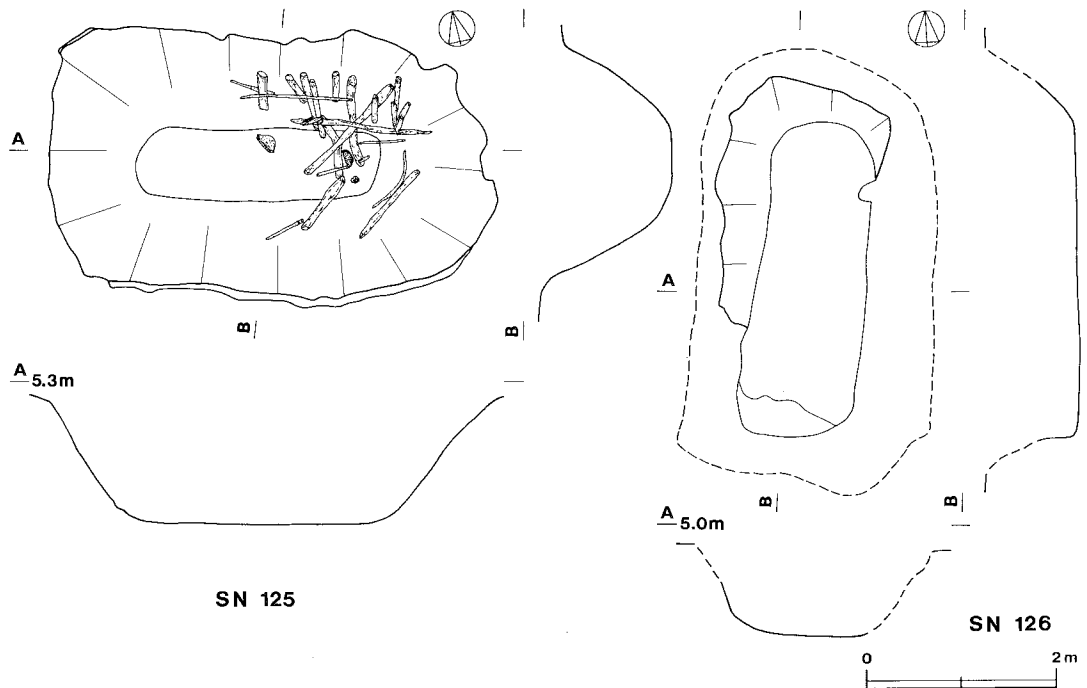
第26図 第5製塩跡鹹水槽実測図(3)



第27図 第5製塩跡鹹水槽実測図(4)



第28図 第5製塩跡鹹水槽実測図(5)



第29図 第5製塩跡鹹水槽実測図(6)

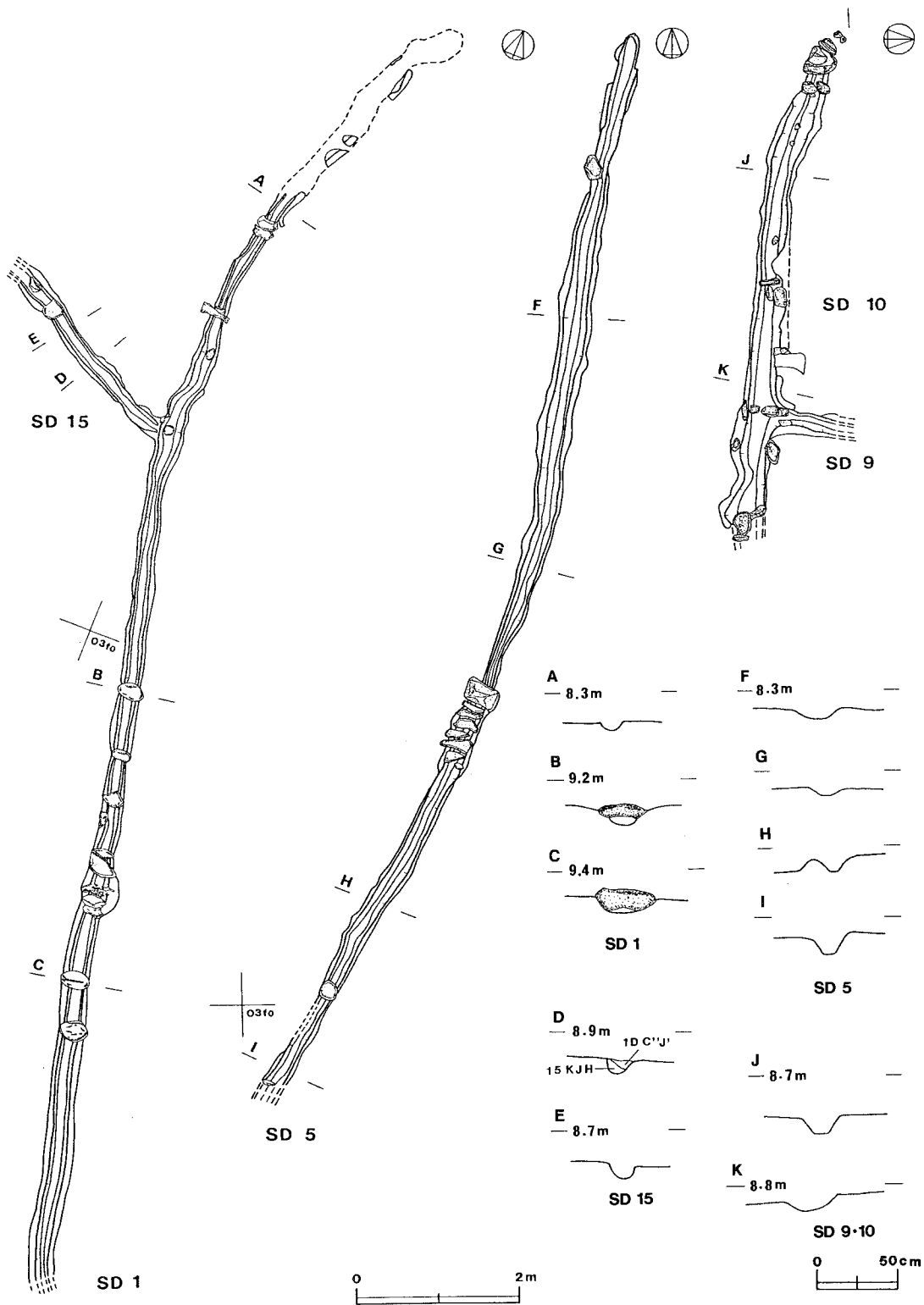
屋外鹹水槽 N4i区から南北にO4g区にかけて26基(第16・20・27・30・45・47・48・55・67・76・78・79・81・83・108~112・115・117・122・126号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]0.96~5.64m、短軸[径]0.48~2.94m、深さ0.14~2.05mである。底面は平坦で、壁は内彎、外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~19cmの粘土を貼って構築している。第55・111号鹹水槽、第78・122号鹹水槽、第108~110・115号鹹水槽及び第112・126号鹹水槽が互いに重複している。

鹹水槽一覧表

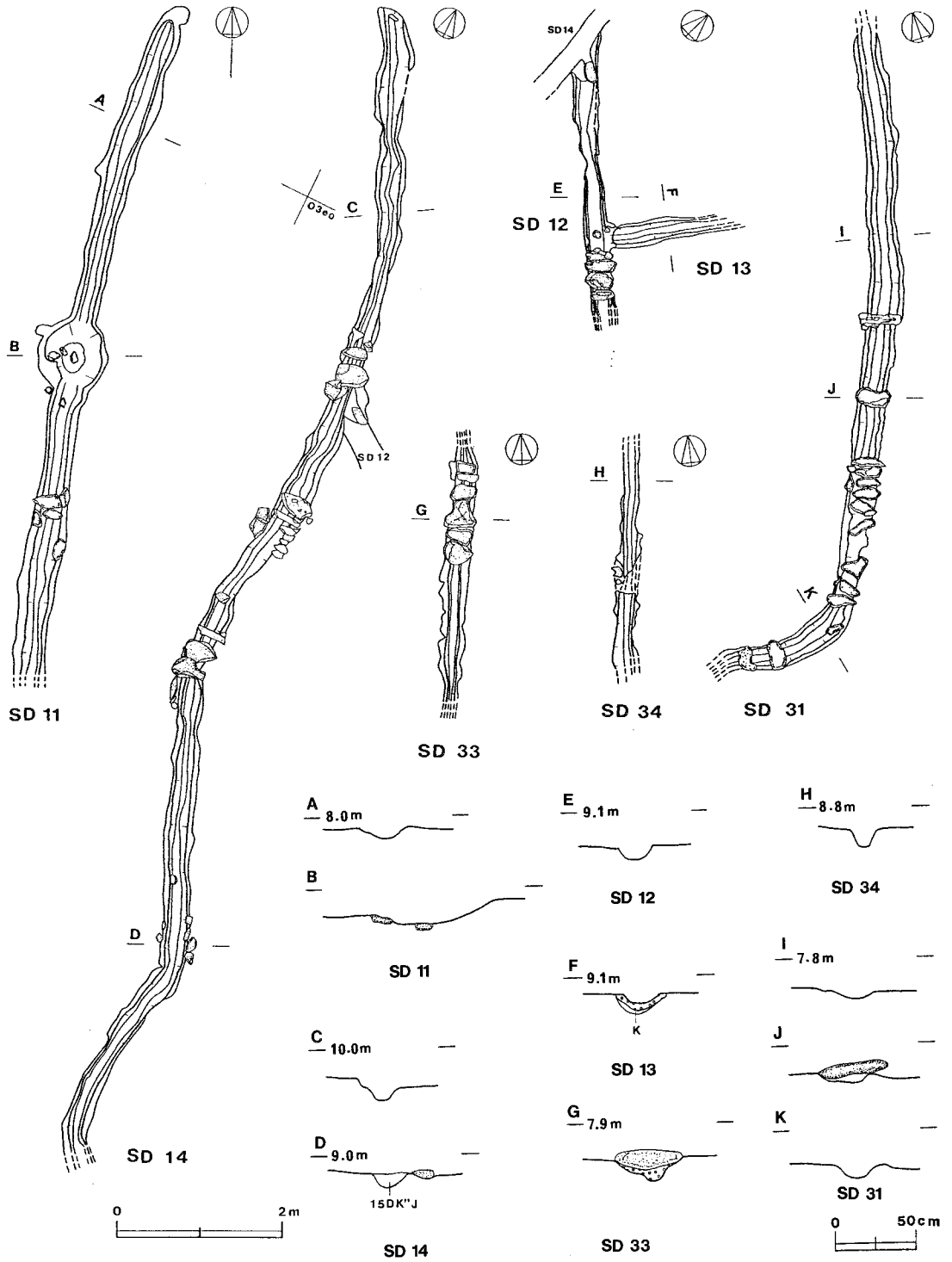
鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
5の3	03da	N-70°-W	隅丸長方形	1.43	1.00	0.48	5	外傾	平坦	自然	8.20	IVA2a	居出場、石6点、第5の8・5の24・5の26・5の32号鹹水槽と重複
5の8	03da	N-33°-E	隅丸長方形	1.98	1.90	0.97	5	外傾	平坦	自然	8.10	VA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、第5の3・5の24・5の26・5の32号鹹水槽と重複
5の9	03ca	N-24°-E	隅丸長方形	1.86	1.58	1.00	4~10	外傾	平坦	自然	8.20	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第1号土礎と連結
5の10	03ea	N-40°-E	隅丸長方形	2.35	1.90	1.12	5	外傾	平坦	自然	7.00	IVA3c	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、底面一石6点、第5の15・5の16・5の18~21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の12	03fa	N-53°-W	隅丸長方形	1.90	0.80	0.30	5	外傾	平坦	自然	7.20	IVA2a	居出場
5の13	03da	N-20°-E	隅丸長方形	2.05	1.34	0.80	5	外傾	平坦	自然	6.90	IVA3b	釜屋内鹹水槽、㊸焼石5点、㊹焼石3点

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
5の14	03d ₀	N-22°-E	隅丸方形	(1.70)	1.65	0.87	5	外傾	平坦	自然	6.90	VA2b	釜屋内鹹水槽
5の15	03e ₉	N-52°-W	隅丸方形	1.88	1.81	1.15	8~10	外傾	平坦	自然	7.20	VA2c	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、礎石3点、第5の10・5の16・5の18~21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複、第68号土礎と連結
5の16	03e ₉	N-60°-W	楕円形	1.62	0.92	0.69	5	緩斜	平坦	自然	7.20	IA2b	居出場、第5の10・5の15・5の18~21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の18	03e ₉	N-48°-W	隅丸長方形	1.19	0.40	(0.02)	3	緩斜	平坦	自然	6.80	IA2a	居出場、第5の10・5の15・5の16・5の18・5の19・5の21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の19	03e ₉	N-60°-W	隅丸長方形	1.29	0.42	(0.05)	5	緩斜	平坦	自然	6.60	IA2a	居出場、第5の10・5の15・5の16・5の18・5の20・5の21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の20	03e ₉	N-48°-W	不 明	(0.54)	—	(0.09)	5	緩斜	平坦	自然	7.20	VIIA1a	居出場、第5の10・5の15・5の16・5の18・5の19・5の21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の21	03e ₉	N-58°-W	不 明	(0.30)	—	(0.01)	5	緩斜	平坦	自然	6.60	VIIA1a	居出場、(㊦)土師質土器の皿1点、第5の10・5の15・5の16・5の18~20・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の24	03d ₀	N-71°-W	楕円形	1.38	0.94	0.52	9	緩斜	平坦	自然	6.30	IA2b	居出場、第5の3・5の8・5の26・5の32号鹹水槽と重複
5の25	03b ₀	N-7°-E	隅丸長方形	1.83	1.34	1.06	3~10	外傾	平坦	自然	6.55	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第5の30・76・118・125号鹹水槽と重複、第71・72号土礎と連結
5の26	03d ₀	N-76°-W	楕円形	(0.40)	0.80	0.06	10	緩斜	平坦	自然	6.30	IA1a	居出場、第5の3・5の8・5の24・5の32号鹹水槽と重複
5の28	03f ₀	N-55°-W	楕円形	(1.00)	0.61	0.24	6	外傾	平坦	自然	6.90	IA1a	居出場、第5の29号鹹水槽と重複
5の29	03f ₀	N-38°-E	楕円形	1.45	0.96	0.32	6	緩斜	平坦	自然	6.60	IA2a	居出場、第5の28号鹹水槽と重複、底面-石5点
5の30	03b ₀	N-3°-E	楕円形	1.29	0.76	1.30	10	外傾	平坦	自然	6.55	IA2c	釜屋内鹹水槽、第5の25・76・118・125号鹹水槽と重複、第71・72号土礎と連結
5の31	03c ₀	N-30°-E	楕円形	2.27	1.74	0.88	2~11	外傾	平坦	自然	5.80	IA3b	釜屋内鹹水槽
5の32	03d ₀	N-58°-W	隅丸長方形	2.03	0.74	0.29	8	外傾	平坦	自然	6.00	IVA3a	居出場、第5の3・5の8・5の24・5の26号鹹水槽と重複
5の33	03e ₉	N-65°-W	楕円形	0.67	0.36	0.06	3	緩斜	平坦	自然	6.10	IA1a	居出場、第5の10・5の15・5の16・5の18~21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の34	03e ₉	N-60°-W	楕円形	0.77	0.44	0.13	3	緩斜	平坦	自然	6.10	IA1a	居出場、第5の10・5の15・5の16・5の18~21・5の33・5の34・119号鹹水槽と重複
5の35	03c ₀	N-35°-E	隅丸方形	1.80	1.66	0.80	2~12	外傾	平坦	自然	5.70	VA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、(㊦)石6点
16	04g ₁	N-16°-E	隅丸長方形	5.64	2.60	1.58	5	緩斜	平坦	自然	8.95	IVA4d	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面-石6点、(㊦)石2点
17	04f ₂	N-14°-E	隅丸長方形	3.24	1.39	1.16	1~7	緩斜	平坦	自然	8.73	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面-石2点
18	04d ₂	N-16°-E	隅丸長方形	4.12	1.09	1.05	7~19	外傾	平坦	自然	8.48	IVA4c	屋外鹹水槽、底面-石5点、(㊦)石1点
19	04b ₂	N-13°-E	隅丸長方形	2.11	1.34	0.28	10	緩斜	平坦	自然	7.96	IVA3a	屋外鹹水槽、底面-石2点
20	04a ₁	N-23°-E	隅丸長方形	(2.10)	(0.58)	(0.22)	7	緩斜	平坦	自然	8.12	IVA3a	屋外鹹水槽、第47号鹹水槽と重複、(㊦)石3点
27	N4j ₂	N-6°-E	隅丸長方形	2.82	1.40	0.72	2~12	緩斜	平坦	自然	7.76	IVA2b	屋外鹹水槽、底面-石3点
30	04e ₁	N-21°-E	隅丸長方形	4.45	2.30	1.30	3~8	外傾	平坦	自然	7.88	IVA4c	屋外鹹水槽

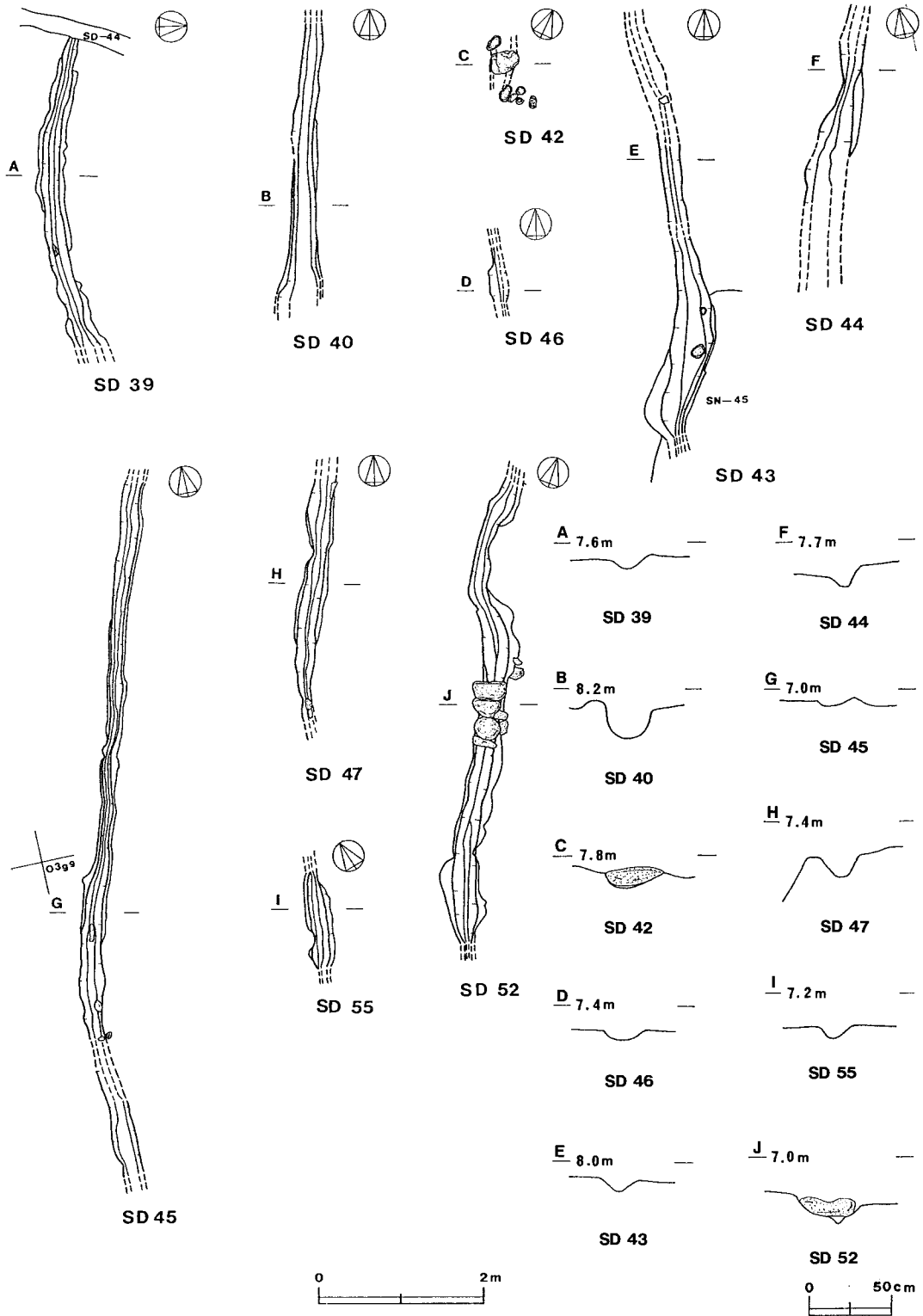
鉢水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
45	03h ₉	N-14°-E	隅丸長方形	4.45	1.11	0.81	1~9	外傾	平坦	自然	8.54	IVA2b	屋外鉢水槽、足掛け石1点、底面-石4点、㊸焼石3点
47	04a ₁	N-16°-E	隅丸長方形	4.21	1.40	0.85	3~11	緩斜	平坦	自然	6.64	IVA2b	屋外鉢水槽、第20号鉢水槽と重複
48	04a ₁	N-2°-E	隅丸長方形	3.52	1.29	0.40	2~7	緩斜	平坦	自然	7.16	IVA4a	屋外鉢水槽
55	03g ₀	N-18°-E	隅丸長方形	5.21	2.75	1.50	2~8	緩斜	平坦	自然	8.30	IVA4d	屋外鉢水槽、足掛け石2点、第111号鉢水槽と重複
67	03h ₉	N-88°-W	楕円形	3.56	2.27	1.72	3~8	緩斜	平坦	自然	8.37	IA4d	屋外鉢水槽、足掛け石1点、底面-石3点
76	03b ₀	N-64°-W	隅丸長方形	3.33	1.55	0.85	—	緩斜	平坦	自然	7.44	IVA4b	屋外鉢水槽
78	04b ₁	N-6°-E	隅丸長方形	4.31	2.28	1.60	4~9	緩斜	平坦	自然	6.42	IVA4d	屋外鉢水槽、足掛け石1点、底面-石8点、㊸石9点、第122号鉢水槽と重複
79	04e ₂	N-12°-E	隅丸長方形	4.03	2.30	1.03	—	緩斜	平坦	自然	6.82	IVA4c	屋外鉢水槽
81	04d ₁	N-20°-E	隅丸長方形	5.35	2.94	1.42	8~10	緩斜	平坦	自然	6.40	IVA4c	屋外鉢水槽、木製品(灰掻き出し柄振1点、ろ過器1点、蓋柄杓1点、腕1点、担い棒24点)、竹片(ざる片)1点、石白1点
83	N4i ₁	N-2°-W	隅丸長方形	3.85	1.54	0.94	5~15	外傾	平坦	自然	6.48	IVA4b	屋外鉢水槽
108	03f ₀	N-10°-E	隅丸長方形	2.50	1.20	0.33	4	緩斜	平坦	自然	6.91	IVA3c	屋外鉢水槽、底面-石1点、第109-110-115号鉢水槽と重複
109	03f ₀	N-15°-E	楕円形	2.70	2.00	2.05	2~7	緩斜	平坦	自然	6.61	IA3d	屋外鉢水槽、第108-110-115号鉢水槽と重複
110	03f ₀	N-76°-W	楕円形	3.02	(1.84)	0.77	2~10	緩斜	平坦	自然	6.72	IA4b	屋外鉢水槽、足掛け石1点、第108-109-115号鉢水槽と重複
111	03g ₀	N-20°-E	楕円形	4.90	2.33	1.15	2~7	内彎	平坦	自然	7.13	IC4c	屋外鉢水槽、足掛け石1点、底面-石1点、第55号鉢水槽と重複
112	04c ₁	N-17°-E	楕円形	4.50	(1.50)	0.87	7	内彎	平坦	自然	6.32	IA4b	屋外鉢水槽、底面-石2点、第126号鉢水槽と重複
115	03f ₀	N-8°-E	隅丸長方形	4.10	(2.04)	1.21	2~10	緩斜	平坦	自然	6.73	IVA4c	屋外鉢水槽、足掛け石2点、第108~110号鉢水槽と重複
117	04f ₃	N-26°-E	隅丸長方形	0.96	0.48	0.14	2~7	緩斜	平坦	自然	6.63	IVA1a	屋外鉢水槽
118	03b ₀	N-10°-E	楕円形	4.70	2.26	1.02	2~8	内彎	平坦	自然	5.80	IC4c	釜屋内鉢水槽、足掛け石1点、第5の25-5の30-76-125号鉢水槽と重複
119	03e ₉	N-3°-E	楕円形	(0.83)	(0.70)	0.11	4~10	外傾	平坦	自然	5.75	IA1a	居出場、底面-石2点、第5の10-5の15-5の16-5の18~21-5の33-5の34号鉢水槽と重複
120	03c ₀	N-0°	隅丸長方形	4.10	2.34	1.28	5~12	緩斜	平坦	自然	5.36	IVA4c	釜屋内鉢水槽、底面-石1点、㊸石2点
122	04b ₁	N-6°-E	楕円形	3.38	1.45	1.88	4	緩斜	平坦	自然	5.82	IA4d	屋外鉢水槽、第78号鉢水槽と重複
125	03b ₀	N-13°-E	楕円形	4.53	2.70	1.40	3~10	緩斜	平坦	自然	5.18	IA4c	釜屋内鉢水槽、底面-木材片8点、竹片2点、石3点、第5の25-5の30-76-118号鉢水槽と重複
126	04c ₁	N-5°-E	隅丸長方形	3.74	1.70	0.59	1~4	緩斜	平坦	自然	10.17	IVA4d	屋外鉢水槽、第112号鉢水槽と重複



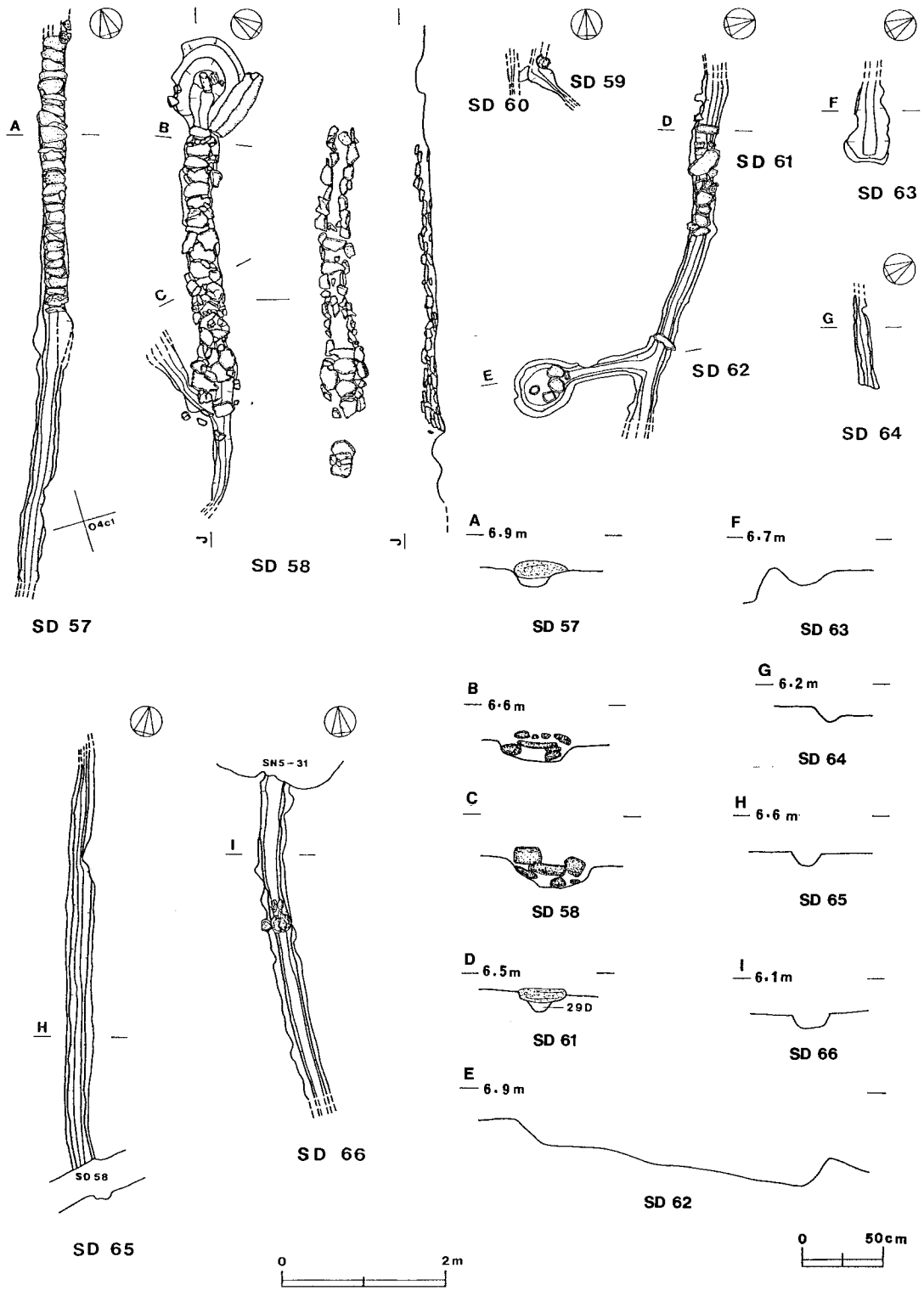
第30图 第5製塩跡土樋実測図(1)



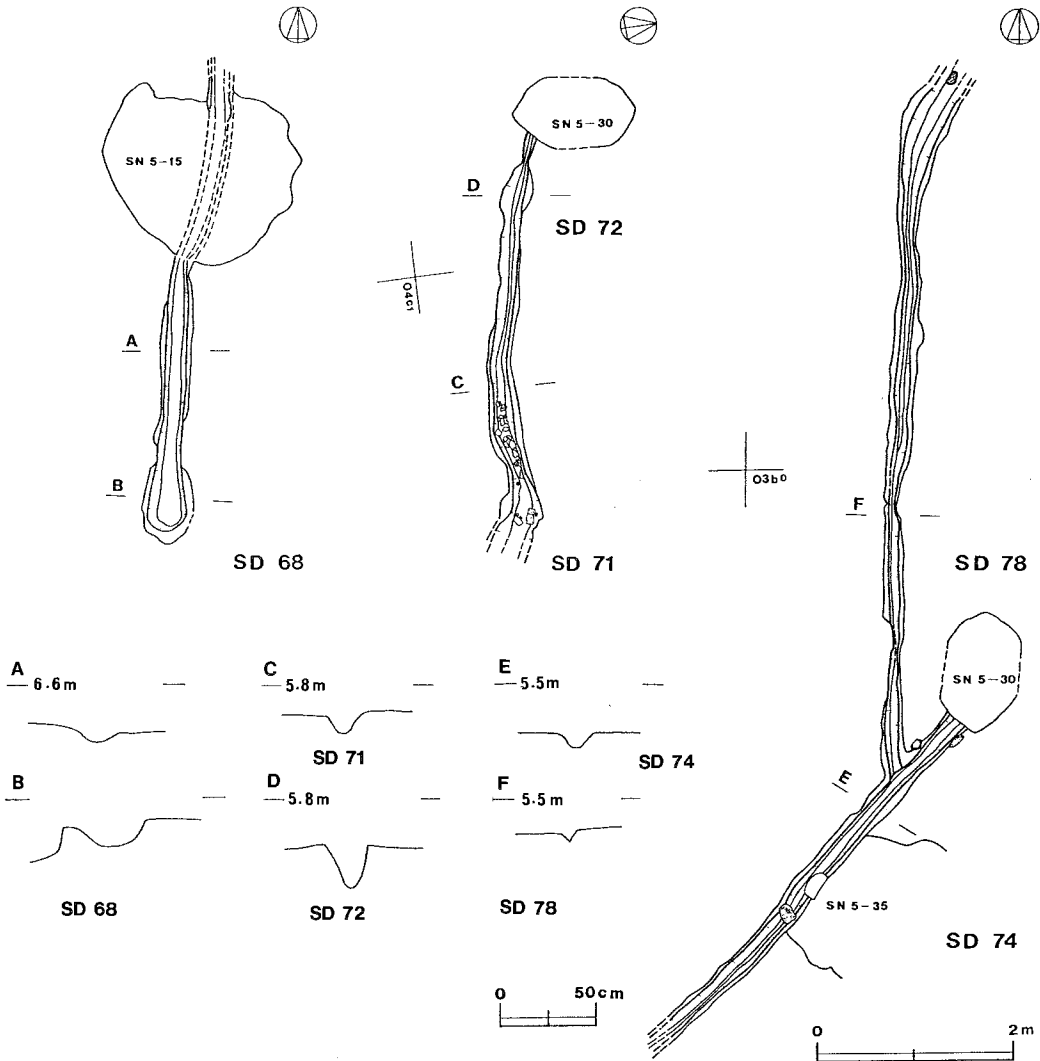
第31图 第5製塩跡土桶突測図(2)



第32图 第5製塩跡土樋実測图(3)



第33图 第5製塩跡土樋実測図(4)



第34図 第5製塩跡土樋実測図(5)

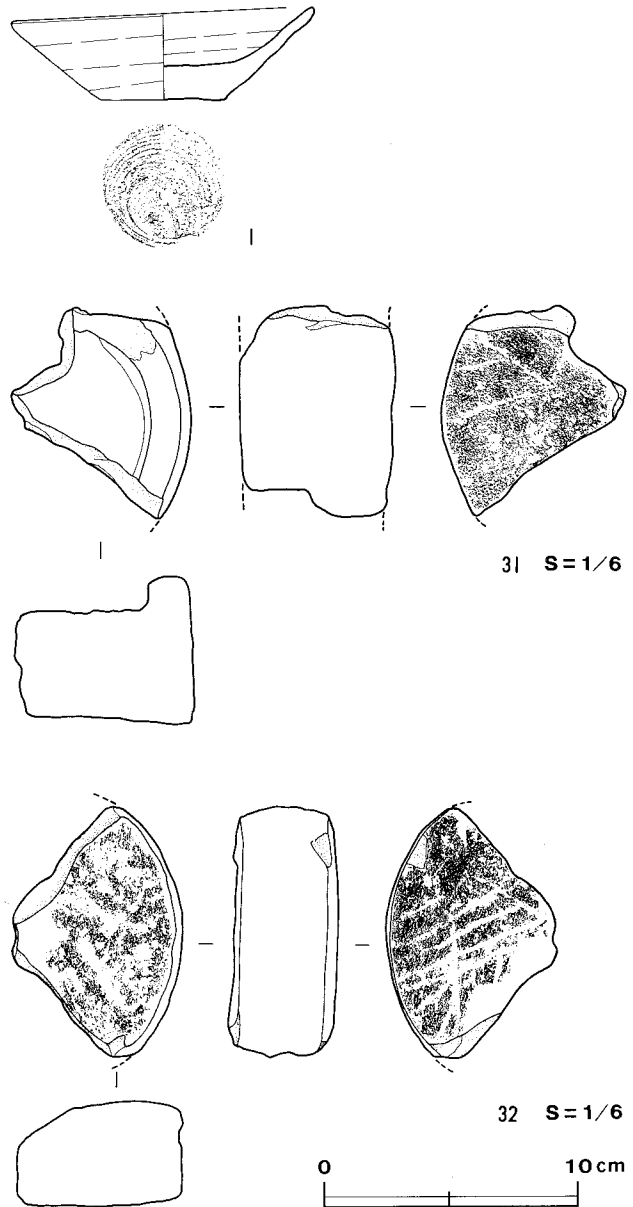
土樋 O3a0区から O4e1区を中心として37条（第1・5・9～15・31・33・34・39・40・42～47・52・55・57～66・68・71・72・74・78号土樋）検出され、全長が最も短いものは0.25mで、最も長いものは17.30mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅13～55cm，下幅3～27cm，深さ2～23cmである。第1号土樋は、第16号鹹水槽と連なっており、第10号土樋は、第18号鹹水槽と連なっている。第1・68・71・72号土樋は第5の9・5の15・5の25・5の30号釜室内の鹹水槽と連結していたと思われる。

土樋一覧表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	03c ₀ ~03g ₀	N-4°-W N-15°-E N-14°-W	17.30	27	7	6	4	U	自然	有	8.24 ~9.11	第15号土樋と接続, 第5 の9号鹹水槽と連結
5	03f ₀ ~04b ₁	N-30°-E N-8°-E	13.60	28	18	8	4~6	U	自然	有	8.07 ~8.18	
9	04d ₁	N-15°-E	0.80	25	20	12	4~8	U	自然	無	8.74 ~8.75	第10号土樋と接続
10	03d ₀ ~04e ₁	N-84°-W	6.80	35	25	14	2~4	U	自然	有	8.28 ~8.75	第9・14号土樋と接続
11	04a ₁ ~04b ₁	N-18°-E	8.80	30	27	6	4~8	U	自然	無	7.84 ~7.92	
12	03e ₀ ~03f ₀	N-45°-W	4.80	23	22	10	2~10	U	自然	有	8.72 ~9.00	第13号土樋と接続
13	03e ₀ ~04e ₁	N-40°-E	1.40	22	20	8	2~4	U	自然	有	9.00	第12・14号土樋と接続
14	03d ₀ ~03g ₀	N-25°-W N-9°-E	15.20	22	18	8	4~6	U	自然	有	9.80 ~9.84	第10・13号土樋と接続
15	03e ₀	N-56°-W	2.70	18	16	9	4	U	自然	有	8.48	第1号土樋と接続
31	03e ₀ ~04c ₁	N-25°-E N-80°-W	8.50	33	19	7	4~6	U	自然	有	7.60 ~7.71	
33	03f ₀	N-6°-E	3.20	17	13	7	6~8	U	自然	有	7.60 ~7.81	
34	03g ₀ ~03h ₀	N-8°-E	2.60	30	15	10	2~8	U	自然	無	8.69 ~8.71	
39	03f ₀ ~03f ₀	N-75°-E N-80°-W	4.00	22	15	6	6~8	U	自然	無	7.44 ~7.50	
40	03f ₀ ~03g ₀	N-5°-E	3.20	34	22	8	2~4	U	自然	無	7.80 ~7.98	
42	03f ₀	N-15°-W	0.30	32	27	9	4~6	U	自然	無	7.75	
43	03g ₀ ~03h ₀	N-10°-W	4.80	49	20	6	4	U	自然	無	7.89	
44	03e ₀ ~03h ₀	N-15°-E	6.85	32	10	8	4~10	U	自然	無	6.92 ~7.40	
45	03g ₀	N-2°-E N-20°-E	8.60	31	22	14	4~10	U	自然	無	7.06 ~7.78	
46	03e ₀	N-0°	0.70	20	3	4	4	U	自然	無	7.21	
47	03e ₀ ~03f ₀	N-10°-E	3.20	25	17	10	2~4	U	自然	無	7.19 ~7.36	
52	03c ₀ ~03e ₀	N-13°-W	6.00	32	17	8	4~8	U	自然	有	6.72 ~7.00	
55	03b ₀ ~04b ₁	N-28°-E	1.30	22	15	8	6	U	自然	無	6.98	第57号土樋と接続
57	03c ₀ ~04c ₁	N-24°-E	7.00	30	14	6	4~6	U	自然	有	6.36 ~6.66	第55号土樋と接続
58	03d ₀ ~04a ₁	N-55°-E	6.00	30	18	10	4~10	U	自然	有	6.33 ~6.38	

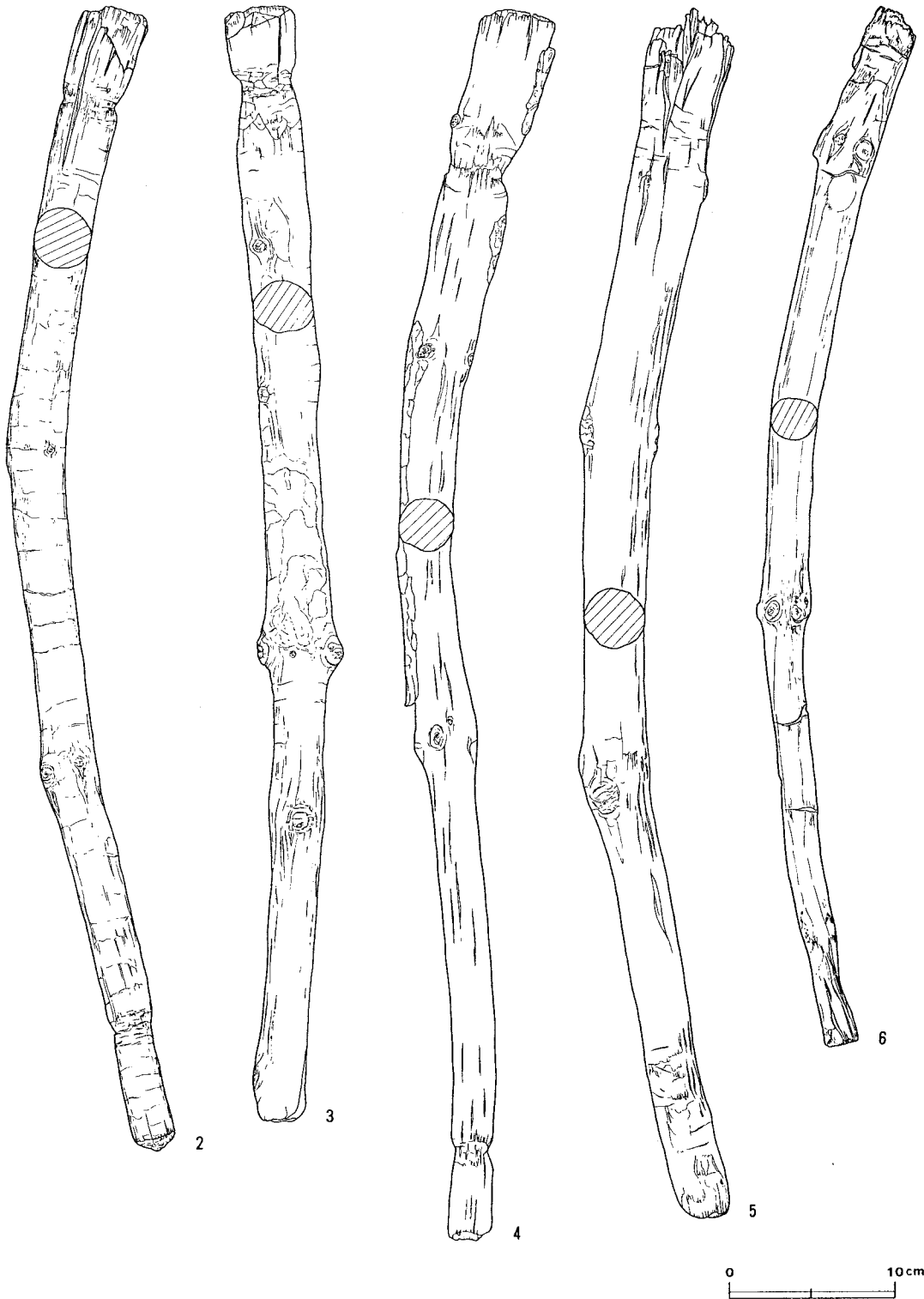
59	03c _o ~03d _o	N-47°-W	0.60	25	8	2	2	∪	自然	無	6.50 ~6.58	第60号土樋と接続
60	03c _o	N-0°	0.25	13	3	2	2	∪	自然	無	6.45	第59号土樋と接続
61	03d _o ~04d ₁	N-62°-W	4.80	28	12	8	4~6	∪	自然	有	6.36 ~6.42	第62号土樋と接続
62	04d ₁ ~04e ₁	N-5°-E	1.80	23	13	14	4~6	∪	自然	有	6.68	第61号土樋と接続
63	03e _o	N-58°-W	1.00	55	24	12	4~8	∪	自然	無	6.50 ~6.72	
64	03b _o ~03d _o	N-60°-E	1.00	15	8	7	4~6	∪	自然	無	5.75 ~5.93	
65	04a ₁ ~04b ₁	N-10°-W	5.10	23	12	7	4~6	∪	自然	無	6.38 ~6.56	
66	03e _o ~03d _o	N-2°-E	3.80	25	15	10	4~10	∪	自然	有	5.92 ~6.00	
68	03e _o ~03f _o	N-4°-E	5.20	40	20	12	4~6	∪	自然	無	6.36 ~6.48	第5の15号鹹水槽と連結
71	04b ₁	N-85°-E	2.10	27	13	9	4~6	∪	自然	無	5.66 ~6.02	第72号土樋と接続、第5の25・5の30号鹹水槽と連結
72	03b _o ~04b ₁	N-80°-W	2.40	24	18	23	2~6	∪	自然	無	5.55 ~5.71	第71号土樋と接続、第5の25・5の30号鹹水槽と連結
74	03b _o ~03c _o	N-45°-E	4.60	20	13	9	2~6	∪	自然	無	5.10 ~5.30	第78号土樋と接続
78	03a _o ~03b _o	N-3°-E	7.70	32	9	10	4~8	∪	自然	無	5.30 ~5.70	第74号土樋と接続

出土遺物 第21号鹹水槽の覆土中から土師質土器の皿1点(第35図1)、第81号鹹水槽の覆土中から担い棒24点(第36~40図2~25)、ろ過器1点(第41図26)、柄振2点(第41図27・28)、椀1点(第41図29)、ざる片1点、第125号鹹水槽内から担い棒1点(第41図30)、木材片8点、竹片2点、石3点、第11号竈の覆土中から石臼2点(第35図31・32)等が散乱して出土している。26のろ過器の法量は、口径40.6cm、底径36.6cm、器高20.2cmであり、第81号鹹水槽から正位の状態出土している。材質はマツ属の一種である。柄振は用途から2種類に分けられ、27は灰掻き出し柄振で、法量は板部の最大長35.2cm、最大幅10.8cm、最大厚4.9cmであり、黒く変色している。材質はマツ属の一種である。28は釜柄振で、法量は板部の最大長42.0cm、最大幅11.0cm、最大厚4.8cmである。29の椀(木製品)は、釜柄杓に転用されたもので、法量は口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.0cmであり、体部内・外面は漆塗りで、



第35図 第5製塩跡出土遺物実測・拓影図(1)

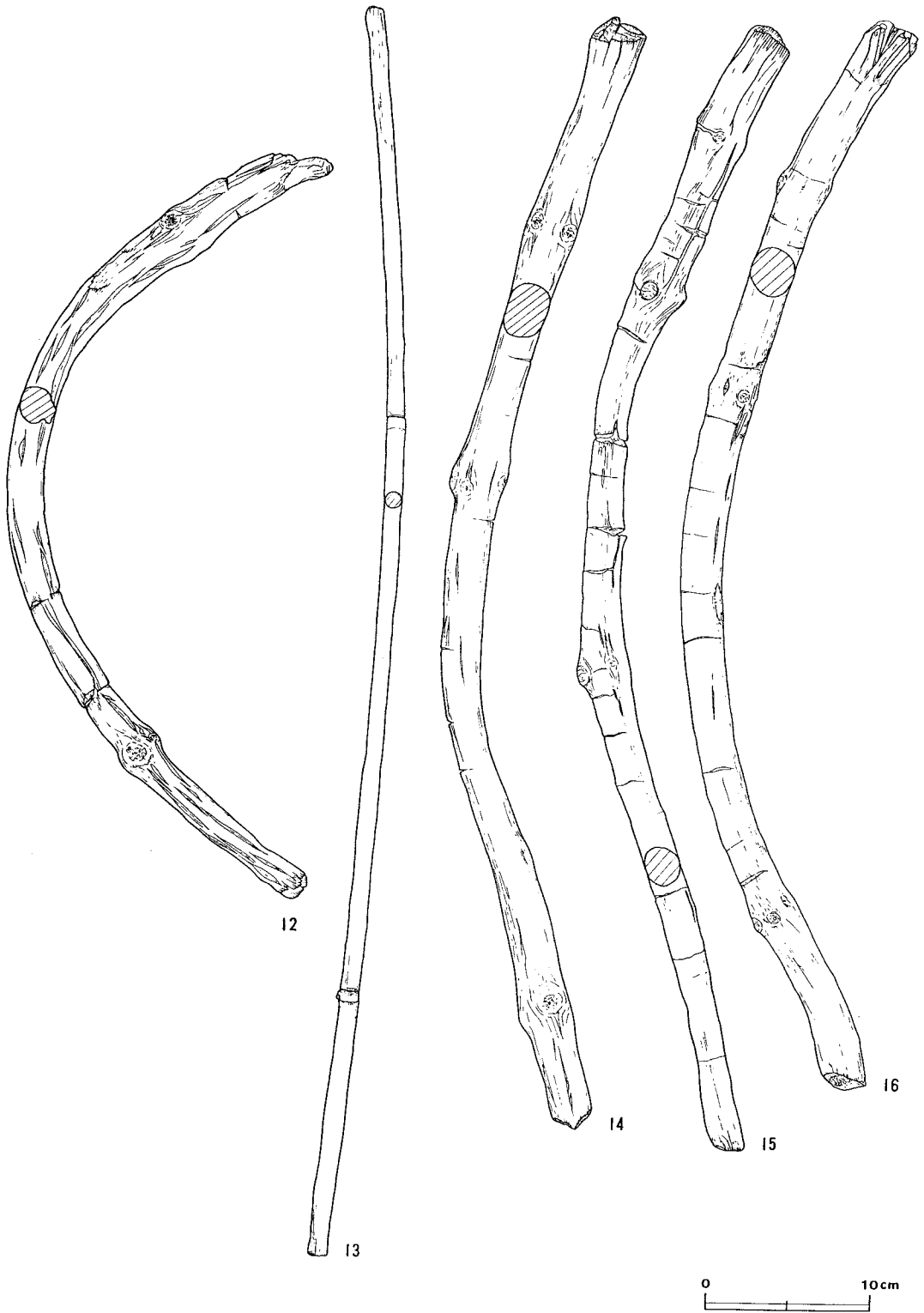
底部内面に朱色で三つ巴が描かれている。材質はハンノキ属の一種である。31と32は粉挽き臼の上臼と下臼の破片で、完存率は30%である。31は推定直径約28.0cm、上縁高2.8cm、上縁幅3.6cm、重さ約2,250gを測る。石質は安山岩である。磨り合わせ面は摩滅が著しく、分画数は不明である。32は推定直径約28.0cm、現存する高さ8.5cm、ふくみ0.7cm、重さ2,550gを測る。石質は砂岩である。磨り合わせ面は摩滅が著しく、分画数は不明である。



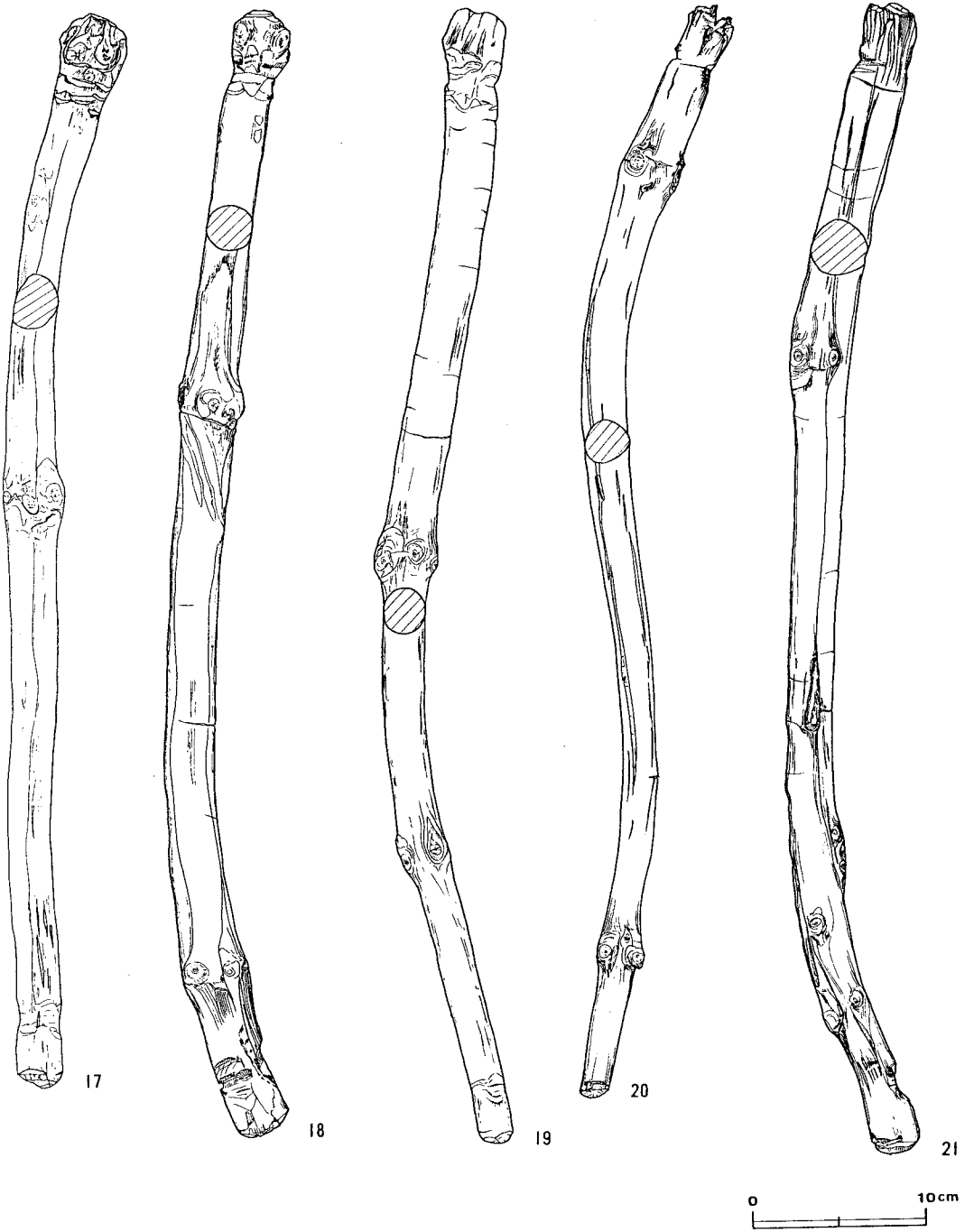
第36図 第5製塩跡出土遺物実測図(2)



第37图 第5製塩跡出土遺物実測図(3)



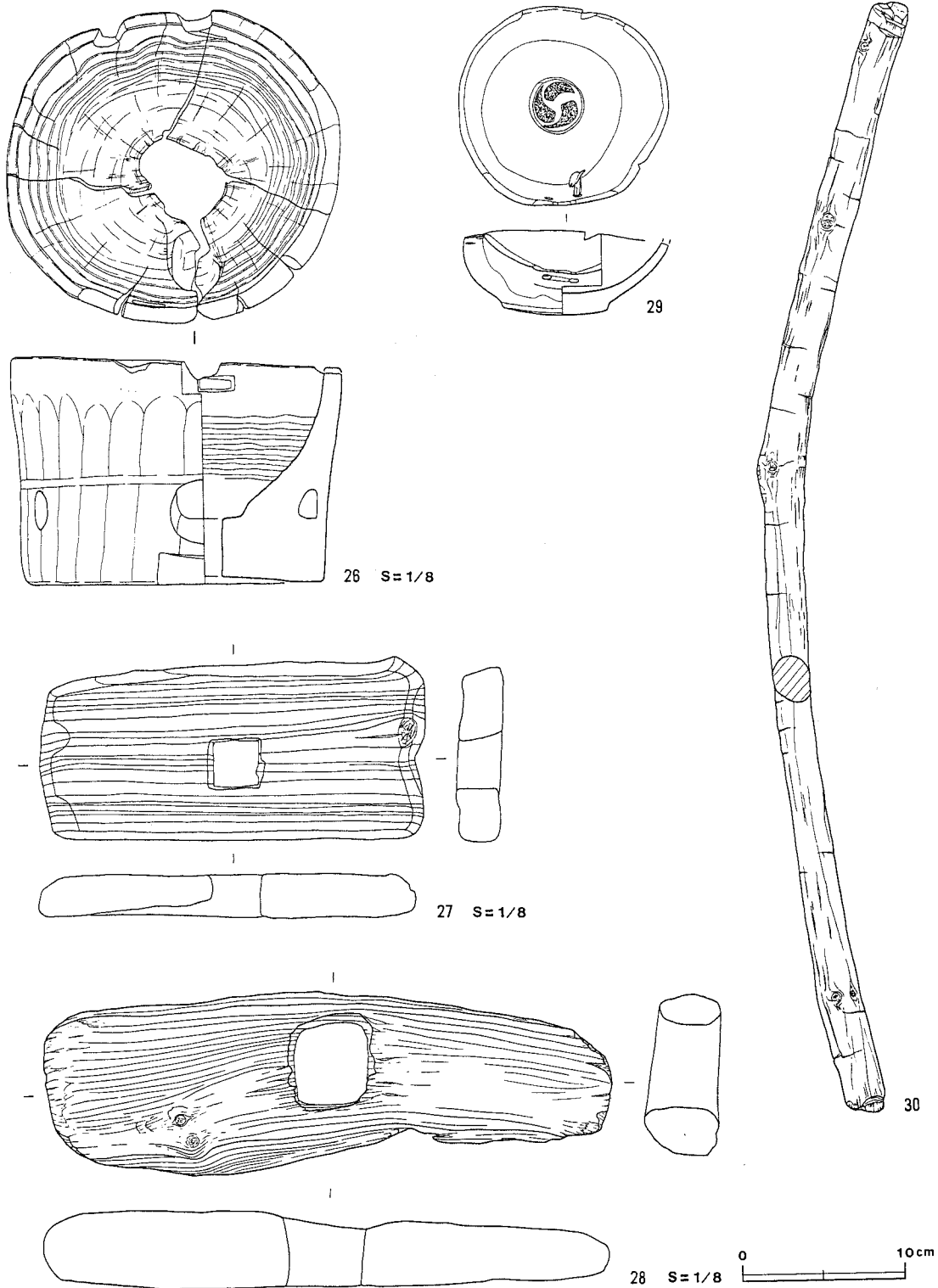
第38图 第5製塩跡出土遺物実測图(4)



第39图 第5製塩跡出土遺物実測図(5)



第40図 第5製塩跡出土遺物実測図(6)



第41図 第5製塩跡出土遺物実測図(7)

第21号鹹水槽出土土器観察表(第35図1)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師質土器	A 11.8 B 3.7 C 5.0	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P21 100 % 第21号鹹水槽覆土

第81号鹹水槽出土木製品一覧表(第36~40図2~25)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
2	担い棒	72.0	3.8	3.4	222.0	SN81	W9
3	担い棒	79.3	3.3	3.7	217.6	SN81	W10
4	担い棒	76.5	3.3	3.3	198.4	SN81	W11
5	担い棒	76.0	3.8	3.7	301.7	SN81	W12
6	担い棒	65.0	2.6	2.9	95.4	SN81	W14
7	担い棒	69.0	2.4	2.6	115.4	SN81	W15
8	担い棒	66.5	0.3	3.1	257.4	SN81	W16
9	担い棒	66.2	2.8	2.7	107.5	SN81	W17
10	担い棒	64.9	3.1	2.8	239.9	SN81	W18
11	担い棒	65.5	3.1	3.5	122.3	SN81	W19
12	担い棒	60.8	2.3	2.3	54.3	SN81	W20
13	担い棒	87.7	1.1	1.1	29.6	SN81	W21
14	担い棒	70.8	3.5	2.4	132.8	SN81	W22
15	担い棒	72.5	2.5	2.1	102.0	SN81	W23
16	担い棒	70.0	3.0	2.8	105.3	SN81	W24
17	担い棒	63.5	3.3	2.5	105.7	SN81	W25
18	担い棒	67.1	2.6	2.6	134.8	SN81	W26
19	担い棒	67.6	2.7	2.5	123.8	SN81	W27
20	担い棒	65.6	2.5	2.6	77.3	SN81	W28
21	担い棒	69.0	3.3	3.3	140.8	SN81	W29
22	担い棒	64.2	2.9	2.8	110.9	SN81	W30
23	担い棒	67.8	3.3	3.0	185.9	SN81	W31
24	担い棒	58.5	3.4	2.8	119.2	SN81	W32
25	担い棒	66.2	3.2	2.7	144.9	SN81	W33

第125号鹹水槽出土木製品一覧表(第41図30)

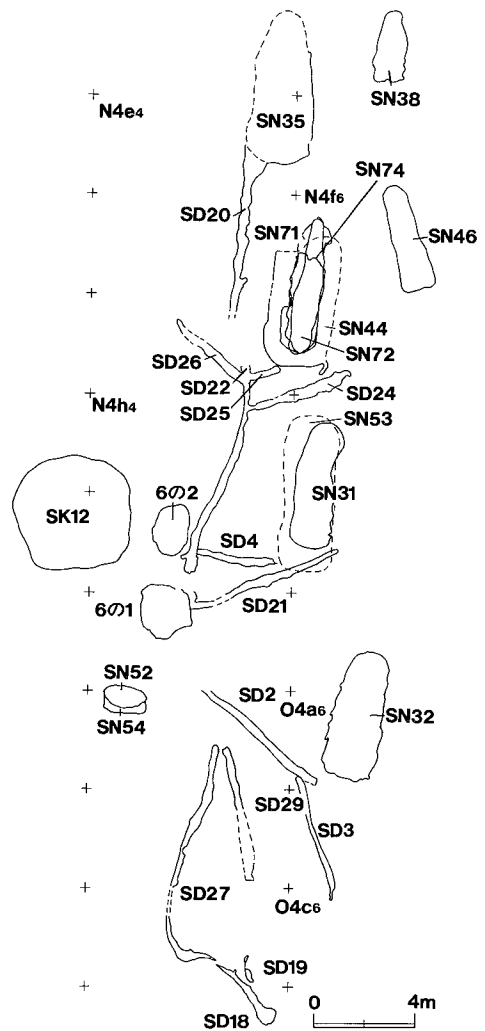
図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
30	担い棒	71.0	3.0	2.3	127.3	SN125	W13

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、6期にわたって操業されていたものと思われる。この六つのグループの新旧関係は、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場の重複関係と確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループ、第5グループ、第6グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第21号鹹水槽から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる、第81号鹹水槽及び第125号鹹水槽からも担い棒が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

第6製塩跡(第42図)

位置 調査区の中央部N4hs区を中心に確認され、標高6.60mに位置している。

関連遺構 第12号竈、第6の1・6の2・31・32・35・38・44・46・52～54・69・71・72・74号鹹水槽及び第2～4・18～22・24～27・29号土樋で構成されている。これらの遺構は、居出場と屋外鹹水槽の重複関係や配置の違いから、4グループに区別できる。第1グループは、第12号竈、釜屋内鹹水槽(6の1, 6の2), 居出場(54), 屋外鹹水槽(31, 32, 35, 72)及び土樋(2, 3, 4, 18～21)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(53, 69, 71, 74)及び土樋(4, 20, 25)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、居出場(52)及び屋外鹹水槽(38, 44)で構成されている。第4グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第3グループと同一で、屋外鹹水槽(46)で構成されている。土樋等で上記にあげたもの以外は、部分的関連状況しか解明できなかったため、グルーピングできなかった。



第42図 第6製塩跡遺構配置図

第6 製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N4h ₅	6.60	12	6の1,6の2	54	31,32,35,72	2,3,4,18,19,20,21	最新
2	N4h ₅	6.60	12	6の1,6の2	54	53,69,71,74	4,20,25	第1グループより古い
3	N4h ₅	6.60	12	6の1,6の2	52	38,44	—	第1・2グループより古い
4	N4h ₅	6.60	12	6の1,6の2	52	46	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北11.50m、東西9.80mの不定形を呈している。砂上に厚さ20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽1基、南側に居出場2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状の詳細については不明である。釜屋の周囲は底面から60～70cmの高さで土手が築かれており、南側に釜屋内へ向かって傾斜した出入口が付設されている。

竈 N4i₃区を中心に1基（第12号竈）検出され、平面形は、円形を呈している。規模は、径4.60m、深さ1.10mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては灰が20～65cmの厚さで堆積している。竈の南側付近には多量の石材が出土している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
12	N4i ₃	—	円 形	4.60	4.60	1.10	自然	5.80	㊦耳金1点	

釜屋内鹹水槽 N4j₄区とN4i₄区から2基（第6の1・6の2号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸方形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.06・1.90m、短軸1.97・1.40m、深さ1.06・1.00mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ5～6cmの粘土を貼って構築している。

居出場 O4a₄区から2基（第52・54号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.18・1.47m、短軸0.85・(0.56)m、深さ0.32・0.34mである。底面は平坦で、壁は内彎及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。第54号鹹水槽の下から第52号鹹水槽が検出されていることから、第54号鹹水槽が新しい。

屋外鹹水槽 N4d₅・d₆区・N4f₆・f₇区・N4g₆区・N4h₆区・O4a₆区の7か所から11基（第31・32・35・38・44・46・53・69・71・72・74号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸2.10～5.97m、短軸0.76～2.20m、深さ0.20～1.80mである。底面は平坦で、

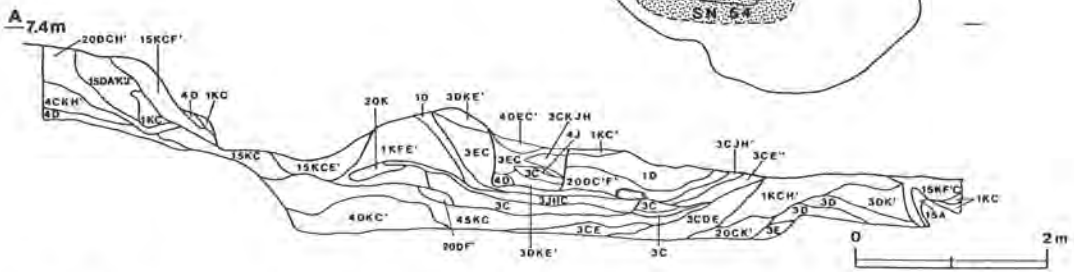
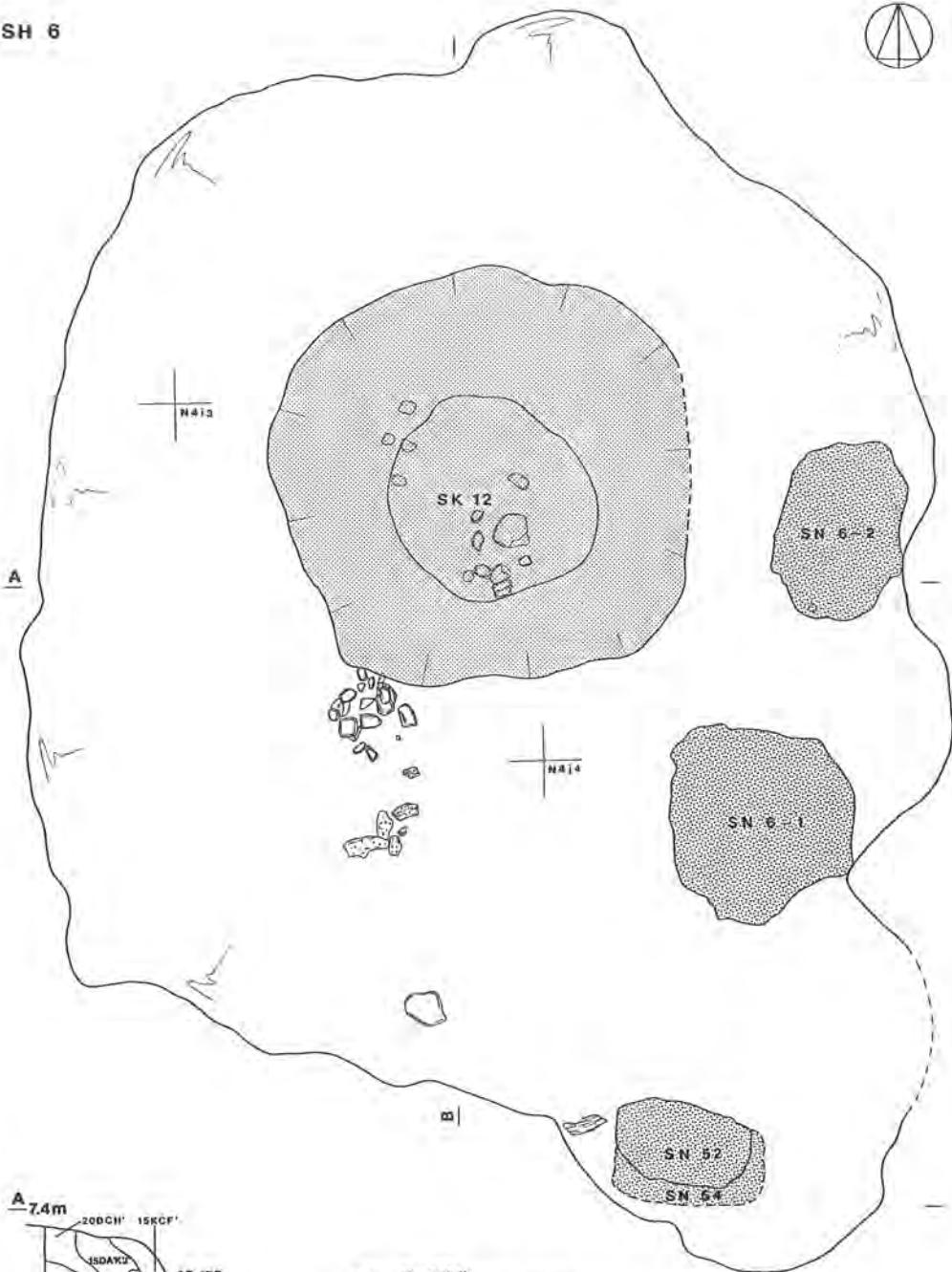
壁は内彎，外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧貼った上に厚さ3～59cmの粘土を貼って構築している。第31・35・72・74号鹹水槽の下から第44・53・69・71号鹹水槽が検出されていることから，第31・35・72・74号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

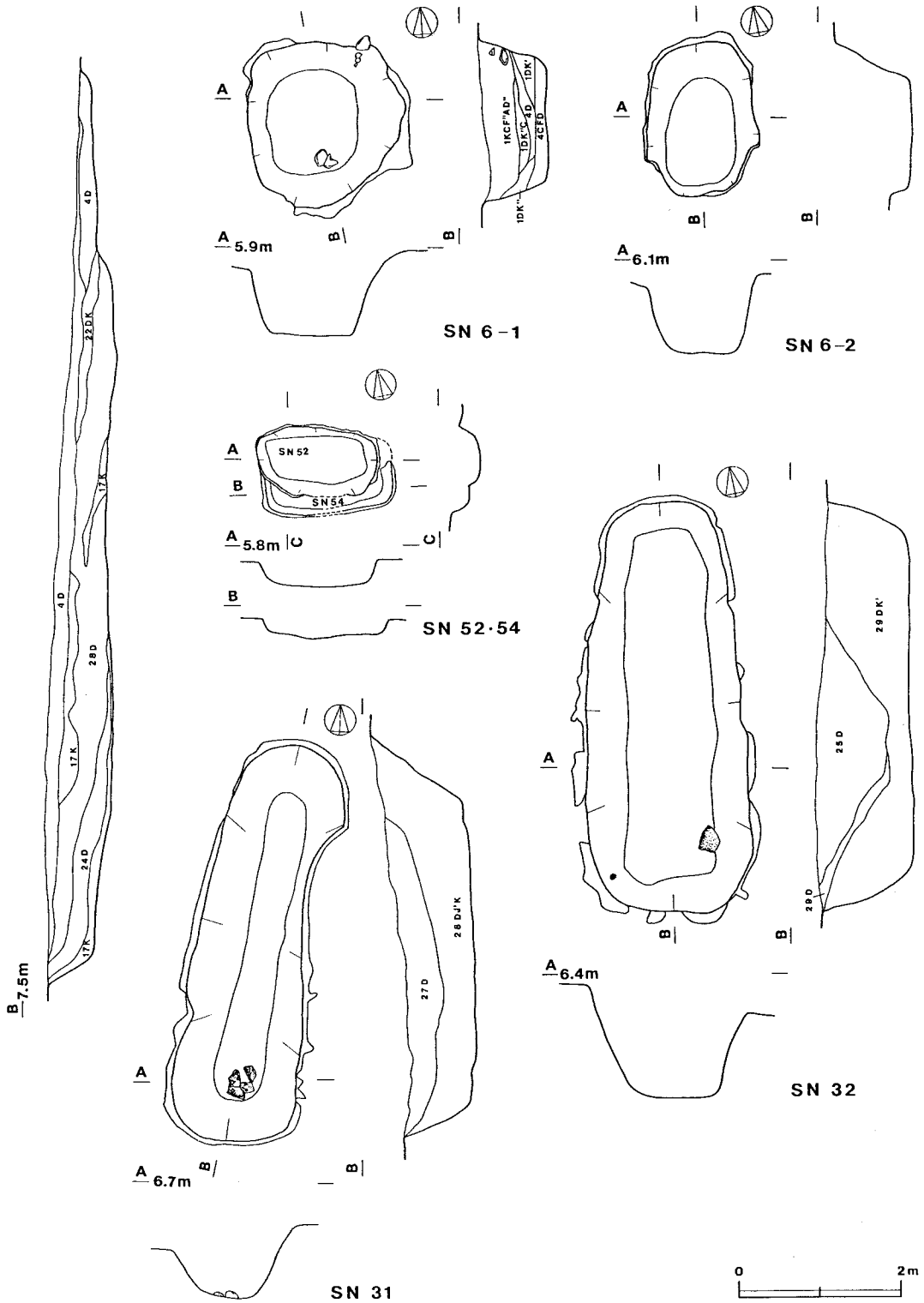
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
6の1	N4j	N-0°	隅丸方形	2.06	1.97	1.06	5	外傾	平坦	自然	5.70	VA3c	釜屋内鹹水槽，第2・20・21・29号土樋と連結
6の2	N4i	N-11°-E	隅丸長方形	1.90	1.40	1.00	6	外傾	平坦	自然	5.90	IVA2c	釜屋内鹹水槽
31	N4h	N-9°-E	隅丸長方形	4.98	1.31	0.92	5～10	内彎	平坦	自然	6.20	IVA4b	屋外鹹水槽，足掛け石1点，底面一石4点，第53号鹹水槽と重複
32	O4a	N-12°-E	隅丸長方形	5.08	1.89	1.40	4～20	外傾	平坦	自然	6.29	IVA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点，底面一石1点
35	N4d	N-4°-E	隅丸長方形	5.97	2.20	1.36	3～25	外傾	平坦	自然	6.20	IVA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点，底面一石3点，第69号鹹水槽と重複
38	N4d	N-5°-E	隅丸長方形	2.10	0.76	0.20	7～58	緩斜	平坦	自然	5.06	IVA3a	屋外鹹水槽，⊙石2点
44	N4g	N-10°-E	隅丸長方形	4.60	1.50	0.96	6～20	外傾	平坦	自然	5.34	IVA4b	屋外鹹水槽，底面一石4点，足掛け石1点，第74号鹹水槽と重複
46	N4f	N-16°-W	隅丸長方形	4.16	0.89	0.35	4～11	外傾	平坦	自然	5.23	IVA4a	屋外鹹水槽，底面一石2点，⊙石1点
52	O4a	N-82°-W	隅丸長方形	2.18	0.85	0.32	1～6	緩斜	平坦	自然	5.07	IVA3a	居出場，第54号鹹水槽と重複
53	N4h	N-1°-E	隅丸長方形	5.60	1.52	1.04	14～59	緩斜	平坦	自然	5.34	IVA4c	屋外鹹水槽，底面一石3点，第31号鹹水槽と重複
54	O4a	N-45°-W	隅丸長方形	1.47	(0.56)	0.34	3～7	内彎	平坦	自然	5.68	IVC2a	居出場，第52号鹹水槽と重複
69	N4d	N-5°-E	舟 形	4.90	1.50	1.47	8～18	外傾	平坦	自然	6.00	VIA4c	屋外鹹水槽，第35号鹹水槽と重複
71	N4f	N-10°-E	隅丸長方形	5.55	1.45	1.50	9～13	緩斜	平坦	自然	5.41	IVA4d	屋外鹹水槽，第72号鹹水槽と重複
72	N4f	N-8°-E	隅丸長方形	5.30	1.10	1.70	10	外傾	平坦	自然	5.83	IVA4d	屋外鹹水槽，第71号鹹水槽と重複
74	N4g	N-8°-E	隅丸長方形	3.83	1.35	1.80	16～17	緩斜	平坦	自然	5.69	IVA4d	屋外鹹水槽，第44号鹹水槽と重複

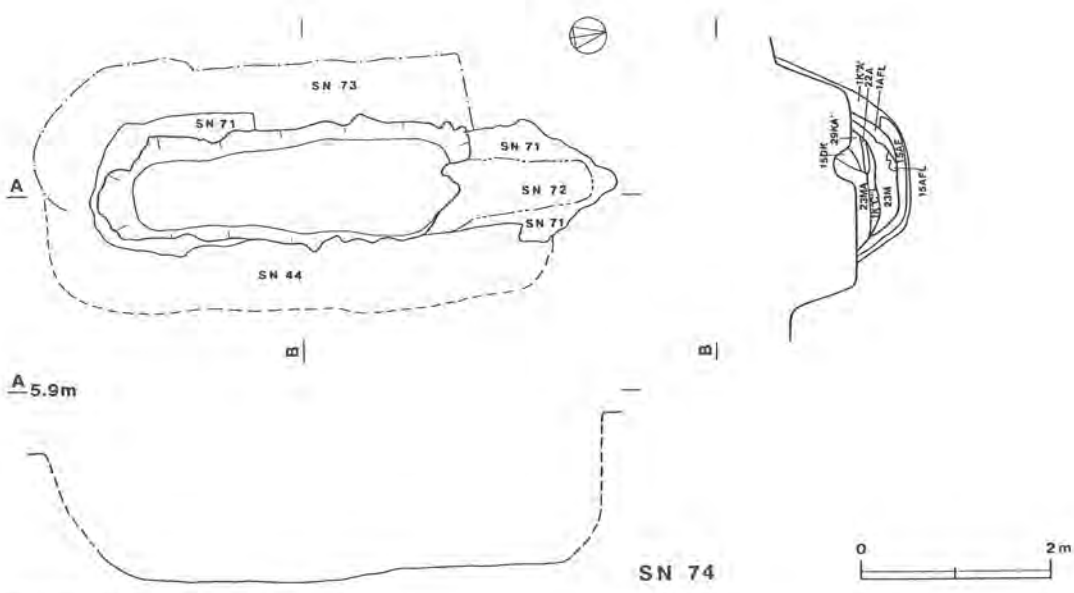
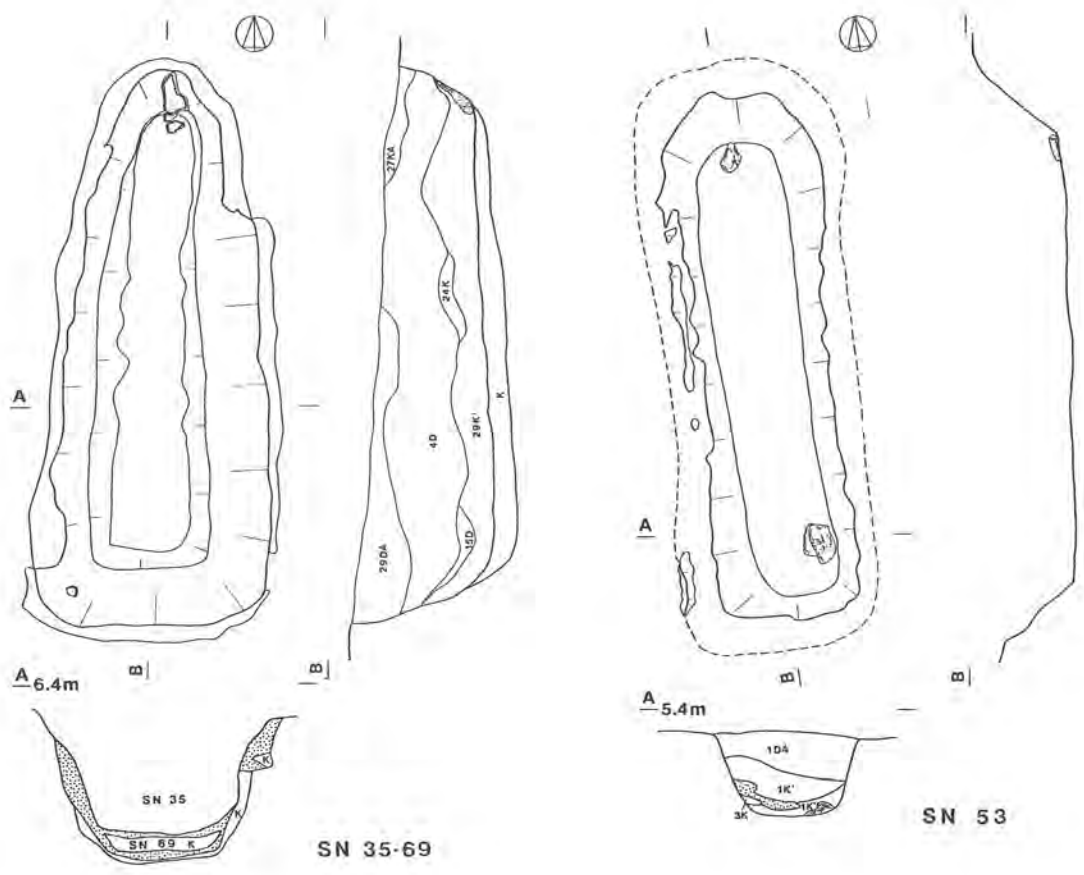
土樋 N4es区からO4ds区を中心として13条（第2～4・18～22・24～27・29号土樋）検出され，全長が最も短いものは1.40mで，最も長いものは12.60mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し，上幅18～35cm，下幅8～20cm，深さ4～15cmである。各土樋は砂地を浅く掘り，粘土を2～18cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第2・3号土樋の下から第27・29号土樋が検出されていることから，第2・3号土樋が新しい。第35・69号鹹水槽と連なっている第20号土樋は，第31・53号鹹水槽と連なっている第4号土樋と合流し，さらに第44・71・72・74号鹹水槽と連なっている第25号土樋や第22・24号土樋が合流する。第32号鹹水槽と連なっている第2号土樋は第3号土樋と合流する。そして，第2・20・21号土樋が釜屋内の第6の1号鹹水槽と連結していたと思われる。さらに第18号土樋は第27号土樋と接続し，O4as区で第29号土樋と接続して，釜屋内の第6の1号鹹水槽と連結していたと思われる。

SH 6

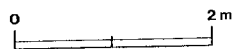
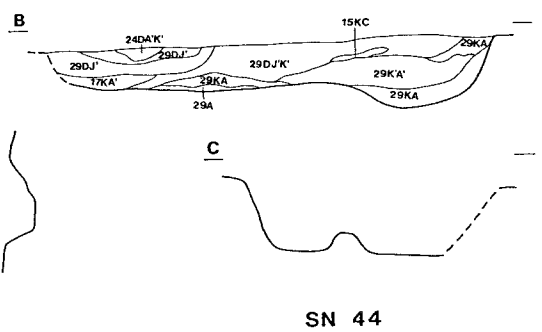
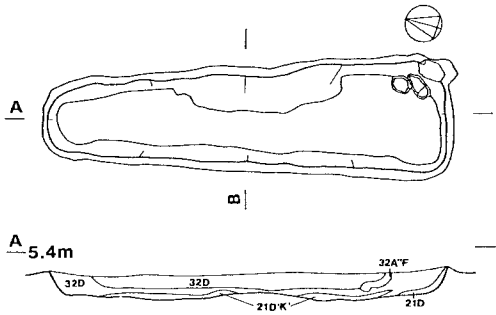
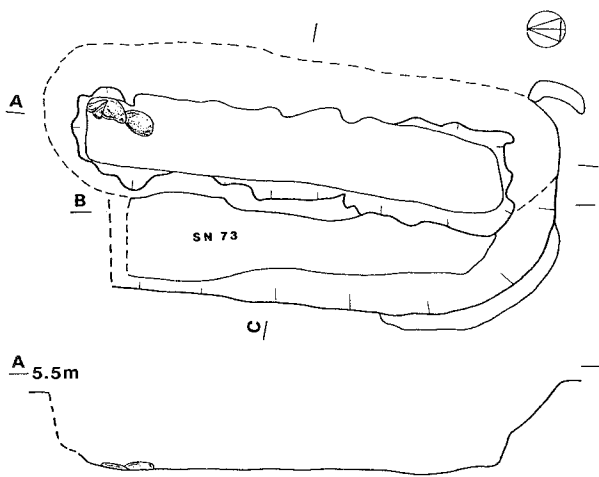
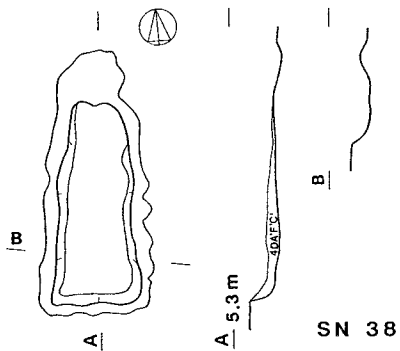
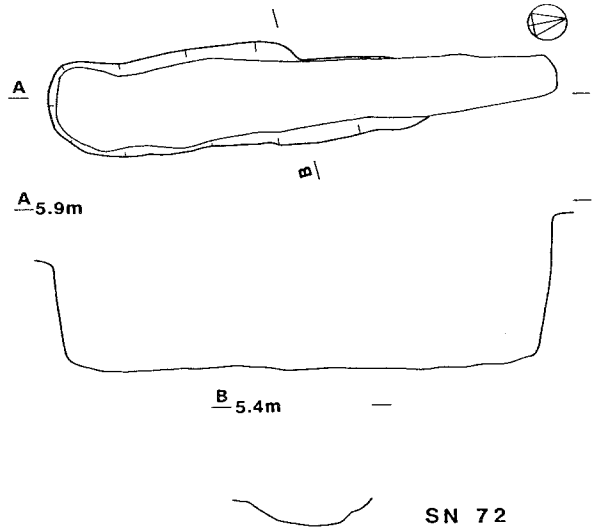
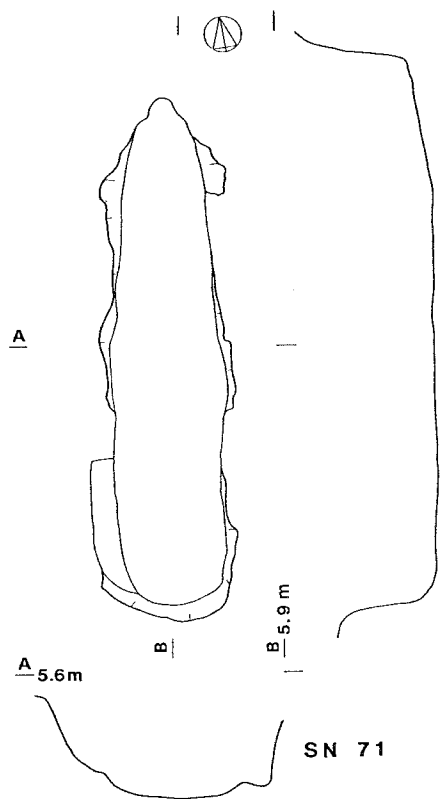


第43図 第6製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

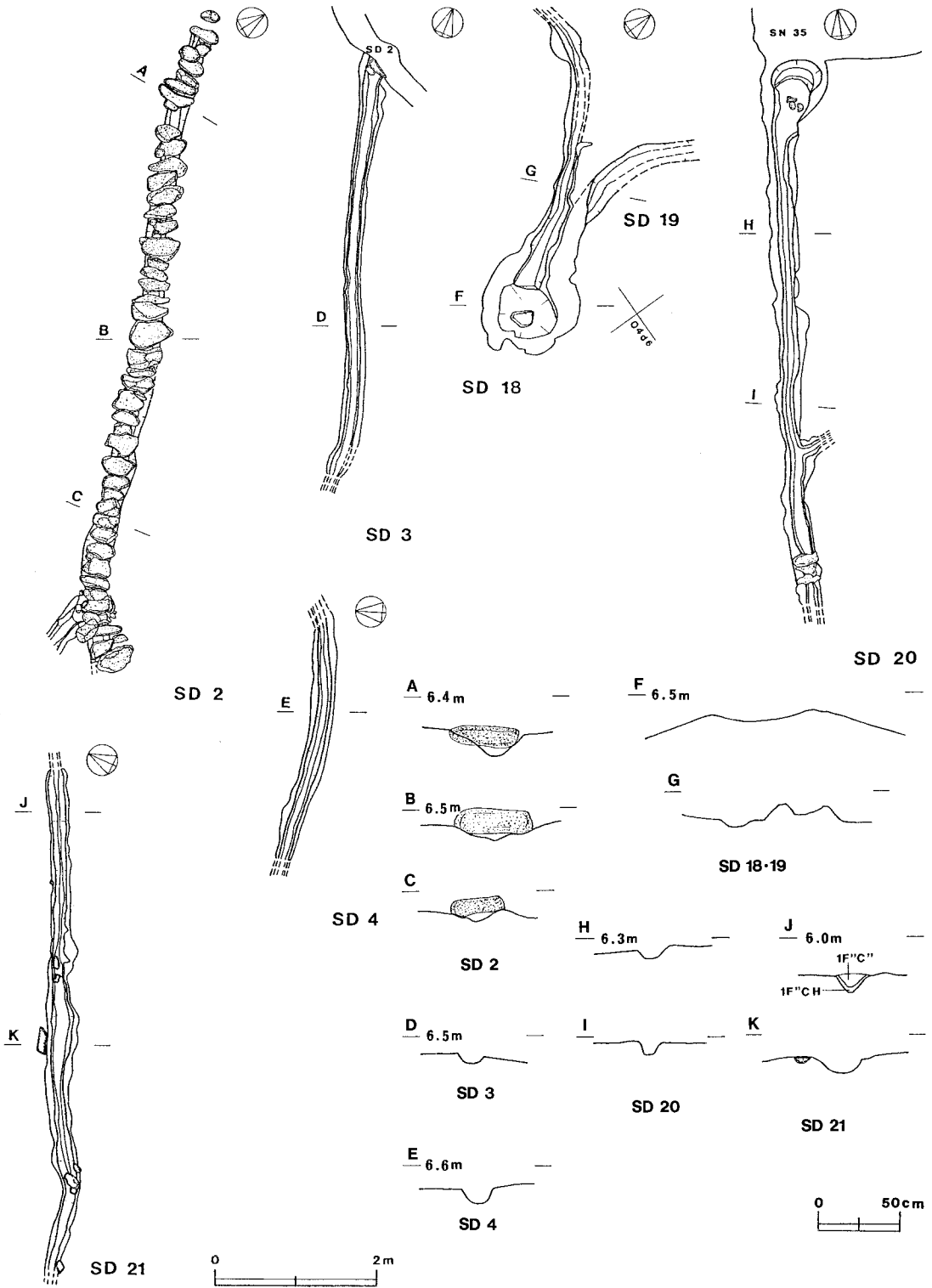




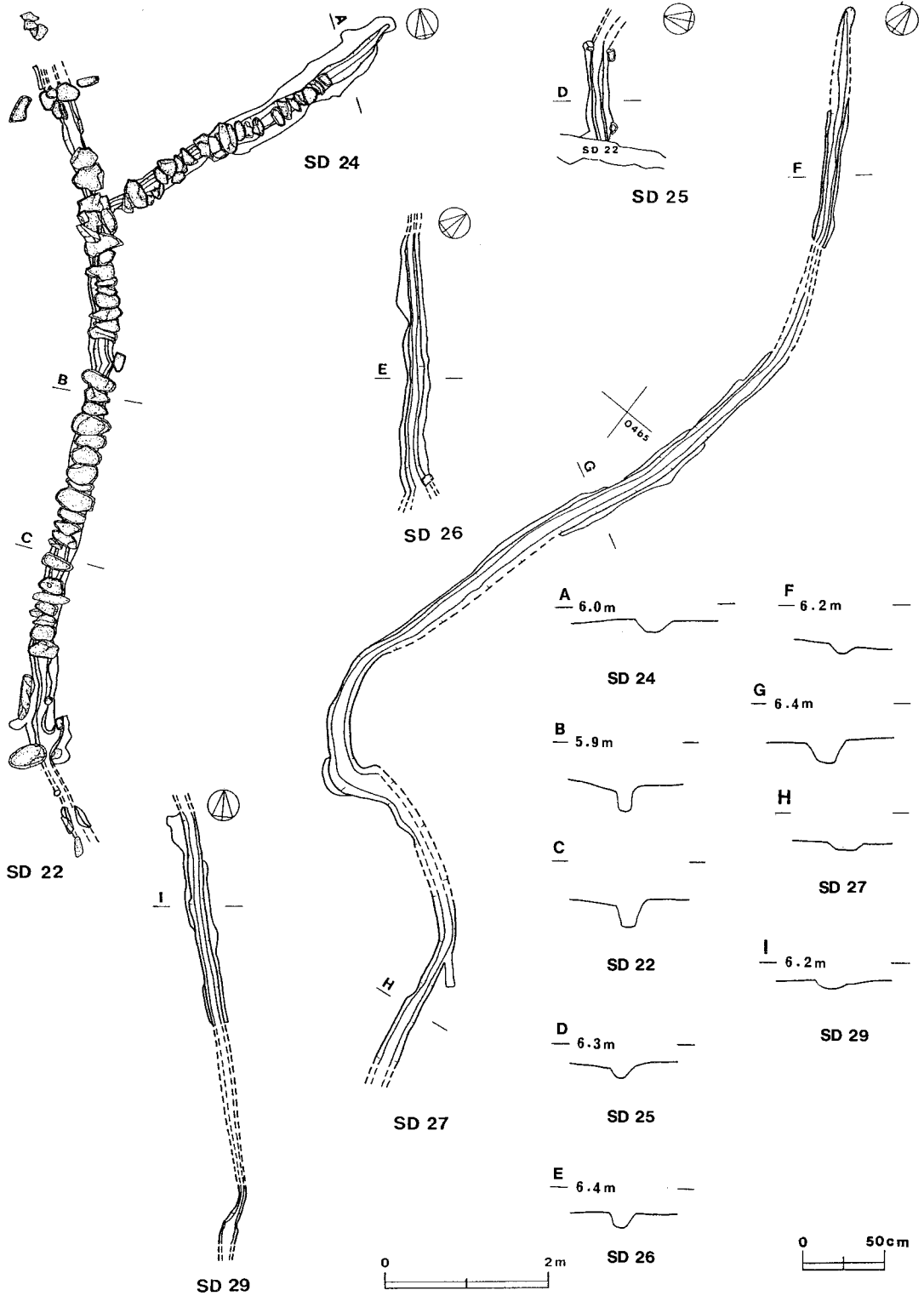
第44図 第6製塩跡鹹水槽実測図(1)



第45図 第6製塩跡鹹水槽実測図(2)



第46图 第6製塩跡土樋実測図(1)



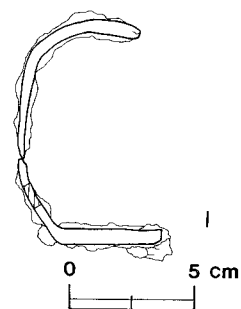
第47图 第6製塩跡土樋実測图(2)

土樋一覧表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
2	N4j _s ~04a ₆	N-49°-W	8.10	35	17	13	4	U	自 然	有	5.88 ~6.31	第3号土樋と接続, 第6の1号鹹水槽と連結
3	04a ₆ ~04c ₆	N-16°-W	5.50	18	9	5	2~5	U	自 然	無	6.24 ~6.32	第2号土樋と接続
4	N4j _s	N-84°-W	3.40	20	12	8	2~8	U	自 然	無	5.97 ~6.46	第20号土樋と接続
18	04c _s ~04d _s	N-35°-W	4.20	33	11	6	2~6	U	自 然	無	6.28 ~6.32	第27号土樋と接続
19	04c _s ~04d _s	N-25°-W	1.40	23	15	5	2~4	U	自 然	無	6.36	第18号土樋と接続
20	N4e _s ~N4g _s	N-5°-E	7.00	18	12	13	4~11	U	自 然	有	6.19 ~6.26	第4・22・24・25号土樋と接続, 第6の1号鹹水槽と連結
21	N4g _s ~N4i ₆	N-68°-E	6.20	30	13	8	2~10	U	自 然	無	6.03 ~6.07	第6の1号鹹水槽と連結
22	N4g _s ~N4i _s	N-28°-E	9.00	18	8	15	2~10	U	自 然	有	5.63 ~5.64	第20・24・25号土樋と接続
24	N4g _s ~N4g _s	N-73°-E	4.30	30	12	7	2~18	U	自 然	有	5.88	第20・22号土樋と接続
25	N4g _s	N-75°-E	2.00	20	15	9	4~8	U	自 然	有	6.18 ~6.19	第20・22号土樋と接続
26	N4g _s ~N4g _s	N-50°-W	3.70	30	12	12	2~8	U	自 然	無	6.25	
27	N4j _s ~04d _s	N-55°-W N-27°-W N-15°-E N-5°-W	12.60	25	20	15	2~4	U	自 然	無	5.94 ~6.20	第18・29号土樋と接続
29	04a _s ~04b _s	N-10°-W	5.60	20	15	4	2~10	U	自 然	無	6.10 ~6.16	第27号土樋と接続, 第6の1号鹹水槽と連結

出土遺物 第12号竈の覆土中から耳金1点(第48図1)が出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが, 4期にわたって操業されていたものと思われる。四つのグループの新旧関係は, 居出場と屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから, 第1グループが最も新しく, 次いで第2グループ, 第3グループ, 第4グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は, 第12号竈から耳金が出土しているが, その時期を明確にすることはできなかった。



第48図 第6製塩跡
出土遺物実測図

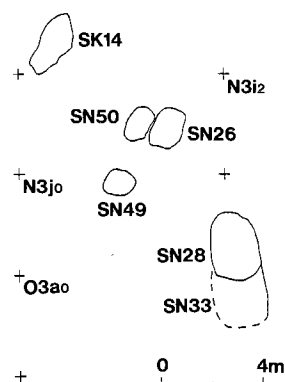
第12号竈出土鉄製品一覧表(第48図1)

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	9.6	1.0	0.4	46.4	第12号竈	M2 断面長方形,両端部折れ曲がる。

第7 製塩跡(第49図)

位置 調査区の N4i₁ を中心に確認され、標高7.70m に位置している。

関連遺構 第14号竈、第26・28・33・49・50号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、屋外鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第14号竈、釜屋内鹹水槽(26, 50)、居出場(49)及び屋外鹹水槽(33)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(28)で構成されている。



第49図 第7 製塩跡
遺構配置図

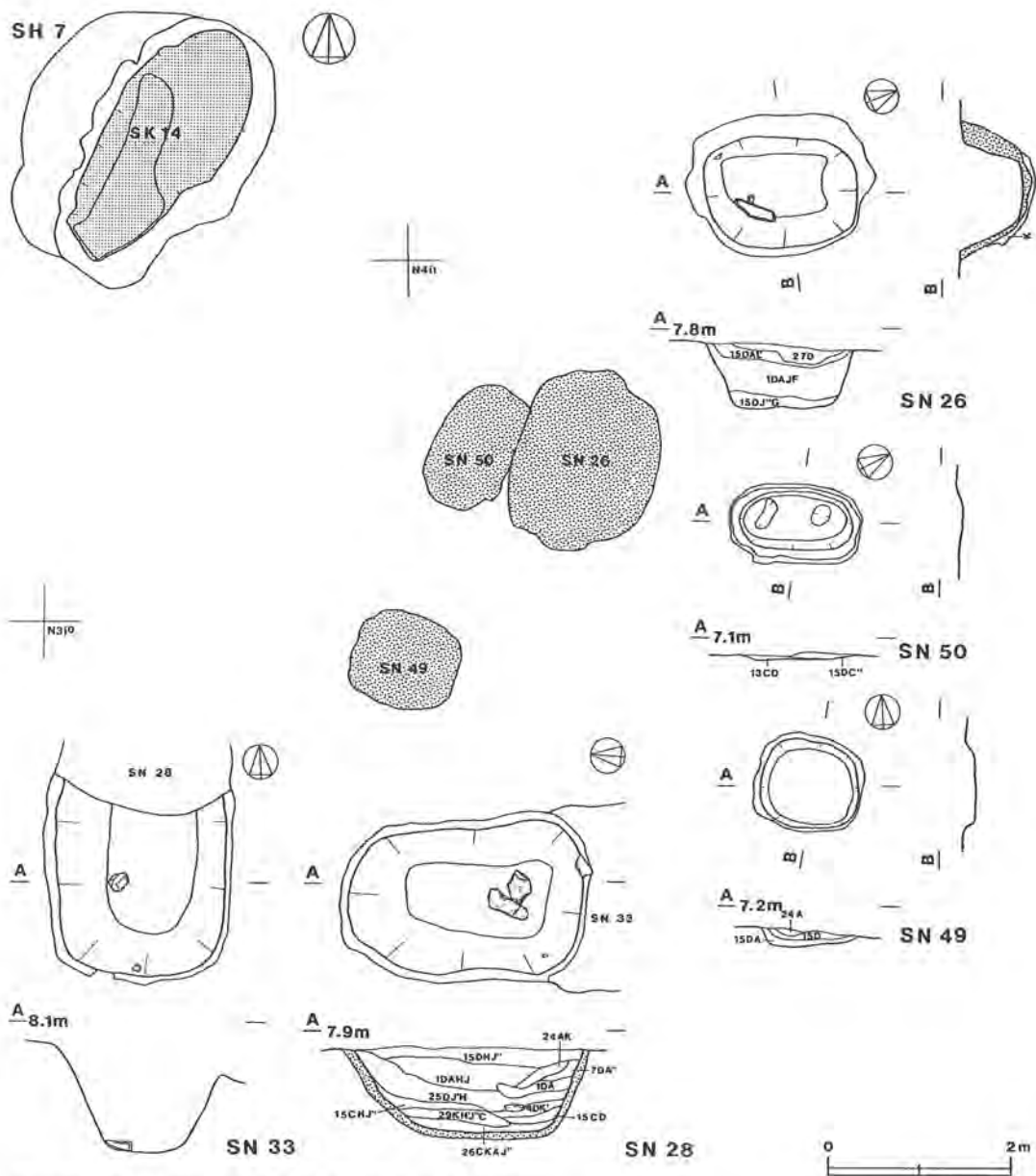
第7 製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N4i ₁	7.70	14	26, 50	49	33	—	新
2	N4i ₁	7.70	14	26, 50	49	28	—	古

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 N3i₀区から1基(第14号竈)検出されたが、ほとんど削平されているため、規模と平面形は不明である。ただ、火床直下の砂と思われる焼砂が長軸2.60m、短軸1.20mの楕円形を呈する範囲で検出され、その上面は周辺から流れ込んだと思われる黒色土砂が覆っている。

釜屋内鹹水槽 N4h₁区とN4i₁区から2基(第26・50号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.67・1.39m、短軸1.24・0.68m、深さ0.71・(0.08)mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~11cmの粘土を貼って構築している。第50号鹹水槽は、上層が削平されているため浅くなっている。



第50図 第7製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

居出場 N4j₁区から1基(第49号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.09m、短軸0.93m、深さ0.16mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~10cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 N4j₂区とO4a₂区から2基(第28・33号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.58・2.68m、短軸1.56・1.85m、深さ0.94・1.21mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚

さ3～13cmの粘土を貼って構築している。第33号鹹水槽の下から第28号鹹水槽を検出したので、第33号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
26	N4h ₁	N-21°-E	隅丸長方形	1.67	1.24	0.71	2～9	外傾	平坦	自然	7.62	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、底面一石2点
28	N4j ₂	N-63°-W	隅丸長方形	2.58	1.56	0.94	3～9	緩斜	平坦	自然	7.71	IVA3b	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石3点、 \odot 鉄1点
33	04a ₂	N-11°-W	隅丸長方形	2.68	1.85	1.21	6～13	緩斜	平坦	自然	7.88	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石2点、底面一石1点
49	N4j ₁	N-71°-W	隅丸長方形	1.09	0.93	0.16	2～10	外傾	平坦	自然	6.94	IVA2a	居出場
50	N4i ₁	N-30°-E	隅丸長方形	1.39	0.68	(0.08)	4～11	緩斜	平坦	自然	6.94	IVA2a	釜屋内鹹水槽

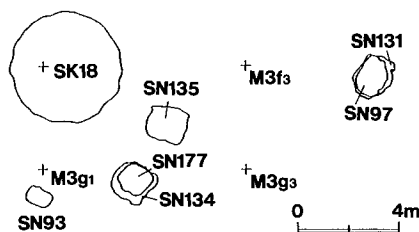
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の第28号鹹水槽と第33号鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第8製塩跡(第51図)

位置 調査区の中央部 M3e₂区を中心に確認され、標高10.10mに位置している。

関連遺構 第18号竈、第93・97・131・134・135・177号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。

第1グループは、第18号竈、釜屋内鹹水槽(134, 135)、居出場(93)及び屋外鹹水槽(97)で構成されている。第2グループは、竈と居出場が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽(135, 177)及び屋外鹹水槽(131)で構成されている。



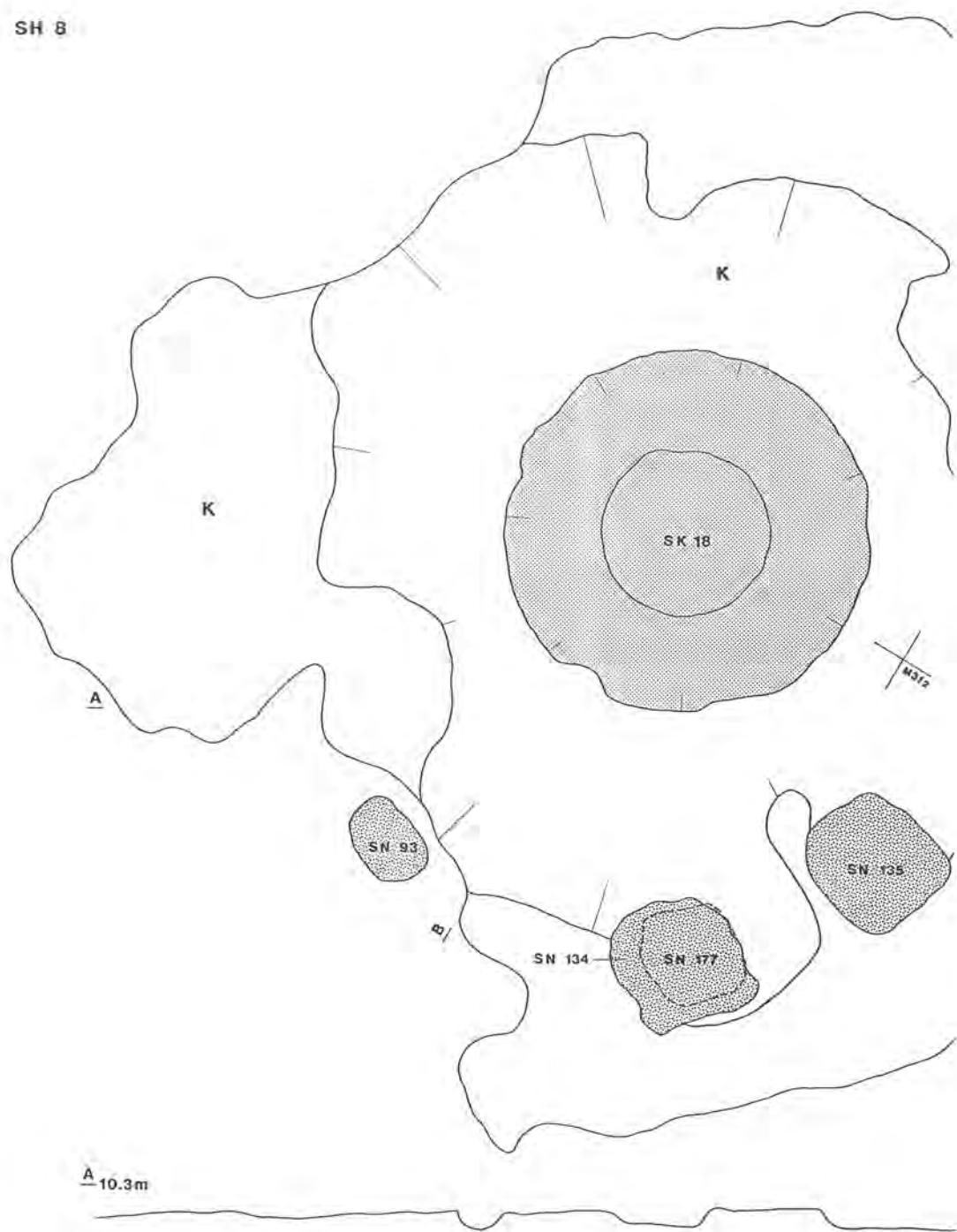
第51図 第8製塩跡遺構配置図

第8製塩跡一覧表

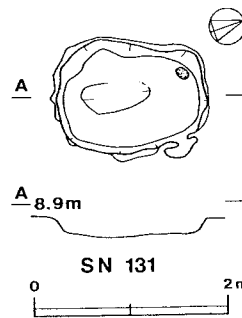
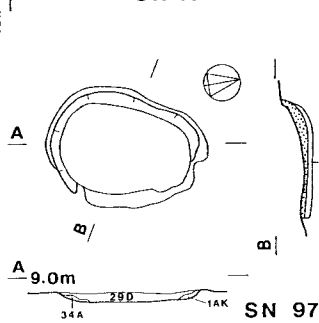
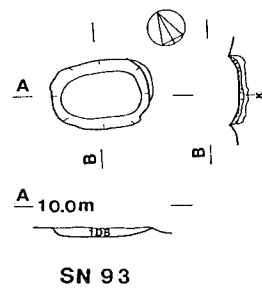
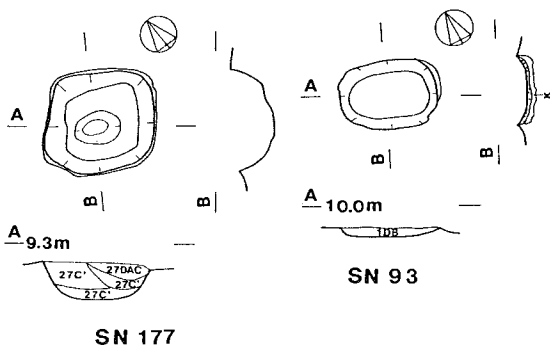
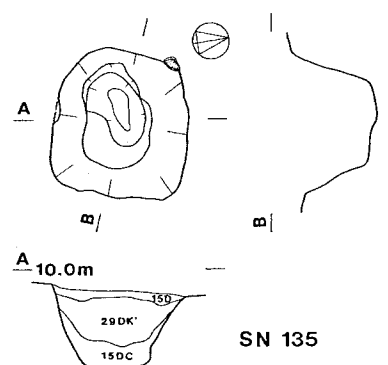
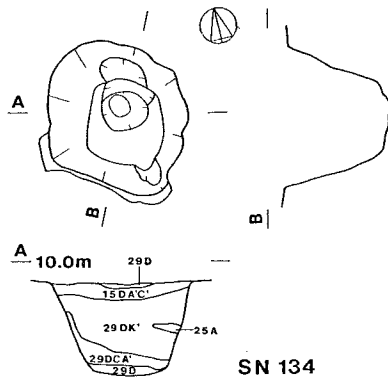
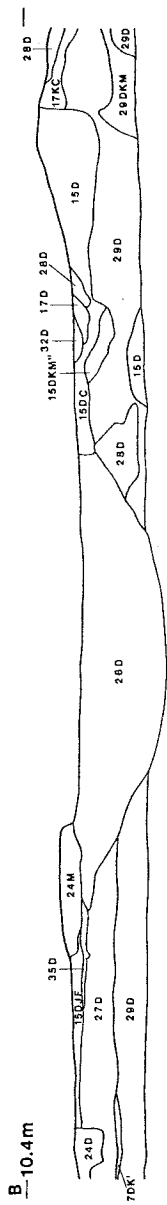
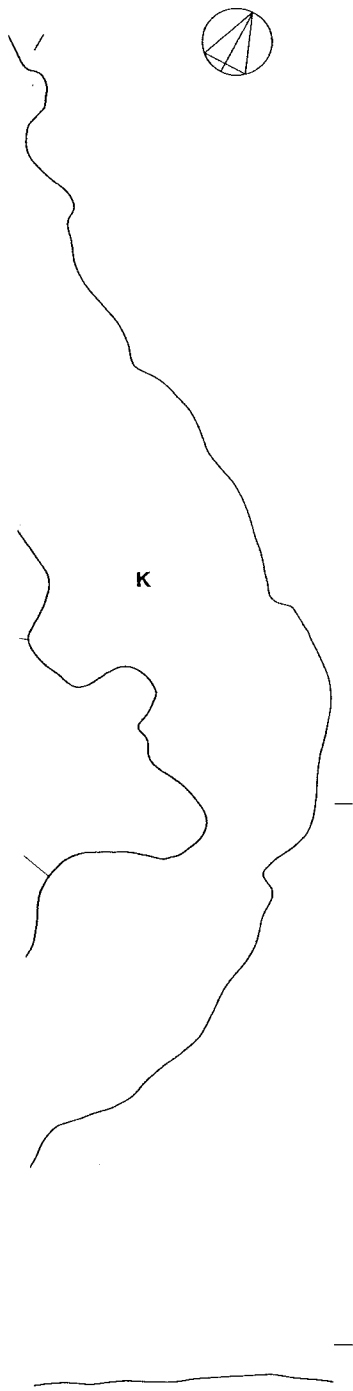
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	M3e ₂	10.10	18	134, 135	93	97	—	新
2	M3e ₂	10.10	18	135, 177	93	131	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北13.10m、東西14.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽3基、南側に居出場1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細につ

SH 8



第52図 第8製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



いては不明である。釜屋の周囲は底面から30cmの高さで土手が築かれている。

竈 M3e₁区を中心に1基(第18号竈)検出され、平面形は、円形を呈している。規模は、径4.40m、深さ0.90mである。底面から鍋状に立ち上がり、竈の周囲は火熱を受けて砂が赤変している。覆土は、周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
18	M3e ₁	-	円形	4.40	4.40	0.90	自然	10.05		

釜屋内鹹水槽 M3f₂区とM3g₁区から3基(第134・135・177号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.10~1.55m、短軸1.10~1.46m、深さ0.40~1.14mである。底面は平坦で、壁は内彎及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黑色土を丁寧に貼った上に厚さ1~8cmの粘土を貼って構築している。第177号鹹水槽の上に第134号鹹水槽が位置しているので、第134号鹹水槽が新しい。

居出場 M2g₀区から1基(第93号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.02m、短軸0.73m、深さ0.11mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黑色土を丁寧に貼った上に厚さ3~5cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 M3f₄区から2基(第97・131号鹹水槽)検出され、互いに重複している。平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.48・1.53m、短軸1.20・1.35m、深さ0.21・0.23mで上層が削平されているため浅くなっている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黑色土を丁寧に貼った上に厚さ2~11cmの粘土を貼って構築している。第97号鹹水槽が第131号鹹水槽の上に位置しているので、第97号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

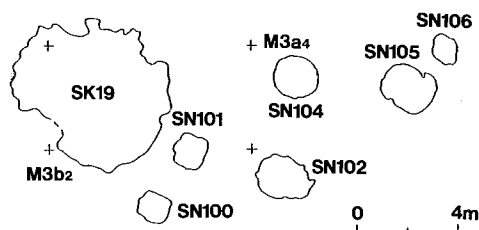
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
93	M2g ₀	N-25°-E	隅丸長方形	1.02	0.73	0.11	3~5	緩斜	平坦	自然	9.98	IVA2a	居出場
97	M3f ₄	N-32°-E	隅丸長方形	1.48	1.20	0.21	6~11	緩斜	平坦	自然	8.97	IVA2a	屋外鹹水槽, 第131号鹹水槽と重複
131	M3f ₄	N-26°-E	隅丸長方形	1.53	1.35	0.23	2~7	緩斜	平坦	自然	8.76	IVA3a	屋外鹹水槽, 足掛け石1点, 第97号鹹水槽と重複
134	M3g ₁	N-31°-E	隅丸方形	1.53	1.46	1.14	1~8	緩斜	平坦	自然	9.88	VA3c	釜屋内鹹水槽, 第177号鹹水槽と重複
135	M3f ₂	N-19°-E	隅丸方形	1.55	1.40	0.90	-	緩斜	平坦	自然	9.86	VA3b	釜屋内鹹水槽, 足掛け石1点
177	M3g ₁	N-53°-W	隅丸方形	1.10	1.10	0.40	1~6	内彎	平坦	自然	9.20	VC2a	釜屋内鹹水槽, 第134号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、釜屋内鹹水槽と屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第9製塩跡(第53図)

位置 調査区の中央部 L3j₄区を中心に確認され、標高10.60m に位置している。

関連遺構 第19号竈、第100～102・104～106号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、屋外鹹水槽の長軸方向と配置の違いから、2グループに区別できる。第1グループは、第19号竈、釜屋内鹹水槽(100、



第53図 第9製塩跡遺構配置図

101) 及び屋外鹹水槽 (102, 104) で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、屋外鹹水槽 (105, 106) で構成されている。

第9製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3j ₄	10.60	19	100,101	—	102,104	—	新
2	L3j ₄	10.60	19	100,101	—	105,106	—	古

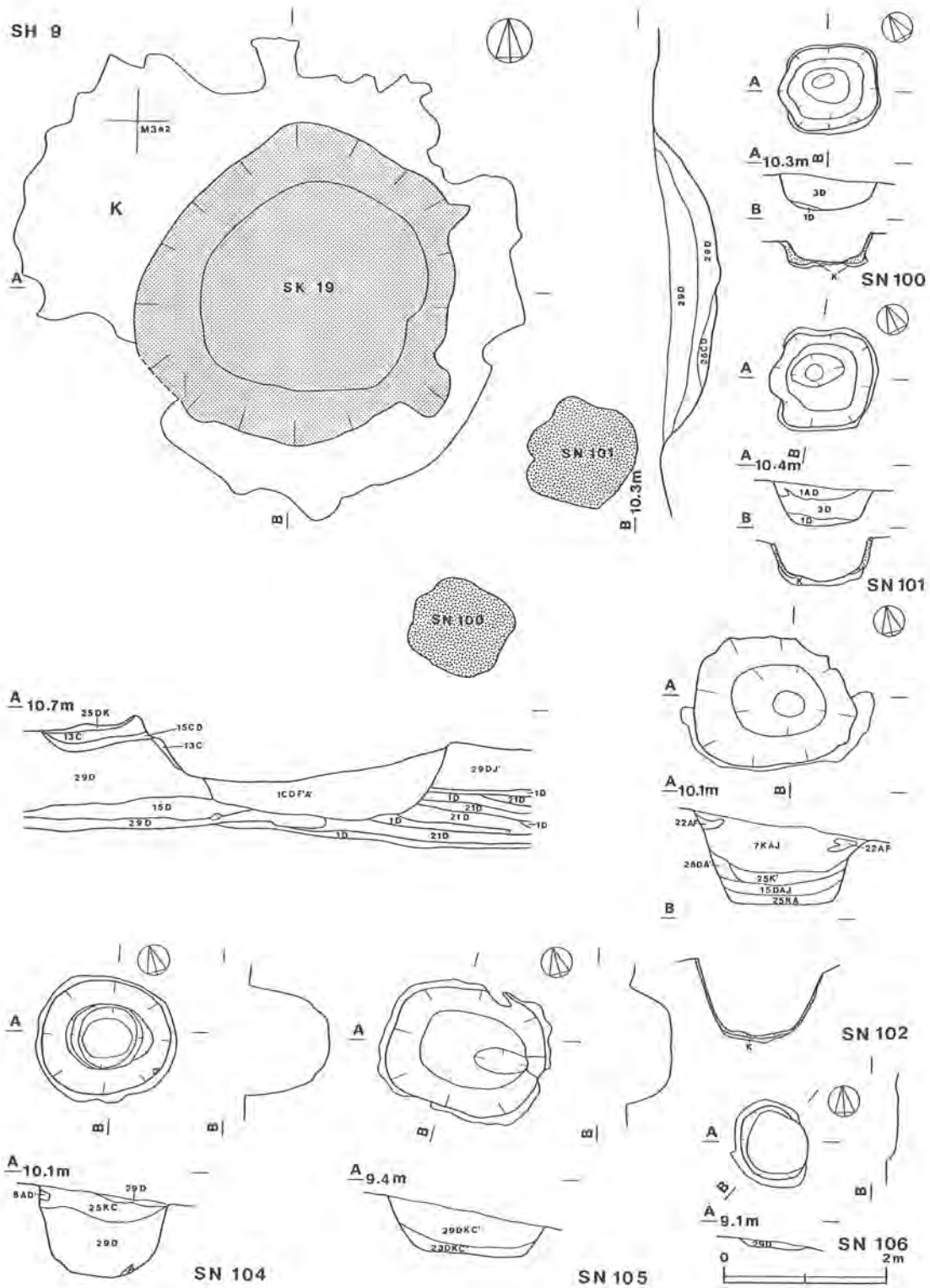
釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北4.50m、東西6.20mの不定形を呈している。砂上に10～25cm厚さの灰混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 M3a₂区を中心に1基(第19号竈)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸4.20m、短軸3.70m、深さ0.90mである。黒色土を10～70cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は砂混じりの灰が10～40cmの厚さで堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
19	M3a ₂	N-38°-E	隅丸長方形	4.20	3.70	0.90	自然	10.10		

釜屋内鹹水槽 M3b₃区から2基(第100・101号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.20・1.22m、短軸1.03・1.17m、深さ0.45・0.57mである。底面は平坦で、



第54図 第9製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

壁は内彎及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～11cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 M3a₄・a₅区・M3b₄区の3か所から4基（第102・104～106号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸（0.91）～2.03m，短軸（0.75）～1.62m，深さ（0.15）～1.22mである。底面は平坦で、壁は内彎及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3～12cmの粘土を貼って構築している。第106号鹹水槽は上層が削平されている。

鹹水槽一覧表

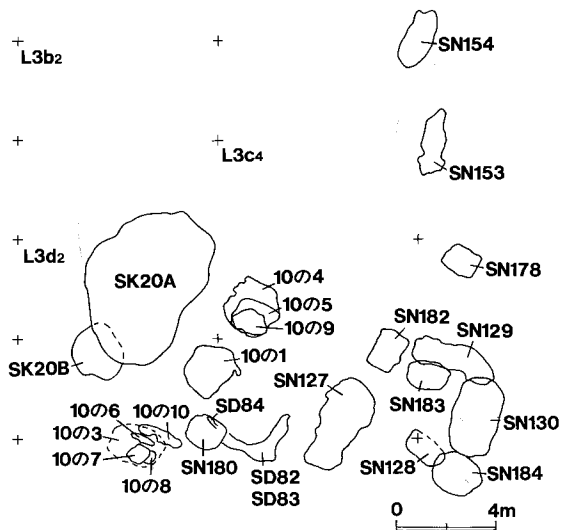
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
100	M3b ₃	N-58°-W	隅丸方形	1.20	1.03	0.45	3～11	内彎	平坦	自然	10.13	VC2a	釜屋内鹹水槽
101	M3b ₃	N-60°-W	隅丸方形	1.22	1.17	0.57	1～5	緩斜	平坦	自然	10.20	VA2b	釜屋内鹹水槽
102	M3b ₄	N-12°-E	隅丸長方形	2.03	1.62	1.22	3～5	緩斜	平坦	自然	9.87	IVA3c	屋外鹹水槽，足掛け石1点
104	M3a ₄	N-10°-E	隅丸長方形	1.60	1.45	1.18	4～12	内彎	平坦	自然	9.94	VC2c	屋外鹹水槽，足掛け石1点
105	M3a ₅	N-58°-W	隅丸長方形	1.55	1.45	0.78	3～10	緩斜	平坦	自然	9.22	VA2b	屋外鹹水槽
106	M3a ₅	N-21°-W	隅丸長方形	(0.91)	(0.75)	(0.15)	5～12	緩斜	平坦	自然	8.91	IVA1a	屋外鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが，2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は，屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから，第1グループが新しい。本製塩跡は，出土遺物がなく，その時期を明確にすることができなかった。

第10製塩跡（第55図）

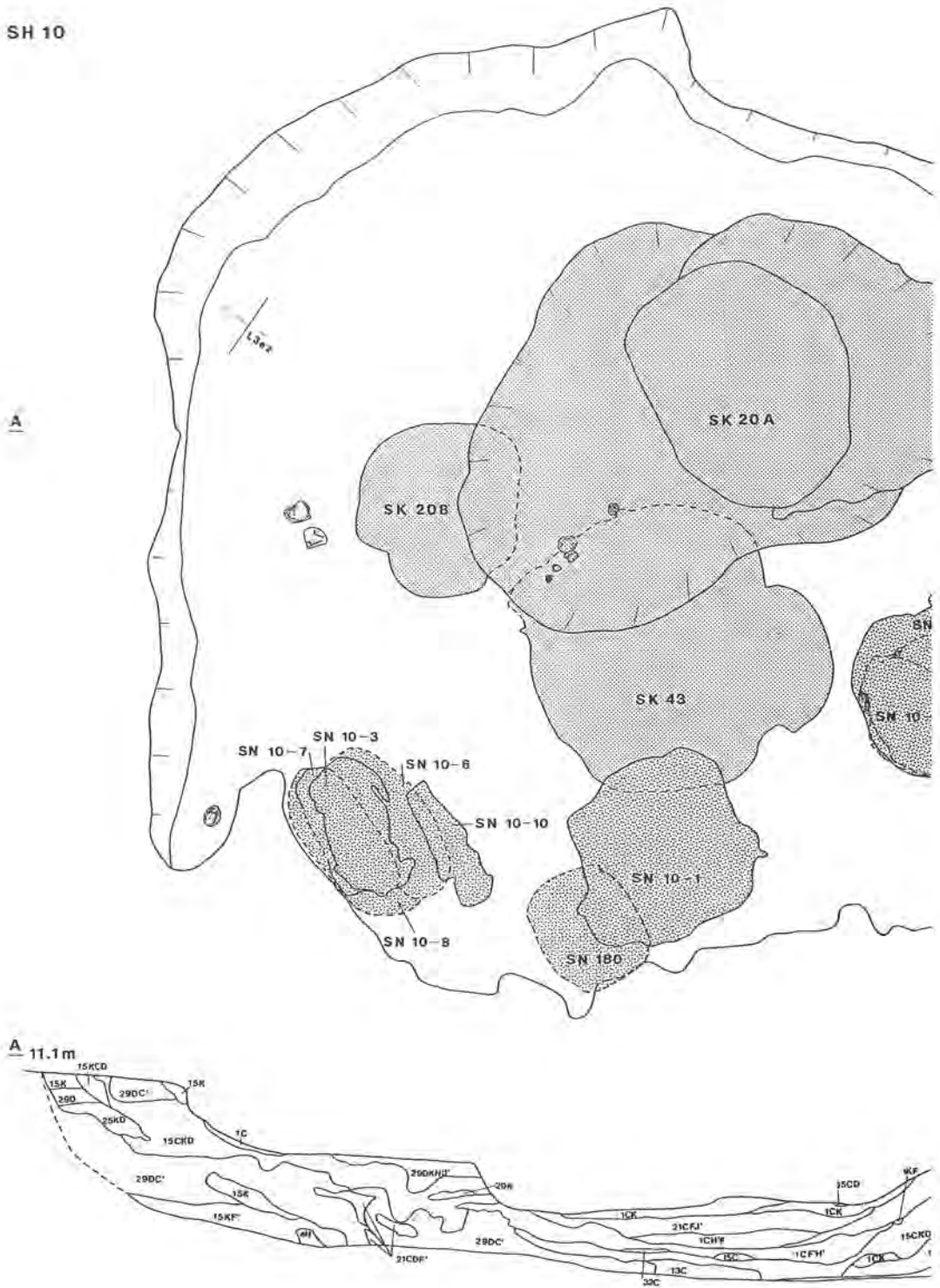
位置 調査区の中央部 L3c₄区を中心に確認され，標高10.50mに位置している。

関連遺構 第20(A・B)・43号竈，第10の1・10の3～10の10・127～130・153・154・178・180・182～184号鹹水槽及び第82～84号土樋で構成されている。これらの遺構は，竈と鹹水槽の重複関係や配置の違いから，3グループに区別できる。第1グループは，第20号竈A，釜屋内鹹水槽（10の1，10の4，10の5），居出場（10の3，10の10）及び屋外鹹水槽（127，154，182）で構成されている。第2グループは，第20号竈B，居出場（10の7，10の8），

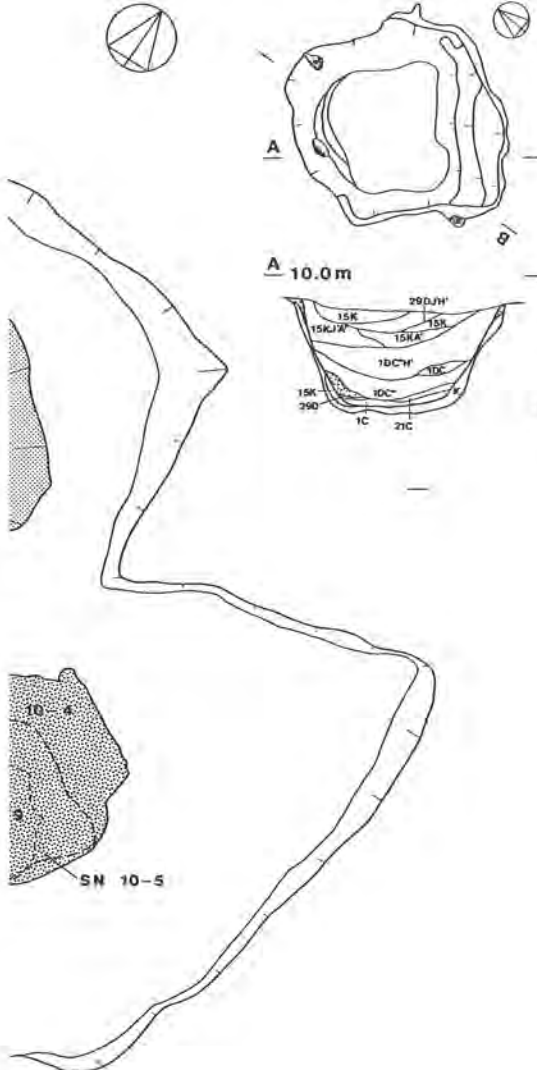


第55図 第10製塩跡遺構配置図

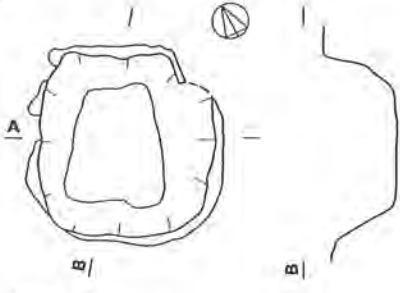
SH 10



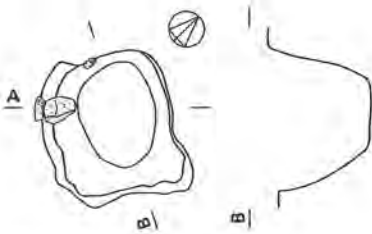
第56図 第10製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



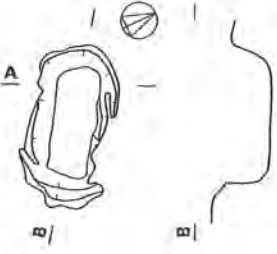
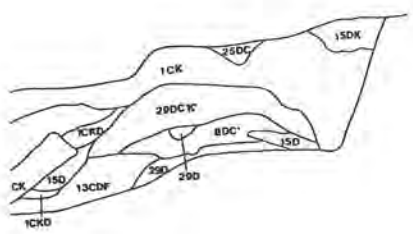
SN 10-1



SN 10-4



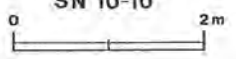
SN 10-5



SN 10-3



SN 10-10



屋外鹹水槽（130, 153）及び土樋（82, 83, 84）で構成されている。第3グループは、第43号竈、釜屋内鹹水槽（10の9, 180）、居出場（10の6）及び屋外鹹水槽（128, 129, 178, 183, 184）で構成されている。

第10製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3c ₄	10.50	20A	10の1,10の4,10の5	10の3,10の10	127,154,182	—	最新
2	L3c ₄	10.50	20B	—	10の7,10の8	130,153	82,83,84	第1グループより古い
3	L3c ₄	10.50	43	10の9,180	10の6	128,129,178,183,184	—	最古

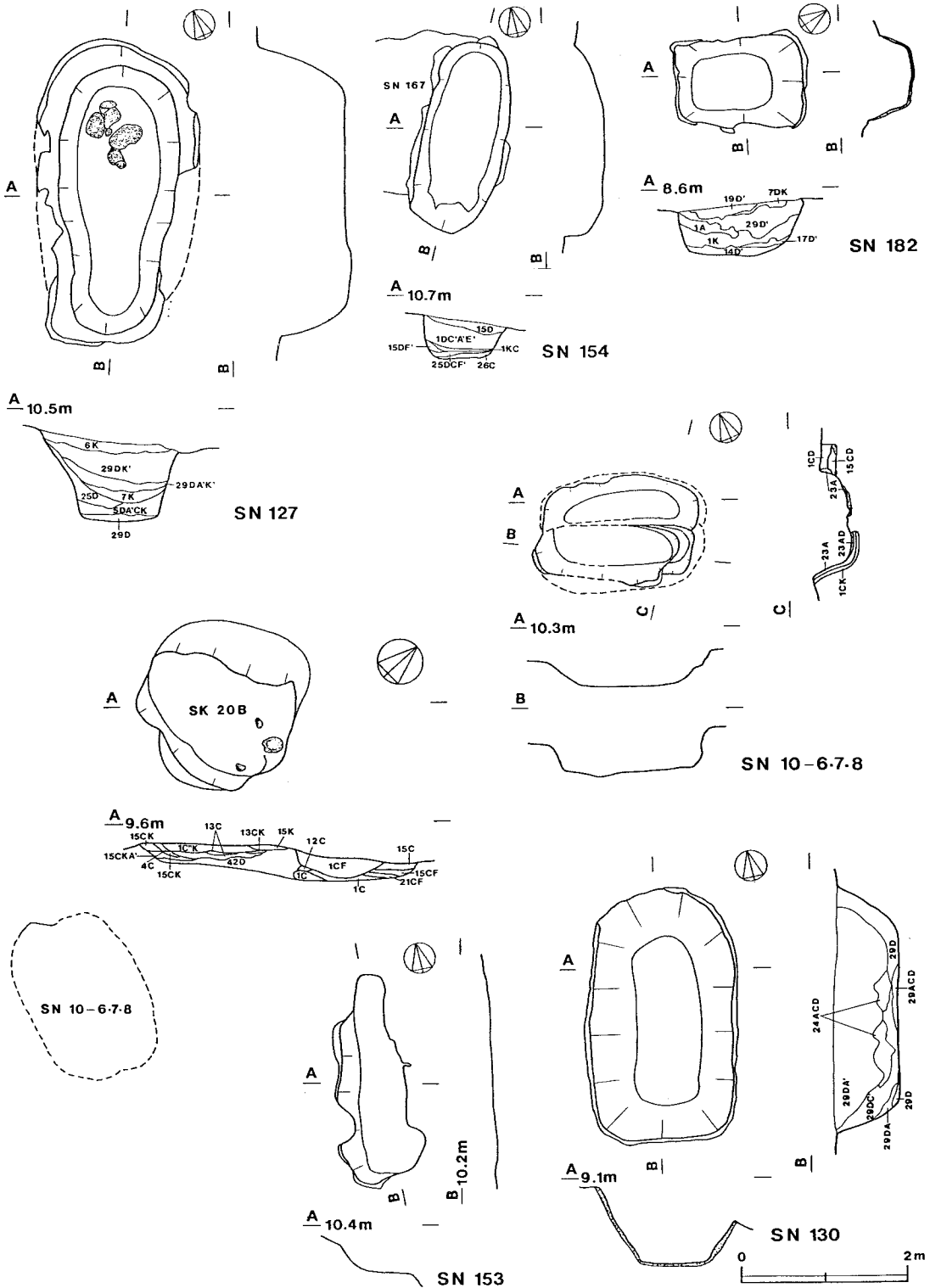
釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.00m、東西11.60mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～90cmの灰、炭化物及び貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部と北側に竈3基、東側に鹹水槽5基、南側に居出場4基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。釜屋の周囲は底面から20～30cmの高さで土手が築かれている。

竈 L3d₃区・L3e₂・e₃区の3か所から3基（第20号竈A・B、第43号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.80～3.80m、短径2.60～3.50m、深さ0.40～0.80mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～30cmの厚さで堆積している。第43号竈の周辺には多量の焼石が出土しており、底面から凝灰岩が出土している。三つの竈の新旧関係は、確認面での標高の違いから、第20号竈Aが最も新しく、次いで第20号竈B、第43号竈と順に古くなる。

竈一覧表

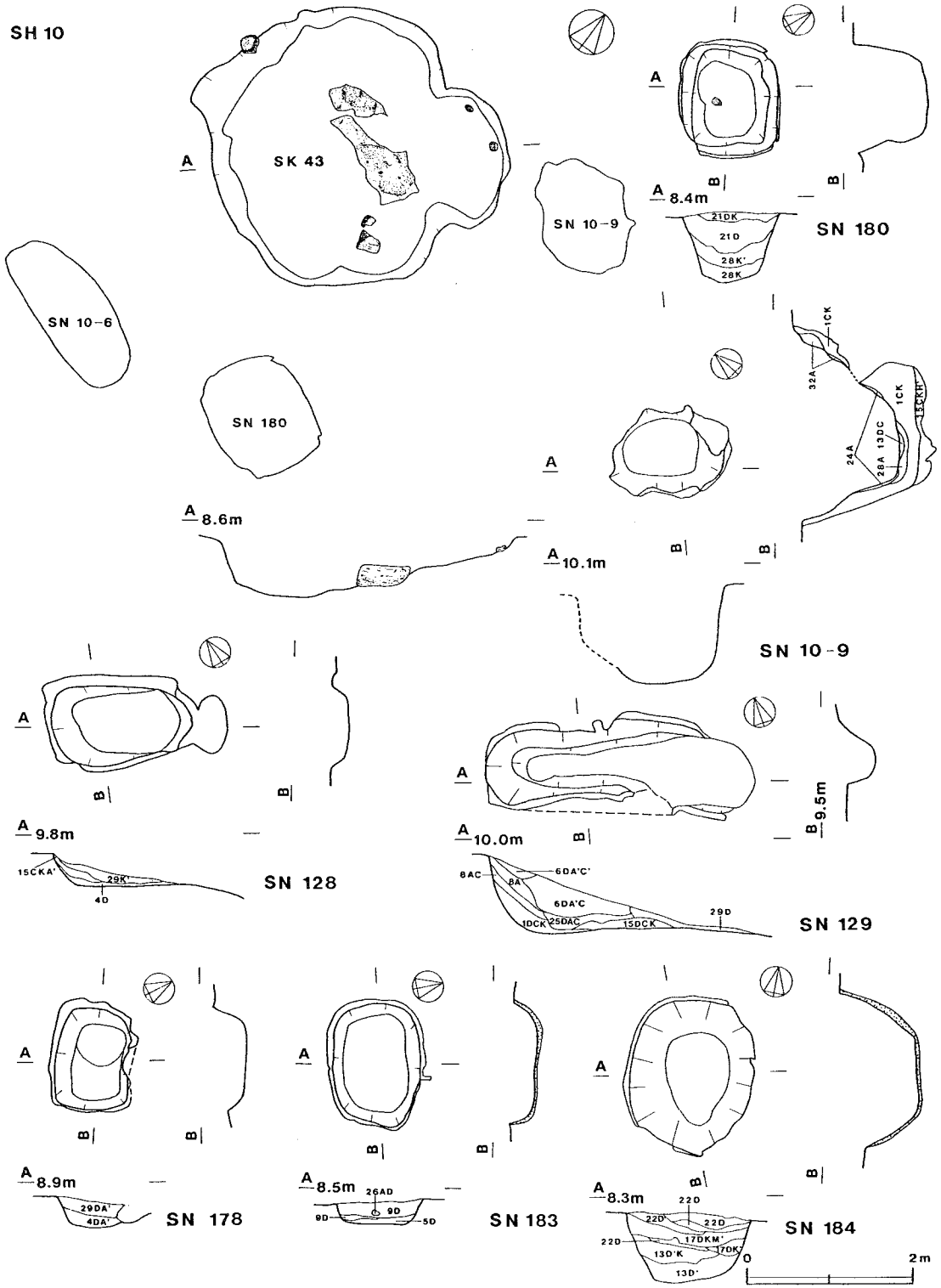
竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
20A	L3d ₃	N-53°-E	楕円形	3.80	3.50	0.65	自然	9.40		
20B	L3e ₂	N-60°-E	楕円形	2.80	2.60	0.40	自然	9.30		
43	L3e ₃	N-46°-W	楕円形	3.45	3.00	0.80	自然	8.50	竈周辺から焼石が出土している。	

釜屋内鹹水槽 L3d₄区とL3e₃区から5基（第10の1・10の4・10の5・10の9・180号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸方形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.49～2.40m、短軸1.10～2.10m、深さ0.80～1.20mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。L3d₄区で第10の4・10の5・10の9が、L3e₃区で第10の1・10の6・10の10・180号鹹水槽が互いに重複している。



第57図 第10製塩跡鹹水槽実測図

SH 10



第58图 第10製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

居出場 L3e₃区とL3f₃区から5基(第10の3・10の6・10の7・10の8・10の10号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.60~2.00m、短軸[径]0.60~(0.82)m、深さ0.23~0.60mである。底面は平坦で、壁は内彎及び外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3~7cmの粘土を貼って構築している。L3f₃区で第10の3・10の7・10の8号鹹水槽が重複している。

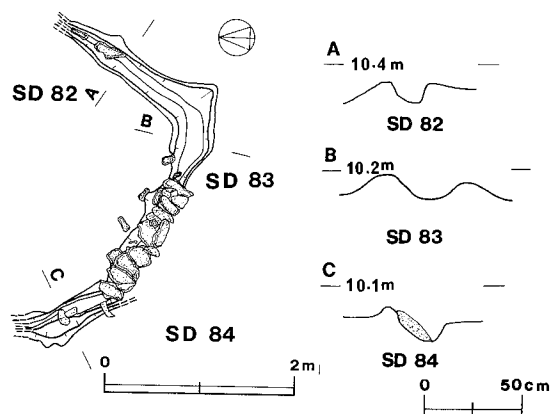
屋外鹹水槽 L3a₆区・L3c₆区・L3d₆区・L3e₅・e₆区・L3f₆区の6か所から10基(第127~130・153・154・178・182~184号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.30~3.70m、短軸(0.85)~1.90m、深さ0.31~1.13mである。底面は平坦で、壁は内彎及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~12cmの粘土を貼って構築している。L3e₅区で第127・182号鹹水槽が、L3e₆区で第129・130・183号鹹水槽が、

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
10の1	L3e ₃	N-30°-E	隅丸長方形	2.14	1.94	1.20	2~5	外傾	平坦	自然	9.70	VA2c	釜屋内鹹水槽、㊸焼石3点、第10の6・10の10・180号鹹水槽と重複。第82~84号土層と連続
10の3	L3f ₃	N-60°-W	隅丸長方形	1.61	(0.82)	0.60	5	外傾	平坦	自然	9.20	IVA2b	居出場、第10の7・10の8号鹹水槽と重複
10の4	L3d ₄	N-30°-E	隅丸長方形	1.88	1.86	0.80	4~9	外傾	平坦	自然	9.90	VA2b	釜屋内鹹水槽、㊸焼石5点、第10の5・10の9号鹹水槽と重複
10の5	L3d ₄	N-45°-W	隅丸長方形	2.40	2.10	1.03	5~10	外傾	平坦	自然	9.90	IVA3c	釜屋内鹹水槽、㊸石3点、第10の4・10の9号鹹水槽と重複
10の6	L3e ₃	N-67°-W	楕円形	2.00	(0.80)	0.28	5	内彎	平坦	自然	9.80	1C3a	居出場、第10の1・10の10・180号鹹水槽と重複
10の7	L3f ₃	N-62°-W	楕円形	1.80	(0.80)	0.51	3~7	外傾	平坦	自然	10.00	1A2b	居出場、第10の3・10の8号鹹水槽と重複
10の8	L3f ₃	N-70°-W	楕円形	1.92	0.70	0.23	5	外傾	平坦	自然	10.10	1A2a	居出場、第10の3・10の7号鹹水槽と重複
10の9	L3d ₄	N-48°-W	隅丸長方形	1.50	1.10	1.00	2~5	緩斜	平坦	自然	9.80	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第10の4・10の5号鹹水槽と重複
10の10	L3e ₃	N-65°-W	楕円形	1.60	0.60	0.23	5	外傾	平坦	自然	10.00	1A2a	居出場、第10の1・10の6・180号鹹水槽と重複
127	L3e ₅	N-27°-E	隅丸長方形	3.70	1.90	1.13	1~4	緩斜	平坦	自然	10.17	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石10点、第182号鹹水槽と重複
128	L3f ₆	N-61°-W	隅丸長方形	1.70	1.00	0.41	2~12	緩斜	平坦	自然	9.50	IVA2a	屋外鹹水槽、第184号鹹水槽と重複
129	L3e ₆	N-72°-W	隅丸長方形	3.33	(0.90)	0.94	2~9	内彎	平坦	自然	9.33	IVC4b	屋外鹹水槽、第130・183号鹹水槽と重複
130	L3e ₆	N-16°-E	隅丸長方形	3.10	1.71	0.91	1~10	緩斜	平坦	自然	9.00	IVA4b	屋外鹹水槽、㊸管状土層1点、第129・183号鹹水槽と重複
153	L3c ₆	N-13°-E	隅丸長方形	(2.48)	(1.04)	0.38	3~7	緩斜	平坦	自然	9.94	IVA3a	屋外鹹水槽
154	L3a ₆	N-28°-E	隅丸長方形	2.40	(0.85)	0.54	4~9	緩斜	平坦	自然	10.47	IVA3b	屋外鹹水槽
178	L3d ₆	N-51°-W	隅丸長方形	1.30	0.90	0.36	2~12	緩斜	平坦	自然	8.70	IVA2a	屋外鹹水槽
180	L3e ₆	N-56°-W	隅丸長方形	1.49	1.23	0.86	2~8	緩斜	平坦	自然	8.50	IVA2b	釜屋内鹹水槽、底面一石1点、第10の1・10の6・10の10号鹹水槽と重複
182	L3e ₆	N-37°-E	隅丸長方形	1.50	1.10	0.64	1~5	緩斜	平坦	自然	8.40	IVA2b	屋外鹹水槽、第127号鹹水槽と重複
183	L3e ₆	N-73°-W	隅丸長方形	1.50	1.10	0.31	2~7	緩斜	平坦	自然	8.40	IVA2a	屋外鹹水槽、第129・130号鹹水槽と重複
184	L3f ₆	N-57°-W	隅丸長方形	1.90	1.50	0.76	1~7	緩斜	平坦	自然	8.10	IVA2b	屋外鹹水槽、第128号鹹水槽と重複

L3f₆区で第128・184号鹹水槽が互いに重複している。

土樋 L3e₃区からL3f₄区を中心として3条(第82～84号土樋)検出され、全長が最も短いものは0.90mで、最も長いものは3.40mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅22～32cm、下幅10～17cm、深さ9～10cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を4～10cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。さらに、3条の土樋は、いずれも釜屋内の第1号鹹水槽と連結している。



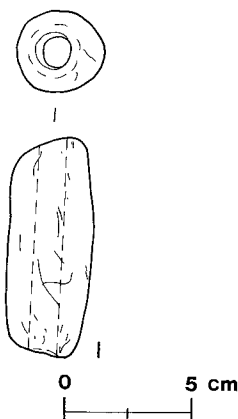
第59図 第10製塩跡土樋実測図

土樋一覧表

土樋番号	位置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高 (m)	備 考
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
82	L3e ₃ ~ L3f ₄	N-62°-W	3.40	22	17	10	4	U	自然	無	10.04 ~ 10.10	第83号土樋と接続, 第10の1号鹹水槽と連結
83	L3f ₄	N-26°-E	1.80	32	10	10	4~10	U	自然	無	10.10 ~ 10.31	第82・84号土樋と接続, 第10の1号鹹水槽と連結
84	L3e ₃	N-30°-W	0.90	23	17	9	4~10	U	自然	有	9.94 ~ 9.98	第83号土樋と接続, 第10の1号鹹水槽と連結

出土遺物 第130号鹹水槽の覆土中から管状土錘1点(第60図1)が出土している。周囲からの流れ込みと思われる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、竈と鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第130号鹹水槽から管状土錘が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。



第60図 第10製塩跡出土遺物実測図

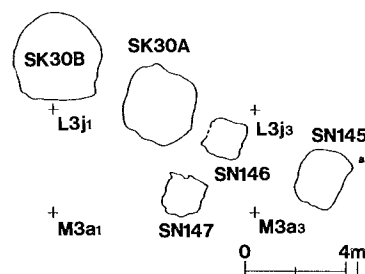
第130号鹹水槽出土遺物土製品一覧表 (第60図1)

図版番号	名 称	法 量					出土地点	備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔 径 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)		
1	管状土錘	8.8	3.4	1.5	1.9	102.3	第130号鹹水槽	DP1

第11製塩跡（第61図）

位置 調査区の中央部 L3i₃区を中心に確認され、標高9.40mに位置する。

関連遺構 第30号竈（A・B）、第145・146・147号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、第30号竈がAとBで重複していることから、2グループに区別できる。第1グループは、第30号竈A、釜屋内鹹水槽（146、147）及び屋外鹹水槽（145）で構成されている。第2グループは、釜屋内鹹水槽と屋外鹹水槽が第1グループと同一で、第30号竈Bで構成されている。



第61図 第11製塩跡遺構配置図

第11製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3i ₃	9.40	30A	146,147	—	145	—	新
2	L3i ₃	9.40	30B	146,147	—	145	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北7.40m、東西7.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～70cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部と北西側に竈1基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

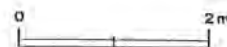
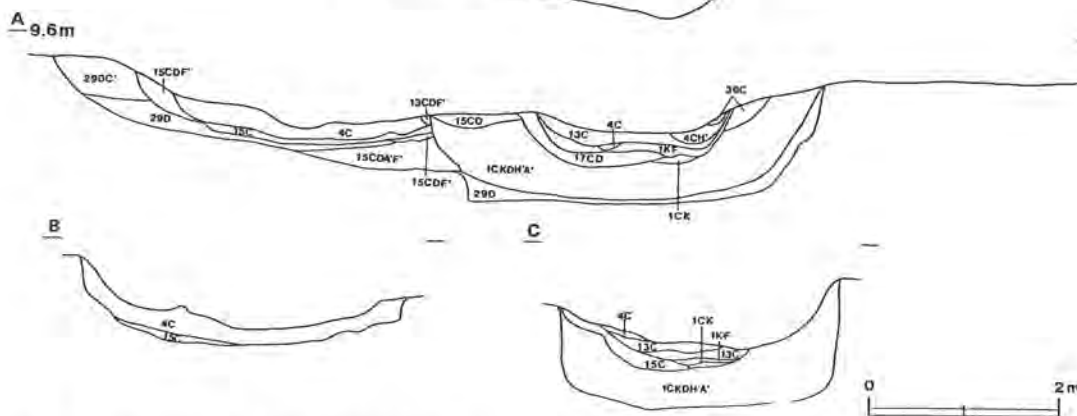
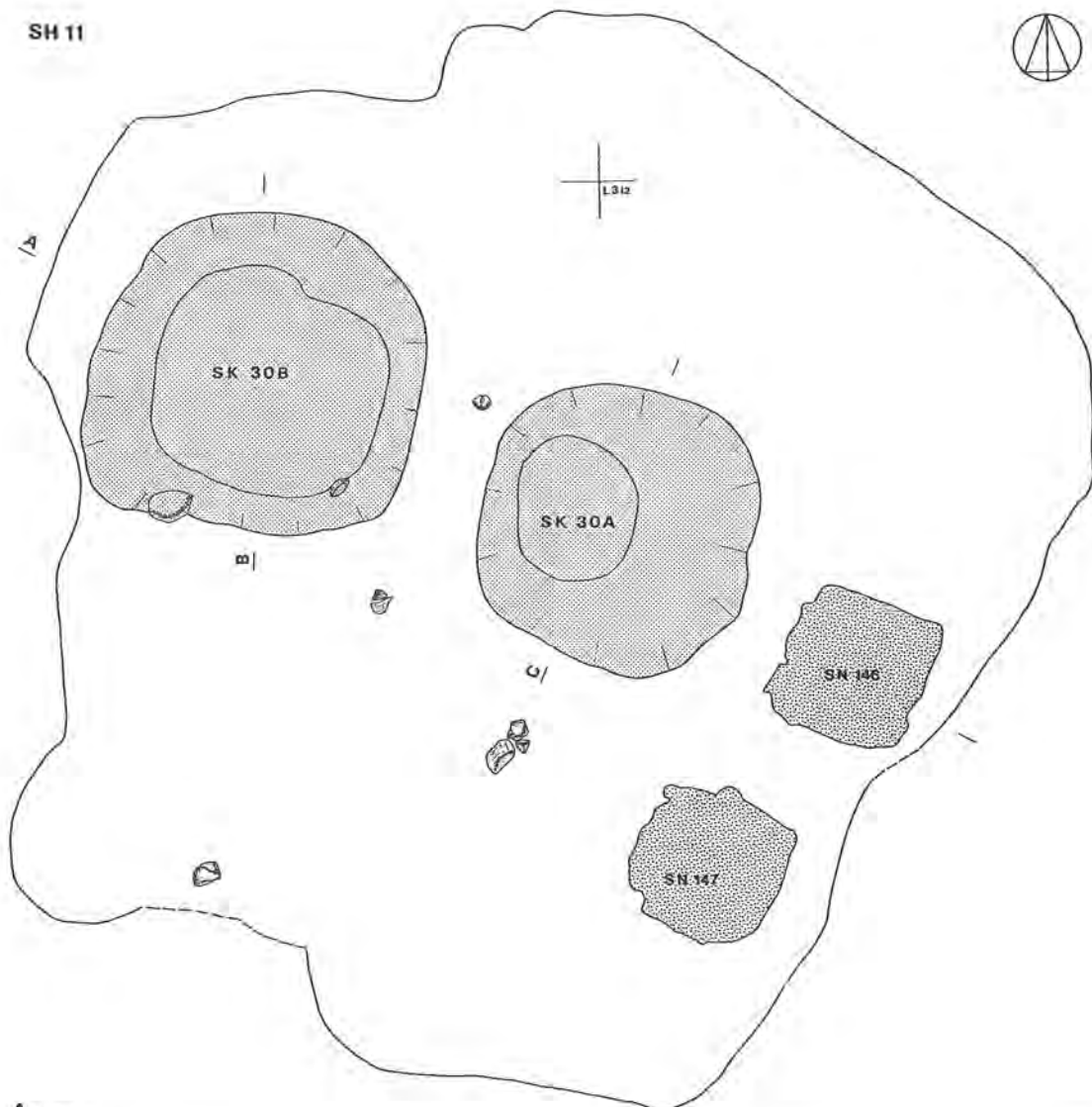
竈 L3i₁区を中心に2基(第30号竈A・B)検出され、平面形は、楕円形と隅丸方形を呈している。規模は、長軸〔径〕2.80・3.60m、短軸〔径〕2.20・3.40m、深さ0.86・0.90mである。黒色土を10～110cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだ砂が自然堆積し、下層は灰が10～45cmの厚さで堆積している。二つの竈の新旧関係は、土層から第30号竈Aが第30号竈Bを掘り込んでいるので、第30号竈Aが新しい。

竈一覧表

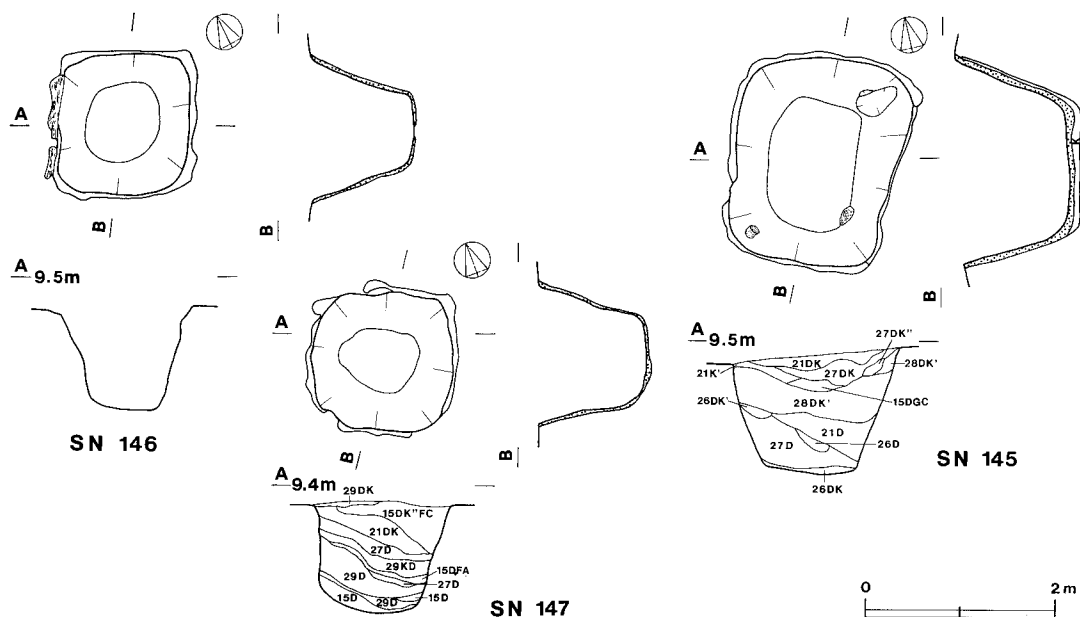
竈番号	位置	長軸方向〔長径〕	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)〔径〕	短軸(m)〔径〕	深さ(m)				
30A	L3i ₁	N-22°-E	楕円形	2.80	2.20	0.86	自然	9.10		
30B	L3i ₁	N-46°-W	隅丸方形	3.60	3.40	0.90	自然	9.40		

釜屋内鹹水槽 L3j₂区から2基(第146・147号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.50・1.53m、短軸1.40・1.51m、深さ1.07mである。底面は平坦で、壁は緩や

SH 11



第62図 第11製塩跡釜屋内遺構実測図



第63図 第11製塩跡鹹水槽実測図

かに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～20cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 L3j₃区から1基(第145号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.18m、短軸1.77m、深さ1.19mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

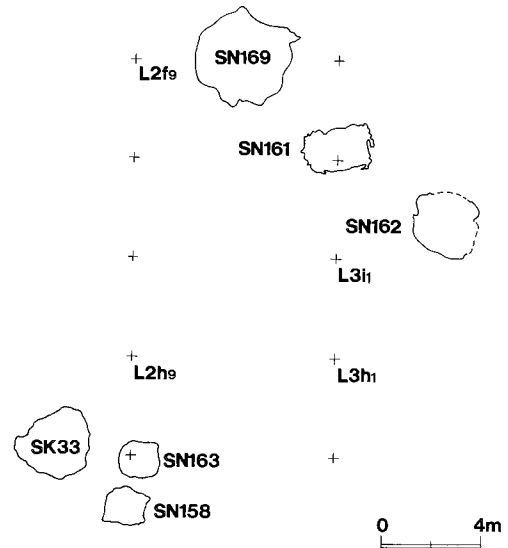
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
145	L3j ₃	N-23°-E	隅丸長方形	2.18	1.77	1.19	2～10	緩斜	平坦	自然	9.36	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石1点
146	L3j ₂	N-29°-E	隅丸方形	1.50	1.40	1.07	1～20	緩斜	平坦	自然	9.25	VA2c	釜屋内鹹水槽
147	L3j ₂	N-28°-E	隅丸方形	1.53	1.51	1.07	1～6	緩斜	平坦	自然	9.20	VA2c	釜屋内鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、二つの竈の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第12製塩跡（第64図）

位置 調査区の中央部 L2h₉区を中心に確認され、標高9.50m に位置している。

関連遺構 第33号竈，第158・161～163・169号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，屋外鹹水槽の長軸方向と配置の違いから，2グループに区別できる。第1グループは，第33号竈，釜屋内鹹水槽（158，163）及び屋外鹹水槽（162，169）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（161）で構成されている。



第64図 第12製塩跡遺構配置図

第12製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L2h ₉	9.50	33	158,163	—	162,169	—	新
2	L2h ₉	9.50	33	158,163	—	161	—	古

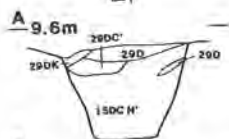
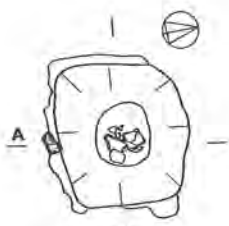
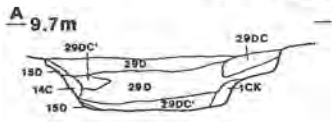
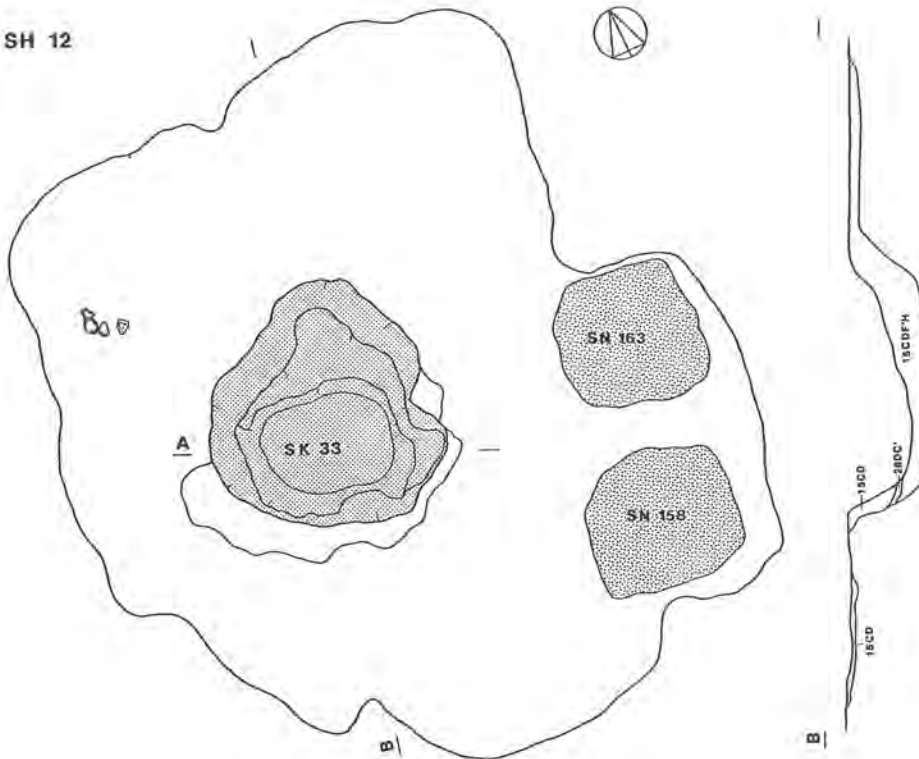
釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北7.80m，東西7.00m の不定形を呈している。砂上に厚さ10～40cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 L2i₇区を中心に1基(第33号竈)検出され，平面形は，不定形を呈している。規模は，長軸3.00m，短軸2.50m，深さ0.60mである。黒色土を10～50cmの厚さで鍋状に貼って構築しており，覆土は，上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，下層は砂混じりの灰が自然堆積している。

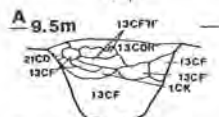
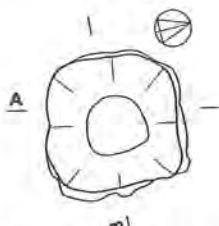
竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
33	L2i ₇	N-22°-E	不定形	3.00	2.50	0.60	自然	9.40		

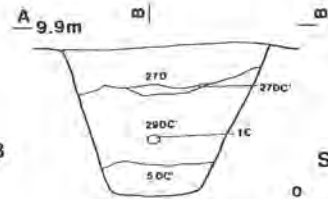
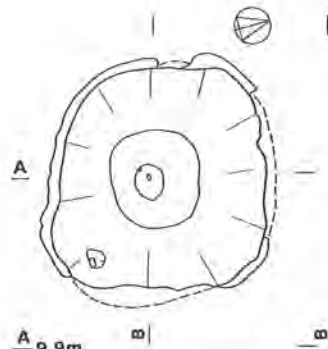
SH 12



SN 158



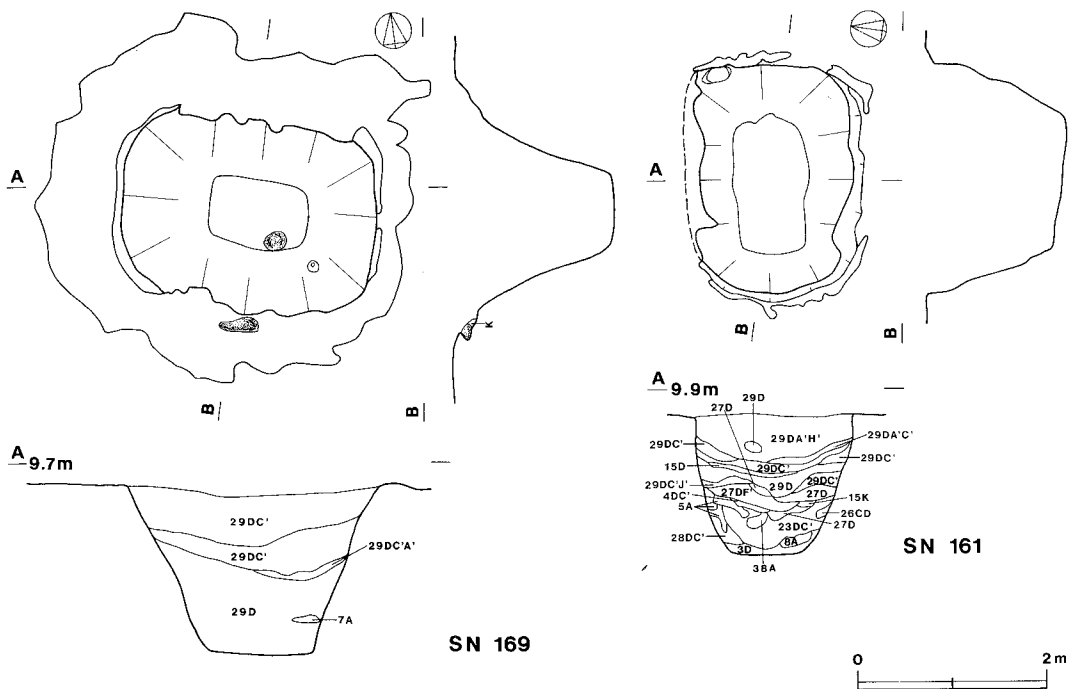
SN 163



SN 162



第65図 第12製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



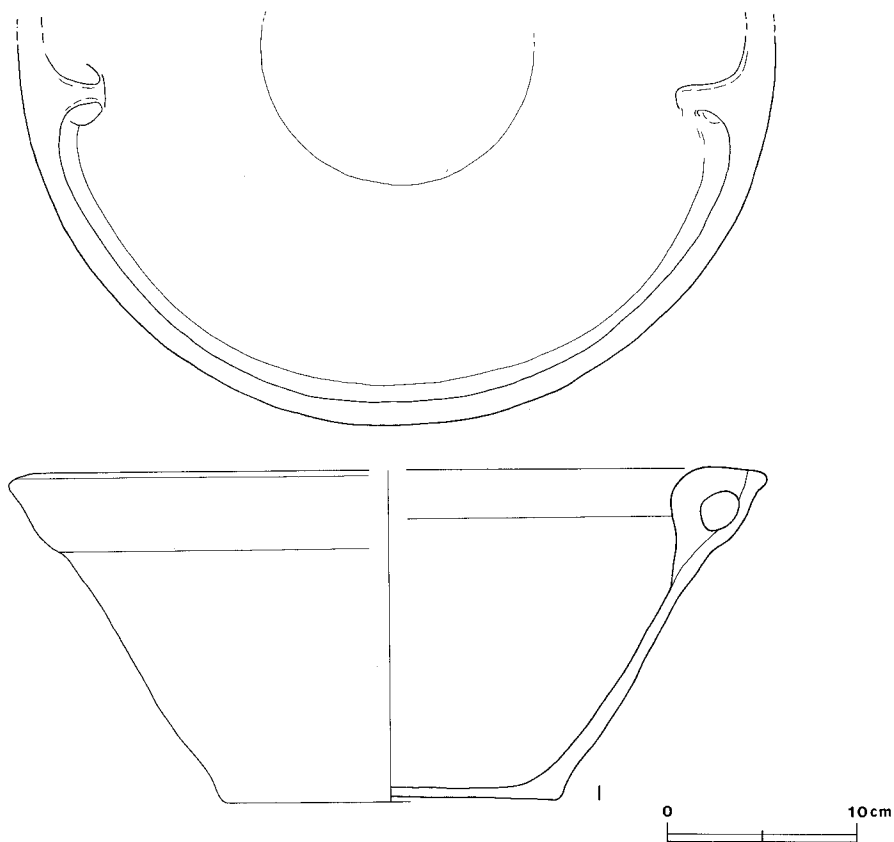
第66図 第12製塩跡鹹水槽実測図

釜屋内鹹水槽 L2j_s区を中心に2基(第158・163号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.50・1.41m、短軸1.43・1.40m、深さ1.00・0.93mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 L2f_o区とL3g₁区から3基(第161・162・169号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、隅丸方形及び楕円形を呈している。規模は、長軸[径]2.35～2.70m、短軸[径]1.50～2.34m、深さ1.54～1.72mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～17cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
158	L2j _s	N-7°-E	隅丸方形	1.50	1.43	1.00	1～4	緩斜	平坦	自然	9.38	VA2c	釜屋内鹹水槽、底面一内耳形土器片6点、石10点
161	L2f _o	N-78°-E	隅丸長方形	2.50	1.50	1.54	2～7	緩斜	平坦	自然	9.64	IVA2d	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
162	L3g ₁	N-72°-W	隅丸方形	2.35	2.34	1.68	1～16	緩斜	平坦	自然	9.80	VA3c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
163	L2j _s	N-12°-E	隅丸方形	1.41	1.40	0.93	2～10	緩斜	平坦	自然	9.33	VA2b	釜屋内鹹水槽
169	L2f _o	N-72°-W	楕円形	2.70	2.10	1.72	6～17	外傾	平坦	自然	9.50	IA3d	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石1点、石1点



第67図 第12製塩跡出土遺物実測図

第158号鹹水槽出土土器観察表（第67図1）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	内耳形土器 土師質土器	A [40.0] B 17.2 C 17.4	平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。頸部内面に幅広い浅い凹線が巡る。耳は2か所残存。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部下端から底部外面にかけてヘラナデ。耳は接合。	砂粒・雲母・スコリア・長石・石英・パミス 黒色 普通	P6 40% 外面に納墨付着 第158号鹹水槽覆土

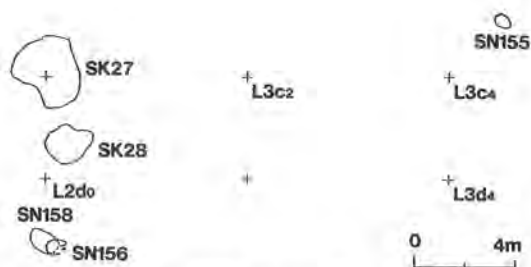
出土遺物 第158号鹹水槽の底面から内耳形土器片6点が出土し、接合したら第67図1になった。周囲から流れ込んだものと思われる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第158号鹹水槽から15世紀頃の内耳形土器が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることができなかった。

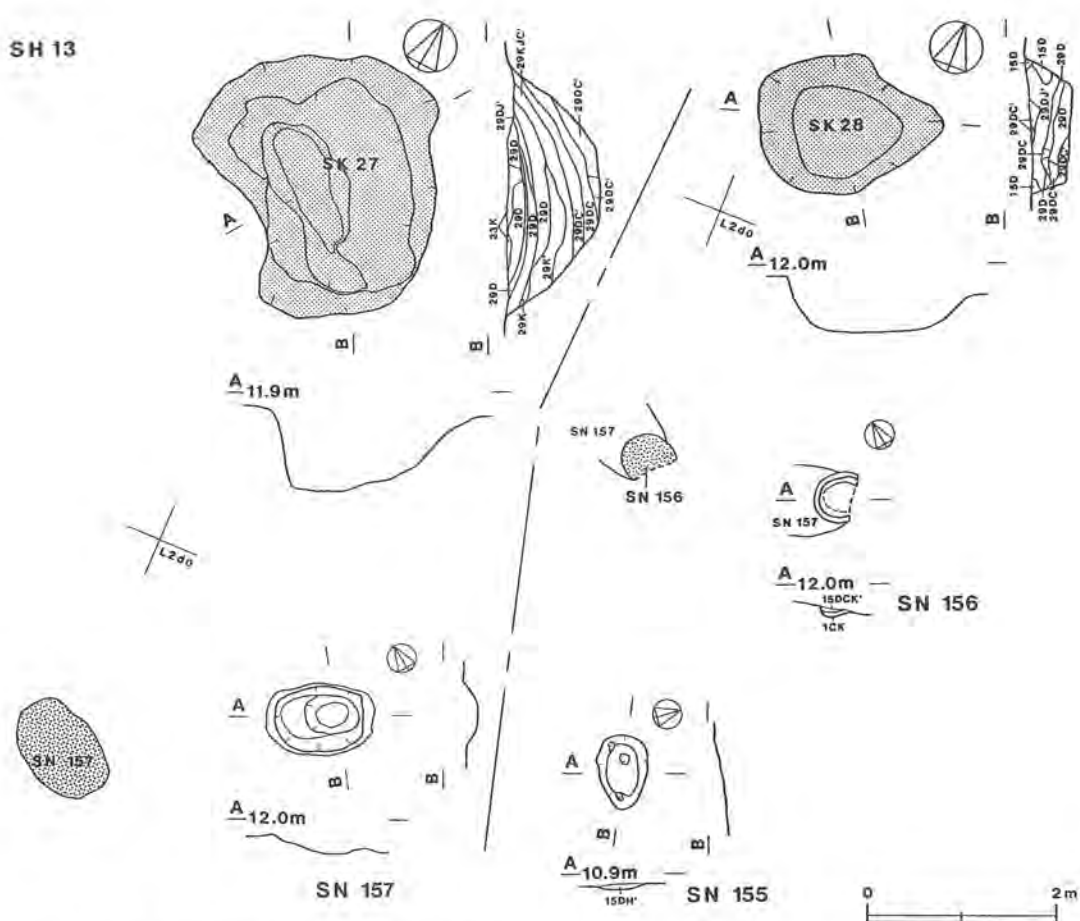
第13製塩跡 (第68図)

位置 調査区の中央部 L3b₂区を中心に検出され、標高11.80mに位置している。

関連遺構 第27・28号竈、第155～157号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と居出場の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第28号竈と居出場(156)で構成されている。第2グループは、第27号竈、居出場(157)及び屋外鹹水槽(155)で構成されている。



第68図 第13製塩跡遺構配置図



第69図 第13製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

第13製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3b ₂	11.80	28	—	156	—	—	新
2	L3b ₂	11.80	27	—	157	155	—	古

竈 L2b₀区とL2c₀区から2基(第27・28号竈)検出され、平面形は、不定形を呈している。規模は、長軸2.80・1.90m、短軸2.20・1.44m、深さ0.85・0.44mである。断面形は両方とも鍋状を呈している。標高からの新旧関係では、第27号竈が第28号竈より10cm低いので、第27号竈が古い。

竈一覧表

竈番号	位 置	長軸方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
27	L2b ₀	N-40°-W	不定形	2.80	2.20	0.85	自然	11.70		
28	L2c ₀	N-50°-E	不定形	1.90	1.44	0.44	自然	11.80		

居出場 L2d₀区から2基(第156・157号鹹水槽)検出され、平面形は、第157号鹹水槽は隅丸長方形を呈するが、第156号鹹水槽はほとんど削平されているため、平面形は不明である。規模は、長軸(0.45)・1.04m、短軸(0.34)・0.68m、深さ(0.11)・0.21mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。二つの竈の新旧関係は、第156号鹹水槽の下から第157号鹹水槽を検出したことから、第156号鹹水槽が新しい。

屋外鹹水槽 L3b₄区から1基(第155号鹹水槽)検出され、平面形は、ほとんど削平されているため不明である。規模は、確認できた部分は長軸(0.80)m、短軸(0.55)mで、深さ(0.07)mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。居出場と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ7～10cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
155	L3b ₄	N-75°-W	不 明	(0.80)	(0.55)	(0.07)	7～10	外傾	平坦	自然	10.83	VIA1a	屋外鹹水槽、底面一石3点
156	L2d ₀	N-46°-E	不 明	(0.45)	(0.34)	(0.11)	5～6	緩斜	平坦	自然	11.80	VIA1a	居出場、東前半崩落、第157号鹹水槽と重複
157	L2d ₀	N-59°-W	隅丸長方形	1.04	0.68	0.21	2～10	外傾	平坦	自然	11.80	VA2a	居出場、第156号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈と居出場の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第14製塩跡（第70図）

位置 調査区の中央部 N4g₅区を中心に確認され、標高6.40m に位置している。

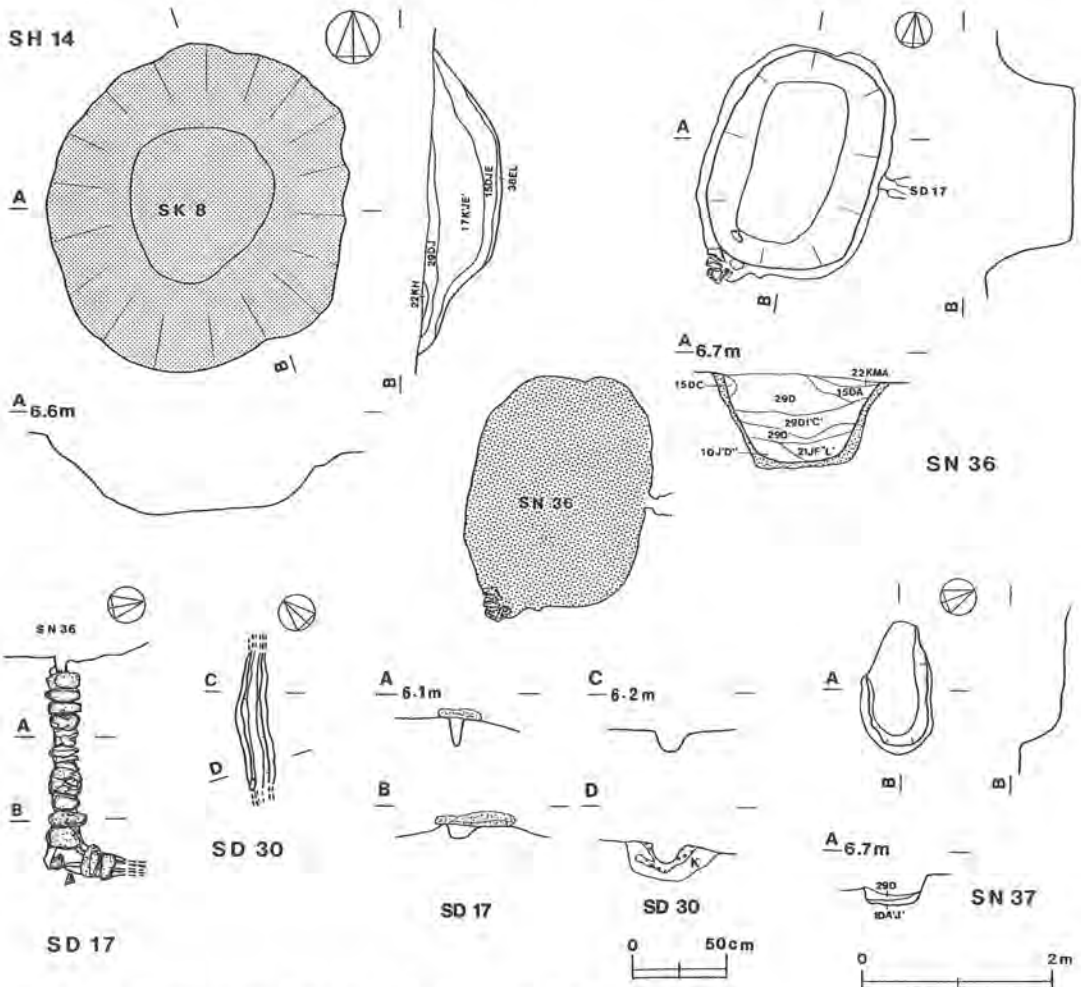
関連遺構 第8号竈，釜屋内の第36・37号鹹水槽及び第17・30号土樋で構成されている。

第14製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N4g ₅	6.40	8	36	37	—	17,30	—

釜屋 釜屋内の竈や鹹水槽は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 N4g₄区を中心に1基（第8号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.46m，短径3.10m，深さ0.66mである。黒色土を10～20cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、



第70図 第14製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・土樋実測図

覆土は、上層から中層にかけて、周辺から流れ込んだと思われる加熱を受けた貝殻片や焼砂を含む黒色土砂が自然堆積している。火床直下の砂は長期間火熱を受けたために赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
8	N4g ₄	N-14°-E	楕円形	3.46	3.10	0.66	自然	6.40		

釜屋内鹹水槽 N4g₅区から1基(第36号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.32m、短軸1.65m、深さ0.93mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ5～13cmの粘土を貼って構築している。

居出場 N4g₄区から1基(第37号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.32)m、短軸0.64m、深さ0.54mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
36	N4g ₅	N-14°-E	隅丸長方形	2.32	1.65	0.93	5～13	外傾	平坦	自然	6.49	IVA3b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、第17号土樋と連結
37	N4g ₄	(N-73°-W)	隅丸長方形	(1.32)	0.64	0.54	2～10	外傾	平坦	自然	6.42	IVA2b	居出場

土樋 N4g₅～g₆区とN4f₆区から2条(第17・30号土樋)検出され、長さ3.00・1.80m、上幅24・21cm、下幅8・13cm、深さ16・9cmで、断面形は「U」字形を呈している。第17号土樋は、第36号鹹水槽と連結している。

土樋一覧表

土樋番号	位置	主軸方向	規模				粘土の厚さ(cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高(m)	備考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
17	N4g ₅ ～N4g ₆	N-85°-W	3.00	24	8	16	4～6	U	自然	有	6.34～6.40	第36号鹹水槽と連結
30	N4f ₆	N-41°-E	1.80	21	13	9	4～6	U	自然	無	6.02	

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈、鹹水槽及び土樋の関連状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第15製塩跡（第71図）

位置 調査区の中央部 M5a₁区を中心に確認され、標高4.10m に位置している。

関連遺構 第24号竈と釜屋内の第15の1号鹹水槽で構成されている。

第15製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	M5a ₁	4.10	24	15の1	-	-	-	-

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.00m、東西9.00mの楕円形を呈し、長径方向はN-4°-Eを指している。砂上に厚さ10~30cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 L5j₁区を中心に1基(第24号竈)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸3.00m、短軸2.90m、深さ1.00mである。黒色土を10cmの厚さで鍋状に貼り、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長軸方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
24	L5j ₁	N-6°-E	隅丸方形	3.00	2.90	1.00	自然	4.10	陶器(片口鉢)1点、磁器(徳利)1点、鉄製品(鉄鍋片)1点、舟釘1点、砥石1点	

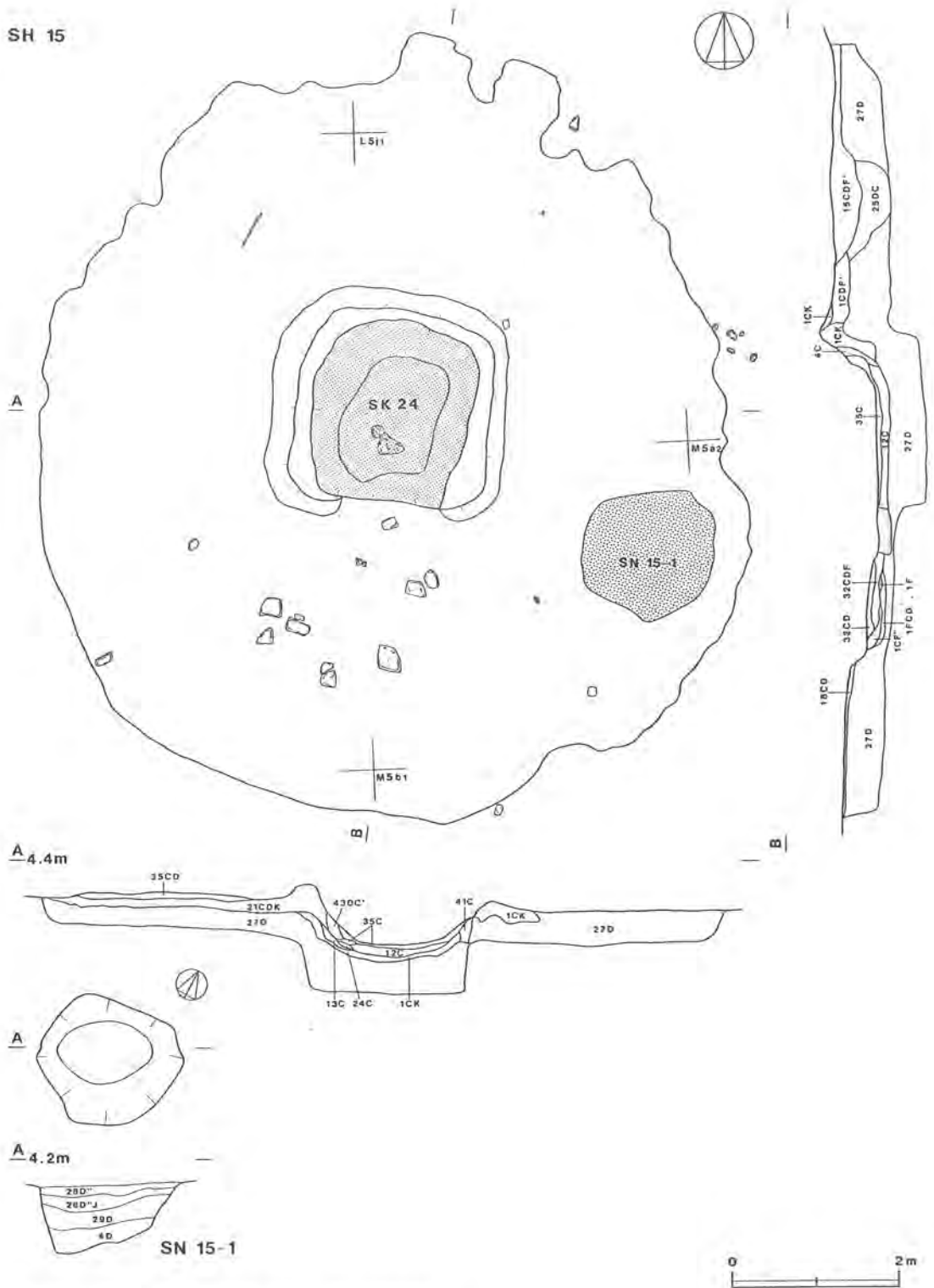
釜屋内鹹水槽 M5a₁区から1基(第15の1号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径1.80m、短径1.50m、深さ1.20mである。厚さ12cmの木枠で構築されたが、木枠は一部分を残し腐食している。底面は平坦で、確認できた壁は垂直に立ち上がっている。

鹹水槽一覧表

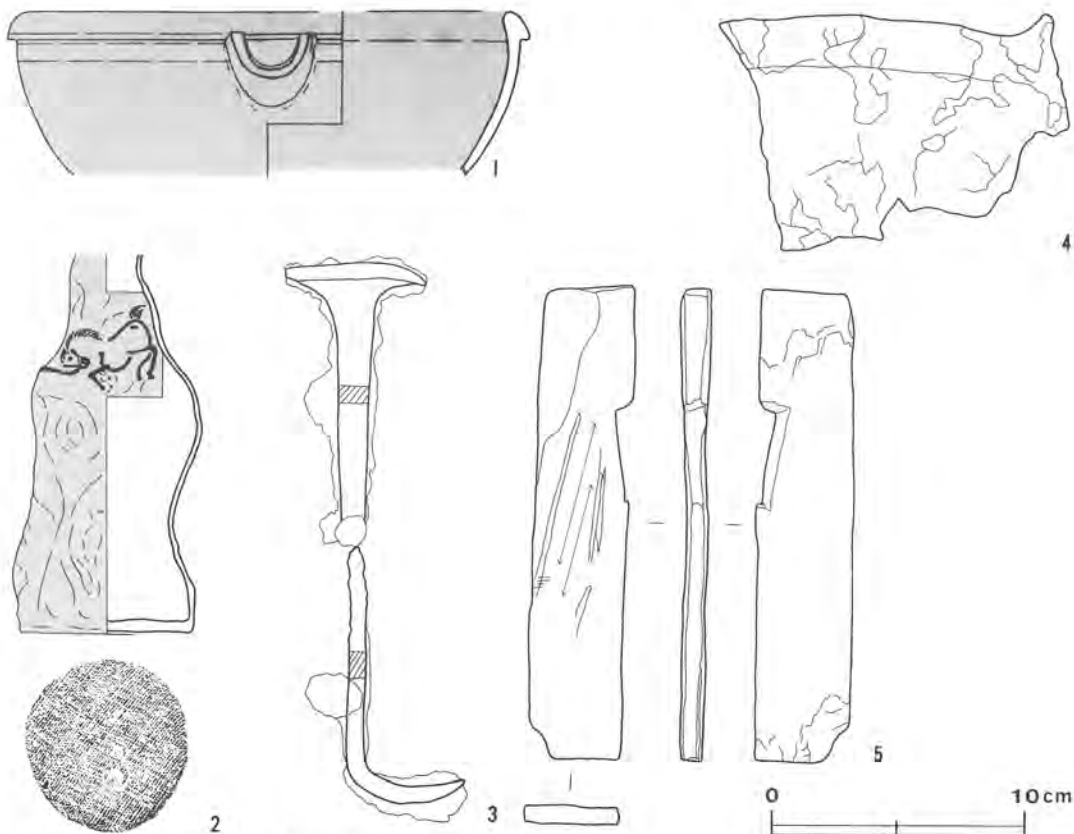
鹹水槽番号	位置	長径方向	平 面 形	規 模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)							
15の1	M5a ₁	-	円 形	1.40	1.40	0.80	2	垂直	平坦	自然	3.90	III A2a	

出土遺物 第24号竈手前付近から陶器の片口鉢1点(第72図1)、磁器の徳利1点(第72図2)、舟釘1点(第72図3)、鉄鍋片1点(第72図4)、砥石1点(第72図5)が出土し、さらに、竈の周囲からも多量の石や木片が散乱して出土している。4の鉄鍋片の法量は、残存している最大長は10.0cm、最大幅14.0cm、最大厚0.5cmである。

SH 15



第71図 第15製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第72図 第15製塩跡出土遺物実測・拓影図

第24号竈出土土器観察表 (第72図1・2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	片口鉢 陶器	A [19.4] B (6.6)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾して、折り返した縁帯がつく。体部と口頸部の境に「U」字形の注ぎ口が張り付けられている。	水挽き成形。 横ナデ。	(胎土) 灰白色 (釉) 灰オリーブ色 (焼成) 良好	P4 40% 第24号竈覆土
2	徳利 磁器	B (15.3) C 6.9	平底で、胴部は筒形を呈し、胴部上位から細くつばまり、頸部は直立する。胴部は凹凸を呈している。	水挽き成形。 底部にはひさご形の押印で『相馬』という文字が刻みこまれている。胴部上位に、杭につながれた馬を染め付けている。胴部外面に釉が施されている。	(胎土) 灰オリーブ色 (釉) 灰白色 (焼成) 普通	P3 90% 第24号竈覆土 相馬焼

第24号竈出土鉄製品一覧表 (第72図3)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
3	舟釘	21.6	1.0	1.2	120.0	第24号竈	M3 断面長方形，下端部折れ曲がる。

第24号竈出土石製品一覧表（第72図5）

図版 番号	名 称	法			量	石 質	出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)			
5	砥 石	19.0	4.0	1.4	134.0	粘板岩	第24号竈	Q3

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本跡に伴う居出場や屋外鹹水槽は検出できなかったが、釜屋内鹹水槽が木枠で構築されていることや、他の製塩跡の調査例から推定すると、居出場も木製で構築されていたものが腐食してしまったと思われる。屋外の鹹水槽は構築されなかったのではないかとと思われる。この製塩の時期は、第24号竈から陶器の片口鉢及び19世紀頃の磁器の徳利が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる、同じく第24号竈から舟釘及び砥石が出土しているが、その時期を明確にすることはできなかった。

第16製塩跡（第73図）

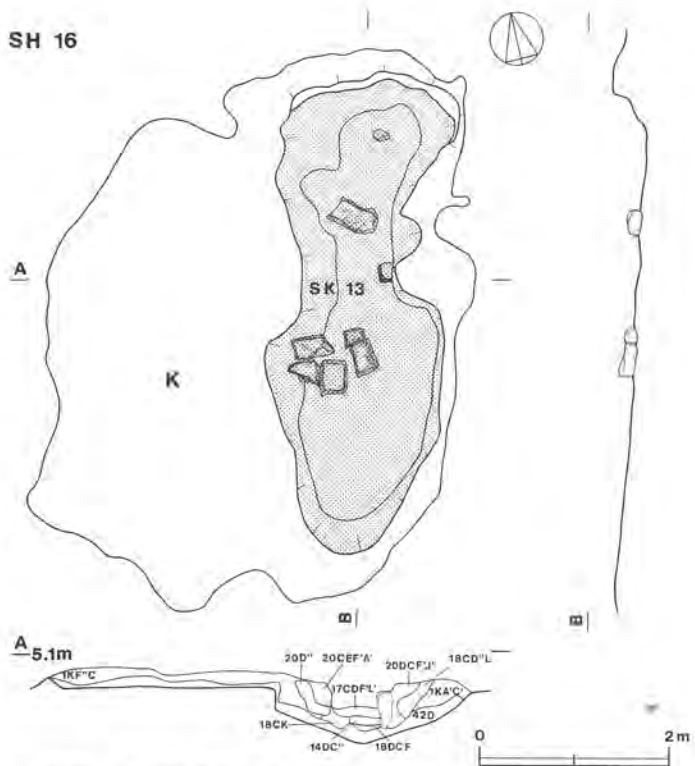
位置 調査区のO5b₁区を中心に確認され、標高5.00mに位置している。

関連遺構 第13号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 O5b₂区を中心に1基（第13号竈）検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸2.00m、短軸1.90m、深さ0.

SH 16



第73図 第16製塩跡竈実測図

40mである。黒色土を10cmの厚さで鍋状に貼り、その上に15cmの厚さの粘土枠をコの字形にまわして構築している。覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は厚さ15cmの灰が堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

第16製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	05b ₁	5.00	13	—	—	—	—	—

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
13	05b ₂	N-21°-E	隅丸方形	2.00	1.90	0.40	自然	5.00	竈手前に焼石が散乱して出土している。	

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第17製塩跡 (第74図)

位置 調査区の中央部 L3a₅区を中心に確認され、標高10.40m に位置する。

関連遺構 第34・39号竈、第175号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、第34号竈と第39号竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第34号竈と釜屋内鹹水槽(175)で構成されている。第2グループは、釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、第39号竈で構成されている。

第17製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3a ₅	10.40	34	175	—	—	—	新
2	L3a ₅	10.40	39	175	—	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北11.80m、東西10.50mの不定形を呈している。砂上に厚さ10cmの灰混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。北側に竈2基、東側に釜屋内鹹水槽1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 L3a₅区を中心に2基(第34・39号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.00・1.00m、短径2.40・0.80m、深さ0.40・0.20mである。深さは2基とも上層は削平されているため浅いけれども、黒色土を5~15cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、灰が5~40cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長期間火熱を受けているために赤変している。二つの竈の新旧関係は、第34号竈の下から第39号竈を検出していることから、第34号竈が新しい。

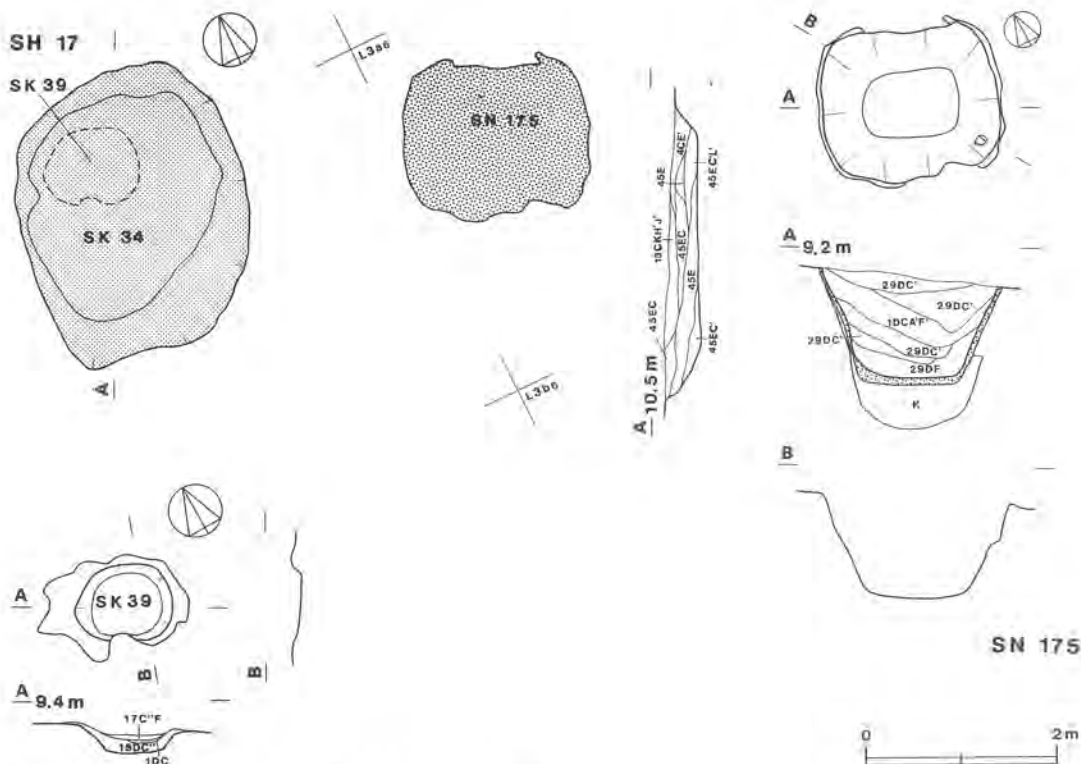
電一覽表

電番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
34	L3a5	N-18°-E	楕円形	3.00	2.40	0.40	自然	10.40		
39	L3a5	N-58°-W	楕円形	1.00	0.80	0.20	自然	9.20		

釜屋内鹹水槽 L3a5区から1基(第175号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.80m、短軸1.60m、深さ1.06mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~10cmの粘土を貼って構築している。第154号鹹水槽と重複しているが、第154号鹹水槽は第10製塩跡に伴う屋外鹹水槽で、配置や軸方向から考えても本跡に関連する遺構ではないと思われる。

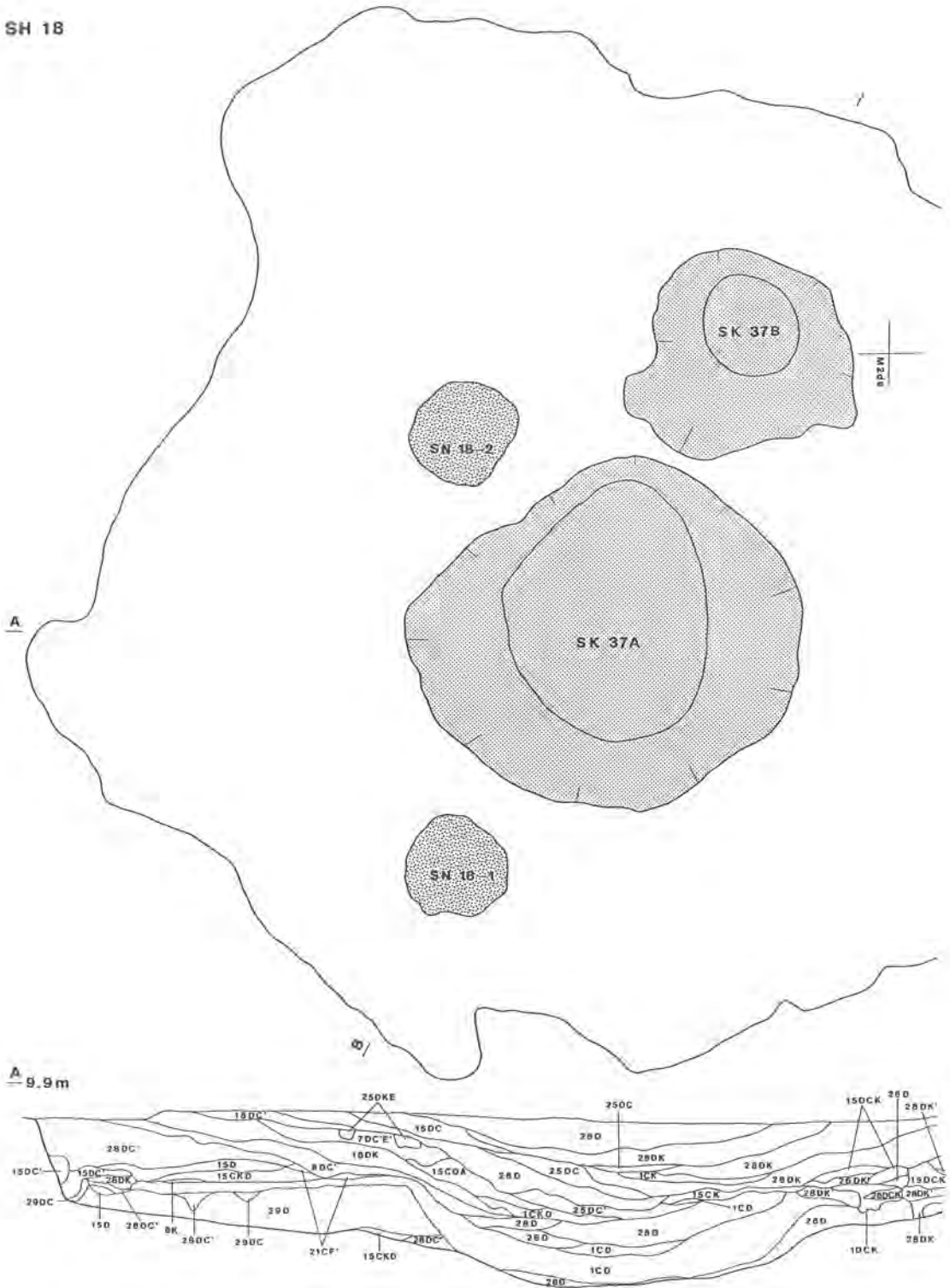
鹹水槽一覽表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
175	L3a5	N-68°-W	隅丸長方形	1.80	1.60	1.06	2~10	緩斜	平坦	自然	8.90	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第154号鹹水槽と重複。②層1点

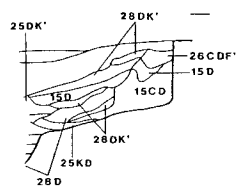
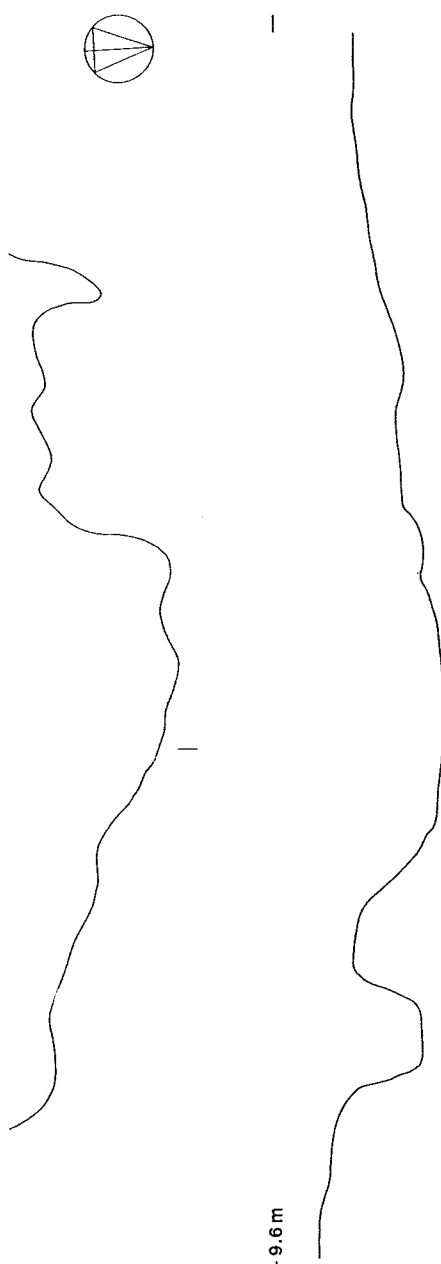


第74図 第17製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

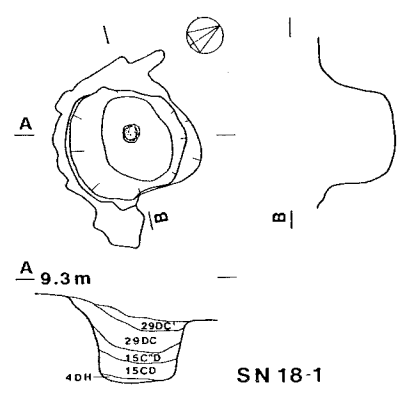
SH 18



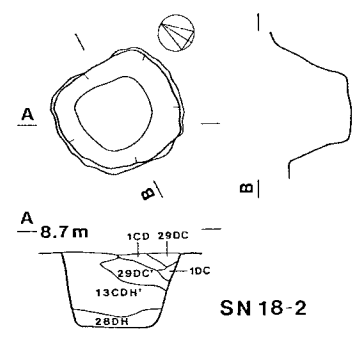
第75図 第18製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



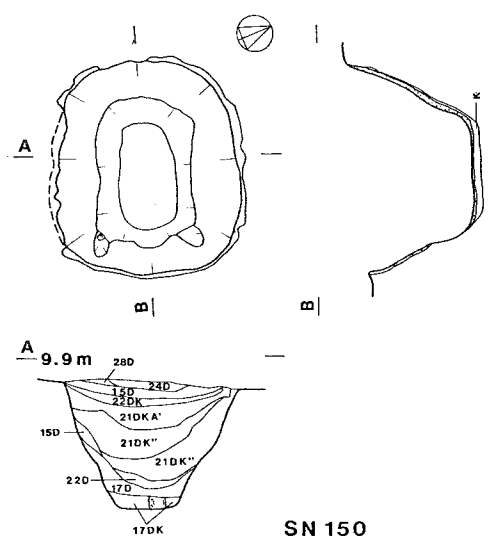
B 9.6 m



SN 18-1



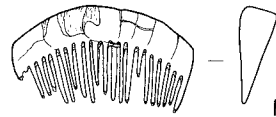
SN 18-2



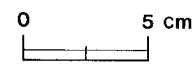
SN 150



出土遺物 第175号鹹水槽の覆土中から櫛1点(第76図1)が出土している。法量は最大長7.2cm, 最大幅4.3cm, 最大厚1.5cmである。弓形で、歯は22本残存している。材質はツゲノキである。周囲からの流れ込みと思われる。



所見 本跡のグループが操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、二つの竈の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

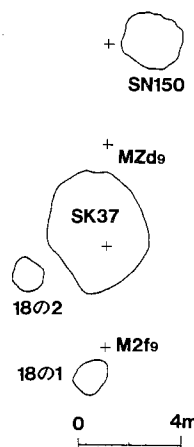


第76図 第17製塩跡
出土遺物実測図

第18製塩跡 (第77図)

位置 調査区の中央部 M2d₉区を中心に確認され、標高8.80m に位置している。

関連遺構 第37号竈 (A・B), 第18の1・18の2・150号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、第37号竈がAとBで重複していることから、2グループに区別できる。第1グループは、第37号竈B, 釜屋内鹹水槽(18の2)及び屋外鹹水槽(150)で構成されている。第2グループは、屋外鹹水槽が第1グループと同一で、第37号竈A及び釜屋内鹹水槽(18の1)で構成されている。



第77図 第18製塩跡
遺構配置図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北13.00m, 東西13.00mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-35°-Eを指している。砂上に厚さ10~60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。北側と北西側に竈2基、東側に鹹水槽1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状の詳細については不明である。釜屋の周囲には、底面から40~50cmの高さで土手が築かれており、南側に釜屋内へ向かって傾斜した出入口が付設されている。

第18製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	M2d ₉	8.80	37B	18の2	—	150	—	新
2	M2d ₉	8.80	37A	18の1	—	150	—	古

竈 M2d₉区を中心に2基(第37号竈A・B)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸4.50・2.70m, 短軸4.00・2.50m, 深さ1.30・0.70mである。黒色土を10~20cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が

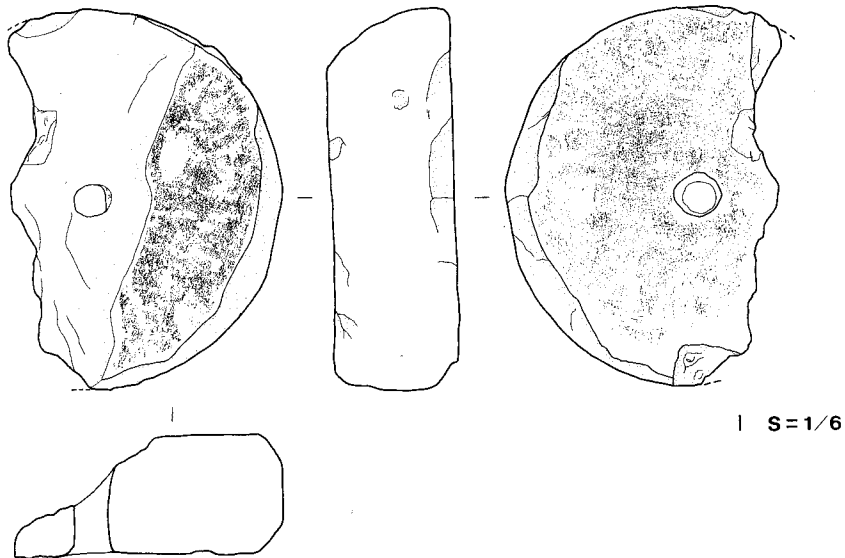
自然堆積し、下層は灰が30cmほど堆積している。二つの竈の新旧関係は、第37号竈Bが第37号竈Aを掘り込んで構築していることから、第37号竈Bが新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
37A	M2d _o	N-40°-W	隅丸方形	4.50	4.00	1.30	自然	8.80		
37B	M2d _o	N-50°-W	隅丸方形	2.70	2.50	0.70	自然	8.80	竈南側から石臼1点 が出土している。	

釜屋内鹹水槽 M2e_o・e_o区から2基（第18の1・18の2号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形と隅丸長方形を呈している。規模は、長径1.28・1.24m、短径1.12・1.16m、深さ0.94・0.80mで上面が削平されているので浅い。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～12cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 M2b_o区から1基（第150号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.83m、短軸2.34m、深さ1.29mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～6cmの粘土を貼って構築している。



第78図 第18製塩跡出土遺物実測・拓影図

出土遺物 第37号竈の南側から石臼1点（第78図1）が出土している。粉挽き臼の下臼で、完存率は60%である。推定直径35.0cm、現存する高さ10.2cm、ふくみ1.0cm、芯穴の径3.0cm、重量6,150gを測る。石質は安山岩である。磨り合わせ面は摩滅が著しく、分画数は不明である。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
18の1	M2e ₉	N-30°-E	楕円形	1.28	1.12	0.94	3~12	緩斜	平坦	自然	9.30	IA2b	釜屋内鹹水槽
18の2	M2e ₉	N-45°-W	隅丸長方形	1.24	1.16	0.80	2~6	緩斜	平坦	自然	8.60	IVA2b	釜屋内鹹水槽
150	M2b ₉	N-22°-E	隅丸長方形	2.83	2.34	1.29	1~6	緩斜	平坦	自然	9.62	IVA2c	屋外鹹水槽、㊸/㊹/㊺/㊻/㊼/㊽/㊾/㊿/1点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の重複関係から、第1グループが新しい。居出場、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の検出数が他の製塩跡と比べて少ない。本製塩跡は、第37号竈の南側から石臼を出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

第19製塩跡 (第79図)

位置 調査区の中央部 L2h₉区を中心に確認され、標高9.00mに位置している。

関連遺構 第38号竈 (A~C)、第19の1・164号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、第38号竈がAとB及びCで重複しているから、3グループに区別できる。第1グループは、第38号竈A、釜屋内鹹水槽 (19の1) 及び居出場 (164) で構成されている。第2グループは、居出場が第1グループと同一で、第38号竈Cで構成されている。第3グループは、居出場が第1グループと同一で、第38号竈Bで構成されている。

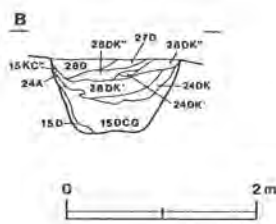
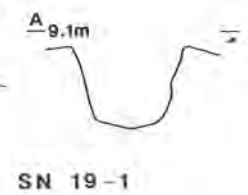
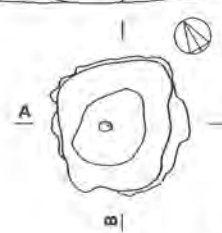
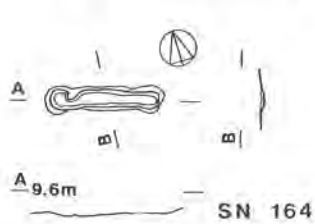
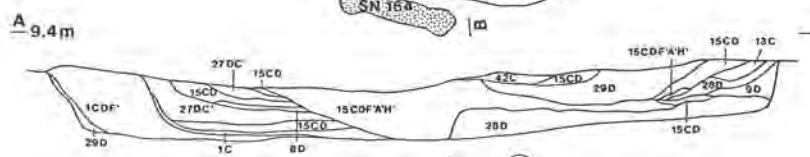
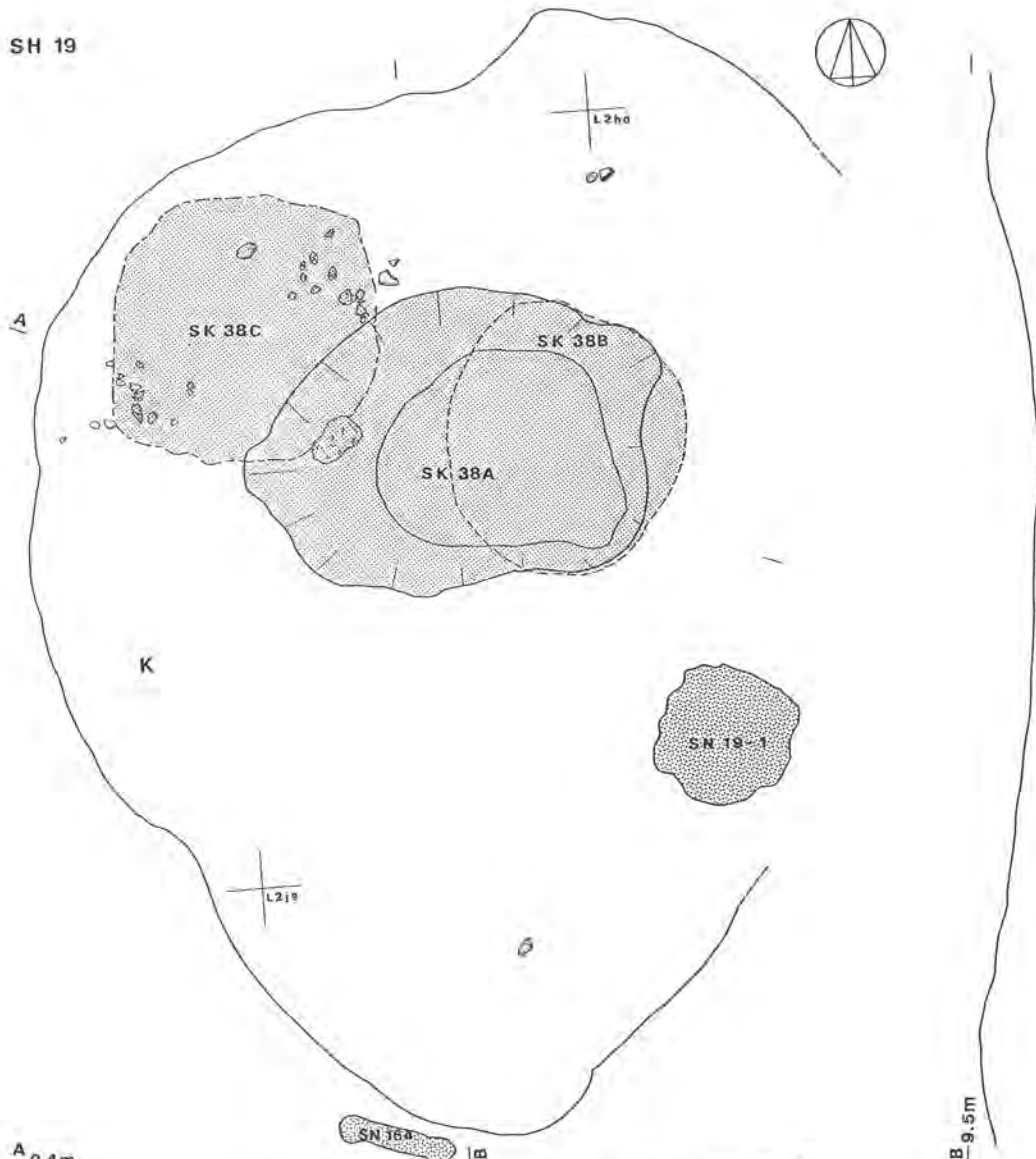
第19製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L2h ₉	9.00	38A	19の1	164	—	—	最新
2	L2h ₉	9.00	38C	—	164	—	—	第1グループ より古い
3	L2h ₉	9.00	38B	—	164	—	—	最古

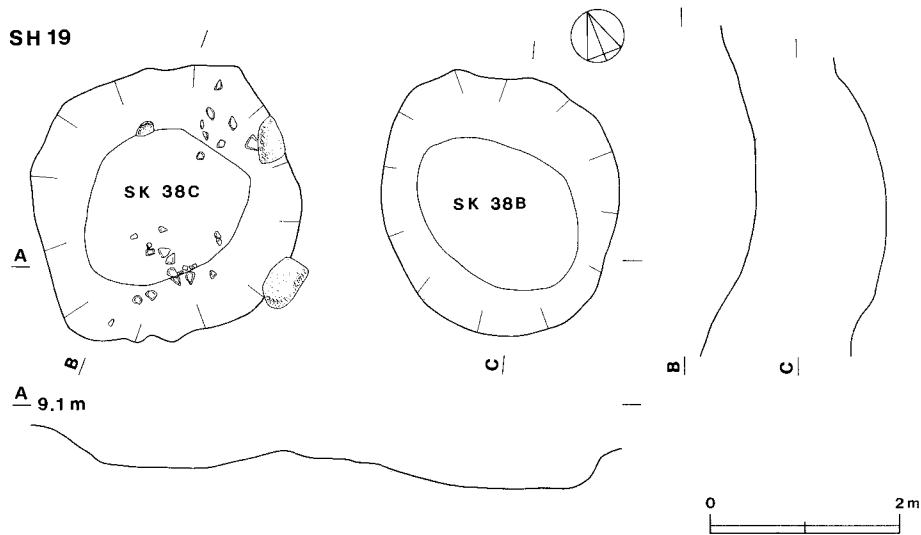
釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北7.50m、東西7.50mの不定形を呈している。砂上に厚さ10~60cmの灰、炭化物及び貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈3基、南側に居出場1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 L2h₉区を中心に3基 (第38号竈A~C) 検出され、そのうちAとBの平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.20・3.00m、短径3.20・2.70m、深さ0.30・0.54mである。Cの平面形は、円形を呈している。規模は、径2.80m、深さ0.60mである。いずれも黒色土を10~20cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10cmほど堆積している。火床直下の砂は長期間火熱を受けているた

SH 19



第79図 第19製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第80図 第19製塩跡竈実測図

め赤変している。三つの竈の新旧関係は、確認面での標高の違いから、第38号竈Aが最も新しく、次いで第38号竈C、第38号竈Bの順に古くなる。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
38A	L2h ₉	N-76°-W	楕円形	4.20	3.20	0.30	自然	9.00	竈の覆土中から石が出土している。	
38B	L2h ₉	N-22°-E	楕円形	3.00	2.70	0.54	自然	8.70		
38C	L2h ₉	—	円形	2.80	2.80	0.60	自然	8.90		

釜屋内鹹水槽 L3h₀区から1基(第19の1号鹹水槽)検出され、平面形は隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.58m、短軸1.13m、深さ0.66mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ8~14cmの粘土を貼って構築している。

居出場 L2j₉区から1基(第164号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.20m、短軸0.20m、深さ0.04mで上面が削平されているため浅い。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~6cmの粘土を貼って構築している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、三つの竈の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
164	L2j ₉	N-74°-W	隅丸長方形	1.20	0.20	0.04	2~6	緩斜	平坦	自然	9.42	IVA2a	居出場
19の1	L3h ₀	N-31°-E	隅丸長方形	1.58	1.13	0.66	8~14	外傾	平坦	自然	8.82	IVA2b	釜屋内鹹水槽

第20製塩跡 (第82図)

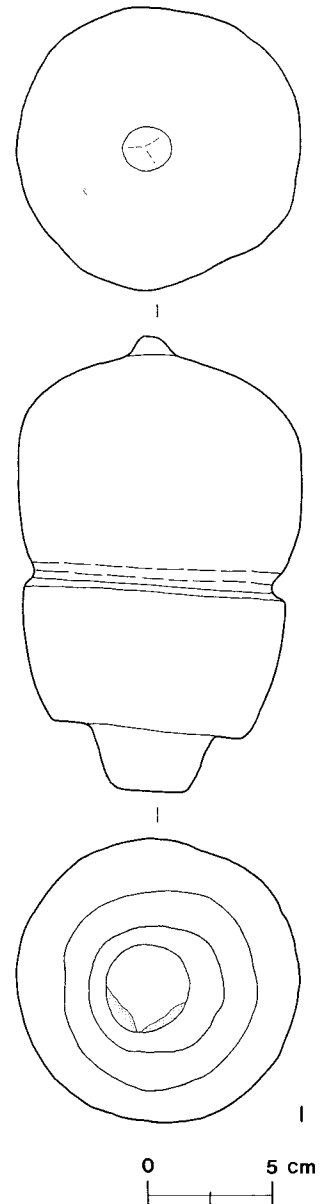
位置 調査区の中央部 N2c₆区を中心に確認され、標高8.60m に位置する。

関連遺構 第45号竈 (A・B) で構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。これらの遺構は、第45号竈がAとBで重複していることから、2グループに区別できる。第1グループは、第45号竈B、第2グループは、第45号竈Aで構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.60m、東西13.60mの不定形を呈している。砂上に厚さ10~30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状の詳細については不明である。釜屋の周囲は底面から30cmの高さで土手が築かれている。

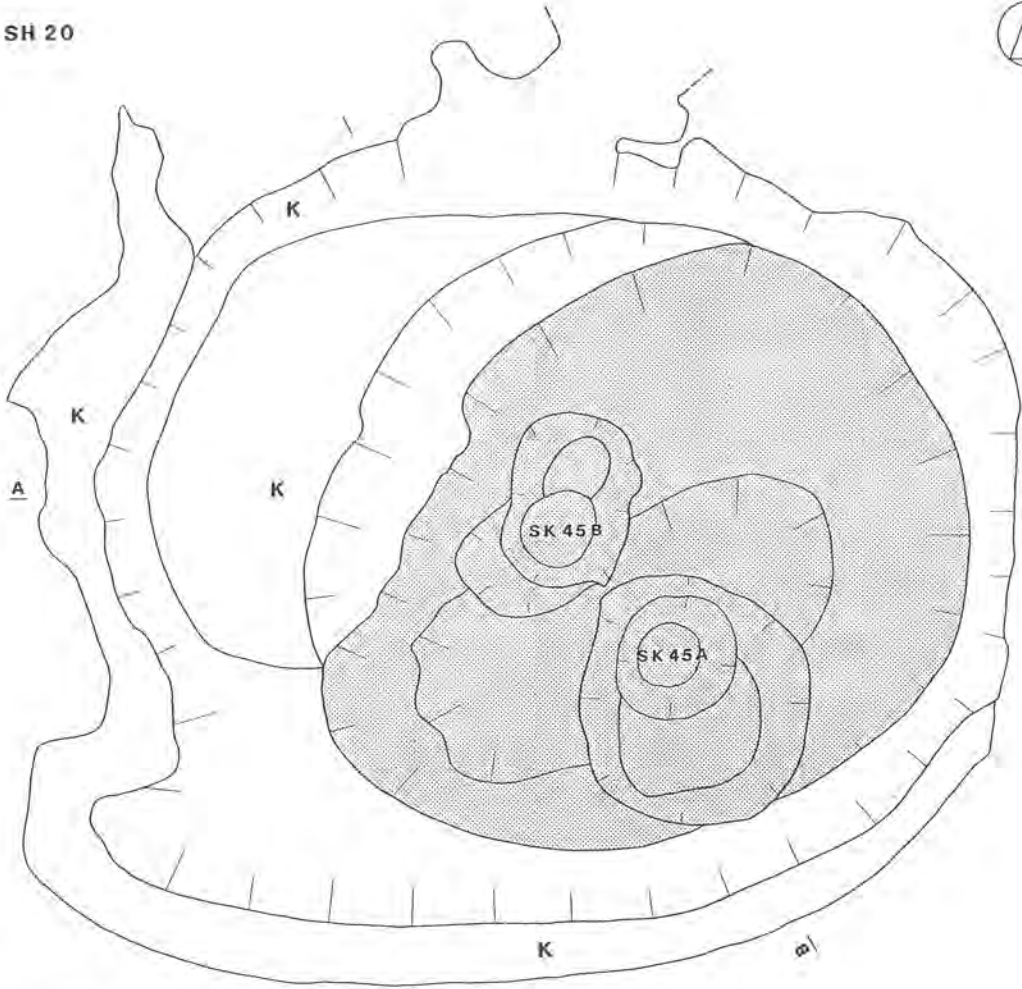
竈 N2b₅区とN2c₆区から2基(第45号竈A・B) 検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.70・1.90m、短径2.40・1.20m、深さ0.90・0.70mである。黒色土を10~30cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10~20cmほど堆積している。二つの竈の新旧関係は、確認面での標高の違いから、第45号竈Bが第45号竈Aより新しい。

出土遺物 第45号竈の覆土中から石塔1点(第81図1)が出土している。周囲からの流れ込みと思われる。

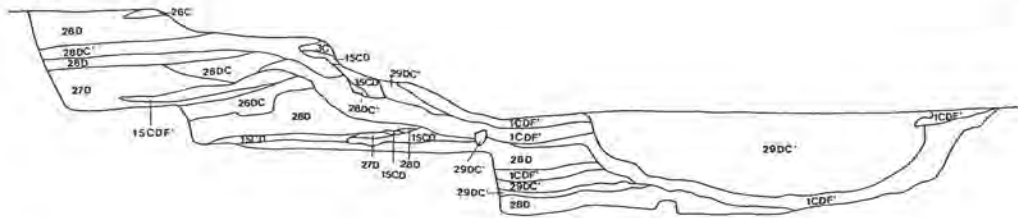


第81図 第20製塩跡出土遺物実測図

SH 20



A 9.5m



B 8.8m



第82図 第20製塩跡竈実測図

第20製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	N2c ₆	8.60	45B	—	—	—	—	新
2	N2c ₆	8.60	45A	—	—	—	—	古

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
45A	N2c ₆	N-36°-W	楕円形	2.70	2.40	0.90	自然	8.30		
45B	N2b ₅	N-15°-E	楕円形	1.90	1.20	0.70	自然	8.60	④石塔(空・風鈴)1点	

第45号竈出土石塔一覧表 (第81図1)

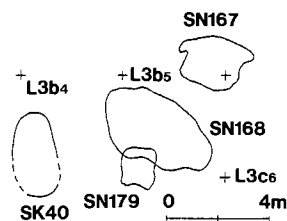
図版番号	名 称	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)			
1	空・風鈴	11.4	11.4	18.3	2,900	砂 岩	第45号竈	Q6

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、二つの竈の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第45号竈から空・風輪が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

第21製塩跡 (第83図)

位置 調査区の中央部 L3b₄区を中心に確認され、標高9.10m に位置する。

関連遺構 第40号竈、第167・168・179号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、屋外鹹水槽の第168号と第179号が重複しているところから、2グループに区別できる。第1グループは、第40号竈と屋外鹹水槽(167, 168)で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(179)で構成されている。

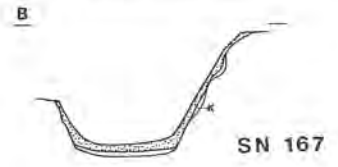
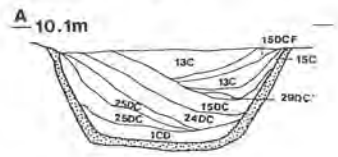
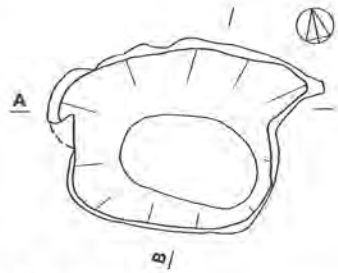
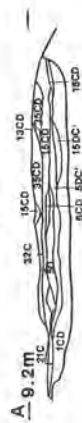
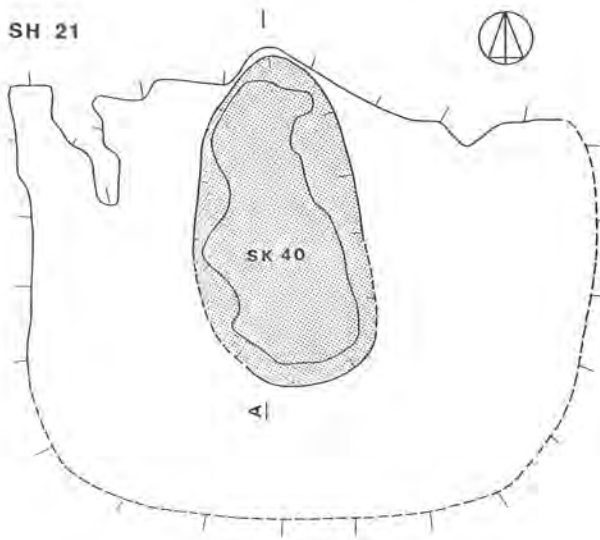


第83図 第21製塩跡遺構配置図

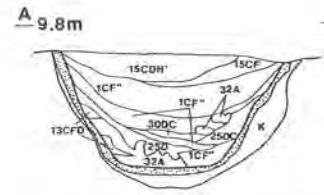
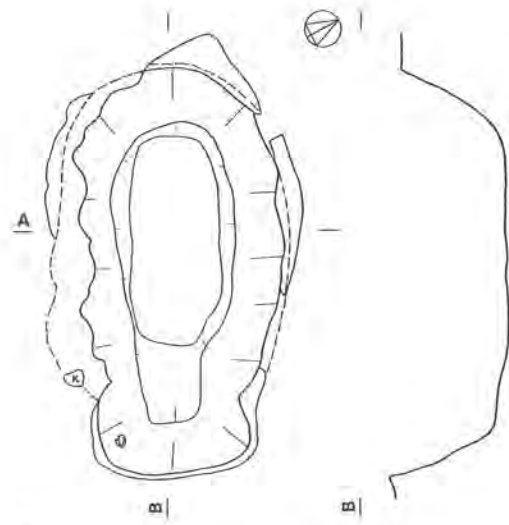
第21製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	L3b ₄	9.10	40	—	—	167,168	—	新
2	L3b ₄	9.10	40	—	—	179	—	古

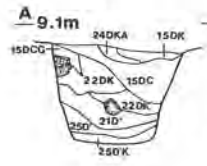
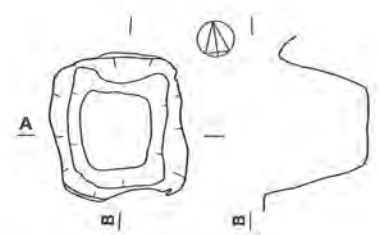
SH 21



SN 167



SN 168



SN 179



第84図 第21製塩跡竈・鹹水槽実測図

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 L3b₄区を中心に1基(第40号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.50m、短径1.80m、深さ0.20mである。深さは上層が削平されているため浅いが、黒色土を10cmほどの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、灰が20cmの厚さで堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
40	L3b ₄	N-11°-W	楕円形	3.50	1.80	0.20	自然	9.10		

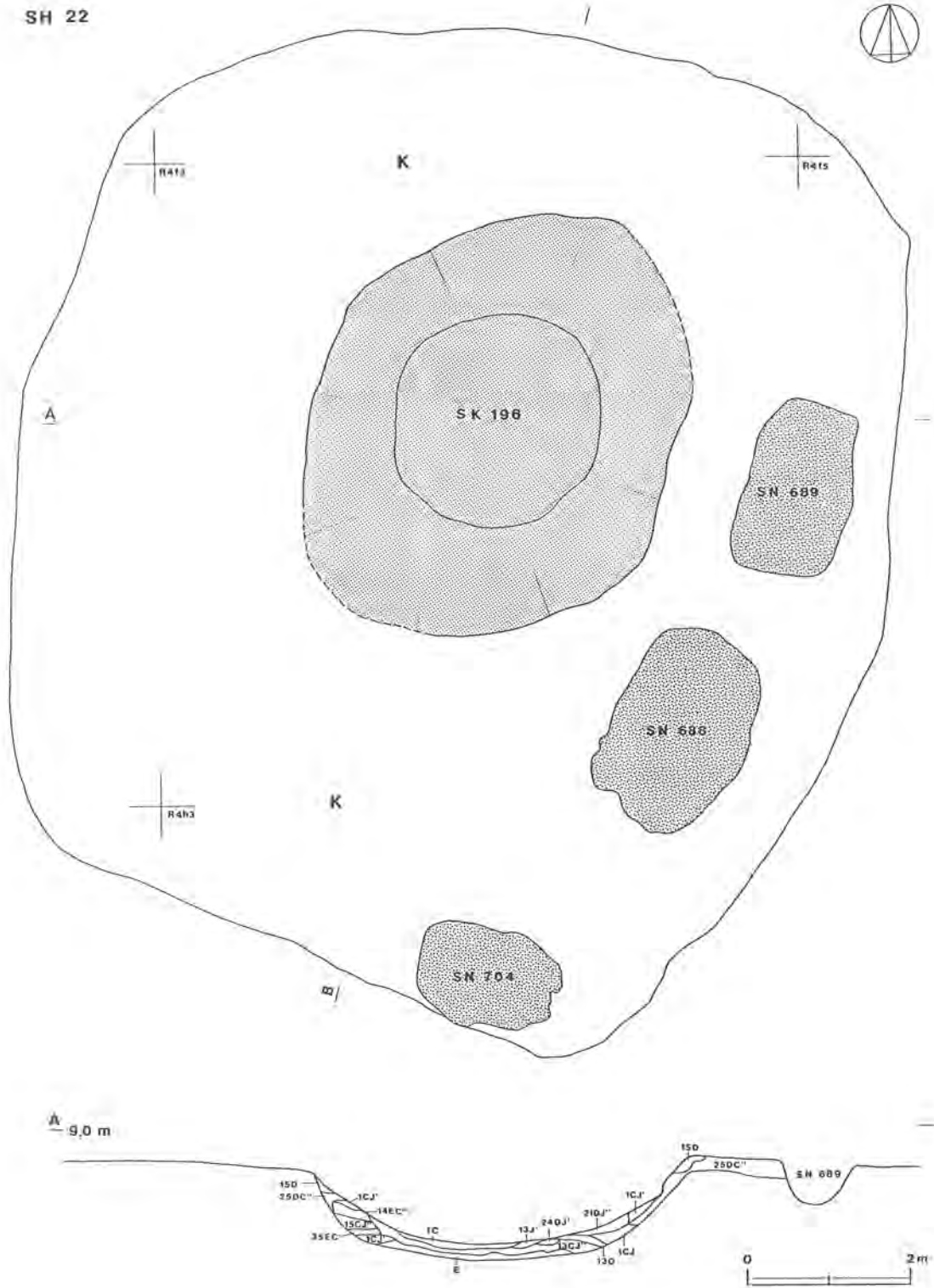
屋外鹹水槽 L3a₅区とL3b₅区から3基(第167・168・179号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.50~4.30m、短軸1.30~2.10m、深さ0.86~1.07mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。砂を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~21cmの粘土を貼って構築している。第168号鹹水槽の下から第179号鹹水槽を検出したことから、第168号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

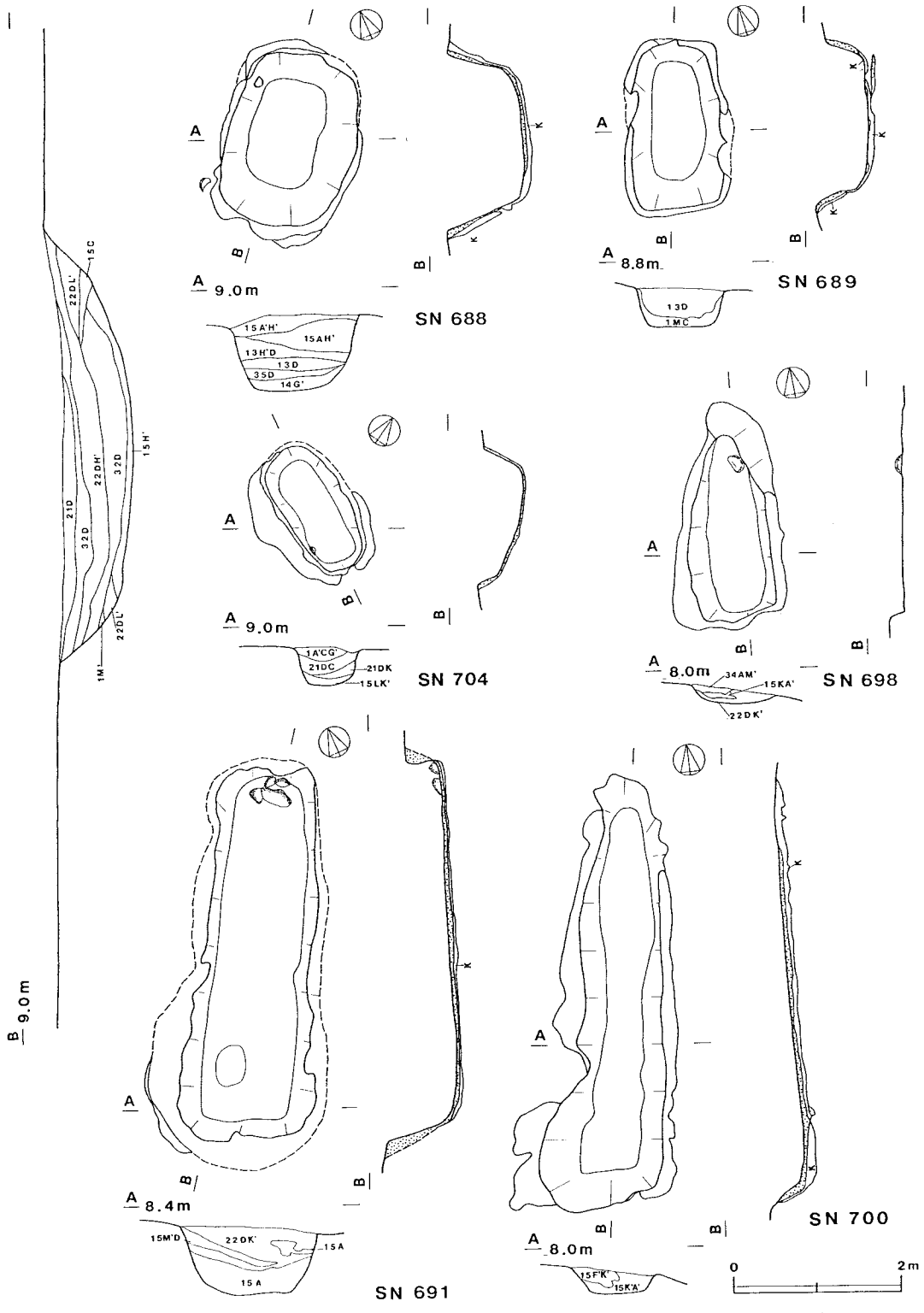
鹹水槽 番 号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
167	L3a ₅	N-64°-W	隅丸長方形	2.40	1.90	0.88	2~13	緩斜	平坦	自然	10.02	IA3b	屋外鹹水槽
168	L3b ₅	N-61°-W	隅丸長方形	4.30	2.10	1.07	3~21	緩斜	平坦	自然	9.70	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、第179号鹹水槽と重複
179	L3b ₅	N-4°-E	隅丸長方形	1.50	1.30	1.02	1~3	外傾	平坦	自然	9.00	IVA2c	屋外鹹水槽、第168号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の第168号鹹水槽と第179号鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

SH 22



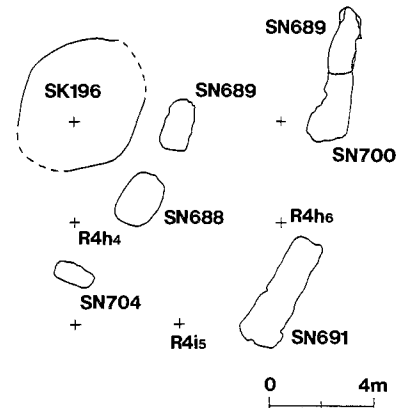
第85図 第22製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第22製塩跡(第86図)

位置 調査区の南部 R4g₄区を中心に確認され、標高8.77mに位置している。

関連遺構 第196号竈，第688・689・691・698・700・704号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，長軸方向と平面形の違いから，3グループに区別できる。第1グループは，第196号竈，釜屋内鹹水槽（688，689），居出場（704）及び屋外鹹水槽（691，698）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（698）で構成されている。第3グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（700）で構成されている。



第86図 第22製塩跡遺構配置図

第22製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4g ₄	8.77	196	688,689	704	691,698	—	最新
2	R4g ₄	8.77	196	688,689	704	698	—	第1グループより古い
3	R4g ₄	8.77	196	688,689	704	700	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北12.80m，東西11.70mの不定形を呈している。砂上に厚さ30cmの灰，炭化粒子及び貝殻片混じりの黒色土を貼って地盤を構築し，中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出場1基が位置している。しかし，この黒色土の範囲を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出できなかったため，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 R4f₄区を中心に1基(第196号竈)検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径5.77m，短径4.57m，深さ1.06mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており，覆土は，上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，中層から下層にかけて貝殻片を含んだ灰が18~45cmの厚さで堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
196	R4f ₄	N-30°-E	楕円形	5.77	4.57	1.06	自然	8.64		

釜屋内鹹水槽 R4g₄区から2基(第688・689号鹹水槽)検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸2.20・2.10m，短軸1.53・1.06m，深さ0.86・0.47mである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後，黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2

～5 cmの粘土を貼って構築している。

居出場 R4h₄区から1基(第704号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.56m、短軸0.82m、深さ0.48mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～4 cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 R4h₅区とR4f₆区から3基(第691・698・700号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸2.63～5.38m・短軸1.02～1.53m、深さ0.19～0.86mである。底面は皿状及び平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～8 cmの粘土を貼って構築している。第698号鹹水槽の下から第700号鹹水槽が検出されていることから、第698号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

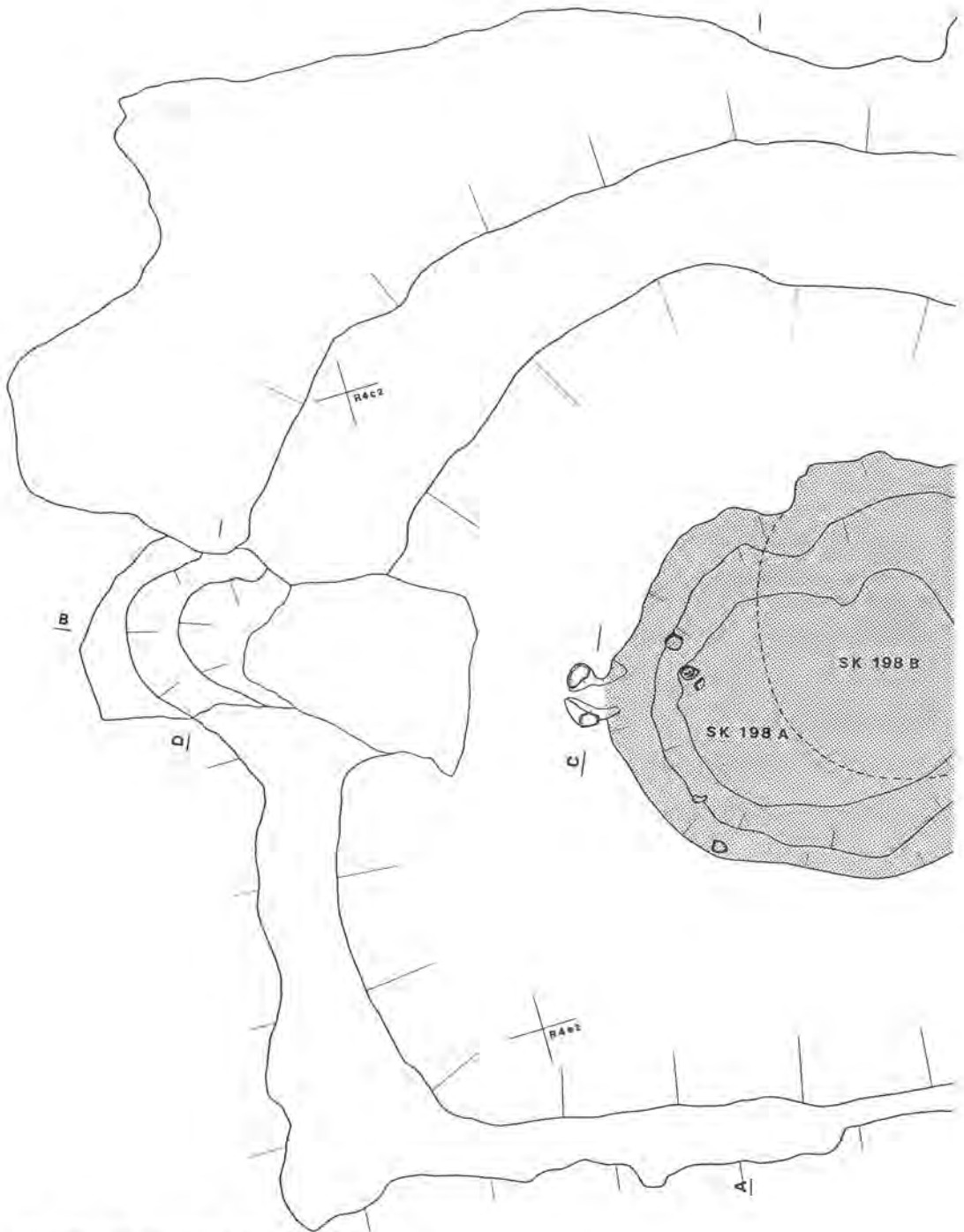
鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
688	R4g ₄	N-28°-E	隅丸長方形	2.20	1.53	0.86	2～5	外傾	平坦	自然	8.77	IVA3b	釜屋内鹹水槽、足掛けくぼみ、 [㊦] 石1点
689	R4g ₄	N-22°-E	隅丸長方形	2.10	1.06	0.47	2～5	外傾	平坦	自然	8.50	IVA3a	釜屋内鹹水槽
691	R4h ₅	N-29°-E	隅丸長方形	4.55	1.50	0.86	2～7	緩斜	皿状	自然	8.27	IVB4b	屋外鹹水槽、底面一石4点
698	R4f ₆	N-9°-E	舟形	2.63	1.02	0.19	—	緩斜	平坦	自然	7.72	VIA3a	屋外鹹水槽、底面一石2点、第700号鹹水槽と重複
700	R4f ₆	N-10°-E	舟形	5.38	1.53	0.34	2～8	緩斜	平坦	自然	7.44	VIA4a	屋外鹹水槽、第698号鹹水槽と重複
704	R4h ₄	N-62°-W	隅丸長方形	1.56	0.82	0.48	2～4	外傾	平坦	自然	8.76	IVA2a	居出場、底面一石1点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第2グループの第698号鹹水槽より第1グループの第691号鹹水槽の標高が高いので、第1グループが最も新しく、第2グループの第698号鹹水槽の下から第3グループの第700号鹹水槽を検出していることから、次いで第2グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

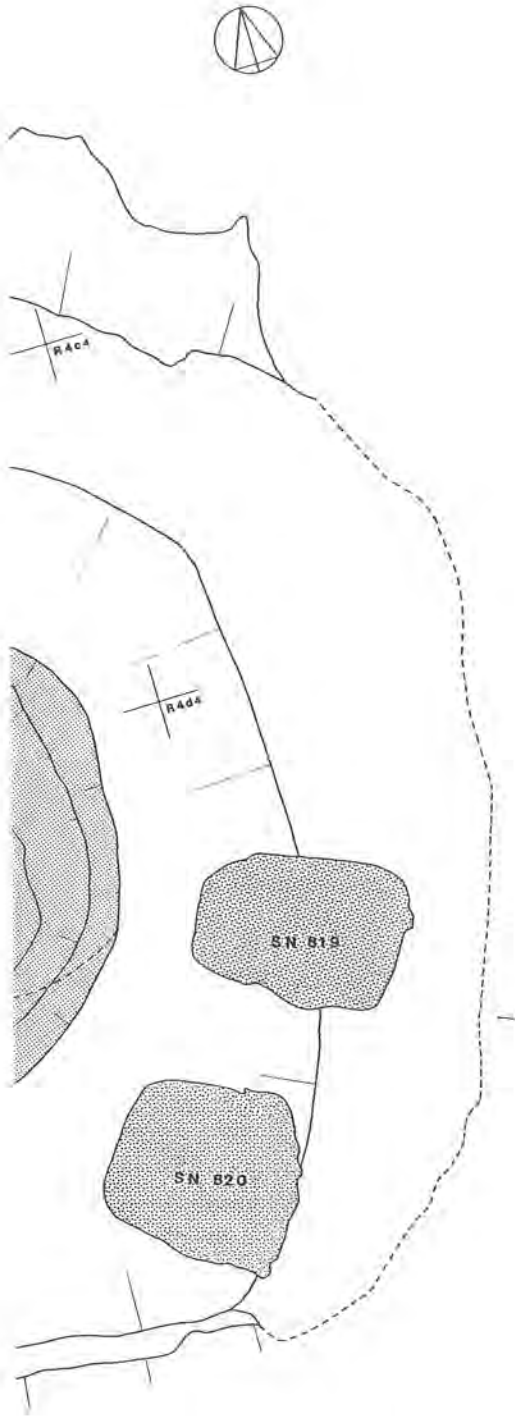
第23製塩跡(第88図)

位置 調査区の南部R4d₄区を中心に確認され、標高8.02mに位置している。

関連遺構 第198号竈(A・B)、第699・819・820・822・823・831・848・864号鹹水槽及び第192～194・197～199・214・219～221・224～226・228・233号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いや竈や土樋の重複関係から、3グループに区別できる。第1グループは、第198号竈A、釜屋内鹹水槽(819, 820)、屋外鹹水槽(699)及び土樋(198, 199, 219, 225, 226)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(822, 823)及び土樋(192～194, 197)で構成されている。第3グループは、釜屋内鹹水槽が第1グル



第87図 第23製塩跡釜屋内遺構実測図

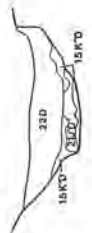


A 8.8 m



B

D 8.6 m



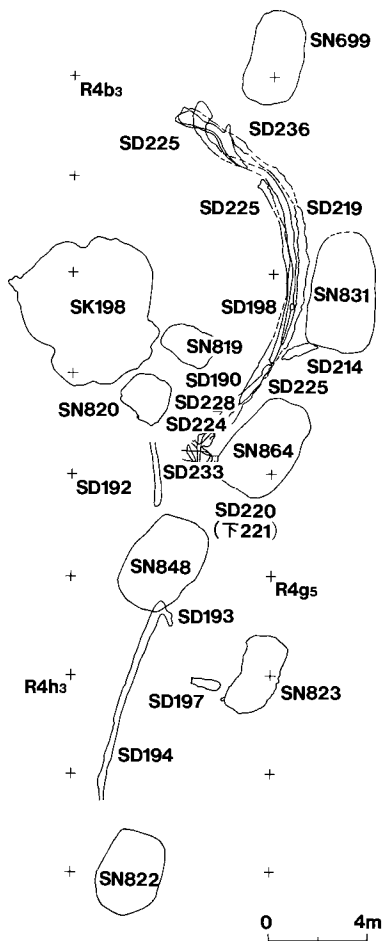
C 7.6 m



ープと同一で、第198号竈B、屋外鹹水槽(831, 848, 864)及び土樋(214, 220, 221, 224, 228, 233)で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北13.97m・東西13.65mの楕円形を呈し、長径方向はN-7°-Eを指している。砂上に厚さ7~17cmの炭化粒子や灰混じりの黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈2基、東側に鹹水槽2基が位置している。釜屋の周囲は底面から62~80cmの高さで土手が築かれており、西側に釜屋内に向かって傾斜した出入口が付設されている。しかし、この黒色土の範囲を調査しても、建屋を指す柱穴等は検出することはできなかった。

竈 R4d₂・d₃区にまたがって2基(第198号竈A・B)検出された。第198号竈Bの平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.30m、短径(4.07)m、深さ1.16mである。第198号竈Aは西側から南側にかけて攪乱を受けているが、平面形は楕円形を呈していたものと思われる。規模は、長径(3.85)m、短径(2.46)m、深さ0.97mである。いずれも黒色土を7~10cmの厚さで鍋状に貼って構築しており、覆土は、周辺から流れ込んで砂が上層から中層にかけて自然堆積し、その下に灰が12~24cmの厚さで堆積している。二つの竈の新旧関係は、土層から第198号竈Aが新しい。



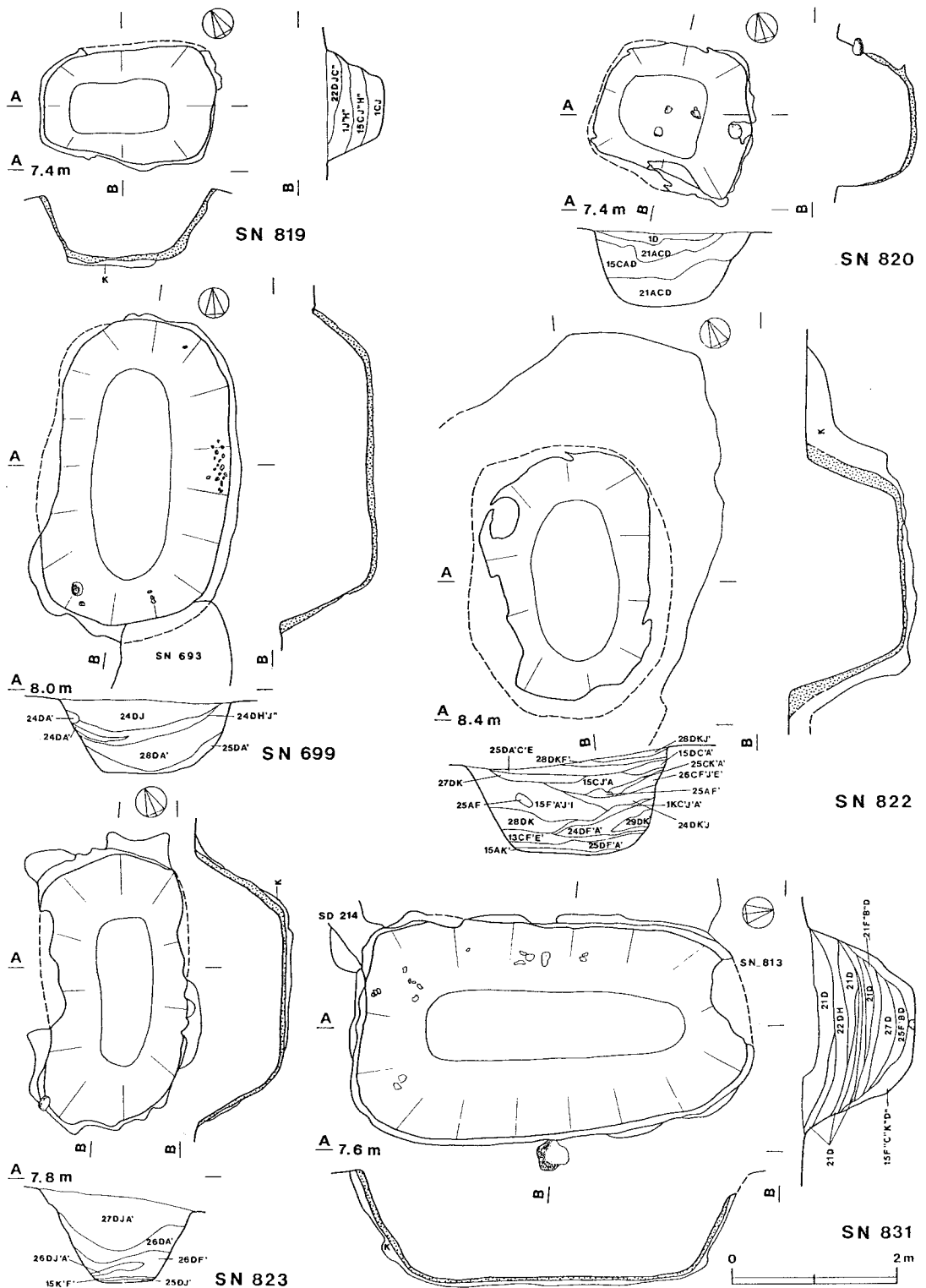
第88図 第23製塩跡遺構配置図

第23製塩跡一覧表

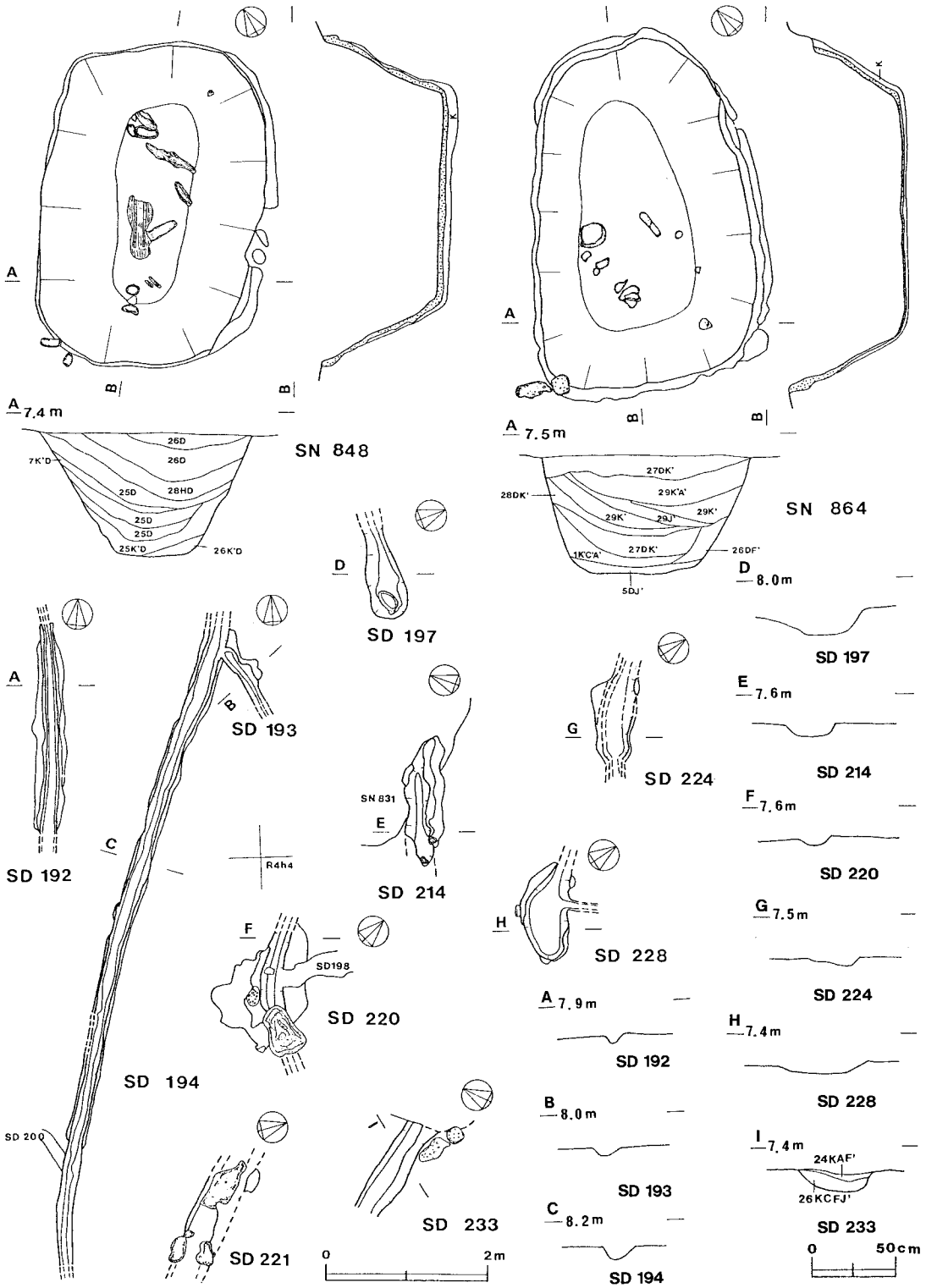
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4d ₄	8.02	198A	819, 820	—	699	198, 199, 219, 225, 226	最新
2	R4d ₄	8.02	198A	819, 820	—	822, 823	192, 193, 194, 197	第1グループより古い
3	R4d ₄	8.02	198B	819, 820	—	831, 848, 864	214, 220, 221, 224, 228, 233	最古

竈一覧表

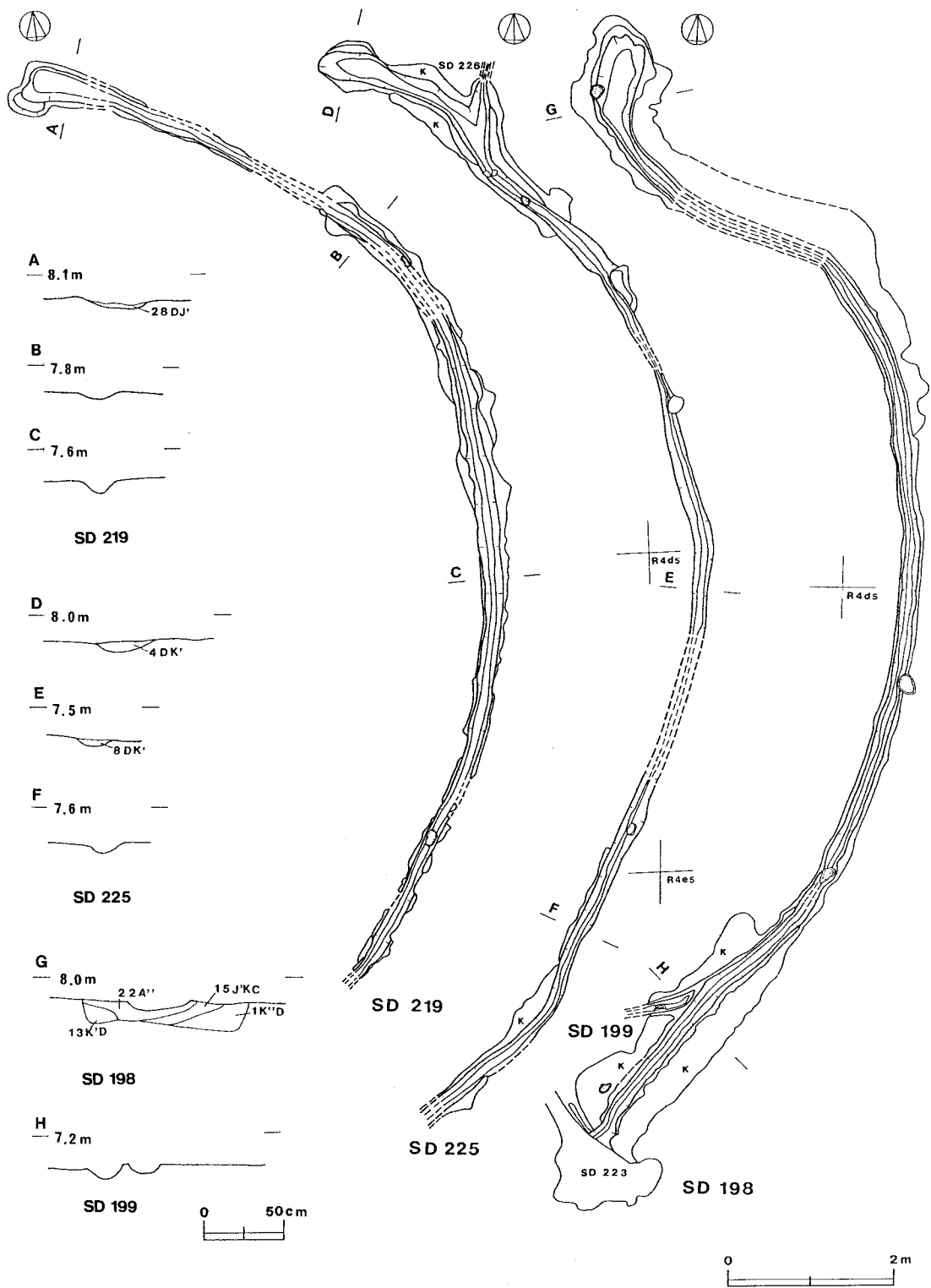
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
198A	R4d ₂	(N-8°-E)	楕円形	(3.85)	(2.46)	0.97	自然	7.24	底面一石2点、石5点、石1点	第198号竈Bと重複
198B	R4d ₃	N-10°-E	楕円形	4.30	(4.07)	1.16	自然	7.24	石9点	第198号竈Aと重複



第89図 第23製塩跡鹹水槽実測図



第90图 第23製塩跡鹹水槽・土桶実測図



第91図 第23製塩跡土樋実測図

釜屋内鹹水槽 R4d₄区と R4e₃区から2基（第819・820号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.10・1.95m、短軸1.40・1.58m、深さ0.74・0.95mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 R4a₅区・R4d₅区・R4e₄区・R4f₃区・R4h₄区・R4j₃区の6か所から6基（第699・822・823・831・848・864号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.07～4.80m、短軸1.75～2.73m、深さ0.90～1.45mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。第848号鹹水槽の底部から木片8点が出土している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
699	R4a ₅	N-12°-E	隅丸長方形	3.87	2.12	0.90	3～7	緩斜	平坦	自然	7.90	IVA4b	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、㊶石24点
819	R4d ₄	N-62°-W	隅丸長方形	2.10	1.40	0.74	2～12	緩斜	平坦	自然	7.08	IVA3b	釜屋内鹹水槽
820	R4e ₃	N-30°-E	隅丸長方形	1.95	1.58	0.95	1～6	外傾	平坦	自然	7.16	VA2b	釜屋内鹹水槽、底面一石4点、㊶石8点
822	R4j ₃	N-28°-E	隅丸長方形	3.07	2.13	1.35	1～7	緩斜	平坦	自然	8.02	IVA4c	屋外鹹水槽、底面一石1点、㊶石7点
823	R4h ₄	N-22°-E	隅丸長方形	3.33	1.75	1.15	2～8	緩斜	平坦	自然	7.61	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、㊶石1点
831	R4d ₆	N-6°-E	隅丸長方形	4.80	2.72	1.40	2～6	緩斜	平坦	自然	7.32	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、㊶石16点、㊶石1点
848	R4f ₃	N-37°-E	隅丸長方形	4.01	2.73	1.45	4～12	緩斜	平坦	自然	7.10	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、底面一石6点、木片8点、㊶石1点、㊶石2点
864	R4e ₄	N-31°-E	隅丸長方形	4.28	2.70	1.34	1～11	緩斜	平坦	自然	7.25	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石10点、㊶石51点、土師質土器の皿1点、土師片1点、㊶石2点

土樋 R4b₄区から R4j₃区を中心にして15条（第192～194・197～199・214・219～221・224～226・228・233号土樋）検出され、全長が最も短いものは0.70mで、最も長いものは16.90mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅14～58cm、下幅5～39cm、深さ1～10cmである。各土樋は、砂地を浅く掘り、粘土を1～7cmの厚さで雨樋のように貼って構築している。第193号土樋は第194号土樋と接続し、第192号土樋へ伸びていたと思われる。第198・219・225号土樋は重複しており、第198号土樋の下から第219・225号土樋が検出されたことから、第198号土樋が最も新しく、次いで第219号土樋、第225号土樋の順に古くなるものと思われる。第226号土樋は第219号土樋の下から検出され、第225号土樋に接続している。第220号土樋の下から第221・224・228・233号土樋が検出されたことから、第220号土樋が最も新しく、次いで第221号土樋、第224号土樋、第228号土樋、第233号土樋の順に古くなる。そして第192・198・199・219・220・221・224・225・228・233号土樋は、釜屋内の第820号鹹水槽と連結していたと思われる。

土樋一覽表

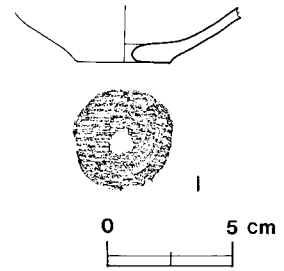
土樋番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断面	覆 土	蓋石の有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
192	R4e ₃ ~R4f ₃	N-6°-W	2.60	20	6	6	3~7	U	自 然	無	7.70 ~7.76	第820号鹹水槽と連結
193	R4g ₃	N-32°-W	0.90	18	6	6	1~4	U	自 然	無	7.80	第194号土樋と接続
194	R4g ₃ ~R4j ₃	N-19°-E	8.20	30	10	9	2~4	U	自 然	無	7.86 ~8.18	第193号土樋と接続
197	R4h ₃	N-83°-W	1.15	40	25	10	2~5	U	自 然	無	7.78	
198	R4b ₄ ~R4c ₄	N-40°-E N-3°-W N-47°-W	16.90	22	6	5	2~8	U	自 然	無	7.50 ~7.54	第199号土樋と接続、第219・225号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
199	R4e ₄	N-81°-E	0.70	14	5	9	-	U	自 然	無	7.52	第198号土樋と接続、第820号鹹水槽と連結
214	R4d ₅	N-70°-E	1.55	34	9	7	3~6	U	自 然	無	7.50	
219	R4b ₄ ~R4e ₄	N-55°-W N-3°-W N-32°-E	14.80	18	5	8	2~5	U	自 然	無	7.48 ~7.95	第198・225号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
220	R4e ₄	N-45°-W	1.55	26	16	3	1~2	U	自 然	無	7.42	第221・224・228・233号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
221	R4e ₄	N-45°-W	1.06	45	33	-	-	U	自 然	無	-	第220・224・228・233号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
224	R4e ₄	N-48°-W	1.11	30	20	7	1~5	U	自 然	無	7.35	第220・221・228・233号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
225	R4b ₄ ~R4e ₄	N-25°-E N-12°-W N-45°-W	16.10	23	7	5	3~5	U	自 然	無	7.34 ~7.54	第226号土樋と接続、第198・219号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
226	R4b ₄	N-88°-W	0.71	28	8	2	1~3	U	自 然	無	7.77	第225号土樋と接続
228	R4e ₄	N-45°-W	1.25	58	39	1	1~2	U	自 然	無	7.28	第220・221・224・233号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結
233	R4e ₄	N-83°-W	1.38	42	20	3	1~3	U	自 然	無	7.26	第220・221・224・228号土樋と重複、第820号鹹水槽と連結

第864号鹹水槽出土土器観察表(第92図1)

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	皿 土師質土器	A [8.5] B (2.3) C 3.8	平底で、体部は内彎気味に立ち上がっている。底部は使用後に穿孔されている。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P59 70% 第864号鹹水槽覆土

出土遺物 第864号鹹水槽の覆土中から土師質土器の皿1点(第92図1)が出土している。周囲からの流れ込みと思われる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、竈の重複や屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第864号鹹水槽から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることができなかった。

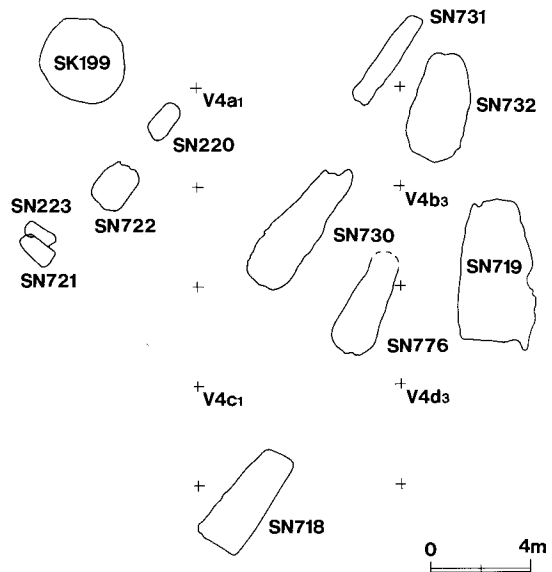


第92図 第23製塩跡
出土遺物実測・拓影図

第24製塩跡(第93図)

位置 調査区の南部V5c2区を中心に確認され、標高7.87mに位置している。

関連遺構 第199号竈，第718～723・730～732・776号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いや居出場の重複関係から、3グループに区別できる。第1グループは、第199号竈，釜屋内鹹水槽(720, 722)，居出場(723)及び屋外鹹水槽(718, 776)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(719, 732)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、居出場(721)，屋外鹹水槽(730, 731)で構成されている。



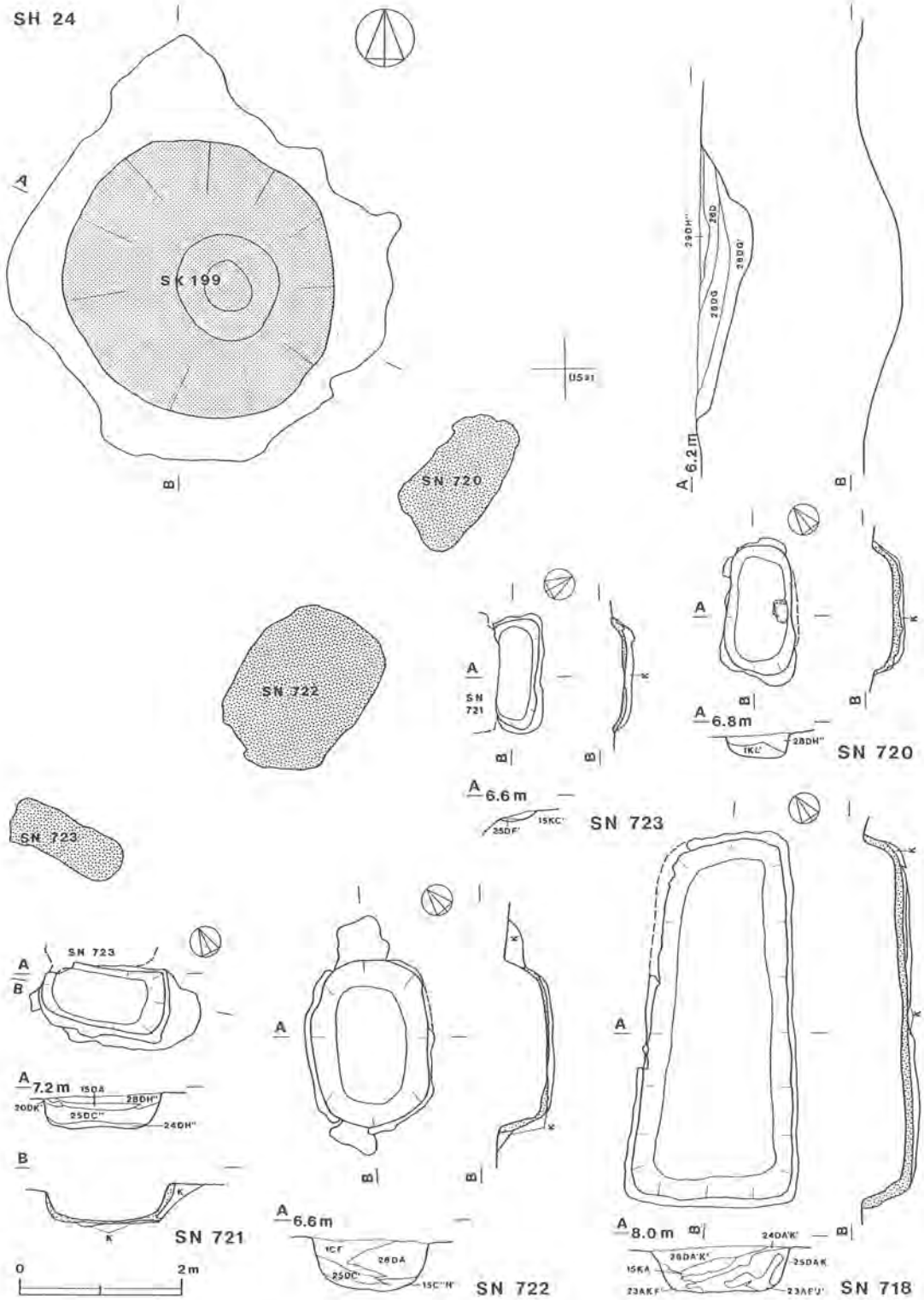
第93図 第24製塩跡遺構配置図

第24製塩跡一覧表

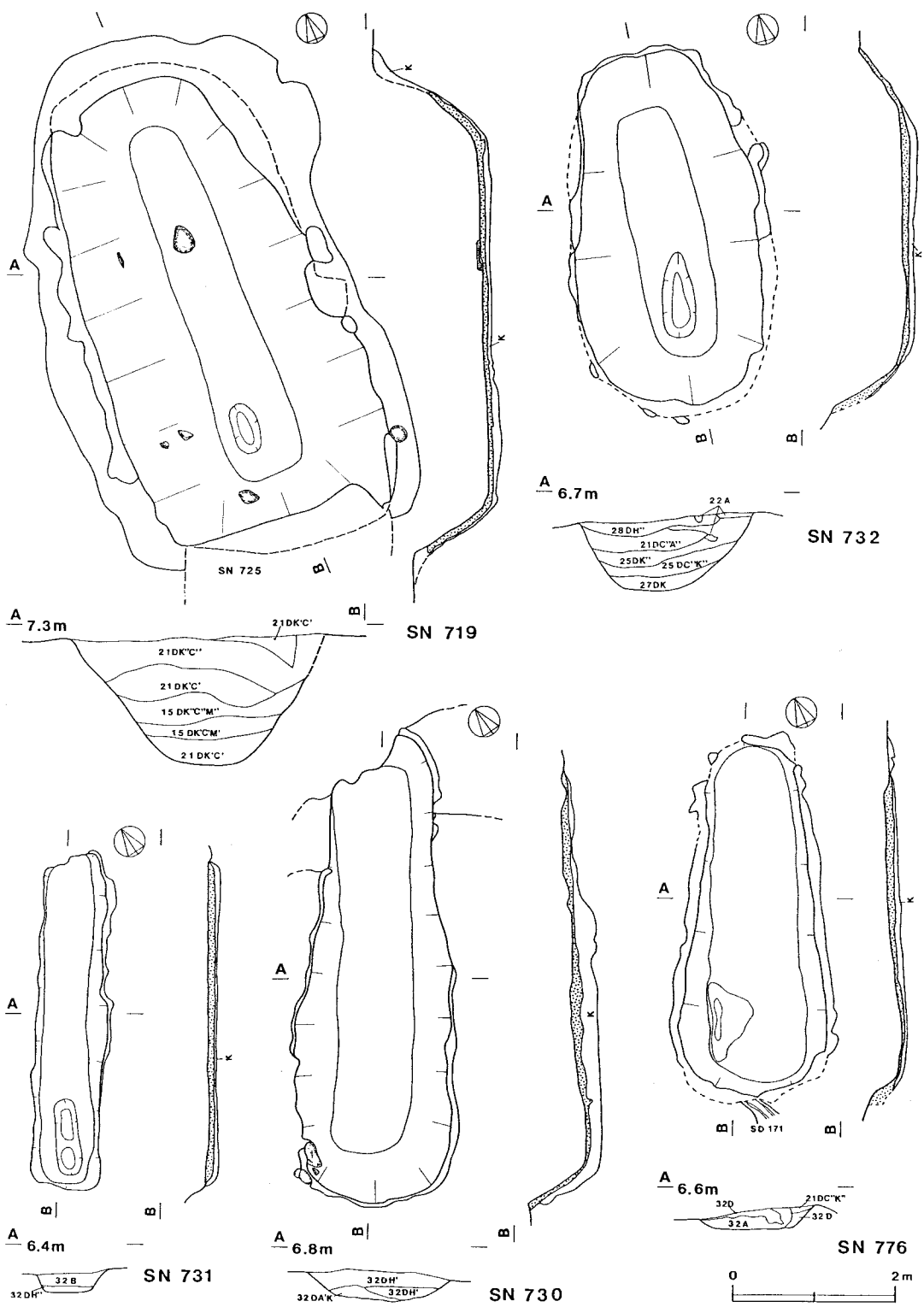
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	V5c2	7.87	199	720,722	723	718,776	—	最新
2	V5c2	7.87	199	720,722	723	719,732	—	第1グループより古い
3	V5c2	7.87	199	720,722	721	730,731	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.32m，東西4.75mの不定形を呈している。砂上に厚さ15cmの灰混じりの黒色土を貼りつけて構築し，中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出

SH 24



第94図 第24製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第95図 第24製塩跡鹹水槽実測図

場 2 基が位置している。しかし、この黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出できなかったもので、釜屋の規模と形状等の詳細は不明である。

竈 U4j₉区を中心に 1 基 (第199号竈) 検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径 3.56m, 短径3.34m, 深さ0.70m である。砂を鍋状に掘り込んで構築しており、覆土は、上層に周辺からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけて灰が15~40cm堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
199	U4j ₉	N-35°-W	楕円形	3.56	3.34	0.70	自然	6.12		

釜屋内鹹水槽 V4a₀区から 2 基 (第720・722号鹹水槽) 検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.59・2.02m, 短軸0.65・1.43m, 深さ0.36・0.62m である。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ 1~12cmの粘土を貼って構築している。第722号鹹水槽から土師質土器片 2 点が出土している。

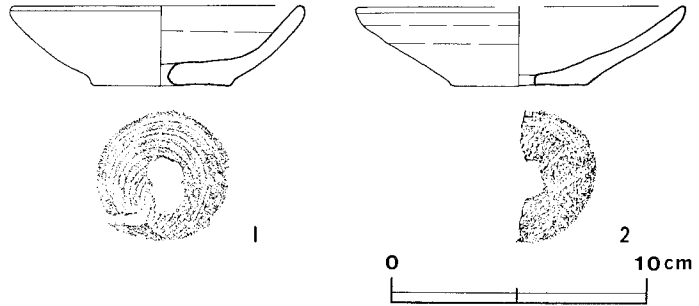
居出場 V4b₉区から 2 基 (第721・723号鹹水槽) が重複して検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.53・1.36m, 短軸0.79・0.39m, 深さ0.44・0.16m である。底面は平坦及び皿状を呈し、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。第721号鹹水槽は攪乱により粘土壁がない状態で検出されている。第721号鹹水槽は、第723号鹹水槽の下から検出されていることから、第723号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
718	V5e ₁	N-36°-E	隅丸長方形	4.50	1.52	0.59	3~15	外傾	平坦	自然	7.87	IVA4b	屋外鹹水槽
719	V5b ₃	N- 4°-E	隅丸長方形	5.72	3.22	1.54	4~12	緩斜	平坦	自然	6.81	IVA4d	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、足掛け石1点、底面一石1点、 [㊦] 石2点、 [㊧] 石1点
720	V4a ₀	N-44°-E	隅丸長方形	1.59	0.65	0.36	3~11	緩斜	平坦	自然	6.62	IVA2a	釜屋内鹹水槽、底面一石1点
721	V4b ₉	N-51°-W	隅丸長方形	1.53	0.79	0.44	1~9	外傾	平坦	自然	7.06	IVA2a	居出場、 [㊦] 土師質土器の皿1点(第96図1)、第723号鹹水槽と重複
722	V4a ₀	N-35°-E	隅丸長方形	2.02	1.43	0.62	1~12	外傾	平坦	自然	6.39	IVA3b	釜屋内鹹水槽、底面一土師質土器片2点(第96図2)
723	V4b ₉	N-51°-W	隅丸長方形	1.36	0.39	0.16	1~5	緩斜	皿状	自然	6.45	IVB2a	居出場、第721号鹹水槽と重複
730	V5b ₁	N-36°-E	隅丸長方形	5.75	1.96	0.45	2~15	緩斜	凹凸	自然	6.50	IVA4a	屋外鹹水槽、 [㊦] 石2点、 [㊧] 石2点
731	U5j ₂	N-34°-E	隅丸長方形	4.15	0.87	0.26	5~11	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA4a	屋外鹹水槽
732	V5a ₃	N- 3°-E	隅丸長方形	4.41	4.27	0.94	3~16	緩斜	平坦	自然	6.46	IVA4b	屋外鹹水槽
776	V5c ₂	N-26°-E	舟 形	4.35	1.82	0.39	1~11	緩斜	平坦	自然	6.26	VIA4a	屋外鹹水槽

屋外鹹水槽 U5j₂区・V5a₃区・V5b₁・b₃区・V5c₂区・V5e₁区の6か所から6基(第718・719・730~732・776号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸4.15~5.75m, 短軸0.87~4.27m, 深さ0.26~1.54mである。底面は、平坦及び凹凸で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~16cmの粘土を貼って構築している。

出土遺物 第721号鹹水槽の覆土中から土師質土器の皿1点(第96図1)、第722号鹹水槽の覆土中からも土師質土器の皿1点(第96図2)が出土している。いずれも、周囲からの流れ込みと思われる。



第96図 第24製塩跡出土遺物実測・拓影図

第721号鹹水槽出土土器観察表(第96図1)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師質土器	A 11.3	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。底部は使用後に穿孔されている。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母・バミス・石英 明赤褐色 普通	P56 100% 第721号鹹水槽覆土
		B 3.3				
		C 5.4				

第722号鹹水槽出土土器観察表(第96図2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	皿 土師質土器	A [13.0]	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。底部は使用後に穿孔されている。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・バミス・長石・雲母 淡赤褐色 普通	P57 40% 第722号鹹水槽覆土
		B 3.2				
		C [5.2]				

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第721・722号鹹水槽から15~16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる、その時期を明確にすることができなかった。

第25製塩跡(第97図)

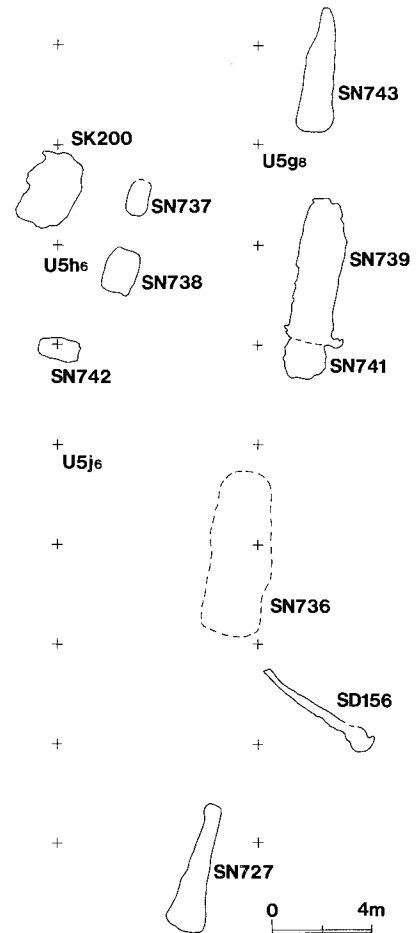
位置 調査区の南部 U5i₇区を中心に確認され、標高6.35mに位置している。

関連遺構 第200号竈、第727・736~739・741~743号鹹水槽及び第156号土樋で構成されている。

これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いや重複関係から、3グループに区別できる。第1グループは、第200号竈、釜屋内鹹水槽(737, 738), 居出場(742)及び屋外鹹水槽(727)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(736, 739, 743)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(739, 741, 743)で構成されている。土樋は1条検出されているが、部分的なためグルーピングできなかった。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、竈を中心に南北3.23m, 東西2.27mの不定形を呈している。砂上に厚さ20~30cmの灰混じりの黒色土を貼りつけて構築し、中央部に竈1基, 東側に鹹水槽2基, 南側に居出場1基が位置している。しかし、建屋を示す柱穴等は検出できなかったため、釜屋の規模と形状等の詳細は不明である。

竈 U5g_s区を中心に1基(第200号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.22m, 短径2.21m, 深さ0.27mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており、底面は多少凹凸が見られる。覆土は、上層に周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層と下層には焼砂や炭化粒子を含む灰が20~30cmの厚さで堆積している。



第97図 第25製塩跡遺構配置図

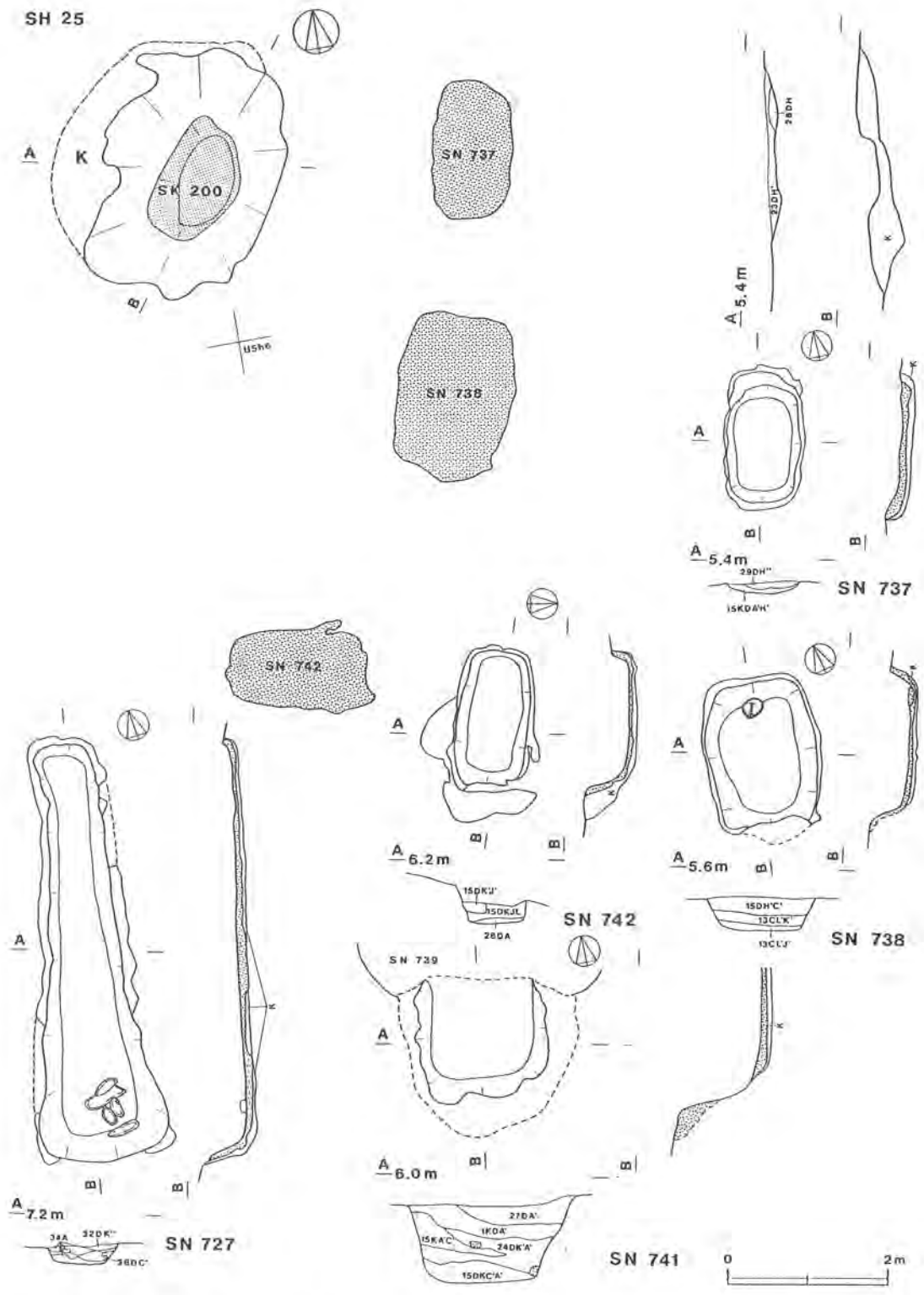
第25製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	U5i ₇	6.35	200	737,738	742	727	-	最新
2	U5i ₇	6.35	200	737,738	742	736,739,743	-	第1グループより古い
3	U5i ₇	6.35	200	737,738	742	739,741,743	-	最古

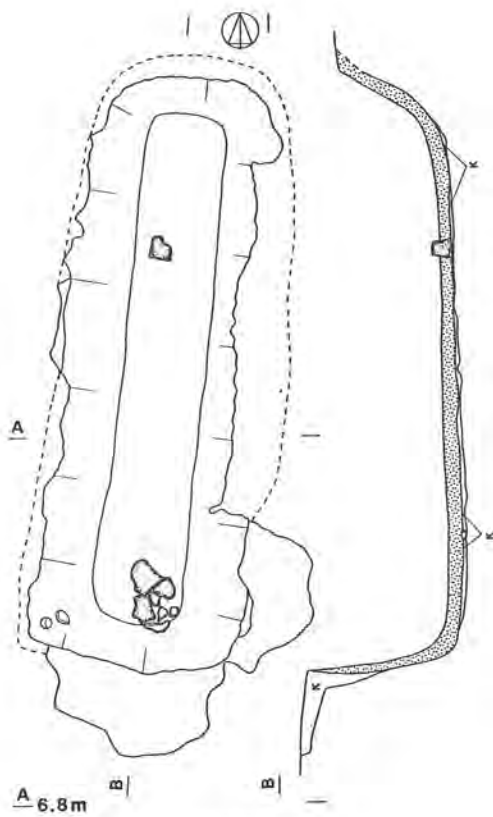
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
200	U5g _s	N-31°-E	楕円形	3.22	2.21	0.27	自然	5.17		

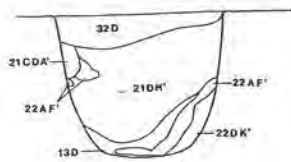
釜屋内鹹水槽 U5g_s区とU5h_e区から2基(第737・738号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.59・1.76m, 短軸0.82・1.37m, 深さ0.20・0.33mである。底面



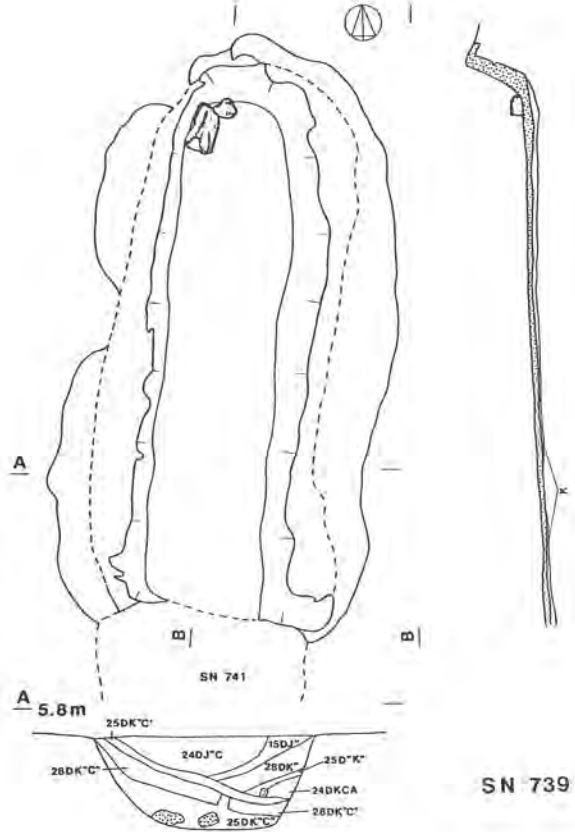
第98図 第25製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



A 6.8m



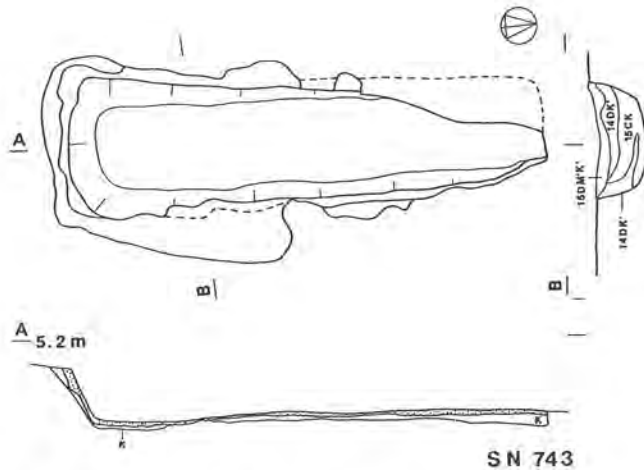
SN 736



A 5.8m

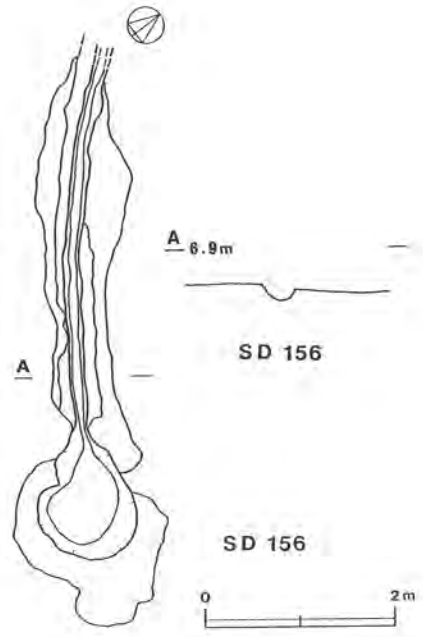
SN 741

SN 739



A 5.2m

SN 743



A 6.9m

SD 156

SD 156



第99図 第25製塩跡鹹水槽実測図

は皿状及び平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～15cmの粘土を貼って構築している。

居出場 U5i6区から1基(第742号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.73m、短軸0.90m、深さ0.30mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。


屋外鹹水槽 U5f8区・U5h8区・U5i8区・V5a7区・V5d7区の5か所から5基(第727・736・739・741・743号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸5.03～7.32m、短軸1.46～2.36m、深さ0.44～1.37mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ2～14cmの粘土を貼って構築している。第741号鹹水槽の南西コーナー部の上から第739号鹹水槽の南西コーナー部と思われる壁の立ち上がりを検出したことから、第739号鹹水槽が新しいものと思われる。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
727	V5d7	N-16°-E	舟形	5.25	1.60	0.44	2～13	緩斜	平坦	自然	6.85	VIA4a	屋外鹹水槽、底面一石5点、㊸石1点
736	V5a7	N-7°-E	隅丸長方形	6.27	2.36	1.37	10～14	外傾	平坦	自然	6.35	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、底面一石8点
737	U5g8	N-13°-E	隅丸長方形	1.59	0.82	0.20	4～15	緩斜	皿状	自然	5.19	IVB2a	釜屋内鹹水槽
738	U5h8	N-20°-E	隅丸長方形	1.76	1.37	0.33	2～8	緩斜	平坦	自然	5.18	IVA2a	釜屋内鹹水槽、底面一石1点、㊸焼石1点
739	U5h8	N-8°-E	隅丸長方形	5.66	1.82	0.56	3～11	外傾	平坦	自然	5.46	IVA4b	屋外鹹水槽、底面一石2点、第741号鹹水槽と重複
741	U5i8	N-8°-E	隅丸長方形	7.32	1.82	1.02	3～11	外傾	平坦	自然	5.25	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、第739号鹹水槽と重複
742	U5i6	N-75°-W	隅丸長方形	1.73	0.90	0.30	2～10	外傾	平坦	自然	5.92	IVA2a	居出場、底面一獣骨
743	U5f8	N-6°-E	隅丸長方形	5.03	1.46	0.55	2～7	外傾	平坦	自然	4.90	IVA4b	屋外鹹水槽

土樋 V5b8区からV5c9区にかけて1条(第156号土樋)検出され、長さ6.00m、上幅16cm、下幅10cm、深さ5cmで、断面形は「U」字形を呈している。西側が削平されているため、どの釜屋内鹹水槽と連結していたかは不明である。

土樋一覧表

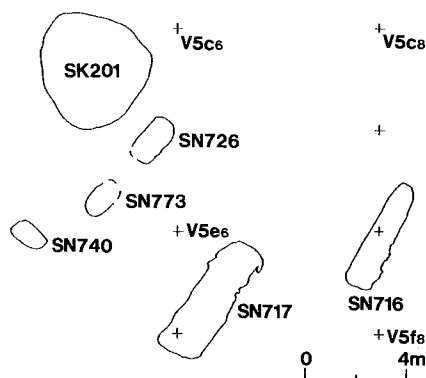
土樋番号	位置	主軸方向	規模				粘土の厚さ(cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高(m)	備考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
156	V5b8 ～V5c9	N-52°-W	6.00	16	10	5	1～4		自然	無	6.62 ～6.72	

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の重複関係と確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第26製塩跡(第100図)

位置 調査区の南部 V5d₆区を中心に確認され、標高7.70mに位置している。

関連遺構 第201号竈，第716・717・726・740・773号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，屋外鹹水槽の長軸方向や平面形の違いから，2グループに区別できる。第1グループは，第201号竈，釜屋内鹹水槽(726, 773)，居出場(740)及び屋外鹹水槽(716)で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽(717)で構成されている。



第100図 第26製塩跡遺構配置図

第26製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	V5d ₆	7.70	201	726,773	740	716	-	新
2	V5d ₆	7.70	201	726,773	740	717	-	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北7.80m，東西6.45mの不定形を呈している。砂上に厚さ27cmの灰混じりの黒色土を貼り付け地盤を構築し，中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出場1基が位置している。しかし，この黒色土の範囲を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出できなかったため，釜屋の規模と形状等は不明である。

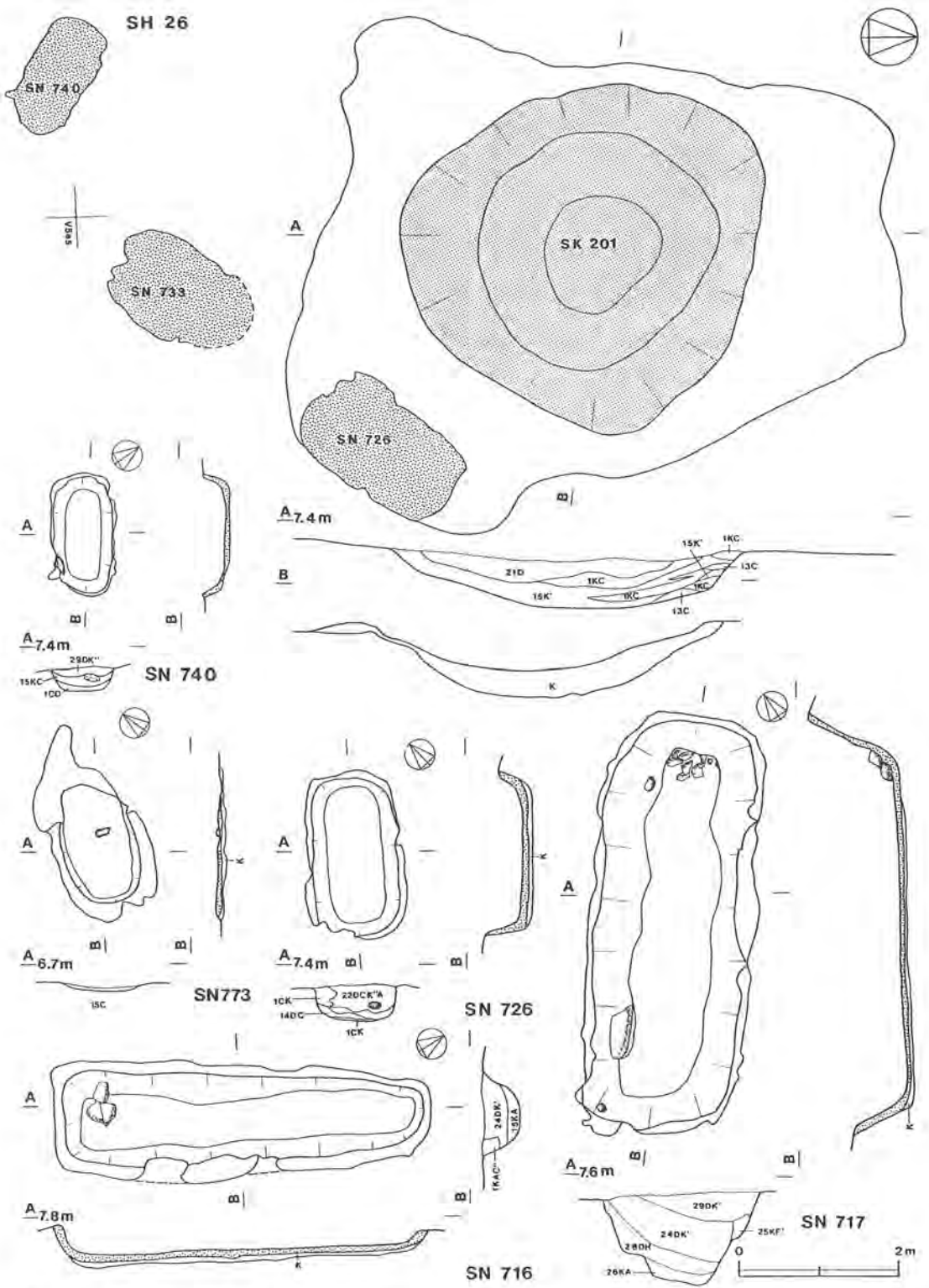
竈 V5c₆区を中心に1基(第201号竈)検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径4.70m，短径4.19m，深さ0.79mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており，覆土は，上層に周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し，中層には炭化粒子を含む灰が10～35cmの厚さで堆積し，下層には焼砂を含む灰が30cmの厚さで堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
201	V5c ₆	N-25°-W	楕円形	4.70	4.19	0.79	自然	7.0L		

釜屋内鹹水槽 V5d₆区から2基(第726・773号鹹水槽)検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸1.98・1.51m，短軸1.06・0.95m，深さ0.42・0.09mである。底面は平坦で，壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後，黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。

居出場 V5e₄区から1基(第740号鹹水槽)検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模



第101図 第26製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

は、長軸1.48m、短軸0.77m、深さ0.26mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1～9cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 V5d_s区とV5e_s区から2基(第716・717号鹹水槽)検出され、平面形は、舟形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸4.54・5.24m、短軸1.18・1.77m、深さ0.44・1.16mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ4～12cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
716	V5d _s	N-27°-E	舟形	4.54	1.18	0.44	6～12	緩斜	平坦	自然	7.70	VIA4a	屋外鹹水槽、底面一石2点、㊸石1点
717	V5e _s	N-38°-E	隅丸長方形	5.24	1.77	1.16	4～10	外傾	平坦	自然	7.48	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、底面一石13点、㊸石2点
726	V5d _s	N-42°-E	隅丸長方形	1.98	1.06	0.42	4～10	外傾	平坦	自然	7.11	IVA2a	釜屋内鹹水槽
740	V5e _a	N-54°-W	隅丸長方形	1.48	0.77	0.26	1～9	外傾	平坦	自然	7.15	IVA2a	居出場、㊸石1点
773	V5d _s	N-44°-E	隅丸長方形	1.51	0.95	0.09	1～7	緩斜	平坦	自然	6.46	IVA2a	釜屋内鹹水槽、底面一石1点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第27製塩跡(第102図)

位置 調査区の南部 T5f_s区を中心に確認され、標高5.20mに位置している。

関連遺構 第202号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

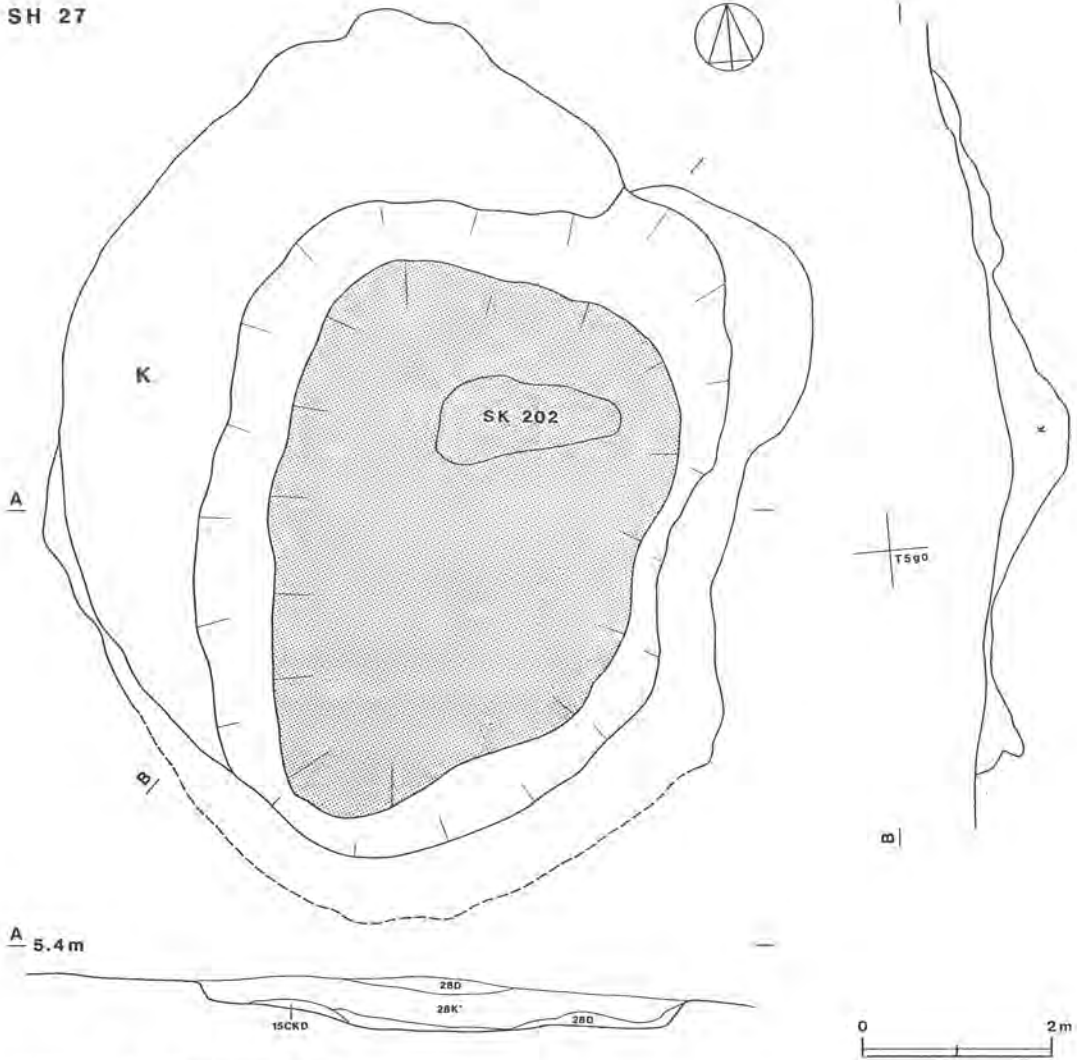
第27製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	T5f _s	5.20	202	—	—	—	—	—

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北9.62m、東西7.45mの不定形を呈している。砂上に厚さ9～15cmの炭化粒子と灰を含む黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈1基が位置している。黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴は検出できなかったため、釜屋の規模や形状等の詳細は不明である。

竈 T5f_s区を中心に1基(第202号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径7.65m、短径4.90m、深さ1.01mである。覆土は、上層に周囲からの流れ込みと思われる灰や炭化粒子を少量含む砂が自然堆積し、中層と下層には灰を含む黒色土が83cmの厚さで堆積している。

SH 27



第102図 第27製塩跡竈実測図

竈一覧表

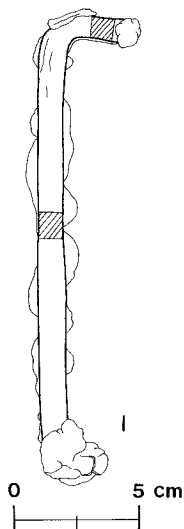
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
202	T5fa	N-32°E	楕円形	7.65	4.90	1.01	自然	5.20	②鉄製品4点(耳金片3点, 鍍片1点), 木片2点, 焼石25点	

第202号竈出土鉄製品一覧表(第103図1)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
1	耳金	18.5	1.1	1.1	162.9	第202号竈	M34 両端部折れ曲がる

出土遺物 第202号竈の覆土中から耳金片3点, 鉄片1点, 木片2点, 焼石25点が出土し, そのうち残存状態の良い耳金1点(第103図1)だけを掲載する。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが, 竈が1基だけ検出されていることから, 1期だけの操業と思われる。この製塩跡の時期は, 第202号竈から耳金が出土しているが, その時期を明確にすることができなかった。

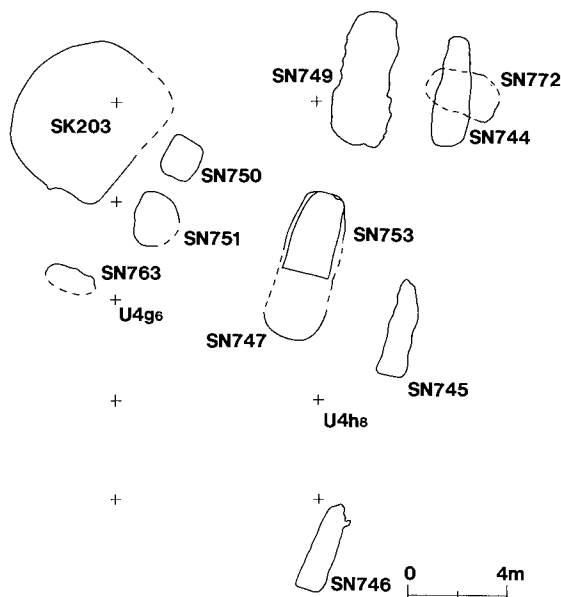


第103図 第27製塩跡
出土遺物実測図

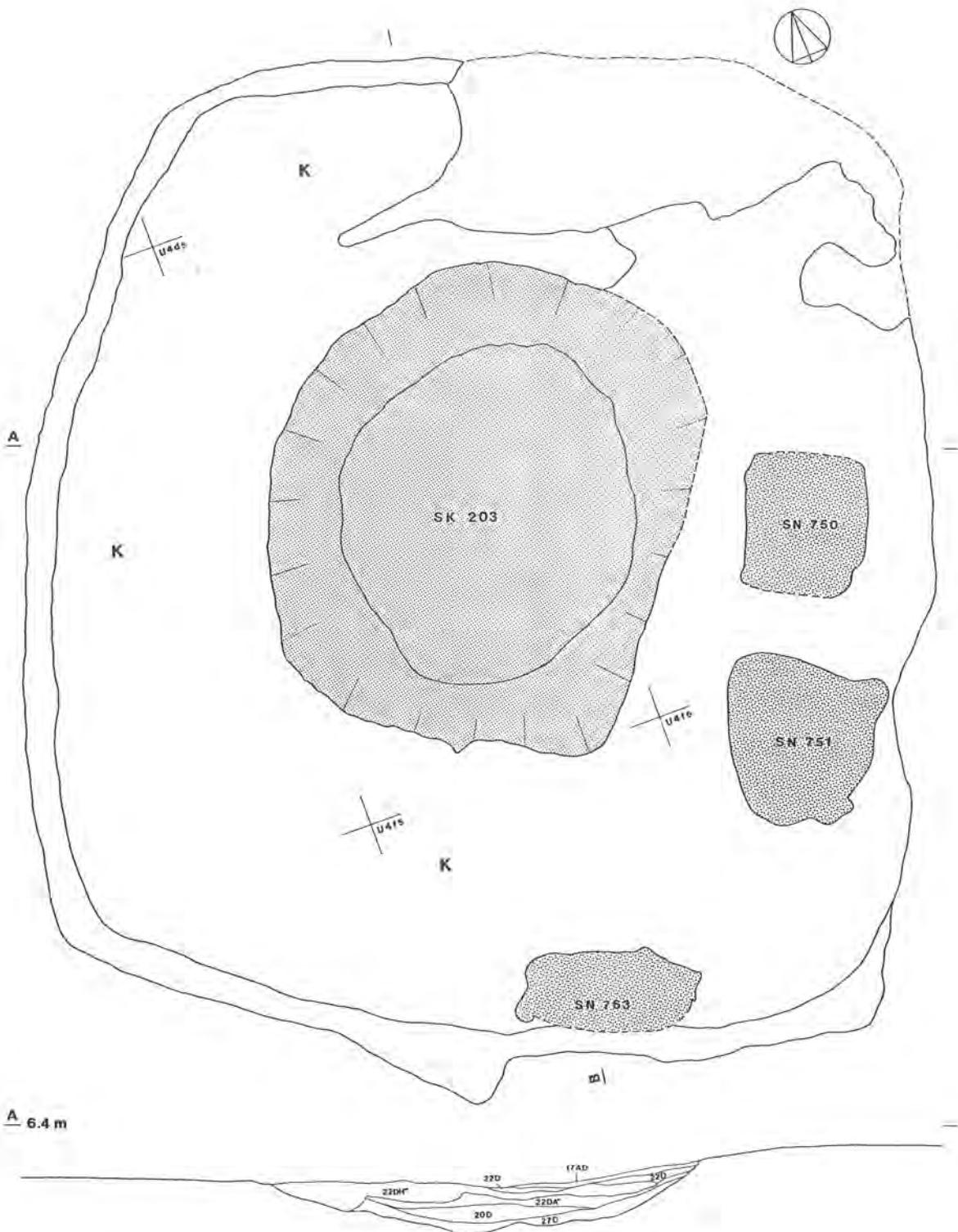
第28製塩跡(第104図)

位置 調査区の南部 U4f₇区を中心に確認され, 標高6.19mに位置している。

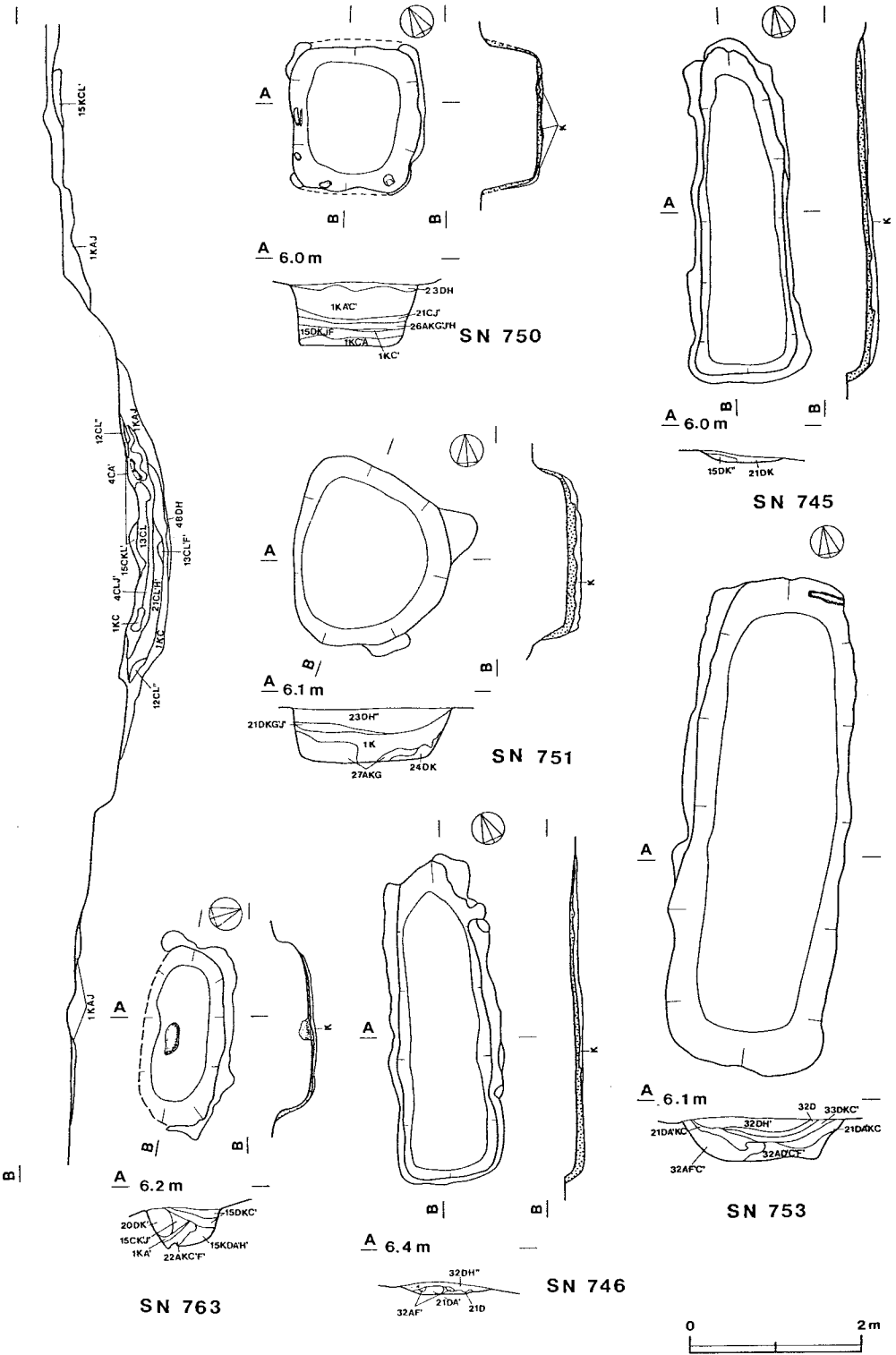
関連遺構 第203号竈, 第744~747・749~751・753・763・772号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は, 鹹水槽の長軸方向の違いや重複関係から, 4グループに区別できる。第1グループは, 第203号竈, 釜屋内鹹水槽(750, 751), 居出場(763)及び屋外鹹水槽(745, 746, 753)で構成されている。第2グループは, 竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で, 屋外鹹水槽(745~747)で構成されている。第3グループは, 竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で, 屋外鹹水槽(744, 749)で構成されている。第4グループは, 竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で, 屋外鹹水槽(772)で構成されている。



第104図 第28製塩跡遺構配置図



第105図 第28製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第28製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	U4f ₇	6.19	203	750,751	763	745,746,753	—	最新
2	U4f ₇	6.19	203	750,751	763	745,746,747	—	第1グループ より古い
3	U4f ₇	6.19	203	750,751	763	744,749	—	第1・2グループ より古い
4	U4f ₇	6.19	203	750,751	763	772	—	最古

釜屋 確認した黒色土の範囲は、南北12.85m、東西10.48mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-32°-Eを指している。砂上に厚さ5～10cmの炭化粒子と灰を含む黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場1基が位置している。しかし、この黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等を検出することはできなかった。

竈 U4e₅区を中心に1基(第203号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径6.40m、短径5.27m、深さ1.13mである。砂を鍋状に掘り、厚さ5～15cmの黒色土を貼って地盤を構築している。覆土は、上層に周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層と下層に貝殻片と礫を含む灰が30cmの厚さで堆積している。

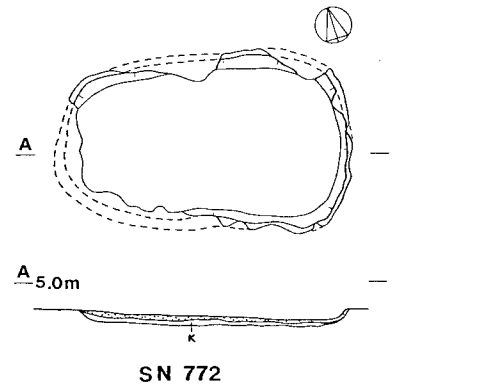
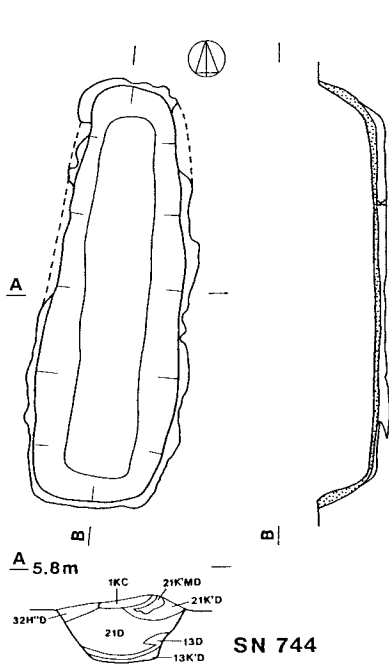
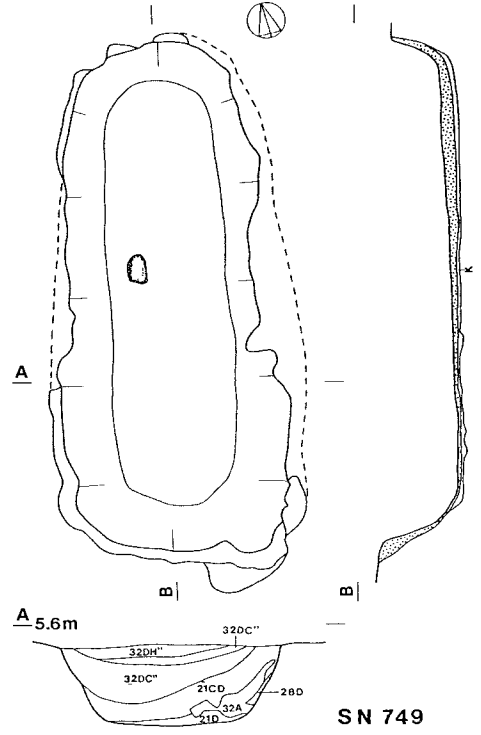
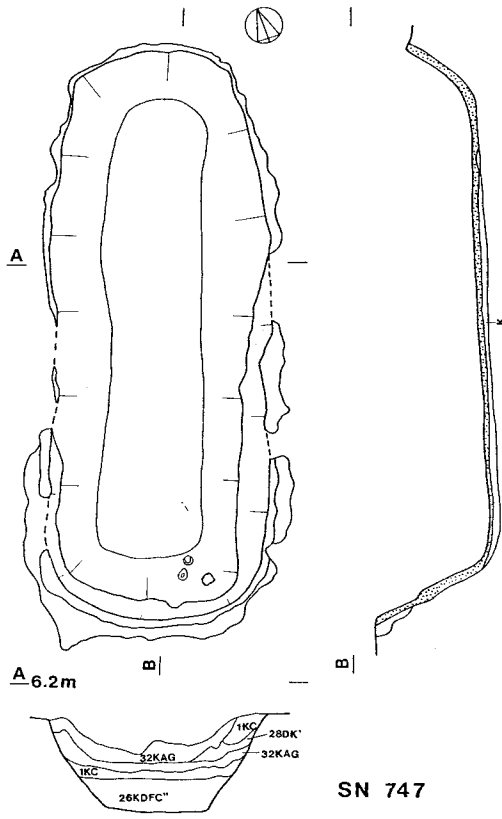
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
203	U4e ₅	N-32°-E	楕円形	6.40	5.27	1.13	自然	6.15		

釜屋内鹹水槽 U4e₅区とU4f₆区から2基(第750・751号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.73・(1.86)m、短軸[径]1.52・2.23m、深さ0.66・0.38mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。

居出場 U4f₅区から1基(第763号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.10m、短軸(0.92)m、深さ0.43mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～2cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 U4d₈・d₉区・U4f₇区・U4g₈区・U4i₈区の5か所から7基(第744～747・749・753・772号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸2.82～6.09m、短軸1.09～2.35m、深さ0.11～1.21mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1～13cmの粘土を貼って構築している。第744号鹹水槽の下から第772号鹹水槽が検出されていることから、第744号鹹水槽が新しい。第747号鹹水槽と第753号鹹水槽も重複しており、第753号鹹水槽の下から第747号鹹水槽が検出されたことから、第



第106图 第28製塩跡鹹水槽実測图

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
744	U4d ₉	N-6°-E	隅丸長方形	4.48	1.51	0.54	3~9	緩斜	平坦	自然	5.39	IVA4b	屋外鹹水槽, 第772号鹹水槽と重複
745	U4g ₈	N-12°-E	舟 形	3.90	1.13	0.24	2~9	緩斜	平坦	自然	5.74	VIA4a	屋外鹹水槽
746	U4i ₈	N-21°-E	舟 形	3.65	1.09	0.12	3~11	緩斜	平坦	自然	6.19	VIA4a	屋外鹹水槽
747	U4f ₇	N-19°-E	隅丸長方形	6.09	2.20	1.21	2~9	緩斜	平坦	自然	5.63	IVA4c	屋外鹹水槽, 足掛け石1点, ㊦石6点, 第753号鹹水槽と重複
749	U4d ₈	N-12°-E	隅丸長方形	5.42	2.35	0.86	1~13	緩斜	平坦	自然	5.40	IVA4b	屋外鹹水槽, 底面一石1点
750	U4e ₈	N-29°-E	隅丸長方形	1.73	1.52	0.66	1~7	外傾	平坦	自然	5.72	VA2b	釜屋内鹹水槽, ㊦石5点
751	U4f ₆	N-33°-E	楕 円 形	(1.86)	2.23	0.38	3~10	外傾	平坦	自然	5.91	IA2a	釜屋内鹹水槽
753	U4f ₇	N-19°-E	隅丸長方形	(3.38)	1.71	0.47	3~10	緩斜	平坦	自然	5.85	IVA4a	屋外鹹水槽, 第747号鹹水槽と重複
763	U4f ₆	N-68°-W	隅丸長方形	2.10	(0.92)	0.43	1~2	外傾	平坦	自然	5.73	IVA3a	居出場, 底面一石1点
772	U4d ₈	N-70°-W	隅丸長方形	2.82	1.57	0.11	1~7	緩斜	平坦	自然	4.74	IVA3a	屋外鹹水槽, 第744号鹹水槽と重複

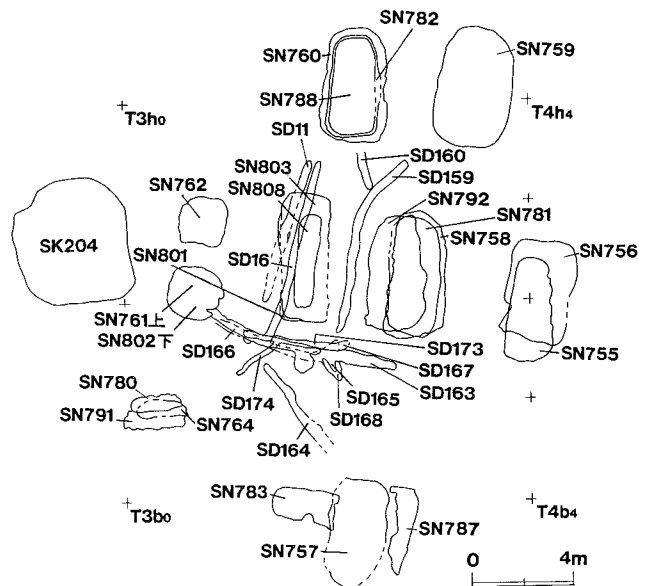
753号鹹水槽が新しい。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。四つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の重複関係や確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

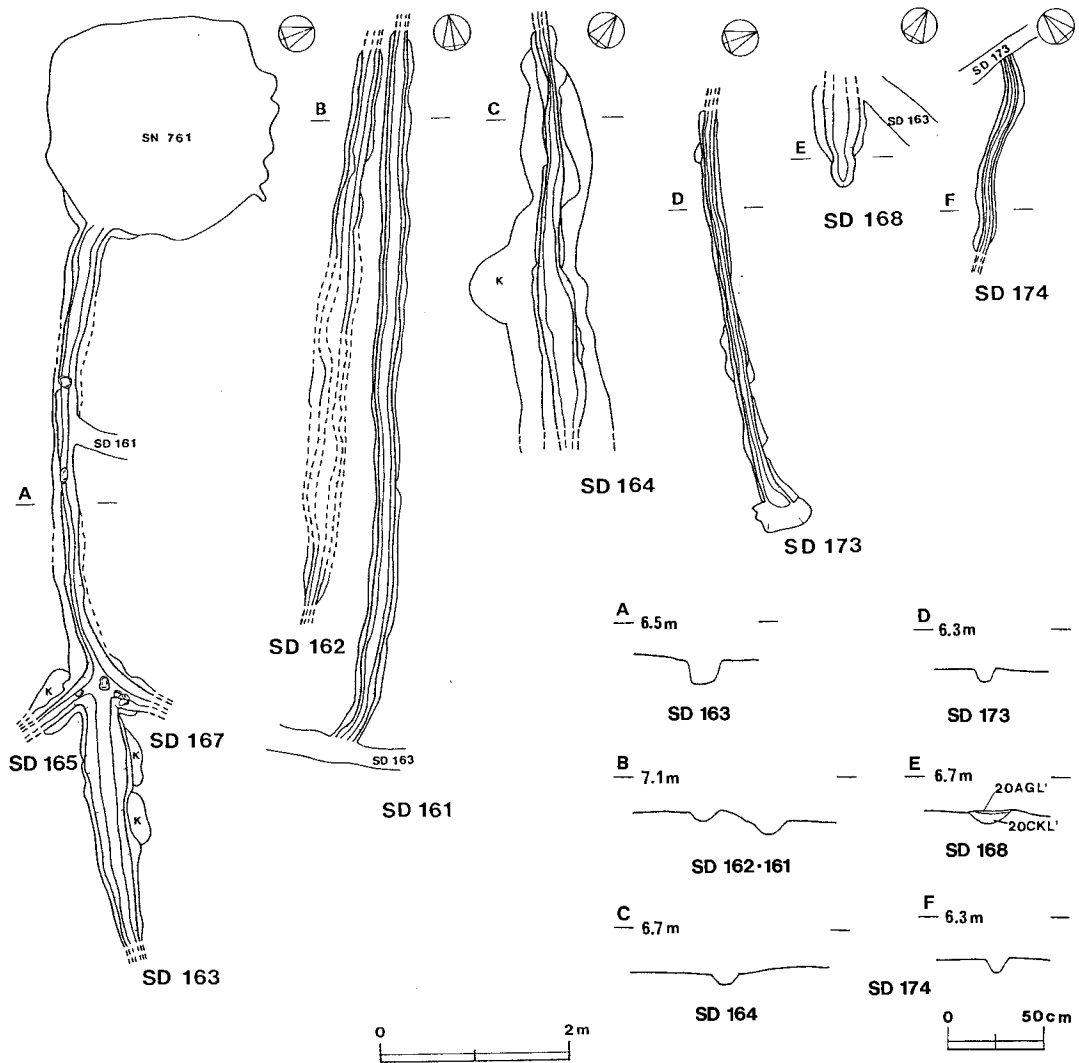
第29製塩跡(第107図)

位置 調査区の南部 T4i₁区を中心に確認され、標高6.70mに位置している。

関連遺構 第204号竈, 第755~762・764・780~783・787・788・791・792・801~803・808号鹹水槽及び第159~168・173・174号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽や土樋の重複関係から、4グループに区別できる。第1グループは、第204号竈, 釜屋内鹹水槽(761, 762), 居出場(764), 屋外鹹水槽(755, 756, 759)及び土樋(159, 166, 167)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(757, 758, 760, 781, 782, 787,



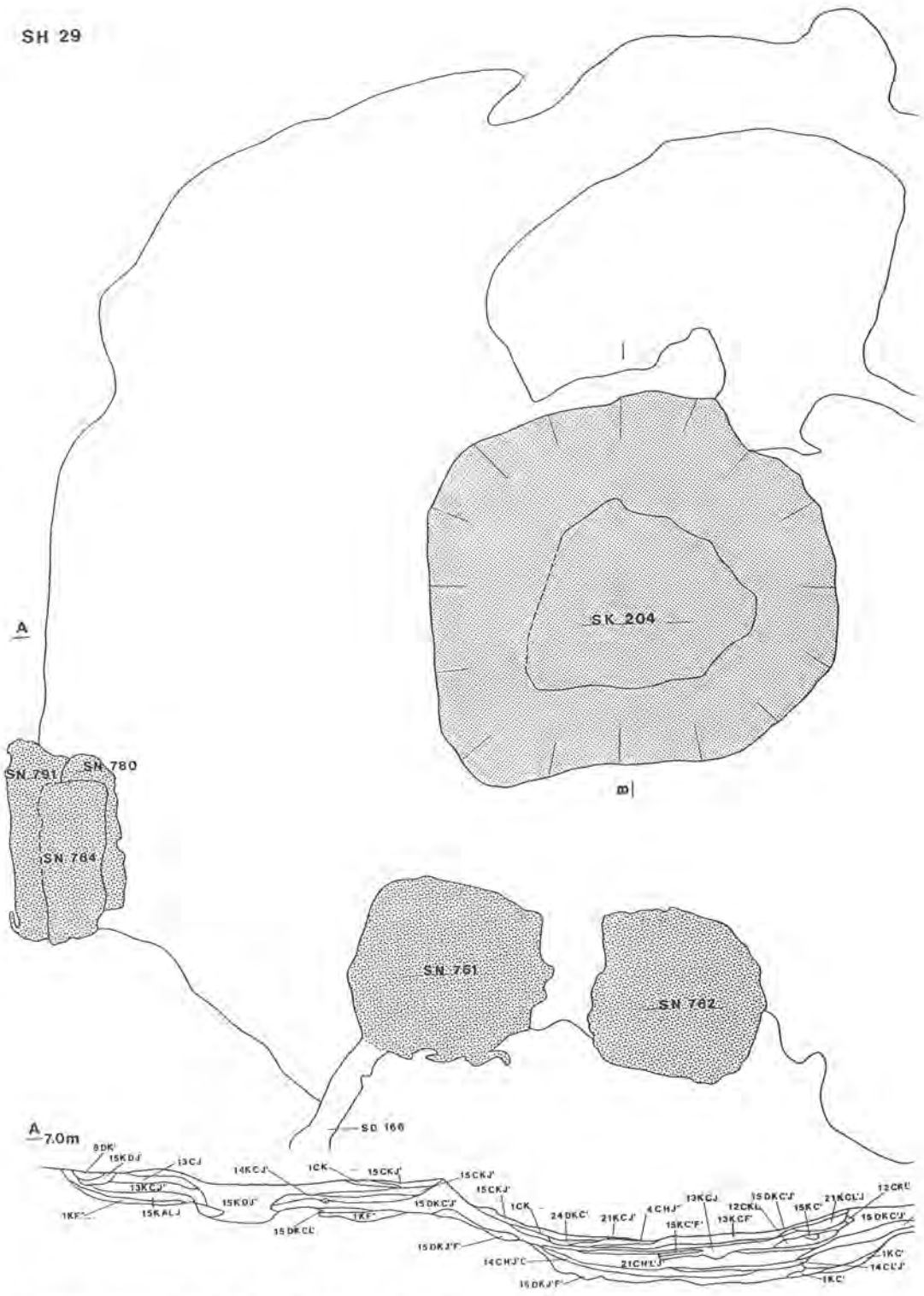
第107図 第29製塩跡遺構配置図



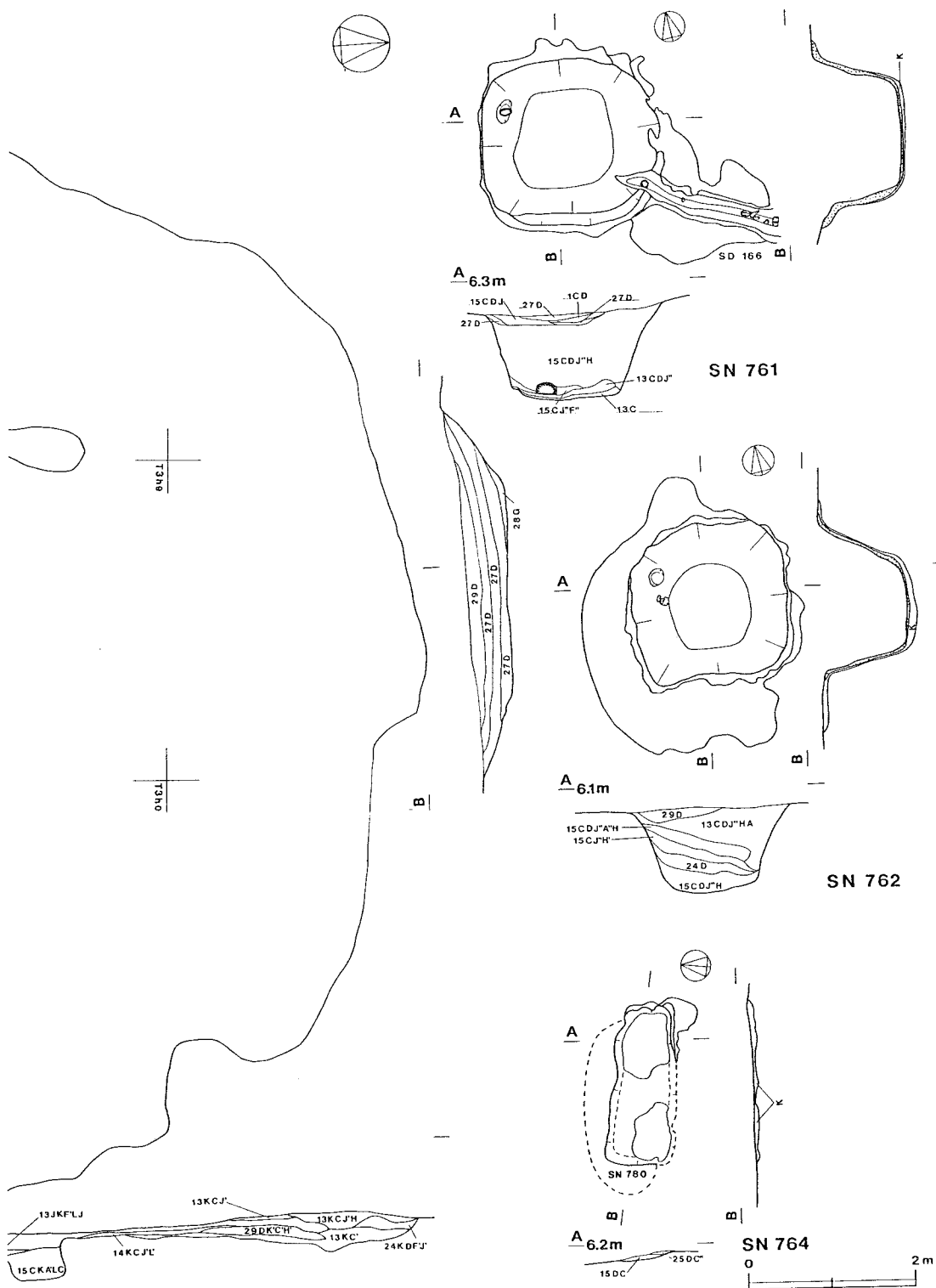
第108図 第29製塩跡土樋実測図(1)

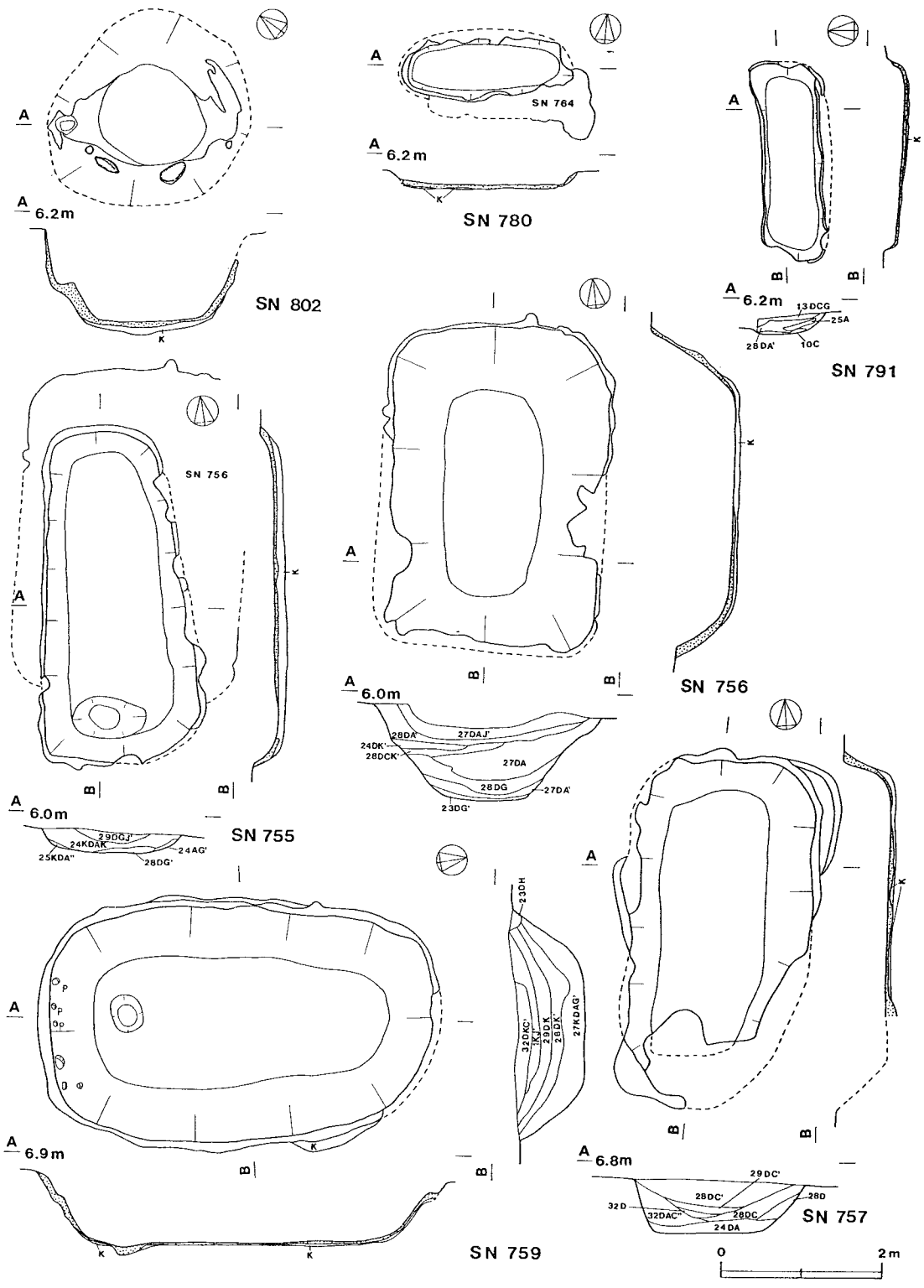
788, 792) 及び土樋 (159~165, 168) で構成されている。第3グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽 (762, 802), 居出場 (780) 及び屋外鹹水槽 (801, 803, 808) で構成されている。第4グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第3グループと同一で、居出場 (791), 屋外鹹水槽 (783) 及び土樋 (173, 174) で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北15.85m、東西14.10mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-15°-Eを指している。砂上に厚さ8~23cmの貝殻片や灰混じりの黒色土を鍋状に貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽3基、南側に居出場3基が位置している。西側に釜屋内へ向かって傾斜した出入口が付設されている。しかし、この黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出できなかった。

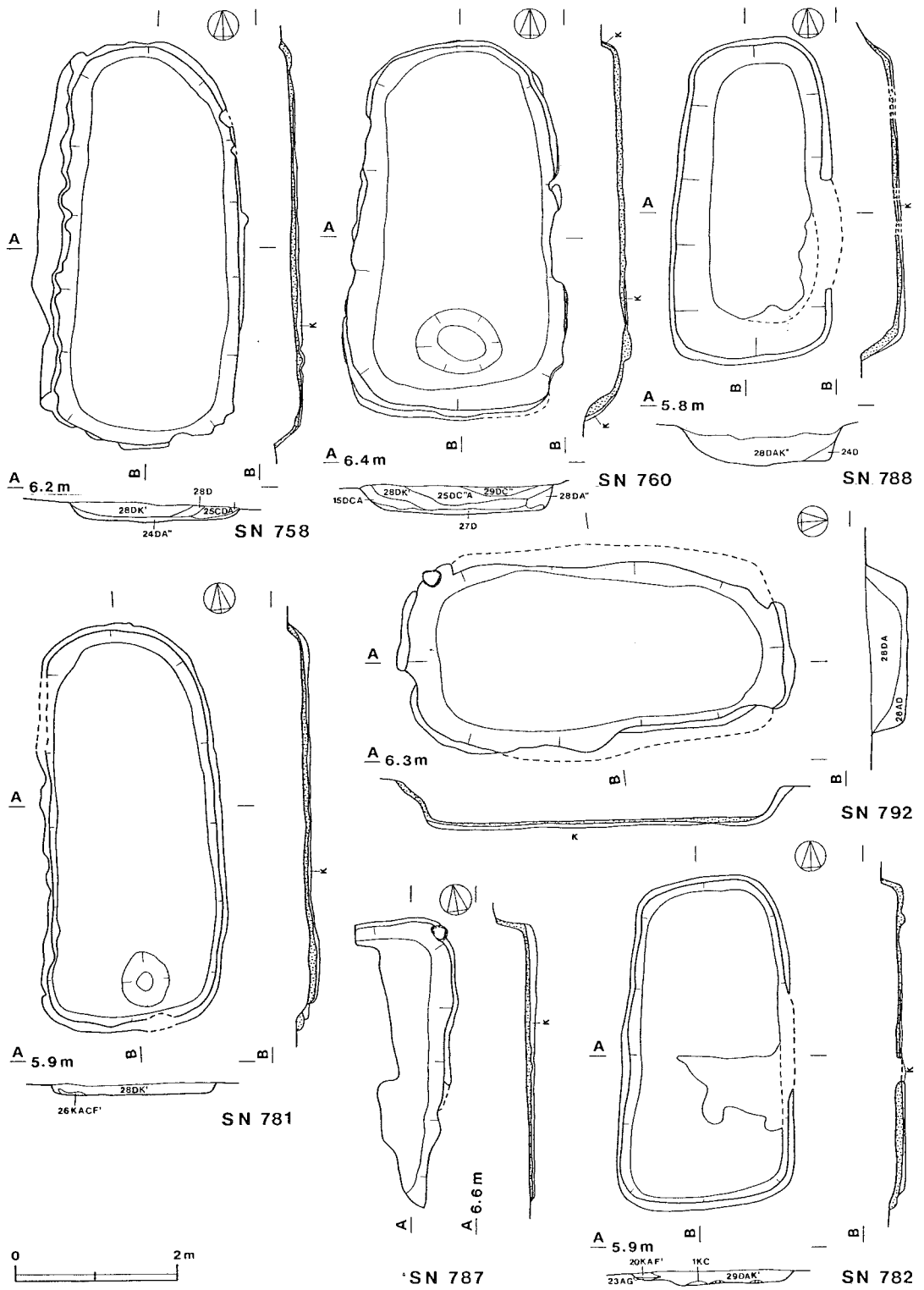


第109図 第29製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

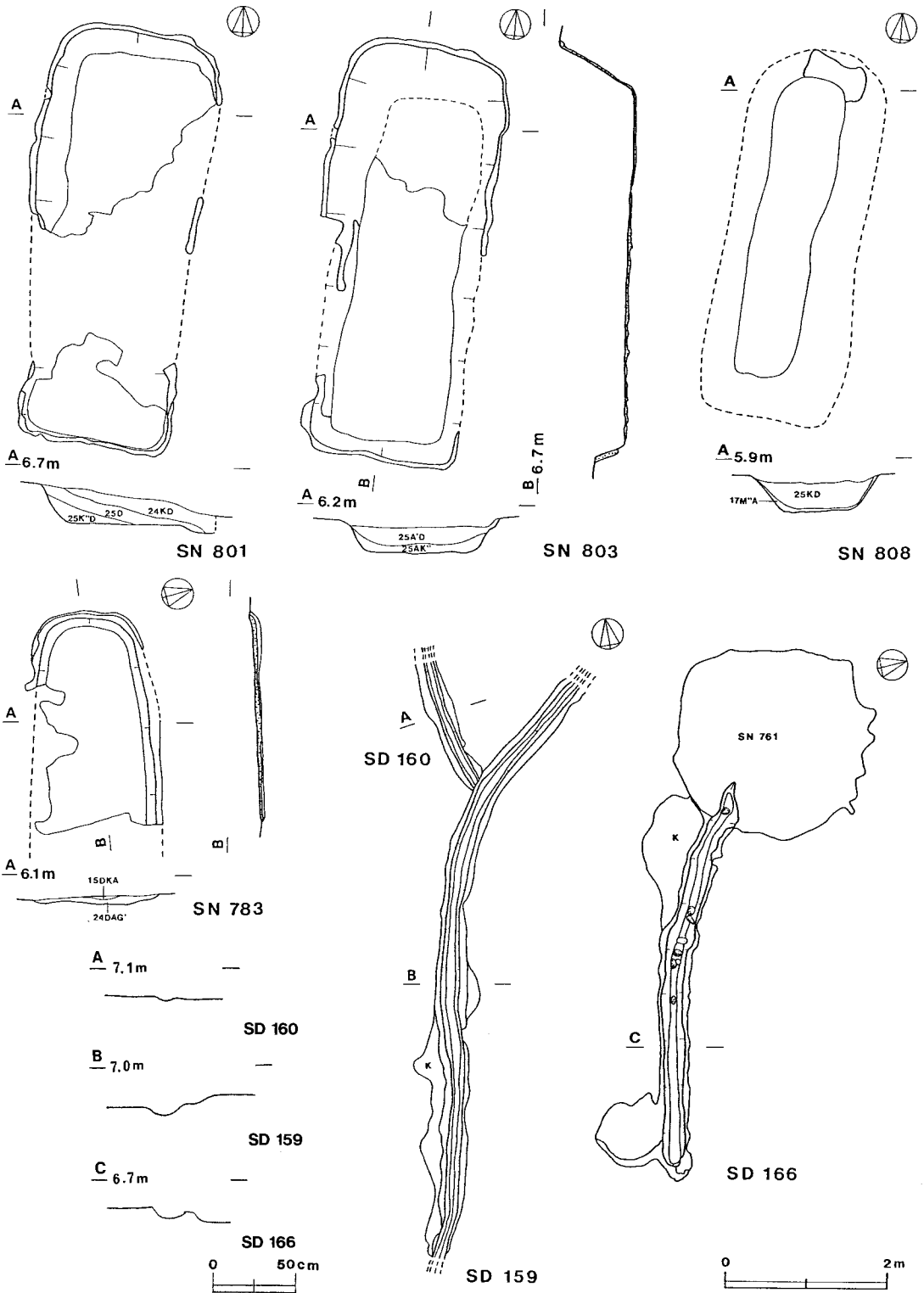




第110図 第29製塩跡鹹水槽実測図(2)



第111図 第29製塩跡鹹水槽実測図(3)



第112図 第29製塩跡鹹水槽・土樋実測図(4)

第29製塩跡一覽表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	T4i1	6.70	204	761,762	764	755,756,759	159,166,167	最新
2	T4i1	6.70	204	761,762	764	757,758,760,781,782,787,788,792	159,160,161,162,163,164,165,168	第1グループより古い
3	T4i1	6.70	204	762,802	780	801,803,808	—	第1・2グループより古い
4	T4i1	6.70	204	762,802	791	783	173,174	最古

竈 T3i9区を中心に1基(第204号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径5.32m、短径4.73m、深さ0.86mである。覆土は、上層と中層に周囲からの流れ込みと思われる灰黄色の砂と黒色土が自然堆積し、下層には炭化粒子や貝殻片や粘土ブロックを含む灰が30cmの厚さで堆積している。

竈一覽表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
204	T3i9	N-15°-E	楕 円 形	5.32	4.73	0.86	自然	6.39	①鉄製品2点(吊金具1点、耳金1点)	

釜屋内鹹水槽 T3i9区から3基(第761・762・802号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.94~2.20m、短軸1.90~2.07m、深さ0.93~1.14mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~11cmの粘土を貼って構築している。第761号鹹水槽の下から第802号鹹水槽が検出されたことから、第761号鹹水槽が新しい。

居出場 U3a0区から3基(第764・780・791号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.82~2.50m、短軸[径]0.62~0.78m、深さ0.06~0.17mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。3基とも上位が削平されている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~9cmの粘土を貼って構築している。3基の新旧関係は、第764号鹹水槽の下から第780号鹹水槽を検出し、さらに、その下から第791号鹹水槽が検出されたことから、第764号鹹水槽が最も新しく、次いで第780号鹹水槽、第791号鹹水槽の順に古くなる。

屋外鹹水槽 T4g2・g3区・T4i1・i2・i4区・T4j4区・U4b1・b2区・U4d2区の9か所から15基(第755~760・781~783・787・788・792・801・803・808号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、舟形及び楕円形を呈している。規模は、長軸[径](2.52)~5.14m、短軸[径](1.08)~2.97m、深さ0.11~1.20mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1~12cmの粘土を貼って構築している。全体的に屋外鹹

水槽は6か所に位置し、第759号鹹水槽以外は二重・三重に重複している。第760号鹹水槽の下から第782号鹹水槽、その下から第788号鹹水槽と検出されたことから、第760号鹹水槽が最も新しく、次いで第782号鹹水槽、第788号鹹水槽の順に古くなる。第755号鹹水槽の下から第756号鹹水槽が検出されたことから、第755号鹹水槽が新しい。第758号鹹水槽の下から第781号鹹水槽、さらに、その下から第792号鹹水槽が検出されたことから、第758号鹹水槽が最も新しく、次いで第781号鹹水槽、第792号鹹水槽の順に古くなる。第161・162号土樋の下より検出されている第801・803・808号鹹水槽の新旧関係は、第801号鹹水槽の下から第803号鹹水槽、その下から第808号鹹水槽が検出されていることから、第801号鹹水槽が最も新しく、次いで第803号鹹水槽、第808号鹹水槽の順で古くなる。第757・783・787号鹹水槽の3基も重複して検出され、第783・787号鹹水槽は、第757号鹹水槽に切られたように検出されたことから、第757号鹹水槽が最も新しく、第783・787号鹹水槽については新旧関係は不明である。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
755	T4j	N-6°-E	舟 形	4.15	1.93	0.24	2~4	緩斜	平坦	自然	5.80	VIA4a	屋外鹹水槽、第756号鹹水槽と重複
756	T4i	N-11°-E	隅丸長方形	4.00	2.72	1.01	3~7	緩斜	平坦	自然	5.68	IVA4c	屋外鹹水槽、第755号鹹水槽と重複
757	U4b ₂	N-9°-E	隅丸長方形	4.28	2.25	0.54	3~6	緩斜	平坦	自然	6.50	IVA4b	屋外鹹水槽、第783・787号鹹水槽と重複
758	T4ia	N-7°-E	楕 円 形	5.00	2.12	0.31	2~8	緩斜	平坦	自然	6.05	IA4a	屋外鹹水槽、第781・792号鹹水槽と重複
759	T4g ₃	N-12°-E	楕 円 形	4.80	2.97	0.79	1~7	緩斜	平坦	自然	6.70	IA4b	屋外鹹水槽、足掛け石2点
760	T4g ₂	N-7°-E	楕 円 形	4.57	2.68	0.46	1~12	外傾	平坦	自然	6.17	IA4a	屋外鹹水槽、第782・788号鹹水槽と重複
761	T3io	N-15°-E	隅丸長方形	2.20	2.07	0.93	1~11	外傾	平坦	自然	5.99	VA3b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、㊸石15点、焼石1点、第802号鹹水槽と重複
762	T3io	N-11°-E	隅丸長方形	1.94	1.90	1.00	2~6	外傾	平坦	自然	5.93	VA2c	釜屋内鹹水槽、足掛けくぼみ、㊸石6点
764	U3a ₀	N-88°-W	隅丸長方形	1.98	0.68	0.06	1~2	緩斜	平坦	自然	6.07	IVA2a	居出場、第780・791号鹹水槽と重複
780	U3a ₀	N-82°-E	楕 円 形	1.82	0.62	0.17	1~7	緩斜	平坦	自然	5.98	IA2a	居出場、底部一石1点、第764・791号鹹水槽と重複
781	T4ia	N-5°-E	隅丸長方形	4.67	2.02	0.18	2~11	外傾	平坦	自然	5.69	IVA4a	屋外鹹水槽、第758・792号鹹水槽と重複
782	T4g ₂	N-2°-E	隅丸長方形	4.01	2.07	0.19	2~11	緩斜	平坦	自然	5.68	IVA4a	屋外鹹水槽、第760・788号鹹水槽と重複
783	U4b ₁	N-78°-W	(隅丸長方形)	(2.52)	(1.35)	0.11	1~6	緩斜	平坦	自然	5.85	IVA3a	屋外鹹水槽、第757・787号鹹水槽と重複
787	U4d ₂	N-10°-E	(隅丸長方形)	(3.52)	(1.08)	0.34	2~6	外傾	平坦	自然	6.34	IVA4a	屋外鹹水槽、㊸石1点、第757・783号鹹水槽と重複
788	T4g ₂	N-2°-E	隅丸長方形	3.93	1.96	0.43	1~10	緩斜	平坦	自然	5.55	IVA4a	屋外鹹水槽、第760・782号鹹水槽と重複
791	U3a ₀	N-85°-E	隅丸長方形	2.50	0.78	0.16	2~9	緩斜	平坦	自然	5.90	IVA3a	居出場、㊸石1点、焼石1点、貝片2点、第764・780号鹹水槽と重複
792	T4ia	N-6°-E	楕 円 形	4.66	2.35	0.56	3~7	緩斜	平坦	自然	5.08	IA4b	屋外鹹水槽、㊸石1点、第758・781号鹹水槽と重複
801	T4ii	N-4°-E	隅丸長方形	5.14	2.04	0.56	3~12	緩斜	平坦	自然	6.50	IVA4b	屋外鹹水槽、第803・808号鹹水槽と重複
802	T3io	N-15°-E	隅丸長方形	2.20	2.07	1.14	1~8	外傾	平坦	自然	5.95	VA3c	釜屋内鹹水槽、足掛けくぼみ、㊸石4点、第761号鹹水槽と重複
803	T4ii	N-4°-E	隅丸長方形	5.13	2.00	0.20	4~11	緩斜	平坦	自然	5.94	IVA4a	屋外鹹水槽、第801・808号鹹水槽と重複
808	T4ii	N-8°-E	(楕 円 形)	(4.63)	1.75	1.20	1~6	緩斜	平坦	自然	5.60	IA4c	屋外鹹水槽、第801・803号鹹水槽と重複

土樋 T4h₁区から U4a₂区を中心にして12条検出され、全長が最も短いものは0.50mで、最も長いものは7.90mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅11～38cm、下幅3～15cm、深さ4～10cmである。第159号土樋は第163号土樋に接続し、第163号土樋は第761号鹹水槽と連結している。第160号土樋は第159号土樋に接続しているが、第159号の粘土壁によりさえぎられていることから、第159号土樋の方が新しく構築されたものと思われる。第163号土樋は、西側で第166・173号土樋と重複しており、第163号土樋の下から第173号土樋が検出されたことと、第163号土樋が第166号土樋の下へもぐり込むように検出されたことから、第166号土樋が最も新しく、次いで第163号土樋、第173号土樋の順に古くなる。第165・167号土樋は第163号土樋に接続している。第173号土樋は第174号土樋と中央部で接続しているが、粘土を貼り付けて第174号土樋に連ならないようにしている。しかし、この粘土は第174号土樋の構築時に貼り付けたものではなく、第174号土樋とも一時連なっていたものと思われる。

土樋一覧表

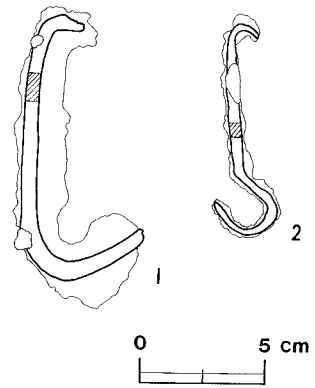
土樋番号	位置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高 (m)	備考
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
159	T4h ₂ ~ T4j ₂	N-11°-E	7.60	23	10	9	1~3	U	自然	無	6.70 ~ 6.84	第160・163号土樋と接続
160	T4h ₂	N-13°-W	1.60	11	4	4	3~8	U	自然	無	6.94	第159号土樋と接続
161	T4h ₁ ~ T4j ₁	N-16°-E	7.02	20	13	10	1~5	U	自然	無	6.58 ~ 6.88	第163号土樋と接続
162	T4h ₁ ~ T4j ₁	N-16°-E	6.07	22	7	4	1~3	U	自然	無	6.60 ~ 6.92	
163	T3j ₆ ~ T4j ₂	N-75°-W	7.90	32	15	7	1~4	U	自然	無	6.12 ~ 6.52	第159・165・167号土樋と接続、第166号土樋と重複
164	T4j ₁ ~ U4a ₂	N-38°-W	4.25	38	5	5	2~8	U	自然	無	6.42 ~ 6.52	
165	T4j ₂	N-18°-W	0.80	15	5	6	1~5	U	自然	無	6.56	第163号土樋と接続、第168号土樋と重複
166	T4j ₁	N-75°-W	2.95	25	11	6	2~7	U	自然	無	6.52 ~ 6.60	第163号土樋と重複
167	T4j ₂	N-44°-E	0.50	30	6	5	2~6	U	自然	無	-	第163号土樋と接続
168	T4j ₂	N-18°-W	0.97	36	14	6	1~3	U	自然	無	6.54	第165号土樋と重複
173	T4j ₁ ~ T4j ₂	N-81°-W	4.50	12	4	7	1~3	U	自然	無	6.10 ~ 6.16	第174号土樋と接続
174	T4j ₁	N-52°-E	2.12	11	3	8	2~3	U	自然	無	6.08 ~ 6.10	第173号土樋と接続

第204号竈出土鉄製品一覧表(第113図1・2)

図版番号	名称	法 量				出土地点	備考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
1	耳 金	10.7	1.1	0.6	104.7	第204号竈	M35 表面に粘土が付着。
2	吊 金 具	8.5	0.6	0.4	22.6	第204号竈	M36 下端部折れ曲がる。

出土遺物 第204号竈の覆土中から耳金1点(第113図1)と吊金具1点(第113図2)が出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、鹹水槽と土樋の重複関係や確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第204号竈から耳金及び吊金具が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

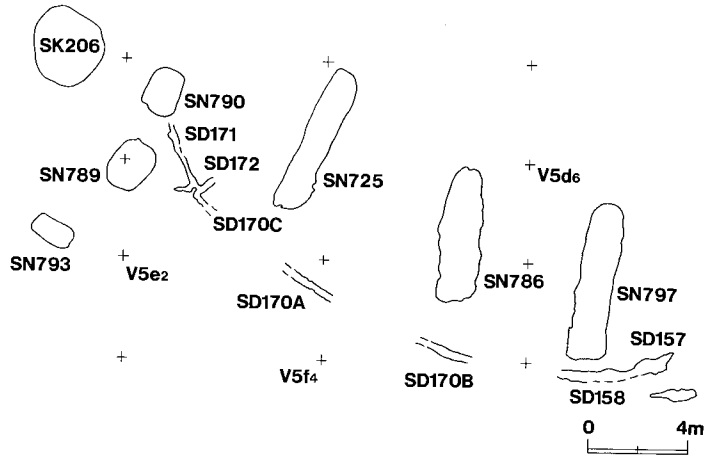


第113図 第29製塩跡出土遺物実測図

第30製塩跡(第114図)

位置 調査区の南部 V5c3区を中心に確認され、標高7.00mに位置している。

関連遺構 第206号竈、第725・786・789・790・793・797号鹹水槽及び第157・158・170~172号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いから、2グループに区別できる。第1グループは、第206号



第114図 第30製塩跡遺構配置図

竈、釜屋内鹹水槽(789, 790), 居出場(793), 屋外鹹水槽(725, 786)及び土樋(170~172)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(797)及び土樋(157, 158, 170, 171)で構成されている。

第30製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	V5c3	7.00	206	789, 790	793	725, 786	170, 171, 172	新
2	V5c3	7.00	206	789, 790	793	797	157, 158, 170, 171	古

釜屋 確認した黒色土の範囲は、南北12.57m、東西10.68mの不定形を呈している。砂上に厚さ5～16cmの貝殻片を含む黒色土を貼り付け地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場1基が位置している。黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかつたため、釜屋の規模・形状等の詳細は不明である。

竈 V5b₁区を中心に1基(第206号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.00m、短径2.89m、深さ0.68mである。砂を鍋状に掘り込んで、黒色土を16cmの厚さで貼り付け地盤を構築している。覆土は、上層に周囲からの流れ込みと思われる炭化粒子や灰を含んだ砂が自然堆積し、中層と下層にかけては粘土ブロックや貝殻片を含む灰が80～90cmの厚さで堆積している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
206	V5b ₁	N-34°-E	楕円形	3.00	2.89	0.68	自然	6.42	④石1点	

釜屋内鹹水槽 V5c₂区とV5d₂区から2基(第789・790号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.10・1.93m、短軸1.63・1.36m、深さ0.75・0.61mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～13cmの粘土を貼って構築している。

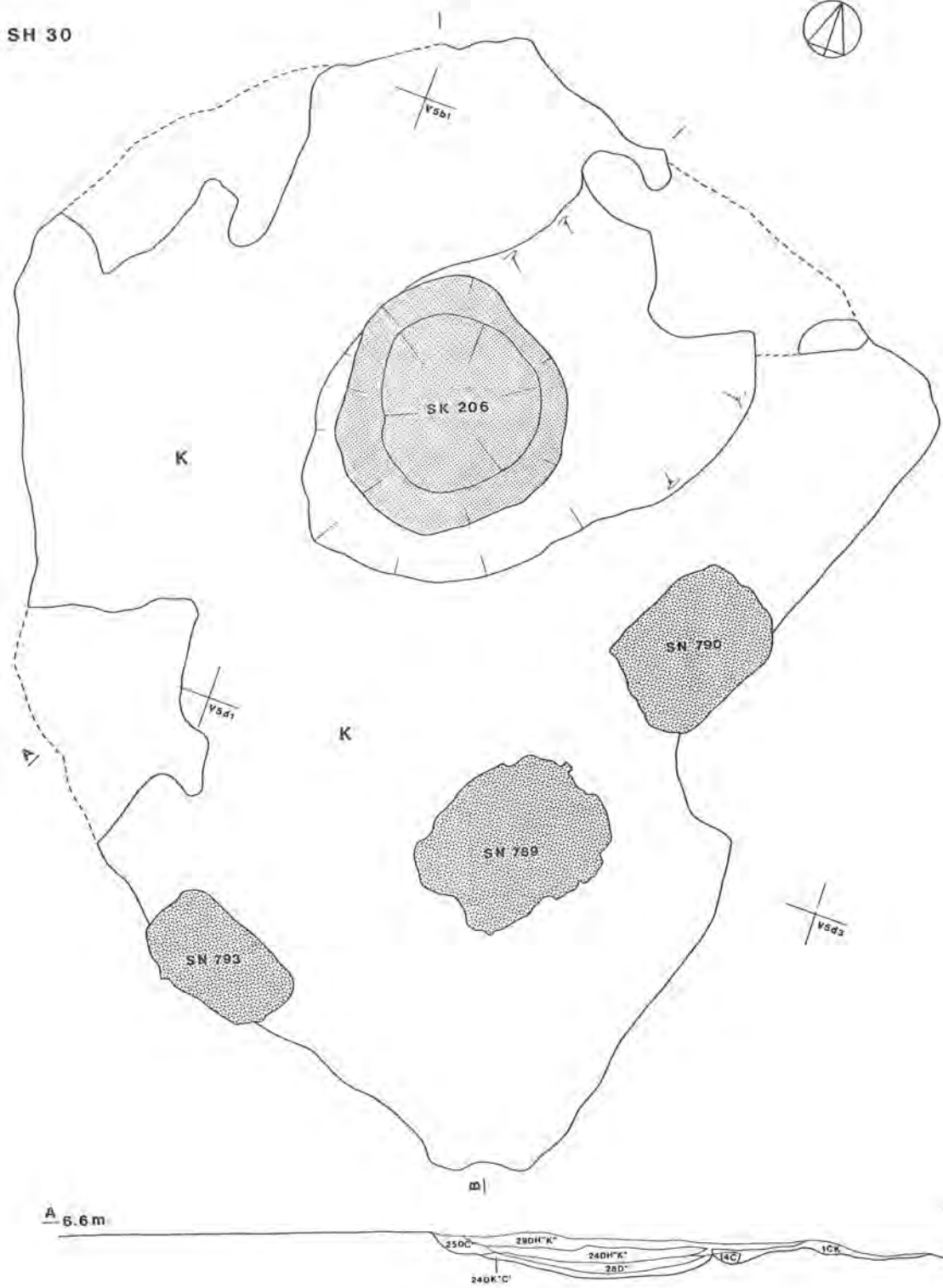
居出場 V5d₁区から1基(第793号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.72m、短軸0.95m、深さ0.40mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～6cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 V5c₃区・V5d₅区・V5e₆区の3か所から3基(第725・786・797号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸5.45～6.27m、短軸1.25～1.70m、深さ0.35～0.72mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の貼った上に厚さ3～14cmの粘土を貼って構築している。

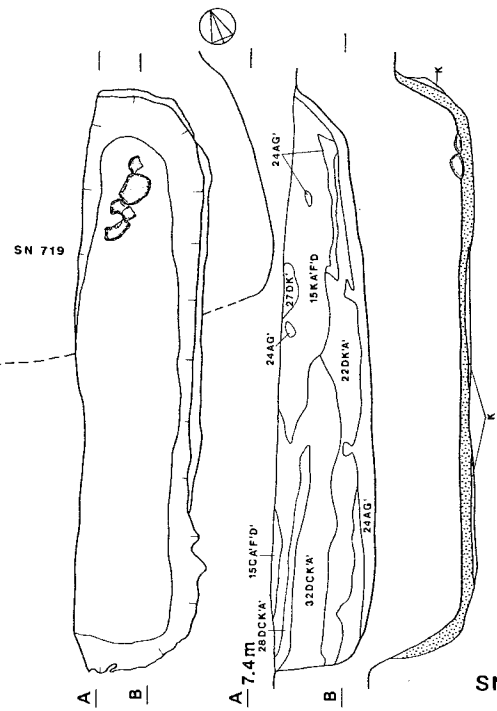
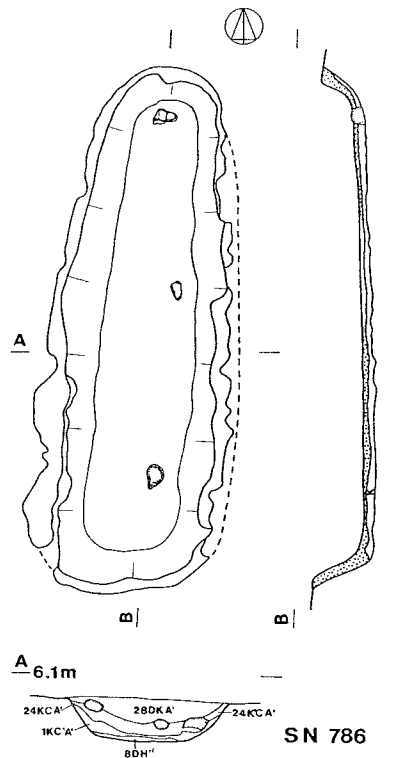
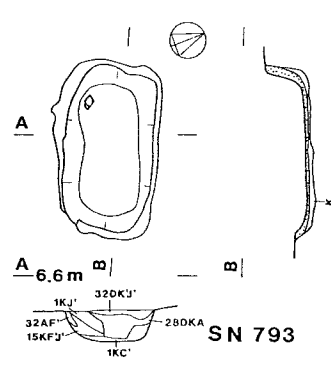
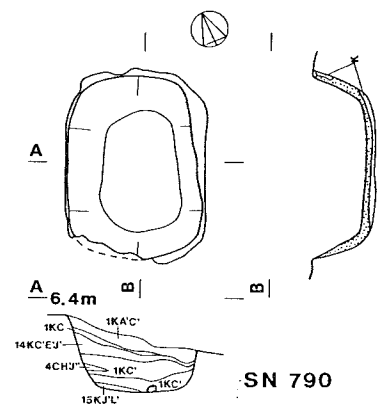
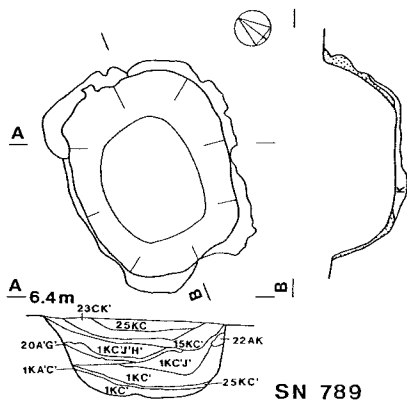
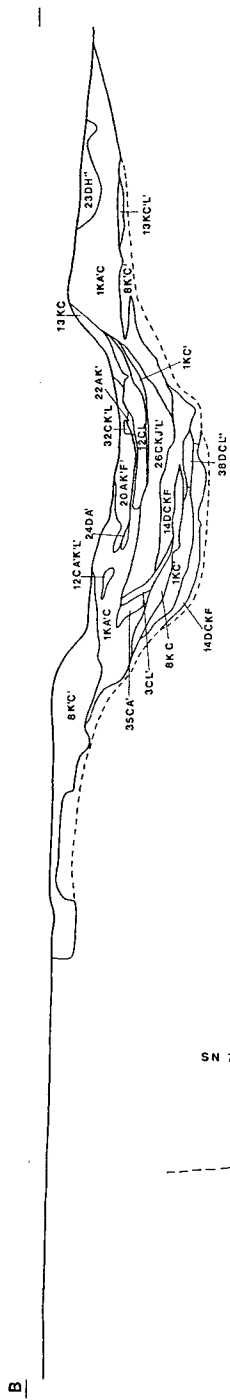
鹹水槽一覧表

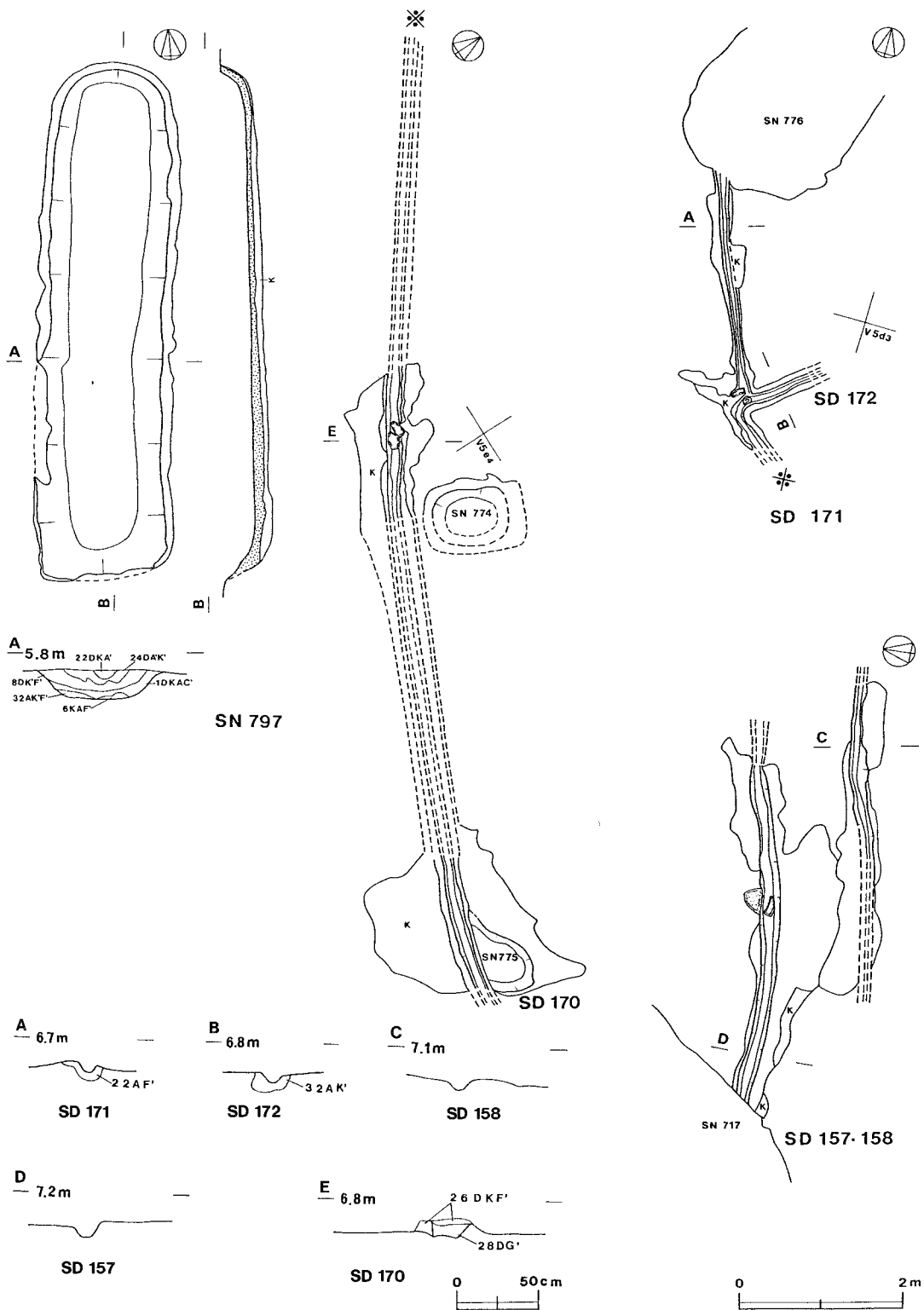
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
725	V5c ₃	N-25°-E	隅丸長方形	6.07	1.25	0.72	5～14	緩斜	平坦	自然	6.90	IVA4b	屋外鹹水槽、底面一石5点、④石1点
786	V5d ₅	N-7°-E	隅丸長方形	5.45	1.70	0.51	4～14	緩斜	平坦	自然	5.91	IVA4b	屋外鹹水槽、底面一石2点、焼石1点
789	V5d ₂	N-27°-E	隅丸長方形	2.10	1.63	0.75	1～13	緩斜	平坦	自然	6.30	IVA3b	釜屋内鹹水槽
790	V5c ₂	N-25°-E	隅丸長方形	1.93	1.36	0.61	3～10	外傾	平坦	自然	6.20	IVA2b	釜屋内鹹水槽、④石2点
793	V5d ₁	N-65°-W	隅丸長方形	1.72	0.95	0.40	2～6	外傾	平坦	自然	6.25	IVA2a	居出場、底面一石1点
797	V5e ₆	N-9°-E	隅丸長方形	6.27	1.55	0.35	3～14	緩斜	平坦	自然	5.60	IVA4a	屋外鹹水槽

SH 30



第115図 第30製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図





第116図 第30製塩跡鹹水槽・土樋実測図

土樋 V5c₂区から V5f₇区を中心にして5条検出され、全長が最も短いものは0.80mで、最も長いものは7.95mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅11～20cm、下幅5～9cm、深さ4～7cmである。第157号土樋は、西側が第26製塩跡に伴う第717号鹹水槽を構築する際に切られてしまったと思われるが、位置や長軸方向、レベル等から第170号土樋と接続すると思われる。第170号土樋は、2か所削平されているが、第171号土樋へ接続し、第790号鹹水槽と連なっている。第172号土樋は、第171号土樋に接続している。

土樋一覧表

土樋番号	位置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高 (m)	備 考
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
157	V5f ₅ ～V5f ₇	N-84°-E	5.55	20	8	7	2～6	U	自然	無	6.93～7.00	
158	V5f ₇	N-75°-E	2.35	11	5	5	7～10	U	自然	無	6.90	
170	V5e ₃ ～V5e ₅	N-65°-W	7.95	18	9	6	2～5	U	自然	無	6.70	第171・172号土樋と接続
171	V5c ₂ ～V5d ₂	N-21°-W	2.70	12	5	4	3～4	U	自然	無	6.56	第170・172号土樋と接続、第790号鹹水槽と連結
172	V5d ₂	N-55°-E	0.80	11	6	7	5～10	U	自然	無	6.62	第170・172号土樋と接続

所見 本跡が、操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第31製塩跡(第117図)

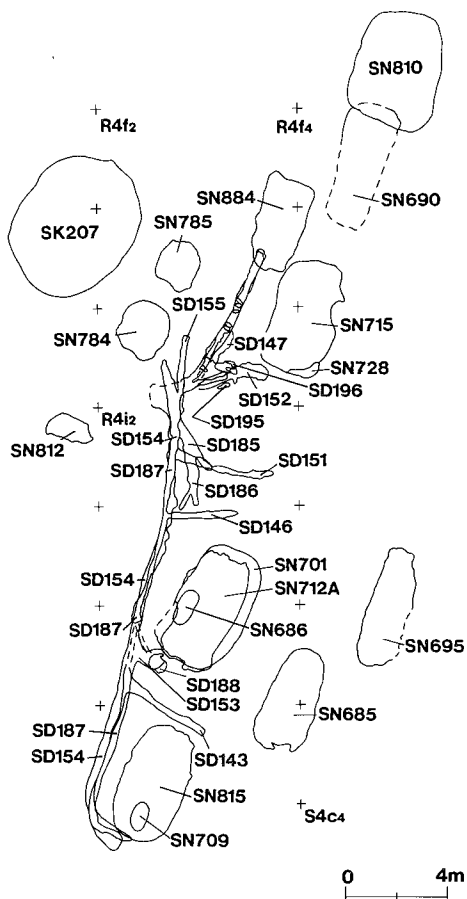
位置 調査区の南部 R4i₂区を中心に確認され、標高8.90mに位置している。

関連遺構 第207号竈、第685・686・690・695・701・709・712A・715・728・784・785・810・812・815・884号鹹水槽及び第143・146～148・151～155・175・176・185～188・195・196号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の重複関係と長軸方向の違い及び土樋の重複関係から、5グループに区別できる。第1グループは、第207号竈、釜屋内鹹水槽(784, 785)、居出場(812)、屋外鹹水槽(690, 695, 715)及び土樋(146, 147, 151, 152, 155)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(685, 686, 690, 695, 709, 715)及び土樋(143, 146, 147, 151～155)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(695, 701, 715, 810, 815)及び土樋(143, 146～148, 151～155)で構成されている。第4グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(712A, 715, 810, 815)及び土樋(175, 185～188)で構成されている。第5グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋

外鹹水槽（712A, 728, 815, 884）及び土樋（176, 185～188, 195, 196）で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北16.80m、東西12.10mの不定形を呈している。砂上に厚さ6～25cmの炭化粒子、灰及び貝殻片混じりの黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央に竈1基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場1基が位置している。建屋の柱穴と思われる4基の土坑（第219～222号土坑）が検出された。規模は、長径1.02～1.80m、短径0.95～1.67mで、深さ1.23～2.09mである。覆土の上層から石が数個出土し、柱を押えるためのものと思われる。釜屋の周囲は底面から78～103cmの高さで土手が築かれている。

竈 R4g₂区を中心に1基（第207号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径6.00m、短径5.10m、深さ1.37mである。砂を鍋状に掘り込んだ後、黒色土を7～69cmの厚さで貼って構築しており、覆土は上層に周辺から流れ込んで自然堆積し、中層から下層にかけて灰が80～105cmの厚さで堆積し、底面中央には焼石が柱状に堆積している。



第117図 第31製塩跡遺構配置図

第31製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4i ₂	8.90	207	784,785	812	690,695,715	146,147,151,152,155	最新
2	R4i ₂	8.90	207	784,785	812	685,686,690,695,709,715	143,146,147,151,152,153,154,155	第1グループより古い
3	R4i ₂	8.90	207	784,785	812	695,701,715,810,815	143,146,147,148,151,152,153,154,155	第1・2グループより古い
4	R4i ₂	8.90	207	784,785	812	712A,715,810,815	175,185,186,187,188	第1・2・3グループより古い
5	R4i ₂	8.90	207	784,785	812	712A,728,815,884	176,185,186,187,188,195,196	最古

竈一覧表

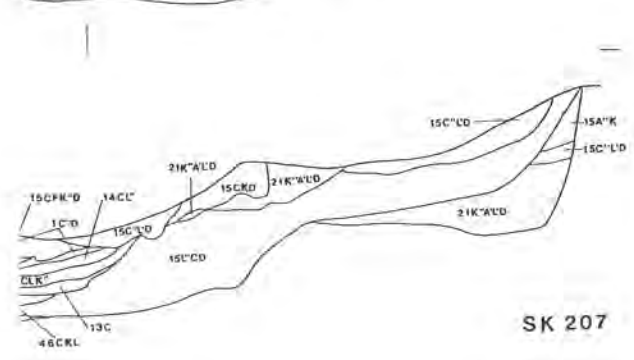
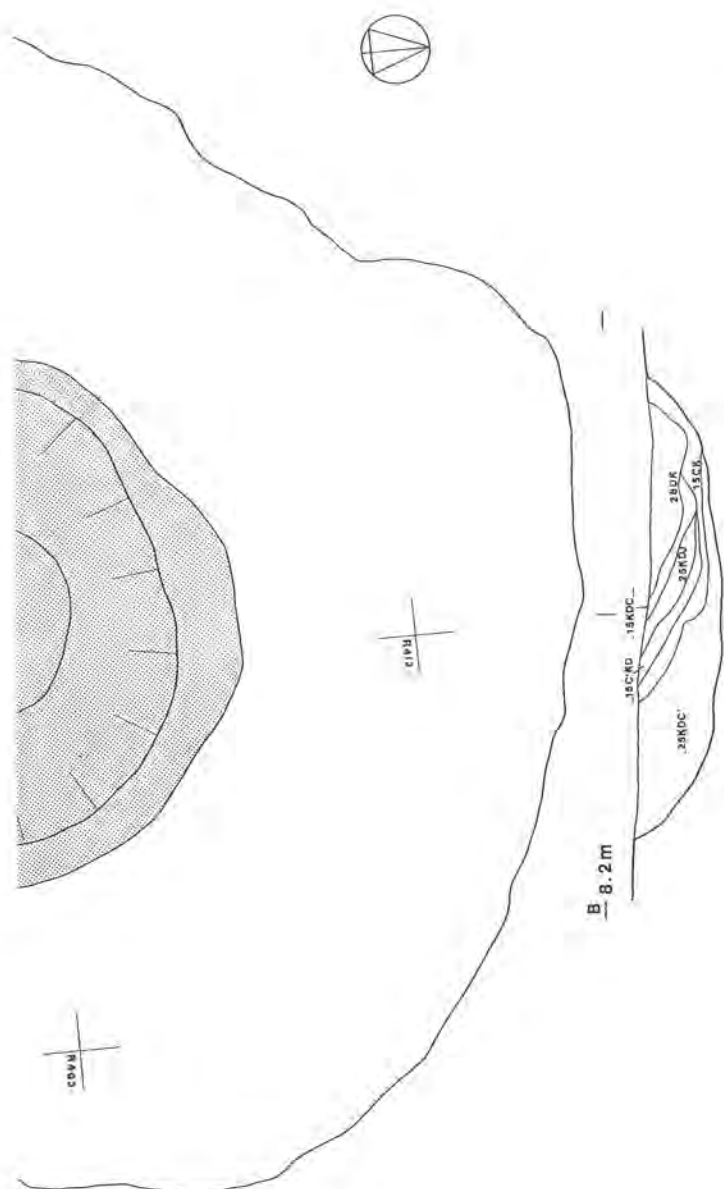
竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
207	R4g ₁	N-45°-E	楕円形	6.00	5.10	1.37	自然	7.68	石10点, 耳金1点	

釜屋内鹹水槽 R4g₂区とR4h₂区から2基(第784・785号鹹水槽)検出され,平面形は,隅丸長方形を呈している。規模は,長軸2.10・1.81m,短軸1.92・1.67m,深さ1.04・0.91mである。底面は平坦で,壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後,黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~11cmの粘土を貼って構築している。

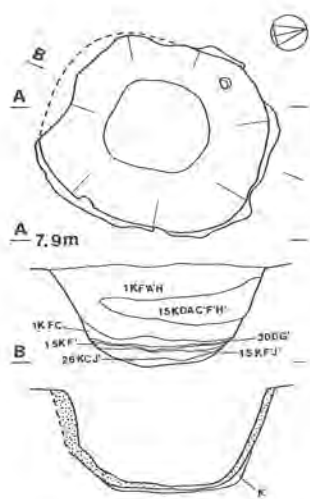
居出場 R4i₁区から1基(第812号鹹水槽)検出され,平面形は,隅丸長方形を呈している。規模は,長軸1.94m,短軸0.88m,深さ0.65mである。底面は平坦で,壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~5cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 R4e₅区・R4f₄区・R4g₃区・R4h₄区・R4j₃区・S4a₂~a₄区・S4b₂・b₃区・S4c₂区の11か所から12基(第685・686・690・695・701・709・712A・715・728・810・815・884号鹹水槽)検出され,平面形は,楕円形,隅丸長方形,舟形及びひさご形を呈している。規模は,長軸[径]1.12~5.09m,短軸[径]0.65~3.25m,深さ0.14~1.69mである。底面は皿状及び平坦で,壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1~17cmの粘土を貼って構築している。第686号鹹水槽の下から第701号鹹水槽,第712A号鹹水槽の順に検出されたことから,第686号鹹水槽が最も新しく,次いで第701号鹹水槽,第712A号鹹水槽の順に古くなる。第712A号鹹水槽は,第712B号鹹水槽(第34製塩跡)の壁面を上部へ貼り加えたものである。第690・709・715号鹹水槽の下から第728・810・815号鹹水槽が検出されたことから,第690・709・715号鹹水槽が新しい。

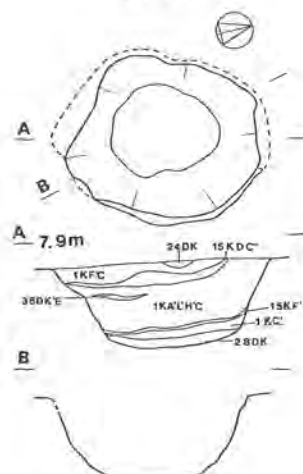
土樋 R4g₂区からS4c₂区を中心にして17条検出され,全長が最も短いものは0.50mで,最も長いものは20.30mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し,上幅13~81cm,下幅4~43cm,深さ2~15cmである。各土樋は砂地を浅く掘り,粘土を1~11cmの厚さで雨樋のように貼って構築している。第143・146・151・155号土樋は第154号土樋と接続し,釜屋内の第784号鹹水槽と連結している。第153・154号土樋の下から第187・188号土樋が検出されたことから,第153・154号土樋が新しい。第187号土樋は,第185・186・188号と接続し,釜屋内の第784号鹹水槽と連結していたものと思われる。第147号土樋は第148・152号土樋と接続し,第175号土樋と重複しており,第147号土樋の下から第175号土樋が検出されたことから,第147号土樋が新しい。第152号土樋の下から検出された第176号土樋は,第175号土樋と接続していたと思われる。



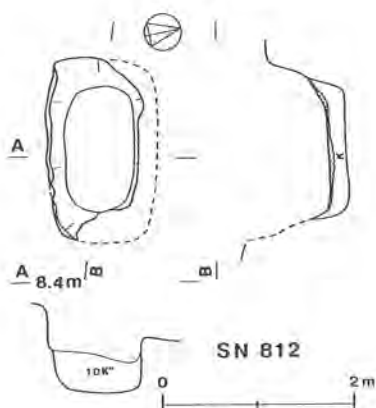
SK 207



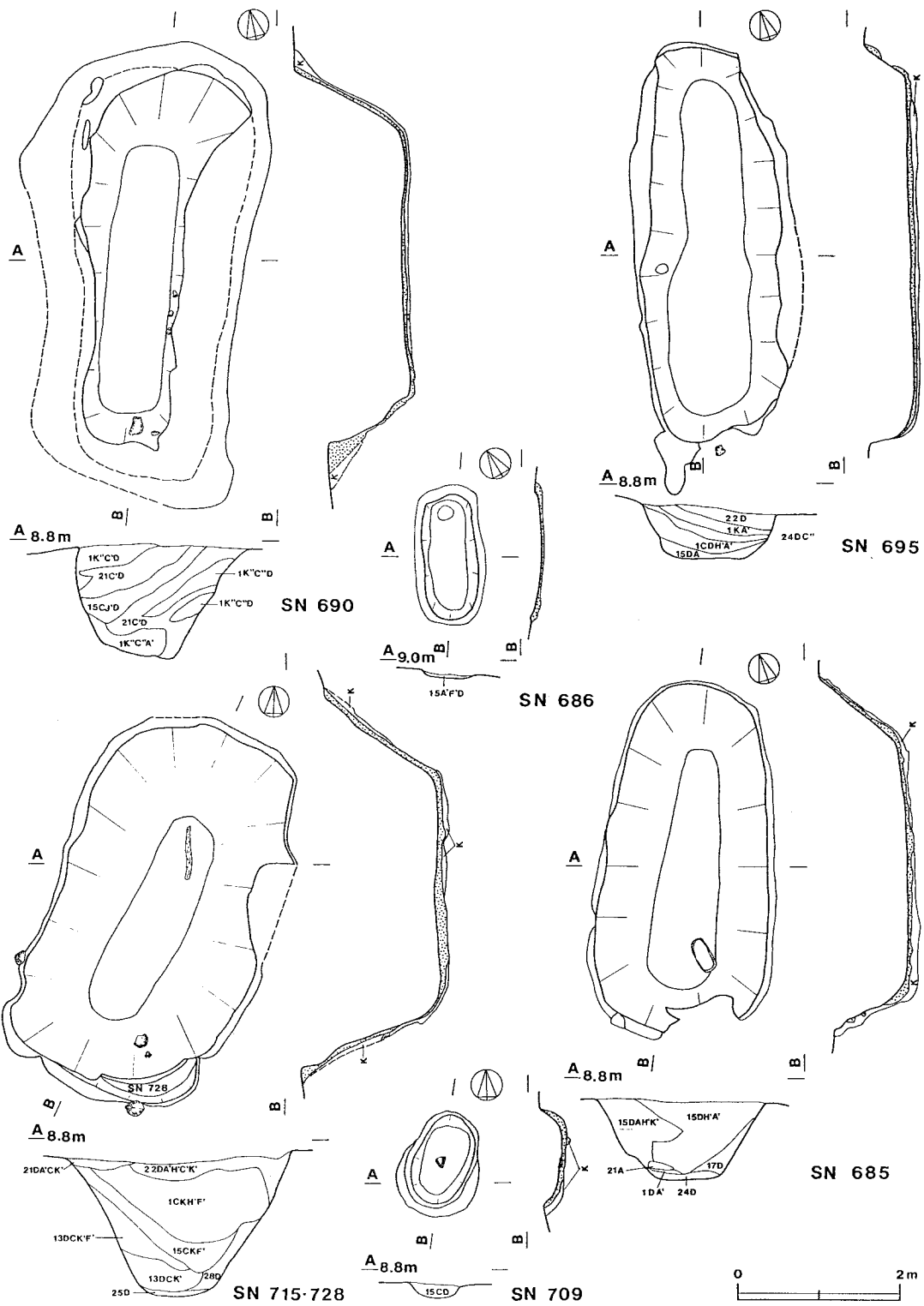
SN 784



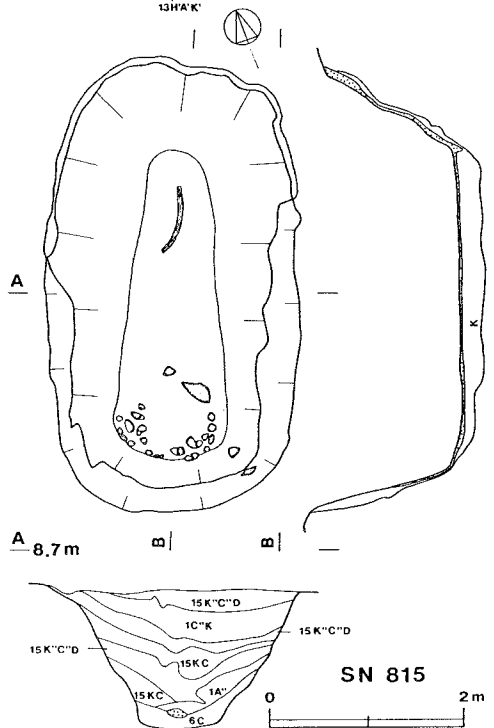
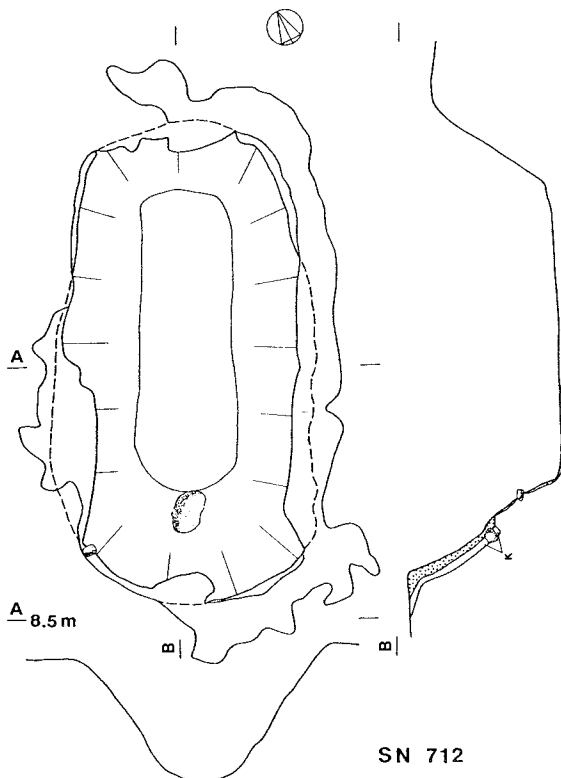
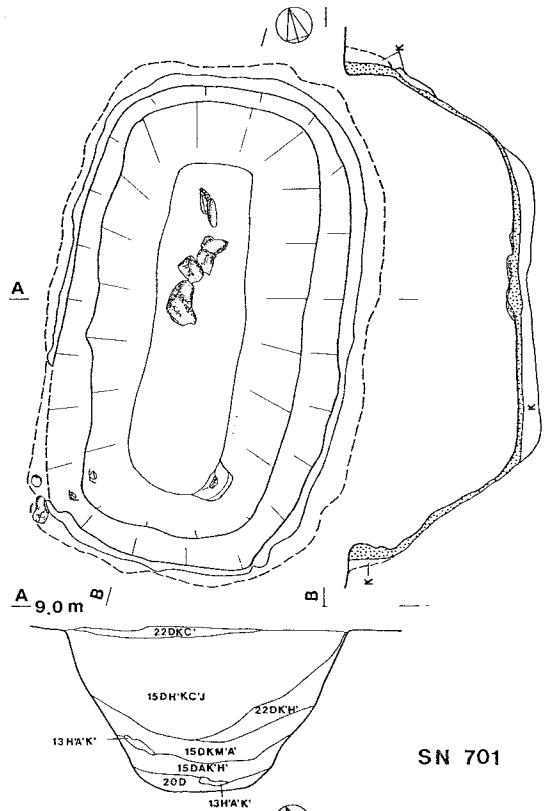
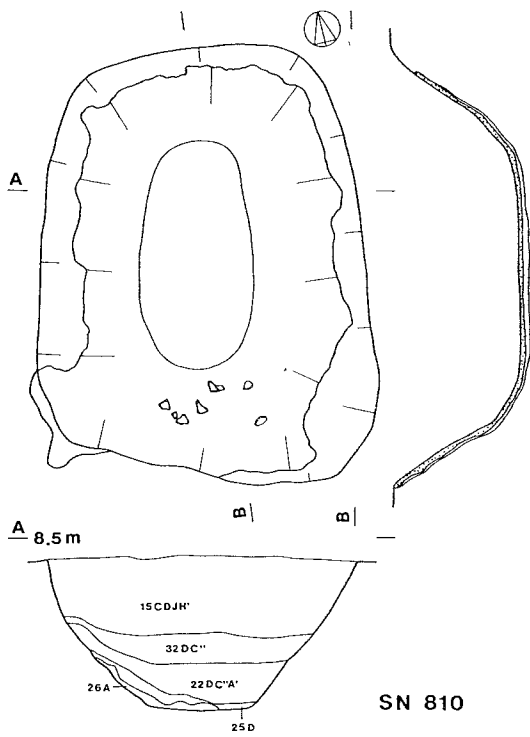
SN 785



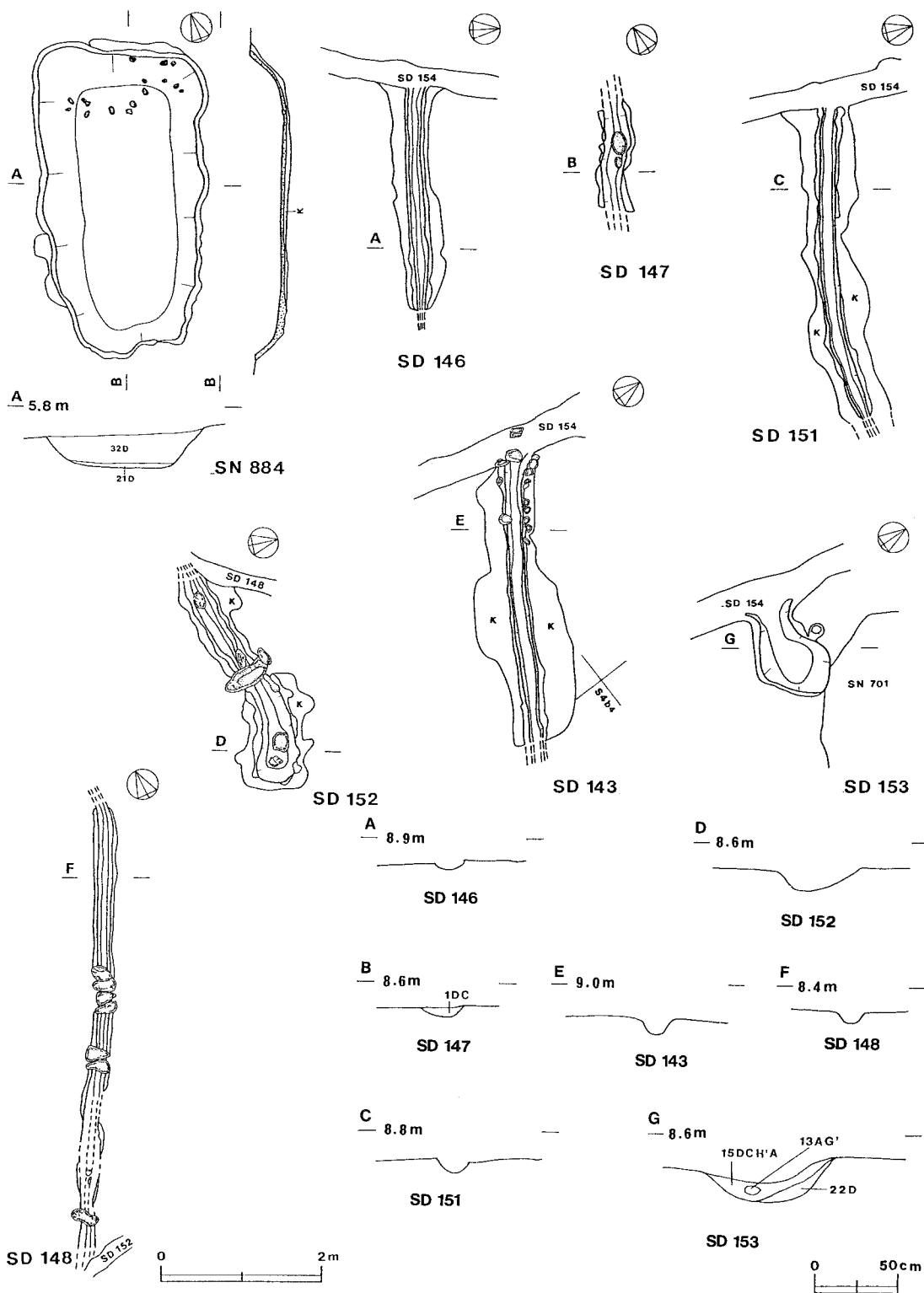
SN 812



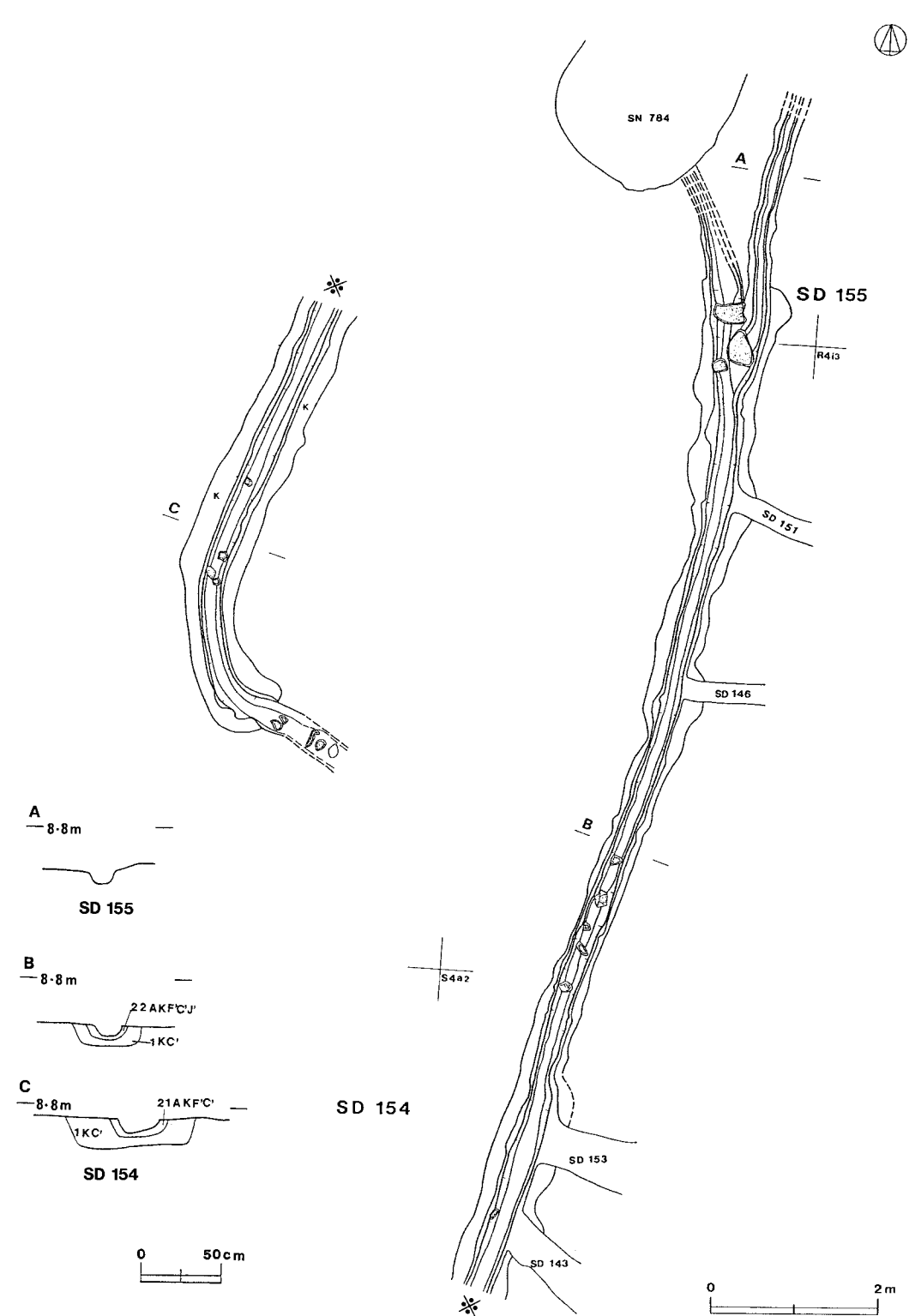
第119図 第31製塩跡鹹水槽実測図(1)



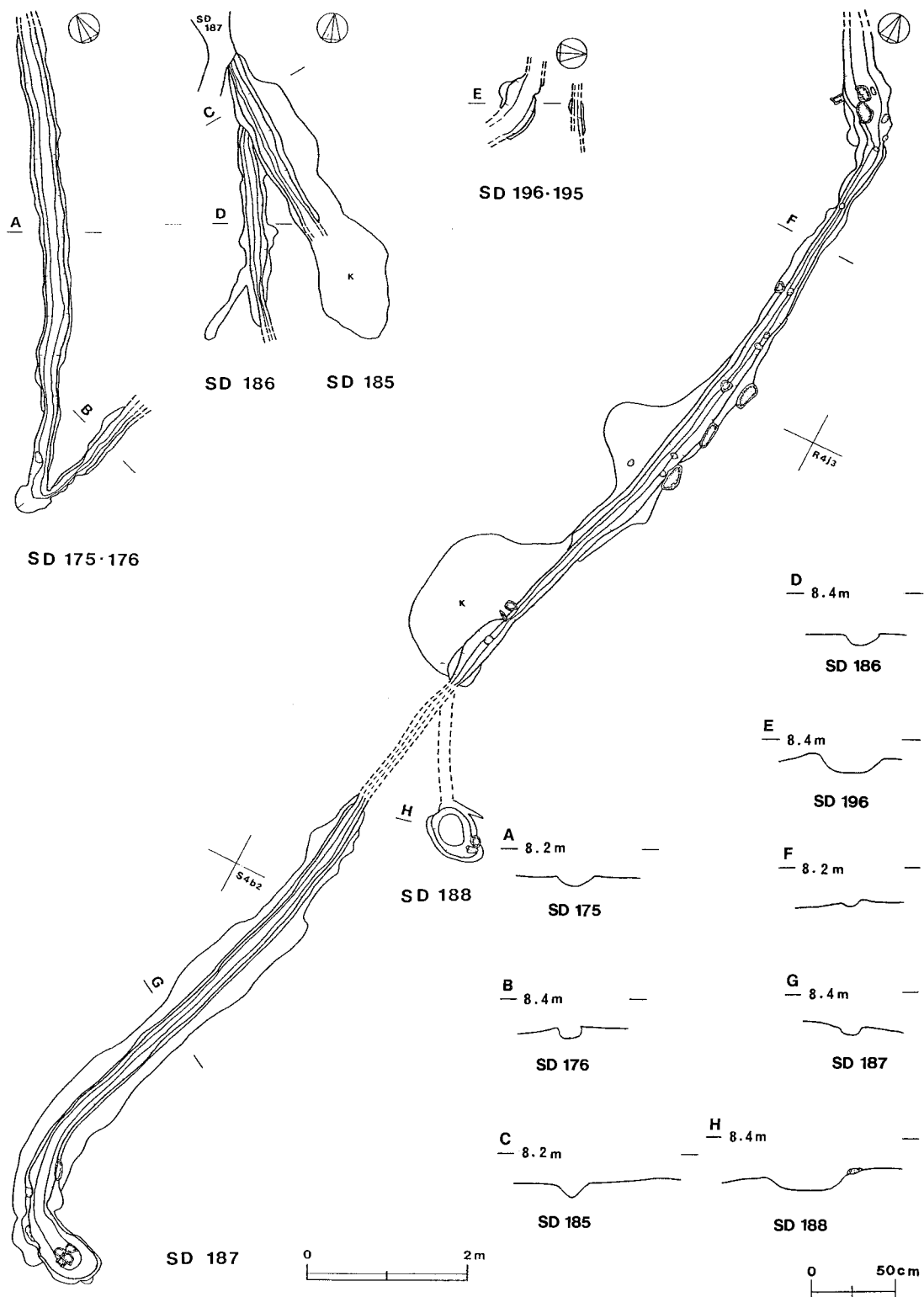
第120図 第31製塩跡鹹水槽実測図(2)



第121図 第31製塩跡鹹水槽・土樋実測図(3)



第122図 第31製塩跡土樋実測図(1)

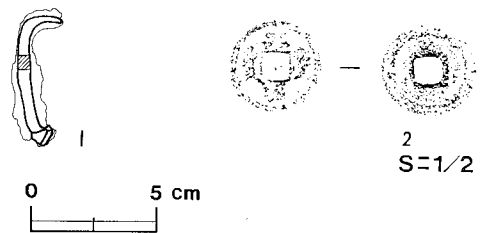


第123图 第31製塩跡土樋実測図(2)

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
685	S4b ₃	N-24°-E	舟 形	4.32	2.00	1.10	3~10	緩斜	平坦	自然	8.56	VIA4c	屋外鹹水槽, 底面一石1点
686	S4a ₂	N-30°-E	隅丸長方形	1.55	0.65	0.14	1~10	緩斜	皿状	自然	8.90	IVB2a	屋外鹹水槽, 第701・712A号鹹水槽と重複
690	R4f ₄	N-19°-E	隅丸長方形	4.61	1.25	1.40	2~6	外傾	平坦	自然	8.60	IVA4c	屋外鹹水槽, ㊸石5点, 第810号鹹水槽と重複
695	S4a ₄	N-17°-E	ひ さ ご 形	4.89	1.65	0.54	2~8	外傾	平坦	自然	8.59	VIIA4b	屋外鹹水槽, ㊸石1点
701	R4j ₃	N-30°-E	隅丸長方形	5.09	2.82	1.69	4~15	緩斜	平坦	自然	8.84	IVA4d	屋外鹹水槽, 足掛け石3点, 底面一石6点, ㊸石14点, 古銭1枚, ㊸石3点, 第686・712A号鹹水槽と重複
709	S4c ₂	N-20°-E	楕 円 形	1.12	0.68	0.16	6~8	外傾	皿状	自然	8.63	IB2a	屋外鹹水槽, 底面一石1点, ㊸石1点, 第815号鹹水槽と重複
712A	S4a ₃	N-31°-E	隅丸長方形	4.96	2.46	1.20	2~17	緩斜	平坦	自然	8.31	IVA4c	屋外鹹水槽, 第686・701号鹹水槽と重複
715	R4h ₄	N-27°-E	隅丸長方形	4.60	2.60	1.45	1~7	緩斜	平坦	自然	8.31	IVA4c	屋外鹹水槽, 貝の奥積, 底面一木片, ㊸石9点, ㊸石2点, 第728号鹹水槽と重複
728	R4h ₄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	屋外鹹水槽, 第715号鹹水槽南東コーナー部より1部分検出
784	R4h ₂	N-33°-E	隅丸長方形	2.10	1.92	1.04	2~11	外傾	平坦	自然	7.60	VA3c	釜屋内鹹水槽, 足掛け石1点
785	R4g ₂	N-34°-E	隅丸長方形	1.81	1.67	0.91	1~8	緩斜	平坦	自然	7.65	VA2b	釜屋内鹹水槽, 足掛けくぼみ
810	R4e ₅	N-16°-E	隅丸長方形	4.63	3.25	1.56	3~8	緩斜	平坦	自然	8.30	IVA4d	屋外鹹水槽, 足掛けくぼみ, ㊸石5点, 第690号鹹水槽と重複
812	R4i ₁	N-73°-W	隅丸長方形	1.94	0.88	0.65	1~5	緩斜	平坦	自然	7.89	IVA2b	居出場
815	S4b ₂	N-21°-E	隅丸長方形	4.45	2.47	1.63	1~9	緩斜	平坦	自然	8.29	IVA4d	屋外鹹水槽, 足掛けくぼみ, 底面一石24点, 木製品1点, 第709・872(第34製塩跡)号鹹水槽と重複
884	R4g ₃	N-21°-E	隅丸長方形	3.76	1.91	0.40	3~9	緩斜	平坦	自然	5.45	IVA4a	屋外鹹水槽, 底面一石9点, ㊸石9点

出土遺物 第207号竈の覆土中から耳金1点(第124図1), 石10点, 第701号鹹水槽の覆土中から古銭1点(第124図2)が出土している。いずれも周囲からの流れ込みと思われる。



第124図 第31製塩跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが, 5期にわたって操業されていたものと思われる。この五つのグループの新旧関係は, 屋外鹹水槽の長軸方向の違いや重複関係及び土樋の重複関係から, 第1グループが最も新しく, 次いで第2グループ, 第3グループ, 第4グループ, 第5グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は, 第207号竈から耳金が出土し, 第701号鹹水槽から古銭が出土しているが, いずれも周囲からの流れ込みと思われ, その時期を明確にすることができなかった。

土樋一覽表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
143	S4b ₂	N-58°-W	3.75	21	15	10	3	U	自 然	無	8.76 ~8.78	第154号土樋と接続
146	R4j ₂ ~R4j ₃	N-89°-E	3.02	18	7	8	4~6	U	自 然	無	8.64 ~8.82	第154号土樋と接続
147	R4h ₃	N-34°-E	1.50	31	16	7	4~11	U	自 然	無	8.46	第148号土樋と接続
148	R4g ₃ ~R4h ₃	N-28°-E	5.85	16	6	7	1~6	U	自 然	有	8.20 ~8.24	第147・152号土樋と接続、第175号土樋と重複
151	R4i ₂ ~R4i ₃	N-73°-W	4.20	29	11	6	3~5	U	自 然	無	8.60 ~8.78	第154号土樋と重複
152	R4h ₃	N-74°-E	3.10	49	10	12	4~10	U	自 然	有	8.40 ~8.44	第148号土樋と接続、第176号土樋と重複
153	S4a ₂	N-82°-W	1.25	81	43	15	-	U	自 然	無	8.62	第154号土樋と接続、第188号土樋と重複
154	R4g ₂ ~S4c ₂	N-27°-E	20.30	28	11	6	2~7	U	自 然	無	8.66	第143・146・151・153・155号土樋と接続、第187号土樋と重複、第784号鹹水槽と連結
155	R4h ₂	N-6°-E	2.93	30	8	6	3~5	U	自 然	無	8.42 ~8.66	第154号土樋と接続
175	R4g ₃ ~R4h ₃	N-21°-E	5.65	26	11	9	1~4	U	自 然	無	8.00 ~8.02	第176号土樋と接続、第148号土樋と重複
176	R4h ₃	N-73°-E	1.60	16	5	3	4~5	U	自 然	無	8.04 ~8.22	第175号土樋と重複
185	R4i ₂ ~R4i ₃	N-32°-W	2.45	23	4	9	2~6	U	自 然	無	8.02 ~8.10	第186・187号土樋と接続、第151・154号土樋と重複
186	R4i ₂	N-11°-W	2.46	23	7	5	2~4	U	自 然	無	8.12 ~8.17	第185号土樋と接続、第151号土樋と重複
187	R4h ₂ ~S4c ₂	N-10°-E	17.45	30	6	9	1~4	U	自 然	無	8.00 ~8.58	第185号土樋と接続、第154号土樋と重複
188	S4a ₂	N-44°-W	0.80	66	29	11	2~6	U	自 然	無	8.22	第153号土樋と重複
195	R4h ₃	N-80°-E	0.50	13	4	2	1~2	U	自 然	無	8.24	
196	R4h ₃	N-64°-W	0.80	36	20	9	1~3	U	自 然	無	7.80	

第207号竈出土鉄製品一覽表(第124図1)

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	5.2	0.5	0.5	19.1	第207号竈	M37 両端部折れ曲がる。

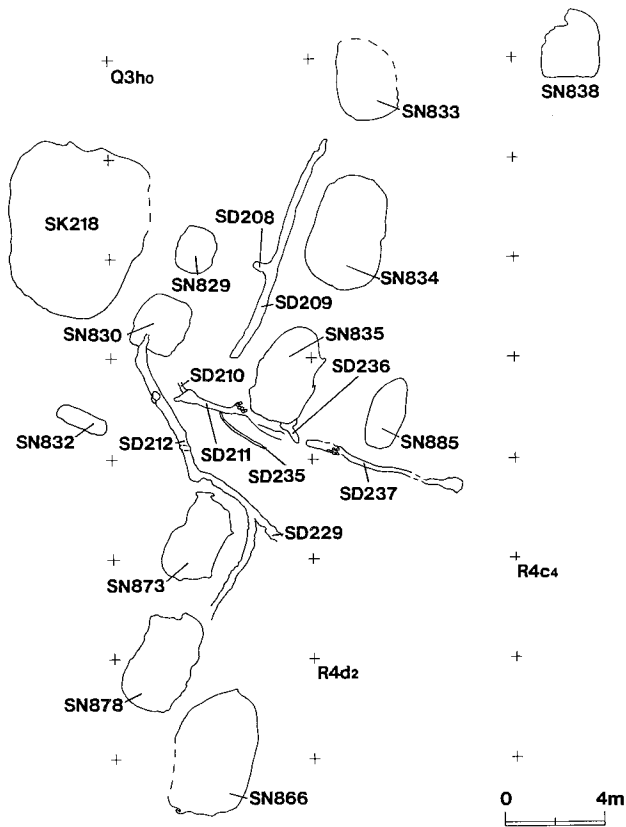
第701号鹹水槽出土古銭一覽表(第124図2)

図版番号	鑄 名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備 考
2	元 豊 通 寶	1078	北 宋	第701号鹹水槽	M151

第32製塩跡(第125図)

位置 調査区の南部Q3j_o区を中心に確認され、標高7.42mに位置している。

関連遺構 第218号竈，第829・830・832～835・838・866・873・878・885号鹹水槽及び第208～212・229・235～237号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いや土樋の接続の違いから、3グループに区別できる。第1グループは、第218号竈，釜屋内鹹水槽（829，830），居出場（832），屋外鹹水槽（833～835，838）及び土樋（208，209）で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（833～835，866，873，878，885）及び土樋（208～212，229，236，237）で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び



第125図 第32製塩跡遺構配置図

居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽（833～835，873，878）及び土樋（208～212，229，235）で構成されている。

第32製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	Q3j _o	7.42	218	829,830	832	833,834,835,838	208,209	最新
2	Q3j _o	7.42	218	829,830	832	833,834,835,866,873,878,885	208,209,210,211,212,229,236,237	第1グループより古い
3	Q3j _o	7.42	218	829,830	832	833,834,835,873,878	208,209,210,211,212,229,235	最古

釜屋 確認された黒色土の範囲は、南北16.50m、東西13.70mの不定形を呈し、砂上に厚さ5～17cmの貝殻片や灰を含んだ黒色土を貼り付け地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場1基が位置している。竈の南側に傾斜して出入口が付設されている。出入口の西側から南西コーナーにかけて40cmの高さの土手が築かれており、囲いに使われたと思われるピット

が4か所(P₁~P₄)検出された。P₁からP₄の規模は、径20~30cm、深さは砂地のため、明瞭に確認することはできなかった。さらに竈の南側から出入口付近にかけて多量の炭化材(松材、茅材等)、灰等が堆積している。

竈 Q3i₉区を中心に1基(第218号竈)検出され、砂を鍋状に掘り込み、その上に2~17cm厚さの黒色土を貼って構築している。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径6.87m、短径5.75m、深さ0.87mである。底面から緩やかに立ち上がり、覆土は、上層が周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中・下層には砂や灰を含む黒色土が10cmの厚さで堆積している。

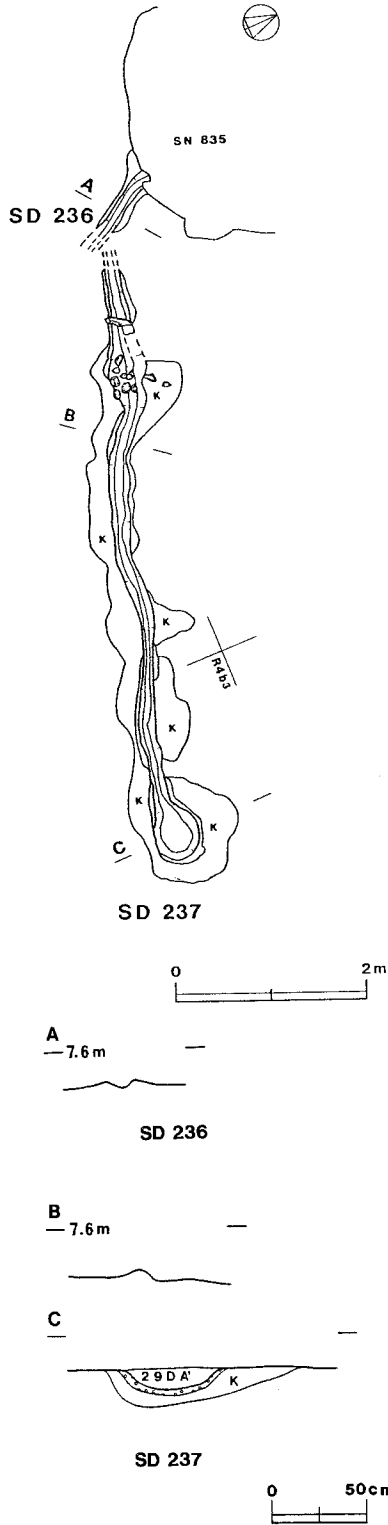
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
218	Q3i ₉	N-16°-E	楕円形	6.87	5.75	0.87	自然	6.90	底面一焼石1点、 [㊤] 耳金1点、鉄片1点、 [㊤] 焼石1点	

釜屋内鹹水槽 Q3i₁₀区とQ3j₁₀区から2基(第829・830号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.88・2.34m、短軸1.30・2.06m、深さ0.83・1.00mである。底面は皿状で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~15cmの粘土を貼って構築している。2基とも覆土中から多量の炭化材と灰が検出された。第830号鹹水槽の南側に柱穴と思われるピットを2か所(P₁・P₂)検出したが、第830号鹹水槽に伴うものと思われる。P₁とP₂の規模は、径12・20cm、深さは砂地のため明瞭に確認することはできなかった。

居出場 R3a₉区より1基(第832号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.10m、短径0.63m、深さ0.24mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように、黒色土の上に厚さ5~7cmの粘土を貼って構築している。覆土中から多量の炭化材及び土師質土器の皿1点(第131図3)が出土している。

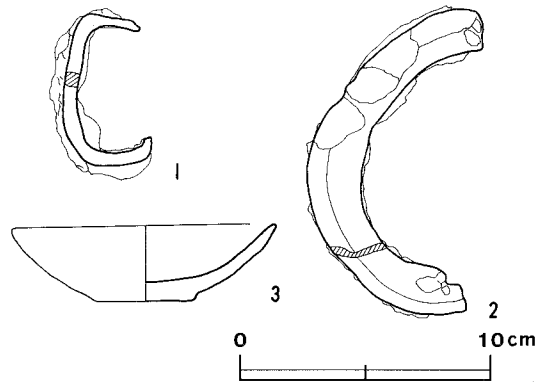
屋外鹹水槽 Q4h₂区・Q4g₄区・Q4i₂区・R3b₀区・R3d₀区・R4a₁・a₂区・R4d₁区の8か所から8基(第833~835・838・866・873・878・885号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、楕円形及び舟形を呈している。規模は、長軸[径](2.70)~5.14m、短軸[径]1.37~3.01m、深さ0.12~1.62mである。底面は全体的に平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~14cmの粘土を貼って構築している。第833~835号鹹水槽の覆土中に、釜屋内から確認されたものと同様に炭化材が出土している。



第126図 第32製塩跡土樋実測図(1)

土樋 Q3j_o区からR4b_o区を中心にして9条検出され、全長が最も短いものは0.39mで、最も長いものは22.40mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅9～58cm、下幅4～10cm、深さ3～6cmである。第208号土樋は第829号鹹水槽と連なっていたものと思われる。第209号土樋は、第208号土樋と接続し、さらに、南方向へも伸びていることから、第830号鹹水槽とも連なるように構築されたものと思われる。第211号土樋は第210号土樋と接続する。第235号土樋は粘土壁がなく、地盤の黒色土のみ検出され、第211号土樋に接続している。第212号土樋は第866号鹹水槽の南西側から伸び、途中で第229号土樋と接続して第830号鹹水槽と連結している。

出土遺物 第218号竈の覆土中から耳金1点(第127図1)と、一部分のため性格等が不明な鉄片1点(第127図2)、第829号鹹水槽の覆土中から土器片1点、第832号鹹水槽の覆土中から土師質土器の皿1点(第127図3)が出土してい

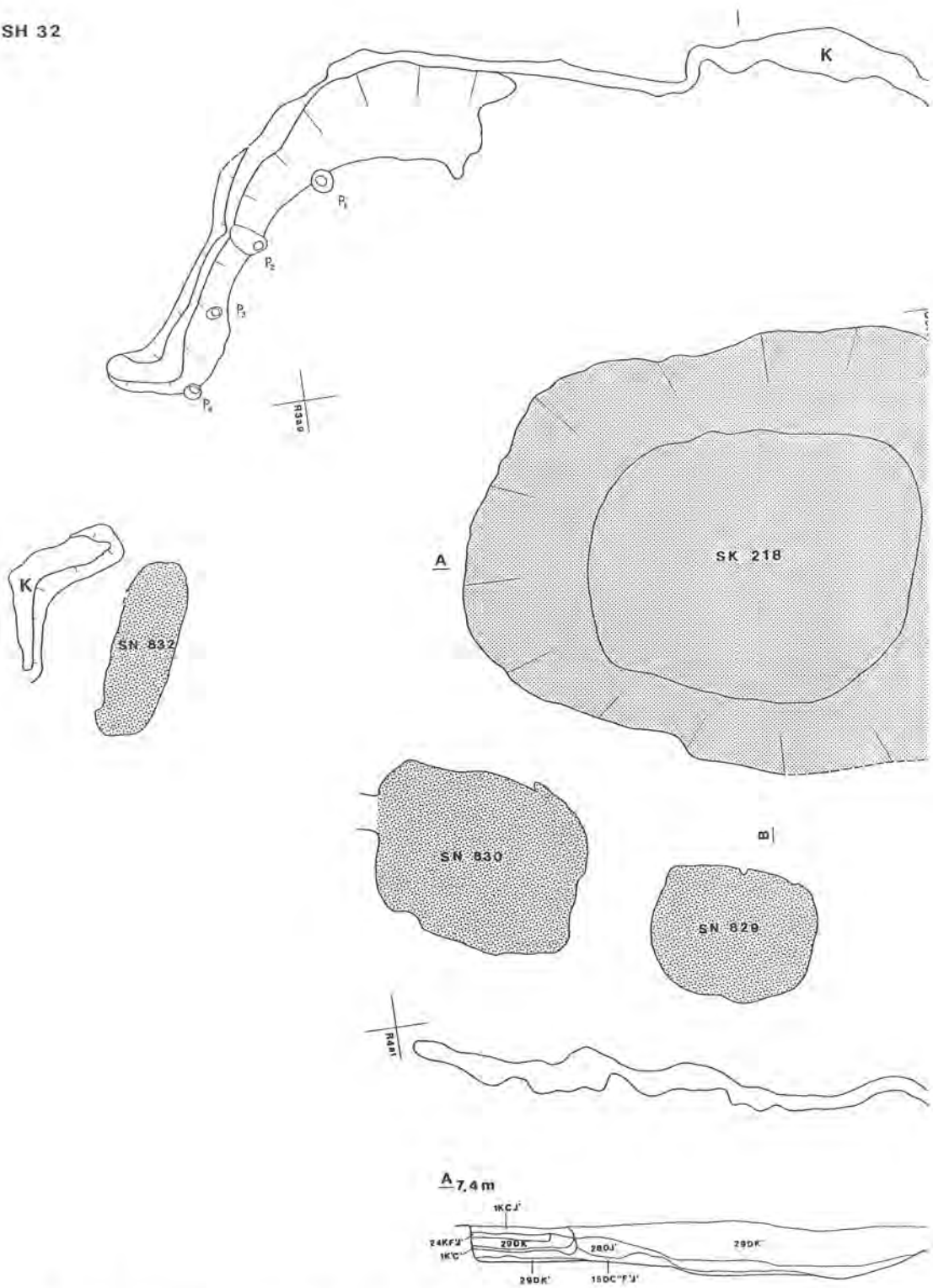


第127図 第32製塩跡出土遺物実測図

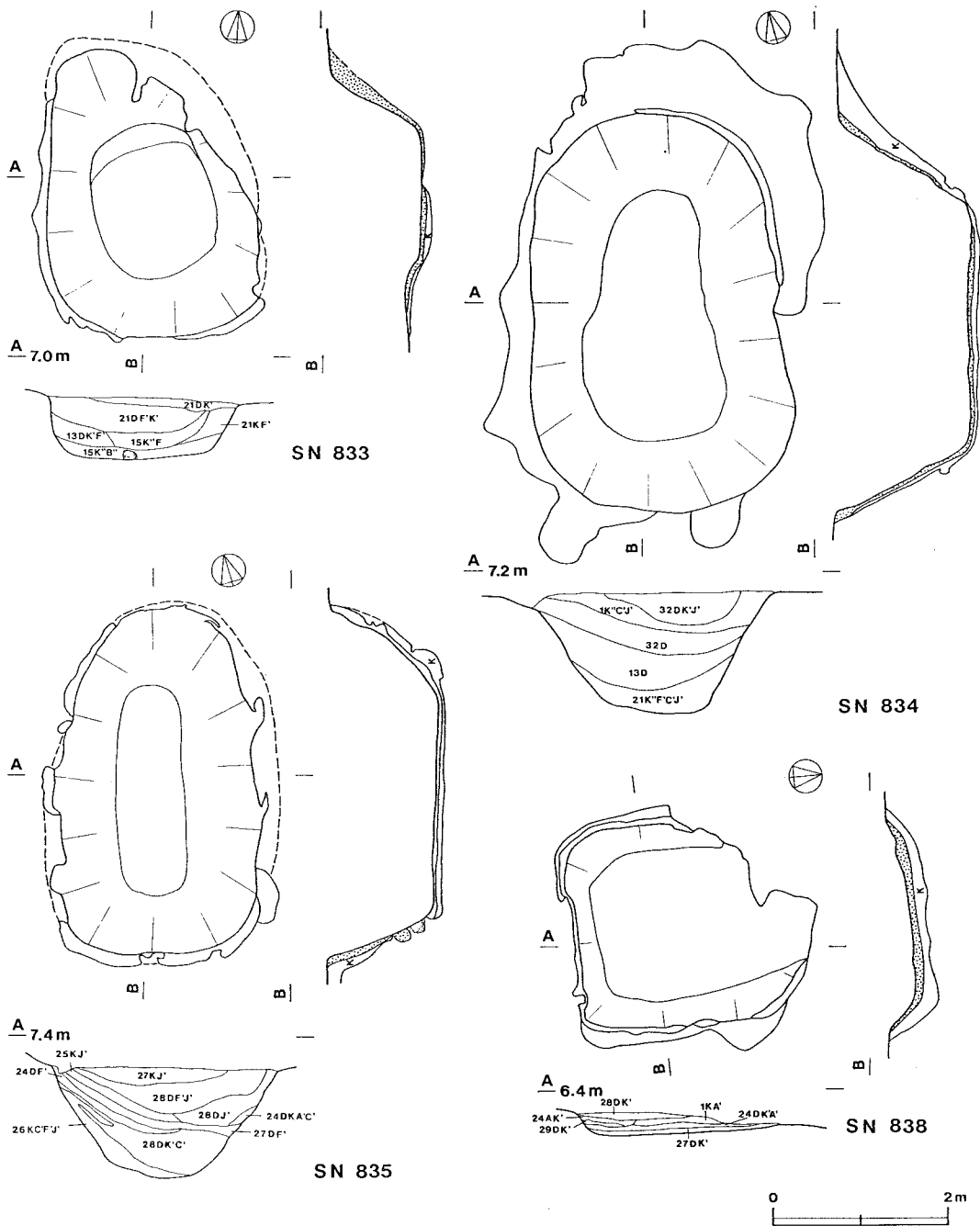
る。いずれも、周囲からの流れ込みと思われる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、土樋の接続の違いや屋外鹹水槽の確認面での標高から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。この製塩跡の時期

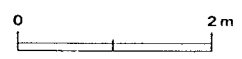
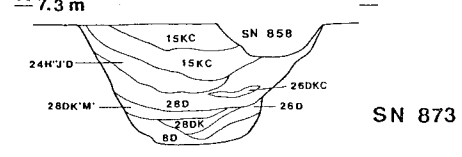
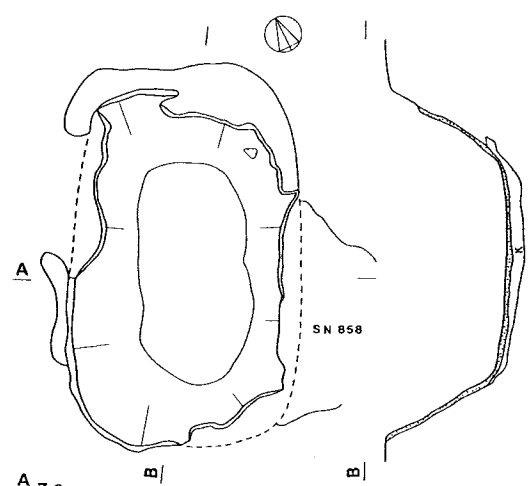
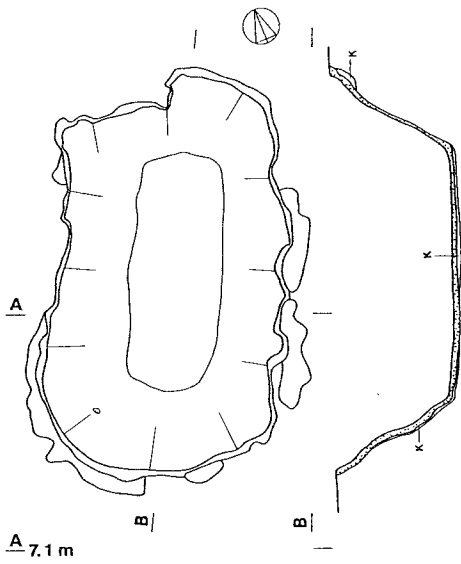
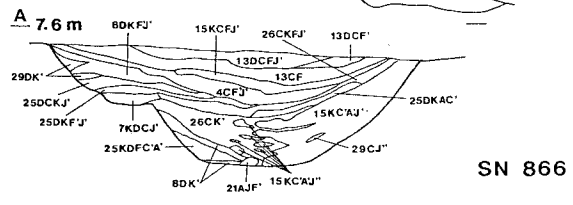
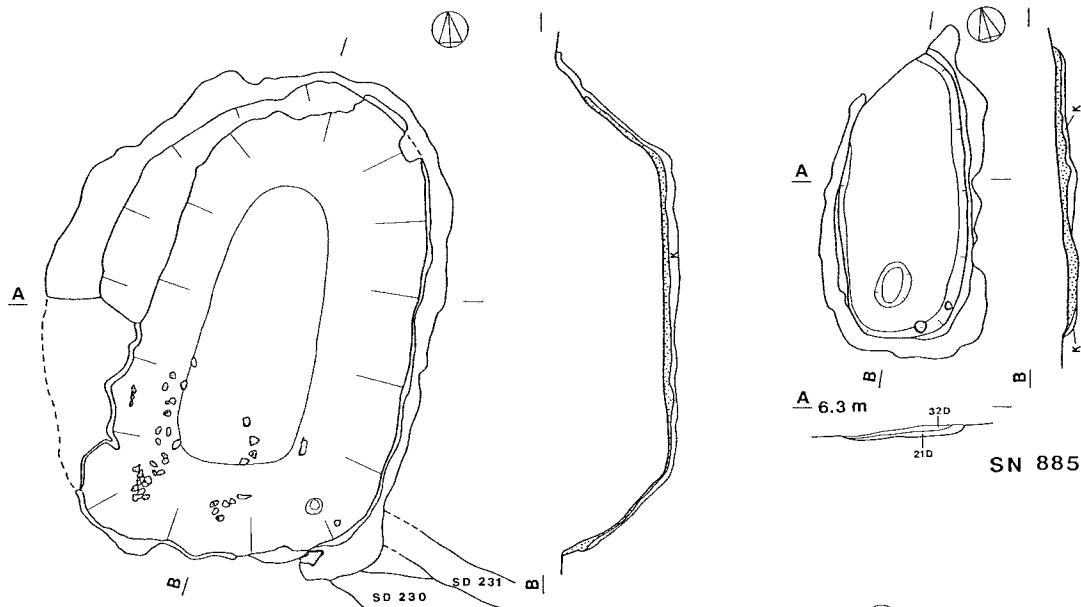
SH 32



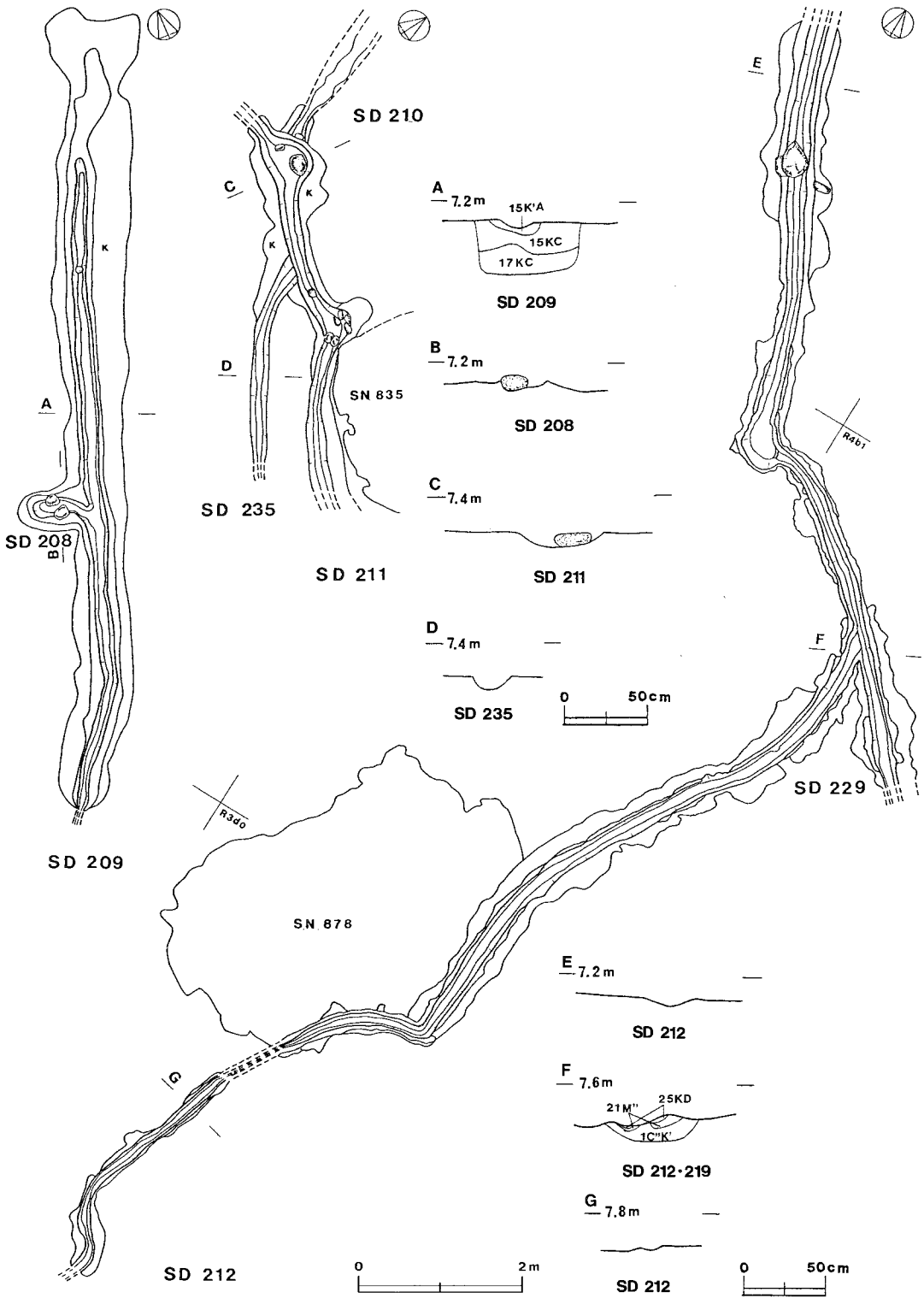
第128図 第32製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第129図 第32製塩跡鹹水槽実測図(1)



第130図 第32製塩跡鹹水槽実測図(2)



第131図 第32製塩跡土桶実測図(2)

は、第832号鹹水槽から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、第218号竈から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
829	Q3i _o	N-16°-E	隅丸長方形	1.88	1.30	0.83	2～8	外傾	皿状	自然	7.05	IVB2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、底面一石5点、土器片1点、炭化物、 [㊦] 炭化物、 [㊧] 石4点、炭化物
830	Q3j _o	N-27°-E	隅丸長方形	2.34	2.06	1.00	3～15	緩斜	皿状	自然	7.07	IVB3c	釜屋内鹹水槽、 [㊦] 石9点、炭化物
832	R3a _o	N-64°-W	楕 円 形	2.10	0.63	0.24	5～7	緩斜	平坦	自然	7.15	IA3a	層出場、底面一炭化物、 [㊦] 炭化物、土師質土器の皿1点
833	Q4b ₂	N-18°-W	隅丸長方形	3.23	2.44	0.71	1～6	外傾	平坦	自然	6.95	IVA4b	屋外鹹水槽
834	Q4i ₂	N-19°-E	楕 円 形	4.60	3.01	1.62	2～5	緩斜	平坦	自然	6.97	IA4d	屋外鹹水槽、底面一石1点、炭化物、駄骨、 [㊦] 炭化物
835	R4a ₁	N-19°-E	隅丸長方形	3.98	2.29	1.18	1～12	緩斜	平坦	自然	7.00	IVA4c	屋外鹹水槽
838	Q4g ₁	N-1°-E	隅丸長方形	(2.70)	2.36	0.25	2～13	緩斜	平坦	自然	6.12	IVA3a	屋外鹹水槽、 [㊦] 石8点、 [㊧] 石1点
866	R4d ₁	N-17°-E	舟 形	5.14	2.80	1.20	2～9	緩斜	平坦	自然	7.42	VIB4c	屋外鹹水槽、底面一石11点、 [㊦] 石77点、焼石1点、 [㊧] 焼石1点
873	R3b _o	N-24°-E	隅丸長方形	3.69	2.16	1.38	2～6	緩斜	平坦	自然	7.20	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
878	R3d _o	N-25°-E	隅丸長方形	4.17	2.39	1.23	2～6	緩斜	平坦	自然	6.90	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
885	R4a ₂	N-17°-E	隅丸長方形	2.98	1.37	0.12	1～14	緩斜	平坦	自然	6.00	IVB3a	屋外鹹水槽、 [㊦] 石3点

土樋一覧表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
208	Q4j ₁	N-68°-W	0.80	22	8	3	2～3	U	自然	無	7.08 ～7.10	第209号土樋と接続
209	Q4h ₂ ～Q4j ₁	N-21°-E	10.10	21	10	4	1～4	U	自然	無	6.99 ～7.10	第208号土樋と接続
210	R3a _o	N-28°-W	0.39	19	4	4	1～3	U	自然	無	7.17	第211号土樋と接続
211	R3a _o ～R4a ₁	N-73°-W	3.10	58	8	5	1～4	U	自然	無	7.11 ～7.16	第210・235号土樋と 接続
212	Q3j _o ～R3e _o	N-51°-W N-30°-E N-37°-W	22.40	24	9	5	1～6	U	自然	有	7.12 ～7.60	第229号土樋と接続
229	R4b ₁	N-45°-W	1.85	25	6	3	1～6	U	自然	無	-	第212号土樋と接続
235	R4a ₁	N-59°-W	2.50	9	-	-	-	U	自然	無	-	第211号土樋と接続
236	R4a ₁	N-32°-W	0.92	16	5	4	3～5	U	自然	無	6.84	
237	R4a ₁ ～R4b ₃	N-71°-W	6.61	24	8	6	1～5	U	自然	無	7.20 ～7.40	

第218号竈土鉄製品一覧表 (第127図1)

図版番号	名称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	6.6	0.6	0.6	25.6	第218号竈	M56 両端部折れ曲がる。

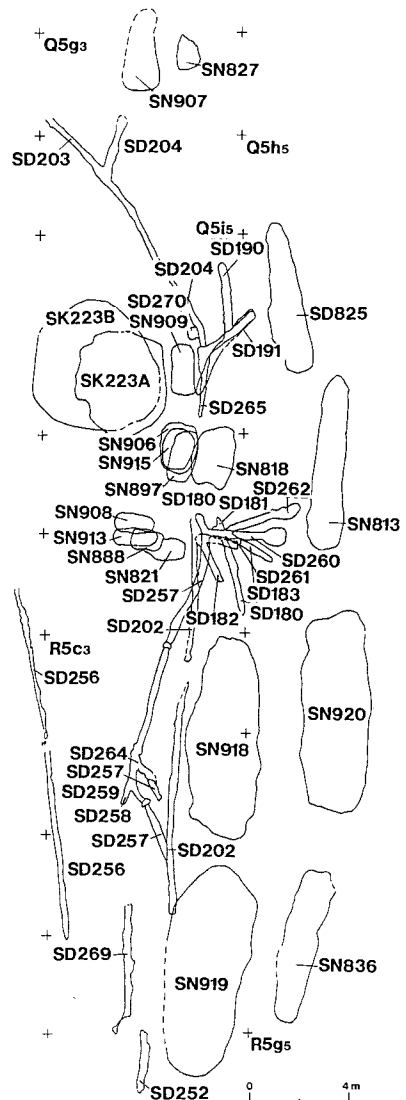
第832号鹹水槽出土土器観察表 (第127図3)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
3	皿 土師質土器	A 10.6 B 3.2 C 3.1	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸みをもつ。	水挽き成型。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・石英・雲母・ 長石・パミス 明赤褐色 普通	P58 100% 第832号鹹水槽覆土 普通

第33製塩跡 (第132図)

位置 調査区の南部 R5b4区を中心に確認され、標高5.72mに位置している。

関連遺構 第223号竈 (A・B・C) , 第813・818・821・825・827・836・888・897・906~909・913・915・918~920号鹹水槽及び第180~183・190・191・202~204・251・252・257~262・264・265・269・270号土樋で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の長軸方向の違いや土樋の接続等から、4グループに区別できる。第1グループは、第223号竈A、釜屋内鹹水槽 (818, 909), 居出場 (821), 屋外鹹水槽 (813, 836, 918~920) 及び土樋 (180~182) で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽 (897, 909), 居出場 (888), 屋外鹹水槽 (813, 836, 918~920) 及び土樋 (183, 202, 260) で構成されている。第3グループは、第223号竈B, 釜屋内鹹水槽 (906, 909), 居出場 (908), 屋外鹹水槽 (813, 825, 836, 918~920) 及び土樋 (190, 191, 202, 251, 261, 262) で構成されている。第4グループは、第223号竈C, 釜屋内鹹水槽 (909, 915), 居出場 (913), 屋外鹹水槽 (813, 825, 827, 907) 及び土樋 (203, 204, 257~260, 264, 265) で構成されている。第252・269・270号土樋は部分的なため、グルーピングできなかった。



第132図 第33製塩跡遺構配置図

第33製塩跡一覧表

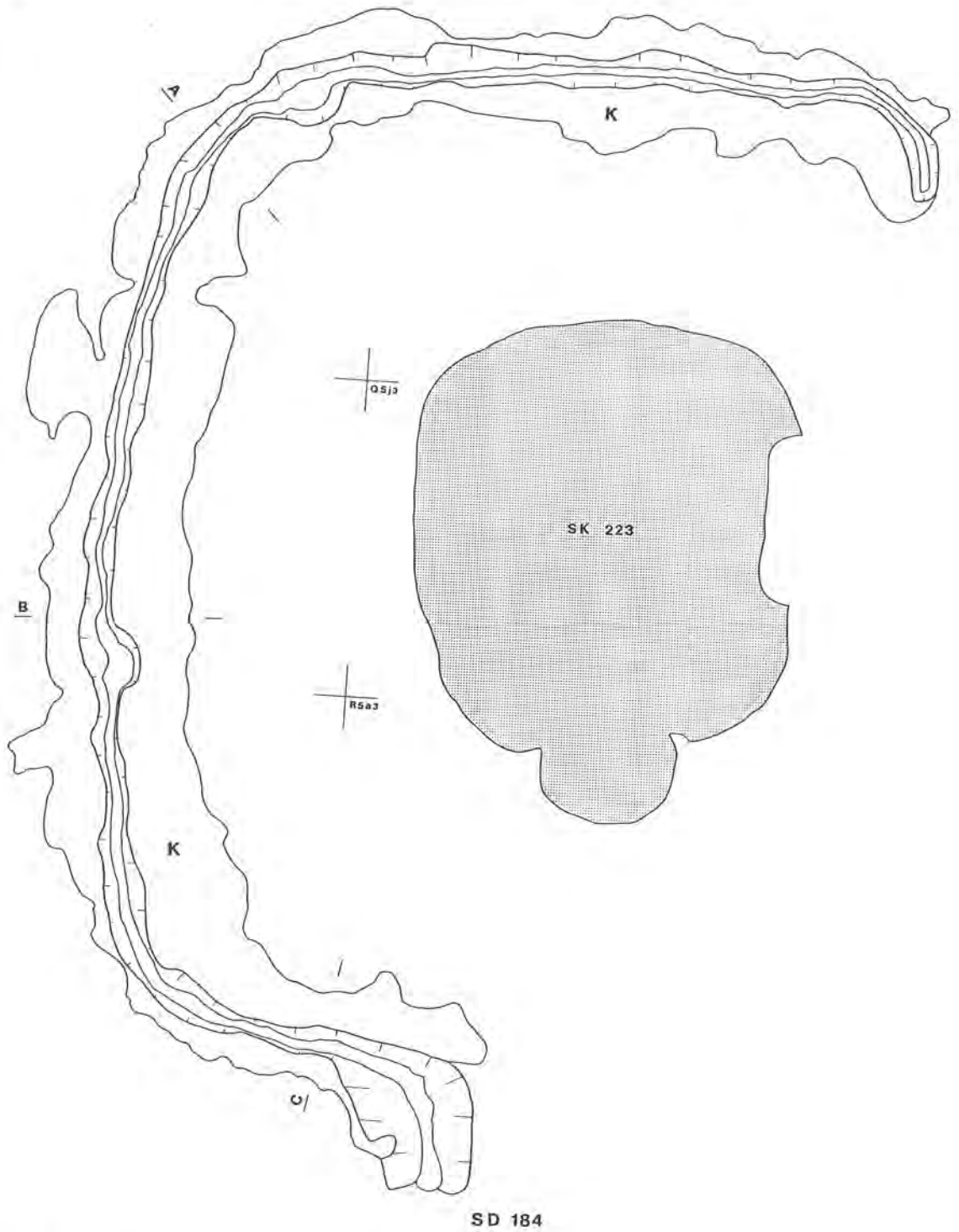
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R5b ₄	5.72	223A	818,909	821	813,836,918,919,920	180,181,182	最新
2	R5b ₄	5.72	223A	897,909	888	813,836,918,919,920	183,202,260	第1グループより古い
3	R5b ₄	5.72	223B	906,909	908	813,825,836,918,919,920	190,191,202,251,261,262	第1・2グループより古い
4	R5b ₄	5.72	223C	909,915	913	813,825,827,907	203,204,257,258,259,260,264,265	最古

釜屋 確認された黒色土の範囲は、南北14.57m、東西12.56mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-3°-Eを指している。砂上に厚さ6～25cmの灰、炭化物及び粘土混じりの黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈3基、東側に鹹水槽6基、南側に居出場4基が位置している。釜屋を囲むように全長25.95m、上幅20～76cm、下幅4～34cm、深さ27～60cmの第184号溝が構築されており、釜屋の囲いと思われる。さらに、溝の中から囲いの柱穴と思われるピットが4か所(P1～P4)検出され、P1～P4の規模は径0.12～0.20m、深さ28～61cmである。居出場の北側には版築された黒色土の上に厚さ5～25cmの粘土が貼ってあり、性格等の詳細は不明である。

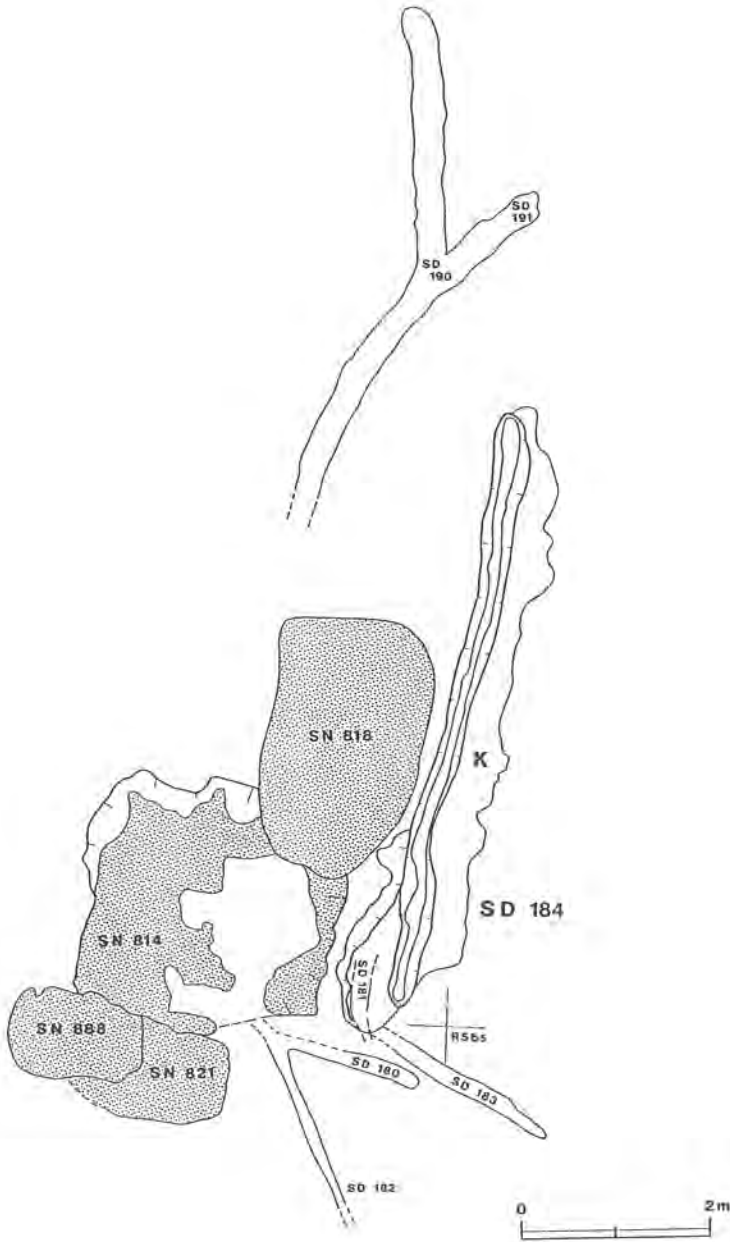
竈 Q5j₃区から3基(第223号竈A・B・C)検出された。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径(3.50)～4.80m、短径(3.28)～4.16m、深さ0.79～1.03mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており、覆土は、上層が周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけて貝殻片、炭化粒子を含む灰が厚さ45～70cmで堆積している。第223号竈Aの覆土中層には貝殻片と火熱により赤変した石を多量に含んだ灰が7～23cmの厚さで堆積している。確認できた範囲は、長軸2.90m、短軸2.14mの楕円形を呈している。底面より釜を吊ったと思われる鉄製品8点が出土している。これらの遺物の出土状況や含有物等から貝釜ではないかと思われる。第223号竈A・B・Cは重複しており、第223号竈Aの下から第223号竈B・Cが検出されたことと、土層から第223号竈Aが最も新しく、次いで第223号竈B、第223号竈Cの順に古くなる。

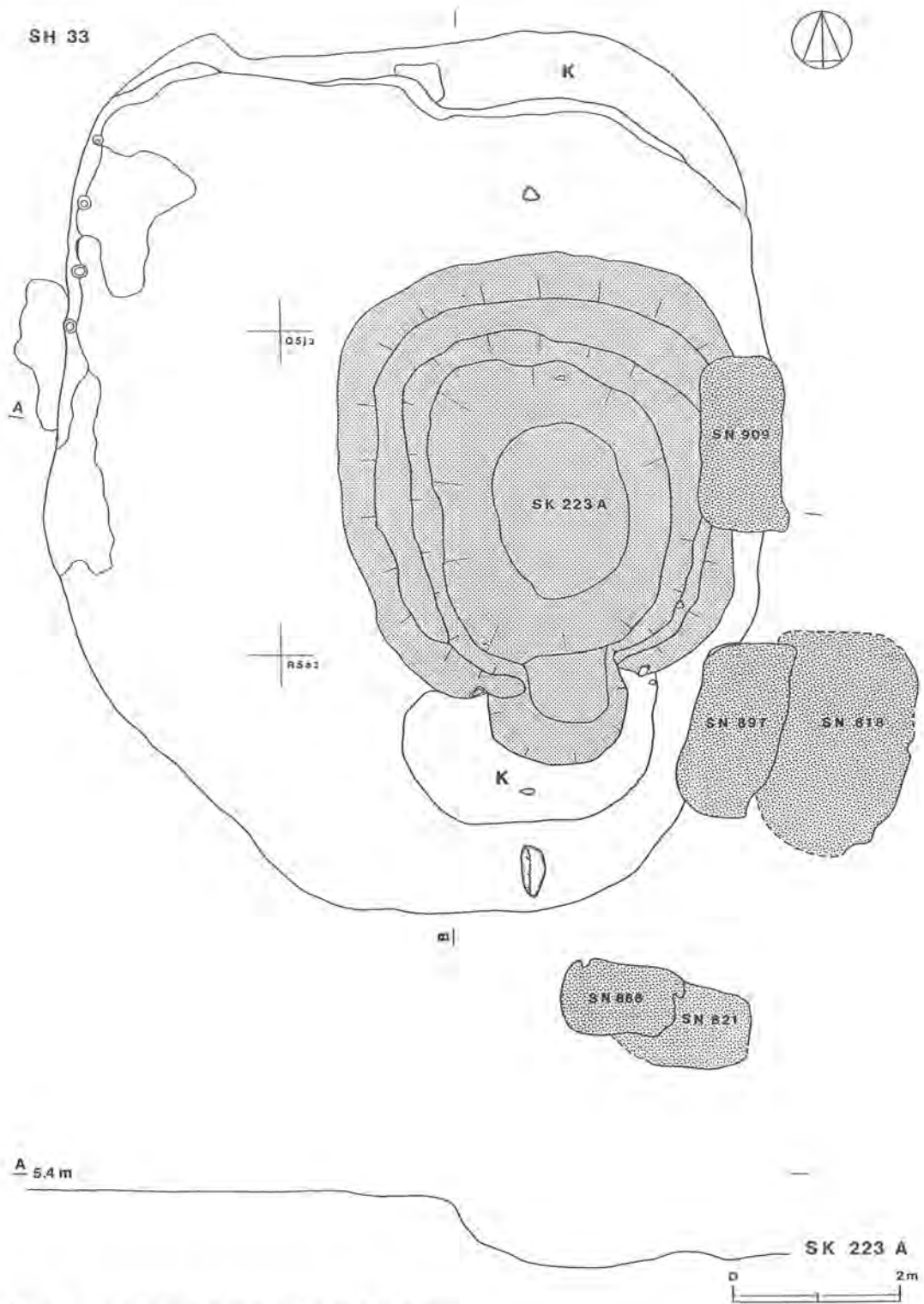
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
223A	Q5j ₃	N-6°-W	楕円形	4.80	4.16	1.03	自然	5.72	④石100点、耳金8点、吊金具1点、煙管1点、石臼1点、土器片7点、⑤炭石1点、石3点、土器片1点	第223号と竈Bと重複
223B	Q5j ₃	N-27°-W	楕円形	(4.10)	(3.28)	0.83	自然	4.32		第223号竈A・Cと重複
223C	Q5j ₃	N-8°-E	楕円形	(3.50)	(3.30)	0.79	自然	3.74		第223号と竈Bと重複

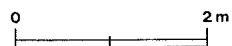
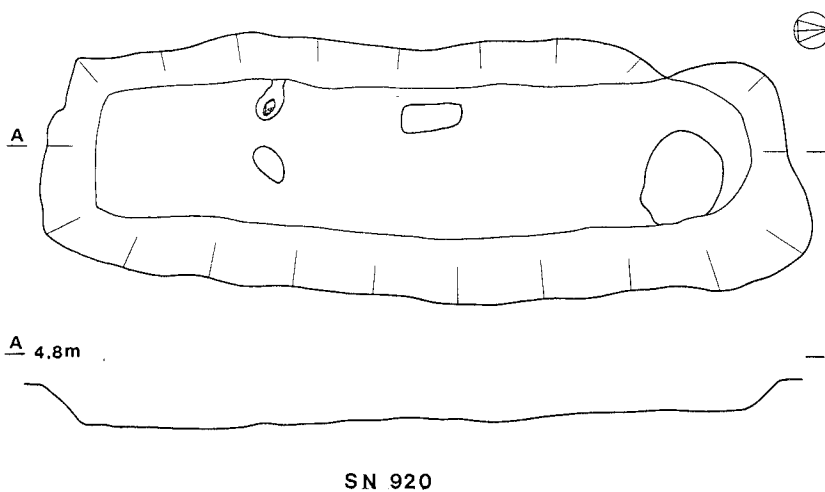
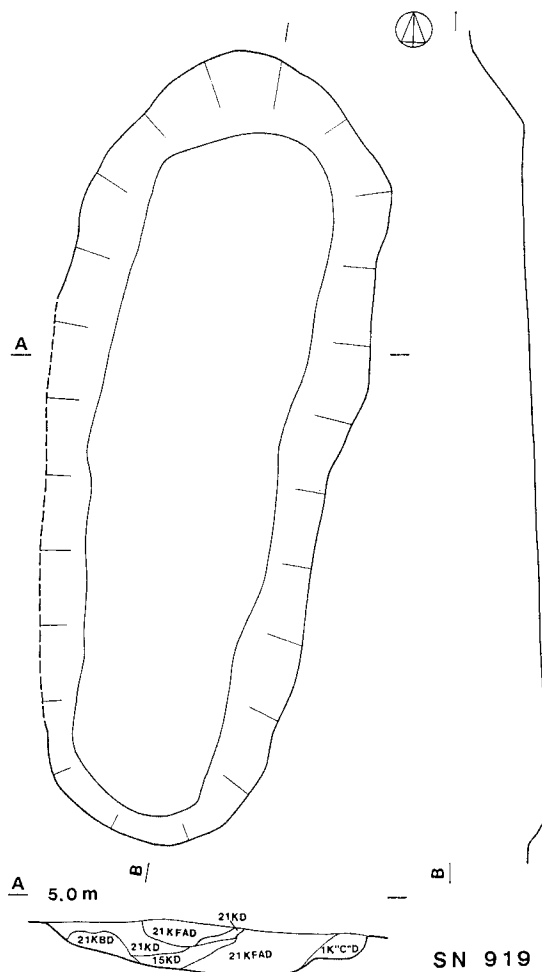
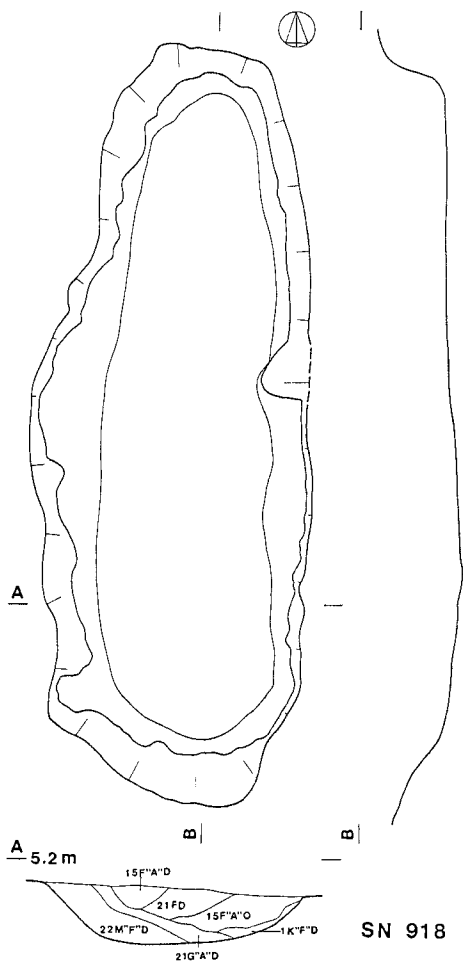


第133図 第33製塩跡釜屋内遺構・溝実測図

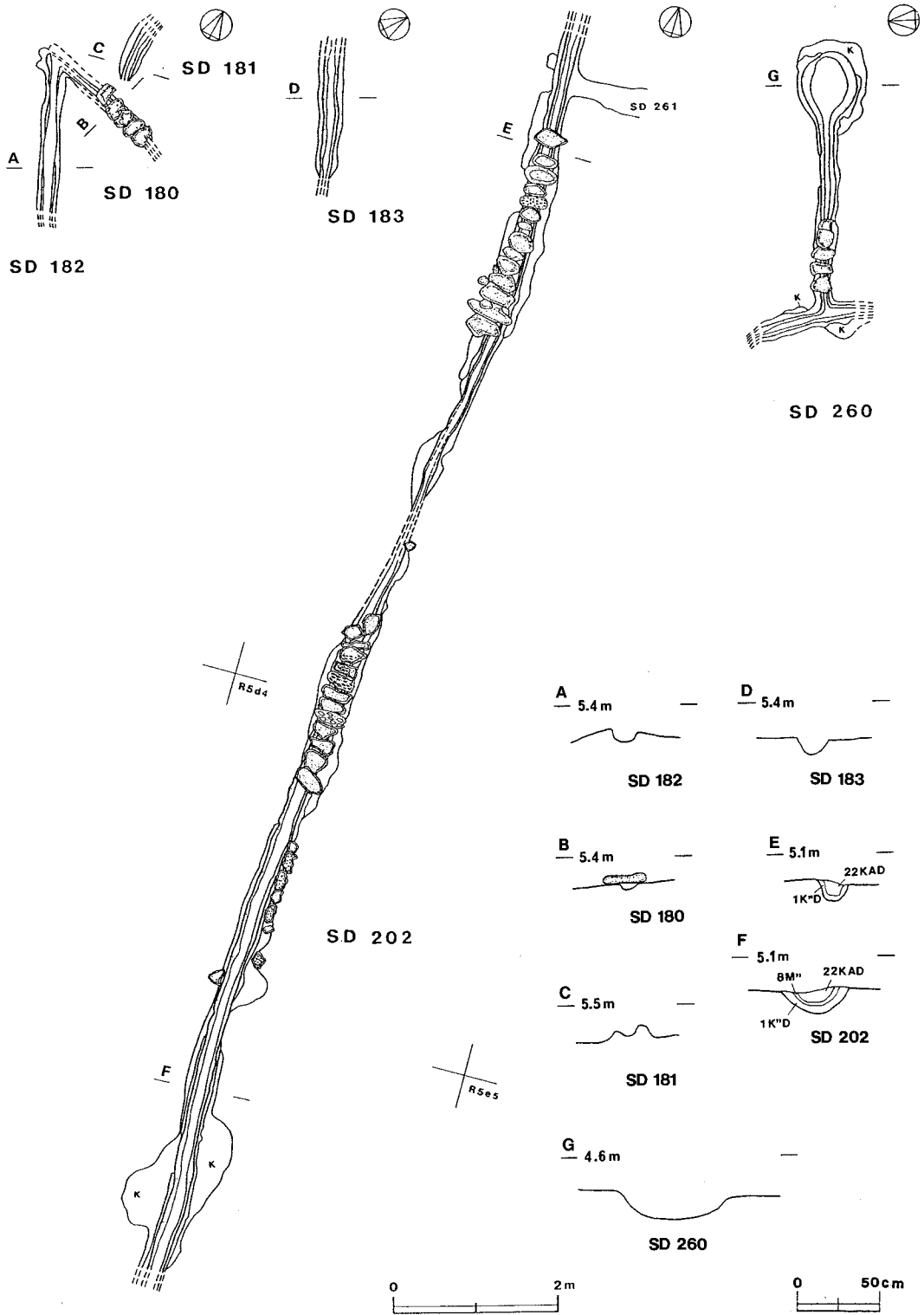




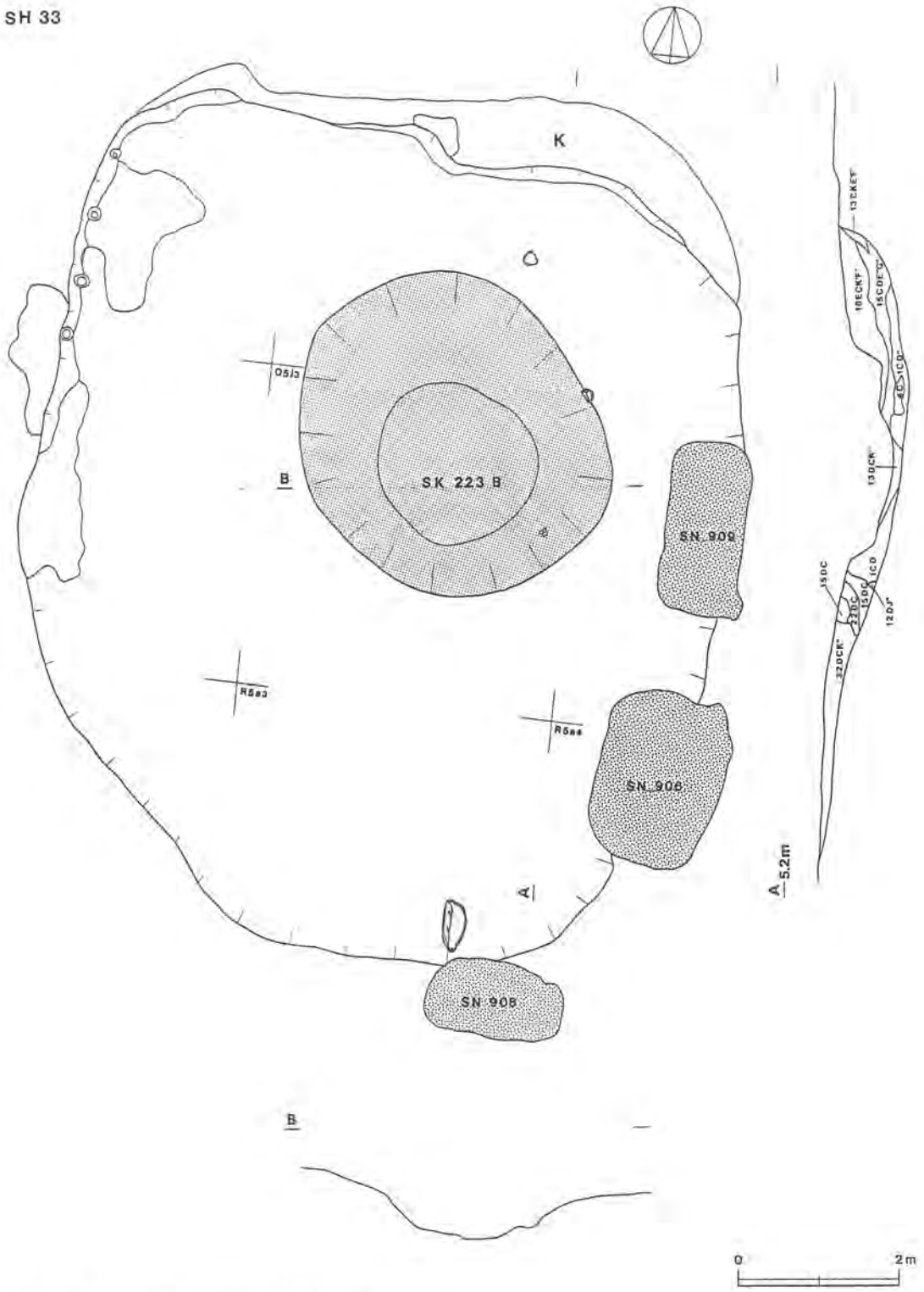
第134図 第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



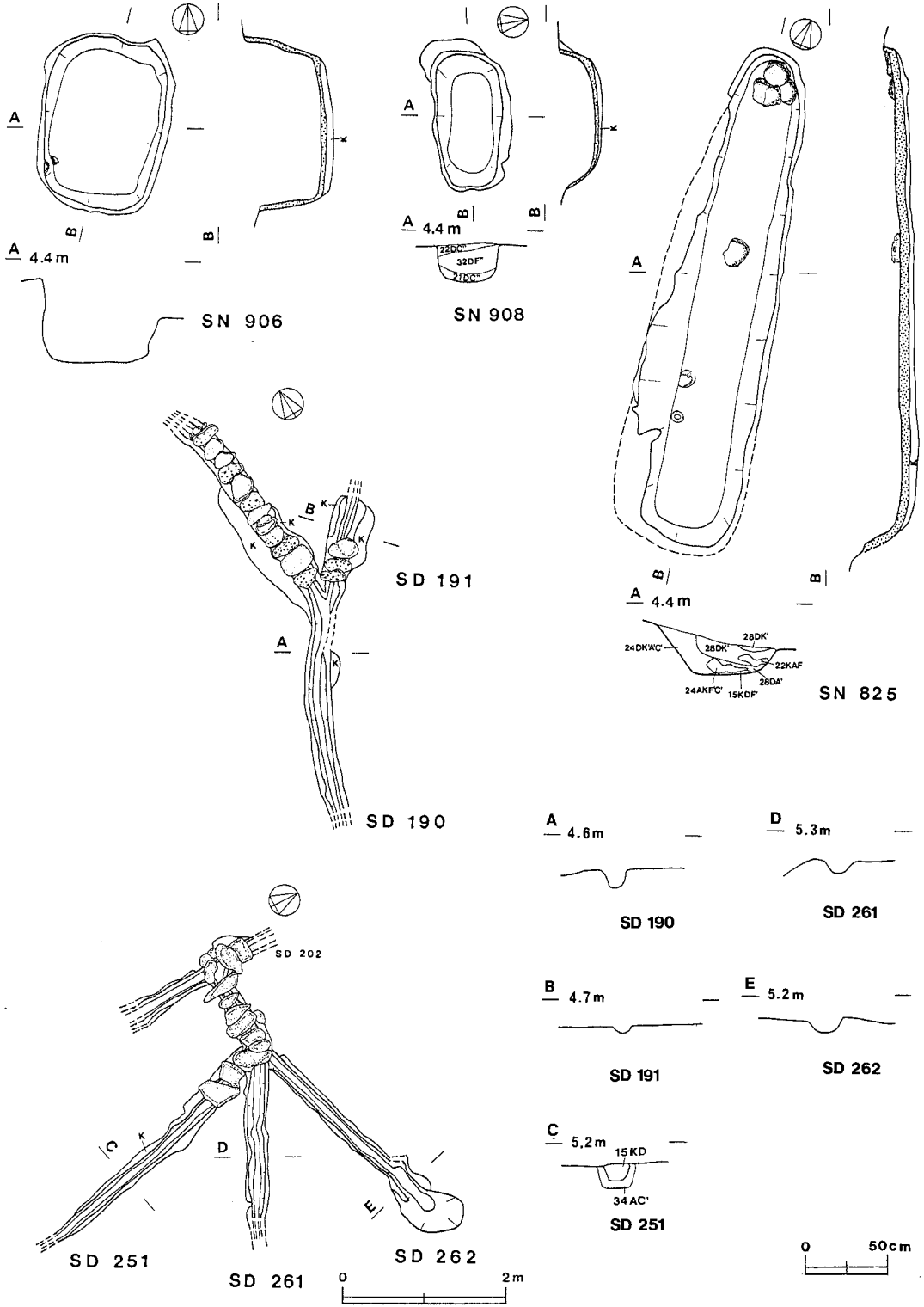
第135図 第33製塩跡鹹水槽実測図



第136图 第33製塩跡土樋実測図

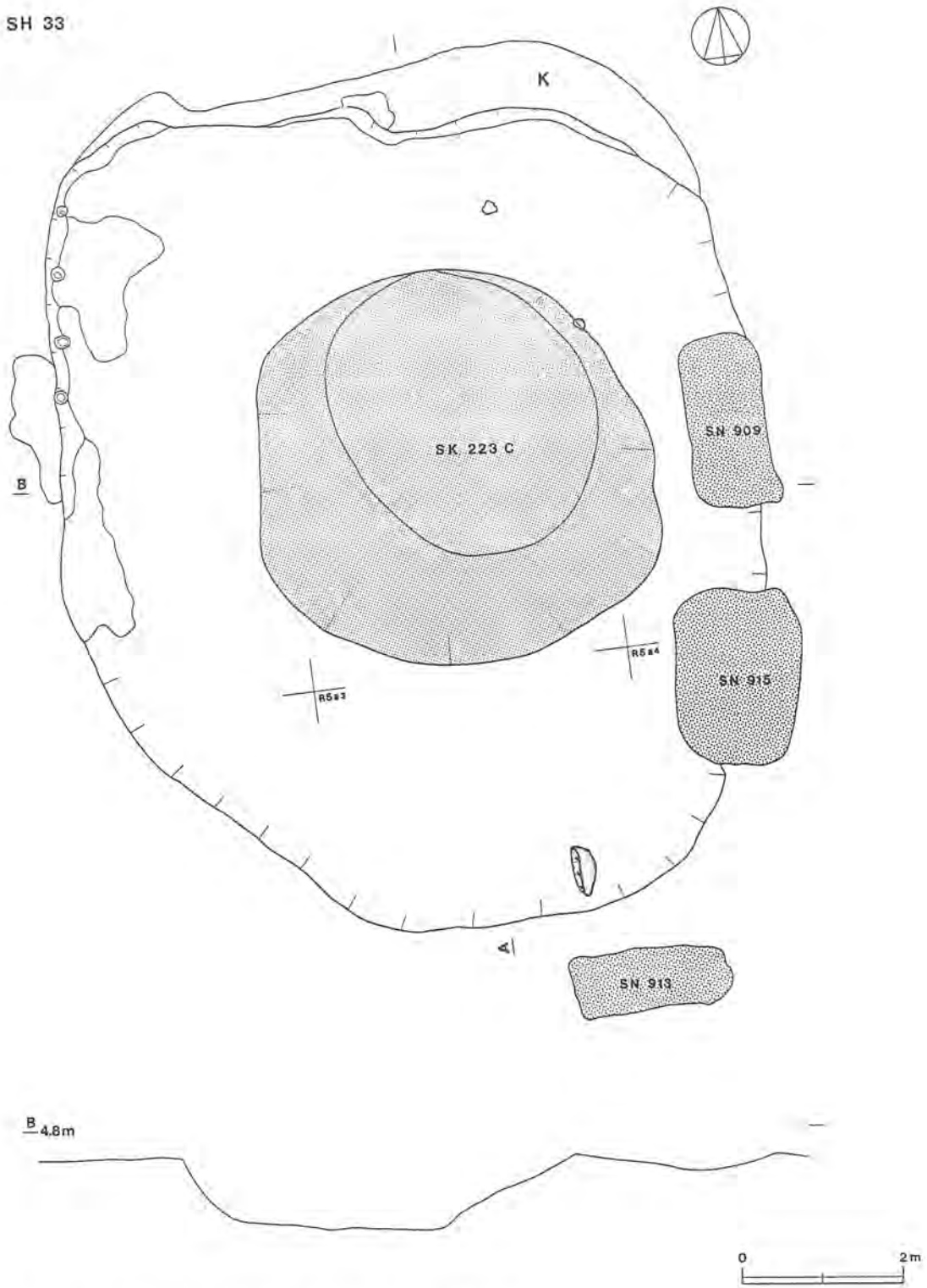


第137図 第33製塩跡釜屋内遺構実測図

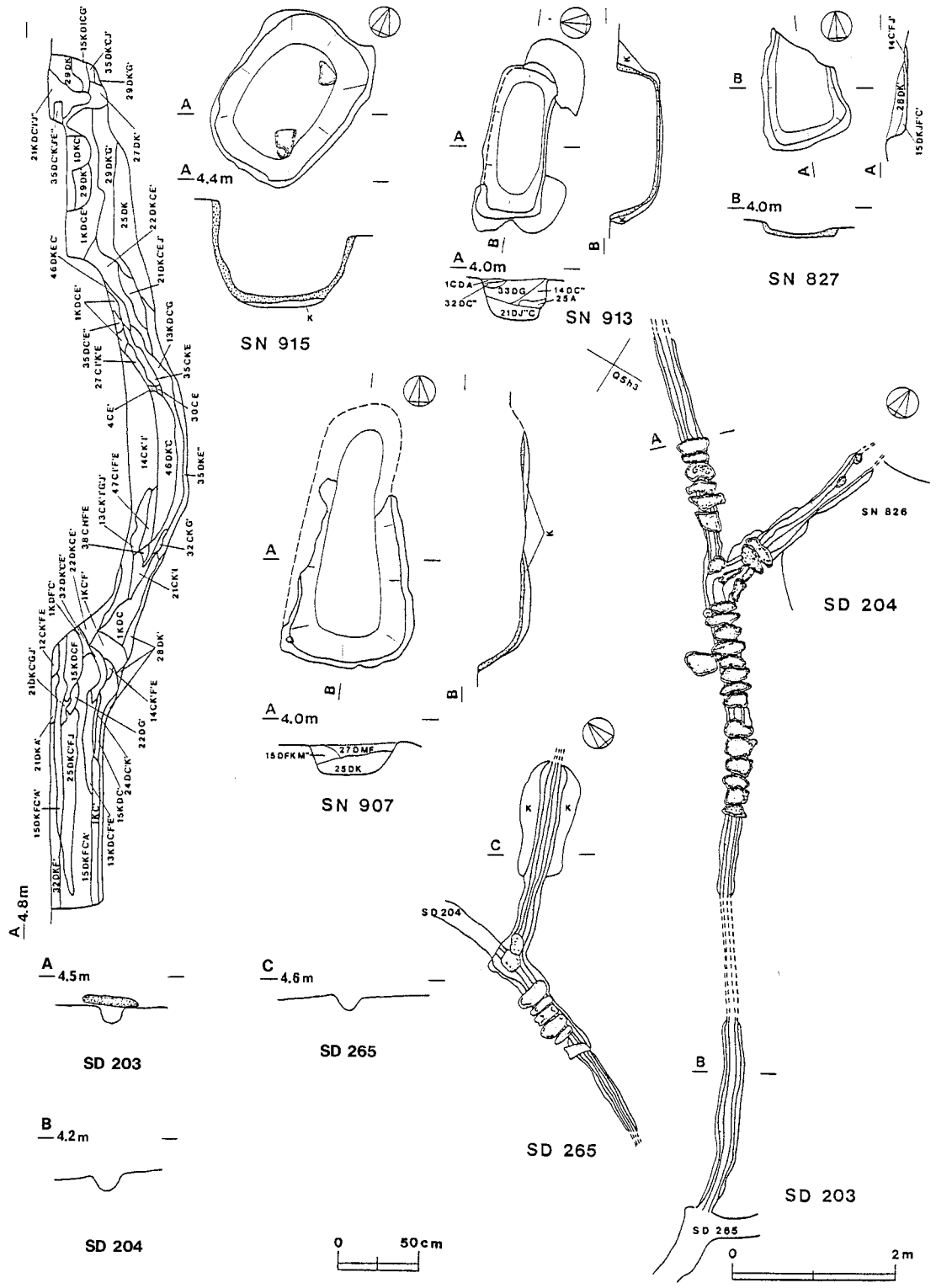


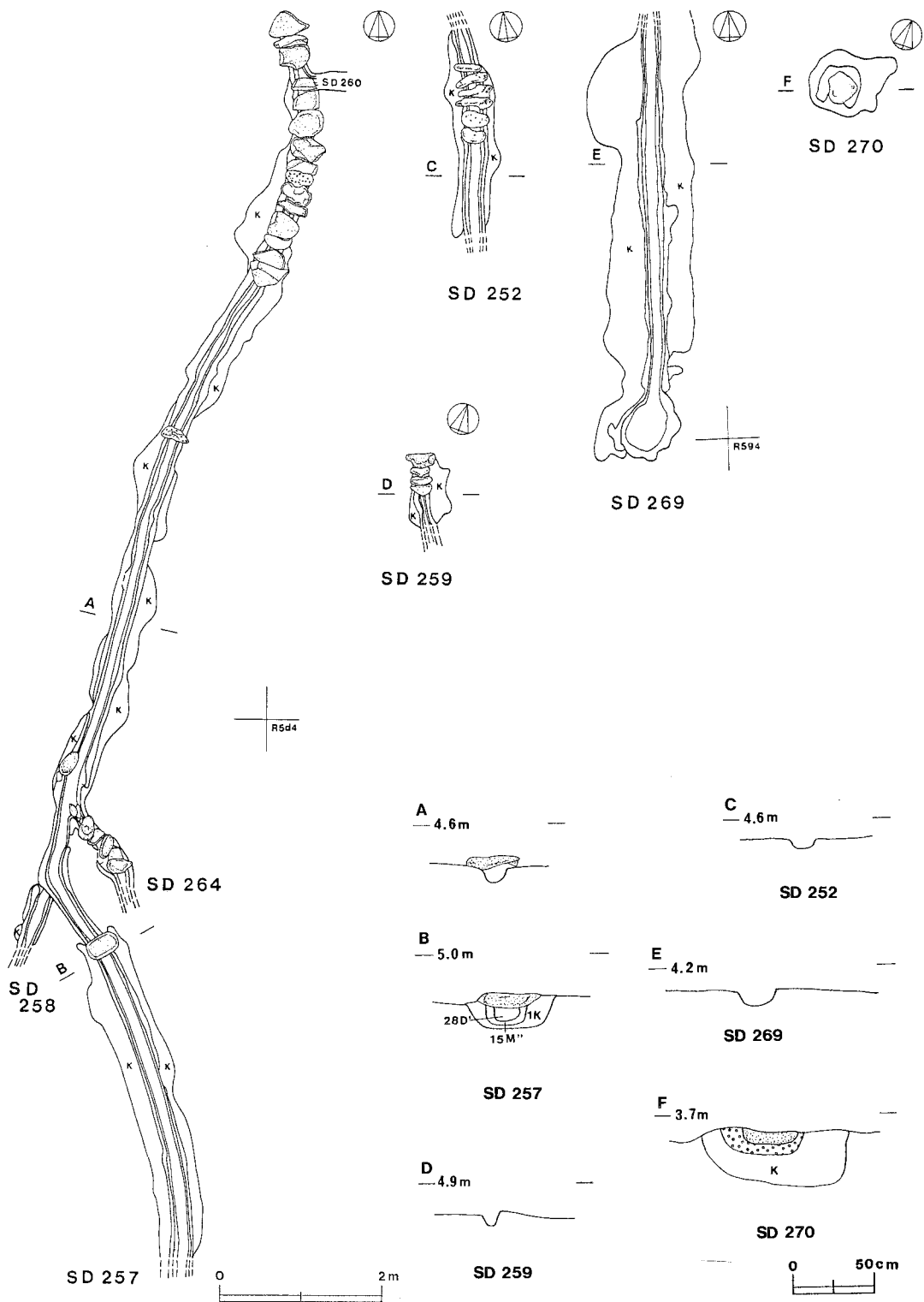
第138图 第33製塩跡鹹水槽・土樋実測図

SH 33



第139図 第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・土樋実測図





第140図 第33製塩跡土樋実測図

釜屋内鹹水槽 Q5j₄区とR5a₄区から5基(第818・897・906・909・915号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.70~2.40m、短軸[径]0.78~1.65m、深さ0.14~0.94mである。底面は平坦で、壁は垂直、外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~15cmの粘土を貼って構築している。第818・897・906・915号鹹水槽は重複しており、第818号鹹水槽の下から第897号鹹水槽、第906号鹹水槽、第915号鹹水槽の順に検出されたことから、第818号鹹水槽が最も新しく、第897・906・915号鹹水槽の順に古いものと思われる。

居出場 R5a₃区・R5b₃・b₄区の3か所から4基(第821・888・908・913号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.21~1.82m、短軸[径]0.53~0.97m、深さ0.46~0.62mである。底面は平坦及び皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1~9cmの粘土を貼って構築している。第821・888・908・913号鹹水槽は重複しており、第821号鹹水槽の下から第888・908・913号鹹水槽の順に検出されたことから、第821号鹹水槽が最も新しく、第888号鹹水槽、第908号鹹水槽、第913号鹹水槽の順に古いものと思われる。

屋外鹹水槽 Q5g₄区・Q5i₅区・R5a₅区・R5c₅区・R5d₄区・R5f₄・f₅区の7か所から8基(第813・825・827・836・907・918~920号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、楕円形、舟形及びひさご形を呈している。規模は、長軸[径](1.20)~8.36m、短軸[径]0.73~3.37m、深さ0.15~0.91mである。底面は平坦及び皿状を呈し、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~13cmの粘土を貼って構築している。第827・907号鹹水槽は北部が攪乱を受け、第918・919・920号鹹水槽は、粘土壁がほとんどない状態で検出された。

土樋 Q5g₃区からR5g₃区を中心にして21条検出され、全長が最も短いものは0.52mで、最も長いものは16.90mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅8~56cm、下幅4~36cm、深さ4~11cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1~11cmの厚さで雨樋のように貼って構築している。第180・190・202~204・251・252・257・259・260・264・265号土樋は石蓋を有している。第180号土樋は第182号土樋と接続し、第251・257号土樋と重複している。第180号土樋の下から、第251・257号土樋が検出されたことから、第180号土樋が新しい。第257号土樋と第182号土樋は重複しており、第182号土樋の下から第257号土樋が検出されたことから、第182号土樋が新しい。第181号土樋は第183・251・260~262号土樋と重複しており、第181号土樋の下から第183・251・260~262号土樋の順に検出されたことから、第181号土樋が最も新しく、次いで第183号土樋、第251号土樋、第260~262号土樋の順に古くなるものと思われる。第190号土樋は第191号土樋と接続している。第191号土樋は第265号土樋と重複しており、第191号土樋の下から第265

号土樋が検出されたことから、第191号土樋が新しい。第202号土樋は、第251号土樋に接続している。第203号土樋は第204号土樋と接続している。第257号土樋は第258・264号土樋と接続している。

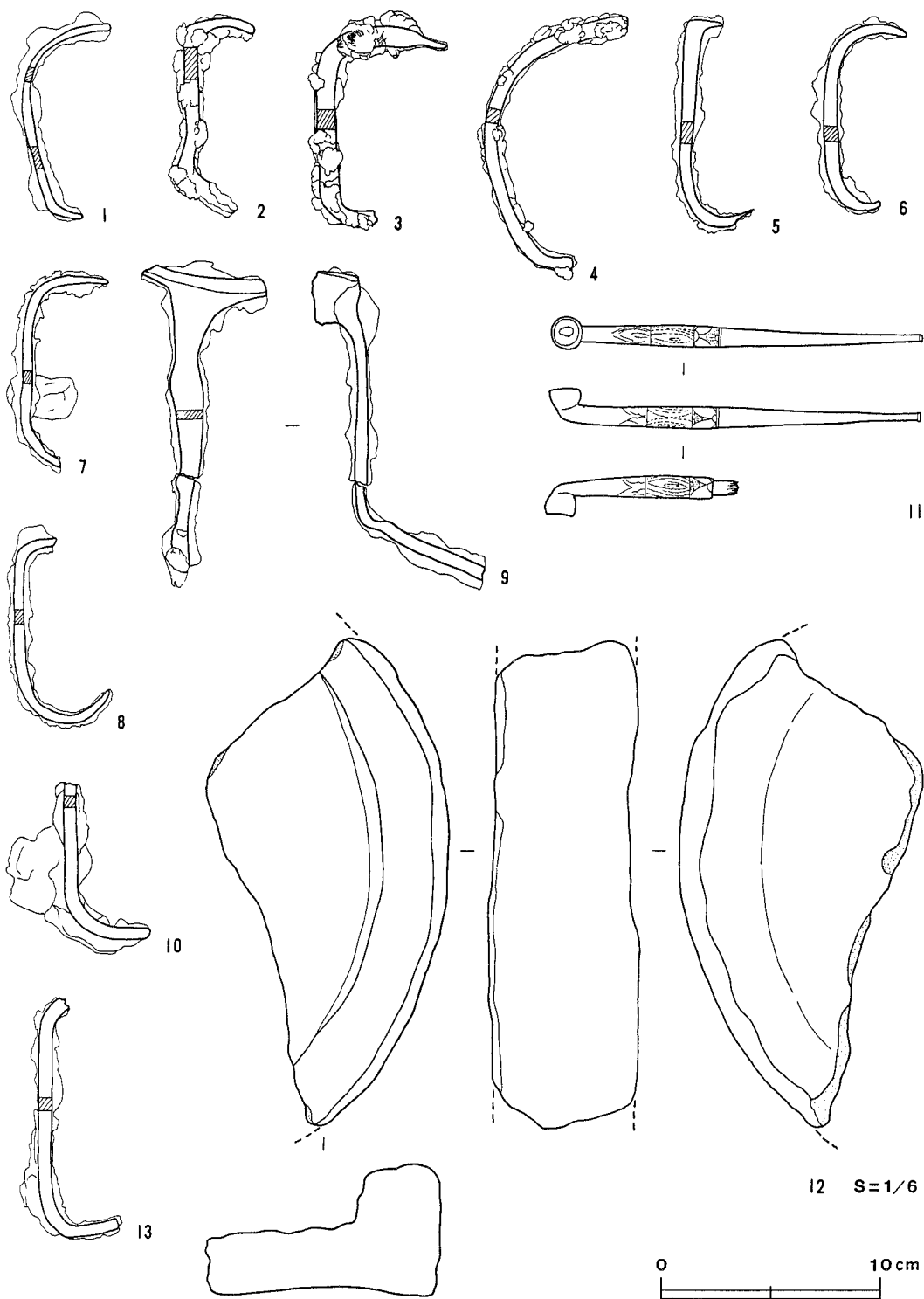
鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
813	R5a _s	N-6°-E	ひさご形	7.10	1.47	0.42	3~12	緩斜	平坦	自然	4.96	VIIA4a	屋外鹹水槽、底面一石3点、焼石1点、㊦石1点、貝殻片2点
818	R5a _s	N-12°-E	楕円形	2.40	1.65	0.94	4~14	外傾	平坦	自然	5.15	IA3b	釜屋内鹹水槽、底面一焼石1点、㊦耳金1点、第897・906・915号鹹水槽と重複
821	R5b _s	N-73°-W	隅丸長方形	1.68	0.97	0.62	1~5	外傾	平坦	自然	5.30	IVA2b	居出場、第888・908・913号鹹水槽と重複
825	Q5i _s	N-11°-W	舟形	6.10	1.46	0.65	1~6	緩斜	平坦	自然	4.13	VIA4b	屋外鹹水槽、底面一石5点、㊦石1点
827	Q5g _s	N-4°-E	(隅丸長方形)	(1.20)	0.73	0.15	1~5	外傾	皿状	自然	3.84	IVB2a	屋外鹹水槽
836	R5f _s	N-15°-E	楕円形	6.26	1.36	0.40	1~13	緩斜	平坦	自然	4.30	IA4a	屋外鹹水槽
888	R5b _s	N-75°-W	隅丸長方形	1.21	0.53	0.59	2~9	外傾	平坦	自然	5.00	IVA2b	居出場、第821・908・913号鹹水槽と重複
897	R5a _s	N-13°-E	隅丸長方形	2.08	(1.01)	0.89	4~15	垂直	平坦	自然	4.68	IVA3b	釜屋内鹹水槽、底面一石1点、第818・906・915号鹹水槽と重複
906	R5a _s	N-13°-E	隅丸長方形	2.10	1.40	0.93	2~7	外傾	平坦	自然	4.07	IVA3b	釜屋内鹹水槽、底面一石1点、㊦石1点、第818・897・915号鹹水槽と重複
907	Q5g _s	(N-5°-E)	舟形	(3.29)	(1.27)	0.51	1~5	緩斜	平坦	自然	3.80	VIA4b	屋外鹹水槽、㊦石5点、貝殻6点、第821・888・913号鹹水槽と重複
908	R5a _s	N-78°-W	楕円形	1.63	0.92	0.46	1~7	外傾	皿状	自然	4.19	IB2a	居出場
909	Q5j _s	N-1°-E	隅丸長方形	2.08	0.78	0.50	3~7	外傾	平坦	自然	3.70	IVA3b	釜屋内鹹水槽
913	R5b _s	N-85°-W	隅丸長方形	1.82	0.70	0.51	1~7	外傾	平坦	自然	3.95	IVA2b	居出場、第821・888・908号鹹水槽と重複
915	R5a _s	N-13°-E	隅丸長方形	1.70	1.23	0.14	4~5	緩斜	平坦	自然	3.15	IVA2a	釜屋内鹹水槽、底面一石3点、㊦石1点、第818・897・906号鹹水槽と重複
918	R5d _s	N-3°-E	楕円形	7.95	2.93	0.91	-	緩斜	平坦	自然	5.03	IA4b	屋外鹹水槽
919	R5f _s	N-12°-E	楕円形	8.36	3.37	0.80	-	緩斜	平坦	自然	4.85	IA4b	屋外鹹水槽
920	R5c _s	N-1°-W	隅丸長方形	8.07	2.77	0.54	-	緩斜	平坦	自然	4.56	IVA4b	屋外鹹水槽

出土遺物 第223号竈Aの覆土中から耳金8点(第141図1~8)、舟釘1点(第141図9)、吊金具1点(第141図10)、煙管1点(第141図11)、石臼1点(第141図12)、土器片7点、焼石100点が出土している。これらのうち、11の煙管と12の石臼及び土器片は周囲からの流れ込みと思われる。12の石臼は、粉挽き臼の上臼の破片で、完存率は15%である。推定直径約28.0cm、現存する高さ6.2cm、上縁高3.0cm、上縁幅4.0cm、重量1,400gを測る。石質は砂岩である。磨り合わせ面は摩滅が著しく、分画数は不明である。11の煙管は、雁首、火皿、吸口部を残し、羅宇の大部分を欠損している。現存長17.2cm、羅宇の径0.8cm、火皿の口径1.4cmである。雁首表面は線刻されており、羅宇表面には朱色の漆が施されている。季刊考古学第13号(古泉弘氏1985)の編年に

土樋一覽表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
180	R5b ₄	N-76°-W	1.65	10	5	4	2~6	U	自 然	有	5.24	第182号土樋と接続, 第251・257号土樋と 重複
181	R5b ₄	N-5°-W	0.80	11	4	4	-	U	自 然	無	5.36	土器片1点, 第183・ 251・260~262号土樋 と重複
182	R5b ₄	N-28°-W	3.75	15	10	6	4~6	U	自 然	無	5.20 ~5.24	第180号土樋と接続, 第257号土樋と重複
183	R5b ₅	N-60°-W	1.75	18	9	5	-	U	自 然	無	5.22	第181・251・260~262 号土樋と接続
190	Q5i ₄ ~Q5i ₄	N-5°-W	5.60	21	12	8	4~6	U	自 然	有	4.39 ~4.78	第191号土樋と接続
191	Q5i ₅	N-45°-E	1.40	13	6	6	2~5	U	自 然	無	4.46	第190号土樋と接続, 第265号土樋と重複
202	R5a ₄ ~R5e ₄	N-7°-E	16.05	20	9	11	2~4	U	自 然	有	4.91 ~4.93	第251号土樋と接続
203	Q5g ₃ ~Q5h ₃	N-43°-W	3.00	18	7	7	1~5	U	自 然	有	4.26 ~4.30	第204号土樋と接続
204	Q5g ₃ ~Q5j ₄	N-31°-W	10.80	24	7	8	1~4	U	自 然	有	4.01 ~4.18	第203号土樋と接続
251	R5b ₄	N-12°-W	4.50	16	6	11	3~6	U	自 然	有	5.08	第202号土樋と接続, 第180・183・260~262 号土樋と重複
252	R5g ₃	N-8°-E	2.60	24	7	5	2~6	U	自 然	有	4.48	
257	R5a ₄ ~R5e ₄	N-17°-E	16.90	18	8	9	1~6	U	自 然	有	4.76 ~4.80	第258・264号土樋と 接続, 第180・182号 土樋と重複
258	R5d ₃	N-21°-E	0.76	18	7	6	1~4	U	自 然	無	4.40	第257号土樋と接続
259	R5d ₄	N-30°-W	0.90	8	5	6	4~8	U	自 然	有	4.72	第264号土樋の作り 替え
260	R5a ₄ ~R5b ₅	N-88°-W	3.39	18	6	7	3~11	U	自 然	有	4.16	第257号土樋と接続, 受皿, 第183・251・ 261・262号土樋と重複
261	R5b ₄ ~R5b ₅	N-58°-W	2.21	20	7	11	2~3	U	自 然	無	5.12	第183・251・261・262 号土樋と重複
262	R5a ₄ ~R5a ₅	N-72°-E	3.10	15	7	10	3~9	U	自 然	無	5.07	第183・251・260・261 号土樋と重複
264	R5d ₃ ~R5d ₄	N-35°-W	1.20	11	10	6	4~7	U	自 然	有	4.44	第257号土樋と接続
265	Q5i ₅ ~Q5j ₄	N-50°-E	2.44	15	4	10	1~6	U	自 然	有	3.92 ~4.50	第191号土樋と重複
269	R5e ₃ ~R5g ₃	N-1°-E	5.40	23	11	6	3~5	U	自 然	無	4.04 ~4.06	
270	Q5i ₄ ~Q5j ₄	N-13°-W	0.52	56	36	6	-	U	自 然	無	3.60	



第141図 第33製塩跡出土遺物実測図

よると、18世紀後半から19世紀と思われる。さらに、第818号鹹水槽の覆土中から耳金1点（第141図13）が出土している。これも周囲からの流れ込みと思われる。

第223号竈出土鉄製品一覧表(第141図1～10)

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	9.1	1.0	0.4	38.6	第223号竈	M39 断面長方形，両端部折れ曲がる。
2	耳 金	9.3	1.4	0.6	68.5	第223号竈	M40 断面長方形，貝殻片付着。
3	耳 金	9.5	1.0	0.9	59.7	第223号竈	M41 断面正方形，下端部折れ曲がる。
4	耳 金	11.9	0.6	0.6	46.4	第223号竈	M42 両端部折れ曲がる。
5	耳 金	9.7	1.0	0.6	50.8	第223号竈	M43 両端部折れ曲がる。
6	耳 金	8.5	0.7	0.6	29.8	第223号竈	M44 両端部折れ曲がる。
7	耳 金	9.3	0.6	0.4	34.6	第223号竈	M45 断面長方形，両端部折れ曲がる。
8	耳 金	8.6	0.6	0.5	33.1	第223号竈	M46 両端部折れ曲がる。
9	舟 釘	14.8	0.4	1.2	93.8	第223号竈	M47
10	吊 金 具	6.8	0.5	0.5	65.4	第223号竈	M48 上部欠損。

第818号鹹水槽出土鉄製品一覧表(第141図13)

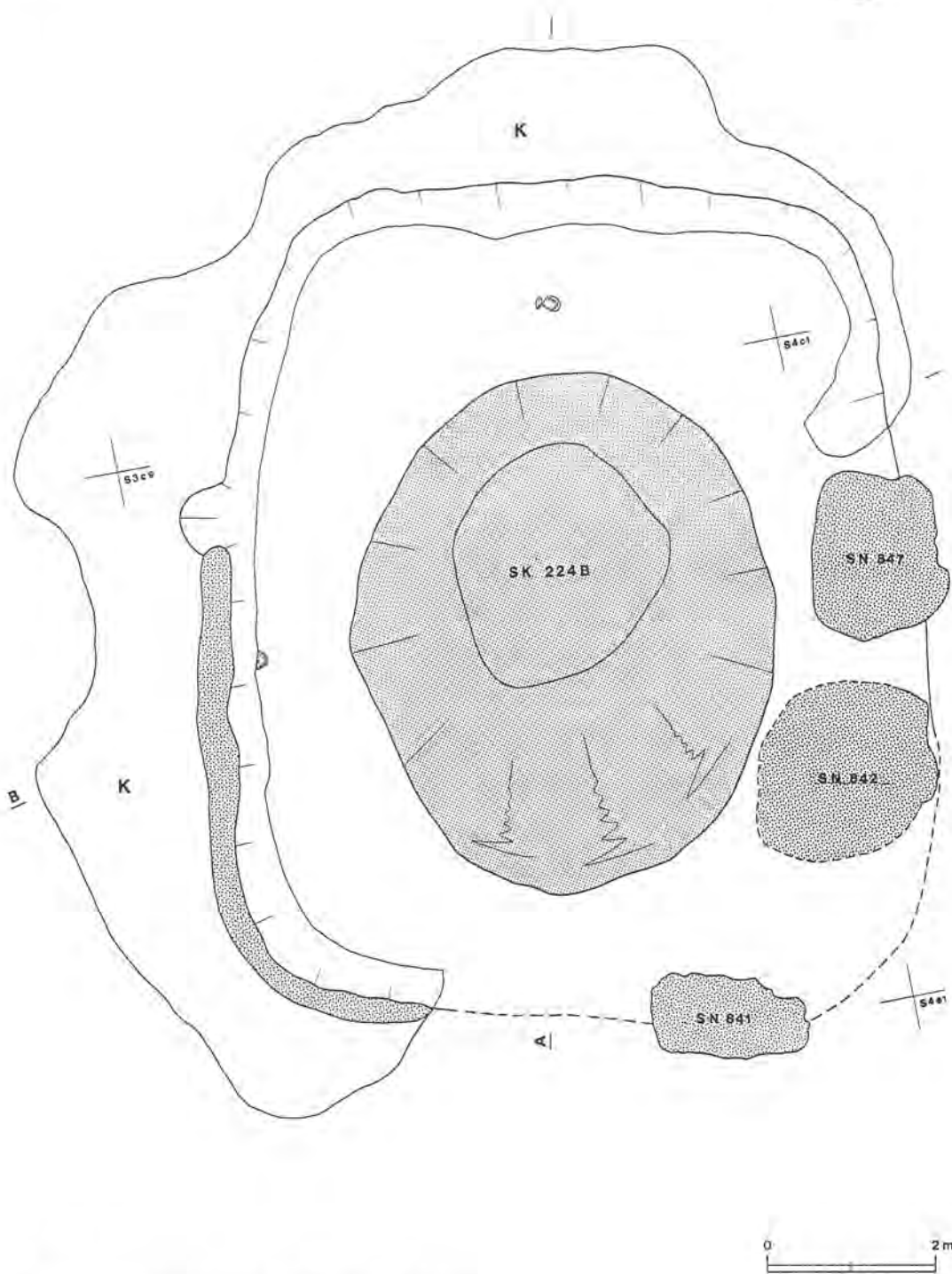
図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
13	耳 金	11.2	0.6	0.6	45.1	第818号鹹水槽	M52 断面正方形，下端部折れ曲がる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、竈や釜屋内鹹水槽、居出場及び土樋の重複関係から、第1グループが最も新しく、第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第223号竈と第818号鹹水槽から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることはできなかった。

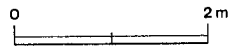
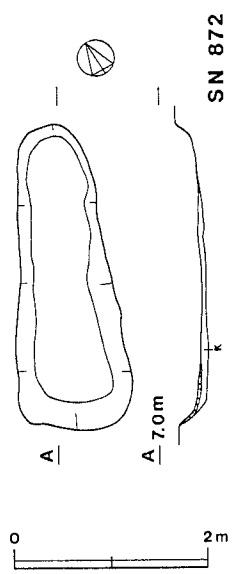
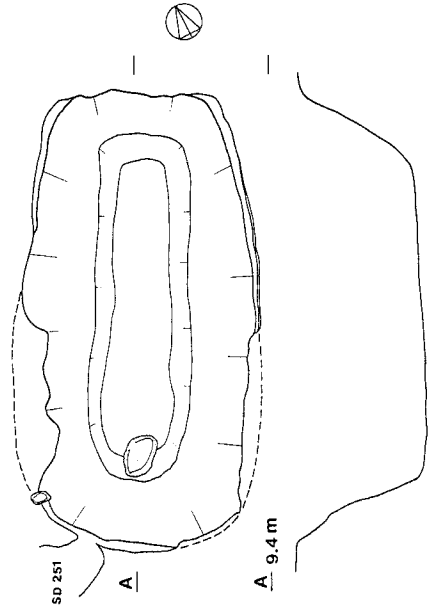
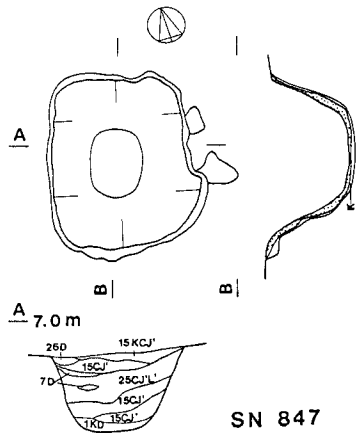
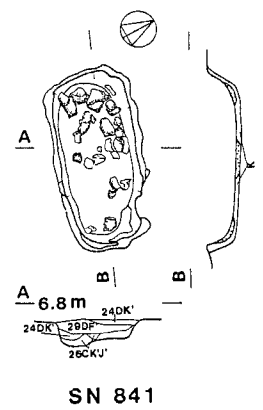
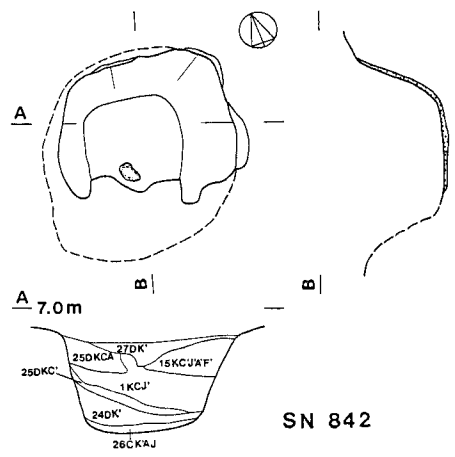
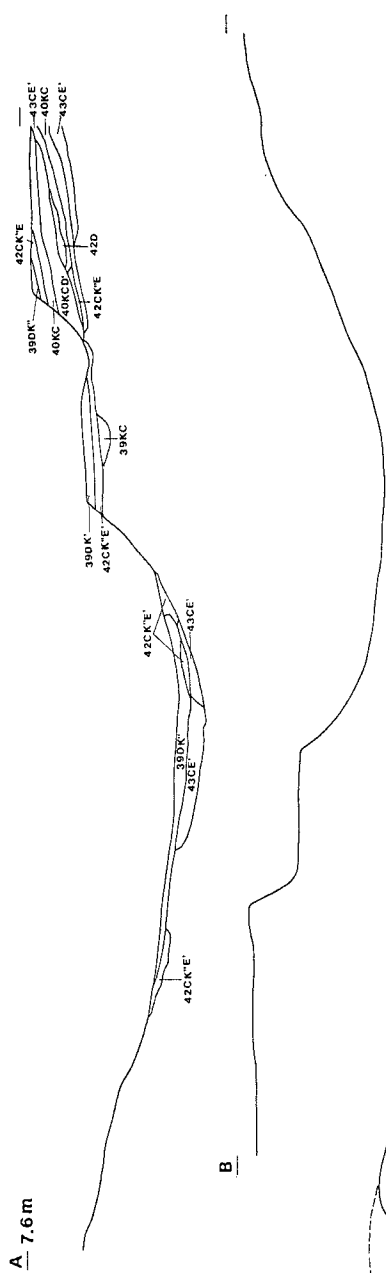
第34製塩跡（第143図）

位置 調査区の南部S4c1区を中心に確認され、標高7.94mに位置している。

関連遺構 第224号竈（A・B）、第712B・837・841・842・847・872号鹹水槽及び第189・201・213・215号土樋で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係や鹹水槽の長軸方向の違いから、2グループに区別できる。第1グループは、第224号竈B、釜屋内鹹水槽（842、847）、居出場（841）、屋外鹹水槽（712B、872）及び土樋（189、201、215）で構成されている。第2グループは、釜屋内鹹水槽と居出場が第1グループと同一で、第224号竈A、屋外鹹水槽（837）及び土樋（213）で構成されている。

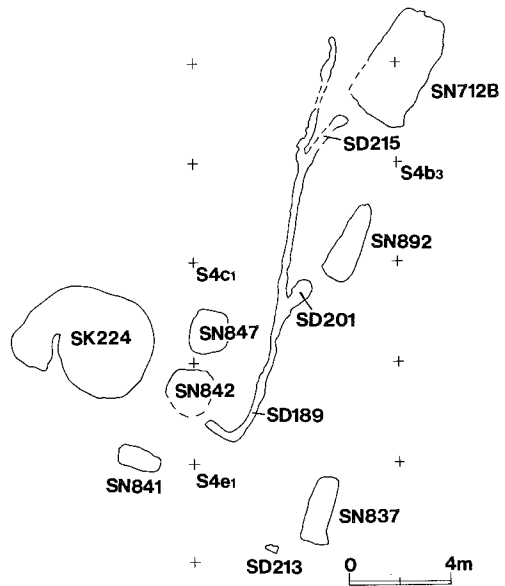


第142図 第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北12.10m、東西10.75mの不定形を呈している。砂上に厚さ12cmの灰、煤及び貝殻片混じりの黒色土を貼り付け、西側から南西コーナーにかけて、底面から40～50cmの高さに山砂を土手状に構築し、中央部に竈2基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場1基が位置している。黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出できなかった。

竈 S3c₀区を中心に2基（第224号竈A・B）重複して検出された。平面形は楕円形を呈している。規模は、長径7.23・6.78m、短径6.20・5.62m、深さ0.66・1.03mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけて炭化粒子を含む灰が70cmの厚さで堆積している。第224号竈Bの火床と思われる砂は、火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第224号竈Aの下から第224号竈Bが検出されたことから、第224号竈Aが新しい。



第143図 第34製塩跡遺構配置図

第224号竈Bの火床と思われる砂は、火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第224号竈Aの下から第224号竈Bが検出されたことから、第224号竈Aが新しい。

第34製塩跡一覧表

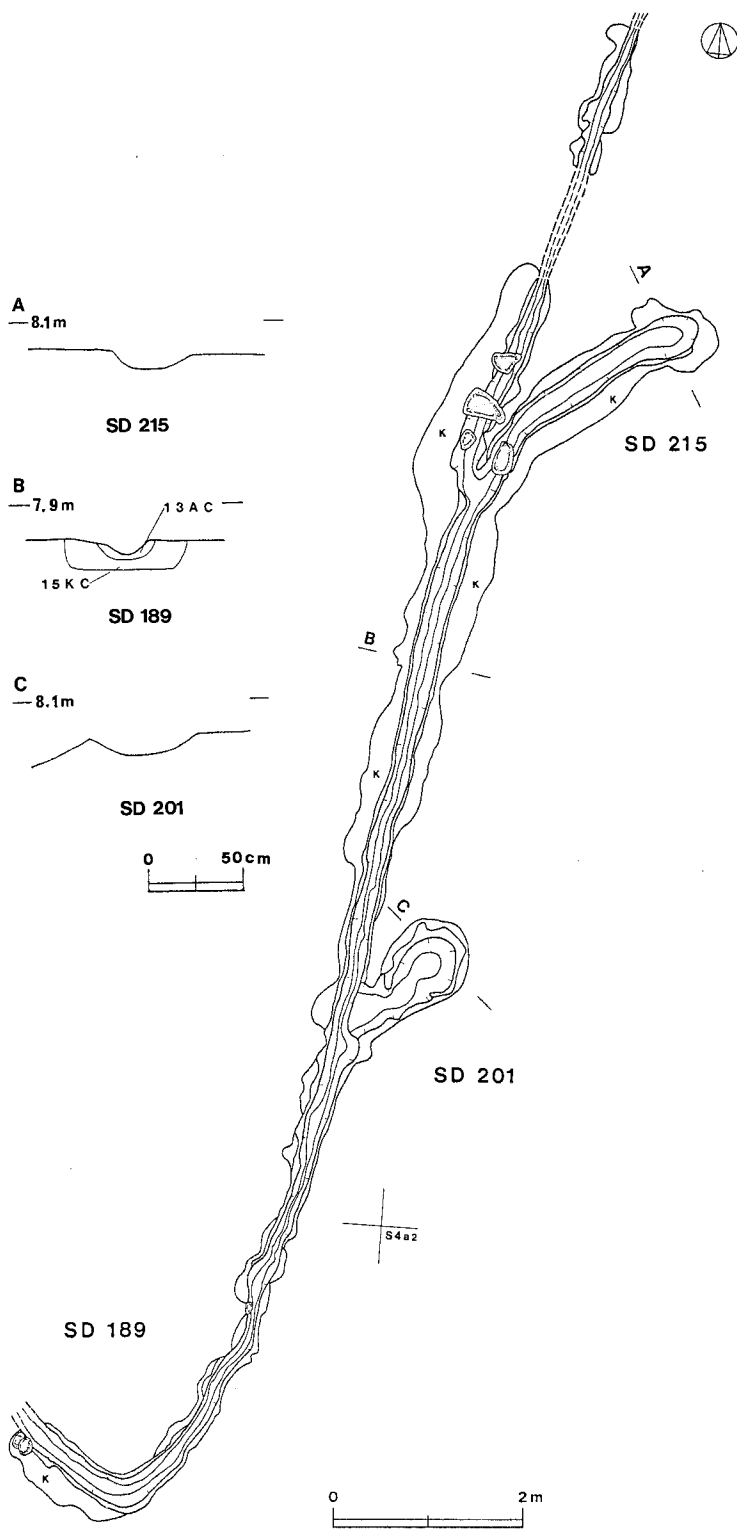
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	S4c ₁	7.94	224B	842,847	841	712B,872	189,201,215	古
2	S4c ₁	7.94	224A	842,847	841	837	213	新

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
224A	S3c ₀	N-18°-E	楕円形	7.23	6.20	0.66	自然	7.44	底面一石3点, ㊦焼石1点	第224号と 竈重
224B	S3c ₀	N-21°-E	楕円形	6.78	5.62	1.03	自然	6.99	㊦石3点	第224号と 竈重

釜屋内鹹水槽 S3d₀区とS4c₁区から2基（第842・847号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.82・1.80m、短軸（1.60）・1.52m、深さ0.89・0.86mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。

居出場 S3d₀区から1基（第841号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.33m、短軸0.80m、深さ0.29mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

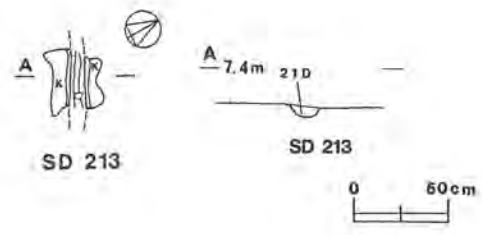
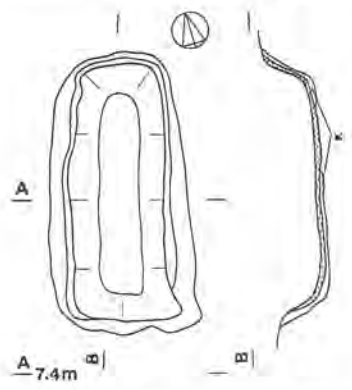
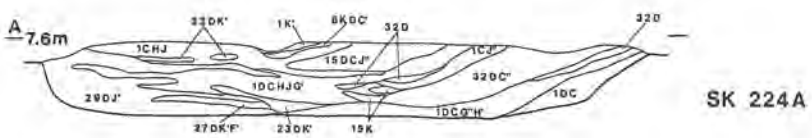
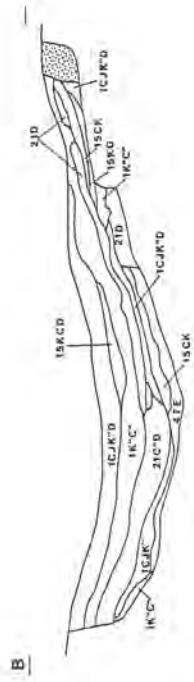
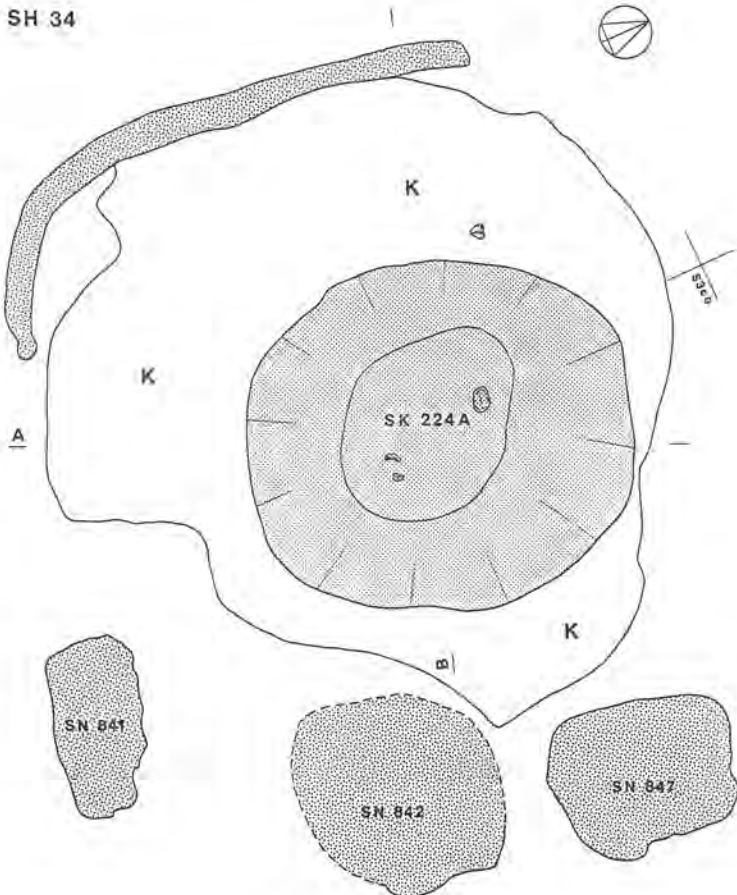


第144図 第34製塩跡土樋実測図

釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ2～4 cmの粘土を貼って構築している。覆土に多量の焼石が含まれている。

屋外鹹水槽 S4a3区・S4b2区・S4e2区の3か所から3基(第712B・837・872号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸2.71～4.72m、短軸1.01～2.18m、深さ0.62～1.39mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。第712B号鹹水槽は、上位の壁面を貼り加えている。第712B号鹹水槽と連なっている第189号土樋が第31製塩跡の釜屋へ向かっていることから、本跡の屋外鹹水槽として使用された後、第31製塩跡の屋外鹹水槽とし

SH 34



第145図 第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・土樋実測図

でも使用されたものと思われる。第31製塩跡に伴う第815号鹹水槽の下から第872号鹹水槽が検出されたことから、第815号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
712B	S4a ₃	N-31°-E	隅丸長方形	4.72	2.18	1.39	1~10	緩斜	平坦	自然	8.14	IVA4c	屋外鹹水槽
837	S4e ₂	N-15°-E	隅丸長方形	2.71	1.01	0.62	4~9	緩斜	平坦	自然	7.39	IVA3b	屋外鹹水槽
841	S3d ₀	N-71°-W	隅丸長方形	1.33	0.80	0.29	2~4	外傾	平坦	自然	6.60	IVA2a	居出場、底面一石20点、焼石5点、㊸石1点
842	S3d ₀	N-24°-E	隅丸長方形	1.82	(1.60)	0.89	2~6	外傾	平坦	自然	6.75	IVA2b	釜屋内鹹水槽、底面一石1点
847	S4c ₁	N-14°-E	隅丸長方形	1.80	1.52	0.86	1~7	外傾	平坦	自然	6.84	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、底面一焼石1点、㊸焼石1点
872	S4b ₂	N-29°-E	舟 形	3.22	1.16	1.35	1~4	緩斜	平坦	自然	7.90	VIA4c	屋外鹹水槽、第815 (第31製塩跡) 号鹹水槽と重複

土樋 R4c₂区からS4e₁区を中心にして4条検出され、全長が最も短いものは0.60mで、最も長いものは18.00mである。これらの土樋の形状は断面形は「U」字形を呈し、上幅16~59cm、下幅6~15cm、深さ5~9cmである。各土樋は、砂地を浅く掘り、粘土を1~10cmの厚さで兩樋のように貼って構築している。第189号土樋は、第201・215号土樋と接続している。第712B号鹹水槽は、第189・215号土樋と連なって、第842号鹹水槽と連結している。第872号鹹水槽も、第189・201号土樋と連なって、第842号鹹水槽と連結している。

土樋一覧表

土樋番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の有無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
189	R4j ₂ ~S4d ₁	N-10°-E	18.00	25	6	5	2~10	U	自然	無	7.94~8.86	第201・215号土樋と接続、第842号鹹水槽と連結
201	R4c ₂	N-45°-E	1.60	59	15	9	1~5	U	自然	無	7.89	第189号土樋と接続
213	S4e ₁	N-66°-W	0.60	16	7	6	3~6	U	自然	無	7.32	
215	S4a ₂	N-53°-E	2.70	47	10	6	4~7	U	自然	無	7.95	第189号土樋と接続

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業していたものと思われる。第1グループと第2グループの新旧関係は、竈の重複と屋外鹹水槽の確認面での標高から、第2グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

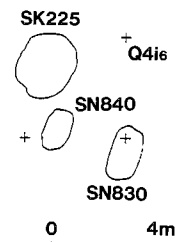
第35製塩跡 (第146図)

位置 Q4i₅区を中心を確認され、標高6.92mに位置している。

関連遺構 第225号竈、釜屋内の第839号鹹水槽及び屋外の第840号鹹水槽で構成されている。

釜屋 確認された黒色土の範囲は、南北7.70m、東西5.08mの不定形を呈している。砂上に厚さ7～17cmの灰ブロックや粘土ブロックを少量含む黒色土を貼り付けて地盤を構築し、中央部に竈1基、南東部に釜屋内鹹水槽1基が位置している。黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等を検出することができず、規模や形状等の詳細は不明である。

竈 Q4i_s区を中心に1基（第225号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.66m、短径2.34m、深さ0.72mである。砂を鍋状に掘り込んで構築しており、覆土は炭化粒子と貝殻片を含む灰が20cmの厚さで堆積している。



第146図 第35製塩跡遺構配置図

第35製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	Q4i _s	6.92	225	840	—	839	—	—

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
225	Q4i _s	N-16°-E	楕円形	2.66	2.34	0.72	自然	6.92	㊦焼石1点, 石3点	

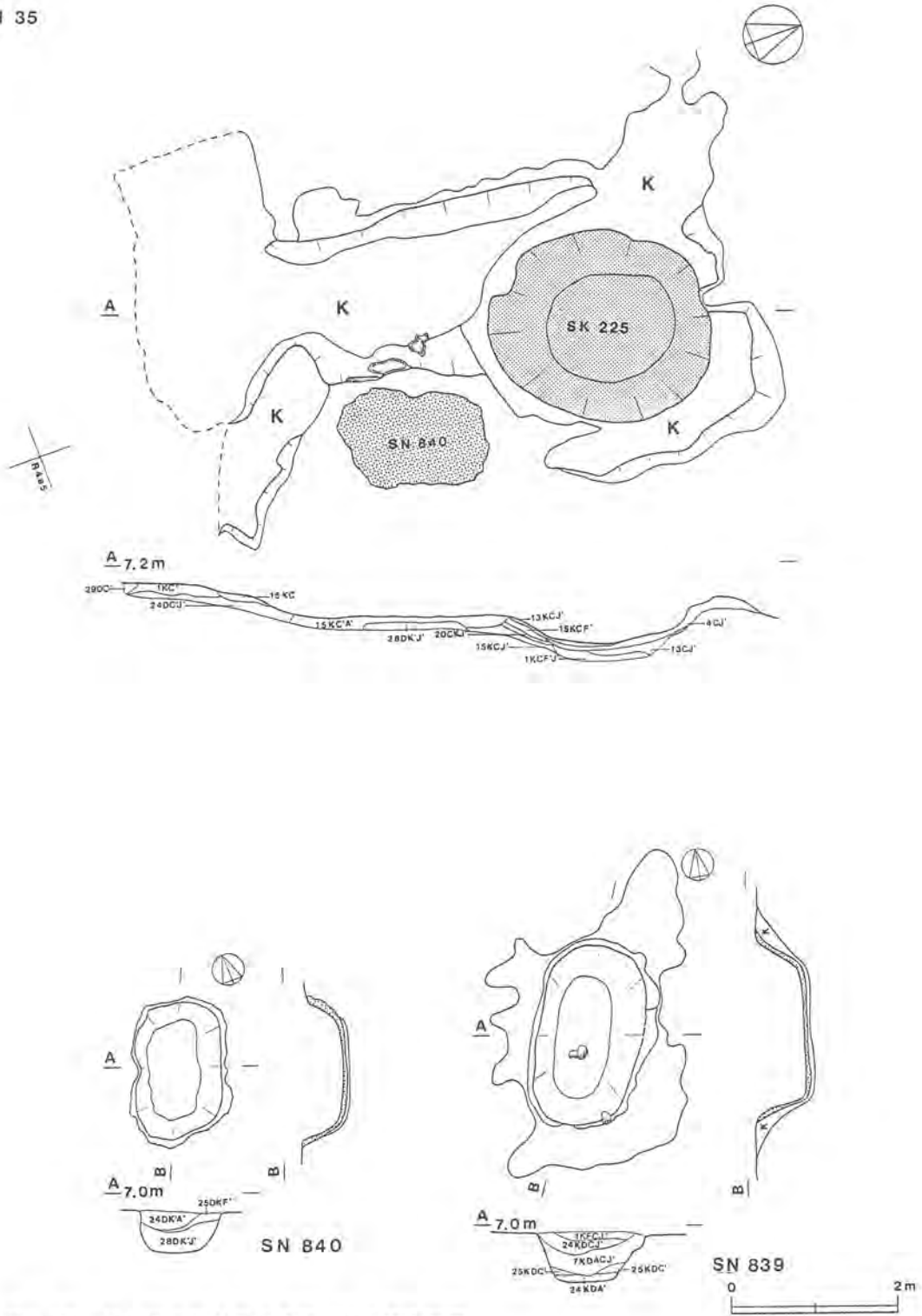
釜屋内鹹水槽 Q4i_s区から1基（第840号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径1.66m、短径1.03m、深さ0.50mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、厚さ10cmの黒色土を貼った上に厚さ2～10cmの粘土を丁寧に貼って構築している。

屋外鹹水槽 Q4j_e区から1基（第839号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.20m、短径1.23m、深さ0.60mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ2～8cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長径方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)							
839	Q4j _e	N-18°-E	楕円形	2.20	1.23	0.60	2～8	外傾	平坦	自然	6.87	IA3b	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石2点
840	Q4i _s	N-22°-E	楕円形	1.66	1.03	0.50	2～10	外傾	平坦	自然	6.75	IA2b	釜屋内鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。



第147図 第35製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

第36製塩跡（第148図）

位置 R4g₃区を中心に確認され、標高7.17mに位置している。

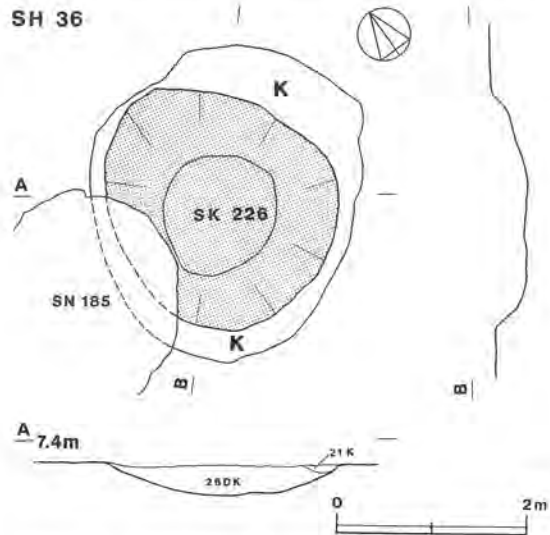
関連遺構 第226号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

第36製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4g ₃	7.17	226	-	-	-	-	-

釜屋 釜屋内で竈が1基検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は竈の周囲にわずかに存在するだけで、詳細は不明である。

竈 R4g₃区を中心に1基(第226号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.71m、短径2.24m、深さ0.37mである。黒色土を12cmの厚さで鍋状に貼って構築されている。覆土は、上層には砂が自然堆積し、下層には灰が8cmの厚さで堆積している。西側部分は第785号鹹水槽に掘り込まれていることから、第785号鹹水槽が新しい。



第148図 第36製塩跡竈実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
226	R4g ₃	N-14°-E	楕円形	2.71	2.24	0.37	自然	7.17		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第37製塩跡（第149図）

位置 調査区の南部 R4h₂区を中心に確認され、標高7.71mに位置している。

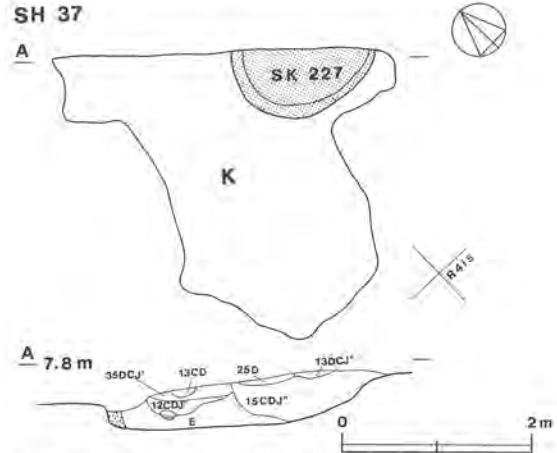
関連遺構 第227号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

釜屋 釜屋内で竈が1基検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は竈の周囲にわずかに存在するだけで、詳細は不明である。

第37製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4h ₂	7.71	227	—	—	—	—	—

竈 R4h₂区を中心に1基(第227号竈)検出され、確認された灰の範囲は、長径(3.54)m、短径(3.22)m、深さ0.25mである。攪乱を受けているために底面のみしか調査することができなかつたので、規模と形状等の詳細は不明である。覆土は、貝殻片を含む灰が25cm堆積し、火床は火熱により砂が赤変している。



第149図 第37製塩跡竈実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
227	R4h ₂	N-50°-W	不定形	(3.54)	(3.22)	0.25	自然	7.71		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかつた。

第38製塩跡(第150図)

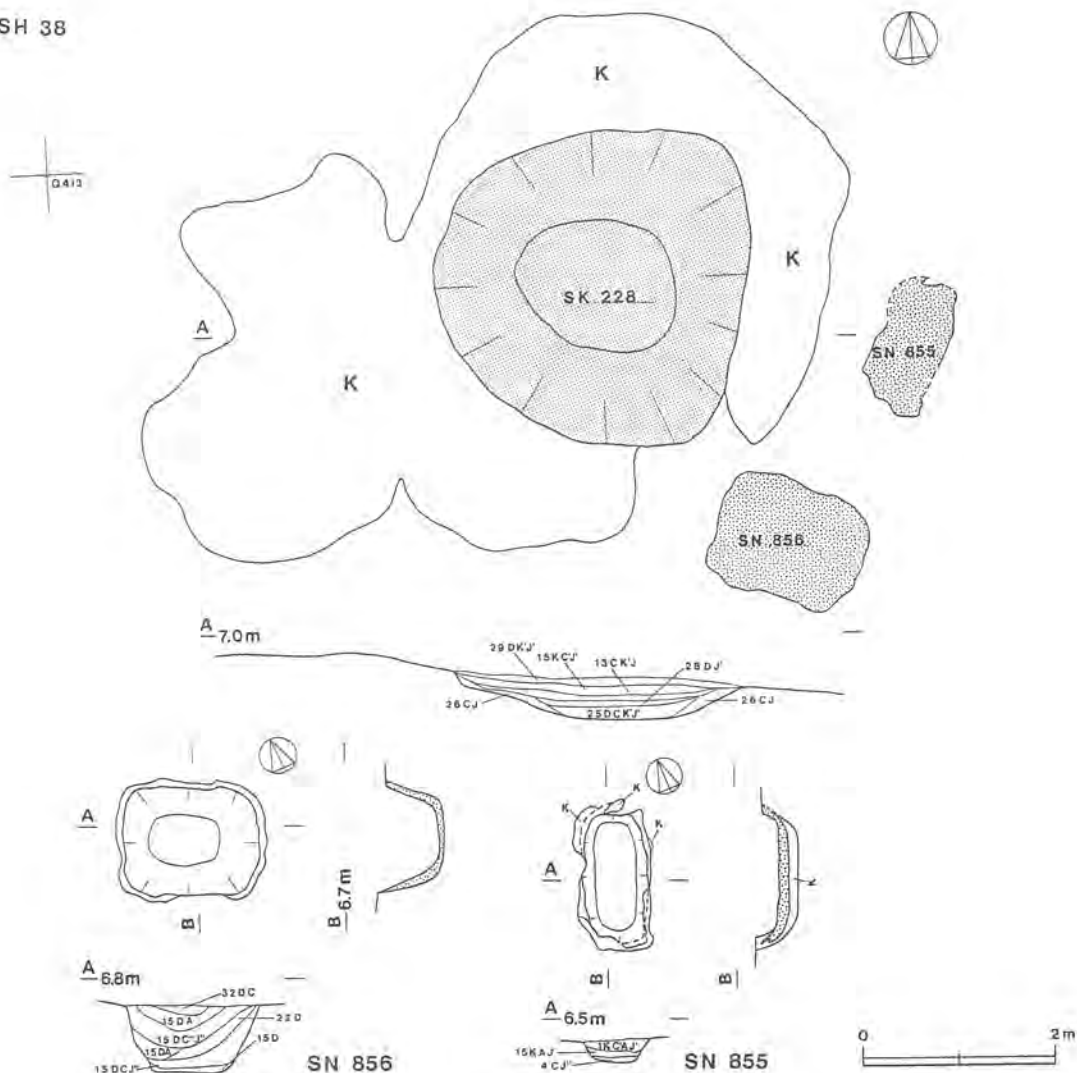
位置 調査区の南部 Q4i₄区を中心に確認され、標高6.80mに位置している。

関連遺構 第228号竈と釜屋内の第855・856号鹹水槽で構成され、居出場、屋外鹹水槽及び土樋は検出されなかつた。

第38製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	Q4i ₄	6.80	228	855,856	—	—	—	—

釜屋 黒色土の範囲は南北5.64m、東西4.60mの不定形を呈している。砂上に厚さ9~11cmの黒色土を貼り地盤を構築し、中央部に竈1基が位置している。黒色土の範囲を調査しても、建屋を示す柱穴等が検出されなかつたので、規模と形状等についての詳細は不明である。



第150図 第38製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

竈 Q4i₄区を中心に1基(第228号竈)検出され、砂上に締まりのある黒色土を貼って構築している。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.61m、短径3.57m、深さは0.59mである。壁は、緩やかに立ち上がり、覆土は、上層が周囲からの流れ込みと思われる砂が堆積し、中層から下層にかけてはやや締まりのある灰が20cmの厚さで堆積している。火床と思われる砂は火熱を受け赤変している。南側に幅0.12mの焚口部が付設されている。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
228	Q4i ₄	N-36°-E	楕円形	3.61	3.57	0.59	自然	6.81	㊦焼石1点	

釜屋内鹹水槽 Q4i_s区とQ4j_s区から2基(第855・856号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.34・1.46m、短軸0.69・1.11m、深さ0.26・0.68mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3～11cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

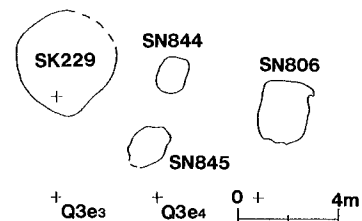
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
855	Q4i _s	N-20°-E	隅丸長方形	1.34	0.69	0.26	3～11	緩斜	平坦	自然	6.25	IVA2a	釜屋内鹹水槽
856	Q4j _s	N-62°-W	隅丸長方形	1.46	1.11	0.68	3～10	外傾	平坦	自然	6.47	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石2点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第39製塩跡(第151図)

位置 調査区の南部Q3c_s区を中心に確認され、標高8.52mに位置している。

関連遺構 第229号竈、釜屋内の第844・845号鹹水槽及び屋外の第846号鹹水槽で構成され、居出場と土樋は検出されなかった。



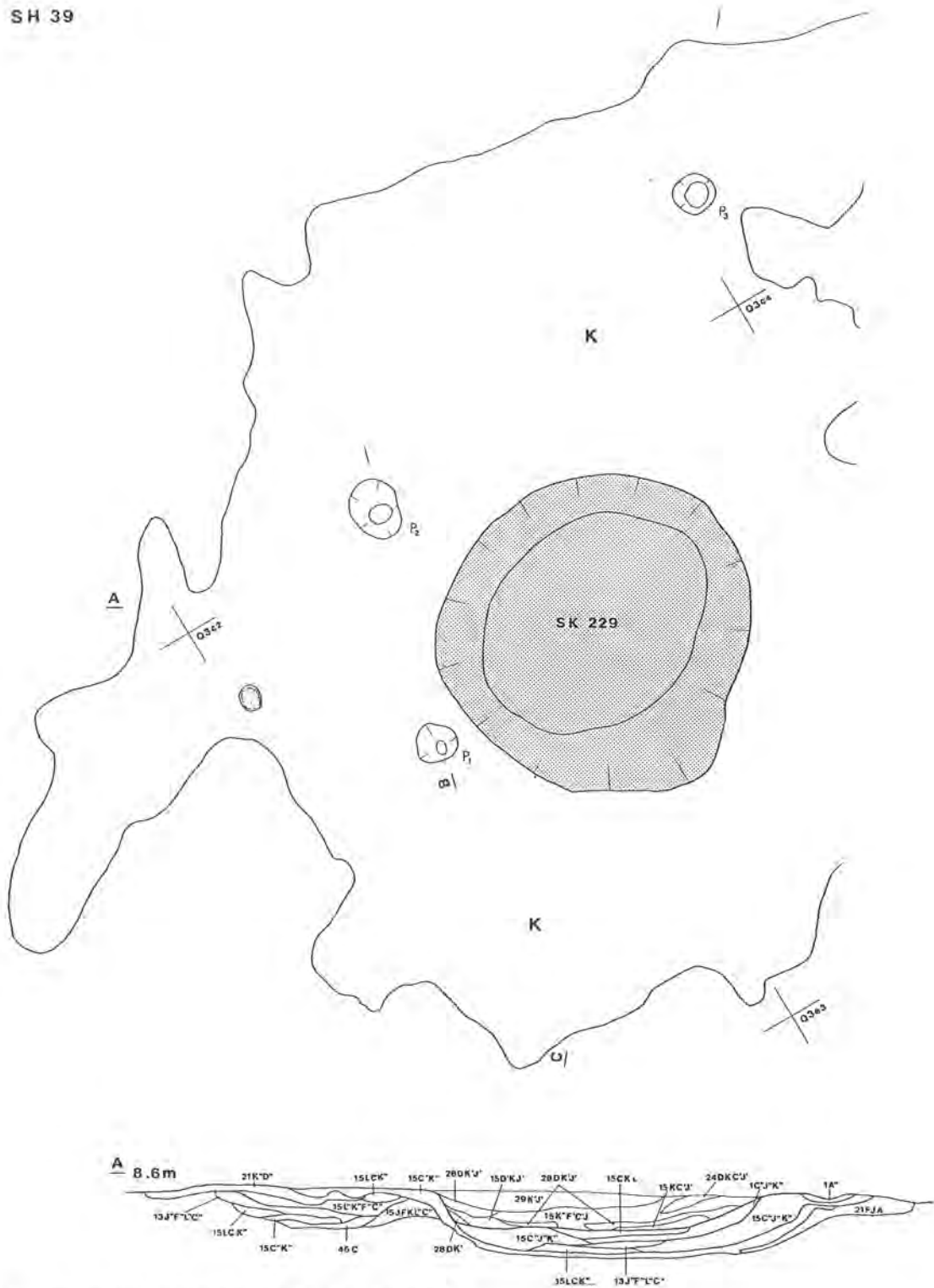
第151図 第39製塩跡遺構配置図

第39製塩跡一覧表

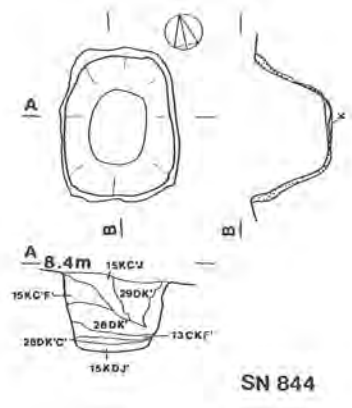
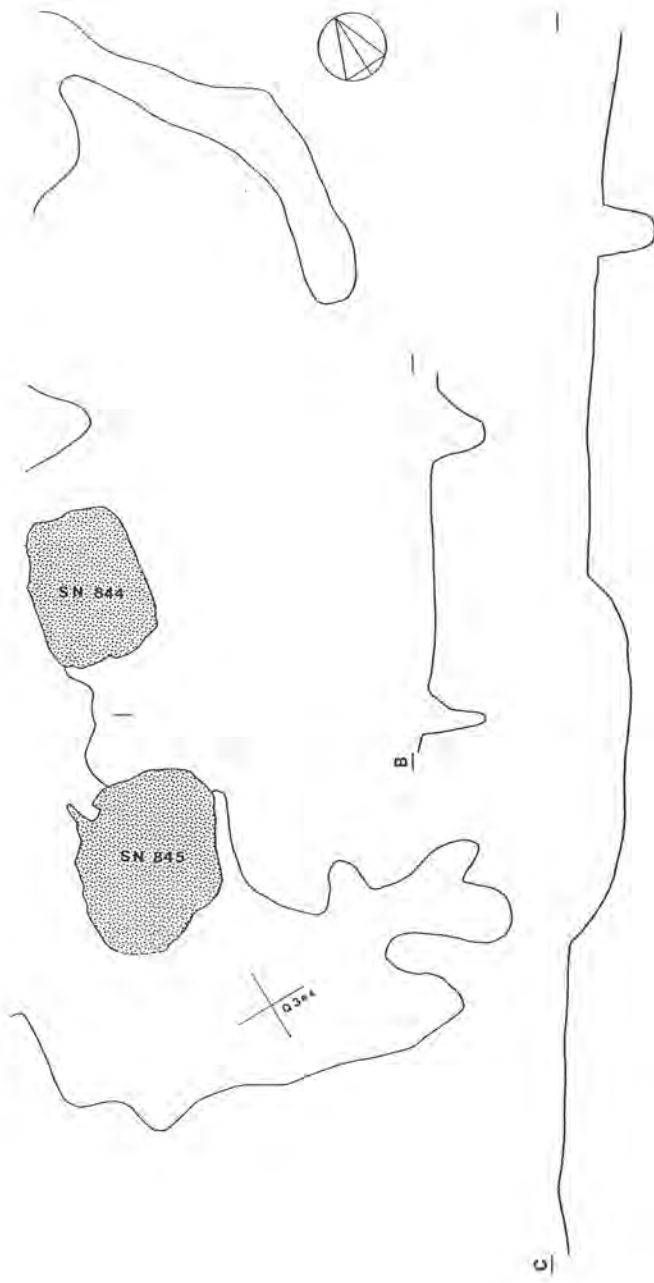
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	Q3c _s	8.52	229	844, 845	-	846	-	-

釜屋 確認できた黒色土の範囲は南北11.20m、東西12.22mの不定形を呈している。砂上に厚さ5～14cmの灰や貝殻片を多量に含んだ黒色土を貼り付け地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基が位置している。黒色土の範囲内から建屋の柱穴と想定されるピットが釜屋の北部から西部にかけて3か所(P₁～P₃)検出されている。ピットは、いずれも本跡に伴うものと思われ、P₁からP₃の規模は、長径53～77cm、短径47～57cmの規模を有し、深さ50～70cmである。

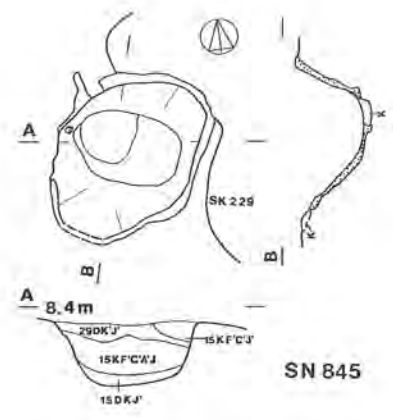
竈 Q3c_s区を中心に1基(第229号竈)検出され、黒色土を鍋状に貼り構築している。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.04m、短径3.66m、深さ0.55mである。覆土は、上層が貝殻片を含む砂が自然堆積し、中層から下層にかけて炭化粒子を含む灰が30cmの厚さで堆積している。



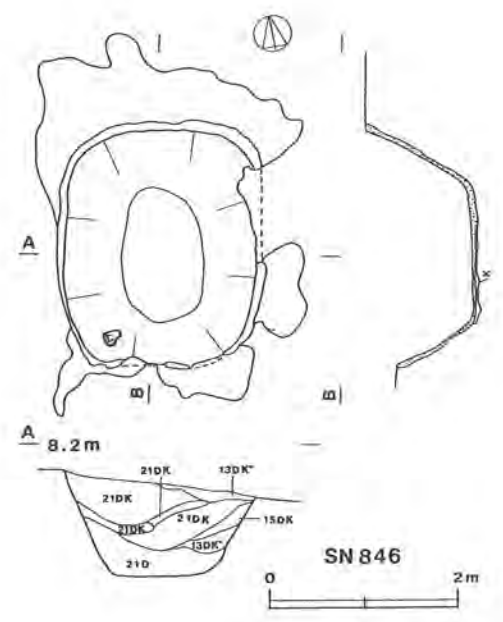
第152図 第39製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



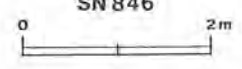
SN 844



SN 845



SN 846



竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
229	Q3c ₃	N-51°-E	楕円形	4.04	3.66	0.55	自然	8.45	㊦焼石1点	

釜屋内鹹水槽 Q3c₄区とQ3d₃区から2基(第844・845号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.49・1.77m、短軸1.16・1.45m、深さ0.81・0.74mである。底面は平坦及び皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黑色土を丁寧に貼った上に厚さ1～11cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 Q3d₅区から1基(第846号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.47m、短軸2.01m、深さ1.16mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黑色土を丁寧に貼った上に厚さ3～9cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

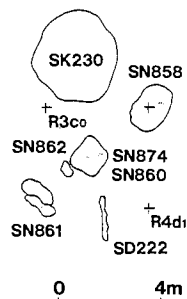
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
844	Q3c ₄	N-18°-E	隅丸長方形	1.49	1.16	0.81	1～11	外傾	平坦	自然	8.30	IVA2b	釜屋内鹹水槽
845	Q3d ₃	N-28°-E	隅丸長方形	1.77	1.45	0.74	1～7	外傾	皿状	自然	8.27	IVB2b	釜屋内鹹水槽、㊦焼石1点
846	Q3d ₅	N-10°-E	隅丸長方形	2.47	2.01	1.16	3～9	緩斜	平坦	自然	7.95	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第40製塩跡(第153図)

位置 調査区の南部 R3c₀区を中心に確認され、標高7.68mに位置する。

関連遺構 第230号竈、第858・860～862・874号鹹水槽及び第222号土樋で構成されている。これらの遺構は、居出場の重複関係から3グループに区別できる。第1グループは、第230号竈、釜屋内鹹水槽(858, 874)及び居出場(860)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、居出場(861)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、居出場(862)で構成されている。第222号土樋は1条検出されているが、部分的なためグルーピングできなかった。



第153図 第40製塩跡遺構配置図

第40製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R3c ₀	7.68	230	858,874	860	—	—	—
2	R3c ₀	7.68	230	858,874	861	—	—	新
3	R3c ₀	7.68	230	858,874	862	—	—	古

釜屋 砂上に厚さ8cmの灰混じりの黒色土を貼り付け地盤を構築し、中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基、南側に居出場3基が位置している。黒色土は竈の周囲にわずかに残っているだけで、規模と形状等の詳細は不明である。

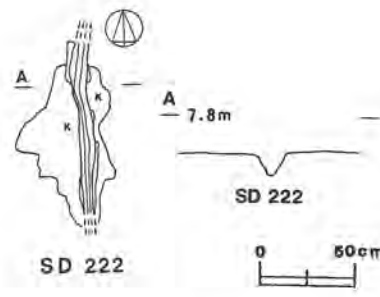
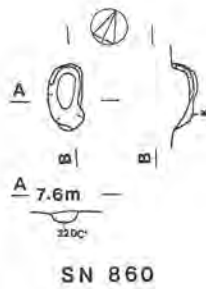
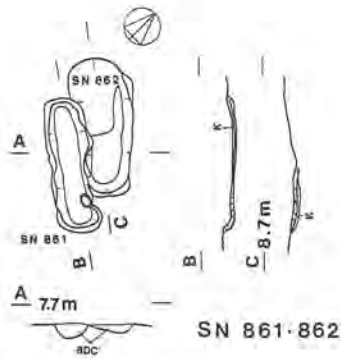
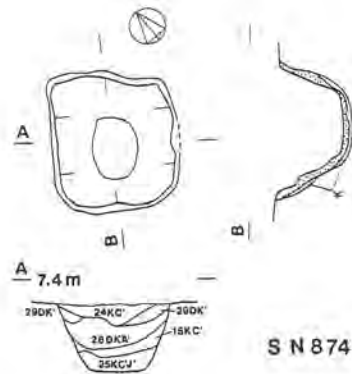
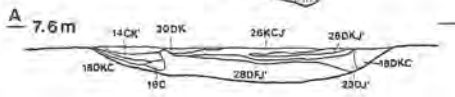
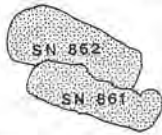
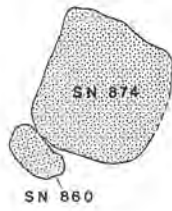
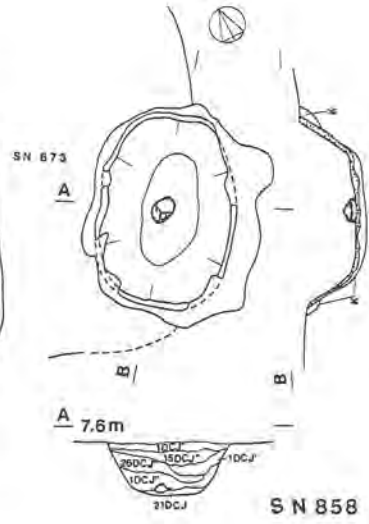
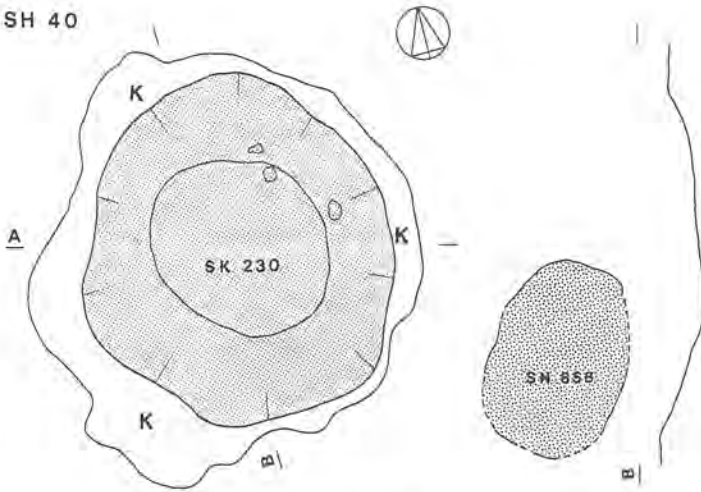
竈 R3b₀区を中心に1基(第230号竈)検出され、砂を鍋状に掘り込み構築している。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.58m、短径3.26m、深さ0.46mである。覆土は、上層が周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては貝殻片を含む灰が17cm厚さで堆積している。火床と思われる砂は火熱のために赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
230	R3b ₀	N-33°-W	楕円形	3.58	3.26	0.46	自然	7.38	底面一石1点, ◎石2点	

釜屋内鹹水槽 R3c₀区とR4c₁区から2基(第858・874号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.91・1.39m、短軸1.30・1.22m、深さ0.51・0.71mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。

SH 40



第154図 第40製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・土樋実測図

居出場 R3c₉・c₀区から3基（第860～862号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸〔径〕0.69～1.47m、短軸〔径〕0.31～0.53m、深さ0.09～0.16mである。底面は平坦及び皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1～6cmの粘土を貼って構築している。第861号鹹水槽の下から第862号鹹水槽が検出されたことから、第861号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向 〔長径〕	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) 〔径〕	短軸(m) 〔径〕	深さ(m)							
858	R4c ₁	N-35°-E	隅丸長方形	1.91	1.30	0.51	2～6	緩斜	平坦	自然	7.43	IVA2b	釜屋内鹹水槽、底面一焼石1点
860	R3c ₀	N-21°-W	楕 円 形	0.69	0.31	0.16	2～6	緩斜	皿状	自然	7.42	IIB1a	居出場
861	R3c ₉	N-57°-W	隅丸長方形	1.36	0.40	0.15	1～3	緩斜	平坦	自然	7.48	IVA2a	居出場、底面一石1点、第862号鹹水槽と重複
862	R3c ₉	N-52°-W	隅丸長方形	1.47	0.53	0.09	3～5	緩斜	平坦	自然	7.44	IVA2a	居出場、第861号鹹水槽と重複
874	R3c ₀	N-35°-E	隅丸長方形	1.39	1.22	0.71	4～10	緩斜	平坦	自然	7.14	IVA2b	釜屋内鹹水槽

土樋 R3d₀区で1条検出され、長さ2.04m、上幅17cm、下幅5cm、深さ5cmで、断面形は「U」字形を呈している。

土樋一覧表

土樋番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
222	R3d ₀	N-3°-W	2.04	17	5	5	—	U	自然	無	7.60 ～7.68	

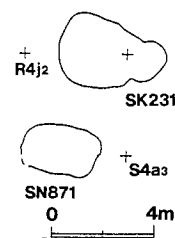
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、居出場の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第41製塩跡(第155図)

位置 調査区の南部 R4j₂区を中心に確認され、標高7.44mに位置している。

関連遺構 第231号竈と屋外の第871号鹹水槽で構成され、釜屋内鹹水槽、居出場及び土樋は検出されなかった。

釜屋 釜屋内に竈が1基検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土が竈の周囲に存在するだけなので、詳細は不明である。



第155図 第41製塩跡遺構配置図

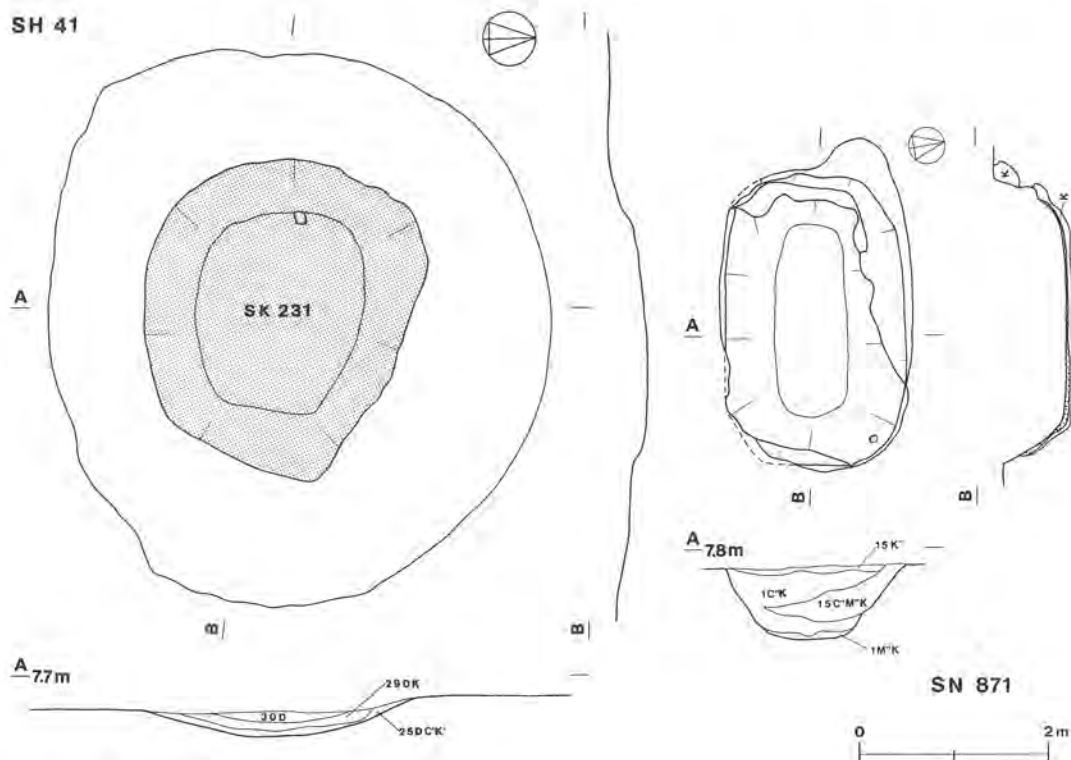
第41製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R4j ₂	7.44	231	—	—	871	—	—

竈 R4i₂区を中心に1基(第231号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.20m、短径2.79m、深さ0.39mである。黒色土を鍋状に貼って構築しており、覆土は、上層が周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては攪乱を受けているため、詳細は不明である。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
231	R4i ₂	N-80°-W	楕 円 形	3.20	2.79	0.39	自然	7.44	底面-石1点	



第156図 第41製塩跡竈・鹹水槽実測図

屋外鹹水槽 R4j₂区から1基(第871号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.64m、短軸1.82m、深さ0.76mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。砂を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～6cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

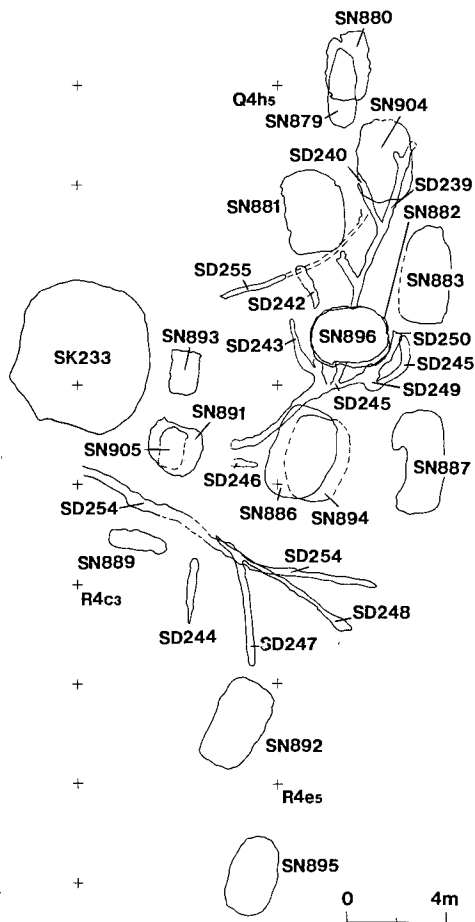
鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
871	R4j ₂	N-80°-W	隅丸長方形	2.64	1.82	0.76	1～6	緩斜	平坦	自然	7.60	IVA3b	屋外鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第42製塩跡(第157図)

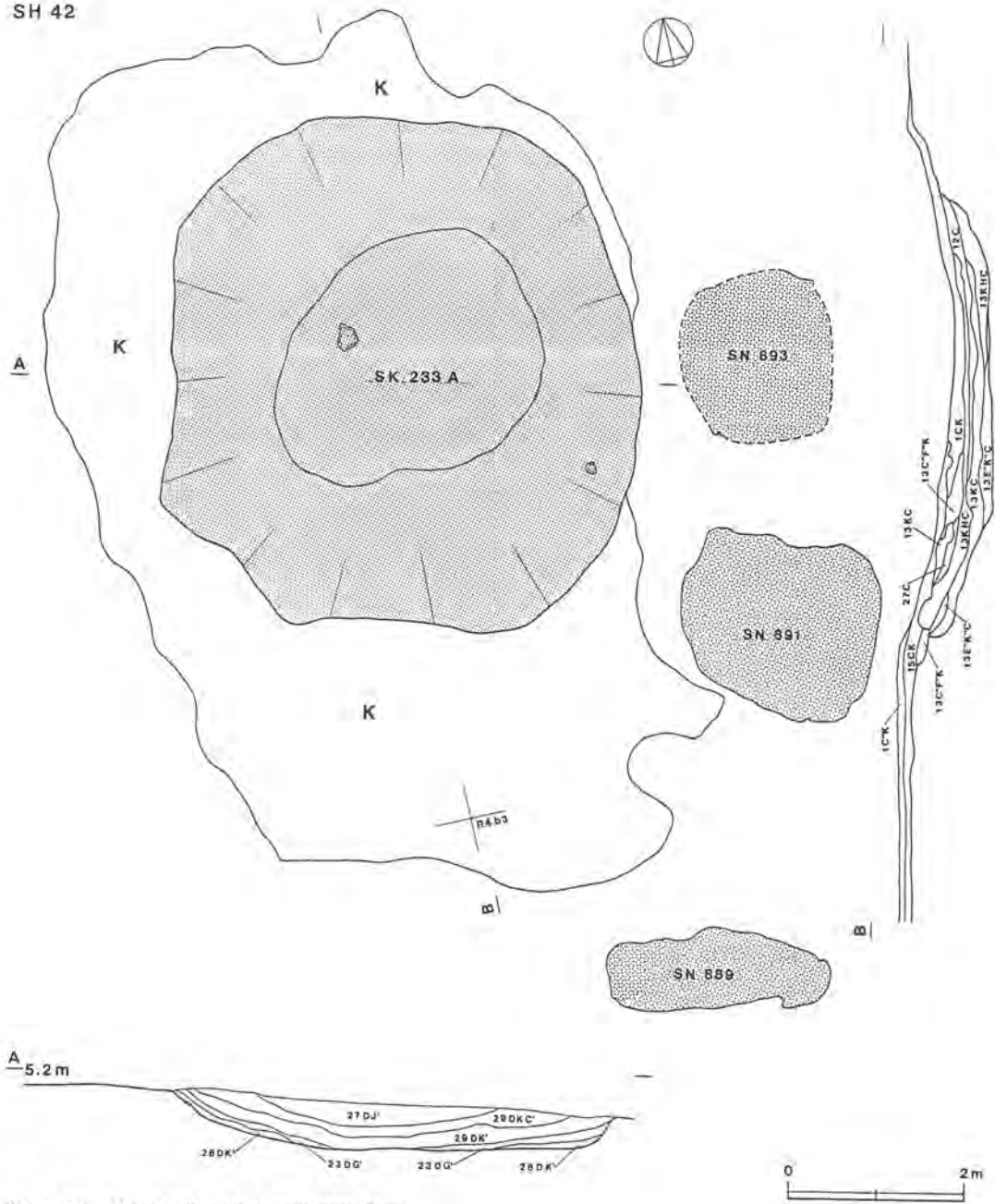
位置 調査区の南部 Q4j₄区を中心に確認され、標高5.70mに位置している。

関連遺構 第233号竈(A・B)、第879～883・886・887・889・891～896・904・905号鹹水槽及び第239～250・254・255号土樋で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係や鹹水槽の長軸方向及び土樋の接続関係から、4グループに区別できる。第1グループは、第233号竈A、釜屋内鹹水槽(891, 893)、居出場(889)、屋外鹹水槽(879～881, 883, 887)及び土樋(239～245, 250)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(886, 892, 894, 895)及び土樋(246～248)で構成されている。第3グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で、屋外鹹水槽(882, 896)及び土樋(249, 254)で構成されている。第4グループは、居出場が第1グループと同一で、第233号竈B、釜屋内鹹水槽(893, 905)、屋外鹹水槽(904)及び土樋(255)で構成されている。



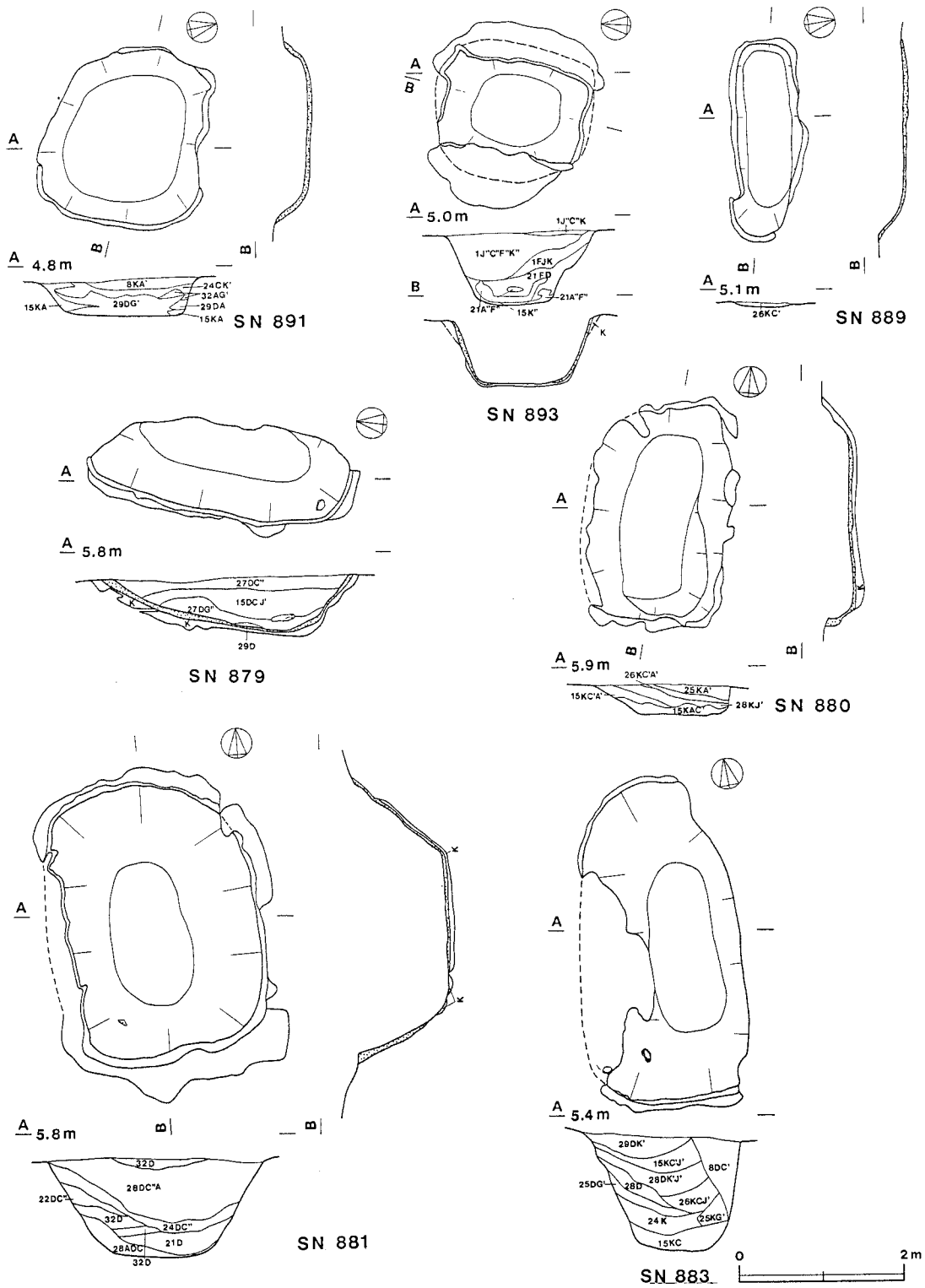
第157図 第42製塩跡遺構配置図

SH 42

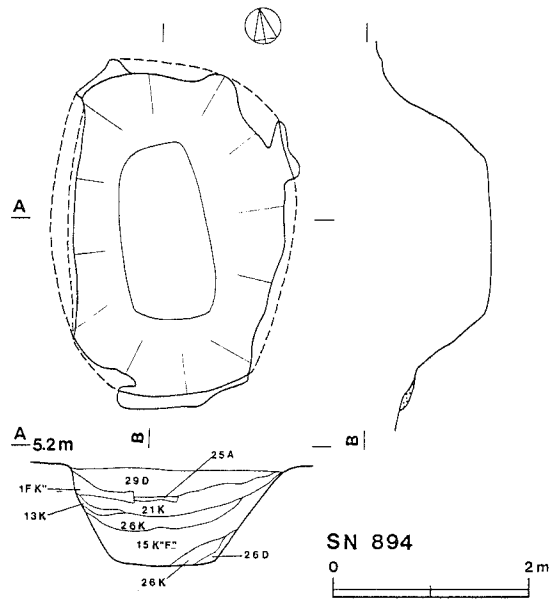
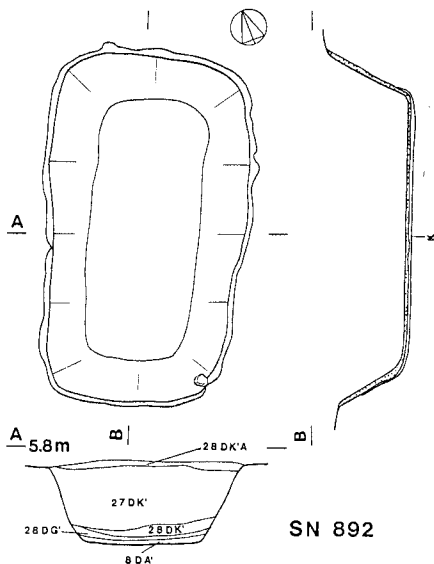
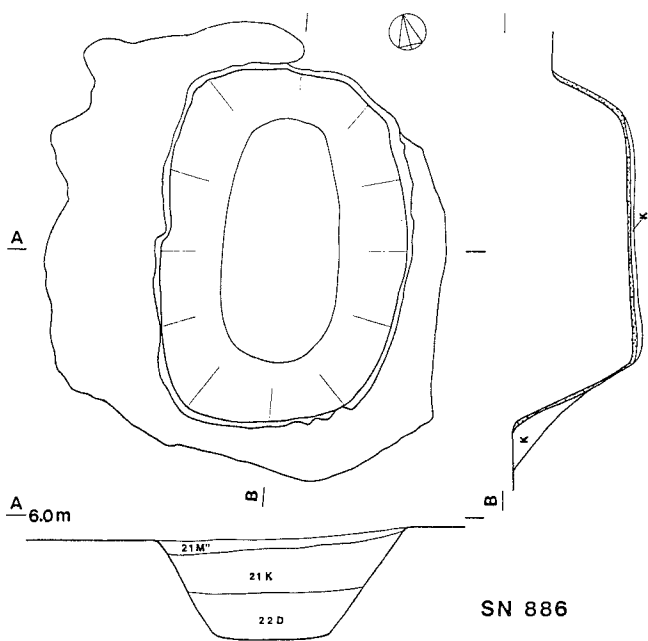
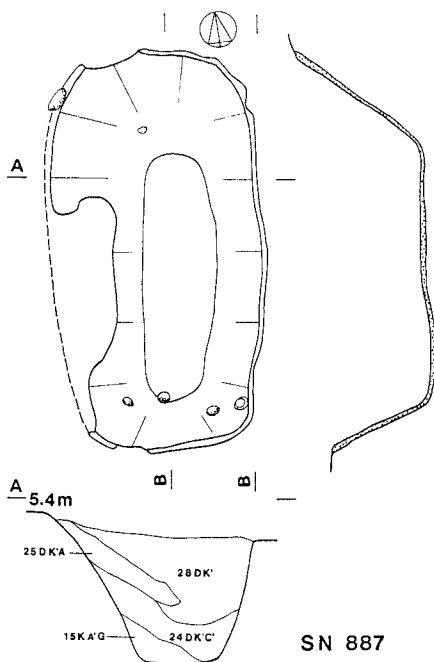


第158図 第42製塩跡釜屋内遺構実測図

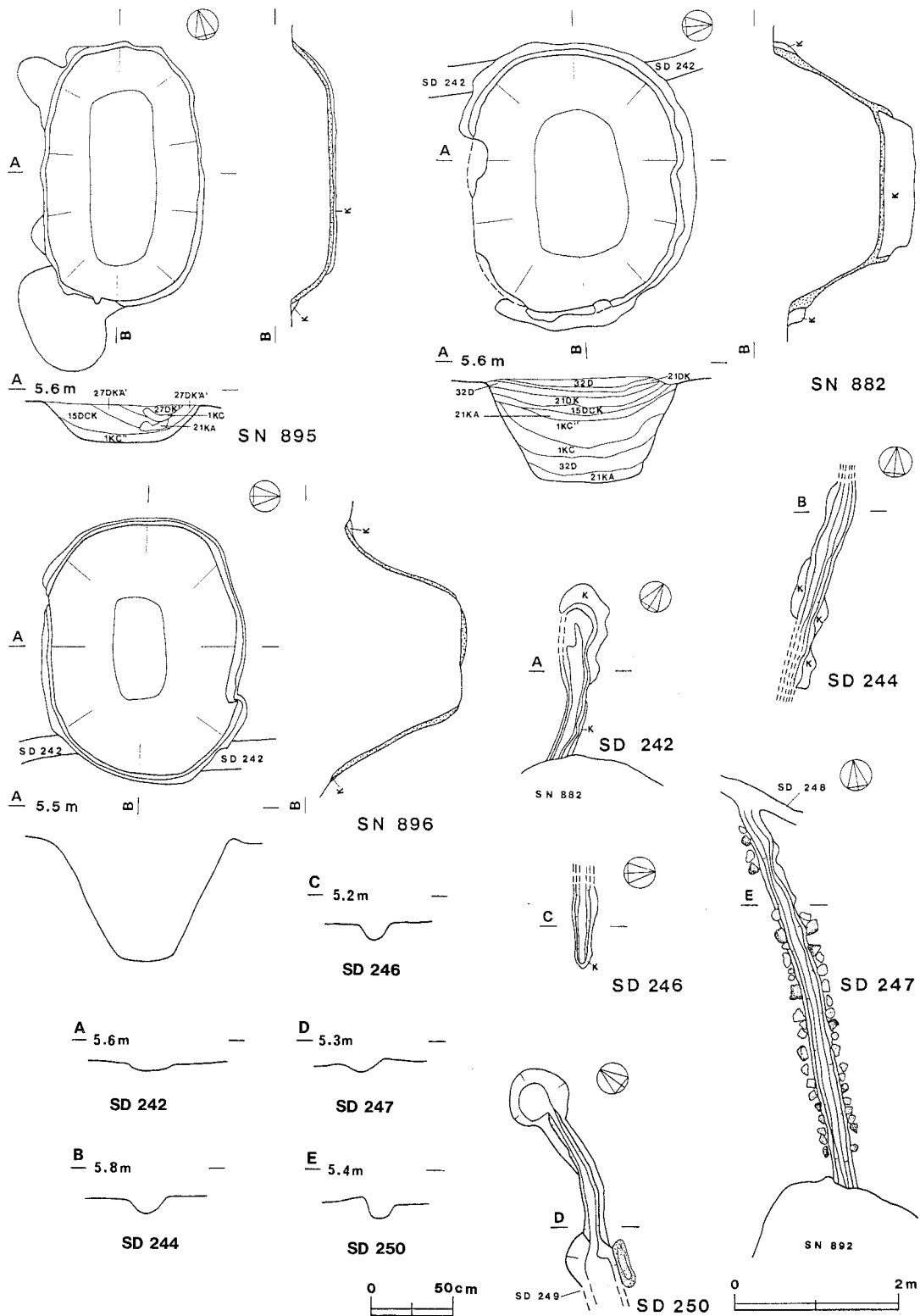
釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.25m、東西6.82mの不定形を呈している。砂上に厚さ6～8cmの灰混じりの黒色土を貼り付けて釜屋の地盤を構築し、中央部に竈2基、東側に鹹水槽3基、南側に居出場1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかつたので、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。



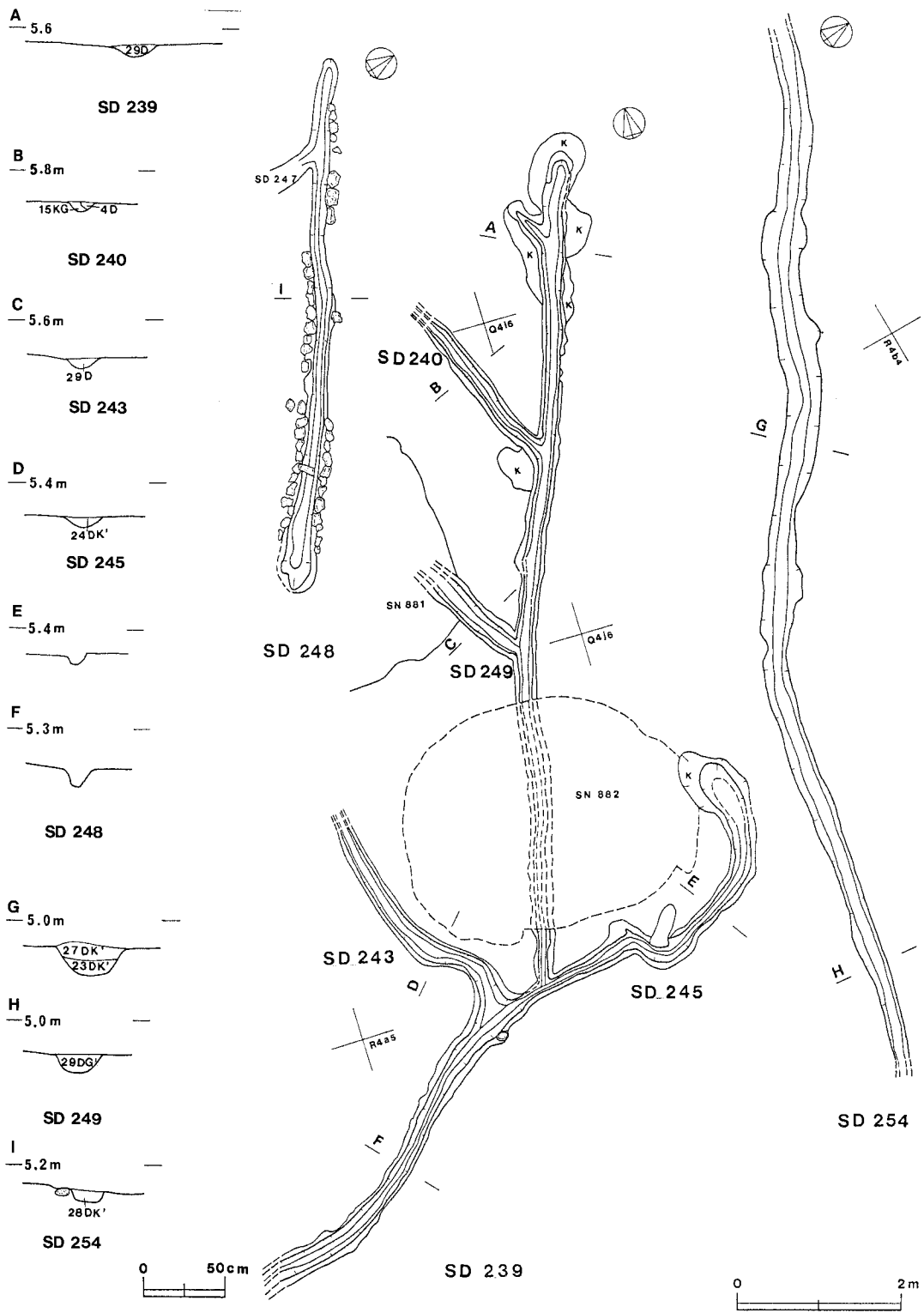
第159図 第42製塩跡鹹水槽実測図(1)



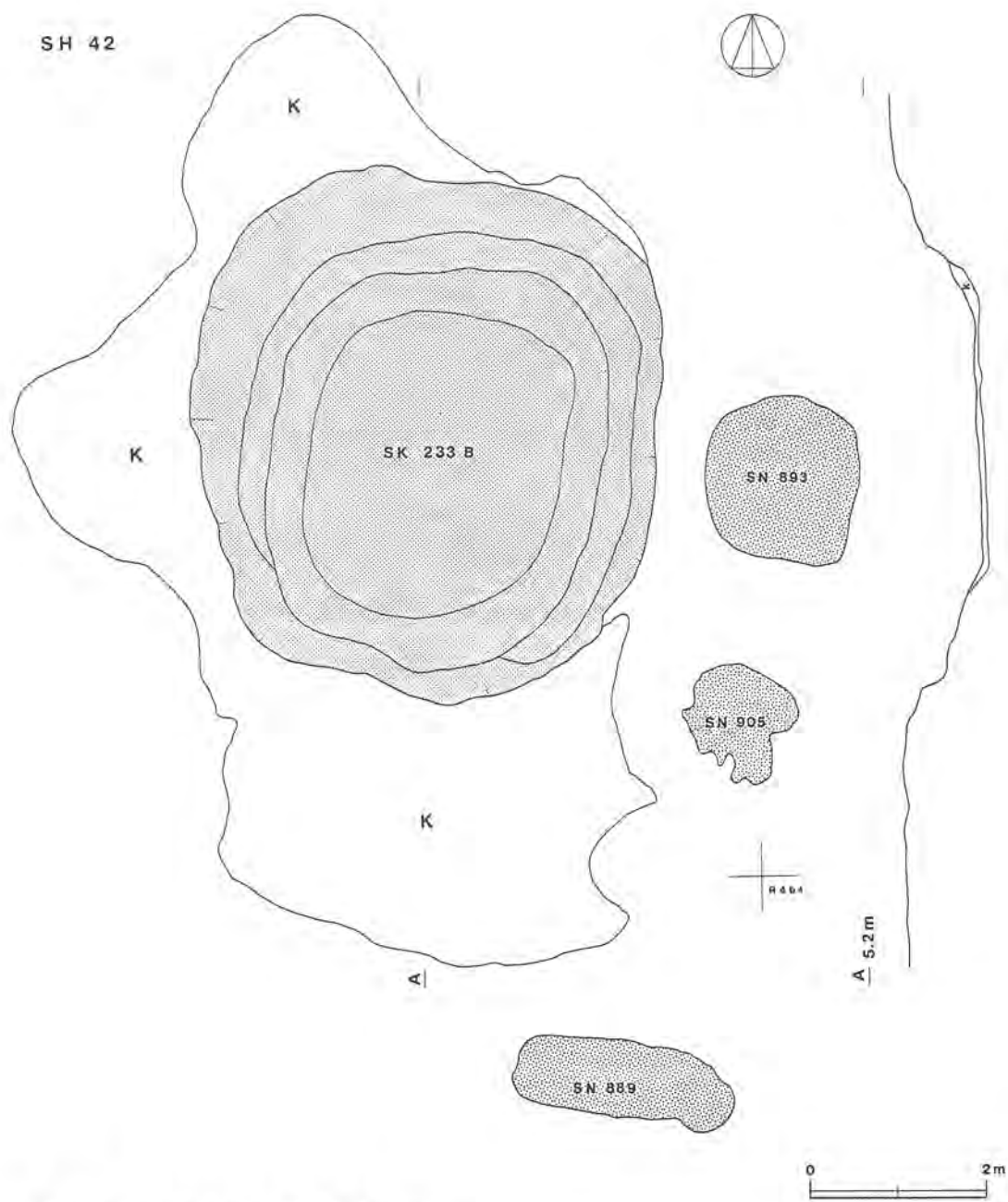
第160図 第42製塩跡鹹水槽実測図(2)



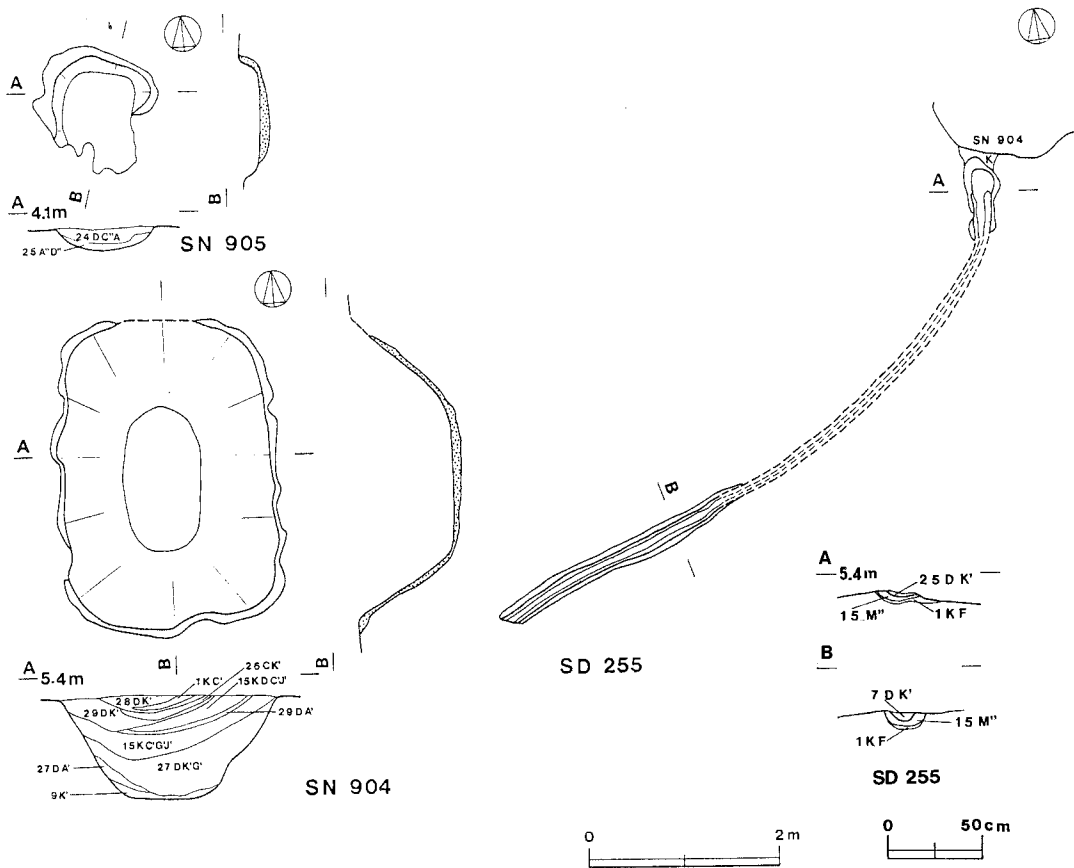
第161図 第42製塩跡鹹水槽・土樋実測図



第162図 第42製塩跡土樋実測図



第163図 第42製塩跡釜屋内遺構実測図



第164図 第42製塩跡鹹水槽・土樋実測図

第42製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	Q4j ₄	5.70	233A	891,893	889	879,880,881,883,887	239,240,241,242,243,244,245,250	最新
2	Q4j ₄	5.70	233A	891,893	889	886,892,894,895	246,247,248	第1グループより古い
3	Q4j ₄	5.70	233A	891,893	889	882,896	249,254	第1・2グループより古い
4	Q4j ₄	5.70	233B	893,905	889	904	255	最古

竈 Q4j₃区を中心に2基(第233号竈A・B)検出された。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径5.73・6.00m, 短径5.38・5.47m, 深さ0.74・1.06mである。砂を鍋状に掘り込み、厚さ2~8cmの黒色土を貼って構築しており、覆土は、上層には周囲からの流れ込みと思われる砂が自然堆積し、中層には灰が10cmの厚さで堆積し、下層には焼砂を含む灰が5cmの厚さで堆積し

ている。火床と思われる砂は火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第233号竈Aの下から第233号竈Bを検出していることから、第233号竈Aが新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
233A	Q4j ₃	N-18°-E	楕円形	5.73	5.38	0.74	自然	4.98	底面-石1点、㊦焼石1点、㊧石1点	第233号と竈Bと重複
233B	Q4j ₃	N-18°-E	楕円形	6.00	5.47	1.06	自然	4.03		第233号と竈Aと重複

釜屋内鹹水槽 Q4j₄区とR4a₃区から3基(第891・893・905号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.28)～2.23m、短軸1.02～2.05m、深さ0.22～0.67mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。第891号鹹水槽の下から第905号鹹水槽が検出されたことから、第891号鹹水槽が新しい。

居出場 R4b₃区から1基(第889号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.05m、短径0.78m、深さ0.33mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1～5cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 Q4g₅区・Q4h₆区・Q4i₅・i₆区・Q4j₅区・R4a₅・a₆区・R4d₄区・R4e₄区の9か所から12基(第879～883・886・887・892・894～896・904号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸[径]2.67～4.20m、短軸[径](1.07)～2.59m、深さ0.35～1.46mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。第882・886号鹹水槽の下から第894・896号鹹水槽が検出されたことから、第882・886号鹹水槽が新しい。第904号鹹水槽は第239・240号土樋の下から検出されたことから、第239・240号土樋より古い。

土樋 Q4h₅区からR4c₅区を中心にして14条検出され、全長が最も短いものは0.56mで、最も長いものは13.20mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅14～41cm、下幅3～34cm、深さ3～11cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1～10cmの厚さで雨樋のように貼って構築しているが、第246号土樋は粘土のかわりに丸太を半分を割り、中をくりぬいたものを使用している。第879号鹹水槽は第239・245号土樋の順に連なって、第891号鹹水槽と連結していたと思われる。第239号土樋は第882号鹹水槽で切られているように検出されたが、第882号鹹水槽の壁の断割から第239号土樋が新しい。第240・241号土樋は第239号土樋と接続し、第241号土樋は第881号鹹水槽と連結していたものと思われる。第242号土樋も第881号鹹水槽と連なって、第245号土樋に接続する。第249・250号土樋も第245号土樋と接続する。第247・248号土樋は、側面に小

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
879	Q4h ₆	N-6°-E	隅丸長方形	3.18	(1.07)	0.76	1~7	緩斜	平坦	自然	5.52	IVA4b	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
880	Q4g ₅	N-3°-E	隅丸長方形	2.67	1.68	0.35	1~6	緩斜	平坦	自然	5.65	IVA3a	屋外鹹水槽
881	Q4i ₅	N-6°-W	隅丸長方形	3.36	2.37	1.14	1~5	緩斜	平坦	自然	5.40	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ
882	Q4j ₅	N-88°-W	隅丸長方形	3.16	2.48	1.33	3~12	緩斜	平坦	自然	5.37	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石2点、㊸石4点、第896号鹹水槽と重複
883	Q4i ₆	N-7°-E	隅丸長方形	3.97	(1.55)	1.39	—	外傾	平坦	自然	5.20	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、㊸石3点、㊹石1点
886	R4a ₅	N-20°-E	楕円形	4.20	2.59	0.94	2~5	緩斜	平坦	自然	5.70	IA4b	屋外鹹水槽、足掛け石1点、第894号鹹水槽と重複
887	R4a ₆	N-7°-E	楕円形	4.15	2.15	1.34	2~6	緩斜	平坦	自然	5.05	IA4c	屋外鹹水槽、底面一石1点、㊸石5点、㊹石1点
889	R4b ₃	N-81°-W	楕円形	2.05	0.78	0.33	1~5	緩斜	平坦	自然	5.20	IA3a	居出場
891	R4a ₃	N-64°-W	隅丸方形	2.23	2.05	0.41	1~4	緩斜	平坦	自然	4.55	VA3a	釜屋内鹹水槽、㊸石1点、第905号鹹水槽と重複
892	R4d ₄	N-28°-E	隅丸長方形	3.14	2.10	0.85	3~8	外傾	平坦	自然	5.65	IVA4b	屋外鹹水槽、足掛け石1点
893	Q4j ₄	N-10°-E	隅丸長方形	1.67	1.20	0.67	1~6	外傾	平坦	自然	4.54	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点
894	R4a ₄	N-4°-E	隅丸長方形	3.42	2.22	0.99	—	緩斜	平坦	自然	4.95	IVA4b	屋外鹹水槽、㊸石2点、第886号鹹水槽と重複
895	R4e ₄	N-15°-E	隅丸長方形	3.18	1.91	0.45	3~6	緩斜	平坦	自然	5.30	IVA4a	屋外鹹水槽
896	Q4j ₅	N-88°-W	楕円形	3.12	2.27	1.46	1~9	緩斜	平坦	自然	5.05	IA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、第882号鹹水槽と重複
904	Q4h ₆	N-4°-E	隅丸長方形	3.25	2.26	1.01	1~10	緩斜	平坦	自然	5.13	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛けくぼみ、㊸石7点、第239・240号土樋と重複
905	R4a ₃	(N-16°-E)	隅丸長方形	(1.28)	1.02	0.22	4~10	緩斜	平坦	自然	3.95	IVA2a	釜屋内鹹水槽、第891号鹹水槽と重複

石を隙間なく並べ構築している。第247・255号土樋は、第892・904号鹹水槽と連なっていたものと思われる。第254号土樋は攪乱を受け、黒色土だけが検出され、第248号土樋の下から検出されたことから、第248号土樋より古い。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、竈、鹹水槽及び土樋の重複関係や屋外鹹水槽の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

土樋一覧表

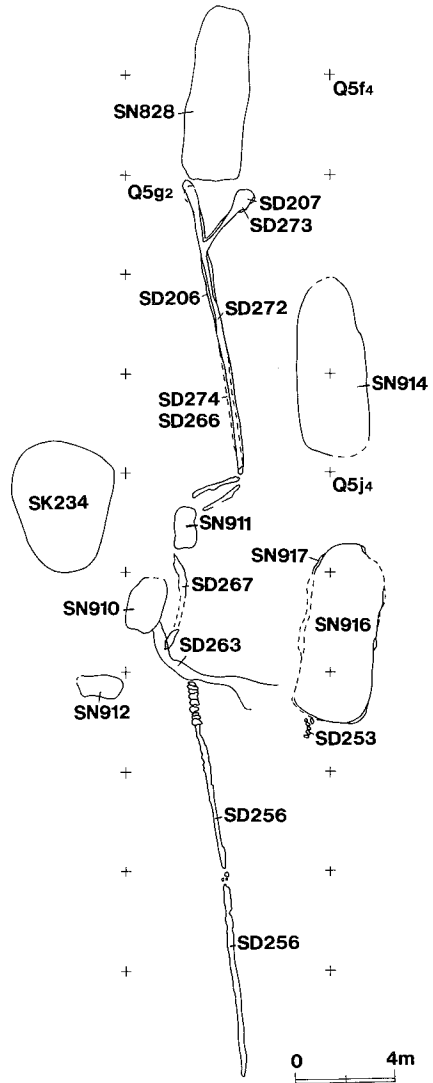
土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
239	Q4h _s ~Q4j _s	N-20°-E	10.30	26	10	5	2~6	U	自然	無	5.18 ~5.50	第240・241・245号 土樋と接続,第904 号鹹水槽と重複
240	Q4h _s ~Q4i _s	N-25°-W	2.40	15	6	4	2~3	U	自然	無	5.60	第239号土樋と接 続,第904号鹹水槽 と重複
241	Q4i _s	N-29°-W	1.30	22	11	5	1~7	U	自然	無	5.36	第239号土樋と接 続
242	Q4i _s ~Q4j _s	N-24°-W	3.90	31	5	3	1~7	U	自然	無	5.44	第243号土樋と接 続
243	Q4j _s	N-14°-W	2.70	25	8	6	2~6	U	自然	無	5.40	第242・245号土樋 と接続
244	R4b _s ~R4c _s	N-7°-E	2.70	24	3	5	4~6	U	自然	無	5.60 ~5.70	
245	Q4j _s ~R4a _s	N-54°-E	9.64	22	4	9	3~4	U	自然	無	5.04 ~5.30	第239・243・249・ 250号土樋と接続
246	R4a _s	N-86°-W	1.07	20	11	8	1~3	U	自然	無	5.04	木樋
247	R4b _s ~R4c _s	N-6°-W	4.50	22	6	10	1~7	U	自然	無	5.10 ~5.30	第248号土樋と接 続,側面に石
248	R4b _s ~R4c _s	N-56°-W	6.60	17	8	8	1~5	U	自然	無	5.06 ~5.08	第247号土樋と接 続,側面に石,第 254号土樋と重複
249	R4a _s	N-36°-E	0.58	41	34	11	-	U	自然	無	5.36	第245号土樋と接 続,第250号土樋と 重複
250	Q4j _s	N-26°-E	2.40	19	4	9	1~10	U	自然	無	5.20	第245号土樋と接 続,第249号土樋と 重複
254	R4b _s ~R4c _s	N-65°-W	13.20	35	14	7	-	U	自然	無	4.80 ~4.88	第248号土樋と重 複
255	Q4i _s ~Q4j _s	N-68°-E	7.00	14	7	6	2~4	U	自然	無	4.94 ~5.30	

第43製塩跡(第165図)

位置 調査区の南部 R5j₂区を中心に確認され、標高4.06m に位置している。

関連遺構 第234号竈，第828・910～912・914・916・917号鹹水槽及び第205～207・253・256・263・266・267・271～274号土樋で構成されている。これらの遺構は，鹹水槽と土樋の接続関係や鹹水槽の配置から，2グループに区別できる。第1グループは，第234号竈，釜屋内鹹水槽(910，911)，居出場(912)，屋外鹹水槽(828)及び土樋(205～207，266，271～274)で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び居出場が第1グループと同一で，屋外鹹水槽(914，916，917)及び土樋(253，256，263，267)で構成されている。

釜屋 確認された黒色土の範囲は，南北12.70m，東西9.93mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN-3°-Wを指している。砂上に厚さ12～35cmの暗褐色の山砂が釜屋を囲むように底面から45cmの高さで土手状に貼られている。その内側には15～18cm厚さの黒色土を貼って釜屋の地盤を構築し，中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出場1基が位置している。黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等を検出することができなかった。



第165図 第43製塩跡遺構配置図

第43製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	R5j ₂	4.06	234	910,911	912	828	205,206,207,266,271,272,273,274	—
2	R5j ₂	4.06	234	910,911	912	914,916,917	253,256,263,267	—

竈 Q5j₁区を中心に1基(第234号竈)検出され、砂を鍋状に掘り込み構築している。平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径5.30m、短径4.12m、深さ1.20mである。覆土は、上層には黒色土を含む砂が自然堆積し、中層から下層にかけては貝殻片を含む灰が50cmの厚さで堆積している。火床と思われる砂は火熱のために赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
234	Q5j ₁	N-6°-W	楕円形	5.30	4.12	1.20	自然	4.06		

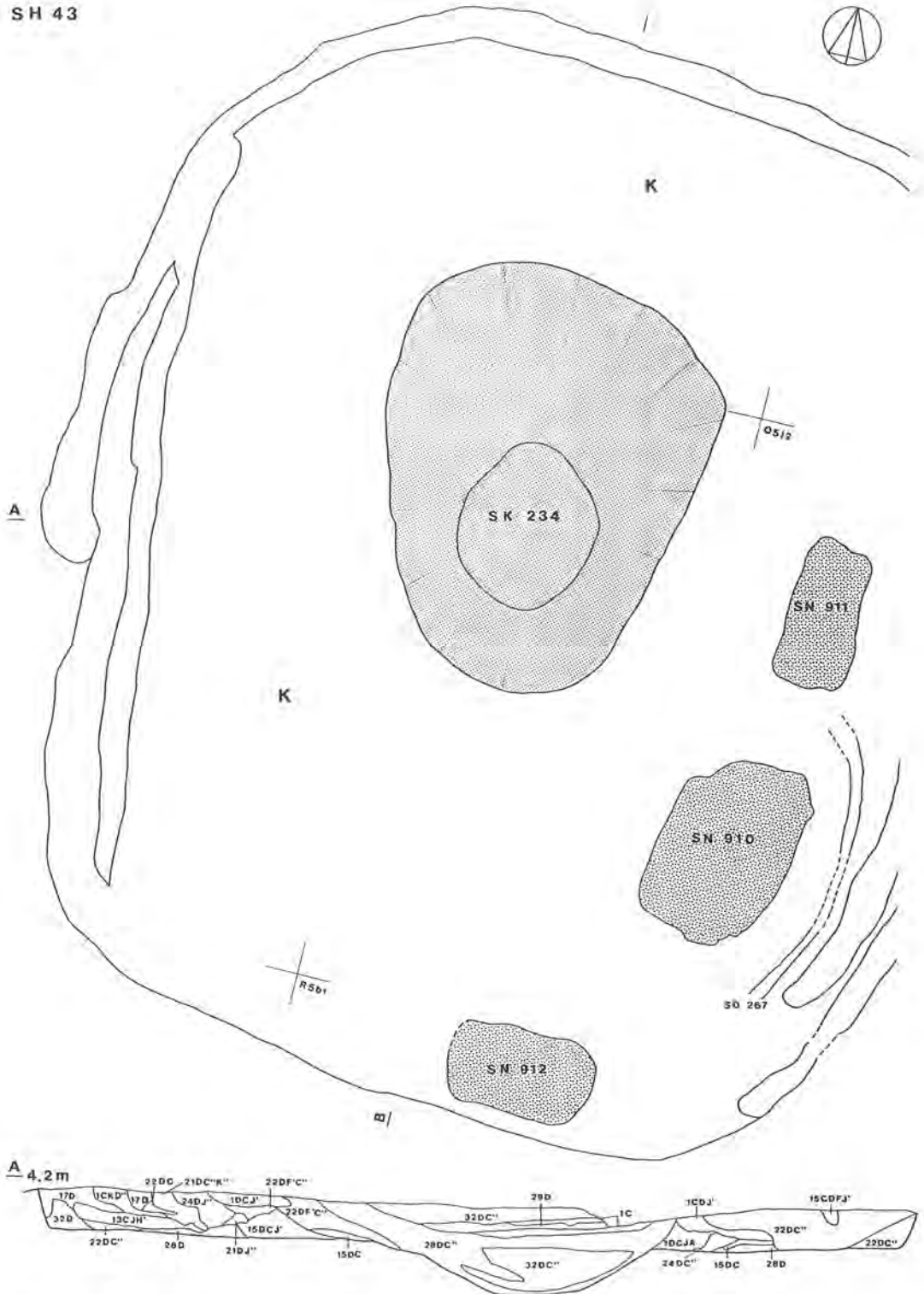
釜屋内鹹水槽 R5a₂区とQ5j₂区から2基(第910・911号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.20・1.74m、短軸1.50・0.85m、深さ0.80・0.25mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～10cmの粘土を貼って構築している。

居出場 R5b₁区から1基(第912号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.85)m、短軸0.96m、深さ0.55mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～6cmの粘土を貼って構築している。

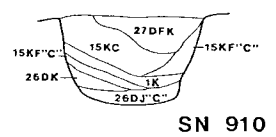
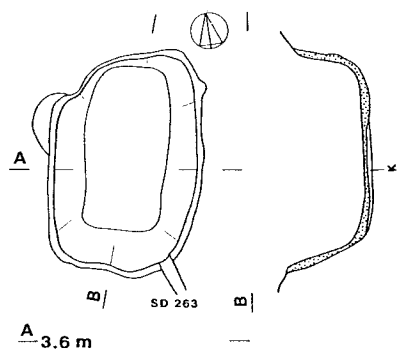
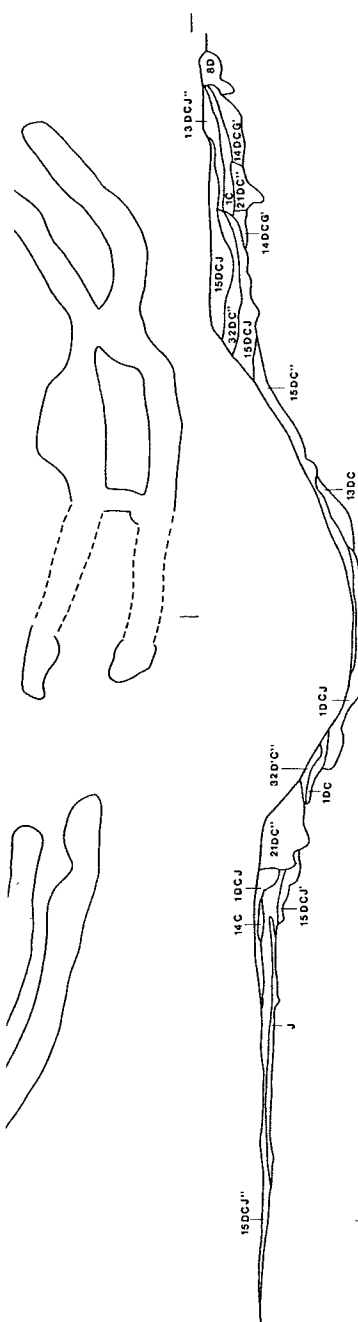
屋外鹹水槽 Q5f₂区・Q5i₄区・R5a₄区の3か所から4基(第828・914・916・917号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、楕円形及び舟形を呈している。規模は、長軸[径]6.99～7.26m、短軸[径]2.42～2.98m、深さ0.50～1.35mである。壁は暗褐色の山砂をレンガ状に積み上げて構築しており、底面は平坦及び皿状を呈し、外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土の上に厚さ2～17cmの粘土を貼って構築している。第916号鹹水槽に伴うと思われるピットが、第916号鹹水槽の東側と西側に2か所(P₁・P₂)検出されている。P₁とP₂の規模は、径15・18cmで、深さは砂地のため明瞭に確認することはできなかった。第916号鹹水槽の下から第917号鹹水槽が検出されたことから、第916号鹹水槽が新しい。

土樋 Q5g₂区からR5f₃区を中心にして12条検出され、全長が最も短いものは0.80mで、最も長いものは16.20mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅9～57cm、下幅6～43cm、深さ5～11cmである。各土樋は砂を浅く掘り、粘土を1～12cmの厚さで、雨樋のように貼って構築している。第828号鹹水槽から第205号土樋、第206号土樋へと連なっていたものと思われる。第205号土樋は第207・273号土樋と重複しており、第205号土樋の下から第207号土樋、その下から第273号土樋が検出されたことから、第205号土樋が最も新しく、次いで第207号土樋、第273号土樋の順に古くなる。第206号土樋も、第272・274号土樋と重複しており、第206号土樋の下か

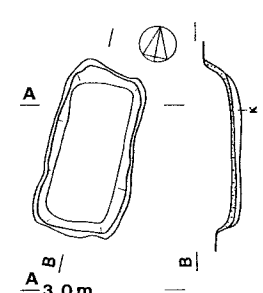
SH 43



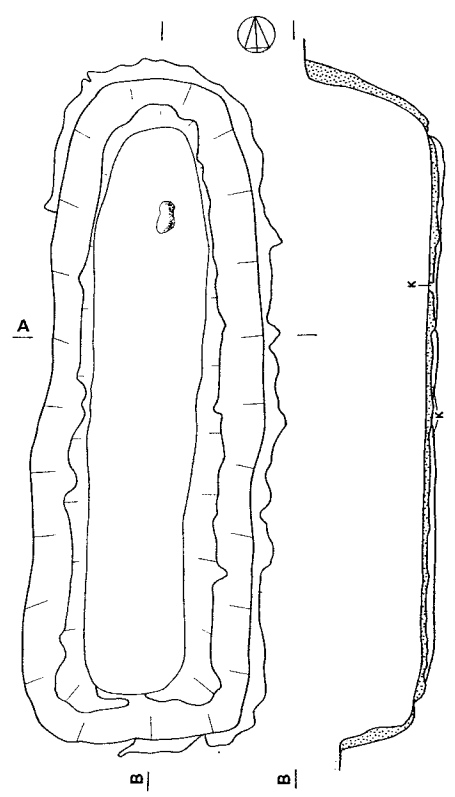
第166図 第43製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



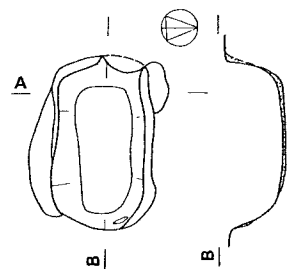
SN 910



SN 911

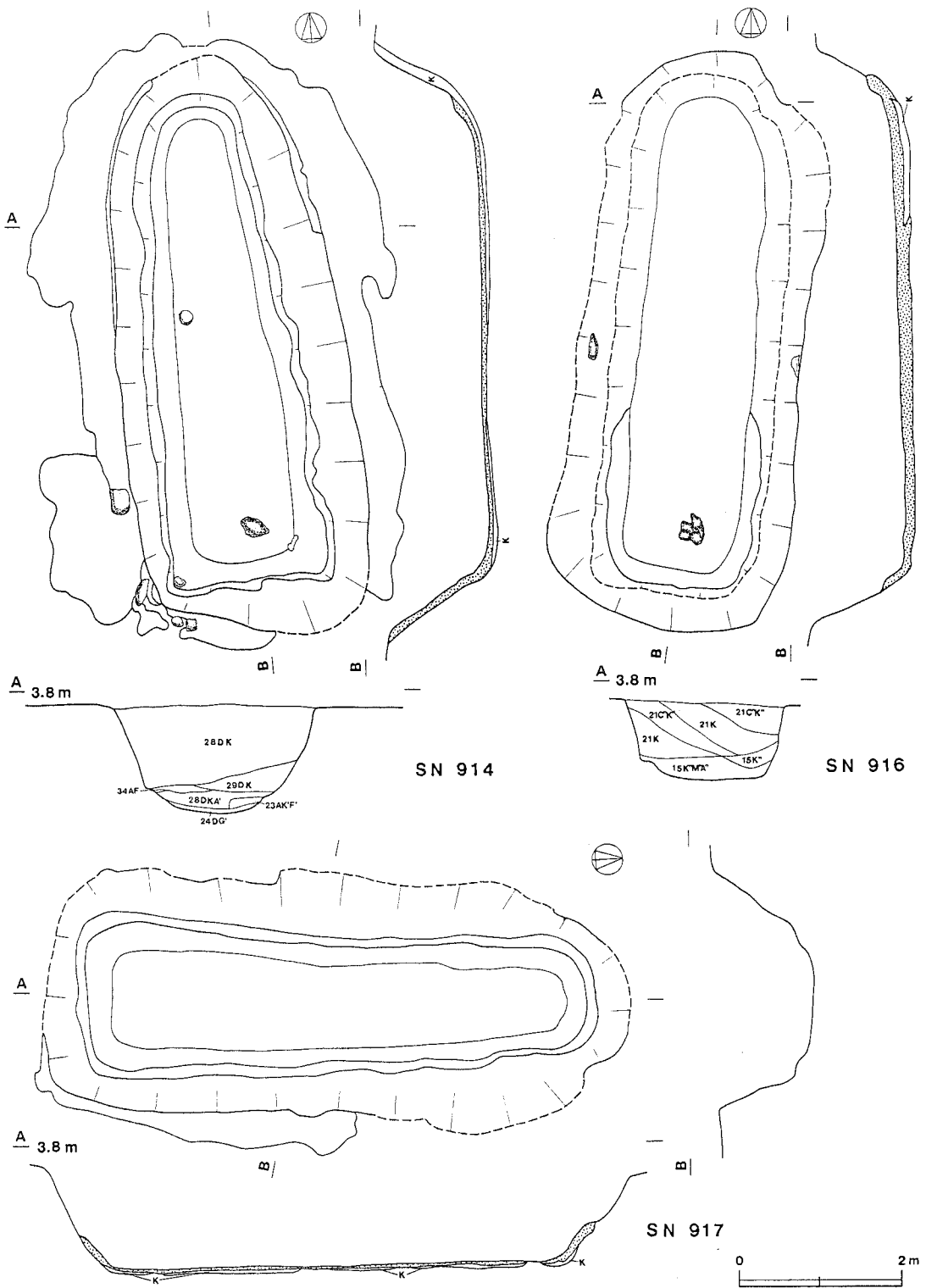


SN 828

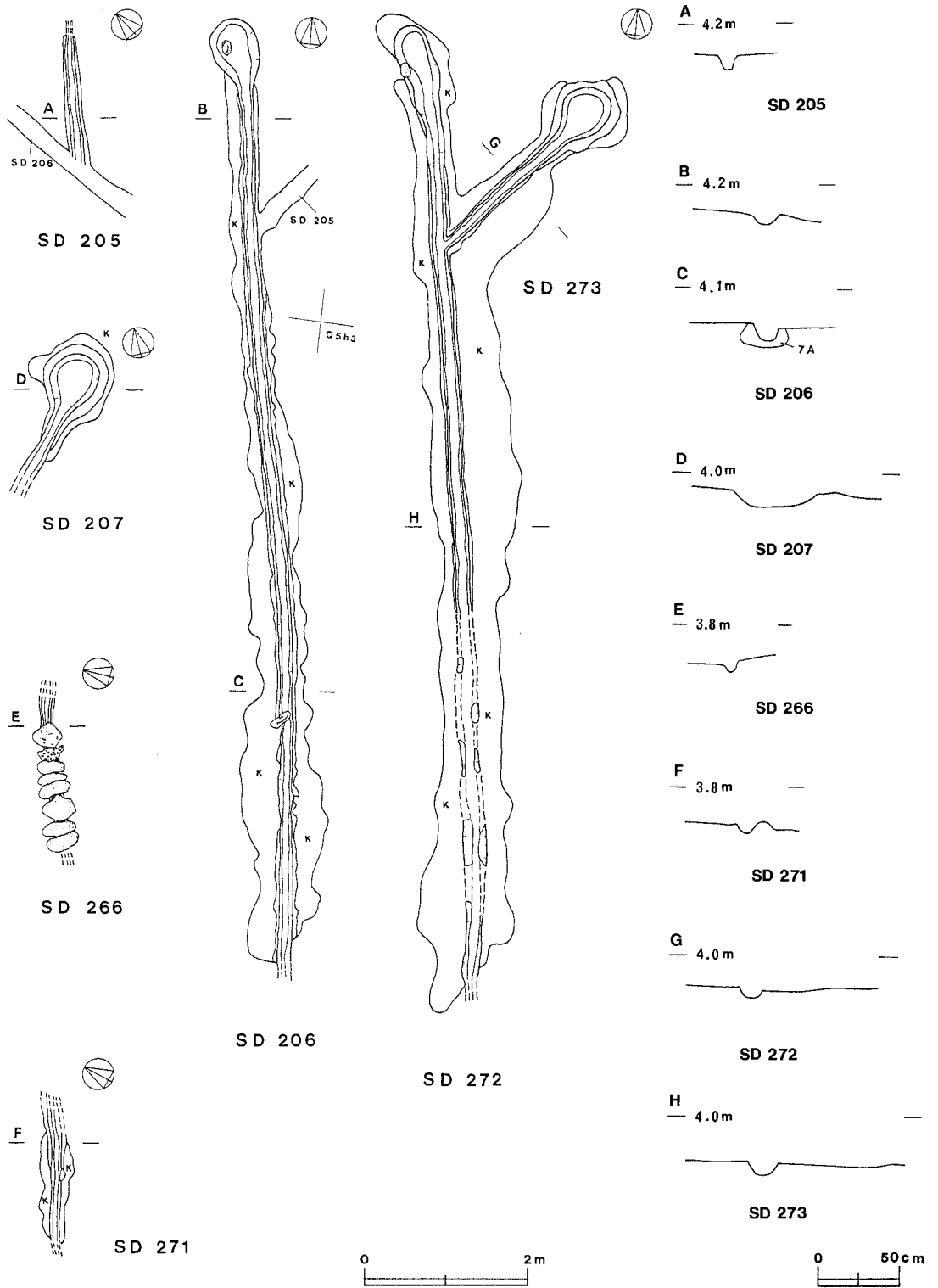


SN 912

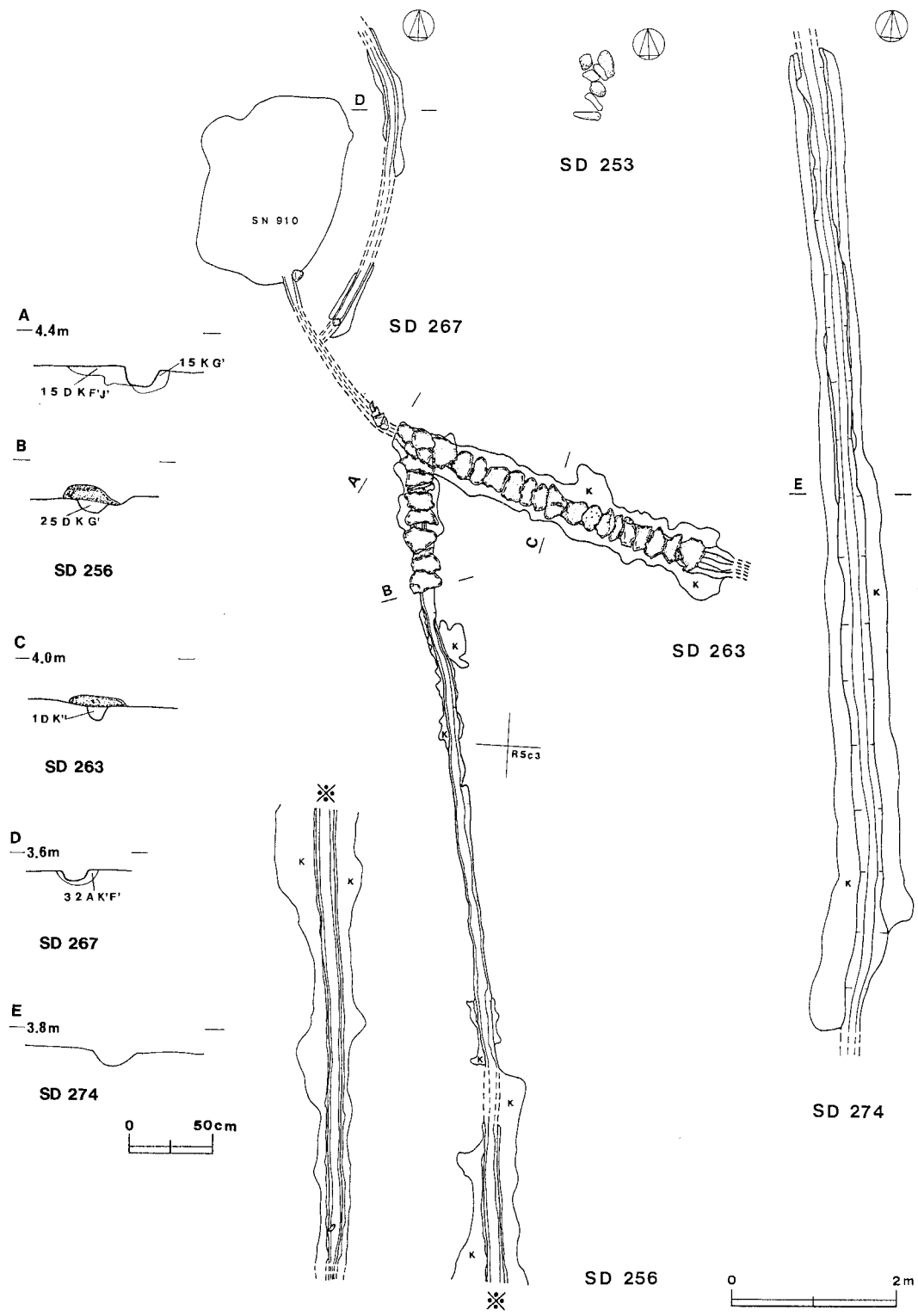




第167図 第43製塩跡鹹水槽実測図



第168図 第43製塩跡土樋実測図(1)



第169図 第43製塩跡土樋実測図(2)

ら第272号土樋，その下から第274号土樋が検出されていることから，第206号土樋が最も新しく，第272号，第274号土樋の順で古くなる。第256号土樋は，第263号土樋と接続し，第910号鹹水槽と連結していたものと思われる。

鹹水槽一覧表

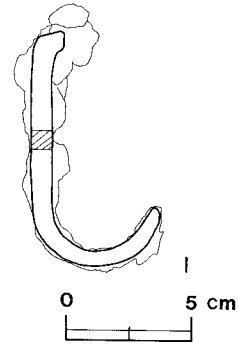
鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
828	Q5f2	N-5°-E	楕 円 形	6.99	2.42	1.29	3~7	外傾	皿状	自然	3.85	IB4c	屋外鹹水槽，底面一石1点， \textcircled{R} 耳金1点
910	R5a2	N-16°-E	隅丸長方形	2.20	1.50	0.80	3~10	外傾	平坦	自然	3.25	IVA3b	釜屋内鹹水槽，SD263→， \textcircled{R} 石3点， \textcircled{R} 石2点
911	Q5j2	N-5°-E	隅丸長方形	1.74	0.85	0.25	2~7	緩斜	平坦	自然	2.92	IVA2a	釜屋内鹹水槽
912	R5b1	(N-85°-W)	隅丸長方形	(1.85)	0.96	0.55	1~6	緩斜	平坦	自然	3.30	IVA2b	居出場， \textcircled{R} 石1点
914	Q5i4	N-3°-W	舟 形	7.11	2.83	1.35	2~17	緩斜	平坦	自然	3.63	VIA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点，底面一石3点， \textcircled{R} 石4点
916	R5a4	N-5°-E	楕 円 形	7.26	(2.78)	1.09	5~17	外傾	平坦	自然	3.53	IA4c	屋外鹹水槽，底面一焼石5点，第917号鹹水槽と重複
917	R5a4	N-5°-E	隅丸長方形	(7.24)	2.98	0.50	3~6	外傾	平坦	自然	2.80	IVA4b	屋外鹹水槽，第916号鹹水槽と重複

土樋一覧表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
205	Q5g2	N-37°-E	1.65	13	6	9	—	U	自然	無	4.00	第206号土樋と接続，第207・273号土樋と重複
206	Q5g2 ~Q5i3	N-11°-W	11.75	17	8	6	2~4	U	自然	無	3.76 ~3.88	第205号土樋と接続， \textcircled{R} 土器片1点，第272・274号土樋と重複
207	Q5g3	N-41°-E	1.57	57	43	5	1~4	U	自然	無	3.76 ~3.90	第205・273号土樋と重複
253	R5b3	N-9°-E	0.80	—	—	—	—	U	—	有	—	石蓋だけ検出，粘土壁なし
256	R5b2 ~R5f3	N-6°-W	16.20	15	12	9	4~12	U	自然	有	4.36 ~4.40	
263	R5a2 ~R5b3	N-70°-W	6.60	18	6	11	2~10	U	自然	有	3.60 ~3.90	第256号土樋と接続
266	Q5j2 ~Q5j3	N-70°-E	2.00	9	6	9	1~4	U	自然	有	3.56 ~3.60	
267	R5a2	N-14°-E	3.97	15	7	10	3~11	U	自然	無	3.46 ~3.50	
271	Q5j2 ~Q5j3	N-58°-E	1.80	12	6	6	1~7	U	自然	無	3.54 ~3.58	
272	Q5g2 ~Q5i3	N-11°-W	11.45	17	10	9	1~7	U	自然	無	3.64 ~3.94	第206・274号土樋と重複
273	Q5g2 ~Q5g3	N-39°-E	3.00	15	7	6	3~7	U	自然	無	3.80 ~3.84	第272号土樋と接続，第205・207号土樋と重複
274	Q5g2 ~Q5j3	N-11°-W	12.12	28	11	9	2~6	U	自然	無	3.64 ~3.72	第206・272号土樋と重複

出土遺物 第828号鹹水槽の覆土中から耳金1点(第170図1)が出土している。周囲からの流れ込みと思われる。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の確認面での標高の差が少なく、解明できなかった。この製塩跡の時期は、第828号鹹水槽から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。



第170図 第43製塩跡出土遺物実測図

第828号鹹水槽出土鉄製品一覧表(第170図1)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
1	耳金	9.5	0.7	0.8	76.8	第828号鹹水槽	M53 下端部折れ曲がる。

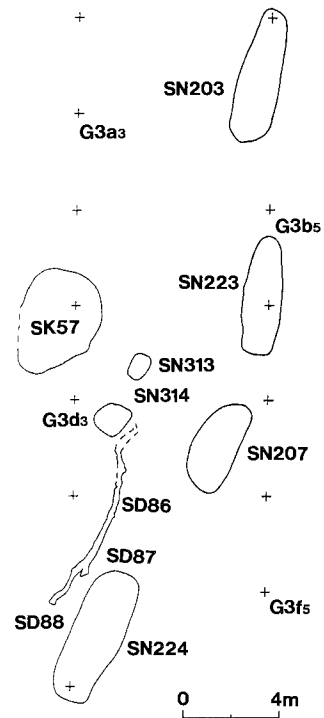
第44製塩跡(第171図)

位置 調査区の中央部 G3c3区を中心に確認され、標高8.41mに位置している。

関連遺構 第57号竈、第203・207・223・224・313・314号鹹水槽及び第86～88号土樋で構成されている。屋外鹹水槽の長軸方向の違いから、2グループに区別できる。第1グループは、第57号竈、釜屋内鹹水槽(313, 314)、屋外鹹水槽(207, 224)及び土樋(86～88)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽及び土樋が第1グループと同一で、それに屋外鹹水槽(203, 223)で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.00m、東西8.60mの不定形を呈している。砂上に厚さ30～50cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 G3c2区を中心に1基(第57号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.56m、短径3.22m、深さ0.80



第171図 第44製塩跡遺構配置図

mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が20～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

第44製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	G3c ₃	8.41	57	313,314	—	207,224	86,87,88	新
2	G3c ₃	8.41	57	313,314	—	203,223	86,87,88	古

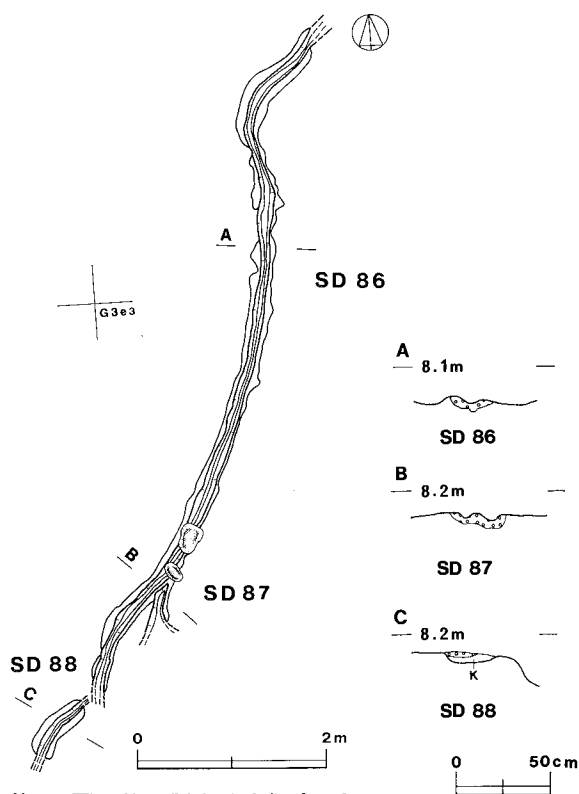
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
57	G3c ₂	N-25°-E	楕円形	4.56	3.22	0.80	自然	8.34		

釜屋内鹹水槽 G3c₃区とG3d₄区から2基(第313・314号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.16・1.39m、短軸0.78・1.29m、深さ0.30・0.32mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～15cmの粘土を貼って構築している。

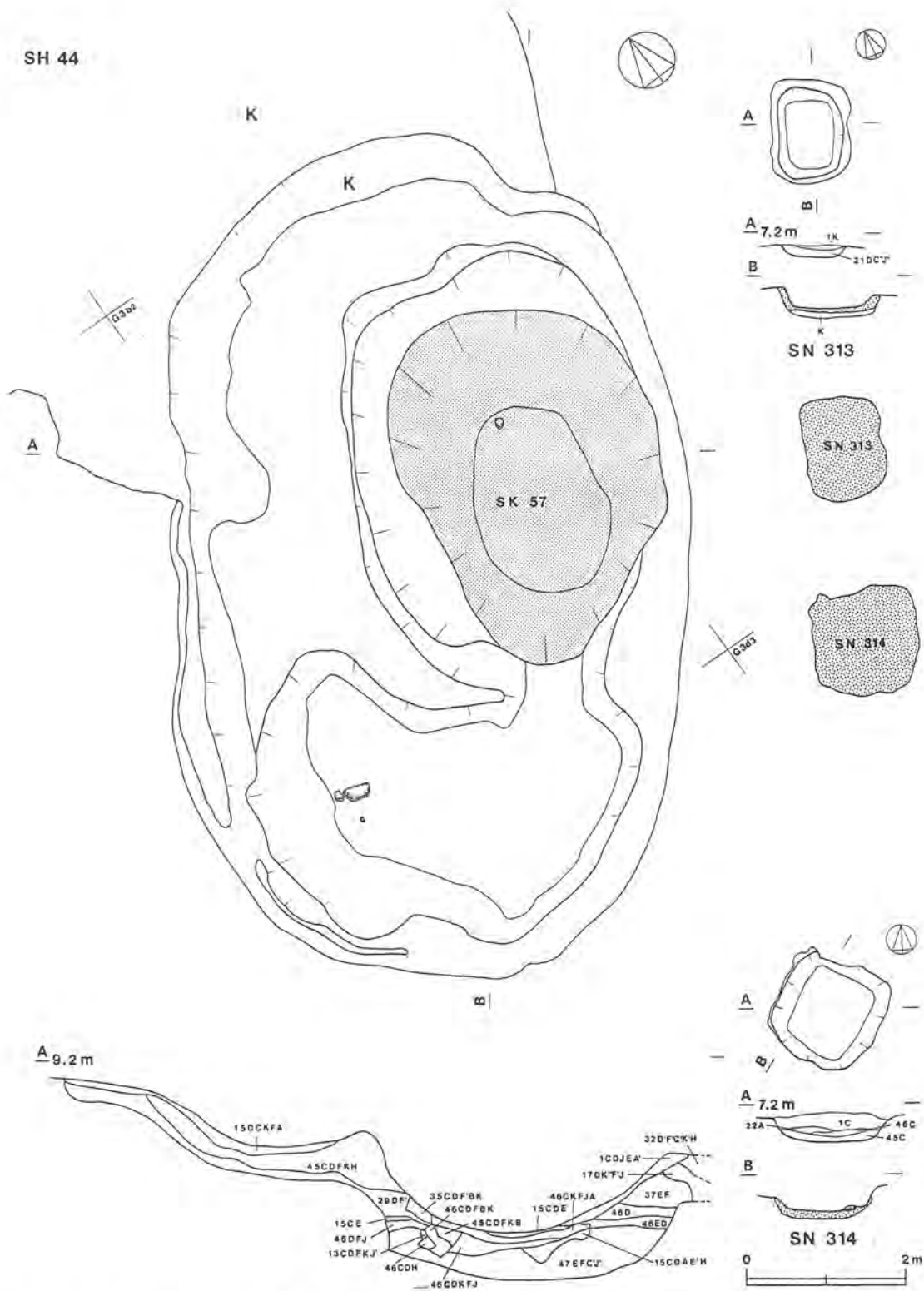
屋外鹹水槽 G3b₄区・G3d₄区・G3f₃区・F3j₄区の4か所から4基(第203・207・223・224号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形、楕円形及び舟形を呈している。規模は、長軸[径]3.93～(5.75)m、短軸[径]1.58～1.92m、深さ0.90～1.46mである。

底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～11cmの粘土を貼って構築している。

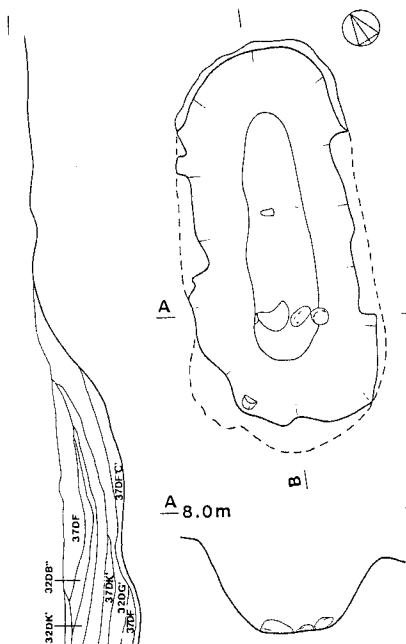


第172図 第44製塩跡土樋実測図

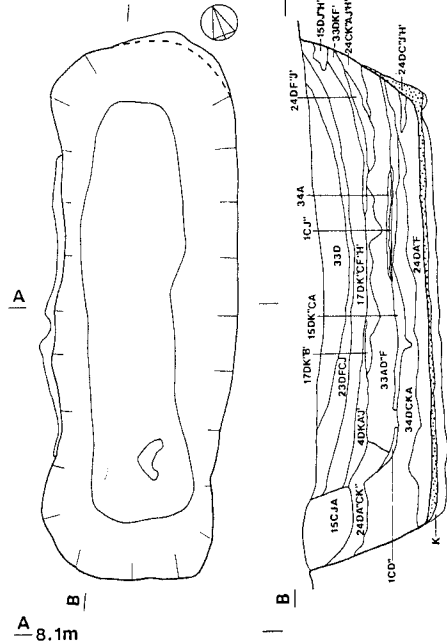
SH 44



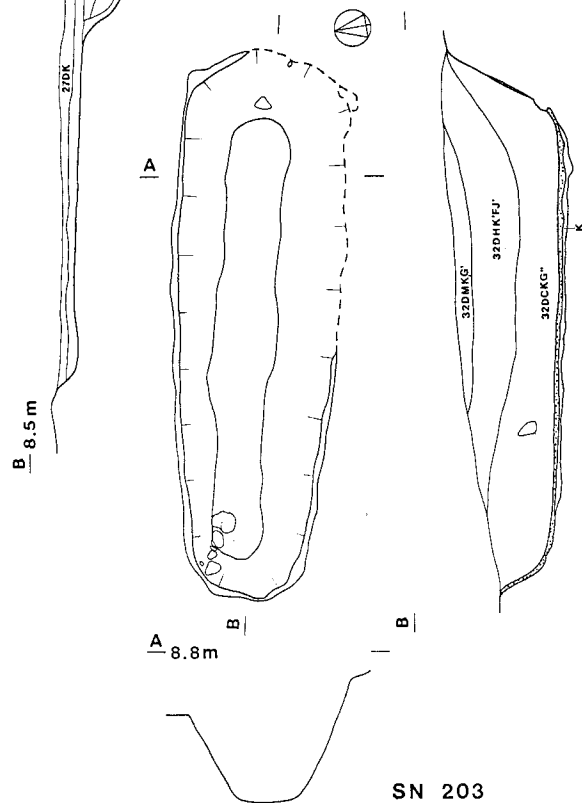
第173図 第44製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



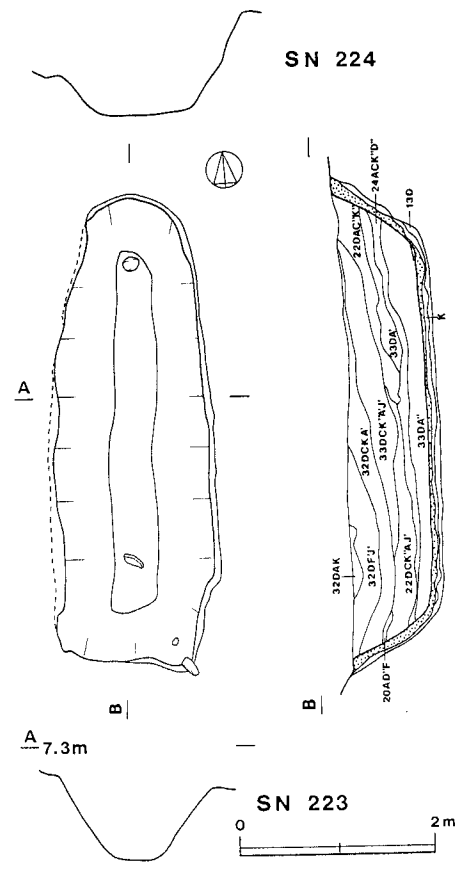
SN 207



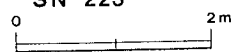
SN 224





SN 203



SN 223






鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
203	F3j ₁	N-11°-E	隅丸長方形	(5.75)	1.58	1.46	1~5	緩斜	平坦	自然	7.79	IVA4c	屋外鹹水槽、底面-石2点、  石6点
207	G3d ₁	N-27°-E	楕円形	3.93	1.63	1.10	1~8	緩斜	平坦	自然	8.41	IA4c	屋外鹹水槽、底面-石4点、  石11点、足掛け石1点
223	G3b ₁	N-7°-E	舟形	4.93	1.59	0.90	1~9	緩斜	平坦	自然	7.45	VIA4b	屋外鹹水槽、石白1点、足掛けくぼみ
224	G3f ₁	N-23°-E	隅丸長方形	5.63	1.92	1.10	3~11	緩斜	平坦	自然	7.98	IVA4c	屋外鹹水槽、底面-焼石1点
313	G3c ₁	N-25°-E	隅丸長方形	1.16	0.78	0.30	2~15	外傾	平坦	自然	7.18	IVA2a	釜屋内鹹水槽
314	G3d ₁	N-28°-E	隅丸長方形	1.39	1.29	0.32	2~11	緩斜	平坦	自然	7.06	IVA2a	釜屋内鹹水槽

土樋 G3d₁区からG3f₁区を中心にして3条(第86・87・88号土樋)検出され、全長が最も短いものは0.53mで、最も長いものは7.70mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅10~20cm、下幅2~12cm、深さ4~10cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1~7cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第224号鹹水槽と連なっている第87号土樋は、第86号土樋と合流し、釜屋内の第314号鹹水槽と連結していたと思われる。さらに第88号土樋は第86号土樋と接続し、釜屋内の第314号鹹水槽と連結していたと思われる。

土樋一覧表

土樋番号	位置	主軸方向	規 模				粘土の厚さ (cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
86	G3d ₁ ~G3e ₁	N-22°-E	7.70	15	4	10	4~7		自然	有	7.80 ~8.10	第87・88号土樋と接続
87	G3e ₁	N-12°-E	0.53	20	12	5	1~2		自然	無	8.02	第86号土樋と接続
88	G3f ₁	N-56°-E	0.72	10	2	4	3~5		自然	無	8.05	第86号土樋と接続

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の長軸方向の違いから、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第89号竈から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

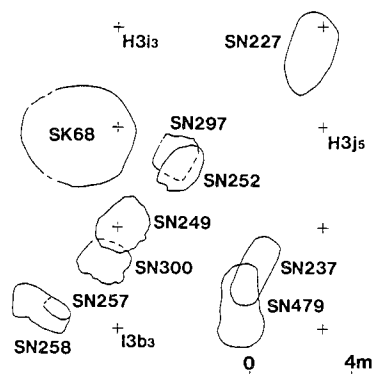
第45製塩跡(第174図)

位置 調査区の中央部F3j₁区を中心を確認され、標高10.90mに位置している。

関連遺構 第68号竈、第227・237・249・252・257・258・297・300・479号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、釜屋内鹹水槽と屋外鹹水槽の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第68号竈、釜屋内鹹水槽(252, 300)、居出場(257・258)及び屋外鹹水槽(227, 237)で構成されている。第2グループは、竈と居出場が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽(249,

297) と屋外鹹水槽 (227, 479) で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北13.80m、東西12.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ20～60cmの灰、貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽4基、南側に居出場1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。



第174図 第45製塩跡遺構配置図

第45製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 桶(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3j ₃	10.90	68	252,300	257,258	227,237	—	新
2	H3j ₃	10.90	68	249,297	257,258	227,479	—	古

竈 H3j₂区を中心に1基(第68号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.38m、短径4.09m、深さ0.56mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては灰が10～90cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

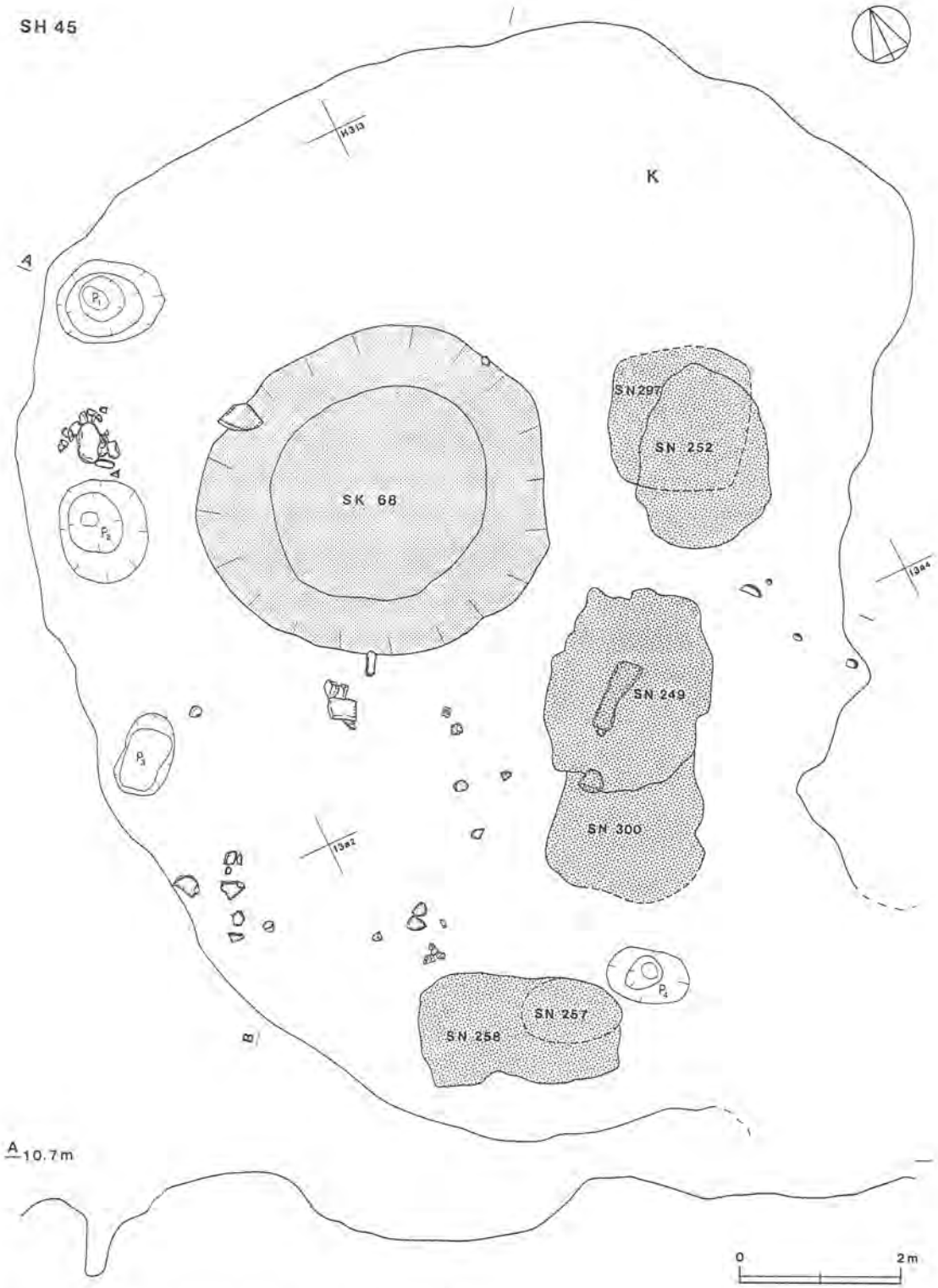
竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
68	H3j ₂	N-69°-W	楕円形	4.38	4.09	0.56	自然	10.52	④耳金1点,土師質土器の皿1点	

釜屋内鹹水槽 H3j₃区とI3a₂区から4基(第249・252・297・300号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸[径](1.63)～2.37m、短軸[径](1.14)～1.76m、深さ0.50～1.14mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～20cmの粘土を貼って構築している。第252・300号鹹水槽の下から第249・297号鹹水槽を検出していることから、第252・300号鹹水槽が新しい。

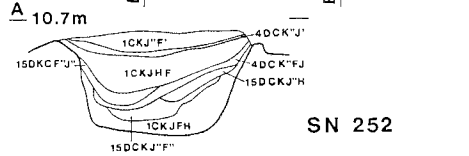
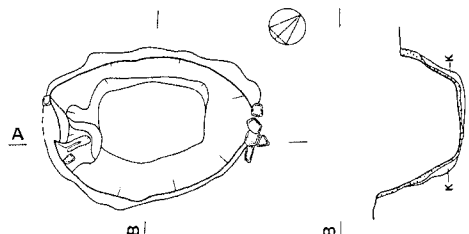
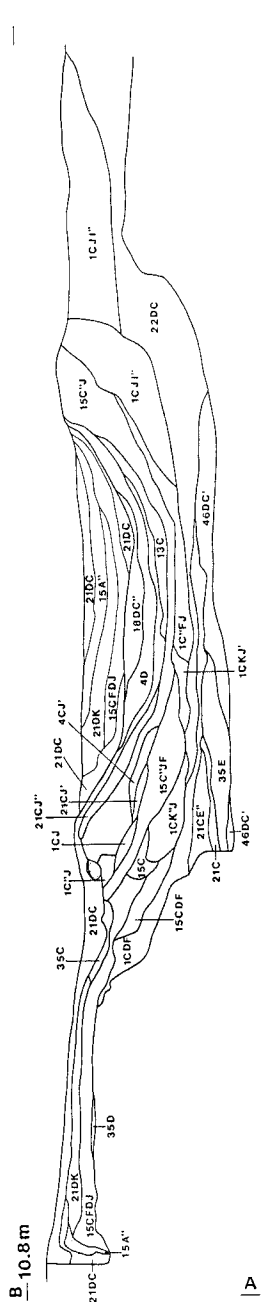
居出場 I3a₂・a₃区から2基(第257・258号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.15)・2.45m、短軸0.66・1.12m、深さ0.45mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 H3i₄区・I3a₄区から3基(第227・237・479号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長

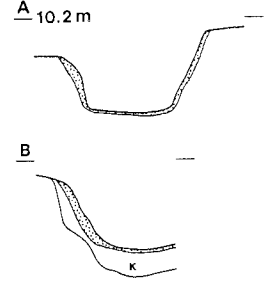
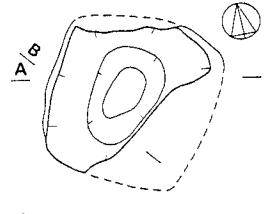
SH 45



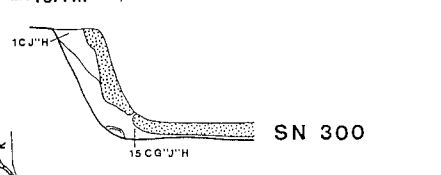
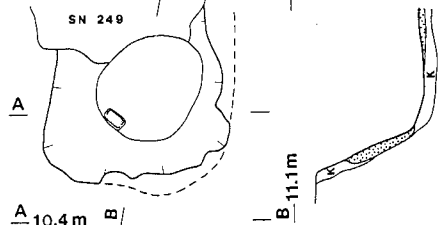
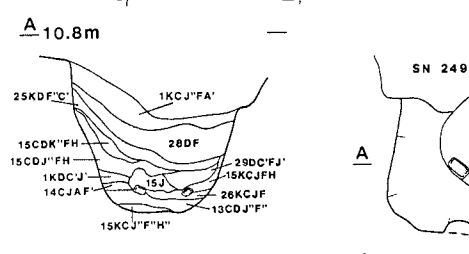
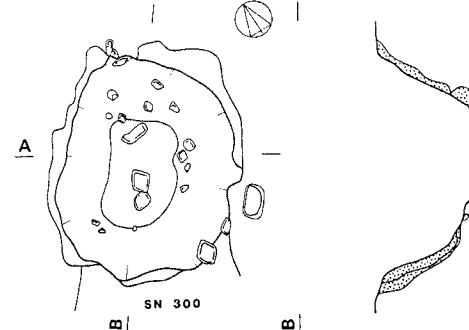
第175図 第45製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



SN 252

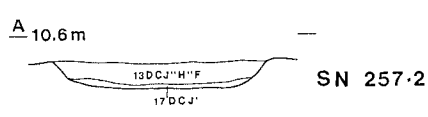
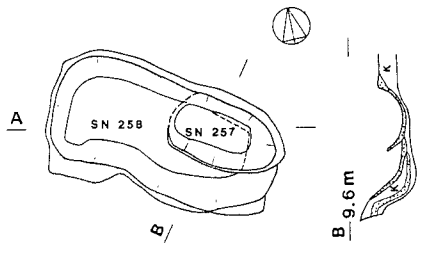


SN 297

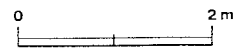


SN 249

SN 300



SN 257-258



方形と楕円形を呈している。規模は、長軸〔径〕2.97～3.37m、短軸〔径〕1.24～1.81m、深さ0.20～0.73mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。第237号鹹水槽の下から第479号鹹水槽が検出されていることから、第237号鹹水槽が新しい。

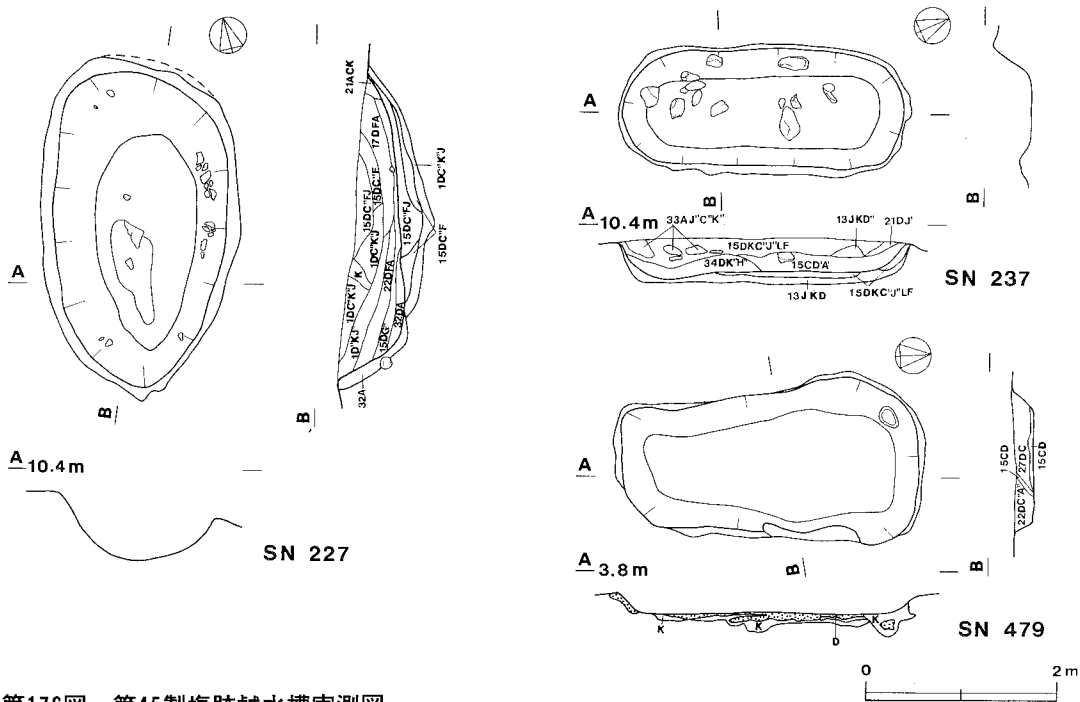
出土遺物 第68号竈の覆土上層から耳金（第177図1）、土師質土器の灯明皿1点（第177図2）、石臼1点（第177図3）が出土している。3の石臼は、粉挽き白の上白の破片で、完存率は30%である。推定直径約26.2cm、現存する高さ7.3cm、重量2,150gを測る。石質は安山岩である。磨り合わせ面は摩滅が著しく、分面数は不明である。周囲からの流れ込みと思われる。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 〔長径〕	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) 〔径〕	短軸(m) 〔径〕	深さ(m)							
227	H3i ₄	N-12°-E	楕 円 形	3.37	1.81	0.73	2～12	緩斜	平坦	自然	10.16	IA4b	屋外鹹水槽
237	I3a ₄	N-24°-E	隅丸長方形	2.97	1.24	0.40	2～8	緩斜	平坦	自然	10.23	IVA3a	屋外鹹水槽、第479号鹹水槽と重複
249	H3j ₃	N-30°-E	隅丸長方形	2.37	1.76	1.07	1～20	外傾	平坦	自然	9.97	IVA3e	釜屋内鹹水槽、足掛くぼみ、底面一石3点、㊸石2点、第300号鹹水槽と重複
252	H3j ₃	N-46°-E	楕 円 形	2.13	1.46	0.92	1～7	緩斜	皿状	自然	10.30	IB3b	釜屋内鹹水槽、㊸石2点、第297号鹹水槽と重複
257	I3a ₂	N-59°-W	隅丸長方形	(1.15)	0.66	0.45	1～12	緩斜	平坦	自然	10.32	IVA2a	居出場
258	I3a ₃	N-59°-W	隅丸長方形	2.45	1.12	0.45	1～6	緩斜	平坦	自然	10.31	IVA3a	居出場
297	H3j ₃	N-35°-E	隅丸長方形	(1.63)	(1.14)	0.50	3～12	緩斜	皿状	自然	9.95	IVB2b	釜屋内鹹水槽、第252号鹹水槽と重複
300	I3a ₂	N-47°-W	隅丸長方形	(1.92)	(1.71)	1.14	1～11	緩斜	平坦	自然	10.90	IVA2c	釜屋内鹹水槽、底面一石1点、㊸石1点、第249号鹹水槽と重複
479	I3a ₄	N-6°-E	隅丸長方形	3.13	1.48	0.20	1～5	緩斜	平坦	自然	3.56	IVA4a	屋外鹹水槽、第237号鹹水槽と重複

第68号竈出土鉄製品一覧表（第177図1）

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	8.8	0.9	0.5	35.1	第68号竈	M8 両端部折れ曲がる。

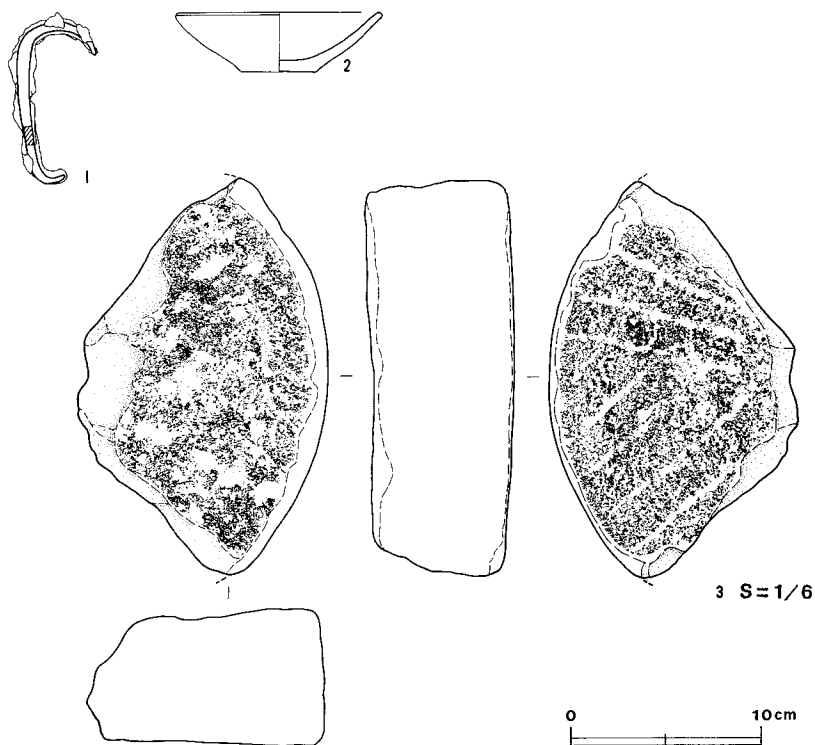


第176図 第45製塩跡鹹水槽実測図

第68号竈出土土器観察表 (第177図2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	灯明皿 土師質土器	A 10.8	平底で、体部は内彎気味に 開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・バミス・ス コリア 橙色 普通	P12 50% 口唇部に煤付着 第68号竈覆土
		B 3.3				
		C 4.0				

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は釜屋内鹹水槽と屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第68号竈の覆土上層から15～16世紀頃の土師質土器の灯明皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる、その時期を明確にすることができなかった。



第177図 第45製塩跡出土遺物実測・拓影図

第46製塩跡（第178図）

位置 調査区の中央部 H3h₄区を中心に確認され、標高9.10m に位置している。

関連遺構 第70号竈，第335・338・384号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，釜屋内鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは，第70号竈と釜屋内鹹水槽（335，338）で構成されている。第2グループは，竈が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽（335，384）で構成されている。

第46製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3h ₄	9.10	70	335,338	—	—	—	新
2	H3h ₄	9.10	70	335,384	—	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北10.20m，東西12.00m の不定形を呈している。砂上に厚さ10～60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽3基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱

穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。
竈 H3h₄区を中心に1基(第70号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.82m、短径4.60m、深さ0.80mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が20～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
70	H3h ₄	N-28°-E	楕 円 形	4.82	4.60	0.80	自然	9.02		

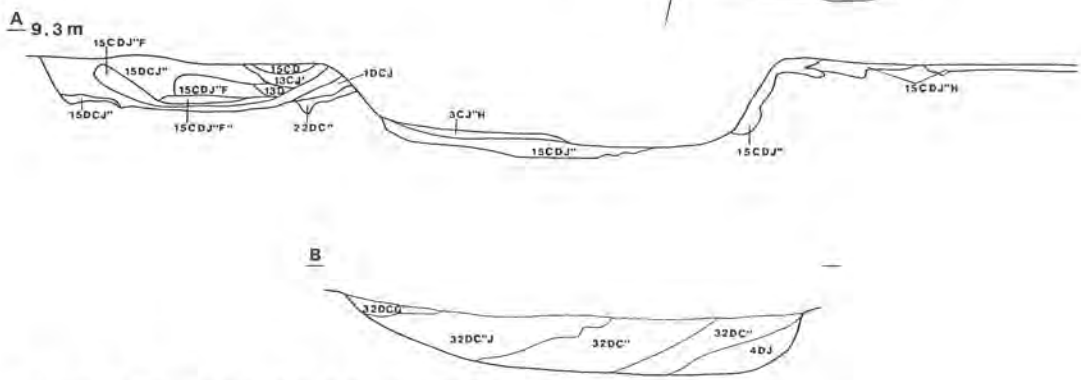
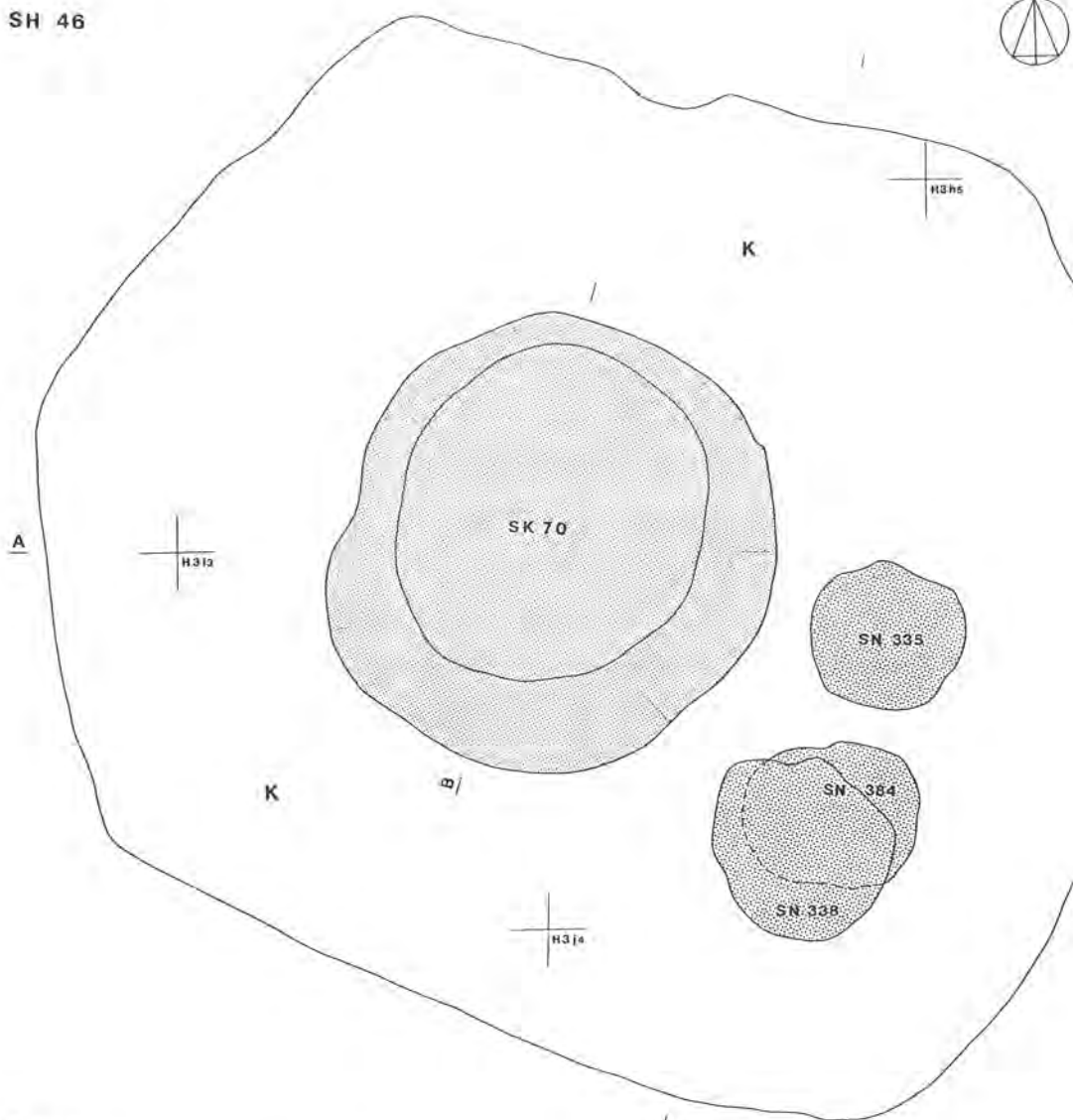
釜屋内鹹水槽 H3i₄区から3基(第335・338・384号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸[径]1.70～2.03m、短軸[径]1.37～1.80m、深さ0.81～1.01mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。第338号鹹水槽の下から第384号鹹水槽を検出していることから、第338号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

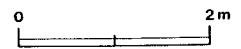
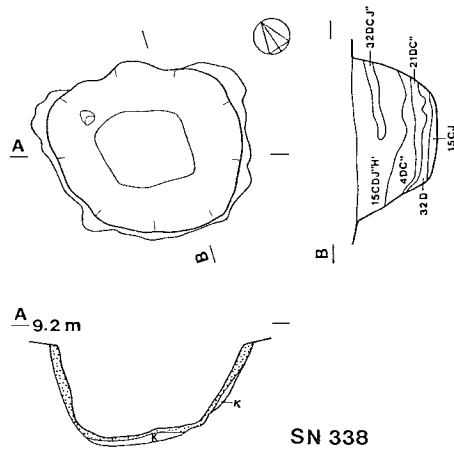
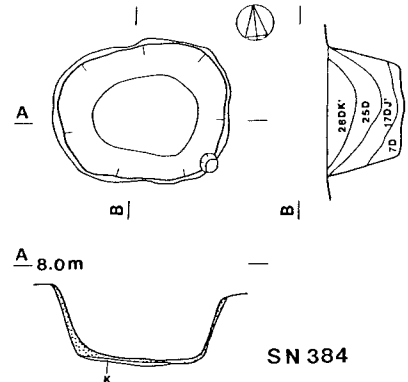
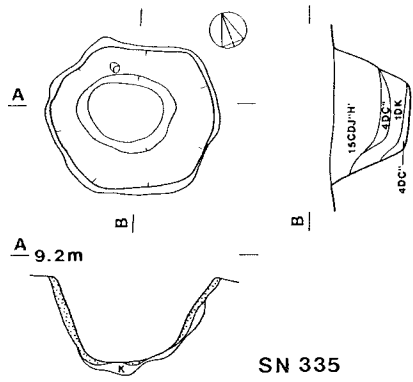
鹹水槽 番 号	位 置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
335	H3i ₄	N-71°-W	楕 円 形	1.73	1.48	0.94	1～10	緩斜	平坦	自然	9.00	IA2b	釜屋内鹹水槽
338	H3i ₄	N-59°-W	楕 円 形	2.03	1.80	1.01	1～7	緩斜	平坦	自然	9.02	IA3c	釜屋内鹹水槽、第384号鹹水槽と重複
384	H3i ₄	N-88°-E	隅丸長方形	1.70	1.37	0.81	1～10	外傾	平坦	自然	7.70	IVA2b	釜屋内鹹水槽、第338号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、釜屋内鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

SH 46



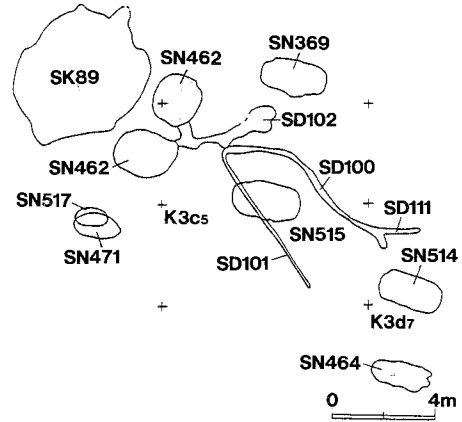
第178図 第46製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第47製塩跡（第179図）

位置 調査区の中央部 K3b₅区を中心に確認され、標高8.32m に位置している。

関連遺構 第89号竈，第369・462～464・471・514・515・517号鹹水槽及び第100～102・111号土樋で構成されている。これらの遺構は，居出場の重複関係と屋外鹹水槽の長軸方向から，2グループに区別できる。第1グループは，第89号竈，釜屋内鹹水槽(462, 463)，居出場(471)，屋外鹹水槽(464, 514) 及び土樋（100, 101, 111）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で，居出場（517），屋外鹹水槽（369, 515）及び土樋（102, 111）で構成されている。



第179図 第47製塩跡遺構配置図

第47製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	K3b ₅	8.32	89	462, 463	471	464, 514	100, 101, 111	新
2	K3b ₅	8.32	89	462, 463	517	369, 515	102, 111	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北14.00m，東西14.20m の不定形を呈している。砂上に厚さ20～30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基，南側に居出場2基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。釜屋の周囲は，底面から60～80cmの高さで土手が築かれており，南側に釜屋へ向かって傾斜した出入口が付設されている。

竈 K3a₄区を中心に1基（第89号竈）検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径4.97m，短径4.57m，深さ0.83mである。底面から鍋状に立ち上がり，覆土は，上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，下層は灰が10～40cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
89	K3a ₄	N-24°-E	楕円形	4.97	4.57	0.83	自然	7.92	⑥耳金1点	

釜屋内鹹水槽 K3b₄・b₅区から2基(第462・463号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.89・2.39m、短軸1.69・1.80m、深さ1.18・1.04mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～16cmの粘土を貼って構築している。

居出場 K3c₄区から2基(第471・517号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.86・1.23m、短軸0.97・0.71m、深さ0.45・0.15mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～2cmの粘土を貼って構築している。第471号鹹水槽の下から第517号鹹水槽が検出されていることから、第471号鹹水槽が新しい。

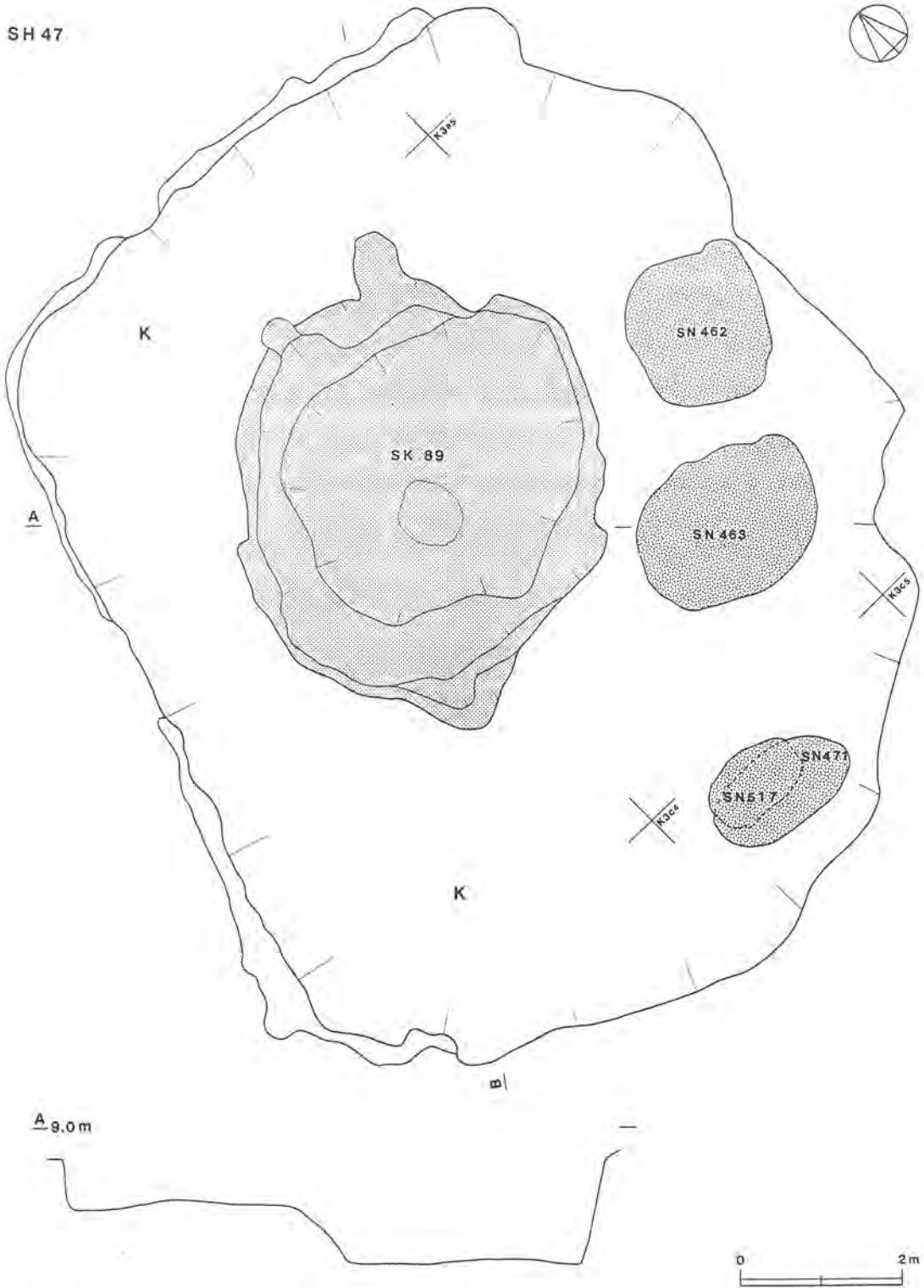
屋外鹹水槽 K3a₆区・K3c₆・c₇区・K3d₇区の4か所から4基(第369・464・514・515号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.52～(3.28)m、短軸1.04～(1.65)m、深さ0.43～1.49mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～15cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

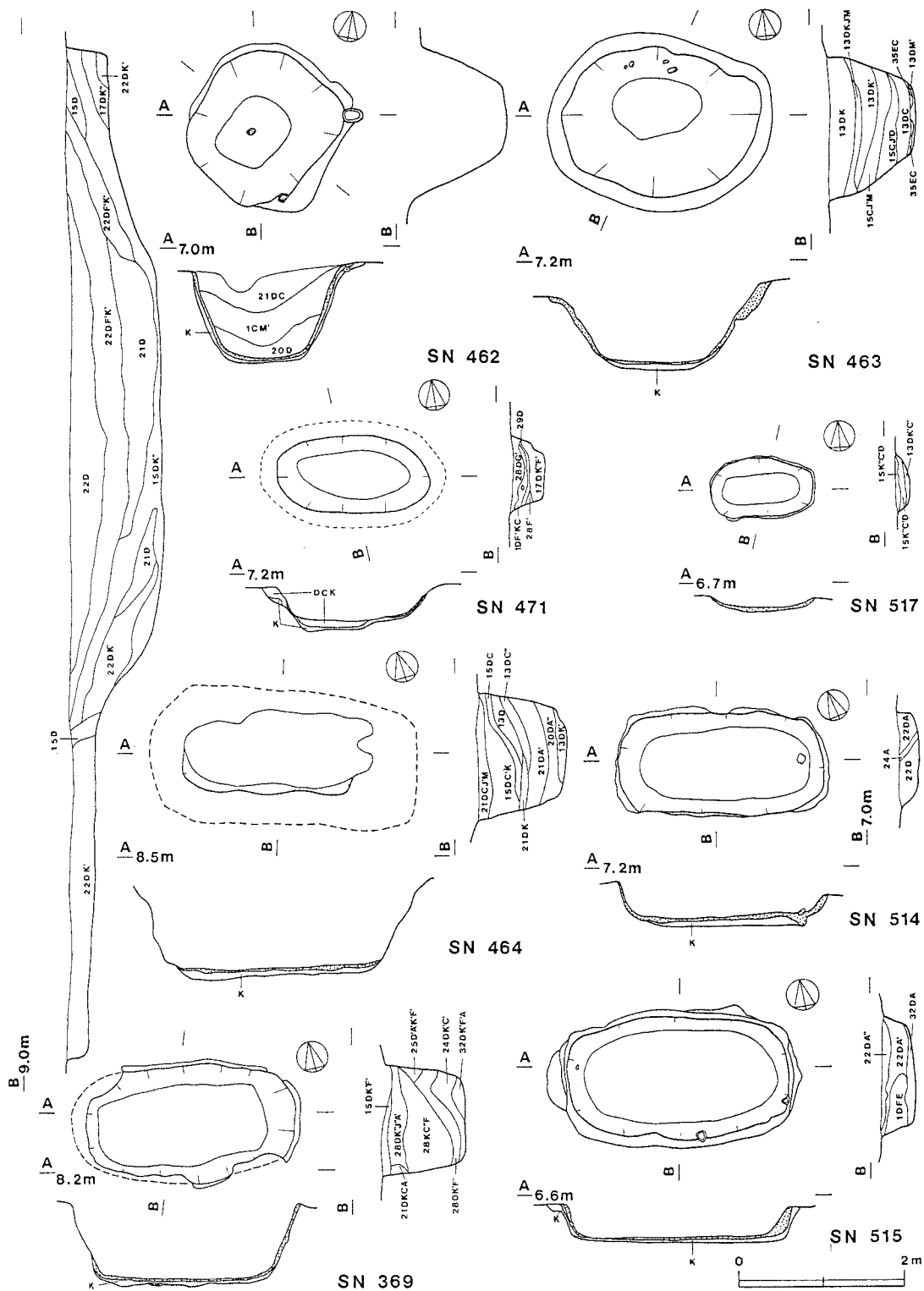
鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
369	K3a ₆	N-84°-W	隅丸長方形	2.59	1.04	0.94	2～6	外傾	平坦	自然	7.88	IVA3b	屋外鹹水槽
462	K3b ₅	N-23°-E	隅丸長方形	1.89	1.69	1.18	1～6	外傾	平坦	自然	7.27	IVA2c	釜屋内鹹水槽
463	K3b ₄	N-73°-W	隅丸長方形	2.39	1.80	1.04	1～16	緩斜	平坦	自然	7.06	IVA3c	釜屋内鹹水槽
464	K3d ₇	N-73°-W	隅丸長方形	(3.28)	(1.65)	1.15	1～6	緩斜	平坦	自然	8.32	IVA4c	屋外鹹水槽
471	K3c ₄	N-81°-W	隅丸長方形	1.86	0.97	0.45	1～2	緩斜	平坦	自然	7.06	IVA2a	居出場、第517号鹹水槽と重複
514	K3c ₇	N-78°-W	隅丸長方形	2.52	1.21	1.49	3～15	緩斜	平坦	自然	7.04	IVA3a	屋外鹹水槽、底面一石1点
515	K3c ₆	N-80°-W	隅丸長方形	2.74	1.50	0.43	1～13	外傾	平坦	自然	6.48	IVA3a	屋外鹹水槽、 [㊦] 石3点
517	K3c ₄	N-89°-E	隅丸長方形	1.23	0.71	0.15	1	緩斜	平坦	自然	6.48	IVA2a	居出場、 [㊦] 石1点、第471号鹹水槽と重複

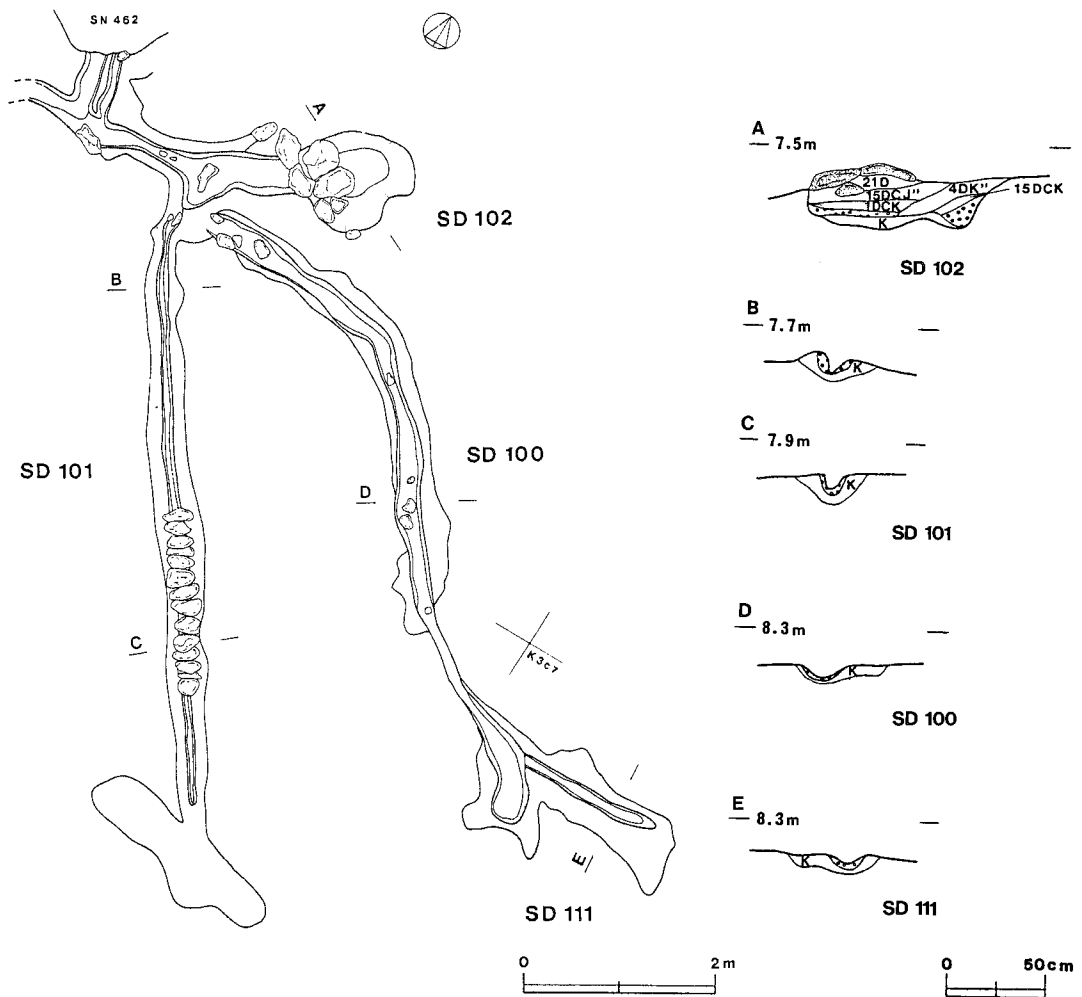
土樋 K3b₅区からK3c₇区を中心にして4条(第100～102・111号土樋)検出され、全長が最も短いものは1.53mで、最も長いものは7.85mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅7～44cm、下幅5～30cm、深さ11～18cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1～10cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第100号土樋の下から第111号土樋が検出されていることから、第100号土樋が新しいと思われる。第464号鹹水槽と連なっている第101号土樋は、第100号土樋が合流し、釜屋内の第463号鹹水槽と連結していたと思われる。第102号土樋は、第462号鹹水槽と連結していたと思われる。

SH 47



第180図 第47製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

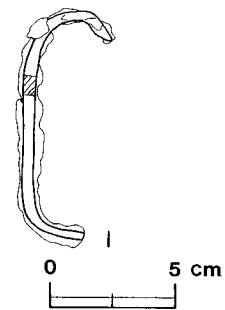




第181図 第47製塩跡土樋実測図

出土遺物 第89号竈の覆土中から耳金1点(第182図1)が出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、居出場の重複関係と屋外鹹水槽の軸方向の違いから、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第89号竈から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることはできなかった。



第182図 第47製塩跡
出土遺物実測図

土樋一覽表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
100	K3b ₆ ~K3c ₇	N-40°-W N-62°-W	7.85	27	19	11	1~10	∪	自然	無	7.20 7.85	⑤石 8 点, 第101号土樋と 接続, 第111号土樋と重複
101	K3b ₅ ~K3c ₆	N-35°-W	6.30	7	5	12	1~8	∪	自然	有	7.09 7.75	第463号鹹水槽と連結, 第 100号土樋と接続
102	K3b ₅	N-66°-E N-19°-W	4.37	44	30	18	-	∪	自然	無	7.30	⑤石12点, ⑥石1点, 第 462号鹹水槽と連結
111	K3e ₇	N-85°-E	1.53	16	10	-	-	∪	自然	無	8.10	第100号土樋と重複

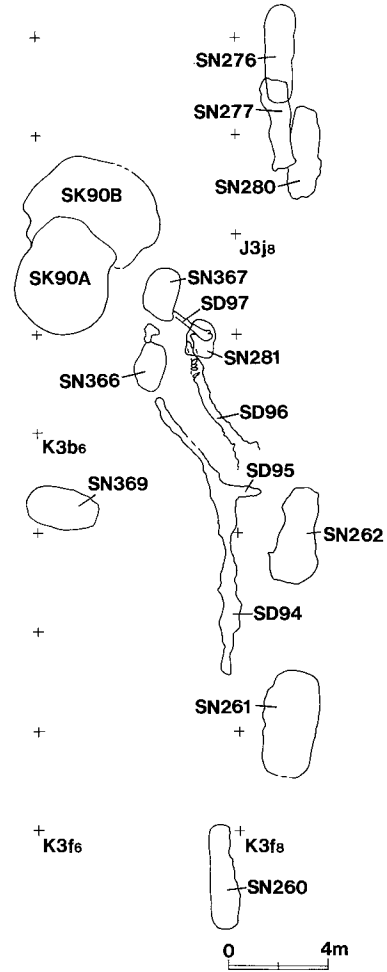
第89号竈出土鉄製品一覽表 (第182図1)

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	9.5	0.8	0.5	29.4	第89号竈	M9 断面長方形, 両端部折れ曲 がる。

第48製塩跡 (第183図)

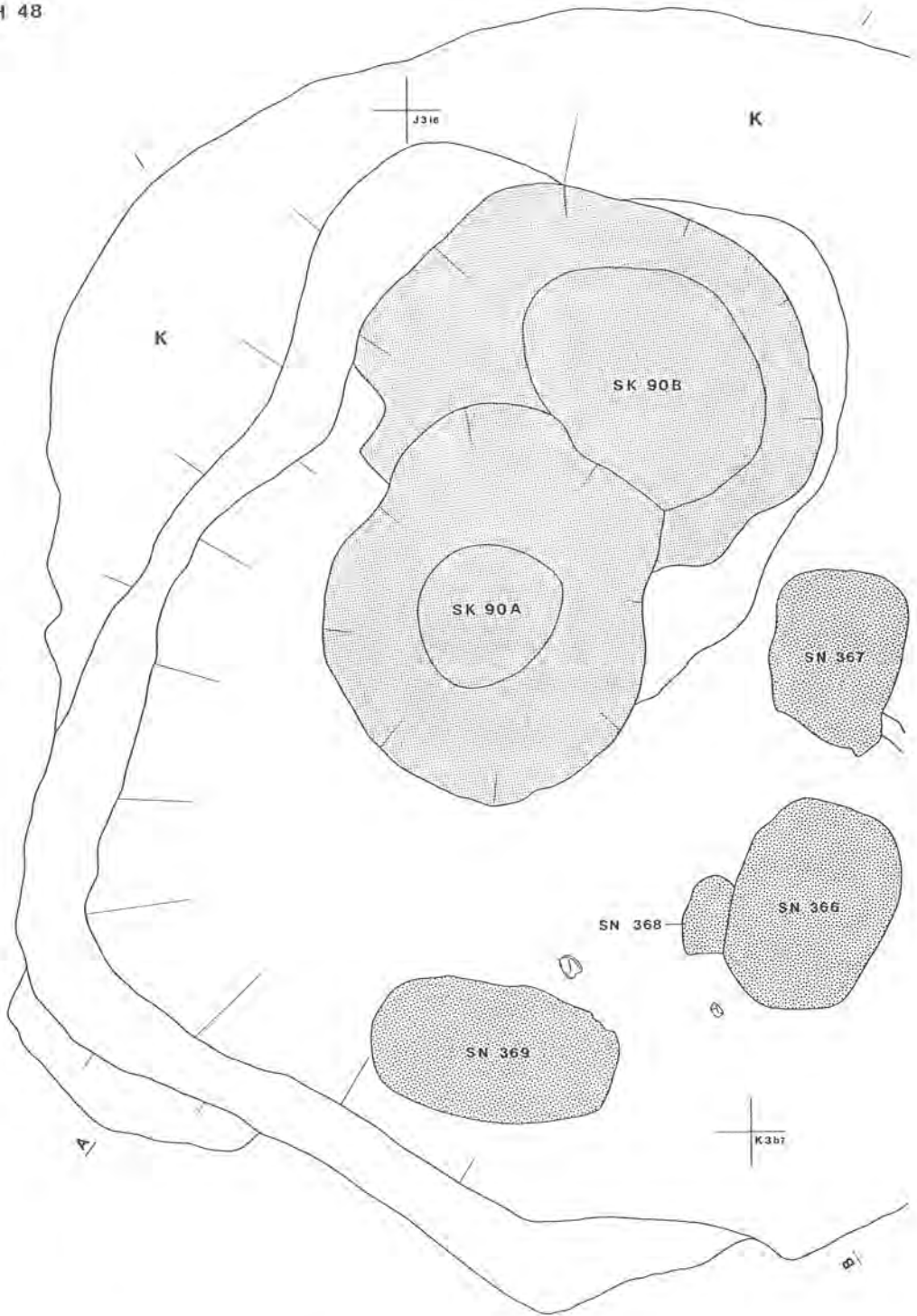
位置 調査区の中央部 K3b₆区を中心に確認され, 標高
8.80m に位置している。

関連遺構 第90号竈 (A・B), 第260~262・276・277・
280・281・366・367・369号鹹水槽及び第94~97号土樋
で構成されている。これらの遺構は, 竈と釜屋内鹹水
槽及び屋外鹹水槽の重複関係から, 4グループに区別
できる。第1グループは, 第90号竈A, 釜屋内鹹水槽
(281), 屋外鹹水槽 (260~262, 276) 及び土樋 (95,
96) で構成されている。第2グループは, 第90号竈B,
釜屋内鹹水槽 (281, 367), 居出場 (369), 屋外鹹水槽
(260~262, 277) 及び土樋 (96, 97) で構成されてい
る。第3グループは, 竈と居出場が第2グループと同
一で, 釜屋内鹹水槽 (366, 367), 屋外鹹水槽 (260~262,
280) 及び土樋 (94) で構成されている。



第183図 第48製塩跡遺構配置図

SH 48



第184図 第48製塩跡釜屋内遺構実測図

第48製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	K3b ₆	8.80	90A	281	—	260,261,262,276	95,96	最新
2	K3b ₆	8.80	90B	281,367	369	260,261,262,277	96,97	第1グループ より古い
3	K3b ₆	8.80	90B	366,367	369	260,261,262,280	94	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.50m、東西10.20mの隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N-50°-Wを指している。砂上に厚さ30～70cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽3基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 J3i₆区を中心に2基（第90号竈A・B）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.14・4.23m、短径2.42・3.90m、深さ1.50・1.28mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が20～40cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第90号竈Aの下から第90号竈Bを検出していることから、第90号竈Aの方が新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
90A	J3i ₆	N-50°-W	楕円形	3.14	2.42	1.50	自然	7.94		
90B	J3i ₆	N-30°-E	楕円形	4.23	3.90	1.28	自然	7.90		

釜屋内鹹水槽 K3a₇区・J3j₇区の2か所から3基（第281・366・367号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.47～1.91m、短軸[径]1.07～1.37m、深さ0.85～1.23mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。

居出場 K3a₆区から1基（第369号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.59m、短軸1.04m、深さ0.94mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～6cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 J3h₈区・J3i₈区・K3c₈区・K3d₈区・K3f₇区の5か所から6基（第260～262・276・277・280号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.07～4.45m、短軸0.79～2.22m、深さ0.50～1.45mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋

内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～15cmの粘土を貼って構築している。第276号鹹水槽の下から第277・280号鹹水槽が検出されていることから、第276号鹹水槽が最も新しく、次いで第277号鹹水槽、第280号鹹水槽の順に古くなる。

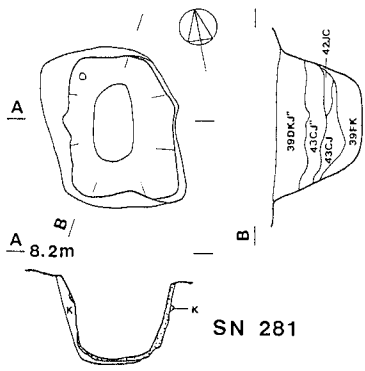
鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
260	K3f7	N-9°-E	隅丸長方形	4.45	1.16	1.19	4～13	緩斜	平坦	自然	8.80	IVA4c	屋外鹹水槽
261	K3d8	N-8°-E	隅丸長方形	4.30	2.22	1.08	1～9	緩斜	平坦	自然	8.41	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点
262	K3c8	N-10°-E	隅丸長方形	3.86	1.28	1.45	1～12	緩斜	平坦	自然	8.18	IVA4c	屋外鹹水槽
276	J3h8	N-0°	隅丸長方形	3.92	1.05	0.50	1～11	緩斜	平坦	自然	7.76	IVA4b	屋外鹹水槽、第277・280号鹹水槽と重複
277	J3h8	N-3°-W	隅丸長方形	3.07	0.79	0.52	2～15	緩斜	平坦	自然	7.70	IVA4b	屋外鹹水槽、第276・280号鹹水槽と重複
280	J3i8	N-30°-E	隅丸長方形	3.52	1.23	0.62	1～15	緩斜	平坦	自然	7.19	IVA4b	屋外鹹水槽、第267・277号鹹水槽と重複
281	K3a7	N-15°-E	隅丸長方形	1.47	1.07	0.93	1～7	緩斜	平坦	自然	8.04	IVA2b	釜屋内鹹水槽
366	K3a7	N-16°-E	楕円形	1.90	1.08	1.23	1～6	緩斜	平坦	自然	7.92	IA2c	釜屋内鹹水槽、③石2点
367	J3j7	N-16°-E	隅丸長方形	1.91	1.37	0.85	1～4	緩斜	平坦	自然	7.86	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点
369	K3a8	N-81°-W	隅丸長方形	2.59	1.04	0.94	2～6	緩斜	平坦	自然	7.88	IVA3b	届出場

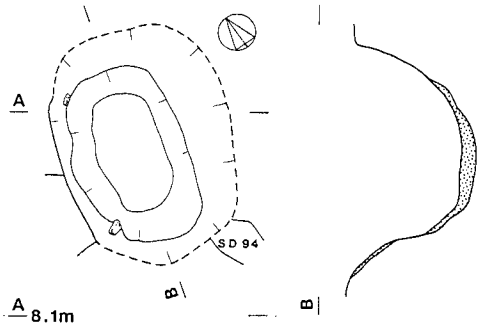
土樋 J3j7区からK3d7区を中心にして4条(第94～97号土樋)検出され、全長が最も短いものは1.64mで、最も長いものは13.02mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅21～29cm、下幅6～11cm、深さ4～13cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を2～9cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第262号鹹水槽と連なっている第95号土樋は、第96号土樋と合流し、釜屋内の第281号鹹水槽と連結していたと思われる。さらに、第94号土樋は、釜屋内の第366・367号鹹水槽と連結していたと思われる。

土樋一覧表

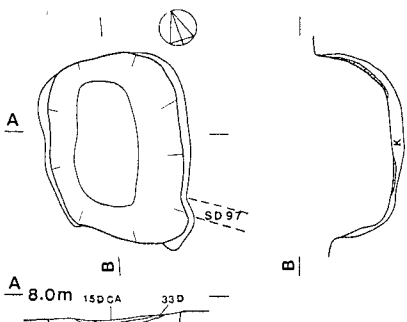
土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
94	K3a7 ～K3d7	N-10°-W	13.02	21	8	13	2～5	U	自然	有	8.26 ～8.70	第366・367号鹹水槽と連結
95	K3b7 ～K3b8	N-86°-E	1.64	21	8	13	2～6	U	自然	有	8.34 ～8.39	第96号土樋と接続、 第262号鹹水槽と連結
96	J3j7 ～K3b8	N-34°-W	8.81	29	11	12	4～5	U	自然	有	8.08 ～8.18	第95号土樋と接続、 第281号鹹水槽と連結
97	J3j7 ～K3a7	N-56°-W	1.78	21	6	4	2～9	U	自然	無	8.06	第367号鹹水槽と連結



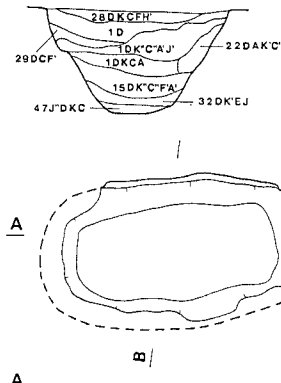
SN 281



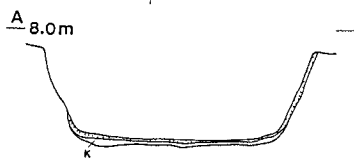
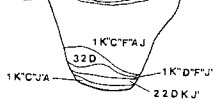
SN 366



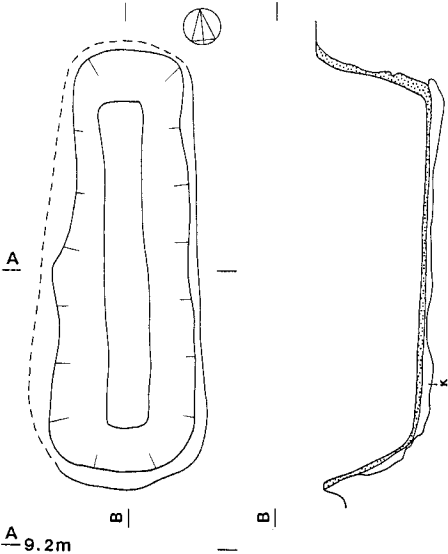
SN 367



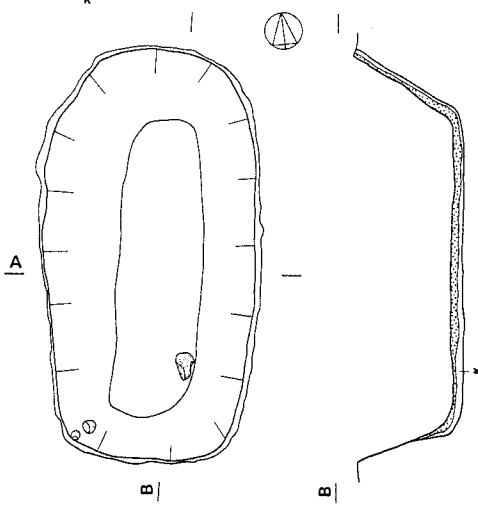
SN 369



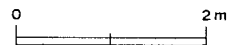
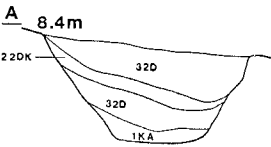
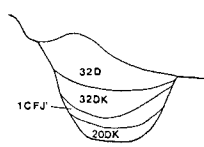
SN 369



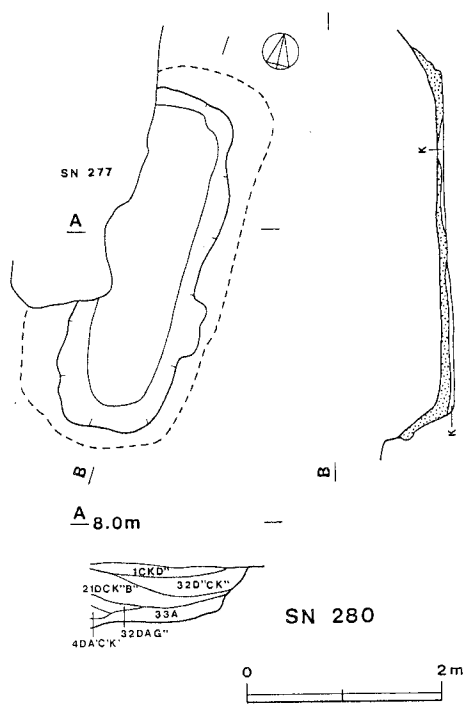
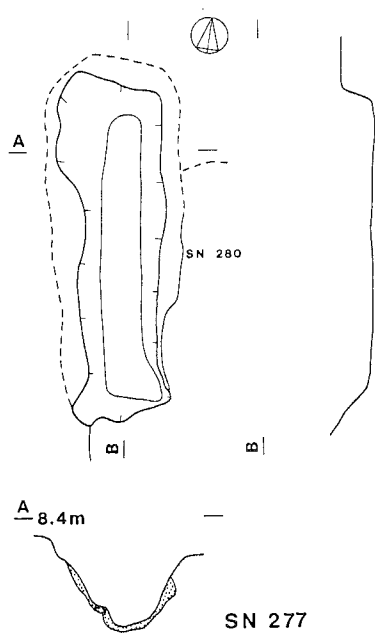
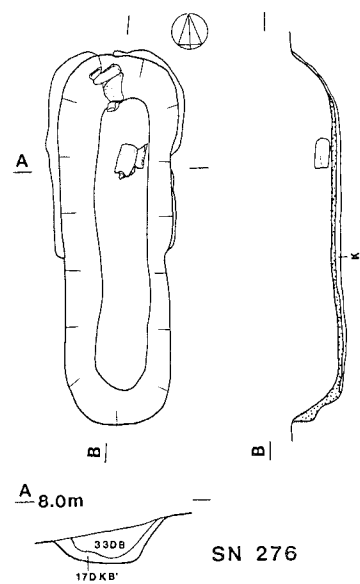
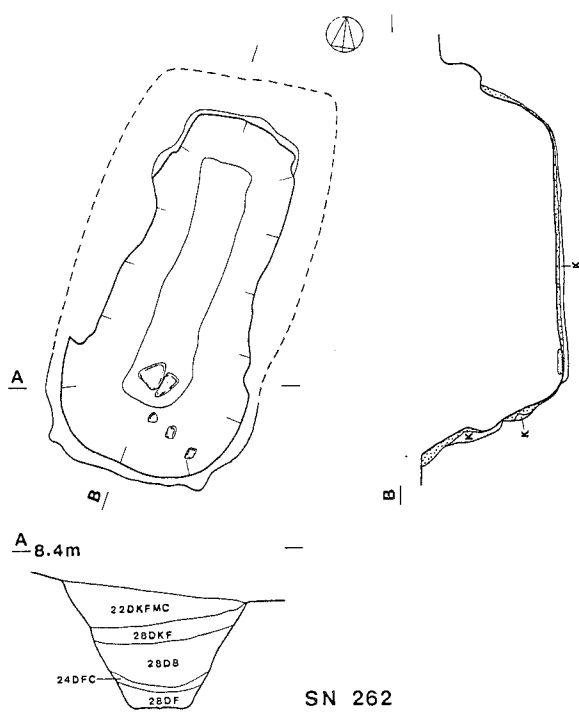
SN 260



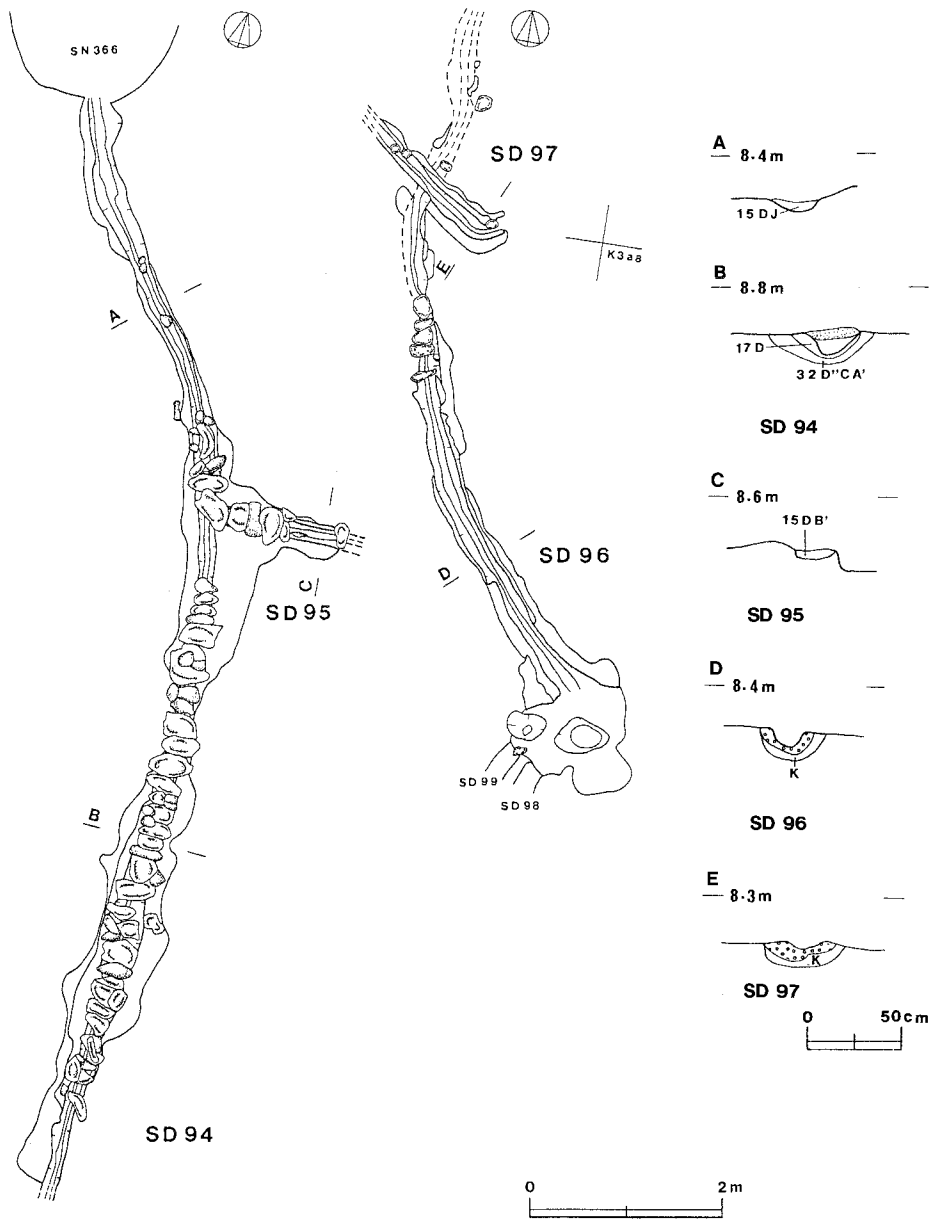
SN 261



第185図 第48製塩跡鹹水槽実測図(1)



第186図 第48製塩跡鹹水槽実測図(2)



第187図 第48製塩跡土極実測図

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、竈と釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第49製塩跡(第188図)

位置 調査区の中央部 J3e₉区を中心に確認され、標高7.26m に位置している。

関連遺構 第91号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

第49製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J3e ₉	7.26	91	—	—	—	—	—

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.00m、東西9.20m の不定形を呈している。砂上に厚さ10～30cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基が位置している。竈の西側に建屋を示す柱穴4本を検出することができた。平面形は、楕円形を呈している。規模は長径1.03～1.50m、短径0.95～1.08m、深さ0.34～0.74mである。4本の柱穴は南北1列に等間隔で並んでいる。東側にも同じように柱穴が並んでいたと思われるが、検出できなかった。

竈 J3e₉区を中心に1基(第91号竈)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.09m、短軸2.61m、深さ0.65mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。竈の周囲は、確認面から20cmの高さで土手状に築かれており、南側に焚口部が付設されていたものと思われる。

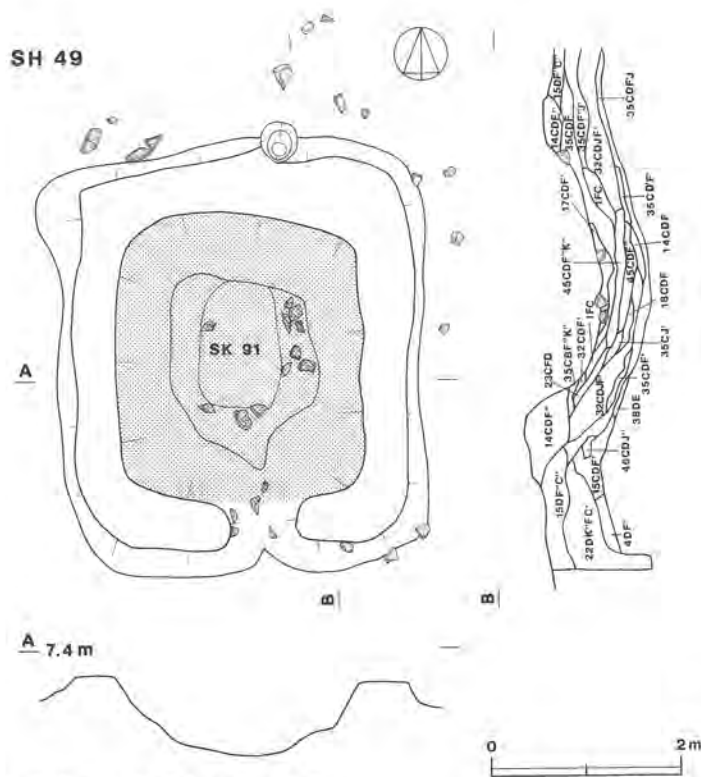
竈一覧表

竈番号	位 置	長軸方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
91	J3e ₉	N-4°-E	隅丸長方形	3.09	2.61	0.65	自然	7.26	底面・石1点、 [㊦] 石1点、陶器の碗1点、 [㊦] 石24点	

出土遺物 第91号竈の覆土上層から陶器の碗1点(第189図1)が出土している。周囲からの流れ込みと思われる。

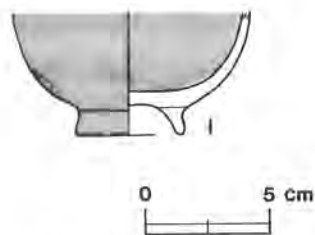
第91号竈出土土器観察表(第189図1)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	碗 陶 器	B (5.0) D 4.4 E 1.2	底部片で高台は直立し、体部は丸味をもって立ち上がる。	水挽き成形。 削り出し高台。 釉は粗い貫乳が見られる。 内・外面に灰釉が施されている。	(胎土) 灰白色 (釉) 浅黄色 (焼成) 良好	P13 30% 第91号竈覆土 瀬戸焼



第188図 第49製塩跡竈実測図

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。この製塩跡の時期は、第91号竈の覆土上層から14～15世紀頃の陶器の碗が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われるので、その時期を明確にすることができなかった。



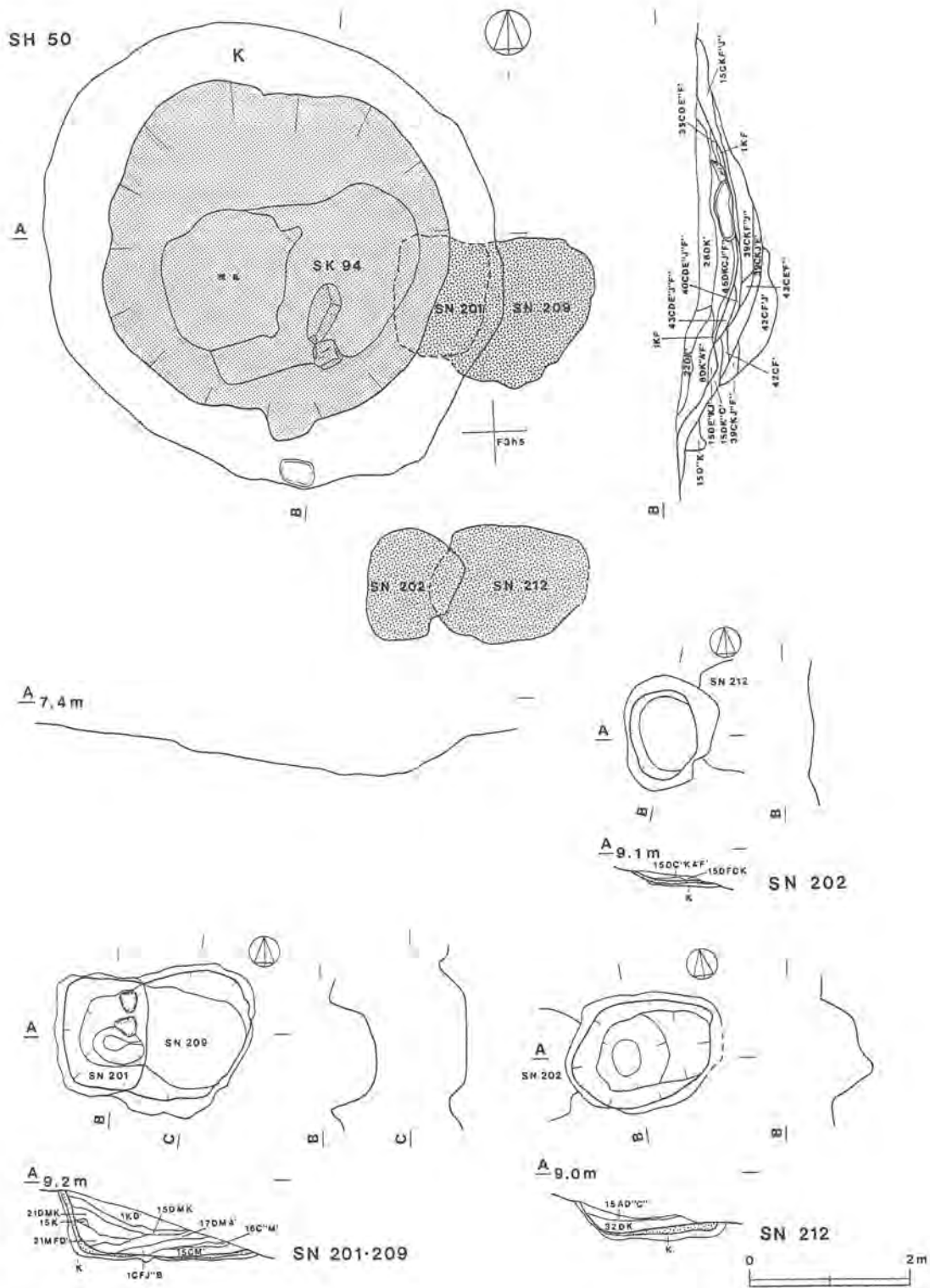
第189図 第49製塩跡
出土遺物実測図

第50製塩跡(第190図)

位置 調査区の中央部 F3g₄区を中心に確認され、標高8.21m に位置している。

関連遺構 第94号竈、第201・202・209・212号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第94号竈と釜屋内鹹水槽(201, 202)で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽(209, 212)で構成されている。

釜屋 確認できた黑色土の範囲は、南北6.10m、東西5.60mの楕円形を呈し、長径方向はN-22°-Wを指している。砂上に厚さ10～20cmの灰と貝殻片混じりの黑色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽4基が位置している。しかし、この黑色土の地盤を



第190図 第50製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

第50製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3g ₄	8.21	94	201,202	—	—	—	新
2	F3g ₄	8.21	94	209,212	—	—	—	古

調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 F3g₄区を中心に1基(第94号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.46m、短径4.38m、深さ0.64mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10~60cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
94	F3g ₄	N-22°-W	楕 円 形	4.46	4.38	0.64	自然	7.35	底面-石2点	

釜屋内鹹水槽 F3g₄・g₅区・F3h₄・h₅区の4か所から4基(第201・202・209・212号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.10~1.74m、短軸0.82~1.30m、深さ0.08~0.64mである。底面は平坦及び皿状で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~8cmの粘土を貼って構築している。第201・202号鹹水槽の下から、第209・212号鹹水槽が検出されていることから、第201・202号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
201	F3g ₄	N-12°-E	隅丸長方形	1.39	1.01	0.58	1~4	外傾	平坦	自然	8.21	IVA2b	釜屋内鹹水槽、底面-石2点、第209号鹹水槽と重複
202	F3h ₄	N-4°-E	隅丸長方形	1.10	0.82	0.08	1~4	緩斜	皿状	自然	8.05	IVB2a	釜屋内鹹水槽、第212号鹹水槽と重複
209	F3g ₅	N-81°-W	隅丸長方形	1.63	1.26	0.34	2~8	緩斜	平坦	自然	7.95	IVA2a	釜屋内鹹水槽、第201号鹹水槽と重複
212	F3h ₅	N-86°-W	隅丸長方形	1.74	1.30	0.64	1~4	緩斜	平坦	自然	8.00	IVA2b	釜屋内鹹水槽、第202号鹹水槽と重複

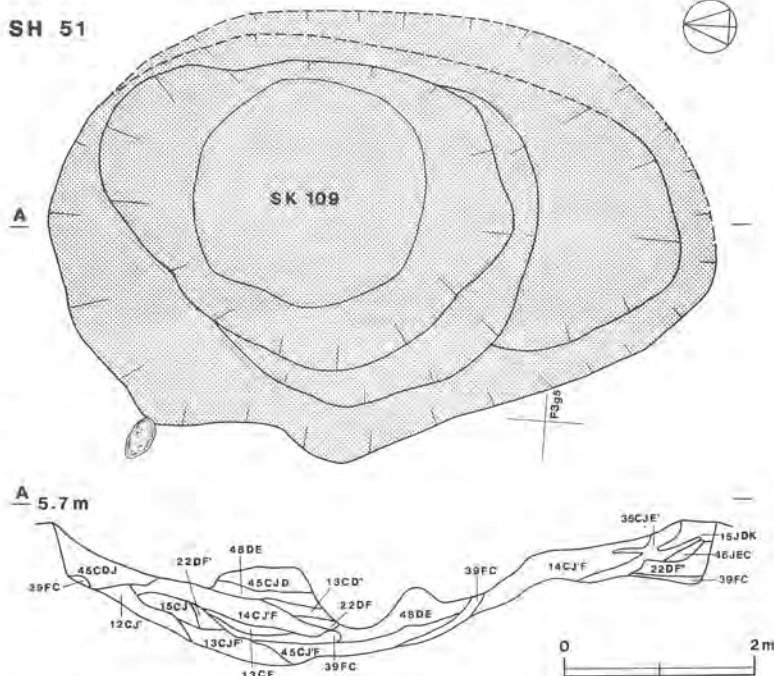
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第51製塩跡(第191図)

位置 調査区の中央部 F3fs区を中心に確認され、標高5.60mに位置している。

関連遺構 第109号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。



第191図 第51製塩跡竈実測図

第51製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3fs	5.60	109	-	-	-	-	-

竈 F3fs区を中心に1基(第109号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径7.00m、短径4.27m、深さ0.50mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は厚さ20~30cmの灰が堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
109	F3fs	N-3°-E	楕円形	7.00	4.27	0.50	自然	5.60		

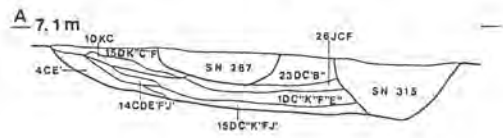
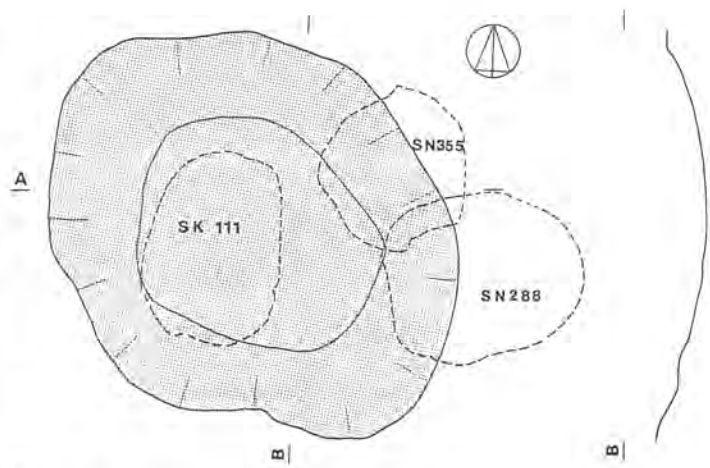
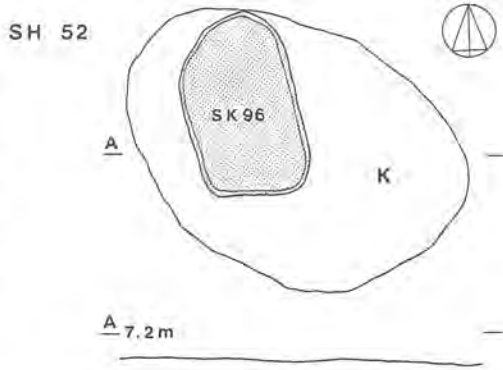
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第52製塩跡(第192図)
位置 調査区の中央部
F3b₃区を中心に確認さ
れ、標高7.60mに位置
している。

関連遺構 第96・111号
竈で構成されている。

これらの遺構は、竈の
重複関係から2グルー
プに区別できる。第1
グループは、第96号竈、
第2グループは、第111
号竈で構成されている。

釜屋 釜屋内の竈は検
出されているが、釜屋
の規模と形状等を確認
する手がかりとなる版
築された黒色土は、竈
の周囲にわずかに存在
しているだけで、詳細
は不明である。



第192図 第52製塩跡竈実測図



第52製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3b ₃	7.60	96	—	—	—	—	新
2	F3b ₃	7.60	111	—	—	—	—	古

竈 F3b₃区を中心に2基(第96・111号竈)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.93・4.95m、短軸[径]1.16・4.05m、深さ0.05・0.65mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10~20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤

変している。二つの竈の新旧関係は、第96号竈の下から第111号竈を検出していることから、第96号竈が新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)				
96	F3b ₃	N-13°-W	隅丸長方形	1.93	1.16	0.05	自然	6.96		
111	F3b ₃	N-39°-W	楕円形	4.95	4.05	0.65	自然	6.76		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第53製塩跡(第193図)

位置 調査区の中央部 G3d₆区を中心に確認され、標高4.98mに位置している。

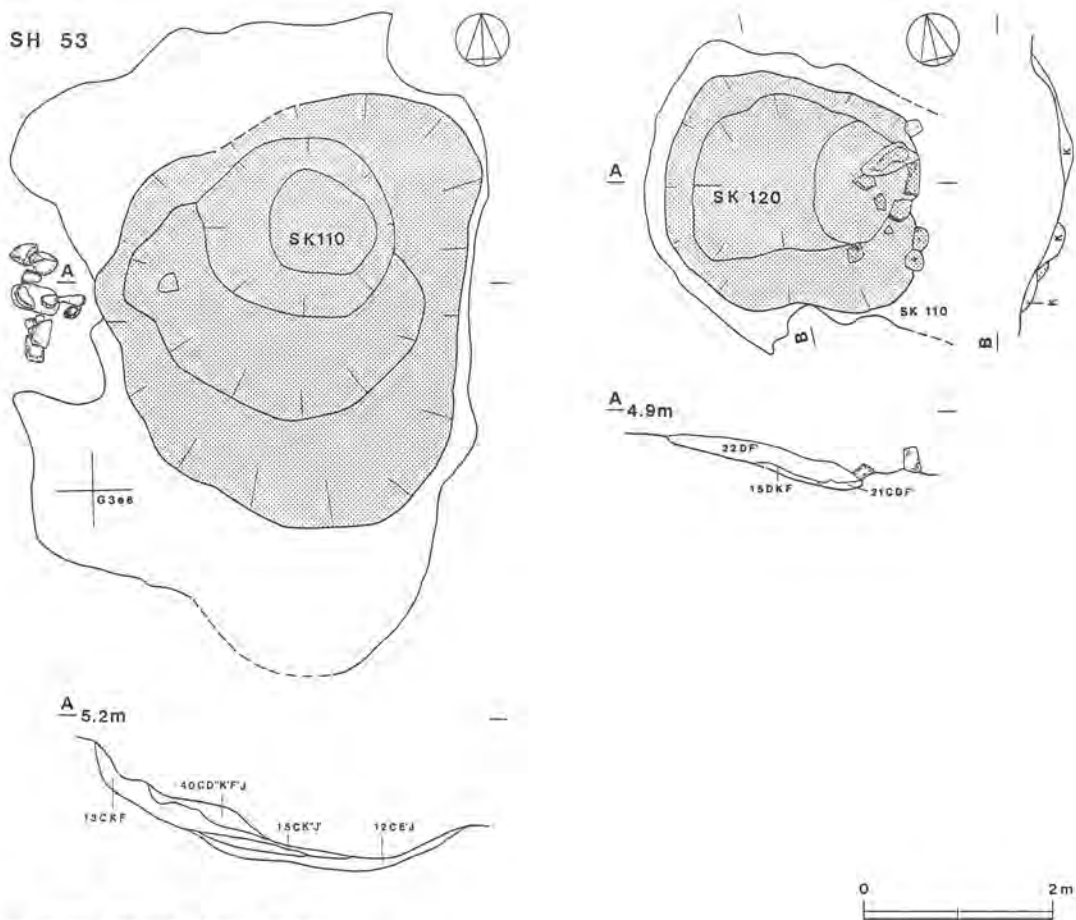
関連遺構 第110・120号竈で構成されている。これらの遺構は、竈の確認面での標高の違いから2グループに区別できる。第1グループは、第110号竈、第2グループは、第120号竈で構成されている。

第53製塩跡一覧表

グループ 番 号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	G3d ₆	4.98	110	—	—	—	—	新
2	G3d ₅	4.64	120	—	—	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北12.00m、東西5.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ30cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 G3d₆区を中心に2基(第110・120号竈)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸4.64・2.88m、短軸3.84・2.53m、深さ1.20・0.35mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が20~30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。第120号竈の東側から焼石9点が散乱して出土している。二つの竈の新旧関係は、竈の確認面での標高の違い



第193図 第53製塩跡竈実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
110	G3d ₆	N-7°-E	隅丸長方形	4.64	3.84	1.20	自然	4.98	㊦焼石1点	
120	G3d ₆	N-48°-W	隅丸長方形	2.88	2.53	0.35	自然	4.64	㊦焼石9点	

から、第110号竈が新しい。

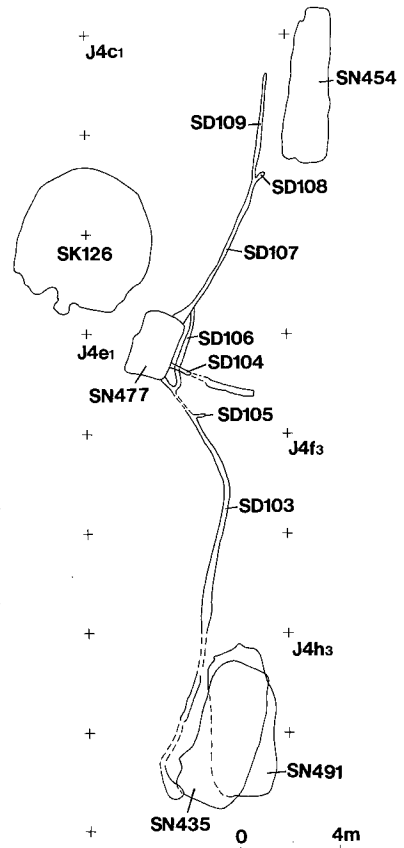
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第54製塩跡(第194図)

位置 調査区の中央部 J4e2区を中心に確認され、標高6.10mに位置している。

関連遺構 第126号竈，第435・454・477・491号鹹水槽及び第103～109号土樋で構成されている。これらの遺構は，屋外鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは，第126号竈，釜屋内鹹水槽(477)，屋外鹹水槽(435, 454)及び土樋(103～109)で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び土樋が第1グループと同一で，屋外鹹水槽(454, 491)で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北12.20m，東西9.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ90～100cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽1基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。



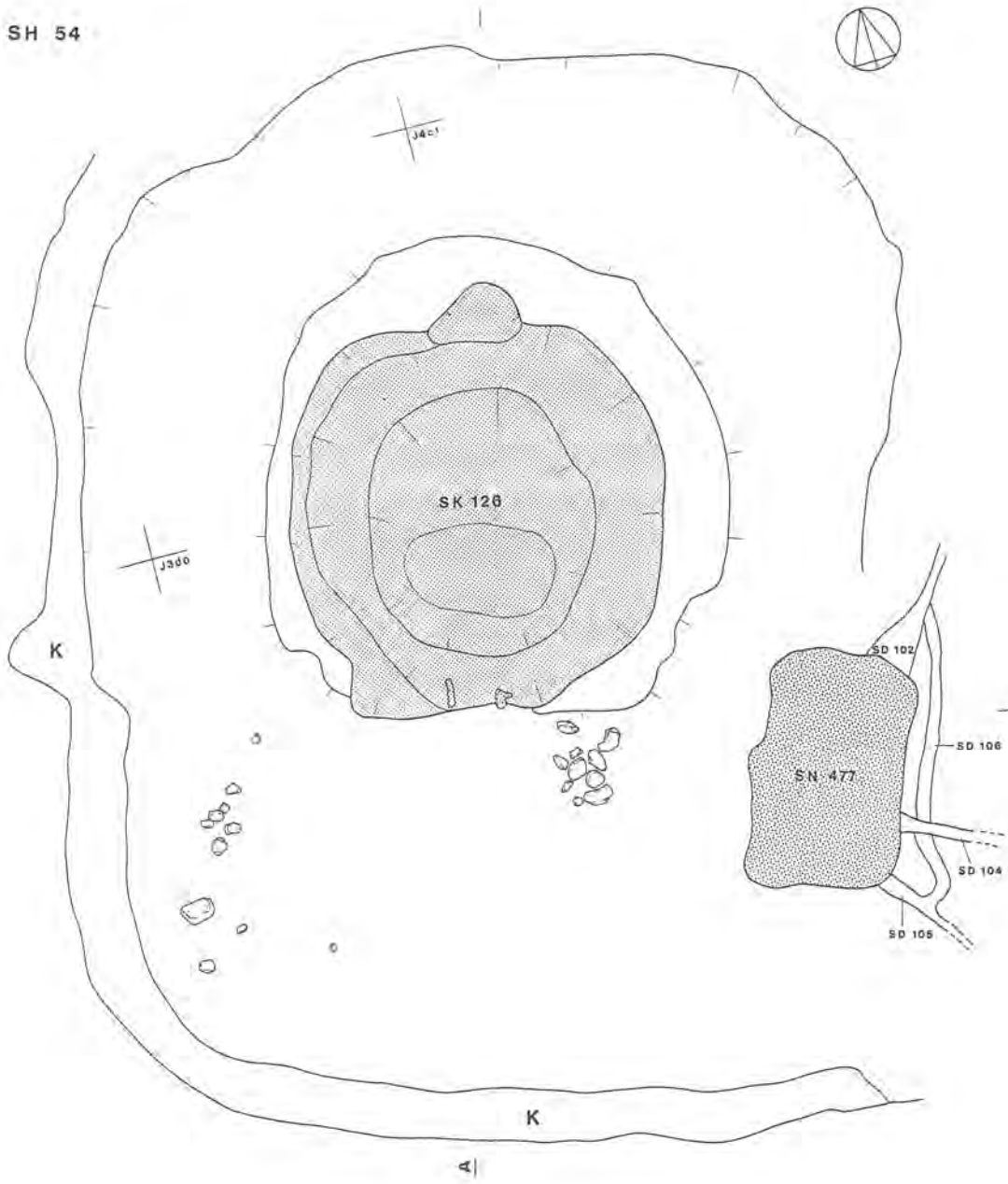
第194図 第54製塩跡遺構配置図

第54製塩跡一覧表

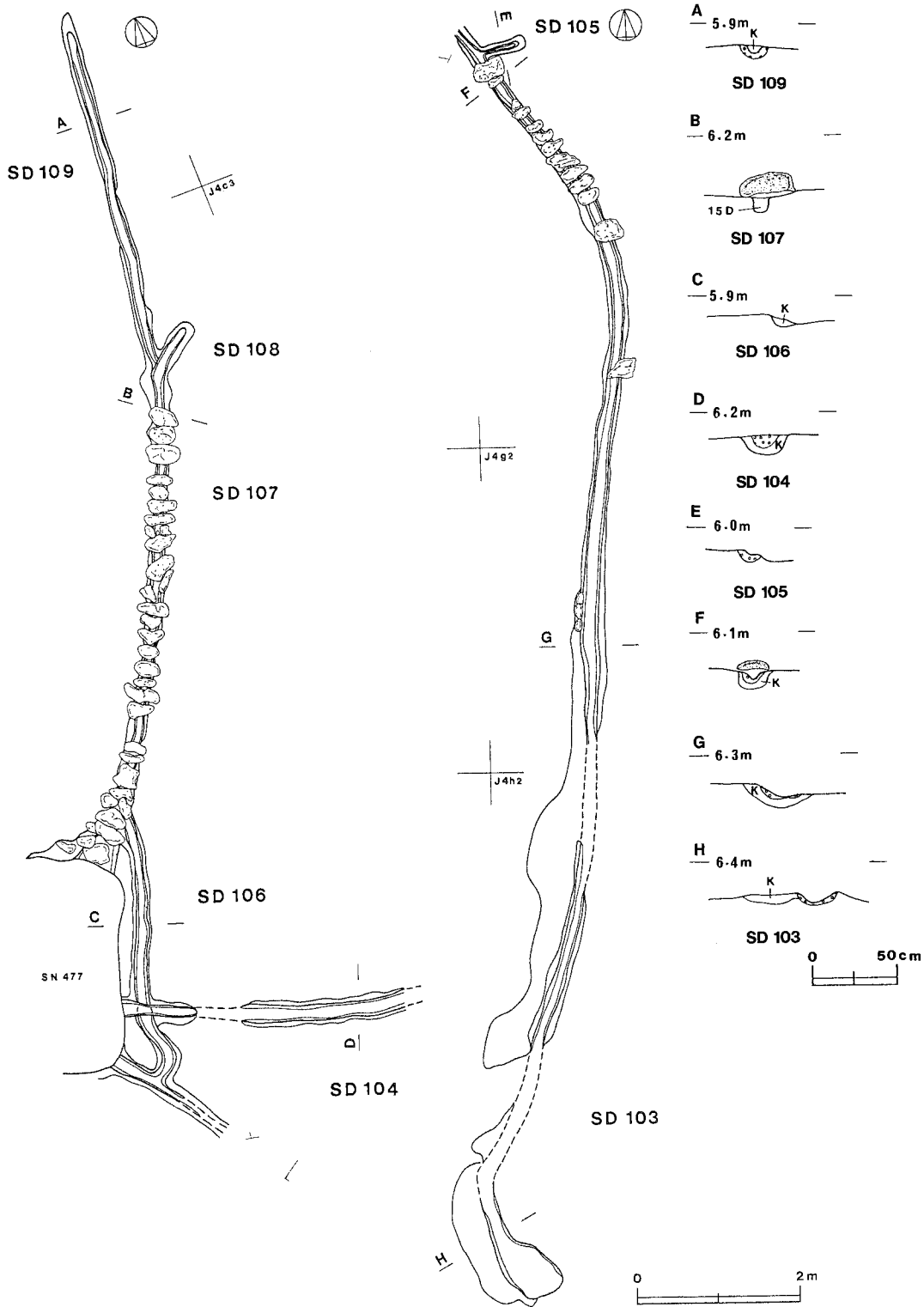
グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J4e2	6.10	126	477	—	435,454	103～109	新
2	J4e2	6.10	126	477	—	454,491	103～109	古

竈 J4e2区を中心に1基(第126号竈)検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径4.58m，短径4.50m，深さ1.03mである。底面から鍋状に立ち上がり，覆土は，上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，中層から下層にかけては，灰が80cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。竈の周囲は底面から20～30cmの高さで土手が築かれており，南側に焚口が付設されている。さらに，南側付近には多量の石材と思われる焼石が散乱している。

SH 54



第195図 第54製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第196図 第54製塩跡土樋実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
126	J4e ₂	N-63°-E	楕円形	4.58	4.50	1.03	自然	5.88	㊦砥石1点, 石臼1点	

釜屋内鹹水槽 J4e₁区から1基(第477号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.70m、短軸1.58m、深さ1.19mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ4～10cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 J4b₃区とJ4h₂区から3基(第435・454・491号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸5.69～6.20m、短軸1.48～2.43m、深さ0.94～1.45mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～13cmの粘土を貼って構築している。第435号鹹水槽の下から第491号鹹水槽が検出されていることから、第435号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
435	J4h ₂	N-15°-E	隅丸長方形	5.69	2.16	1.45	3～13	外傾	平坦	自然	6.10	IVA4c	屋外鹹水槽, 足掛け石1点, 底面-石2点, 木片1点, ㊦石3点, 第491号鹹水槽と重複
454	J4b ₃	N-10°-E	隅丸長方形	6.20	1.48	0.94	1～11	外傾	平坦	自然	5.46	IVA4b	屋外鹹水槽
477	J4e ₁	N-22°-E	隅丸長方形	2.70	1.58	1.19	4～10	外傾	平坦	自然	5.82	IVA3c	釜屋内鹹水槽, 底面-石1点
491	J4h ₂	N-15°-E	隅丸長方形	5.83	2.43	1.30	3～13	外傾	平坦	自然	5.70	IVA4c	屋外鹹水槽, 第435号鹹水槽と重複

土樋 J4b₂区からJ4h₂区を中心にして7条(第103～109号土樋)検出され、全長が最も短いものは0.60mで、最も長いものは17.65mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅8～24cm、下幅2～13cm、深さ5～10cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1～10cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第435・491号鹹水槽と連なっている第103・104号土樋は、釜屋内の第477号鹹水槽と連結していたと思われる。さらに、第454号鹹水槽と連なっている第108号土樋は、第107・109号土樋と一連のものと思われ、J4c₂区で第109号土樋と接続し、同じくJ4c₂区で第107号土樋と接続して、釜屋内の第477号鹹水槽と連結していたと思われる。

出土遺物 第126号竈の覆土中から砥石1点(第197図1)、石臼2点(第197図2・3)が出土している。いずれも周囲からの流れ込みと思われる。2・3の石臼は、粉挽き臼の上臼の破片で、完存率は30%である。推定直径約36.8・28.0cm、現存する高さ12.8・11.3cm、重量4,300・5,800gを測る。2の芯穴の推定直径は3.2cmである。3の供給口の径は5.6cmの円形状を呈し、縦方向

土樋一覧表

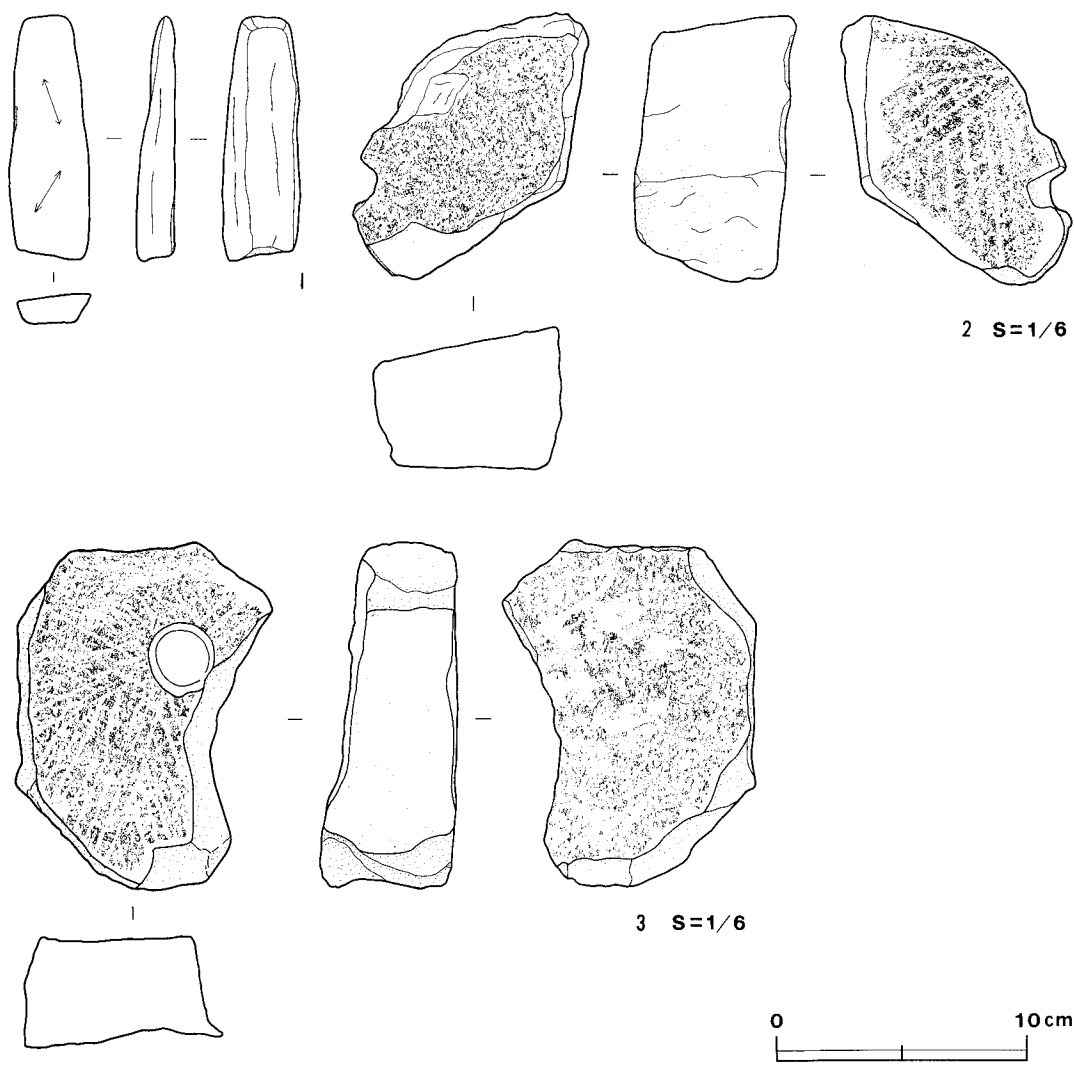
土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
103	J4e ₁ ~J4h ₂	N-35°-E N-8°-E N-18°-E	17.65	17	8	9	4~7	U	自然	有	5.86 ~6.00	第105・106号土樋と 接続, 第477号鹹水槽 と連結, 第435・491 号鹹水槽と連結
104	J4e ₁ ~J4e ₂	N-69°-W	3.45	24	13	8	3~8	U	自然	無	6.06	第477号鹹水槽と連 結
105	J4e ₂	N-13°-E	0.60	8	4	7	4~5	U	自然	無	5.86	第103号土樋と接続
106	J4d ₂ ~J4e ₁	N-21°-E N-13°-W	3.40	16	10	6	2~9	U	自然	無	5.76	第103・107号土樋と 接続
107	J4c ₂ ~J4d ₂	N-23°-E	6.25	22	10	10	1~10	U	自然	有	5.78	第106・108・109号土 樋と接続, 第477号鹹 水槽と連結
108	J4c ₂	N-52°-E	6.00	14	2	5	3~9	U	自然	無	5.82	第109号土樋と接続, 第454号鹹水槽と連 結
109	J4b ₂ ~J4c ₂	N-7°-E	5.26	13	10	5	2~5	U	自然	無	5.77	第107・108号土樋と 接続

に8.5cmの深さに穿たれている。石質はいずれも安山岩である。磨り合わせ面には1分画に4~8の溝が刻まれている。

第126号竈出土石製品一覧表(第197図1)

図版 番号	名 称	法 量				石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)			
1	砥 石	9.9	3.2	1.6	57.3	砂 岩	第126号竈	Q12

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第126号鹹水槽から砥石、石臼が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることができなかった。



第197図 第54製塩跡出土遺物実測・拓影図

第55製塩跡(第198図)

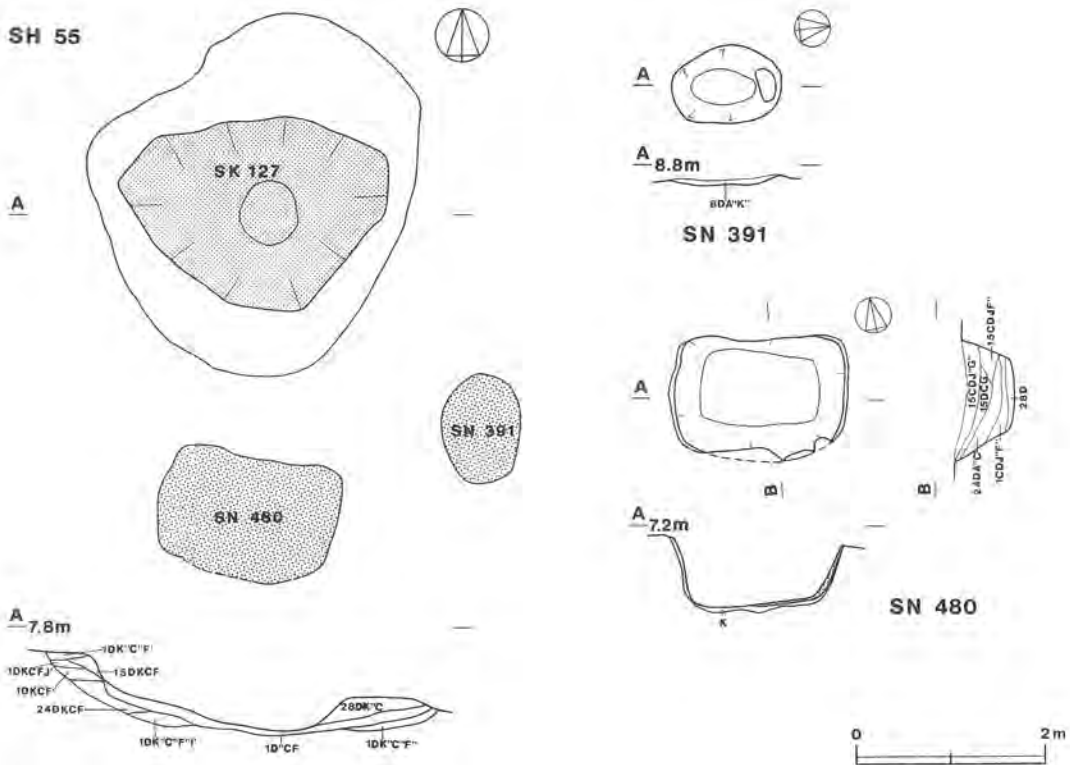
位置 調査区の中央部 J3d₁区を中心に確認され、標高7.40m に位置している。

関連遺構 第127号竈と釜屋内の第391・480号鹹水槽で構成されている。

第55製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J3d ₁	7.40	127	391,480	—	—	—	

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.60m、東西10.70m の不定形を呈している。砂上に厚



第198図 第55製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

き30cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 J3d₁区を中心に1基(第127号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.84m、短径3.39m、深さ0.60mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が5~10cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
127	J3d ₁	N-18°-E	楕円形	3.84	3.39	0.60	自然	7.32	底面-石2点	

釜屋内鹹水槽 J3e₁区・J3f₁区から2基(第391・480号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.15)・1.79m、短軸(0.82)・1.13m、深さ0.68mである。底面は

平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～6cmの粘土を貼って構築している。第391号鹹水槽はほとんど削平されているため底面しか検出できなかった。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
391	J3e:	(N-2°-E)	隅丸長方形	(1.15)	(0.82)	—	—	—	平坦	自然	8.70	IVA2a	釜屋内鹹水槽、底面だけ検出
480	J3f:	N-78°-W	隅丸長方形	1.79	1.13	0.68	2～6	緩斜	平坦	自然	7.10	IVA2b	釜屋内鹹水槽、底面-石1点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第56製塩跡(第199図)

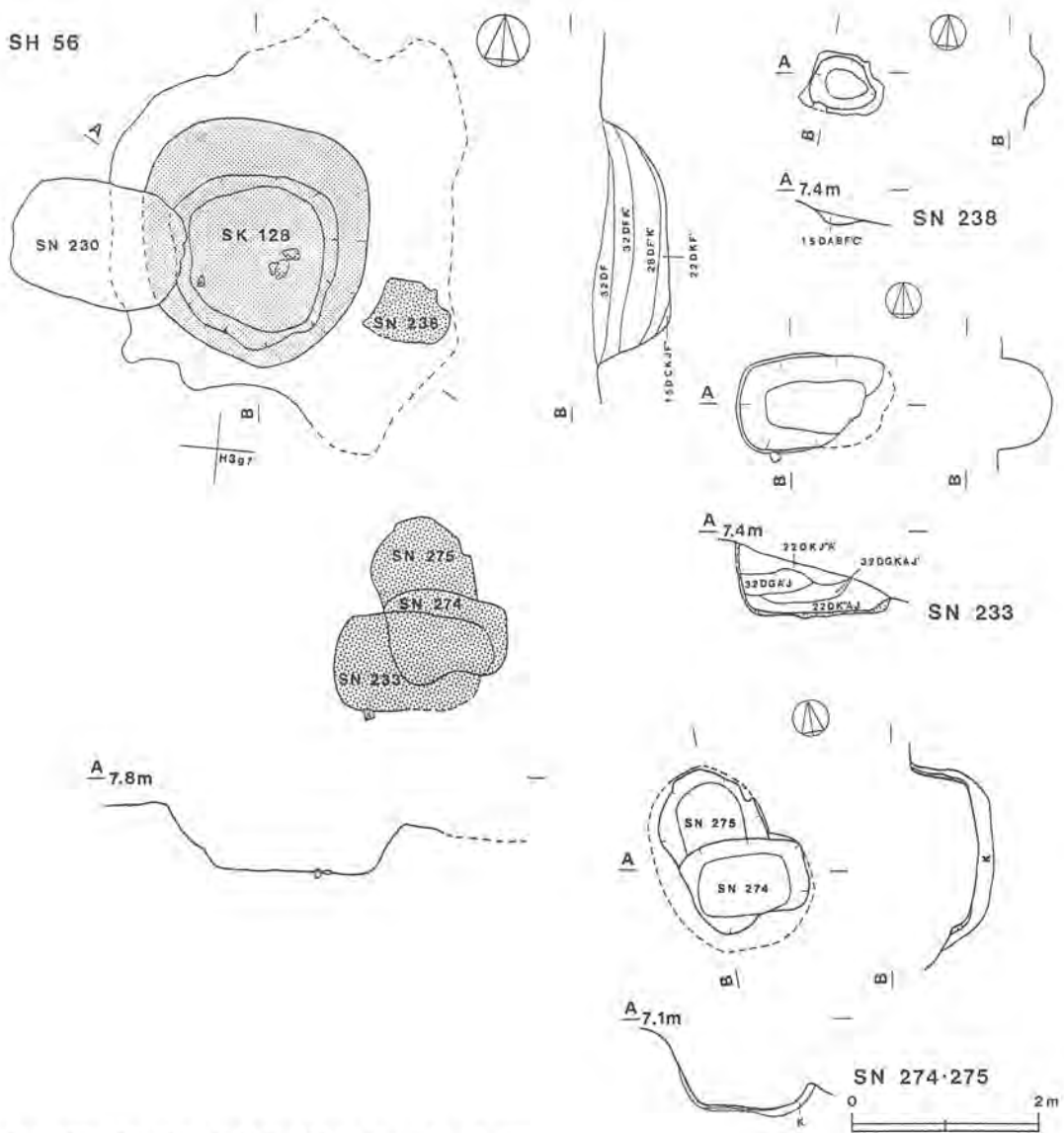
位置 調査区の中央部 H3f₇区を中心に確認され、標高7.52mに位置している。

関連遺構 第128号竈、第233・238・274・275号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、居出場の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第128号竈、釜屋内鹹水槽(238)及び居出場(233)で構成されている。第2グループは、竈と釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、居出場(274・275)で構成されている。

第56製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3f ₇	7.52	128	238	233	—	—	新
2	H3f ₇	7.52	128	238	274,275	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北9.20m、東西3.90mの不定形を呈している。砂上に厚さ30～60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽1基、南側に居出場2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。



第199図 第56製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

竈 H3f7区を中心に1基(第128号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.72m、短径2.43m、深さ1.28mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が30~60cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
128	H3f ₇	N-19°-W	楕円形	2.72	2.43	1.28	自然	7.52	底面-石4点, ⑨石1点	

釜屋内鹹水槽 H3f₇区から1基(第238号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径(0.69)m、短径(0.54)m、深さ(0.17)mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～6cmの粘土を貼って構築している。

居出場 H3g₇区から3基(第233・274・275号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.34～1.73m、短軸[径]0.75～0.98m、深さ0.58～0.88mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。第233号鹹水槽の下から第274号鹹水槽が検出されていることから、第233号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

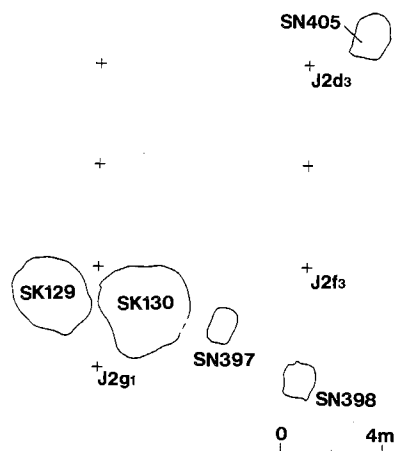
鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
233	H3g ₇	N-0°	隅丸長方形	1.60	0.98	0.58	2～5	外傾	平坦	自然	7.41	IVA2b	居出場, 第274号鹹水槽と重複
238	H3f ₇	N-68°-W	楕円形	(0.69)	(0.54)	(0.17)	1～6	緩斜	平坦	自然	7.30	IA1a	釜屋内鹹水槽
274	H3g ₇	N-86°-W	隅丸長方形	1.34	0.75	0.88	1～6	緩斜	平坦	自然	7.30	IVA2b	居出場, 第233号鹹水槽と重複
275	H3g ₇	N-6°-W	楕円形	1.73	0.78	0.78	1～7	外傾	平坦	自然	6.50	IB2b	居出場

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、居出場の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第57製塩跡(第200図)

位置 調査区の中央部 J2f₁区を中心に確認され、標高8.50m に位置している。

関連遺構 第129・130号竈、第397・398・405号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈の確認面での標高の違いから2グループに区別できる。第1グループは、第129号竈で構成されている。第2グループは、第130号竈、釜屋内鹹水槽(397, 398)及び屋外鹹水槽(405)で構成されている。



第200図 第57製塩跡遺構配置図

第57製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J1f ₀	8.50	129	—	—	—	—	新
2	J2f ₁	8.50	130	397, 398	—	405	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北8.00m、東西9.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ10cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 J1f₀区と J2f₁区から2基(第129・130号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.20・3.61m、短径2.70・3.48m、深さ0.37・0.50mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
129	J1f ₀	N-44°-W	楕円形	3.20	2.70	0.37	自然	8.48	底面-石1点	
130	J2f ₁	N-16°-W	楕円形	3.61	3.48	0.50	自然	8.36	④耳金1点	

釜屋内鹹水槽 J2f₂区とJ2g₂区から2基(第397・398号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形と隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.32・1.40m、短軸0.94・1.27m、深さ0.80・1.13mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～11cmの粘土を貼って構築している。

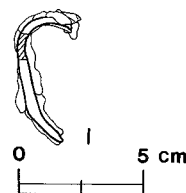
屋外鹹水槽 J2c₃区から1基(第405号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径1.80m、短径1.19m、深さ0.72mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～5cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
397	J2f ₂	N-17°-E	隅丸長方形	1.40	0.94	0.80	1～6	外傾	平坦	自然	8.10	IVA2b	釜屋内鹹水槽
398	J2g ₂	N-17°-E	隅丸方形	1.32	1.27	1.13	2～11	外傾	平坦	自然	8.52	IVA2c	釜屋内鹹水槽、底面-石1点
405	J2c ₃	N-10°-E	楕 円 形	1.80	1.19	0.72	1～5	外傾	平坦	自然	7.40	1A2b	屋外鹹水槽

出土遺物 第130号竈の覆土中から耳金1点(第201図1)が出土している。

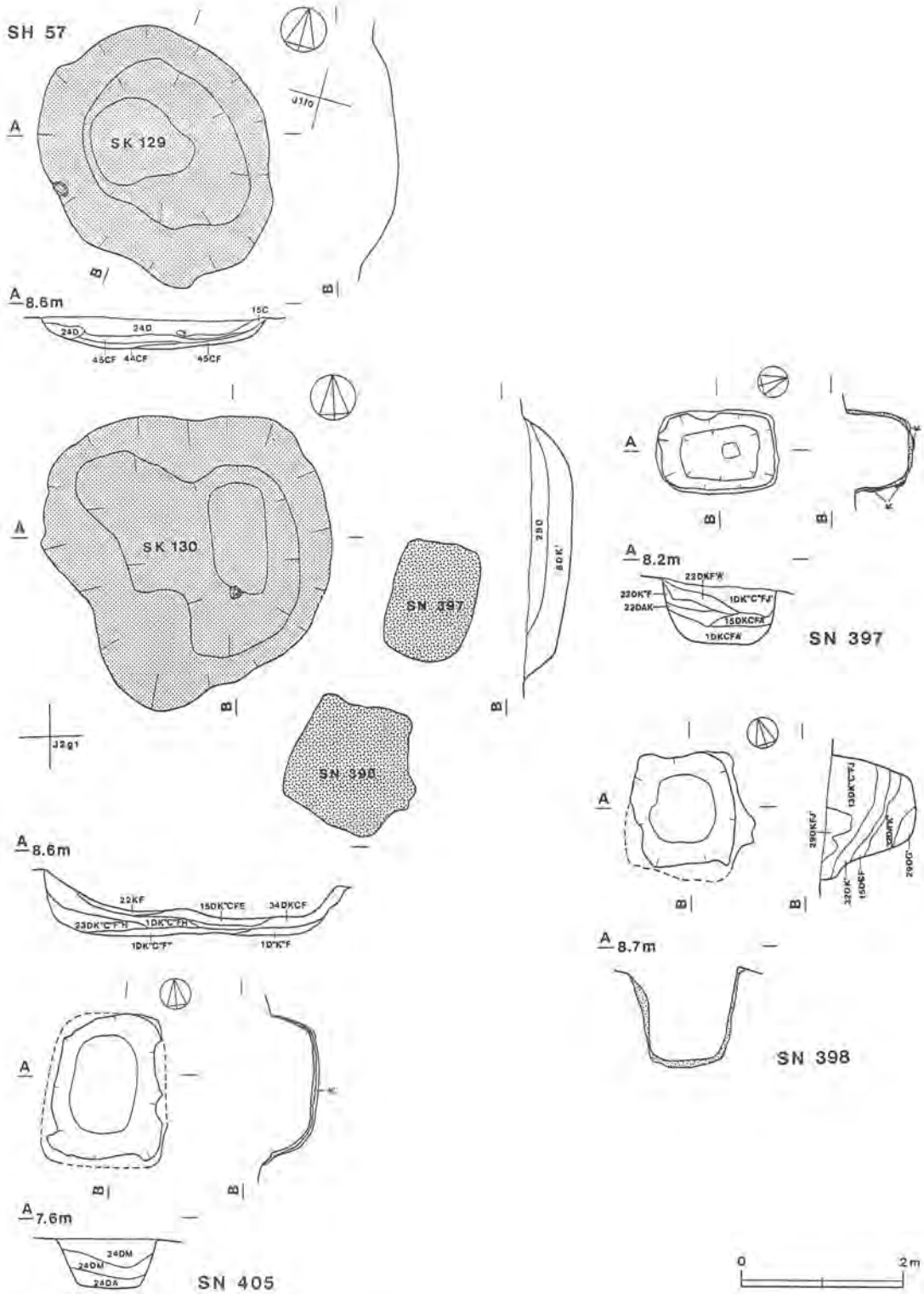
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の確認面での標高の違いから、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第130号竈から耳金が出土しているが、その時期を明確にすることはできなかった。



第201図 第57製塩跡出土遺物実測図

第130号竈出土鉄製品一覧表(第201図1)

図版番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	5.3	1.0	0.3	18.5	第130号竈	M10 上部欠損、下端部折れ曲がる。



第202図 第57製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

第58製塩跡(第203図)

位置 調査区の中央部I3a₆区を中心に確認され、標高7.20mに位置している。

関連遺構 第134号竈と釜屋内の第400・401号鹹水槽で構成されている。

第58製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	I3a ₆	7.20	134	400,401	—	—	—	

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北9.00m、東西7.20mの不定形を呈している。砂上に厚さ30～60cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽4基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 I3a₆区を中心に1基(第134号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.58m、短径3.68m、深さ1.38mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

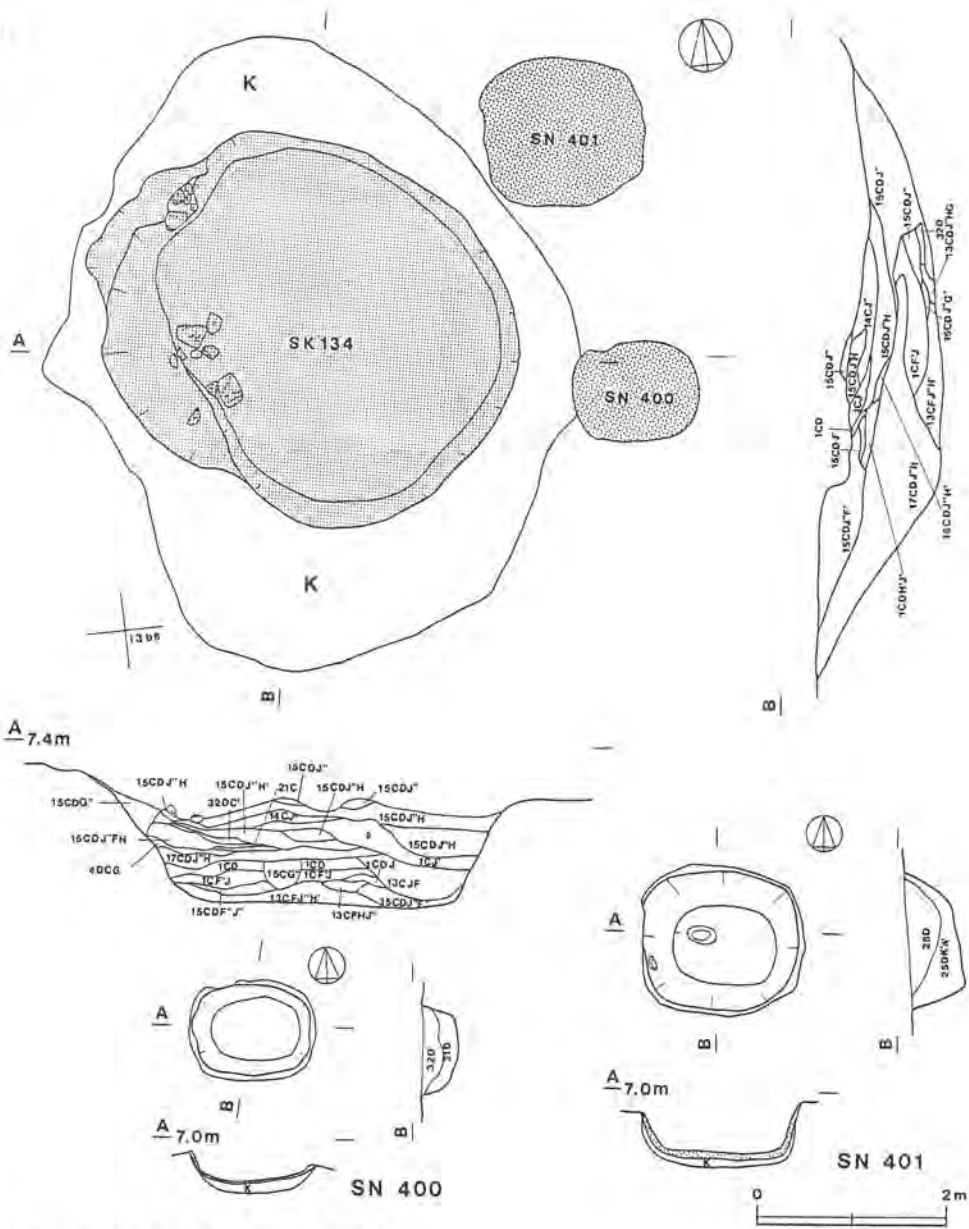
竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
134	I3a ₆	N-52°-W	楕円形	4.58	3.68	1.38	自然	7.13	底面-石8点, ⊗石7点	

釜屋内鹹水槽 H3j₇区とI3a₇区から2基(第400・401号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.25・1.65m、短軸0.96・1.47m、深さ0.31・0.56mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～9cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
400	I3a ₇	N-0°	隅丸長方形	1.25	0.96	0.31	1～4	緩斜	平坦	自然	6.92	IVA2a	釜屋内鹹水槽
401	H3j ₇	N-87°-W	隅丸長方形	1.65	1.47	0.56	4～9	緩斜	平坦	自然	6.93	IVA2b	釜屋内鹹水槽, 足掛け石1点



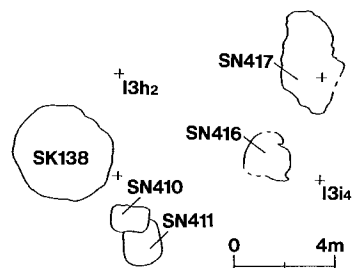
第203図 第58製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第59製塩跡(第204図)

位置 調査区の中央部I3h₂区を中心に確認され、標高6.43mに位置している。

関連遺構 第138号竈，第410・411・416・417号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，釜屋内鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは，第138号竈，釜屋内鹹水槽(410)及び屋外鹹水槽(416, 417)で構成されている。第2グループは，竈と屋外鹹水槽が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽(411)で構成されている。



第204図 第59製塩跡遺構配置図

第59製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	I3h ₂	6.43	138	410	—	416, 417	—	新
2	I3h ₂	6.43	138	411	—	416, 417	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北8.85m，東西9.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽2基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

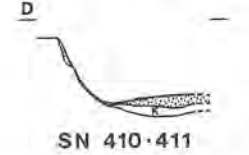
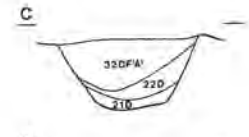
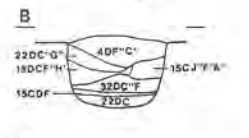
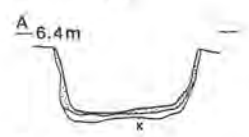
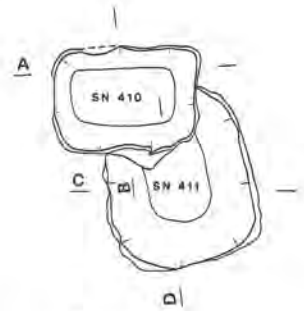
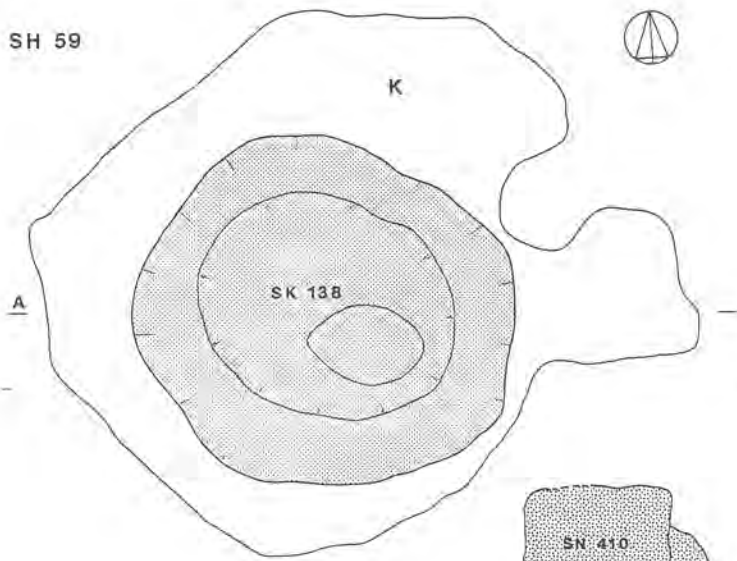
竈 I3h₁区を中心に1基(第138号竈)検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径4.05m，短径3.68m，深さ0.92mである。底面から鍋状に立ち上がり，覆土は，上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，下層は灰が20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

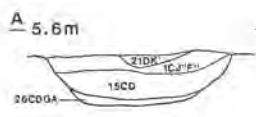
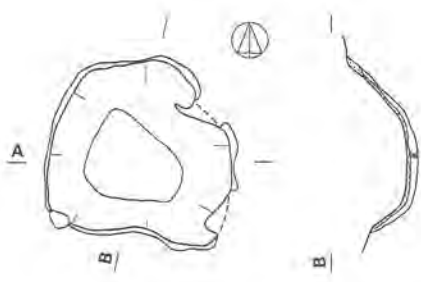
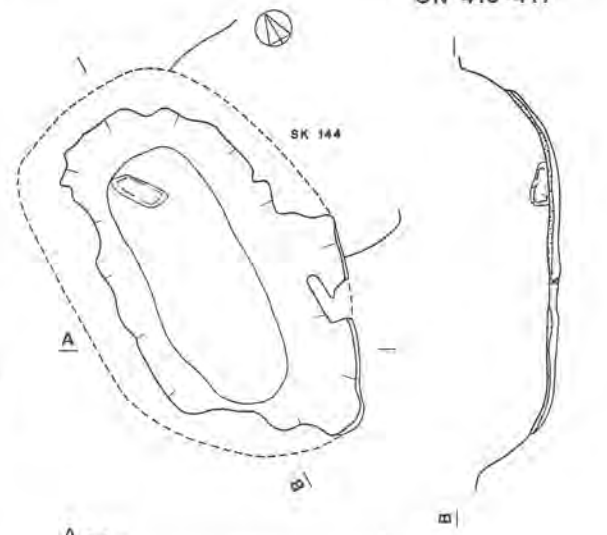
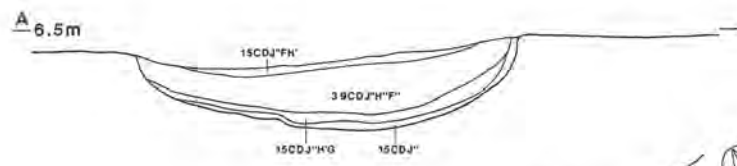
竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高(m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
138	I3h ₁	N-89°-E	楕円形	4.05	3.68	0.92	自然	6.43		

釜屋内鹹水槽 I3i₂区から2基(第410・411号鹹水槽)検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸1.48・(1.46)m，短軸1.03・1.45m，深さ0.71・0.72mである。底面は平坦で，壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後，黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～14cmの粘土を貼って構築している。第410号鹹水槽の下から第411号鹹水槽が検出

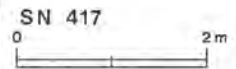
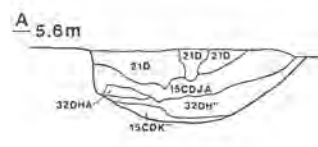
SH 59



SN 410・411



SN 416



SN 417

第205図 第59製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

されていることから、第410号鹹水槽が新しい。

屋外鹹水槽 I3h₃区とI3g₃区から2基（第416・417号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径（2.07）・（4.10）m、短径1.36・1.93m、深さ0.60・0.77mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～5cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
410	I3i ₂	N-0°	隅丸長方形	1.48	1.03	0.71	1～8	外傾	平坦	自然	6.31	IVA2b	釜屋内鹹水槽、第411号鹹水槽と重複
411	I3i ₂	N-7°-W	隅丸長方形	(1.46)	1.45	0.72	1～14	緩斜	平坦	自然	6.24	IVA2b	釜屋内鹹水槽、第410号鹹水槽と重複
416	I3h ₃	N-52°-W	楕 円 形	(2.07)	1.36	0.66	1～5	緩斜	平坦	自然	5.46	IA2b	屋外鹹水槽
417	I3g ₃	N-0°	楕 円 形	(4.10)	1.93	0.77	1～5	緩斜	平坦	自然	5.54	IA2b	屋外鹹水槽、底面・石2点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、釜屋内鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第60製塩跡(第206図)

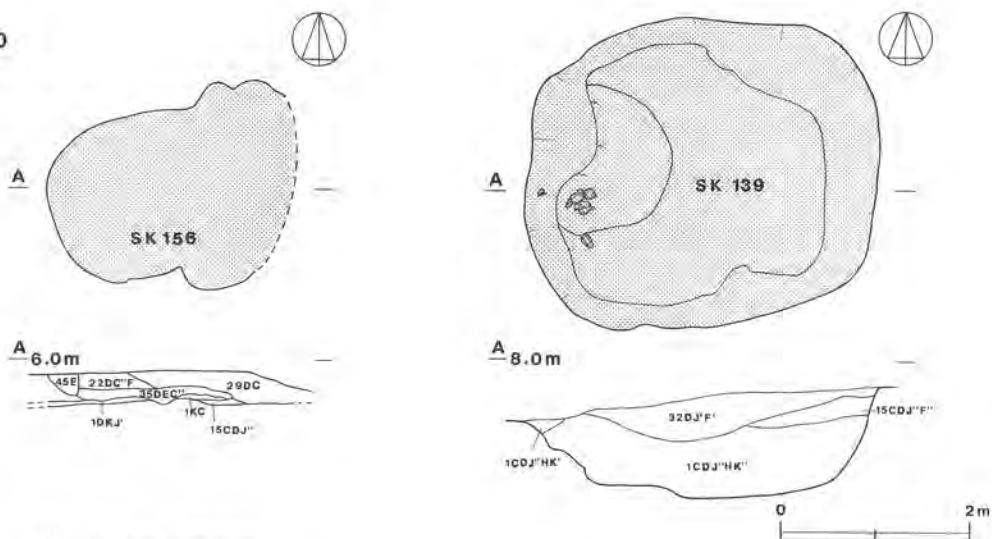
位置 調査区の中央部H3f₁区を中心に確認され、標高7.82mに位置している。

関連遺構 第139・156号竈で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第156号竈、第2グループは、第139号竈で構成されている。

第60製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H2f ₀	7.82	156	-	-	-	-	新
2	H3f ₁	7.82	139	-	-	-	-	古

SH 60



第206図 第60製塩跡竈実測図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.20m、東西10.80mの楕円形を呈している。長径方向はN-81°-Eを指している。砂上に厚さ20~50cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 H2f₀区とH3f₁区から2基（第139・156号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.80・2.78m、短径3.11・1.71m、深さ0.85mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が40～70cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第156号竈の下から第139号竈を検出していることから、第156号竈が新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
139	H3f ₁	N-81°-E	楕円形	3.80	3.11	0.85	自然	5.60		
156	H2f ₀	N-60°-E	楕円形	2.78	1.71	—	自然	6.99		底面だけ検出

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の新旧関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第61製塩跡（第207図）

位置 調査区の中央部 F3c₃区を中心に確認され、標高8.00mに位置している。

関連遺構 第116号竈、第282～284・304・305・308～310・319・320・337号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈、居出場及び釜屋内鹹水槽の重複関係から、4グループに区別できる。第1グループは、第116号竈、釜屋内鹹水槽（310、337）、居出場（284）で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽（305、320）及び居出場（304）で構成されている。第3グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽（282、310）と居出場（308）で構成されている。第4グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽（283、309）と居出場（319）で構成されている。

第61製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3d ₃	8.50	116	310,337	284	—	—	最新
2	F3d ₃	8.50	116	305,320	304	—	—	第1グル ープより古い
3	F3c ₃	8.50	116	282,310	308	—	—	第1・2グル ープより古い
4	F3c ₃	8.50	116	283,309	319	—	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.70m、東西8.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～15cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽8基、南側に居出場4基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 F3c₃区を中心に1基(第116号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.07m、短径3.76m、深さ0.74mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

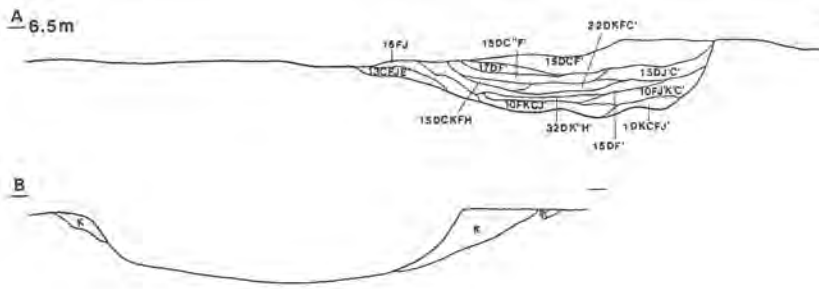
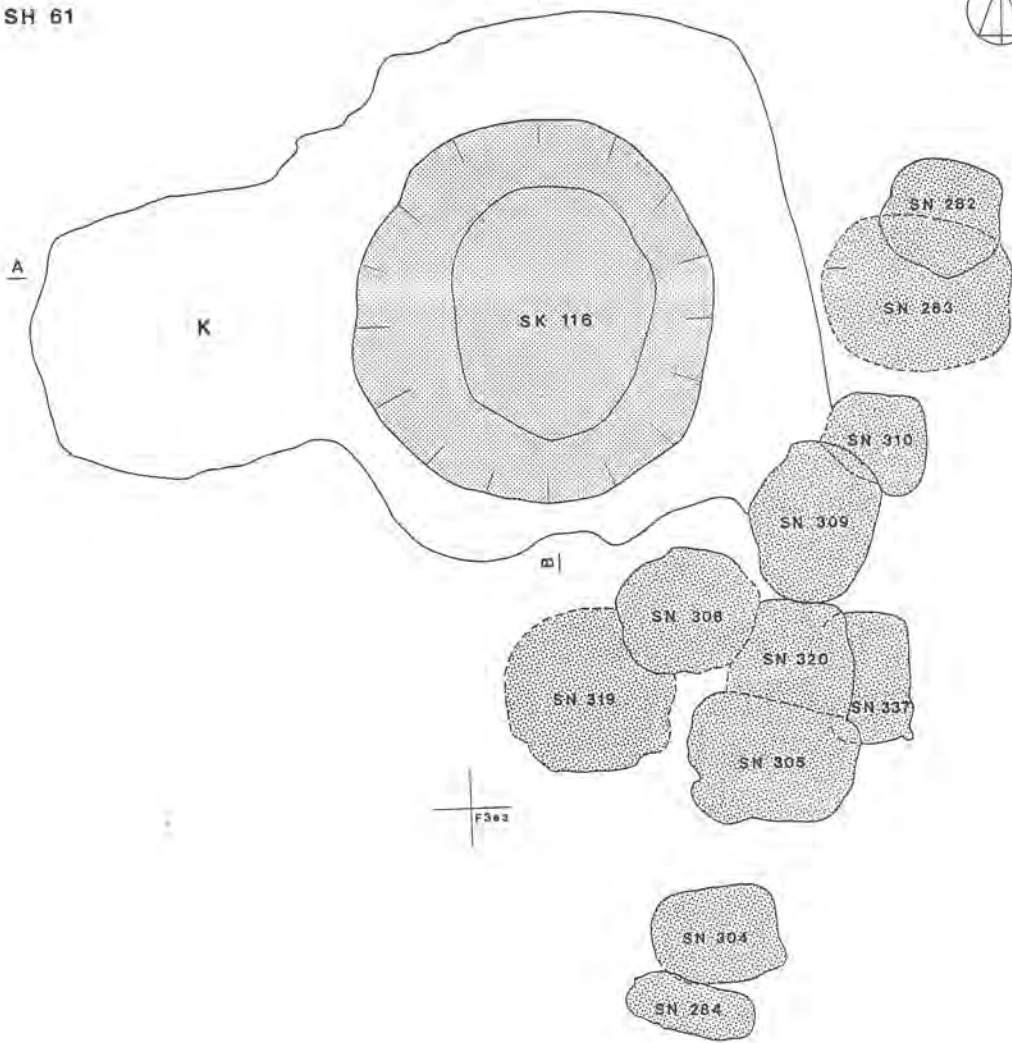
竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
116	F3c ₃	N-24°-E	楕円形	4.07	3.76	0.74	自然	6.30		

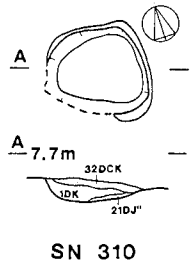
釜屋内鹹水槽 F3c₄区・F3d₃区・d₄区の3か所から8基(第282・283・305・309・310・320・337号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.14)～1.75m、短軸(0.87)～(1.17)m、深さ0.26～1.00mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～12cmの粘土を貼って構築している。第199・282・310・337号鹹水槽の下から第283・305・309・320号鹹水槽が検出されていることから、第199・282・310・337号鹹水槽が新しい。

居出場 F3d₃区・F3d₀区・F3e₃区の3か所から4基(第284・304・308・319号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.23～1.65m、短軸0.43～1.47m、深さ0.12～1.12mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を貼った上に厚さ1～15cmの粘土を貼って構築している。第284・308号鹹水槽の下から第304・319号鹹水槽が検出されていることから、第284・308号鹹水槽が新しい。

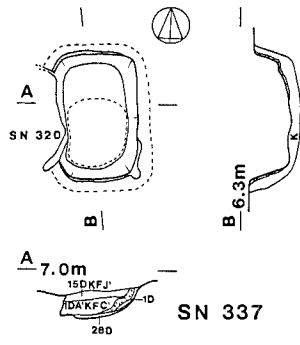
SH 61



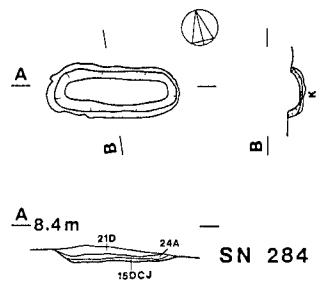
第207図 第61製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



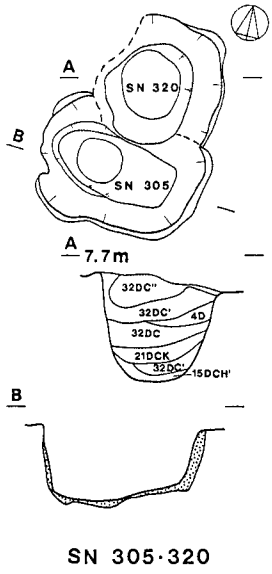
SN 310



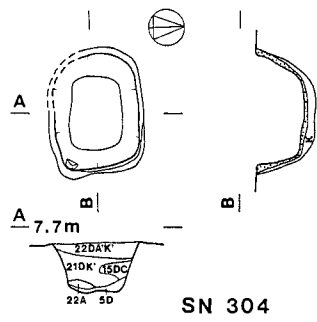
SN 337



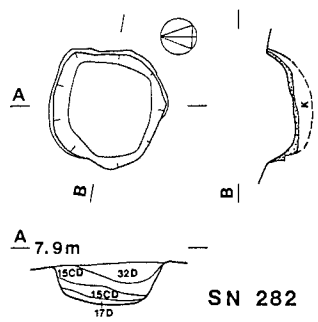
SN 284



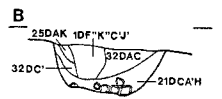
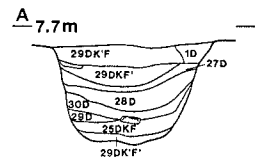
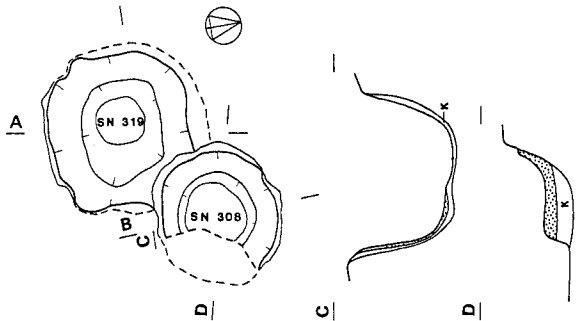
SN 305-320



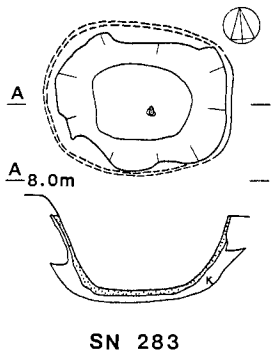
SN 304



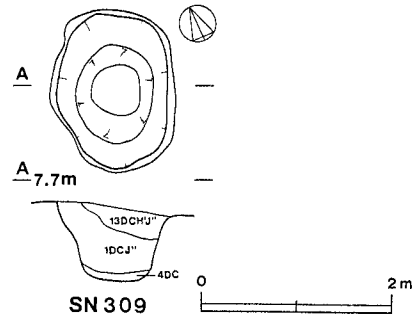
SN 282



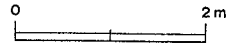
SN 308-319



SN 283



SN 309



第208図 第61製塩跡鹹水槽実測図

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
282	F3c ₄	N-73°-W	隅丸長方形	1.21	1.06	0.41	1～8	緩斜	平坦	自然	7.71	IVA2a	釜屋内鹹水槽
283	F3c ₄	N-82°-W	隅丸長方形	1.32	1.14	1.00	1～7	緩斜	平坦	自然	7.84	IVA2c	釜屋内鹹水槽、底面-石1点
284	F3e ₃	N-73°-W	隅丸長方形	1.26	0.43	0.12	1～8	緩斜	平坦	自然	8.15	IVA2a	居出場、第304号鹹水槽と重複
304	F3e ₃	N-87°-E	隅丸長方形	1.23	0.89	0.54	1～10	外傾	平坦	自然	7.53	IVA2b	居出場、足掛けくぼみ、第284号鹹水槽と重複
305	F3d ₃	N-84°-W	隅丸長方形	1.75	(1.17)	0.82	1～12	外傾	平坦	自然	7.53	IVA2b	釜屋内鹹水槽
308	F3d ₃	N-0°	隅丸長方形	(1.30)	1.21	0.46	10～15	緩斜	平坦	自然	7.56	IVA2a	居出場、第319号鹹水槽と重複
309	F3d ₃	N-20°-E	隅丸長方形	1.64	1.14	0.82	1～7	外傾	平坦	自然	7.49	IVA2b	釜屋内鹹水槽
310	F3d ₄	N-78°-W	隅丸長方形	(1.14)	(0.94)	0.26	1～4	緩斜	平坦	自然	7.44	IVA2a	釜屋内鹹水槽
319	F3d ₀	N-0°	隅丸長方形	1.65	1.47	1.12	1～5	緩斜	平坦	自然	7.56	IVA2c	居出場、第308号鹹水槽と重複
320	F3d ₃	N-9°-E	隅丸長方形	(1.39)	(1.06)	0.97	1～10	外傾	平坦	自然	7.56	IVA2b	釜屋内鹹水槽
337	F3d ₄	N-1°-W	隅丸長方形	1.33	0.87	0.46	1～3	緩斜	平坦	自然	6.90	IVA2a	釜屋内鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、4期にわたって操業されていたものと思われる。この四つのグループの新旧関係は、釜屋内鹹水槽及び居出場の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第62製塩跡（第209図）

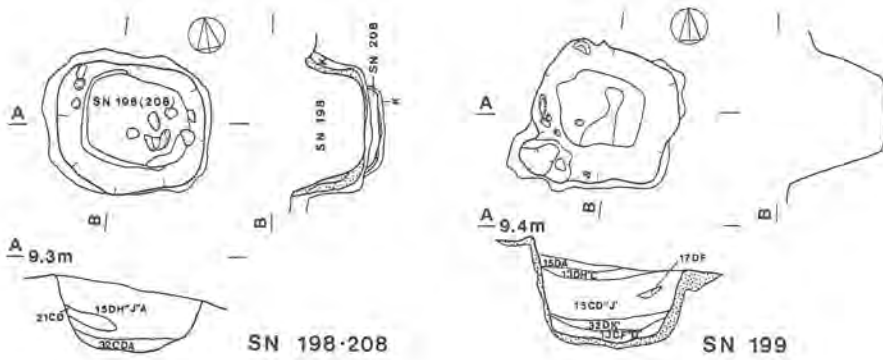
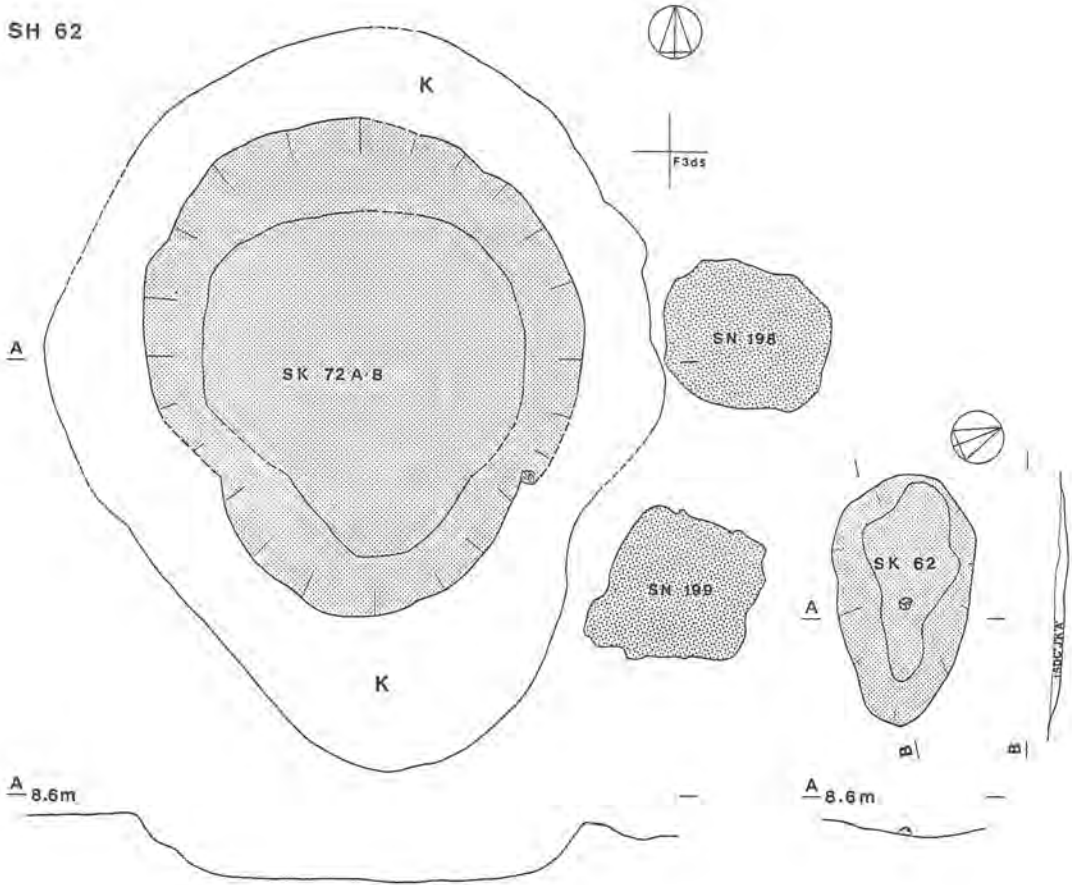
位置 調査区の中央部 F3d₄区を中心に確認され、標高8.60mに位置している。

関連遺構 第62・72（A・B）号竈、第198・199・208号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と釜屋内鹹水槽の重複関係から、3グループに区別できる。第1グループは、第72号竈Aと釜屋内鹹水槽（198, 199）で構成されている。第2グループは、釜屋内鹹水槽が第1グループと同一で、第72号竈Bで構成されている。第3グループは、第62号竈と釜屋内鹹水槽（199, 208）で構成されている。

第62製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3d ₄	8.60	72A	198,199	—	—	—	最新
2	F3d ₄	8.60	72B	198,199	—	—	—	第1グループより古い
3	F3d ₄	8.60	62	199,208	—	—	—	最古

SH 62



第209図 第62製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北6.60m、東西5.60mの楕円形を呈し、長径方向はN-3°-Wを指している。砂上に厚さ20～30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽3基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 F3d₄区を中心に3基（第62・72号竈A・B）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.67～7.88m、短径1.50～6.50m、深さ0.13～0.82mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては灰が60～70cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。三つの竈の新旧関係は、第72号竈Aの下から第72号竈B及び第62号竈を検出していることから第72号竈Aが最も新しく、次いで第72号竈B、第62号竈の順に古くなる。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
62	F3d ₄	N-65°-W	楕 円 形	2.67	1.50	0.13	自然	8.35		
72A	F3d ₄	N-3°-W	楕 円 形	6.55	5.65	0.82	自然	8.60	底面-石2点	
72B	F3d ₄	N-2°-W	楕 円 形	7.88	6.50	0.65	自然	8.40	㊦石1点	

釜屋内鹹水槽 F3d₅区とF3e₅区から3基（第198・199・208号鹹水槽）検出され、平面形は、楕円形と隅丸方形を呈している。規模は、長軸[径]1.10～1.57m、短軸[径]0.86～1.47m、深さ0.78～1.20mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～15cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
198	F3d ₅	N-72°-W	楕 円 形	1.57	.38	0.78	1～15	外傾	平坦	自然	8.23	IA2b	釜屋内鹹水槽、㊦石3点、第208号鹹水槽と重複
199	F3e ₅	N-69°-W	隅 丸 方 形	1.48	1.47	1.20	1～4	外傾	平坦	自然	8.49	IA2c	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、底面-石1点、㊦石8点、炭化物
208	F3d ₅	N-72°-W	楕 円 形	1.10	0.86	0.95	1～6	外傾	平坦	自然	8.05	IA2b	釜屋内鹹水槽、底面-石8点、第198号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、竈と釜屋内鹹水槽の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第63製塩跡（第210図）

位置 調査区の中央部 G3e₄区を中心に確認され、標高6.24m に位置している。

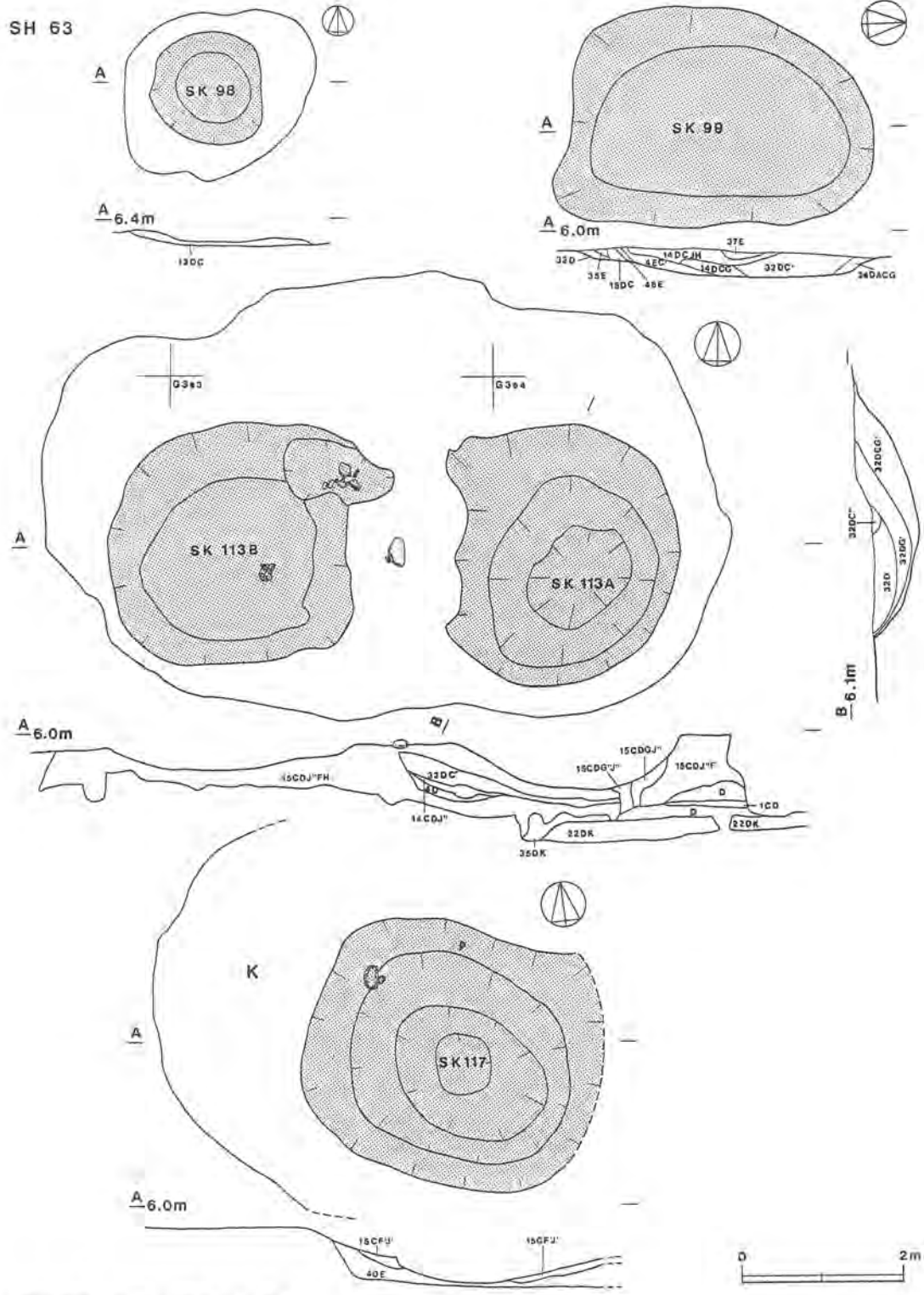
関連遺構 第98・99・113（A・B）・117号竈で構成されている。これらの遺構は、五つの竈の確認面での標高の違いから、5グループに区別できる。第1グループは、第98号竈、第2グループは、第113号竈A、第3グループは、第113号竈B、第4グループは、第117号竈、第5グループは、第99号竈で構成されている。

第63製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	G3e ₁	6.24	98	—	—	—	—	最新
2	G3e ₄	6.24	113A	—	—	—	—	第1グループより古い
3	G3e ₃	6.24	113B	—	—	—	—	第1・2グループより古い
4	G3d ₄	6.24	117	—	—	—	—	第1・2・3グループより古い
5	G3e ₄	6.24	99	—	—	—	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.60m、東西8.60mの不定形を呈している。砂上に厚さ20～60cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈5基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 G3e₄区を中心に5基（第98・99・113A・B・117号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径1.50～3.75m、短径1.43～3.15m、深さ0.11～0.76mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。五つの竈の新旧関係は、確認面での標高の違いから、第98号竈が最も新しく、次いで第113号竈A、第113号竈B、第117号竈、第99号竈の順に古くなる。



第210図 第63製塩跡竈実測図

竈一覧表

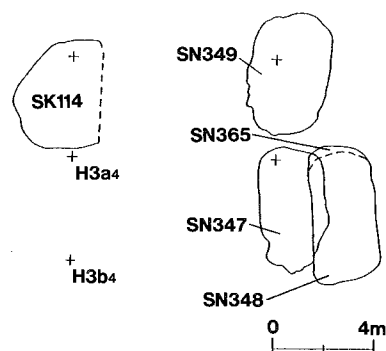
竈番号	位置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
98	G3e ₁	N-41°-W	楕円形	1.50	1.43	0.11	自然	6.24		
99	G3e ₂	N-7°-E	楕円形	3.75	2.77	0.34	自然	5.73		
113のA	G3e ₃	N-3°-W	楕円形	3.23	2.81	0.76	自然	6.06		
113のB	G3e ₄	N-3°-W	楕円形	2.98	2.94	0.72	自然	5.90		
117	G3d ₁	N-55°-W	楕円形	3.66	3.15	0.75	自然	5.76		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、5期にわたって操業されていたものと思われる。この五つのグループの新旧関係は、竈の確認面での標高の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループ、第5グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第64製塩跡（第211図）

位置 調査区の中央部 G3j₄区を中心に確認され、標高4.50m に位置している。

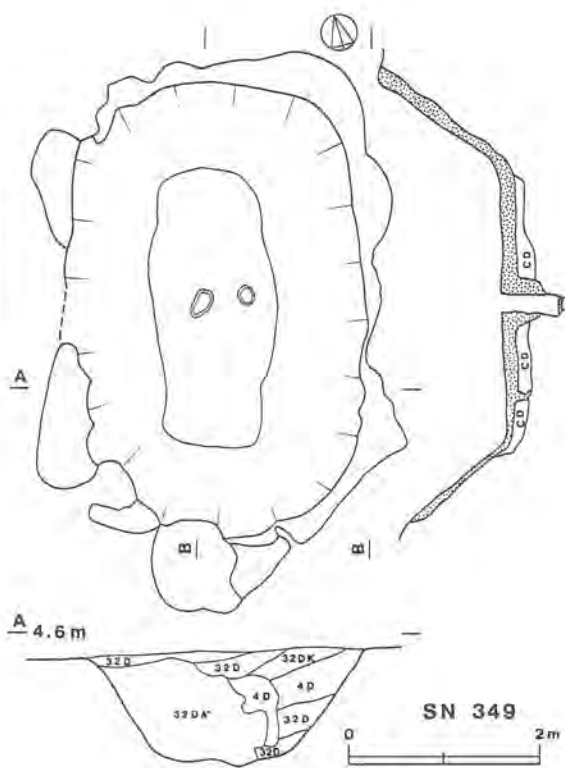
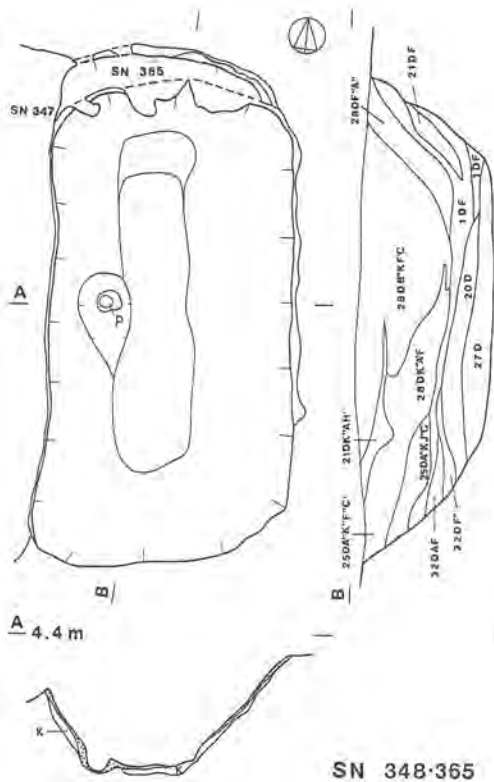
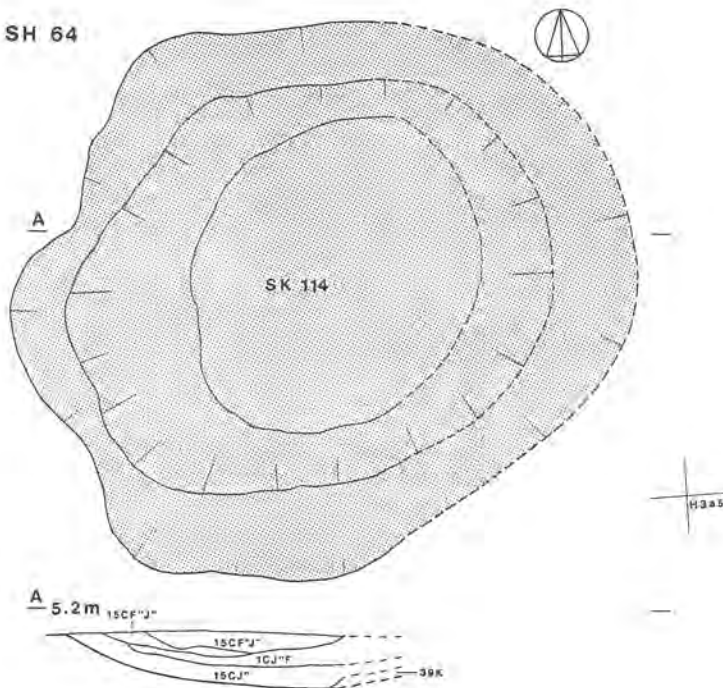
関連遺構 第114号竈、第347～349・365号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、屋外鹹水槽の重複関係から、3グループに区別できる。第1グループは、第114号竈と屋外鹹水槽（348、349）で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、屋外鹹水槽（349）で構成されている。第3グループは、竈が第1グループと同一で、屋外鹹水槽（347、349）で構成されている。



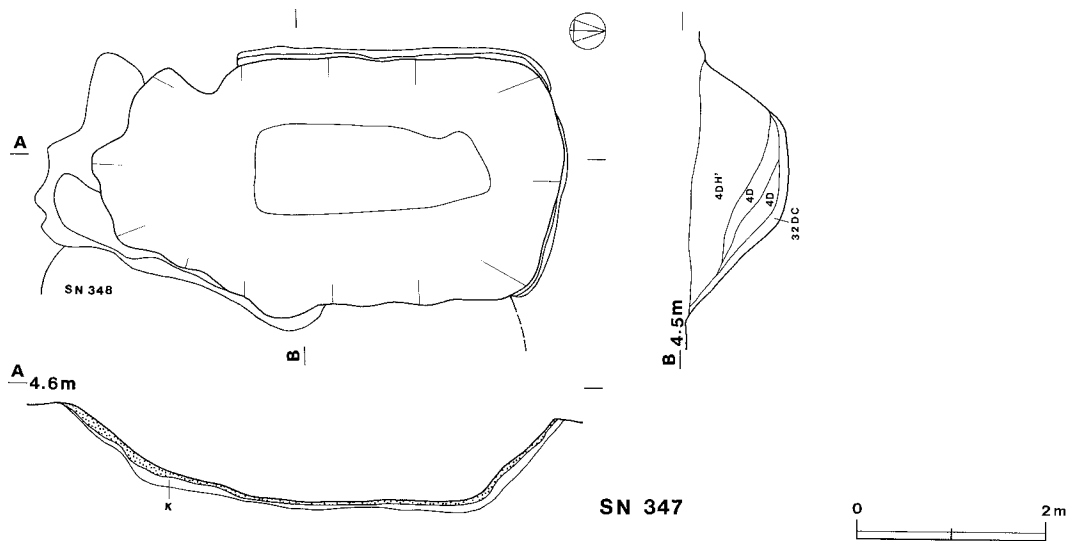
第211図 第64製塩跡遺構配置図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.90m、東西5.90mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

SH 64



第212図 第64製塩跡窟・鹹水槽実測図



第213図 第64製塩跡鹹水槽実測図

第64製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	G3j ₄	4.50	114	-	-	348,349	-	最新
2	G3j ₄	4.50	114	-	-	349	-	第1グループより古い
3	G3j ₄	4.50	114	-	-	347,349	-	最古

竈 G3j₃区を中心に1基(第114号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.31m、短径(3.50)m、深さ0.57mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が40~50cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
114	G3j ₃	N-10°-E	楕円形	4.31	(3.50)	0.57	自然	4.50		

屋外鹹水槽 G3j₆区とH3a₆区から3基(第347~349・365号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸4.85~5.07m、短軸2.54~3.14m、深さ1.03~1.37mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~25cmの粘土を貼って構築している。第348号鹹水槽の下から第347号鹹水槽が検

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
347	H3a ₆	N-3°-W	隅丸長方形	4.93	2.60	1.03	1~9	緩斜	平坦	自然	4.26	IVA4c	屋外鹹水槽, 第348号鹹水槽と重複
348	H3a ₆	N-6°-W	隅丸長方形	5.07	2.54	1.20	1~7	緩斜	平坦	自然	4.46	IVA4c	屋外鹹水槽, 第347・365号鹹水槽と重複
349	G3j ₆	N-30°-E	隅丸長方形	4.85	3.14	1.37	1~25	緩斜	平坦	自然	4.53	IVA4c	屋外鹹水槽
365	H3a ₆	N-6°-E	(隅丸長方形)	(5.35)	2.54	1.14	1~6	緩斜	平坦	自然	4.30	IVA4c	屋外鹹水槽, 第348号鹹水槽と重複

出されていることから、第348号鹹水槽が新しい。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第65製塩跡 (第214図)

位置 調査区の中央部 F3d₄区を中心に確認され、標高6.26mに位置している。

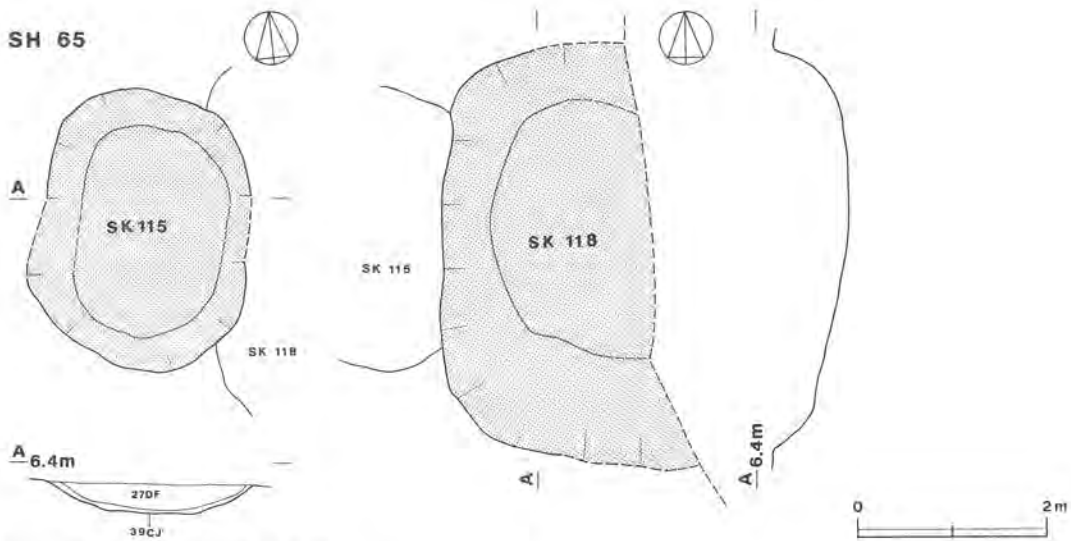
関連遺構 第115・118号竈で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第115号竈、第2グループは、第118号竈で構成されている。

第65製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3d ₄	6.26	115	—	—	—	—	新
2	F3d ₄	6.22	118	—	—	—	—	古

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 F3d₄区を中心に2基 (第115・118号竈) 検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.92・4.23m、短軸2.32・(1.81) m、深さ0.31・0.81mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が5~20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第115号竈の下から第118号竈を検出していることから第115号竈が新しい。



第214図 第65製塩跡竈実測図

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
115	F3d ₄	N-13°-E	隅丸長方形	2.92	2.32	0.31	自然	6.26		
118	F3d ₄	N-3°-E	隅丸長方形	4.23	(1.81)	0.81	自然	6.22		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第66製塩跡 (第215図)

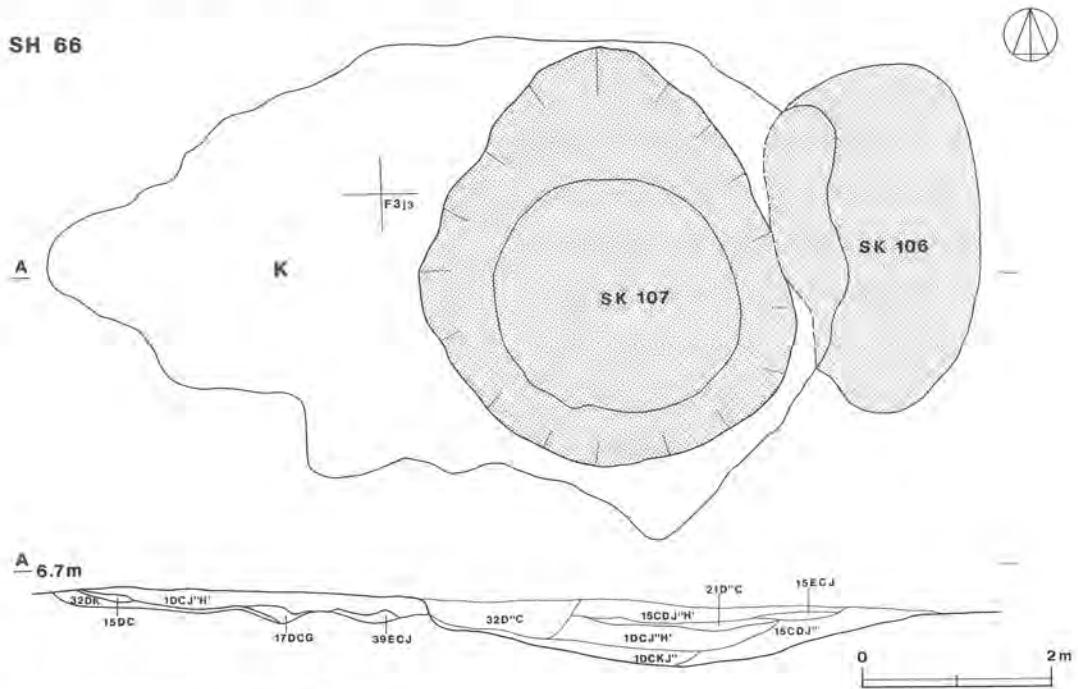
位置 調査区の中央部 F3j₃区を中心に確認され、標高6.50mに位置している。

関連遺構 第106・107号竈で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第107号竈、第2グループは、第106号竈で構成されている。

第66製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	F3j ₃	6.50	107	—	—	—	—	新
2	F3j ₄	6.28	106	—	—	—	—	古

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。



第215図 第66製塩跡竈実測図

竈 F3j₃区とF3j₄区から2基（第106・107号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.70・4.40m、短径2.20・3.80m、深さ0.18・0.72mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第107号竈の下から第106号竈を検出していることから、第107号竈が新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
106	F3j ₄	N-3°-W	楕円形	3.70	2.20	0.18	自然	6.28		
107	F3j ₃	N-7°-W	楕円形	4.40	3.80	0.72	自然	6.50		

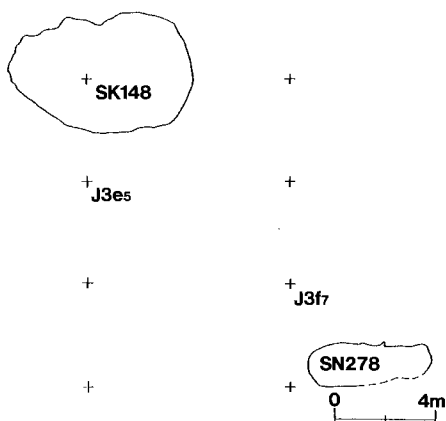
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の新旧関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第67製塩跡（第216図）

位置 調査区の中央部 J3d_s区を中心に確認され、標高5.60m に位置している。

関連遺構 第148号竈と屋外の第278号鹹水槽で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.80m，東西10.70m の不定形を呈している。砂上に厚さ15～40cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。



第216図 第67製塩跡遺構配置図

第67製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 種(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J3d _s	5.60	148	-	-	278	-	-

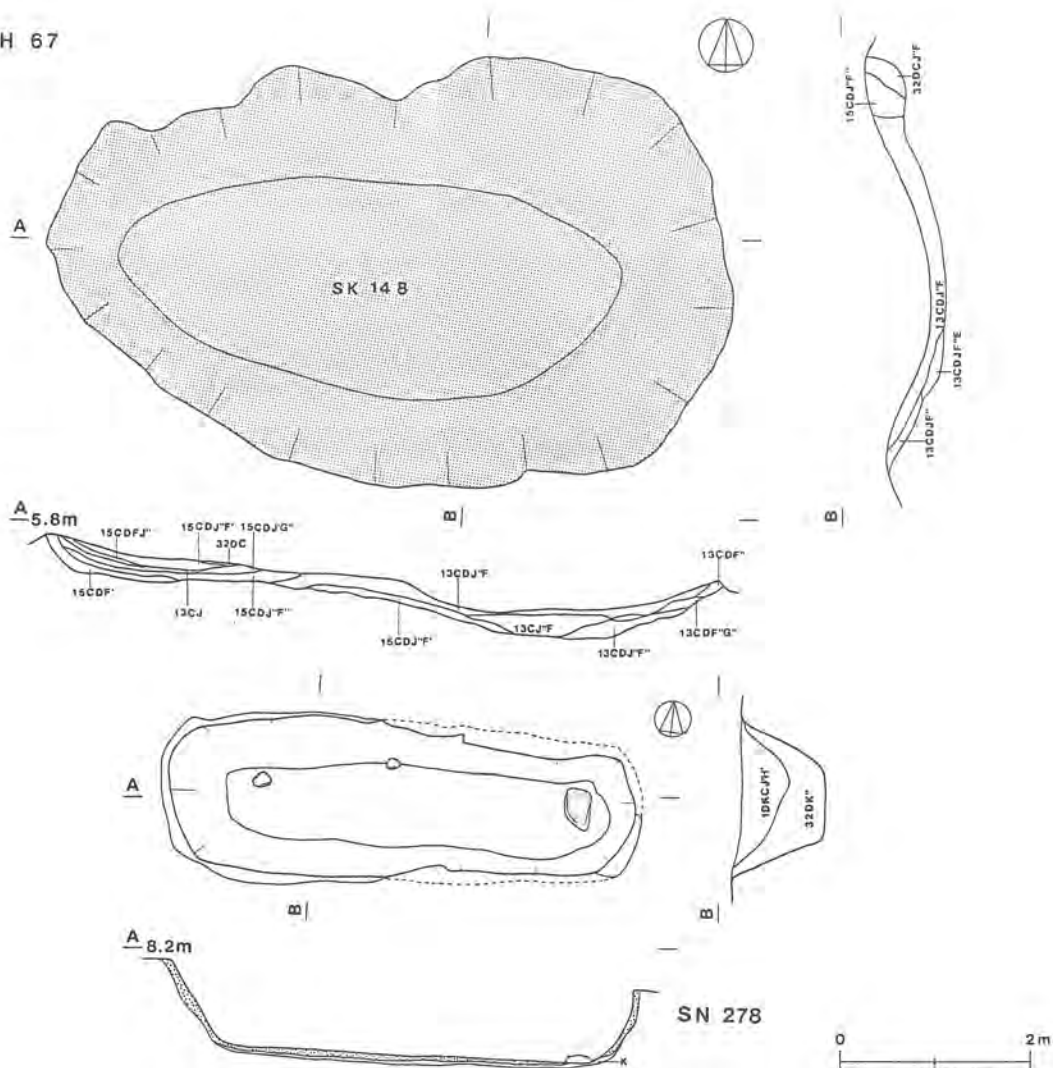
竈 J3d_s区を中心に1基（第148号竈）検出され、平面形は、不定形を呈している。規模は、長軸7.20m，短軸4.60m，深さ0.73mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
148	J3d _s	N-84°-E	不定形	7.20	4.60	0.73	自然	5.60		

屋外鹹水槽 J3f₇区から1基（第278号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸4.80m，短軸1.20m，深さ1.08mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。砂を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3～10cmの粘土を貼って構築している。

SH 67



第217図 第67製塩跡竈・鹹水槽実測図

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
278	J3f	N-84°-E	隅丸長方形	4.80	1.20	1.08	3~10	緩斜	平坦	自然	8.06	IVA4b	屋外鹹水槽,底面一石3点

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

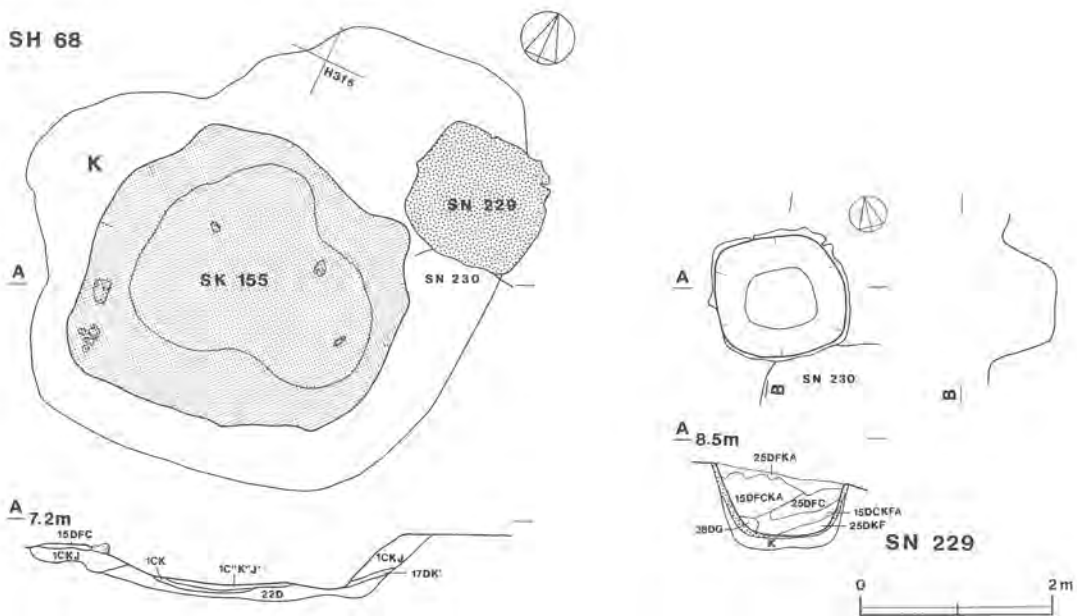
第68製塩跡(第218図)

位置 調査区の中央部 H3f₆区を中心に確認され、標高8.90m に位置している。

関連遺構 第155号竈と釜屋内の第229号鹹水槽で構成されている。

第68製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3f ₆	8.90	155	229	-	-	-	-



第218図 第68製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.00m、東西4.90mの不定形を呈している。砂上に厚さ10cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

竈 H3f₆区を中心に1基(第155号竈)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.74m、短軸3.31m、深さ0.44mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が15cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
155	H3f ₆	N-45°-E	隅丸長方形	3.74	3.31	0.44	自然	8.84	底面一石3点, ⑨石5点	

釜屋内鹹水槽 H3f₆区から1基(第229号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸方形を呈している。規模は、長軸1.35m、短軸1.26m、深さ0.70mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
229	H3f ₆	N-6°-E	隅丸方形	1.35	1.26	0.70	1～7	緩斜	平坦	自然	8.26	VA2b	釜屋内鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第69製塩跡(第219図)

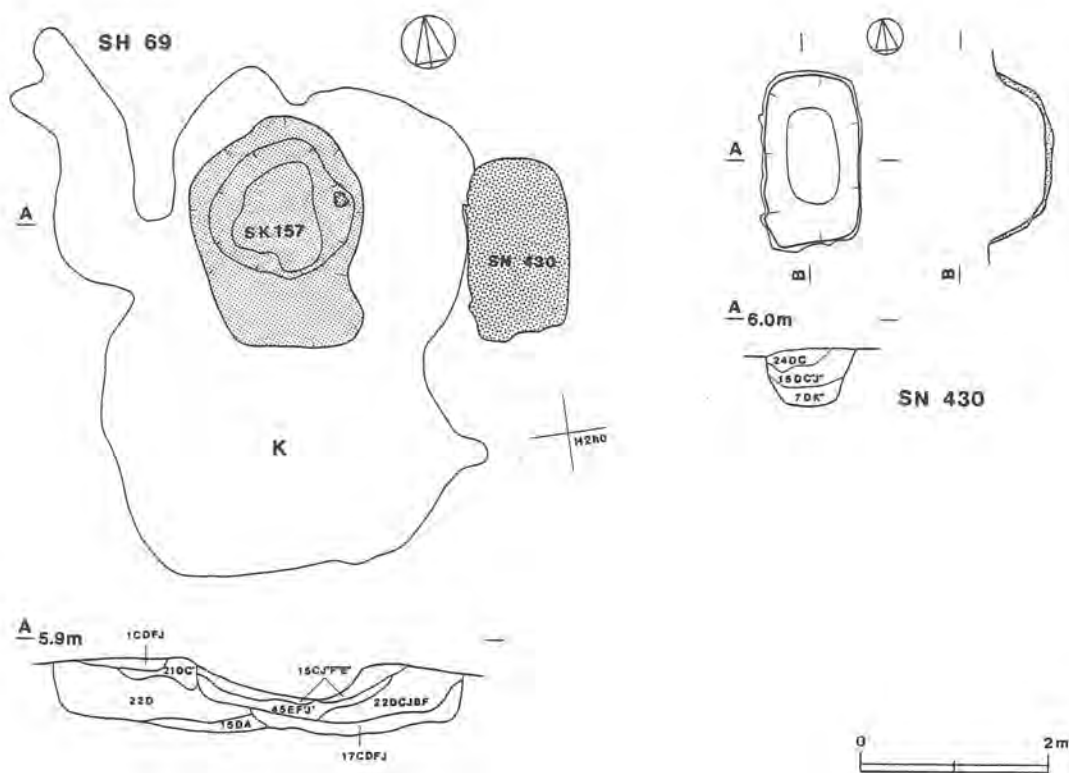
位置 調査区の中央部 H2g₉区を中心に確認され、標高5.70mに位置している。

関連遺構 第157号竈と釜屋内の第430号鹹水槽で構成されている。

第69製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H2g ₉	5.70	157	430	—	—	—	—

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北6.00m、東西6.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ10cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。



第219図 第69製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

竈 H2g₉区を中心に1基(第157号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.43m、短径1.73m、深さ0.37mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10~30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
157	H2g ₉	N-8°-E	楕円形	2.43	1.73	0.37	自然	5.70	底面-石1点, 鉄片1点	

釜屋内鹹水槽 H2g₉区から1基(第430号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.77m、短軸1.00m、深さ0.61mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~7cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
430	H2g*	N-0°	隅丸長方形	1.77	1.00	0.61	2~7	緩斜	平坦	自然	5.70	IVA2b	釜屋内鹹水槽

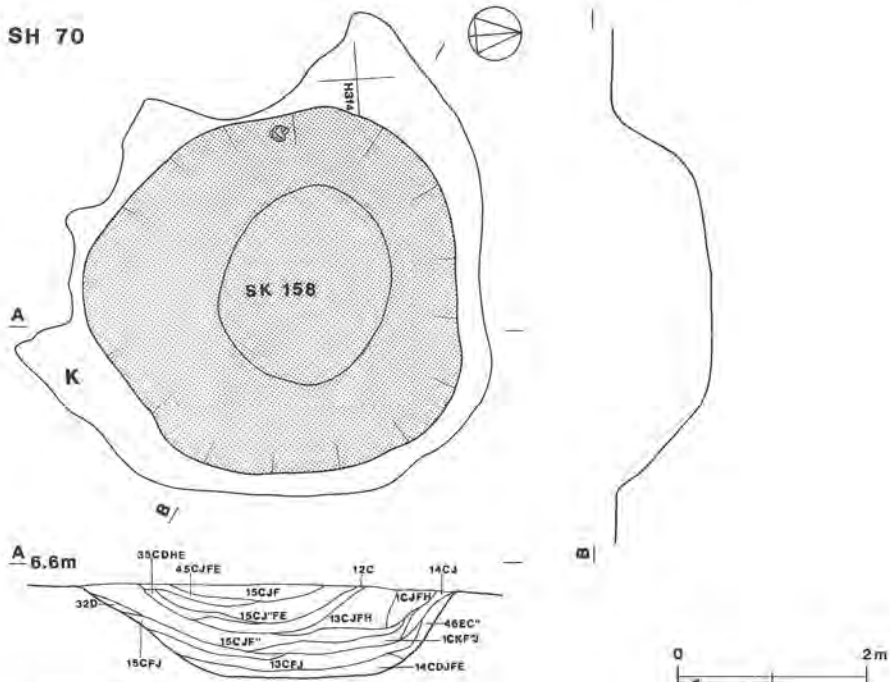
出土遺物 第157号竈の底面から鉄片1点、石1点が出土している。鉄片は遺存状態が悪いので形状は不明である。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。この製塩跡の時期は、第157号竈から鉄片が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

第70製塩跡(第220図)

位置 調査区の中央部 H3f₄区を中心に確認され、標高6.38mに位置している。

関連遺構 第158号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。



第220図 第70製塩跡竈実測図

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

第70製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3f ₄	6.38	158	—	—	—	—	—

竈 H3f₄区を中心に1基(第158号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.99m、短径3.93m、深さ0.50mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は厚さ10cmの灰が堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
158	H3f ₄	N-42°-W	楕 円 形	3.99	3.93	0.50	自然	6.38		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第71製塩跡(第221区)

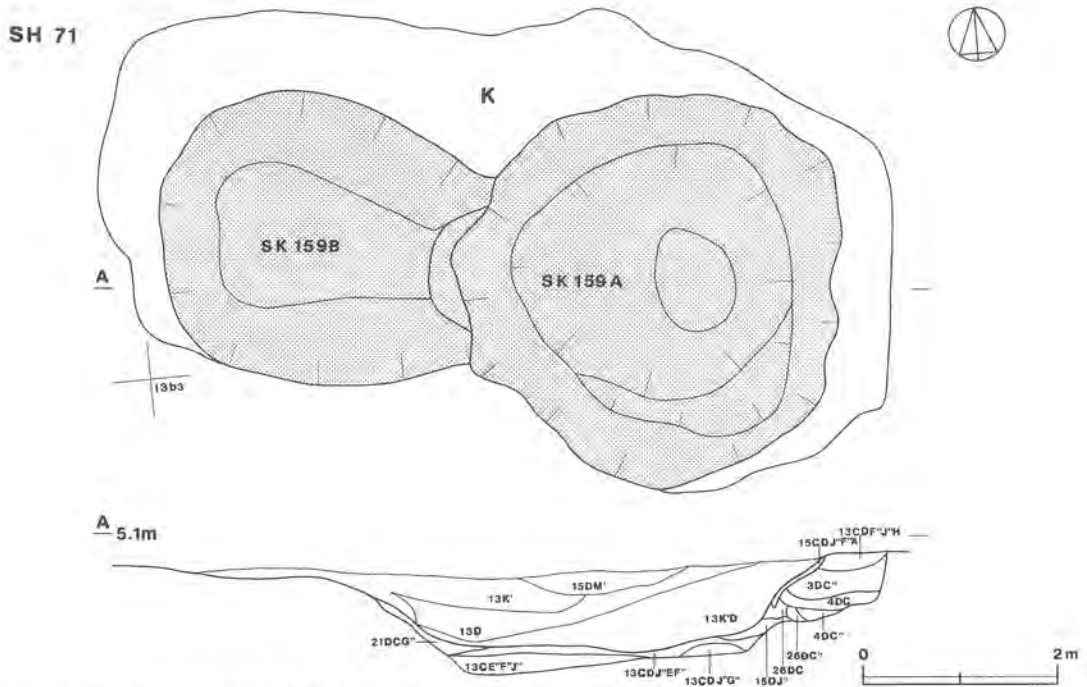
位置 調査区の中央部 I3a₄区を中心に確認され、標高4.90mに位置している。

関連遺構 第159号竈(A・B)で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第159号竈A、第2グループは、第159号竈Bで構成されている。

第71製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	I3a ₄	4.86	159A	—	—	—	—	新
2	I3a ₃	4.75	159B	—	—	—	—	古

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。



第221図 第71製塩跡竈実測図

竈 I3a₃・a₄区を中心に2基(第159号竈A・B)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.85・(3.20)m, 短径4.32・3.05m, 深さ0.85・0.11mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10~30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第159号竈Aの下から第159号竈Bを検出していることから、第159号竈Aが新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
159A	I3a ₄	N-21°-W	楕円形	4.85	4.32	0.85	自然	4.86		
159B	I3a ₃	N-17°-E	楕円形	(3.20)	3.05	0.11	自然	4.75		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の新旧関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

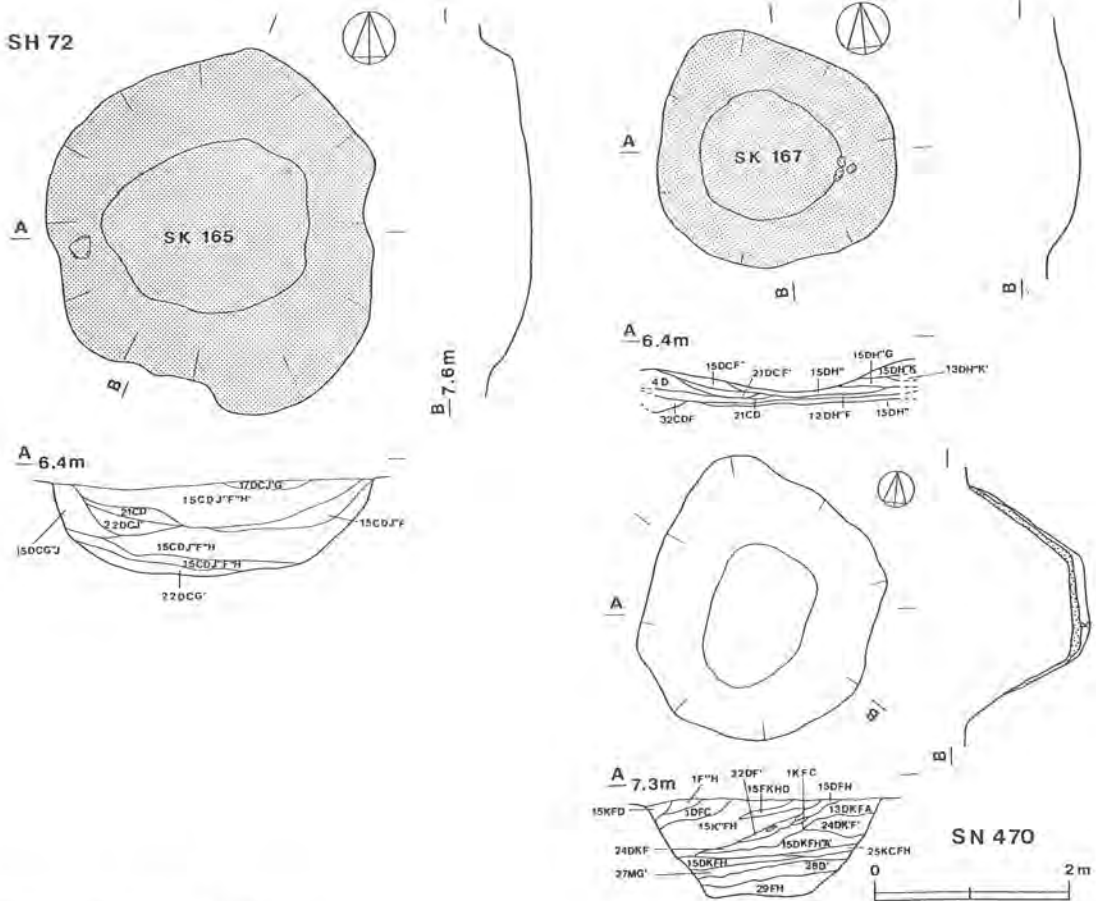
第72製塩跡(第222図)

位置 調査区の中央部 K3i7区を中心に確認され、標高7.00mに位置している。

関連遺構 第165・167号竈、第470号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と釜屋内鹹水槽の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第165号竈で構成されている。第2グループは、第167号竈と屋外鹹水槽(470)で構成されている。

第72製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	K3i7	7.00	165	—	—	—	—	新
2	K3i7	7.00	167	—	—	470	—	古



第222図 第72製塩跡竈実測図

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北9.90m、東西5.40mの不定形を呈している。砂上に厚さ20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽4基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 K3i₇区を中心に2基（第165・167号竈）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.14・5.04m、短軸2.71・2.18m、深さ0.37mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10～70cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第165号竈の下から第167号竈を検出していることから、第165号竈が新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
165	K3i ₇	N-62°-W	隅丸長方形	3.14	2.71	0.37	自然	6.96	底面-石2点, 石1点	
167	K3i ₇	N-3°-E	隅丸長方形	5.04	2.18	—	自然	6.96	底面-石2点	底面だけ検出

屋外鹹水槽 K3j₆区から1基（第470号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.80m、短軸2.37m、深さ1.09mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3～11cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
470	K3j ₆	N-8°-E	隅丸長方形	2.80	2.37	1.09	3～11	緩斜	平坦	自然	7.16	IVA3c	屋外鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈と釜屋内鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

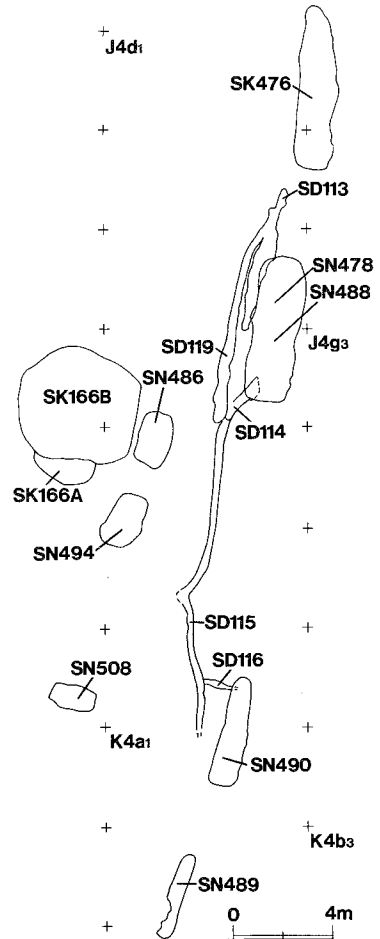
第73製塩跡(第223図)

位置 調査区の中央部 J4h₁区を中心に確認され、標高6.10mに位置している。

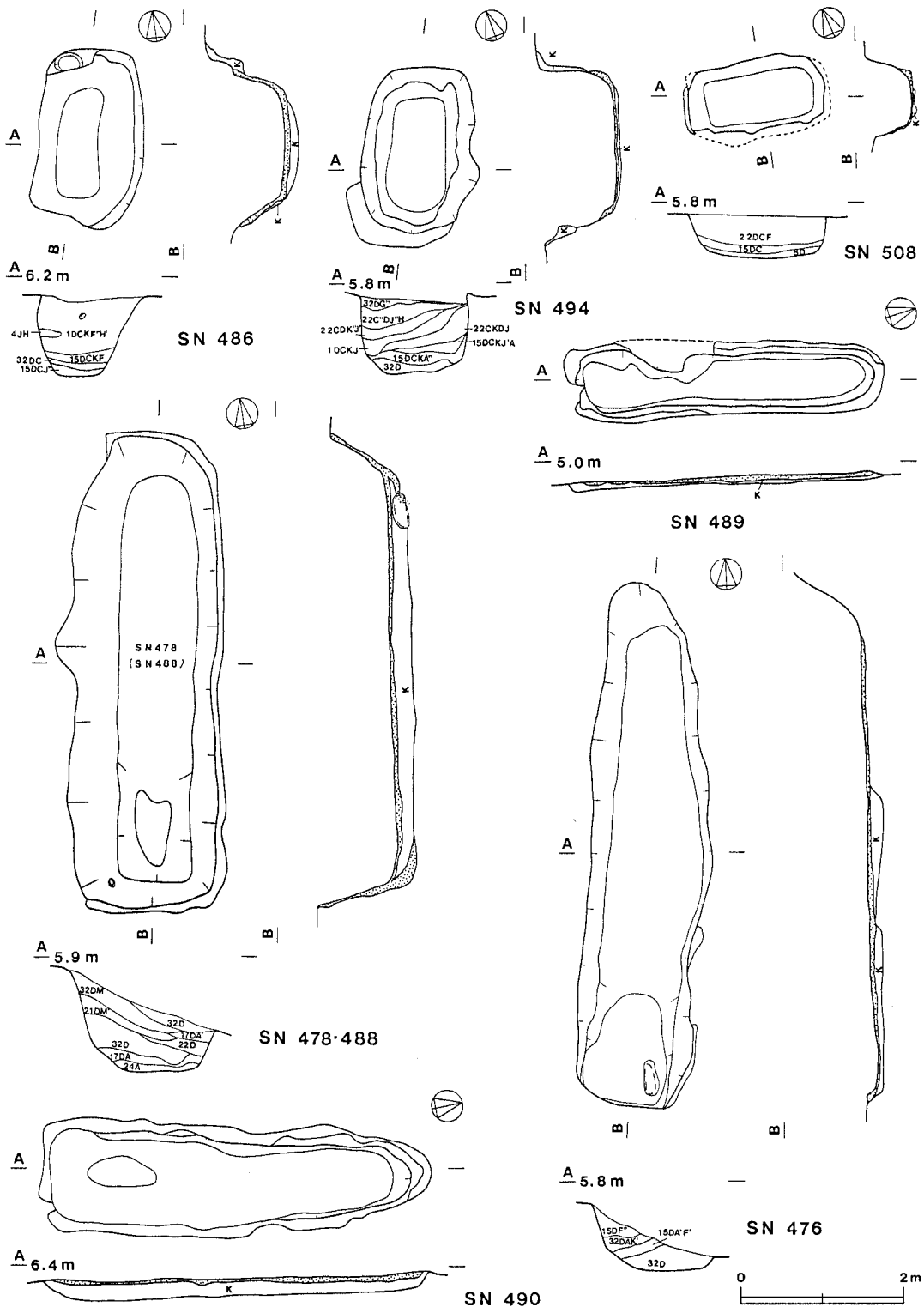
関連遺構 第166号竈 (A・B)、第476・478・486・488～490・494号鹹水槽及び第113～116・119号土樋で構成されている。これらの遺構は、竈、釜屋内鹹水槽及び土樋の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第166号竈A、釜屋内鹹水槽(486)、屋外鹹水槽(478, 489, 490)及び土樋(115, 116)で構成されている。第2グループは、第166号竈B、釜屋内鹹水槽(494)、居出場(508)、屋外鹹水槽(476, 478, 488)及び土樋(113～116, 119)で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北14.40m、東西7.70mの不定形を呈している。砂上に厚さ15～30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

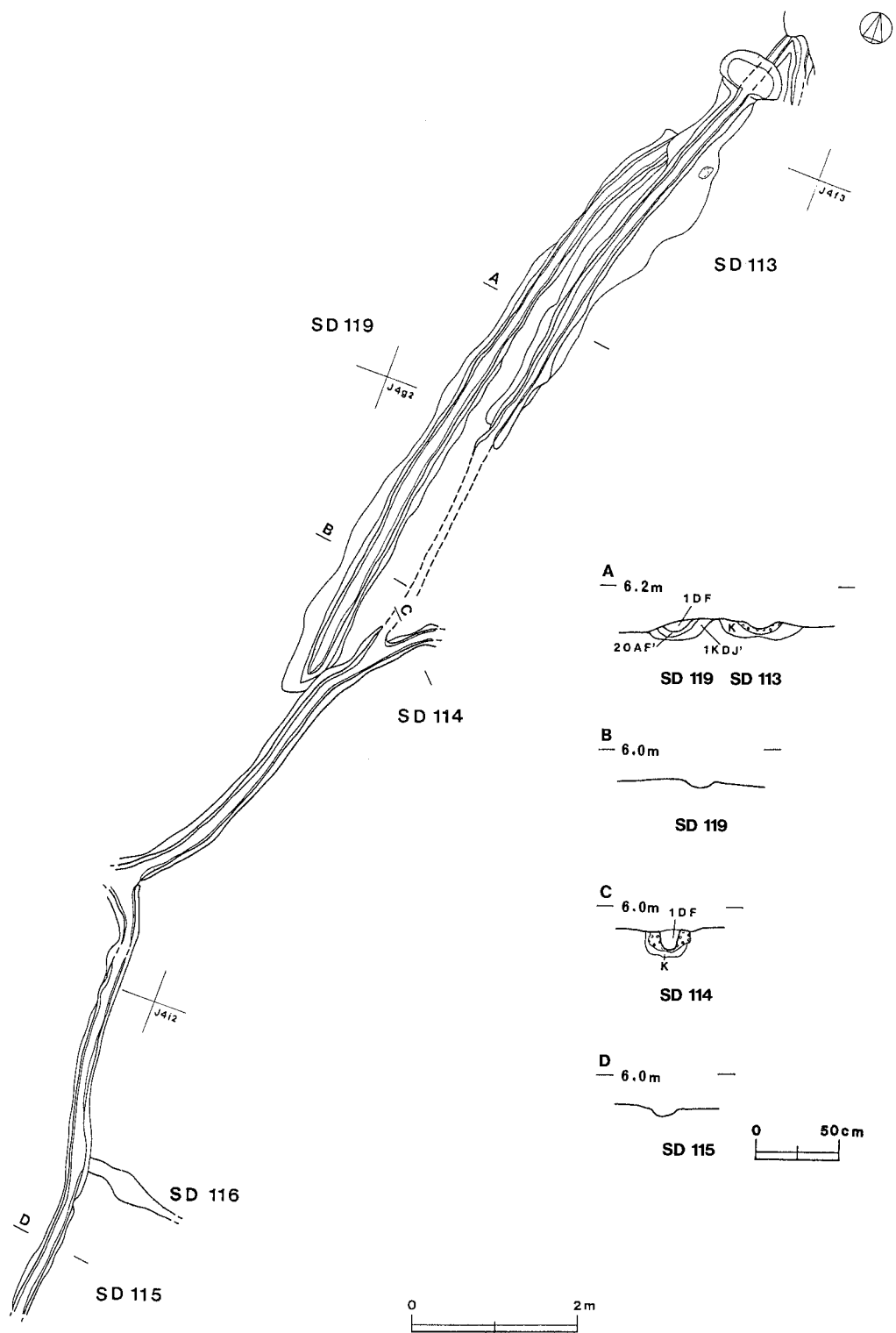
竈 J3g₀区とJ3h₀区から2基(第166号竈A・B)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径2.38・4.68m、短径(1.10)・4.47m、深さ0.37・1.04mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10～50cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第166号竈Aの下から第166号竈Bを検出していることから、第166号竈Aが新しい。



第223図 第73製塩跡遺構配置図



第225図 第73製塩跡鹹水槽実測図



第226図 第73製塩跡土樋実測図

第73製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	J4h ₁	6.10	166A	486	—	478,489,490	115,116	新
2	J4h ₁	6.10	166B	494	508	476,478,488	113,114,115, 116,119	古

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平面形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
166A	J3h ₀	N-31°-E	楕円形	2.38	(1.10)	0.37	自然	5.65	④耳金2点,小刀1点,土師質土器の皿1点	
166B	J3g ₀	N-20°-E	楕円形	4.68	4.47	1.04	自然	5.52		

釜屋内鹹水槽 J4h₁区から2基(第486・494号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸2.10・2.05m、短軸1.26・1.29m、深さ0.98・0.99mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。第486号鹹水槽の下から第494号鹹水槽が検出されていることから、第486号鹹水槽が新しい。

居出場 J3i₀区から1基(第508号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.75m、短軸0.98m、深さ0.58mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～7cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 K4a₂区・K4b₁区・J4d₃区・J4f₂区の4か所から5基(第476・478・488～490号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と舟形を呈している。規模は、長軸2.43～6.39m、短軸0.50～1.64m、深さ0.11～1.00mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～16cmの粘土を貼って構築している。第478号鹹水槽の下から第488号鹹水槽が検出されていることから、第478号鹹水槽が新しい。

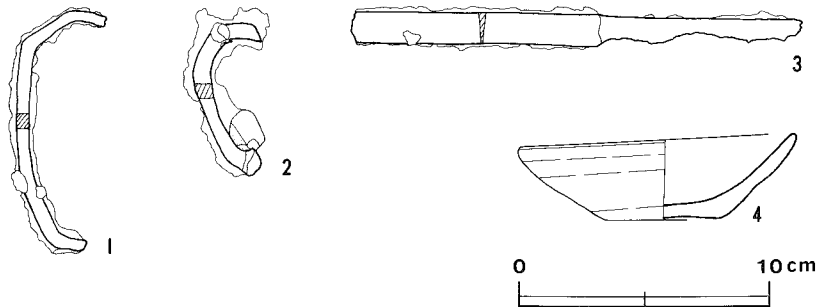
土樋 J4e₂区からJ4j₁区を中心にして5条(第113～116・119号土樋)検出され、全長が最も短いものは1.28mで、最も長いものは9.39mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅17～22cm、下幅11～14cm、深さ5～27cmである。各土樋は砂地を浅く掘り、粘土を1～12cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第435・491号鹹水槽と連なっている第116号土樋は、第115号土樋と合流し、第476号鹹水槽と釜屋内の第486・494号鹹水槽と連結していたと思われる。第113号土樋も第478号鹹水槽と連なっている第114号土樋と合流し、釜屋内の第486・494号鹹水槽と連結していたと思われる。

鹹水槽一覽表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
476	J4d ₃	N-6°-E	隅丸長方形	6.39	1.30	0.82	1~10	緩斜	平坦	自然	5.69	IVA4b	屋外鹹水槽, ㊦石1点
478	J4f ₂	N-8°-E	隅丸長方形	5.82	1.64	1.00	1~16	外傾	平坦	自然	5.72	IVA4c	屋外鹹水槽, 第488号鹹水槽と重複
486	J4h ₁	N-14°-E	隅丸長方形	2.10	1.26	0.98	2~7	緩斜	平坦	自然	5.98	IVA3b	釜屋内鹹水槽, 第494号鹹水槽と重複
488	J4f ₂	N-7°-E	隅丸長方形	5.76	(1.57)	-	-	-	平坦	自然	4.72	IVA4a	屋外鹹水槽, 第478号鹹水槽と重複
489	K4b ₁	N-19°-E	隅丸長方形	3.52	0.50	0.11	3~7	緩斜	平坦	自然	4.89	IVA4a	屋外鹹水槽
490	K4a ₂	N-10°-E	舟 形	2.43	0.90	0.38	2~9	緩斜	平坦	自然	4.94	IVA3a	屋外鹹水槽
494	J4h ₁	N-19°-E	隅丸長方形	2.05	1.29	0.99	1~7	外傾	平坦	自然	5.70	IVA3b	釜屋内鹹水槽, 第486号鹹水槽と重複
508	J3i ₀	N-75°-W	隅丸長方形	1.75	0.98	0.58	1~7	外傾	平坦	自然	5.68	IVA2b	居出場

土樋一覽表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
113	J4e ₂ ~J4g ₂	N-21°-E	5.99	22	11	16	2~6	U	自然	無	5.86 ~5.88	
114	J4g ₂	N-40°-E	1.94	19	13	13	1~6	U	自然	無	5.84 ~5.88	第119号土樋と接続, 第478号鹹水槽と連 結
115	J4j ₁	N-18°-E	2.24	17	13	5	2~6	U	自然	無	5.79 ~5.90	第116号土樋と接続
116	J4i ₂	N-81°-W	1.28	17	13	27	2~12	U	自然	無	6.07	第115号土樋と接続, 第435・491号鹹水槽 と連結
119	J4e ₂ ~J4g ₂	N-13°-E	9.39	21	14	6	1~6	U	自然	有	5.66 ~5.81	第114号土樋と接続, 第476号鹹水槽と連 結



第227図 第73製塩跡出土遺物実測図

出土遺物 第166号竈Aの覆土上層から耳金2点(第227図1・2)、小刀1点(第227図3)及び土師質土器の皿1点(第227図4)が出土している。3の小刀は、刀身の切先は欠損し、残存している長さは18.1cmである。刀身長は9.8cm、刀身幅は1.3cm、刀関幅0.3cm、茎長8.3cm、茎幅は先幅1.0cm、元幅0.8cmである。本小刀は反りが無く、棟は直線で、棟関は無く、茎に至る。刀関は刃部端から外彎気味に茎部に至る。土師質土器の皿と小刀は周囲からの流れ込みと思われる。

第166号竈A出土鉄製品一覧表(第227図1・2)

図版番号	名称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	耳 金	9.8	0.6	0.5	25.1	第166号竈A	M11 断面長方形、両端部折れ曲がる。
2	耳 金	6.1	0.6	0.6	26.3	第166号竈A	M12 上端部欠損、下端部折れ曲がる。

第166号竈A出土土器観察表(第227図4)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	皿 土師質土器	A 10.6	平底で、底部外面がやや窪む。体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P14 70% 第166号竈A南側覆土
		B 3.6				
		C 2.7				

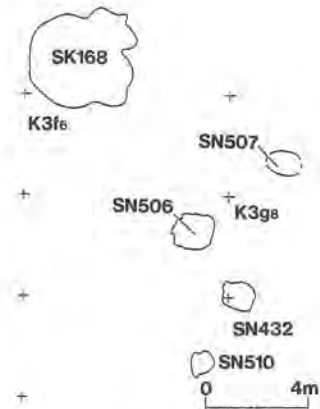
所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈、釜屋内鹹水槽及び土樋の重複関係から、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第1グループの第166号竈Aの覆土上層から15世紀から16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることはできなかった。

第74製塩跡(第228図)

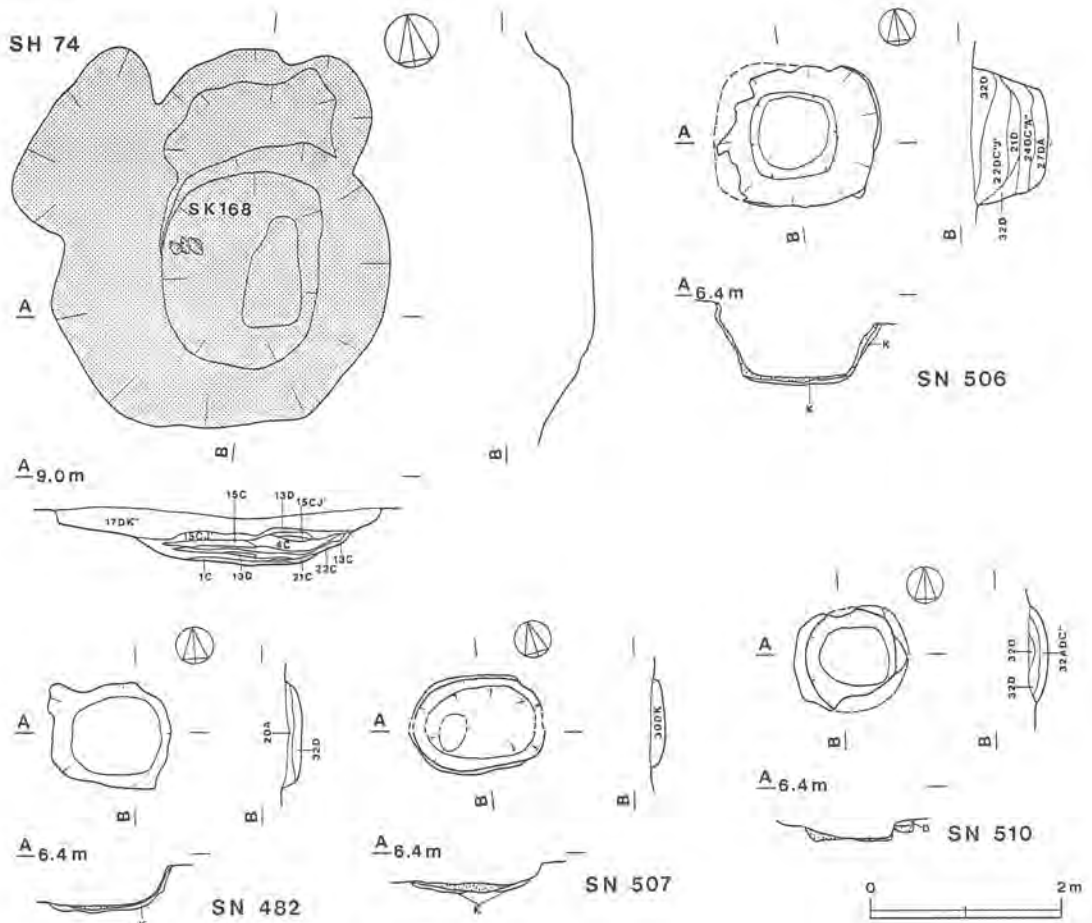
位置 調査区の中央部 H3f₆区を中心に確認され、標高6.85mに位置している。

関連遺構 第168号竈と屋外の第482・506・507・510号鹹水槽で構成され、釜屋内鹹水槽、居出場及び土樋は検出されなかった。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北5.20m、東西9.10mの不定形を呈している。砂上に厚さ20cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。



第228図 第74製塩跡遺構配置図



第229図 第74製塩跡竈・鹹水槽実測図

第74製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3f ₆	6.85	168	—	—	482,506,507,510	—	—

竈 K3e₆区を中心に1基(第168号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.04m、短径3.47m、深さ0.57mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が20～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
168	K3e ₆	N-16°-E	楕 円 形	4.04	3.47	0.57	自然	6.85	㊦石3点	

屋外鹹水槽 K3f₈区・K3g₇・g₈区・K3h₇区から4基(第482・506・507・510号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸0.94～1.65m、短軸0.86～1.49m、深さ0.20～0.86mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。砂を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。

鹹水槽一覧表

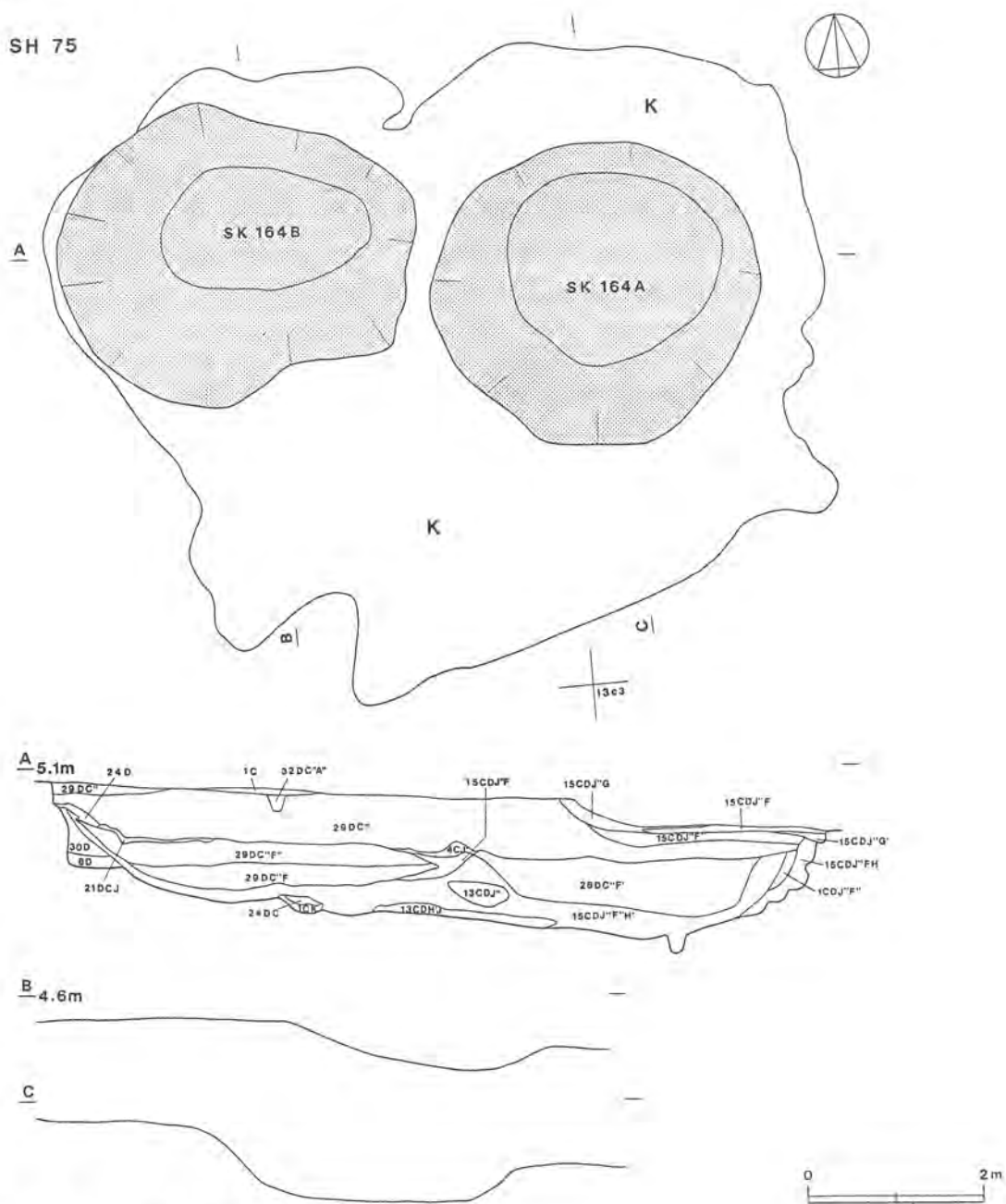
鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
482	K3g ₈	N-76°-W	隅丸長方形	1.23	0.93	0.43	3～10	緩斜	平坦	自然	6.30	IVA2a	屋外鹹水槽
506	K3g ₇	N-82°-W	隅丸長方形	1.65	1.49	0.86	3～7	緩斜	平坦	自然	6.38	IVA2b	屋外鹹水槽
507	K3f ₈	N-80°-W	隅丸長方形	1.29	0.86	0.22	1～8	緩斜	平坦	自然	6.28	IVA2a	屋外鹹水槽
510	K3h ₇	N-86°-W	隅丸長方形	0.94	0.92	0.20	—	緩斜	平坦	自然	6.06	IVA1a	屋外鹹水槽

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況や鹹水槽の検出状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第75製塩跡(第230図)

位置 調査区の中央部 I3a3区を中心に確認され、標高4.90m に位置している。

関連遺構 第164号竈(A・B)で構成されている。これらの遺構は、竈の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは、第164号竈A、第2グループは、第164号竈Bで構成されている。



第230図 第75製塩跡竈実測図

第75製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	I3a ₃	4.19	164A	—	—	—	—	新
2	I3a ₂	4.10	164B	—	—	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北9.40m、東西8.70mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 I3a₁・a₂区から2基（第164号竈A・B）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.72・4.17m、短径3.46・3.35m、深さ0.82・0.29mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第164号竈Aの下から第164号竈Bを検出していることから、第164号竈Aが新しい。

竈一覧表

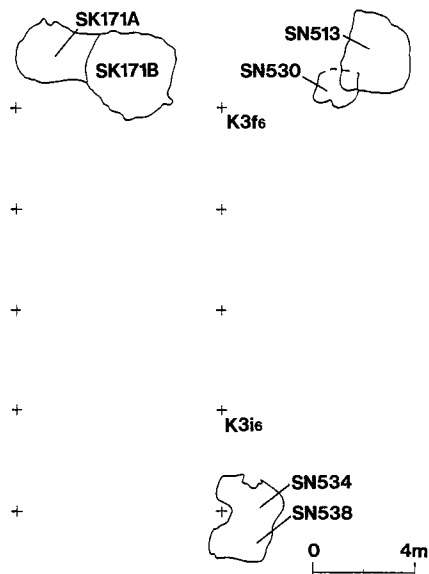
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
164A	I3a ₂	N-81°-W	楕円形	3.72	3.46	0.82	自然	4.19		
164B	I3a ₁	N-80°-W	楕円形	4.17	3.35	0.29	自然	4.10		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第76製塩跡(第231図)

位置 調査区の中央部 K3j₆区を中心に確認され、標高7.20mに位置している。

関連遺構 第171号竈(A・B)、第513・530・534・538号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と屋外鹹水槽の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第171号竈Aと屋外鹹水槽(530, 534)で構成されている。第2グループは、第171号竈Bと屋外鹹水槽(513, 538)で構成されている。



第231図 第76製塩跡遺構配置図

第76製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	K3j ₆	7.20	171A	—	—	530, 534	—	新
2	K3j ₆	7.20	171B	—	—	513, 538	—	古

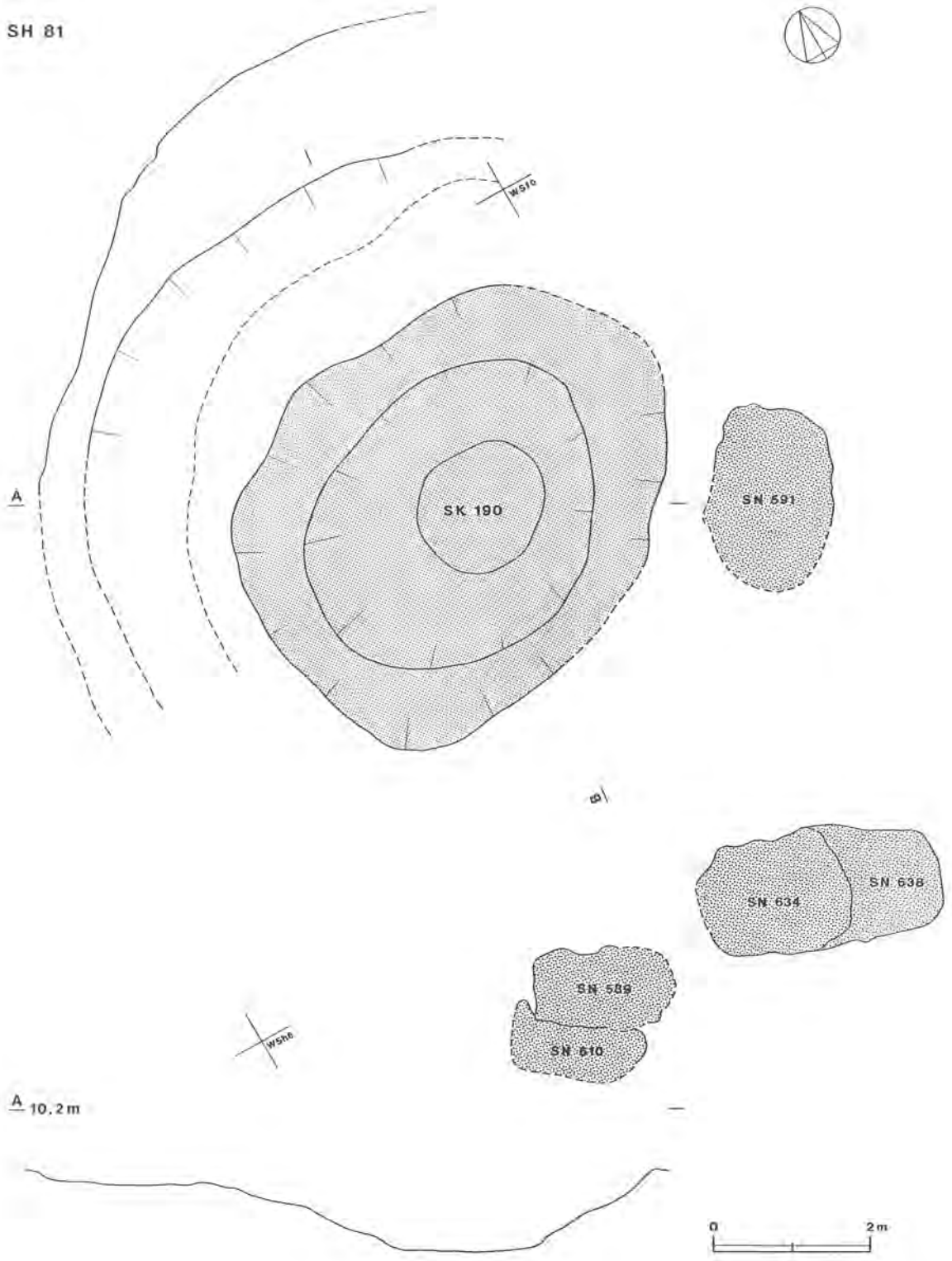
釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 K3e₄・e₅区から2基(第171号竈A・B)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(2.71)・3.65m、短軸1.97・3.37m、深さ0.38・0.54mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10~50cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第171号竈Aの下から第171号竈Bを検出していることから、第171号竈Aが新しい。

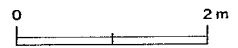
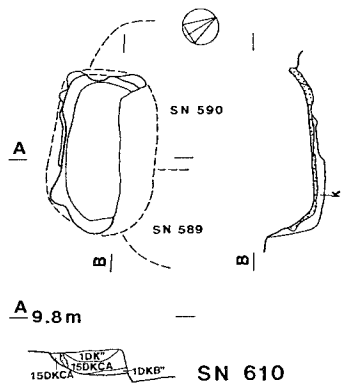
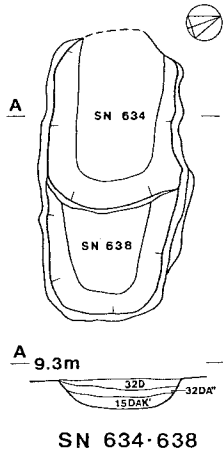
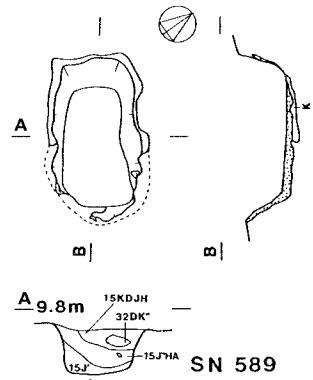
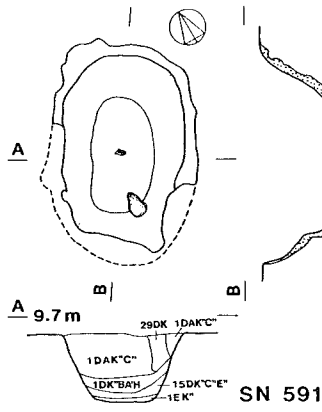
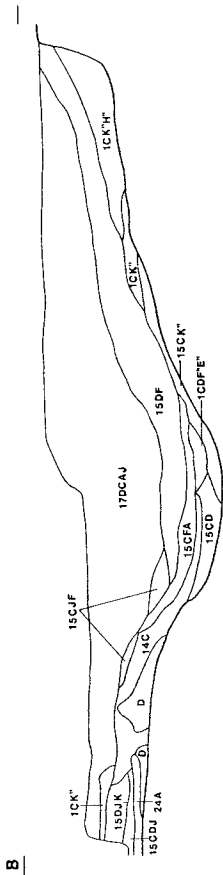
竈一覧表

竈番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
171A	K3e ₄	N-71°-W	隅丸長方形	(2.71)	1.97	0.38	自然	5.94		
171B	K3e ₅	N-41°-W	隅丸長方形	3.65	3.37	0.54	自然	5.60		

SH 81



第232図 第76製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



屋外鹹水槽 K3e₇区と K3j₆区から4基（第513・530・534・538号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.57)～3.28m、短軸1.52～2.64m、深さ0.79～1.01mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。砂を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～25cmの粘土を貼って構築している。第530・534号鹹水槽の下から第513・538号鹹水槽が検出されていることから、第530・534号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
513	K3e ₇	N-20°-E	隅丸長方形	2.87	2.35	0.97	1～6	緩斜	平坦	自然	6.96	IVA3b	屋外鹹水槽,第530号鹹水槽と重複
530	K3e ₇	N-12°-E	隅丸長方形	(1.57)	1.52	0.90	1～8	緩斜	平坦	自然	7.12	IVA2b	屋外鹹水槽,第513号鹹水槽と重複
534	K3j ₆	N-17°-E	隅丸長方形	3.28	2.64	1.01	2～15	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA4c	屋外鹹水槽,第538号鹹水槽と重複
538	K3j ₆	N-17°-E	隅丸長方形	3.28	2.64	0.79	2～15	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA4b	屋外鹹水槽,第534号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、竈と屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第77製塩跡(第233図)

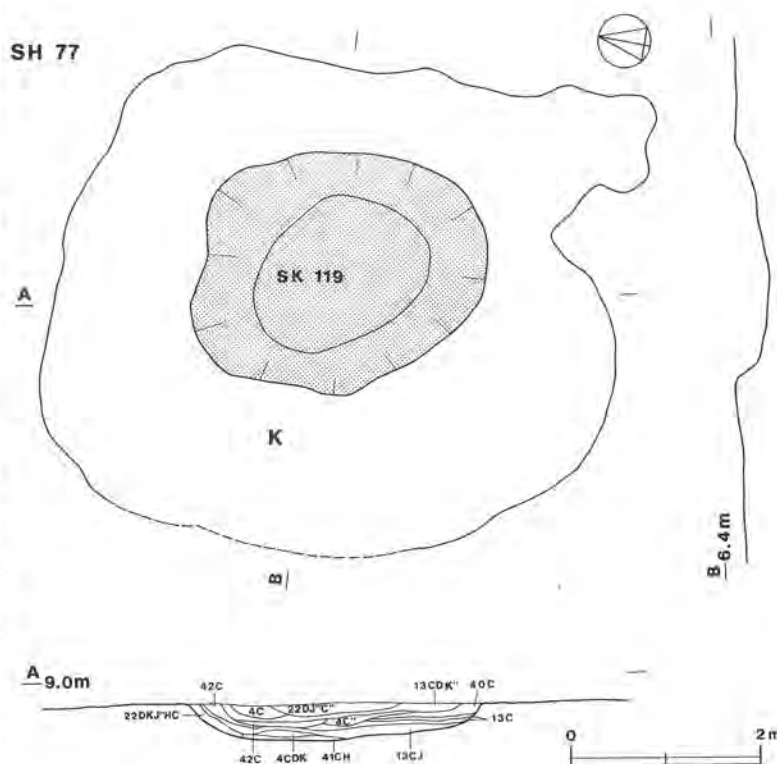
位置 調査区の中央部
H3h₃区を中心に確認
され、標高8.70mに位
置している。

関連遺構 第119号竈
だけで構成され、鹹水
槽及び土樋は検出され
なかった。

釜屋 確認できた黒色
土の範囲は、南北6.00
m、東西5.20mの不定
形を呈している。砂上
に厚さ60cmの灰と炭化
物混じりの黒色土を貼
りつけて釜屋の地盤を
構築している。中央部
に竈1基が位置してい

る。しかし、この黒色

土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細について不明である。



第233図 第77製塩跡竈実測図

第77製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	H3h ₃	8.70	119	-	-	-	-	-

竈 H3h₃区を中心に1基(第119号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.20m、短径2.57m、深さ0.44mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10~20cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
119	H3h ₃	N-27°-W	楕円形	3.20	2.57	0.44	自然	6.25		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。
本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第78製塩跡(第234図)

位置 調査区の中央部 K3a₆区を中心に確認され、標高6.50m に位置している。

関連遺構 第170号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

第78製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	K3a ₆	6.50	170	—	—	—	—	—

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北10.60m、東西9.20m の不定形を呈している。砂上に厚さ10～80cmの灰と炭化物混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、規模と形状等の詳細については不明である。

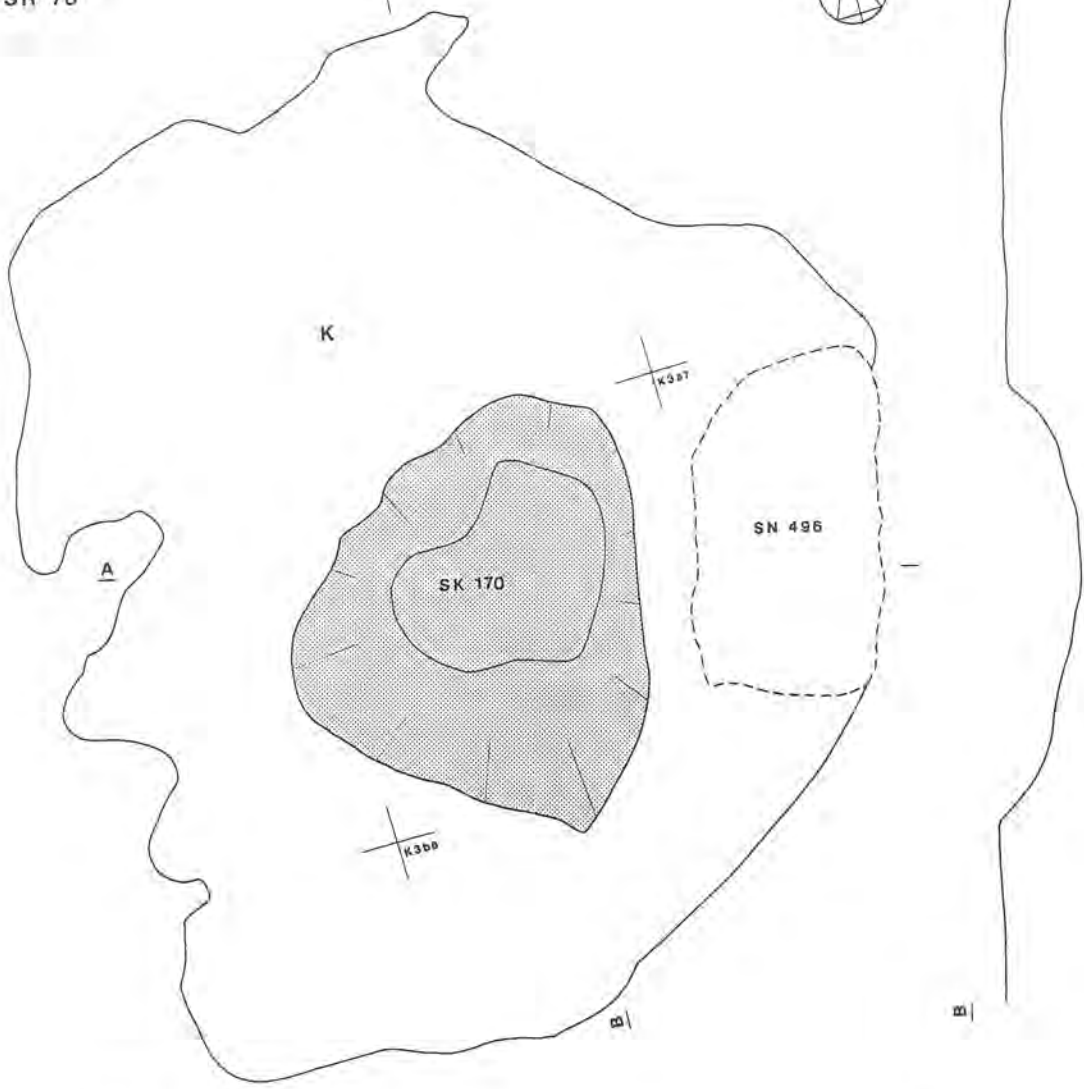
竈 K3a₆区を中心に1基(第170号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径4.20m、短径(3.74m)、深さ0.60mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は灰が10～50cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

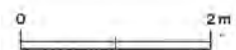
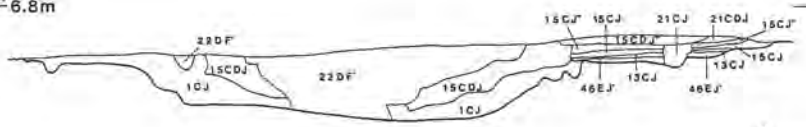
竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
170	K3a ₆	N-35°-E	楕 円 形	4.20	(3.74)	0.60	自然	6.24		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

SH 78



A 6.8m



第234図 第78製塩跡窟実測図

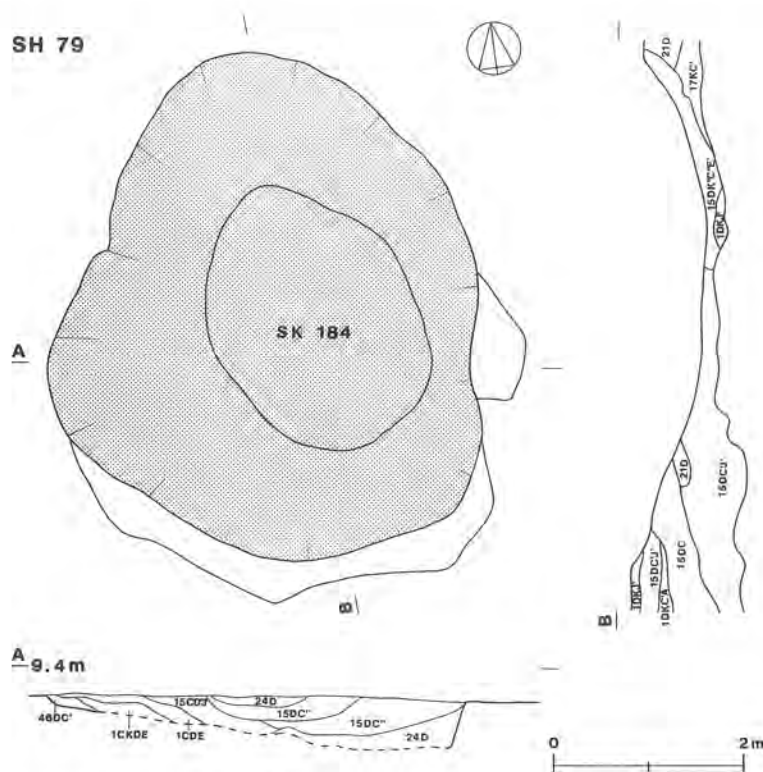
第79製塩跡（第235図）

位置 調査区の南部 W5g_s区を中心に確認され、標高9.30m に位置している。

関連遺構 第184号竈だけで構成され、鹹水槽及び土樋は検出されなかった。

第79製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	W5g _s	9.30	184	—	—	—	—	—



第235図 第79製塩跡竈実測図

釜屋 釜屋内の竈は検出されているが、釜屋の規模と形状等を確認する手がかりとなる版築された黒色土は、竈の周囲にわずかに存在しているだけで、詳細は不明である。

竈 W5g_s区を中心に1基（第184号竈）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径5.68m, 短径4.68m, 深さ0.44mである。黒色土を10～30cmの厚さで鍋状に貼って構築している。覆土は、上層から中層にかけて周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、下層は厚さ10～70cmの灰が堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

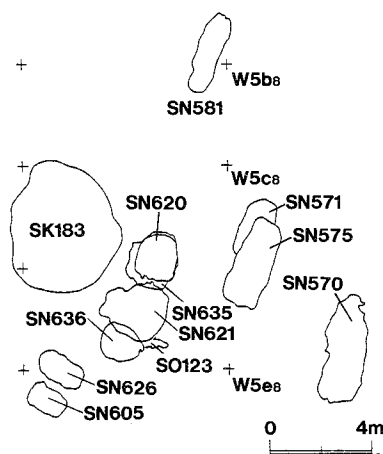
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
184	W5gs	N-5'-W	楕円形	5.68	4.68	0.44	自然	9.10		

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、竈の覆土状況から1期だけの操業と思われる。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。

第80製塩跡（第236図）

位置 調査区の南部 W5c₆区を中心に確認され、標高10.84m に位置している。

関連遺構 第183号竈、第570・571・575・581・605・620・621・626・635・636号鹹水槽及び第123号土樋で構成されている。これらの遺構は、居出場、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の重複関係から、2グループに区別できる。第1グループは、第183号竈、釜屋内鹹水槽（620, 636）、居出場（605）、屋外鹹水槽（570, 571, 581）及び土樋（123）で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽（621, 635）、居出場（626）及び屋外鹹水槽（570, 575, 581）で構成されている。



第236図 第80製塩跡遺構配置図

第80製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	W5c ₆	10.84	183	620, 636	605	570, 571, 581	123	新
2	W5c ₆	10.84	183	621, 635	626	570, 575, 581	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北16.30m、東西12.00mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～40cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基、東側に鹹水槽4基、南側に居出場2基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。釜屋の周囲は、底面から20～30cmの高さで土手が築かれており、南側に釜屋内へ向かって傾斜した出入口が付設されている。

竈 W5c₆区を中心に1基(第183号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径(5.27)m、短径(4.10)m、深さ1.66mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10~30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
183	W5c ₆	N-80°-W	楕円形	(5.27)	(4.10)	1.66	自然	10.84		


釜屋内鹹水槽 W5c₇区・W5d₆・d₇区の3か所から4基(第620・621・635・636号鹹水槽)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径(1.60)~2.22m、短径1.40~1.97m、深さ0.28~0.93mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ4~50cmの粘土を貼って構築している。

居出場 W5e₆区から2基(第605・626号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.56・1.71m、短軸[径]0.96・0.87m、深さ0.56・0.50mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~8cmの粘土を貼って構築している。

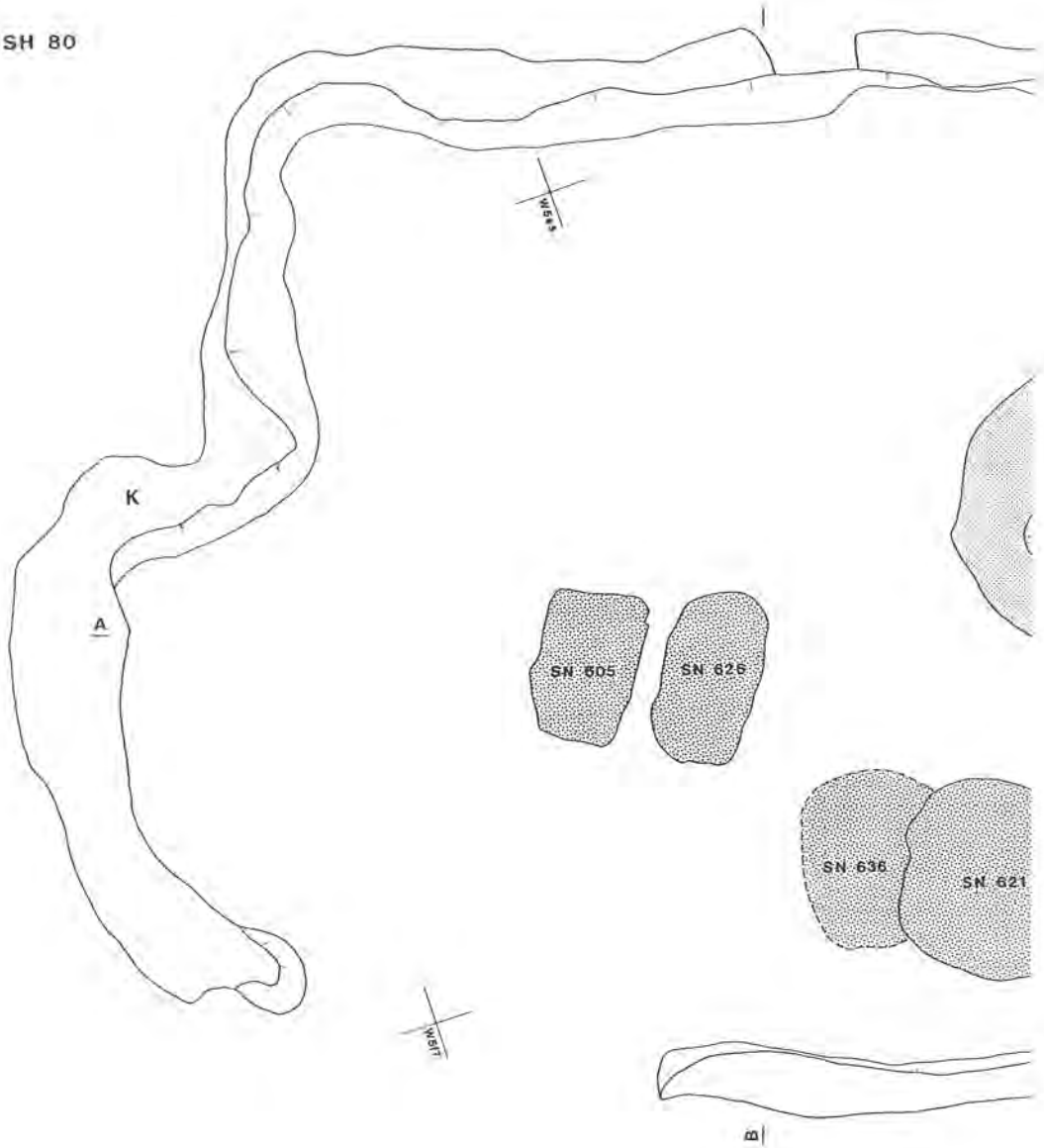
屋外鹹水槽 W5a₇区・W5c₈区・W5d₉区の3か所から4基(第570・571・575・581号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]2.33~4.28m、短軸[径]1.02~1.64m、深さ0.03~0.57mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~15cmの粘土を貼って構築している。第571号鹹水槽の下から第575号鹹水槽が検出されていることから、第571号鹹水槽が新しい。

土樋 W5d₇区から1条(第123号土樋)検出され、長さ0.77m、上幅19cm、下幅12cm、深さ11cmで、断面形は「U」字形を呈している。砂地を浅く掘り、粘土を2~6cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。一部分の検出のため、どの鹹水槽と連結していたか確認できなかった。第123号土樋は、釜屋内の第636号鹹水槽と連結していたと思われる。

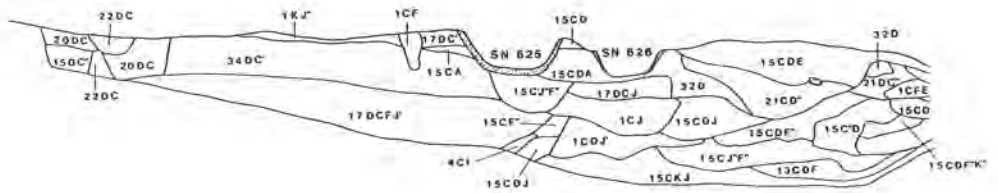
土樋一覧表

土樋番号	位置	主軸方向	規模				粘土の厚さ(cm)	断面	覆土	蓋石の有無	標高(m)	備考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
123	W5d ₇	N-71°-W	0.77	19	12	11	2~6		自然	無	9.20~9.31	第636号鹹水槽と連結

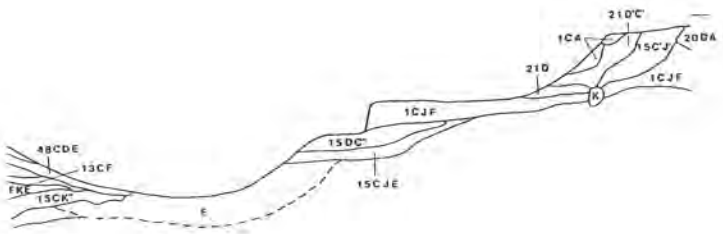
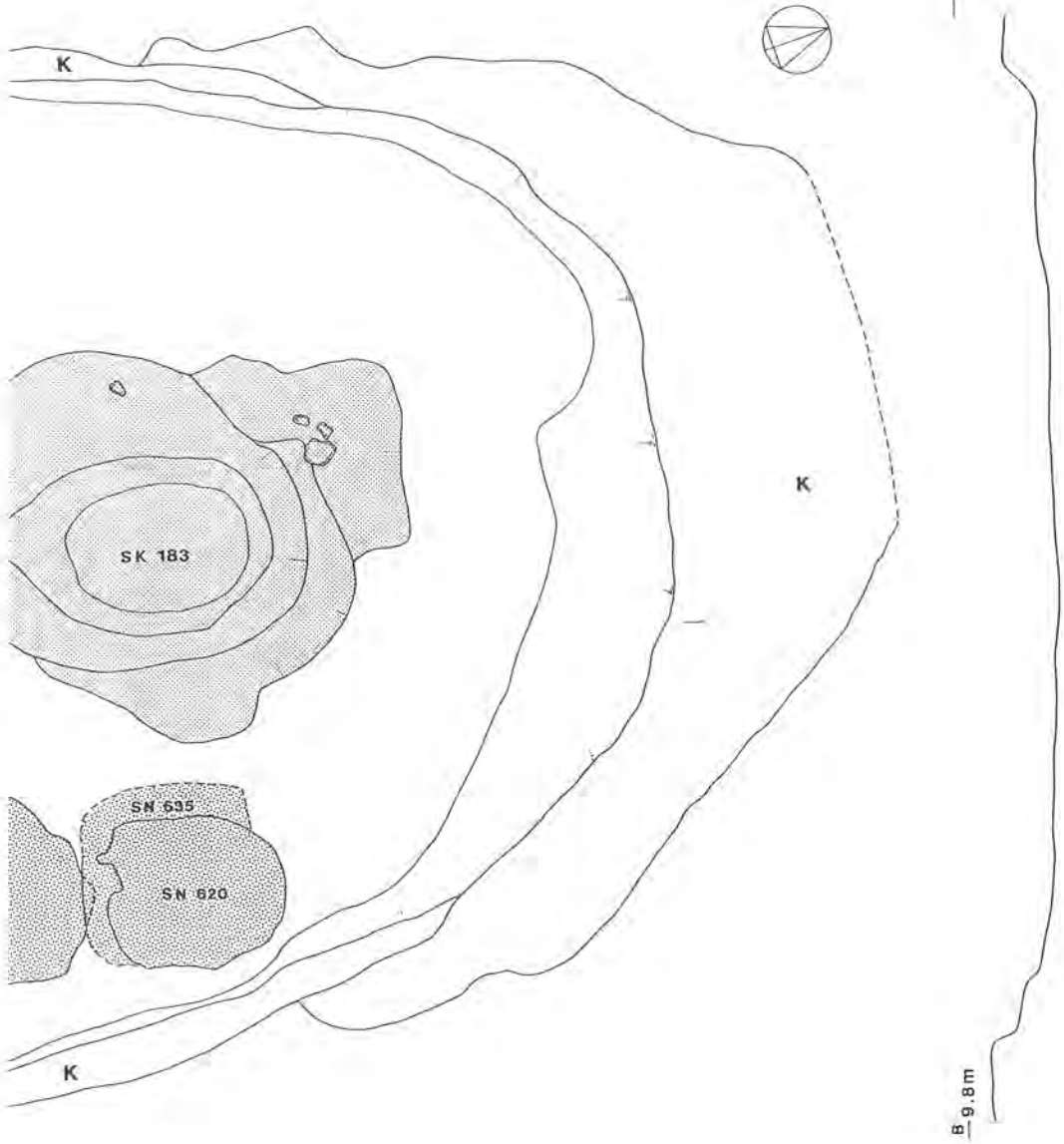
SH 80



A 10.0m



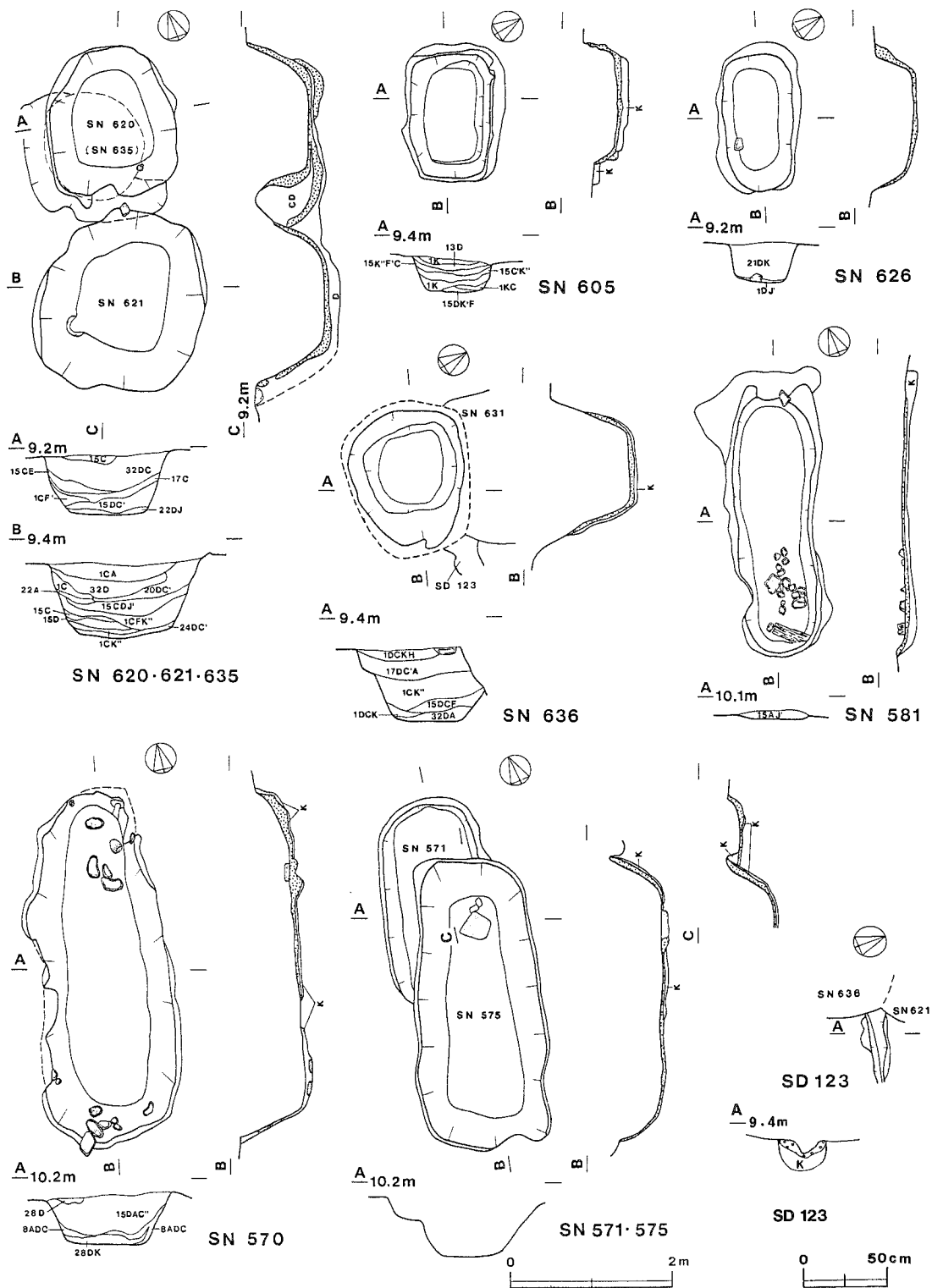
第237図 第80製塩跡釜屋内遺構実測図



鹹水槽一覽表

鹹水槽 番 号	位置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
570	W5d ₉	N-11°-E	楕 円 形	4.28	1.64	0.57	3～15	緩斜	平坦	自然	10.02	IA4b	屋外鹹水槽, 足掛け石1点, 底面一焼石6点, ㊦石8点
571	W5c ₈	N-22°-E	隅丸長方形	2.33	1.25	0.30	3～7	緩斜	平坦	自然	10.01	IVA3a	屋外鹹水槽, 第575号鹹水槽と重複
575	W5c ₈	N-21°-E	隅丸長方形	3.60	1.58	0.45	2～7	緩斜	平坦	自然	9.70	IVA4a	屋外鹹水槽, 底面一石3点, ㊦石2点, 第571号鹹水槽と重複
581	W5a ₇	N-19°-E	隅丸長方形	3.18	1.02	0.03	3～7	緩斜	平坦	自然	9.88	IVA4a	屋外鹹水槽, 底面一焼石2点, 石2点
605	W5e ₆	N-30°-E	隅丸長方形	1.56	0.96	0.56	2～8	緩斜	平坦	自然	9.17	IVA2b	居出場
620	W5c ₇	N-12°-E	楕 円 形	1.85	1.56	0.74	4～12	外傾	平坦	自然	9.16	IA2b	釜屋内鹹水槽, 第635号鹹水槽と重複
621	W5d ₇	N-33°-E	楕 円 形	2.22	1.97	0.93	5～50	外傾	平坦	自然	9.20	IA3b	釜屋内鹹水槽, 第636号鹹水槽と重複
626	W5e ₆	N-12°-E	楕 円 形	1.71	0.87	0.50	2～6	外傾	平坦	自然	9.00	IA2b	居出場
635	W5c ₇	N-18°-E	楕 円 形	(1.60)	(1.47)	0.28	5～9	緩斜	平坦	自然	8.64	IA2a	釜屋内鹹水槽, 第620号鹹水槽と重複
636	W5d ₆	N-55°-W	楕 円 形	1.68	1.40	0.92	4～8	緩斜	平坦	自然	9.31	IA2a	釜屋内鹹水槽, 足掛け石1点, ㊦石3点, 第621号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、居出場、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。本製塩跡は、出土遺物がなく、その時期を明確にすることができなかった。



第238図 第80製塩跡鹹水槽・土樋実測図

第81製塩跡（第239図）

位置 調査区の南部 W5g₉区を中心に確認され、標高9.96m に位置している。

関連遺構 第190号竈，第589・591・610・634・638号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，居出場と釜屋内鹹水槽の重複関係から，2グループに区別できる。第1グループは，第190号竈，釜屋内鹹水槽（591，634）及び居出場（589）で構成されている。第2グループは，竈が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽（591，638）及び居出場（610）で構成されている。

第81製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	W5g ₉	9.96	190	591,634	589	—	—	新
2	W5g ₉	9.96	190	591,638	610	—	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北9.00m，東西9.00m の不定形を呈している。砂上に厚さ30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽3基，南側に居出場2基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 W5f₉区を中心に1基(第190号竈)検出され，平面形は，楕円形を呈している。規模は，長径(6.03)m，短径4.30m，深さ1.72mである。底面から鍋状に立ち上がり，覆土は，上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し，中層から下層にかけては，灰が10～30cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

竈番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模			覆土	標 高 (m)	出 土 遺 物	備 考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
190	W5f ₉	N-69°-E	楕 円 形	(6.03)	4.30	1.72	自然	9.96		

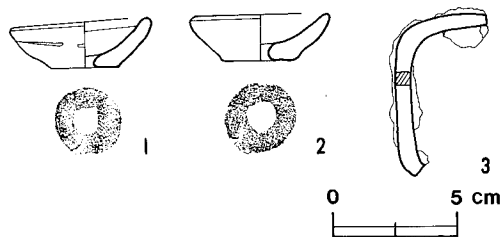
釜屋内鹹水槽 W5g₀区と W5h₉区から3基（第591・634・638号鹹水槽）検出され，平面形は，隅丸長方形を呈している。規模は，長軸(1.18)～2.18m，短軸1.28～1.45m，深さ0.72～1.75mである。底面は平坦で，壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後，黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～10cmの粘土を貼って構築している。第634号鹹水槽の下から第638号鹹水槽を検出していることから，第634号鹹水槽が新しい。

居出場 W5h₈・h₉区から2基（第589・610号鹹水槽）検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.98・1.63m、短軸0.87・(0.59) m、深さ0.50・0.24mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～9 cmの粘土を貼って構築している。第589号鹹水槽の下から第610号鹹水槽が検出されていることから、第589号鹹水槽が新しい。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態分類	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
589	W5h ₈	N-60°-W	隅丸長方形	1.98	0.87	0.50	1～9	外傾	平坦	自然	9.64	IVA2b	居出場、㊸焼石1点、石1点、第610号鹹水槽と重複
591	W5g ₀	N-37°-E	隅丸長方形	2.18	1.28	0.72	1～10	緩斜	平坦	自然	9.50	IVA3b	釜屋内鹹水槽、底面一焼石1点、石1点、土師質土器の皿2点
610	W5h ₈	N-33°-W	隅丸長方形	1.63	(0.59)	0.24	1～5	緩斜	平坦	自然	9.44	IVA2a	居出場、耳金1点、第589号鹹水槽と重複
634	W5h ₈	N-66°-W	隅丸長方形	(1.92)	1.45	1.75	4～10	緩斜	平坦	自然	9.13	IVA2c	釜屋内鹹水槽、第638号鹹水槽と重複
638	W5h ₈	N-66°-W	隅丸長方形	(1.18)	1.32	0.85	5～10	外傾	平坦	自然	8.10	IVA2b	釜屋内鹹水槽、第634号鹹水槽と重複

出土遺物 第591号鹹水槽の覆土上層から土師質土器の皿2点（第240図1・2）、第610号鹹水槽の覆土中から耳金1点（第240図3）が出土している。いずれも周囲からの流れ込みと思われる。



第240図 第81製塩跡出土遺物実測・拓影図

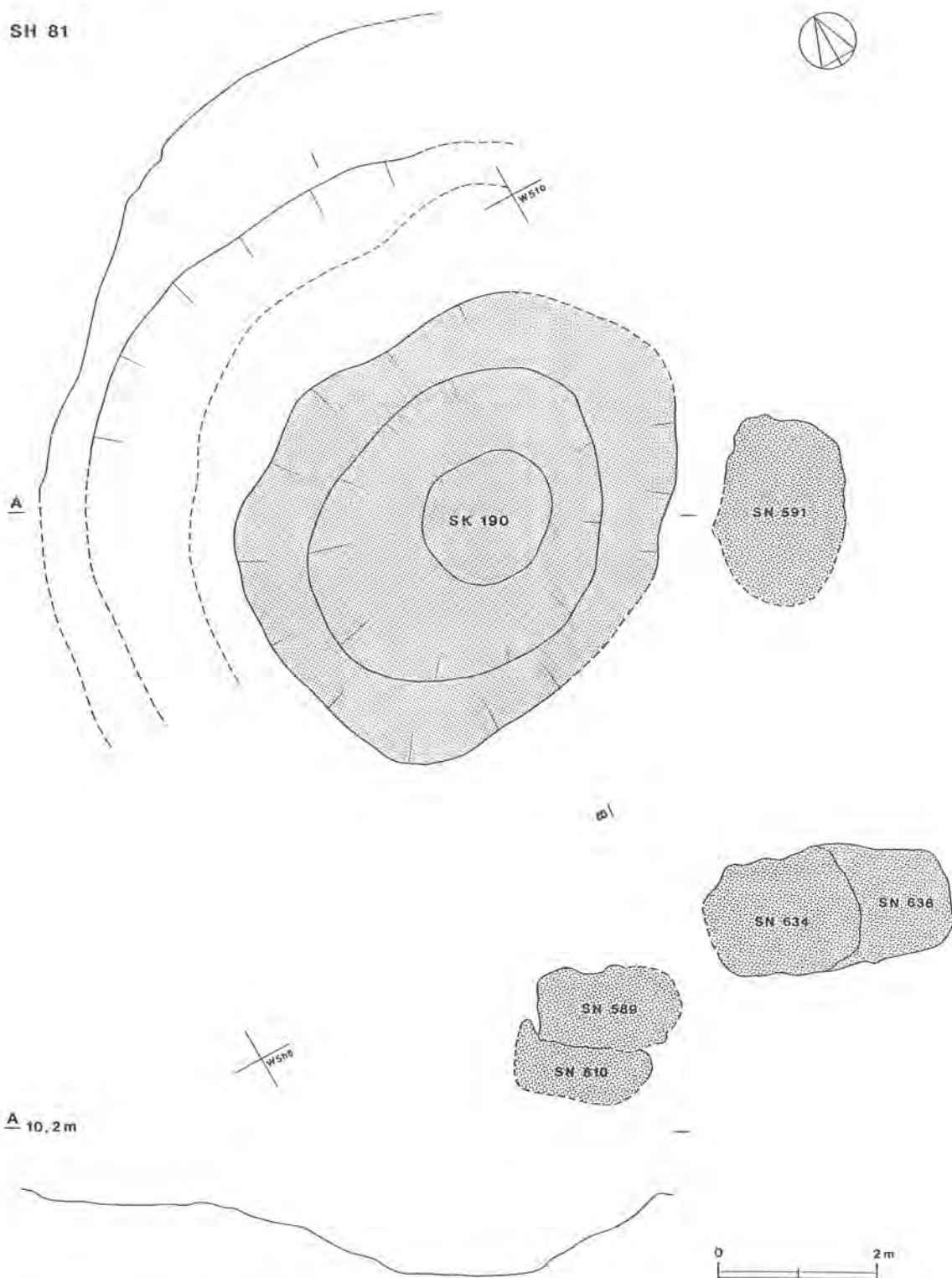
第591号鹹水槽出土土器観察表（第240図1・2）

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	皿 土師質土器	A 5.4	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。底部は使用後に穿孔されている。	水挽き成形。横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・パミス・スコリア 明赤褐色・普通	P22 100% 第591号鹹水槽覆土
		B 2.0				
		C 2.8				
2	皿 土師質土器	A 5.3	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。底部は使用後に穿孔されている。	水挽き成形。横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア・パミス 明赤褐色・普通	P23 100% 第591号鹹水槽覆土
		B 1.9				
		C 3.0				

第610号鹹水槽出土鉄製品一覧表（第240図3）

図版番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
3	耳 金	6.4	0.5	0.7	19.4	第610号鹹水槽	M18 上端部欠損，下端部折れ曲がる。

SH 81



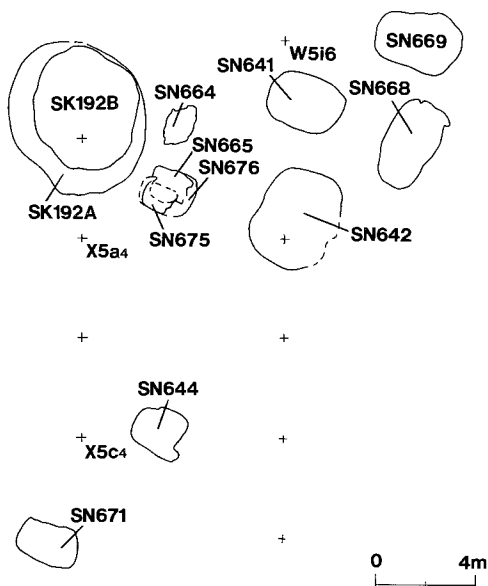
第239図 第81製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は、居出場と釜屋内鹹水槽の重複関係から、第1グループが新しい。この製塩跡の時期は、第591号鹹水槽の覆土上層から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土しているが、周囲からの流れ込みと思われ、その時期を明確にすることができなかった。

第82製塩跡（第241図）

位置 調査区の南部 X5a₄区を中心に確認され、標高8.82m に位置している。

関連遺構 第192号竈（A・B）、第641・642・644・664・665・668・669・671・675・676号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は、竈と釜屋内鹹水槽の配置の違いから、3グループに区別できる。第1グループは、第192号竈A、釜屋内鹹水槽（664, 665）及び屋外鹹水槽（642, 668）で構成されている。第2グループは、竈が第1グループと同一で、釜屋内鹹水槽（664, 675）及び屋外鹹水槽（644, 669）で構成されている。第3グループは、第192号竈B、釜屋内鹹水槽（664, 676）及び屋外鹹水槽（641, 671）で構成されている。



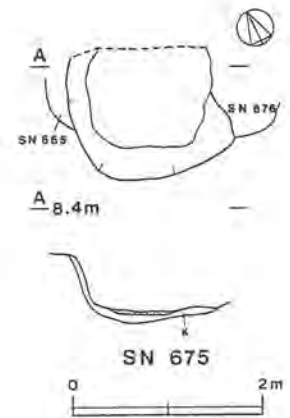
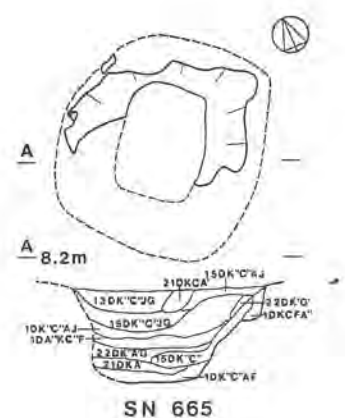
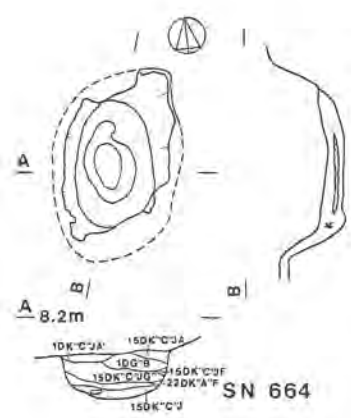
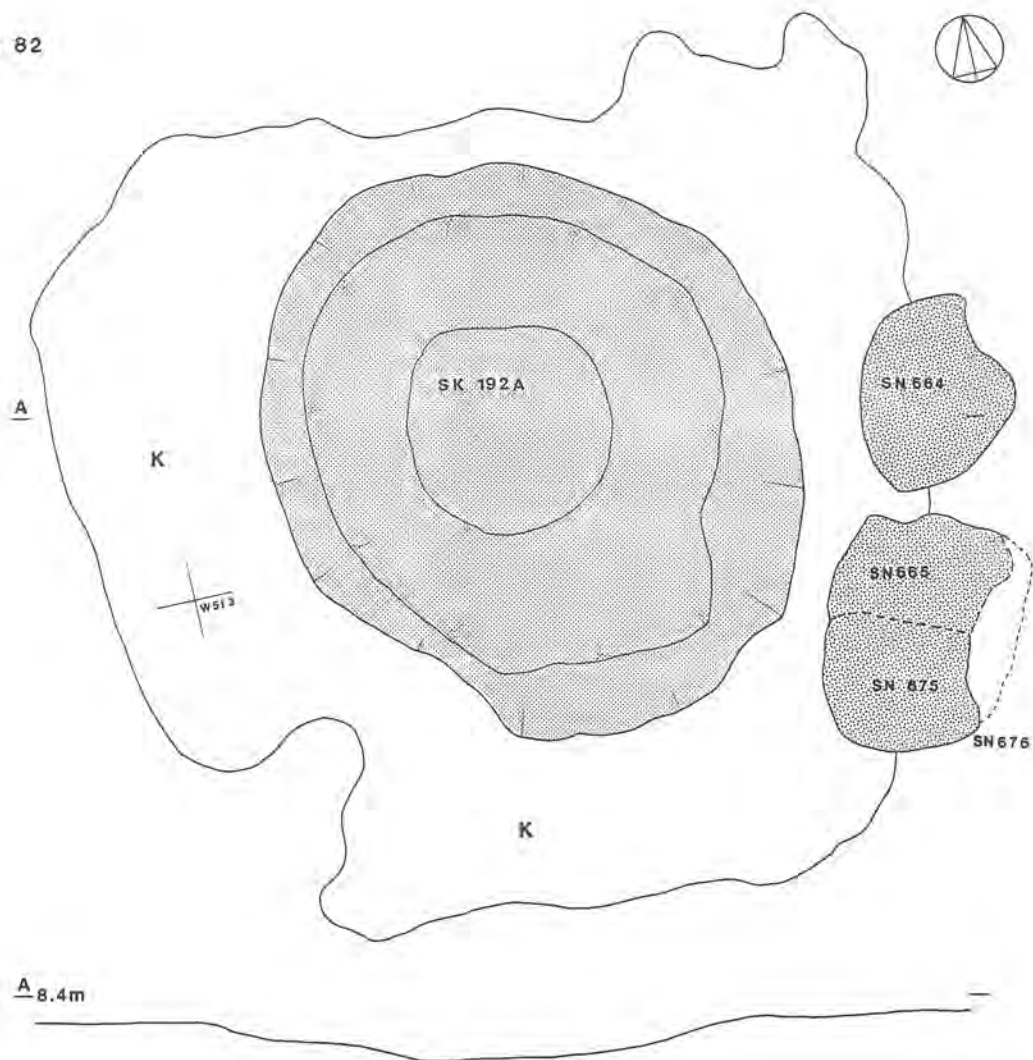
第241図 第82製塩跡遺構配置図

第82製塩跡一覧表

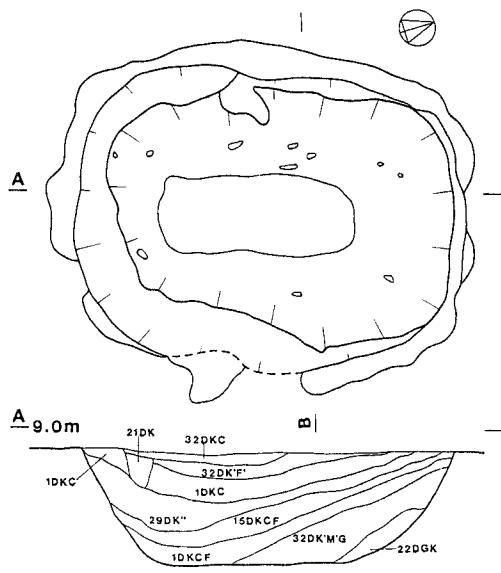
グループ番号	位置	標高(m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽(号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	X5a ₄	8.82	192A	664,665	—	642,668	—	最新
2	X5a ₄	8.82	192A	664,675	—	644,669	—	第1グループより古い
3	X5a ₄	8.82	192B	664,676	—	641,671	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北16.90m、東西13.30mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽4基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

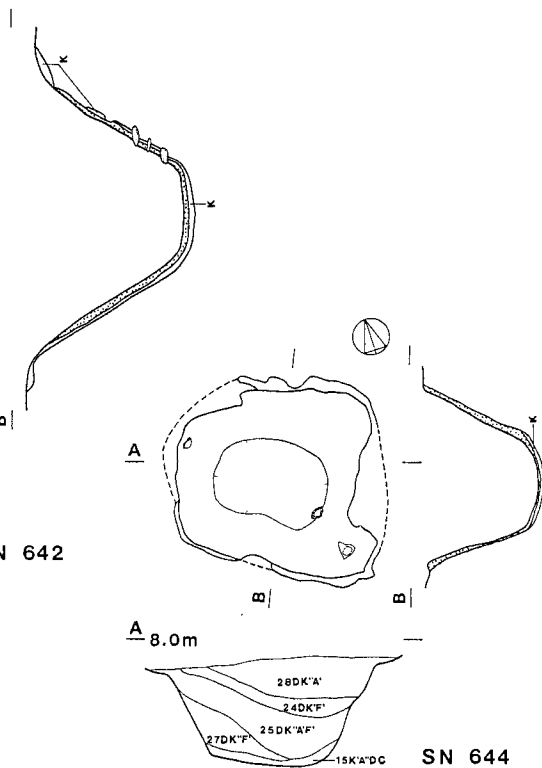
SH 82



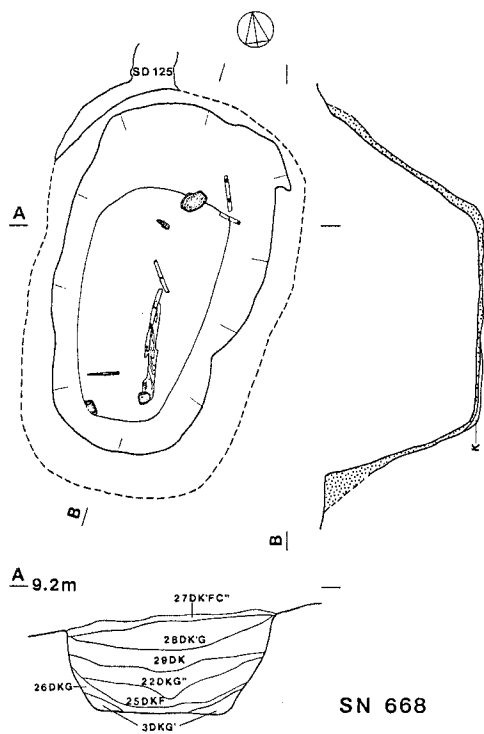
第242図 第82製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



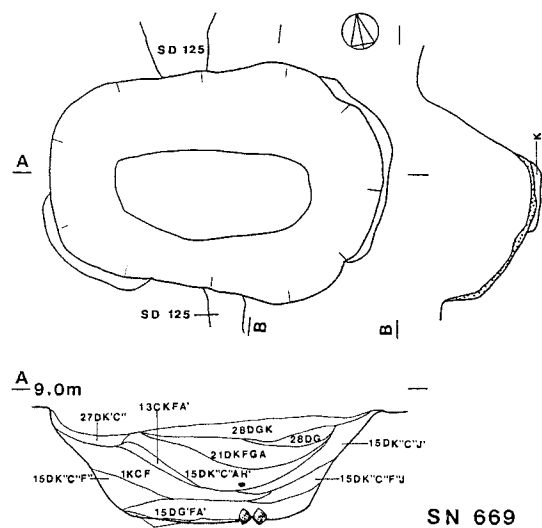
SN 642



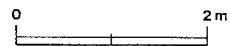
SN 644



SN 668



SN 669



第243图 第82製塩跡鹹水槽実測図

竈 W5i₃区を中心に2基(第192号竈A・B)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径6.30・4.32m、短径5.48・4.15m、深さ0.40・0.87mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が20～50cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第192号竈Aの下から第192号竈Bが検出されていることから、第192号竈Aが新しい。

竈一覧表

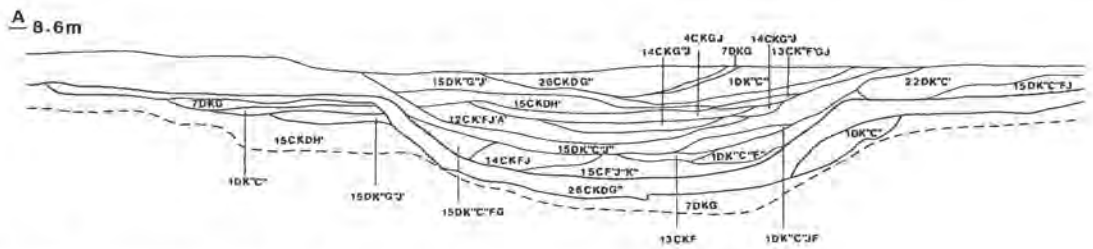
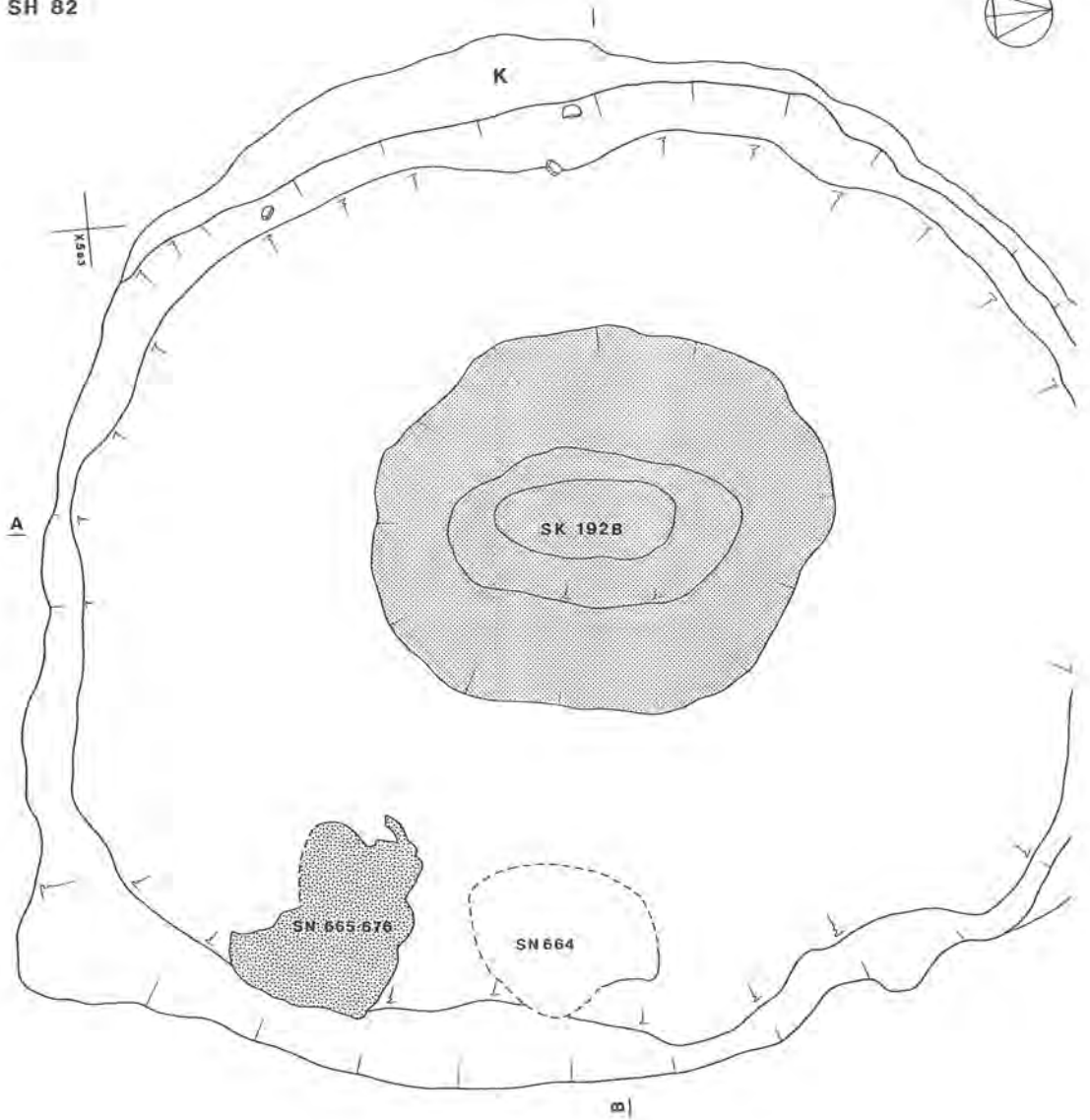
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
192A	W5i ₃	N-12°-W	楕円形	6.30	5.48	0.40	自然	8.18		
192B	W5i ₃	N-6°-E	楕円形	4.32	4.15	0.87	自然	7.86	㊦焼石3点	

釜屋内鹹水槽 W5i₅区とW5j₄区から4基(第664・665・675・676号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径](1.20)～1.94m、短軸[径]1.18～1.70m、深さ0.68～1.02mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2～25cmの粘土を貼って構築している。第665号鹹水槽の下から第675・676号鹹水槽を検出していることから、第665号鹹水槽が最も新しく、次いで第675号鹹水槽、第676号鹹水槽の順に古くなる。

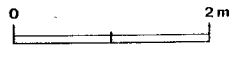
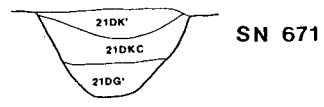
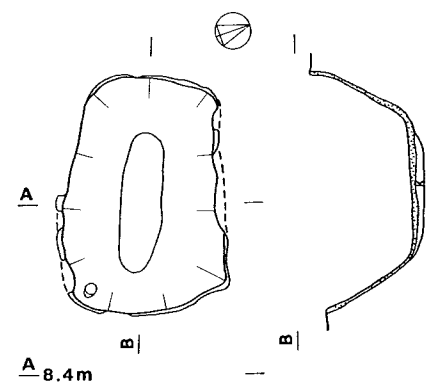
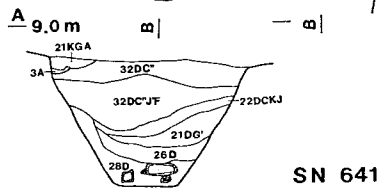
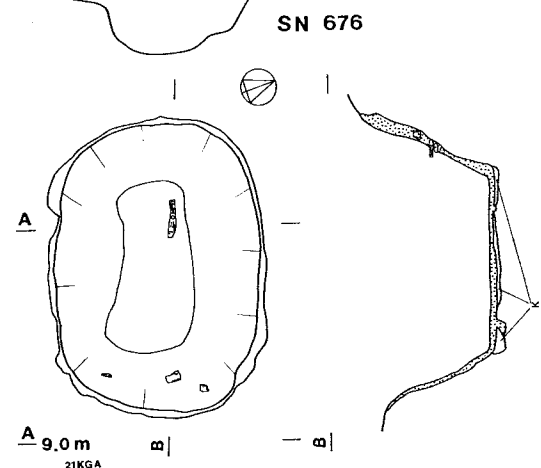
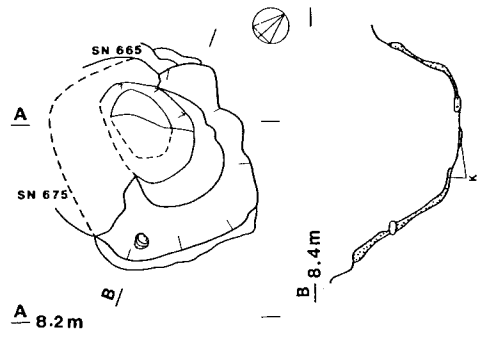
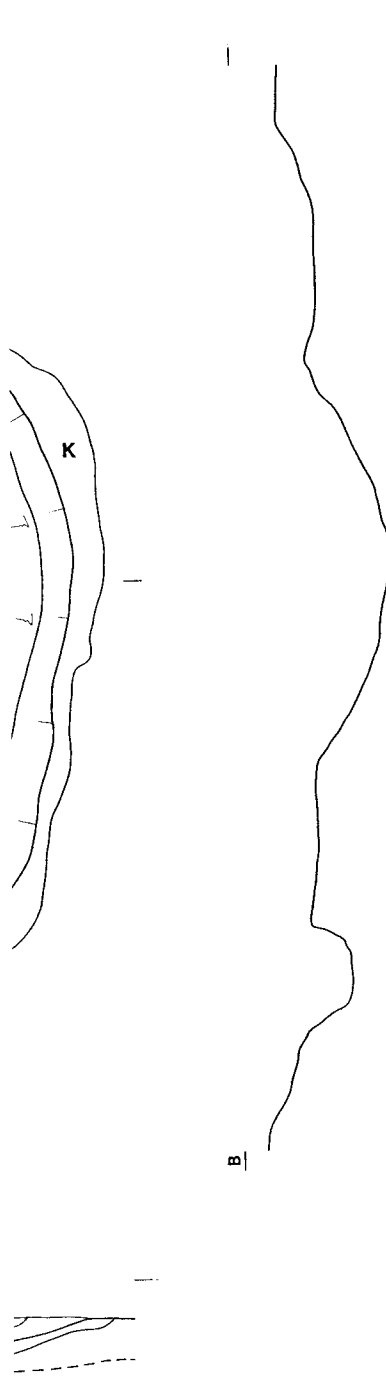
屋外鹹水槽 W5i₆・i₇区・W5j₆・j₇区・X5b₄区・X5d₃区の6か所から6基(第641・642・644・668・669・671号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径]1.95～3.96m、短軸[径]1.73～3.16m、深さ1.00～1.70mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1～14cmの粘土を貼って構築している。

出土遺物 第668号鹹水槽の覆土中から竹片5点、石2点が出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、3期にわたって操業されていたものと思われる。この三つのグループの新旧関係は、竈、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の配置の違いから、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第668号鹹水槽から竹片が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。



第244図 第02製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



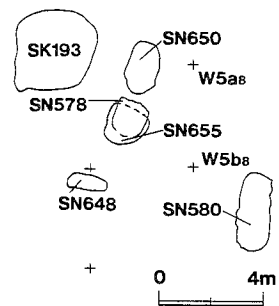
鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
641	W5i ₆	N-72°-W	隅丸長方形	3.03	2.18	1.32	3~14	緩斜	平坦	自然	8.69	IVA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点， [㊦] 石3点
642	W5j ₆	N-28°-E	隅丸長方形	3.96	3.16	1.70	3~9	緩斜	平坦	自然	8.82	IVA4c	屋外鹹水槽， [㊦] 石11点
644	X5b ₁	N-68°-W	楕円形	1.95	1.92	1.13	1~10	緩斜	平坦	自然	7.76	IA2c	屋外鹹水槽，足掛け石 [㊦] 石2点
664	W5i ₅	N-36°-E	楕円形	1.94	1.18	0.68	8~25	外傾	平坦	自然	8.02	IA2b	釜屋内鹹水槽
665	W5j ₁	N-38°-E	隅丸長方形	(1.20)	1.54	1.02	6~16	緩斜	平坦	自然	7.95	IVA2c	釜屋内鹹水槽，第675・676号鹹水槽と重複
668	W5j ₇	N-23°-E	隅丸長方形	3.74	2.15	1.45	2~12	緩斜	平坦	自然	8.86	IVA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点， [㊦] 石2点，竹5点
669	W5i ₇	N-76°-W	隅丸長方形	3.56	2.48	1.22	1~7	緩斜	平坦	自然	8.82	IVA4c	屋外鹹水槽，足掛け石1点，底面一石2点
671	X5d ₃	N-67°-W	隅丸長方形	2.48	1.73	1.00	2~8	緩斜	平坦	自然	7.22	IVA3c	屋外鹹水槽，足掛け石 [㊦] 石
675	W5j ₁	N-69°-W	隅丸長方形	(1.64)	1.38	—	3~5	—	平坦	自然	7.92	IVA2a	釜屋内鹹水槽，第665・676号鹹水槽と重複，底面だけ検出
676	W5j ₄	N-74°-W	隅丸長方形	1.85	1.70	0.82	2~9	緩斜	平坦	自然	7.60	IVA2b	釜屋内鹹水槽，第665・675号鹹水槽と重複

第83製塩跡（第245図）

位置 調査区の南部 W5a₇区を中心に確認され、標高9.88m に位置している。

関連遺構 第193号竈，第578・580・648・650・655号鹹水槽で構成されている。これらの遺構は，釜屋内鹹水槽の重複関係から2グループに区別できる。第1グループは，第193号竈，釜屋内鹹水槽（578，650），居出場（648）及び屋外鹹水槽（580）で構成されている。第2グループは，竈，居出場及び屋外鹹水槽が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽（650，655）で構成されている。

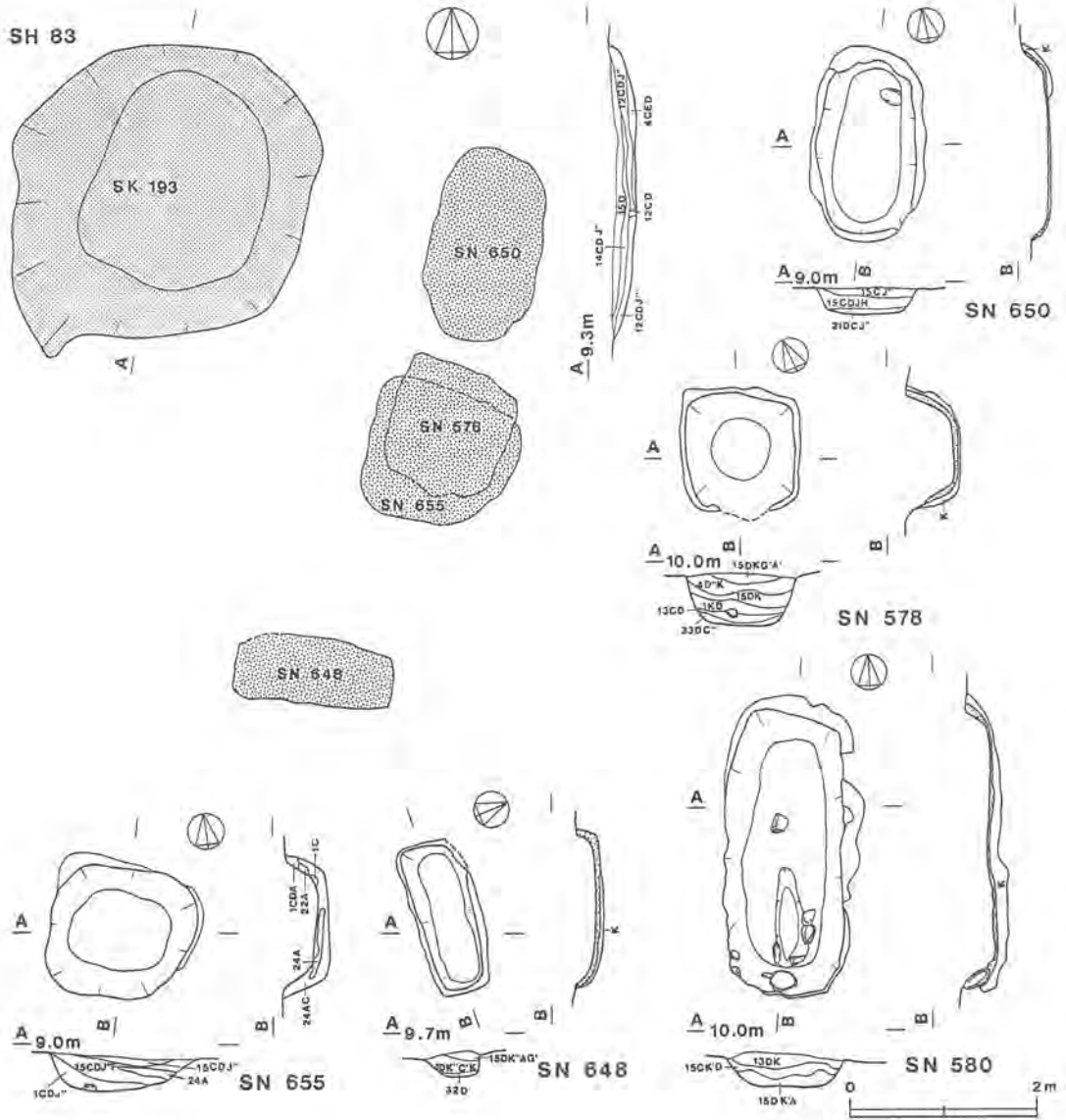


第245図 第83製塩跡遺構配置図

第83製塩跡一覧表

グループ 番号	位置	標高 (m)	釜 屋 内 施 設			屋外の鹹水槽 (号)	土 樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	W5a ₇	9.88	193	578.650	648	580	—	新
2	W5a ₇	9.88	193	650.655	648	580	—	古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は，南北12.00m，東西10.60m の不定形を呈している。砂上に厚さ10~20cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈1基，東側に鹹水槽3基，南側に居出場1基が位置している。しかし，この黒色土の地盤を調査しても，建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って，釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。



第246図 第83製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

竈 V5j₆区を中心に1基(第193号竈)検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径3.90m、短径3.25m、深さ0.14mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10~15cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。

竈一覧表

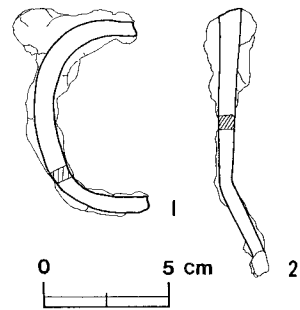
竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高(m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
193	V5j ₆	N-44°-E	楕円形	3.90	3.25	0.14	自然	9.04	◎耳金1点	

釜屋内鹹水槽 W5a7区から3基(第578・650・655号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.30~2.06m、短軸1.16~1.40m、深さ0.26~0.53mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~7cmの粘土を貼って構築している。第578号鹹水槽の下から第655号鹹水槽を検出していることから、第578号鹹水槽が新しい。

居出場 W5b₆区から1基(第648号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸1.62m、短軸0.61m、深さ0.22mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ3~14cmの粘土を貼って構築している。

屋外鹹水槽 W5b₈区から1基(第580号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸3.00m、短軸1.28m、深さ0.27mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~10cmの粘土を貼って構築している。

出土遺物 第193号竈の覆土中から耳金1点(第247図1)、第648号鹹水槽の覆土中からも吊金具1点(第247図2)と鉄片1点が出土している。鹹水槽から出土している吊金具と鉄片は周囲からの流れ込みと思われる。



第247図 第83製塩跡
出土遺物実測図

第193号竈出土鉄製品一覧表（第247図1）

図版番号	名称	法 量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
1	耳金	7.8	0.5	0.6	50.6	第193号竈	M16 断面長方形，両端部折れ曲がる。

第648号鹹水槽出土鉄製品一覧表（第247図2）

図版番号	名称	法 量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
2	吊金具	10.8	0.9	0.7	31.1	第648号鹹水槽	M19 上端部欠損。

鹹水槽一覧表

鹹水槽番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土の厚さ(cm)	壁面	底面	覆土	標高(m)	形態分類	備考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)							
578	W5a	N-27°-E	隅丸長方形	1.30	1.16	0.53	3~7	外傾	平坦	自然	9.88	IVA2b	釜屋内鹹水槽，第655号鹹水槽と重複
580	W5ba	N-7°-E	隅丸長方形	3.00	1.28	0.27	2~10	緩斜	平坦	自然	9.73	IVA4a	屋外鹹水槽，底面-石5点，(石)4点
648	W5ba	N-80°-W	隅丸長方形	1.62	0.61	0.22	3~14	緩斜	平坦	自然	9.44	IVA2a	居出場，底面-鉄片1点，(吊金)具1点
650	W5a	N-17°-E	隅丸長方形	2.06	1.22	0.26	2~5	緩斜	平坦	自然	8.94	IVA3a	釜屋内鹹水槽
655	W5a	N-71°-W	隅丸長方形	1.54	1.40	0.38	1~7	緩斜	平坦	自然	8.82	IVA2a	釜屋内鹹水槽，第578号鹹水槽と重複

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが，2期にわたって操業されていたものと思われる。この二つのグループの新旧関係は，釜屋内鹹水槽の重複関係から，第1グループが新しい。この製塩跡の時期は，第193号竈から耳金，第648号鹹水槽から吊金具が出土しているが，その時期を明確にすることができなかった。

第84製塩跡（第248図）

位置 調査区の南部 W5e区を中心に確認され，標高9.32m に位置している。

関連遺構 第194号竈（A・B），第639・646・647・651・654・656~661・666・667・672・673・677・678号鹹水槽及び第132~137・140・141号土樋で構成されている。これらの遺構は，居出場，釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の重複関係から，5グループに区別できる。第1グループは，第194号竈A，釜屋内鹹水槽（666，667），居出場（639）及び屋外鹹水槽（651，659，660）で構成されている。第2グループは，竈と釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽が第1グループと同一で，居出場（657）及び土樋（135，140）で構成されている。第3グループは，竈が第1グループと同一で，釜屋内鹹水槽（667，673），居出場（661），屋外鹹水槽（651，654，659，660）及び土樋（132，135，140）で構成されている。第4グループは，第194号竈B，釜屋内鹹水槽（673，677），居出場（656），

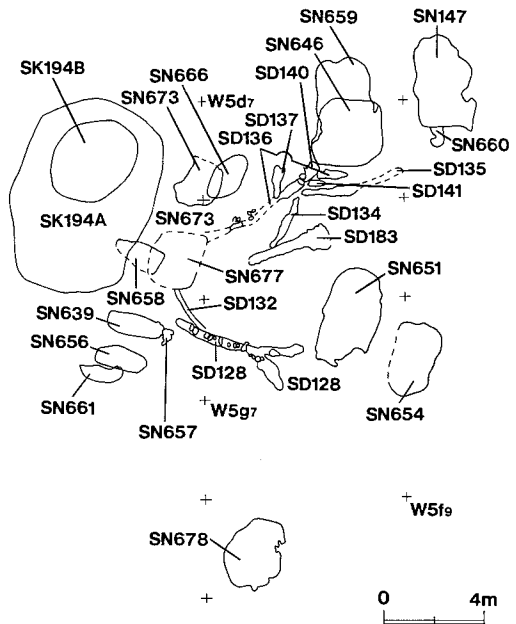
屋外鹹水槽（646, 647, 654, 672, 678）及び土樋（132）で構成されている。第5グループは、竈、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽が第4グループと同一で、居出場（658）で構成されている。第133・134・136・137・141号土樋は部分的なため、グルーピングできなかった。

第84製塩跡一覧表

グループ番号	位置	標高(m)	釜屋内施設			屋外の鹹水槽(号)	土樋(号)	新旧関係
			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)			
1	W5e ₆	9.32	194A	666,667	639	651,659,660	—	最新
2	W5e ₆	9.32	194A	666,667	657	651,659,660	135,140	第1グループより古い
3	W5e ₆	9.32	194A	667,673	661	651,654,659,660	132,135,140	第1・2グループより古い
4	W5e ₆	9.32	194B	673,677	656	646,647,654,672,678	132	第1～3グループより古い
5	W5e ₆	9.32	194B	673,677	658	646,647,654,672,678	—	最古

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北15.80m、東西11.50mの不定形を呈している。砂上に厚さ10～30cmの灰と貝殻片混じりの黒色土を貼りつけて釜屋の地盤を構築している。中央部に竈2基、東側に鹹水槽4基、南側に居出場5基が位置している。しかし、この黒色土の地盤を調査しても、建屋を示す柱穴等は検出することができなかった。従って、釜屋の規模と形状等の詳細については不明である。

竈 W5d₅区を中心に2基（第194号竈A・B）検出され、平面形は、楕円形を呈している。規模は、長径7.90・3.67m、短径4.50・2.98m、深さ0.14・0.86mである。底面から鍋状に立ち上がり、覆土は、上層に周辺から流れ込んだと思



第248図 第84製塩跡遺構配置図

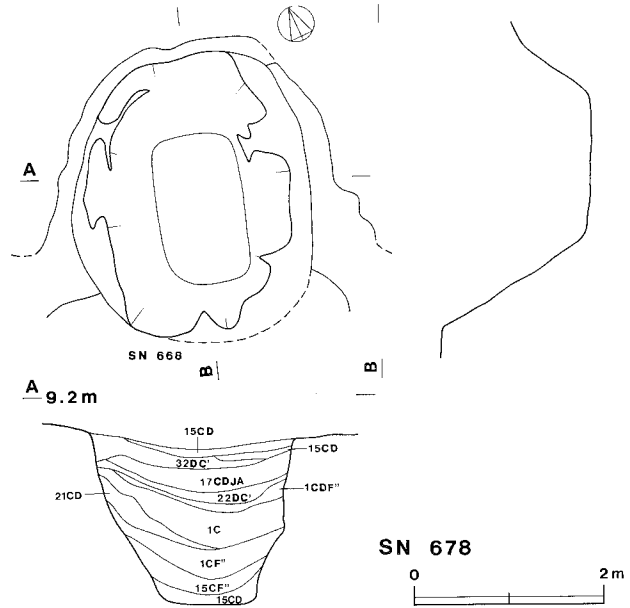
われる砂が自然堆積し、中層から下層にかけては、灰が10～60cmの厚さで堆積している。火床直下の砂は長時間火熱を受けて赤変している。二つの竈の新旧関係は、第194号竈Aの下から第194号竈Bを検出していることから、第194号竈Aが新しい。

竈一覧表

竈番号	位置	長径方向	平面形	規模			覆土	標高 (m)	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
194A	W5e _s	N-37°-E	楕円形	7.90	4.50	0.14	自然	9.04		
194B	W5d _s	N-15°-E	楕円形	3.67	2.98	0.86	自然	8.68		

釜屋内鹹水槽 W5d_s・d₇区・W5e_s区

の3か所から4基(第666・667・673・677号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、長軸(1.90)~(2.14)m、短軸(1.23)~1.74m、深さ0.72~1.00mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~9cmの粘土を貼って構築している。第666・667号鹹水槽の下から第673・677号鹹水槽を検出していることから、第666・667号鹹水槽が新しい。

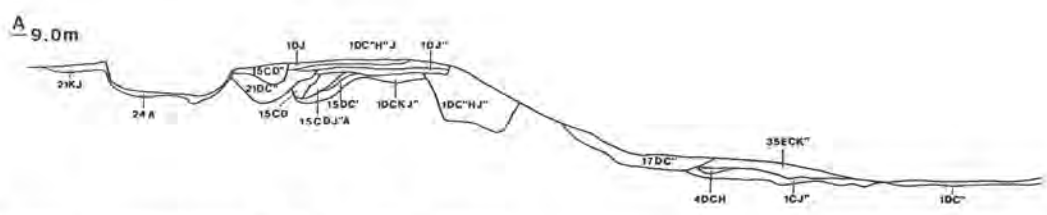
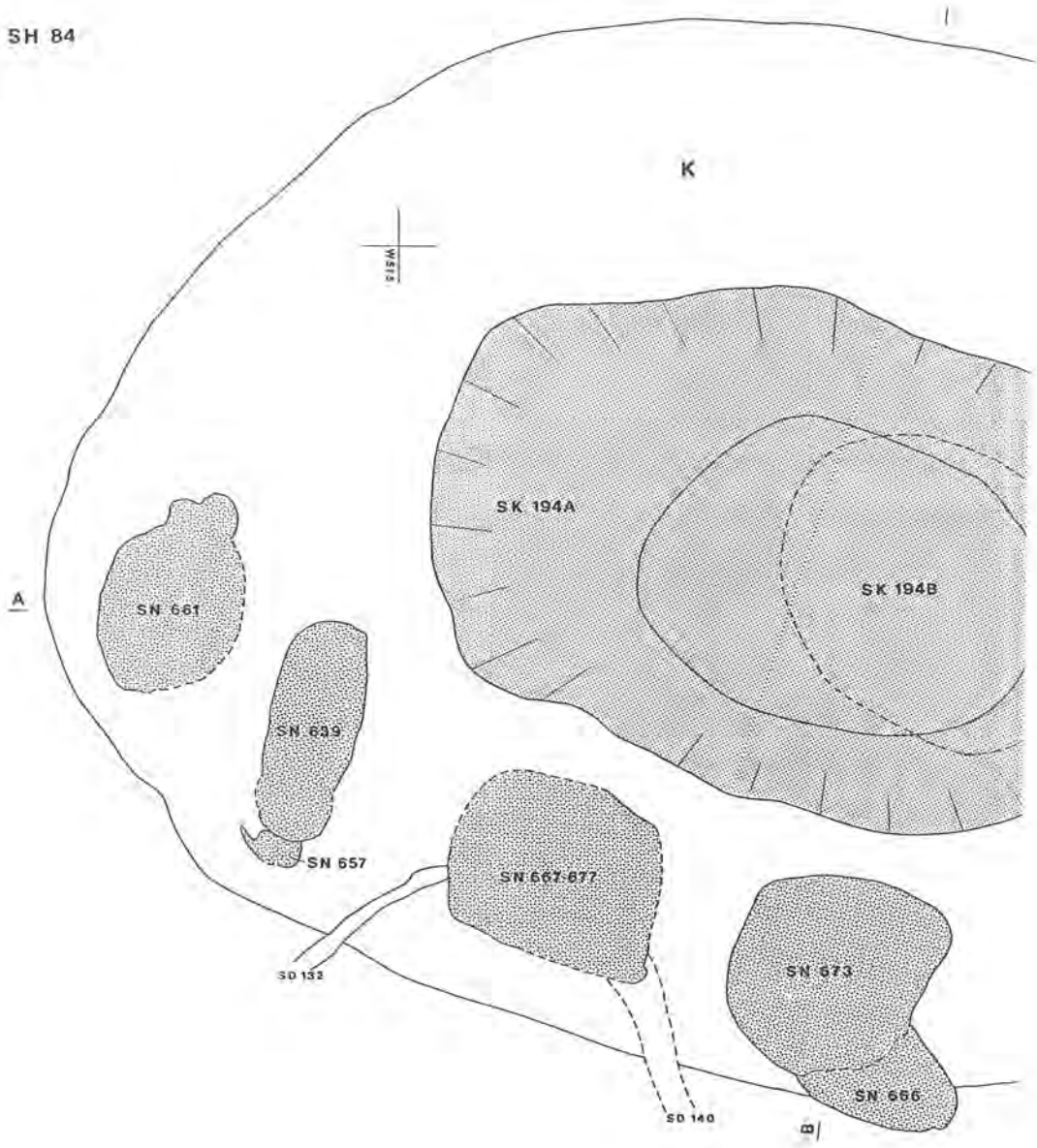


第252図 第84製塩跡鹹水槽実測図

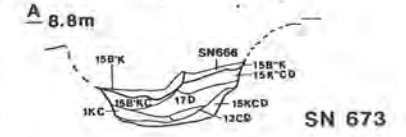
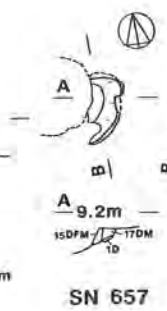
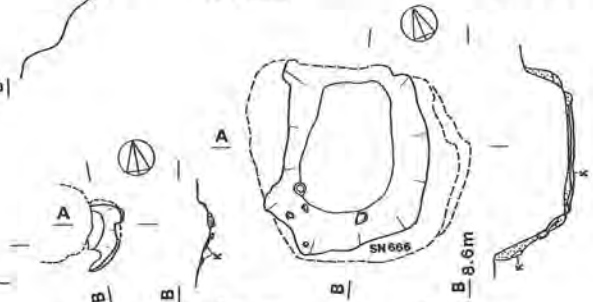
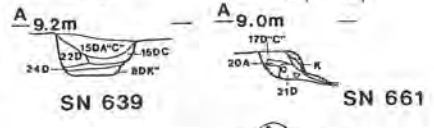
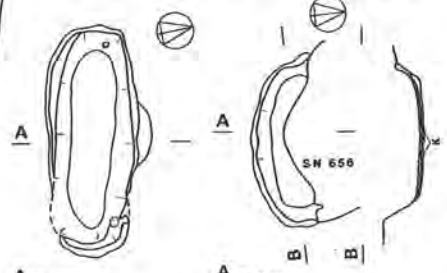
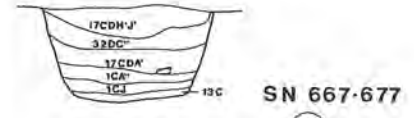
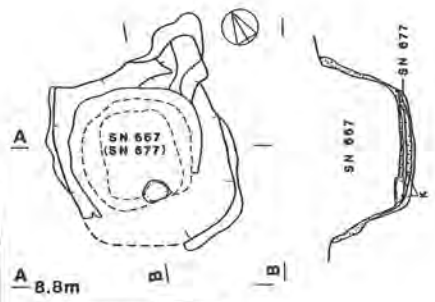
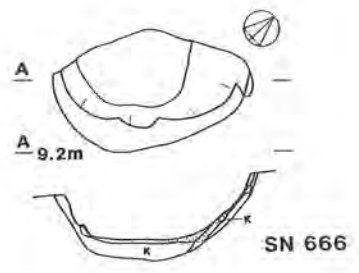
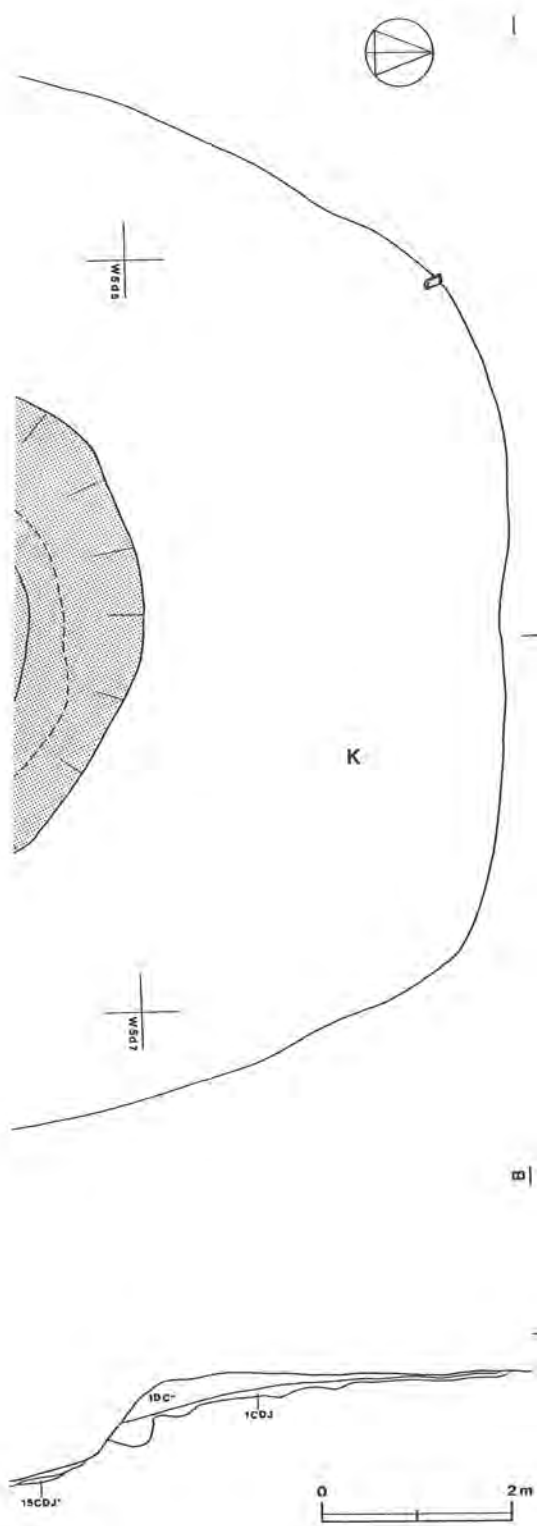
居出場 W5e_s区とW5f_s区から5基(第639・656~658・661号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸(0.66)~2.30m、短軸(0.31)~(0.98)m、深さ0.12~0.44mである。底面は平坦で、壁は外傾及び緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ1~10cmの粘土を貼って構築している。第639・661号鹹水槽の下から第656・657号鹹水槽が検出されていることから、第639・661号鹹水槽が新しい。

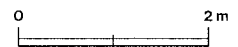
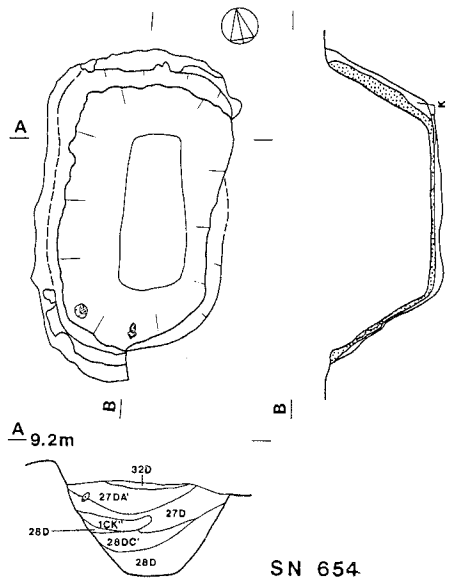
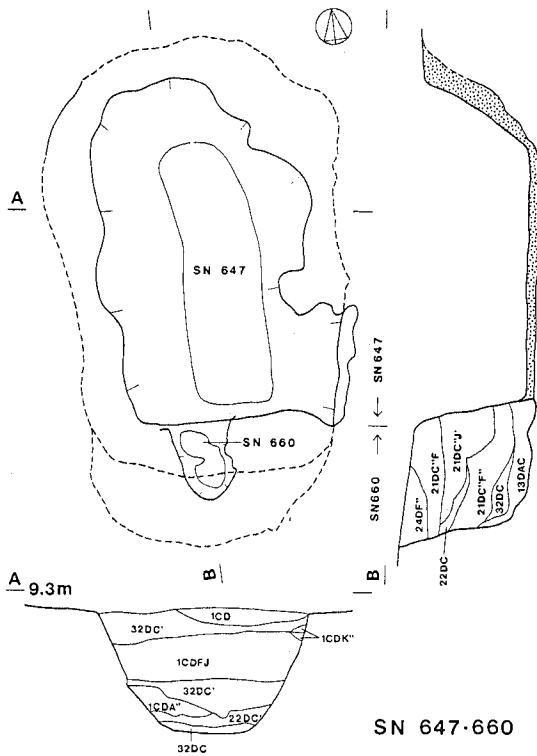
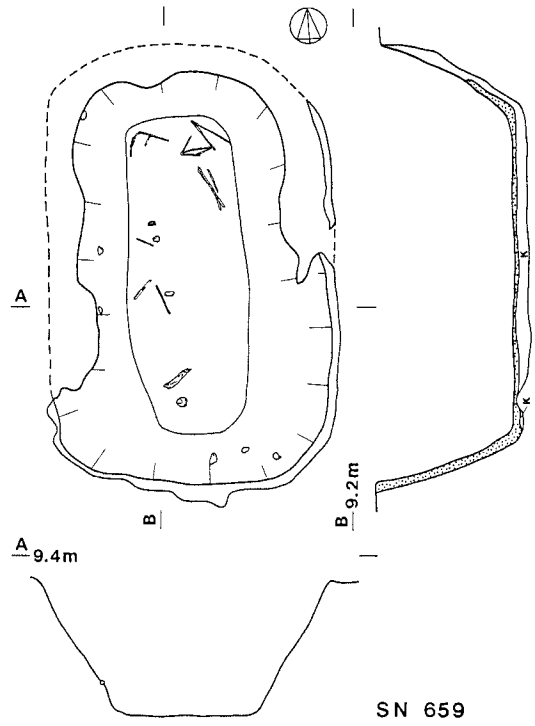
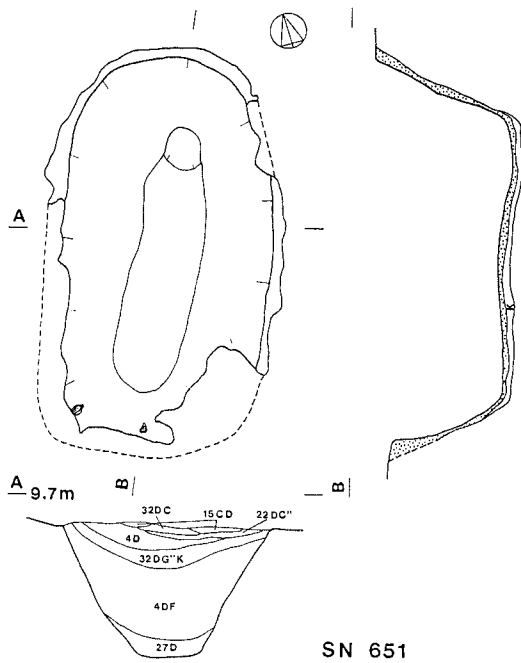
屋外鹹水槽 W5c₉区・W5d_s・d₉区・W5f₇~f₉区・W5h₇区の7か所から8基(第646・647・651・654・659・660・672・678号鹹水槽)検出され、平面形は、隅丸長方形と楕円形を呈している。規模は、長軸[径](1.29)~4.38m、短軸[径]1.73~2.90m、深さ0.94~1.70mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同じように黒色土を丁寧に貼った上に厚さ2~16cmの粘土を貼って構築している。第651・659・660号鹹水槽の下から第646・647・672号鹹水槽が検出されていることから、第651・659・660号鹹水槽が新しい。

SH 84

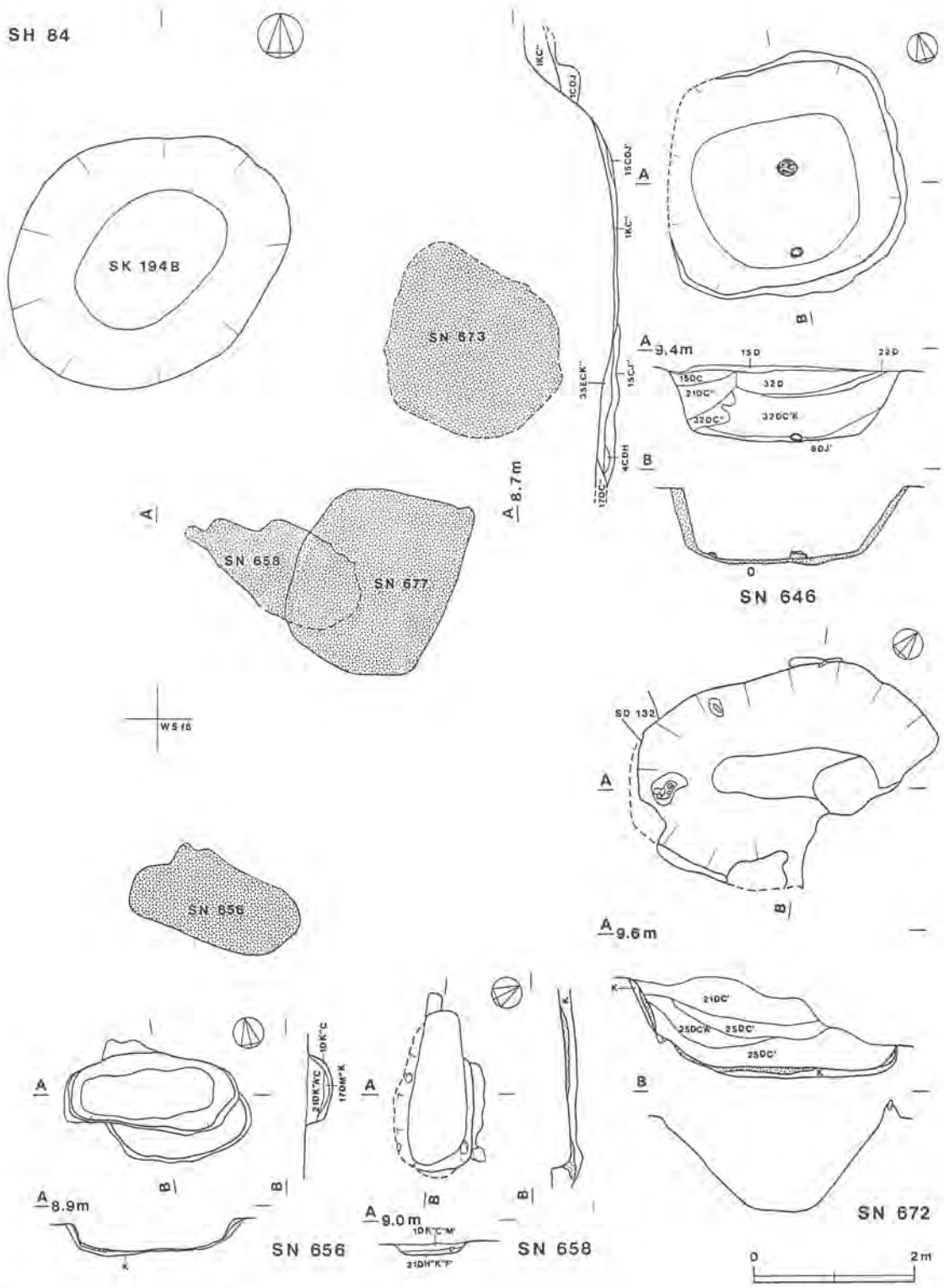


第249図 第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図

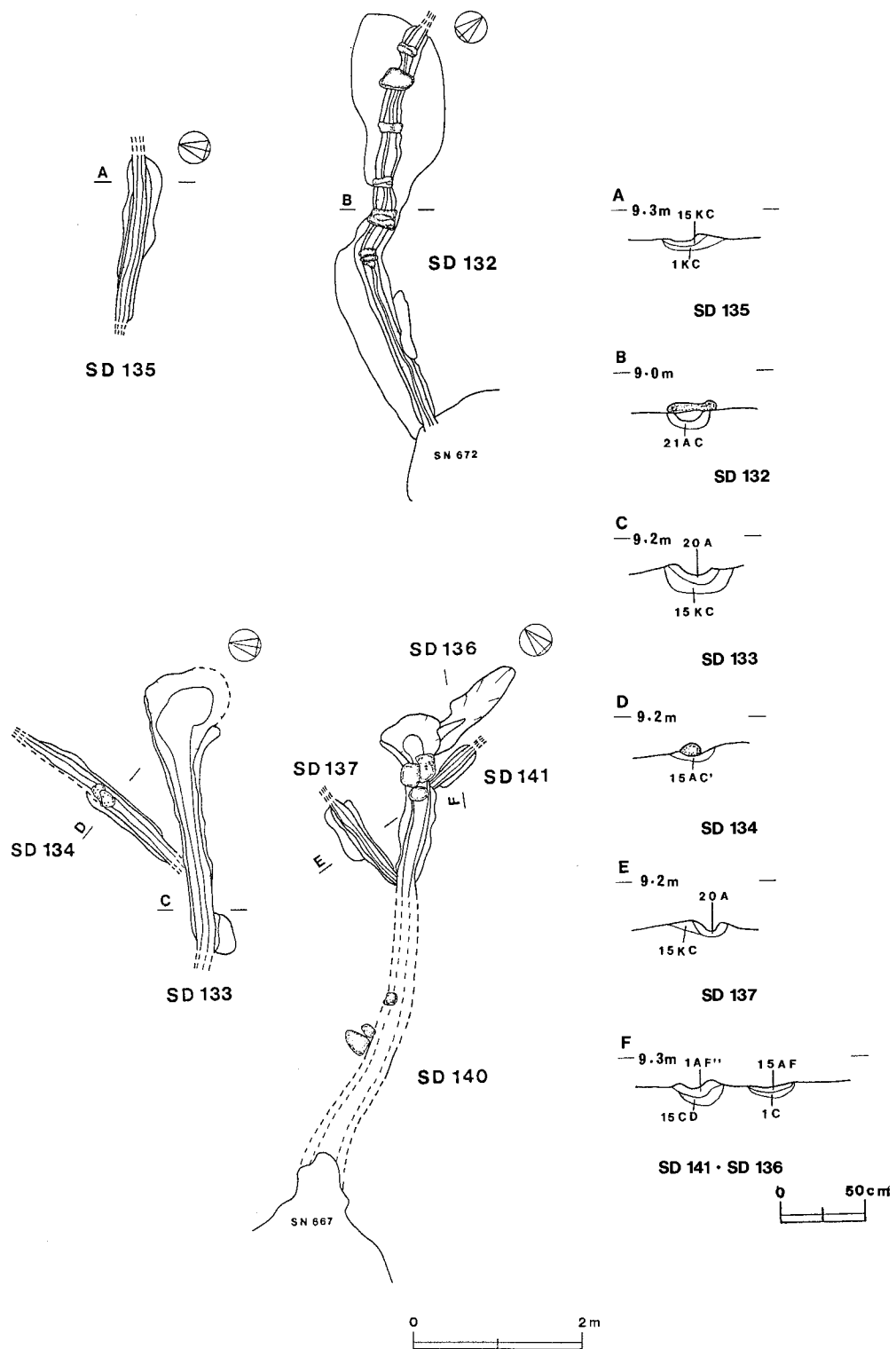




第250图 第84製塩跡鹹水槽実測图



第251図 第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第253図 第84製塩跡土樋実測図

鹹水槽一覧表

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
639	W5f ₆	N-72°-W	隅丸長方形	2.30	0.88	0.44	3~9	外傾	平坦	自然	9.12	IVA3a	居出場、㊟石2点、第657号鹹水槽と重複
646	W5d ₈	N-5°-E	隅丸長方形	2.72	2.67	0.94	3~23	緩斜	平坦	自然	9.10	VA3b	屋外鹹水槽、底面一石2点、㊟石1点、第659号鹹水槽と重複
647	W5e ₉	N-5°-W	隅丸長方形	3.65	2.20	1.25	3~5	緩斜	平坦	自然	9.08	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、第660号鹹水槽と重複
651	W5f ₈	N-23°-E	隅丸長方形	4.04	2.22	1.40	2~16	外傾	平坦	自然	9.32	IVA4c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、㊟石1点、第672号鹹水槽と重複
654	W5f ₉	N-13°-E	隅丸長方形	2.98	1.73	1.08	3~13	緩斜	平坦	自然	8.78	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、㊟石1点
656	W5f ₆	N-75°-W	楕円形	2.04	0.93	0.41	1~4	緩斜	平坦	自然	8.74	IA3a	居出場、第661号鹹水槽と重複
657	W5f ₆	N-5°-E	隅丸長方形	(0.66)	(0.31)	0.12	1~2	緩斜	平坦	自然	9.00	IVA1a	居出場、底面一石1点、第639号鹹水槽と重複
658	W5e ₆	N-62°-W	隅丸長方形	(2.00)	(0.98)	0.13	3~10	緩斜	平坦	自然	8.71	IVA3a	居出場、㊟石3点、㊟石1点
659	W5d ₈	N-1°-W	隅丸長方形	4.38	2.90	0.14	3~15	外傾	平坦	自然	9.18	IVA4c	屋外鹹水槽、底面一石3点、㊟石6点、竹片6点、木片2点、第646号鹹水槽と重複
660	W5d ₉	N-2°-W	楕円形	(1.29)	2.25	1.03	—	外傾	皿状	自然	9.10	IA2c	屋外鹹水槽、第647号鹹水槽と重複
661	W5f ₆	N-87°-W	楕円形	1.63	(0.68)	0.38	1~5	外傾	平坦	自然	8.78	IA2a	居出場、第656号鹹水槽と重複
666	W5d ₇	N-20°-E	隅丸長方形	(1.90)	(1.23)	0.72	3~6	緩斜	平坦	自然	8.98	IVA2b	釜屋内鹹水槽、㊟石3点、第673号鹹水槽と重複
667	W5e ₉	N-22°-E	隅丸長方形	(2.14)	1.74	1.00	2~9	緩斜	平坦	自然	8.49	IVA3c	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、第677号鹹水槽と重複
672	W5f ₇	N-43°-E	楕円形	3.78	(2.68)	1.30	3~8	緩斜	平坦	自然	9.12	IA3c	屋外鹹水槽、第651号鹹水槽と重複
673	W5d ₈	N-31°-E	隅丸長方形	(1.95)	1.50	0.80	2~8	外傾	平坦	自然	8.76	IVA2b	釜屋内鹹水槽、足掛け石1点、㊟石1点、第666号鹹水槽と重複
677	W5e ₈	N-22°-E	隅丸長方形	(2.14)	1.74	—	—	—	平坦	—	7.49	IVA3a	釜屋内鹹水槽、第667号鹹水槽と重複、底面だけ検出
678	W5h ₇	N-15°-E	隅丸長方形	2.98	2.56	1.70	2~7	緩斜	平坦	自然	8.86	IVA3c	屋外鹹水槽、足掛け石1点、底面一石1点

土樋 W5d₇区から W5f₇区を中心にして10条(第132~137・140・141号土樋)検出され、全長が最も短いものは0.57mで、最も長いものは5.70mである。これらの土樋の形状は断面形が「U」字形を呈し、上幅15~34cm、下幅9~26cm、深さ4~15cmである。砂地を浅く掘り、粘土を2~9cmの厚さに貼って雨樋のように構築している。第133・140号土樋の下から第134・136号土樋が検出されていることから、第133・140号土樋が新しい。第659・660号鹹水槽と連なっている第135・140号土樋は、釜屋内の第667号鹹水槽と連結していたと思われる。そして、第132号土樋も釜屋内の第667・677号鹹水槽と連結していたと思われる。

土樋一覧表

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
132	W5e ₆ ~W5f ₇	N-42°-W N-69°-W	5.70	24	9	9	4~9	∪	自然	有	8.60 ~8.94	第667・677号鹹水槽 と連結
133	W5e ₇	N-70°-E	3.38	24	18	15	4~5	∪	自然	無	9.02 ~9.04	第134号土樋と重複
134	W5e ₇	N-32°-E	2.37	20	12	6	3~5	∪	自然	有	9.02	第133号土樋と重複
135	W5d ₈	N-85°-E	2.20	20	11	7	4~6	∪	自然	無	9.06 ~9.12	
136	W5d ₈	N-0°	1.29	34	26	4	2~5	∪	自然	無	9.17	第140号土樋と重複
137	W5d ₇	N-8°-E	1.27	21	12	4	3~4	∪	自然	無	8.93	
140	W5d ₈	N-38°-E	0.76	31	20	8	2~9	∪	自然	有	9.12	第136号土樋と重複
141	W5d ₈	N-8°-W	0.57	15	10	5	4~5	∪	自然	無	9.12	

出土遺物 第659号鹹水槽の覆土中から竹片6点、木片2点、石6点が出土している。

所見 本跡が操業していた期間は不明であるが、5期にわたって操業されていたものと思われる。この五つのグループの新旧関係は、竈、居出場、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽の重複関係から、第1グループが最も新しく、次いで第2グループ、第3グループ、第4グループ、第5グループの順に古くなる。この製塩跡の時期は、第659号鹹水槽から竹片や木片が出土しているが、その時期を明確にすることができなかった。

茨城県教育財団文化財調査報告第77集
常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

沢田遺跡(上)

平成4年3月25日印刷

平成4年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
TEL 0292-25-6587

印刷 株式会社 あけぼの印刷社
水戸市松が丘2-6-24
TEL 0292-51-5265(代)

茨城県教育財団文化財調査報告第77集

常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

沢 田 遺 跡
(下)

平成 4 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第77集

常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

さわ だ 遺 跡

(下)

平成 4 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

目 次

口 絵	
序	
例 言	
目 次 (図版・写真・表目次を含む)	

— 上 卷 —

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査方法	13
第1節 地区設定	13
第2節 基本層序の検討	13
第3節 遺構確認	14
第4節 遺構調査	14
第4章 遺構と遺物	15
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	15
1 遺跡の概要	15
2 遺構・遺物の記載方法	16
第2節 製塩跡	26

— 下 卷 —

第2節 竈を伴わない鹹水槽及び土樋	381
第3節 人骨と馬骨について (埋葬遺構)	448
第4節 その他の遺構	459
1 炉 跡	459
2 土 坑	460
3 不明遺構	461

第5節 遺構外出土遺物	473
1 土器・陶磁器	473
2 金属製品	474
3 石製品	475
4 古 銭	477
5 土製品	477
6 骨製品	477
第5章 考 察	499
第1節 塩づくりとその歴史	499
第2節 遺 構	503
第3節 遺 物	516
1 製塩業に関する遺物について	516
2 その他の遺物について	517
3 遺構と遺物から窺う塩づくり	519
第4節 埋葬遺構について	524
第5節 塩の流通について	527
結 語	531
付 章 (人骨, 熱ルミネッセンス, 土壌分析, 木製品の材質鑑定)	533

挿 図 目 次

上 巻

第 1 図	沢田遺跡周辺地形及び周辺遺跡 位置図……………11	第 22 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………50
第 2 図	沢田遺跡調査区名称図……………13	第 23 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………51
第 3 図	沢田遺跡土層柱状図……………13	第 24 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(1)……………52
第 4 図	第 1 製塩跡遺構配置図……………26	第 25 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(2)……………53
第 5 図	第 1 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………27	第 26 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(3)……………54
第 6 図	第 1 製塩跡鹹水槽実測図……………28	第 27 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(4)……………55
第 7 図	第 2 製塩跡遺構配置図……………29	第 28 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(5)……………56
第 8 図	第 2 製塩跡釜屋内遺構実測図……………30	第 29 図	第 5 製塩跡鹹水槽実測図(6)……………57
第 9 図	第 2 製塩跡鹹水槽実測図……………31	第 30 図	第 5 製塩跡土樋実測図(1)……………60
第 10 図	第 2 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図……………32	第 31 図	第 5 製塩跡土樋実測図(2)……………61
第 11 図	第 3 製塩跡遺構配置図……………33	第 32 図	第 5 製塩跡土樋実測図(3)……………62
第 12 図	第 3 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………34	第 33 図	第 5 製塩跡土樋実測図(4)……………63
第 13 図	第 3 製塩跡鹹水槽実測図……………35	第 34 図	第 5 製塩跡土樋実測図(5)……………64
第 14 図	第 4 製塩跡遺構配置図……………37	第 35 図	第 5 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図(1)……………67
第 15 図	第 4 製塩跡鹹水槽実測図……………39	第 36 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(2)……………68
第 16 図	第 4 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………40	第 37 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(3)……………69
第 17 図	第 4 製塩跡出土遺物実測図……………42	第 38 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(4)……………70
第 18 図	第 5 製塩跡遺構配置図……………43	第 39 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(5)……………71
第 19 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………45	第 40 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(6)……………72
第 20 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………46	第 41 図	第 5 製塩跡出土遺物実測図(7)……………73
第 21 図	第 5 製塩跡釜屋内遺構・竈・鹹水槽 実測図……………48	第 42 図	第 6 製塩跡遺構配置図……………75
		第 43 図	第 6 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………78
		第 44 図	第 6 製塩跡鹹水槽実測図(1)……………80
		第 45 図	第 6 製塩跡鹹水槽実測図(2)……………81
		第 46 図	第 6 製塩跡土樋実測図(1)……………82

第 47 図	第 6 製塩跡土樋実測図(2)……………83	第 71 図	第 15 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………113
第 48 図	第 6 製塩跡出土遺物実測図……………84	第 72 図	第 15 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………114
第 49 図	第 7 製塩跡遺構配置図……………85	第 73 図	第 16 製塩跡竈実測図 ……………115
第 50 図	第 7 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………86	第 74 図	第 17 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………117
第 51 図	第 8 製塩跡遺構配置図……………87	第 75 図	第 18 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………118
第 52 図	第 8 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………88	第 76 図	第 17 製塩跡出土遺物実測図 ……120
第 53 図	第 9 製塩跡遺構配置図……………91	第 77 図	第 18 製塩跡遺構配置図 ……………120
第 54 図	第 9 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………92	第 78 図	第 18 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………121
第 55 図	第 10 製塩跡遺構配置図……………93	第 79 図	第 19 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………123
第 56 図	第 10 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………94	第 80 図	第 19 製塩跡竈実測図 ……………124
第 57 図	第 10 製塩跡鹹水槽実測図……………97	第 81 図	第 20 製塩跡出土遺物実測図 ……125
第 58 図	第 10 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図……………98	第 82 図	第 20 製塩跡竈実測図 ……………126
第 59 図	第 10 製塩跡土樋実測図 ……………100	第 83 図	第 21 製塩跡遺構配置図 ……………127
第 60 図	第 10 製塩跡出土遺物実測図 ……100	第 84 図	第 21 製塩跡竈・鹹水槽実測図 …128
第 61 図	第 11 製塩跡遺構配置図 ……………101	第 85 図	第 22 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………130
第 62 図	第 11 製塩跡釜屋内遺構実測図 …102	第 86 図	第 22 製塩跡遺構配置図 ……………132
第 63 図	第 11 製塩跡鹹水槽実測図 ……………103	第 87 図	第 23 製塩跡釜屋内遺構実測図 …134
第 64 図	第 12 製塩跡遺構配置図 ……………104	第 88 図	第 23 製塩跡遺構配置図 ……………136
第 65 図	第 12 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………105	第 89 図	第 23 製塩跡鹹水槽実測図 ……………137
第 66 図	第 12 製塩跡鹹水槽実測図 ……………106	第 90 図	第 23 製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………138
第 67 図	第 12 製塩跡出土遺物実測図 ……107	第 91 図	第 23 製塩跡土樋実測図 ……………139
第 68 図	第 13 製塩跡遺構配置図 ……………108	第 92 図	第 23 製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………142
第 69 図	第 13 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………108	第 93 図	第 24 製塩跡遺構配置図 ……………142
第 70 図	第 14 製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 ……………110		

第94図	第24製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	143	第117図	第31製塩跡遺構配置図	176
第95図	第24製塩跡鹹水槽実測図	144	第118図	第31製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	178
第96図	第24製塩跡出土遺物実測・ 拓影図	146	第119図	第31製塩跡鹹水槽実測図(1)	180
第97図	第25製塩跡遺構配置図	147	第120図	第31製塩跡鹹水槽実測図(2)	181
第98図	第25製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	148	第121図	第31製塩跡鹹水槽・土樋 実測図(3)	182
第99図	第25製塩跡鹹水槽実測図	149	第122図	第31製塩跡土樋実測図(1)	183
第100図	第26製塩跡遺構配置図	151	第123図	第31製塩跡土樋実測図(2)	184
第101図	第26製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	152	第124図	第31製塩跡出土遺物実測・ 拓影図	185
第102図	第27製塩跡竈実測図	154	第125図	第32製塩跡遺構配置図	187
第103図	第27製塩跡出土遺物実測図	155	第126図	第32製塩跡土樋実測図(1)	189
第104図	第28製塩跡遺構配置図	155	第127図	第32製塩跡出土遺物実測図	189
第105図	第28製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	156	第128図	第32製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	190
第106図	第28製塩跡鹹水槽実測図	159	第129図	第32製塩跡鹹水槽実測図(1)	192
第107図	第29製塩跡遺構配置図	160	第130図	第32製塩跡鹹水槽実測図(2)	193
第108図	第29製塩跡土樋実測図(1)	161	第131図	第32製塩跡土樋実測図(2)	194
第109図	第29製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	162	第132図	第33製塩跡遺構配置図	196
第110図	第29製塩跡鹹水槽実測図(2)	164	第133図	第33製塩跡釜屋内遺構・溝 実測図	198
第111図	第29製塩跡鹹水槽実測図(3)	165	第134図	第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	200
第112図	第29製塩跡鹹水槽・土樋 実測図(4)	166	第135図	第33製塩跡鹹水槽実測図	202
第113図	第29製塩跡出土遺物実測図	170	第136図	第33製塩跡土樋実測図	203
第114図	第30製塩跡遺構配置図	170	第137図	第33製塩跡釜屋内遺構実測図	204
第115図	第30製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図	172	第138図	第33製塩跡鹹水槽・土樋 実測図	205
第116図	第30製塩跡鹹水槽・土樋 実測図	174	第139図	第33製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図	206
			第140図	第33製塩跡土樋実測図	208

第141図	第33製塩跡出土遺物実測図 ……	212	第165図	第43製塩跡遺構配置図 ……	244
第142図	第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	214	第166図	第43製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	246
第143図	第34製塩跡遺構配置図 ……	216	第167図	第43製塩跡鹹水槽実測図 ……	248
第144図	第34製塩跡土樋実測図 ……	217	第168図	第43製塩跡土樋実測図(1) ……	249
第145図	第34製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 ……	218	第169図	第43製塩跡土樋実測図(2) ……	250
第146図	第35製塩跡遺構配置図 ……	220	第170図	第43製塩跡出土遺物実測図 ……	252
第147図	第35製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	221	第171図	第44製塩跡遺構配置図 ……	252
第148図	第36製塩跡竈実測図 ……	222	第172図	第44製塩跡土樋実測図 ……	253
第149図	第37製塩跡竈実測図 ……	223	第173図	第44製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	254
第150図	第38製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	224	第174図	第45製塩跡遺構配置図 ……	257
第151図	第39製塩跡遺構配置図 ……	225	第175図	第45製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	258
第152図	第39製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	226	第176図	第45製塩跡鹹水槽実測図 ……	261
第153図	第40製塩跡遺構配置図 ……	229	第177図	第45製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……	262
第154図	第40製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 ・土樋実測図 ……	230	第178図	第46製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	264
第155図	第41製塩跡遺構配置図 ……	231	第179図	第47製塩跡遺構配置図 ……	266
第156図	第41製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……	232	第180図	第47製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……	268
第157図	第42製塩跡遺構配置図 ……	233	第181図	第47製塩跡土樋実測図 ……	270
第158図	第42製塩跡釜屋内遺構実測図 ……	234	第182図	第47製塩跡出土遺物実測図 ……	270
第159図	第42製塩跡鹹水槽実測図(1) ……	235	第183図	第48製塩跡遺構配置図 ……	271
第160図	第42製塩跡鹹水槽実測図(2) ……	236	第184図	第48製塩跡釜屋内遺構実測図 ……	272
第161図	第42製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……	237	第185図	第48製塩跡鹹水槽実測図(1) ……	276
第162図	第42製塩跡土樋実測図 ……	238	第186図	第48製塩跡鹹水槽実測図(2) ……	277
第163図	第42製塩跡釜屋内遺構実測図 ……	239	第187図	第48製塩跡土樋実測図 ……	278
第164図	第42製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……	240	第188図	第49製塩跡竈実測図 ……	280
			第189図	第49製塩跡出土遺物実測図 ……	280
			第190図	第50製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽	

	実測図 ……………	281	第213図	第64製塩跡鹹水槽実測図 ……………	318
第191図	第51製塩跡竈実測図 ……………	283	第214図	第65製塩跡竈実測図 ……………	320
第192図	第52製塩跡竈実測図 ……………	284	第215図	第66製塩跡竈実測図 ……………	321
第193図	第53製塩跡竈実測図 ……………	286	第216図	第67製塩跡遺構配置図 ……………	322
第194図	第54製塩跡遺構配置図 ……………	287	第217図	第67製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……	323
第195図	第54製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	288	第218図	第68製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	324
第196図	第54製塩跡土樋実測図 ……………	290	第219図	第69製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	326
第197図	第54製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………	293	第220図	第70製塩跡竈実測図 ……………	327
第198図	第55製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	294	第221図	第71製塩跡竈実測図 ……………	329
第199図	第56製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	296	第222図	第72製塩跡竈実測図 ……………	330
第200図	第57製塩跡遺構配置図 ……………	298	第223図	第73製塩跡遺構配置図 ……………	332
第201図	第57製塩跡出土遺物実測図 ……	299	第224図	第73製塩跡釜屋内遺構実測図 ……	333
第202図	第57製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	300	第225図	第73製塩跡鹹水槽実測図 ……………	334
第203図	第58製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	302	第226図	第73製塩跡土樋実測図 ……………	335
第204図	第59製塩跡遺構配置図 ……………	303	第227図	第73製塩跡出土遺物実測図 ……	337
第205図	第59製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	304	第228図	第74製塩跡遺構配置図 ……………	339
第206図	第60製塩跡竈実測図 ……………	306	第229図	第74製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……	339
第207図	第61製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	309	第230図	第75製塩跡竈実測図 ……………	341
第208図	第61製塩跡鹹水槽実測図 ……………	310	第231図	第76製塩跡遺構配置図 ……………	343
第209図	第62製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	312	第232図	第76製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	344
第210図	第63製塩跡竈実測図 ……………	315	第233図	第77製塩跡竈実測図 ……………	347
第211図	第64製塩跡遺構配置図 ……………	316	第234図	第78製塩跡竈実測図 ……………	350
第212図	第64製塩跡竈・鹹水槽実測図 ……	317	第235図	第79製塩跡竈実測図 ……………	351
			第236図	第80製塩跡遺構配置図 ……………	352
			第237図	第80製塩跡釜屋内遺構実測図 ……	354
			第238図	第80製塩跡鹹水槽・土樋 実測図 ……………	357
			第239図	第81製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………	360

第240図	第81製塩跡出土遺物実測・ 拓影図 ……………359	実測図 ……………369	
第241図	第82製塩跡遺構配置図 ……………362	第247図	第83製塩跡出土遺物実測図 ……370
第242図	第82製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………363	第248図	第84製塩跡遺構配置図 ……………372
第243図	第82製塩跡鹹水槽実測図 ……364	第249図	第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………374
第244図	第82製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………366	第250図	第84製塩跡鹹水槽実測図 ……376
第245図	第83製塩跡遺構配置図 ……………368	第251図	第84製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 ……………377
第246図	第83製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽	第252図	第84製塩跡鹹水槽実測図 ……373
		第253図	第84製塩跡土樋実測図 ……378

下 巻

第254図	竈を伴わない鹹水槽実測図(1) …395	第274図	竈を伴わない鹹水槽実測図(21) …415
第255図	竈を伴わない鹹水槽実測図(2) …396	第275図	竈を伴わない鹹水槽実測図(22) …416
第256図	竈を伴わない鹹水槽実測図(3) …397	第276図	竈を伴わない鹹水槽実測図(23) …417
第257図	竈を伴わない鹹水槽実測図(4) …398	第277図	竈を伴わない鹹水槽実測図(24) …418
第258図	竈を伴わない鹹水槽実測図(5) …399	第278図	竈を伴わない鹹水槽実測図(25) …419
第259図	竈を伴わない鹹水槽実測図(6) …400	第279図	竈を伴わない鹹水槽実測図(26) …420
第260図	竈を伴わない鹹水槽実測図(7) …401	第280図	竈を伴わない鹹水槽実測図(27) …421
第261図	竈を伴わない鹹水槽実測図(8) …402	第281図	竈を伴わない鹹水槽実測図(28) …422
第262図	竈を伴わない鹹水槽実測図(9) …403	第282図	竈を伴わない鹹水槽実測図(29) …423
第263図	竈を伴わない鹹水槽実測図(10) …404	第283図	竈を伴わない鹹水槽実測図(30) …424
第264図	竈を伴わない鹹水槽実測図(11) …405	第284図	竈を伴わない鹹水槽実測図(31) …425
第265図	竈を伴わない鹹水槽実測図(12) …406	第285図	竈を伴わない鹹水槽実測図(32) …426
第266図	竈を伴わない鹹水槽実測図(13) …407	第286図	竈を伴わない鹹水槽実測図(33) …427
第267図	竈を伴わない鹹水槽実測図(14) …408	第287図	竈を伴わない鹹水槽実測図(34) …428
第268図	竈を伴わない鹹水槽実測図(15) …409	第288図	竈を伴わない鹹水槽実測図(35) …429
第269図	竈を伴わない鹹水槽実測図(16) …410	第289図	竈を伴わない鹹水槽実測図(36) …430
第270図	竈を伴わない鹹水槽実測図(17) …411	第290図	竈を伴わない鹹水槽実測図(37) …431
第271図	竈を伴わない鹹水槽実測図(18) …412	第291図	竈を伴わない鹹水槽実測図(38) …432
第272図	竈を伴わない鹹水槽実測図(19) …413	第292図	竈を伴わない鹹水槽実測図(39) …433
第273図	竈を伴わない鹹水槽実測図(20) …414	第293図	竈を伴わない鹹水槽実測図(40) …434

第294図	竈を伴わない鹹水槽実測図(41) ……435	拓影図(3) ……482	
第295図	竈を伴わない鹹水槽実測図(42) ……436	第321図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(4) ……483
第296図	竈を伴わない鹹水槽実測図(43) ……437	第322図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(5) ……484
第297図	竈を伴わない鹹水槽実測図(44) ……438	第323図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(6) ……485
第298図	竈を伴わない土樋実測図(1) ……439	第324図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(7) ……486
第299図	竈を伴わない土樋実測図(2) ……440	第325図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(8) ……487
第300図	竈を伴わない土樋実測図(3) ……441	第326図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(9) ……488
第301図	竈を伴わない土樋実測図(4) ……442	第327図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(10) ……489
第302図	竈を伴わない土樋実測図(5) ……443	第328図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(11) ……490
第303図	竈を伴わない土樋実測図(6) ……444	第329図	遺構外出土遺物実測図(12) ……490
第304図	竈を伴わない土樋実測図(7) ……445	第330図	遺構外出土遺物実測図(13) ……491
第305図	その他の鹹水槽出土遺物実測・ 拓影図 ……446	第331図	遺構外出土古銭拓影図(1) ……492
第306図	人骨出土分布状況図 ……455	第332図	遺構外出土古銭拓影図(2) ……493
第307図	人骨に伴って出土した古銭 拓影図(1) ……457	第333図	I区(F3)集中製塩跡竈分布図 ……509
第308図	人骨に伴って出土した古銭 拓影図(2) ……458	第334図	II区(H3)集中製塩跡竈分布図 ……510
第309図	炉跡実測図(1) ……464	第335図	III区(L3)集中製塩跡竈分布図 ……511
第310図	炉跡実測図(2) ……465	第336図	IV区(R4)集中製塩跡竈分布図 ……512
第311図	炉跡実測図(3) ……466	第337図	V区(W5)集中製塩跡竈分布図 ……513
第312図	土坑実測図 ……467	第338図	沢田遺跡の揚浜式塩づくり 予想図 ……520
第313図	不明遺構実測図(1) ……468	第339図	主な出土遺物実測図 ……522
第314図	不明遺構実測図(2) ……469	第340図	江戸時代那珂川における河岸 ……529
第315図	不明遺構実測図(3) ……470	第341図	近世那珂川流域における街道 ……530
第316図	不明遺構実測図(4) ……471		
第317図	炉・土坑・不明遺構出土遺物 実測・拓影図 ……472		
第318図	遺構外出土遺物実測・ 拓影図(1) ……480		
第319図	遺構外出土遺物実測図(2) ……481		
第320図	遺構外出土遺物実測・		

付 章 挿 図 目 次

第 1 図 熱ルミネッセンス (TL) 年代測の原理 ……………567	第 3 図 等価線量の決定方法 ……………570
第 2 図 第89号竈の火床の石英粒子の TL グローカブー ……………569	第 1 図 沢田遺跡試料中の 2 μm 以上粘土の X線回析図 ……………577

付 図 目 次

付図 1 製塩跡遺構配置図・竈断面図(1)	付図 2 製塩跡遺構配置図・竈断面図(2)
-----------------------	-----------------------

表 目 次

表 1 那珂湊市遺跡一覧表 ……………12	表 6 炉跡一覧表……………459
表 2 鹹水槽一覧表……………381	表 7 土坑一覧表……………460
表 3 土樋一覧表……………393	表 8 不明遺構一覧表……………461
表 4 人骨出土一覧表……………448	表 9 各製塩跡のグルーピングされた遺構群の標高分布表……………514
表 5 人骨に伴って出土した古銭一覧表……………452	

付 章 表 目 次

表 I - 1 代表的人骨計測値 (頭骨) ……549	(%) (上腕骨) ……………553
表 I - 2 代表的人骨計測値 (鎖骨) ……550	表 II - 2 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (橈骨) ……………553
表 I - 3 代表的人骨計測値 (上腕骨) ……550	表 II - 3 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (尺骨) ……………553
表 I - 4 代表的人骨計測値 (橈骨) ……550	表 II - 4 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (大腿骨) ……………554
表 I - 5 代表的人骨計測値 (尺骨) ……551	表 II - 5 四肢骨計測値 (mm) および示数 (%) (脛骨) ……………554
表 I - 6 代表的人骨計測値 (寛骨) ……551	
表 I - 7 代表的人骨計測値 (大腿骨) ……552	
表 I - 8 代表的人骨計測値 (脛骨) ……552	
表 II - 1 四肢骨計測値 (mm) および示数	

表III	沢田遺跡出土四肢骨計測値の 平均値と比較……………555	表2	沢田遺跡試料の土性……………575
表IV	沢田遺跡出土人骨個体構成表……………556	表3	沢田遺跡試料の比電導度・ PH(H ₂ O, Kcl) ……………575
第1表	TL年代測定結果……………571	表4	沢田遺跡主要層の微細形態……………576
表1	沢田遺跡分析試料一覧……………574	表1	沢田遺跡出土材の樹種……………582

写 真 目 次

P L 1	調査前風景	P L 11	第6製塩跡，釜屋全景，第6の1号 鹹水槽，第32号鹹水槽，第35号鹹水 槽，第46号鹹水槽，第3号土樋，第 22号土樋
P L 2	調査後風景，作業風景	P L 12	第7・8・9製塩跡，7－第26号鹹水 槽遺物出土状況，7－第28号鹹水槽 遺物出土状況，7－第33号鹹水槽， 7－第49号鹹水槽，8－第18号竈， 8－第177号鹹水槽，9－釜屋全景， 9－第105号鹹水槽
P L 3	第1製塩跡，第1号竈，第11号鹹水 槽，第12号鹹水槽，第14号鹹水槽， 第15号鹹水槽	P L 13	第10製塩跡，釜屋全景，第154号鹹水 槽，第180号鹹水槽，第184号鹹水槽
P L 4	第2製塩跡，釜屋全景，第13号鹹水 槽，第63号鹹水槽，第64号鹹水槽， 第64・65号鹹水槽	P L 14	第11・12・13製塩跡，11－釜屋全景， 11－第146号鹹水槽，12－第33号竈， 12－第161号鹹水槽，12－第162号鹹 水槽，12－第169号鹹水槽，13－第27 号竈，13－第157号鹹水槽
P L 5	第3製塩跡，釜屋全景，第1号鹹水 槽，第2号鹹水槽，第10号鹹水槽， 第61・62号鹹水槽	P L 15	第14・15・18・19製塩跡，14－第8号 竈，14－第36号鹹水槽，15－釜屋全 景，15－第24号竈，18－第150号鹹水 槽，19－釜屋全景，19－第19の1号 鹹水槽
P L 6	第4製塩跡，釜屋全景，第87号鹹水 槽，第89号鹹水槽，第90号鹹水槽， 第91号鹹水槽	P L 16	第21・22・23製塩跡，21－第168号鹹 水槽，21－第168号鹹水槽土層断面，
P L 7	第5製塩跡，釜屋全景，第5の22号 鹹水槽，第5の35号鹹水槽		
P L 8	第5製塩跡，第16号鹹水槽，第17号 鹹水槽，第18号鹹水槽，第27号鹹水 槽，第32号鹹水槽，第45号鹹水槽， 第47号鹹水槽，第55号鹹水槽		
P L 9	第5製塩跡，第1号土樋，第58号土 樋		
P L 10	第5製塩跡，第81号鹹水槽遺物出土 状況，第125号鹹水槽遺物出土状況		

- 22-釜屋全景, 22-第698号鹹水槽,
23-製塩跡全景, 23-釜屋全景,
23-第699号鹹水槽, 23-第820号鹹水槽
- P L 17 第23・24製塩跡, 23-第848号鹹水槽,
23-第864号鹹水槽, 23-第198・199号土樋, 23-第225号土樋, 24-製塩跡全景, 24-第199号竈, 24-第199号竈断割
- P L 18 第24・25・26製塩跡, 24-第719号鹹水槽, 24-第723号鹹水槽, 25-製塩跡全景, 25-第200号竈, 26-製塩跡全景, 26-第201号竈, 26-第716号鹹水槽
- P L 19 第26・27製塩跡, 26-第717号鹹水槽(%) (尺骨) (二次), 26-第717号鹹水槽(一次), 27-第202号竈, 27-第202号竈遺物出土状況
- P L 20 第28・29・30製塩跡, 28-製塩跡全景, 28-第203号竈断割, 29-製塩跡全景, 29-釜屋全景, 29-第761号鹹水槽, 29-第163・166号土樋, 30-第786号鹹水槽
- P L 21 第31製塩跡, 製塩跡全景, 釜屋全景, 第784・785号鹹水槽, 第207号竈断割, 釜屋に伴う柱痕土層断面
- P L 22 第31製塩跡, 第701号鹹水槽, 第701号鹹水槽断割, 第709号鹹水槽, 第715号鹹水槽, 第815号鹹水槽, 第884号鹹水槽, 第151号土樋土層断面
- P L 23 第31・32製塩跡, 31-第148号土樋, 31-第185・186号土樋, 31-第187号土樋水受け, 32-製塩跡全景, 32-釜屋内炭化材出土状況, 32-第829号鹹水槽, 32-第830号鹹水槽
- P L 24 第32製塩跡, 第830号鹹水槽, 第832号鹹水槽, 第834号鹹水槽, 第838号鹹水槽, 第210号土樋
- P L 25 第33製塩跡, 釜屋全景, 第223号竈(一次), 第223号竈(二次), 第223号竈遺物出土状況, 第223号竈内土釜出土状況
- P L 26 第33製塩跡, 第821号鹹水槽, 第828号鹹水槽, 第818号鹹水槽, 第906号鹹水槽, 第203・204号土樋, 第203号土樋, 第202・251・261・262号土樋, 第258号土樋
- P L 27 第34・35・38製塩跡, 34-釜屋全景, 34-第224号竈, 34-第224号竈断割, 34-第213号土樋, 35-釜屋全景, 38-釜屋全景, 38-第228号竈
- P L 28 第39・40・42製塩跡, 39-釜屋全景, 39-第229号竈, 39-第844号鹹水槽, 39-第845号鹹水槽, 39-第846号鹹水槽, 40-釜屋全景, 42-釜屋全景, 42-第882・887・891・893・904号鹹水槽群
- P L 29 第42・43・44・45製塩跡, 42-第886号鹹水槽, 42-第246号木樋, 43-第828号鹹水槽, 43-第206号土樋, 44-第57号竈, 44-第207号鹹水槽, 45-釜屋全景
- P L 30 第47・48製塩跡, 48-製塩跡全景, 48-第90号竈, 47-製塩跡全景, 48-

- 釜屋全景，48—第281・367号鹹水槽
- P L 31 第46・49・51・53製塩跡，46—釜屋全景，46—第335号鹹水槽，49—釜屋全景，49—第91号竈，51—第109号竈，53—第110号竈，53—第120号竈
- P L 32 第54・55・56製塩跡，54—第126号竈，54—釜屋全景，54—第477号鹹水槽，54—第107・108・109号土樋，55—第480号鹹水槽，56—第128号竈，56—第128号竈断割
- P L 33 第57・58・59・61製塩跡，57—釜屋全景，57—第129号竈，57—第130号竈，57—第405号鹹水槽，58—釜屋全景，59—釜屋全景，59—第410号鹹水槽，61—第284号鹹水槽
- P L 34 第61・62・63・67・68・69・70製塩跡，61—第309号鹹水槽，62—第198号鹹水槽，62—第199号鹹水槽，63—第98号竈，67—第148号竈，68—第155号竈，69—第157号竈，70—第158号竈
- P L 35 第71・72・73・74・76・78・80製塩跡，71—第159号竈，72—第165号竈，73—釜屋全景，74—釜屋全景，76—第171号竈，78—第170号竈，80—釜屋全景，80—第183号竈
- P L 36 第81・82・83・84製塩跡，81—第634・638号鹹水槽，82—釜屋全景，82—第642号鹹水槽土層断面，82—第642号鹹水槽遺物出土状況，83—釜屋全景，83—第193号竈，84—釜屋全景，84—第667号鹹水槽
- P L 37 竈を伴わない鹹水槽，第3号鹹水槽，第4号鹹水槽，第5号鹹水槽，第6号鹹水槽，第7号鹹水槽，第8号鹹水槽，第9号鹹水槽，第21号鹹水槽
- P L 38 竈を伴わない鹹水槽，第25号鹹水槽，第40号鹹水槽，第57号鹹水槽，第65号鹹水槽，第114号鹹水槽，第116号鹹水槽，第133号鹹水槽
- P L 39 竈を伴わない鹹水槽，第138号鹹水槽，第139号鹹水槽，第142号鹹水槽，第148号鹹水槽，第149号鹹水槽，第152号鹹水槽，第160号鹹水槽，第171号鹹水槽
- P L 40 竈を伴わない鹹水槽，第171号鹹水槽土層断面，第693号鹹水槽，第694号鹹水槽，第707号鹹水槽，第707号鹹水槽土層断面，第766号鹹水槽，第769号鹹水槽，第770号鹹水槽
- P L 41 竈を伴わない鹹水槽，第771号鹹水槽，第778号鹹水槽，第798号鹹水槽，第853号鹹水槽，第863号鹹水槽，第898号鹹水槽，第226号鹹水槽，第230号鹹水槽
- P L 42 竈を伴わない鹹水槽，第232号鹹水槽，第285号鹹水槽，第292号鹹水槽，第294号鹹水槽，第303号鹹水槽，第315号鹹水槽，第316号鹹水槽，第323号鹹水槽
- P L 43 竈を伴わない鹹水槽，第329号鹹水槽，第334号鹹水槽，第344号鹹水槽，第374号鹹水槽，第376号鹹水槽，第444号鹹水槽，第466号鹹水槽，第467号鹹水槽

- P L 44 竈を伴わない鹹水槽・土樋, 第503号
 鹹水槽, 第565号鹹水槽, 第569号鹹
 水槽, 第670号鹹水槽, 第681号鹹水
 槽, 第48号土樋, 第80号土樋
 P L 45 炉跡・土坑, 第10号炉跡 (SK77),
 第13号炉跡 (SK84), 第18号炉跡
 (SK97), 第21号炉跡 (SK102),
 第23・24号炉跡 (SK104・105), 第27
 号炉跡 (SK132), 第40号炉跡
 (SK179), 第7号土坑 (SK214)
 P L 46 不明遺構, 8 (SX18), 21 (SK60),
 25 (SK79), 26 (SK81),
 27 (SK82), 28 (SK88),
 36 (SK175), T5h₉区遺物出土状況
 P L 47 陶器, 磁器, 土師質土器, 内耳形土
 器
 P L 48 陶器, 土師質土器, 内耳形土器
 P L 49 陶器, 磁器
 P L 50 石製品 (石臼・石塔・砥石)
 P L 51 石製品 (石臼・硯)
 P L 52 石製品 (石臼)
 P L 53 石製品 (石臼)
 P L 54 石製品 (石臼・石塔・砥石)
 P L 55 石製品 (石塔・砥石・硯・石球), 鉄
 製品 (吊金具・耳金・鍋)
 P L 56 金属製品 (煙管・吊金具・耳金・小
 刀・短刀・筭・鎌・鍵・刀装具), 土
 製品 (管状土錘)
 P L 57 木製品 (担い棒)
 P L 58 木製品 (ろ過器・柄振・椀・担い棒・
 櫛), 骨製品 (筭)
 P L 59 古銭(1)
 P L 60 古銭(2)
 P L 61 古銭(3)
 P L 62 古銭(4), 陶器, 瓦質土器

付 章 写 真 目 次

- P L 1 I : 3号・33号人骨頭骨
 P L 2 II : 33号人骨四肢骨
 P L 3 III : 33号人骨四肢骨
 P L 4 IV : 3号人骨四肢骨
 P L 5 V : 3号人骨四肢骨
 P L 6 VI : SK-25幼児骨
 P L 7 VII : 病的所見を示す人骨
 P L 1 微細形態

第2節 竈を伴わない鹹水槽及び土樋

表2 鹹水槽一覧表(第254～297図)

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
3	N2f ₅	N-65°-W	隅丸長方形	1.82	1.56	1.13	3～8	外傾	平坦	自然	10.12	IVA2c	足掛け石1点
4	N2j ₇	N-66°-W	隅丸長方形	1.86	1.46	0.86	1～8	外傾	平坦	自然	10.00	IVA2b	足掛け石1点
5	N2g ₇	N-37°-W	隅丸長方形	2.22	1.92	1.52	2～10	外傾	平坦	自然	9.90	IVA3d	足掛け石1点
6	O2a ₇	N-50°-W	隅丸長方形	2.12	1.86	1.14	2～13	外傾	平坦	自然	10.01	IVA3c	足掛け石1点
7	O2b ₆	N-56°-W	隅丸長方形	1.80	1.76	1.26	1～8	外傾	平坦	自然	10.18	IVA2c	底面一石2点
8	O2b ₇	N-57°-W	隅丸長方形	2.58	2.12	1.08	1～11	外傾	平坦	自然	10.03	IVA3c	足掛け石1点
9	N2h ₆	N-25°-E	隅丸長方形	2.03	1.75	2.00	1～15	外傾	平坦	自然	10.00	IVA3d	足掛け石1点
21	O3a ₉	N-73°-W	隅丸方形	0.76	0.66	0.36	2～8	外傾	平坦	自然	8.14	IVA1a	
22	N3j ₉	N-24°-E	隅丸長方形	1.02	(0.82)	0.40	5～9	外傾	皿状	自然	8.05	IVB2a	底面一石1点
23	N3i ₉	N-27°-E	隅丸方形	0.70	0.68	1.60	1～4	緩斜	平坦	自然	7.96	IVA1d	⊗石1点, ⊗石2点
24	N3j ₀	—	円形	0.82	0.82	0.53	2～12	緩斜	平坦	自然	7.96	IIIA1b	第25・29・114・124号鹹水槽と重複
25	N3j ₀	N-3°-E	隅丸長方形	0.96	0.72	0.28	4～17	緩斜	平坦	自然	7.97	IVA1a	底面一石1点, 第24・29・114・124号鹹水槽と重複
29	N3j ₀	N-19°-E	隅丸長方形	(0.64)	(0.53)	0.26	—	緩斜	平坦	自然	8.05	IVA1a	東側半分崩落, 第24・25・114・124号鹹水槽と重複
34	O4a ₇	—	円形	0.44	0.42	0.08	4～5	外傾	平坦	自然	5.54	IIIA1a	底面一骨片2点, 第42号鹹水槽と重複
39	N2e ₄	N-52°-W	隅丸長方形	2.35	1.64	1.26	2～9	外傾	平坦	自然	9.53	IVA3c	第56・75号鹹水槽と重複
40	O2a ₀	N-57°-W	隅丸長方形	1.19	1.68	0.94	2～10	緩斜	平坦	自然	8.93	IVA2b	
42	O4a ₇	N-79°-W	楕円形	0.57	(0.42)	0.17	4～14	緩斜	平坦	自然	5.62	IA1a	第34号鹹水槽と重複
56	N2e ₄	N-37°-W	隅丸長方形	1.19	1.60	1.22	2～5	外傾	平坦	自然	9.62	IVA2c	足掛け石1点, 底面一石1点, 第39・75号鹹水槽と重複
57	N2f ₅	N-48°-W	隅丸長方形	2.09	1.49	1.03	2～10	緩斜	平坦	自然	9.76	IVA3c	足掛け石1点
59	N2i ₅	N-3°-E	隅丸長方形	1.90	1.52	1.29	1～5	外傾	平坦	自然	9.00	IVA1c	足掛け石1点
60	N2i ₆	N-28°-E	隅丸長方形	1.86	1.35	1.00	3～9	緩斜	平坦	自然	9.29	IVA1c	
65	O2f ₆	N-33°-E	隅丸長方形	2.26	1.78	1.20	1～10	緩斜	平坦	自然	8.90	IVA3c	足掛け石1点
66	O3h ₈	N-72°-W	ひさご形	4.90	1.85	0.89	3～7	緩斜	平坦	自然	7.96	VIIA4b	底面一石2点
68	O3g ₈	N-24°-E	隅丸長方形	3.64	2.32	1.13	2～5	緩斜	平坦	自然	7.83	IVA4c	足掛け石1点, ⊗石5点, 底面一石3点
75	N2e ₄	N-37°-W	舟形	4.00	1.30	1.35	2～7	外傾	平坦	自然	5.80	IVA4c	第39・56号鹹水槽と重複
77	N2c ₅	N-36°-E	隅丸方形	(1.22)	(1.20)	1.11	2～13	緩斜	平坦	自然	9.26	IVA2c	
82	N3j ₁	N-12°-E	舟形	(4.24)	(2.15)	0.88	3～5	緩斜	平坦	自然	6.42	IVA4b	
94	M3f ₁	N-36°-E	隅丸長方形	0.91	0.76	0.27	3～8	緩斜	平坦	自然	10.05	IVA1a	
95	M3e ₃	N-45°-W	隅丸長方形	(1.06)	(1.00)	(0.02)	—	緩斜	皿状	自然	10.03	IVB2a	削平されているため壁の立ち上がりかほとんどみられない。第96・133・174号鹹水槽と重複
96	M3e ₃	N-9°-E	楕円形	3.40	2.00	0.28	5～12	緩斜	平坦	自然	9.46	IA4a	第95・133・174号鹹水槽と重複
98	M3c ₂	N-29°-E	楕円形	2.58	2.27	1.68	6～11	緩斜	平坦	自然	10.15	IA3d	足掛け石1点
99	M3c ₄	N-62°-W	隅丸方形	2.10	2.04	1.38	2～10	緩斜	平坦	自然	9.97	VA3c	
103	M3a ₃	N-8°-W	楕円形	1.78	1.60	1.38	2～9	緩斜	平坦	自然	10.31	IA2c	足掛け石1点, 第148号鹹水槽と重複
113	O3d ₀	N-11°-E	隅丸長方形	4.64	2.80	1.33	4～10	内彎	平坦	自然	6.16	IVA4c	足掛け石1点
114	N3j ₀	N-19°-E	隅丸長方形	4.50	1.75	1.22	8	緩斜	平坦	自然	6.38	IVA4c	底面一本製品8点, 焼石5点, 炭化物1点, 第24・25・29・124号鹹水槽と重複
116	O3g ₈	N-11°-E	楕円形	4.03	(2.08)	1.30	2～8	緩斜	平坦	自然	6.16	IA4c	足掛け石2点, 底面一焼石3点, ⊗石1点(第305図?), 丸棒8点, 竹

鹹水槽 番 号	位置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
124	N3j ₆	N-23°-E	楕円形	(3.24)	(1.57)	0.72	10	緩斜	平坦	自然	5.94	IA4b	第24・25・29・114号鹹水槽と重複
132	M3d ₃	N-13°-E	隅丸方形	(2.14)	(2.07)	1.28	6	緩斜	平坦	自然	9.74	VA3c	足掛けくぼみ
133	M3e ₃	N-46°-E	隅丸方形	(2.40)	(2.33)	1.21	2~7	緩斜	平坦	自然	9.84	VA3c	第95・96・174号鹹水槽と重複
136	M2d ₈	N-60°-W	隅丸方形	1.58	1.16	0.14	4~12	緩斜	平坦	自然	10.45	VA2a	底面一焼石1点, 第138号鹹水槽と重複
138	M2d ₈	—	円形	0.40	0.38	0.13	2~10	緩斜	皿状	自然	9.36	IIIb1a	底面一石1点, 第136号鹹水槽と重複
139	M2e ₇	—	円形	0.56	0.56	0.06	2~6	緩斜	平坦	自然	10.38	IIIa1a	底面一内耳土器片3点, 石1点
140	M2e ₈	N-67°-W	楕円形	0.70	0.50	0.11	2~7	緩斜	平坦	自然	10.38	IA1a	第141号鹹水槽と重複
141	M2e ₆	N-81°-W	楕円形	0.60	0.34	0.06	5~13	緩斜	平坦	自然	10.40	IA1a	第140号鹹水槽と重複
142	M2f ₆	N-28°-E	円形	0.55	0.50	0.09	6~26	緩斜	平坦	自然	10.52	IIIa1a	北側半分崩落
143	M2g ₆	N-19°-E	楕円形	(0.37)	(0.30)	0.06	7~27	緩斜	平坦	自然	10.47	IA1a	
144	M2f ₇	N-21°-E	円形	0.25	0.22	0.18	12~54	緩斜	平坦	自然	10.21	IIIa1a	
148	M3a ₃	N-8°-E	隅丸長方形	2.33	1.82	1.18	1~6	緩斜	平坦	自然	9.04	IVA3c	足掛けくぼみ, 第103号鹹水槽と重複
149	M3b ₃	N-12°-E	楕円形	2.46	2.12	1.36	2~13	緩斜	平坦	自然	9.00	IA3c	足掛けくぼみ
151	M3c ₁	N-65°-W	楕円形	(1.48)	(1.39)	1.19	2~8	緩斜	平坦	自然	9.31	IA2c	足掛けくぼみ
152	M3e ₂	N-70°-W	楕円形	(2.30)	1.80	1.85	2~13	緩斜	平坦	自然	9.40	IA3d	上端に炭化物付着, 第172号鹹水槽と重複
160	M2b ₈	N-28°-E	楕円形	2.33	1.95	1.50	1~17	緩斜	平坦	自然	9.70	IA3c	足掛けくぼみ
165	M2i ₆	N-47°-W	楕円形	1.69	1.52	1.01	2~11	緩斜	平坦	自然	9.04	IA2c	足掛けくぼみ
166	M2j ₉	N-36°-E	隅丸長方形	1.97	1.47	1.06	2~10	緩斜	平坦	自然	9.11	IVA2c	足掛けくぼみ, 第88号鹹水槽と重複
171	M3c ₃	N-70°-W	楕円形	2.00	1.70	1.22	2~12	緩斜	平坦	自然	9.00	IA3c	足掛け石1点
172	M3d ₁	N-68°-W	隅丸長方形	2.70	1.90	1.42	2~8	緩斜	平坦	自然	9.24	IVA3c	第152号鹹水槽と重複
174	M3e ₃	N-51°-W	隅丸方形	1.90	1.74	0.67	2~6	緩斜	平坦	自然	9.20	IVA2b	第95・96・133号鹹水槽と重複
176	M3d ₂	N-6°-E	隅丸長方形	2.10	1.70	1.22	2~6	緩斜	平坦	自然	8.90	IVA3c	足掛け石1点
181	L3e ₄	N-58°-W	楕円形	1.28	1.18	0.78	2~5	緩斜	平坦	自然	8.40	VA2b	
187	F2h ₂	N-61°-W	隅丸方形	0.60	0.58	0.16	3~13	緩斜	皿状	自然	9.55	VB1a	
188	F1j ₆	(N-20°-E)	隅丸方形	(1.44)	(1.36)	0.40	5~6	緩斜	平坦	自然	9.92	VA2a	
189	G1b ₀	N-62°-W	ひさご形	3.09	1.19	0.66	1~7	外傾	平坦	自然	10.03	VIIA4b	底面一石2点, ㊦石2点
190	G1f ₆	N-0°	楕円形	0.67	0.54	0.28	1~10	緩斜	平坦	自然	10.25	IA1a	
191	G1d ₀	—	円形	0.48	0.45	0.10	3~13	緩斜	皿状	自然	9.81	IIIb1a	底面一石2点, ㊦石2点
192	G1d ₀	N-0°	楕円形	0.63	0.57	0.20	—	緩斜	皿状	自然	9.85	IB1a	底面一石2点, ㊦石13点, ㊦石2点, 第219号鹹水槽と重複
193	G1e ₀	—	円形	0.50	0.48	0.08	8~16	緩斜	平坦	自然	9.89	IIIa1a	
194	G2c ₅	N-81°-W	隅丸長方形	1.70	1.03	0.25	—	緩斜	平坦	自然	8.89	IVA2a	
195	F3a ₃	N-80°-W	隅丸長方形	1.94	1.48	0.77	3~9	外傾	平坦	自然	8.43	IVA2b	
196	F3a ₄	N-9°-E	隅丸長方形	2.00	1.51	0.70	1~6	外傾	平坦	自然	8.57	IVA3b	底面一石1点
197	F3a ₄	—	不定形	1.40	(1.18)	0.73	—	外傾	平坦	自然	8.05	VIIA2b	㊦石1点
200	F3f ₅	N-66°-W	舟形	2.88	1.08	0.68	2~10	緩斜	皿状	自然	8.53	VIB3b	
204	F2e ₀	N-67°-W	隅丸長方形	1.86	0.78	0.45	6~20	緩斜	皿状	自然	8.69	IVB2b	底面一石3点, ㊦石1点, ㊦石1点
205	F1j ₀	N-0°	楕円形	(0.70)	0.53	0.13	—	緩斜	皿状	自然	10.86	IB2a	底面一石1点
206	F3b ₁	N-87°-W	隅丸長方形	1.84	1.70	1.18	1~10	外傾	平坦	自然	8.37	IVA2c	底面一石1点, ㊦石1点
210	G2d ₇	—	円形	0.50	0.43	0.06	1~2	緩斜	平坦	自然	8.91	IIIa2a	
211	G2d ₇	N-0°	隅丸長方形	0.51	0.38	—	1~10	緩斜	平坦	自然	8.93	IVA2a	㊦石1点

213	F2h _s	N-26°-E	隅丸長方形	1.81	1.15	0.34	4~8	外傾	平坦	自然	8.56	IVA2a	第220号鹹水槽と重複
214	F1j _o	(N-45°-W)	(隅丸長方形)	(3.90)	0.50	0.15	2~9	緩斜	皿状	自然	9.85	IVB4a	
215	F1j _o	-	不定形	0.55	0.34	0.16	2~7	緩斜	皿状	自然	5.23	VIIIb1a	
216	F2h ₂	-	円形	(0.66)	(0.66)	0.06	-	緩斜	平坦	自然	10.47	IIIA1a	
217	F2h ₂	-	円形	(0.63)	(0.59)	0.06	-	緩斜	平坦	自然	9.52	IIIA1a	
218	F3b ₂	N-11°-W	隅丸長方形	2.06	1.56	1.47	1~6	外傾	平坦	自然	8.54	IVA3c	
219	G1d _o	N-0°	円形	0.74	0.64	0.05	-	緩斜	皿状	自然	9.91	IIIB1a	第192号鹹水槽と重複
221	G2d ₇	N-0°	楕円形	(0.45)	(0.30)	0.08	-	緩斜	平坦	自然	8.90	IA1a	
222	G2d ₇	N-20°-W	楕円形	0.52	0.41	-	1~7	緩斜	平坦	自然	8.91	IA1a	㊟小砂利, 底面だけ検出
225	G3f _s	N-27°-E	(楕円形)	3.55	(1.40)	1.03	2~14	緩斜	凹凸	自然	7.85	IA4c	
226	H3h _s	N-70°-W	舟形	1.29	0.35	0.16	1~10	緩斜	ゆるい起伏	自然	9.94	IVA2b	
228	H3f _s	N-0°	(隅丸方形)	(0.87)	0.84	0.43	1~6	緩斜	皿状	自然	8.54	VB2a	
230	H3f _s	N-82°-W	隅丸長方形	1.75	1.21	0.91	2~10	外傾	平坦	自然	8.26	IVA2b	
231	H3g _e	N-7°-W	隅丸方形	1.32	1.25	0.91	2~7	緩斜	皿状	自然	8.87	VB2b	
232	H3g _e	N-4°-E	隅丸長方形	2.18	2.03	1.24	2~6	外傾	平坦	自然	8.04	IVA3c	足掛け石1点
234	H3h _s	N-31°-E	楕円形	1.40	0.98	0.37	1~8	緩斜	平坦	自然	9.04	IA2a	
235	H3a _e	N-27°-E	隅丸方形	1.34	1.24	0.46	4~8	緩斜	平坦	自然	8.78	VA2a	
236	H3j _a	N-61°-E	隅丸長方形	1.67	0.85	0.61	4~13	緩斜	平坦	自然	8.74	IVA2b	
239	I3b _s	(N-45°-E)	楕円形	(1.54)	(1.02)	(0.32)	1~14	緩斜	皿状	自然	9.10	IB2a	
241	H3e _s	N-90°-E	隅丸長方形	1.15	0.90	0.20	1~8	緩斜	平坦	自然	8.28	IVA2a	
242	F3a _s	-	不定形	2.09	1.03	1.14	-	緩斜	平坦	自然	7.22	VIIA3c	
244	H1a _o	-	円形	0.52	0.52	0.38	1~11	垂直	皿状	自然	9.10	IIIB1a	底面-石2点, ㊟貝
245	H1d _s	N-61°-W	隅丸長方形	0.96	0.80	0.39	1~4	緩斜	皿状	自然	10.23	IVB2a	
246	G1i _s	N-0°	楕円形	0.57	0.43	0.24	1~15	緩斜	ゆるい起伏	自然	11.07	IA1a	底面-石1点
247	H1g ₇	N-45°-W	楕円形	(1.30)	0.93	0.38	-	緩斜	平坦	自然	10.81	IA2a	
248	H1d _s	N-50°-W	隅丸長方形	1.04	0.60	0.40	1~5	緩斜	平坦	自然	10.25	IVA2a	
250	H2c ₂	N-38°-E	隅丸長方形	1.26	1.04	0.45	10~25	緩斜	皿状	自然	9.44	IVB2a	㊟石2点, ㊟石2点
251	H3a ₃	N-75°-W	隅丸長方形	1.75	1.47	1.15	1~6	緩斜	平坦	自然	0.74	IVA2c	
253	H1e ₉	N-0°	楕円形	4.30	3.70	0.09	14	緩斜	皿状	自然	10.08	IB4a	
254	H1j _o	N-14°-E	隅丸長方形	0.72	0.40	0.15	3~11	緩斜	平坦	自然	9.99	IVA1a	底面-石1点
255	H3a ₂	N-70°-W	隅丸長方形	2.60	1.59	0.66	4~11	緩斜	平坦	自然	8.38	IVA3b	㊟足掛け石1点, 炭化物
256	H1a ₇	N-40°-W	隅丸長方形	1.05	0.67	0.21	5~15	緩斜	平坦	自然	11.10	IVA2a	
259	I3a ₁	N-52°-W	隅丸長方形	1.58	0.84	0.54	4~11	緩斜	平坦	自然	9.61	IVA2b	
263	K3b _s	N-6°-E	隅丸長方形	1.13	0.79	0.38	2~5	緩斜	平坦	自然	7.79	IVA2a	
264	K3h ₇	N-85°-W	隅丸長方形	1.38	0.93	0.32	2~16	外傾	皿状	自然	9.22	IVB2a	
265	K3g ₇	N-86°-W	隅丸長方形	1.43	0.85	0.26	2~13	緩斜	皿状	自然	9.15	IVB2a	
266	K3g ₇	N-69°-W	楕円形	1.98	1.11	0.44	1~13	緩斜	皿状	自然	9.40	IB2a	
267	H3f ₇	N-6°-W	隅丸長方形	2.22	1.73	0.81	2~11	緩斜	平坦	自然	6.60	IVA3b	足掛けくぼみ, 底面-石1点
268	H3e ₇	N-88°-W	隅丸長方形	1.75	1.16	0.82	1~7	外傾	平坦	自然	6.80	IVA2b	足掛けくぼみ, ㊟炭
269	H3c ₇	N-80°-W	隅丸長方形	1.55	0.87	0.62	1~9	緩斜	平坦	自然	6.00	IVA2b	
270	H3d _o	N-85°-W	隅丸長方形	1.92	1.30	0.11	1~9	緩斜	皿状	自然	7.25	IVB2c	
271	H3b _o	N-88°-W	隅丸長方形	1.48	1.03	0.33	2~6	緩斜	平坦	自然	6.00	IVA2a	第272号鹹水槽と重複

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
272	H3b ₆	N-88°-W	隅丸長方形	1.74	1.03	0.33	5~9	緩斜	平坦	自然	5.98	IVA2a	第271号鹹水槽と重複
273	G3j ₅	—	不定形	(2.20)	(1.39)	(0.61)	1~20	緩斜	皿状	自然	6.06	VIIB3b	
279	J3h ₆	N-30°-E	隅丸長方形	0.92	0.59	0.12	3~6	緩斜	平坦	自然	8.27	IVA1a	
285	F3g ₂	N-13°-E	隅丸長方形	1.45	0.94	0.51	1~6	外傾	平坦	自然	8.00	IVA2b	足掛けくぼみ
286	F3h ₂	N-70°-W	隅丸長方形	1.29	0.94	0.52	2~7	緩斜	平坦	自然	8.05	IVA2b	足掛けくぼみ
287	F3b ₃	N-3°-E	隅丸長方形	1.90	1.08	1.06	1~7	外傾	平坦	自然	7.62	IVA2c	
288	F3b ₄	N-79°-W	隅丸長方形	1.85	1.32	1.24	1~6	外傾	平坦	自然	7.60	IVA2c	足掛けくぼみ、底面一石3点、 [㊦] 内耳形土器1点(第305図5)
289	F3h ₂	N-10°-E	隅丸長方形	1.41	0.96	0.42	3~7	外傾	平坦	自然	8.01	IVA2a	
290	F3h ₂	N-14°-W	隅丸長方形	1.55	(1.31)	0.89	2~6	緩斜	平坦	自然	8.04	IVA2b	
291	F3f ₁	N-0°	隅丸長方形	1.43	1.11	0.79	1~6	緩斜	平坦	自然	8.12	IVA2b	
292	F3h ₁	N-28°-E	隅丸長方形	1.30	1.10	0.81	1~7	緩斜	平坦	自然	8.02	IVA2b	
293	F3f ₁	N-0°	(楕円形)	(1.85)	(1.15)	0.80	1~7	外傾	皿状	自然	8.06	1B2b	
294	G3e ₂	N-24°-W	隅丸長方形	1.76	1.43	1.10	1~6	緩斜	皿状	自然	7.86	IVB2c	
295	F3b ₃	N-14°-W	隅丸長方形	2.29	1.78	1.29	2~7	外傾	平坦	自然	7.90	IVA3c	
296	G3d ₂	N-68°-W	隅丸長方形	1.34	0.62	0.33	2~7	緩斜	平坦	自然	7.75	IVA2a	
298	F3f ₁	N-87°-E	隅丸長方形	1.53	1.12	0.99	2~6	外傾	平坦	自然	7.85	IVA2b	足掛け石1点
299	F2a ₆	N-0°	隅丸長方形	(2.02)	(1.36)	0.11	1~3	緩斜 ゆるい 起伏	自然	自然	10.40	IVA3a	
301	F3d ₁	N-74°-W	隅丸長方形	1.25	0.81	0.29	2~8	緩斜	皿状	自然	7.68	IVA2a	
302	H3c ₂	N-17°-W	隅丸長方形	1.99	(1.34)	1.03	1~4	緩斜	平坦	自然	7.16	IVA2c	足掛けくぼみ
303	H3a ₃	N-5°-W	隅丸長方形	1.65	1.19	0.64	2~7	緩斜	平坦	自然	6.38	IVA2b	底面一石1点
306	F3f ₅	N-85°-W	隅丸長方形	1.05	0.84	0.32	1~8	緩斜	平坦	自然	6.93	IVA2a	底面一石1点
307	F3f ₃	N-87°-E	隅丸長方形	1.64	1.24	0.51	1~5	外傾	平坦	自然	7.50	IVA2b	
311	F3j ₁	N-10°-E	(隅丸長方形)	(1.10)	(0.85)	0.24	1~6	緩斜	平坦	自然	7.20	IVA2a	
312	F3g ₄	N-45°-W	(隅丸長方形)	1.21	0.58	0.08	1~4	緩斜	平坦	自然	7.10	IVA2a	
315	F3b ₄	N-5°-W	隅丸長方形	1.54	1.28	1.03	1~11	外傾	平坦	自然	7.16	IVA2c	足掛けくぼみ
316	F3b ₁	N-85°-W	隅丸長方形	1.48	1.13	0.57	1~5	外傾	平坦	自然	7.38	IVA2b	
318	F3a ₁	N-5°-E	隅丸長方形	1.43	1.00	0.54	2~9	緩斜	平坦	自然	7.70	IVA2b	
321	F3b ₂	N-10°-W	(隅丸長方形)	1.42	0.59	0.25	1~4	外傾	平坦	自然	7.26	IVA2a	
323	F2h ₆	N-70°-E	隅丸長方形	1.47	1.18	0.63	1~6	外傾	平坦	自然	7.57	IVA2b	
324	G3a ₃	N-0°	隅丸長方形	0.90	0.58	0.11	5~8	緩斜	平坦	自然	7.30	IVA1a	
325	G3a ₄	N-25°-E	隅丸長方形	0.76	(0.85)	0.13	3~8	緩斜	平坦	自然	7.08	IVA1a	
326	G3a ₃	N-78°-W	(隅丸長方形)	0.96	(0.62)	0.18	1~6	緩斜	平坦	自然	7.20	IVA1a	
327	G3a ₂	N-70°-W	隅丸長方形	0.95	0.69	0.25	2~9	緩斜	平坦	自然	7.18	IVA1a	底面一石2点
328	I3b ₃	N-15°-E	隅丸長方形	(1.74)	(0.69)	—	—	—	平坦	自然	9.16	IVA2a	底面一石1点、底面だけ検出
329	G3i ₂	N-75°-E	隅丸長方形	1.71	1.21	0.55	1~8	緩斜	平坦	自然	6.47	IVA2b	
330	G3j ₂	N-75°-E	隅丸長方形	1.14	0.79	0.38	1~10	緩斜	平坦	自然	6.54	IVA2a	
331	F3d ₃	N-0°	隅丸長方形	(3.51)	(2.85)	1.07	1~8	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA4c	
332	G3b ₂	N-0°	隅丸長方形	1.36	0.68	0.07	3~5	緩斜	平坦	自然	6.85	IVA2a	
333	G3e ₃	N-0°	隅丸長方形	(2.46)	(1.03)	0.19	3~6	緩斜	平坦	自然	5.36	IVA3a	
334	H3g ₅	N-4°-E	隅丸長方形	1.79	1.20	0.90	1~6	外傾	平坦	自然	8.93	IVA2b	足掛けくぼみ

336	G3e _s	N-8°-W	隅丸長方形	3.31	1.87	0.68	1~10	緩斜	平坦	自然	5.80	IVA4b	
339	G3a _s	-	不定形	1.97	1.66	0.47	1~8	緩斜	平坦	自然	5.12	VIA2a	
340	F3j _s	N-11°-E	隅丸長方形	4.50	2.40	0.99	5~14	緩斜	平坦	自然	4.88	IVA4b	第341号鹹水槽と重複
341	F3j _s	N-11°-E	隅丸長方形	3.88	2.40	0.89	1~6	緩斜	平坦	自然	4.80	IVA4b	第340号鹹水槽と重複
342	K2g ₀	N-36°-E	楕円形	1.25	1.07	0.46	1~6	緩斜	平坦	自然	9.24	IA2a	
343	I3a _s	N-72°-W	隅丸長方形	2.05	1.63	1.11	1~5	外傾	平坦	自然	9.00	IVA3c	
344	I3b _s	N-71°-W	隅丸長方形	2.26	2.00	1.20	4~13	緩斜	平坦	自然	9.14	IVA3c	足掛け石1点
345	H3i _s	N-2°-W	隅丸方形	1.63	1.58	1.02	1~5	緩斜	皿状	自然	9.00	VB2c	足掛け石1点
346	I3c _s	N-0°	楕円形	2.30	2.05	1.28	1~17	緩斜	皿状	自然	9.24	IB3c	足掛けくぼみ, 足掛け石1点
350	F3c _s	N-1°-W	隅丸長方形	2.26	1.22	0.26	-	緩斜	平坦	自然	6.40	IVA3a	
351	F3c _s	N-23°-W	舟形	2.72	0.89	0.05	1~7	緩斜	平坦	自然	6.36	VIA3a	
352	H3b _s	N-10°-W	隅丸長方形	2.27	1.60	0.89	1~7	緩斜	皿状	自然	6.22	IVB3b	
353	I3a _s	N-0°	隅丸長方形	2.24	1.98	0.38	2~8	緩斜	平坦	自然	8.70	IVA3a	足掛けくぼみ
354	I3a ₂	N-11°-E	隅丸長方形	1.53	1.37	0.52	1~16	緩斜	平坦	自然	8.68	IVA2b	
355	I3b _s	N-51°-W	隅丸方形	1.72	1.70	0.98	2~10	緩斜	平坦	自然	8.73	VA2b	足掛けくぼみ, ④石1点
356	I3f _s	-	不定形	1.53	0.70	0.45	-	緩斜	平坦	自然	5.32	VIA2a	
357	F3b _s	N-10°-W	楕円形	(0.97)	(0.95)	(0.46)	1~6	緩斜	平坦	自然	6.48	IA1a	
358	F3c _s	-	不定形	(1.19)	(0.95)	0.50	-	緩斜	皿状	自然	6.38	VIB2b	
359	H3b _s	N-0°	長楕円形	6.40	5.90	0.15	2~8	緩斜	平坦	自然	4.30	IIA4a	
360	H3j _s	N-84°-E	隅丸方形	1.77	1.64	1.17	1~9	外傾	平坦	自然	8.46	VA2c	
361	H3j _s	N-63°-E	隅丸方形	1.32	1.28	0.60	1~7	緩斜	平坦	自然	8.52	VA2b	
362	H3j _s	N-83°-W	隅丸長方形	1.55	1.14	0.62	1~6	外傾	平坦	自然	8.73	IVA2b	
363	H3h _s	N-4°-E	隅丸長方形	1.81	1.62	1.11	1~11	外傾	平坦	自然	8.66	IVA2c	足掛けくぼみ
364	H3f _s	-	不定形	2.16	1.74	1.58	4~18	緩斜	平坦	自然	8.62	VIA3d	底面一石3点, ⑤石1点
368	K3a ₆	N-10°-E	(楕円形)	0.95	(0.50)	0.36	2~7	緩斜	平坦	自然	8.64	IA1a	
370	K3b _s	N-84°-W	隅丸長方形	1.31	1.04	0.39	1~5	緩斜	平坦	自然	7.96	IVA2a	
371	H3h _s	N-78°-W	隅丸長方形	1.42	1.04	0.76	1~5	緩斜	平坦	自然	8.48	IVA2b	足掛け石1点
372	J3f ₆	N-7°-E	隅丸長方形	3.28	1.83	1.00	-	緩斜	平坦	自然	6.70	IB4c	
373	K3h ₇	N-80°-W	隅丸長方形	2.48	(2.06)	1.15	1~14	緩斜	平坦	自然	8.85	IVA3c	
374	K3j ₆	N-82°-E	隅丸長方形	1.42	0.91	0.32	2~6	緩斜	平坦	自然	8.20	IVA2a	
375	K3j _s	N-0°	隅丸長方形	1.22	0.75	0.14	1~7	緩斜	平坦	自然	8.38	IVA2a	
376	I3a _s	N-87°-W	楕円形	1.80	1.47	0.98	2~7	外傾	平坦	自然	8.28	IA2b	足掛けくぼみ
377	K3d ₆	N-79°-W	隅丸長方形	1.38	0.93	0.24	1~15	外傾	平坦	自然	4.91	IVA2b	底面一くぼみ石
378	K3f ₇	N-3°-W	隅丸長方形	4.26	0.75	0.45	2~7	緩斜	平坦	自然	7.68	IVA4a	
379	I3c ₇	N-7°-E	隅丸長方形	1.40	1.20	0.68	2~15	外傾	平坦	自然	6.82	IVA2b	
380	I3b ₇	N-0°	楕円形	1.80	1.72	0.83	2~8	緩斜	平坦	自然	6.94	IA2b	第381号鹹水槽と重複
381	I3b ₇	N-0°	楕円形	0.87	(0.75)	0.06	3~6	緩斜	平坦	自然	6.98	IA1a	第380号鹹水槽と重複
382	I3g ₆	-	円形	1.30	1.30	0.75	2~10	緩斜	平坦	自然	8.09	IIIA2b	
383	H3i ₆	N-41°-W	隅丸長方形	1.86	1.36	0.78	1~7	緩斜	平坦	自然	7.56	IVA2b	足掛けくぼみ
385	H3g ₄	N-2°-E	隅丸方形	1.06	1.04	0.33	1~7	緩斜	皿状	自然	7.72	VB2a	
386	H3g ₄	N-19°-E	隅丸長方形	1.20	1.08	0.48	3~10	緩斜	皿状	自然	7.77	IVB2a	足掛け石1点, 第387号鹹水槽と重複
387	H3g ₄	(N-68°-W)	(隅丸長方形)	(0.56)	0.80	0.29	1~4	緩斜	平坦	自然	7.76	IVA1a	第386号鹹水槽と重複

鹹水槽 番 号	位置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
388	H3g ₄	N-60°-W	隅丸長方形	0.93	0.79	0.05	1~3	緩斜	平坦	自然	7.72	IVA1a	
389	H3g ₄	N-68°-W	(隅丸長方形)	(0.96)	0.81	0.15	1~10	緩斜	ゆるい起伏	自然	7.74	IVA1a	
390	H3g ₅	N-27°-E	舟 形	1.20	0.63	0.33	3~8	外傾	平坦	自然	7.76	VIA2a	
392	J2e ₉	N-4°-E	隅丸長方形	1.41	1.28	0.53	1~9	緩斜	平坦	自然	7.76	IVA2b	
393	J3b ₁	N-4°-W	隅丸長方形	2.16	1.60	—	—	緩斜	平坦	自然	6.80	IVA3a	
394	J2i ₅	—	円 形	0.90	0.87	0.22	1~6	緩斜	平坦	自然	8.68	III A1a	
395	H3h ₂	N-84°-W	(隅丸長方形)	(2.05)	1.27	1.03	1~14	外傾	平坦	自然	7.64	IVA3c	第396号鹹水槽と重複
396	H3h ₂	N-84°-W	隅丸長方形	1.55	1.25	1.00	1~10	外傾	平坦	自然	7.60	IVA2c	第395号鹹水槽と重複
399	K3e ₆	N-65°-W	隅丸長方形	1.54	1.16	0.66	1~7	緩斜	皿状	自然	8.90	IVB2b	底面-石1点
402	H3j ₈	N-5°-E	舟 形	2.43	1.24	0.49	2~7	外傾	平坦	自然	6.19	IVA3a	ビット3か所
403	I3a ₇	N-3°-W	隅丸方形	(2.65)	(2.65)	1.11	3~7	緩斜	平坦	自然	6.58	VA3c	
404	H3j ₇	N-64°-W	隅丸方形	1.89	1.57	1.15	1~7	外傾	平坦	自然	6.76	VA2c	
406	H3i ₄	N-48°-W	隅丸長方形	1.64	1.29	0.59	1~6	緩斜	平坦	自然	7.72	IVA2b	足掛けくぼみ, 第407号鹹水槽と重複
407	H3i ₄	N-64°-W	隅丸方形	1.21	1.15	0.75	1~8	緩斜	平坦	自然	7.75	VA2b	足掛けくぼみ, 第406号鹹水槽と重複
408	H3i ₁	N-86°-W	隅丸長方形	1.47	1.04	0.34	1~6	緩斜	平坦	自然	7.00	IVA2a	
409	I3i ₁	N-2°-W	隅丸長方形	1.45	1.13	0.75	1~6	外傾	平坦	自然	6.40	IVA2b	
412	I3b ₁	N-34°-W	隅丸長方形	2.33	1.88	1.13	1~10	緩斜	平坦	自然	6.22	IVA3c	底面-獣骨
413	I3d ₂	N-86°-W	隅丸長方形	(2.68)	1.95	0.66	1~5	緩斜	平坦	自然	6.46	IVA3b	
414	I2e ₈	N-11°-W	隅丸方形	1.11	1.06	0.38	3~10	緩斜	皿状	自然	6.08	VB2a	
415	J3a ₂	N-9°-W	隅丸長方形	1.81	1.30	0.64	1~10	外傾	平坦	自然	6.44	IVA2b	
418	H2j ₆	N-88°-W	隅丸方形	1.53	1.52	0.65	2~9	外傾	平坦	自然	5.80	VA2b	足掛けくぼみ, ㊸石1点
419	H2i ₅	N-86°-W	隅丸長方形	(2.32)	1.95	0.52	—	緩斜	平坦	自然	6.04	IVA3b	
420	H2i ₅	—	不 定 形	(1.64)	0.80	0.61	1~5	外傾	平坦	自然	5.98	VII A2b	㊸須恵系土器1点(第305図6)
421	H3i ₁	N-86°-E	隅丸長方形	2.15	1.78	0.47	1~2	緩斜	平坦	自然	6.74	IVA3a	㊸石4点
422	H3f ₃	N-8°-E	隅丸長方形	(2.19)	1.75	0.56	1~10	緩斜	平坦	自然	7.08	IVA3b	
423	H3f ₂	N-13°-W	隅丸長方形	2.33	1.67	0.71	1~3	外傾	平坦	自然	6.89	IVA3b	
424	H3f ₂	N-4°-E	隅丸方形	1.96	(1.91)	0.63	1~5	外傾	平坦	自然	6.70	VA2b	
425	H3f ₁	N-3°-E	隅丸長方形	(2.35)	1.79	0.68	1~7	緩斜	平坦	自然	6.68	IVA3b	
426	H3f ₁	N-89°-E	隅丸長方形	1.18	0.94	0.38	2~10	緩斜	平坦	自然	6.48	IVA2a	
427	H3j ₂	N-0°	隅丸長方形	(2.32)	1.67	0.43	1~5	外傾	平坦	自然	5.93	IVA3a	
428	H3f ₂	N-8°-W	隅丸長方形	(3.00)	1.98	0.82	2~5	緩斜	平坦	自然	6.92	IVA4b	㊸ビット2か所
429	H3f ₁	N-15°-E	楕 円 形	2.45	1.66	0.62	1~7	緩斜	平坦	自然	5.92	IA3b	
431	H2h ₈	N-6°-E	隅丸長方形	1.52	0.90	0.69	2~4	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA2b	
432	J3d ₆	N-7°-E	舟 形	2.30	1.43	0.49	1~6	緩斜	平坦	自然	5.10	VIA3a	底面-石1点, ㊸ビット1か所, 石1点
433	K4a ₁	N-66°-E	楕 円 形	1.64	1.10	—	—	—	平坦	自然	—	IA2a	底部だけ検出
434	J4j ₁	N-70°-E	隅丸長方形	3.78	0.86	0.53	5~11	緩斜	平坦	自然	6.68	IVA4b	
436	H2f ₈	N-0°	隅丸方形	1.99	1.96	0.70	1~6	外傾	平坦	自然	6.32	VA2b	底面-土器片1点, 鉄片1点, ㊸ビット2か所, 木片1点, 古銭1点(第305図1)
437	H3c ₁	N-2°-E	隅丸長方形	1.53	1.39	0.51	3~6	緩斜	平坦	自然	5.36	IVA2b	
438	I3c ₁	N-5°-W	隅丸長方形	1.85	1.26	0.72	2~6	緩斜	平坦	自然	5.40	IVA2b	
439	I2d ₆	N-3°-E	隅丸長方形	1.56	1.20	0.60	1~5	緩斜	平坦	自然	5.12	IVA2b	

440	I2e _s	N-7°-W	隅丸長方形	1.42	1.24	0.75	2~9	緩斜	平坦	自然	5.80	IVA2b	
441	H2j _s	N-80°-W	隅丸長方形	2.14	1.64	0.85	1~5	緩斜	平坦	自然	5.68	IVA3b	
442	H2f ₇	N-7°-E	隅丸長方形	1.58	0.97	0.77	3~14	外傾	平坦	自然	5.70	IVA2b	
443	H2i _s	N-80°-W	隅丸長方形	2.06	1.66	0.27	—	緩斜	平坦	自然	5.80	IVA3a	
444	H2e ₉	N-0°	隅丸長方形	(2.46)	1.42	0.64	1~6	外傾	平坦	自然	5.68	IVA3b	
445	I2g ₇	N-0°	隅丸長方形	2.01	1.72	0.81	—	緩斜	ゆるい起伏	自然	5.68	IVA3b	
446	J3e ₁	N-0°	ひさご形	5.74	1.20	0.10	4~15	緩斜	平坦	自然	6.34	VIIA4a	底面-石3点
447	H3f _s	N-8°-E	楕円形	3.12	2.13	0.98	1~9	緩斜	平坦	自然	6.39	IA4b	㊸ビット2か所
448	I3a _s	N-3°-E	隅丸長方形	4.33	2.92	1.12	1~10	緩斜	平坦	自然	4.98	IVA4c	
449	H2j _s	N-5°-E	隅丸長方形	2.13	1.32	0.87	1~8	緩斜	平坦	自然	5.78	IVA3b	
450	H2j _s	N-4°-E	隅丸長方形	1.94	1.47	0.72	1~6	緩斜	平坦	自然	5.76	IVA2b	
451	I3a ₇	N-0°	隅丸長方形	2.17	1.84	0.23	1~12	緩斜	平坦	自然	5.52	IVA3a	
452	J4a ₁	N-24°-E	隅丸長方形	4.14	1.55	0.36	—	緩斜	平坦	自然	6.86	IVA4a	
453	J3b _s	N-27°-E	舟形	4.64	1.75	0.64	2~6	緩斜	平坦	自然	6.88	VI4b	
455	I2a _s	—	不定形	1.38	1.08	0.25	—	緩斜	平坦	自然	5.56	VIIA2a	
456	I2f _s	N-82°-W	隅丸長方形	(1.25)	(0.68)	0.31	1~2	緩斜	皿状	自然	5.16	IVB2a	
457	K3a ₆	N-4°-E	隅丸長方形	4.34	2.51	1.51	1~13	緩斜	平坦	自然	7.44	IVA4d	底面-石6点, ㊸石3点
458	K3a ₇	N-2°-E	隅丸長方形	3.26	2.21	1.45	1~9	緩斜	平坦	自然	7.56	IVA4c	
459	J3j _s	N-5°-E	隅丸長方形	1.85	0.76	0.18	1~12	緩斜	平坦	自然	7.02	IVA2a	
460	J3j _s	N-25°-E	隅丸長方形	2.75	1.10	0.37	2~9	緩斜	平坦	自然	7.12	IVA3a	
465	K3h _s	N-85°-W	隅丸長方形	3.12	2.30	1.25	2~14	外傾	平坦	自然	7.23	IVA4c	
466	K3h _s	N-77°-W	隅丸長方形	1.96	1.78	0.95	2~13	緩斜	平坦	自然	7.38	IVA2b	
467	K3j _s	N-0°	隅丸長方形	2.81	2.10	1.22	2~5	緩斜	平坦	自然	7.92	IVA3c	
468	L3a ₆	N-70°-W	隅丸長方形	1.92	0.91	0.72	1~5	外傾	平坦	自然	7.52	IVA2b	
469	H2i ₈	N-7°-E	(隅丸長方形)	1.74	1.13	0.84	1~3	緩斜	平坦	自然	5.90	IVA2b	
472	J3g _s	N-15°-E	隅丸長方形	1.85	(1.16)	0.73	2~11	緩斜	平坦	自然	6.10	IVA2b	
473	J3g _s	N-5°-W	隅丸長方形	1.09	0.64	0.27	1~4	緩斜	平坦	自然	5.26	IVA2a	
474	J3g _s	N-5°-W	隅丸長方形	1.52	1.14	0.81	1~10	緩斜	平坦	自然	5.26	IVA2b	
475	L3a ₇	N-74°-E	隅丸長方形	2.33	2.23	1.52	1~10	外傾	平坦	自然	7.30	IVA3d	
479	I3a ₄	N-6°-E	隅丸長方形	3.13	1.48	0.20	1~5	緩斜	平坦	自然	3.56	IVA2a	
481	K3i ₇	N-13°-E	隅丸長方形	1.68	1.56	1.10	2~5	外傾	平坦	自然	7.10	IVA2c	第500号鹹水槽と重複
483	K3e ₃	N-14°-E	隅丸長方形	1.45	1.07	0.43	3~8	緩斜	平坦	自然	7.45	IVA2a	
484	K3e ₆	N-18°-E	隅丸長方形	1.83	0.93	0.94	4~9	外傾	平坦	自然	8.24	IVA2b	
485	K3j _s	N-1°-E	隅丸長方形	2.50	2.00	1.70	1~11	外傾	平坦	自然	7.40	IVA3d	
487	K3f ₇	N-22°-E	隅丸長方形	1.68	0.92	0.64	1~6	外傾	平坦	自然	7.69	IVA2b	
492	K3e ₃	N-9°-E	隅丸長方形	2.45	1.05	0.27	1~8	緩斜	平坦	自然	7.49	IVA3a	
493	K3e ₃	N-12°-E	隅丸長方形	2.21	0.52	0.23	1~4	緩斜	平坦	自然	7.56	IVA3a	
495	J3i ₆	N-23°-E	楕円形	1.20	0.96	0.15	1~5	外傾	平坦	自然	5.74	IA2a	
496	K3a ₇	N-17°-E	隅丸長方形	3.54	1.84	1.19	2~6	緩斜	平坦	自然	6.25	IVA4c	㊸ビット2か所
497	J3j ₇	N-63°-W	隅丸長方形	0.69	0.46	0.31	1~6	緩斜	平坦	自然	6.28	IVA1a	
498	G3j ₇	N-4°-E	隅丸長方形	2.39	1.18	0.48	2~9	緩斜	平坦	自然	6.07	IVA3a	底面-石1点, ㊸ビット1か所, 石1点
499	K3c ₆	N-0°	円形	(0.40)	0.35	0.09	1~5	緩斜	皿状	自然	7.60	VB1a	第500号鹹水槽と重複

鹹水槽 番 号	位置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁 面	底 面	覆 土	標 高 (m)	形 態 分 類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深 さ (m)							
500	K3c6	N-22°-E	楕 円 形	0.80	0.64	0.04	1~4	—	平坦	自然	7.60	IA1a	第499号鹹水槽と重複
501	L3a6	N-10°-E	隅丸長方形	1.16	0.57	0.23	1~4	緩斜	平坦	自然	6.27	IVA2a	
502	L3a5	N-17°-E	隅丸長方形	1.54	0.85	0.53	1~5	外傾	平坦	自然	6.20	IVA2b	底面-石4点
503	L3b7	N-5°-E	隅丸長方形	3.30	1.18	1.54	1~19	外傾	平坦	自然	6.93	IVA4d	足掛けくぼみ、底面-石1点
504	K4a2	N-16°-E	隅丸長方形	4.60	0.81	0.37	2~11	緩斜	平坦	自然	4.94	IVA4d	
505	K3i7	N-72°-W	隅丸長方形	1.26	0.92	0.50	1~9	外傾	平坦	自然	6.00	IVA2b	第481号鹹水槽と重複
509	K3h7	N-0°	隅丸長方形	(0.89)	(0.85)	0.11	2~13	緩斜	平坦	自然	6.06	IVA1a	第522号鹹水槽と重複
511	K3h6	N-80°-W	隅丸長方形	1.42	0.83	0.13	1~6	緩斜	平坦	自然	6.34	IVA2a	
512	K3f6	N-7°-E	隅丸長方形	1.63	(0.74)	0.42	1~5	緩斜	平坦	自然	6.56	IVA2a	
516	K3a4	N-69°-W	隅丸長方形	0.71	0.43	0.08	—	緩斜	平坦	自然	6.58	IVA1a	
518	K3f3	N-6°-E	隅丸長方形	1.72	1.31	0.94	2~6	緩斜	平坦	自然	6.82	IVA2b	
519	K3f2	N-4°-E	隅丸長方形	2.24	1.55	1.40	1~5	緩斜	平坦	自然	6.90	IVA3b	
520	K3e3	N-8°-E	隅丸長方形	(2.54)	1.82	0.92	1~8	緩斜	平坦	自然	6.64	IVA3b	
521	K3f5	N-58°-W	隅丸長方形	1.02	0.60	0.15	—	緩斜	平坦	自然	6.56	IVA2a	
522	K3h9	N-82°-W	隅丸長方形	1.45	1.15	0.30	1~5	外傾	平坦	自然	6.02	IVA2a	第509号鹹水槽と重複
523	K3c8	—	不 定 形	0.94	(0.55)	0.37	1~4	外傾	平坦	自然	6.94	VIIA1a	
524	K3j6	N-86°-W	隅丸長方形	3.17	3.14	0.83	2~8	緩斜	平坦	自然	6.16	IVA4b	
525	K3f5	N-84°-W	隅丸長方形	(1.13)	(0.67)	0.43	1~5	緩斜	平坦	自然	6.54	IVA2a	
526	K3b4	N-55°-W	隅丸長方形	0.37	0.27	0.08	2~5	緩斜	平坦	自然	6.50	IVA1a	第527号鹹水槽と重複
527	K3b4	N-61°-W	隅 丸 方 形	0.37	0.35	0.07	1~5	緩斜	皿状	自然	6.48	VB1a	第526号鹹水槽と重複
528	K3e7	N-16°-E	隅丸長方形	(1.65)	1.63	0.79	—	緩斜	平坦	自然	6.46	IVA2b	
529	K2d6	N-33°-E	隅丸長方形	1.58	1.29	0.68	2~5	緩斜	平坦	自然	6.84	IVA2b	
531	K3e5	N-5°-E	(隅丸長方形)	(1.44)	1.17	0.50	—	緩斜	平坦	自然	6.00	IVA2b	
532	K3e6	N-62°-W	隅丸長方形	2.18	1.73	0.86	2~4	緩斜	平坦	自然	6.60	IVA3b	
533	K3d6	N-61°-W	隅丸長方形	2.30	1.66	0.98	1~8	緩斜	皿状	自然	6.40	IVB3b	
535	K3f1	N-3°-W	隅丸長方形	2.06	1.53	0.93	2~8	外傾	皿状	自然	6.45	IVB3b	
536	K3f5	N-9°-E	隅丸長方形	2.84	2.00	0.94	3~7	緩斜	平坦	自然	6.12	IVA3b	
537	K2c6	—	不 定 形	1.88	1.45	0.95	1~3	外傾	平坦	自然	7.13	VIIA2b	
539	X5a7	N-51°-E	楕 円 形	0.47	0.42	1.00	1~5	緩斜	皿状	自然	10.54	IA1a	
540	X5c2	N-50°-W	楕 円 形	1.12	0.93	1.00	5~6	緩斜	平坦	自然	11.28	IA2a	
541	X5b1	N-17°-E	楕 円 形	0.98	0.81	0.07	1~2	緩斜	平坦	自然	11.15	IA1a	
542	X5e2	N-32°-W	楕 円 形	0.53	0.50	0.18	3~5	垂直	平坦	自然	11.26	IA1a	
543	X5d3	N-33°-W	楕 円 形	0.38	0.28	0.13	3~6	緩斜	皿状	自然	11.58	IA1a	底面-石1点
544	X5d3	N-24°-E	隅丸長方形	1.20	0.63	0.41	1~8	外傾	平坦	自然	11.50	IVA2a	
545	X5e3	N-7°-E	隅丸長方形	0.88	0.56	0.23	1~10	外傾	平坦	自然	11.40	IVA1a	底面-石1点
546	X5e4	N-13°-E	(隅丸長方形)	(2.29)	1.57	0.90	2~11	緩斜	平坦	自然	11.52	IVA3b	⑨石1点
547	X5b3	N-25°-E	隅丸長方形	0.90	0.50	0.06	3~14	緩斜	平坦	自然	11.68	IVA1a	
548	X5b3	N-27°-E	隅丸長方形	1.17	0.72	0.25	2~3	外傾	平坦	自然	11.20	IVA2a	
549	X5e7	N-84°-W	楕 円 形	0.40	0.32	0.32	2~10	外傾	皿状	自然	11.14	IVB1a	
550	X5e7	N-68°-W	隅丸長方形	1.99	1.38	0.58	3~8	緩斜	平坦	自然	11.30	IVA2b	

551	X5a7	N-73°-W	楕円形	0.73	0.60	0.26	3~10	外傾	平坦	自然	10.60	IA1a	
552	X6c1	N-4°-E	隅丸長方形	2.00	1.22	0.12	2~5	緩斜	平坦	自然	8.98	IVA3a	
553	W5i9	N-60°-W	隅丸長方形	1.89	0.87	0.21	5~10	緩斜	平坦	自然	9.90	IVA2a	
554	W5h0	N-55°-W	隅丸長方形	1.33	0.93	0.05	3~7	緩斜	平坦	自然	9.86	IVA2a	
555	X5d5	N-67°-W	隅丸長方形	2.32	1.48	0.76	2~12	緩斜	平坦	自然	11.44	IVA3b	
556	X5b5	N-64°-E	隅丸長方形	0.93	0.59	0.13	3~8	緩斜	平坦	自然	11.60	IVA1a	
557	X5c9	N-88°-W	隅丸長方形	1.95	1.03	0.33	3~5	緩斜	平坦	自然	9.80	IVA2a	㊦石2点
558	X4e5	N-6°-W	楕円形	0.55	0.50	0.08	4~11	緩斜	皿状	自然	10.52	IB1a	底面-石1点, ㊦土器片1点
559	X4e7	N-75°-E	楕円形	0.60	0.39	0.03	3~8	緩斜	ゆるい起伏	自然	10.51	IA1a	
560	X5d7	N-53°-W	楕円形	0.75	0.72	0.31	2~11	緩斜	皿状	自然	11.36	IB1a	
561	X5e5	N-11°-E	楕円形	3.65	1.78	0.95	1~8	緩斜	平坦	自然	10.42	IA4b	
562	W5j5	N-32°-E	楕円形	0.66	0.57	0.15	3~5	緩斜	平坦	自然	11.34	IA1a	第583号鹹水槽と重複
563	X4d5	-	不定形	0.70	0.57	0.16	2~11	緩斜	皿状	自然	10.65	VIII1a	㊦石1点
564	X5b0	N-72°-W	隅丸長方形	1.87	1.76	0.63	2~9	緩斜	平坦	自然	9.78	VA2b	足掛け石1点
565	X5b0	N-1°-W	楕円形	2.15	1.68	0.64	2~8	緩斜	平坦	自然	9.80	IA3b	
566	X5a0	N-6°-E	楕円形	1.22	0.70	0.13	2~10	緩斜	ゆるい起伏	自然	9.98	IA2a	底面-石2点, ㊦石8点
567	W5c7	N-41°-E (楕円形)	0.62	(0.27)	0.07	2~3	緩斜	皿状	自然	10.00	IB1a	㊦石1点, 土器片1点	
568	W5c1	N-13°-W	楕円形	0.64	0.56	0.14	2~5	緩斜	皿状	自然	9.92	IB1a	
569	W5i9	N-9°-W	隅丸長方形	3.97	1.88	0.09	2~7	緩斜	平坦	自然	9.90	IVA4a	足掛け石1点
572	X5b1	N-8°-W	楕円形	0.44	0.37	0.03	1~2	緩斜	皿状	自然	10.66	IB1a	
573	X5d4	N-74°-E (楕円形)	(0.78)	(0.49)	0.24	3~4	緩斜	皿状	自然	11.78	IB1a		
576	W5e5	N-38°-W (隅丸長方形)	(1.08)	0.69	0.18	2~8	緩斜	平坦	自然	10.17	IVA2a		
577	W5a5	N-62°-W	隅丸長方形	1.57	0.94	0.36	3~6	緩斜	平坦	自然	9.77	IVA2a	㊦石1点
579	V5j9	N-17°-E	隅丸長方形	1.98	1.48	0.75	1~12	緩斜	平坦	自然	9.20	IVA2b	
582	W5a9	N-3°-E	楕円形	2.00	1.85	0.72	2~8	緩斜	平坦	自然	9.48	IA3b	足掛けくぼみ, ㊦石1点
583	W5j5	-	不定形	0.72	(0.63)	0.32	4~15	緩斜	平坦	自然	11.34	VIIA1a	第562号鹹水槽と重複
584	X5b5	N-31°-E	楕円形	0.99	0.90	0.34	1~15	緩斜	皿状	自然	11.46	IB1a	
585	X5b1	N-71°-W	隅丸長方形	0.72	0.60	0.13	1~6	緩斜	平坦	自然	11.50	IVA1a	
586	W5j1	N-9°-E	楕円形	0.62	0.53	0.15	6~7	緩斜	平坦	自然	11.00	IA1a	
587	W5i8	N-59°-W	隅丸長方形	1.81	1.00	0.35	1~5	緩斜	皿状	自然	9.84	IVB3b	底面-焼石1点, 石8点, ㊦石4点
588	W5h5	N-29°-E	隅丸長方形	2.22	1.53	0.80	2~9	外傾	平坦	自然	9.74	IVA2b	底面-石1点, ㊦耳金1点(第305図2)
590	W5h5	N-32°-E	隅丸長方形	1.85	1.14	0.78	2~9	外傾	平坦	自然	9.48	IVA2b	㊦石2点
592	X5a7	N-40°-W	楕円形	0.48	0.29	0.09	2~10	緩斜	平坦	自然	10.42	IA1a	
593	W5h5	N-16°-E (舟形)	(2.19)	(0.82)	0.03	2~6	緩斜	平坦	自然	9.61	IVA3a		
594	X5b1	N-52°-W	楕円形	0.78	0.61	0.23	-	緩斜	皿状	自然	11.02	IA1a	第607号鹹水槽と重複
595	X5c3	-	不定形	1.42	0.85	0.20	2~5	緩斜	平坦	自然	11.38	VIIA2a	足掛けくぼみ, 底面-石2点, ㊦石1点
596	W5j9	N-12°-W	舟形	4.40	2.67	0.88	2~6	緩斜	平坦	自然	9.71	IVA4b	足掛け石1点, 焼石1点, 壁石多数, 底面-石2点
597	X5e1	N-22°-E	隅丸長方形	1.28	0.88	0.30	1~6	外傾	平坦	自然	10.84	IVA2a	鉄片1点
598	X5c2	N-84°-E	楕円形	1.48	1.25	0.26	4~17	緩斜	平坦	自然	11.20	IA2a	㊦石4点, 第606号鹹水槽と重複
599	X5b2	- (不定形)	(1.91)	(1.54)	0.36	3~6	緩斜	皿状	自然	10.88	VIII2a		
600	X5e3	N-10°-E	隅丸長方形	0.84	0.47	0.13	2~5	緩斜	平坦	自然	11.12	IVA1a	
601	X5e1	N-11°-W	楕円形	0.54	0.39	0.08	1~3	緩斜	皿状	自然	11.18	IA1a	

鹹水槽 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
602	X5e1	N-73°-E	楕円形	0.63	0.51	0.31	1~11	緩斜	皿状	自然	11.28	IA1a	
603	X5e1	N-25°-W	楕円形	1.12	0.98	0.58	2~8	外傾	皿状	自然	11.16	IB2b	
604	X5a5	N-30°-W	(楕円形)	(0.36)	(0.28)	0.11	3~4	緩斜	皿状	自然	11.01	IB1a	
606	X5d2	N-84°-E	楕円形	1.46	0.26	0.49	2~17	緩斜	皿状	自然	11.18	IB2a	㊸石2点, 第598号鹹水槽と重複
607	X5b4	N-68°-W	楕円形	0.86	0.68	0.20	—	緩斜	皿状	自然	10.96	IA1a	第594号鹹水槽と重複
608	X5e2	N-26°-E	楕円形	0.57	0.54	0.11	3~12	外傾	皿状	自然	11.02	IB1a	底面-石2点, ㊸焼石1点
609	X5c3	N-64°-W	楕円形	1.30	1.02	0.31	2~6	緩斜	皿状	自然	10.80	IB2a	
611	W6h3	N-5°-E	(隅丸長方形)	(3.32)	0.98	0.11	5~12	緩斜	平坦	自然	8.18	IVA4a	
612	X5a4	N-14°-E	楕円形	0.54	0.48	0.12	3~8	緩斜	皿状	自然	10.33	IB1a	
613	X5b5	N-35°-E	楕円形	0.42	0.38	0.12	2~8	緩斜	皿状	自然	10.38	IB1a	底面-石2点
614	X5a5	—	(不定形)	(0.73)	(0.48)	0.05	3~4	緩斜	平坦	自然	10.29	VIIA1a	
615	X5a6	N-38°-W	楕円形	0.47	0.46	0.09	2~5	緩斜	皿状	自然	10.35	IB1a	
616	X5a5	N-85°-E	楕円形	0.82	0.75	0.07	2~4	緩斜	平坦	自然	10.34	IA1a	㊸石1点
617	X5b1	N-40°-E	楕円形	0.70	0.57	0.10	2~30	緩斜	皿状	自然	10.74	IB1a	底面-石1点, 第619号鹹水槽と重複
618	W5i5	N-3°-W	楕円形	0.71	0.58	0.08	3~4	緩斜	皿状	自然	10.02	IB1a	
619	X5b1	N-33°-E	楕円形	0.85	0.56	0.21	1~7	緩斜	皿状	自然	10.70	IB1a	底面-石1点, 第617号鹹水槽と重複
622	X5a5	N-53°-W	隅丸長方形	1.43	1.01	0.54	—	外傾	皿状	自然	9.92	IVB2b	
623	W5i5	—	(不定形)	(1.18)	(0.72)	0.14	1~4	緩斜	平坦	自然	9.80	VIIA2a	
624	X5b3	N-68°-E	楕円形	0.55	0.54	0.23	3~5	緩斜	皿状	自然	10.00	IB1a	底面-石1点
627	X5e1	N-11°-W	隅丸長方形	2.96	1.28	1.06	4~17	緩斜	平坦	自然	9.16	IVA3c	足掛け石1点
628	X5b1	N-30°-E	楕円形	0.52	0.38	0.10	2~6	緩斜	皿状	自然	9.50	IB1a	㊸石8点
629	X5b5	N-72°-E	楕円形	0.67	0.60	0.13	—	緩斜	皿状	自然	9.28	IB1a	
630	X5d5	N-10°-E	楕円形	2.85	2.70	1.52	1~18	緩斜	皿状	自然	8.90	IB3d	足掛け石1点
631	X5c5	N-85°-W	楕円形	1.83	0.61	0.10	4~5	緩斜	皿状	自然	9.48	IB2a	
632	X5e5	N-82°-W	隅丸長方形	(1.27)	2.14	1.17	—	緩斜	平坦	自然	8.75	IVA2c	
633	W5h3	N-32°-E	隅丸長方形	1.64	1.00	0.52	2~6	緩斜	平坦	自然	9.18	IVA2b	㊸石5点, 第637号鹹水槽と重複
637	W5h5	—	不定形	(0.38)	(0.35)	(0.12)	9	緩斜	平坦	自然	8.98	VIIA1a	第633号鹹水槽と重複
640	W5h5	N-46°-W	隅丸長方形	2.43	2.18	1.48	2~13	緩斜	平坦	自然	8.65	IVA3c	足掛けくぼみ, 足掛け石4点
643	X5a4	N-8°-W	楕円形	2.32	1.93	1.70	3~8	外傾	平坦	自然	8.25	IA3d	足掛けくぼみ, 足掛け石1点, ㊸燧石9点
645	X4d5	N-27°-E	隅丸長方形	2.20	1.52	1.20	4~15	緩斜	平坦	自然	9.30	IVA3c	足掛けくぼみ, ㊸石1点, ㊸土器片
652	W5a6	N-74°-W	楕円形	1.49	0.93	0.06	3~10	緩斜	平坦	自然	9.72	IA2a	
653	W5e1	N-66°-W	隅丸方形	0.49	0.45	0.15	2~6	緩斜	平坦	自然	9.47	VA1a	㊸焼石1点, 石1点
662	W5b5	N-71°-W	隅丸長方形	1.18	0.55	0.11	2~4	緩斜	平坦	自然	9.28	IVA2a	
663	W5b5	N-13°-E	楕円形	2.98	1.45	0.57	3~5	緩斜	皿状	自然	8.84	IB3b	
670	X5c5	N-27°-E	隅丸長方形	2.12	1.64	1.38	6~10	緩斜	平坦	自然	8.42	IVA3c	㊸足掛け石, 石2点
674	W5g1	N-21°-W	(隅丸長方形)	(2.81)	1.91	1.38	1~8	緩斜	平坦	自然	9.00	IVA3c	㊸足掛け石1点
679	W5g1	N-27°-W	(隅丸長方形)	(2.62)	2.31	1.48	1~10	緩斜	平坦	自然	8.98	IVA3c	㊸足掛け石1点
680	W5j3	N-21°-E	隅丸方形	1.55	1.50	0.78	1~7	緩斜	平坦	自然	7.26	VA3b	底面-石2点, ㊸足掛け石1点
681	W6h5	N-5°-E	長楕円形	6.58	2.05	0.88	5~10	緩斜	平坦	自然	4.38	IIA4b	㊸足掛け石1点
682	W5h5	N-45°-E	隅丸方形	2.10	2.08	1.15	3~8	緩斜	平坦	自然	8.38	VA3c	足掛け石1点

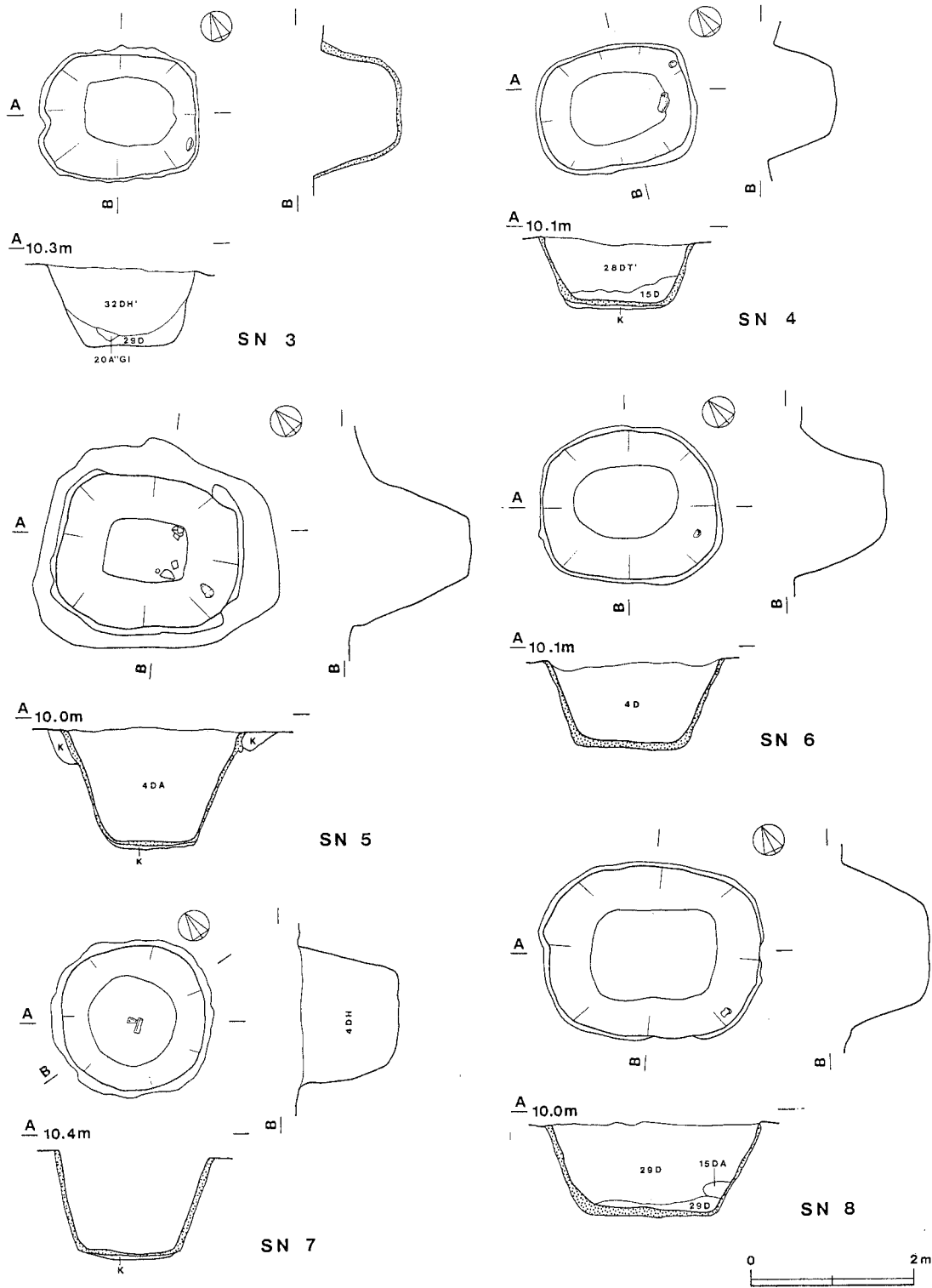
683	S4d ₃	N-26°-E	隅丸長方形	1.63	0.76	0.38	2~7	外傾	平坦	自然	8.80	IVA2a	
684	S4c ₃	N-20°-E	隅丸長方形	1.18	0.72	0.25	2~4	外傾	皿状	自然	8.70	IVB2a	㊸炭化物
687	S3e ₃	N-56°-W	隅丸長方形	2.13	1.09	0.49	2~9	外傾	平坦	自然	8.80	IVA3a	底面-石1点
692	S3f ₇	—	円形	0.47	0.47	0.15	10~16	緩斜	皿状	自然	8.86	IIIB5a	底面-石3点, 貝片2点
693	R4b ₄	N-18°-E	舟形	4.27	1.50	0.45	2~8	緩斜	平坦	自然	8.10	VI A4a	足掛け石1点, 底面-石1点, 貝片1点
694	R4d ₅	N-13°-E	舟形	3.32	1.65	0.55	1~6	緩斜	平坦	自然	7.76	VIA4b	㊸石2点
696	S3c ₃	—	円形	0.51	0.51	0.09	2~9	緩斜	皿状	自然	6.84	IIIB1a	
697	S3c ₈	—	円形	0.27	0.27	1.50	2~6	緩斜	平坦	自然	8.90	IIIB1a	
702	S3e ₃	N-56°-W	隅丸長方形	2.27	1.09	0.55	1~5	緩斜	平坦	自然	8.96	IVA2b	第687号鹹水槽と重複
703	R4j ₂	N-71°-E	楕円形	0.64	0.41	0.09	2~12	緩斜	皿状	自然	8.48	IB1a	
705	R4c ₃	N-16°-E	舟形	4.19	2.24	0.80	3~9	緩斜	平坦	自然	8.45	VI A4b	足掛け石2点, 底面-石3点, ㊸石12点
706	S3c ₃	N-0°	楕円形	1.00	0.85	0.12	0.8~5	緩斜	皿状	自然	8.84	IB2a	底面-石1点
707	S3c ₃	N-32°-E	隅丸長方形	2.06	1.33	0.57	4~9	外傾	平坦	自然	8.80	IVA3b	底面-石1点
708	S3i ₃	N-41°-W	隅丸長方形	1.50	0.90	0.41	3.5~6	緩斜	平坦	自然	8.40	IVA2a	
710	S3d ₃	N-6°-E	楕円形	0.94	0.71	0.22	1.5~7	緩斜	皿状	自然	8.60	IB2a	㊸石8点
711	S3e ₃	—	円形	0.60	0.60	0.11	3~14	緩斜	皿状	自然	9.07	IIIB1a	底面-石1点
713	S3i ₃	—	円形	0.63	0.63	0.37	8~13	外傾	平坦	自然	8.68	IIIA1a	
714	S3e ₃	—	円形	0.58	0.58	0.16	1~2.5	外傾	皿状	自然	8.98	IIIB1a	
724	R4g ₃	N-0°	楕円形	0.62	0.38	0.07	1.5~4	外傾	平坦	自然	8.25	IB1a	
729	V5b ₁	N-49°-E	不明	1.42	1.40	0.12	7~16	緩斜	皿状	自然	6.63	VIB2a	㊸石1点
733	V5d ₃	N-6°-W	楕円形	(0.68)	0.50	0.16	—	外傾	平坦	自然	7.09	IA1a	
734	U5j ₃	—	円形	0.72	0.72	0.09	3~6	緩斜	皿状	自然	6.04	IIIB1a	
735	U5i ₃	N-47°-W	楕円形	1.10	1.04	0.24	4	緩斜	皿状	自然	6.00	IB2a	
752	V5d ₄	—	円形	0.52	0.52	0.10	2~5	緩斜	皿状	自然	7.05	IIIB1a	
754	U4d ₇	N-0°	不定形	0.88	0.73	0.03	3~10	緩斜	皿状	自然	5.60	VIB1a	
765	T3h ₃	N-13°-W	楕円形	1.47	0.67	0.57	4~12	外傾	平坦	自然	6.01	IA2b	㊸石2点
766	T3i ₄	N-2°-W	楕円形	0.68	0.59	0.27	3~10	緩斜	凹凸	自然	8.56	IA1a	底面-石1点
768	T3g ₅	N-88°-W	隅丸長方形	1.28	0.90	0.46	1~4.5	外傾	平坦	自然	8.10	IVA2a	
769	T3e ₃	N-67°-W	楕円形	0.91	0.61	0.29	0.5~7	外傾	平坦	自然	7.83	IA2a	
770	T3f ₅	N-62°-W	隅丸長方形	1.54	0.76	0.46	1~8	外傾	平坦	自然	8.34	IVA2a	
771	T3c ₅	N-89°-E	円形	0.47	0.47	0.16	2~8	緩斜	皿状	自然	8.70	IIIB1a	
774	V5e ₄	N-27°-E	不明	(0.90)	(0.40)	0.35	8~14	緩斜	皿状	自然	6.68	VIIA1a	
775	V5e ₅	N-39°-E	(不明)	(0.67)	(0.57)	0.19	6~15	緩斜	皿状	自然	6.77	VIIIB1a	
777	S3j ₄	N-41°-W	隅丸長方形	2.34	1.20	0.56	1~6	外傾	平坦	自然	8.64	IVA3b	
778	S3j ₃	N-40°-W	隅丸長方形	2.61	1.44	0.77	4~7	緩斜	平坦	自然	8.70	IVA3b	
779	S3i ₃	N-42°-W	楕円形	0.82	0.70	0.12	2~6	緩斜	皿状	自然	8.70	IB1a	
794	S3h ₅	—	円形	0.74	0.74	0.26	2~5	外傾	皿状	自然	8.58	IIIB1a	㊸石3点
795	T3b ₅	N-52°-W	楕円形	1.07	0.65	0.12	3~4	緩斜	平坦	自然	7.71	IB2a	
796	T3b ₅	N-65°-W	楕円形	0.84	0.60	0.31	3~11	外傾	皿状	自然	7.90	IB1a	底面-石1点
798	T3c ₄	—	円形	0.52	0.52	0.20	2~10	垂直	皿状	自然	8.10	IIIA1a	底面-石2点, ㊸石1点
799	T3b ₅	N-0°	楕円形	(1.15)	(0.95)	0.43	2~16	緩斜	皿状	自然	7.91	IB2a	㊸石3点
800	S3i ₄	N-46°-E	楕円形	1.31	0.52	0.04	3~6	緩斜	平坦	自然	8.49	IB2a	

鹹水槽 番 号	位置	長軸方向 [長径]	平 面 形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	形態 分類	備 考
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
804	T3h ₀	N-20°-W	楕 円 形	1.92	0.64	0.66	2~4	外傾	皿状	自然	5.98	IA2b	第764号鹹水槽と重複
805	T3b ₅	N-0°	(楕円形)	(0.90)	0.60	0.35	0.5~1	外傾	皿状	自然	7.84	IB1a	
806	S3i ₄	N-25°-E	楕 円 形	0.55	0.38	0.02	4~19	—	平坦	自然	8.66	IA1a	
807	S3h ₆	N-0°	不 定 形	0.77	0.68	0.06	2~11	緩斜	皿状	自然	8.69	VIB1a	
809	S3g ₅	—	円 形	0.76	0.76	0.30	5~11	緩斜	皿状	自然	8.74	III B1a	底面-石1点
811	V4b ₇	N-78°-E	楕 円 形	2.00	0.86	0.28	3~9	緩斜	平坦	自然	5.18	IA3a	
814	R5a ₄	N-19°-E	不 定 形	2.45	2.22	0.18	8~47	緩斜	平坦	自然	5.18	VII A3a	㊟ 礫石2点、布釘1点(第305図3)、耳金1点(第305図4)、㊟ 石2点、礫石1点
824	R4f ₅	N-37°-E	隅丸長方形	2.61	1.57	1.05	3~10	緩斜	平坦	自然	7.50	IVA3c	足掛けくぼみ、底面-石1点
826	Q5h ₄	N-62°-W	不 明	(2.35)	(2.04)	0.32	—	緩斜	皿状	自然	4.46	IVB3a	攪乱により不明
843	Q3d ₁	N-78°-W	隅丸長方形	3.02	2.29	1.40	3~8	外傾	平坦	自然	8.52	IVA4c	足掛けくぼみ、足掛け石1点、底面-石2点
849	R4h ₃	N-80°-W	楕 円 形	0.66	0.52	0.31	1.5~6	外傾	皿状	自然	7.49	IB1a	
850	R4h ₃	N-73°-W	楕 円 形	1.35	0.56	0.15	1~3	緩斜	平坦	自然	7.55	IA2a	
851	Q3j ₃	N-49°-W	隅丸長方形	1.17	0.68	0.31	1~4	緩斜	平坦	自然	7.64	IVA2a	
852	Q3j ₄	N-90°-W	隅丸長方形	2.22	2.21	1.50	3~12	外傾	平坦	自然	7.53	VA3d	㊟ 足掛け石1点
853	Q3h ₆	N-6°-E	隅丸長方形	2.37	2.20	1.55	2~10	外傾	平坦	自然	6.95	VA3d	㊟ 石2点、㊟ 石3点
854	R3a ₃	N-10°-E	隅丸長方形	3.39	1.75	0.49	0.5~8	緩斜	平坦	自然	7.40	IVA4a	
857	Q4j ₄	N-12°-E	楕 円 形	0.79	0.52	0.19	0.1~4	緩斜	皿状	自然	6.80	IB1a	
859	R3e ₉	N-43°-W	楕 円 形	2.84	1.03	0.32	1.5~10	緩斜	平坦	自然	7.13	IA3a	㊟ 石6点
863	Q3h ₇	N-89°-W	楕 円 形	2.21	1.95	1.56	3~17	外傾	平坦	自然	6.81	IA3d	
865	R4i ₃	N-53°-W	隅丸長方形	3.89	2.62	1.22	3~7	緩斜	平坦	自然	7.54	IVA4c	足掛けくぼみ、底面-石3点
867	R4h ₃	N-39°-W	楕 円 形	4.95	3.17	1.48	6~10	緩斜	平坦	自然	7.19	IA4c	足掛け石1点、底面-石3点、木片1点、㊟ 石20点
868	R4d ₄	N-62°-W	不 定 形	2.53	2.35	1.07	0.5~12	緩斜	平坦	自然	7.14	VII A3c	足掛け石1点
869	Q3i ₄	N-89°-W	隅丸長方形	1.94	1.46	0.92	4~11	外傾	平坦	自然	6.75	IVA2b	足掛けくぼみ
870	R4g ₄	N-32°-E	楕 円 形	3.21	1.78	0.71	2~9	外傾	平坦	自然	6.62	IA4b	
875	R4d ₅	N-9°-E	隅丸長方形	4.62	1.58	0.90	3~8	外傾	平坦	自然	7.01	IVA4b	
876	R4f ₄	N-73°-W	隅丸長方形	2.43	1.45	0.35	2~9	緩斜	平坦	自然	6.48	IVA3a	
877	R4i ₇	N-63°-W	楕 円 形	1.67	0.75	0.10	0.5~4	緩斜	皿状	自然	6.90	IB2a	
898	Q3i ₆	N-12°-E	楕 円 形	1.85	1.39	0.57	3~6	緩斜	平坦	自然	5.52	IA2b	
899	Q3h ₃	N-88°-E	楕 円 形	2.23	1.85	1.27	1~8	外傾	平坦	自然	5.75	IA3c	足掛け石1点、底面-石4点、㊟ 石3点
900	Q3j ₆	N-64°-W	楕 円 形	1.85	1.61	0.87	1~6	外傾	平坦	自然	6.07	IA2b	
901	R3c ₃	N-53°-W	隅丸長方形	1.63	0.88	0.27	2~6	緩斜	平坦	自然	5.30	IVB2a	
902	R4c ₃	N-69°-W	隅丸長方形	3.18	(1.57)	1.20	1~6	外傾	平坦	自然	4.87	IVA4c	足掛け石1点、底面-石2点
903	R4d ₅	(N-75°-W)	隅丸長方形	(2.87)	(1.20)	0.04	1~7	緩斜	平坦	自然	3.90	IVB3a	

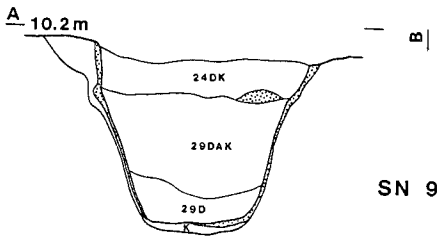
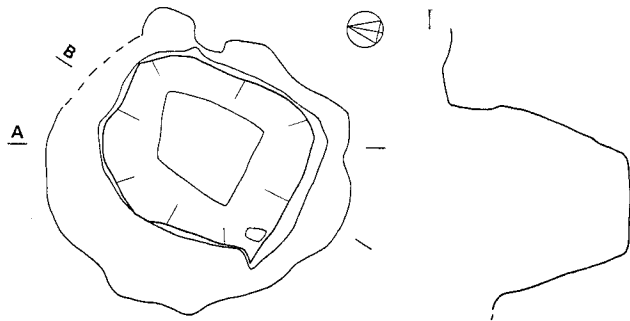
表3 土樋一覧表 (第298~304図)

土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ (m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)						
6	O3c ₀	N-57°-E	1.35	22	20	4	4~6	U	自然	無	8.32 ~8.46	第7・8号土樋と接続
7	O3c ₀	N-72°-E	0.85	24	18	8	6	U	自然	有	8.39 ~8.46	第6・8号土樋と接続
8	O3c ₀	N-88°-E	0.76	21	18	7	3~6	U	自然	無	8.33 ~8.46	第6・7号土樋と接続
23	N4i ₆	N-65°-W	0.80	12	6	2	2~8	U	自然	無	5.80	
28	O4a ₅ ~O4a ₆	N-70°-W	1.80	25	18	8	8~10	U	自然	有	5.92 ~5.93	
32	O3f ₉ ~O3f ₀	N-80°-W	2.80	30	15	10	2~6	U	自然	無	7.82 ~7.84	第39号鹹水槽と連結
35	O3f ₉ ~O3g ₉	N-38°-E	1.20	14	10	5	2~4	U	自然	無	8.15	第36号土樋と接続
36	O3f ₉ ~O3g ₉	N-22°-E	1.30	19	10	4	2~4	U	自然	無	8.10	第35号土樋と接続
37	O3e ₉ ~O3f ₉	N-6°-W	2.00	22	10	17	6~10	U	自然	有	7.42	石蓋のかわりに獣骨 で蓋をしている。
38	O3d ₀	N-80°-W	0.70	25	23	2	8~10	U	自然	無	7.72	
48	O3e ₀ ~O4e ₁	N-84°-W	4.20	32	22	4	2~4	U	自然	無	7.19 ~7.30	
49	O4b ₁	N-22°-W	1.30	23	17	7	4	U	自然	無	7.42	
50	O4c ₁	N-5°-W	0.70	12	10	5	5	U	自然	無	6.70	
51	O4c ₁	N-66°-W	2.10	28	17	13	2~4	U	自然	無	6.56	
53	O3h ₉	N-72°-W	2.50	20	8	2	4	U	自然	無	7.88 ~7.92	第54号土樋と接続、 第45号鹹水槽と連結
54	O3h ₉	N-62°-W	4.20	38	25	8	4	U	自然	無	7.87 ~7.92	第53号土樋と接続、 第45号鹹水槽と連結
56	O4b ₁	N-72°-W	0.80	13	11	4	4~6	U	自然	無	6.94	
67	O3d ₉	N-10°-E	0.60	20	14	2	4~6	U	自然	無	5.94	
69	O3f ₉ ~O3f ₀	N-55°-E	2.80	23	13	10	4~6	U	自然	無	6.48 ~6.57	第110号鹹水槽と連結
70	O3d ₉ ~O3f ₉	N-3°-W	8.00	40	15	5	4~6	U	自然	有	5.84 ~6.17	
73	O3a ₀	N-30°-E	3.00	19	15	8	4	U	自然	無	5.38 ~5.87	
75	O3e ₉ ~O3f ₉	N-1°-E	4.20	20	13	4	3~4	U	自然	無	5.69 ~5.76	
76	O3d ₉ ~O3f ₉	N-5°-E N-7°-W	8.00	20	17	6	4~8	U	自然	無	5.52 ~5.65	
77	O3d ₉ ~O3e ₉	N-34°-W	4.50	15	8	7	4~8	U	自然	無	5.08 ~5.14	第80号土樋と接続
79	O3d ₉ ~O3d ₀	N-86°-W	2.60	13	10	10	4~8	U	自然	無	5.19 ~5.30	
80	O3e ₉ ~O3f ₉	N-8°-E	4.60	14	10	8	4~8	U	自然	無	5.18 ~5.26	第77号土樋と接続
90	H3j ₃ ~H3j ₄	N-35°-E	6.43	35	28	10	1~5	U	自然	有	10.15 ~10.24	㊦焼石3点、石8点、 第91号土樋と接続
91	H3j ₃	N-64°-W	0.55	30	10	6	1~4	U	自然	無	10.33	
92	J3f ₀ ~J3g ₀	N-2°-W N-27°-W	5.57	32	23	10	3~13	U	自然	無	6.56 ~6.58	
93	J3e ₀	N-4°-E	3.80	49	27	14	4~13	U	自然	無	6.48 ~6.52	
112	J4e ₂	N-63°-E	0.58	20	12	7	5~7	U	自然	無	5.92	
117	K3b ₆	N-87°-W	2.34	22	13	8	1~2	U	自然	有	7.32 ~7.51	
118	J4g ₂	N-40°-E	1.94	19	13	13	1~6	U	自然	無	5.71 ~5.75	

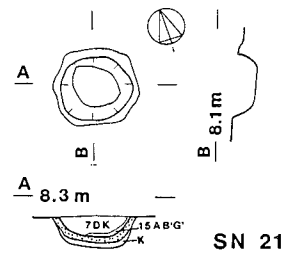
土樋 番号	位 置	主軸方向	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	断 面	覆 土	蓋石の 有 無	標 高 (m)	備 考
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
120	W5e _a ~W5f _a	N-35°-E	6.79	24	14	6	2~6	U	自然	無	10.03 ~10.16	
121	W5f ₇	N-5°-E	0.78	15	10	5	2~5	U	自然	無	10.22	
124	W5h ₈ ~W5j ₇	N-54°-E N-24°-E N-63°-E N-9°-W	11.75	25	17	9	-	U	自然	有	9.08 ~9.20	
125	W5f ₇ ~W5i ₇	N-2°-E N-5°-W N-38°-E	12.00	24	13	12	2~11	U	自然	無	8.58 ~8.80	
126	W5g ₆ ~W5i ₆	N-9°-E N-6°-W N-19°-E	10.80	19	14	4	2~3	U	自然	有	8.81 ~9.01	
127	W5f ₈ ~W5h ₈	N-20°-E N-13°-E	5.24	19	10	6	4~10	U	自然	無	8.74 ~9.03	
128	W5f ₈ ~W5f ₇	N-65°-W N-42°-W	5.14	36	10	10	-	U	自然	有	9.40	第129号土樋と接続
129	W5f ₇	N-65°-E	1.85	25	10	12	-	U	自然	有	9.40	第128号土樋と接続
130	W5d ₇	N-4°-E	7.31	13	6	6	2~4	U	自然	無	9.30 ~9.35	
131	W5j ₆	N-67°-W N-60°-E	5.57	20	8	10	3~8	U	自然	無	8.65 ~8.84	
138	W5i ₆	N-62°-E	1.65	20	14	4	2~10	U	自然	有	8.70	
139	W5i ₆	N-36°-E N-58°-E	3.96	16	10	7	3~9	U	自然	無	8.72	
142	W5h ₇	N-47°-E	2.45	14	6	6	2~7	U	自然	無	8.86 ~8.94	
144	R4e ₃	N-43°-W	1.56	30	5	7	3	U	自然	無	8.50	
145	R4d ₄	N-65°-E	0.65	23	14	5	-	U	自然	無	8.28	
149	R4e ₄	N-24°-E	0.50	13	5	8	1.5~4	U	自然	無	8.60	
150	R4e ₄	N-2°-W	3.21	28	7	10	2~5	U	自然	無	8.56 ~8.58	
177	R4e ₄	N-48°-W	1.48	34	15	6	3~5	U	自然	無	8.36	
178	R4e ₄	N-47°-E	0.84	24	5	2	6~7	U	自然	無	8.36	
179	R4d ₄	N-88°-E	1.45	22	-	-	1~2	U	自然	無	8.36	
200	R4h ₃	N-85°-W	1.20	19	5	4	3~9	U	自然	無	8.18	
216	R4f ₃ ~R4g ₃	N-26°-E	4.60	11	4	5	1~5	U	自然	無	7.30 ~7.31	
217	R4h ₃	N-45°-W	0.73	40	29	3	-	U	自然	有	7.30	
218	R4i ₃	N-29°-E	1.76	15	7	5	2~5	U	自然	無	7.85 ~7.86	
223	R4b ₃ ~R4c ₄	N-65°-W	11.99	30	10	9	1~4	U	自然	有	7.65 ~7.88	
227	R4b ₄	N-46°-E	2.80	42	8	10	1~5	U	自然	無	7.76	
230	R4e ₁	N-75°-W	1.56	15	6	5	1~2	U	自然	無	7.40	
231	R4e ₁	N-57°-W	2.06	19	8	4	1~5	U	自然	無	7.30	
234	R4i ₃	N-80°-W	1.00	38	22	1	1~2	U	自然	無	7.78	
238	R4b ₄	N-36°-W	2.80	29	7	4	1~4	U	自然	無	7.76	
268	R5b ₄	N-36°-W	1.25	60	35	17	1~12	U	自然	無	3.94	



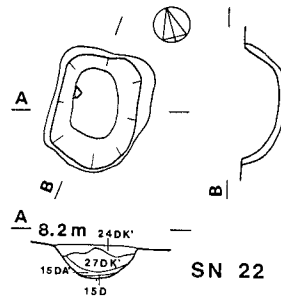
第254図 甕を伴わない鹹水槽実測図(1)



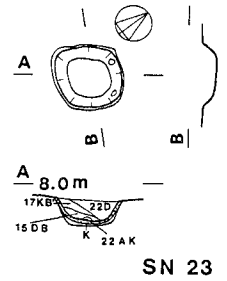
SN 9



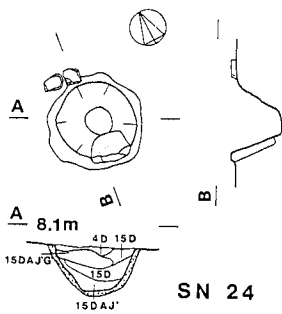
SN 21



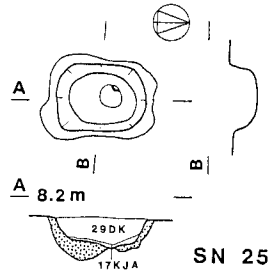
SN 22



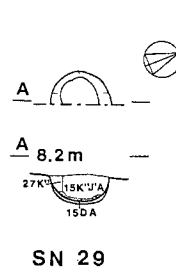
SN 23



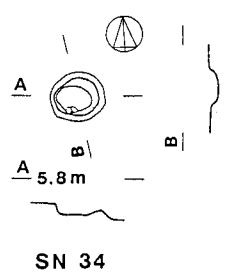
SN 24



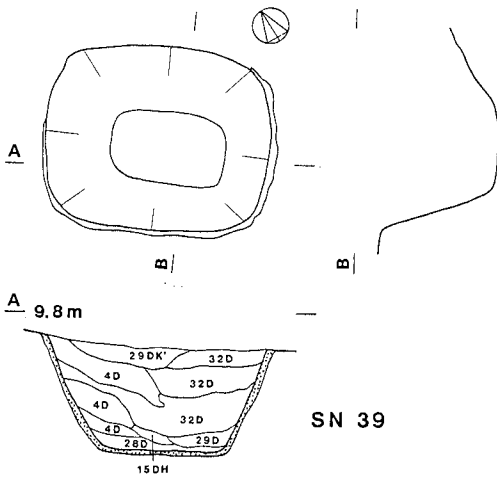
SN 25



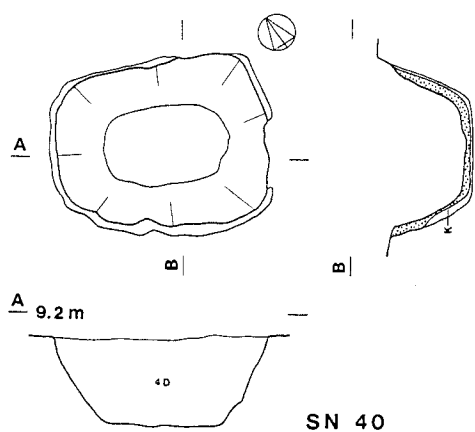
SN 29



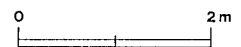
SN 34



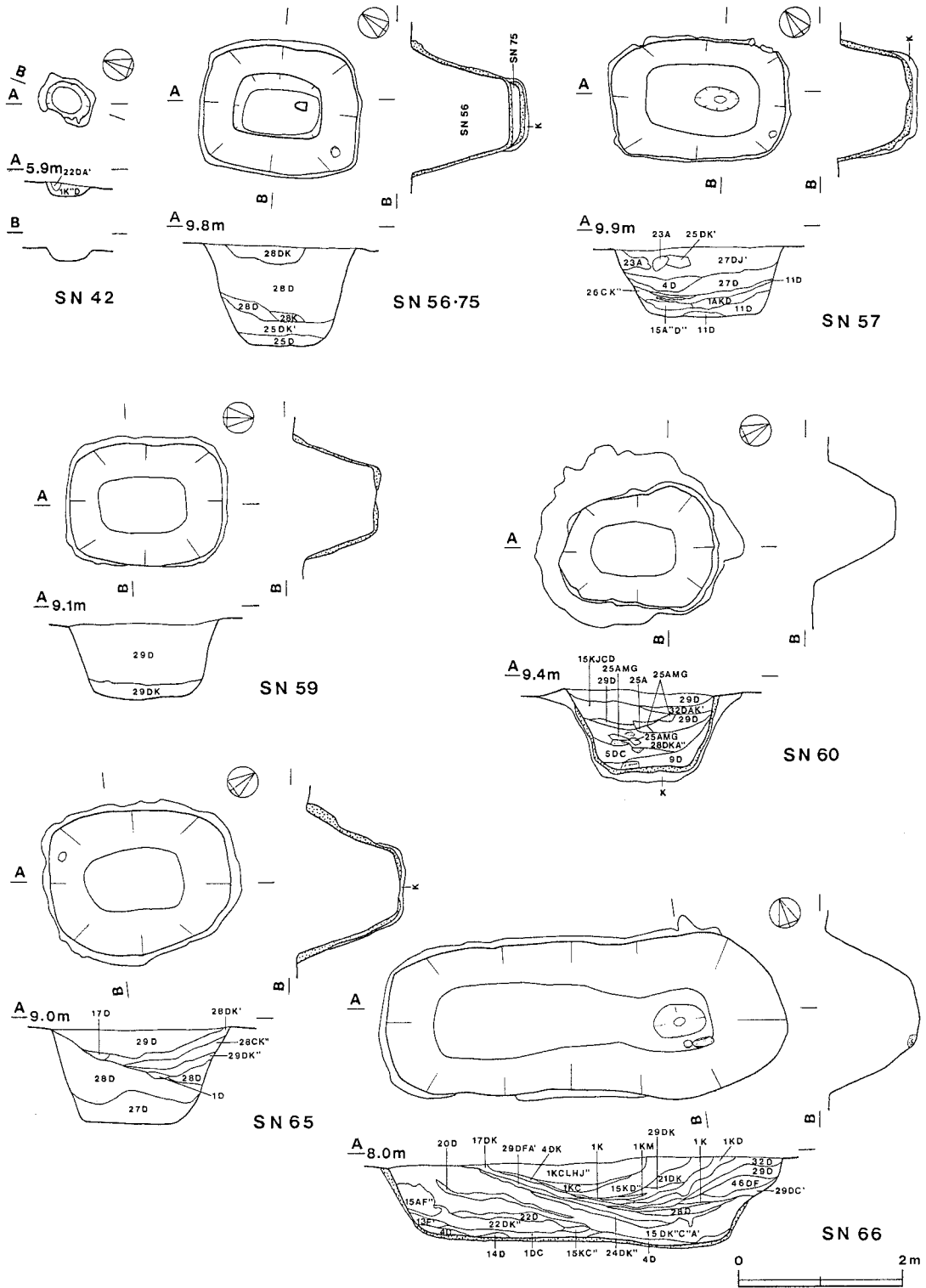
SN 39



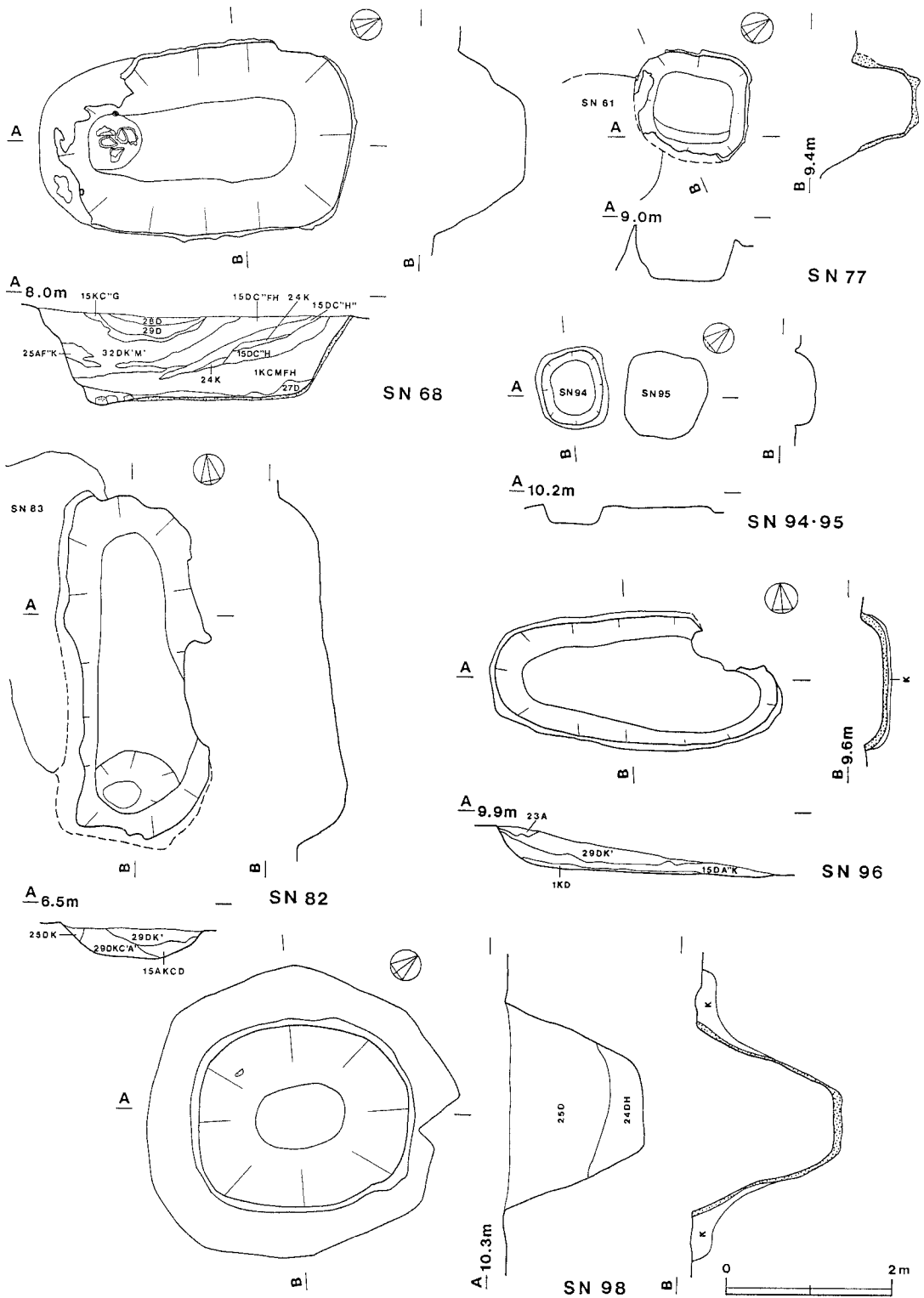
SN 40



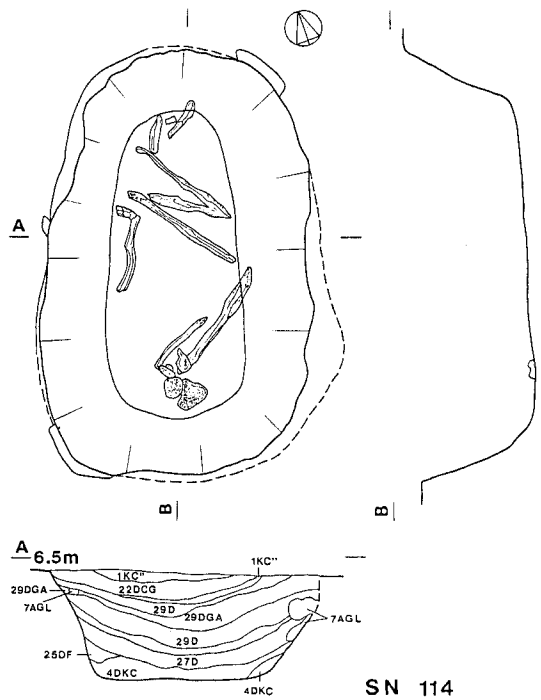
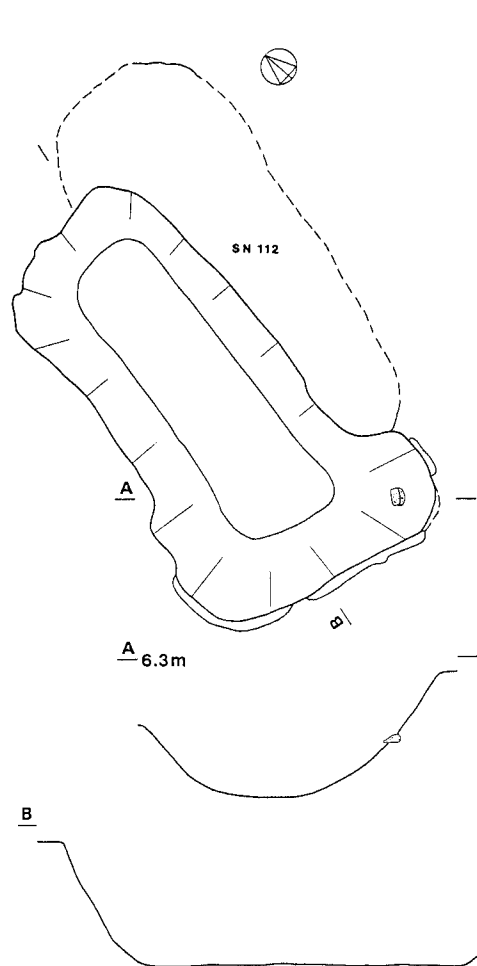
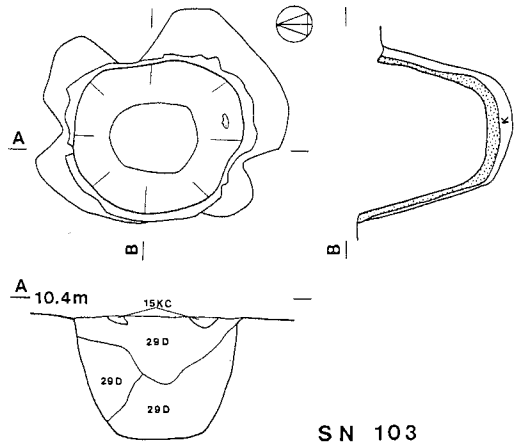
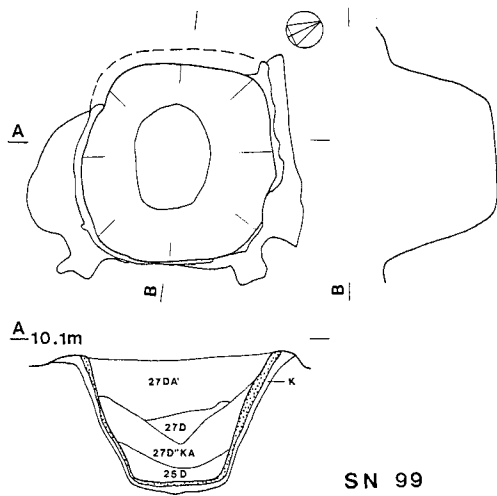
第255図 竈を伴わない鹹水槽実測図(2)



第256図 甕を伴わない鹹水槽実測図(3)



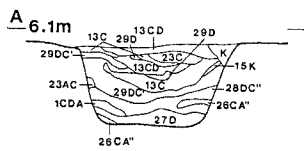
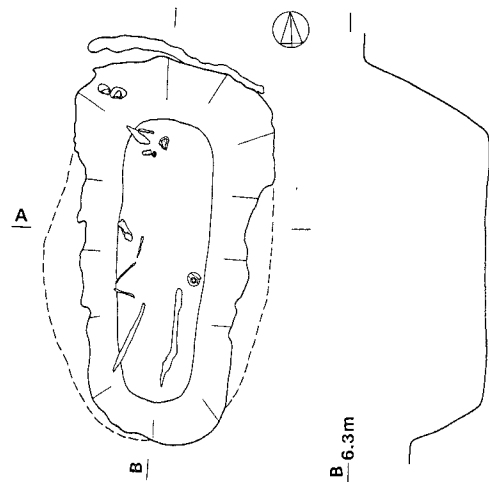
第257図 竈を伴わない鹹水槽実測図(4)



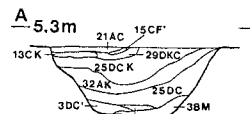
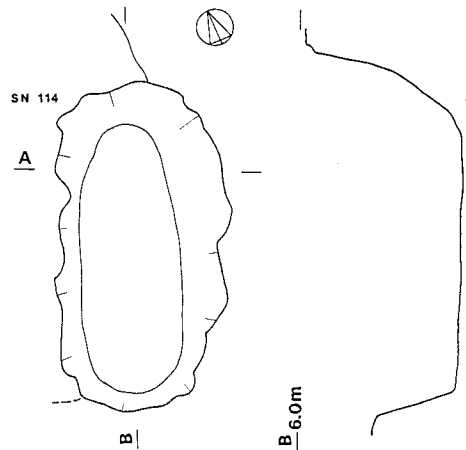
SN 113



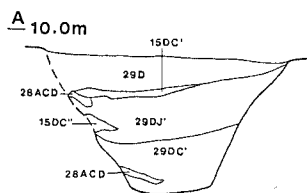
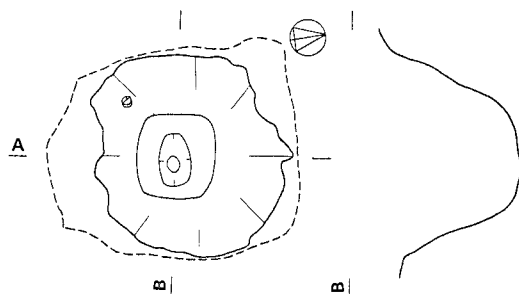
第258図 竈を伴わない鹹水槽実測図(5)



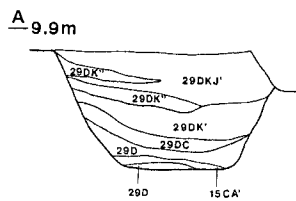
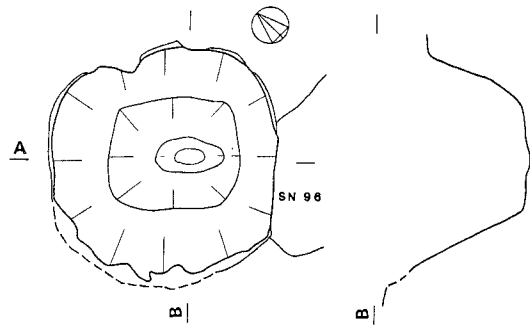
SN 116



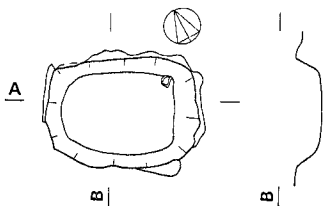
SN 124



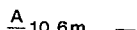
SN 132



SN 133



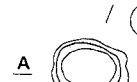
SN 136



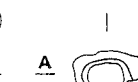
SN 138



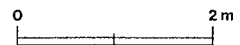
SN 139



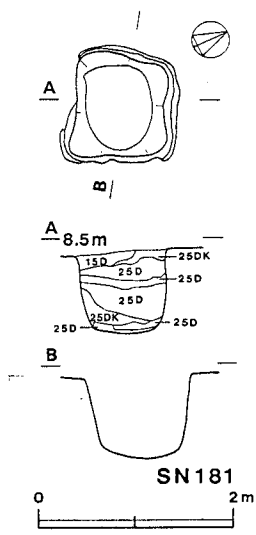
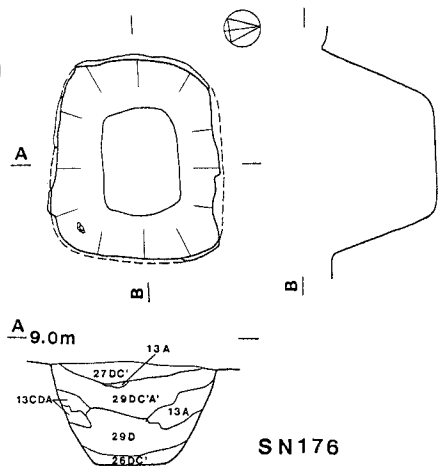
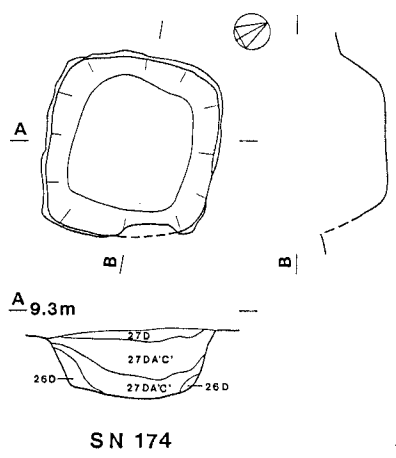
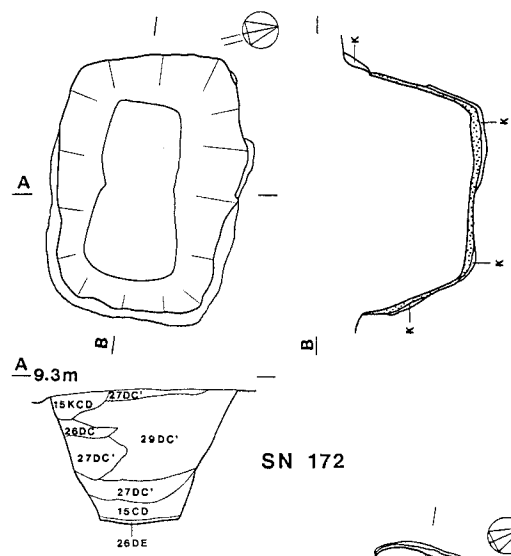
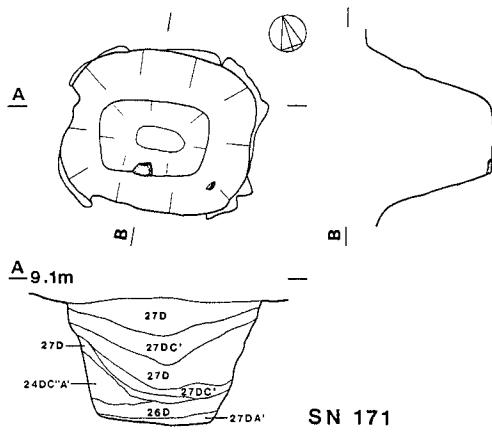
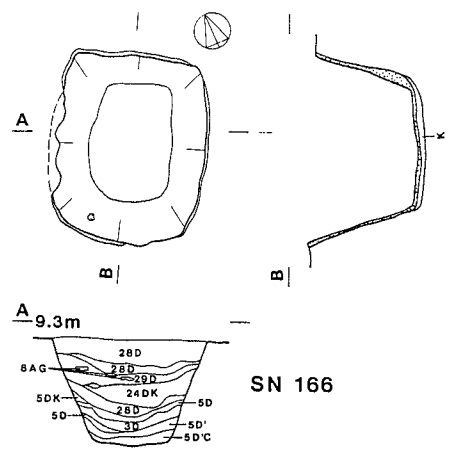
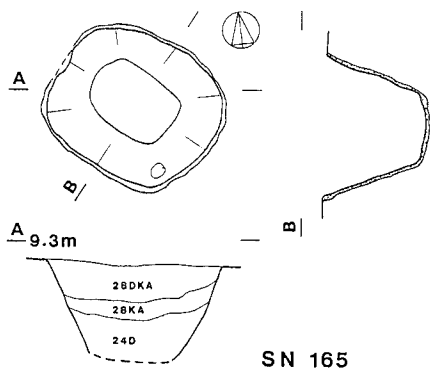
SN 140



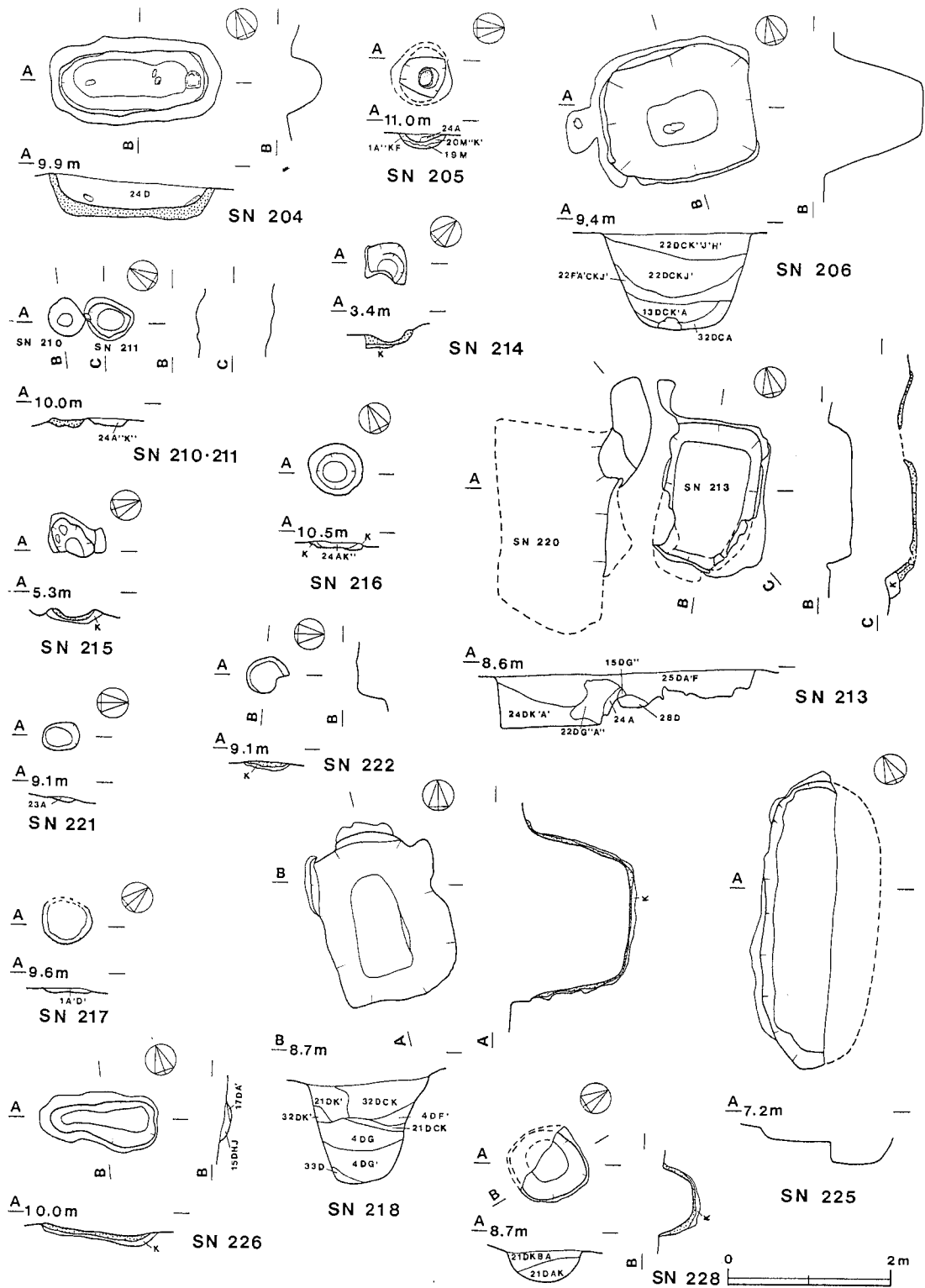
SN 141



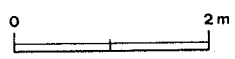
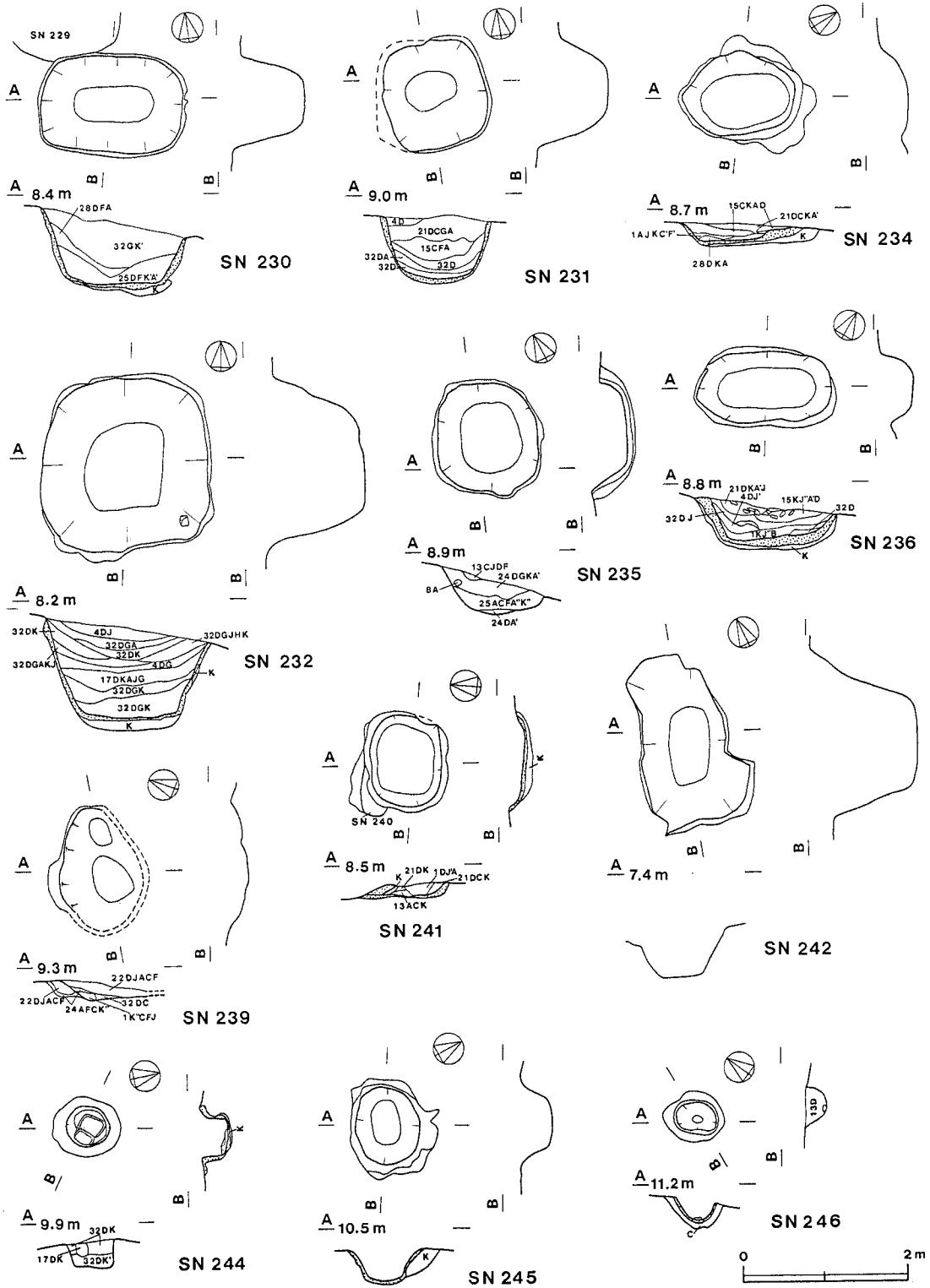
第259図 竈を伴わない鹹水槽実測図(6)



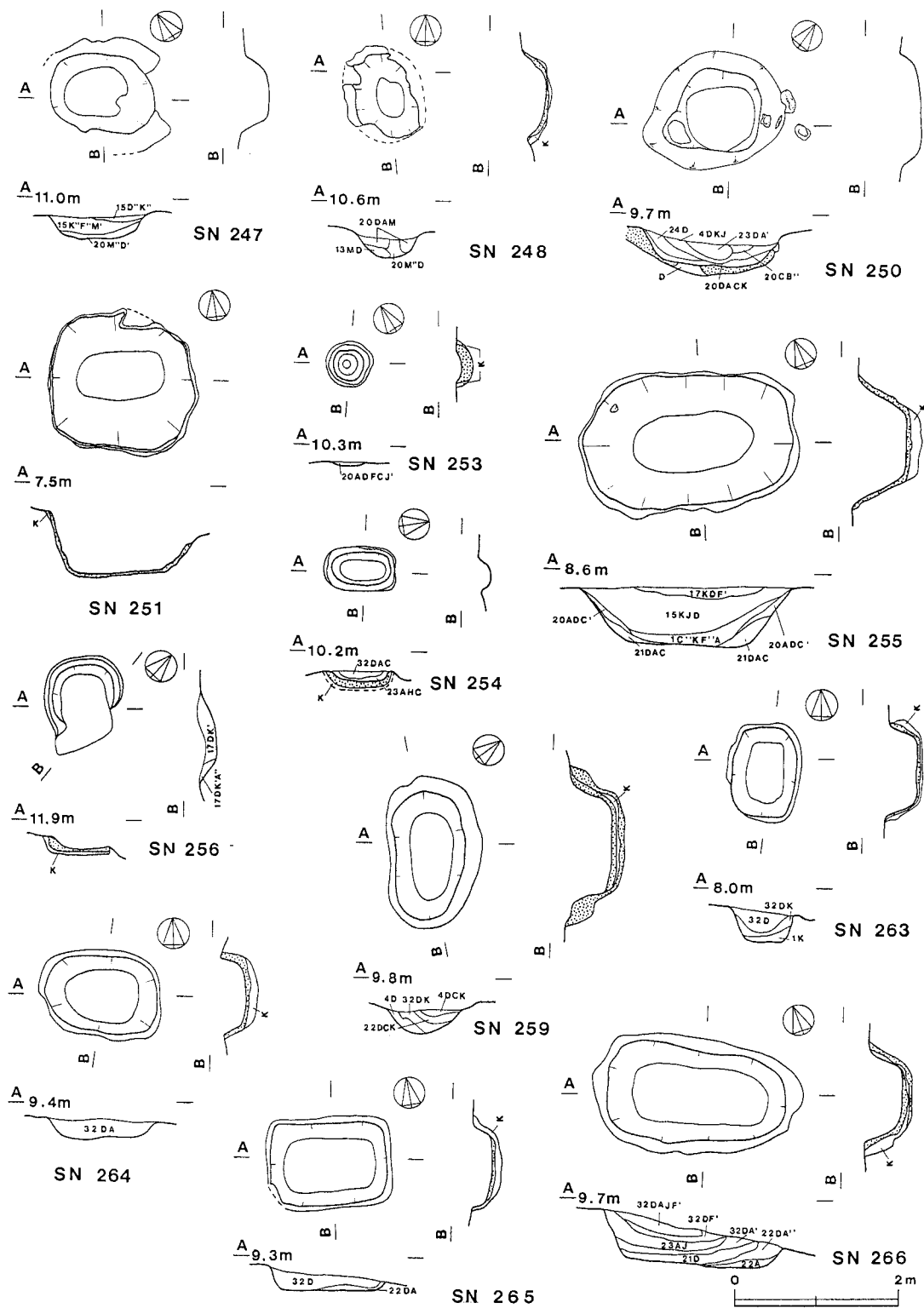
第261図 竈を伴わない鹹水槽実測図(8)



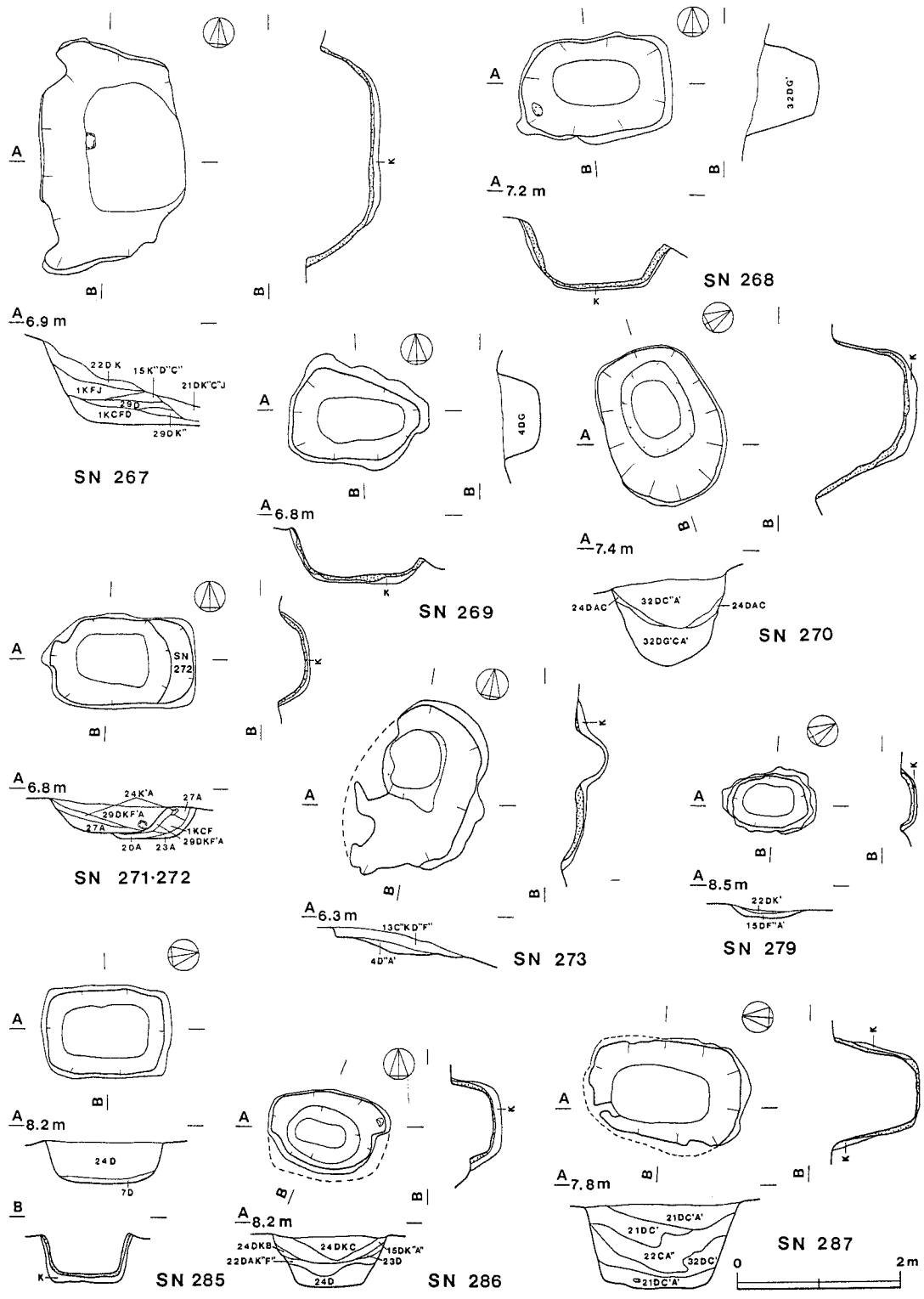
第263図 竈を伴わない鹹水槽実測図(10)



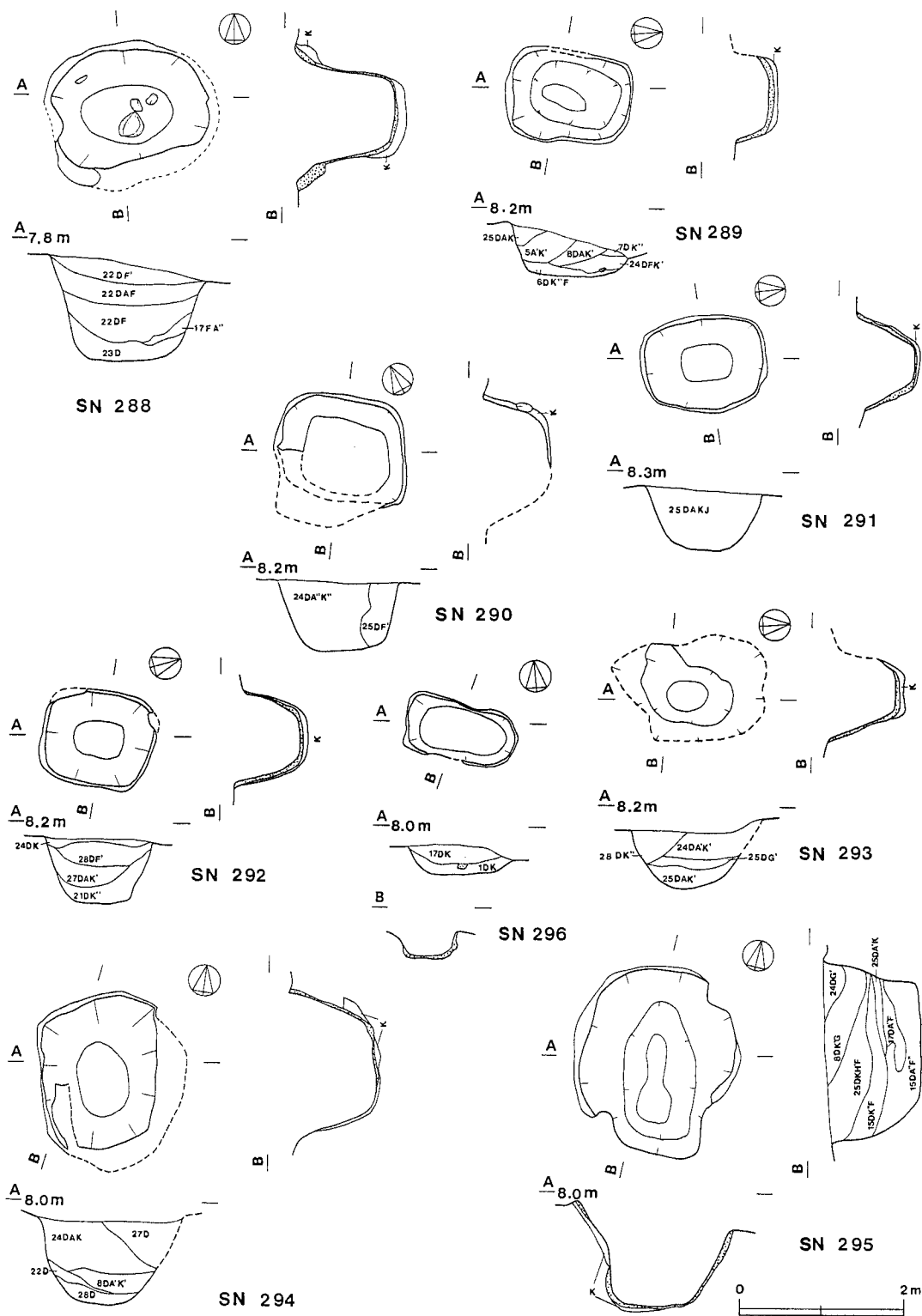
第264図 竈を伴わない鹹水槽実測図(11)



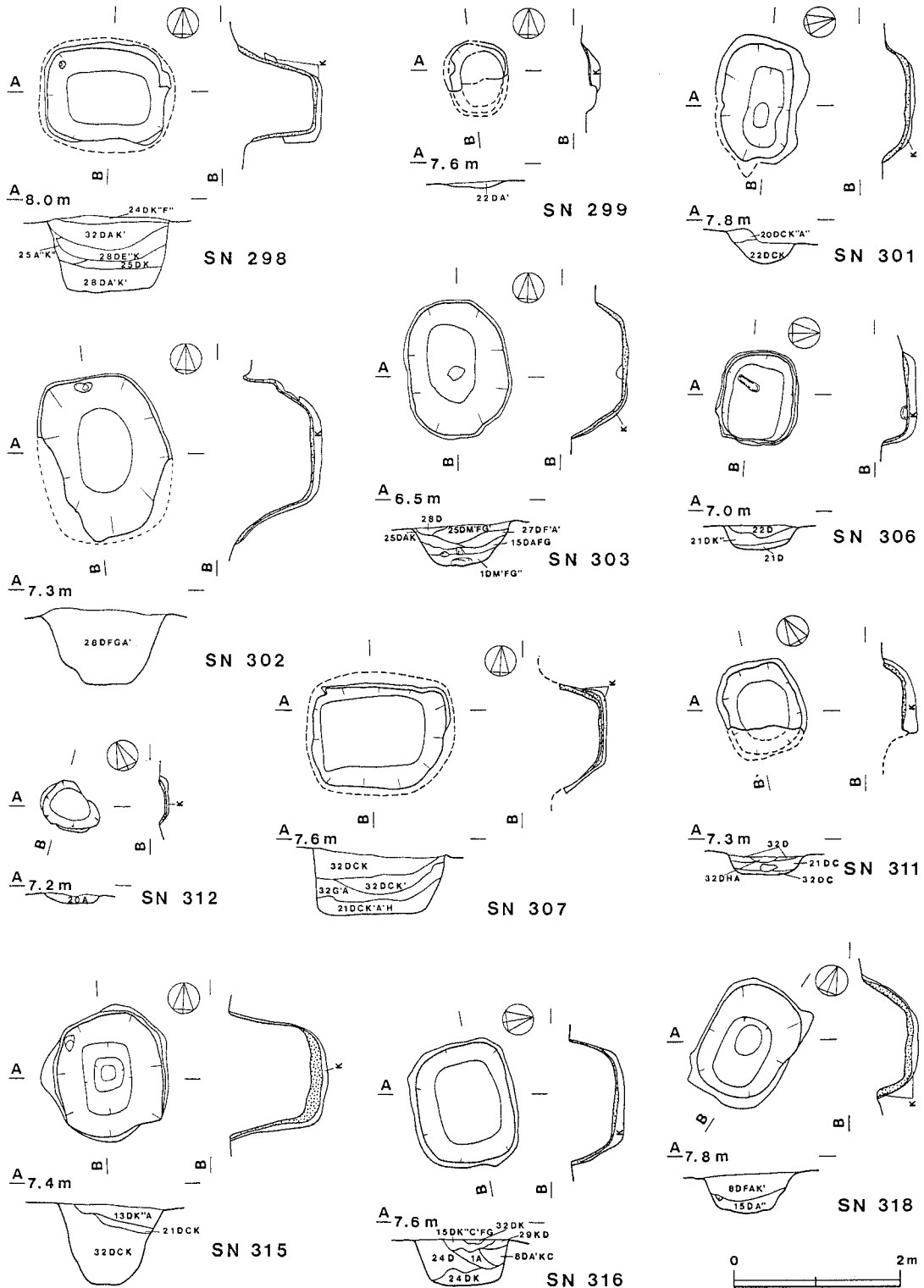
第265図 竈を伴わない鹹水槽実測図(12)



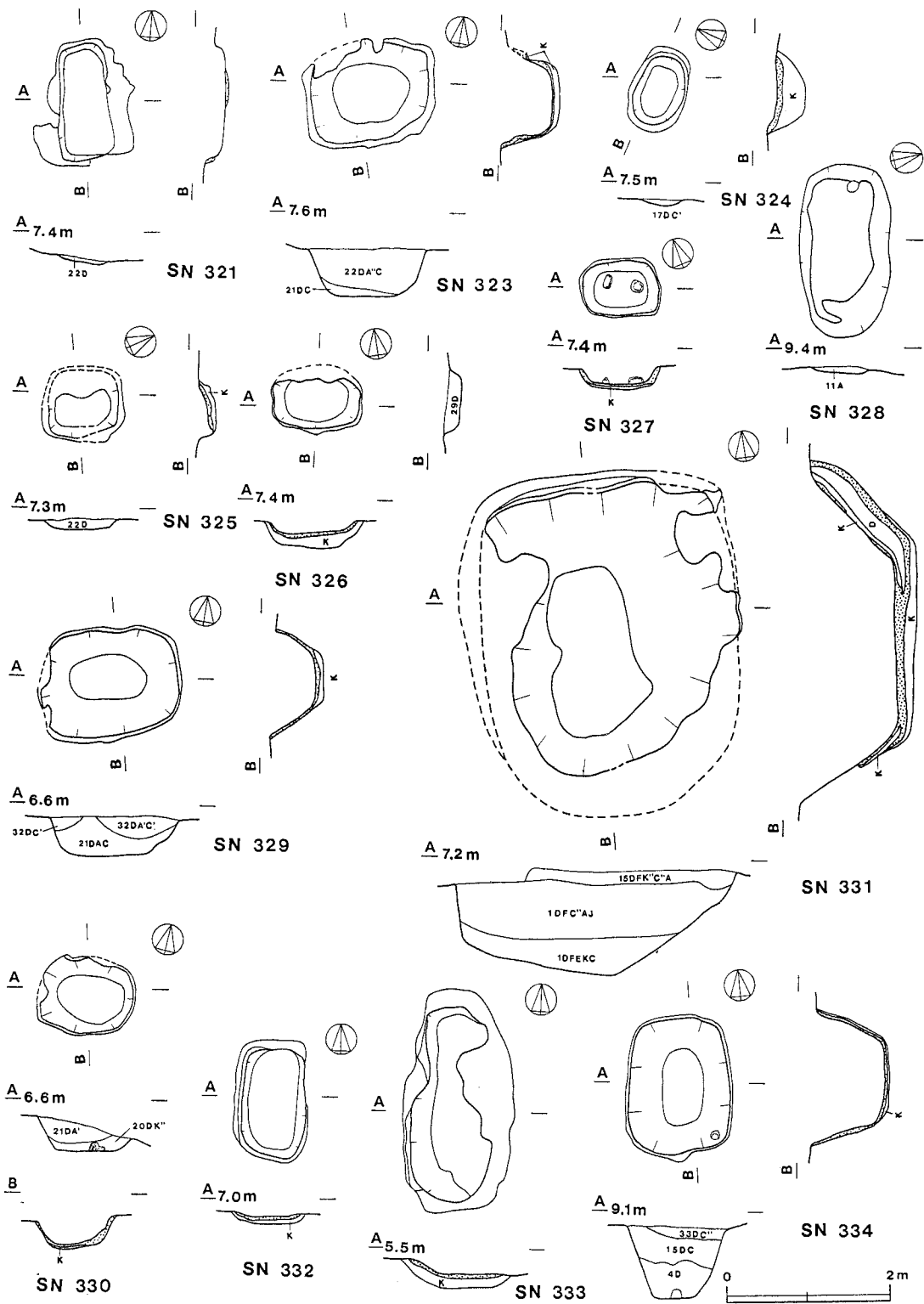
第266図 龜を伴わない鹹水槽実測図(13)



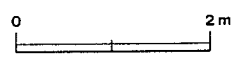
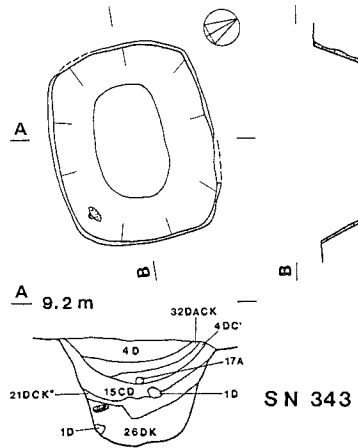
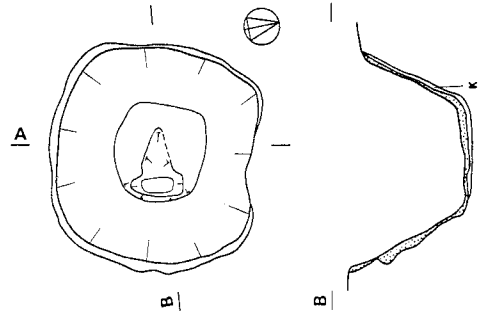
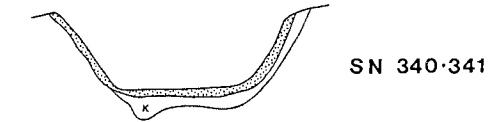
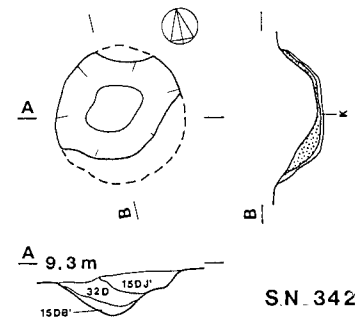
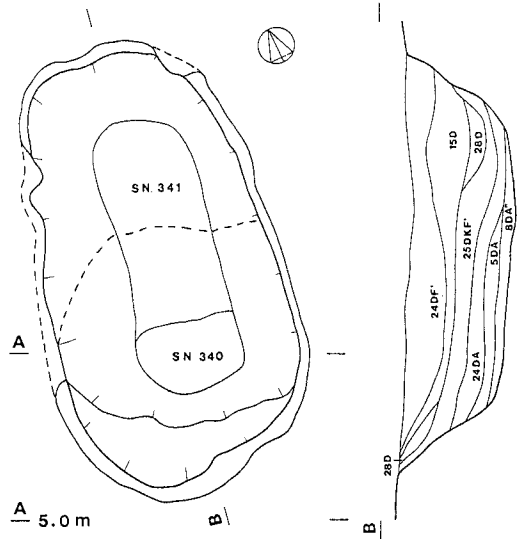
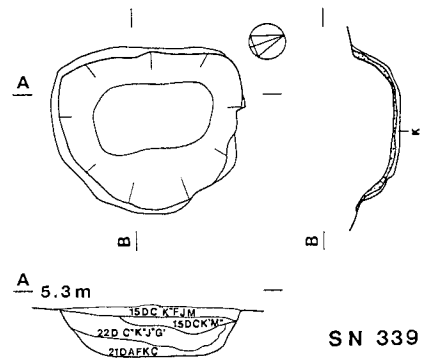
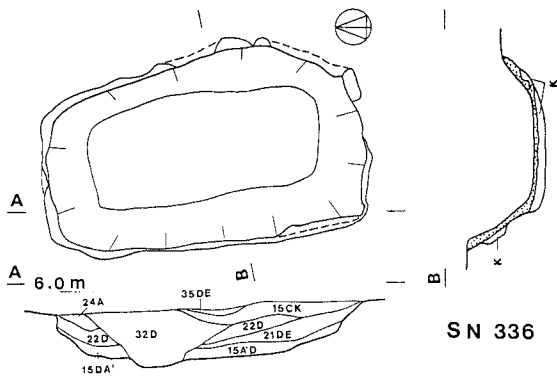
第267図 竈を伴わない鹹水槽実測図(14)



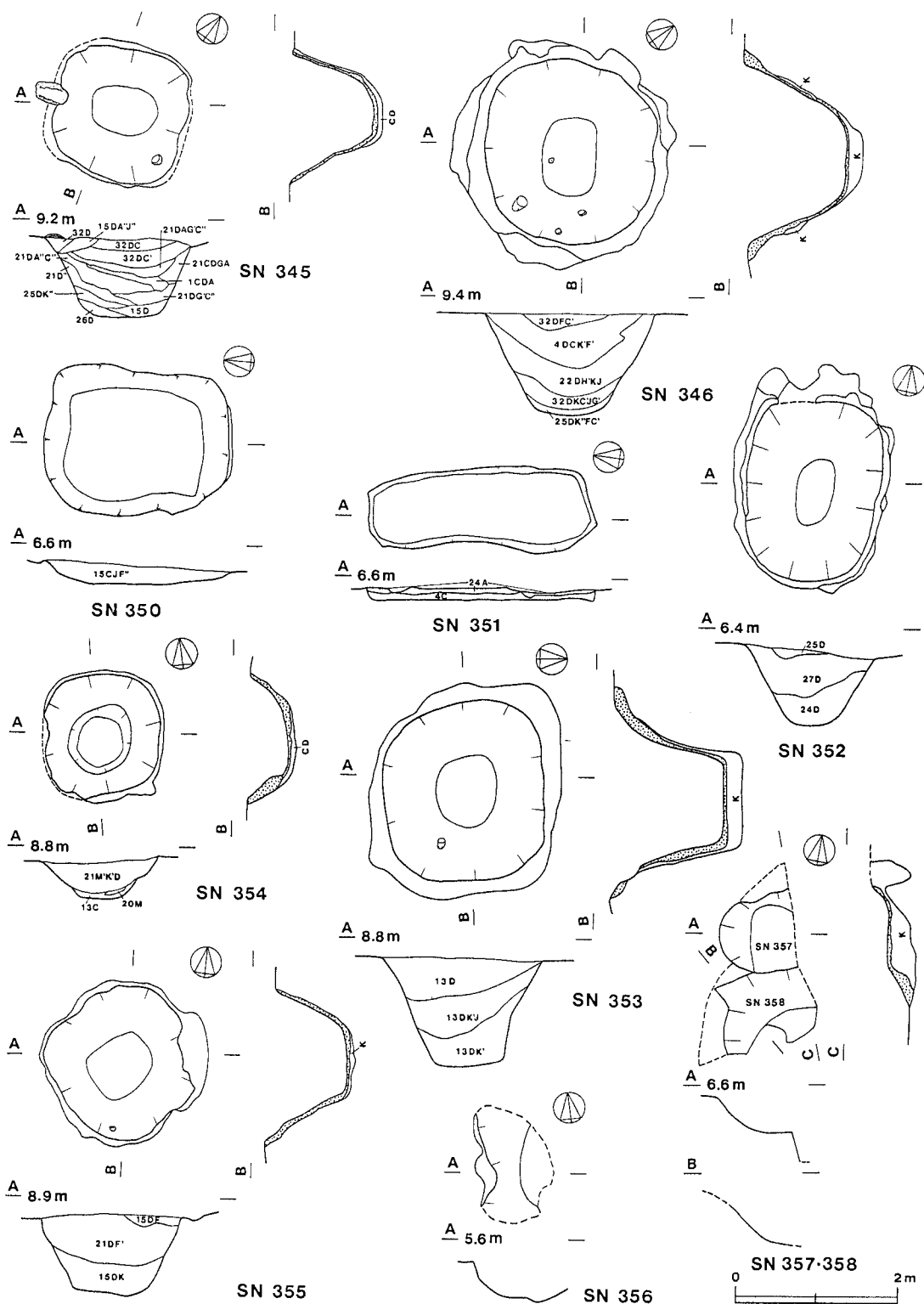
第268図 竈を伴わない鹹水槽実測図(15)



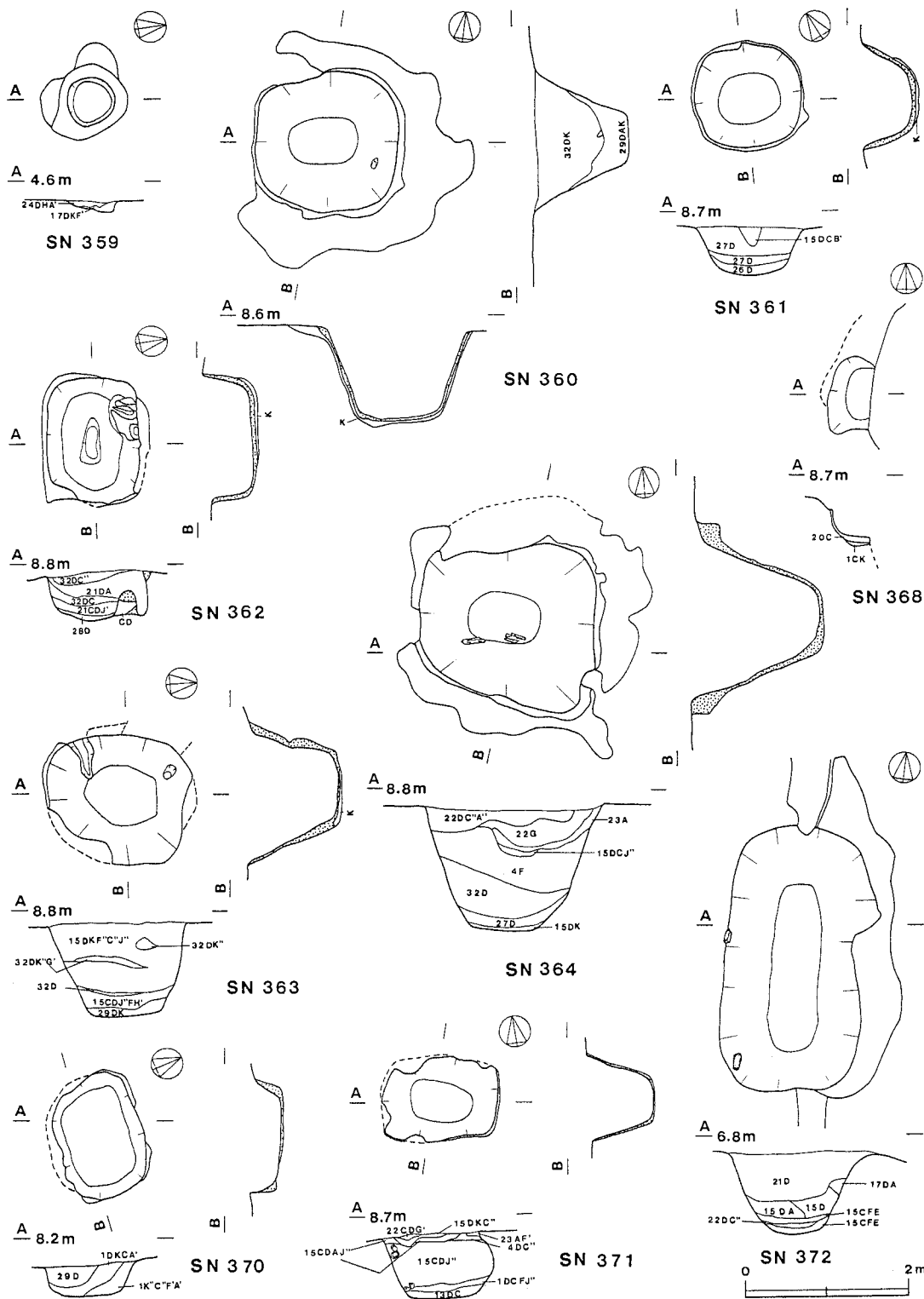
第269図 竈を伴わない鹹水槽実測図(16)



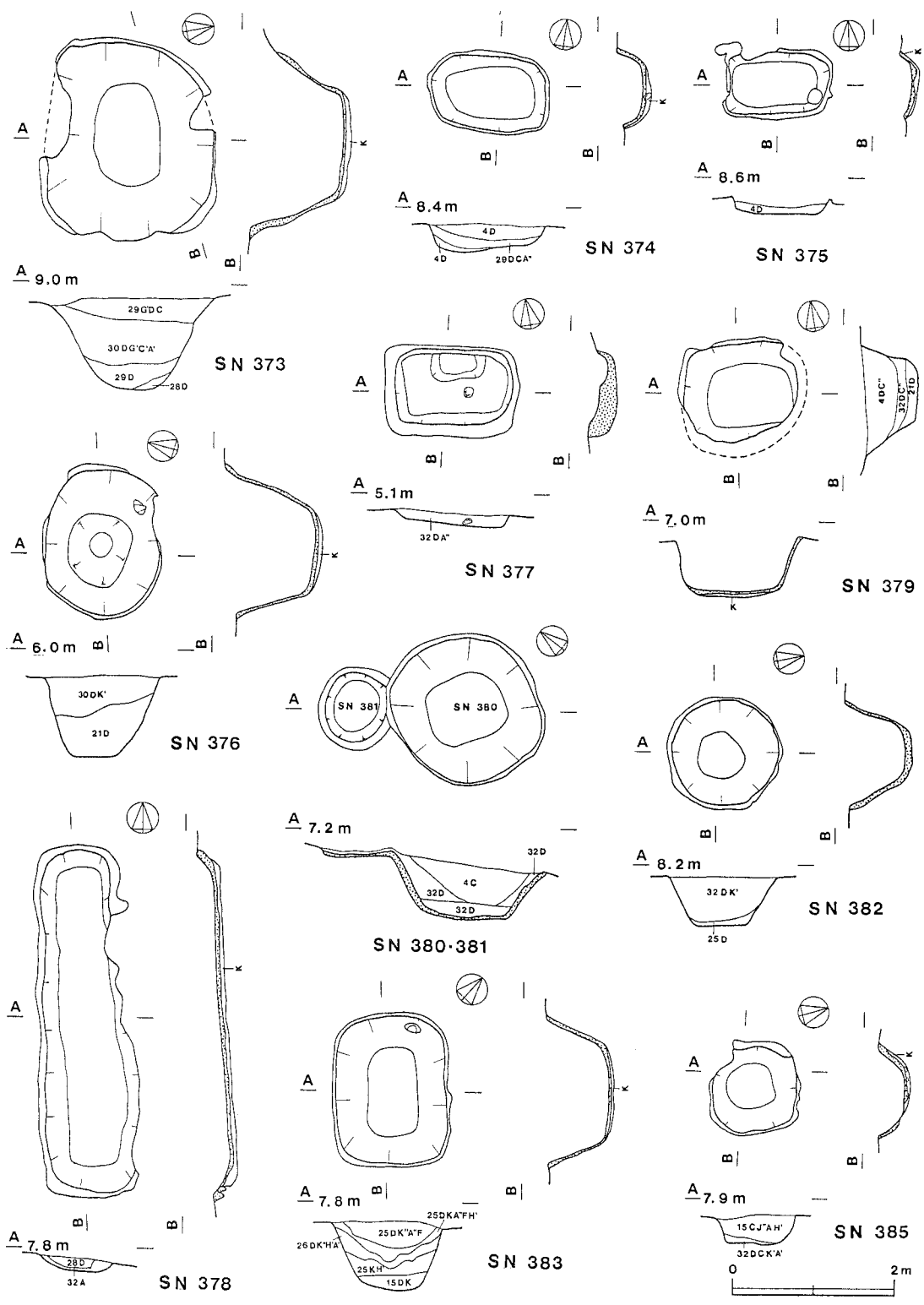
第270図 竈を伴わない鹹水槽実測図(17)



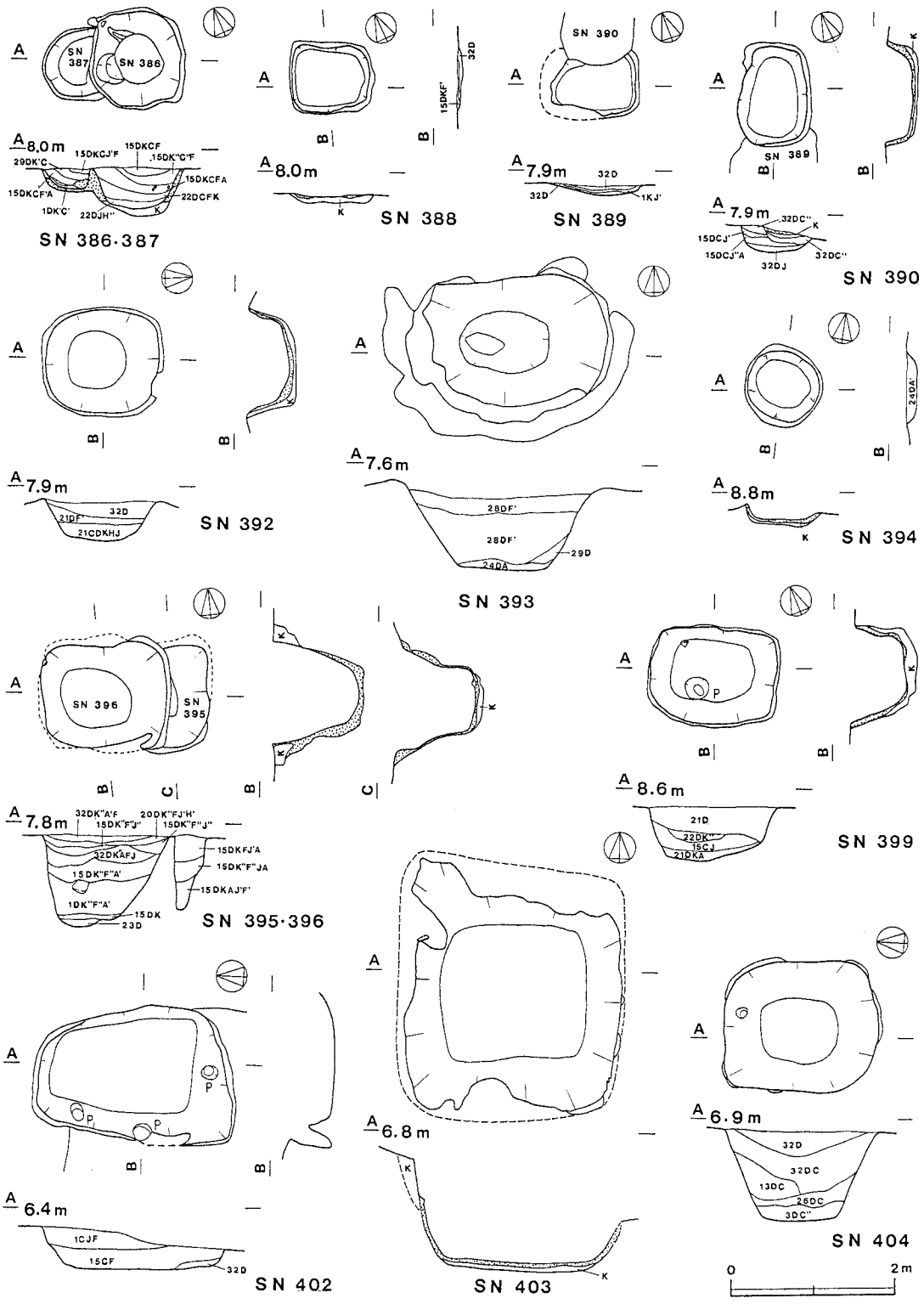
第271図 竈を伴わない鹹水槽実測図(18)



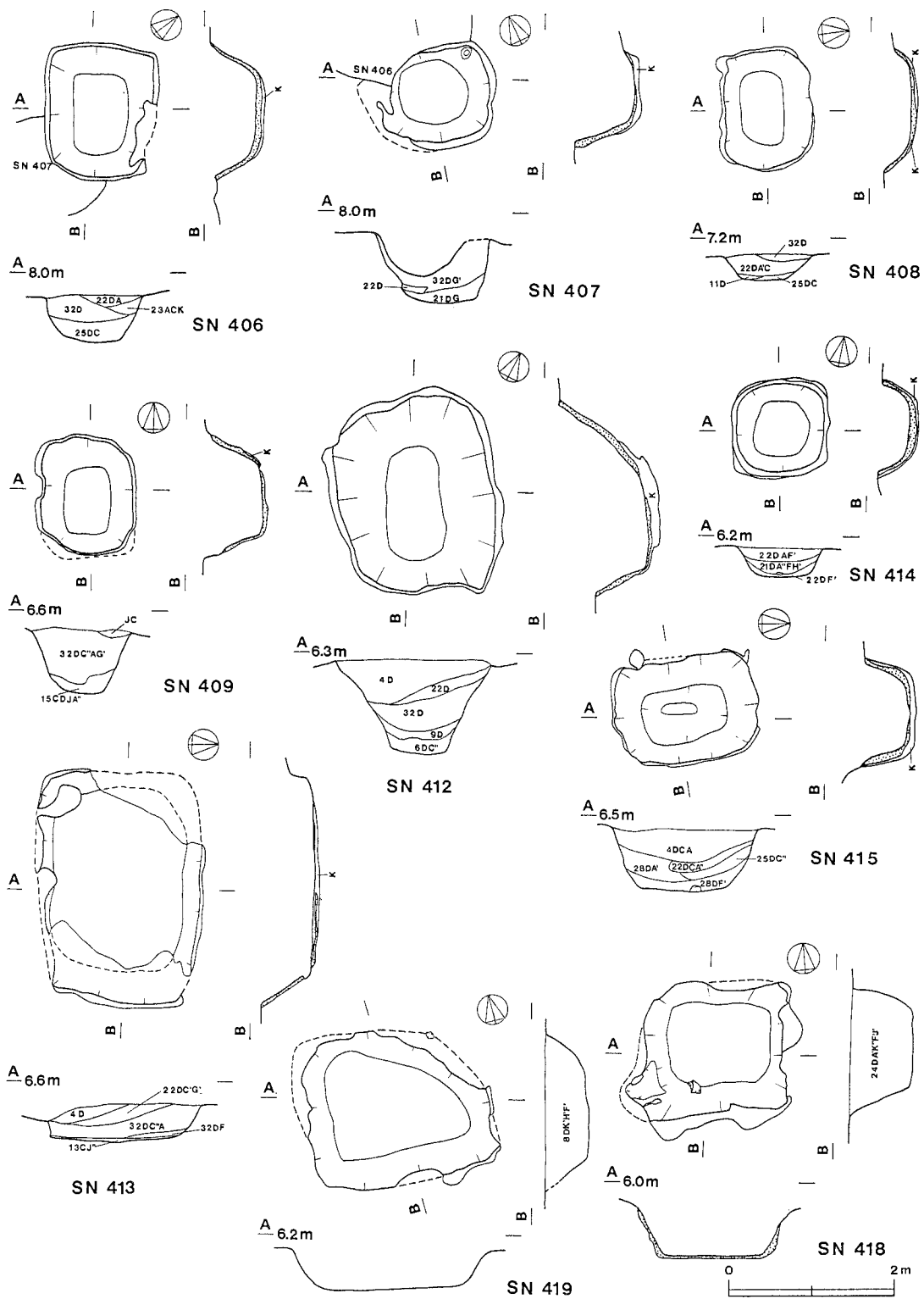
第272図 甕を伴わない鹹水槽実測図(10)



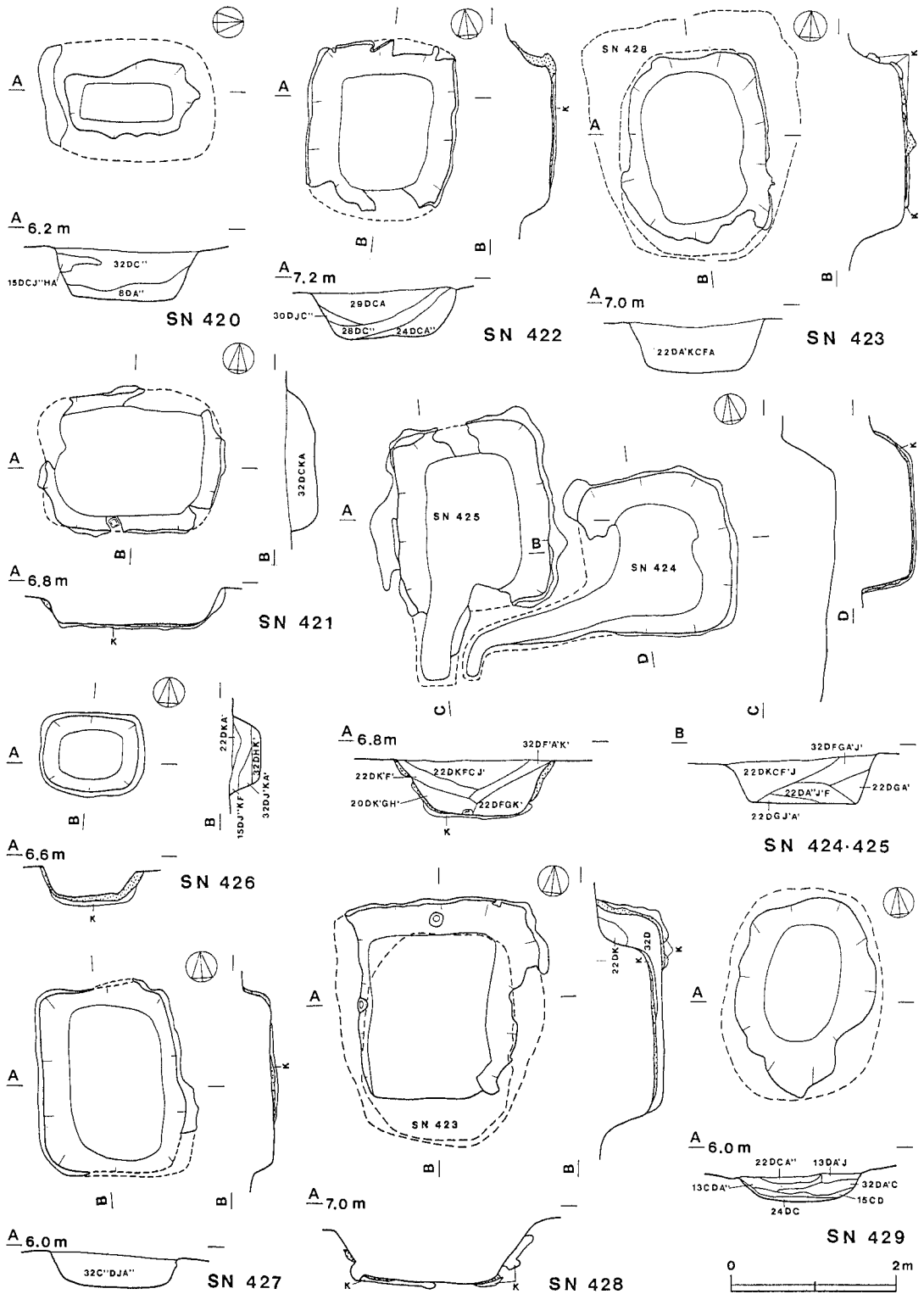
第273図 竈を伴わない鹹水槽実測図(20)



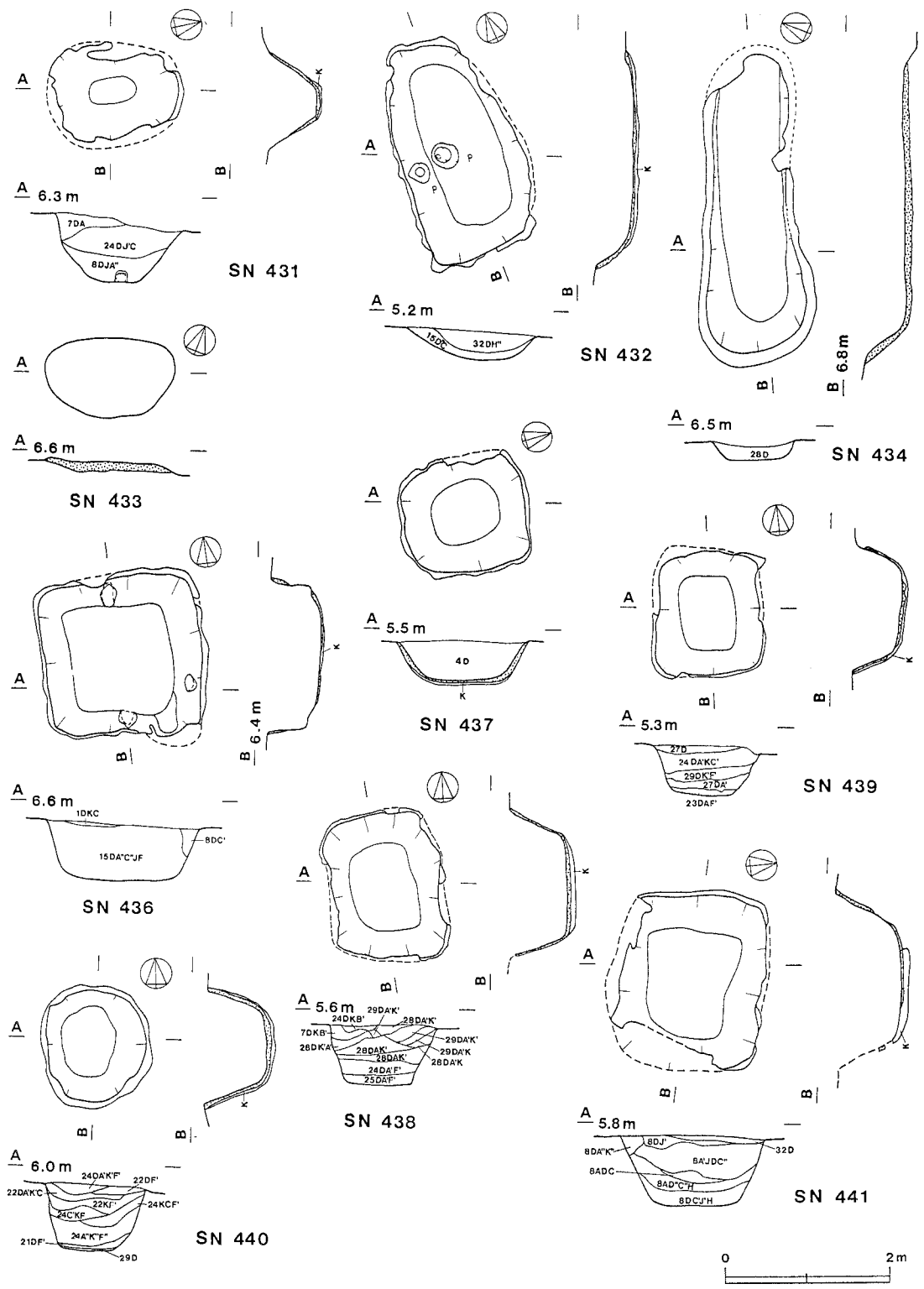
第274図 甕を伴わない鹹水槽実測図(2)



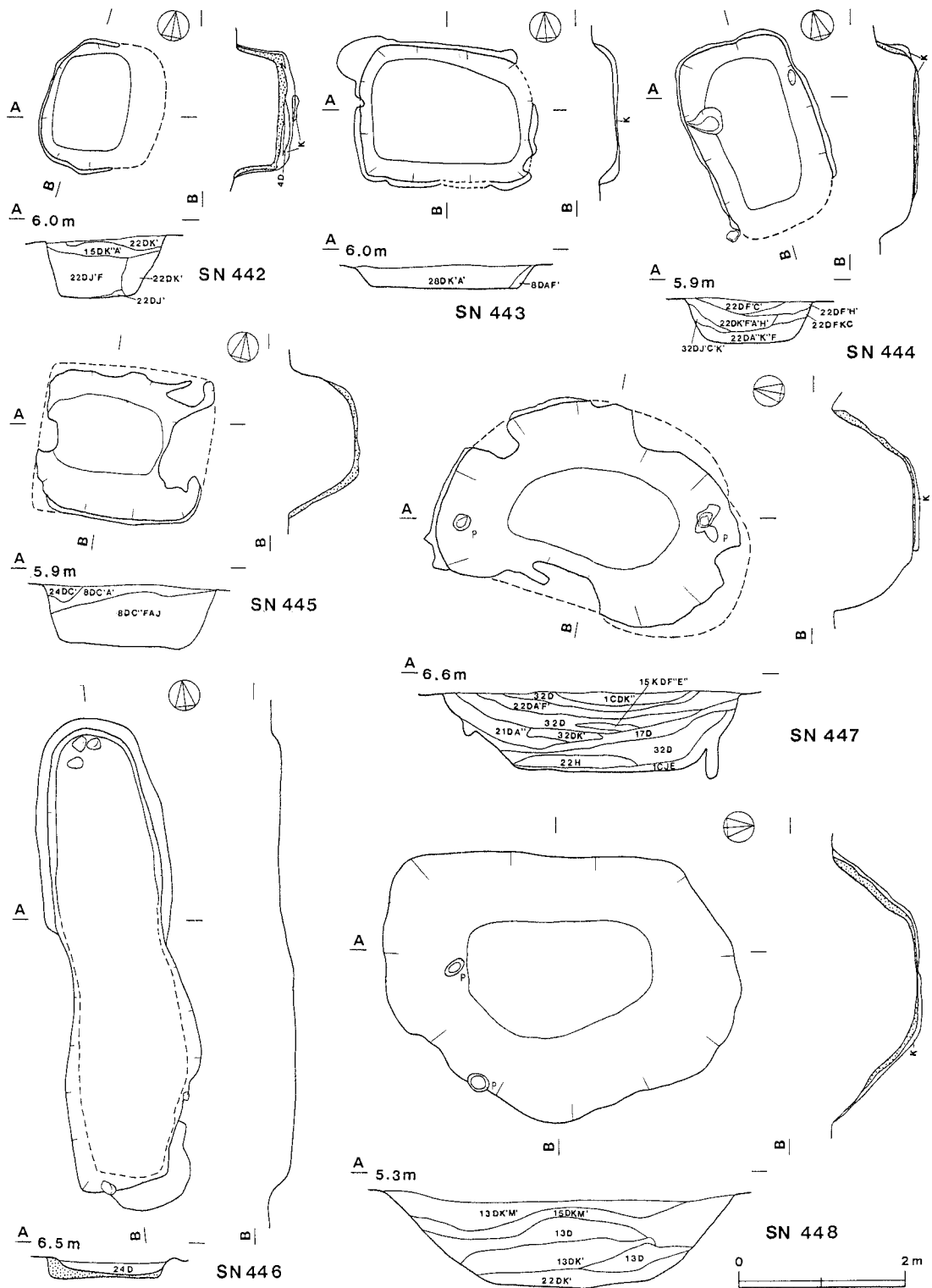
第275図 竈を伴わない鹹水槽実測図(22)



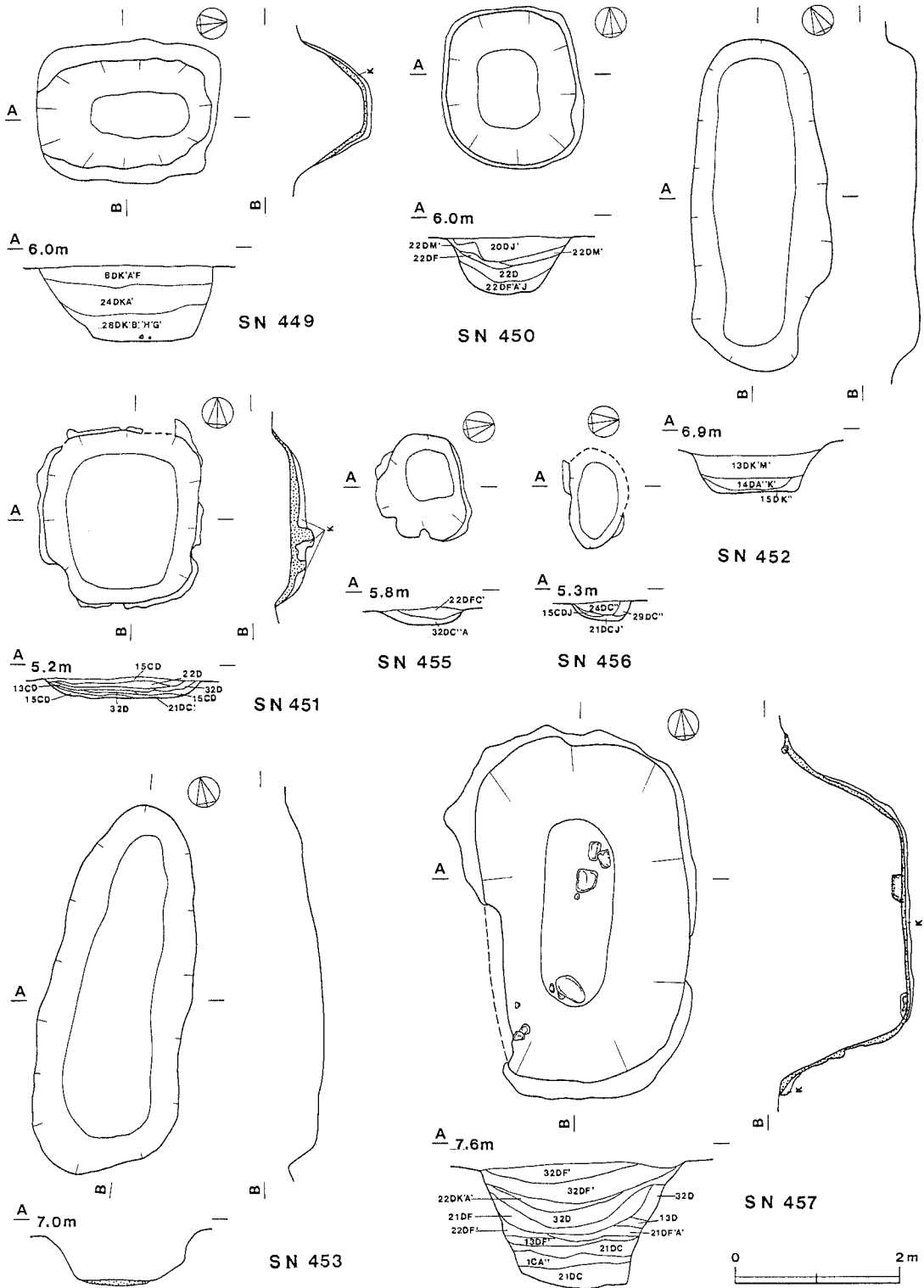
第276図 竈を伴わない鹹水槽実測図(23)



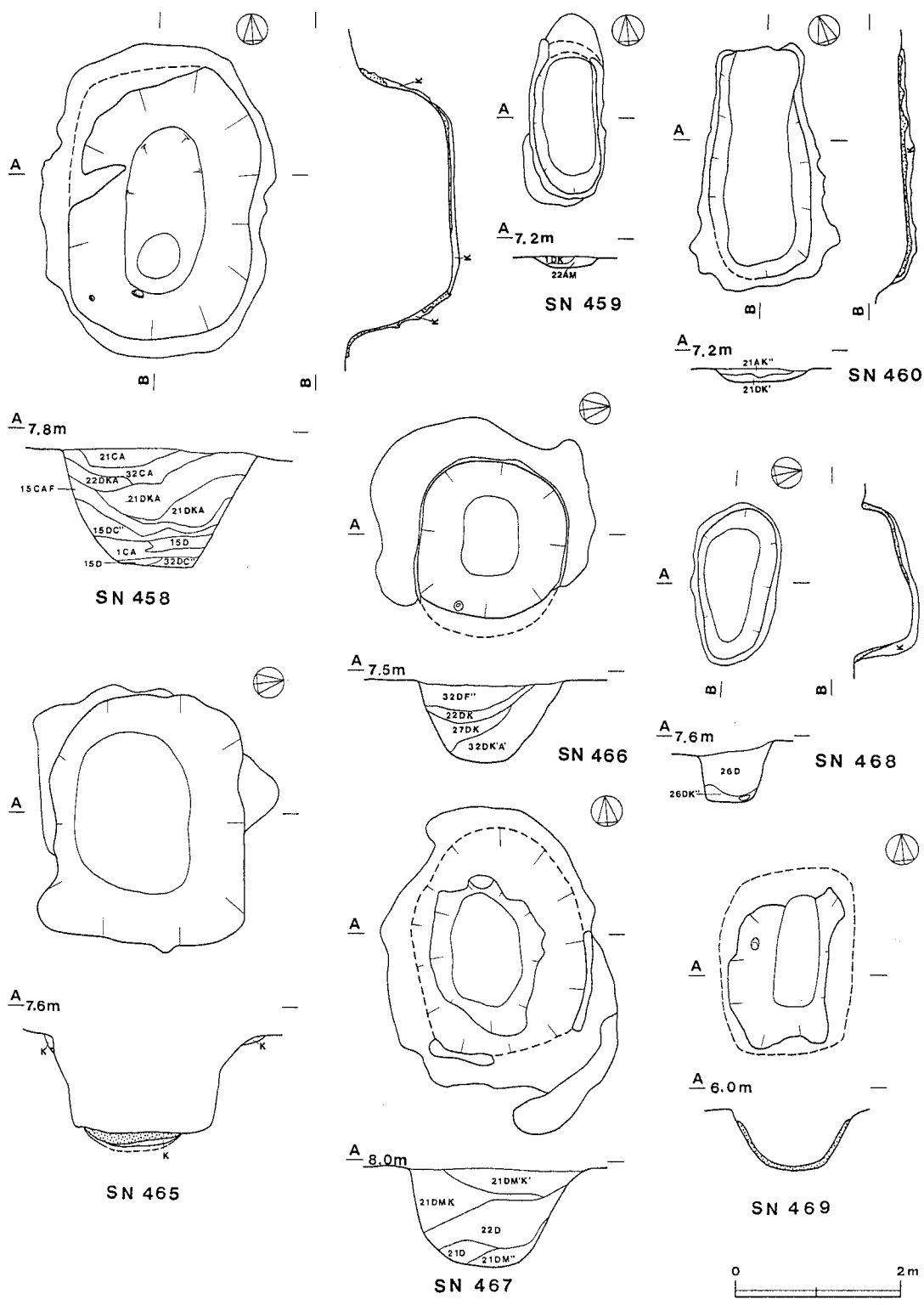
第277図 竈を伴わない鹹水槽実測図(24)



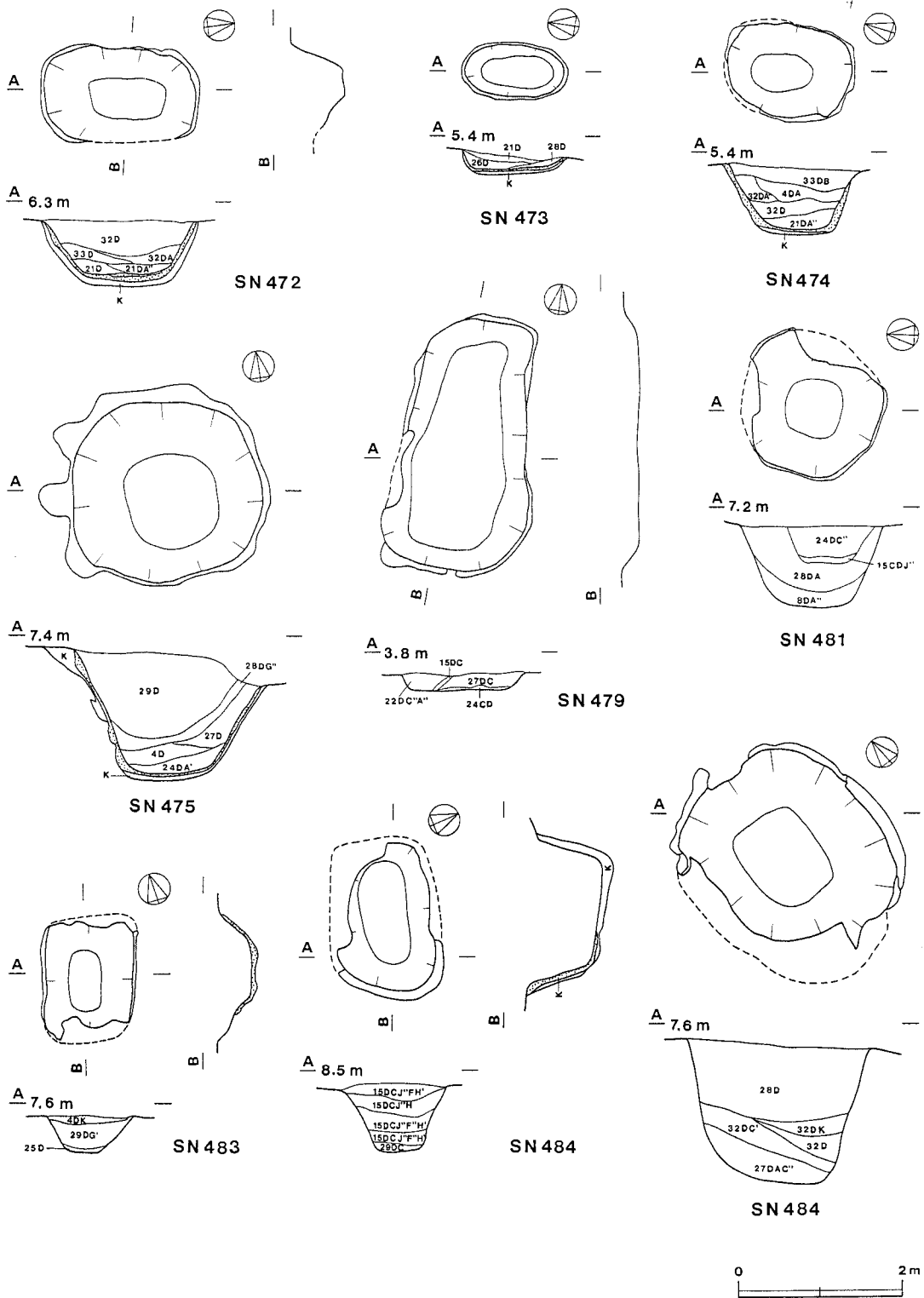
第278図 竈を伴わない鹹水槽実測図(25)



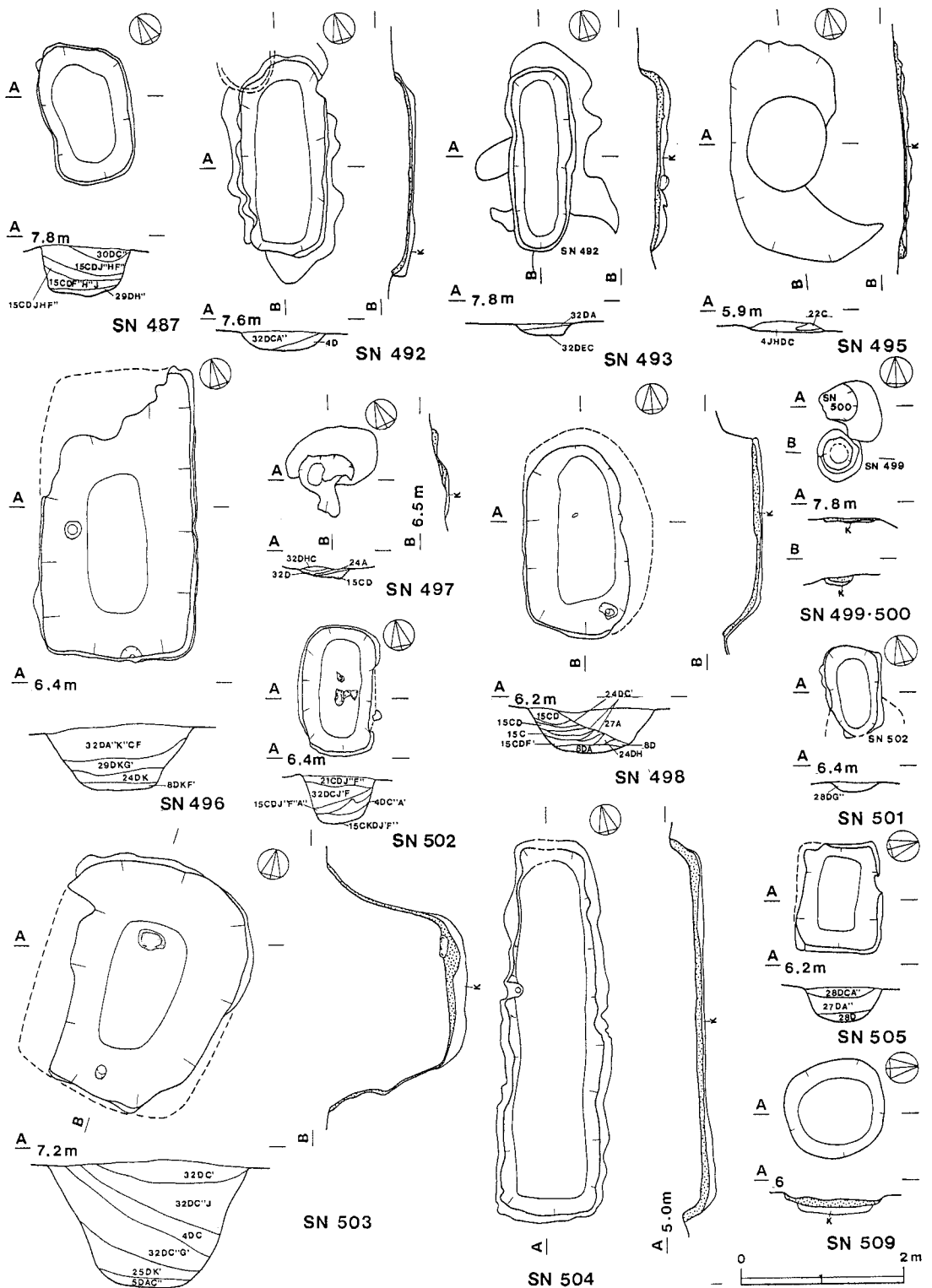
第279図 竈を伴わない鹹水槽実測図(26)



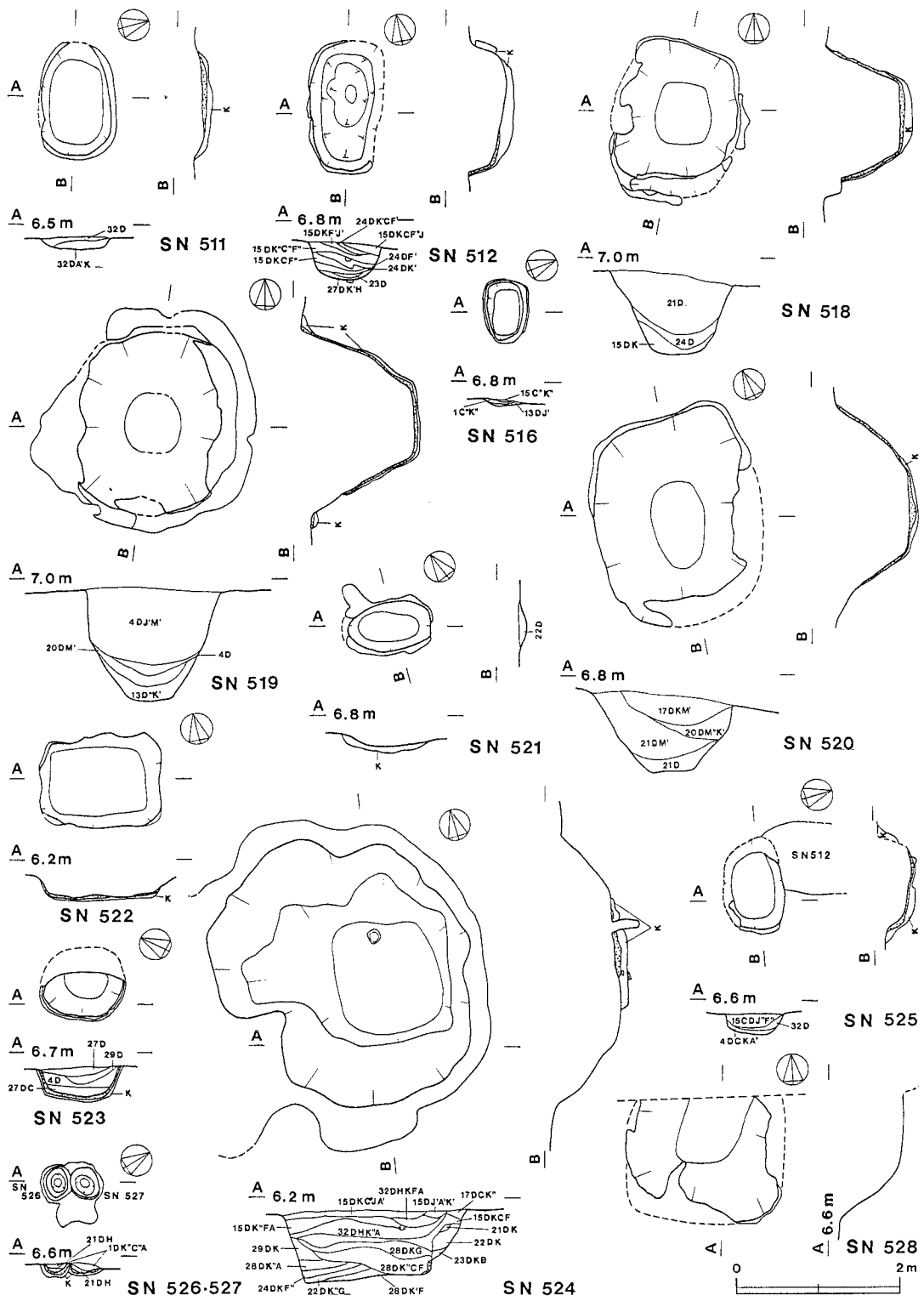
第280図 竈を伴わない鹹水槽実測図(27)



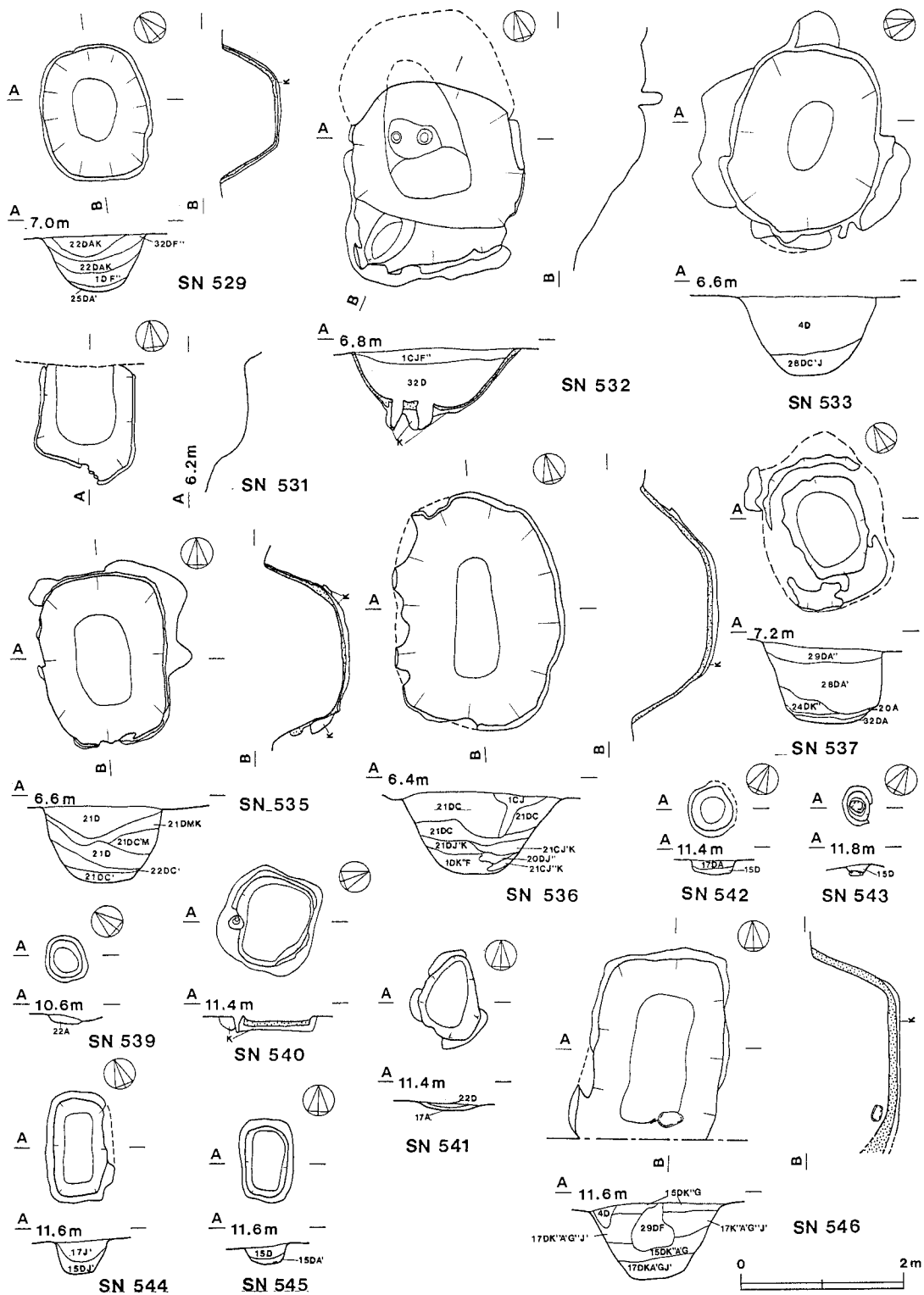
第281図 竈を伴わない鹹水槽実測図(28)



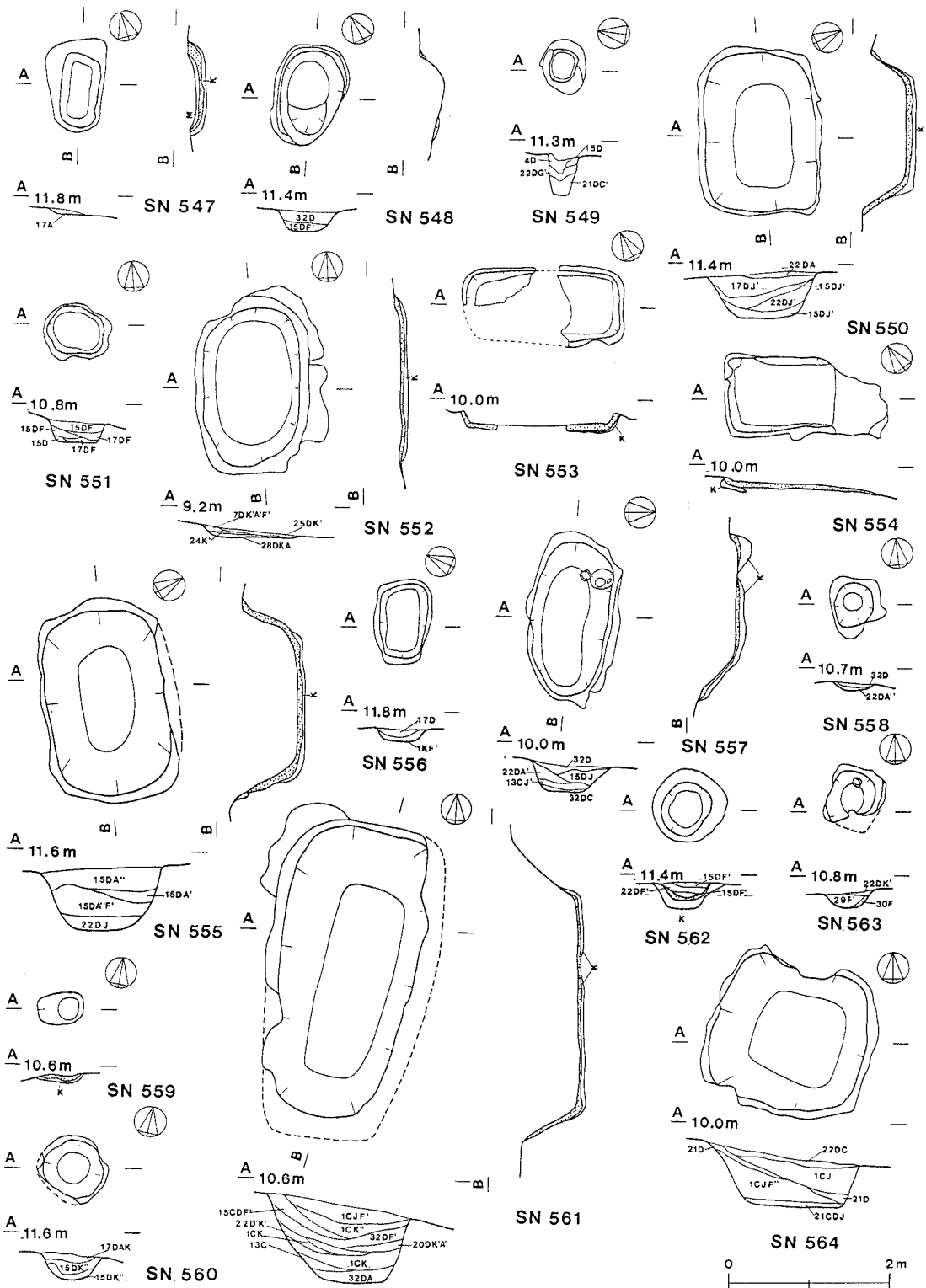
第282図 甕を伴わない鹹水槽実測図(29)



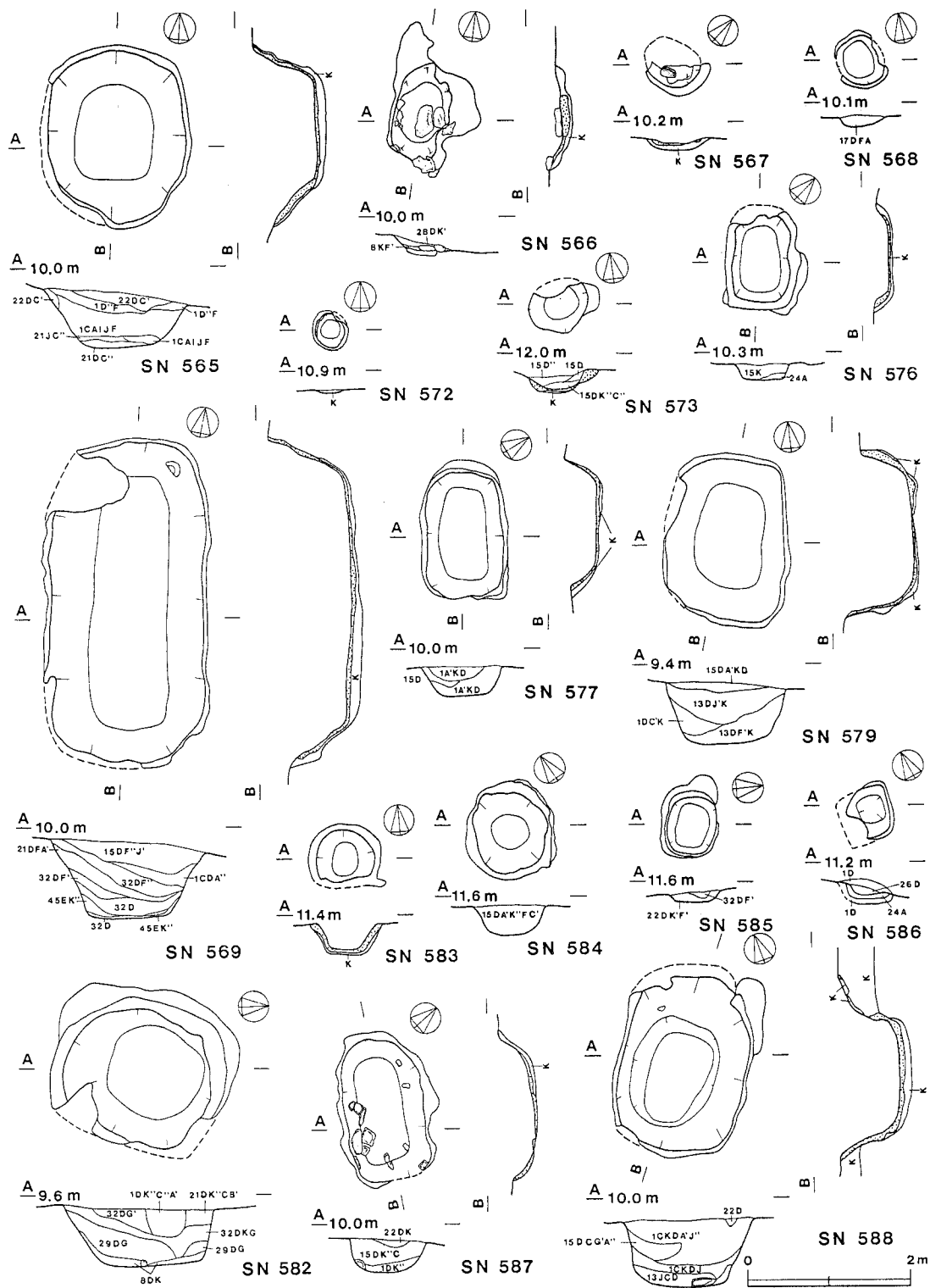
第283図 竈を伴わない鹹水槽実測図(30)



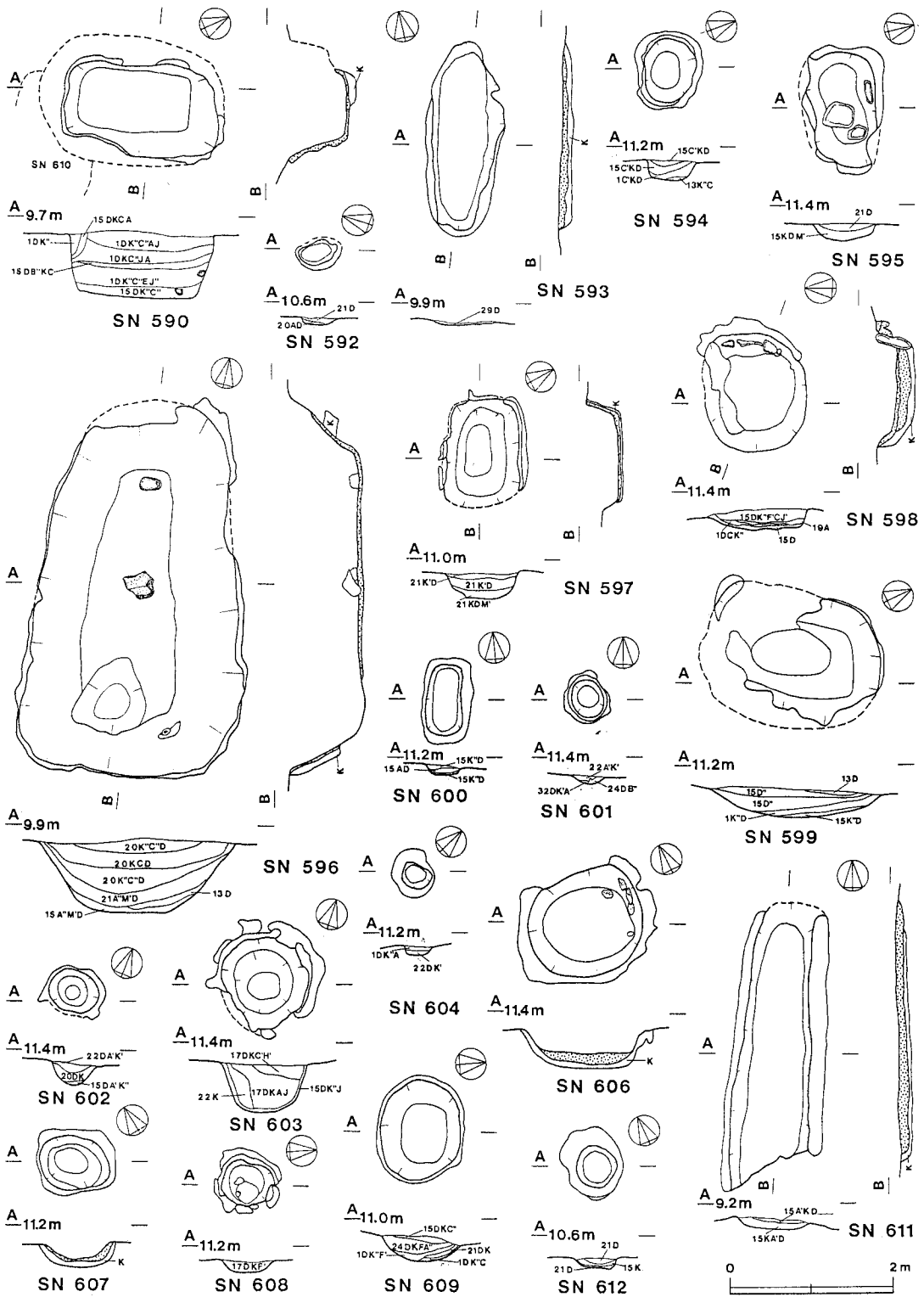
第284図 甕を伴わない鹹水槽実測図(31)



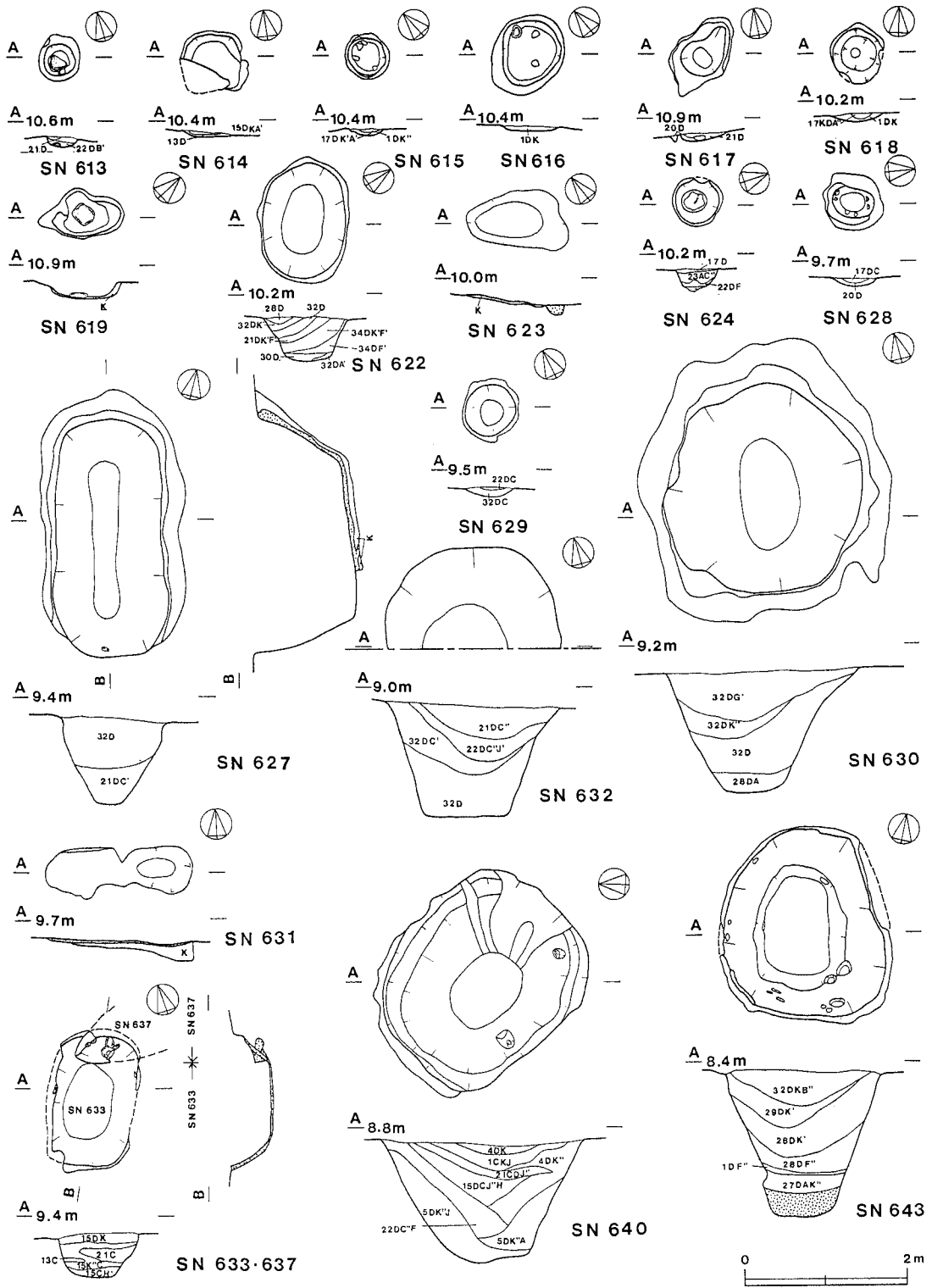
第285図 竈を伴わない鹹水槽実測図(32)



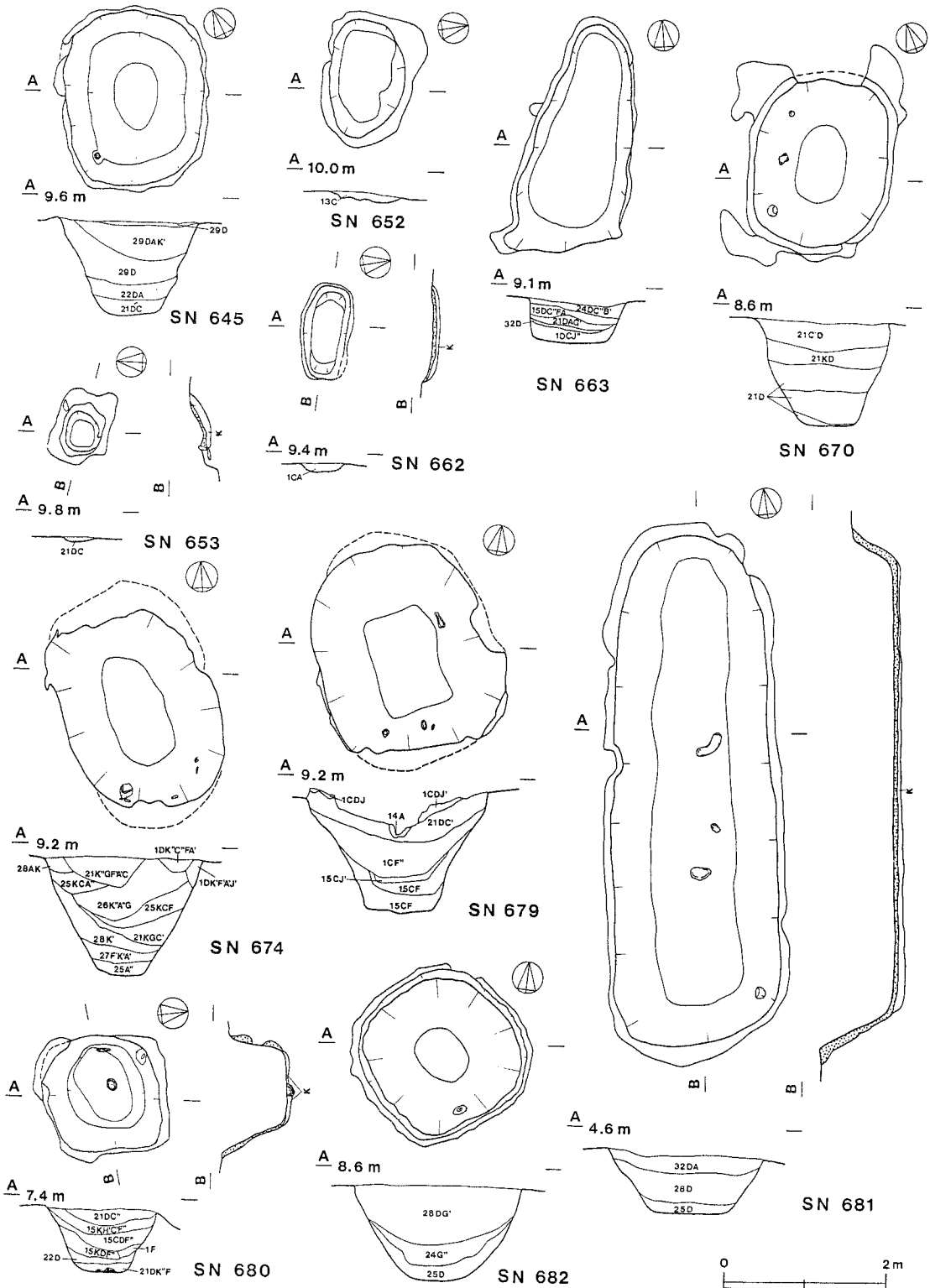
第286図 龍を伴わない鹹水槽実測図(33)



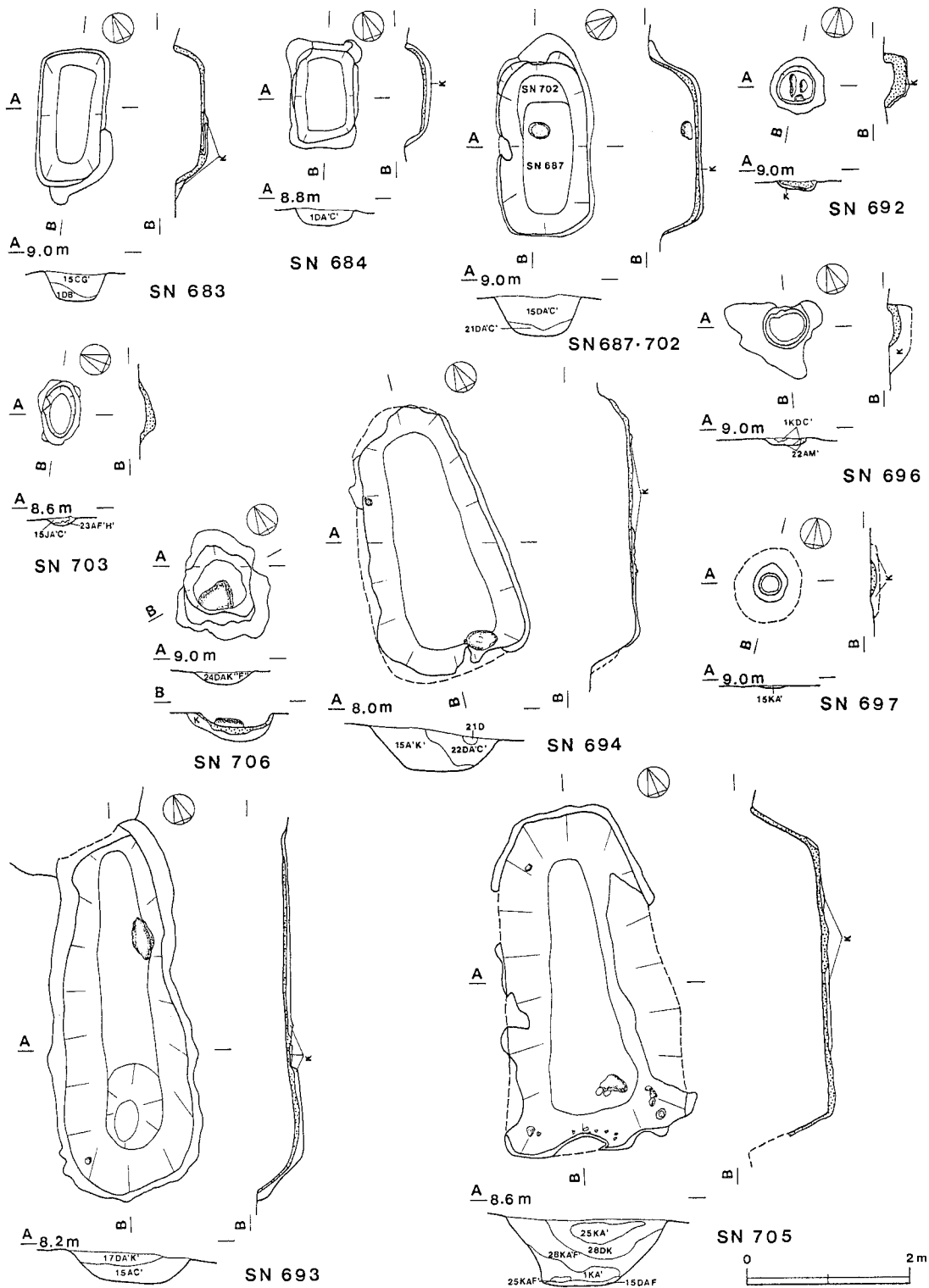
第287図 竈を伴わない鹹水槽実測図(34)



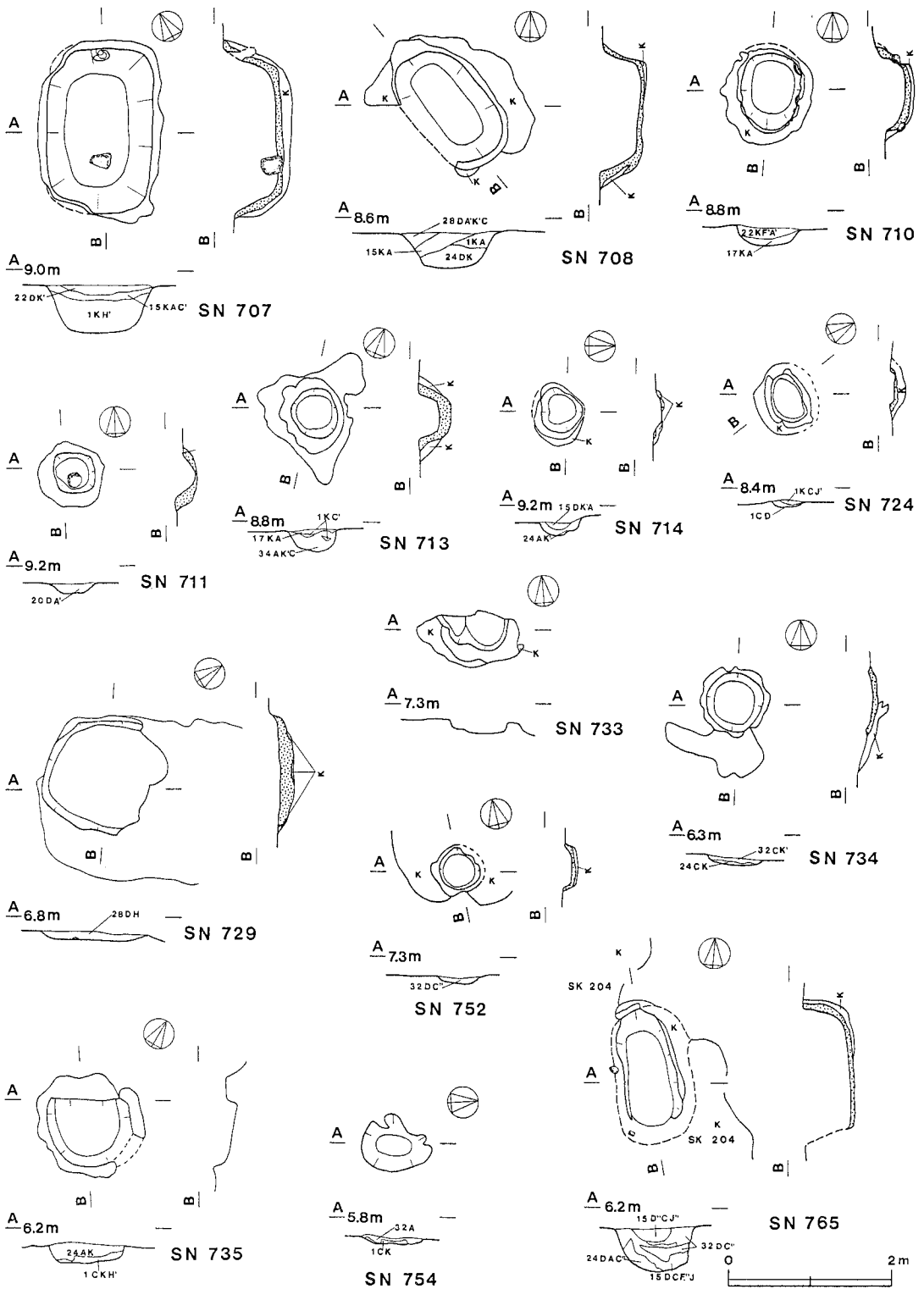
第288図 竈を伴わない鹹水槽実測図(35)



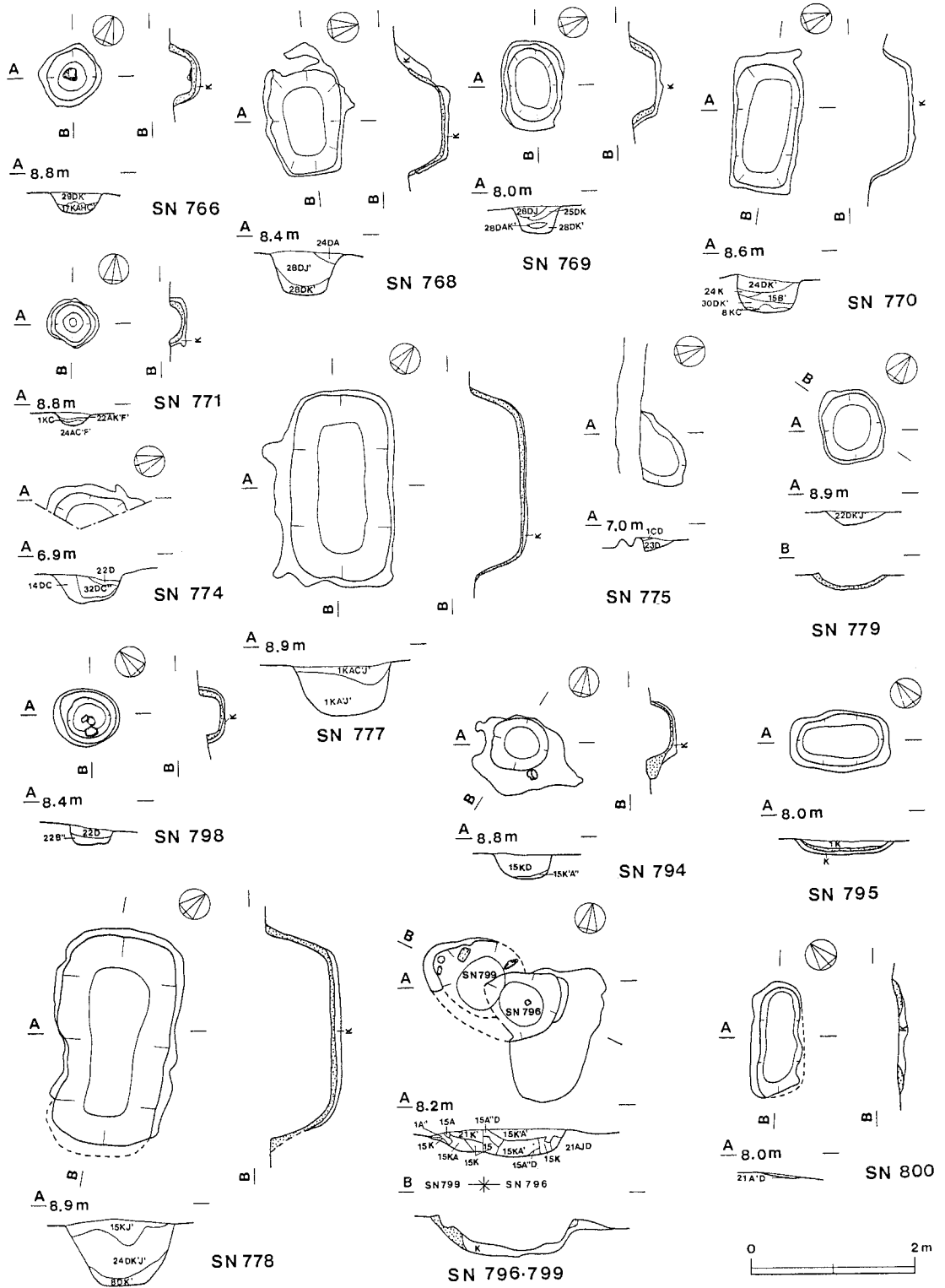
第289図 竈を伴わない鹹水槽実測図(36)



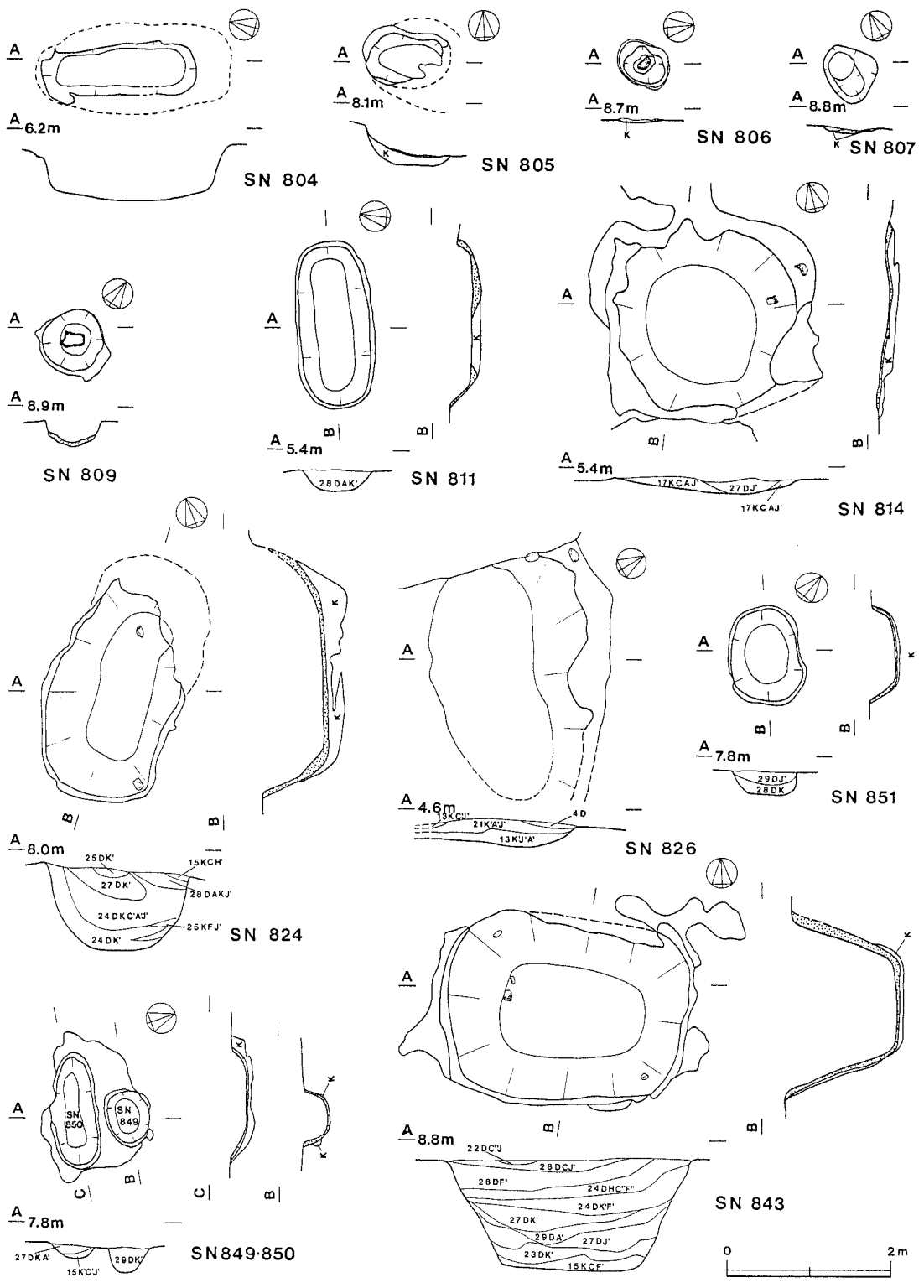
第290図 龍を伴わない鹹水槽実測図(37)



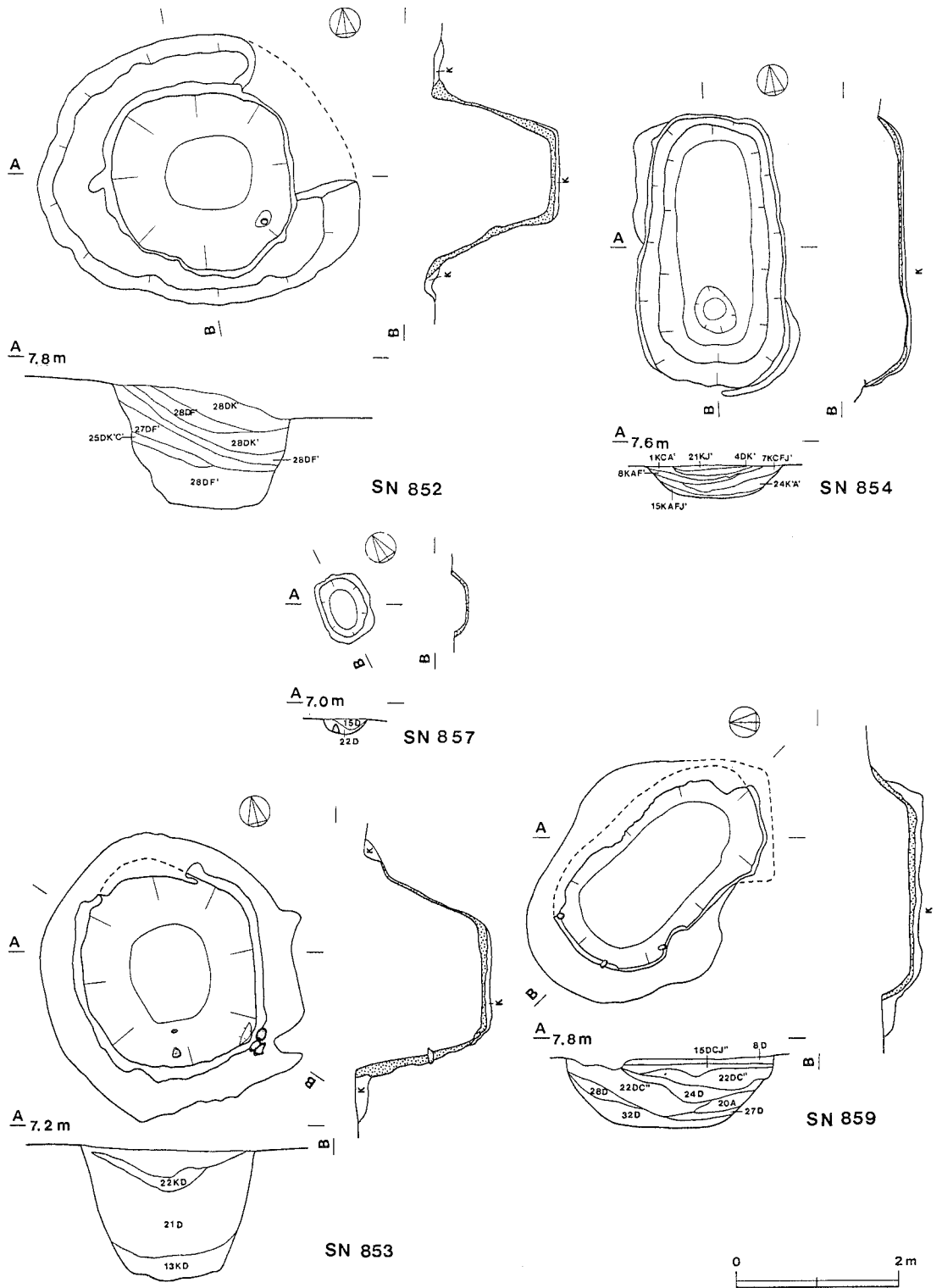
第291図 竈を伴わない鹹水槽実測図(38)



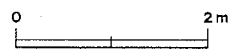
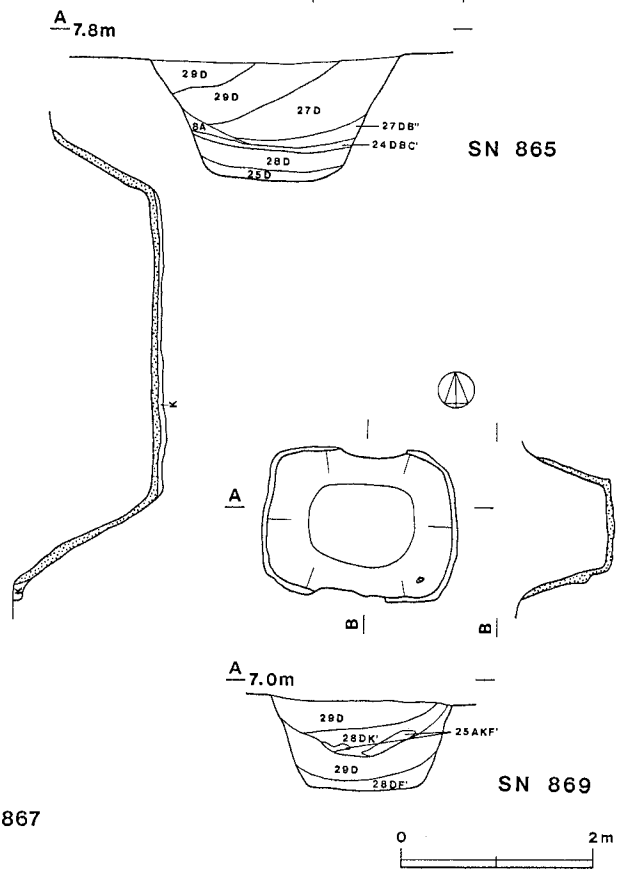
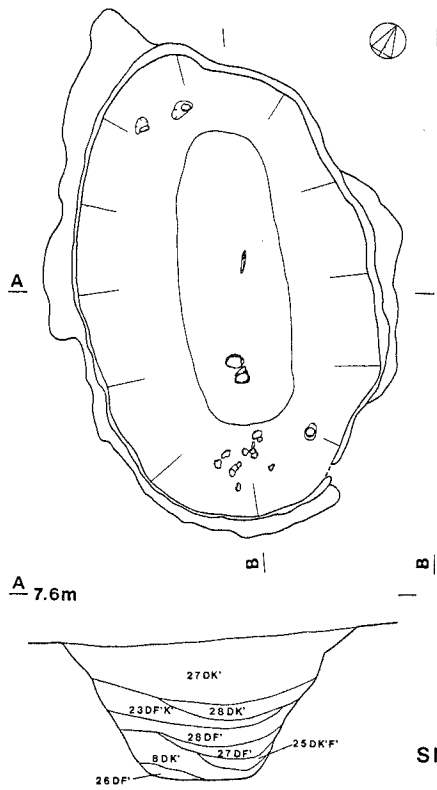
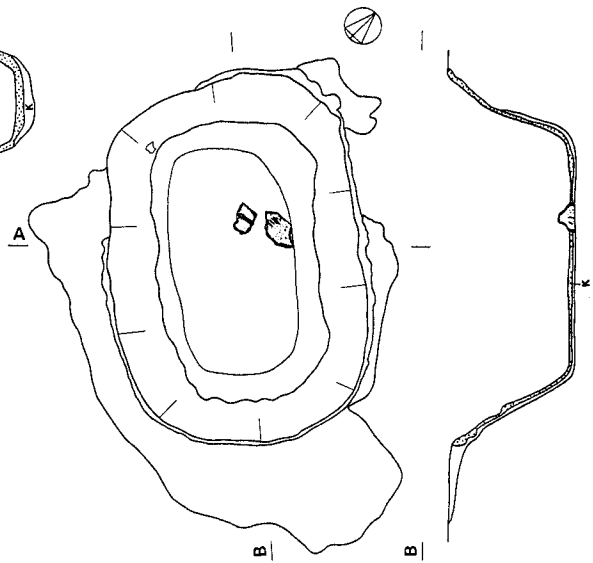
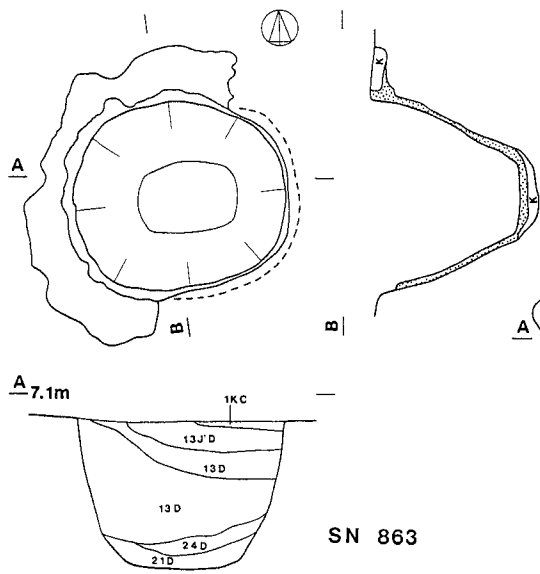
第292図 竈を伴わない鹹水槽実測図(39)



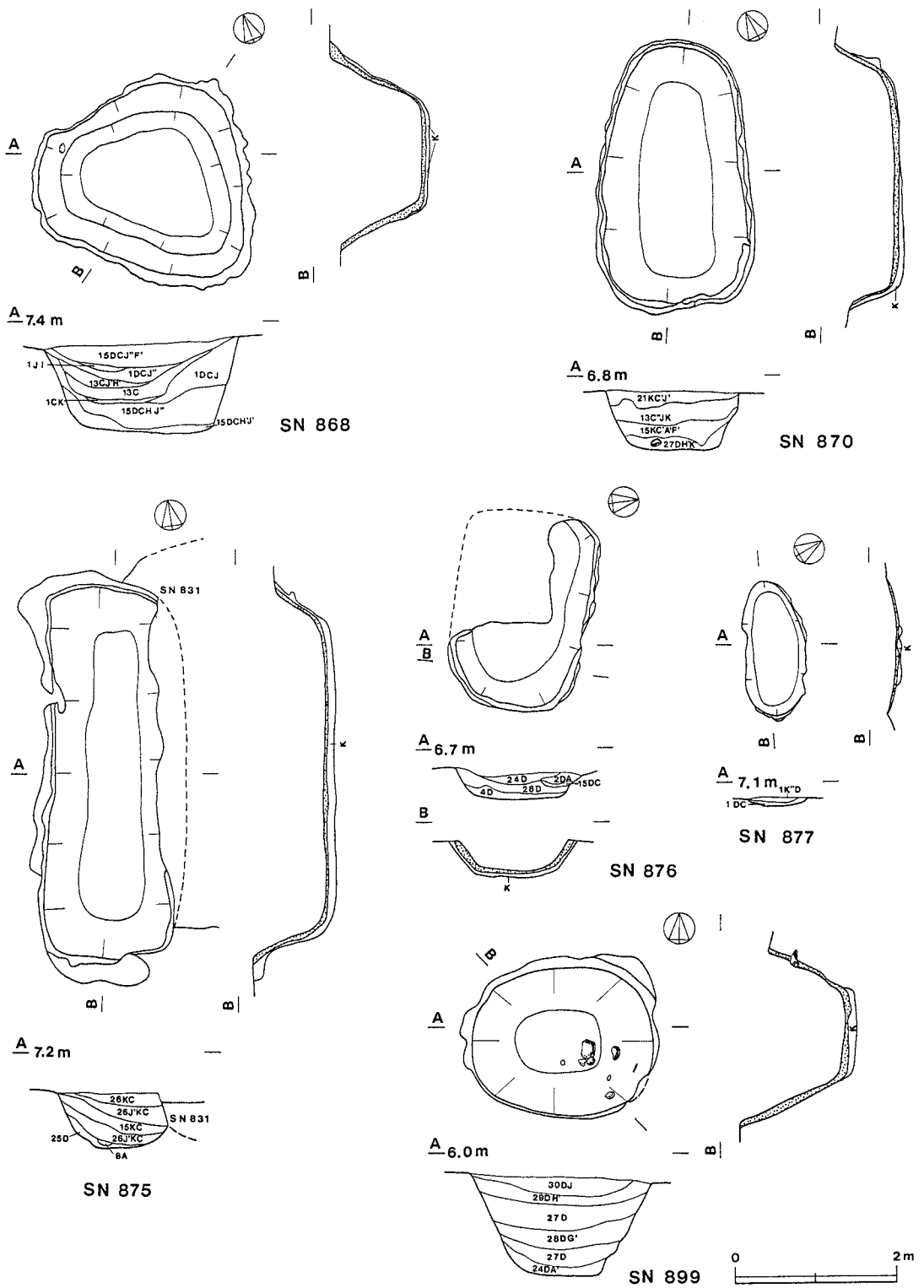
第293図 龍を伴わない鹹水槽実測図(40)



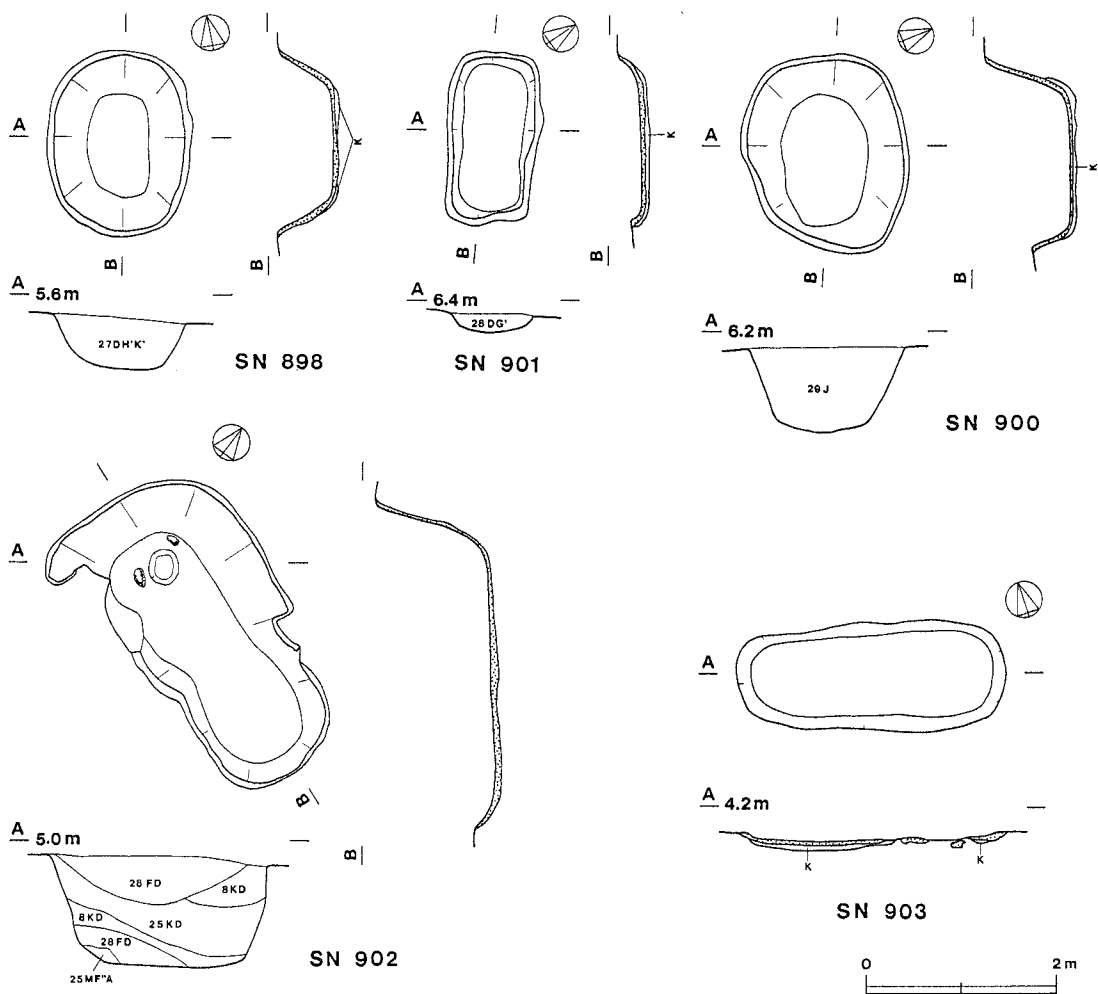
第294図 竈を伴わない鹹水槽実測図(41)



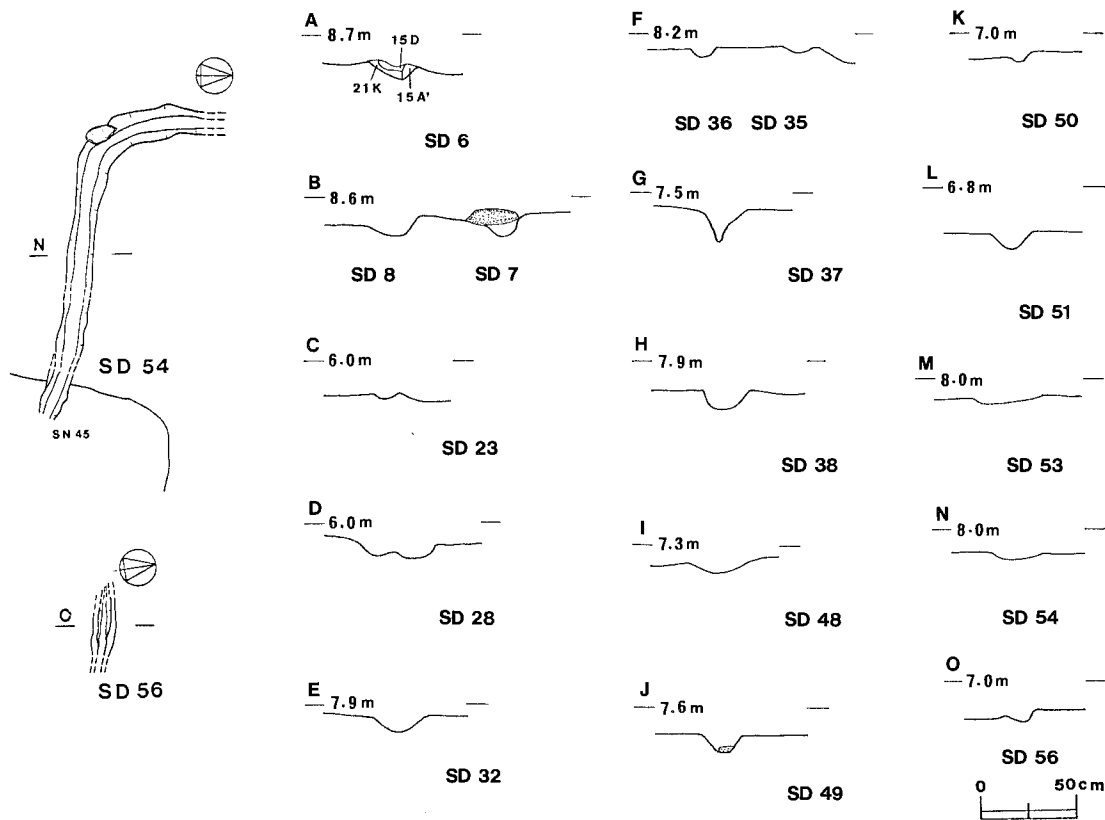
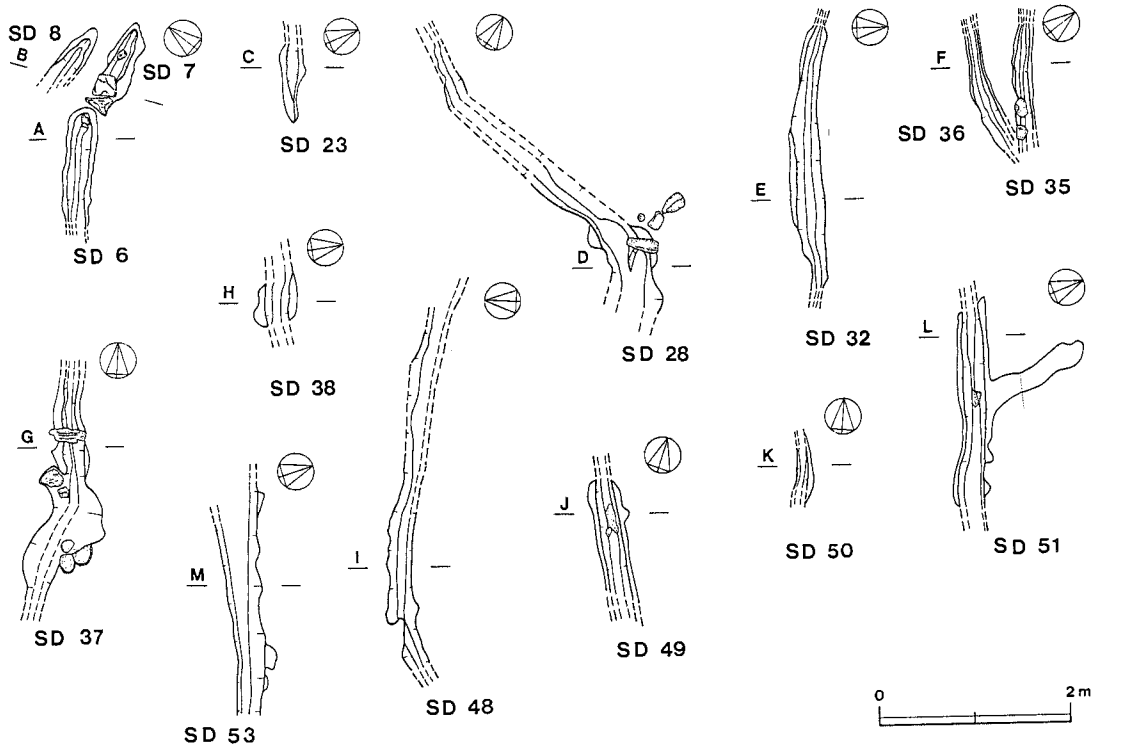
第295図 竈を伴わない鹹水槽実測図(42)



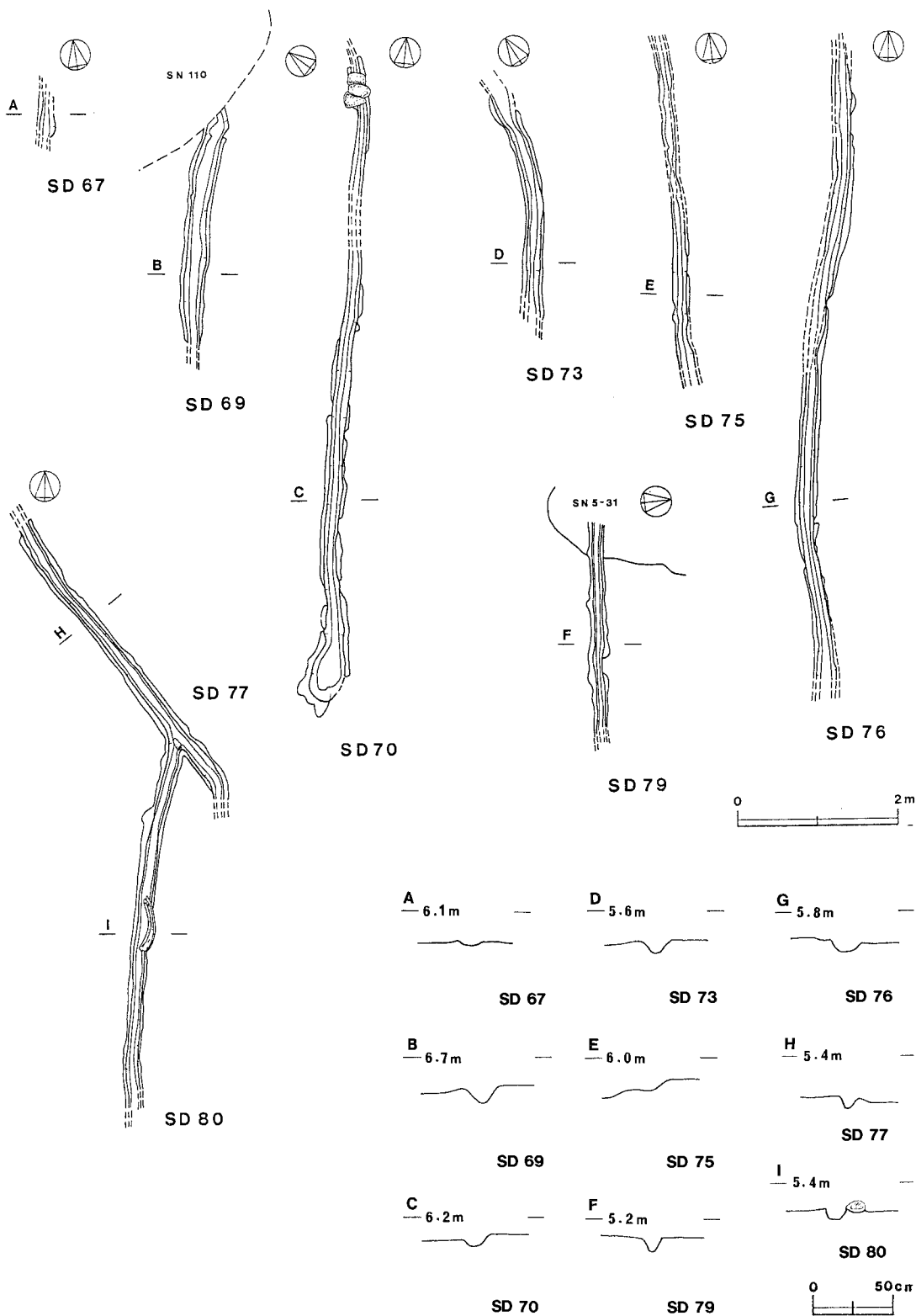
第296図 甕を伴わない鹹水槽実測図(43)



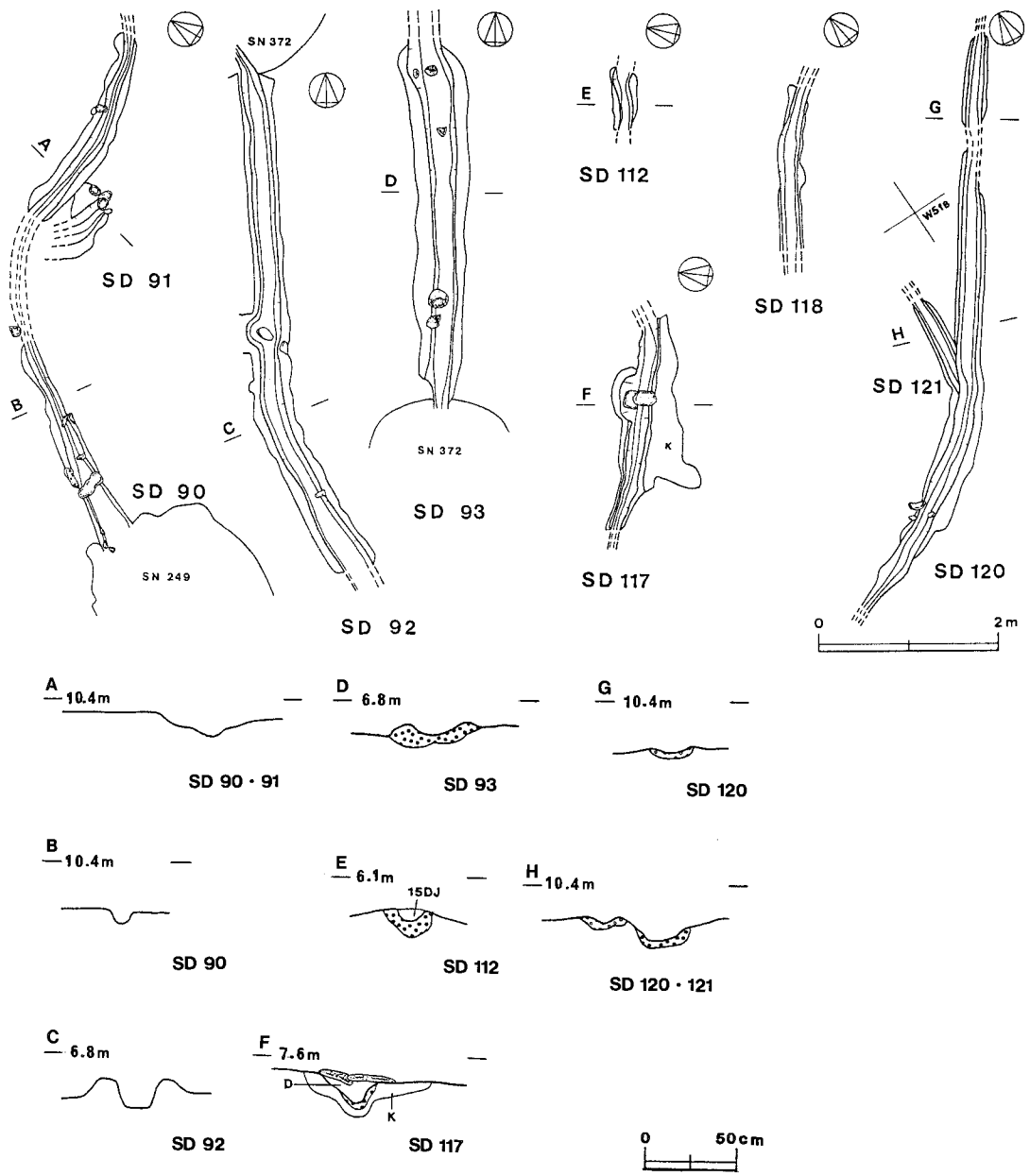
第297図 竈を伴わない鹹水槽実測図(44)



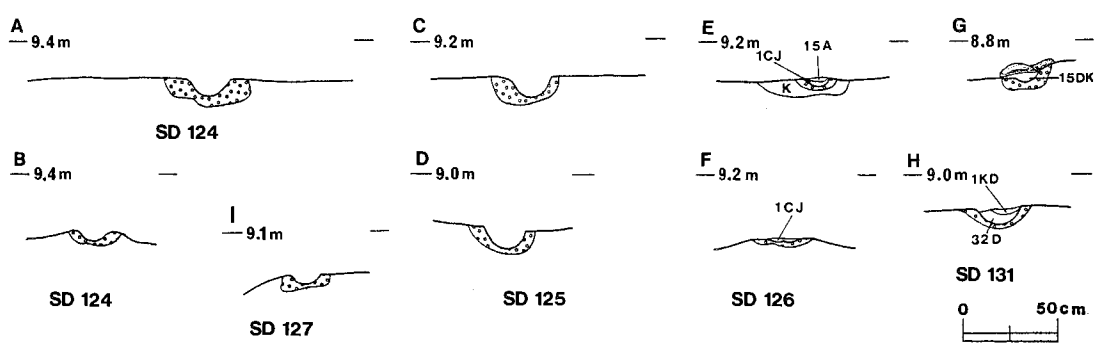
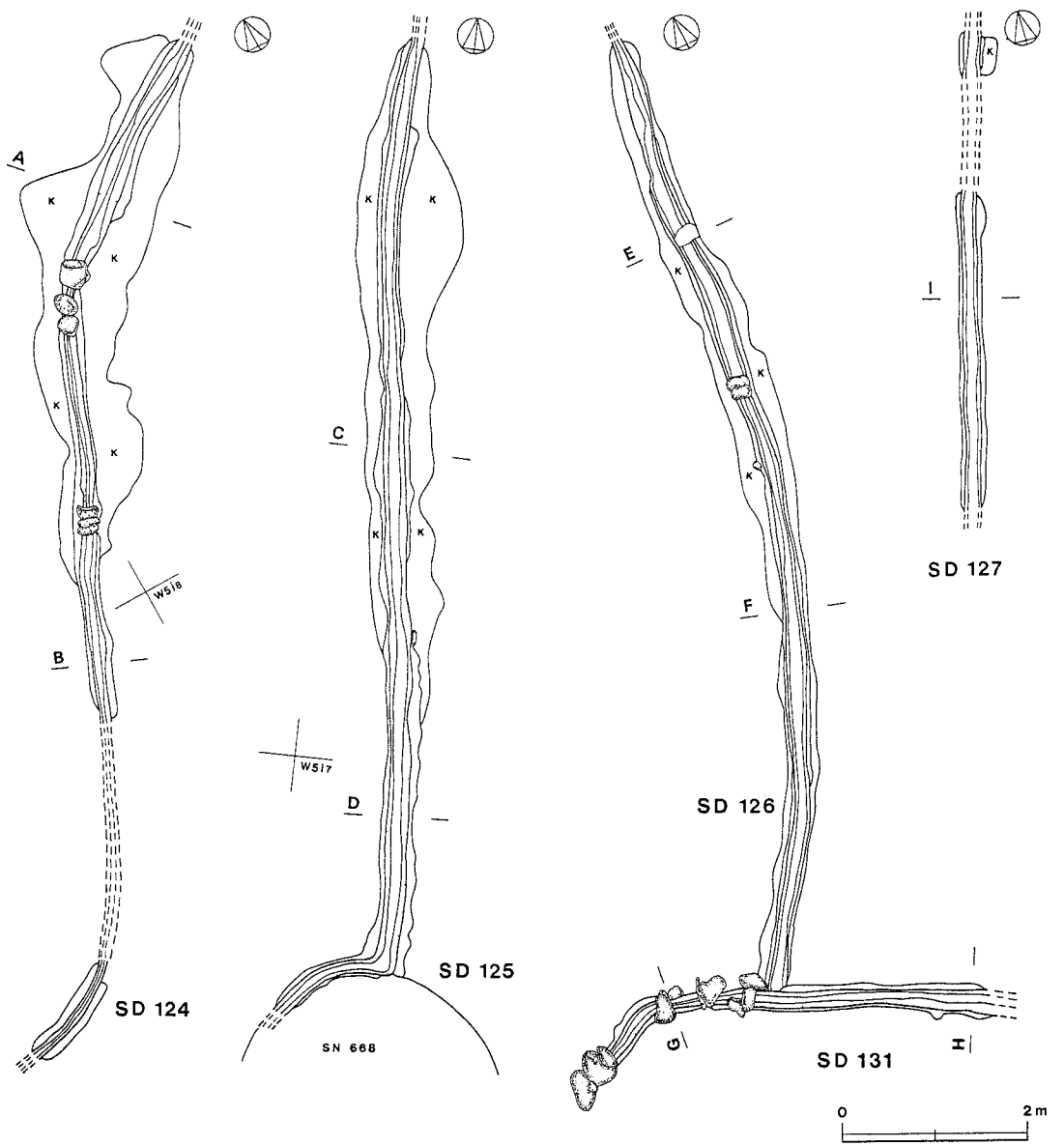
第298図 竈を伴わない土極実測図(1)



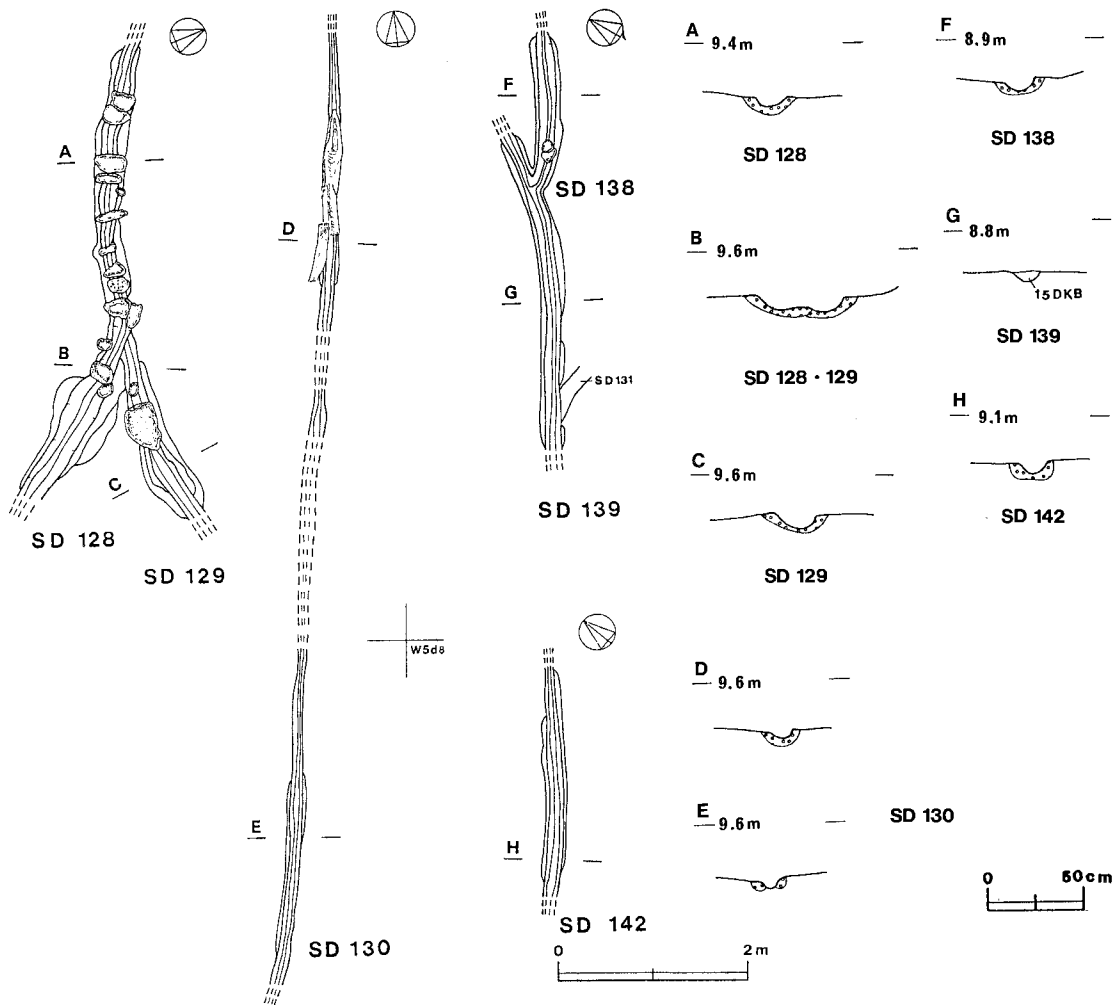
第299図 甕を伴わない土樋実測図(2)



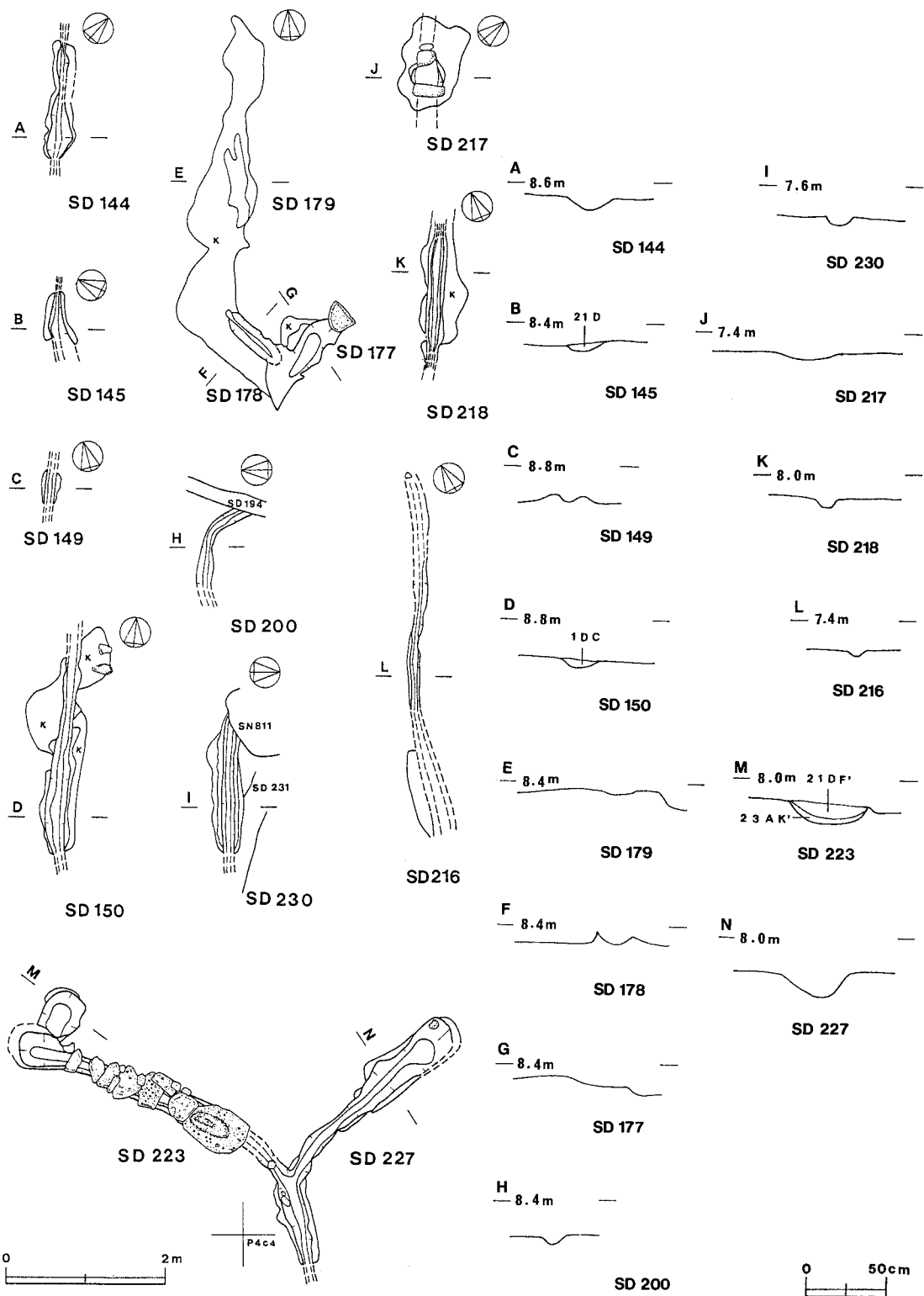
第300図 竈を伴わない土樋実測図(3)



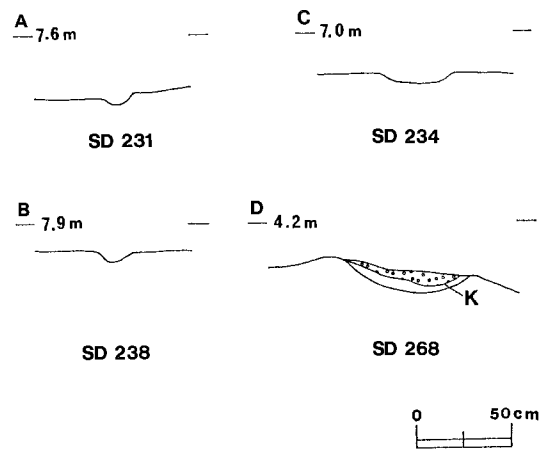
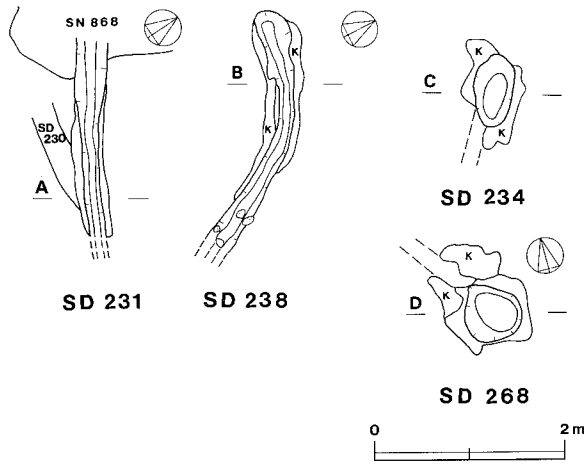
第301図 竈を伴わない土樋実測図(4)



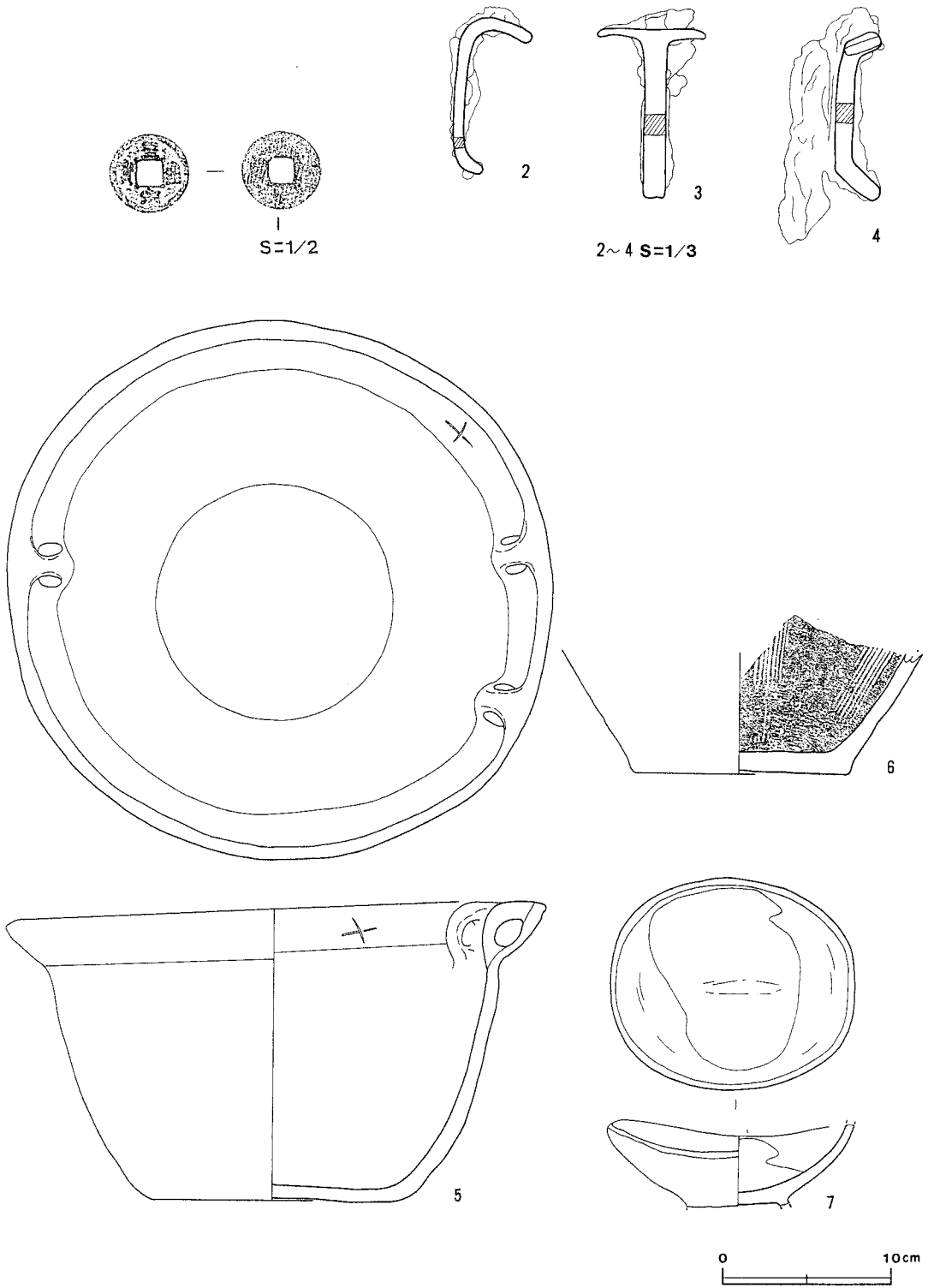
第302図 竈を伴わない土樋実測図(5)



第303図 竈を伴わない土桶実測図(6)



第304図 甕を伴わない土槌実測図(7)



第305図 その他の鹹水槽出土遺物実測・拓影図

甕を伴わない鹹水槽出土遺物

第436号鹹水槽出土古銭一覧表 (第305図1)

図版番号	鑄名	初鑄年(西曆)	鑄造地名	出土地点	備考
1	皇宋通寶	1039	北宋	第436号鹹水槽	M69

第588号鹹水槽出土鉄製品一覧表 (第305図2)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
2	耳金	7.3	0.5	0.6	22.6	第588号鹹水槽	M17 上端部欠損, 下端部折れ曲がる。

第814号鹹水槽出土鉄製品一覧表 (第305図3・4)

図版番号	名称	法量				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
3	舟釘	8.0	0.3	1.0	41.0	第814号鹹水槽	M50 上部残存
4	耳金	8.0	1.7	0.8	150.8	第814号鹹水槽	M51 断面長方形, 両端部折れ曲がる。

第288号鹹水槽出土土器観察表 (第305図5)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	内耳形土器 土師質土器	A 33.0	平底で, 体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。頸部内面に幅広の浅い凹線が巡り, ヘラによる記号も見られる。耳は3か所。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 体部外面下端から底部にかけてヘラ削り後ナデ。 耳は接合。	砂粒・雲母・スコリア・バミス・長石 黒色 普通	P19 90% 外面に鍋墨付着 第288号鹹水槽 覆土
		B 18.8				
		C 15.0				

第420号鹹水槽出土土器観察表 (第305図6)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	攪鉢 須恵系土器	B (7.5) C [12.8]	平底で, 体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。 体部外面下端は整形時の指頭痕が目立つ。筋は7本で1組。	砂粒・石英・長石・スコリア・バミス 褐灰色 普通	P20 40% 第420号鹹水槽 覆土

(第305図7) は椀(木製品)で, 第116号鹹水槽から出土している。漆塗りで, 法量は口径15.0cm, 底径6.3cm, 器高5.3cmである。材質はハンノキ属の一種である。

第3節 人骨と馬骨について（埋葬遺構）

当遺跡からは、人骨が標高15.2mの通称青塚と呼ばれているH2・3区と、調査区の南端で標高13.8mのX4区付近を中心に79か所（第306図）から出土している。この地域は墓地であったと考えられ、人骨は後世の攪乱を受けて半数以上が原形をとどめないほどバラバラになって出土している。そのうち、遺存状態の良いものは頭を北に向けて、足を折り曲げられた状態で、六道銭として渡来銭等を伴って埋葬されているものも見られる。渡来銭（第307・308図1～48）は、唐銭3枚、北宋銭40枚、明銭5枚である。その内、北宋銭は、「太平通寶」・「至道元宝」・「祥符元寶」・「天禧通寶」・「天聖元宝」・「皇宋通寶」・「景德元宝」・「熙寧元宝」・「元豊通寶」・「元祐通寶」・「宋通元寶」・「紹聖元宝」・「元符通寶」・「聖宋元宝」・「大觀通寶」・「政和通寶」である。唐銭は、「開元通寶」で、明銭は、「洪武通寶」・「永楽通寶」である。

さらに、人骨80体分を鑑定した国立科学博物館の馬場悠男氏によると、これらの骨は乳幼児から老人まであり、最も集中している年齢層は30代から50代ごろまでの壮年期、次いで1才から6才ごろまでの幼年期が続いている。体格は人骨の大きさや太さから推定されるが、全体的には江戸時代における江戸の人々と比べて同じ、あるいはやや小柄である。骨格からは、男女とも非常に強壯な体格と華奢な体格がみられ、従って、製塩労働に分業があったために、体格に差が生じていた可能性が考えられる。顎や歯の発達や歯の咬耗は江戸の人々よりも著しく、かなり粗く硬い食物を食べていたものと思われる。

この他、人骨が集中している付近から、内耳形土器片や陶器の播鉢、瓶子、おろし皿、香炉、甕、皿、碗、石塔等が出土している。いずれも日常的な雑器ではあるが、埋葬の際の供養に用いられた可能性も考えられる。特に、内耳形土器片と陶器片の出土量が目立って多い。鑑定の結果、陶器は14世紀から15世紀にかけての瀬戸、常滑で製作されたものが中心であることが判明した。内耳形土器は、15世紀頃製作されたものと思われるが、生産地は不明である。

また、人骨が出土している付近から、馬骨が7か所から出土している。当時、馬は「かます」に入れられた塩や燃料の薪等を担って運ぶため使用されていたものと思われる。

表4 人骨出土一覧表（第306図）（SA-2）

番号	位置	標高 (m)	性別	年齢	時期	備考
2-1	L3j ₆ (SK-25)	8.972	女	2才	江戸	付章 人骨No.69
2-2	O2b ₆ (SK-5)	不明	男	高齢	江戸	

番号	位置	標高 (m)	性別	年齢	時期	備考
2-3	M2i ₇ (SK-32)	9.320	男	壮年	江戸	
2-4	L3g ₄ (SK-22)	9.132	女	高齢	江戸	古銭1枚
2-5	O2d ₉ (SK-16)	8.581	女	壮年	江戸	
2-6	N2j ₅ (SK-7)	9.606	女	壮年	江戸	
2-7	L3c ₅ (SK-42)	8.488	男	不明	江戸	古銭1枚
2-8	L3f ₅ (SK-41)	8.800	不明	壮年	江戸	
2-9	L2g ₀ (SK-29)	10.168	不明	1才	江戸	
2-10	M2d ₅ (SK-23)	不明	女	1才	江戸	内耳形土器片1点
2-11	L2i ₀ (SK-21)	不明	男	壮年	江戸	内耳形土器片1点
2-12	L3i ₅ (SK-26)	9.272	男	壮年	江戸	
2-13	L2f ₇ (SK-35)	9.403	男	高齢	江戸	

(SA-3)

番号	位置	標高 (m)	性別	年齢	時期	備考
1	F3b ₂	12.830	不明	2才半	江戸	
2	J1j ₀	10.213	不明	1才未満	江戸	
3	H2a ₄	9.410	女	青年前期	江戸	
4	H2a ₄	9.860	不明	1才6か月 (幼児)	江戸	
5	G1e ₇ (SK-49)	10.129	女	壮年後期	江戸	古銭6枚
6	G2f ₉	8.487	男	壮年後期 ～熟年	江戸	
7	F3h ₇	5.427	不明	2～3才 (幼児)	江戸	
8	G1e ₈	10.003	男	壮年後期	江戸	
9	F2c ₀	8.123	不明	6才 (小児)	江戸	

番 号	位 置	標高 (m)	性 別	年 齢	時 期	備 考
10	F2j ₇	9.353	不 明	生後6か月 (乳 児)	江 戸	
11	F1b ₉	9.220	不 明	4 ~ 5 才 (幼 児)	江 戸	
12	F2c ₀	7.740	女	壮年前半	江 戸	
13	F2c ₉	7.676	不 明	新 生 児	江 戸	No12人骨に抱かれていた。
14	F1b ₈	9.554	女	成 人	江 戸	
15	H3g ₂	8.757	女	壮年中期	江 戸	
16	H3e ₆	7.494	不 明	1才6か月 (幼 児)	江 戸	
17	H2e ₀	7.986	不 明	未 熟 児 (胎児8か月)	江 戸	古銭2枚
18	不 明	不 明	女 女	壮年前期 壮年後半~熟年	江 戸	2体分
19	H2a ₇	7.665	女 男	年 齢 不 明 壮年中期	江 戸	男女2体分, 古銭5枚
20	I3a ₁	7.315	女	壮年前期	江 戸	
21	G2d ₆	8.365	女	壮年中期	江 戸	古銭4枚のうち3枚不明
22	H3d ₂	7.700	不 明	成 人	江 戸	小刀1振
23	H2d ₆	8.432	男	壮年後期 ~ 熟 年	江 戸	古銭7枚
24	H2c ₆	7.955	男	壮年後期 ~ 熟 年	江 戸	古銭2枚
25	G2j ₇	8.019	女	壮 年 中期~後期	江 戸	
27	H2c ₄	8.823	男	壮年中期	江 戸	
28	H2a ₅	7.839	不 明	2才~3才 (幼 児)	江 戸	
29	G2e ₅	8.873	不 明	3才~4才 (幼 児)	江 戸	
30	H2g ₃	8.980	男・女 不 明	壮年中期~ 後期・幼児	江 戸	男女2体分, 幼児1体分
31	F3i ₁	8.075	不 明	3 ~ 4 才 (幼 児)	江 戸	
32	F3b ₁	7.760	不 明	4 才 (幼 児)	江 戸	
33	H3h ₆	8.526	男	壮年中期	江 戸	

番号	位置	標高 (m)	性別	年齢	時期	備考
34	K3i ₇	8.385	不明	7才 (小児)	江戸	
35	G3b ₃	6.825	女	壮年前期	江戸	
36	H3e ₂	7.620	不明	1才~1才6か月 (幼児)	江戸	
37	H3f ₁	7.897	不明	1才6か月 (幼児)	江戸	古銭1枚
38	G3h ₅	7.496	男	壮年	江戸	
39	F3a ₂	7.080	不明	3~4才 (幼児)	江戸	
40	F3c ₄	5.798	男	壮年	江戸	
41	I3d ₃	8.563	男	壮年中期	江戸	古銭23枚
42	F3c ₅	5.056	女	壮年	江戸	
43	I3d ₆	6.919	女 男	成人 壮年後期	江戸	男女2体分
44	H2a ₅	8.906	不明	1才6か月~2才 (幼児)	江戸	
45	H3h ₂	8.249	男 女	壮年 中期~後期	江戸	男女2体分, 古銭1枚
46	H3e ₃	7.535	女	壮年中期	江戸	古銭1枚
47	I2e ₀	6.934	不明	2才 (幼児)	江戸	古銭3枚
48	I3d ₅	6.754	不明	2才~3才 (幼児)	江戸	
49	G2f ₃	7.446	男	壮年中期	江戸	
50	I2h ₉	6.185	女	青年	江戸	
51	H3j ₂	5.803	不明	7~8才 (小児)	江戸	
52	K3h ₆	7.516	男	壮年中期	江戸	
53	K3g ₆	7.731	不明	新生児	江戸	
54	X4a ₈	9.719	男	壮年前期	江戸	
55	W4f ₉	10.008	女	20才 青年前期	江戸	
56	X4b ₇	8.463	不明	6か月 (乳児)	江戸	

番 号	位 置	標高 (m)	性 別	年 齡	時 期	備 考
57	X5b ₆	11.494	不 明	7 才 (幼 児)	江 戸	
58	X4a ₇	8.447	男	壮 年 中 期	江 戸	
59	X4d ₈	9.964	不 明	2 才 (幼 児)	江 戸	
60	W5j ₅	10.092	女 不 明	壮 年 後 期 2 ~ 3 才	江 戸	女 1 体分と幼児 1 体分
61	V5i ₄	8.499	男	壮 年 中 期	江 戸	
62	W5j ₄	9.830	男	壮 年 前 期	江 戸	
63	X4d ₉	9.979	女	熟 年	江 戸	
64	X5b ₄	9.411	不 明	1 才 (幼 児)	江 戸	
65	X4b ₇	7.529	不 明	3 才 (幼 児)	江 戸	古 銭 1 枚

(SA-4)

番 号	位 置	標高 (m)	性 別	年 齡	時 期	備 考
66	S3g ₆	8.774	男	壮 年 前 期	江 戸	
67	S3f ₈	7.880	不 明	成 人	江 戸	
68	V5e ₃	4.436	男	熟 年	江 戸	

※ SA 3・4 の人骨番号は付章の人骨番号と同一のものである。

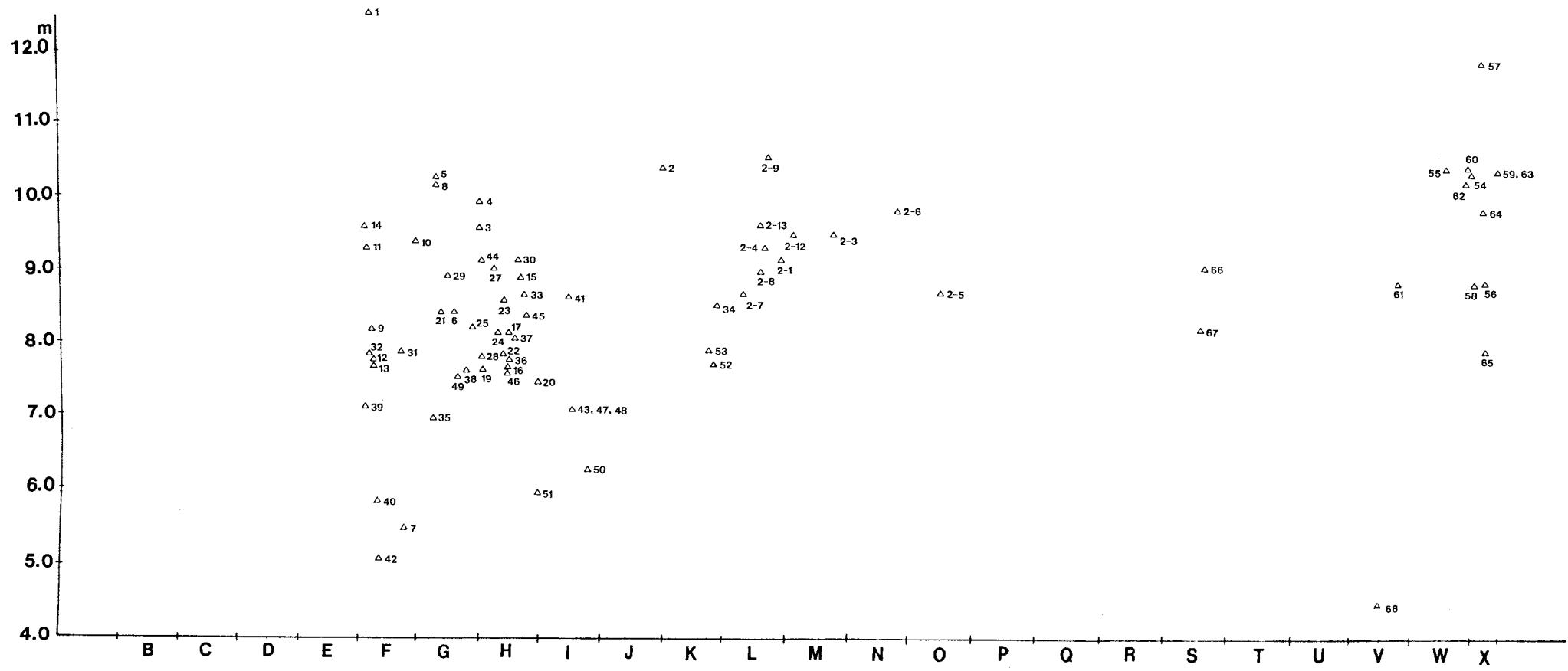
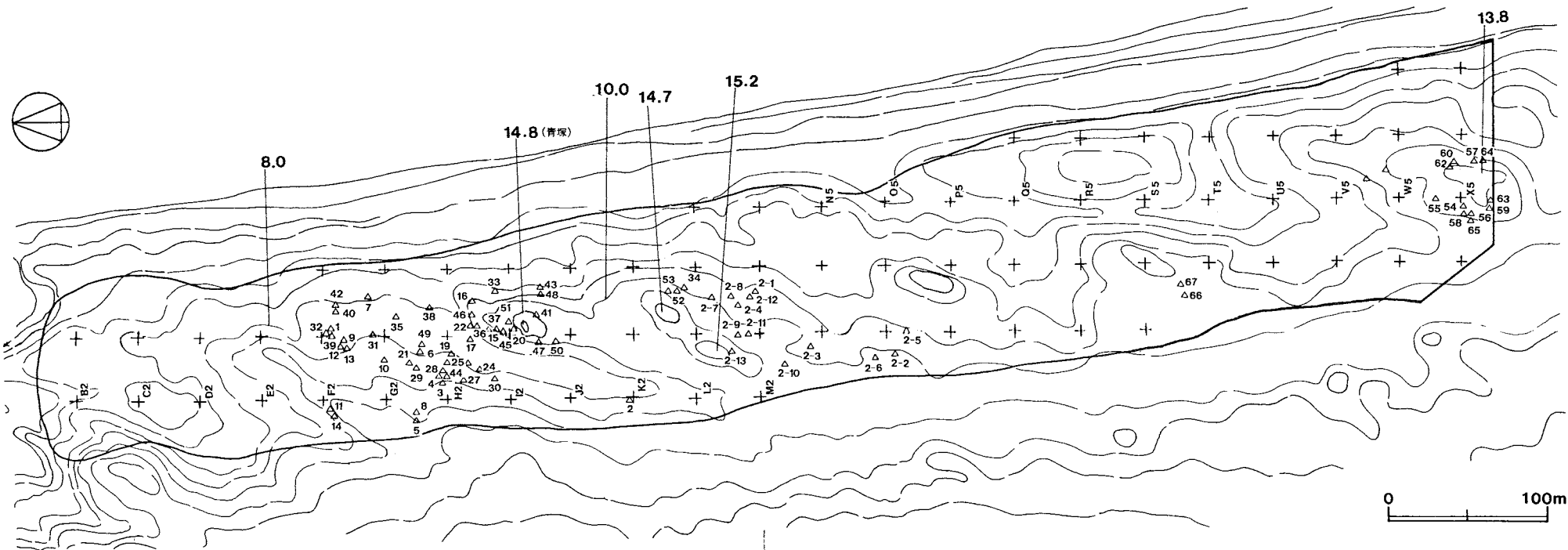
表 5 人骨に伴って出土した古銭一覧表 (第307・308図 1~48)

図版番号	鑄 名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出 土 地 点	備 考
1	天 禧 通 寶	1017	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M72
2	熙 寧 元 宝	1068	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M73
3	皇 宋 通 寶	1039	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M74
4	元 豊 通 寶	1078	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M75
5	祥 符 元 寶	1008	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M76
6	元 符 通 寶	1098	北 宋	人骨 No23 (SA3)	M77
7	永 樂 通 寶	1408	明	人骨 No24 (SA3)	M78

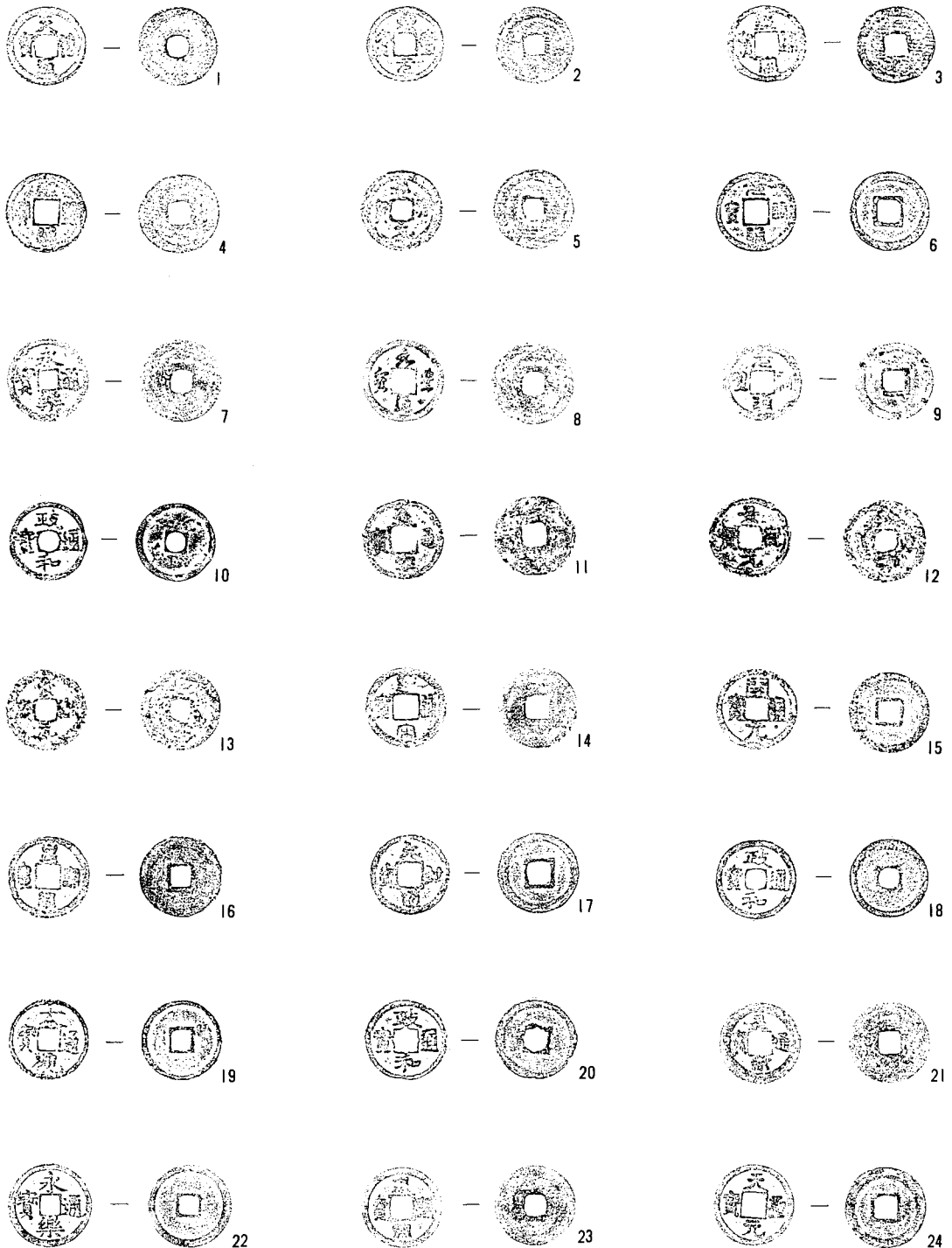
8	元豐通寶	1078	北宋	人骨 No24 (SA3)	M79
9	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No23 (SA3)	M80
10	政和通寶	1111	北宋	人骨 No46 (SA3)	M81
11	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No46 (SA3)	M82
12	景德元寶	1044	北宋	人骨 No46 (SA3)	M83
13	景德元寶	1044	北宋	人骨 No64 (SA3)	M84
14	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No40 (SA3)	M85
15	開元通寶	621	唐	人骨 No40 (SA3)	M86
16	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No40 (SA3)	M87
17	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No40 (SA3)	M88
18	政和通寶	1111	北宋	人骨 No40 (SA3)	M89
19	大觀通寶	1107	北宋	人骨 No40 (SA3)	M90
20	政和通寶	1111	北宋	人骨 No40 (SA3)	M91
21	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No40 (SA3)	M92
22	永樂通寶	1408	明	人骨 No40 (SA3)	M93
23	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No40 (SA3)	M94
24	天聖元寶	1023	北宋	人骨 No40 (SA3)	M95
25	至道元寶	995	北宋	人骨 No40 (SA3)	M96
26	永樂通寶	1408	明	人骨 No40 (SA3)	M97
27	洪武通寶	1368	明	人骨 No40 (SA3)	M98
28	元豐通寶	1078	北宋	人骨 No40 (SA3)	M99
29	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No40 (SA3)	M100
30	開元通寶	621	唐	人骨 No40 (SA3)	M101
31	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No40 (SA3)	M102
32	聖宋元寶	1101	北宋	人骨 No40 (SA3)	M103
33	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No40 (SA3)	M104
34	紹聖元寶	1094	北宋	人骨 No40 (SA3)	M105
35	開元通寶	621	唐	人骨 No40 (SA3)	M106
36	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No19 (SA3)	M115
37	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No19 (SA3)	M116

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
38	太平通寶	976	北宋	人骨 No19 (SA3)	M117
39	宋通元寶	960	北宋	人骨 No19 (SA3)	M118
40	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No19 (SA3)	M119
41	太平通寶	976	北宋	人骨 No17 (SA3)	M121
42	元祐通寶	1086	北宋	人骨 No17 (SA3)	M122
43	紹聖元寶	1094	北宋	人骨 No45 (SA3)	M123
44	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No44 (SA3)	M129
45	天禧通寶	1017	北宋	人骨 No36 (SA3)	M130
46	洪武通寶	1368	明	人骨 No21 (SA3)	M65
47	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No 4 (SA2)	M58
48	皇宋通寶	1039	北宋	人骨 No 7 (SA2)	M59

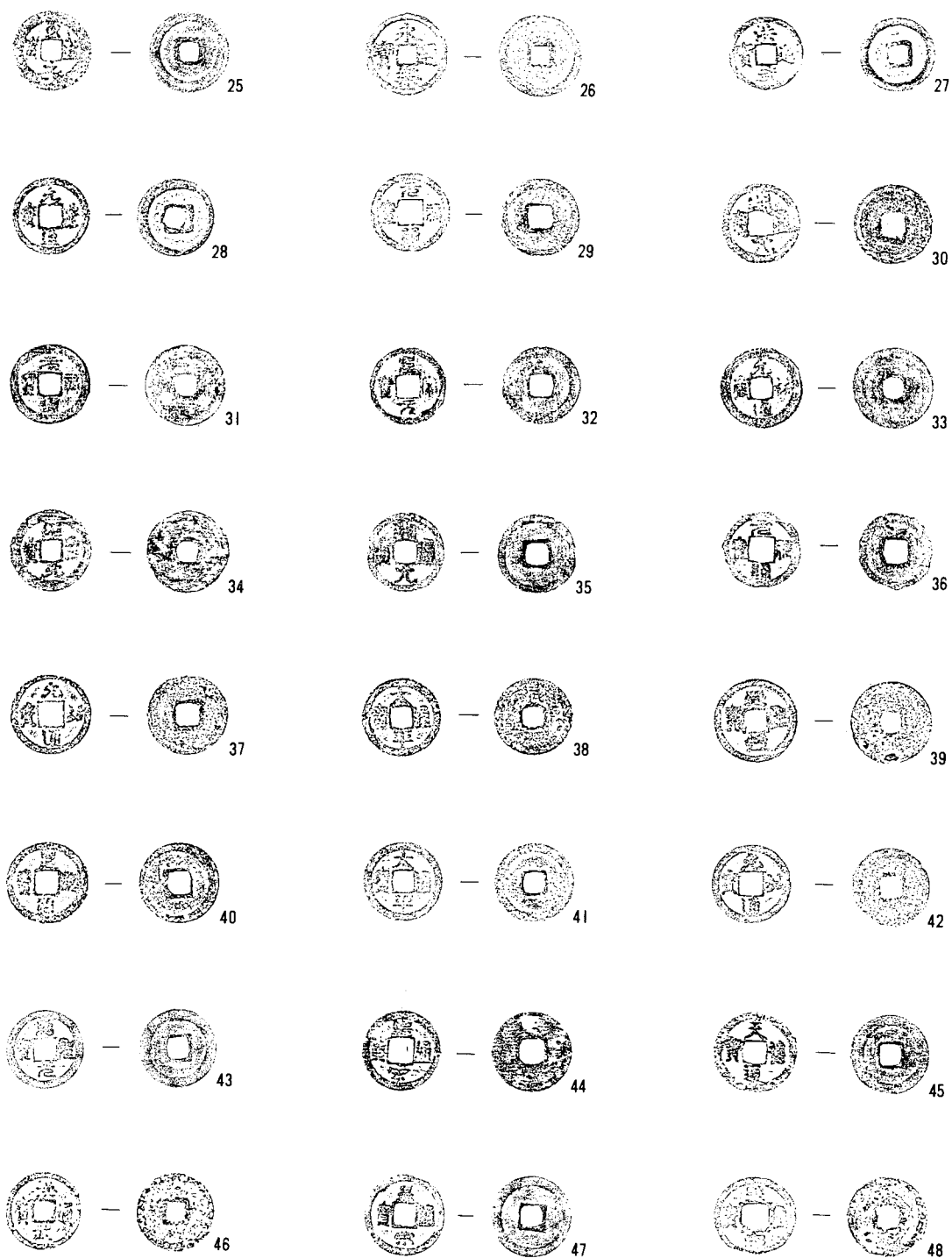
※出土地点の人骨Noは、人骨出土一覧表の番号と同一のものである。



第306图 人骨出土分布状况图



第307図 人骨に伴って出土した古銭拓影図(1)



第308図 人骨に伴って出土した古銭拓影図(2)

第4節 その他の遺構

1 炉 跡 (第309～311図)

当遺跡から検出された炉跡は45基である。それぞれの遺構は、一様に底面が火熱により赤変しており、竈の底面と同じようであるが、竈よりは規模が小さく、これに伴う鹹水槽もみあたらないことから、炉跡として位置づけた。各々の炉跡の解説は一覧表の中に掲載した。

表6 炉跡一覧表

遺構 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)						
1	T3i ₄	N-50°-W	隅丸方形	1.06	1.05	0.23	緩斜	凸凹	自然	8.60		SK205
2	T3c ₃	N-11°-W	楕円形	1.00	0.77	0.12	緩斜	平坦	自然	8.10	底面-石1点	SK208
3	S3h ₅	N-30°-E	楕円形	0.79	0.36	0.12	緩斜	平坦	自然	8.70		SK209
4	S3h ₅	N-51°-E	不定形	1.11	0.80	0.20	緩斜	平坦	自然	8.64		SK215
5	S3h ₄	N-38°-E	不定形	1.43	1.26	—	—	平坦	—	8.64	土師質土器片1点、砥石1点、第7・9号土坑と重複、底面だけ検出	SX15
6	H2c ₉	N-25°-E	楕円形	1.35	1.18	0.08	緩斜	ゆるい起伏	自然	8.00		SK65
7	H2c ₉	N-61°-W	隅丸長方形	1.20	1.06	0.10	緩斜	皿状	自然	8.07		SK66
8	H2e ₉	N-44°-W	楕円形	0.69	0.64	0.12	緩斜	皿状	自然	8.06		SK67
9	H2f ₉	N-60°-W	楕円形	1.18	0.97	0.13	緩斜	皿状	自然	8.16		SK74
10	H2d ₉	—	円形	0.58	0.53	0.10	緩斜	皿状	自然	7.98	底面-石1点、 \odot 石1点	SK77
11	G1h ₉	N-28°-W	楕円形	1.20	1.13	0.15	緩斜	皿状	自然	9.76		SK80
12	H2e ₄	N-73°-E	楕円形	1.64	1.50	0.09	緩斜	皿状	自然	9.14		SK83
13	H2a ₅	N-41°-E	楕円形	1.28	1.18	0.17	緩斜	皿状	自然	8.64		SK84
14	H2j ₂	N-40°-W	楕円形	1.00	0.80	0.07	緩斜	皿状	自然	9.23	底面-石2点	SK85
15	H1d ₉	—	円形	0.53	0.52	0.04	緩斜	皿状	自然	10.10		SK86
16	H1e ₉	N-20°-E	楕円形	0.44	0.38	0.03	緩斜	皿状	自然	9.90		SK87
17	G3a ₁	N-70°-W	楕円形	1.32	1.06	0.06	緩斜	皿状	自然	7.70		SK95
18	G3f ₁	N-22°-W	楕円形	1.06	0.94	0.13	緩斜	平坦	自然	6.50		SK97
19	G3a ₁	—	円形	5.05	4.67	—	—	平坦	—	6.54	底面だけ検出	SK100
20	H2e ₉	N-59°-E	楕円形	0.91	0.78	0.20	緩斜	皿状	自然	7.48	\odot 石1点	SK101
21	H2e ₉	—	円形	0.54	0.53	0.07	緩斜	皿状	自然	7.48		SK102
22	H2f ₉	N-74°-W	楕円形	0.38	0.30	0.06	緩斜	皿状	自然	7.50		SK103
23	H2f ₉	N-41°-E	楕円形	0.58	0.55	0.05	緩斜	皿状	自然	7.92		SK104
24	H2f ₉	N-4°-W	楕円形	0.52	0.51	0.11	緩斜	皿状	自然	7.92		SK105
25	H2d ₉	N-49°-E	楕円形	0.68	0.52	0.17	緩斜	皿状	自然	7.36		SK108
26	I2h ₈	—	円形	0.77	0.72	0.14	緩斜	皿状	自然	7.33		SK131
27	I2f ₈	N-70°-W	楕円形	1.71	1.28	0.11	緩斜	皿状	自然	7.40		SK132
28	I3j ₂	—	円形	0.54	0.53	0.08	緩斜	皿状	自然	6.24		SK135
29	I3j ₂	—	円形	0.53	0.48	0.04	緩斜	皿状	自然	6.18		SK140

遺構番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番 号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)						
30	I2d ₉	N-19°-E	楕円形	0.94	0.78	0.14	外傾	平坦	自然	6.38		SK141
31	I2d ₉	N-75°-E	楕円形	1.03	0.91	0.05	緩斜	皿状	自然	6.40	㊦古銭1点(第317図1)	SK143
32	I2d ₀	N-81°-E	楕円形	4.62	1.34	0.06	緩斜	平坦	自然	6.38		SK145
33	I4f ₅	N-2°-E	不定形	7.92	7.35	0.35	緩斜	平坦	自然	4.40	㊦古銭1点(第317図2)	SK149
34	H2f ₅	N-83°-E	隅丸長方形	0.83	0.66	0.14	緩斜	皿状	自然	6.68		SK150
35	H2f ₅	-	円形	0.63	0.60	0.06	緩斜	皿状	自然	6.84		SK151
36	H2g ₅	N-45°-W	隅丸方形	0.77	0.72	0.12	緩斜	皿状	自然	6.76		SK152
37	H2g ₅	N-53°-W	楕円形	0.50	0.45	0.06	緩斜	皿状	自然	6.72		SK153
38	K3b ₃	N-51°-W	楕円形	2.47	1.57	0.18	緩斜	平坦	自然	7.02		SK162
39	X5a ₇	N-17°-E	隅丸方形	0.65	0.65	0.10	緩斜	平坦	自然	10.52		SK177
40	X5c ₄	N-78°-E	隅丸長方形	0.94	0.77	0.20	緩斜	皿状	自然	10.96	底面-石2点, ㊦石1点	SK179
41	X5c ₂	-	円形	0.66	0.65	0.08	緩斜	皿状	自然	11.10		SK180
42	W5g ₅	N-5°-W	楕円形	5.38	4.68	0.44	緩斜	平坦	自然	9.10		SK184
43	X5b ₄	N-65°-W	隅丸方形	0.61	0.58	0.12	緩斜	平坦	自然	9.44		SK187
44	X5b ₄	N-60°-W	楕円形	0.52	0.42	0.11	緩斜	皿状	自然	9.52		SK189
45	X4d ₆	N-35°-E	楕円形	2.80	1.93	0.10	緩斜	皿状	自然	9.38		SK191

第31・33号炉跡出土古銭一覧表 (第312図1・2)

図版番号	鑄 名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	旧 出 土 地 点	備 考
1	元 祐 通 寶	1086	北 宋	第143号土坑	M61
2	寛 永 通 寶	1636	日 本	第149号土坑	M68

2 土 坑 (第312図)

当遺跡から検出された土坑は13基である。それぞれの土坑は、砂を掘り込んだ後、炭化粒子を含む黒色土を貼って構築している。しかし、鹹水槽、竈、炉跡としての性格を有さないで、土坑として位置づけた。各々の土坑の解説は一覧表にまとめて掲載した。

表7 土坑一覧表

遺構番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番 号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)						
1	O3f ₀	N-47°-E	楕円形	1.14	0.80	0.82	垂直	平坦	自然	9.00		SK3
2	O3h ₀	N-38°-E	隅丸長方形	2.14	1.80	0.90	外傾	平坦	自然	9.80		SK4
3	O3h ₈	N-29°-W	隅丸長方形	1.10	0.68	1.52	外傾	平坦	自然	10.10		SK6
4	L2h ₃	N-58°-W	楕円形	1.10	0.60	0.34	外傾	平坦	自然	8.90	底面-内耳形土器1点(第317図7), ㊦古銭1点(第317図3)	SK44
5	S3g ₅	N-55°-E	楕円形	0.81	0.77	0.14	緩斜	平坦	自然	8.66		SK211
6	S3i ₅	N-22°-W	楕円形	0.85	0.68	0.21	緩斜	皿状	自然	8.60	底面-石1点, 鉄製品1点	SK213

遺構番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番 号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)						
7	S3i ₄	N-24°-E	楕円形	0.90	0.75	0.15	緩斜	皿状	自然	8.64	⑨石1点, 第5号炉と重複, 第8号土坑と重複	SK214
8	S3i ₅	N-27°-E	楕円形	0.87	0.77	0.13	外傾	平坦	自然	8.64	第7号土坑と重複	SK216
9	S3i ₄	N-37°-E	楕円形	0.75	0.55	0.15	緩斜	皿状	自然	8.60	第5号炉と重複	SK217
10	S3j ₆	N-46°-E	楕円形	1.17	0.83	0.19	外傾	平坦	自然	7.95		SX17
11	S3i ₅	-	円形	0.50	0.45	0.06	緩斜	皿状	自然	7.99		SX19
12	T3b ₃	N-39°-W	隅丸長方形	3.34	1.06	0.22	緩斜	平坦	自然	8.03		SX21
13	Q4h ₃	N-0°	楕円形	0.80	0.69	0.33	緩斜	平坦	自然	6.73		SX25

第4号土坑出土土器観察表 (第317図7)

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
7	内耳形土器 土師質土器	A 29.4 B 15.4 C 19.4	平底で, 体部は直線的に外傾して立ち上がり, 口縁部はやや外反する。頸部内面に幅広い浅い凹線が巡る。耳は3か所。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部下端から底部外面にかけてヘラナデ。耳は接合。	砂粒・スコリア・バミス・長石・雲母 黒色 普通	P 5 90% 外面に鈍墨付着 覆土

第4号土坑出土古銭一覧表 (第317図3)

図版番号	鑄 名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	旧 出 土 地 点	備 考
3	天 禧 通 寶	1017	北 宋	第44号土坑	M60

3 不明遺構 (第313~316図)

前述した土坑のように砂を掘り込んで炭化粒子を含む黒色土を貼って構築しているものではなく, 攪乱を受け, 底面だけが残存している土坑や, 覆土中から数点の遺物を出土した土坑が検出されているが, 具体的な性格づけが不可能なものを不明遺構として一覧表にまとめて掲載した。

表8 不明遺構一覧表

遺構番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の厚さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番 号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
1	S3e ₉	N-4°-W	不定形	0.71	0.56	-	3~5	-	-	-	8.93	底面だけ検出	SX1
2	S4a ₁	N-1°-W	不定形	1.43	1.06	-	1~3	-	-	-	8.70	底面だけ検出	SX2
3	R3i ₀	-	円形	1.23	1.18	-	-	-	-	-	8.78	底面だけ検出	SX3
4	V4c ₀	N-30°-W	不定形	2.04	1.38	-	2~5	-	-	-	6.91	底面だけ検出	SX4
5	T5h ₉	N-66°-E	不定形	6.01	5.18	-	-	-	-	-	5.76	底面だけ検出	SX5
6	T3c ₅	-	円形	0.61	0.60	-	-	-	-	-	8.05	底面だけ検出	SX8
7	T3a ₅	N-11°-W	不定形	1.12	0.91	-	-	-	-	-	8.19	底面・陶器(瓶子1点)(第317図8), 底面だけ検出	SX11
8	S3g ₃	N-15°-W	不定形	1.42	0.89	0.20	-	緩斜	平坦	自然	8.04		SX18
9	S3j ₅	N-4°-E	不定形	2.60	1.17	-	-	-	-	-	8.08	底面だけ検出	SX20
10	Q5j ₄	N-11°-E	不定形	3.57	2.02	0.91	-	外傾	平坦	人為	5.08		SX23

遺構 番号	位置	長軸方向 [長径]	平面形	規 模			粘土の 厚 さ (cm)	壁面	底面	覆土	標高 (m)	備 考	旧遺構 番 号
				長軸(m) [径]	短軸(m) [径]	深さ(m)							
11	R5a ₄	N-11°-E	不定形	2.29	1.54	—	1~3	—	—	—	5.06	底面だけ検出	SX28
12	R5a ₄	N-4°-E	不定形	1.82	1.27	—	—	—	—	—	5.02	底面だけ検出	SX29
13	R5a ₄	N-3°-W	不定形	2.66	1.63	10.00	1~3	緩斜	平坦	自然	4.94		SX30
14	G2b ₆	N-4°-W	楕円形	2.55	1.30	0.40	—	外傾	平坦	自然	9.56		SK46
15	G1d ₀	N-37°-E	楕円形	1.74	1.24	1.24	—	緩斜	皿状	自然	9.87		SK48
16	F3e ₂	N-8°-E	楕円形	0.72	0.58	0.25	—	緩斜	平坦	自然	8.60		SK52
17	F3e ₄	N-24°-W	不定形	1.25	1.03	0.24	—	外傾	平坦	自然	8.58		SK53
18	G2d ₇	N-88°-W	不定形	2.80	2.12	0.40	—	緩斜	平坦	自然	8.90		SK54
19	G3d ₃	N-27°-E	不定形	2.07	1.76	0.50	—	緩斜	皿状	自然	7.82	底面一石2点、㊸土器	SK58
20	G3d ₂	N-26°-E	楕円形	1.78	1.26	0.38	—	緩斜	皿状	自然	7.80	底面一石1点、㊸土器	SK59
21	G3d ₄	N-69°-E	隅丸長方形	3.53	1.80	1.23	—	緩斜	皿状	自然	8.16		SK60
22	G2g ₀	N-13°-E (楕円形)	(2.64)	(1.68)	0.93	—	緩斜	平坦	自然	8.40		SK63	
23	G2h ₀	N-72°-W (楕円形)	(3.12)	1.71	0.67	—	緩斜	平坦	自然	8.26		SK64	
24	H3i ₃	N-84°-W	楕円形	2.05	1.08	0.62	—	外傾	皿状	自然	10.40	底面一石2点	SK73
25	G2i ₂	N-6°-W	楕円形	1.08	0.93	0.20	—	緩斜	皿状	自然	9.48	底面一石1点	SK79
26	H1i ₇	N-65°-E	楕円形	0.87	0.68	0.52	—	外傾	平坦	自然	11.26		SK81
27	H2d ₂	N-34°-E	楕円形	1.37	1.19	0.33	—	緩斜	皿状	自然	9.79	㊸石1点、古銭1点(第317図4)	SK82
28	K3d ₂	N-23°-E	楕円形	3.85	3.26	0.60	—	緩斜	皿状	自然	9.44		SK88
29	J3h ₆	N-84°-E	楕円形	1.11	0.66	0.18	—	緩斜	平坦	自然	8.24		SK92
30	H3a ₃	N-9°-W	楕円形	1.17	0.92	0.08	—	緩斜	皿状	自然	6.03		SK112
31	H3h ₃	N-27°-W	楕円形	3.20	2.57	0.44	—	緩斜	皿状	自然	6.25		SK119
32	J3f ₀	N-11°-E	楕円形	3.45	1.78	0.66	—	緩斜	皿状	自然	6.68		SK125
33	I3f ₄	N-86°-W	楕円形	6.16	3.01	—	—	—	—	—	—	底面だけ検出	SK144
34	K3a ₃	N-35°-E	楕円形	4.20	(3.74)	0.60	—	緩斜	平坦	自然	6.24		SK170
35	W5e ₃	N-55°-W	隅丸長方形	1.83	1.11	0.24	—	外傾	平坦	自然	10.06		SK172
36	W5j ₃	N-31°-W	楕円形	4.35	4.07	—	—	—	—	—	—	㊸土師質土器片6点(第317図9~12)、櫛片1点、貝片、底面だけ検出	SK175
37	X5c ₃	N-8°-E	隅丸長方形	0.80	0.75	0.36	—	緩斜	皿状	自然	10.88	底面一石7点、㊸石3点	SK178
38	X5e ₃	N-20°-E	隅丸長方形	1.02	0.50	0.10	—	緩斜	平坦	自然	10.94	㊸貝、耳金1点(第317図5)、㊸石24点、焼石3点	SK181
39	W5b ₁	N-54°-E (楕円形)	(5.49)	4.63	—	—	—	—	自然	9.56	上部削平、底部黒色土だけ検出	SK182	
40	X4e ₀	N-78°-E	楕円形	(2.15)	(0.97)	0.64	—	緩斜	平坦	自然	9.00		SK186A
41	X4e ₀	N-83°-E	楕円形	3.85	(1.15)	0.44	—	緩斜	平坦	自然	8.50		SK186B
42	X4c ₃	N-55°-W	楕円形	1.45	1.25	0.12	—	緩斜	皿状	自然	9.78	㊸耳金1点(第317図6)	SK188A
43	X4c ₃	—	円形	1.52	1.50	0.18	—	緩斜	皿状	自然	9.68		SK188B

第7号不明遺構出土土器観察表 (第317図8)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	瓶子陶器	A 4.0 B (17.0)	胴部上位に最大径の膨らみを持って、肩が張る。頸部は外傾し、口頸部は首もとに凸帯が巡り、段を有する。頸部に1本と胴部上位に3本の、横位沈線が施されている。	粘土輪積み。 内・外面ナデ。 胴部内面には整形時の指頭痕が目立つ。外面に灰釉が施されている。	(胎土) 灰白色 (釉) オリーブ黄色 (焼成) 普通	P55 50% 胴部内面に煤付着 覆土 瀬戸焼

第27号不明遺構出土古銭一覧表 (第317図4)

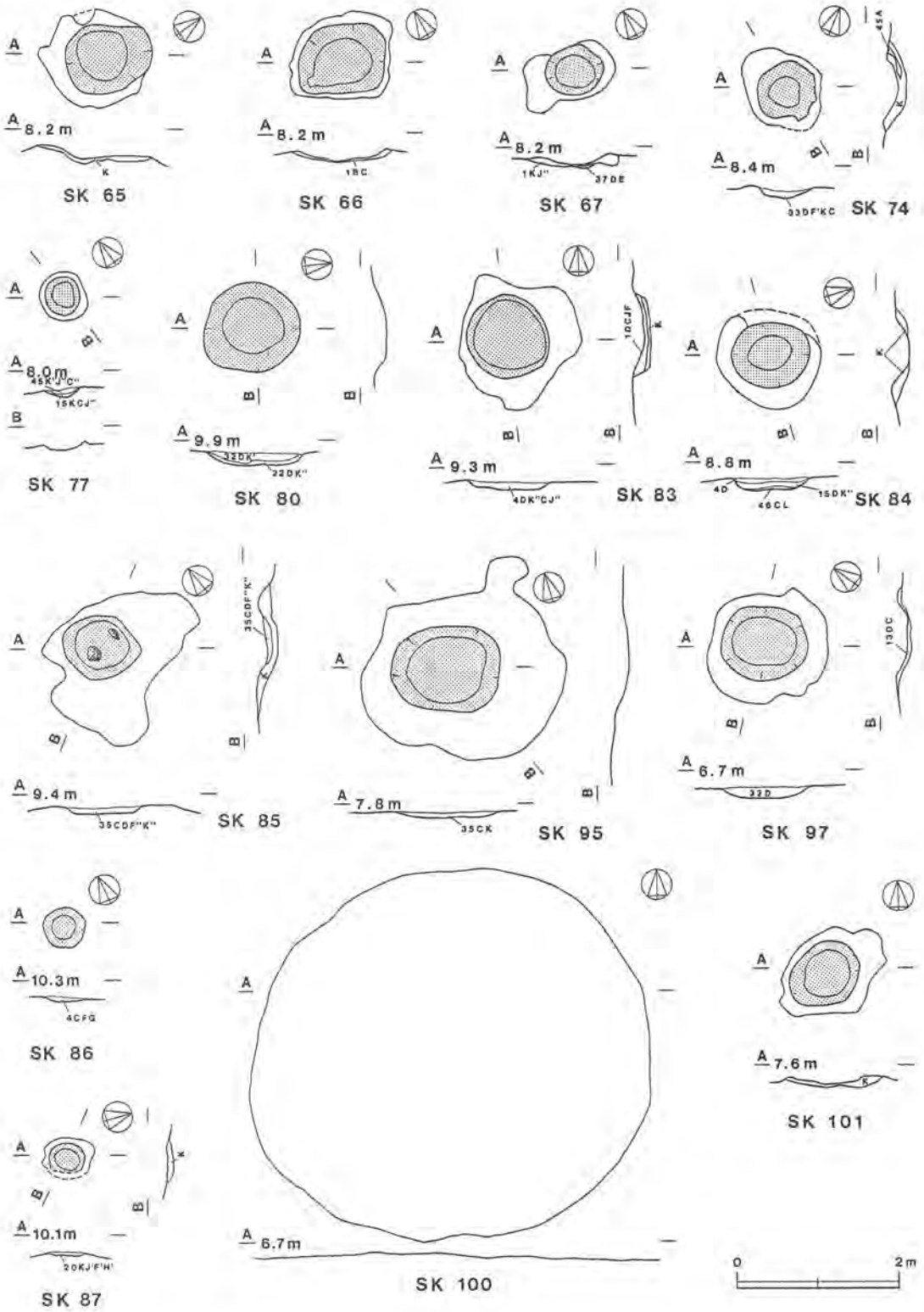
図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	旧出土地点	備考
4	至大通寶	1310	元	第82号土坑	M67

第38・42号不明遺構出土鉄製品一覧表 (第317図5・6)

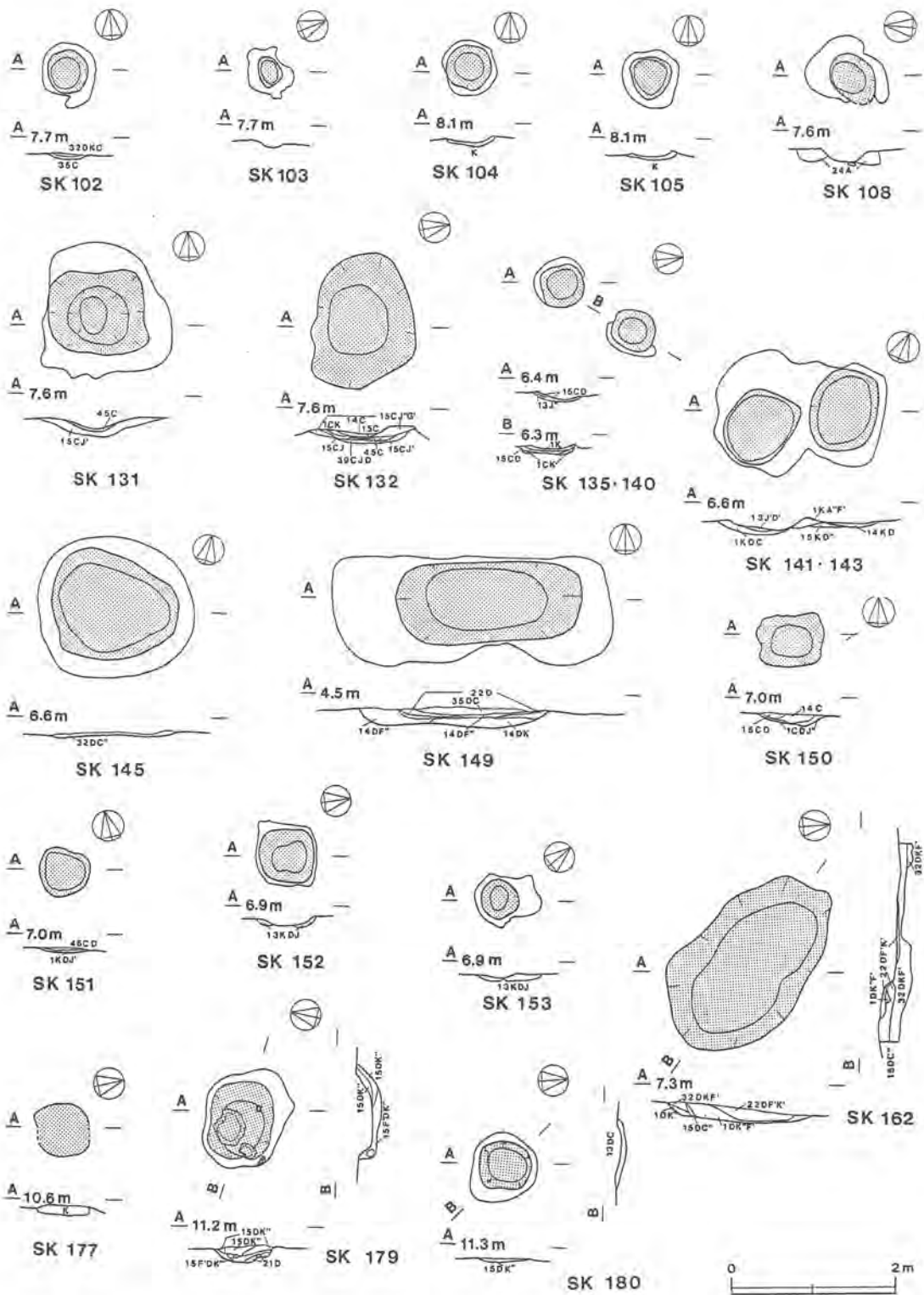
図版番号	名称	法量				旧出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
5	耳金	7.9	0.7	0.6	31.4	第181号土坑	M14 断面正方形,両端部折れ曲がる。
6	耳金	9.1	0.8	0.6	40.1	第188号土坑	M15 断面長方形,両端部折れ曲がる。

第36号不明遺構出土土器観察表 (第317図9~12)

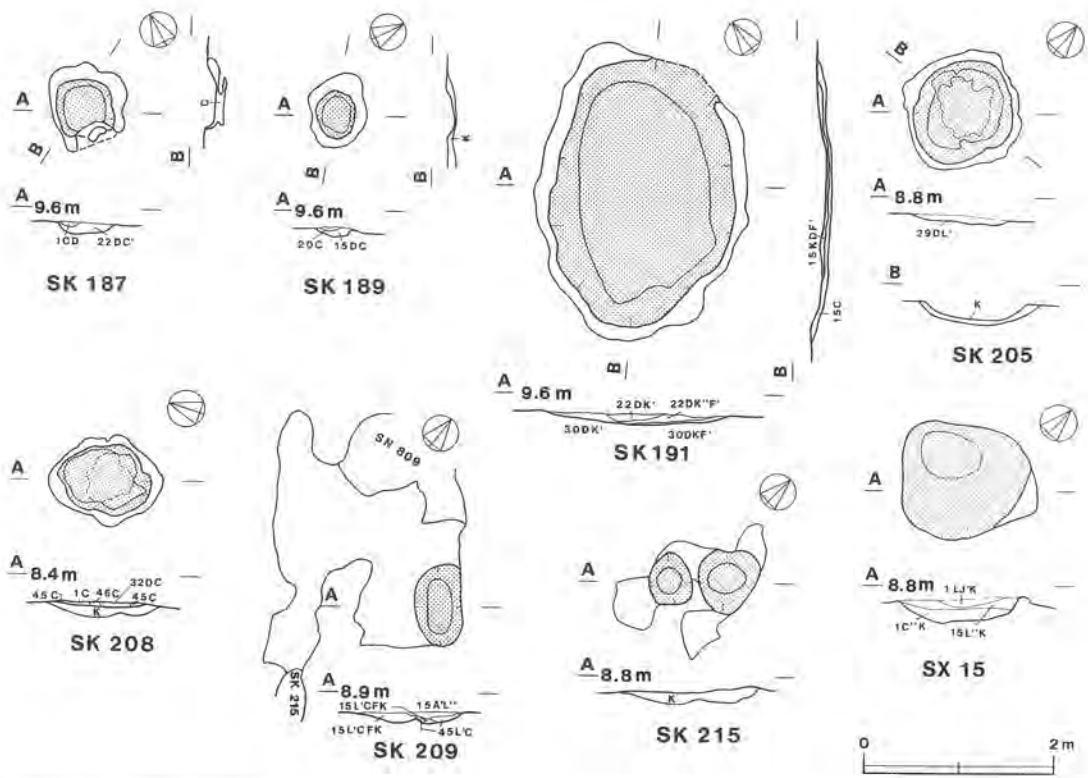
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	土師質土器 皿	A 10.6	平底で、底部内面はやや凸凹している。体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア・石英・パミス にふい赤褐色 普通	P15 100% 口縁部に煤付着 覆土
		B 2.9				
		C 5.4				
10	土師質土器 皿	A 10.6	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P16 80% 覆土
		B 2.8				
		C 4.8				
11	土師質土器 皿	A 10.0	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア・パミス 赤褐色 普通	P17 80% 覆土
		B 2.9				
		C 5.0				
12	土師質土器 皿	A 10.2	平底で、底部内面中央が窪む。体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P18 70% 覆土
		B 2.6				
		C 5.2				



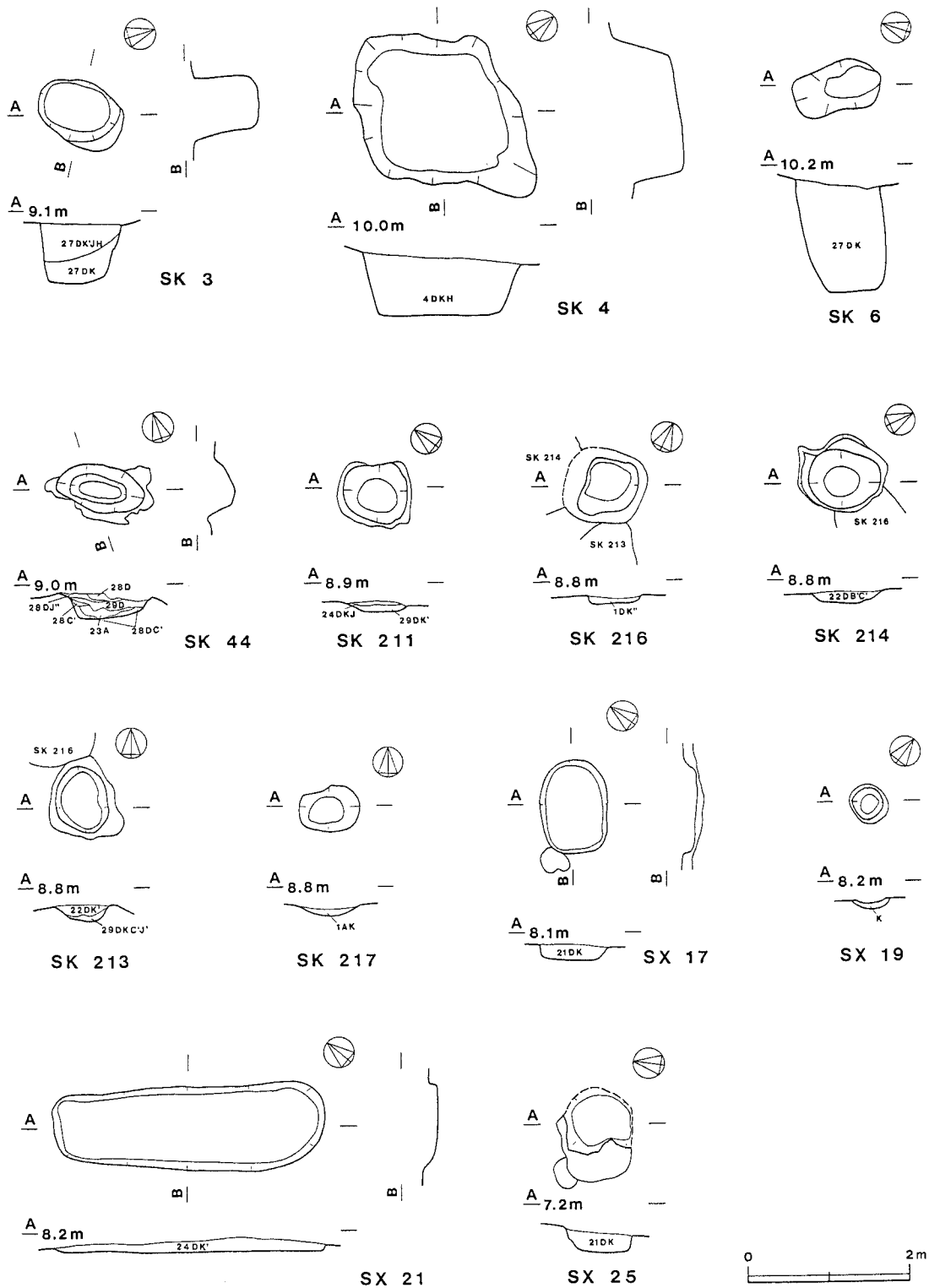
第309图 炉迹实测图(1)



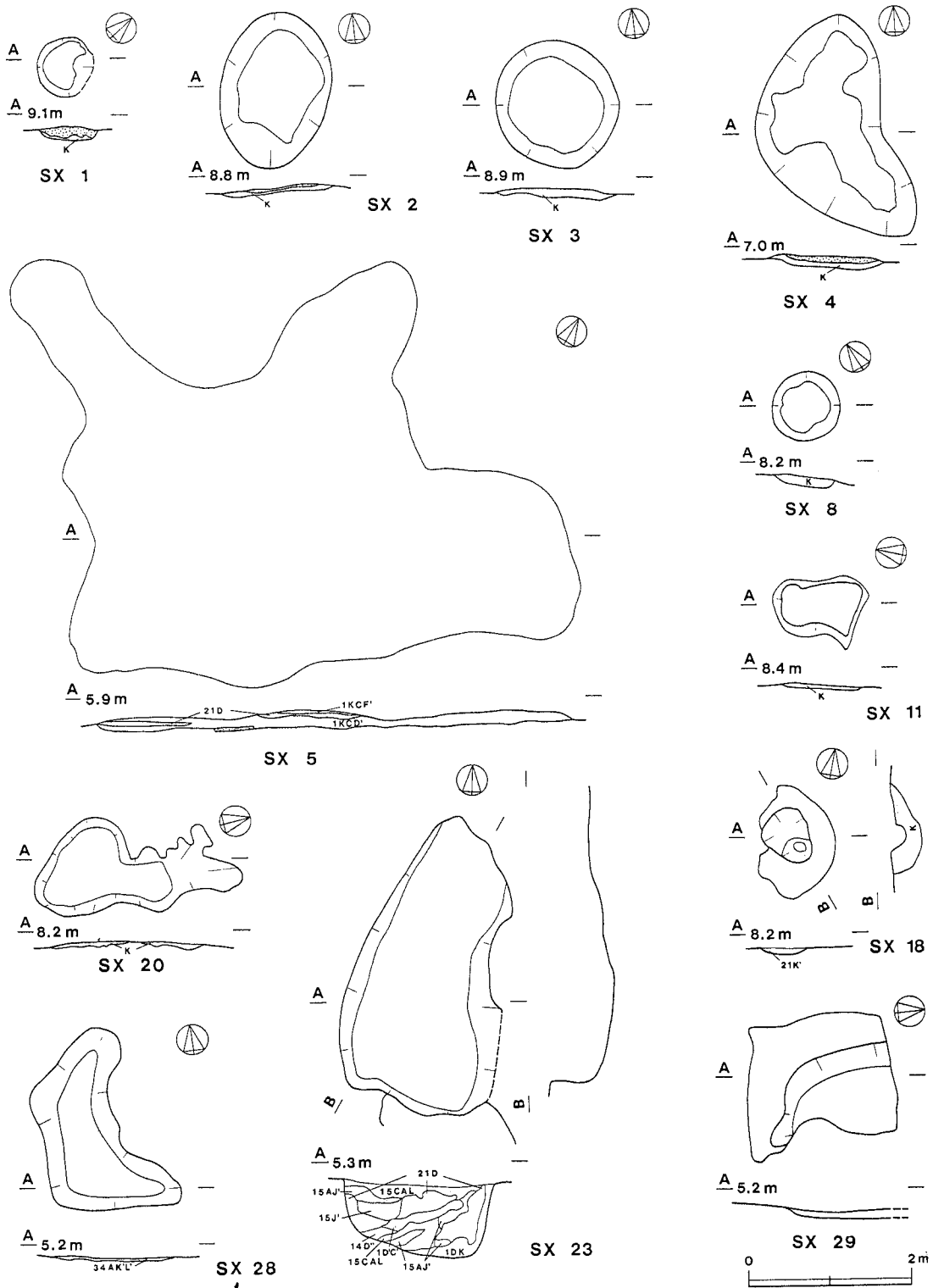
第310图 炉跡実測図(2)



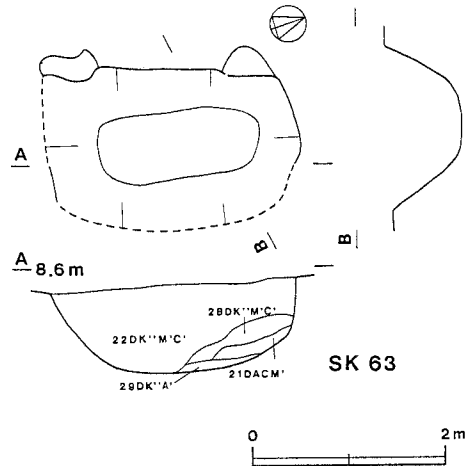
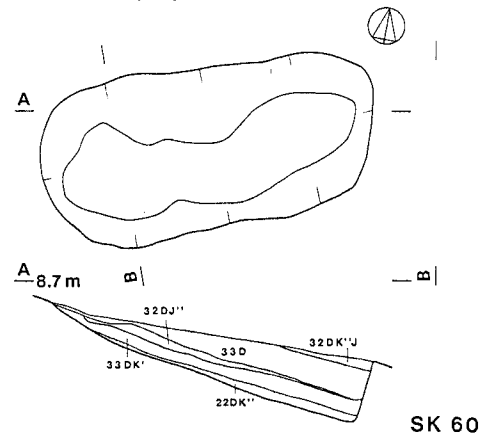
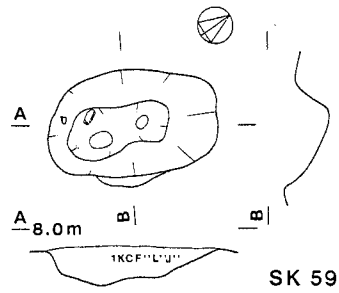
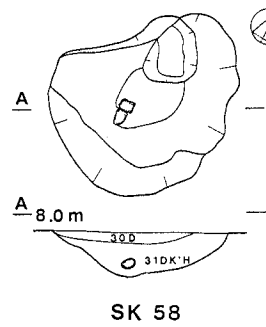
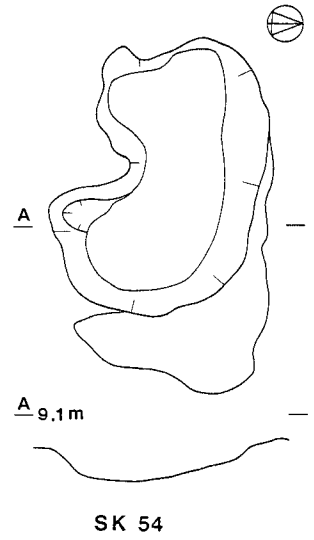
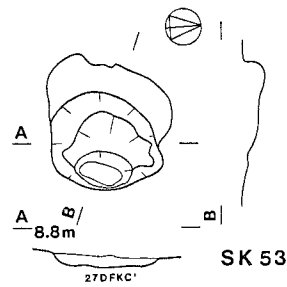
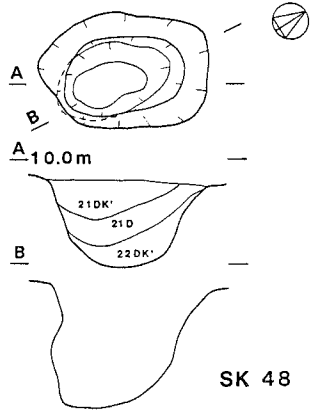
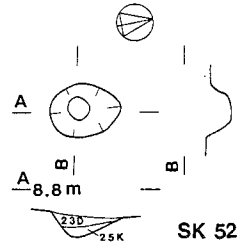
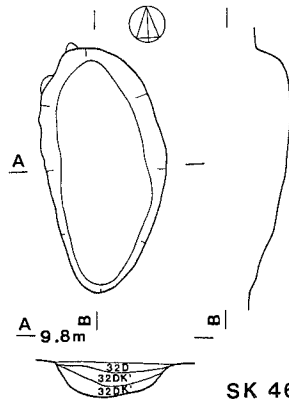
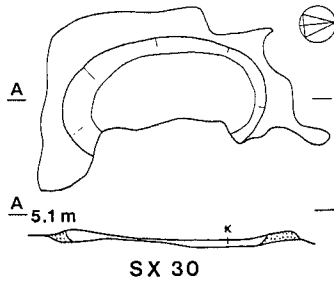
第311图 炉跡実測図(3)



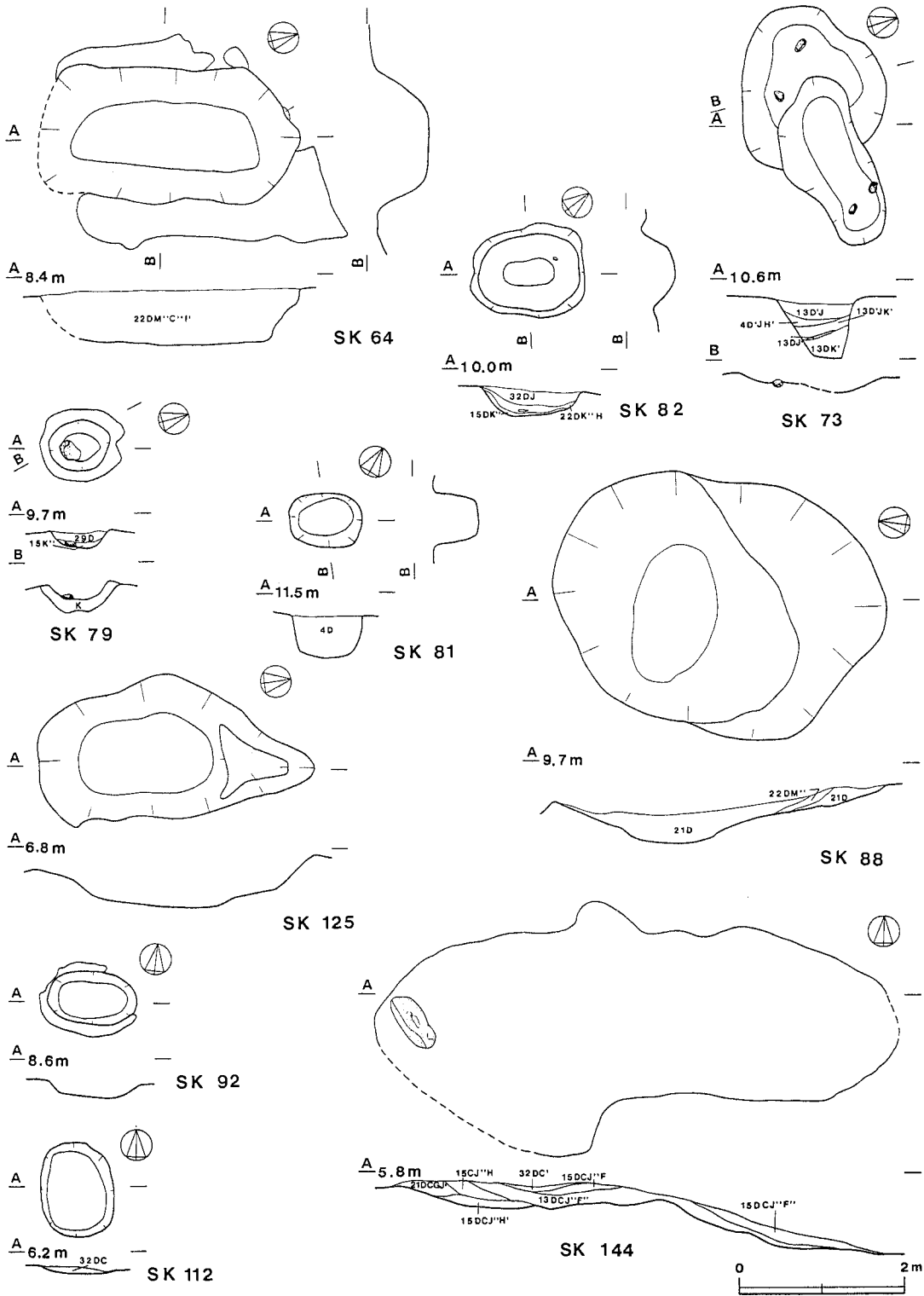
第312图 土坑实测图



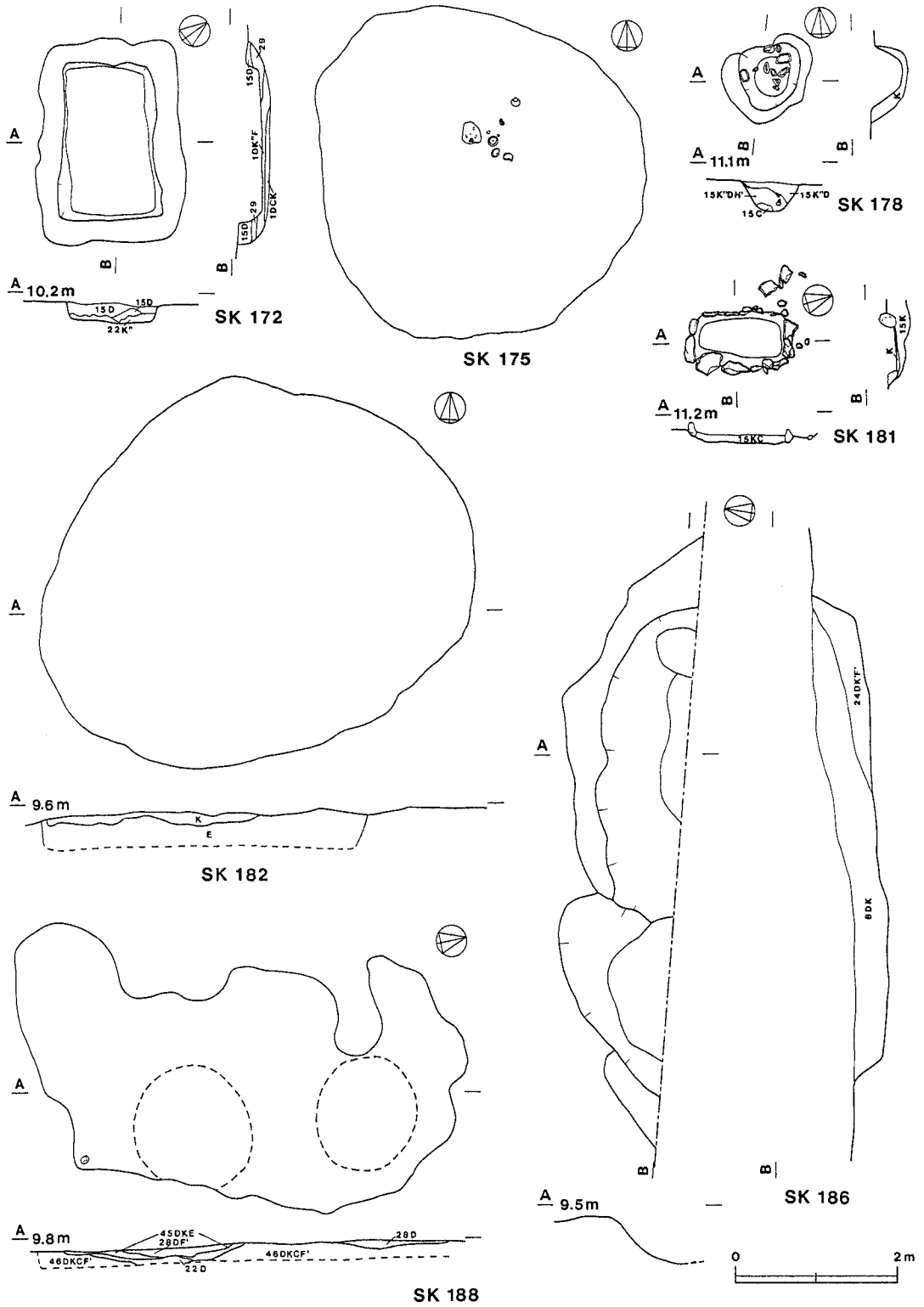
第313図 不明遺構実測図(1)



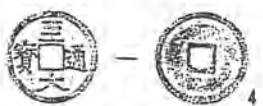
第314図 不明遺構実測図(2)



第315図 不明遺構実測図(3)



第316図 不明遺構実測図(4)



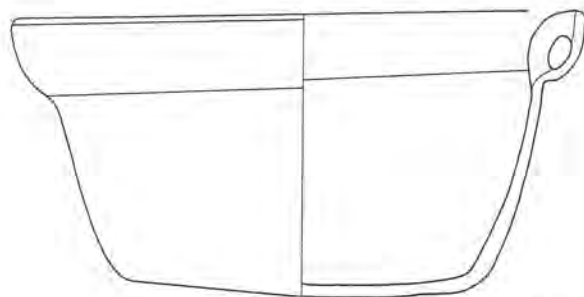
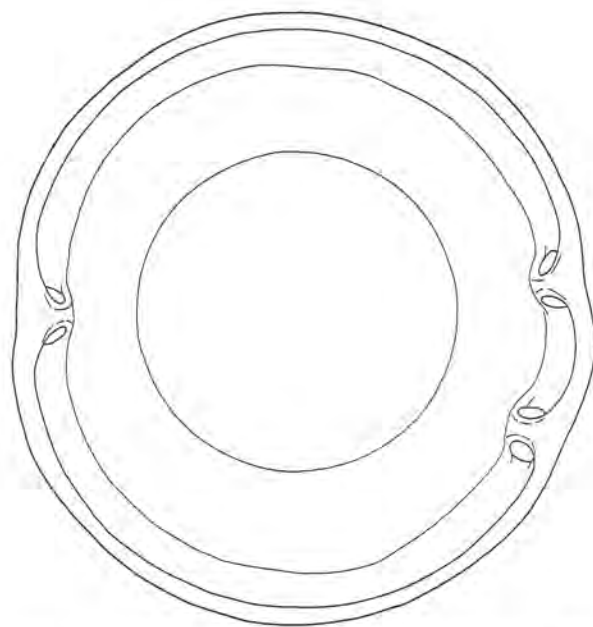
1~4 S=1/2



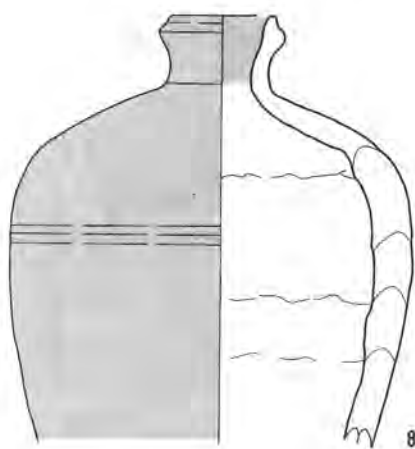
5



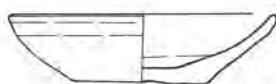
6



7 S=1/4



8



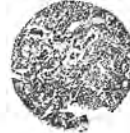
9



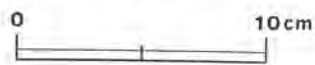
10



11



12



第317図 炉・土坑・不明遺構出土遺物実測・拓影図

第5節 遺構外出土遺物

当遺跡からは、遺構に伴わない土器・陶磁器、石製品（石臼・砥石・石塔）、鉄製品（鎌・刀・刀装具・吊金具・耳金）、古銭、土製品（管状土錘）等が表採、トレンチ及びグリッドから出土している。これらの遺物について、拓影図、実測図を掲載し、説明を加えていきたい。

1 土器・陶磁器

(1) 土師質土器（第318図1～12）

1～12はF1区、F3区、G1e₀区、G2a₀区、H1d₀区、H1f₀区、S3i₄区出土及び表採されたものである。遺構外出土の土師質土器は、口径値から大形のもの（口径が8cm以上12cm未満、1・2・4・8・9～12）と小形のもの（口径が5cm以上8cm未満、3・5～7）に大別することができ、器種はすべて皿形である。器形をみると、平底で、体部が内彎気味に開くもの（1・2・12）と体部が直線的に開くもの（3～11）とがあり、口唇部はいずれも丸くおさまられている。製作技法は、すべて轆轤成形であり、底部は回転糸切りである。体部は水挽き成形後に横ナデ整形が施されている。これらは、15～16世紀頃に位置づけられるものと思われる。

(2) 内耳形土器（第318・319図13～17）

13～17はL3f₁区からM2a₁区のトレンチ、F1a₀区、M3a₅区、I1区出土及び表採されたものである。内耳形土器は、平底で、体部が直線的に外傾して立ち上がるもの（13・14）と、体部が内彎気味に立ち上がるもの（15～17）とがあり、いずれも口縁部は外反し、頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は、1～3か所付いている。体部外面に煤が付着していることから、土鍋として使用していたものと考えられる。これらは、15世紀頃に位置づけられるものと思われる。

(3) 陶磁器（第320～322図18～38）

18～38はH2区、L2区、M2区、H2a₅区、H2e₇区、H3e₂区、H3f₁区、G2i₀区、G3j₁区、J2f₄区、J2e₃区、H2j₀区、F2d₅区、T5h₉区出土及び表採されたものである。陶器は徳利、甕、皿、碗、播鉢、壺、おろし皿、香炉、筒形容器である。渡来品はなく、国内の主に瀬戸・常滑産である。21～33は瀬戸産の碗（32）、皿（21～26）、香炉（27・28）、おろし皿（29・30）、筒形容器（31）、直縁大皿（32）、折縁深皿（33）で、18と19は常滑産の甕、20も常滑産の壺で、多くが瀬戸焼である。瀬戸焼の器種の中で皿類が最も多くみられ、14世紀から15世紀頃に位置づけられるものと思われる。常滑焼も15世紀頃に位置づけられるものと思われる。その他、34の備前焼の播鉢、35の美濃焼の徳利等が出土している。磁器は、37の徳利は切込焼（宮城県）、36の碗は伊万里焼である。38の香炉の産地は不明である。35～37は18世紀初めごろに位置づけられるものと思われる。

(4) 瓦質土器（第322図39）

39は香炉で、G1e₉区から出土している。

(5) 押印文様をもつ土器 (第322図1～13)

陶器片や瓦質土器片で、押印文様をもつものが13点出土している。いずれも火鉢や香炉である。押印文様は、鎌倉時代末から室町時代にかけて装飾的なものとして押印されたもので、家紋、文字及び草花などの文様を表現している。これら13点にも、印花文・三つ巴・菱形文・格子目文・S字文・梅花文・菊花文などの文様がそれぞれ陶印あるいは木印で押されている。

2 金属製品

金属製品は煙管1点、短刀1点、小刀2点、短剣1点、刀装具7点、筭1点、鎌1点、不明鉄製品1点、吊金具2点、耳金2点が出土している。

(1) 煙管 (第323図1)

1は調査区のM3区から表採されたもので、雁首と吸口に分けられ、一連のものではない。雁首は、火皿・脂返し部を残し、羅字に近い部分は欠損している。火皿の口径1.7cmで、脂返しは大きく彎曲している。吸口は現存長5.9cm、最大径1.0cmである。雁首と吸口ともに銅製である。季刊考古学第13号 古泉 弘氏(東京都教育委員会)の編年によると、雁首は17世紀前半で、吸口は17世紀後半に位置づけられると思われる。

(2) 短刀・小刀・短剣 (第323図2～5)

2は短刀で、調査区のG1i₉区から出土している。茎部の一部が欠損している。残存している長さは35.7cmで、刀身長は26.4cm、刀身幅は先幅1.9cm、元幅2.1cmである。茎長は9.3cm、茎幅は2.1cmで同一幅である。造りは、平造りで、棟は角棟である。鋒は、「フクラ」が付き、反りは無い。棟関、刃関は茎部に柄の木質の一部が遺存しているため、明確にとらえることができなかった。茎尻は栗尻である。茎部中央付近には、一辺0.4cmの方形状の目釘穴が一個確かめられる。本短刀は、室町時代ごろに位置づけられるものと思われる。3・4は小刀で、H2a₈区とH2d₂区から表採されたものである。3・4は小刀で、刀身の先端と茎部の一部を欠損し、残存している長さは12.5・12.1cmである。刀身長は10.5・7.8cm、刀身幅は0.3・0.5cm、刀関幅0.5・0.3cmである。残存している茎長は2.0・4.3cm、3の茎幅は0.5cm、4の茎幅は先幅1.1cm、元幅0.8cmである。両小刀は反りが無く、棟は直線で、棟関は無く、茎に至る。刃関は刃部端から外彎気味に茎部に至る。5は短剣で、H2区から表採されたものである。茎部は一部欠損している。残存している長さは16.4cmである。刀身長は10.0cm、刀身幅は0.8cmで、同一幅である。関は両関で、刃部からほぼ160°の角度で0.6cmの長さを持って茎に至っている。残存している茎長は6.4cmで、茎幅は0.9cmで同一幅である。造りは、剣形で偏平な形状で反りが無く、中央部に鑄をもっている。目釘穴は、認められない。

(3) 刀装具 [足金物, 目貫, 大切羽, 筭] (第323図6~13)

6~10は足金物, 11は目貫, 12は大切羽, 13は筭で, いずれも遺構外から出土したものである。6~10はいずれも表採である。これらは刀装具の一部である。6~8は足金物で残存状態が良く, 法量は最大長4.9~5.8cm, 最大幅3.2~3.5cm, 最大厚0.2~0.3cmである。6にはハート形の透かし, 7には縦方向に二筋の線刻が施されている。8は二の足である。9・10も銅製で, 足金物である。法量は最大長2.2・2.4cm, 最大幅1.3cm, 最大厚0.3cmである。11は目貫で調査区のG2b₆区から出土している。銅製で, 法量は最大長4.4cm, 最大幅1.3cm, 最大厚0.5cmである。12は大切羽で表採である。銅製で, 法量は最大長5.0cm, 最大幅2.8cm, 最大厚0.1cmで, 線刻されている。13は筭で調査区のH2a₄区から出土している。銅製で, 法量は最大長11.0cm, 最大幅1.3cm, 最大厚0.2cmで穂先の部分が欠損している。胴部の地板には菱形文が施されている。

(4) 鎌・鍵 (第323図14・15)

14は鎌で, H2a₀区から表採されたものである。刃が一部欠損しており, 残存している最大長14.2cm, 最大幅4.4cm, 最大厚0.4cmである。15は鍵で, V6b₁区から表採されたものである。法量は最大長7.9cm, 最大幅6.5cm, 最大厚3.3cmである。腐食がはげしく, 形をとどめるだけである。

(5) 不明鉄製品 (第323図16)

16は「U」形を呈し, 法量は最大長54.5cm, 最大厚1.8cmである。性格等は不明である。

(6) 吊金具 (第323図17・18)

17・18は「S」字形を呈した鉄製の吊金具で, 下部を土釜にかけ, 上部を縄で小渡りにつるし, 釜の水平を保つために使用されるものである。調査区のG2i₉区とH2h₈区から表採されたものである。残存している最大長は8.9・10.9cm, 最大厚0.6cmである。

(7) 耳金 (第323図19・20)

19・20は「コ」字形をした鉄製の耳金で, 土釜の四方部にはめこみ, 釜をささえるために使用されたものである。調査区のK3j₃区とR5c₄区で表採されたものである。残存している最大長は7.8・9.6cm, 最大厚は0.5・0.6cmである。

3 石製品

石製品は, 石臼12点, 砥石5点, 硯1点, 五輪塔2点, 宝篋印塔1点, 球石1点が出土している。

(1) 石臼 (第324~327図1~12)

石臼は粉挽き臼と茶挽き臼に分類できる。1~3は茶挽き臼で, 1・2は表採されたものである。3はF1a₀区から出土している。1~3は茶挽き臼の下臼の破片で, 完存率は30~50%である。推定直径は21.0~28.0cm, 現存する高さは7.3~8.2cm, ふくみは31.0~33.0cm, 重量は1,400~1,

900gを測る。1・2の芯穴の直径は1.8・2.2cmである。石質は1・2が砂岩、3が安山岩である。4～11は粉挽き臼で、4～11は表採されたものである。その他(5～10)は、H2a₅区・H2b₁区・H3g₁区・I2a₇区・X5c₃・c₄区から出土している。6・9～11は粉挽き臼の下臼で、完存率30～80%である。推定直径約27.8～35.7cm、現存する厚さは8.0～16.2cm、ふくみ0.5～3.0cm、芯穴の直径2.8～3.4cm、重量3,500～18,700gを測る。石質は9が砂岩、6・10・11が安山岩である。その他(4・5・7・8)は、粉挽き臼の上臼で、完存率30～90%である。推定直径約28.4～30.1cm、現存する厚さ9.8～10.8cm・上縁厚0.8～2.8cm、上縁幅2.6～3.4cm、重量4,750～10,800gを測る。4・7の挽き手穴の径は方形状(1.7×1.8・2.0×2.3cm)を呈し、横方向に4.0・4.5cmの深さに穿たれている。8の挽き手穴の直径は2.7cmの円形を呈し、横方向に9.0cmの深さに穿たれている。4・5・7・8の供給口の径は2.3～3.1cmの円形状を呈し、縦方向に6.3～9.0cmの深さに穿たれている。石質は4・5・7が砂岩、6が安山岩である。4・5・7・11の磨り合わせ面には、1分画に5～8の溝が刻まれている。分画数は不明である。12は茶挽き臼の上臼の破片で、推定直径19.8cm、現存する高さ10.0cm、上縁高1.3cm、上縁幅2.3cm、重量2,700gを測る。芯穴の推定直径は2.7cmである。挽き手穴の径は方形状(1.7×1.7cm)を呈し、横方向に3.2cmの深さに穿たれている。石質は砂岩である。磨り合わせ面には1分画に8～12の溝が刻まれている。残存している分画数は4画である。

(2) 五輪塔(第328図1・2)

五輪塔は、空・風・火・水・地輪からなる石造物で、大日如来を本尊とする供養塔として発達したとされており、その初源は平安時代末期と考えられている。

当遺跡からは、遺構外から水輪2点(第328図1・2)が表採及び調査区のM3g₁区から出土している。1・2の水輪は球体を呈し、上下面はほぼ平坦で、安定形状を留めている。出土した五輪塔の石質は、砂岩の比較的加工しやすい石材を使用している。

(3) 宝篋印塔(第328図3)

宝篋印塔は、相輪・笠・塔身・基礎からなる石造物で、鎌倉時代中期はじめからあらわれ、五輪塔と並んでわが国石塔の二大主流をなすといわれている。

当遺跡からは、基礎と考えられるもの1点(第328図3)が調査区のM2b₅区から出土している。上端に2段の段型を有し、側面は輪郭をもって二区に分けられている。石材は、花崗岩を使用している。

(4) 砥石・硯・球石(第330図1～7)

砥石は、調査区のH3a₂・a₅区、H3g₁区、J2e₄・e₀区の5か所から5点(第330図1～5)出土している。石質は全て凝灰岩質の砂岩である。

硯は、調査区のH2a₉区から1点(第330図6)出土している。石質は粘板岩である。

球石は、調査区の H2a₈区から 1 点 (第330図 7) 出土している。石質は流紋岩である。よく磨きあげられている。

4 古銭(第331・332図 1～44)

1～44は調査区の F1i₈区, F2e₇区, G1g₇区, G2e₅区, K3g₁区, H2e₃区, H2e₅区, H2f₉区, H2j₇区, I2f₅区, R5a₁区, R5b₂区, G2区, H1区, I1区, K1区出土及び表採されたものである。古銭は、唐銭 3 枚, 北宋銭28枚, 南宋銭 2 枚, 明銭 7 枚, 国内銭 4 枚で、北宋銭が半分以上を占めている。

5 土製品(第329図 1・2)

土製品は、管状土錘 2 点である。調査区の F1j₇区と G3a₄区から出土している。

6 骨製品(第329図 3)

3 は筭で、H2a₄区の覆土中から出土している。法量は、最大長14.1cm, 最大幅1.4cm, 最大厚0.2cmで、穂先の部分が欠損している。胴部の地板には片面に 1 条刻まれている。

遺構外出土鉄製品一覧表(第323図17～20)

図版 番号	名 称	法 量				出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
17	吊 金 具	10.9	1.1	0.6	62.9	G2i ₁ 区 表採	M22 断面長方形,下端部折れ曲がる。
18	吊 金 具	8.9	0.3	0.6	31.8	H2h ₅ 区 表採	M27 断面長方形,下端部折れ曲がる。
19	耳 金	7.8	2.1	0.6	102.2	K3j ₃ 区 表採	M29 断面長方形,上端部欠損。
20	耳 金	9.6	0.6	0.5	81.0	R5c ₄ 区 表採	M54 両端部折れ曲がる。

遺構外出土石塔一覧表(第328図 1～3)

図版 番号	名 称	法 量				石 質	出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)			
1	水 輪	16.5	15.7	10.9	2,250	砂 岩	M3g ₁ 区	Q8
2	水 輪	25.7	25.5	18.3	1,465	砂 岩	表 採	Q32
3	宝篋印塔	18.5	18.5	16.5	9,500	花 崗 岩	H2b ₅ 区	Q22

遺構外出土石製品一覧表(第330図1～7)

図版 番号	名 称	法 量				石 質	出土地点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)			
1	砥 石	7.1	3.8	0.7	33.5	砂 岩	H3a _s 区	Q18
2	砥 石	7.9	3.2	2.5	96.7	砂 岩	H3a ₂ 区	Q23
3	砥 石	8.3	3.2	1.5	48.7	砂 岩	H3g ₁ 区	Q24
4	砥 石	16.0	3.6	3.4	321.0	砂 岩	J 2e ₁ 区	Q27
5	砥 石	17.8	3.0	2.6	201.0	砂 岩	J 2e ₀ 区	Q28
6	硯	17.0	6.1	1.9	314.2	粘 板 岩	H2a _s 区	Q20
7	球 石	4.8	4.3	—	133.5	流 紋 岩	H2a _s 区	Q19 孔径0.6cm

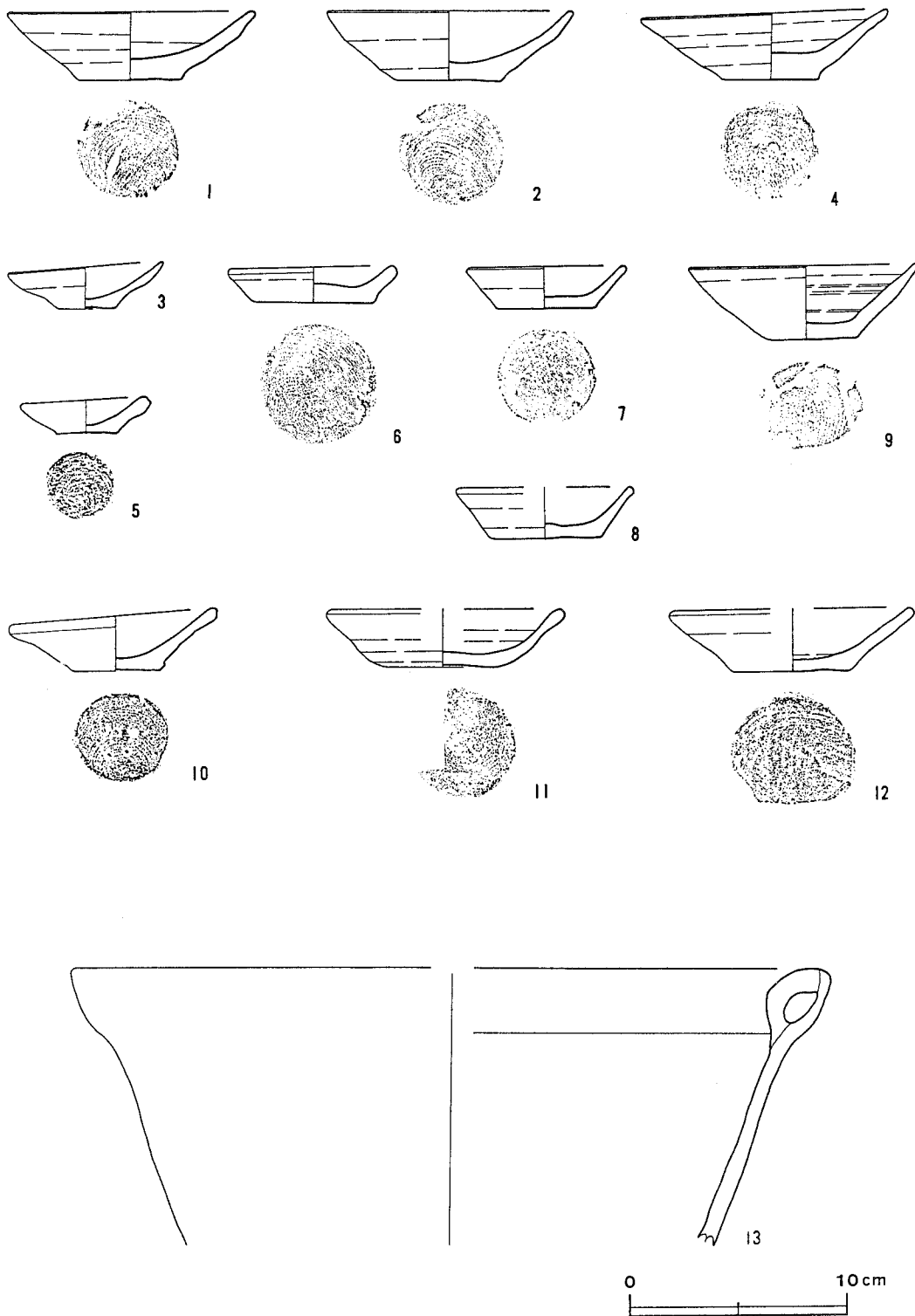
表 遺構外出土古銭一覧表(第331・332図1～44)

図版番号	鑄 名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備 考
1	慶 元 通 寶	1195	南 宋	土砂捨場	M62
2	皇 宋 通 寶	1039	北 宋	土砂捨場	M63
3	元 豊 通 寶	1078	北 宋	表 採	M64
4	天 聖 元 宝	1023	北 宋	表 採	M66
5	永 樂 通 寶	1587	日 本	G2区 表採	M70
6	祥 符 元 寶	1008	北 宋	H1区 表採	M71
7	元 祐 通 寶	1086	北 宋	F1i _s 区	M107
8	洪 武 通 寶	1368	明	F1i _s 区	M108
9	聖 宋 元 宝	1101	北 宋	F2e ₇ 区	M109
10	政 和 通 寶	1111	北 宋	F2e ₇ 区	M110
11	元 祐 通 寶	1086	北 宋	G1g ₇ 区	M111
12	政 和 通 寶	1111	北 宋	G1g ₇ 区	M112
13	祥 符 通 寶	1009	北 宋	G2e _s 区	M113
14	元 祐 通 寶	1086	北 宋	K3g ₁ 区	M114
15	洪 武 通 寶	1368	明	H2e _s 区	M120
16	元 祐 通 寶	1086	北 宋	H2e _s 区	M124
17	淳 化 元 宝	990	北 宋	H2e _s 区	M125
18	聖 宋 元 宝	1101	北 宋	H2f ₉ 区	M126
19	開 元 通 寶	621	唐	H2f ₉ 区	M127
20	皇 宋 通 寶	1039	北 宋	H2f ₉ 区	M128

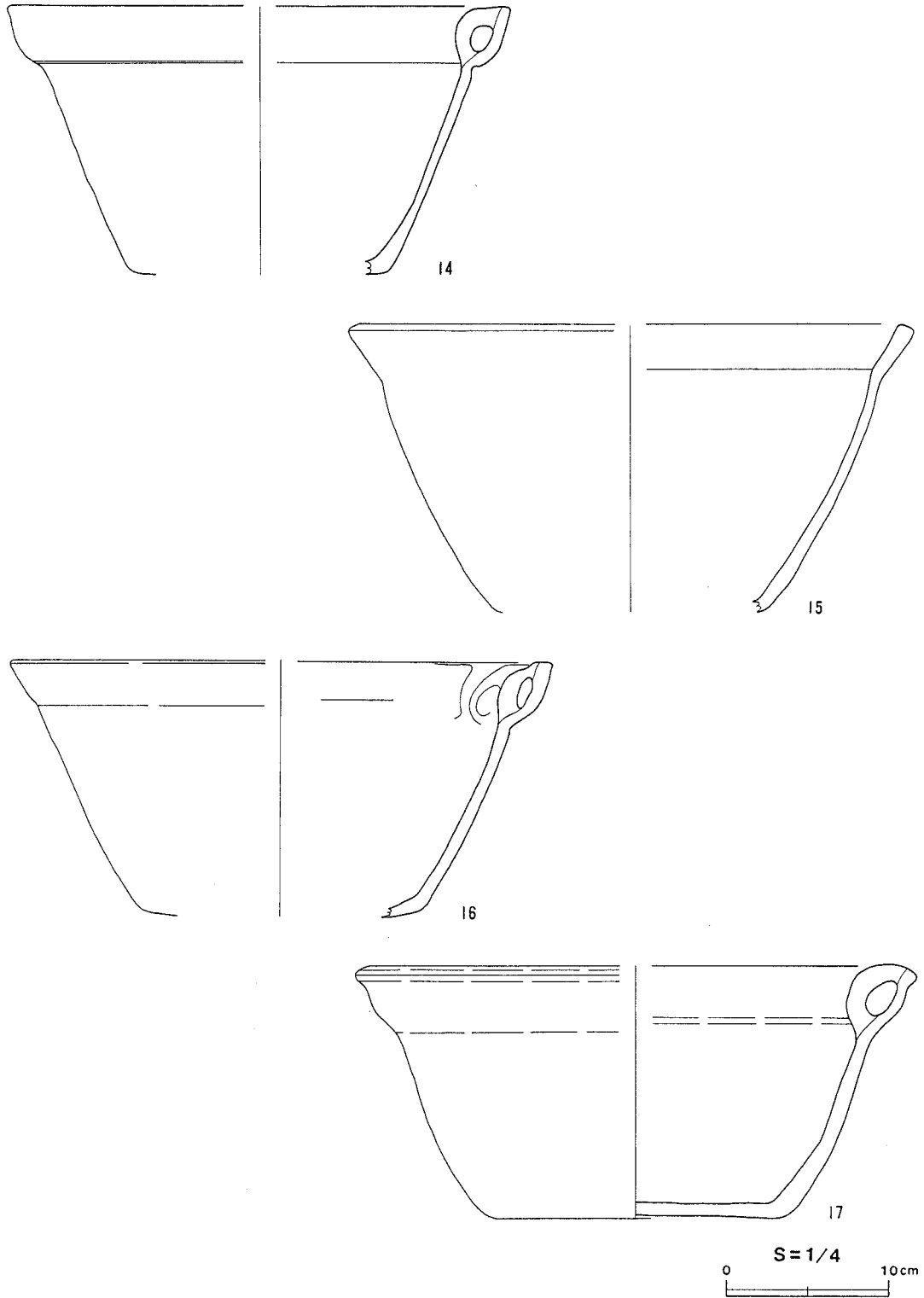
図版番号	鑄名	初鑄年(西曆)	鑄造地名	出土地点	備考
21	開元通寶	621	唐	H2j ₇ 区	M131
22	皇宋通寶	1039	北宋	H2区 表採	M132
23	咸平元宝	998	北宋	I2f ₅ 区	M133
24	洪武通寶	1368	明	I1区 表採	M134
25	至道元宝	995	北宋	K1区 表採	M135
26	元豊通寶	1078	北宋	表採	M136
27	紹聖元宝	1094	北宋	表採	M137
28	永樂通寶	1587	北宋	表採	M138
29	開元通寶	621	唐	表採	M139
30	天聖元宝	1023	北宋	表採	M140
31	寛永通寶	1668	日本	表採	M141
32	寛永通寶	1668	日本	表採	M142
33	皇宋通寶	1039	北宋	表採	M143
34	至和元宝	1054	北宋	表採	M144
35	熙寧元宝	1068	北宋	表採	M145
36	政和通寶	1111	北宋	表採	M146
37	嘉定通寶	1208	南宋	表採	M147
38	洪武通寶	1368	明	表採	M148
39	永樂通寶	1408	日本	表採	M149
40	天當保通寶百	1835	日本	表採	M150
41	寛永通寶	1636	日本	表採	M152
42	祥符元宝	1008	北宋	R5a ₁ 区	M153
43	皇宋通寶	1039	北宋	R5b ₂ 区	M154
44	洪武通寶	1368	明	表採	M155

遺構外出土製品一覽表(第329図1・2)

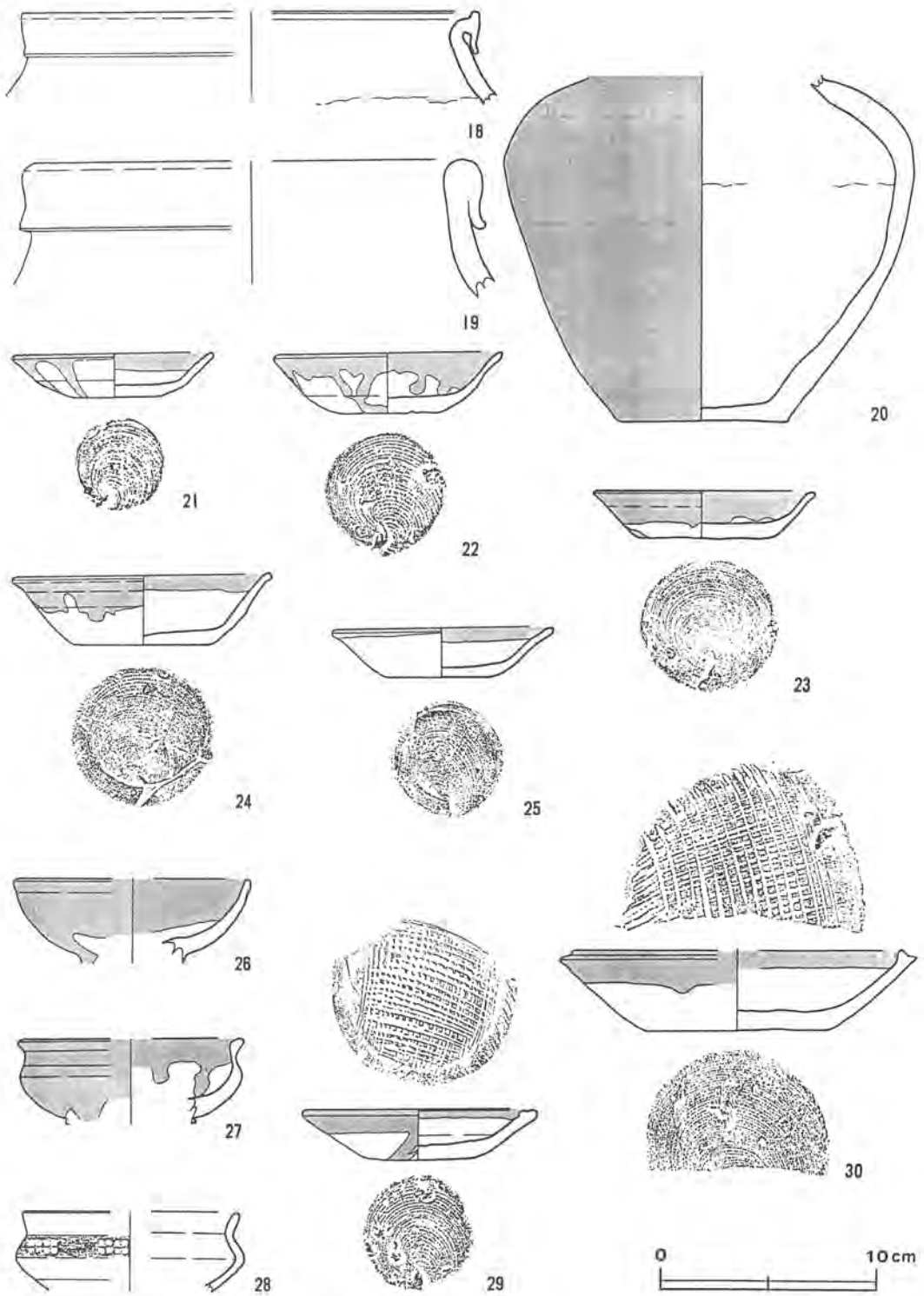
図版番号	名称	法 量					出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
1	管状土錘	3.9	3.4	1.2	2.2	45.9	F1j ₇ 区	DP2
2	管状土錘	5.2	2.0	0.7	1.3	21.4	G3a ₄ 区	DP3



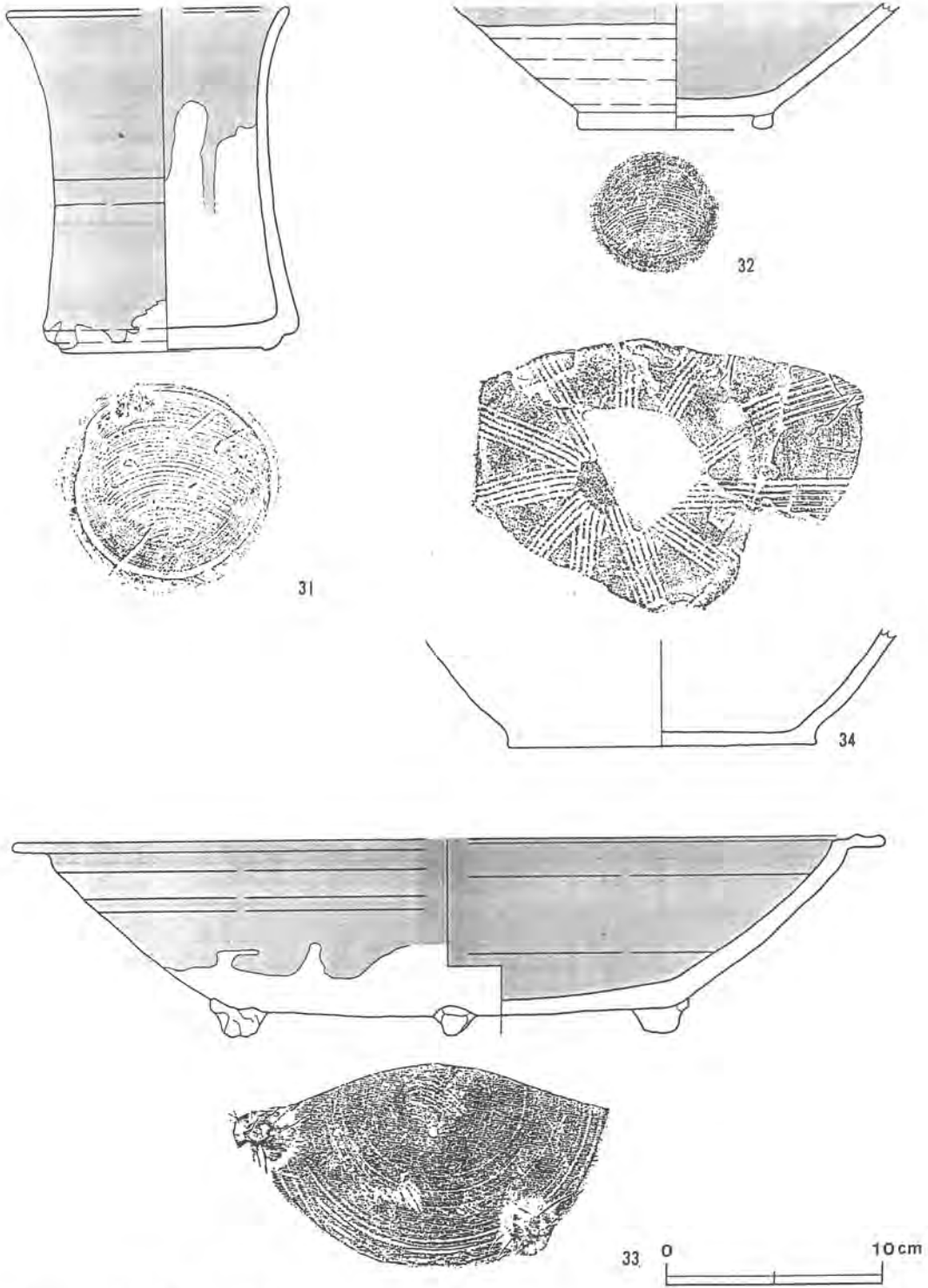
第318図 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



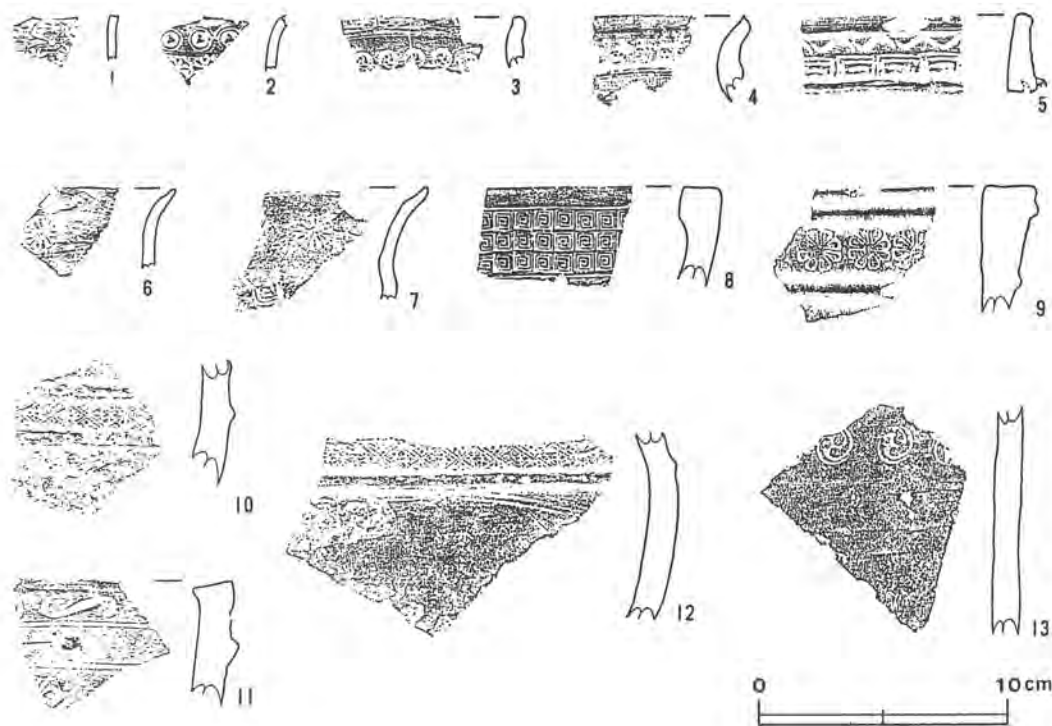
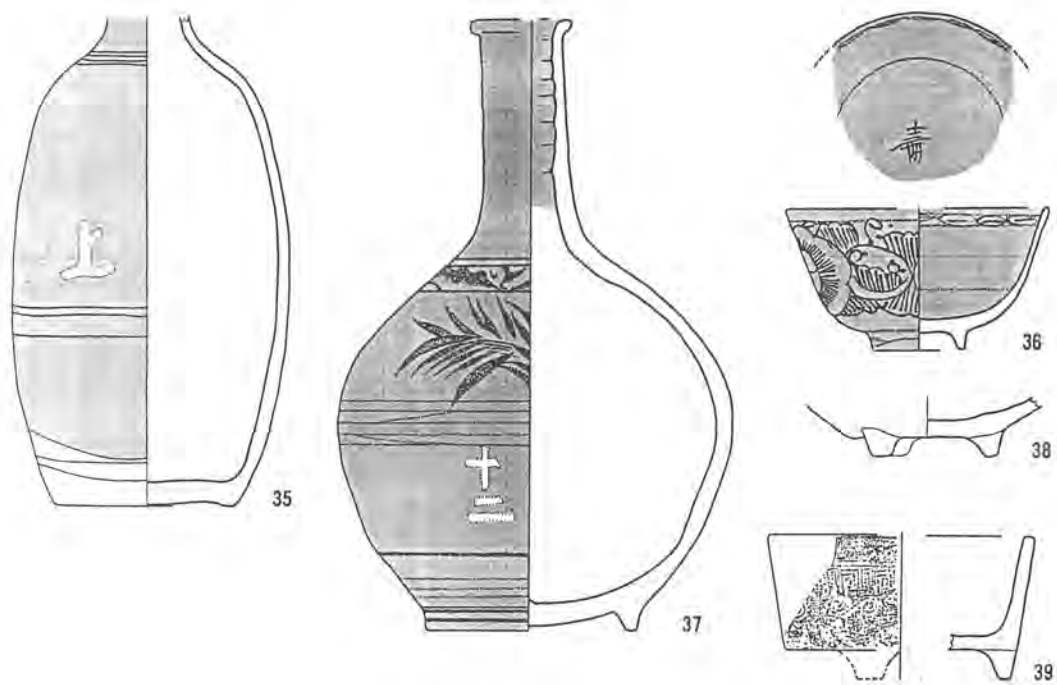
第319図 遺構外出土遺物実測図(2)



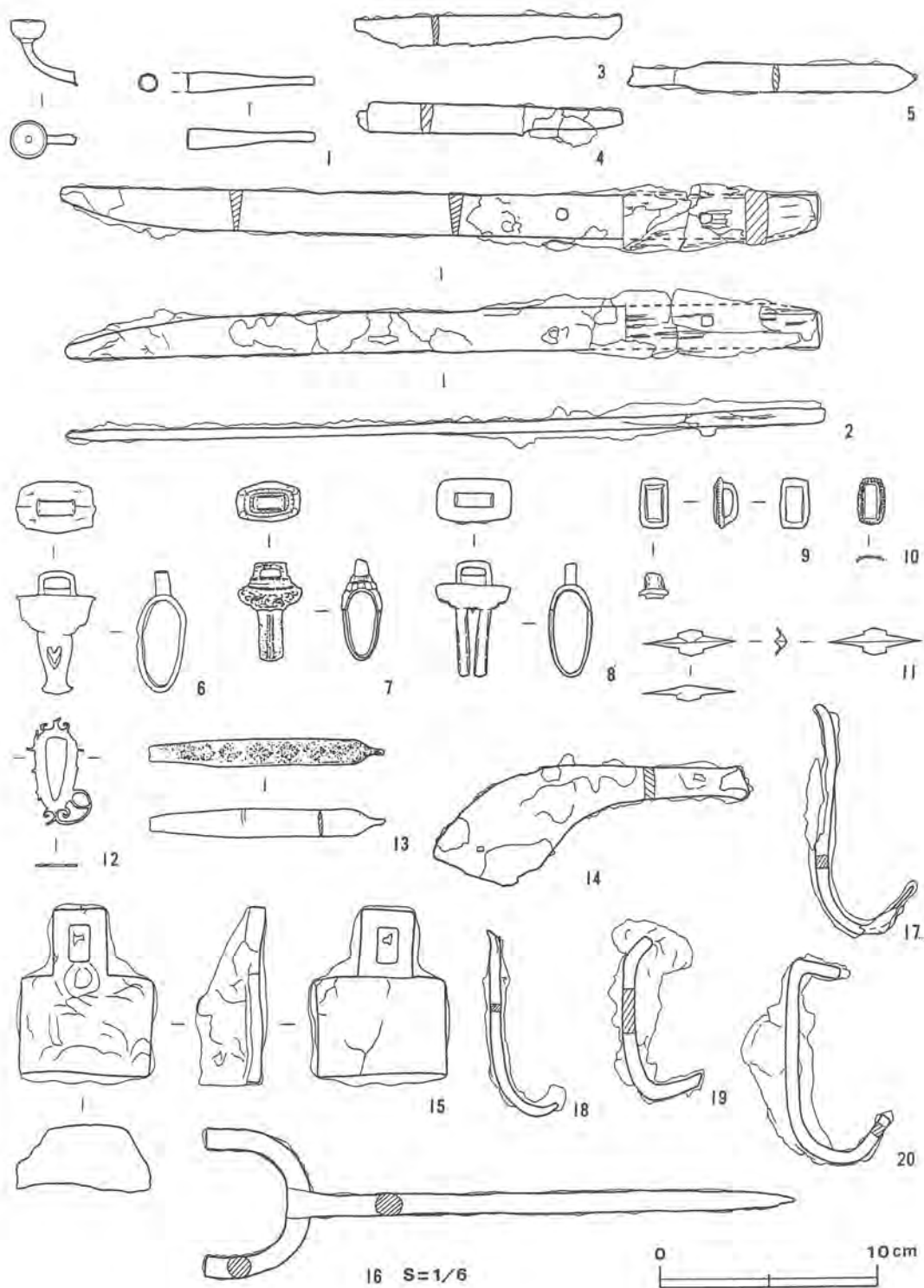
第320図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)



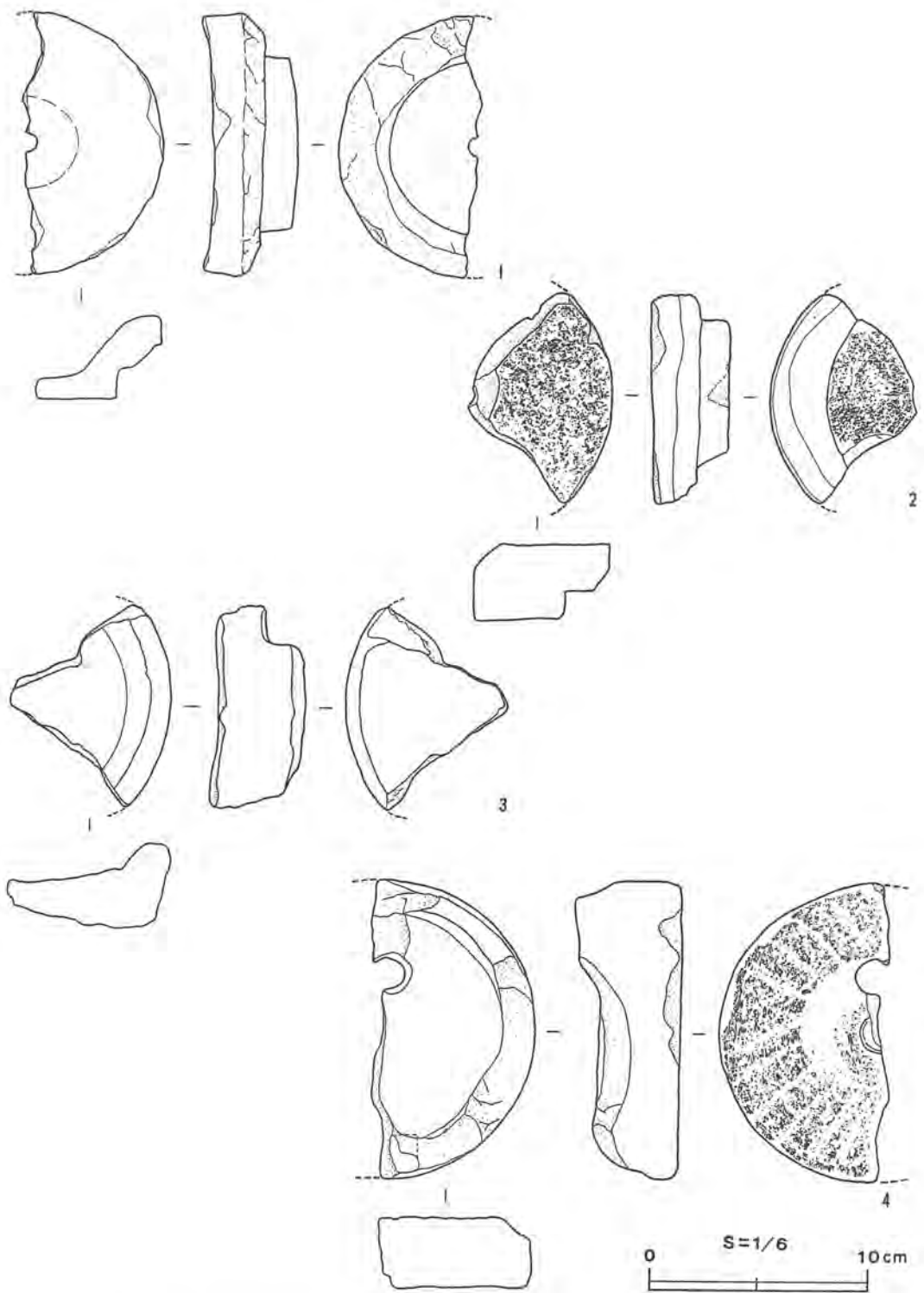
第321图 遺構外出土遺物実測・拓影图(4)



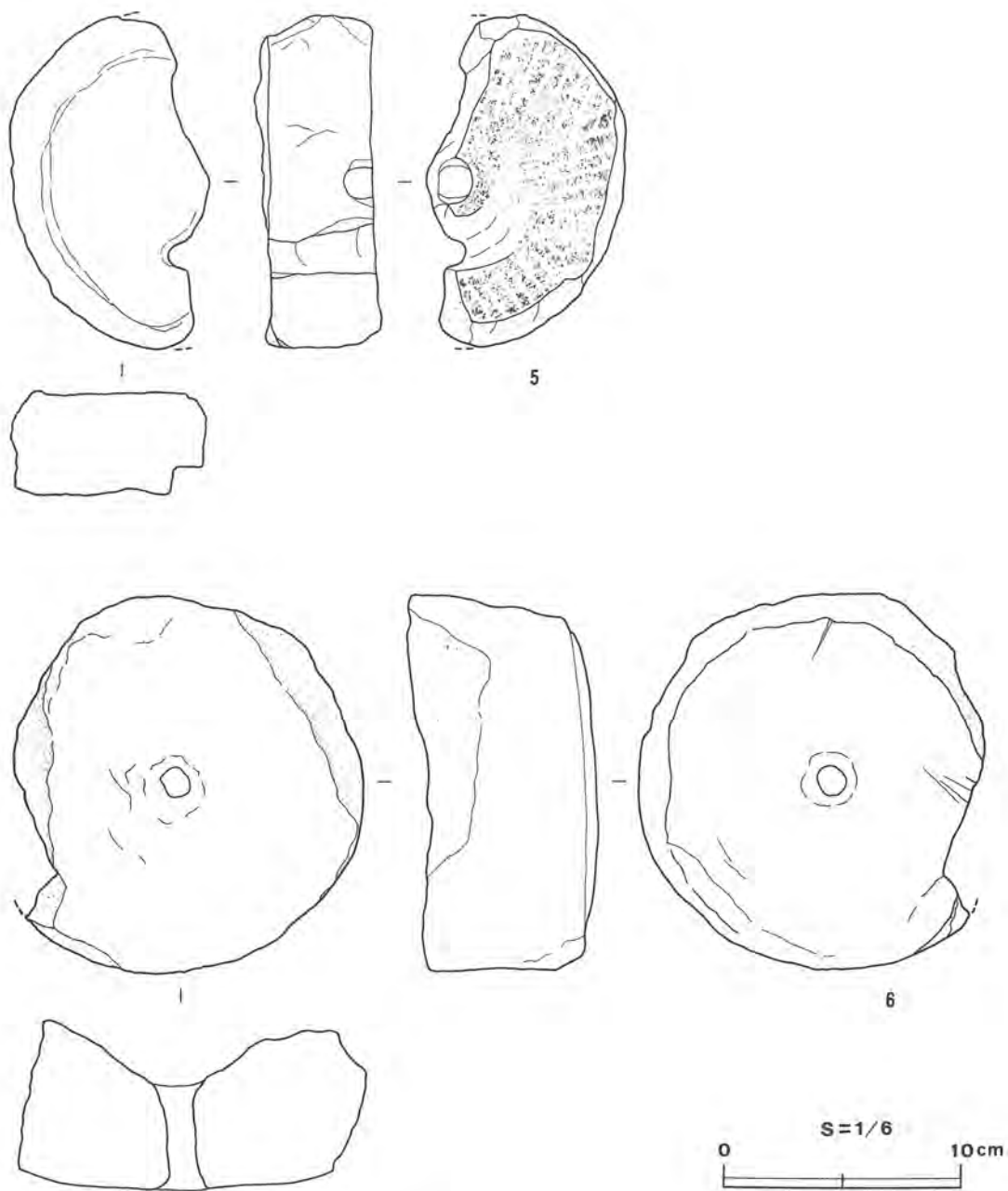
第322図 遺構外出土遺物実測・拓影図(5)



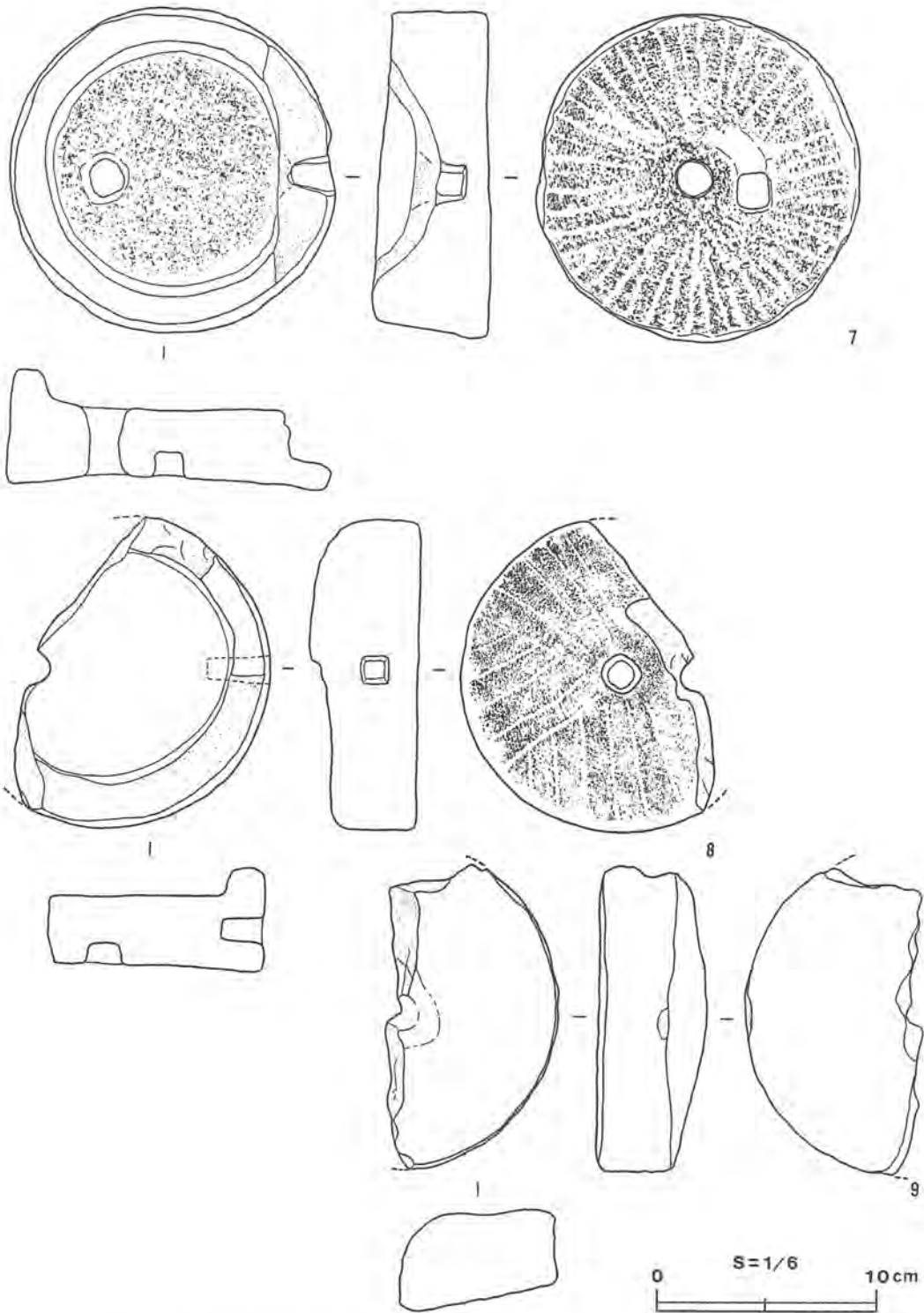
第323図 遺構外出土遺物実測・拓影図(6)



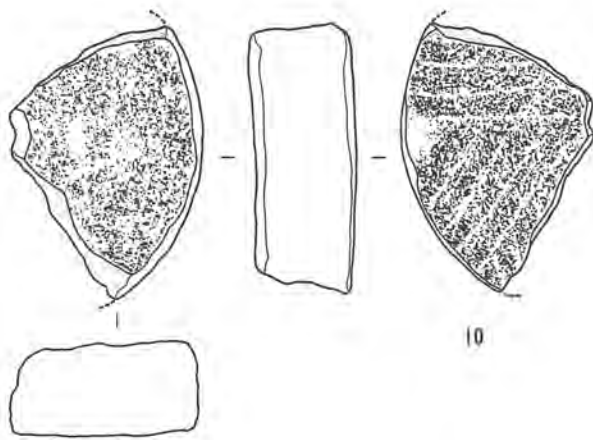
第324図 遺構外出土遺物実測・拓影図(7)



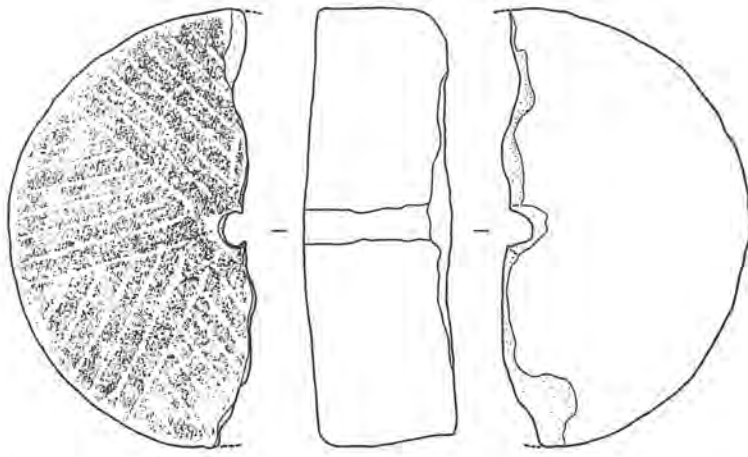
第325図 遺構外出土遺物実測・拓影図(8)



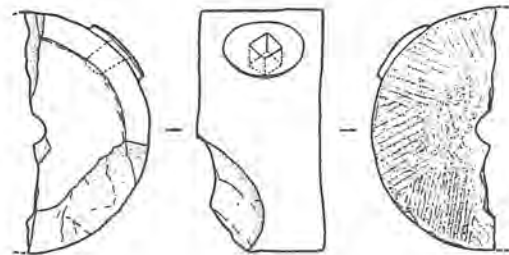
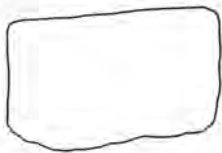
第326図 遺構外出土遺物実測・拓影図(9)



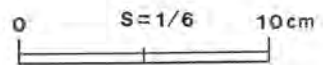
10



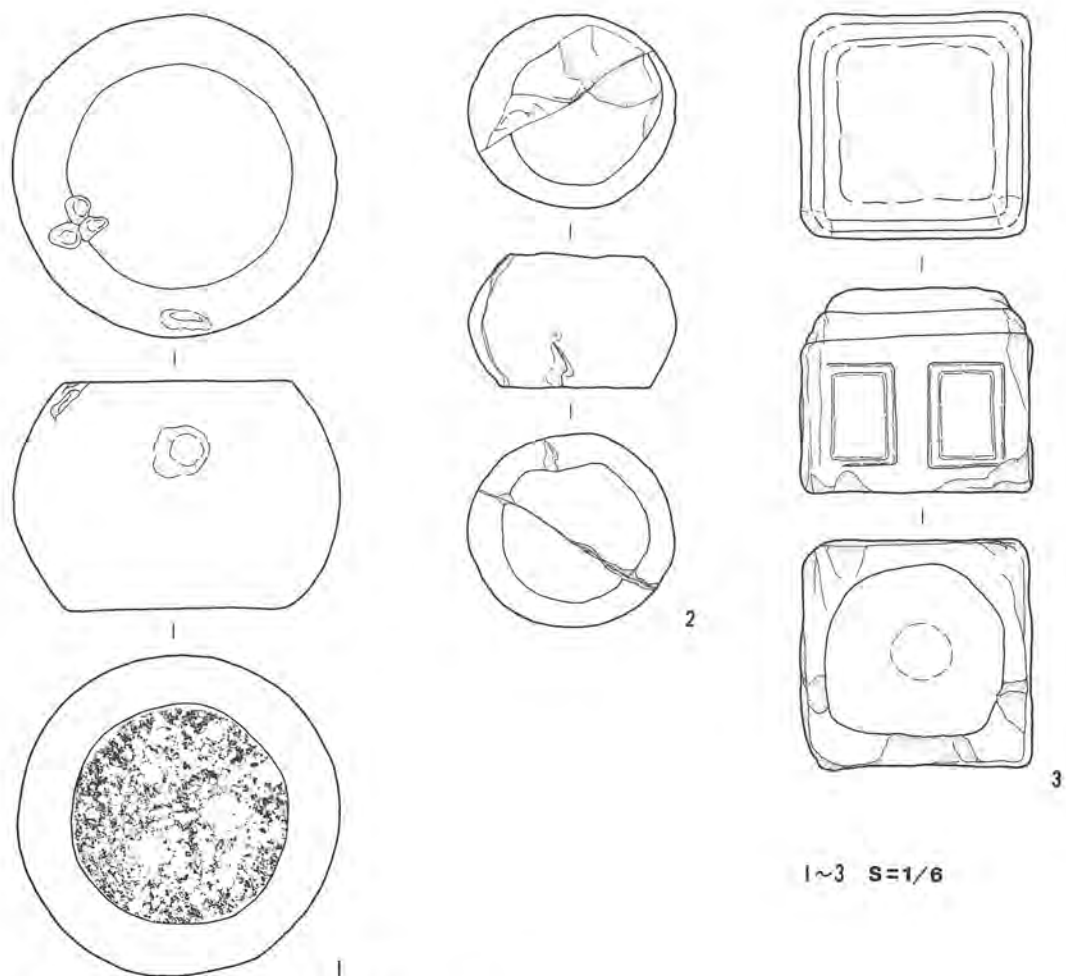
11



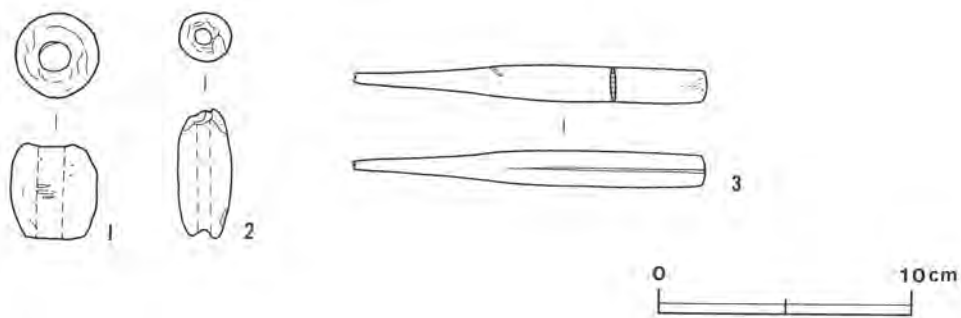
12



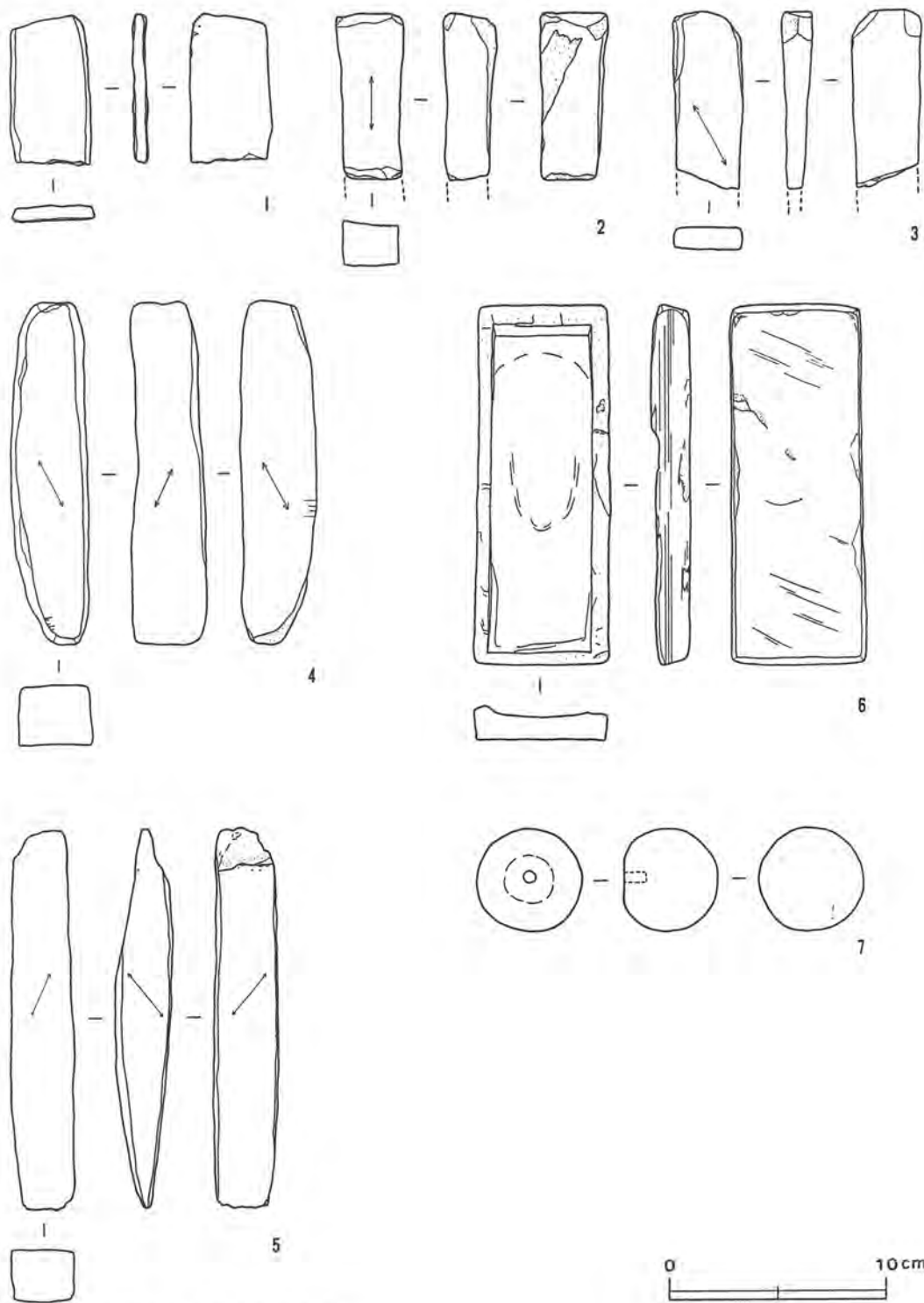
第327図 遺構外出土遺物実測・拓影図(10)



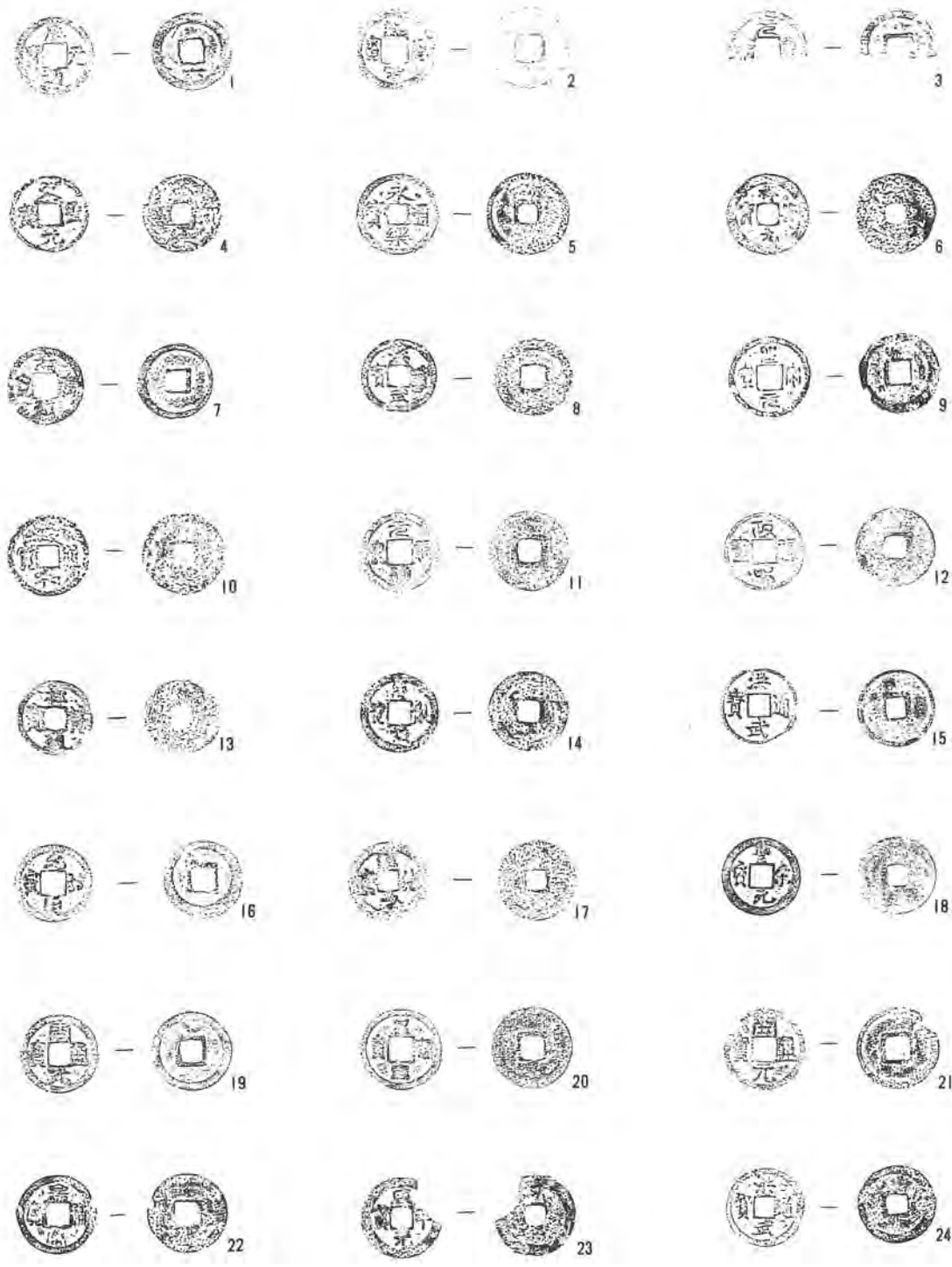
第328図 遺構外出土遺物実測・拓影図(11)



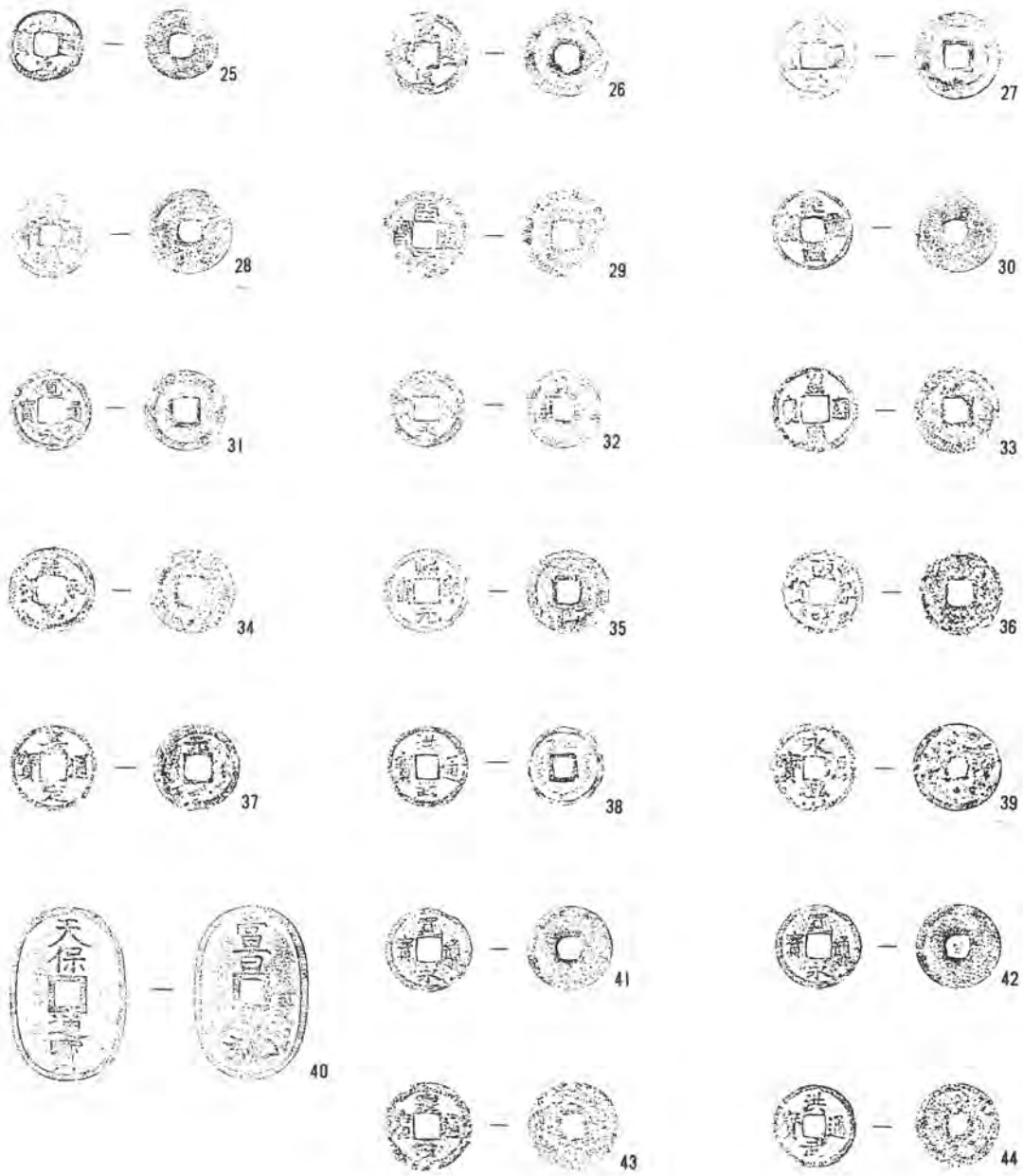
第329図 遺構外出土遺物実測図(12)



第330図 遺構外出土遺物実測図(13)



第331图 遗構外出土古銭拓影图(1)



第332圖 遺構外出土古錢拓影圖(2)

遺構外出土土器観察表(第318~322図1~39)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師質土器	A 11.3	平底で、体部は器厚を減じながら内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P34 80% G2a ₉ 区覆土
		B 3.3				
		C 4.8				
2	皿 土師質土器	A 11.4	平底で、体部は器厚を減じながら内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア・パミス・長石 橙色 普通	P35 90% G2a ₉ 区覆土
		B 3.4				
		C 4.8				
3	皿 土師質土器	A 7.2	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア・パミス 橙色 普通	P26 100% F1区覆土
		B 2.2				
		C 2.6				
4	皿 土師質土器	A 11.6	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・長石・パミス 橙色 普通	P32 100% W5h ₆ 区覆土
		B 3.4				
		C 4.6				
5	皿 土師質土器	A 5.8	平底で、体部は器肉厚く、直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・パミス・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P33 100% F1~F3区表採
		B 1.8				
		C 3.0				
6	皿 土師質土器	A 7.8	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P36 90% W5区覆土
		B 1.8				
		C 5.6				
7	皿 土師質土器	A 7.2	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P37 80% H1d ₆ 区覆土
		B 2.0				
		C 4.6				
8	皿 土師質土器	A [8.2]	平底で、底部内面が凸レンズ状を呈する。体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	P38 50% H1f ₆ 区覆土
		B 2.4				
		C 5.2				
9	皿 土師質土器	A 10.7	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P39 80% G1e ₉ 区覆土
		B 3.5				
		C 4.0				
10	皿 土師質土器	A 9.7	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・長石・スコリア・パミス・雲母 にぶい橙色 普通	P60 100% S3i ₄ 区覆土
		B 3.0				
		C 4.0				
11	皿 土師質土器	A [10.7]	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母・パミス 黒褐色 普通	P25 25% 表採
		B 2.8				
		C 5.2				

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
12	皿 土師質土器	A 11.0 B 3.0 C 5.4	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・長石・パミス・スコリア 明赤褐色 普通	P24 40% 表採
13	内耳形土器 土師質土器	A [35.0] B (12.7)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は2か所残存。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 耳は接合。	砂粒・雲母・スコリア・長石・石英・パミス 黒色 普通	P 7 30% 外面に鍋墨付着 L3f1区～M2a1区覆土
14	内耳形土器 土師質土器	A [31.2] B 16.7 C [16.0]	平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は1か所残存。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 体部下端から底部外面にかけてヘラナデ。耳は接合。	砂粒・雲母・スコリア・パミス 黒色 普通	P31 40% 外面に鍋墨付着 F1a0区覆土
15	内耳形土器 土師質土器	A [33.6] B 17.8 C [15.6]	平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は3か所。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 耳は接合。	砂粒・雲母・スコリア・パミス・長石 黒色 普通	P 8 40% 外面に鍋墨付着 M3as区覆土
16	内耳形土器 土師質土器	A [33.0] B 15.8 C [17.2]	平底で、体部は内彎気味に開いて立ち上がり、頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は2か所残存。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 耳は接合。 体部下端から底部外面にかけてヘラナデ。	砂粒・パミス・スコリア・雲母・長石 黒褐色 普通	P27 25% 外面に鍋墨付着 I1区表採
17	内耳形土器 土師質土器	A (34.8) B 15.7 C (17.4)	平底で、体部は内彎気味に開いて立ち上がり、頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。耳は1か所残存。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 底部外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア・パミス・石英 黒褐色 普通	P30 40% 外面に鍋墨付着 F1a0区覆土
18	甕 陶 器	A [42.8] B (8.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反して、折り返した幅広い縁帯がつく。	粘土紐輪積み。 外面横ナデ。	(胎土)褐色 (焼成)普通	P 9 5% L2区表採 常滑焼
19	甕 陶 器	A [20.4] B (6.5)	頸部から口縁部にかけての破片で、内傾気味に立ち上がっている。	水挽き成形。 横ナデ。	(胎土)褐色 (焼成)普通	P10 5% M2区表採 常滑焼
20	壺 陶 器	B (16.3) C 7.8	平底で、最大径を胸部上位に持って膨らみ、肩が張る。	粘土紐輪積み。 胸部内・外面ナデ。 胸部内面は整形時の指頭痕が目立つ。肩部に鉄釉が施されている。	(胎土)褐色 (釉)暗赤褐色 (焼成)普通	P40 70% H2as区覆土 常滑焼
21	皿 陶 器	A 9.4 B 2.1 C 4.0	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味をもつ。体部内・外面から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 口縁部内・外面に鉄釉が施されている。	(胎土)灰黄色 (釉)暗赤褐色 (焼成)普通	P11 100% 表採 瀬戸焼

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
22	皿 陶 器	A 10.5 B 2.9 C 5.3	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。体部内・外面から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 口縁部内・外面に鉄釉が施されている。	(胎土)にぶい黄褐色 (釉)暗褐色 (焼成)普通	P41 90% H3e2区覆土 瀬戸焼
23	皿 陶 器	A 10.3 B 2.3 C 5.2	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。体部外面下半から底部にかけて露胎。底部内面に3個の砂目が溶着している。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 口縁部内・外面、体部内面に灰釉が施されている。	(胎土)にぶい黄褐色 (釉)浅黄色 (焼成)普通	P42 90% H3f1区覆土 瀬戸焼
24	皿 陶 器	A 12.0 B 3.4 C 6.4	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。体部内・外面下半から底面にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 口縁部内・外面に灰釉が施されている。	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色 (焼成)普通	P43 75% H3e2区覆土 瀬戸焼
25	皿 陶 器	A 10.3 B 2.4 C 5.1	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。体部内・外面から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 口縁部内・外面に鉄釉が施されている。	(胎土)浅黄色 (釉)褐色 (焼成)普通	P44 100% G2t6区覆土 瀬戸焼
26	皿 陶 器	A [10.8] B (4.0) E (0.4)	高台は直立し、体部は緩やかに内彎しながら外上方に開く。底部内面に1個の胎土目が溶着している。底部外面露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 体部内・外面に灰釉が施されている。	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色 (焼成)普通	P45 30% J2f4区覆土 瀬戸焼
27	香 炉 陶 器	A [10.4] B (4.0) E (0.2)	底部外縁は、丸味を以って立ち上がり、頸部は直立し、口縁部は短く外反する。口縁部外面に太い凹線が1周する。体部内面及び外面下半にかけて露胎。足は1か所残存。	水挽き成形。 横ナデ。 口縁部内・外面から体部外面に灰釉が施されている。	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色 (焼成)良好	P46 30% J2e3区覆土 瀬戸焼
28	袴腰形香炉 陶 器	A 10.0 B (3.7)	底部外縁は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転ヘラ削り。 体部外面に押印が施されている。	(胎土)にぶい褐色 (焼成)普通	P53 20% 表採 瀬戸焼
29	おろし皿 陶 器	A 10.9 B 2.4 C 5.4	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は内側に折り返され小突起状を呈し、口唇部は浅く凹む。体部内・外面から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 底部内面にはヘラにより格子状のおろし目が刻まれている。 口縁部内・外面に灰釉が施されている。	(胎土)淡黄色 (釉)オリーブ色 (焼成)普通	P47 60% H2a8区覆土 瀬戸焼

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
30	おろし皿 陶 器	A [15.2] B 3.8 C [8.4]	平底で、体部は内彎気味に大きく開いて外上方に立ち上がる。口縁部は内側に折り返され、小突起を呈し、口唇部は浅く凹む。体部内・外面から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。 底部内面にはヘラにより格子状のおろし目が刻まれている。 口縁部内・外面に灰釉が施されている。	(胎土)灰白色 (釉)オリーブ黄色 (焼成)普通	P48 50% 体部内・外面に煤付着 H2j区覆土 瀬戸焼
31	筒形容器 陶 器	A 12.8 B 16.1 C 9.8	高台は低く直立し、平底で、体部は内傾気味に立ち上がる。頸部から緩やかに外反しながら開き、口唇部は丸味をもつ。体部外面中央には沈線が一周する。体部下端から底部にかけて露胎。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、削り出し高台を施している。 口縁部内・外面及び体部外面に灰釉が施されている。	(胎土)明褐色 (釉)オリーブ黄色 (焼成)良好	P49 60% G3j区覆土 瀬戸焼
32	直縁大皿 陶 器	B (5.9) D 8.8 E 0.8	高台は低く直立し、体部は直線的に開いて立ち上がる。体部外面下方は露胎。見込みに2個の胎土目が熔着している。	水挽き成形。 横ナデ。 体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 体部外面上方及び見込みに灰釉が施されている。	(胎土)淡黄色 (釉)浅黄色 (焼成)良好	P50 30% H2e7区覆土 瀬戸焼
33	折縁深皿 陶 器	A [40.6] B 9.2 D (21.4) E 1.2	平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は外方に折り返している。口唇部はつまみ上げられて凸帯状をなす。足は2か所残存。見込みに2個の胎土目が熔着している。	水挽き成形。 横ナデ。 体部下端から底部にかけて回転ヘラ削り。 体部外面下半は露胎。灰釉が施されている。	(胎土)淡黄色 (釉)浅黄色 (焼成)良好	P54 30% 表採 瀬戸焼
34	插鉢 陶 器	B (5.0) C [14.2]	平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。 底部回転ヘラ切り。 体部外面下端は整形時の指頭痕が目立つ。筋は5本で1組。	砂粒・雲母・スコリア・バミス・長石 灰黄褐色 普通	P28 25% H2区覆土 備前焼
35	徳利 陶 器	A (3.3) B (20.0) C 7.3	高台はわずかに直立し、平底で胴部は筒形を呈し、胴部中位でわずかに膨らみを有する。胴部下位及び底部外面は露胎。	水挽き成形。 削り出し高台。 胴部外面に灰釉が施されている。	(胎土)にぶい橙色 (釉)にぶい黄褐色 (焼成)良好	P61 90% T5b9区覆土 美濃焼 胴部に『上』の刻字
36	碗 磁 器	A [10.6] B 5.8 D 3.6 E 0.9	染付の碗形茶碗。高台は低く直立し、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転ヘラ削り。 体部外面には花卉文が、見込み及び高台外面には圏線が描かれている。釉は細かい貫乳が見られる。	(胎土)灰白色 (釉)明緑灰色 (焼成)良好	P29 50% 表採 伊万里焼

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
37	徳 利 磁 器	A 3.9 B 25.1 D 8.4 E 1.0	高台は低く直立し、底部から胸部にかけて球状を呈している。頸部は細長くほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外反して口唇部は丸味をもつ。	水挽き成形。 削り出し高台。 高台と胸部外面に花卉文と圏線が描かれている。 外面及び口頸部内面に施釉。胸部外面に整形時の回転ヘラ削り痕あり。	(胎土)灰白色 (釉)明オリープ灰色 (焼成)良好	P 2 70% 胸部外面に『十二』の文字が削り出されている。 表採 切込焼(宮城県)
38	香 炉 陶 器	B (2.4) D 6.1 E 0.8	底部破片で、丸味をもって立ち上がっている。足は3か所に付けられている。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P51 10% 底部内面煤付着 F2d ₈ 区覆土
39	筒形香炉 瓦質土器	A [10.8] B 5.9 D [9.4] E 1.2	平底で、体部はやや外傾して立ち上がり、口唇部が角張る。	水挽き成形。 横ナデ。 底部回転ヘラ切り後、足2か所接合。体部外面に格子目文とS字文が押印されている。足は2か所に付けられている。	灰白色 黒色 普通	P52 20% G1e ₉ 区覆土

第5章 考 察

「千々乱風」伝説の地である沢田遺跡の発掘調査を4年間にわたって実施してきた。調査の結果は伝説に直接結びつくような遺構は確認されなかったが、数多くの塩づくりに関する遺構が検出され、この地域は、中世から近代初期にかけての大規模な揚浜式の製塩跡であることが判明した。1期の調査(SA1)では、製塩跡が8か所検出され、それらについては、平成元年3月に報告書として刊行している。

今回の調査(SA2～SA4)では製塩跡が84か所検出され、それらの製塩跡からは、竈123基、鹹水槽920基、土樋274条等が検出されている。その他、直接製塩業に伴わない遺構は、炉跡45基、埋葬遺構79基、土坑12基、不明遺構43基である。製塩業に伴う遺物としては、担い棒(木製品)、柄振(木製品)、ろ過器(木製品)、吊金具(鉄製品)、耳金(鉄製品)、椀転用杓(木製品)である。その他の遺物は、陶磁器、内耳形土器、土師質土器、短刀、刀装具、古銭、管状土錘(土製品)、人骨、獣骨等である。これらの遺構と遺物をもとに、当遺跡における揚浜式製塩の全体像について述べてみたい。

第1節 塩づくりとその歴史

茨城県内で、塩づくりが行われるようになったのは、表9からもわかるように古くは、霞ヶ浦が海であった縄文時代にさかのぼる。稲敷郡美浦村の法堂遺跡、同郡桜川村の広畑貝塚、土浦市の上高津貝塚からは縄文時代の後・晩期の製塩土器が多数出土している。霞ヶ浦における製塩は、鎌倉時代頃までに霞ヶ浦の淡水化が進み、次第に姿を消し、代わって太平洋岸を中心とした製塩等に移っていったようである。

文献資料に記載されている塩づくりは、奈良時代の初めの頃につくられた「常陸国風土記」⁽¹⁾で、その中に「乗浜の里の東に浮島の村あり。……………(中略)……………塩を焚きて業と為す。……………(以下略)」と製塩に関する記事が載っている。

平安時代の「日本文徳天皇実録」⁽²⁾(856年)には「鹿島郡大洗磯前に神有り、新に降る。初め郡民海を煮て塩をつくる者有り、……………」とあり、塩焼きが大洗町の海岸地帯で行われていた記事が載っている。

鎌倉時代の「親鸞伝絵」⁽³⁾にも常陸国の塩づくりの様子が載っている。

室町時代から江戸時代にかけて読まれた御伽草子の代表的作品「文正草子」⁽⁴⁾には、大野村角折の浜を舞台にしてつくられた塩焼き浜の長者伝説が全国に知られている。それには、鹿島灘沿岸で製塩業を営んで長者となった「文太長者」のことが語られている。中世から近世にかけての鹿島灘沿岸は、文太長者と鹿島七釜等の伝説や、上釜、高釜、堺釜、武与釜、別所釜、京知釜、武

井釜など釜のつく地名を残すほど製塩業が盛んに行われていたものと思われる。

この頃の製塩法は、揚浜式製塩で鎌倉時代の「親鸞伝絵」⁽³⁾や室町時代の「文正草子」⁽⁴⁾の絵巻物に描かれている様子と事柄が、当遺跡から出土している道具や検出されている遺構と大変似ており、すでに同じような塩づくりが行われていたものと思われる。

当遺跡の塩づくりが、文献のなかに見られるようになるのは、江戸時代の村松虚空蔵尊堂に残されている「塩浜百姓移住後の諸役請負手形」⁽⁵⁾である。その中には製塩のことが「塩かまやく」と記されている。この文書には、「千々乱風」⁽⁵⁾伝説の時期とほぼ同じ時期のもので、「村松東方の海岸に住む百姓が村松大神宮領内へ移住」と記されている。さらに、千々乱風のことは「水府志料」⁽⁶⁾にも、「前浜村は、……往古大塚とて浜辺に人家ありしに、元和の初め大風に壊れ、其後今の地に家居して前浜村に改めたりと云」と記してあり、さらに、「馬渡村は、……往古青塚、二亦、大塚とて三ヶ村にて浜辺に家居せしに、元和の末大風にて家並も吹潰され、住ひ成がたくして今の所に移り、寛永の末に、青塚、二亦の2ヶ村を合せ、馬渡に入て一村となす。」とも記されている。これらの他に、「新編常陸国誌」⁽⁷⁾には内容に若干の相違はあるが、「千々乱風」伝説に伴う大風によって、村の移動を行ったことが「……コノ村舊クハ青塚二亦村ト稱シテ、海濱ニアリシニ、元和中大風ノ爲、家屋倒壊シ、住居ナリガタキヲ以テ、今地ニ移リ、寛永ノ末ニ至リ、合セテ一村トナシ、馬渡ト號スト云フ……」と記されている。

江戸時代中期以降、水戸藩内の製塩業は、「水府志料」⁽⁶⁾によると、日立から北茨城の海岸で行ったと記載されている。

「大日本鹽業全書」⁽¹²⁾には、江戸時代の中期「正徳年間」に、現在の日立市金沢町で、農業を営んでいた佐藤與市右衛門が副業として揚浜法による製塩業を開始している。この塩づくりは、何度も海岸の砂上に海水を散布し、浜をならすことを繰り返して、乾燥した鹹砂を砂搔きで集め、馬ふごでろ過し、鹹水を作り、鉄釜で塩焚きしている。その他、海水を汲んで直接釜に注いで塩焚も行っている(海水直煮法)。この製塩業は当遺跡から検出されたような粘土貼りの鹹水槽、土樋などは構築せず、その代わり、多種、多量の桶を使用して、鹹水を貯蔵したり、鹹水を輸送したり、苦汁を抜いたりしている。この様子は江戸時代の中期に描かれた絵巻で江戸名所図会の「行徳(千葉県)の製塩作業場」の中でも、多種の桶を使用しており、日立市金沢町の製塩法を窺うことができる。しかし、正保二年(1645)には入浜式製塩による、十州塩田⁽⁸⁾が成立し、その製塩法は瀬戸内で盛んになり、水戸藩内にも赤穂(兵庫県)の塩や、斉田(徳島県)の「差塩」と称し、苦汁分を多く含んだ格安の塩が流通するようになった。この塩が、漬物用、醸造用として多量に消費され、この地方の塩の生産量はそれ以後減少していったものと思われる。

日本塩業大系⁽⁹⁾の「塩録」によると、文化九年(1812)に水戸藩は、豊後国(大分県)から白石又衛門という技術者を招いて、瀬戸内地方の入浜式製塩を平磯や前浜で行ったが、瀬戸内地方と

は地形等の違いから失敗している。

また、天保13年に描かれた「前浜村田畠反別図・前浜村田方図」(那珂湊市阿字ヶ浦町小池家蔵)には製塩の様子が見られるが、江戸時代後期頃には、副業として細々ながら行われていたようである。

明治時代に入っても、製塩は細々と継続されており、明治19年の「前浜村誌⁽¹⁰⁾」には、「製塩ハ何ツ頃ヨリ始メタリシカ年代詳カナラサレトモ、古ヨリ竈数四、五ヶ所ツツハ終ニ絶ヘタルコトナシ、明治二、三年ノ間、塩ノ価額壹斗八升入壹円内外、騰貴シタル時、竈数凡三十六、七ニモ至リシカ、程ナク低価シタルニヨリ、追々ニ減シ現在七竈ノミ存ス」と記されている。大正3年の「鹽專賣史⁽¹¹⁾」にも、塩専売前の明治36年には、「前浜村竈数三、生産高三十石、村松村竈数一、生産高四石」と記されており、明治後期においてもなお製塩が続けられている。古老の話では、昭和13年に当地が陸軍に接収されるまで沢田川流域には数軒の家があり、水田耕作を行うかたわら塩づくりをしていたとのことである。昭和二十年の終戦前後には、全国的な塩不足に悩んだ時期、この一帯では盛んに直煮法による塩づくりが行われていた。

注・参考文献

- (1) 「常陸風土記」 『風土記』 日本古典文学大系2 岩波書店 1958年
- (2) 「日本文徳天皇実録」 『國史大系』3 吉川弘文館 1934年
佐藤次男 「酒列磯崎」 『ひろば』 第八巻第1号 1970年
- (3) 『国史大辞典』7 吉川弘文館 1986年
日本たばこ産業株式会社 「たばこと塩の博物館」 1986年
- (4) 「文正草子」 『御伽草子』 日本の古典第13巻 集英社 1980年
- (5) 東海村村松虚空蔵堂所蔵文書(1623年)には、元和九年、寛永十三年、寛永十八年、享保三年の千々乱風伝説に参考とすべき文書がある。
- (6) 茨城県 「水府志料」 『茨城県史料=近世地誌編』 1977年
- (7) 中山信名編 栗田寛補 「新編常陸国誌」 崙書房 1979年
- (8) 茨城県 「茨城県史=近世編」 1983年
- (9) 日本塩業大系編集委員会 「塩録」 『日本塩業大系 史料編 近世(三)』 日本専売公社 1976年
- (10) 那珂湊市史編さん委員会 「茨城県常陸国那珂郡前浜村誌」 『那珂湊市史料第一集』 那珂湊市教育委員会 1974年
- (11) 日本専売公社 「鹽專賣史」 税務監督局 大正三年
- (12) 日本専売公社 「大日本鹽業全書 第一編」 大蔵省主税局 明治三十九年

塩づくりの歴史

時代	年	おもなできごと	塩づくりの方法	資料で見る茨城の塩づくり
縄文		狩猟と採集の時代	○直煮法……………○製塩土器 ○藻塩焼き……………○製塩土器	○霞ヶ浦沿岸で製塩が始まる。 (約2500年前) {・美浦村法堂貝塚 ・桜川村広畑貝塚}
弥生	300 BC ↑ AD ↓	米づくりが始まる 卑弥呼が魏に使いを送る		
古墳	300	大和朝廷の国土統一 各地に古墳がつくられる		
奈良	600	大化の改新 国分寺・国分尼寺が各地につくられる	○塩地 <small>〔砂浜で自然に塩が付いている〕</small> ○塩浜 <small>〔砂浜に塩田など人の手を加えてかん水を採る〕</small>	○信太郎浮島村(現桜川村浮島)や行方郡で、藻塩焼きによる製塩が行われる。「常陸国風土記」
平安	800	平安京に都を移す 貴族文化が栄える	○入浜系の塩浜・揚浜系の塩浜	○(大洗町)磯崎で製塩が行われる。「日本文徳天皇実録」(856)この頃霞ヶ浦の淡水化に伴い製塩の中心が太平洋岸に移る。
鎌倉	1200	源頼朝が鎌倉幕府を開く		○(大洗町)磯崎で製塩が行われる。「日本文徳天皇実録」(856)この頃霞ヶ浦の淡水化に伴い製塩の中心が太平洋岸に移る。
南北朝	1300	建武の新政		○「親鸞伝絵」に描かれている常陸国の塩づくり
室町		足利尊氏が室町幕府を開く		○(日立市)河原子海岸で製塩が行われる。「鹿島神宮文書」
桃安土	1500	応仁の乱 豊臣秀吉が全国を統一する	○入浜式塩田 ・江戸時代以降、瀬戸内海を中心に築造された。 正保2(1645)年・十州塩田の成立	○鹿島灘の海岸を舞台に塩焼き文太の伝承が残る。「文正草子」ほか
江戸	1600	徳川家康が江戸幕府を開く	○入浜式塩田 ・江戸時代以降、瀬戸内海を中心に築造された。 正保2(1645)年・十州塩田の成立	○この頃千々乱風の伝説
江戸	1700			○村松海岸で製塩が行われる。「村松虚空蔵堂文書」
江戸	1800	徳川慶喜が大政奉還をする 明治維新		○前浜で製塩が行われる。「水府志料」
明治	1900			○水戸藩が前浜(現在の阿字ヶ浦町)で西国の製塩法を試みる。「塩録」
大正		第一次世界大戦		○前浜村に9軒の塩まがが存在した。「前浜邑田方図」(1841)
昭和		第二次世界大戦		○専売法の施行後、茨城県内の製塩は衰退する。
昭和			○真空式蒸発缶 昭和2年 ○加圧式海水直煮製塩 昭和27年	○戦後の物資不足時代、一時的に塩づくりが行われる。
昭和			○流下式塩田 昭和34年 ○イオン交換膜法 昭和46年	
平成			現在	

第2節 遺 構

当遺跡(SA2～SA4)から検出された84か所の製塩跡について、各製塩施設を出土レベルごとに分類すると187に分類することができる。表9に掲載したように、竈を基本単位として、各製塩跡の竈、鹹水槽、居出場及び土樋等の施設の構成状況からA～L類に分類できる。A類は竈だけの検出で、B類は竈と釜屋内鹹水槽、C類は竈、釜屋内鹹水槽及び居出場、D類は竈、釜屋内鹹水槽、居出場及び屋外鹹水槽、E類は竈、釜屋内鹹水槽、居出場、屋外鹹水槽及び土樋、F類は竈、釜屋内鹹水槽及び土樋、G類は竈、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽、H類は竈と屋外鹹水槽、I類は竈、居出場、屋外鹹水槽及び土樋、J類は竈と居出場、K類は竈、居出場及び屋外鹹水槽、L類は竈、釜屋内鹹水槽、居出場及び土樋で構成されている。このA～L類ごとの特徴について述べてみたい。

A類は、33か所であり、竈だけ検出されたものである。全体の17.5%に当たる。本類は、標高4.01～10.00mに検出され、標高6.01～7.00mから検出されているものが14か所と最も多い。次に、標高4.01～6.00mの範囲に、12か所が検出されている。最も高い製塩跡は第79製塩跡で、標高9.10mから検出されている。最も低い製塩跡は第75製塩跡の第2グループで、標高4.10mから検出されている。その他、第49製塩跡の竈の覆土中から14世紀頃の陶器の碗が出土している。第69製塩跡の竈の覆土中から陶器片が出土している。

B類は、竈と釜屋内鹹水槽が組み合って検出されたもので15か所あり、全体の8%に当たる。本類は、標高4.01～11.00mに検出され、標高7.01～9.00mに検出されているものが、8か所と最も多い。次に、標高9.01～10.00mの範囲に、3か所検出されている。最も高い製塩跡は第17製塩跡の第1グループで、標高10.40mから検出されている。最も低い製塩跡は第15製塩跡で、標高4.10mから検出されている。第15製塩跡の竈の覆土中から14～16世紀頃の陶器の片口鉢、土師質土器の皿片及び内耳形土器片が出土している。第58製塩跡の竈の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器片が出土している。

C類は、竈、釜屋内鹹水槽及び居出場が組み合って検出されたもので17か所あり、全体の9.5%に当たる。本類は、標高4.01～10.00mに検出され、標高7.01～9.00mに検出されているものが、8か所と最も多い。次に、標高6.01～7.00mの範囲で、4か所が検出されている。最も高い製塩跡は第81製塩跡の第1グループで、標高9.96mから検出されている。最も低い製塩跡は第5製塩跡の第6グループで、標高4.90mから検出されている。第81製塩跡の第1グループの竈の覆土中からは15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。

D類は、竈、釜屋内鹹水槽、居出場及び屋外鹹水槽が組み合って検出されたもので33か所あり、全体の17.5%に当たる。本類は、標高5.01～11.00mに検出され、標高6.01～7.00mに検出されて

いるものが、8か所と最も多い。次に、標高10.01～11.00mの範囲に、7か所検出されている。最も高い製塩跡は第45製塩跡で、標高10.52mから検出されている。最も低い製塩跡は第25製塩跡で、標高5.17mから検出されている。第24製塩跡の第1グループに属する第721・722号鹹水槽の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。さらに、第45製塩跡の第1グループの竈の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。その他、第1製塩跡の第14・15号鹹水槽の覆土中から内耳形土器片、第5製塩跡の竈の覆土中から土師質土器の皿片と内耳形土器片、同製塩跡の第35号鹹水槽の覆土中からと、第10製塩跡の竈の覆土中から陶器片が出土している。いずれも覆土中から出土した破片で、土師質土器の皿片は15～16世紀頃、内耳形土器片は15世紀頃のものと思われ、陶器片は、形状が不明確なため時期決定はできなかった。

E類は、竈、釜屋内鹹水槽、居出場、屋外鹹水槽及び土樋が組み合って検出されたもので36か所あり、全体の19%に当たり、最も多く検出されている。本類は、標高3.01～11.00mに検出され、標高7.01～8.00mに検出されているものが、10か所と最も多い。次に、標高6.01～7.00mの範囲に、9か所が検出されている。最も高い製塩跡は第80製塩跡の第1グループで、標高10.84mから検出されている。最も低い製塩跡は第33製塩跡の第4グループで、標高3.74mから検出されている。第32製塩跡の第1グループに属する第832号鹹水槽の覆土中からは15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。その他、第6製塩跡の竈の覆土中から土師質土器の皿片、第31製塩跡の竈の覆土中からと、同製塩跡の第784号鹹水槽の覆土中から土師質土器の皿片と内耳形土器片、第33製塩跡の竈の覆土中から内耳形土器片と陶器片が出土している。いずれも覆土中から出土した破片で、土師質土器の皿片は15～16世紀頃、内耳形土器片は15世紀頃のものと思われ、陶器片は、形状等が不明確なため時期決定はできなかった。

F類は、竈、釜屋内鹹水槽及び土樋が組み合って検出されたもので9か所あり、全体の5%に当たる。本類は、標高5.01～9.00mに検出され、標高7.01～8.00mから検出されているものが、4か所と最も多い。次に、標高5.01～6.00mの範囲に、3か所が検出されている。最も高い製塩跡は第44製塩跡で、標高8.34mから検出されている。最も低い製塩跡は第73製塩跡の第1グループで、標高5.65mから検出されている。第73製塩跡の第1グループの竈の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。第23製塩跡の第1グループに属する第864号鹹水槽の覆土中からは15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。その他、第44製塩跡の竈の覆土中から土師質土器の皿片と内耳形土器片、第47・48製塩跡の竈の覆土中から土師質土器の皿片、第54製塩跡の竈の覆土中から陶器片が出土している。いずれも覆土中から出土した破片で、土師質土器の皿片は15～16世紀頃、内耳形土器片は15世紀頃のものと思われ、陶器片は形状等が不明確なため時期決定はできなかった。

G類は、竈、釜屋内鹹水槽及び屋外鹹水槽が組み合って検出されたもので26か所あり、全体の

14%に当たる。本類は、標高6.01～11.00mに検出され、標高9.01～10.00mに検出されているものが、11か所と最も多い。次に、標高8.01～9.00mの範囲に、6か所が検出されている。最も高い製塩跡は第2製塩跡で標高10.30mから検出されている。最も低い製塩跡は第59製塩跡で標高6.43mから検出されている。第2製塩跡の第1グループの竈の覆土中からは15世紀頃の陶器の香炉が出土しており、同製塩跡の第13号鹹水槽の覆土中から内耳形土器の破片が出土している。その他、第4・11製塩跡の竈の覆土中からと、第12製塩跡の第163・169号鹹水槽の覆土中から内耳形土器片、第3製塩跡の竈の覆土中からと、同製塩跡の第2・10号鹹水槽の覆土中から、及び第9製塩跡の竈の覆土中から土師質土器の皿片と内耳形土器片を出土している。いずれも覆土中から出土した破片で、内耳形土器片は15世紀頃、土師質土器の皿片は15～16世紀頃のものと思われる。

H類は、竈と屋外鹹水槽が組み合って検出されたもので11か所あり、全体の6%に当たる。本類は、標高4.01～10.00mに検出され、標高4.01～6.00mに検出されているものが、6か所と最も多い。次に、標高6.01～7.00mと9.01～10.00mの範囲に、4か所検出されている。最も高い製塩跡は第21製塩跡で標高9.10mから検出されている。最も低い製塩跡は、第64製塩跡で標高4.50mから検出されている。

I類は、竈、居出場、屋外鹹水槽及び土樋が組み合って検出されたもので、第10製塩跡の第2グループがあり、全体の0.5%に当たり、標高9.30mに位置している。

J類は、竈と居出場が組み合って検出されたもので4か所あり、全体の2%に当たる。本類は、標高7.01～11.00mに検出され、最も高い製塩跡は第13製塩跡の第1グループで、標高11.80mから検出されている。最も低い製塩跡は第5製塩跡の第4グループで、標高7.10mから検出されている。残り2か所は、8.01～9.00mの標高に位置している。

K類は、竈、居出場及び屋外鹹水槽が組み合って検出されたもので、第13製塩跡の第2グループがあり、標高11.70mに位置している。

L類は、竈、釜屋内鹹水槽、居出場及び土樋が組み合って検出されたもので、第14製塩跡の第1グループがあり、標高6.40mに位置している。

製塩跡の形態を12種類に分類してみたが、最も多くの製塩跡が検出されている高さは、標高6.01～9.00mの範囲に78か所、全体の41%を占めている。次に、標高5.01～7.00mと8.01～10.00mの範囲に48か所、全体の26%を占めている。

製塩跡の形態で、最も多いのは、E類で、次いでA類とD類である。当遺跡における製塩跡の基本的施設構造はE類と思われる。それでは、竈、釜屋内鹹水槽、居出場、屋外鹹水槽及び土樋で構成されているE類を中心に、A類とD類を比較してみることにする。これら3種類の基本的な構造の違いは、E類を基本にした場合、A類は竈だけで、鹹水槽と土樋を伴っていないし、D類は、土樋を伴っていない。A類では、鹹水槽と土樋を伴って検出されなかった理由として考え

られることは、粘土貼りの鹹水槽や土樋に代わって、江戸時代に描かれた絵巻で江戸名所図会に見られる「行徳（千葉県）の製塩作業場」のような多種類の桶を使用していたのではないだろうか。次に、D類であるが、土樋を伴っていない第1～4・8・9製塩跡は、屋外鹹水槽が釜屋のすぐ近くに構築されており、屋外鹹水槽もほぼ等間隔で南北方向に一直線に並んでいるので土樋を必要としなかったことも考えられる。釜屋の標高は9.50～10.60mで海岸寄りの土樋を伴っている釜屋より全体的に高い場所に位置している。E類のように、土樋を伴っている屋外鹹水槽は、長径が3m以上のもので大きく、幾重にも関連する遺構が重複し、調査区の北部と南部に分布している。逆に、A・D類のように土樋を伴っていない屋外鹹水槽は、割合に小さく、長径2m前後のものがほとんどである。

このように、土樋を伴う製塩跡と伴わない製塩跡は何を意味するかについて考えてみると、製塩の生産規模の違いを見いだすことができる。土樋を伴っている製塩跡は、屋外鹹水槽の規模や製塩跡の分布状況から、大量に塩の生産を行い、逆に、土樋を伴わない製塩跡は、比較的小規模な塩の生産を行っていたのではないかと考えられる。

第1～6・10～12・15・23・24・31～33・44・45・47～49・52・54・58・69・73・81製塩跡からは、15～16世紀頃の土師質土器の皿、15世紀頃の内耳形土器、14～16世紀頃の陶器の片口鉢及び碗が竈や鹹水槽から出土しているが、これらの遺物は、平面的には遺跡内の広範囲からばらばらに出土しており、層位的にも、標高4.01～11.00mの範囲内の上層や下層からもそれぞれ出土している。

また、標高7.92mから検出されている第47製塩跡の第89号竈の火床から焼砂を採取し、奈良教育大学の長友恒人氏に熱ルミネッセンス（TL）年代測定を依頼した。その結果、竈の操業が停止された年代は、現在から643（±119）年前とするのが妥当であろうという解答が得られた。

この結果から、本製塩跡の第89号竈の操業停止年代は、上限が13世紀で、下限が15世紀頃ということになるので、当遺跡から出土の土器、陶器、古銭、短刀等と比較した場合、ほぼ下限の時期と同時期にあたるものと思われる。沢田遺跡における製塩業の最盛期は、上記の結果をもとに遺物の出土している遺構の検出状況を考え合わせると、15～16世紀頃を中心とした時期ではないかと思われる。

当遺跡の特に製塩跡が集中して検出されているI区（F3）・II区（H3）・III区（L3）・IV区（R4）・V区（W5）（第333～337図調査区SA2～SA4）の5か所について述べてみたい。

I区（F3）は標高5.60～8.60mから第50～52・61・62・65・66製塩跡の7か所が検出され、A類に属する製塩跡4か所、B類に属する製塩跡2か所、C類に属する製塩跡1か所である。第66製塩跡を除いた6か所の製塩跡が重複している。新旧関係は、層位の違いから第62製塩跡が最も新しく、次いで、第50製塩跡、第52製塩跡、第61製塩跡、第65製塩跡、第51製塩跡の順に古くな

る。重複している6か所の製塩跡と重複していない第66製塩跡の平面的なつながりを竈の標高を基に考えてみると、第66製塩跡の第1グループは第61製塩跡とほぼ同じ層位なので同時期頃で、さらに、第66製塩跡の第2グループは、第65製塩跡とほぼ同じ層位なので同時期頃と思われる。また、第66製塩跡より第51製塩跡は古いものと思われ、第50・52・62製塩跡は第66製塩跡よりも高位置から検出されているので、新しいものと思われる。第52製塩跡の竈の覆土中から15世紀頃の内耳形土器が出土している。

II区(H3)は標高6.38～10.90mから第45・46・56・60・68・70・77製塩跡の7か所が検出され、A類に属する製塩跡3か所、B類に属する製塩跡2か所、C類とD類に属する製塩跡は各1か所ずつである。第46・56・68・70・77製塩跡が重複している。新旧関係は、層位の違いから第46製塩跡が最も新しく、次いで、第68製塩跡、第56製塩跡、第70製塩跡、第77製塩跡の順に古くなっている。重複していない第60製塩跡は第1グループが第70製塩跡とほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。第60製塩跡の第2グループは第77製塩跡とほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。II区の7か所の製塩跡からは遺物が出土していない。

III区(L3)は、標高9.10～11.80mから第9～11・13・17製塩跡の5か所が検出され、B類、D類及びJ類に属する製塩跡は各1か所ずつで、G類に属する製塩跡は2か所である。第9製塩跡と第11製塩跡が重複しており、新旧関係は、層位の違いから第9製塩跡が新しい。重複している第2製塩跡と重複していない第10・13・17製塩跡の竈の標高を基にその新旧関係を考えると、第9製塩跡は第17製塩跡の第1グループとほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。第11製塩跡は、第10製塩跡と第17製塩跡の第2グループとほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。III区の第9～11製塩跡の竈の覆土中から15世紀頃の内耳形土器の破片、第9製塩跡の竈の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器の皿片が出土している。

IV区(R4)は、標高7.17～8.90mから第22・23・31・36・37・41製塩跡の6か所が検出され、A類に属する製塩跡2か所、D～F類及びH類に属する製塩跡は各1か所ずつである。第31製塩跡と第36製塩跡が重複しており、新旧関係は、層位の違いから第31製塩跡が新しい。第37製塩跡と第41製塩跡も重複しており、新旧関係は、層位の違いから第37製塩跡が新しい。各製塩跡の竈の標高を基にその新旧関係を考えると、第31製塩跡と第37製塩跡がほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われ、さらに、第23・36・41製塩跡もほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。IV区の第23・31製塩跡の竈の覆土中から15世紀頃の内耳形土器の破片が出土している。

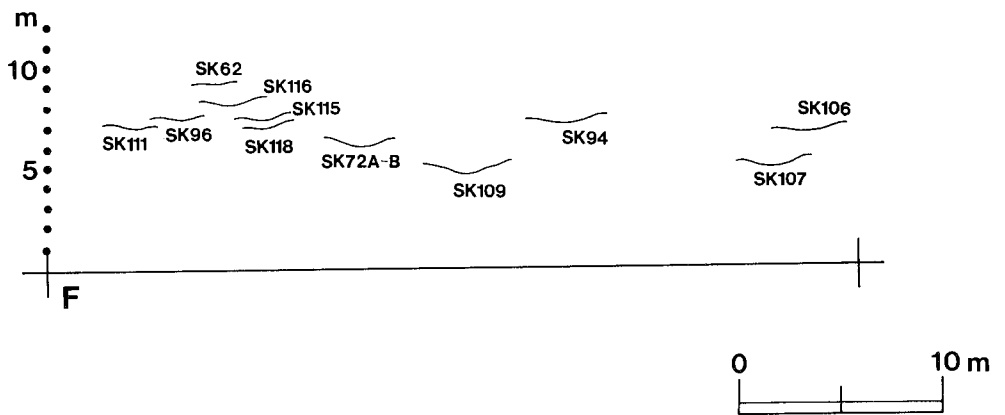
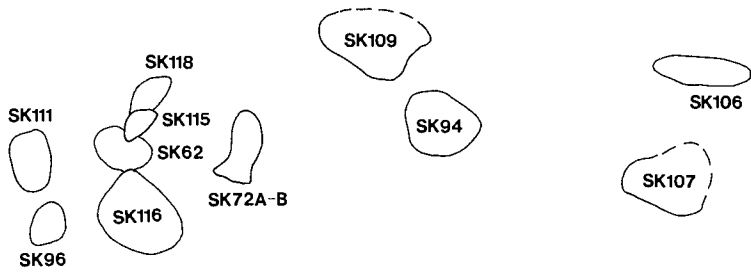
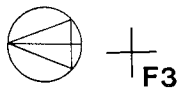
V区(W5)では、標高8.82～10.84mから第79～84製塩跡の6か所が検出され、A類、C類、D類及びG類に属する製塩跡は各1か所ずつで、E類に属する製塩跡2か所である。第79製塩跡と第81製塩跡が重複し、新旧関係は、層位の違いから第81製塩跡が新しい。第80製塩跡と第84製塩跡も重複しており、やはり、層位の違いから第80製塩跡が新しい。各製塩跡の竈の標高を基に

その新旧関係を考えてみると、第79・83・84製塩跡はほぼ同じ層位なので、同時期頃と思われる。第81製塩跡の第1グループの竈の覆土中から15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土している。

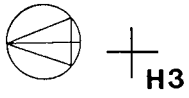
当遺跡から検出された84か所の製塩跡について竈を基本としてA～L類に分類し、その特徴を述べてみたが、製塩跡の基本的な構造は、前述したように竈、釜屋内鹹水槽、居出場、屋外鹹水槽及び土樋で構築されているE類であり、次いで、竈だけのA類と竈、釜屋内鹹水槽、居出場及び屋外鹹水槽のD類などが考えられる。E類は、標高3.01～11.00mから検出され、幾重にも関連する遺構が重複し、調査区の北部と南部の広範囲に分布し、全体的には海岸寄りに構築されている。ところが、D類に属する製塩跡のうち、明らかに土樋を伴わない第1～4・8・9製塩跡のように、屋外鹹水槽が釜屋のすぐ近くに等間隔で一直線に並んで構築された製塩跡は、海岸線から約65m以上奥に位置し、釜屋の標高も9.50～10.60mとE類より全体的に高い場所から検出されている。A類に属する製塩跡は、標高4.01～10.00mで、E類と同じように調査区の北部と南部の広範囲から検出されている。

これらのA～L類の製塩跡からは、表9のように標高4.00～11.00mの各層から15～16世紀頃の土師質土器の皿、15世紀頃の内耳形土器、14～16世紀頃の陶器がそれぞれ出土している。

また、製塩跡が集中しているI区からV区の5か所では、幾重にも製塩跡が重複して検出されているが、これらの製塩跡の集中地点は「千々乱風」伝説のように、製塩業を行っていた釜屋や鹹水槽等が強風によって埋まり何度も構築を繰り返された場所と思われる。



第333图 I 区(F3)集中製塩跡龜分布图



SK128

SK155

SK70

SK119

SK68

SK139



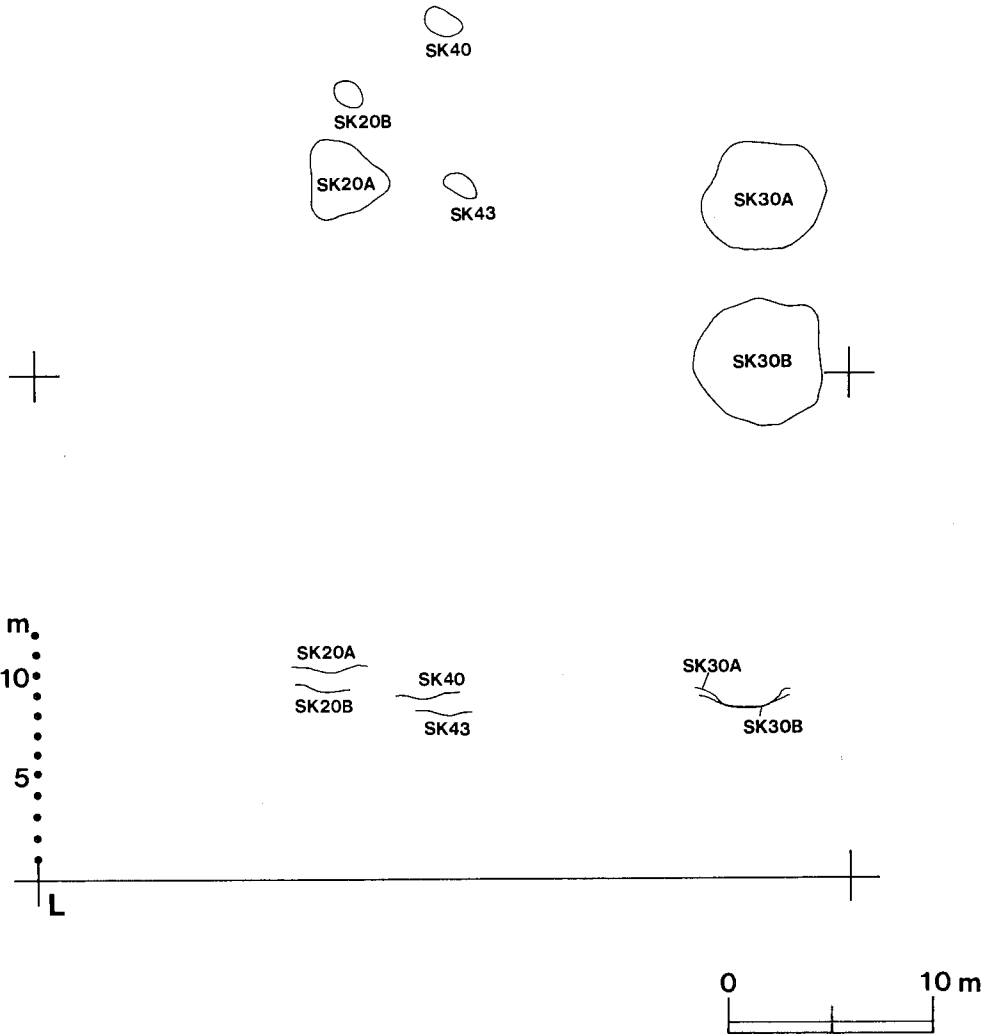
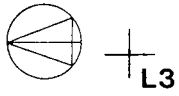
m.
10
5
H

SK128 SK139 SK155

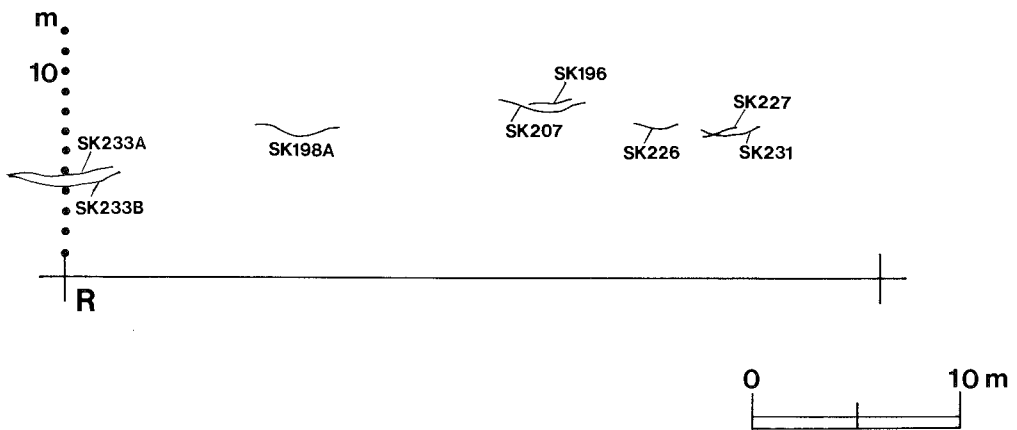
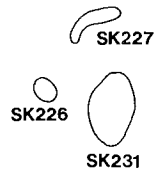
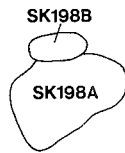
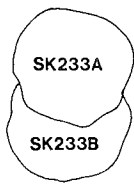
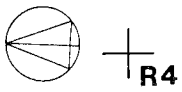
SK119 SK70 SK68

0 10 m

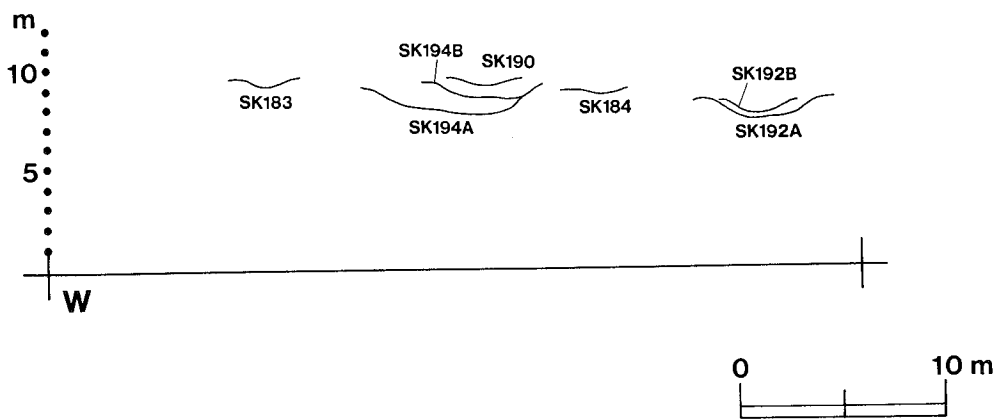
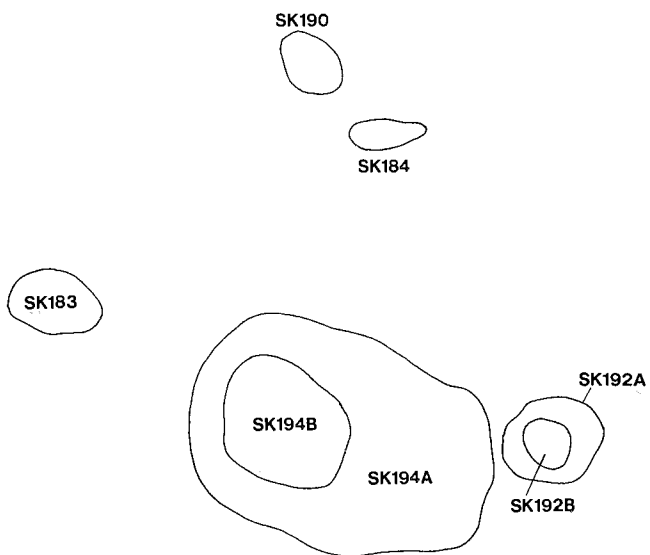
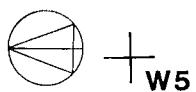
第334图II区(H3)集中製塩跡龜分布图



第335图III区(L3)集中製塩跡産分布図



第336图IV区(R4)集中製塩跡龜分布图



第337图 V区(W5)集中製塩跡地分布图

表9 各製塩跡のグルーピングされた遺構群の標高分布表

類 施設 標高	A 竈	B 竈+鹹水槽	C B+居出場	D C+屋外鹹水槽	E D+土樋	F 竈+鹹水槽+屋外 鹹水槽+土樋
11		1		○7△ (1), (45)	1	
10	1	3	3 (81)△	4 (10)○□	2	
9	3	4	1	5 (5)△○□	1	2 (44)△○
8	3 (49)△□	4 (58)△	7	4	10 △○ (31)	△○△ 4 △ (23), (47), (48)
7	14	1	4	8 (24)△	△ 9 (32)	
6	6 (69)□	1	1	5	△ 5 ○ □ (6), (33)	□ 3 △ (54), (73)
5	6	1 (15)△○□	1		7	
4					1	
3m						
合計	33	15	17	33	36	9
%	17.5	8	9.5	17.5	19	5

※ ()は遺物を出土している製塩跡の番号である。

G	H	I	J	K	L	合計	%
竈+鹹水槽 +屋外鹹水槽	竈+屋外 鹹水槽	竈+居出場+屋 外鹹水槽+土樋	竈+居出場	竈+居出場 +屋外鹹水槽	竈+鹹水槽+ 居出場+土樋		
			1	1		2	1
○□5△○ (2), (9)						14	7.5
△○○11○○ (3), (4), (11), (12)	2	1				27	14
6			2			24	13
1	1		1			35	19
3	2				1	42	22
	3					24	13
	3					18	10
						1	0.5
26	11	1	4	1	1	187	100
14	6	0.5	2	0.5	0.5	100	

△ 土師質土器の皿(15~16世紀頃)

○ 内耳形土器(15世紀頃)

□ 陶器(14~16世紀頃)

第3節 遺物

当遺跡からは、土器・陶磁器、石製品（石臼、砥石、石塔）、金属製品（舟釘、鎌、短刀、刀装具、吊金具、耳金）、古銭、木製品（担い棒、ろ過器、柄振、椀、櫛）、土製品（管状土錘）等が出土している。製塩業に伴う遺物は、木製品では担い棒、ろ過器、柄振、椀、金属製品では吊金具、耳金である。その他は、人骨が80体分ほど出土している。そこで、これらの遺物の中から、製塩業に関する木製品の担い棒、ろ過器、柄振、椀と金属製品の吊金具、耳金について述べ、次いで、その他の出土遺物の土師質土器、内耳形土器、陶磁器、短刀、煙管、古銭について概略を述べることにする。

1 製塩業に関する遺物について

担い棒（第338図1・2）

担い棒は、担い桶のてんびん棒のことである。竹も用いたが、木材のほうが加工によって肩の痛みが少なく、これが普及していた。第81号鹹水槽と第125号鹹水槽から25点出土している。法量は最大長58.5～87.7cm、径中央部1.1～3.7cmで、両端は次第に細くなっている。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物が出土している鹹水槽は、第5製塩跡と関連しており、同製塩跡の第21号鹹水槽からは15～16世紀頃の土師質土器の皿が出土していることから、ほぼ同時期頃に位置づけられるものと思われる。

ろ過器（第338図3）

ろ過器は、鹹水を釜に入れる前に、ろ過して不純物を取り去るものである。第81号鹹水槽から1点出土している。法量は口径40.6cm、底径36.6cm、器高20.2cmである。材質はマツ属の一種である。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物が出土している鹹水槽は、第5製塩跡と関連しており、担い棒と同様の時期に位置づけられるものと思われる。

柄振（第338図4・5）

柄振は、用途から灰掻き出し柄振と釜柄振に分けられる。灰掻き出し柄振（図4）は、竈内に堆積している灰を掻き出す時に使用するものである。第81号鹹水槽から1点、ろ過器や担い棒といっしょに出土している。法量は板部の最大長35.2cm、最大幅10.8cm、最大厚4.9cmである。材質はマツ属の一種である。黒く変色している。釜柄振（図5）は、釜の中で結晶した塩を押し引きして、採りあげやすいように集める時に使用するものである。第81号鹹水槽から1点出土している。法量は板部の最大長42.0cm、最大幅11.0cm、最大厚4.8cmである。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物が出土している鹹水槽は、第5製塩跡と関連しており、担い棒やろ過器と同様の時期に位置づけられるものと思われる。

椀（第338図6）

椀は、釜入杓として、鹹水槽から鹹水を汲み上げ、ろ過器や釜へ鹹水を汲み移す時に使用したものである。第81号鹹水槽から1点出土している椀（図6）の法量は、口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.0cmである。材質はハンノキ属の一種である。第116号鹹水槽から1点出土している椀の法量は、口径15.0cm、底径6.3cm、器高5.3cmである。材質はハンノキ属の一種である。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物が出土している鹹水槽は、第5製塩跡と関連しており、担い棒やろ過器、柄振と同様の時期に位置づけられるものと思われる。

吊金具（第338図9・10）

吊金具は、第10号竈と第223号竈Aの覆土からと、遺構外から出土したものが6点ある。「S」字形を呈した鉄製の吊金具で、下部を土釜にかけ、上部を縄で小渡りにつるし、釜の水平を保つために使用されるものである。残存している最大長は6.8cm～10.9cm、最大厚0.4～0.7cmである。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物のうち、第10号竈と第223号竈Aから出土している吊金具は、15世紀頃の内耳形土器といっしょに出土していることから、ほぼ同時期頃に位置づけられるものと思われる。

耳金（第338図7・8）

耳金は、28点出土しており、第12・68・89・130・166・181・188・193・202・204・207・223号竈Aや第588・610・814・818・828号鹹水槽の覆土と、遺構外から出土したものである。耳金はコの字形をした鉄製の金具で、土釜の四方にはめこみ、釜を支えるために使用されたものである。残存している最大長は5.2～18.5cm、最大厚は0.3～1.1cmである。本遺物から時期を見いだすことはできなかったが、本遺物のうち、第12・89・207・223号竈Aから出土している耳金は、15～16世紀頃の土師質土器の皿や15世紀頃の内耳形土器といっしょに出土していることから、ほぼ同時期頃に位置づけられるものと思われる。

2 その他の遺物について

土師質土器（第338図11～13）

土師質土器は、破片まで含めて1,055点出土しており、そのうち実測可能なものは25点である。土師質土器が出土している遺構は第11・12・19・24・57・68・89～91・134・166号竈A、第65・67号炉、第69・175号土坑、第2・3・5の21・27・136・591・601・615・721・722・784・832・864号鹹水槽から56点出土し、その他は遺構外からの出土である。土師質土器の器種はすべて皿である。器形は、平底で、体部が直線的（図11・13）あるいは内彎気味（図12）に開き、口唇部を丸くおさめている。手法は、水挽きで、横ナデ、底部回転糸切りが施されている。口径値から大形のもの（口径が8cm以上12cm未満）と小形のもの（口径が5cm以上8cm未満）とに大別するこ

とができる。

第69号土坑出土の皿は、口唇部の内面に煤と思われる黒色の付着物がみられ、灯明皿として使用されたものと思われる。その他、第591・721・722・864号鹹水槽出土の皿は、使用後、底部に穿孔されているもの(図12)であるが、穿孔理由は不明である。

これらの25点の土師質土器の皿は、15~16世紀頃の時期⁽¹⁾に位置づけられるものと思われる。

内耳形土器 (第338図14)

内耳形土器は、破片を含めて4,818点出土しており、当遺跡出土遺物の中で最も多い。内耳形土器を出土している遺構は、第9~11・19・20・24・30・57・198・207・223号竈A、第21・23・65号土坑、第3~8・10・13~15・5の28・56・57・60・64・136・139・160・163・169号鹹水槽、第21号土樋で、209点出土し、その他は遺構外からの出土である。器形は、平底で、体部は直線のあるいは内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。頸部内面に幅広の浅い凹線が巡る。

耳は3か所に付けられている。手法は口縁部内・外面横ナデ、体部内・外面ナデが施されている。

竜ヶ崎市の屋代B遺跡⁽²⁾から出土している内耳形土器(図14)と同じ器形と手法である。なかには、屋代B遺跡から出土しているものと同じヘラ記号が施されているもの(図14)もみられる。体部外面に鍋墨が付着していることから、土鍋として使用していたものと考えられる。第21・23号土坑から出土している内耳形土器は人骨を伴って出土しており、埋葬する際に人骨にかぶせて、二次的に利用したものと思われる。栃木県の赤塚遺跡⁽³⁾や大町遺跡⁽⁴⁾出土のものに類似しており、15世紀を中心とした時期⁽¹⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾に位置づけられるものと思われる。

陶磁器 (第338図15~17)

陶磁器の出土総数は421点を数え、いずれも破片である。これらが出土している遺構は、第2・11・20・24・91・126・157・223号竈A、第5の35号鹹水槽、第5・59号土坑、第65・102・149・215号炉で、26点出土し、その他は遺構外からの出土である。陶器は片口鉢、甕、皿、碗、擂鉢、壺、おろし皿、香炉、筒形容器である。渡来品はなく、国内製品だけで、主に瀬戸・常滑産である。特に、瀬戸焼の皿類(図15~17)が10点を数え、最も多くみられ、14世紀から15世紀頃の時期⁽⁷⁾に位置づけられる。常滑産の甕と壺も、15世紀頃の時期⁽⁸⁾に位置づけられるものと思われる。磁器は、18世紀初め頃⁽⁹⁾に位置づけられる伊万里焼及び美濃焼の徳利と碗がみられる。

短刀、煙管、古銭

短刀は、調査区のG1i₉区出土で、室町時代頃のものである。M3区表採や第223号鹹水槽付近出土の煙管は、17世紀前半から19世紀に位置づけられるものと思われる。古銭は93点出土し、最も多いのが北宋銭で68点、次いで明銭12点、唐銭6点、南宋銭2点、元銭1点で、日本銭4点である。これらの古銭が流通した時期を考えると、唐、元、北宋及び南宋銭は宗教的奉養による埋納品の類として扱った場合、「永楽銭渡来から天保通寶初鑄の間」と一応推定して、⁽¹¹⁾「上限を15世紀、

下限は19世紀」とみることが可能である。

以上のことから、当遺跡出土遺物の多くは、15世紀前後を中心に位置づけられるものと考えられる。

3 遺構と遺物から窺う塩づくり

当初の調査は、沢田遺跡には、「千々乱風」伝説があり、当初その伝説が解明されるのではないかと期待されていたが、調査の結果、大規模な揚浜式製塩跡であることが判明した。ここでは、前述した遺構と遺物とを絡めて当遺跡の全体像を簡単に述べてみることにする。

当遺跡で検出された遺構は、瀬戸内で行われている入浜式製塩ではなく、大規模な揚浜式製塩である。揚浜式製塩は、まず人力で汲み上げた海水を砂浜にまいて天日乾燥させる。次に、塩分が付いた砂を集め、海水をかけて砂についた塩分を溶かし出し、濃い塩水（鹹水）を作り出す。さらに、この濃い塩水を釜で煮つめて塩を取り出す方法を言う。

当遺跡から検出された製塩跡は揚浜式製塩跡で、一般的な形態は、釜屋があって、釜屋内の中心部あるいは北寄りには竈がある。その東側の海よりには2基の小形の鹹水槽が、南側には苦汁を抜く居出場（水槽）が位置している。さらに、釜屋外には東側の海よりには大形の鹹水槽が5～6基ほど南北に並んでいる。そして、大形の鹹水槽と釜屋内の小形の鹹水槽の間を土樋で結んでいる。

当遺跡における揚浜式製塩跡は、担い棒に桶を二つ下げて浜辺に行き、人力で海水を汲み上げ、何度も砂浜にまいて日光で海水を乾燥させ、塩の付着した砂を海水で流して濃い塩水（鹹水）を作り、屋外の大形鹹水槽に溜めていた。鹹水は必要に応じて鹹水槽から柄杓で汲み上げ、土樋を通して釜内の鹹水槽に少しずつ流し、釜内の南側の鹹水槽に溜めていた。釜で鹹水を煮つめる時には、釜内の北側の鹹水槽に南側の鹹水槽の鹹水をろ過して、泥などを取り除いた濃い塩水を溜め、柄杓で汲み上げ何度も釜に入れ、釜の中に結晶した塩が一杯になるまで塩焚を行う。塩焚が終わると、釜の中の結晶した塩を釜柄振で押し引きして集め、塩のなかに混じっている苦汁を取り出すために、竈の南側に付設されている居出場と呼ばれる水槽の上の箆に入れ、一昼夜置いて苦汁を下垂れさせて水槽に溜める。その後は、苦汁のぬけた塩をかます吠に入れ、目方をはかり、俵装したと思われる。

これらの一連の工程は、江戸時代に描かれた絵巻で「行徳の製塩作業場」（江戸名所図会）に同じような風景が見られる。さらに、その後、俵装された塩は、倉庫などに格納し、馬などに積んで各地へ運びだされたものと思われる。

なお、塩焚でできた灰は、当時は大切な肥料で、灰掻き出し柄振で竈内から掻き出して大事に保管し、畑等の肥料にしたと思われる。



第338図 沢田遺跡の揚浜式塩づくり予想図

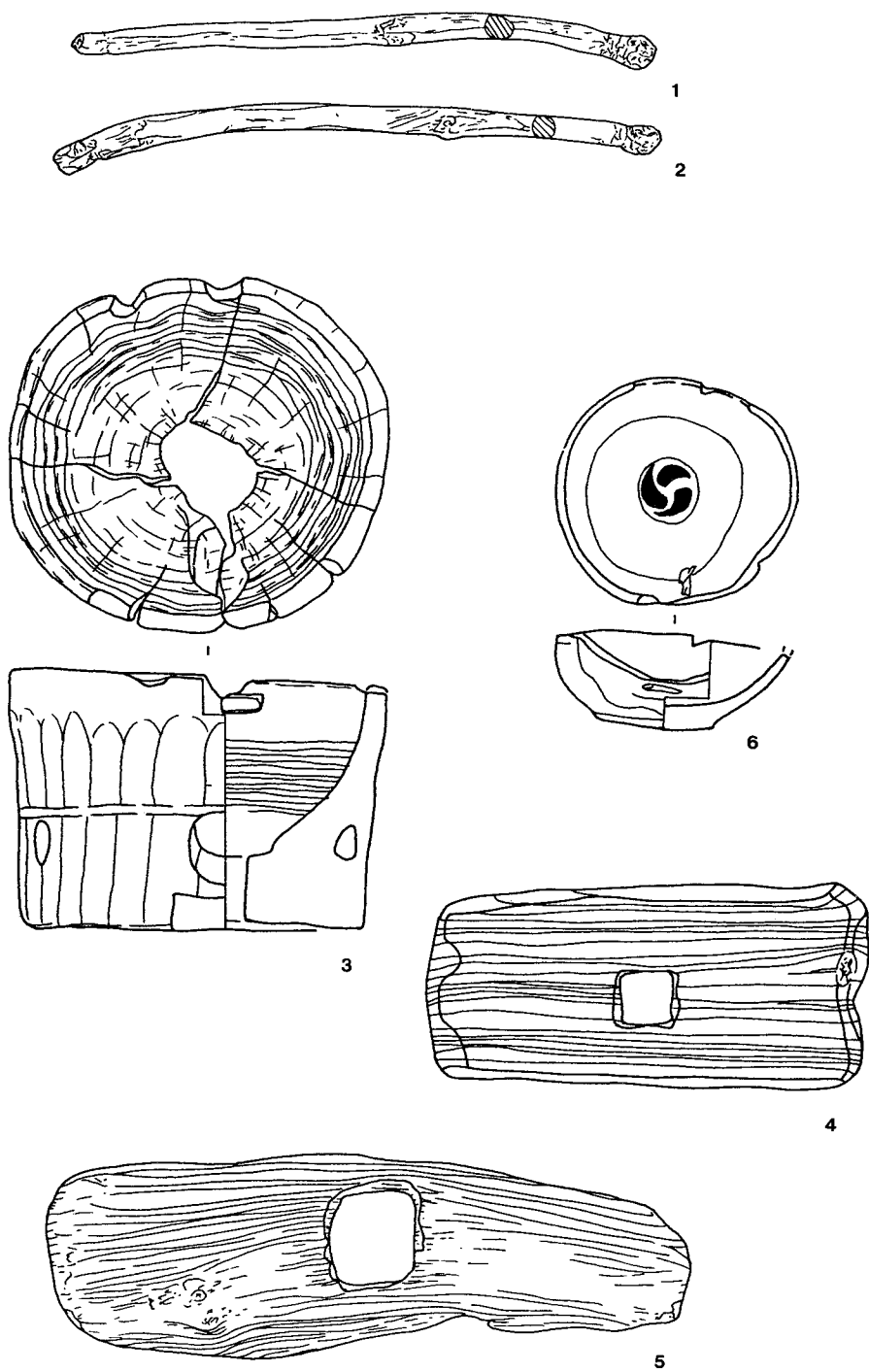
当地でこの揚浜式製塩法が、古くから行われていた理由は、南北3.2kmに及ぶ長い砂丘地帯を有する地理的条件にある。次いで、塩焚の時に必要な多くの燃料用の木材を、近くの山林から得やすいことである。この二つの製塩業の要件については、廣山堯道氏(1978)の著書⁽¹²⁾で述べられているように、若狭・伊勢の地と同じで、日本海側と太平洋の外海に面し、潮の干満差が小さく波の荒い海岸に見られる。しかし、海岸に砂浜がない能登半島では、海面より一段高い場所に、粘土で人工の塩浜の地盤(塗浜)を築いた方法で行っている⁽¹²⁾。この地理的条件を当遺跡に照らしてみると、ぴったり一致するものがあり、特に「塩田」といわれている遺構は存在しない揚浜式製塩が行われていたものと思われる。廣山氏は、茨城県の太平洋沿岸には砂浜が多く、揚浜系の塩浜が始められたのは「親鸞伝絵」に見られるごとく、鎌倉時代頃と見ている。

当遺跡での製塩の開始時期は、製塩跡からの出土遺物や文献資料からはいちがいに決定できないが、鎌倉時代後半に位置づけられるものと思われる。そして、第1節で述べたように、15世紀頃から「千々乱風」伝説が生じた元和年間(桃山時代)頃までが、当遺跡における製塩の最盛期であったと思われる。江戸時代中期頃から瀬戸内の格安の塩の移入によって影響を受け、製塩業の規模は縮小の一途をたどっていったが、明治時代以降も細々ながら製塩を行っていたものと思われる。

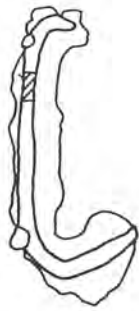
注・参考文献

- (1) 浅野晴樹 「関東における中世在地土器について」 『研究紀要第4号』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- (2) 茨城県教育財団 「屋代B遺跡III」 茨城県教育財団文化財調査報告第45集 1988年
- (3) 栃木県教育委員会 「赤塚遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集 1981年

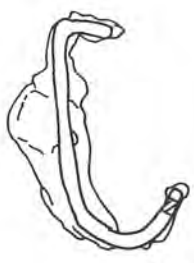
- (4) 栃木県上三川町教育委員会 「大町遺跡」 上三川町埋蔵文化財調査報告書第5集 1984年
- (5) 足立順司 「内耳土器について」 『研究連絡誌第6号』 千葉県文化財センター 1982年
- (6) 津田芳男 「所謂内耳土器について」 『茂原市文化財センター年報No.3』 茂原市文化財センター
- (7) 檜崎彰一 「日本の陶磁3 古代・中世 瀬戸・美濃」 学生社 1990年
- (8) 檜崎彰一 「日本の陶磁4 古代・中世 常滑・渥美・猿投」 学生社 1990年
- (9) 芸術新潮編集部 「やきもの鑑定入門」 新潮社 1983年
- (10) 古泉弘 「江戸の街の出土遺物」 『季刊考古学第13号』 雄山閣 1985年
- (11) 矢島恭介 「日本出土銭貨一覧」 『日本考古学辞典』 東京堂 1962年
- (12) 廣山堯道 「塩の日本史」 雄山閣 1990年



第339図 主な出土遺物実測図



7



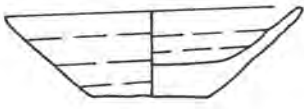
8



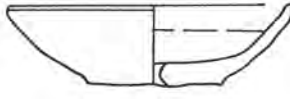
9



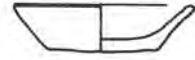
10



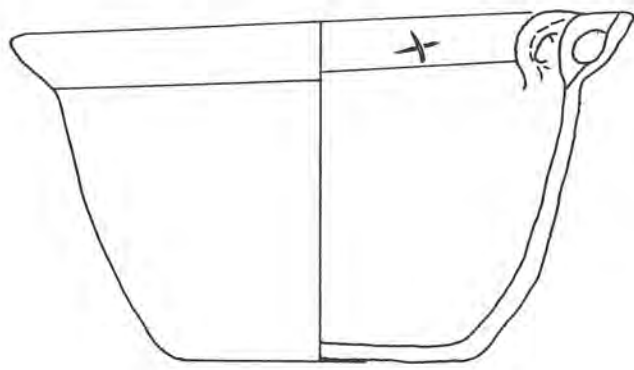
11



12



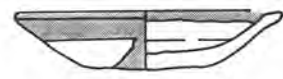
13



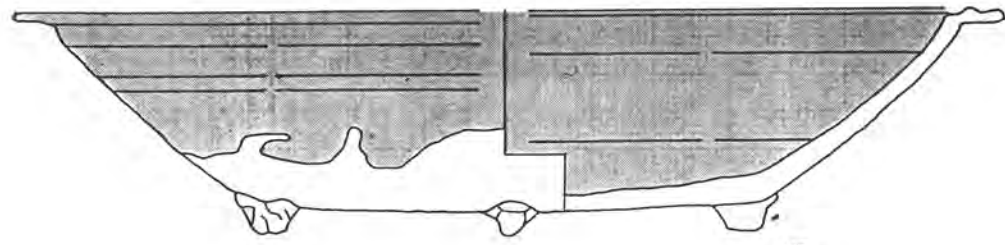
14



15



16



17

第4節 埋葬遺構について

当遺跡から、内耳形土器の破片は4,818点出土しており、出土遺物の中で最も多い。これらの多くは、人骨が集中して出土している標高15.2mの通称青塚と呼ばれているH2・3区と、調査区の南端で標高13.8mのX4区付近から出土している。そして、第21・23号土坑からは人骨を伴って内耳形土器が出土しているので、内耳形土器と埋葬との関係について、述べてみたい。

内耳形土器は、土器の口縁内側に主として縦の方向に耳状環を対照位置に付けたもので、形式上の分類から「鍋形」という名称を用い、内耳付土鍋と呼称される。機能面からみると、外面に鍋墨と考えられる黒色の炭化物が付着していることから煮沸形態土器としての使用が窺える。この内耳形土器は中世を中心に、一部では近世初めまで及ぶ日常雑器で、深みのある鍋の系統と浅いホウロク(1)の系統とがある。その出土例は、本州、北海道、千島、樺太等の城館跡や集落跡などから出土している。茨城県内の出土例も、鎌倉時代から戦国時代にかけての外八代遺跡(1)（竜ヶ崎市）、鹿島城跡(2)(3)（鹿島町）、玉造城跡(4)（玉造町）、大室城跡(5)（阿見町）、大台城跡(6)（牛堀町）、畑田城跡(7)（鉾田町）、神明城跡(8)（北浦村）、石神城跡(9)（東海村）、和歌（島）城跡(10)（八千代町）、戸倉館跡(11)（七会村）等の山城あるいは館跡、長峰遺跡(12)（龍ヶ崎市）、屋代B遺跡(13)~(15)（龍ヶ崎市）、武田遺跡群(16)（勝田市）、角内遺跡(17)（鹿島町）、松原遺跡(18)（つくば市大曾根）、畑田遺跡(19)（鉾田町）、屋代A遺跡(20)（龍ヶ崎市）、洞坂畑遺跡(21)（谷和原村）等の堀、土坑、溝、地下式墳から出土している。その他、武井釜製塩遺跡(22)（大野村）からも出土している。当遺跡出土の内耳形土器は、屋代A遺跡、屋代B遺跡、赤塚遺跡及び大町遺跡出土の土器に類似している。

屋代B遺跡や赤塚遺跡から出土している内耳形土器は墓墳群と考えられる土坑から出土しているが、同じような類例は佐藤次男氏や岩手県埋蔵文化財センターの鈴木恵治氏の調査例にもみられる。

例1は、岩手県九戸村山根遺跡(25)(26)出土で、内耳鉄鍋をかぶった人骨が発見されており、中世の和人で、性別は男、壮年期後半～熟年期前半と結論づけている。内耳鉄鍋は三耳式で12世紀頃のものである。

例2は、青森県十和田市洞内出土で、内耳鉄鍋三個と洪武通寶、無紋銭、それに頭骨とさらに南部家の武田菱の紋のある兜、甲冑、刀剣、馬具、鉄鏃などが伴出しており、南部家の祖南部三郎の墓と考えられている。

例3は、長野県小県郡丸子町出土で、内耳形土器の底を上にもかけて、その下に頭骨があり、さらに骨片があった。人骨の状態は屈葬であつたらしい。

なお、小県郡下では、死者を入棺し、この棺を座敷に安置し、葬送のとき棺をにない出したあと、すぐに棺を安置した場所へ、ホウロク（土器）の底を上にもかけて置き、野辺送りがすんだ後、

このホウロクを取り片付けるという習俗が残っている。

例4は、千葉市生実町高沢古墳群⁽²⁵⁾の5号の土坑で、内耳土器、鉄刀、釘、古銭2枚(政和通寶・永楽通寶)、播鉢等を出土しており、土坑墓的要素を持っている。

例5は、茨城県勝田市東中根出土⁽²⁶⁾で、内耳形土器の底を上に向けて、その下に人骨があり、いっしょに寛永通寶6枚が出土している。

以上の事例で明らかのように、人骨と内耳形土器が共伴して発見されている。さらに、古銭を伴っているものも見られる。これらのことから考えると、人骨に内耳形土器を伴っているのは、銭を六道銭として埋葬時に使用しているのと同じように、葬送習俗によるものと思われる。

なお、頭部に鍋をかぶせて埋葬するのは、遺体を保護するためとか、死者が疫病などの死であった場合に、その災いを封じ込めるためなどの習俗が考えられるが、明確な理由はわからない。このように、通称青塚と呼ばれているH2・3区と調査区の南端で標高13.8mのX4区を中心とする場所から出土している内耳形土器片は、葬送習俗によったものと思われ、さらに、これらの葬送習俗は、当遺跡出土の内耳形土器が第3節で述べたように15世紀を中心とした時期に位置づけられることから、15世紀以降に行われていたものと考えられる。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育財団 「外八代遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第2集 1980年
- (2) 鹿島町教育委員会 「鹿島城址予備調査概報」 1980年
- (3) 鹿島町教育委員会 「鹿島城址」 1985年
- (4) 玉造町教育委員会 「行方郡玉造城跡本丸発掘調査報告書」 1990年
- (5) 阿見町教育委員会 「大室城跡」 1982年
- (6) 牛堀町教育委員会 「堀之内大台城跡」 1985年
- (7) 茨城県教育財団 「畑田城跡・畑田川波遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第68集 1991年
- (8) 茨城県教育財団 「神明城跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第48集 1988年
- (9) 東海村教育委員会 「石神城跡」 茨城県那珂郡東海村所在中世城跡の調査(第2次調査) 1991年
- (10) 八千代町教育委員会 「和歌(島)城跡確認調査報告書」 八千代町埋蔵文化財調査報告書3 1985年
- (11) 七会村教育委員会 「戸倉館跡」 1990年
- (12) 茨城県教育財団 「長峰遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第58集 1990年
- (13) 茨城県教育財団 「屋代B遺跡I」 茨城県教育財団文化財調査報告第33集 1986年
- (14) 茨城県教育財団 「屋代B遺跡II」 茨城県教育財団文化財調査報告第40集 1987年
- (15) 茨城県教育財団 「屋代B遺跡III」 茨城県教育財団文化財調査報告第45集 1988年
- (16) 勝田市文化振興公社 「武田III」 勝田市文化振興公社文化財調査報告第3集 1990年

- (17) 鹿島町教育委員会 「角内遺跡」 鹿島町の文化財第16集 1980年
- (18) 茨城県教育財団 「松原遺跡外」 茨城県教育財団文化財調査報告第56集 1991年
- (19) 茨城県教育財団 「畑田遺跡外」 茨城県教育財団文化財調査報告第6集 1980年
- (20) 谷和原村教育委員会 「洞坂畑遺跡」 1978年
- (21) 茨城県教育財団 「屋代A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第14集 1982年
- (22) 大野村教育委員会 「武井釜製塩遺跡」 『大野村史』 1979年
- (23) 栃木県教育委員会 「赤塚遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集 1981年
- (24) 栃木県上三川町教育委員会 「大町遺跡」 上三川町埋蔵文化財調査報告書第5集 1984年
- (25) 田形孝一 「内耳土器について」 『研究連絡誌第6号』 千葉県文化財センター 1982年
- (26) 佐藤次男 「伝説千々乱風」 『茨城県史研究32』 茨城県史編さん委員会 1974年
- (27) 草間俊一・森本岩太郎 「内耳鉄鍋と人骨」 岩手県九戸村教育委員会 1972年
- (28) 岩手県埋蔵文化財センター 「玉貫遺跡・西根遺跡」 金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 1980年
- (29) 岩手県埋蔵文化財センター 「岩手の遺跡」 1984年

第5節 塩の流通

沢田遺跡が塩の生産地であったとすれば、塩の消費地が存在するはずである。塩は海の産物であり、戦国時代「敵に塩を贈る」という逸話があるように、内陸に住む人々にとっても塩は必要不可欠なものであった。本節では沢田遺跡の塩がどのようなルートで運ばれたのか述べてみることにする。

沢田遺跡周辺からの塩の流通経路は陸路と水路の二通りが考えられるが、残念ながら文献はほとんど残っていない。唯一『新編常陸国誌』の中に、「村田渫濟云、本国ニ鹽海道ト云アリ、世俗ノ説ニ、コノ海道ハ本国ヨリ京師ニ至ルマデ直道ナリト云、難所多ケレドモ、尤モ近シ、一日ニシテ江戸ニ至ルベシト云リ、コノ海道ノハテハ鹽崎村ナリ、鹽ノ崎ヨリハ小路ニ入り、佐竹ノ物見塚へ出(物見塚ハ町附村ニアリ)、又小路ニ入り、笠原不動ノ下ヲ行クヨシ、大道小路ヲ押切テユクコト故、渡ヲ渉ルコト多シ、鹽ノ崎ヨリ途ヲハジムル故、鹽海道ト云ニヤアリト」とあり、この道は、鹿島方面から海岸線を北上し、大貫⁽¹⁾(大洗町)を経て酒沼川を渡り平戸^{ひらど}(旧常澄村)を通り塩ヶ崎へ至る道であったことがわかる。塩ヶ崎からは北西に進路を変え、水戸方面へと伸びている。この「塩の道」を塩ヶ崎から実際に歩いて調べた梶田昌徳氏によれば、前浜、湊村(現那珂湊市)の荷は舟で酒沼川を上り平戸から陸路で塩ヶ崎へ向かうという。同地の折居神社の南側の坂道を上がり、大串^{おおくし}の宿内、木戸前、大場^{おおば}の中坪^{なかつぼ}(旧常澄村)を経て、佐竹氏支配の頃の物見塚と言われている塚がある町附^{まちづき}(水戸市酒門町)で「古代の官道、奥州街道と交差する」とし、町附から更に西へ進み、笠原^{かさらは}、千波^{せんば}、河和田町^{かわわだ}(水戸市)へ至る。河和田町周辺には古い伝承が多く、榎本地区には昔、市が開かれ、塩沢という塩の豪商が屋敷を構えていたことや、親鸞上人の弟子唯円が同地に道場を開いたのも塩街道により栄えた現れであろうと言われている。河和田町からは北西方向に進み、飯島町(水戸市)の鹿島神社前で二路に分かれる。一方は西へ伸び、筑地(内原町)、和尚塚(友部町)、佐伯山^{さしほ}の南側を廻り大郷戸^{おおごうと}(笠間市)を経て、岩瀬町、協和町を過ぎ下野国国府へ至り、もう一方は北へ伸び、加倉井町^{かくらい}、木葉下町^{あばつけ}(水戸市)、古内(常北町)、塩子^{しおご}(七会村)を経て茂木、日光方面へと至るとしている。現在は畑や宅地造成により原形をとどめていない所が多いが、さらに同氏は、「水戸市酒門町町付から古宿、笠原町、千波町、河和田町南区までは塩街道と呼ぶ。飯島町まではなまったのかシヨ街道。内原町和尚塚下の坂道が塩街道。常北町の古内や栃木県茂木町内に塩街道の名があると聞く。」と書いていることから、この街道が「塩の道」であることがわかる。県内には「塩」のつく地名をいくつかあげることができるが、塩子(七会村)という地名もこの「塩の道」と関係があるものと思われる。

このように各地に「塩街道」という名が残っていることや昔の市の伝承⁽³⁾、そして海岸より那珂川沿いに下野方面へ至っていることから、馬あるいは人によってこの街道を利用して塩が運ばれ

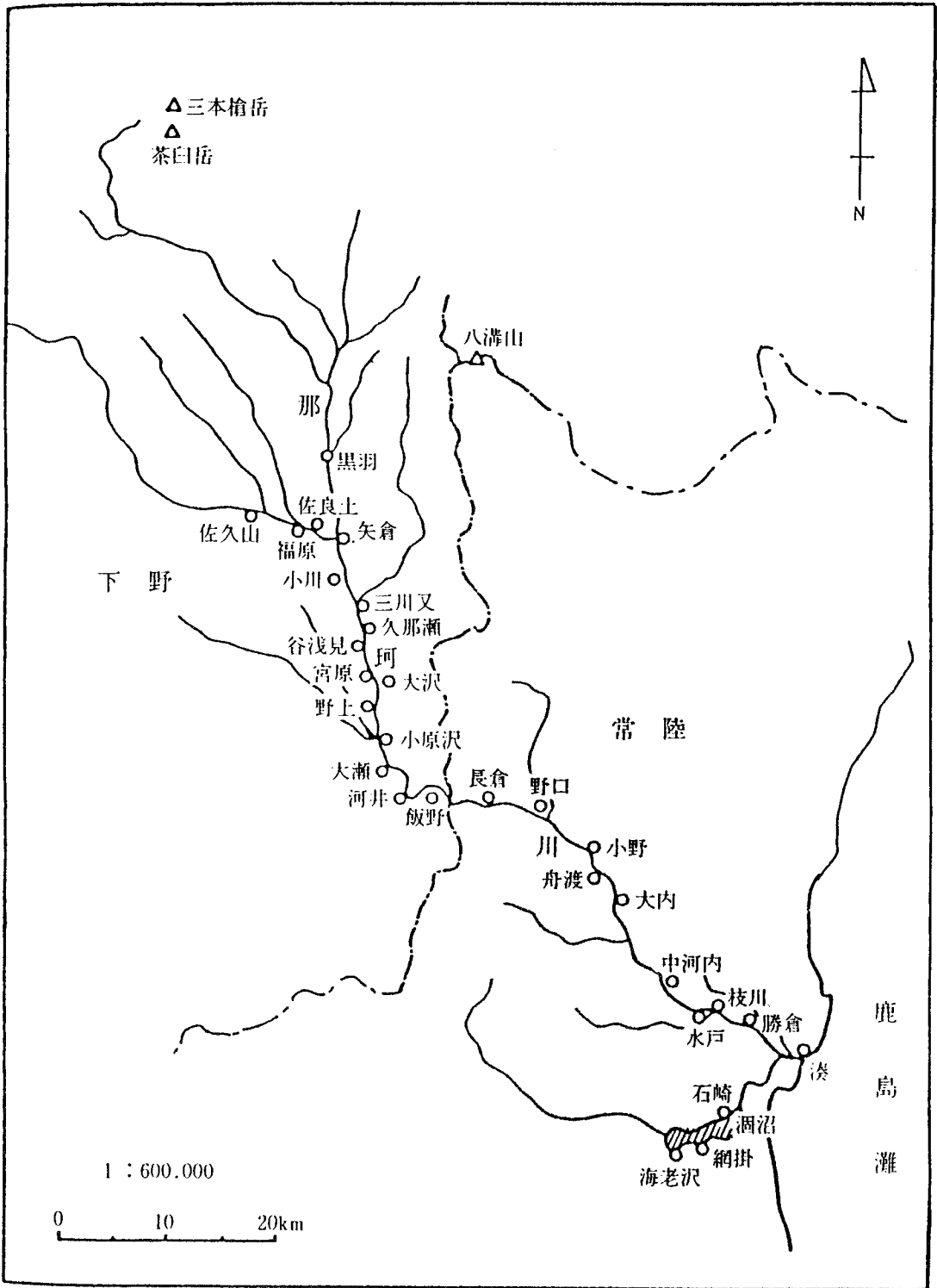
たものと考えられる。

水路については、近世になって那珂湊が奥州や北海道と江戸を結ぶ海上輸送の中継港⁽⁴⁾としての位置を占めるようになり、これに伴い、那珂川の舟運が発展し、河口の那珂湊や城下町として発展した水戸を中心にたくさんの河岸^{かし}⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾が設けられ、上流部と下流部の物資の往来が盛んに行われるようになった。上流からは水戸城で使用する年貢米や薪炭、材木の他に雑穀類、煙草、楮皮、菜種油等が運ばれ、下流からは醤油、味噌、塩、魚介類等が運ばれたという記録が残っている。その中には「塩」も記載されてはいるが、資料⁽⁴⁾によると近世の中頃の塩は、瀬戸内海沿岸で生産された赤穂（兵庫県）や齋田（徳島県）の塩が多数を占めていたと記載されている。従って在地産の塩が運ばれていたかどうかは不明である。

これらのことから、沢田周辺で生産された塩は、中世においては鹿島灘沿いで生産された塩同様に塩街道を通じて下野方面まで流通していたものと思われるが、近世になると海運や河川を利用した舟運が発達し、遠方からの物資や在地産の物資の大量輸送が可能となったことに伴い、赤穂や齋田産の塩におされ、自村及び近隣村への供給と自家消費用として流通していたものと思われる。

注・参考文献

- (1) 宮崎報恩会版 「新編常陸国誌」 崙書房 1973年
- (2) 梶田昌徳 「水戸の塩街道」 『茨城の民俗 第10号』 茨城民俗学会 1971年
- (3) 河和田記念誌編集委員会 「かわわだ 水戸市市制100周年記念」 1990年
- (4) 茨城県 「茨城県史＝近世編」 1985年
- (5) 堀口友一 「那珂川流域の街道と舟運」 『常総の歴史 第4号』 崙書房 1989年
- (6) 御前山村郷土誌編纂委員会 「御前山村郷土誌」 1990年
- (7) 勝田市史編纂委員会 「勝田市史 民俗編」 1975年



第341図 近世那珂川流域における街道 (堀口友一氏 作成 1989)

結 語

昭和63年4月から平成3年3月にかけて実施された那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚に所在する沢田遺跡の発掘調査(SA2～SA4)は、常陸那珂港の作業基地建設工事に伴うもので、平成3年4月から平成4年3月までの整理業務をもって完了する運びとなった。

当遺跡は、太平洋に面した砂丘地帯にあり、江戸時代初期に連日の強風により村が砂に埋もれてしまったという「千々乱風」伝説の地でもあった。調査の結果、埋もれた村は発見されなかったが、大規模な揚浜式の製塩跡であることが判明した。

今回の調査(SA2～SA4)で発見された製塩跡は84か所で、その内訳は竈123基、鹹水槽920基、土樋274条の製塩に関する施設である。各製塩遺構は、第2節で述べたように、竈、釜屋内鹹水槽、居出場、屋外鹹水槽及び土樋の構成が基本のE類が中心であるが、その他、竈だけのものや土樋を伴わないもの等に分類できる。これらの製塩遺構は、集中地点をもちながら調査区全域に分布している。遺構の集中している地点では、何層にもわたって竈や鹹水槽が検出されていることから、砂に埋もれる度に構築されていったものと思われる。

出土遺物は全体的に少なかったものの、製塩業に伴う遺物としては、担い棒(木製品)、柄振(木製品)、ろ過器(木製品)、吊金具(鉄製品)、耳金(鉄製品)、椀転用杓(木製品)等が出土している。その他、土師質土器の皿、内耳形土器、陶磁器、古銭、石製品(石臼、石塔、砥石)等が出土している。

当遺跡は、これらの遺構や遺物を基に考えると、中世から近世初期にかけての自然浜を利用した揚浜式製塩法による大規模な製塩地帯であったことが明らかになった。

この沢田遺跡の調査によって得られた数々の資料が、那珂湊市の歴史はもとより、製塩遺構を解明する上でささやかな一助となれば幸いである。製塩遺構の調査例は全国的にも少なく、従って、今回の調査により知り得た事実については、極力客観的に記録するように努めた。しかし、時間的な制約の中で、他の類例との比較検討も十分とは言えず、深く掘り下げて考察を加えられなかった面も多い。

最後に、本報告書をまとめるにあたり、那珂湊市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導・御協力に対し、文末ではあるが深く感謝の意を表する次第である。

付 章

沢田遺跡出土人骨

国立科学博物館人類研究部

馬場悠男・梶ヶ山真里

はじめに

沢田遺跡は茨城県那珂湊市阿字ヶ浦町字青塚にあり、茨城県教育財団によって、1989年4月から1992年3月にかけて発掘調査された。遺跡の主体は、釜屋、鹹水槽及び土樋などで構成される中世から近世の製塩跡である。ここに報告する人骨は、特定の墓域をもたず、発掘調査地域の北側を中心に点在して出土したものである。出土地点の明らかな1から69号(26号欠)は、ほとんどが屈葬であった。さらに、出土地点の不明な人骨もあり、固体の区別はなく採取してある(9地点)。

出土人骨の概略

出土地点の明らかな69地点と、出土地点の不明な9地点(追加資料も含む)の人骨に関して、年齢・性別・特徴的な形態について述べる。また、代表的な男女の人骨(3・33号)と古病理学的所見を別項とする。

人骨番号 (SA-3)	年齢・性別	観察記録
1	幼児(2~3才)	第1大臼歯が歯冠のみ 尺骨体長9cm, 脛骨体長8cm
2	乳児(0才)	第1乳臼歯が歯冠のみ 生後約6ヵ月
3	♀青年前期	後述
4	幼児 (1才6ヵ月)	第1乳臼歯が萌出 第1大臼歯は歯冠のみ
5	♀壮年後期	顔面平坦 前頭縫合残存 三主縫合開離 上顎歯槽部の退縮が激しい。歯は歯槽膿漏でほとんど生前に脱落 咬耗はプロカのIII 椎骨が変形し骨棘形成顕著 推定身長146cm 全体として華奢である。

- 6 ♂ 壮年後期～熟年 眉間・眉弓の隆起なし 頭は小さい。縫合の走向が複雑 縫合は内板で癒合消失，外板で閉鎖途中 遊離歯の咬耗が著しい（プロカのIII～IV）。大腿上部が偏平 左脛骨に骨梅毒所見（写真VII-7）。
- 7 幼児（2～3才） 第1・2乳臼歯が萌出 第1大臼歯は歯冠のみ
上腕骨の中央最小/最大径は右9/10.5, 左9/11mm 上腕骨体長は10cm程度
- 8 ♂ 壮年後期 眉間の隆起は明瞭 鼻根の陥入も深い 眼窩は横長四角で大きい。外後頭隆起が非常に発達し，オピストクラニオン（最後方突出点）の位置が低い。脳頭蓋の板間層が厚く，断面全体の厚さは1cmをこえる。縫合は外板で消失
歯の保存状況は以下の通り
- | | | | |
|-----------------|--|-----------------|------------|
| ○ 7 6 5 4 ○ ○ ○ | | ○ ○ 3 4 5 6 × × | × 生前脱落歯槽閉鎖 |
| 8 7 6 5 4 3 2 1 | | 1 2 3 4 5 6 ○ 8 | ○ 死後脱落紛失 |
- 歯の咬耗はプロカのIII 四肢骨は骨梅毒のため肥大化している（写真VII-8）。推定身長は左大腿骨約39cmより151cm
- 9 小児（6才） 第1大臼歯萌出，上下顎切歯萌出直前 上腕骨体長14～15cm
- 10 乳児（生後6ヵ月） 上下顎切歯が未萌出 左大腿骨長6cm
- 11 幼児（4～5才） 上顎第1大臼歯が未萌出（歯根のできはじめ） 右脛骨体長15cm, 右大腿骨19cm
- 12 ♀ 壮年前半 最小前頭幅81mmで平均以下 外後頭隆起が比較的明瞭でオピストクラニオンが低い。乳様突起は小さく，全体的に頭蓋骨も小さい。出産経験を示すと言われる耳状面前溝は明確だが小さい。
上・下顎歯の保存状況
- | | | |
|-----------------|--|-----------------|
| ○ 7 6 5 4 3 ○ 1 | | |
| 8 7 6 5 4 3 2 1 | | 1 2 3 4 5 6 7 8 |
- 歯の咬耗はプロカのI～II
女性としては大腿骨骨頭が発達 脛骨が偏平 筋肉は発達
- 13 新生児 12号人骨に抱かれていた。前腕骨体長5cm程度
- 14 ♀ 壮年 遊離歯13点（咬耗はプロカのII）
左膝蓋骨は大きく，上腕骨体は頑丈で太い。女性としては強壯な固体
- 15 ♀ 壮年中 大腿骨計測値は江戸時代女性平均値以上 強壯な女性

- 16 幼 児 第2乳臼歯未萌出 大腿骨体長10cm 上腕骨体長10cm
(1才6ヵ月)
- 17 未 熟 児 上顎第1乳臼歯ができはじめ (胎児8ヵ月程度)
- 18 ♀ 壮 年 前 期 外後頭隆起がはっきりしている。縫合は閉鎖を始めている 歯の咬耗はプロカのII 上顎第3大臼歯が第2大臼歯の歯根に向かって顎骨の中で形成されている。寛骨の大坐骨切痕はゆるやかに湾入。椎骨体に骨棘がある。
- ♀ 眉間や眉弓の隆起はない。特に鼻根部は非常に平坦だけではなく鼻骨がへこんでいる。乳突上稜が明瞭 縫合は癒合消失
- 19 ♂ 年 齢 不 明 左大腿骨は細いが後面の粗線が突出し、付柱を形成。
- ♀ 壮 年 中 期 大腿骨・脛骨は太いが上腕骨は江戸時代女性平均である。下半身がしっかりした女性 その他に別固体の下顎骨
- 20 ♀ 壮 年 前 期 遊離歯の咬耗はプロカのII 眼窩上縁部は丸みを帯び、前頭骨頬骨突起は前方に突出 貧血と関係の深いクリブラ・オルビタリアはない。縫合は内板で癒合消失始めている。耳状面前溝が大きく出産経験多数と思われる。
- 21 ♀ 壮 年 中 期 眉間・眉弓の隆起はない。眼窩上部は直線的 歯の咬耗はプロカのII～III 脛骨は扁平
- 22 性 別 不 明 火葬骨 頭蓋骨縫合は内板で閉鎖を始める。大腿骨断面の致密質が厚い(男性的)。骨片は小さく破断し、炭化しているので軟部の付着したまま低い温度で焼かれていたと推定される。
- 23 ♂ 壮年後期～熟年 大腿骨は、殿筋粗面が発達し第3大転子となっている。粗線が荒く骨棘形成 上腕骨もきわめて太く、三角筋付着部も明瞭 腓骨は矢状径が18mmもあり強壯 腓骨に骨梅毒の所見あり (写真VII-6)。きわめて強壯な固体
- 24 ♂ 壮年後期～熟年 遊離歯の咬耗は縄文時代人のように激しい(プロカのIII)。大腿骨後面の粗線が突出し付け柱を形成 脛骨断面はヘリチカのII型 距骨や踵骨が大きい。
- 25 ♀ 壮年中期～後期 遊離歯の咬耗はプロカのIII 第1大臼歯は歯根まで達する咬耗 脛骨は扁平 四肢骨の筋付着部に骨棘形成がみられる。
- 27 ♂ 壮 年 中 期 右肩甲骨が大きい。反面、鎖骨および上腕骨は細い。上腕骨長は30cmをはるかに越える。下肢骨は太く、筋付着部が明瞭である。
- 28 幼児(2～3才) 第2乳臼歯が萌出してすぐ 第1大臼歯の歯冠できかけ

- 41 ♂ 壮 年 中 期 四肢骨は非常に強壯な印象。左膝関節に関節炎による骨増殖がある(写真VII-1)。
寛骨臼が大きく深い。大坐骨切痕の湾入は鋭い。椎骨は変形し骨棘あり。
- 42 ♀ 壮 年 眉間や眉弓の隆起はない。眼窩上縁は丸みを帯びる。クリブラ・オルビタリアを確認 下顎骨は小さく華奢 下顎関節に関節炎があり変形(写真VII-2) 齒槽膿漏がひどく生前に歯が脱落 鎖骨や右上腕骨も華奢である。
- 43 ♂ 壮 年 後 期 外後頭隆起がよく発達 縫合は内・外板で閉じはじめている。
♀ 成 人 ♀ 四肢骨は華奢
- 44 幼 児 第2乳臼歯は齒根のでき始め 大腿骨体周40mm
(1才6ヵ月~2才)
- 45 ♂ 眉間・眉弓の隆起が明瞭 眼窩は小さく 前頭骨頬骨突起は前方に突出 鼻根部は板を押し当てたように平坦な印象 上顎骨は齒の脱落により齒槽が吸収されている。縫合は内・外板で閉鎖をはじめている。齒の咬耗はプロカのIII 咬耗が激しく、齒冠が失われている。下顎窩の退行性変化あり
壮 年 中 期 ~ 後 期
- 46 ♀ 椎骨には骨棘あり 右寛骨の大坐骨切痕の湾入は大きい。
壮 年 中 期 右手首に骨折の痕(後述, 写真VII-4)
- 47 幼 児 (2 才) 乳齒の保存状態は以下の通り

⑤④③②①	①②③④	上顎骨に左第1切齒が形成し初め
⑤④③〇〇	〇〇③〇⑤	〇は死後紛失
- 48 幼 児 (2 ~ 3 才) 脳頭蓋が長く、後頭骨が出っ張った印象。第2乳臼が萌出
左大腿骨長13cm
- 49 ♂ 壮 年 中 期 脳頭蓋は長い楕円形 眉間や眉弓の隆起が明瞭 縫合は内板で癒合消失、外板でも消失をはじめる。左第2・3大臼歯は生前に脱落 上顎第2切齒は退化傾向で小さい。齒の咬耗はプロカのII
- 50 ♀ 青 年 頭蓋骨では下顎骨のみ残存 下顎枝高は低い(45mm)。下顎角は発達が悪い。筋突起は尖っている。
下顎齒の保存状況は以下の通り

×〇〇54321	〇1234567	×生前脱落
		〇死後紛失

四肢骨の骨端が癒合したばかり 細く華奢な四肢骨
- 51 小 児 (7 ~ 8 才) 第1大臼齒が萌出 第2大臼齒の齒根できはじめ

- 41 ♂ 壮 年 中 期 四肢骨は非常に強壯な印象。左膝関節に関節炎による骨増殖がある（写真VII-1）。
寛骨臼が大きく深い。大坐骨切痕の湾入は鋭い。椎骨は変形し骨棘あり。
- 42 ♀ 壮 年 眉間や眉弓の隆起はない。眼窩上縁は丸みを帯びる。クリブラ・オルビタリアを確認 下顎骨は小さく華奢 下顎関節に関節炎があり変形（写真VII-2） 歯槽膿漏がひどく生前に歯が脱落 鎖骨や右上腕骨も華奢である。
- 43 ♂ 壮 年 後 期 外後頭隆起がよく発達 縫合は内・外板で閉じはじめている。
♀ 成 人 ♀ 四肢骨は華奢
- 44 幼 児 第2乳臼歯は歯根のでき始め 大腿骨体周40mm
(1才6ヵ月~2才)
- 45 ♂ 眉間・眉弓の隆起が明瞭 眼窩は小さく 前頭骨頬骨突起は前方に突出 鼻根部は板を押し当てたように平坦な印象 上顎骨は歯の脱落により歯槽が吸収されている。縫合は内・外板で閉鎖をはじめている。歯の咬耗はプロカのIII 咬耗が激しく、歯冠が失われている。下顎窩の退行性変化あり
壮年中期~後期
- 46 ♀ 椎骨には骨棘あり 右寛骨の大坐骨切痕の湾入は大きい。
壮 年 中 期 右手首に骨折の痕（後述、写真VII-4）
- 47 幼 児 (2 才) 乳歯の保存状態は以下の通り

⑤④③②①	①②③④	上顎骨に左第1切歯が形成し初め
⑤④③〇〇	〇〇③〇⑤	〇は死後紛失
- 48 幼 児 (2 ~ 3 才) 脳頭蓋が長く、後頭骨が出っ張った印象。第2乳臼が萌出
左大腿骨長13cm
- 49 ♂ 壮 年 中 期 脳頭蓋は長い楕円形 眉間や眉弓の隆起が明瞭 縫合は内板で癒合消失、外板でも消失をはじめる。左第2・3大臼歯は生前に脱落 上顎第2切歯は退化傾向で小さい。歯の咬耗はプロカのII
- 50 ♀ 青 年 頭蓋骨では下顎骨のみ残存 下顎枝高は低い(45mm)。下顎角は発達が悪い。筋突起は尖っている。
下顎歯の保存状況は以下の通り

×〇〇54321	〇1234567	×生前脱落 〇死後紛失
----------	----------	----------------

四肢骨の骨端が癒合したばかり 細く華奢な四肢骨
- 51 小 児 (7 ~ 8 才) 第1大臼歯が萌出 第2大臼歯の歯根できはじめ

52 ♂ 壮年中期 眼窩上縁部は丸みをもつ。眉間の隆起がやや確認できる。乳様突起は良く発達し下垂 縫合は開離 歯はプロカのII~III
四肢骨は全体的に長い。大腿骨は殿筋粗面がよく発達し第3転子を形成 脛骨のヒラメ筋線付着部はきわめて明瞭 左尺骨に骨折骨増殖がある(写真VII-4)。

53 新生児 四肢骨の骨体長が5cm程度

54 ♂ 壮年前期 眉間・眉弓の隆起は小さい。外後頭隆起が発達しゴツゴツした印象 最小前頭幅は89cmで狭い。下顎窩は狭く浅い。縫合は開離 乳突上稜が明瞭 前腕骨に変形があり、手のひらを前内側方向にむけたままの位置でほとんど固定されていた(後述、写真VII-4)。歯の保存状況は以下の通り

	1 2 3 4 5 6 7 〇	×生前脱落
〇 7 6 ⑤ 4 3 2 1	1 2 3 4 × 6 7 8	〇付きの数字は乳歯

咬耗はプロカのII 下顎右第2乳白歯が残っている。上顎第2切歯は退化傾向

55 ♀ 青年前期 耳状面前溝から推定すると出産経験あり 骨端線が残存 癒合が完了していない。第3転子が発達 20才程度

56 乳児(6ヵ月) 右鎖骨最大長57.6mm 右上腕骨長77.0mm

57 幼児(7才) 歯の保存状況

6 ⑤ ④ ③ 〇 ①	① ② ③ ④ ⑤ 6	〇付きの数字は乳歯
6 ⑤ ④ ③ 〇 〇	〇 ② ③ ④ ⑤ 6	

遊離歯で未萌出の第2大臼歯の歯冠あり
頭蓋最大長は163mm 人字縫合に縫合骨

58 ♂ 壮年中期 外後頭隆起が顕著、幅5~6cmにも及ぶ隆起をなす。乳様突起はよく発達する。縫合は開離している。歯の咬耗はプロカのII 全体的に、四肢骨は筋付着面が荒く骨棘が形成されており、老化が早い。上腕骨の三角筋粗面は明瞭 大腿骨は殿筋粗面が発達し第3転子を形成している。

59 幼児(2才) 第1乳白歯萌出 第2乳白歯萌出途中 第1大臼歯歯冠形成途中

60 ♀ 壮年後期 眉間・眉弓の隆起はない。冠状縫合は内板・外板ともに癒合消失 内板でクモ膜顆粒小窩が明瞭(高齢) 上顎骨に歯槽膿漏による穿孔が多数 右上顎第1切歯と犬歯はC3程度の虫歯 歯の咬耗はプロカのIII

上腕骨は細長く三角筋付着部は明瞭 大腿骨はあまり長くない。頰間窩が狭い。脛骨の筋付着部は不明瞭、扁平でねじれが強い。

	幼児(2～3才)	四肢骨のみ
61	♂ 壮 年 中 期	歯の咬耗プロカのII 左脛骨に軽い骨梅毒所見あり
62	♂ 壮 年 前 期	眉間の隆起は弱い。歯の咬耗はプロカのIII 歯槽膿漏で歯槽部に穿孔 上腕骨は長い(311mm)。大腿骨は偏平で前方に湾曲 第3転子が発達
63	♀ 熟 年	縫合は癒合消失 下顎骨には植立している歯はない。右上腕骨の三角筋粗面明瞭 脛骨は偏平 関節面辺縁部に骨棘がある。
64	幼 児 (1 才)	上下切歯のみ萌出 乳臼歯は歯冠のみ
65	幼 児 (3 才)	第1・2乳臼歯が萌出 第1大臼歯が歯冠のみ形成途中 大腿骨体長18cm 脛骨体長15cm
(SA-4)		
66	♂ 壮 年 前 期	眉間から眉弓にかける隆起がみられる。外後頭隆起発達しオピストクラニオンの位置が低い。全体的に丸い頭蓋 縫合は内・外板とも開離 歯の咬耗はプロカのI～II 左大腿骨長45cm 左上腕骨32cm 左大腿骨と左尺骨に骨梅毒による骨増殖がある。
67	成 人	頭蓋のみ 縫合は開離 性別不明の成人
68	♂ 熟 年	歯の咬耗はプロカのIII 切歯がややシャベル形 左大腿骨は第3転子が発達 左橈骨と尺骨は骨間縁が発達
(SA-2)		
69	幼 児 (2 才)	最小前頭幅72mm 大泉門は未癒合 第1乳臼歯萌出 第2乳臼歯は歯冠のみ 脛骨体長10cm 大腿骨体長12cm (SK25) (写真VI)
出土地点不明		
1	♂ 壮 年 後 期	遊離歯の咬耗はプロカのIII 大腿骨は後面が突出し付柱を形成 脛骨は偏平 筋肉の付着部明瞭
2	♂ 青 年	縫合が一部で閉鎖を始める。乳様突起は大きく、ごつい印象 外後頭隆起明瞭 歯の咬耗はプロカのII 骨端が未癒合の大腿骨
3	♀ 壮 年	細く華奢な下肢骨 老年性変化はない。
	性別不明成人	細くて華奢な大腿骨 左右大腿骨長が43cm
	性別不明成人	男性的 左大腿骨に骨梅毒所見
	幼 児 (2 才)	第2乳臼歯は形成途中
	幼児(5～6才)	第1大臼歯萌出前後

- | | | | |
|---|----------|-------------|--|
| 4 | 幼児(年齢不明) | 四肢骨片 | |
| | ♂ | | 右寛骨は大坐骨切痕の湾入が小さく、寛骨臼が大きく深い。 |
| 5 | ♀ | 大腿骨長は短い印象 | 後面が突出し付柱形成 |
| | ♀ 青年 | | 大腿骨の殿筋粗面が発達し第3転子を形成 寛骨の大坐骨切痕の湾入はゆるやか 寛骨の辺縁部が癒合してまもない。 |
| 6 | ♂ 壮年中期 | 眉間・眉弓の隆起明瞭 | 乳様突起は大きく垂直に下垂 下顎窩が大きく深い。縫合は内板で癒合消失 脛骨は偏平 上腕骨三角筋粗面が良く発達 |
| | 性別不明(青年) | | 左右上腕骨末端癒合 上腕骨体長25cm |
| | 幼児 | | 頭蓋骨片のみ |
| 7 | ♂ 壮年 | 眉間や眉弓の隆起が明瞭 | 前頭縫合が完全に残存 眼窩上縁部は鈍で眼窩は丸い。鼻根部は平坦 乳様突起も大きくごつい。大腿骨は太く長い。第3転子がよく発達 強壯な固体 |

追加資料

- | | | | |
|---|----------|-------------|---|
| 1 | ♂ 熟年 | 眉間や眉弓の隆起が顕著 | 鼻根部の陥入も比較的強い。眼窩上縁部は江戸時代人には珍しく直線的で眼窩も四角 梨状口は狭い。縫合は内板で癒合消失、外板で一部で癒合している。上顎歯はすべて生前に脱落している。下顎で植立している歯の咬耗は、プロカのIII 仙骨と第5椎骨が癒合し、寛骨にも骨棘が確認できる。 |
| 2 | 幼児(5~6才) | 第1大臼歯が萌出直前 | 脳頭蓋は長く、後頭骨が突出。 |

代表的人骨の形態的特徴

33号人骨 (写真 I・II・III)

年齢・性別

脳頭蓋の主縫合は癒合していない。歯の咬耗はプロカのIIからIII。恥骨結合面はトッドの35才から39才。従って、この固体の年齢は壮年中期と考えられる。頭蓋は頑丈である。眼窩上方が隆起して、乳様突起も大きい。骨盤の大坐骨切痕は鋭く陥入し、恥骨下角は小さい。四肢骨は太く、筋附着痕が著しい。よって、この固体が男性であることは疑問の余地がない。

頭蓋

右側頭部から頭蓋底が採取時に破損している。また、その後の洗浄・乾燥の過程で骨が歪んでおり、完全な形に組み立てられなかった。頭蓋の全体的な大きさは普通だが、ごつい印象であり、骨壁も厚い。

脳頭蓋上面観は類楕円形で中頭(長幅示数78)。頭頂結節は目立たない。左のみに頭頂孔がある。後面観は家形。左ラムダ縫合に縫合骨2ヶあり。側面観では、眉間が前方に突出し、明瞭な眉間上窩が形成されている。額と頭頂骨中央部がよく膨隆しているので、脳頭蓋輪郭は丸みを帯びた四角に見える。側頭窩は大きく、側頭線も高い。乳突上稜も発達している。従って、側頭筋が発達していたといえる。

顔面は広く低い。眼窩上方は、眉間・眉弓・前頭骨頬骨突起のいずれもが強く膨隆している。眼窩上縁はきわめて鈍。眼窩は低く、長方形である。上縁輪郭は水平に近い。以上のような眼窩付近の特徴は江戸時代人としては稀であり、縄文時代人と類似しているほどである。眼窩上神経の痕跡は、右では外側枝が前頭孔を、内側枝が眼窩上切痕を形成している。左では眼窩中央内側よりに眼窩上孔があるのみである。

鼻根はかなりくぼむが、鼻骨はゆるく凹湾し低い。その点で縄文人とはまったく異なっている。右側の鼻骨および上顎骨前頭突起の発達が悪く、鼻骨間縫合が右にずれている。梨状口は低く広い。梨状口上縁付近はやや粗造で肥厚している。また、上顎骨正中部の表面もやや粗造である。これらの所見は軽微であるので、骨性梅毒などの病的なものかどうかは断定できない。

上顎骨の骨体および頬骨突起の前面は、ゆるいくぼみを形成している。歯槽は傾斜するが突顎の程度は弱い。頬骨は大きく頑丈である。前頭突起は幅が17mmもあり、頬骨弓も厚く高い。特に高さは最小でも10mmあり、あたかもネアンデルタール人のようである。

下顎骨は大きくはないが強壯である。特に下顎枝が幅広く、筋突起および咬耗窩が著しく発達

している。側頭部や頬骨の特徴とあわせて判断すると、側頭筋や咬筋などの咀嚼筋が極めて強大であったことがうかがわれる。歯槽部の退縮が進んでいないため、オトガイはあまり突出していない。顎二腹筋窩は明瞭である。オトガイ結節の表面には、広脛筋付着部と考えられる圧痕がある。

歯はかなり残っているが、採取の際に失われたものも多い。

× 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 ○ 5 6 ○ =	×は生前脱落歯槽閉鎖 ○は死後脱落紛失 =は破損
= 6 5 ○ = 2 ○	○ ○ ○ 4 5 6 7 ×	

咬耗はプロカのIIからIII、部分的にはIVに達している。咬合は鉗子状であり、江戸時代人としては珍しい。

四肢骨

体幹の骨はかなり保存されているが、特別の形態は認められないので記載を省略する。ただし、腰椎椎体の辺縁骨棘の形成は軽微である。

鎖骨は江戸時代人男性としては、長く太い。前面の大胸筋起始部が広く、助鎖靭帯圧痕も強い。肩甲骨は、頑丈であり、肩甲下筋の圧痕が明瞭である。腋窩縁の稜・溝の構造はサピエンス型である。上腕骨は、太く扁平である(中央断面示数72)。筋の付着部が発達し、特に三角筋付着部は幅が25mmもある。それに伴い、骨体中央部は外側に凸に湾曲している。橈骨・瘰骨は、江戸時代男性としては長く太い。そして、筋の圧痕が強い。

骨盤は大きく頑丈である。全般的に筋付着部が発達が著しい。腸骨溝は深く、下前腸骨棘も大きい。恥骨結合面には、水平稜・溝は認められず、辺縁の稜は明瞭だが丸みを帯びている。また、表面の退行性変化はほとんど見られない。したがって結合面の年齢はトッドの35から39才に相当すると判断される。

大腿骨は、江戸時代男性としては、やや長くかなり太い。骨体の湾曲は強い。全体として筋付着部がよく発達している。特に後面の粗線が突出し、縄文時代人のように高い付柱を形成している(柱状示数126)。また、殿筋粗面上部も膨隆し、弱いながらも第3大転子を形成している。大腿骨長からの推定身長は158cmである。

脛骨も長く太い。特に中央最大径は32mmもあり、縄文人平均に匹敵する。骨体湾曲が強く、筋圧痕が著しい点などは大腿骨の特徴と一致する。脛骨下面前端には、蹲踞下窩が発達し、距骨脛上面の圧痕に対応している。蹲踞の習慣が著しかったといえる。腓骨は保存が悪いが、筋圧痕が強く断面が十字形である。

まとめ

この人骨の固体は壮年中期の男性である。咀嚼筋が発達し、咬耗が著しいこと、四肢がきわめて強壯であることから、比較的粗末な食料を大量に食べながら、激しい肉体労働に従事していたと推測できる。眼窩上方の隆起、鉗子状の咬合、柱状性の著しい大腿骨などの特長は、あたかも縄文時代の屈強な男性骨格を想起させるほどである。しかし、鼻部や脛骨は縄文時代とは異なっており、江戸時代人として矛盾がないものである。

3号人骨（写真 I・IV・V）

年齢・性別

下顎左第3大臼歯が萌出途中、四肢骨の骨端は大部分が癒合しているが、骨端線が認められる部分が多くある。腸骨稜の骨端は分離しているが、坐骨結節はほぼ癒合を完了している。恥骨結合面は全体的に明瞭な水平線・溝が認められ、辺縁稜は形成されていない。したがって、この固体の年齢は20才台の初期と判断される。頭蓋は小さい。乳様突起は小さく、眼窩上縁は鋭い。大坐骨切痕は丸く深く湾入する。四肢骨は、小さく細い。よって、この固体は女性であると推定される。

頭蓋

頭蓋底と後頭骨の下半が破損している。顔面の保存は良いが、歯はかなり失われている。頭蓋全体は小さいが、その割に幅が広く頑丈な印象である。

脳頭蓋上面観は類菱形で中頭(示数79)。頭頂結節はかなり突出。頭頂孔は左右とも認められない。側面観では、額が膨隆し、いわゆる「おでこ」であるところが目立つ。側頭線は高い。乳様突起は細長い。顔面は、幅は江戸時代女性として普通だが、高さが極めて低い。眼窩上方は平坦で眼窩上縁は鋭い。左右ともに眼窩上孔がある。眼窩は小さい。鼻骨は大きく、前頭骨に強く陥入している。しかし、平坦であり、全く隆起していない。梨状口は非常に低く、幅と高さと同じくらいである。

上顎骨頬骨突起および頬骨上顎突起は発達し、前方に膨隆している。頬骨の前頭隆起は幅広い(15mm)。上顎骨の歯槽突起は強く傾斜し、歯槽性突顎が著しい。梨状口周辺と歯槽突起前面がやや粗造であるが、この固体の年齢を考慮すると骨梅毒とみなすのは困難である。今後の精査にゆだねたい。下顎骨は頭蓋全体の大きさの割に幅広く頑丈である。特に下顎枝が低く広く強壯である。33号男性と同様に咀嚼筋が発達していたといえる。

歯の保存状態は以下の通りである。

? ○ 6 5 4 3 ○ ○	1 ○ ○ 4 5 6 = ○
8 ○ 6 ○ 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

歯の咬耗は弱くプロカの I から II である。咬耗は鋏状。歯は全体的に大きめである。上顎中切歯はいわゆるシャベル形であり、下顎中切歯のウィングが強い。下顎側切歯は舌側に移動し、軽い歯列不整の状態である。上顎左と下顎右の第 2 大臼歯歯槽は不整な凹みとなっており、これらの歯が生前に脱落したことを示している。

四肢骨

体幹の骨も保存されているが記載を省略する。鎖骨は、破損のため長さは不明だが、江戸時代女性としてもやや細めである。肩甲骨も小さい印象である。上腕骨はやや長いが細く、筋付着部はあまり発達していない。橈骨・尺骨も少し長めで細い。ただし尺骨の骨間縁は比較的良く突出する。寛骨は保存が悪く計測できないが普通の大きさである。大坐骨切痕は丸く深く湾入している。一見すると幅が狭いが、坐骨棘の突出が大きいためであり、本来の切痕はかなり幅広く、典型的な女性の様相を呈している。恥骨結合面は水平稜と溝が明瞭に認められ、辺縁稜は全く形成されていないのでトッドの 20 から 24 才の段階に相当すると判断された。大腿骨は江戸時代女性平均よりやや小さく細い。骨体は前後に偏平であり、湾曲も弱い。粗線は発達していないが、小転子は大きく、殿筋粗面上部は第 3 転子を形成している。大腿骨の長さからの推定身長は 144cm である。脛骨はやや長く、太さは普通である。湾曲はかなり強い。骨体はやや偏平(中央断面示数 69)であり、筋付着痕も明瞭である。腓骨は細いが、筋付着痕は明瞭である。

まとめ

この人骨の固体は青年初期の女性である。江戸時代女性としては普通の体格である。四肢骨がやや細いのは若年のためであろうが、すくなくとも 33 号男性のように激しい肉体労働に従事していたとは思われない。顎が頑丈であることは、粗末な食物を食べていたことを示す。鼻根部の平坦さ、鋏状咬合、大腿骨の偏平さなどは、江戸時代人として極めて普通の特長である。

古病理学的所見

梅毒 (写真 VII)

男性 21 固体中の 4 例に、下腿骨の表面が広範囲にわたって粗造な骨増殖を示すものがあり、梅毒による骨膜の慢性的炎症の結果と思われる。女性固体および性別不明の 2 固体のなかには同様な所見はみられない。一般に、薬物治療のなされていない集団においても、骨梅毒の罹患者のうちで骨梅毒に至っているものは一割を大きく越えることはない。そうすると、この沢田遺跡の集

団のほぼ全員が梅毒にであったことになる。女性に所見が認められないのは、女性に罹患者がいなかったのではなく、骨梅毒に至ったものが少なかったから、あるいは、単なるサンプリング誤差と考えるほうが無理はない。梅毒の高率な罹患は江戸市内の状態と同様であり、当時に茨城県北部にまで梅毒が流行していたことを示している。

骨折（写真VII）

骨折の痕跡を示す所見が2例認められた。46号の女性の右橈骨は（写真VII 4）、通常では下方や掌側を向いているはずの手根関節面が、下方やや背側を向いており、下端部全体に骨増殖がある。この橈骨に関節する尺骨の下端も変形しており、骨頭輪状関節面は外側にしかない。したがって、橈骨は回外位にはほぼ固定されていたようである。このような変化をもたらしていた原因は橈骨下端の骨折であると判断される。すなわち、手首を過剰に背屈させたことにより、橈骨下端背側部が座屈して変形したのであろう。

52号男性の左尺骨は（写真VII-5）、骨体中央部が長さ3cmほどにわたって肥厚しており、表面は粗造である。実は、この尺骨はこの部分で破断しており、内部の致密質が海綿状であることがわかる。したがって、これらの所見は、尺骨中央部の骨折の治癒途中を示すものと解釈される。治療が完全ではなかったために、骨の採取時に破断したと考えられる。なお、同側の橈骨は正常である。

関節炎（写真VII）

顎関節の変性を示す所見が2例あった。45号の男性の下顎窩は全体としてやや粗造であり、特に関節突起の一部には溶解したような凹みが認められる。35号女性の下顎右関節突起は下顎頭の上半がなくなるほど変形しており、表面は多孔粗造である（写真VII-2）。これら2例の個体は壮年である。したがって、上記所見は老年性の変化ではなく、咀嚼の負荷が極めて強かったことが原因と考えられる。即ち、硬い粗末な食物を食べていたと推定される。あるいは、歯と顎を道具として酷使した可能性もある。

41号の男性の膝関節面は、関節面の辺縁に唇状の骨増殖が発達している（写真VII-1）。また、外側顆の関節面外側半や膝蓋面も凹凸が激しい。腓骨との関節面付近の骨増殖も著しいが破損のため詳細は不明である。これらの所見は関節炎の症状であるが、その原因は定かでない。半月軟骨の損傷による病変とも考えられる。あるいは、膝関節外側部の外傷に起因する可能性もある。

形態異常（写真VII-5）

54号の左右橈骨上部は通例と異なる形を示す。骨頭の輪状関節面は掌内側のみが広く平坦であ

り、他の部分は狭く曲率が高い。したがって、橈骨の回内回外運動は少なく、常に回外位近くに固定されていたと考えられる。脛部のくびれは弱く、脛および骨体上半は掌内側一背外側方向に偏圧されている。橈骨祖面は膨隆せず、広い圧痕状を呈し、滑面部が認められない。このことも回内回外運動の制限と関連すると判断される。このような形態は、あたかも食肉類の橈骨をみるようである。これらの以上は左右両側に同様にみられるので、後天的な事故によるものではない。先天性のものならば、回内筋の麻痺とも考えられる。円回内筋の付着痕は明瞭でないが、少なくとも尺骨の方形回内筋稜は正常である。筆者の知る限り、このような異常は報告されていない。今後の検討課題としたい。なお33号男性鼻部の異常については前述したので省略する。

検討・まとめ

江戸時代の人骨は、江戸市内からは数千体以上も出土しており詳細な報告があるが、それ以外の地域における保存のよい人骨の出土例は少なく、この沢田遺跡の人骨は貴重である。

本遺跡の人骨のうちで、出土地点の明確なものは73体である。他に出土地点の不明なものが17体あるが、これらは部分的な骨格が多く、独立の個体であるかどうか疑問があり、個体数の算定は含めなかった。ただし、出土地点の明確な人骨と形態的に異なる様子は認められない。前記73体のうちで、未成年は30体、成人は43体である。未成年の死亡が約半数を占めるのは、江戸時代に限られず、近代的な医療の普及していない集団においては一般的である。成人の性別は、男性22体、女性17体、不明4体である。以上のような性別・年齢構成は、ある集団の家族全員の死亡率と一致する。つまり、この製塩施設で働いていたのは、成人男性だけの出稼ぎ集団のようなものではなく、家族全員で住み着いていた集団であったことを示している。

体格は人骨の大きさや形から推定されるが、全体としてみると、江戸市内の人々と比べて同じあるいはやや小柄である。しかし、男女とも非常に強壮な個体と華奢な個体とがある。したがって、製塩労働に分業があったために、体格に差が生じていた可能性がある。顎の発達や歯の咬耗は江戸市内の人々よりも著しく、かなり粗く硬い食物を食べていたらしい。

梅毒の高い罹患は江戸市内の人々と同様である。貧血の影響といわれるクリブラ・オルビタリアは僅かしか認められないが、眼窩部の残っている個体が少ないので、頻度は求めなかった。

一般に、時代的特長は縄文時代以前とそれ以降との間では明瞭だが、弥生時代以降の各時代の間、すなわち古墳時代と中世、あるいは中世と江戸の間では明瞭ではない。この沢田遺跡出土の人骨も、33号人骨の一部の特徴を除けば、縄文時代人骨のような特徴は見られず、関東地方で出土する古墳・中世・江戸時代人骨に共通する特徴を持っている。すなわち、丸い顔の輪郭、平坦な鼻部、鋏状の咬合、前後に偏平な大腿骨体などである。なお、注目すべきは、全体的に大腿骨体の偏平性が著しい。

表 I - 1 代表的人骨計測値 (頭骨)

計 測 項 目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	(169)	179
8. 最大幅	133	140
8 : 1	78.7	78.2
20. バジトン・プレグマ高	109	119
21. 垂直耳高	109	122
9. 最小前頭幅	91	102
10. 最大前頭幅	107	—
9 : 10	85.0	—
9 : 8	68.4	—
41. 側顔長	66	77
43. 上顔幅	100	111
45. 頬骨弓幅	127	140
46. 中顔幅	101	113
46 : 45	79.5	80.7
47. 顔高	106	117
48. 上顔幅	83	68
47 : 45	83.5	83.6
48 : 45	66.3	48.6
48 : 46	79.5	83.6
51. 眼窩幅 (ℓ)	39	45
52. 眼窩高	32	33
52 : 51	82.0	73.0
54. 鼻幅	25	27
55. 鼻高	43	47
54 : 55	58	57
55(1) 梨状口高	24	—
54 : 55(1)	104.0	—
57. 鼻骨最小幅	9	—
57(1) 鼻骨最大幅	10	—
65. 下顎頭幅	—	124
66. 下顎角幅	100	106
68. 下顎長	70	77
69. 頤高	30	33
70. 枝高	51	63
71. 枝幅	37	41
71 : 70	72.5	65.0
71(1) 下顎切痕幅	—	37

表 I - 2 代表的人骨計測値 (鎖骨)

計 測 項 目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	—	146
2a. 体彎曲高	—	32
4. 中央垂直径	8	14
5. 中央矢状径	10	12
4 : 5 中央断面示数	80	117

表 I - 3 代表的人骨計測値 (上腕骨)

計 測 項 目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	272	297
2. 全長	268	297
3. 上幅	39	47
4. 下端幅	50	59
7. 最小周径	50	65
体最大径	18	25
体最小径	14	18
体断面示数	78	72

表 I - 4 代表的人骨計測値 (橈骨)

計 測 項 目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	206	235
2. 生理学長	194	219
3. 最小周径	37	44
4. 体横径	13	16
5. 体矢状径	11	12
5(6) 下端幅	28	35
5 : 4 体断面示数	85	75

表 I - 5 代表的人骨計測値 (尺骨)

計 測 項 目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	—	254
2. 生理学長	—	225
3. 最小周径	—	38
11. 体矢状径	9	14
12. 体横径	14	16
11 : 12 体断面示数	64	88
13. 体上横径	—	22
14. 体上矢状径	—	26
13 : 14 プラトレニー示数	—	85

表 I - 6 代表的人骨計測値 (寛骨)

計 測 項 目	33号 (♂)
1. 骨盤高	216
9. 腸骨長	129
12. 腸骨幅	165
15. 坐骨高	87
17. 恥骨長	92
22. 寛骨臼最大幅	54
31. 坐骨切痕最大幅	56
32. 坐骨切痕高	40

表 I - 7 代表的人骨計測值 (大腿骨)

計測項目	3号 (♀)	33号 (♂)
1. 最大長	(370)	420
2. 自然位長	—	417
3. 最大軀子長	—	409
6. 体中央矢状径	22	34
7. 体中央横径	23	27
8. 体中央周径	71	95
6 : 7 体中央断面示数	96	126
体上最大径	29	31
体上最小径	19	25
体上断面示数	66	81
9. 体上横径	—	31
10. 体上矢状径	—	29
10 : 9 体上断面示数	—	94
13. 上端長	—	90
18. 頭垂直径	—	45
19. 頭横径	—	45
23. 外側顆最大長	—	67

表 I - 8 代表的人骨計測值 (胫骨)

計測項目	3号 (♀)	33号 (♂)
1a 最大長	305	345
3. 上幅	65	77
6. 下幅	—	52
8. 中央最大径	26	32
9. 中央横径	18	24
8a 荣養孔位最大径	29	34
9a 荣養孔位横径	19	24
10. 中央周径	70	89
10a 荣養孔位径	76	91
10b 最小周径	—	80
9 : 8 中央断面示数	69	75
9a : 8a 荣養孔位断面示数	62	71

四肢骨計測値 (mm) および示数 (%)

表II-4 大腿骨

	5号♀		6号♂		12号♀		15号♀		19号♂		19号♀		20号♀		23号♂		24号♂		25号♀		30号♂		40号♂	
	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)
1. 最大長	—	—	329	335	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6. 体矢状径	20.0	19.5	23.0	23.0	25.0	25.0	29.0	29.0	23.5	23.0	22.0	22.5	28.0	29.0	30.5	30.0	24.0	24.0	29.5	28.5	22.0	418	—	—
7. 体横径	25.5	24.0	29.0	27.5	28.2	29.0	30.5	28.5	27.0	29.0	28.0	24.0	25.0	28.5	29.0	29.5	27.0	27.2	24.5	25.5	29.8	—	—	—
6 : 7 体中央断面示数	78.4	81.3	85.5	90.9	81.6	79.3	81.9	87.7	87.7	107.4	123.4	109.1	111.1	101.8	100.0	103.3	105.2	88.9	83.0	117.0	73.8	—	—	—
8. 中央周	70.0	74.0	85.0	81.0	80.0	81.5	86.0	88.0	83.0	80.0	75.0	78.0	90.0	92.0	93.0	92.0	80.0	82.0	88.0	88.0	—	—	—	—
9. 体上横径	—	30.0	36.0	35.0	33.2	33.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10. 体上矢状径	—	25.0	21.5	21.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10 : 9 体上断面示数	—	83.3	59.7	61.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	41号♂		45号♂		49号♂		50号♀		54号♂		60号♀		62号♂		68号♂									
	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)
1. 最大長	420	—	386	386	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6. 体矢状径	25.0	27.0	28.5	28.8	29.0	21.5	21.2	27.0	26.0	25.5	25.0	26.0	25.3	24.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7. 体横径	30.5	30.0	30.5	30.0	29.6	27.0	24.8	26.2	25.1	27.2	27.1	31.2	30.8	29.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6 : 7 体中央断面示数	81.9	90.0	107.0	96.0	97.9	79.6	85.5	103.0	103.5	93.8	92.6	83.3	82.1	82.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8. 中央周	89.0	89.0	92.0	91.0	92.0	77.0	71.0	84.0	82.0	81.0	90.0	89.0	85.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9. 体上横径	35.0	35.0	35.0	34.0	—	29.8	30.0	31.5	31.2	30.0	30.5	31.6	36.2	32.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10. 体上矢状径	24.0	24.5	25.0	24.5	—	20.2	20.0	25.0	25.1	22.0	23.0	24.0	25.0	25.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10 : 9 体上断面示数	68.6	70.0	71.4	72.1	—	67.8	66.7	79.4	80.1	73.3	75.4	75.9	69.1	79.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表II-5 脛骨

	5号♀		6号♂		12号♀		15号♀		19号♀		20号♀		23号♂		24号♂		25号♀		30号♂		40号♂		41号♂	
	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)
1. 最大長	290	—	—	—	320	325	—	—	300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8. 最大径	24.0	23.0	26.5	26.0	28.0	27.0	31.0	29.5	27.0	26.0	27.8	33.2	33.0	32.5	34.0	27.0	27.0	32.0	26.0	30.0	31.0	—	—	—
9. 中央横径	19.0	18.7	19.5	20.0	20.0	20.5	20.5	20.5	19.0	17.5	17.8	22.0	21.6	23.5	21.5	18.5	19.5	20.5	20.0	19.0	22.5	23.0	—	—
9 : 8 断面示数	76.2	81.3	75.0	76.9	71.4	74.0	66.1	69.5	70.4	67.3	63.6	66.3	65.5	72.3	63.2	68.5	72.2	64.0	66.7	73.0	75.0	74.2	—	—
	45号♂		49号♂		50号♀		54号♂		62号♂															
	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)	(r)	(l)
1. 最大長	—	—	—	—	320	298	315	311	337	336	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8. 最大径	32.0	31.8	30.4	31.0	24.6	25.6	31.0	30.8	31.5	30.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9. 中央横径	22.0	23.2	23.3	22.0	17.0	17.2	20.0	20.0	22.2	22.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9 : 8 断面示数	68.8	72.9	76.6	70.9	69.1	68.8	64.5	66.7	70.5	75.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表III 沢田遺跡出土四肢骨計測値の平均値と比較

	沢田遺跡		江戸時代平均値	
	♂	♀	♂	♀
上腕骨				
最大長	306	272.5	296.8	269.7
体最大径	22.0	19.2	22.7	19.6
体最小径	18.3	16.7	17.7	14.9
体断面示数	83.3	85.8	78.3	76.6
尺骨				
最大長	244	219.2	242.1	223.9
体矢状径	12.9	12.3	12.8	10.5
体横径	16.4	14.6	16.2	14.1
体断面示数	78.7	73.9	79.0	77.8
橈骨				
最大長	236.2	200.2	224.2	199.8
体横径	16.7	15.2	16.6	14.4
体矢状径	10.8	10.2	11.9	9.8
体断面示数	74.4	69.7	71.8	78.4
大腿骨				
最大長	422.7	378	413.8	377.9
体中央矢状径	25.4	22.8	28.3	24.8
体中央横径	26.4	26.3	27.4	24.1
体中央周径	87.9	79.2	87.2	76.9
体中央断面示数	97.8	84.9	103.7	103.1
体上横径	33.8	30.8	30.7	26.5
体上矢状径	24.6	22.2	27.8	25.5
体上断面示数	74.4	73.2	91.2	—
脛骨				
最大長	330.6	307	327.1	301.5
中央最大径	30.5	26.4	28.9	25.3
中央横径	21.5	18.9	21.6	18.9
中央断面示数	70.9	70.4	74.9	72.4

表IV 沢田遺跡出土人骨個体構成表

年齢／性別		男	女	不明	計
成人	青年		2	1	3
	壮年	20	13	1	34
	熟年	1	1		2
	不明	1	1	2	4
	計	22	17	4	43
未成年	乳児	6			
	幼児	21			
	小児	3			
	計	30			73

I : 3号・33号人骨頭骨



3号頭骨正面



3号頭骨側面



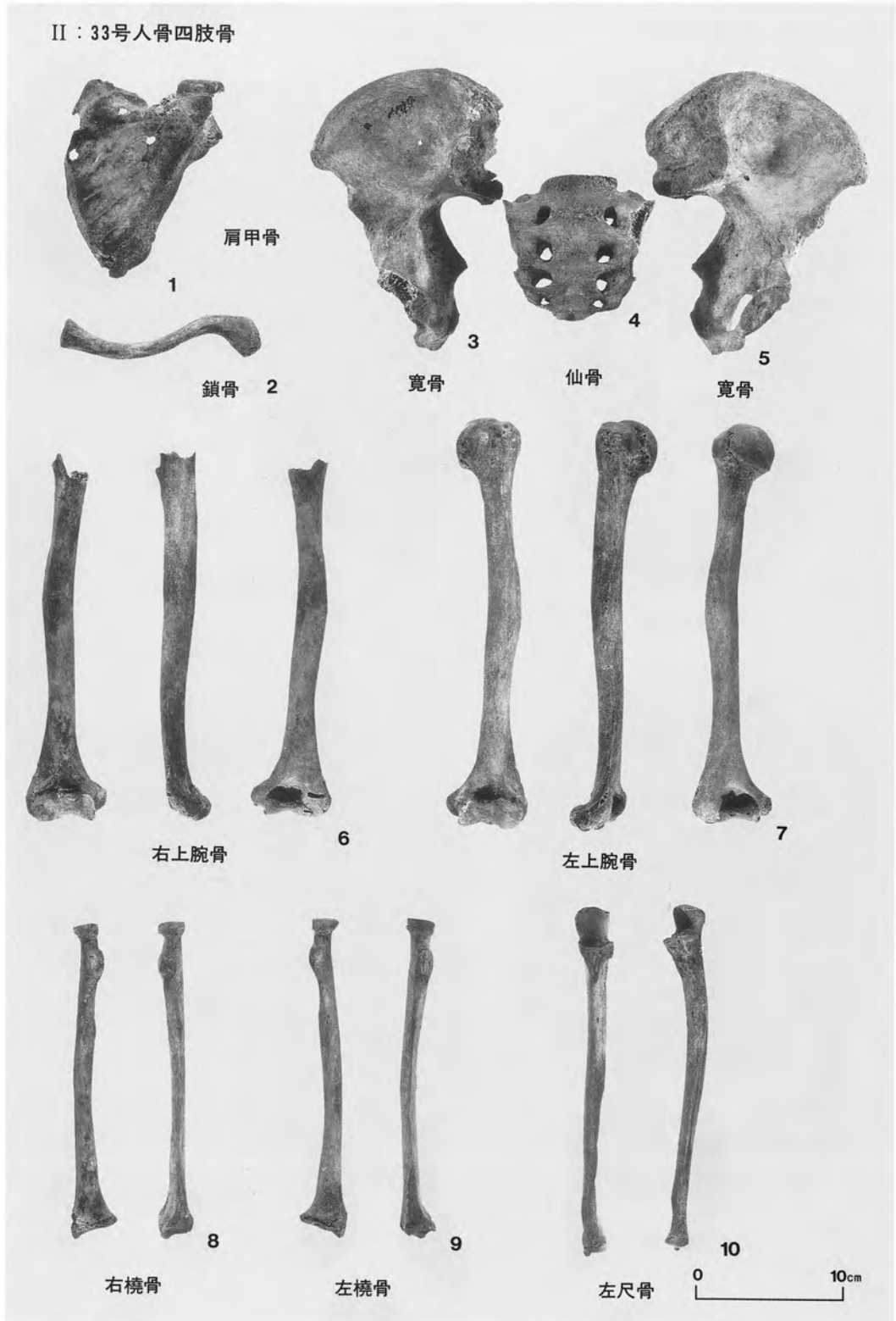
33号頭骨正面



33号頭骨側面

0 10cm

II : 33号人骨四肢骨



III : 33号人骨四肢骨



1

右脛骨



2

左脛骨



3

右大腿骨



4

左大腿骨



IV : 3号人骨四肢骨



1



2

肩甲骨



3



4

寬骨



5

右上腕骨



6

左上腕骨



7

右橈骨



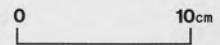
8

左橈骨



9

左尺骨



V : 3 号人骨四肢骨



右脛骨

1

左脛骨

2



右大腿骨

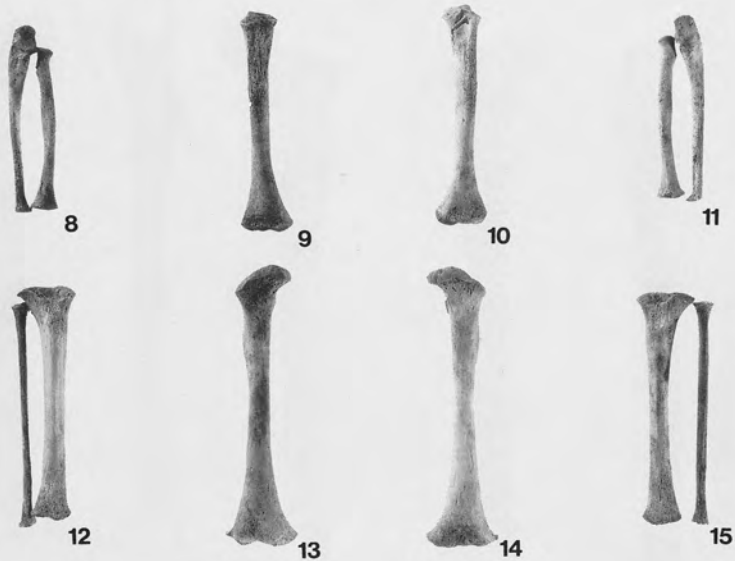
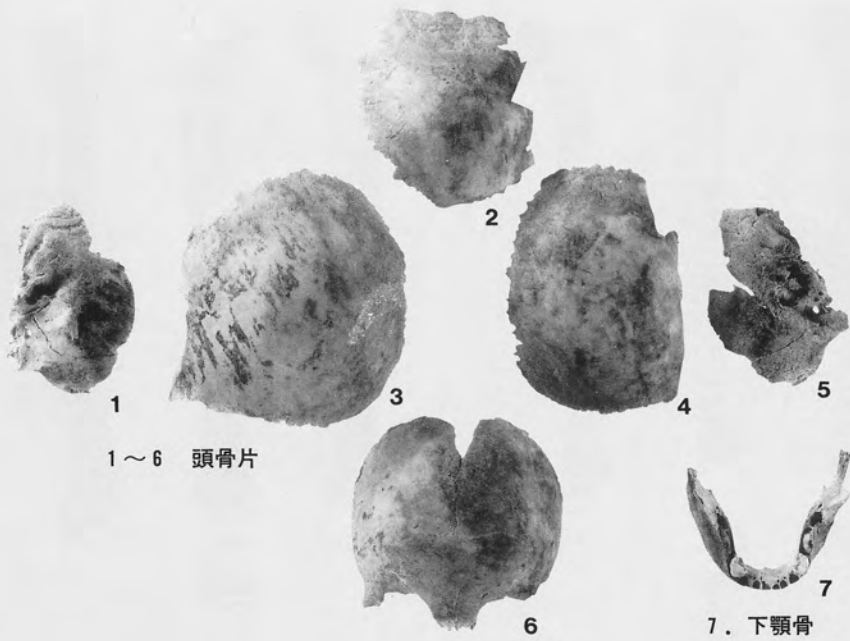
3

左大腿骨

4

0 10cm

VI : SK-25幼兒骨



8. 右尺骨・右橈骨 9. 右上腕骨 10. 左上腕骨 11. 左尺骨・左橈骨
12. 右腓骨・右脛骨 13. 右大腿骨 14. 左大腿骨 15. 左脛骨・左腓骨

0 10cm

VII：病的所見を示す人骨



1 左膝関節面の関節炎



2 右下顎関節突起の関節炎



3 左眼窩のクリブラ・オルビタリア



4 右橈骨下端部の骨折



5 形態異常の右橈骨



6 左脛骨と腓骨の梅毒（軽症）



7 左右脛骨の梅毒



8 右脛骨と腓骨の梅毒（重症）

0 10cm

沢田遺跡竈跡の熱ルミネッセンス年代測定

奈良教育大学 応用物理学教室

長友 恒人

はじめに

竈跡の火床の焼けた砂を試料として、熱ルミネッセンス (TL) 年代測定を行った。TL 年代測定法は焼成または加熱された考古遺物の年代を決定する方法である。測定された結果は過去において最後に加熱された年代を示すので、今回の測定結果は竈の操業が終了した年代を示すことになる。TL 年代測定では土器を試料として測定することが多いが、炉跡の焼土や焼石、遺跡に含まれる火山灰を測定した例もある。

1. 測定の原理

TL 年代測定法は自然界に微量に存在している放射線を測定することによって年代を決定する方法である。以下に、今回の測定に即して TL 年代測定の原理を簡単に述べる。

自然の放射線源

自然界に存在し、TL 年代測定に関係する主な放射線源はウラン (U)、トリウム (Th)、カリウム (K) などの放射性元素である。このうち U には ^{238}U と ^{235}U の 2 種類があり、 ^{232}Th と同じように崩壊して別の放射性元素に変わり続けて、最終的には安定な鉛 (Pb) になる。崩壊の度にアルファ線、ベータ線またはガンマ線を放出する。K の中には ^{40}K が 0.012% 含まれていて、これがベータ線とガンマ線を放出している。このほか、地球の外から降り注いでいる宇宙線も TL 年代測定に関係する放射線である。(ちなみに、年代測定法としてよく知られている炭素14法では、宇宙線によって生成された放射性元素である ^{14}C から放出されるベータ線を測定して年代を決定する。)

放射線の作用と TL

これらの放射線は砂に吸収されるが、このとき放射線は砂を構成する電子を電子トラップと呼ばれる場所に蓄積される。トラップに蓄積された電子を捕獲電子という。捕獲電子は砂が加熱されたり、日光に曝されたりしない限り、電子トラップに安定して存在するが、一度加熱されるとトラップから飛び出して光を放出する。この光が熱ルミネッセンス (TL) である。竈の火床の砂では、竈の操業の度に加熱されるのでトラップの捕獲電子は不安定であり、安定してトラップに蓄積されるのは、竈の操業が完全に停止してからである。

蓄積線量と年間線量

竈が操業を停止してから発掘後測定までに砂が吸収した放射線量を蓄積線量と呼ぶが、蓄積線量は電子トラップ中の捕獲電子の数に比例する。測定した TL 量は捕獲電子の数に比例するから、結局、蓄積線量は TL 量に比例することになる。このようにして、TL 量を測定することにより蓄積線量を決定することができる。

自然の放射線は何らかの異常がない限り時間的に一定の割合で放出されるので、砂が放射線を吸収する割合も一定である。1 年間に砂が吸収した放射線量を年間線量と称する。年間線量を測定により決定するためには人工的に合成した高感度の TL 線量計素子を用いる。

TL 年代

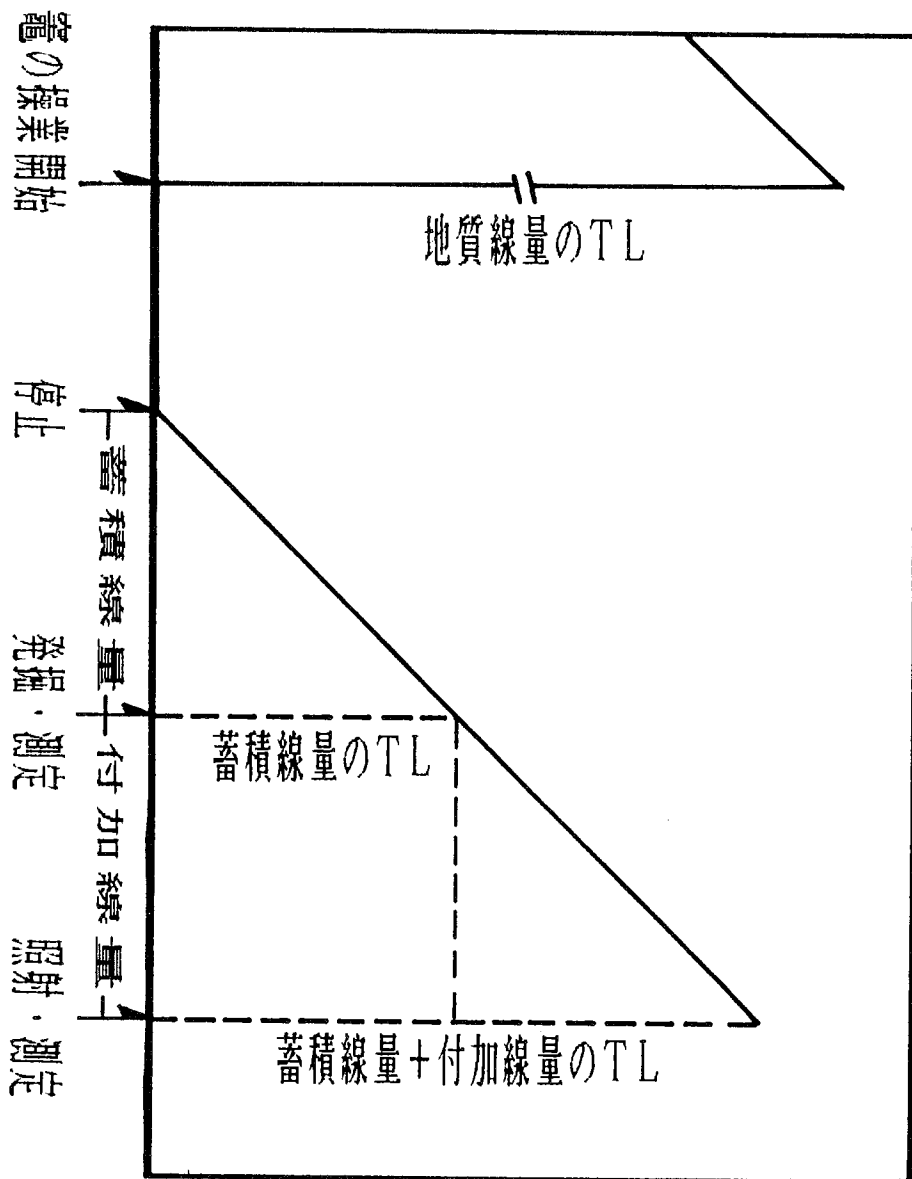
砂の蓄積線量が時間的に一定の割合で蓄積されたとすれば、これを年間線量でわり算することにより、過去に加熱されてから経過した時間、すなわち、年代に換算することができる。これを TL 年代という。竈跡の測定では竈の操業の終了の年代を知ることになる。

付加線量法による石英粗粒子法

砂が吸収した蓄積線量は TL 量に比例しているが、測定した TL 量がどれだけの蓄積線量に相当するかは、蓄積線量の TL 量を測定しただけでは決められない。このため、処理した試料にコバルト-60からの既知量のガンマ線を人為的に吸収させて TL 量を測定する。既知のガンマ線量と TL 量の比から蓄積線量を計算することができる。この人為的なガンマ線量を付加線量と呼ぶ。

TL 年代測定法にはいくつかの方法があり、測定しようとする試料の種類や形状などによって最適の方法が適用される。今回の試料では適当な大きさの石英が多く含まれていたため、石英粗粒子法によって測定した。この方法は、試料処理によって0.1mm程度の大きさの石英粒子を選別し、さらに粒子の表面をフッ酸によって除去することにより、アルファ線の蓄積線量に対する寄与を無視できるようにする方法である。

以上のことを示したのが第 1 図である。図の横軸は放射線量であり、この目盛りは年間線量を測定することにより、年代軸に読み変えることができる。縦軸は TL 量である。



第1図 熱ルミネッセンス (TL) 年代測定の原理

2. 試料処理

砂に含まれる鉱物の多くは、前記で説明した TL 現象を示すが、結晶が安定で吸収した放射線量に比例した発光をする良質の鉱物は石英である。今回の測定は、石英粗粒子法によったので、砂の中から0.1mm程度の大きさの石英だけを以下のような試料処理で選別した。

竈跡の焼けて赤みがかかった色の砂を直射日光に当たらないように採取した。直射日光を避けたのは、砂の中の石英に蓄積された捕獲電子の一部が太陽光のエネルギーで発光して消滅することにより、その数が減少するのを防ぐためである。

砂を大量の水で十分に洗い、塩分や目に見えるゴミなどの有機物を取り除いた。

100メッシュと200メッシュの標準篩でふるい分けて、74 μ m から149 μ m の粒度の砂を残した。

磁力を利用するマグネチックセパレータで磁性鉱物を除去した。石英は非磁性鉱物成分の方に分離される。今回の試料は磁性鉱物の含有量が多く、また非磁性鉱物成分に石英のほか長石や他の非磁性の着色鉱物が混入したので、セパレータの条件設定を変えて分離を繰り返した。

石英以外の非磁性鉱物はフッ酸に溶解しやすいので、これらを除去するために、フッ酸処理をした。正長石の含有量が多かったので原液（46%）のフッ酸で20分間処理をした。原液で完全に溶解しなかった正長石は脆くなって割れ易いので、フッ酸処理後の非磁性鉱物試料を流水下で200メッシュの篩の中で軽くこすり正長石を除去した。

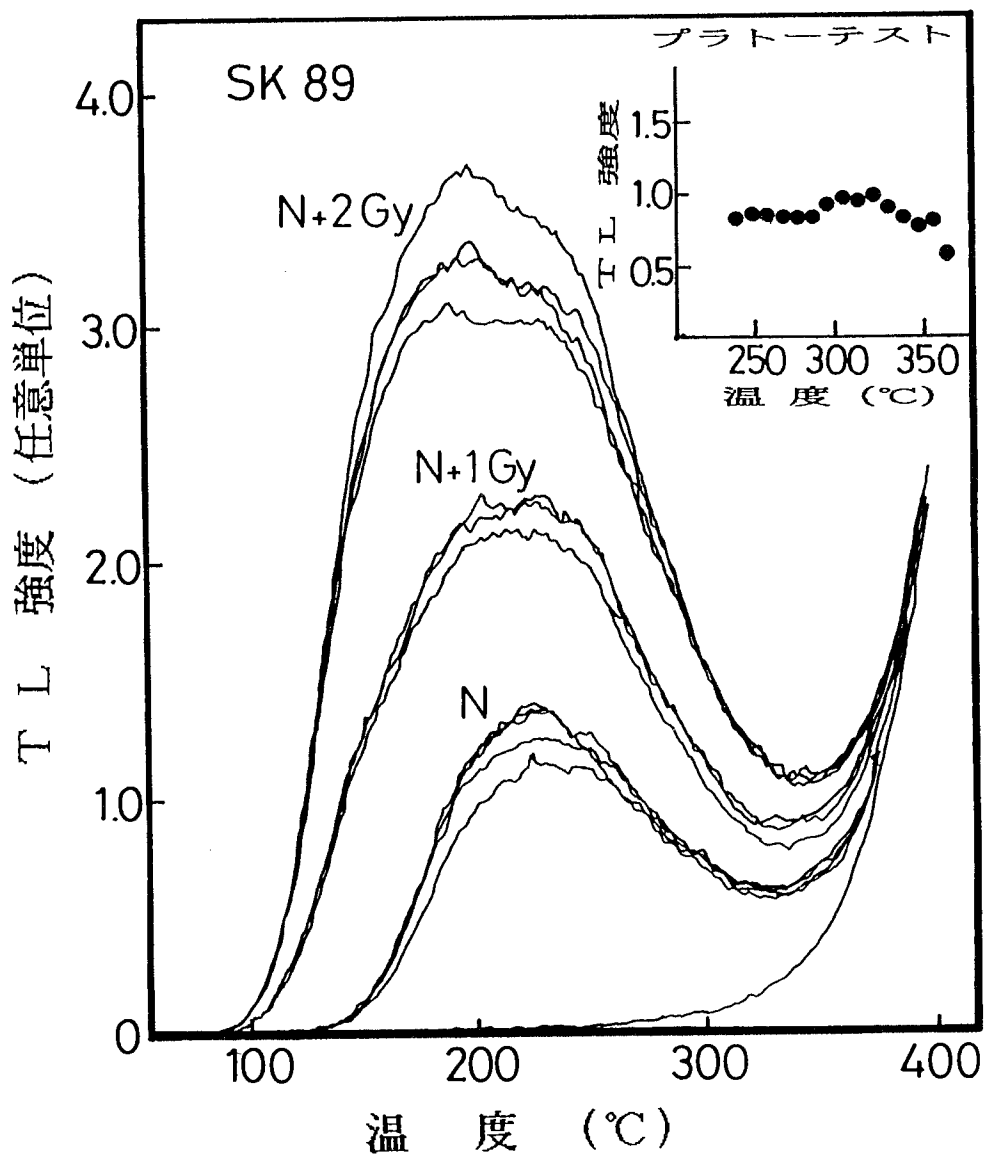
フッ酸処理は石英表面をエッチングして除去する作用もあるが、濃度が濃いため石英表面が荒れたので20%の酢酸で処理をした。

更に、残っている石英以外の成分を除去するため、再度マグネチックセパレータで、磁場強度を強くして分離した。

3. 測定

蓄積線量の測定

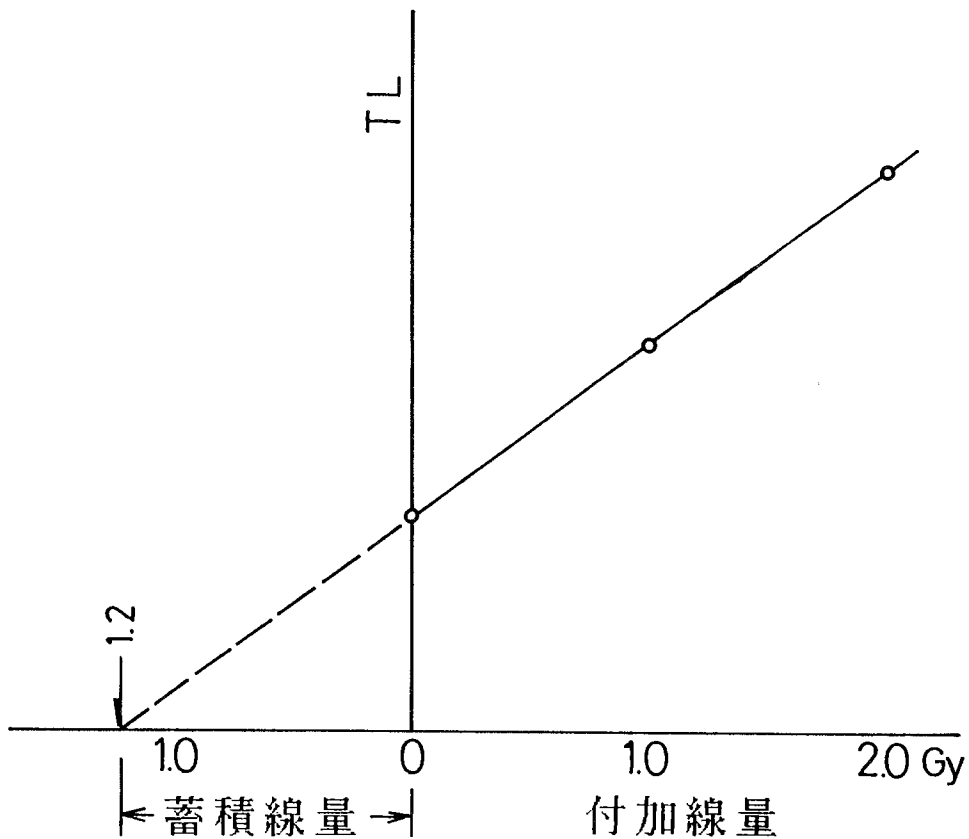
石英試料を TL 測定装置で加熱しながら発光量を測定し、温度に対して発光量を記録したものをグローカーブと呼ぶ。第2図に SK89のグローカーブを示した。図の中で、記号Nを付したカーブは付加線量を与えないもの、N+1Gy、N+2Gy はそれぞれ付加線量を1.0Gy、2.0Gy 照射した石英のグローカーブである（Gy は放射線量の単位、グレイである）。



第2図 第89号竈の火床の石英粒子のTL グローカーブ

第2図の挿図はプラトーテストと呼ばれる。これは石英結晶中に捕獲された電子が現在まで安定で存在したことをチェックする一つの方法であり、プラトー（平ら）になった温度領域では安定であったことを示している。

プラトーの温度領域で第3図のように付加線量に対して発光量をプロットしたとき、直線の延長が横軸と交わる点までの放射線量を等価線量という。SK89の等価線量は1.22Gy, SK90の等価線量は1.70Gyであった。



第3図 等価線量の決定方法

等価線量は竈の操作停止から現在までの放射線量に関係するが、必ずしも蓄積線量と一致しない。これは放射線量に対する TL 量が低放射線量で比例しない場合があるからである。これに対する補正をスプラリニア補正といい、実際には電気炉で、400°Cで30分アニールした石英に人為的にガンマ線を照射して、低放射線量での比例性をテストする。蓄積線量は等価線量とスプラリニア補正値の和である。SK89のスプラリニア補正値は0.25Gy, SK90のスプラリニア補正値は0.05 Gyであった。

年間線量の測定

石英粗粒子法の場合、蓄積線量に寄与する放射線は試料周辺の自然放射性元素からのベータ線とガンマ線および宇宙線である。これらの放射線量はベータ線量測定とガンマ線+宇宙線量測定の二つに分けて行った。ベータ線はガンマ線、宇宙線に比較して物質の透過能が小さいのでベータ線をガンマ線や宇宙線と同時に一つの方法で測定することが困難であるからである。

ベータ線量の測定のために、竈跡の試料を50 μ m程度に粉碎してコイン上にプレス成形した2枚の試料板をつくる。その間に粒子状の人工結晶である TL 線量計素子を薄く広げて数週間放置する。TL 線量計素子は放射線に対する感度が非常に高いので、2・3週間で試料中のベータ線量を測定することができる。

今回、ベータ線量の測定は SK89, SK90の他、SK148についてもおこなった。結果はそれぞれについて、1.201, 1.227, 1.163mGy/y であり、測定誤差の範囲で非常に良く一致した。これは竈跡の海岸の砂が均質であることによる。従って、ベータ線量率としてはこれらの平均値を採用した。

ガンマ線+宇宙線量は、通常銅のパイプに封入した TL 線量計素子を用いて遺跡現地で測定するが、これらの放射線の寄与はベータ線の寄与より少ないことが多いので、2・3ヵ月放置することが必要である。今回は竈跡の砂を大量に持ち帰り、これを地面に埋めて測定した。ベータ線の項で述べたように海岸の砂は均質であったので、ガンマ線+宇宙線量率の評価に関しては一つの測定値 (0.926mGy/y) で代表させた。

4. 結果と考察

以上のような方法で測定した等価線量、スプラリニア補正值、蓄積線量、年間線量をまとめたものが第1表である。表の最後の欄に蓄積線量を年間線量で割った TL 年代を示した。

第1表 TL 年代測定結果

試料	等価線量 (Gy)	スプラリニア 補正 (Gy)	蓄積線量 (Gy)	年間線量 (mGy)			T L 年代 (year)
				β	γ	$\beta + \gamma$	
SK89	1.22 \pm 0.15	0.15 \pm 0.10	1.37 \pm 0.25	1.20	0.93	2.13 \pm 0.06	643 \pm 119
SK90	1.70 \pm 0.30	0.05 \pm 0.05	1.75 \pm 0.35	1.20	0.93	2.13 \pm 0.06	822 \pm 166

TL 年代は1991年を基準として何年前であることを示す。

TL 年代測定は土器に対して適用されることが多いが、土器の場合は焼成する前に粘土を水簸などの方法で精選しているため、試料処理した胎土中の石英粒子も均質である。また、土器の焼成

温度も600°C程度を越えているのが普通であり、石英粒子も十分に高温雰囲気になっている。このため、土器の TL 年代測定ではグローカーブの再現性がよい。

これに対して、今回の測定試料は火床の砂であったため、土器のように均質に高温度まで焼かれていたとは限らない。実際、試料処理をかなり慎重に行ったにも拘らず、SK90のグローカーブは再現性が悪く、等価線量も SK89に較べて大きい結果になった。SK90の試料採取の際、不十分な焼け方の砂が混入した可能性がある。SK89についても、測定結果は通常の土器の TL 年代測定値に比べて大きな誤差を含んでいる。

上述の事情を考慮して、竈の操業が停止された TL 年代としては SK89の測定結果、すなわち、現在から643±119年前とするのが妥当であろう。

沢田遺跡土壌試料分析

農業環境技術研究所 土壌管理科

天野 洋司・草場 敬

I 目的

同遺跡の施設に使用された粘土が付近で採取されたものか、竈等に苦汁が混入しているか、苦汁の塊らしいものは本当に苦汁か、付近の黒土は人為によるものか——などを明らかにするための資料を得ることを目的として理化学的分析を行った。

II 試料と測定方法

試料は茨城県教育財団が採集したもので、表1に示すように合計15点である。比電導度は電導度計を用い試料の5倍(重量)の蒸留水を加えて測定した。PH(H₂O)、PH(KCl)は試料の2.5倍(試料10gに25ml)の蒸留水または1M-KClを加えて一昼夜放置後ガラス電極を用い測定した。土性と試料の一部をとり水で湿らせて触感鑑定を行った。鉱物組成、土壌組織の微細形態は、試料をくずさずに樹脂で固定したのち薄片を作製して偏光顕微鏡観察により判定した(試料数4点)。粘土鉱物は、試料から沈降法により2 μm以下の粘土を採取し、定法によりX線回析を行って判定した。

III 結果と考察

1 製塩施設に使用された粘土の由来

表2のように竈や土樋中の粘土(通称であって学術的にいう粘土ではない)といわれる部分の土性は比較的粗く、壤土くらいの組織を示す。また、付近の崖の細粒の層は砂壤土ないし埴壤土の範囲にあり壤土くらいの部分が多く、土性からみると竈等の細粒部分とほぼ同様である。微細形態の写真も同様である。第1図の回析図から粘土鉱物をみるとSA-9の粘土盤の粘土は大部分が非晶質物で火山灰から生成した粘土由来、SA-11粘土は7, 10, 14A結晶性鉱物を含むので、異質である。しかし、どちらも付近に分布しており、非晶質主体の粘土は地表に近い層から入手できる。

以上の結果からみて、施設の材料を近傍から入手したことを否定することはできない。

2 製塩施設作製への苦汁の使用の有無

表3の比電導度の数値は非常に低く、一般の農地土壌に比較しても高くない。また、2週間後の測定値はやや高いが、農地土壌よりも低い。PH(H₂O)とPH(KCl)の値は、通常の農地土壌よ

りやや高く、また、逆転 (KCl-PH が H₂O-PH よりも高い) しているものもある。その一つの原因は、これらの試料の緩衝能が非常に弱いことにあると推定できる。苦汁のような水溶性の高い電解質が含まれていれば、比電導度は非常に高いはずであるが、逆にそれが非常に低いことは、現在、ほとんど含まれていないことを意味する。また、写真や表 4 に示すように結晶性の塩類は全く見られないことも上記の結論を裏づけている。

3 砂土中に発見された灰白色の塊は苦汁か

その塊は一見して軽石と判定できるが、さらに薄片として観察すると大部分が火山ガラスと石英で構成された有色鉱物はほとんど見出されないの、かなり珪長質の火山放出軽石とみられる。比電導度のごく低いことも含めて、苦汁固形物ではない。この軽石は付近の地層中には層として見あたらないので、時代は不明であるが、海流による漂着物と考えるのが妥当であろう。

4 施設の黒色部分の由来

表 2 に示すように試料 SA-4、SA-7 などから炭化植物片 (ワラが多い) が多量に見出され、微細形態写真及び表 4 に示されているように黒の大部分は混在する炭化植物片によって説明できる。しかし、SA-9 試料の暗色は炭だけでなく腐植が粘土と結合している。腐植の層は付近の崖では、表層の黒墨土だけに見られるので、施設の一部に黒墨土が混入したと推定しても間違いではない。

表 1 沢田遺跡分析試料一覧

試料番号	試料採取地点	備 考
SA-1	第914号鹹水槽	粘土壁
SA-2	第914号鹹水槽	粘土
SA-3	第834号鹹水槽	焼粘土
SA-4	第273号土樋	粘土
SA-5	表採	にがり固形物(?)
SA-6	第234号竈	黒色土最外側
SA-7	第234号竈	竈地盤
SA-8	第234号竈	焼砂
SA-9	第32号不明遺構	粘土盤
SA-10	—	倉庫付近粘土
SA-11	—	倉庫付近粘土
SA-12	第223号竈	灰・土
SA-13	第43号竈	34層粘土
SA-14	第43号竈	35層粘土
SA-15	第43号竈	36層粘土

試料番号は、分析の際、便宜上付加した番号、以下同様。

表2 沢田遺跡試料の土性

試料番号	土性	備考
SA-1	L (壤土)	
SA-2	L~SL (砂壤土)	
SA-3	S (砂土)	焼結物あり
SA-4	G (礫土)	軽石
SA-5	S (砂土)	
SA-6	S (砂土)	炭を含む
SA-7	SL (砂壤土)	炭を含む
SA-8	LS (壤砂土)	炭を含む
SA-9	L (壤土)	腐植を含む
SA-10	SL (砂壤土)	
SA-11	CL (埴壤土)	粗砂を含む
SA-12	LS (壤砂土)	炭を含む
SA-13	SL (砂壤土)	タフ質
SA-14	SL (砂壤土)	タフ質
SA-15	SL (砂壤土)	タフ質

表3 沢田遺跡試料の比電導度・PH(H₂O, KCl)

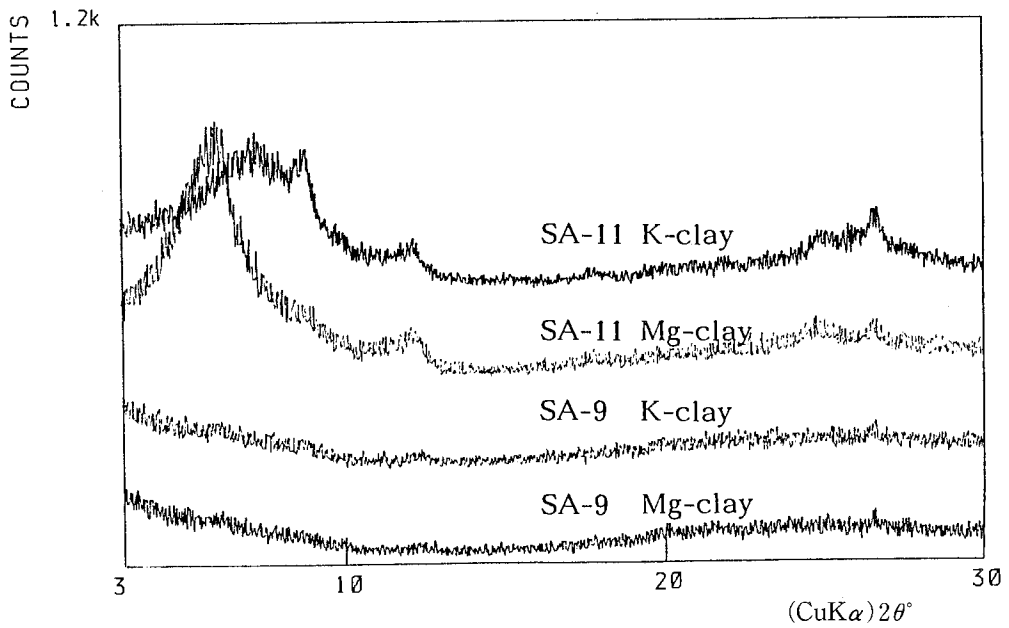
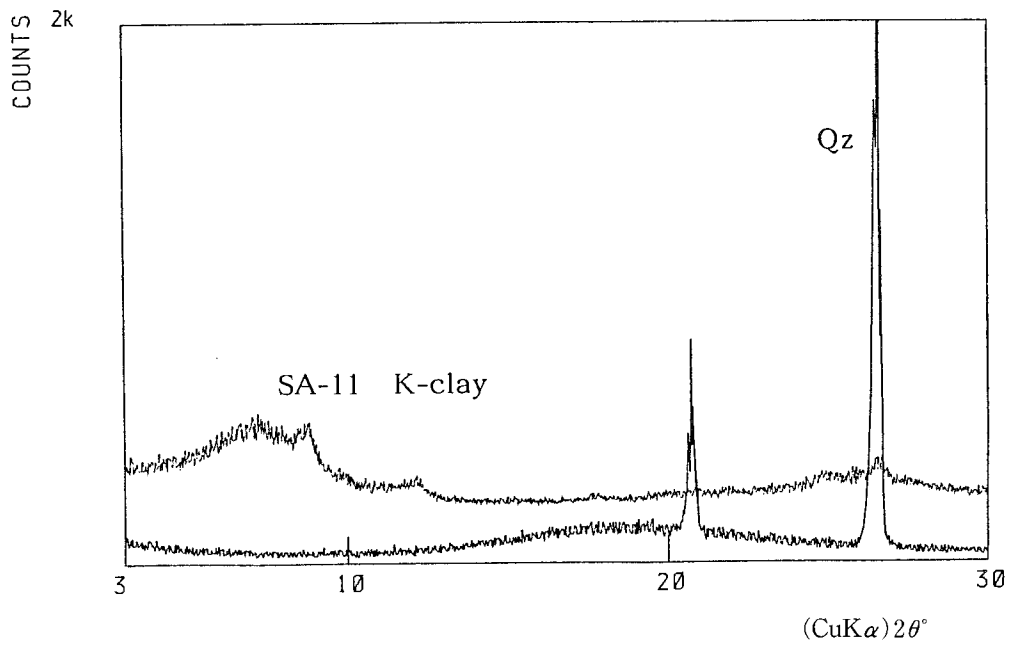
試料番号	EC(1日後)*	EC(14日後)**	PH(H ₂ O)	PH(KCl)
SA-1	51.1	217	7.5	7.2
SA-2	53.5	212	8.1	7.1
SA-3	36.0	166	7.4	7.5
SA-4	91.0	216	7.2	7.5
SA-5	16.7	56	8.1	7.5
SA-6	12.3	71	7.8	7.5
SA-7	52.2	121	7.8	7.7
SA-8	55.9	104	6.9	7.6
SA-9	43.6	106	7.9	7.5
SA-10	38.7	61	6.7	6.6
SA-11	54.2	90	7.5	5.7
SA-12	79.6	130	8.0	7.8
SA-13	33.7	59	7.8	7.4
SA-14	35.1	58	7.8	7.4
SA-15	47.5	61	6.8	7.2
蒸留水	1.4	1.4	—	—

*) 試料に5倍の水を加え、1日後に測定した比電導度

***) 同様にして、14日後に測定した比電導度

表4 沢田遺跡主要層の微細形態（偏光顕微鏡観察）

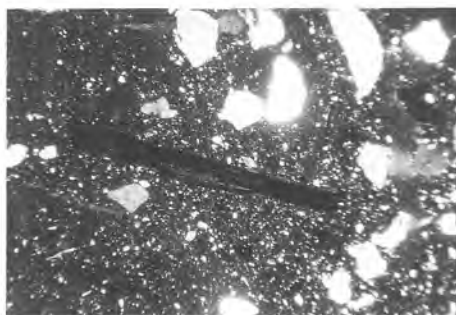
試料番号	主構成鉱物等	組 織
SA-4	粘土鉱物，石英，斜長石，炭化植物	基質の粘土中にいろいろな大きさの石英，斜長石，ワラ炭化物などが無秩序に散在，人が粘土と付近の砂土，ワラなどを混合したものと判定，塩類結晶ないので苦汁の利用については確証なし。
SA-5	火山ガラス，石英	多孔質の火山ガラスを主とする軽石，苦汁の固まったものではない。きわめて数が少なく，層をなしていないので，漂着物と推定。
SA-6	石英，斜長石，岩片	ほぼ大きさの揃った石英，斜長石の亜角粒子が無秩序に散在，粘土はほとんど見られない。大部分は周辺の砂丘砂と同じ，塩類の結晶は認められず，苦汁の利用については確証なし。
SA-7	粘土鉱物，炭化植物，石英，斜長石	粘土中にいろいろな大きさの石英，斜長石粒子や炭化したワラ片などが散在，人による混合物，炭化植物片はSA-4よりも多い。塩類の結晶は認められず，苦汁の利用については確証とならない。



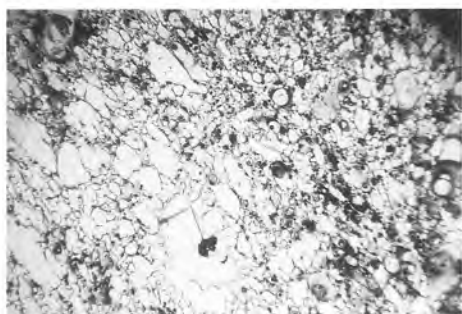
第1図 沢田遺跡試料中の2 μ m以下粘土のX線回析図
 Qz=標準石英粉末, K-clay=カリウム粘土,
 Mg-clay=マグネシウム粘土



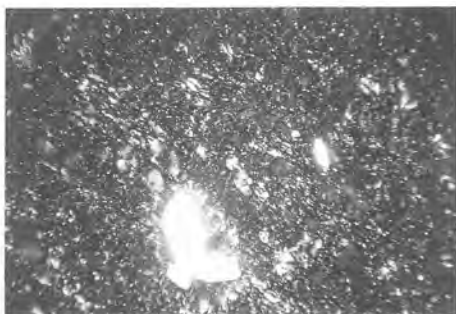
SA-4 平行ニコル(中央に炭化物)



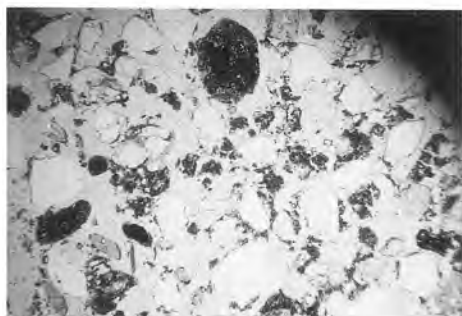
SA-4 クロスニコル(中央に炭化物)



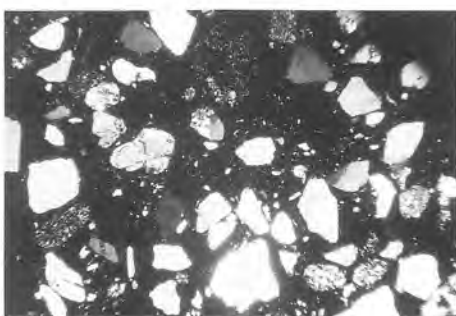
SA-5 平行ニコル



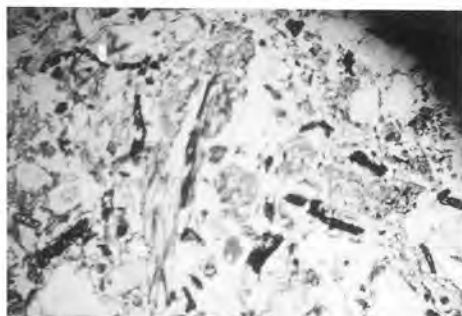
SA-5 クロスニコル



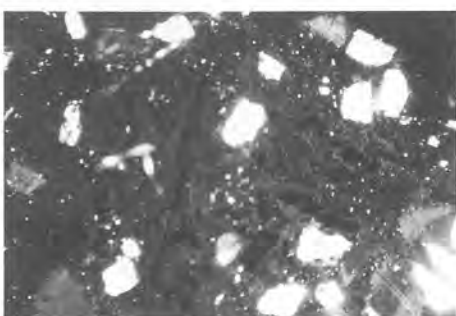
SA-6 平行ニコル



SA-6 クロスニコル



SA-7 平行ニコル



SA-7 クロスニコル

微細形態

沢田遺跡出土木製品材同定について

財団法人 茨城県教育財団
沢田遺跡出土木製品材同定委託報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、財団法人茨城県教育財団殿より御依頼のありました、沢田遺跡出土木製品の材同定が終了しましたので、その結果を御報告申し上げます。

記

沢田遺跡出土材の樹種

1 試料

試料はNo.1～4の4点で、第5製塩跡の第81号鹹水槽と第116号鹹水槽から出土した木製品であり、直接あるいは間接的に製塩に使われたものと考えられている（表1）。

2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡図（第1図）も作成した。

3 結果

試料は以下の2種類（Taxa）に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質は次のようなものである。

・マツ属（複維管束亜属）の一種 [Pinus (subgen. Diploxyton) sp.] マツ科

No.1, 2

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1～15細胞高。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、アカマツ（Pinus densiflora）、クロマツ（P. thunbergii）、リュウキュウマツ（P. luchuensis）の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く成育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途で知られている。

・ハンノキ属の一種 (*Alnus* sp.) カバノキ科 No.3, 4

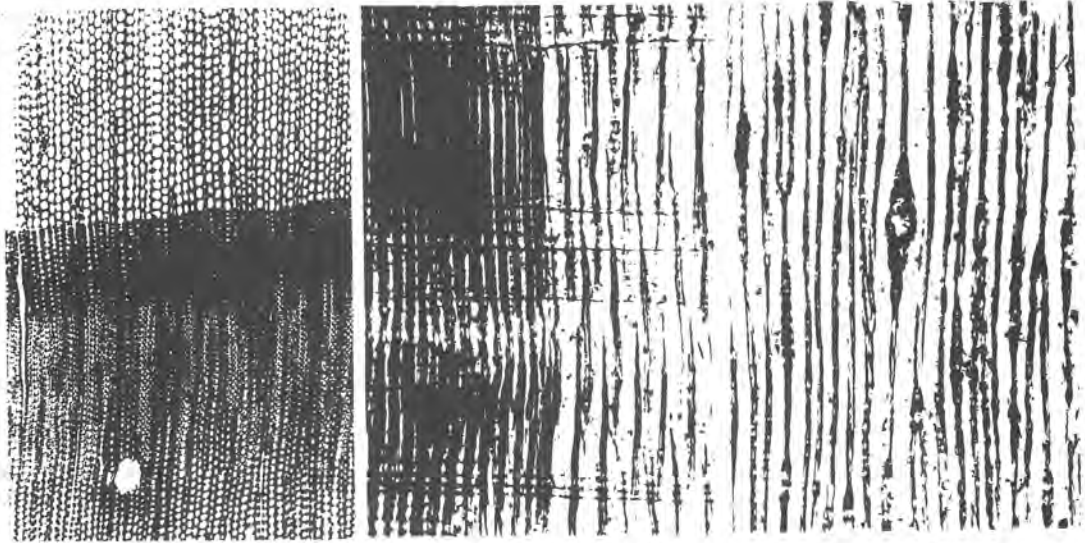
散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合または単独で配列、横断面では楕円形、道管は階段穿孔を有し、段(bar)数は10～30。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のもの集合組織よりなる。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、ハンノキ (*Alnus japonica*) の仲間 (=ハンノキ亜属) とヤシャブシ (*A. firma*) やミヤマハンノキ (*A. maximowiczii*) の仲間 (=ヤシャブシ亜属) に分けられる。いずれも根に根瘤菌が共生しているため痩地でもよく生育する。材はやや軽軟～やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具材などとして用いられる。

以上の同定結果を出土地点・用途とともに一覧表で示す(表1)。

表1 沢田遺跡出土材の樹種

試料番号	出土地点	用途	種名
1	SN81	柄振	マツ属(複維管束亜属)の一種
2	SN81	ろ過器	マツ属(複維管束亜属)の一種
3	SN81	椀	ハンノキ属の一種
4	SN116	椀	ハンノキ属の一種

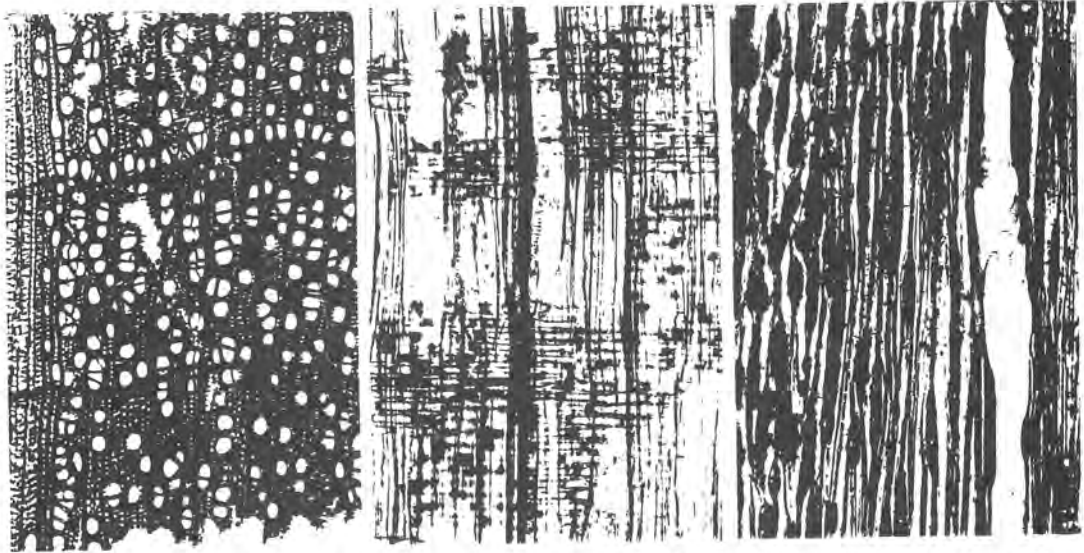


木口 x40

柁目 x100

板目 x100

Pinus (subgen. *Diploxylon*) sp. No. 1



木口 x40

柁目 x100

板目 x100

Alnus sp. No. 4



第 1 図 出土材の顕微鏡図

写真図版



第81号鹹水槽出土ろ過器



調査前風景



調査前風景



調査前風景



調査前風景

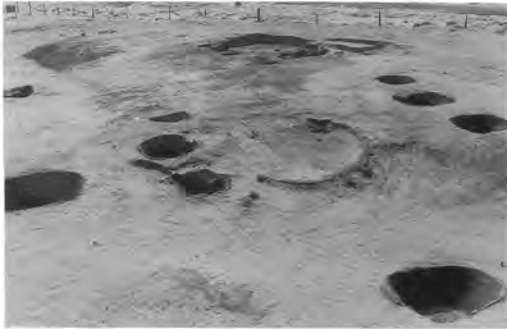


調査前風景

PL2



調査後全景



調査後全景



作業風景



作業風景



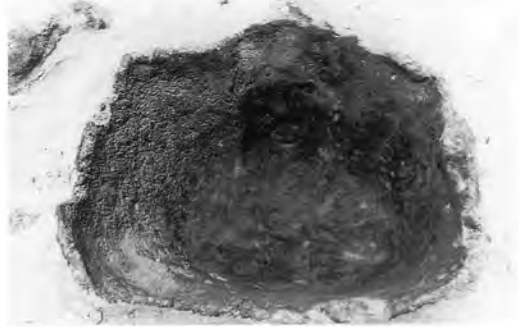
作業風景



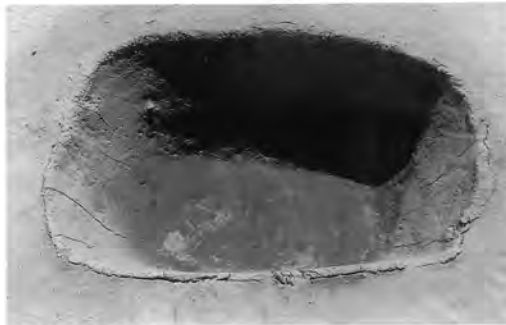
第1号竈



第11号鹹水槽



第12号鹹水槽



第14号鹹水槽



第15号鹹水槽

PL4

第2製塩跡



釜屋全景



第13号鹹水槽



第63号鹹水槽



第64号鹹水槽



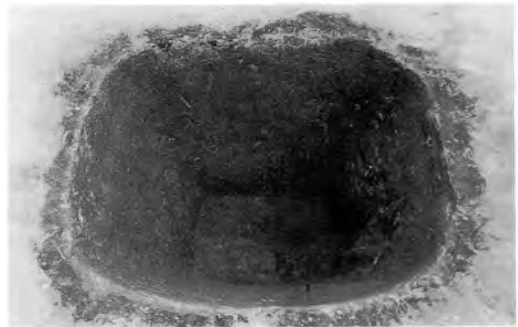
第64・65号鹹水槽



釜屋全景



第1号鹹水槽



第2号鹹水槽



第10号鹹水槽



第61・62号鹹水槽



釜屋全景



第87号鹹水槽



第89号鹹水槽



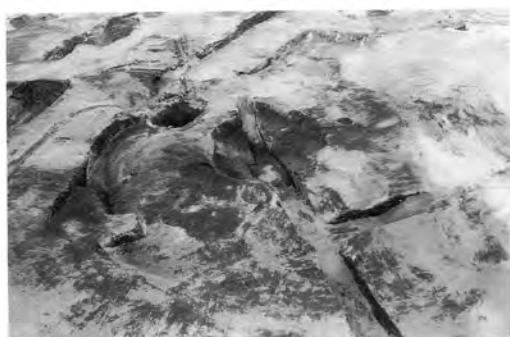
第90号鹹水槽



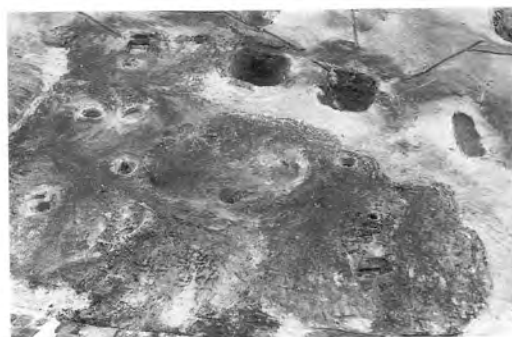
第91号鹹水槽



釜屋全景



釜屋全景



釜屋全景



第5の22号鹹水槽



第5の35号鹹水槽

PL8



第16号鹹水槽

第5製塩跡



第17号鹹水槽



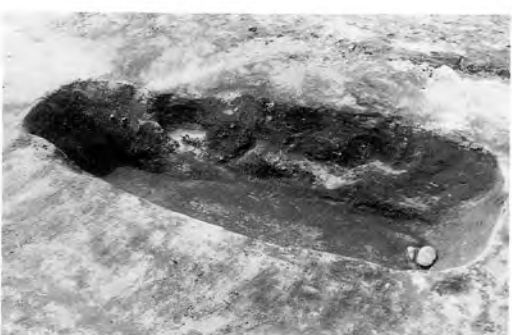
第18号鹹水槽



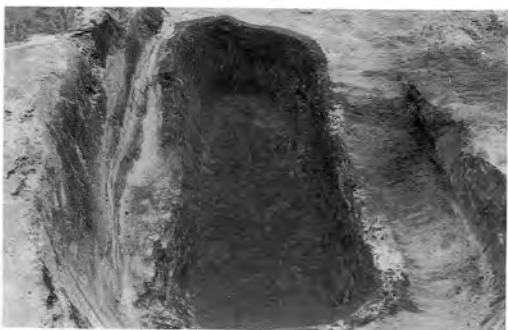
第27号鹹水槽



第32号鹹水槽



第45号鹹水槽



第47号鹹水槽



第55号鹹水槽



第 1 号土樋



第58号土樋



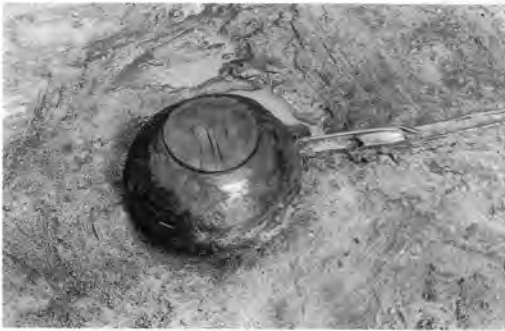
第 1 号土樋



第58号土樋



第81号鹹水槽遺物出土状況



第81号鹹水槽遺物出土状況



第81号鹹水槽遺物出土状況



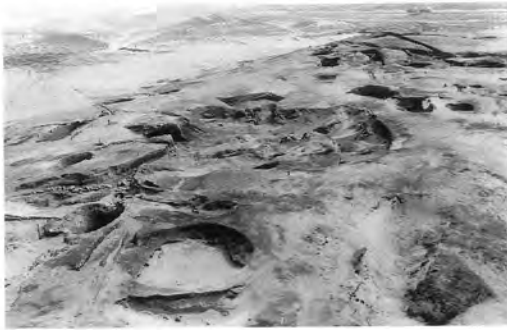
第81号鹹水槽遺物出土状況



第125号鹹水槽遺物出土状況

第6 製塩跡

PL11



釜屋全景



第6の1号鹹水槽



第32号鹹水槽



第35号鹹水槽



第3号土樋



第46号鹹水槽



第22号土樋



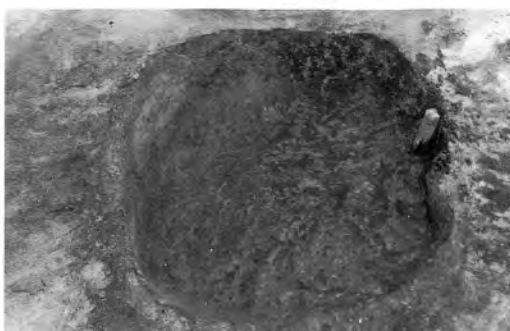
7—第26号鹹水槽遺物出土狀況



7—第28号鹹水槽遺物出土狀況



7—第33号鹹水槽



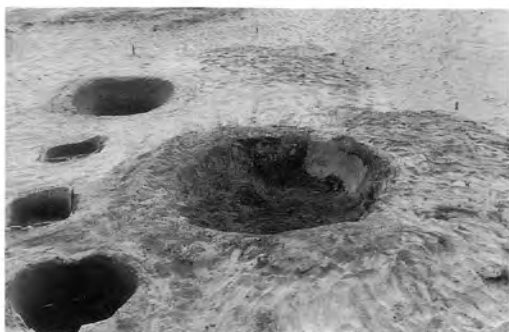
7—第49号鹹水槽



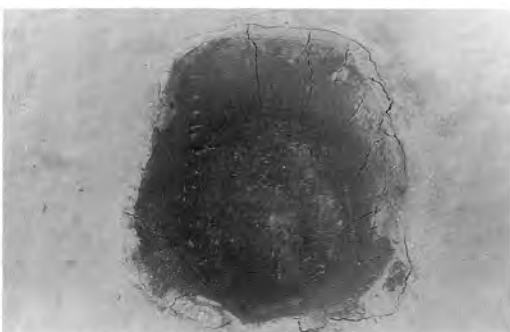
8—第18号竈



8—第177号鹹水槽



9—釜屋全景



9—第105号鹹水槽



釜屋全景



釜屋全景



第154号鹹水槽



第180号鹹水槽



第184号鹹水槽



11—釜屋全景



11—第146号鹹水槽



12—第33号竈



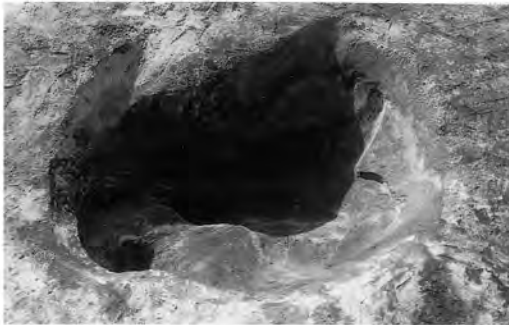
12—第161号鹹水槽



12—第162号鹹水槽



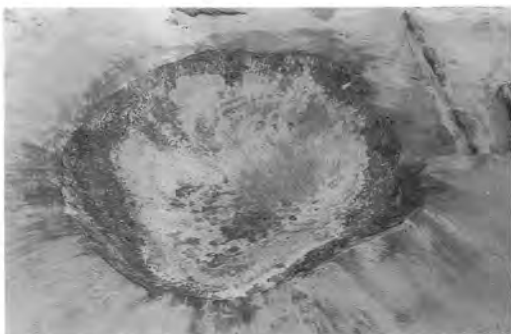
12—第169号鹹水槽



13—第27号竈



13—第157号鹹水槽



14—第8号竈



14—第36号鹹水槽



15—釜屋全景



15—第24号竈



18—第150号鹹水槽



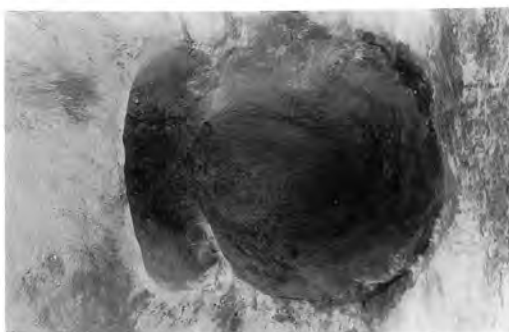
19—釜屋全景



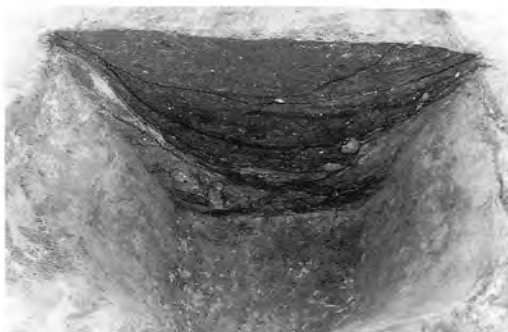
19—釜屋全景



19—第19の1号鹹水槽



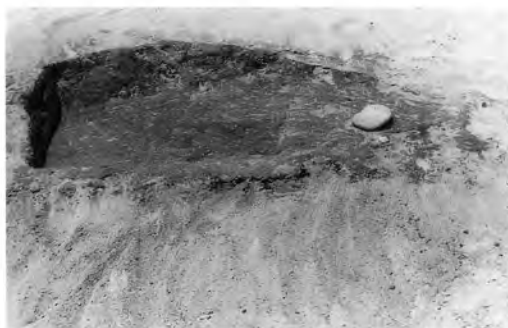
21—第168号鹹水槽



21—第168号鹹水槽土層断面



22—釜屋全景



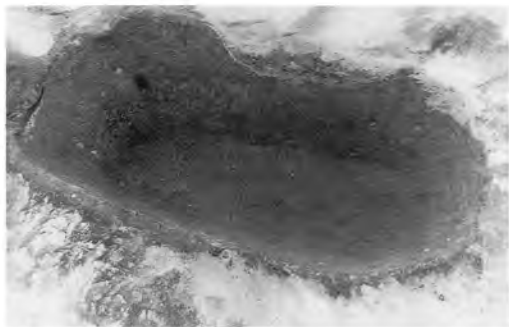
22—第698号鹹水槽



23—製塩跡全景



23—釜屋全景



23—第699号鹹水槽



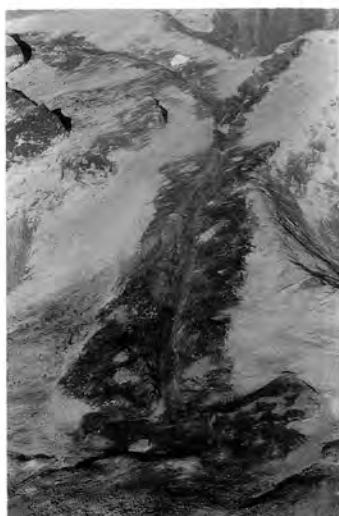
23—第820号鹹水槽



23—第848号鹹水槽



23—第864号鹹水槽



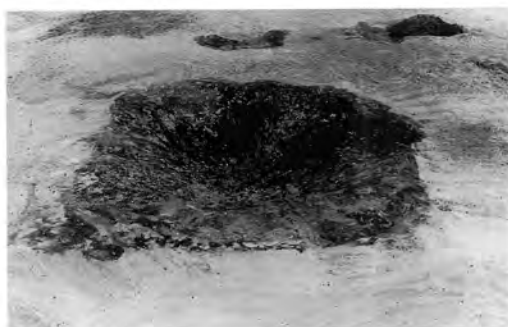
23—第198・199号土樋



23—第225号土樋



24—製塩跡全景



24—第199号竈



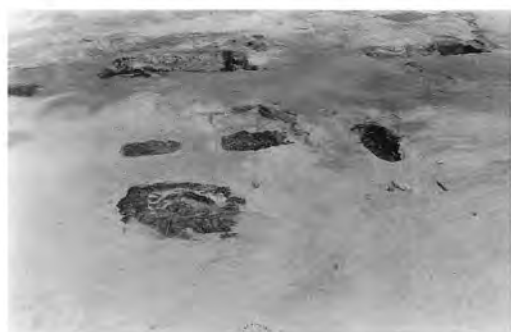
24—第199号竈断割



24—第719号鹹水槽



24—第723号鹹水槽



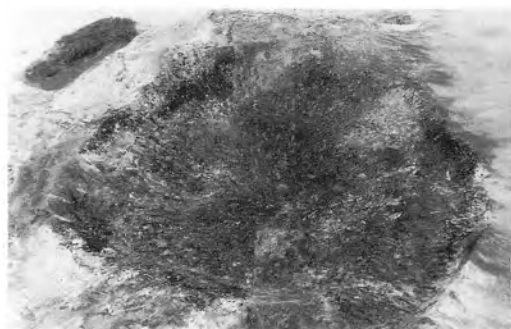
25—製塩跡全景



25—第200号竈



26—製塩跡全景



26—第201号竈



26—第716号鹹水槽



26—第717号鹹水槽(二次)



26—第717号鹹水槽(一次)



27—第202号竈



27—第202号竈遺物出土狀況



27—第202号竈遺物出土狀況



27—第202号竈遺物出土狀況



28—製塩跡全景



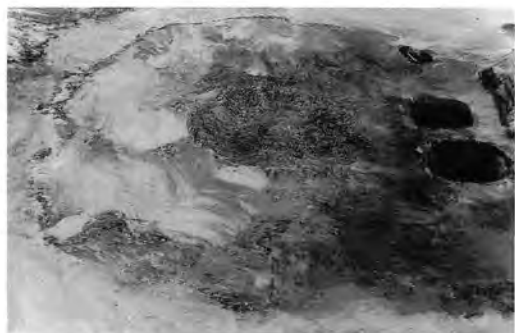
28—第203号竈断割



28—第203号竈断割



29—製塩跡全景



29—釜屋全景



29—第761号鹹水槽



29—第163・166号土樋



30—786号鹹水槽



製塩跡全景



釜屋全景



第784・785号鹹水槽



第207号竈断割



釜屋に伴う柱痕土層断面

PL22

第31製塩跡



第701号鹹水槽



第701号鹹水槽断割



第709号鹹水槽



第715号鹹水槽



第815号鹹水槽



第884号鹹水槽



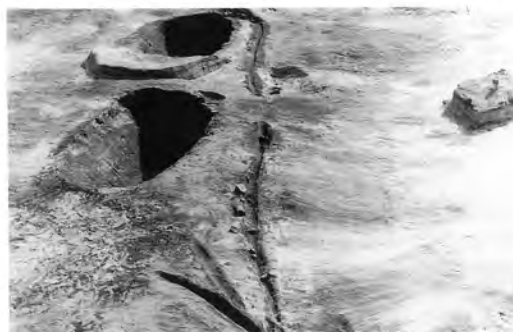
第815号鹹水槽



第151号土樋土層断面



31—第148号土樋



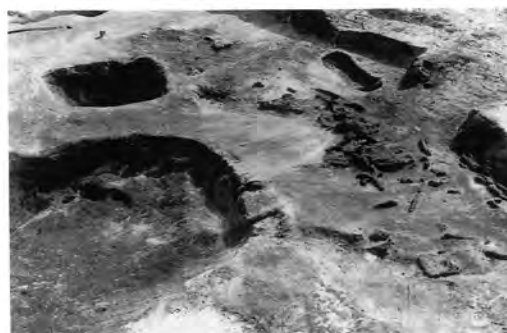
31—第185・186号土樋



31—第187号土樋水受け



32—製塩跡全景



32—釜屋内炭化材出土状況



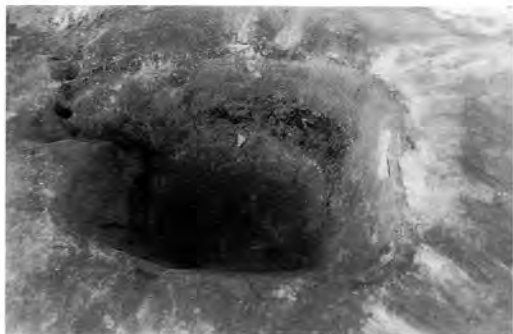
32—第829号鹹水槽



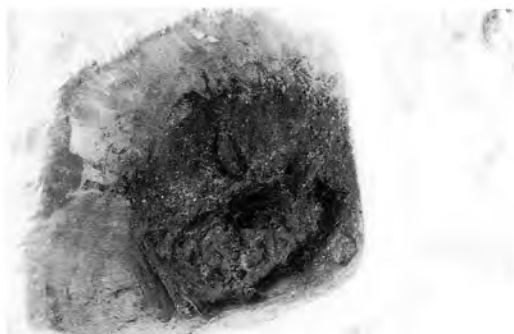
32—第830号鹹水槽

PL24

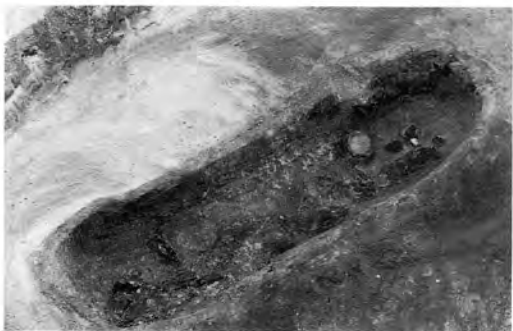
第32製塩跡



第830号鹹水槽



第830号鹹水槽



第832号鹹水槽



第834号鹹水槽



第834号鹹水槽



第834号鹹水槽



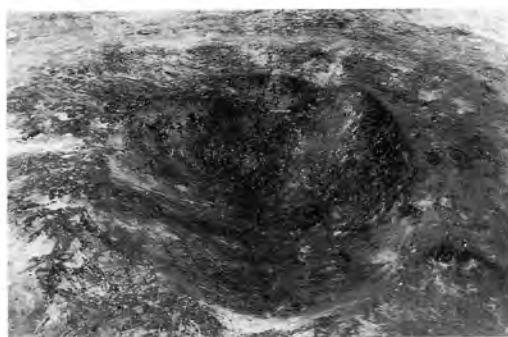
第838号鹹水槽



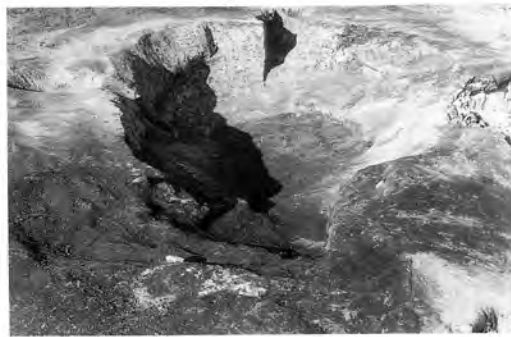
第210号土樋



釜屋全景



第223号竈(一次)



第223号竈(二次)



第223号竈遺物出土状況



第223号竈内土釜出土状況



第821号鹹水槽



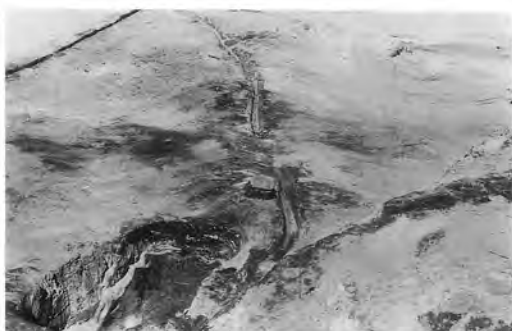
第828号鹹水槽



第818号鹹水槽



第906号鹹水槽



第203・204号土樋



第203号土樋



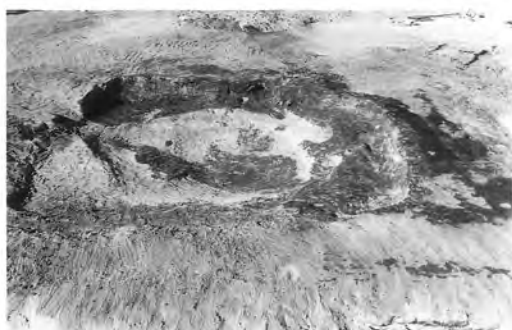
第202・251・261・262号土樋



第258号土樋



34—釜屋全景



34—第224号竈



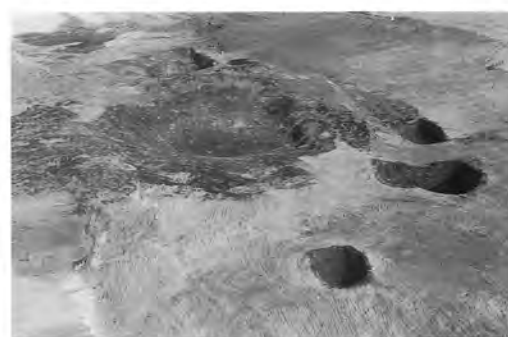
34—第224号竈断割



35—釜屋全景



34—第213号土樋



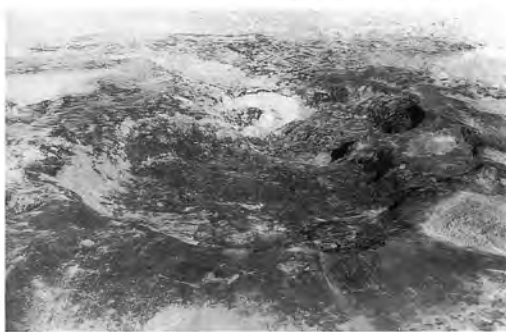
38—釜屋全景



38—第228号竈



39—釜屋全景



39—第229号竈



39—第844号鹹水槽



39—第845号鹹水槽



39—第846号鹹水槽



40—釜屋全景



42—釜屋全景



42—第882·887·891·893·904号鹹水槽群



42—第886号鹹水槽



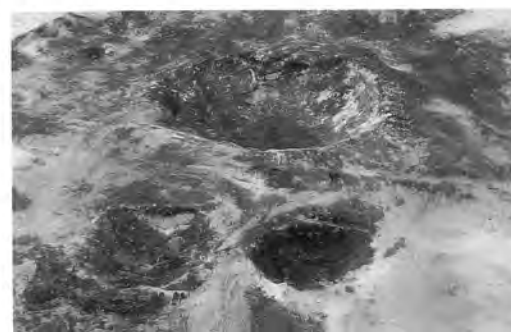
42—第246号木桶



43—第828号鹹水槽



43—第206号土桶



44—第57号竈



44—第207号鹹水槽



45—釜屋全景



48—製塩跡全景



48—第90号竈



47—製塩跡全景



48—釜屋全景



48—第281・367号鹹水槽



46—釜屋全景



46—第335号鹹水槽



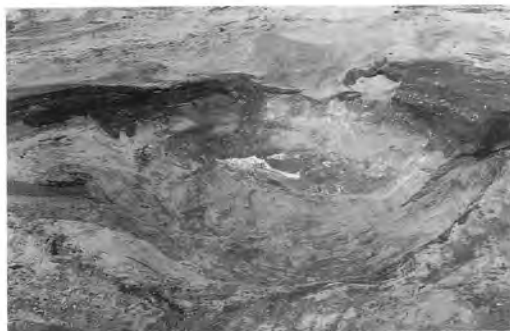
49—釜屋全景



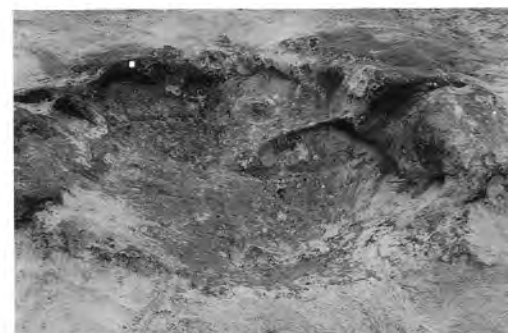
49—釜屋全景



49—第91号竈



51—第109号竈



53—第110号竈



53—第120号竈

PL32

第54・55・56製塩跡



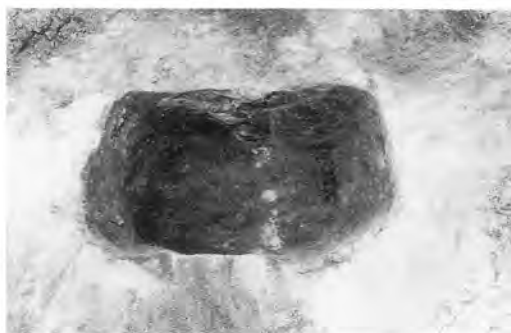
54—第126号竈



54—釜屋全景



54—第477号鹹水槽



55—第480号鹹水槽



54—第107・108・109号土樋



56—第128号竈



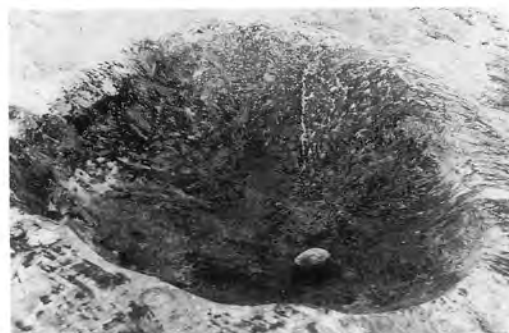
56—第128号竈断割



57—釜屋全景



57—第129号竈



57—第130号竈



57—第405号鹹水槽



58—釜屋全景



59—釜屋全景



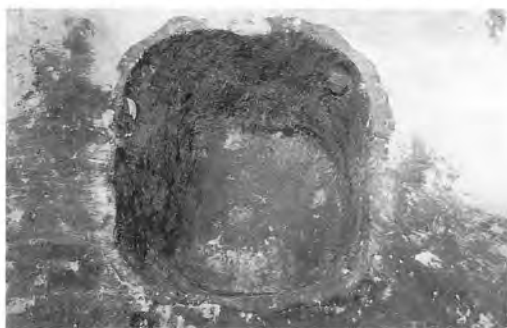
59—第410号鹹水槽



61—第284号鹹水槽



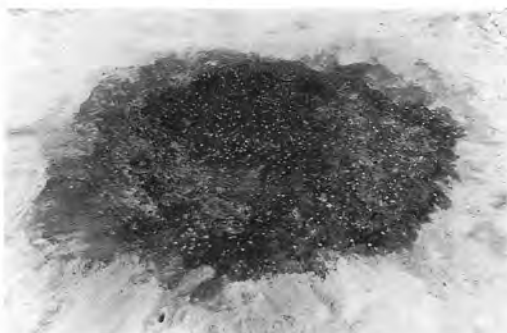
61—第309号鹹水槽



62—第198号鹹水槽



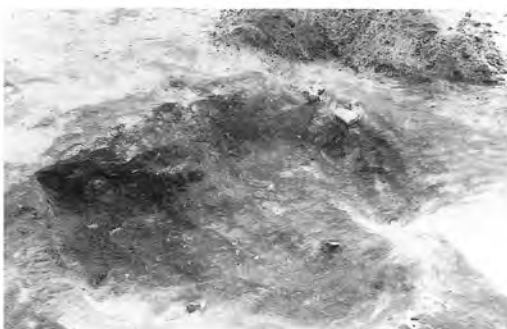
62—第199号鹹水槽



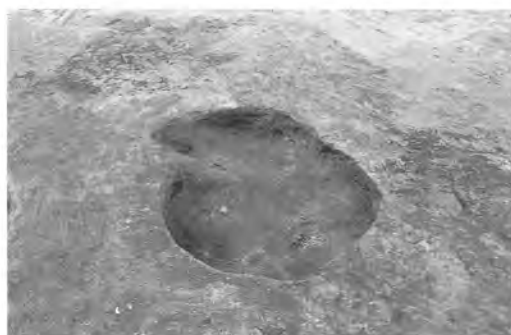
63—第98号竈



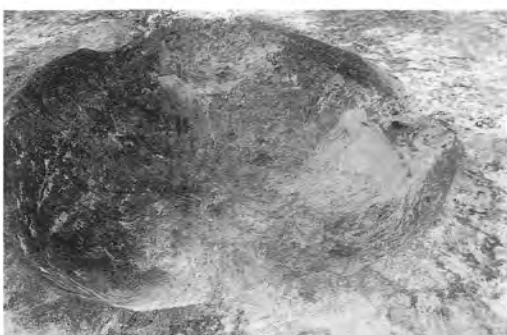
67—第148号竈



68—第155号竈



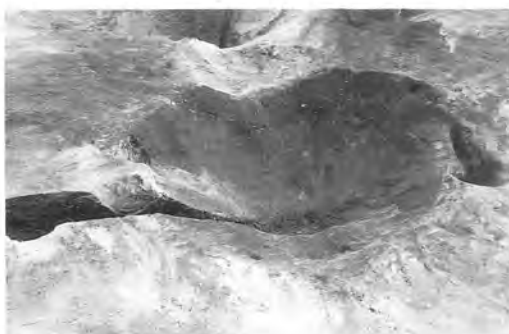
69—第157号竈



70—第158号竈



71—第159号竈



72—第165号竈



73—釜屋全景



74—釜屋全景



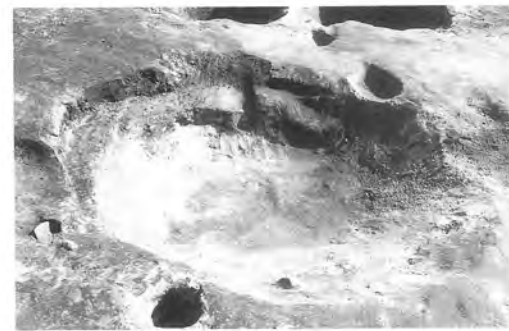
76—第171号竈



78—第170号竈



80—釜屋全景



80—第183号竈



81—第634·638号鹹水槽



82—釜屋全景



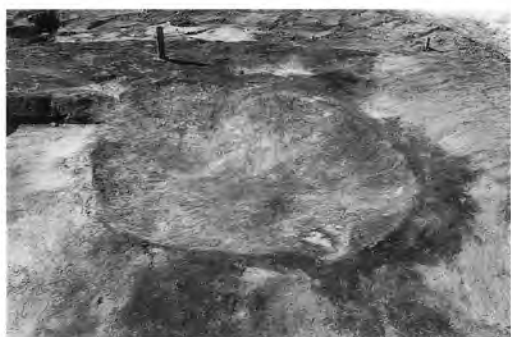
82—第642号鹹水槽土層断面



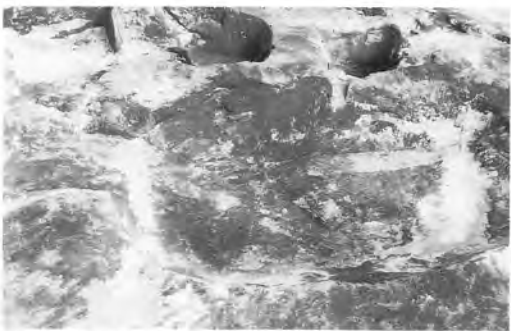
82—第642号鹹水槽遺物出土狀況



83—釜屋全景



83—第193号竈



84—釜屋全景



84—第667号鹹水槽



第3号鹹水槽



第4号鹹水槽



第5号鹹水槽



第6号鹹水槽



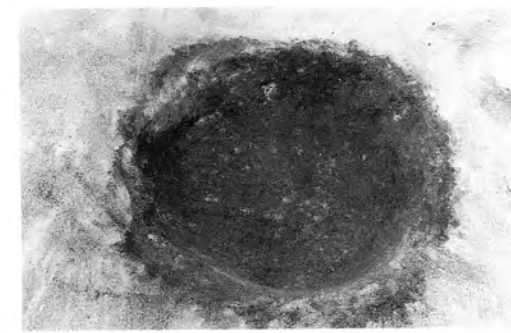
第7号鹹水槽



第8号鹹水槽

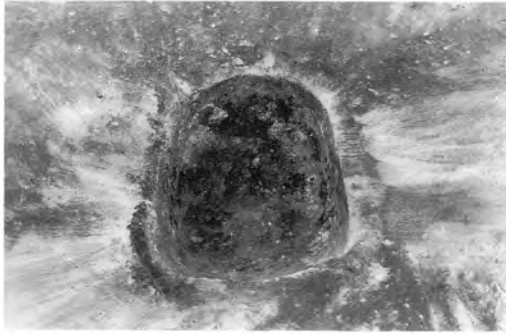


第9号鹹水槽



第21号鹹水槽

PL38



第25号鹹水槽

甕を伴わない鹹水槽



第40号鹹水槽



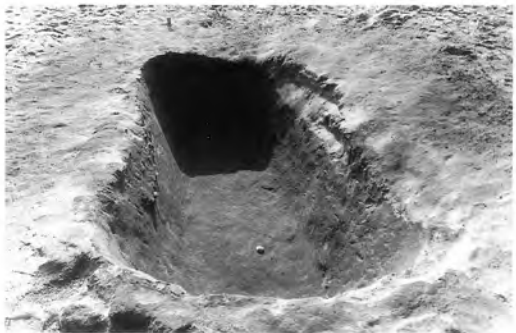
第57号鹹水槽



第65号鹹水槽



第114号鹹水槽



第116号鹹水槽



第133号鹹水槽



第138号鹹水槽



第139号鹹水槽



第142号鹹水槽



第148号鹹水槽



第149号鹹水槽



第152号鹹水槽



第160号鹹水槽



第171号鹹水槽



第171号鹹水槽土層断面



第693号鹹水槽



第694号鹹水槽



第707号鹹水槽



第707号鹹水槽土層断面



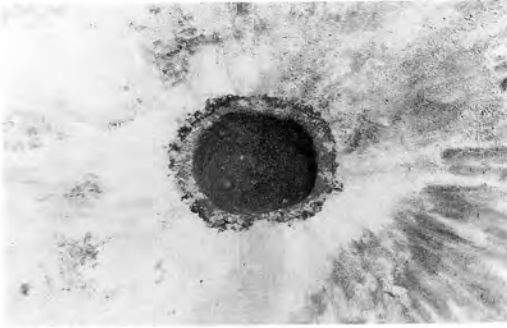
第766号鹹水槽



第769号鹹水槽



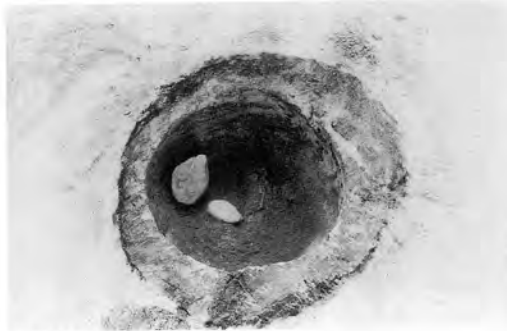
第770号鹹水槽



第771号鹹水槽



第778号鹹水槽



第798号鹹水槽



第853号鹹水槽



第863号鹹水槽



第898号鹹水槽



第226号鹹水槽



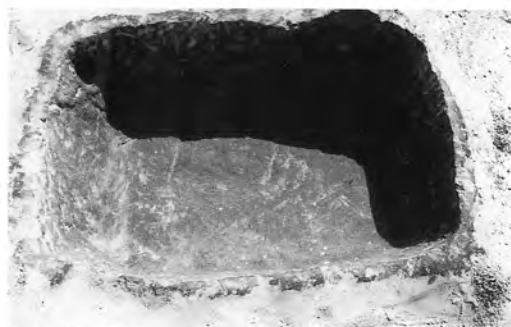
第230号鹹水槽

PL42

竈を伴わない鹹水槽



第232号鹹水槽



第285号鹹水槽



第292号鹹水槽



第294号鹹水槽



第303号鹹水槽



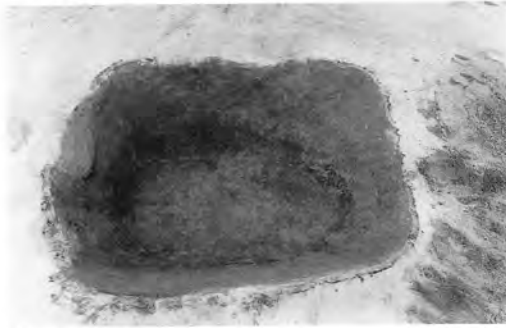
第315号鹹水槽



第316号鹹水槽



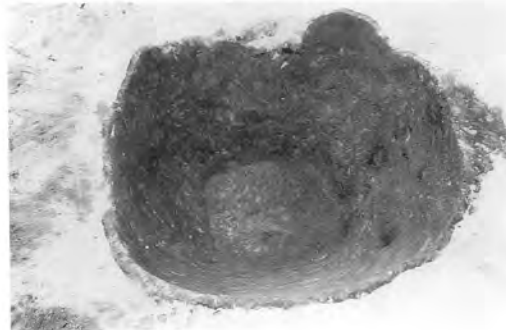
第323号鹹水槽



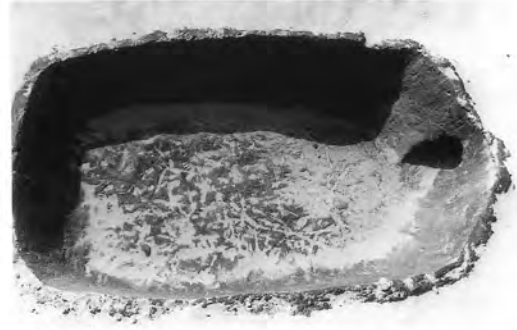
第329号鹹水槽



第334号鹹水槽



第344号鹹水槽



第374号鹹水槽



第376号鹹水槽



第444号鹹水槽

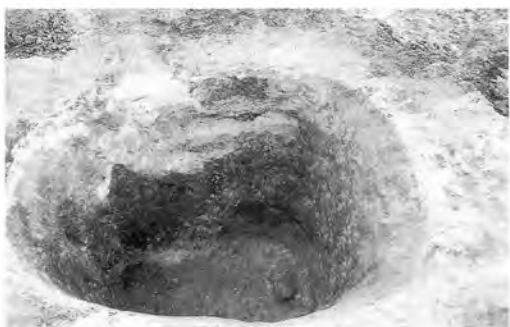


第466号鹹水槽



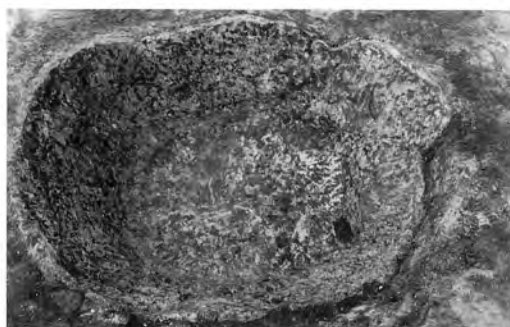
第467号鹹水槽

PL44



第503号鹹水槽

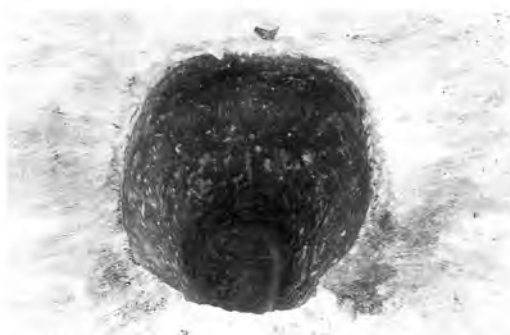
竈を伴わない鹹水槽・土樋



第565号鹹水槽



第569号鹹水槽



第670号鹹水槽



第681号鹹水槽



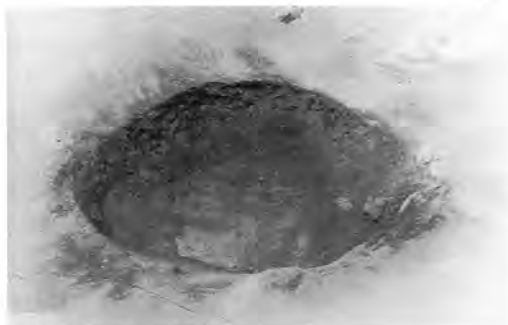
第48号土樋



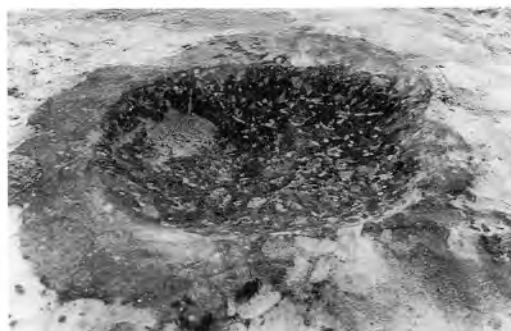
第80号土樋



第10号炉迹(SK77)



第13号炉迹(SK84)



第18号炉迹(SK97)



第21号炉迹(SK102)



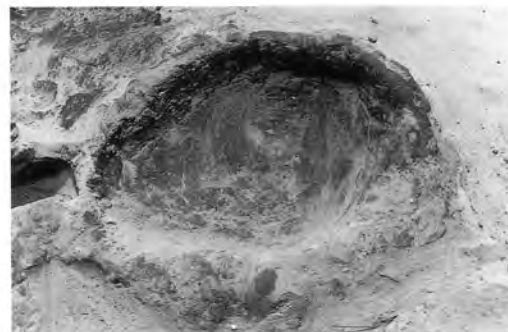
第23・24号炉迹(SK104・105)



第27号炉迹(SK132)



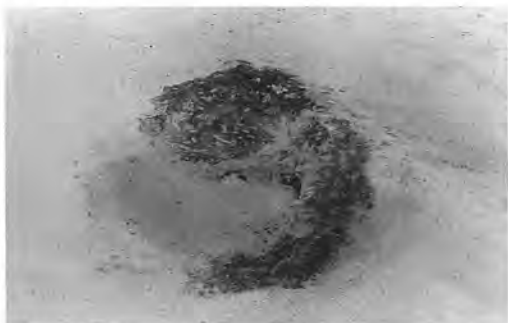
第40号炉迹(SK179)



第7号土坑(SK214)

PL46

不明遺構



8 (SX18)



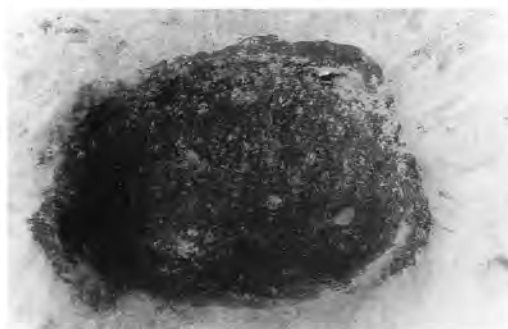
21 (SK60)



25 (SK79)



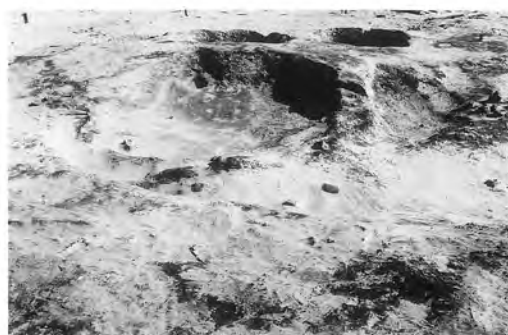
26 (SK81)



27 (SK82)



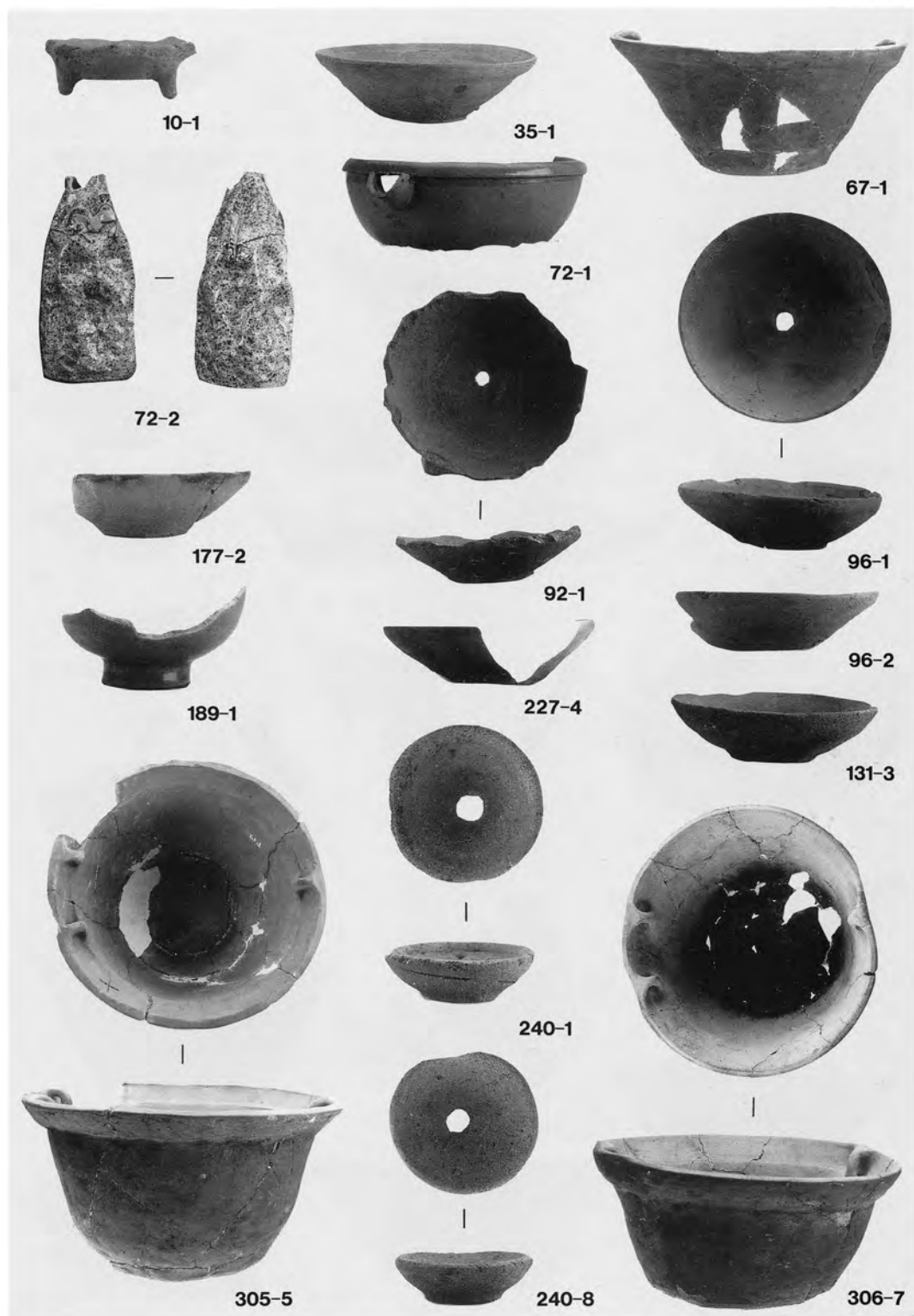
28 (SK88)



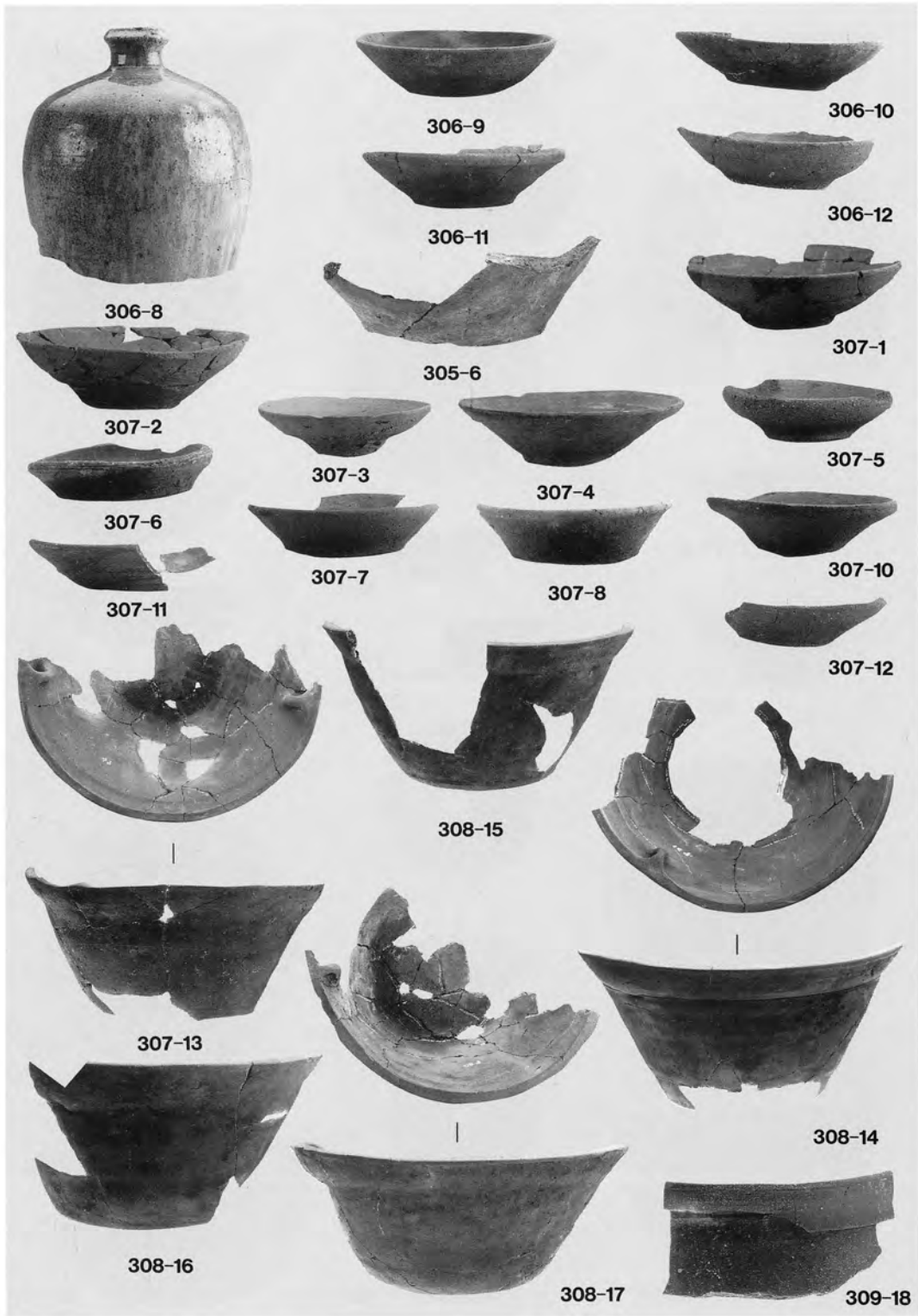
36 (SK175)



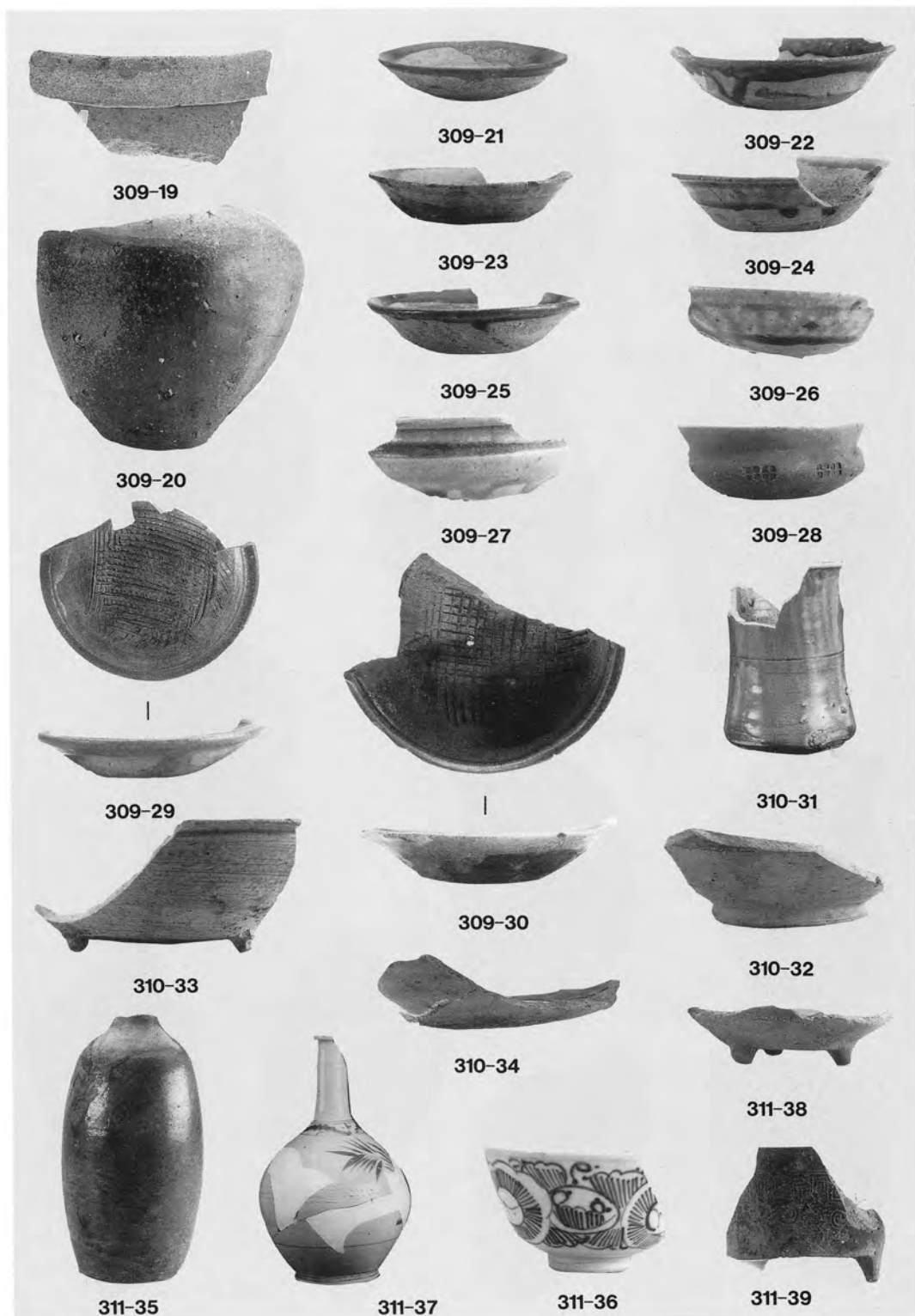
T5h₃区遺物出土状況



陶器，磁器，土師質土器，内耳形土器

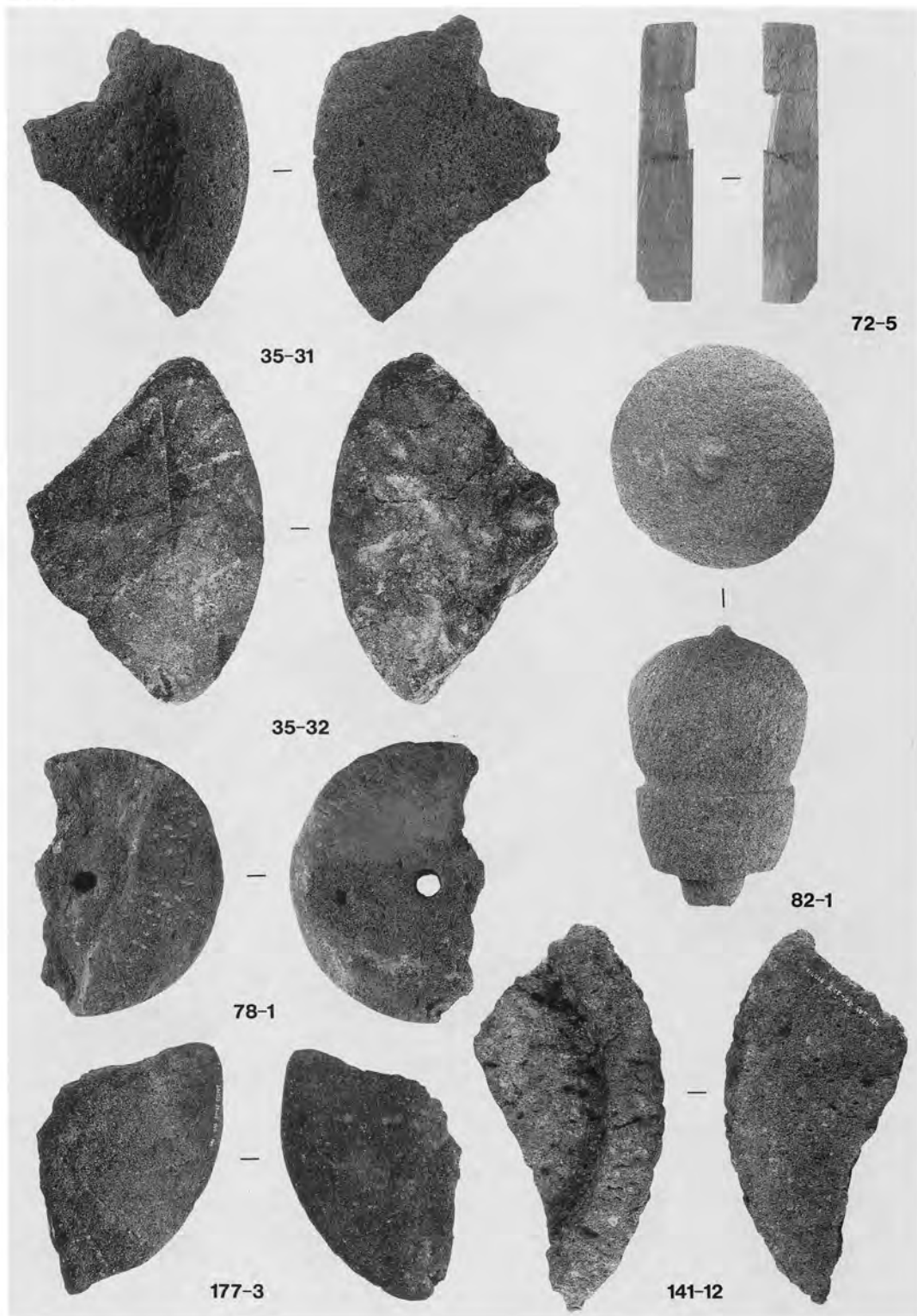


陶器，土師質土器，内耳形土器

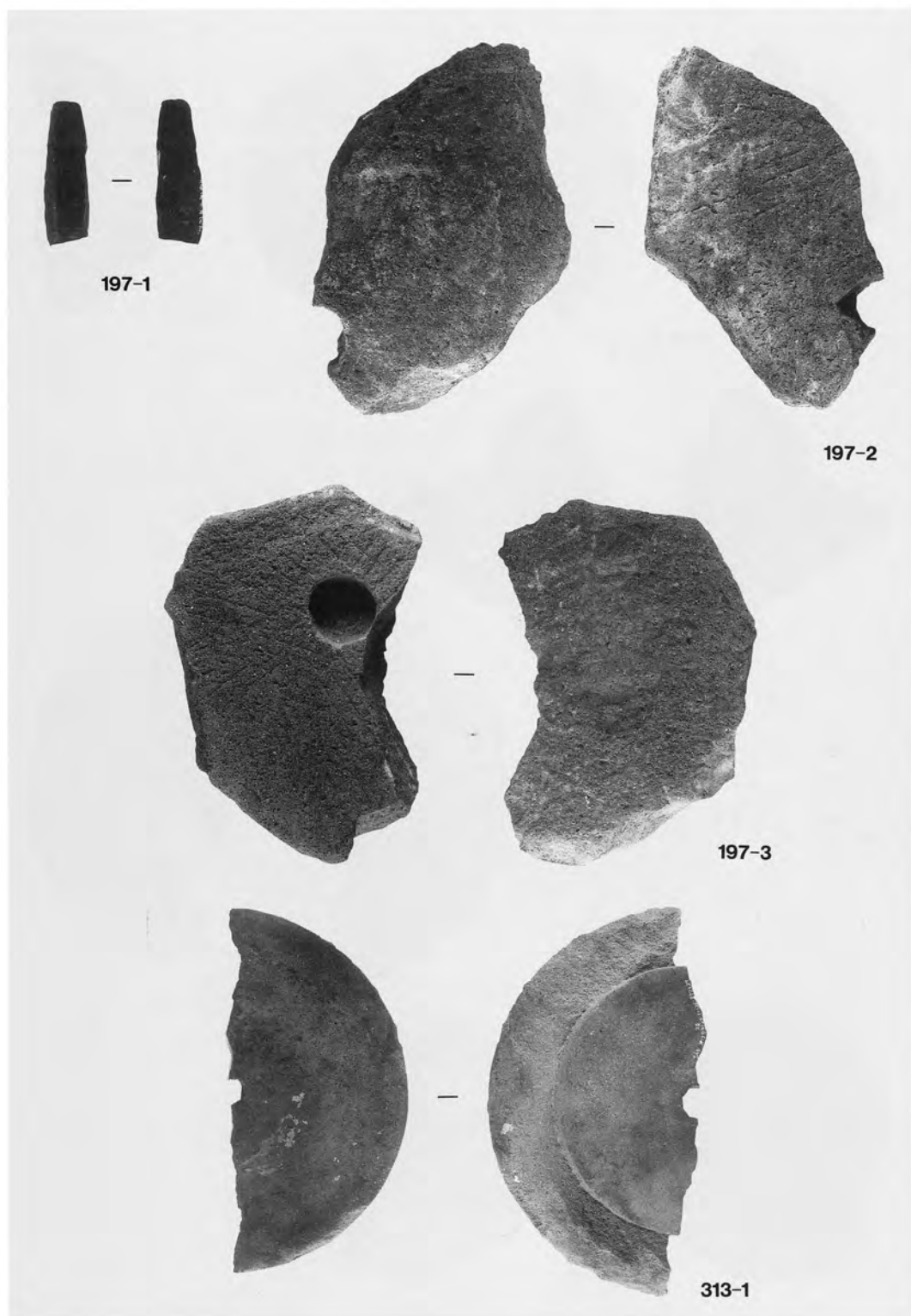


陶器, 磁器

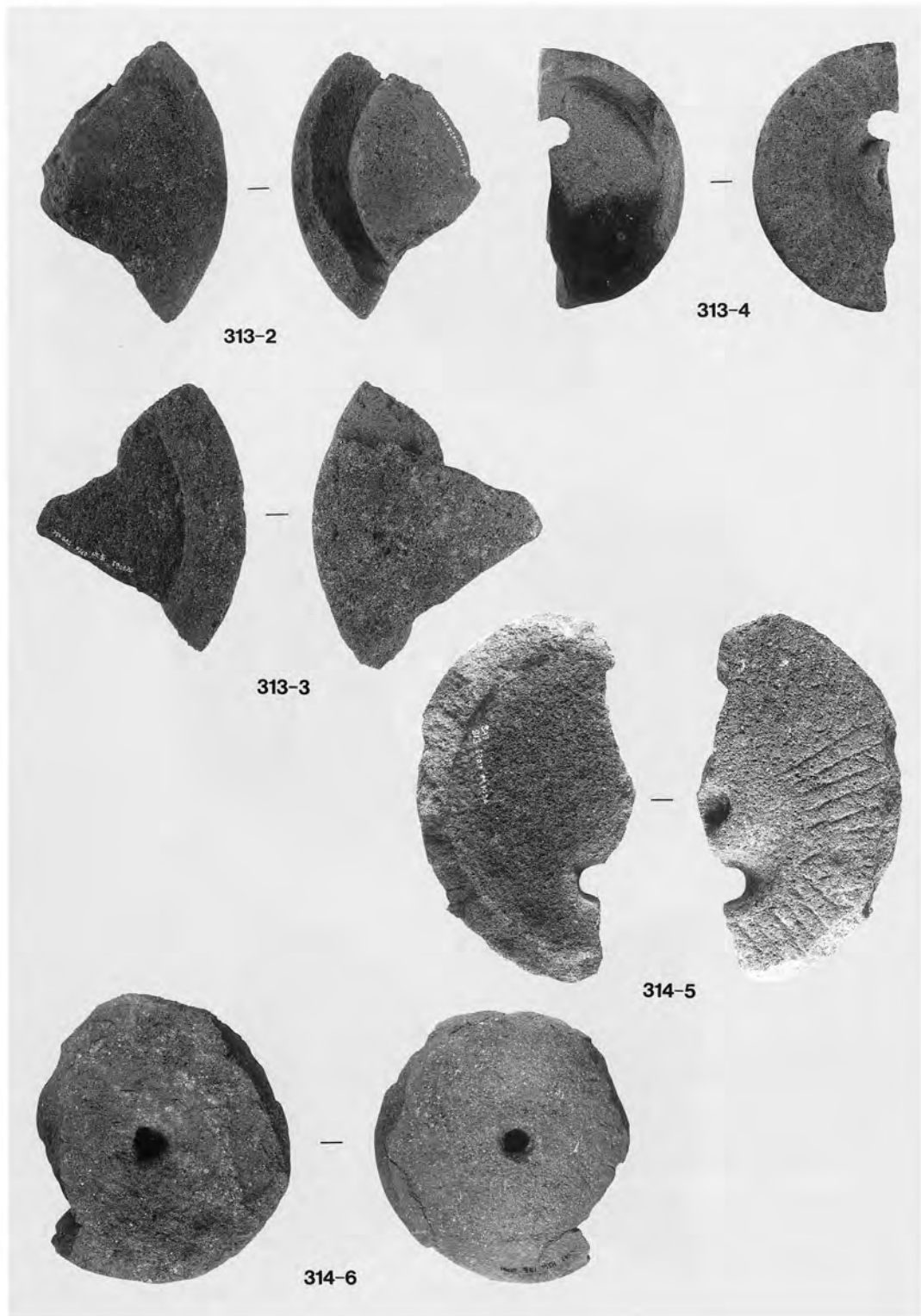
PL50



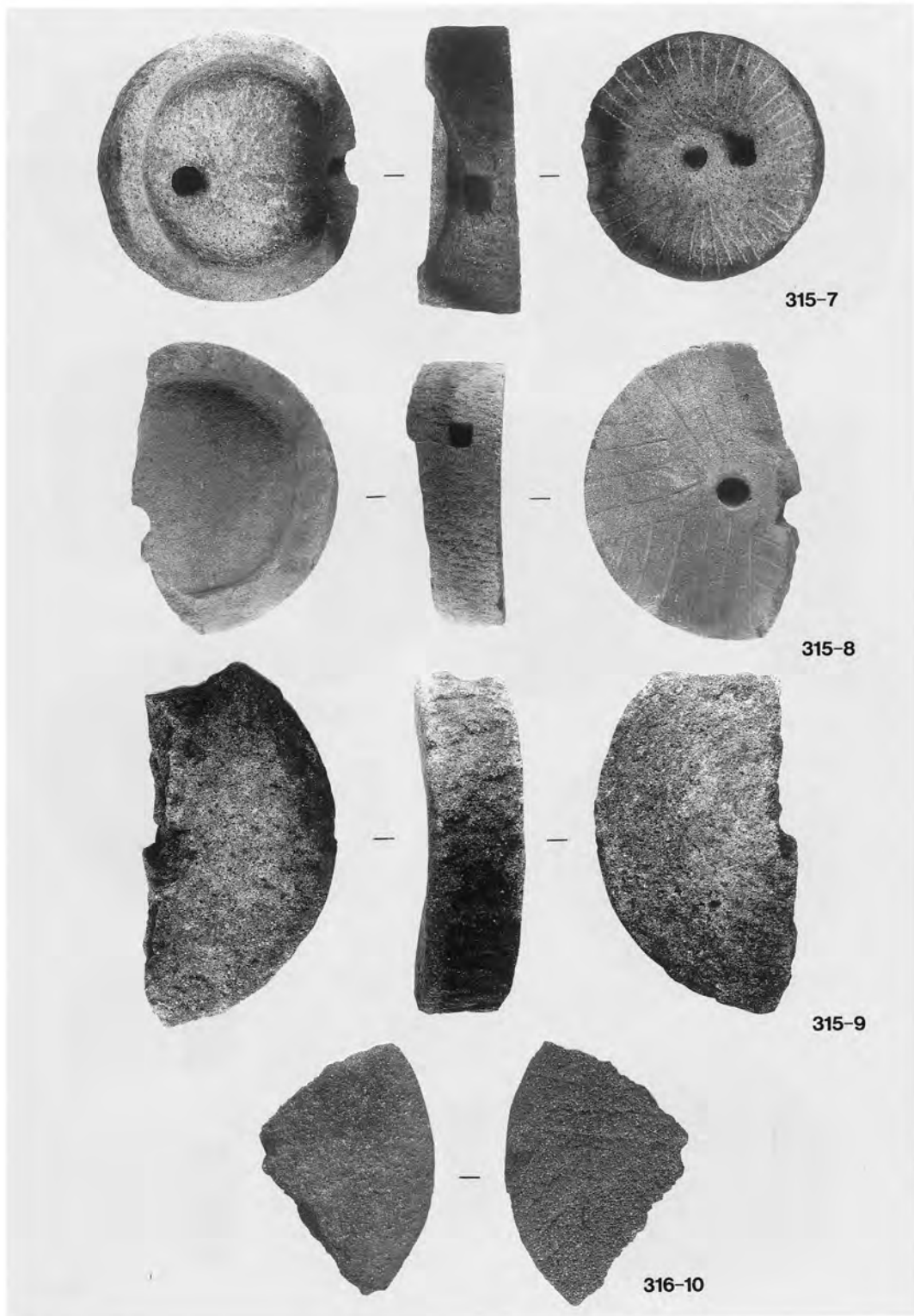
石製品(石臼・石塔・砥石)



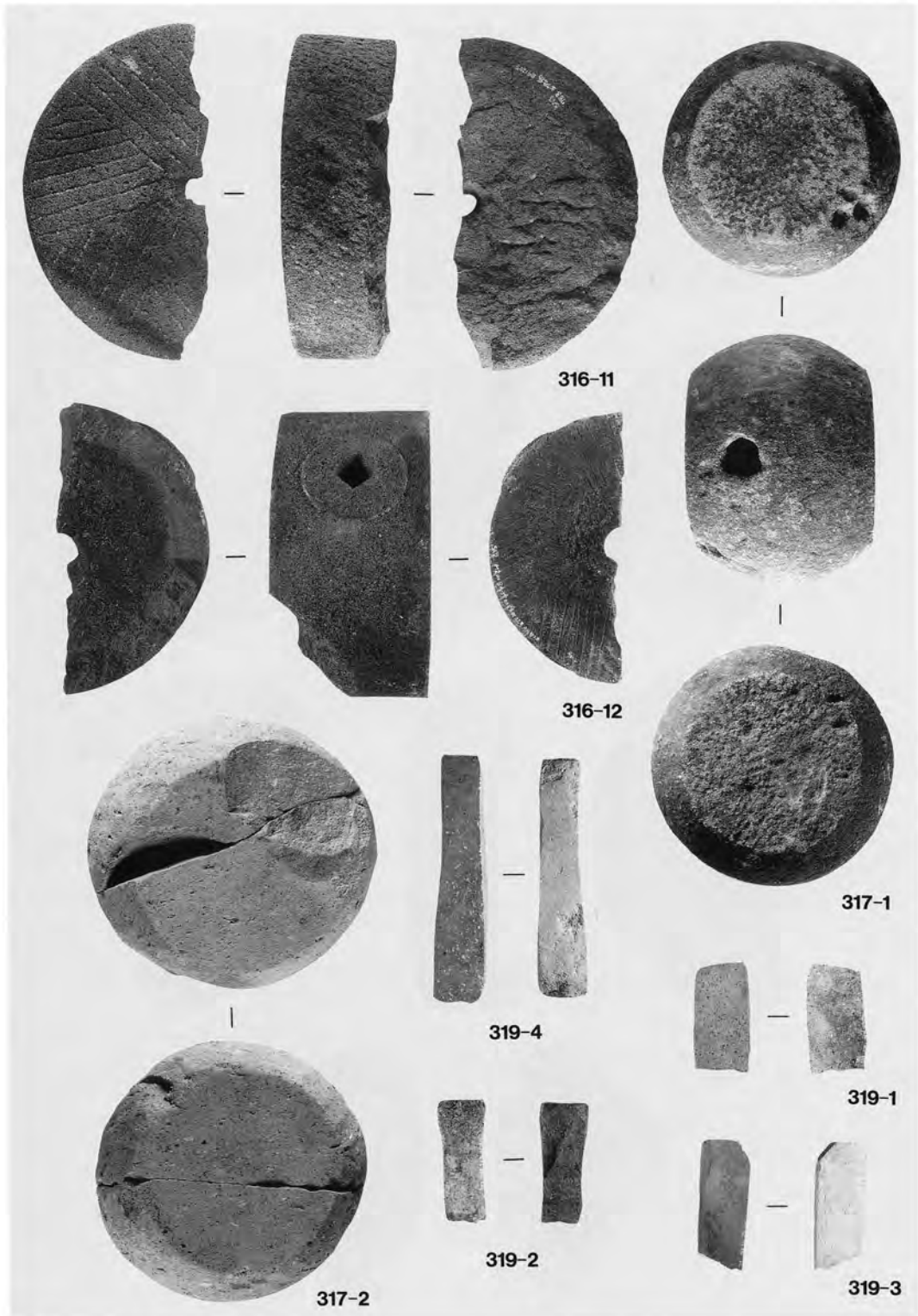
石製品(石臼・不明)



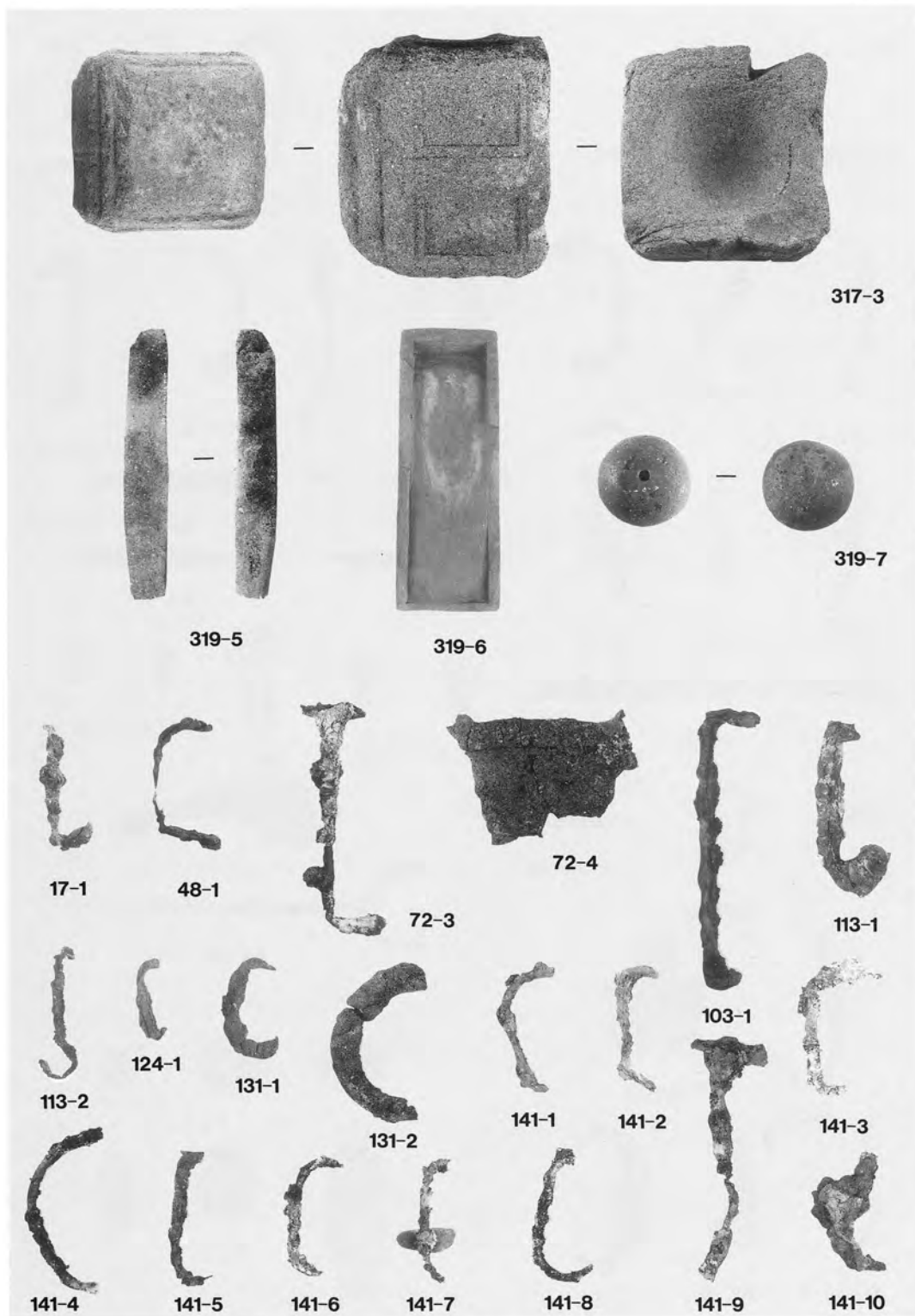
石製品(石臼)



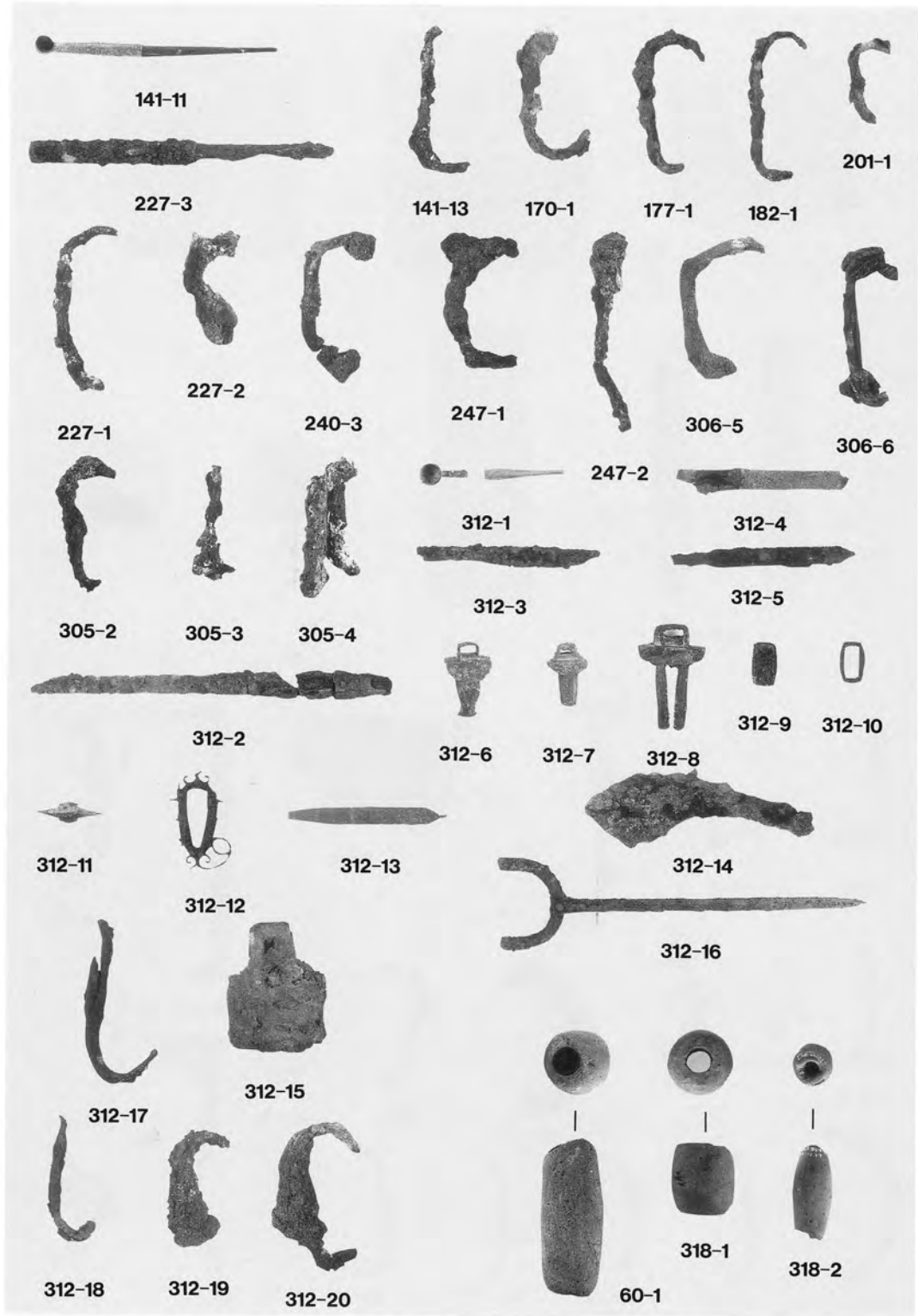
石製品(石臼)



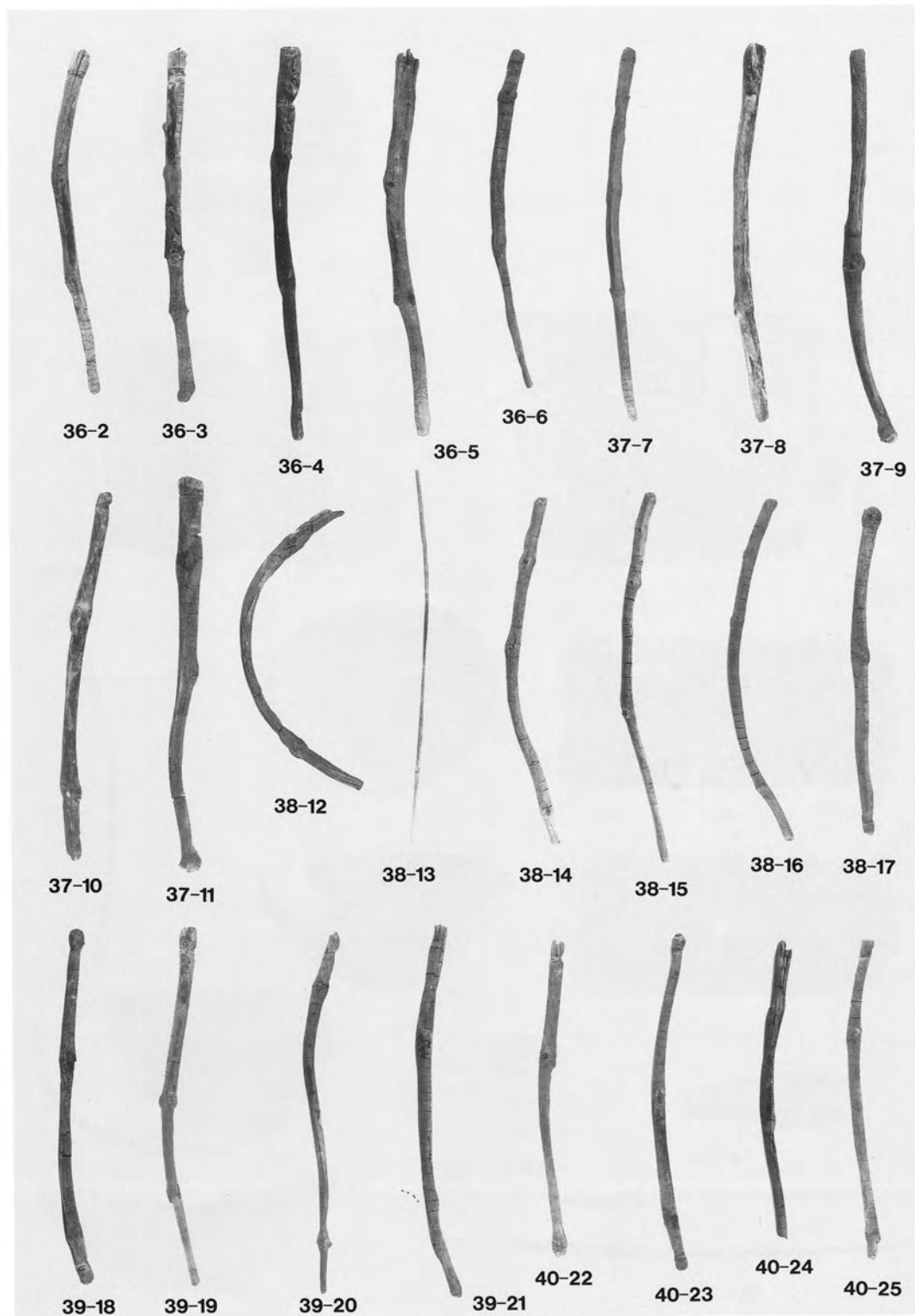
石製品(石臼・石塔・砥石)



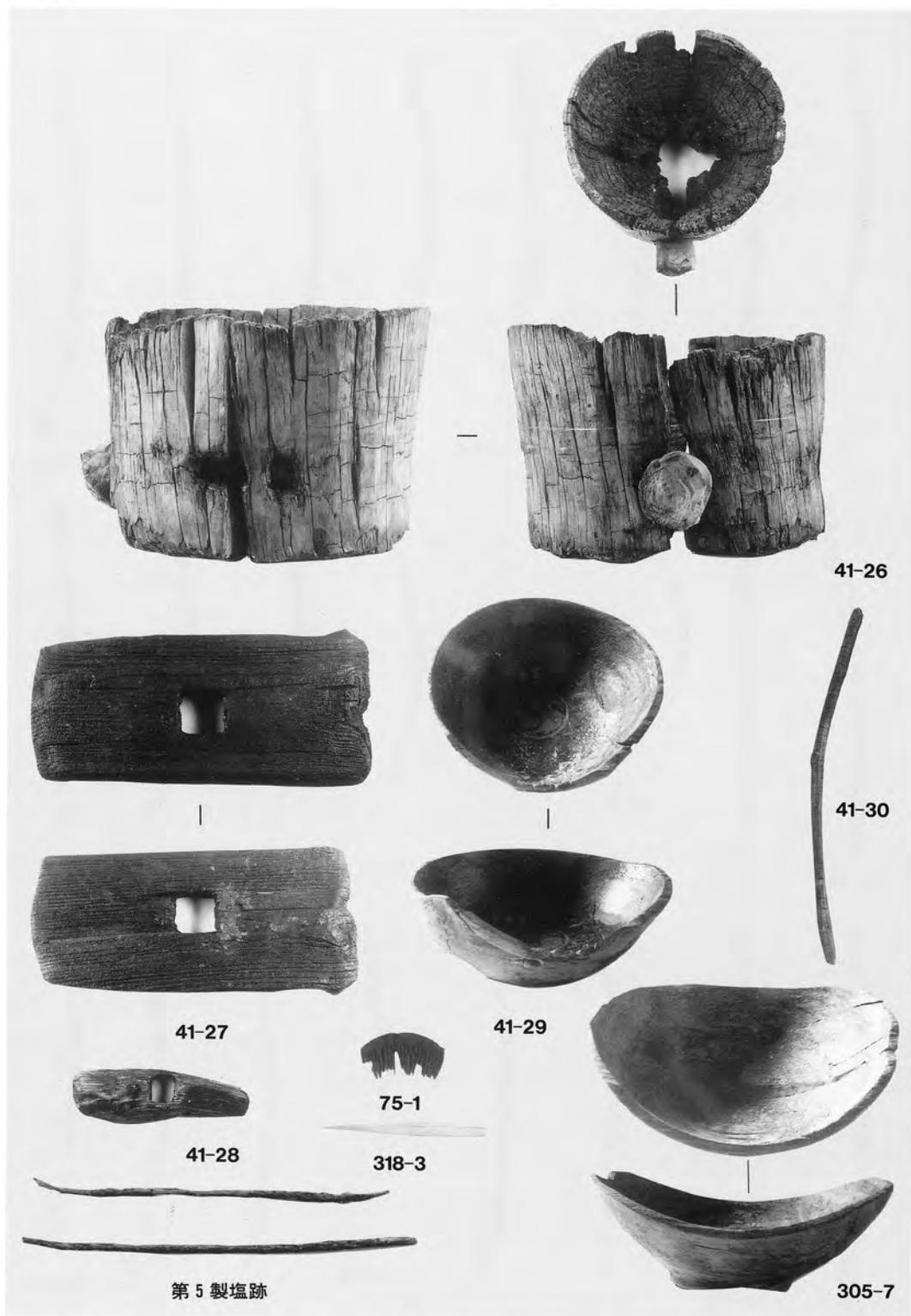
石製品(石塔・砥石・硯・石球), 鉄製品(吊金具・耳金・鍋)



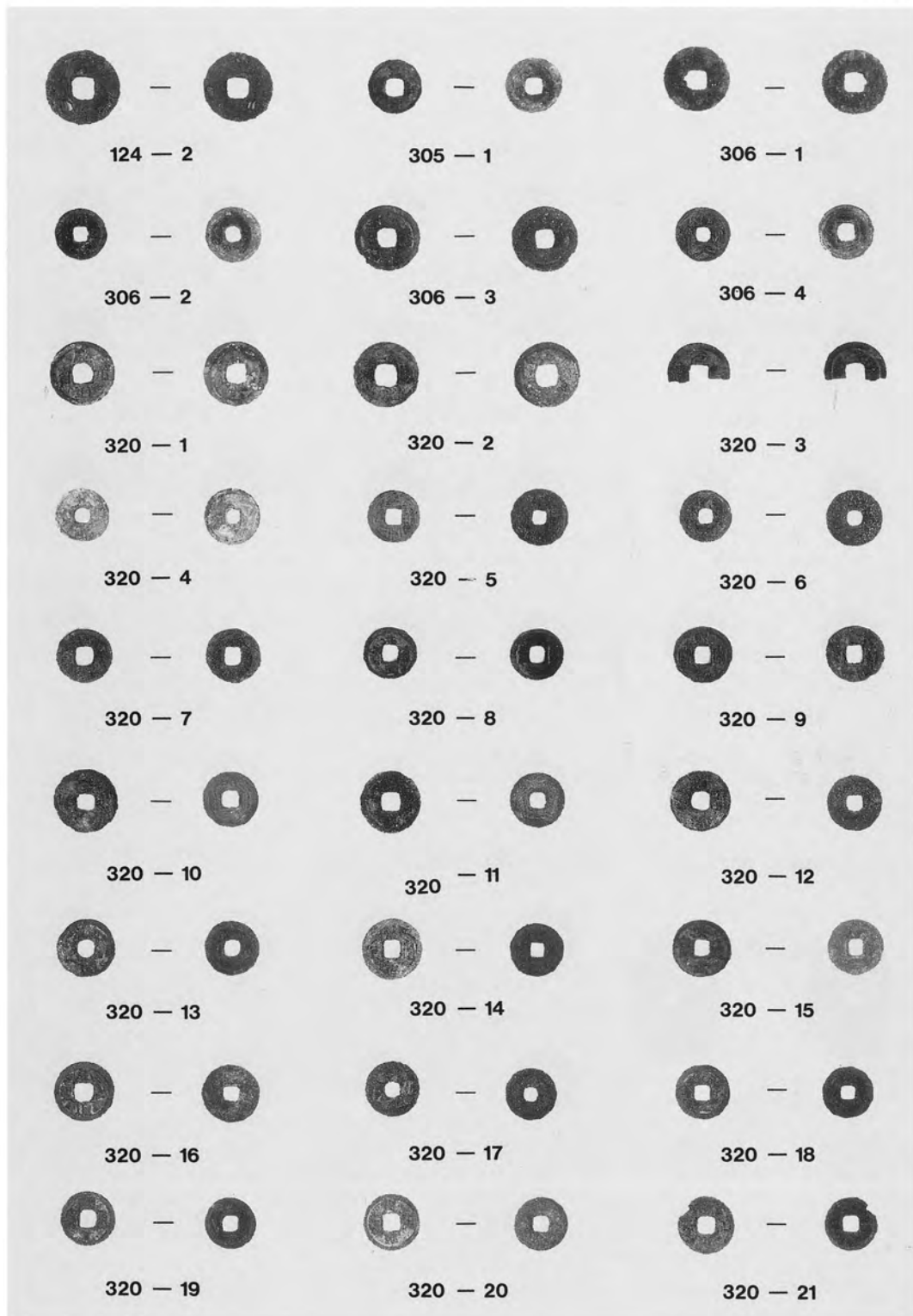
金属製品(煙管・吊金具・耳金・小刀・短刀・筭・鎌・鍵・刀装具), 土製品(管状土錘)



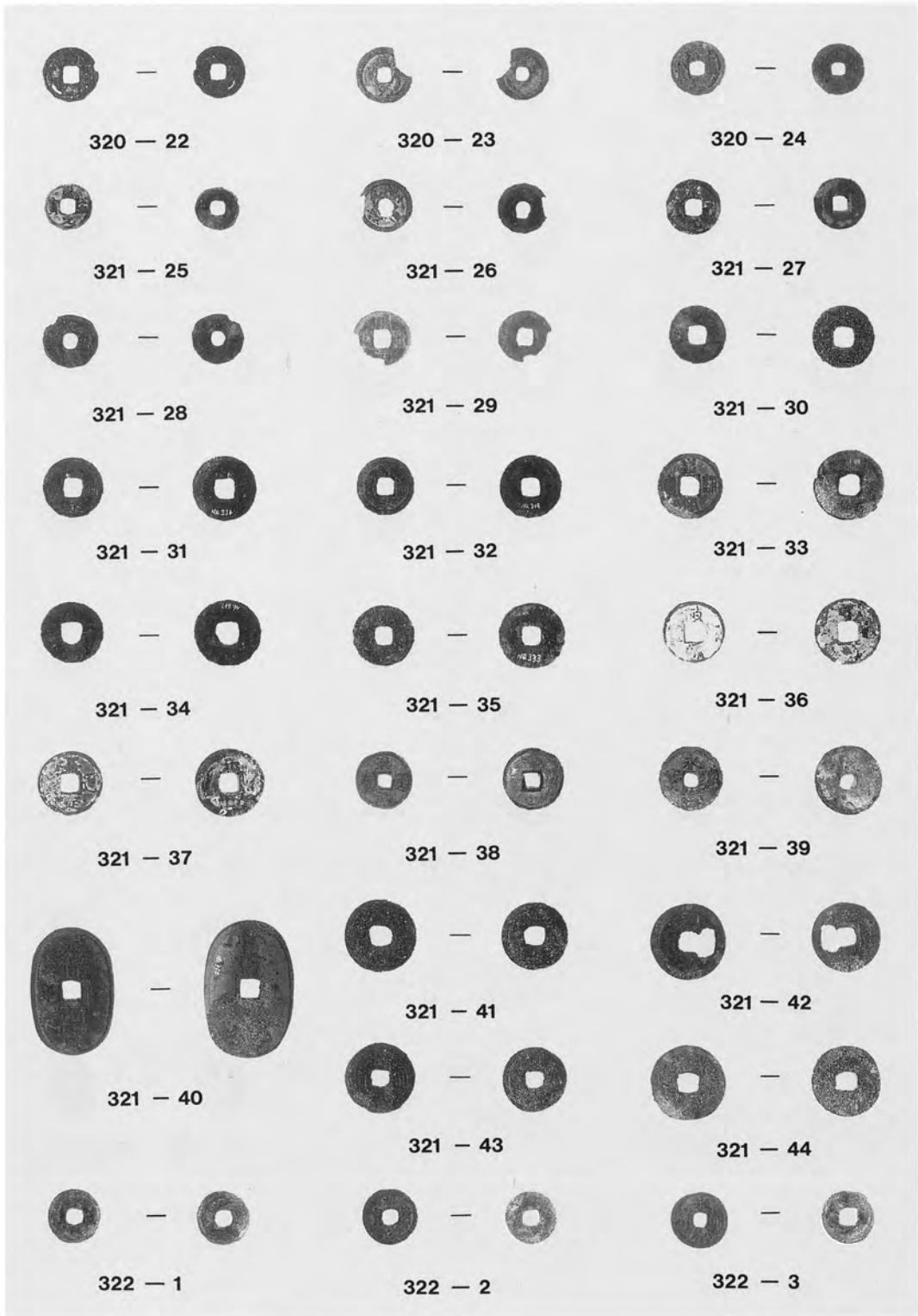
木製品(担い棒)

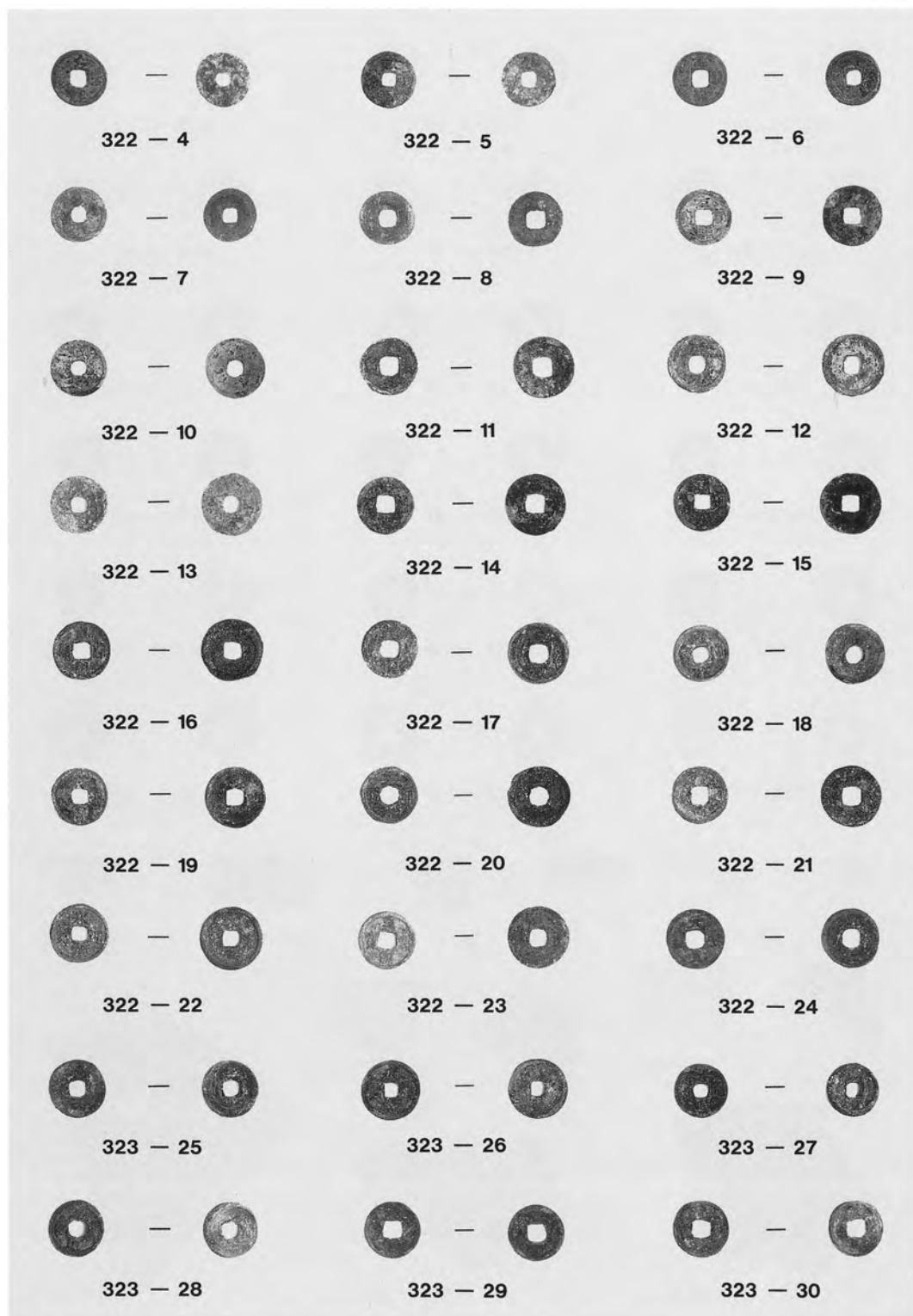


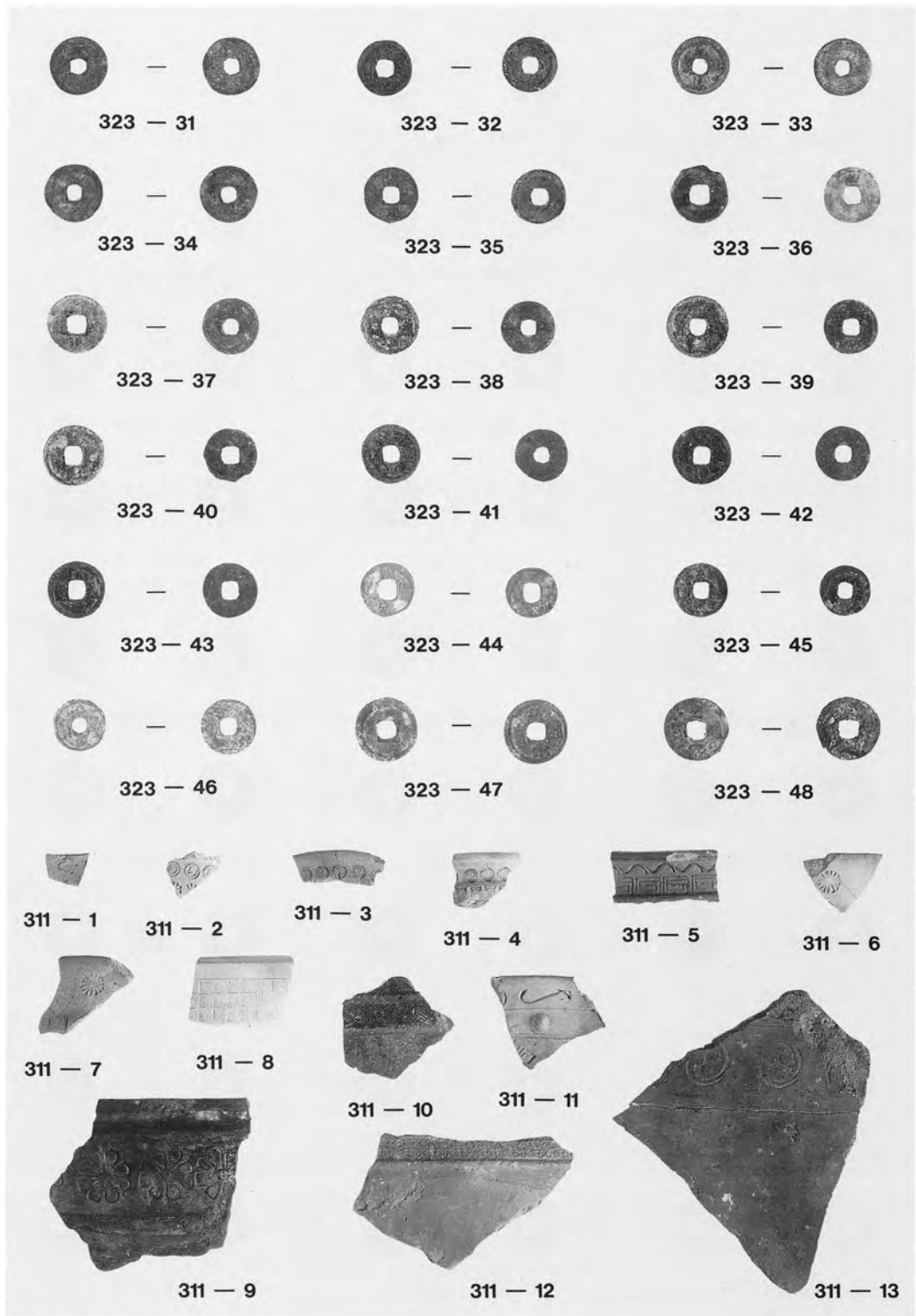
木製品(ろ過器・柄振・椀・担い棒・櫛), 骨製品(筭)



古錢(1)







古錢(4), 陶器, 瓦質土器

茨城県教育財団文化財調査報告第77集
常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書 2

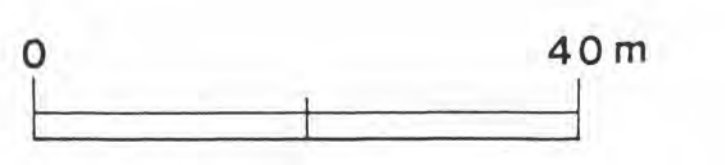
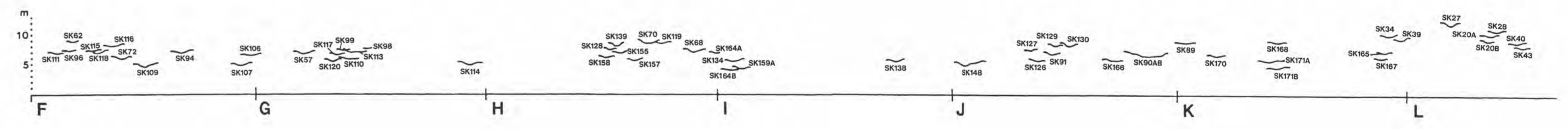
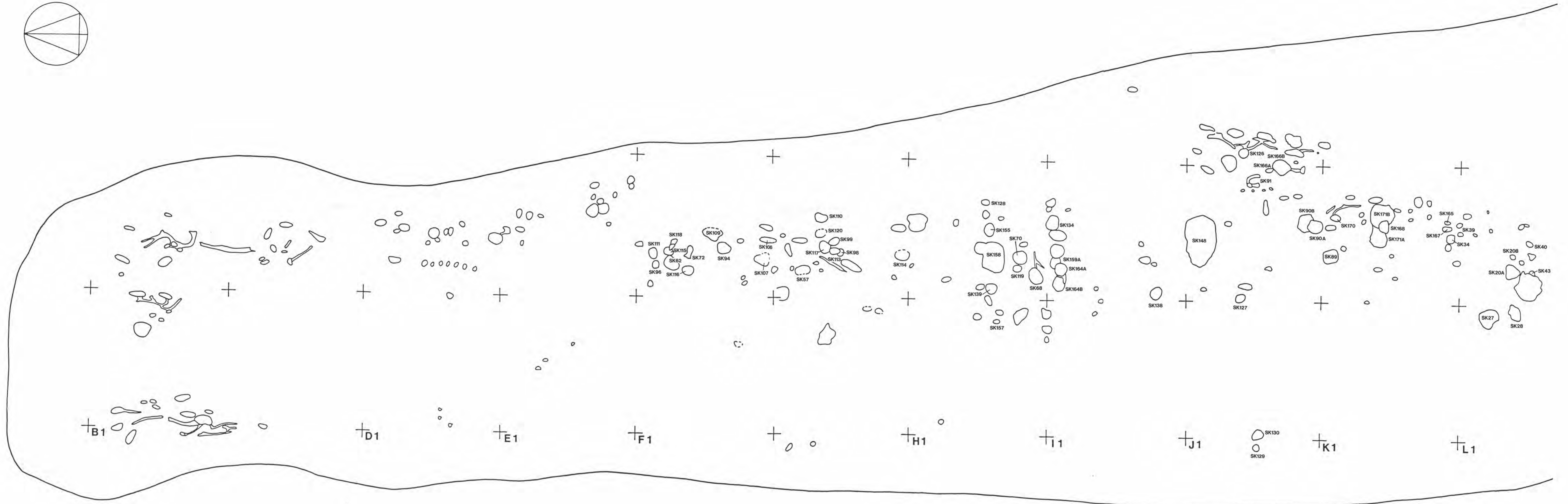
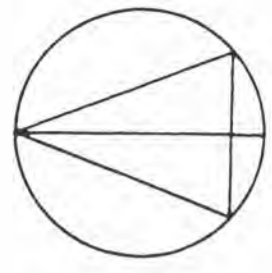
沢 田 遺 跡 (下)

平成 4 年 3 月 25 日印刷

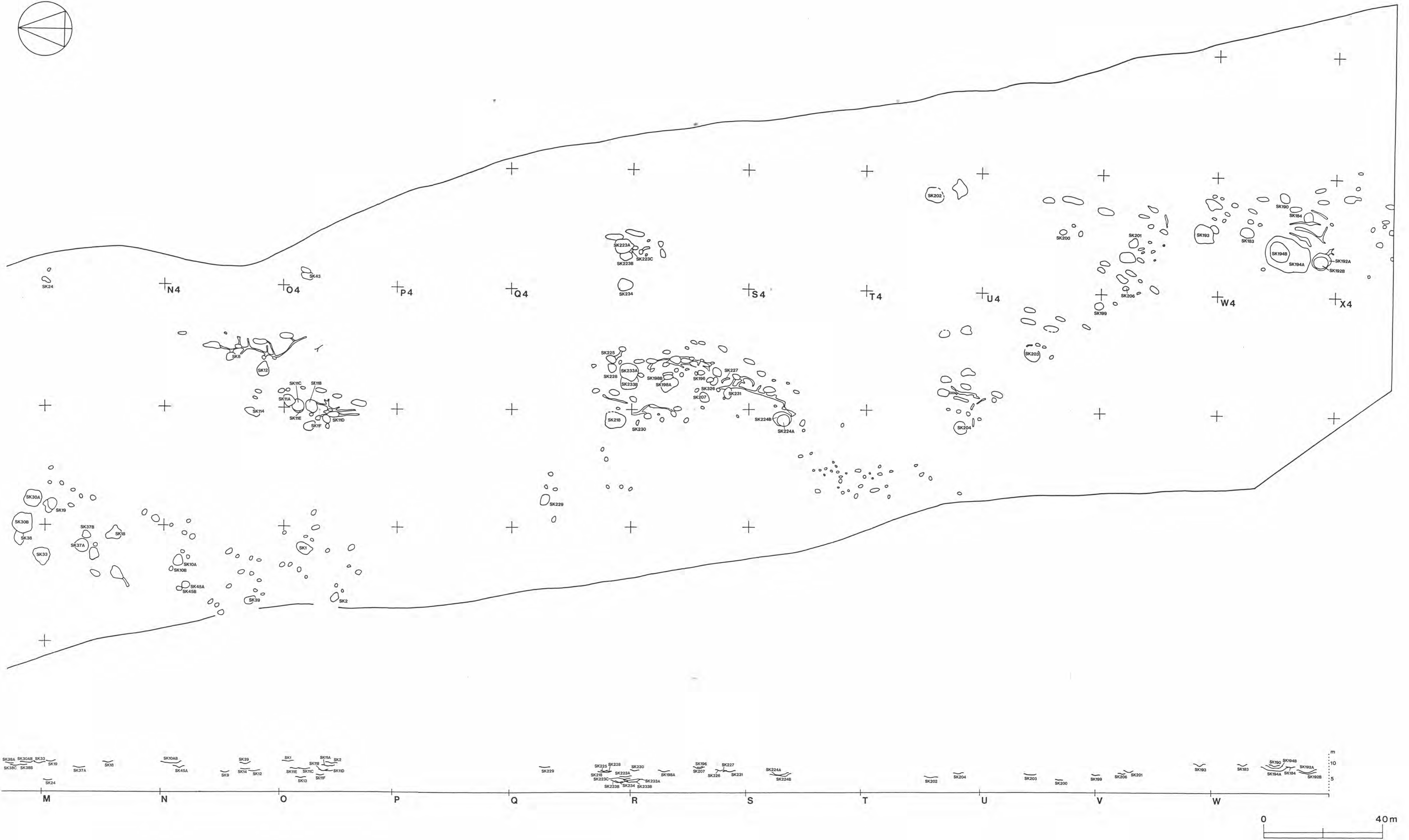
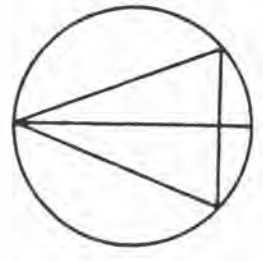
平成 4 年 3 月 31 日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町 3 丁目 4 番 57 号
T E L 0292-25-6587

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社
水戸市松が丘 2 - 6 - 24
T E L 0292-51-5265(代)



付図1 製塩跡遺構配置図・竈断面図(1)



付図2 製塩跡遺構配置図・竈断面図(2)

